

上杉幸太郎と六等分の思い出

Aikk

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

上杉幸太郎 高校生2年生

学園では不良少年のレッテルを貼られ 歩けば人が道を開ける

そんなある日 弟である上杉風太郎はある姉妹の元で家庭教師をやる事となっていた

「幸太郎も手伝ってくれ」 何も変わらない日々が少しずつ変わり始めていた。

※

内容はある程度原作基準ですが

風太郎のやっていた事をオリ主がやるといった事が多いのでご了承ください

あくまでオリ主がメインとなります

感想をくれる方々ありがとうございます。

評価などもよろしければポチつと！

活動報告で色々と書いているので気になった際は、ご確認ください

目次

キャラ設定

1

第一章

第一話	不良少年と未っ子	5
第二話	不良少年と中野姉妹	19
第三話	不良少年と突撃!	28
第四話	不良少年と家庭教師	40
第五話	不良少年と帰り道	52
第六話	不良少年と家庭事情	62
第七話	不良少年と悩める三女	70
第八話	不良少年と歴女な三女	81
第九話	不良少年と小悪魔次女	92
第十話	不良少年と次女の本音	105
第十一話	不良少年と今後の方針	111
第十二話	不良少年と次男の思い	119
第十三話	不良少年と花火の夜	129
第十四話	不良少年と彼女達の関係	139
第十五話	不良少年と長女の秘密	149
第十六話	不良少年と彼の答え・長女の道	155
第十七話	不良少年と長女の話	165
第十八話	不良少年とメアドの行き先	175
第十九話	不良少年と四女の行動	183
第二十話	不良少年と二つの写真	201
第二十一話	不良少年と面倒な一日	215

第二十二話	不良少年と末っ子の休日	228
第二十三話	不良少年と迫るテスト	248
第二十四話	不良少年と泊まり込み	261
第二十五話	不良少年と過去の手帳	278
第二十六話	不良少年とドツペルゲンガー作戦!	288
第二十七話	不良少年と家庭教師の補佐	295
第二十八話	不良少年と三女の買い物	304
第二十九話	不良少年と代行相手	312
第三十話	不良少年と家族の記憶	318
第三十一話	不良少年と結びの伝説 初日	326
第三十二話	不良少年と結びの伝説 2日目	338
第三十三話	不良少年と結びの伝説 2日目②	348
第三十四話	不良少年と結びの伝説 3日目	361
第三十五話	不良少年と結びの伝説 2000日目	380

第二章

第三十六話	不良少年と彼と入院	386
第三十七話	不良少年と彼等の過去	399
第三十八話	不良少年と彼女が語る彼の過去	415
第三十九話	不良少年と退院の日	421
第四十話	不良少年と復帰の登校	430
第四十一話	不良少年と姉妹の理由	438
第四十二話	不良少年と姉妹のお礼	446
第四十三話	不良少年と勤労感謝の多忙な日	454
第四十四話	不良少年と不思議な家族	494
第四十五話	不良少年とあの日の記憶	510

第四十六話	不良少年と真つ赤な記憶	518
第四十七話	不良少年と勉強会での大騒動	542
第四十八話	不良少年と二と五の家出	559
第四十九話	不良少年と末っ子お泊り	572
第五十話	不良少年と姉妹との問題	588
第五十一話	不良少年と中野六花	601
第五十二話	不良少年と次女の話	617
第五十三話	不良少年とキンタロー君作戦	629
第五十四話	不良少年と四女の苦悩	638
第五十五話	不良少年と二と五の結束 四の覚悟	650
第五十六話	不良少年とさようなら	663
第五十七話	不良少年とサヨナラ①	676
第五十八話	不良少年とサヨナラ②	687
第五十九話	不良少年と雪降る夜空	696

第三章

第六十話	不良少年と初の春と再会の兆し	712
第六十一話	不良少年とお疲れ長女	731
第六十二話	不良少年と長女の来店	746
第六十三話	不良少年と長女のお芝居	750
第六十四話	不良少年と偽善の戦い	763
第六十五話	不良少年と最後の試験	775
第六十六話	不良少年と動き出す関係	812
第六十七話	不良少年と過去の清算	823
第六十八話	不良少年と次男と三女	846
第六十九話	不良少年とスクランブルエッグな恋模様1	857

第七十話	不良少年とスクランブルエッグな恋模様 2	873
第七十一話	不良少年とスクランブルエッグな恋模様 3	898
第七十二話	不良少年とスクランブルエッグな恋模様 4	918

第四章

第七十三話	不良少年と姉妹のバイト	940
第七十四話	不良少年と三年生	956
第七十五話	不良少年と学級委員な次男坊	964
第七十六話	不良少年と次女のバイト	982
第七十七話	不良少年と次男と四女	994
第七十八話	不良少年と背水の陣	1007
第七十九話	不良少年と長女の異変	1027
第八十話	不良少年と次男への五羽鶴	1042
第八十一話	不良少年と男の戦	1054
第八十二話	不良少年と彼らのお祝い	1071
第八十三話	不良少年と彼らの今後	1088
第八十四話	不良少年と雨宮紡木	1111
第八十五話	不良少年と彼の選択	1122
第八十六話	不良少年と彼のいないバスデイ	1144
第八十七話	不良少年とシスターズウォー①	1163
第八十八話	不良少年とシスターズウォー②	1185
第八十九話	不良少年とシスターズウォー③	1197
第九十話	不良少年とシスターズウォー④	1221
第九十一話	不良少年とシスターズウォー⑤	1248
第九十二話	不良少年とシスターズウォー⑥	1261
第九十三話	不良少年とシスターズウォー⑦	1284

第五章

第九十四話

不良少年と心機一転

第九十五話

不良少年と実行委員

キャラ設定

上杉幸太郎

詳細

イメージCV：石川界人さん

今作の主人公で上杉家の長男 高校2年生

風太郎とらいはの兄である 誕生日は五月五日で中野姉妹と同じである

顔立ちは弟と似ており目元はそっくりらしい

口は少々悪く 髪型は父親と同じツンツンヘアで色合いが白と黒が混じったような変わった感じになっており本人曰く「地毛」

それもあってか学園では浮いた存在で、ある噂もあり不良少年のレツテル貼られている

風太郎と違った意味で有名な人間

本人もそれを否定しない 『その原因は確実に自分にある』と述べる

ある時期から携帯を持つことはせず 風太郎達は連絡に困ると話している

ただ性格は面倒くさがりな一面があるだけで基本は真面目で礼儀は分かっているつもりであり義理堅い 何より家族を大切に思う少年である

成績も元々優秀だった為 勉強は得意であり

風太郎と同じく中野姉妹の家庭教師をする事になる 一応彼は補佐という位置付けと語る

基本的に一人を好み 友人も作るつもりは無いと話

学園では何時も一人であり 弟の風太郎とも学園では基本的に話す事は少ない

家庭教師の一件以降は、話す事が増えた。

転校してきた 中野姉妹 特に中野五月から甲斐甲斐しく面倒を見られ

一人でいようとすれば何処でもついてくると等 そんな五月に時折恐怖すら覚えるとか

彼もまた物静かな少女である三玖を気にかけている

幼少期に風太郎と共に彼女達とあっていた事を思いだしているが

風太郎には秘密にしている

過去にあった少女 中野六花と名乗った子との思い出は大切にしている

何故か父である勇也を「勇也さん」と呼び一歩距離を開けている

不良少年の扱いを受けているがこれでもバイトはしており

バイト先の人間からは「真面目な少年」と正当な評価を貰っている面倒くさいと言いながらバイト経験の影響か体力は備わっていると話す

味音痴で食べれば一緒と偏見を持つ

中野六花

詳細

半年前 幸太郎が出会った謎の少女

首にかけているヘッドホンが特徴的で目が隠れる斜め分けをしている

ある人物を探していると話し彼もそれを手伝うが結局は見つける事は出来ず

名前を名乗った後は解散し

その後現在まで 彼女と再会は出来てない

彼も携帯を持っておらず連絡先も知らされていない。

当初の彼は心にゆとりがなく

彼女と出合い 話していた時間がとても楽しく充実していたと話す

幼少期に中野姉妹と交流があった彼は存在しない六人目

風太郎と出会った 零奈を合わせると七人目の人物と語った

因みに その人物が中野姉妹のどれからしい

中野五月

詳細

原作ヒロインの一人

何かと幸太郎に対して世話を焼いたり

彼が一人だと彼の元に行くなど、とにかく謎が多く

本人もそれを語ろうとはしない様子で

「普通です」の一点張り 男性には潔癖な筈の彼女だが

彼をやや鼻屑している節が多く

他の姉妹から不信に思われている

風太郎が家庭教師と知り 同時に幸太郎が兄だと知ると絶句してしまう

後に中野六花と言う人間は知らないと言った

中野三玖

詳細

原作ヒロインの一人

五月と違い 幸太郎を警戒していたが

彼女もやり過ぎたと思うときちんと謝れる子である

彼が家庭教師と知った当初は五月程ではないが驚いていた様子

ただ親身になって話す彼を見て変化あった

彼女も同じく六花なる人物は知らないと言った

中野一花

詳細

原作ヒロインの一人

幸太郎と出会った当初は変わらぬペースで彼に接し

幸太郎と風太郎を一目で兄弟だと分かっていた様子

不良少年と呼ばれている彼に対し 何処か思う所があるようだが
そんな人間が自分達の家庭教師を受けるとは思っていないと話し
た

彼女もまた彼が探す 中野六花と言う人物は知らないと言

上杉風太郎

詳細

原作主人公 誕生日は4月15日である

基本的には原作と変わらないが兄である幸太郎がいる為

話し相手が存在している

何かと彼を頼りにしており 携帯を持たない彼に今回の一件を伝

えたのも風太郎である

上杉幸太郎の過去を知っているようだが、それを口にしない

第一章

第一話 不良少年と末っ子

何時かの過去

「今日ありがとう」

少年に語り掛ける少女の笑みは何処か儂げである

何かを悟ったように何かを感じたように

今日一日自分の用事に付き合ってくれた彼に感謝を述べる

少年もまたそんな少女に『気にしなくて良いですよ』と返事を返す

「お名前を聞かせてもらえますか」

彼は名乗った 『上杉幸太郎』

少女も名乗った

「中野 中野六花と言います ではまた 上杉幸太郎さん」

彼女はそう言うのと彼に手を振り

彼もまた手を振り返す 少々名残惜しいと感じながらも自分の目

的の為少年はその場を去って行く

少女は少年の姿が見えなくなるまでずっと手を振り続ける

彼が見えなくなつて来た頃 彼女の目には透明な二粒の水滴が

そつと流れていた…。

何時かの記憶 何時かの思い出 一人の少年と一人の少女の過去の記憶である…。

――

――

――

学園は今日も平和だ相も変わらず周りの人間は俺を見るなり

モーゼの如く道を開け避けていき

ひそひそ話をする他の学生たちの姿

見慣れた顔もあるが、今更何も思いもしない…。

気にもしない

ただまあ 食堂に行く時も便利ではあるし このままで良いだろ

う

「あいつも何時もの定食だろうな 俺は適当にパンでも頼むか…。」

家庭の事情もあり

俺や特に弟は、学園での出費を必要最低限で押さえている

弟にいたっては『焼肉定食 肉抜き』と何処か悲しくてそんな悲惨な事になるのか

作ってる側も慣れたように対応するが、当初はどんな気持ちだったのだろうな。

暫歩くと食堂が見えて来た

歩く速度を少し上げ俺は目的の場所へと足を動かす

ついてすぐ

先ほどと同じく他の学生は道を開け

顔を下に俺から目をそらしている 地毛とは言えこの髪はやはり

目立つな

一度黒に染めた方が良いかな…

「注文いいすっか 食パン2枚で」

自分で頼んでいて何だが味気ないにも程がある

風太郎の事を言えた義理ではないな…。

けど あいつに取っての最適解があのだ食なら俺にとってこれが最適解だ

お腹に入ればどれも同じだ 何を食べても味何て変わらないだろ

う

渡された袋にはパンが2枚持っていたお金を渡すと

俺は足早に去って行く

余り人前に入るような人間でもないし

このままいれば、他の学生たちはずっとこの調子だろうな。

取り合えず隅っこでも良いから目立たない席を探さねば…。

「ん…？ あれは風太郎 何してんだ」

俺が左側の席を凝視するとそこには、弟であり 今日も変わらず肉抜き定食頼む

上杉風太郎の姿があつた

あの席は弟の定位置らしく

時折見かけてはそこに座っているのだ

ただ 兄弟だからといって同じ席に座ることは無く

俺は何時も適当な席を見つけてそこに座っていたりする…。

それでその弟なのだが…どうやら何かもめ事を起こしているよう
だ

周りから聞こえる声に耳を澄ませば

どうやら この席は自分が先に座った 座ってない！の言い合い
を起こしているようだ

「何やってんだ あいつは…変に目立つのは俺の役目だろうに」

ここで助け船を出すのは構わないが、俺が行って風太郎に迷惑をか
ける訳にも行かない

あいつは俺と違って優秀だ

何処に出しても恥ずかし…性格はまあやや面倒な所もある
が

喧嘩にでも巻き込まれてる訳じゃないんだ

ここは風太郎を信じようか…。

「おっと… …… すまんな」

弟の未来を信じ俺は近場の席に向かおうと後ろを振り返った

その時後ろから近づく人に気づかずぶつかってしまった

俺の不注意だ

素直に謝るべきだろう

「いえいえ お気になさいます」

何とも元気の良い子だ

きちんと返事も返してくれる辺り 礼儀も出来てるな

2年になつてからずっと『ひいひい』とだけ言われまともな会話を女子とした記憶がない

ウサギ調のリボンをつけるその少女は俺の返答を受けるとにこやかに微笑んでくれている

「怪我不いなら、行くわ さらばうさぎリボンさん」

「私の名前は中野四葉です！」

「おっおう…すまねーな【中野】」

「それでお名前は」

「俺は、上杉…上杉幸太郎だ」

「上杉…」

ん……………？

何か気になるのだろうか

四葉と名乗った少女は俺の名を聞くとその場でだんまりとしてしま

い 何度も苗字を復唱している

変な事で言ったのか俺は……………？

「了解しました。上杉さん！」

「何もないなら良いんだ、じゃーな」

先ほどの事が何もなかったかのよう

にんまりとする中野をしり目に俺はその場から立ち去る

同じ所に何時までもいると人の目が届くからな

なるべく避けたいんだ

『それじゃー』と後方から声が聞こえる

何処まで愛想が良いんだ あの女学生は……………。

「どうかしたんですか、四葉？」

「あれ 五月じゃないですか？さつき向こうの席に居たのに何でここに」

「移動してきたんです あの子がいた席に座っているのは嫌なので」

「あははは、何かあっただね」

「良いんです。もう会う事は無いので、それより四葉こそ何でここに立っているんですか？」

「ああ、それはですね」

――――

――

そこまで気になるのか？

周りの学生はこちらをちらつと見るが、俺の視線に気づけばすぐに目を逸らす

怯える位なら 見ないで欲しい

はあ……………。

慣れたと言いつつも物を食べてる時まで人の目を気にするのは俺でも嫌になってくる

今度からは食堂も避けようかな……………。

「さつさと食べて 移動するか あむ…あむ」

「あの……………？ 相席宜しいですか」

俺が最初のパンを半分まで食べた辺りで横から声が飛んでくる
聞き間違えじゃなければ、俺の座っている席 同じく座りたいと言っているように聞こえるのだが、すつとその方向を見る。

こちらに訪ねて来たアホ毛の目立つ少女は何処となく先ほど会話した

中野四葉と名乗った少女と雰囲気似ていた、少しばかり既視感を覚えてしまう程には、けれど髪型も少々異なるし

他人の空似と言葉もあるんだし似た人間は3人くらいとも言われ
ご時世だ

一人くらい似た人間を見ても驚くのは失礼だろうか

「あの……………」

「ああ…うん、別に良いけど」

「はい、では失礼します…いただきます」

「おう……………」。(しかし凄い量だな)

空いてる席に座った少女

彼女が持っている、昼食はぱつと見ても凄い量である

ざつと見積もっても900円はするだろうか

俺や風太郎の昼食代を合わせてもこの値段には到底及ばない

食関してはあまり気にはしないが、こうやって見ると結構そるものがる

「変ですか?」

「すまん、それに変じゃないと思うぞ、食べる事は良い事だ。残さず食べるそれが一番だ」

「そうですね、変じゃないですよ! それに残しませんよ」

「そうか……………」

ずいつと前に顔を突き出す少女は何が嬉しいのか目を輝かせている

この量を食べるのだ、他の人からの目も多少なりと気にするのだろうか

でも嬉しそうな表情で食べている姿は、見ているこっちも元気を貰えるし

何処となく……………。いや何でもない

俺は何を勘違いしてるんだ、この女子がこの席に座ったのはただ開いていた席がここだったただけだの事だ。

「もし宜しければお名前を教えてくださいませんか? 折角相席になつ

たので」

「…………… 上杉幸太郎 2年だ」

「上杉幸太郎くん……………はい 私は中野五月と言います」

数分前の俺よ

お前の抱いていた既視感は何違いではない

この少女の名前は 中野五月というようだ

偶然にも先ほど似た苗字を俺は耳にした

この彼女の服装だ

その制服はこの学園の女子が来ている制服ではない

あと先ほどぶつかった中野四葉だ ぱつと見だっただけだが

彼女もまたこの学園とは違う制服を着ていた

もしかするとさっきの中野とは……………姉妹なのだろうか

それも転校生の可能性もある……………俺が知っているあの子達か？

つと悪い癖だがこういつた事に出くわすといついつい考えてします

下手な詮索はやめよう 中野も困惑してしまうだろう

「そうか よろしくな 中野」

「はい よろしくお願いします 上杉君！」

さっきの中野もそうだがやめてくれないか

そんなキラキラした笑顔を振りまくのは……………。

苦手なんだよ

『上杉が女子と話してる』『脅してるのかな』辺りから変噂話が飛んでくる

どうやら俺が思ってた以上に周りの生徒達は俺が、他人と話す事が衝撃的なのだろう

さっきの中野四葉の時もそうだった

少しでも関わろうとすれば、変な視線が飛んでくる

そうなってしまう原因を作ったのは、俺だし

元から人と関わろうとは思わないけど、こうして話す事も周りのか

らすれば異端なのだ

上杉幸太郎という 人間の評価と言うのはそこまで落ち込んでい
る

だから弟の風太郎にも迷惑をかけたくない……………。

「上杉君は そのお腹は空かないんですか？」

「食べればそれで良い」

「でも それだけだと栄養が足りません。どうぞこれを食べてくださ
い！」

「あのさ 何でそこまで話しかけてくるんだ？」

「いえ あのそれは……………」

黙りこんでしまう五月

親切なのは良い事だとは思う

けれど相席なただけでここまで親切に出来るもののだろうか
いや悪い事だとは、思わないけど

仮にも女子なのだから男子に接する場合は、もう少し距離感を考え
るべきだ

「その気遣いだけで、お腹も膨れるよ じゃな 中野」

「は…い 上杉君」

(そこまでしょぼくれるな…怒ってる訳じゃないんだけどな)
残っているパンをかつ込み俺は席をたつ

中野は終始顔を伏せたままだった

悪い事したかな あいつは良い子なんだろうけど……………。

……………

……………

放課後分け合ってその後の授業を受けず保健室で過ごした俺は
帰り支度をするため教室へと戻ろうとしていた

その時前方から弟である風太郎が俺を発見するなり

こっちへと向かって来た

小声で『話がある』と言い

深刻な表情である事も察し彼について行く事にした

しかし風太郎から声をかけてくるとは珍しい事もあるものだな。

「それで、どうしたよ。【風太郎】お前から俺にとは珍しいな？」

「俺から話しかける事は、そんなに珍しい事じゃない。幸太郎が話も聞かず逃げるだけだろ」

「ほほーんなら、逃げるぞ」

「待て 待ってくれ!! これは上杉家に取って大事な案件何だ！」

少しばかり弟をからかおうとしたが、

上杉家に取って そう言われると俺もふざけている訳にも行かないと理解できる

『話せ』と促すと彼は話を開始した

それは風太郎が昼食を食べ終わった後の事だ
彼の携帯に妹である らいはから連絡が来た

どうも人間の腎臓を売るとお金になるらしく、風太郎はそれに志願
したと話す

「してない、してない、売らないからな」

「なら俺か？」

「それはもつと笑えない 冗談はやめてくれ」

「わりいな 調子のったわ」

今のは悪手だ言葉が過ぎた

流石に風太郎相手でも言葉を選ぶべきだった

彼の顔は何処か陰しくなっている
中野に人との距離感とか言っておきながら俺も人の事は言えない
な

俺の態度を見れば「分かればいい」と彼もこの話を一旦切り上げ
話題をらいはから話に戻している

「家の借金が返せるかも知れないんだ」

「話してくれ」

風太郎の教えてくれたその話は

俺たち上杉兄弟にとって重要過ぎる程の物だった

これで父である「勇也さん」にも少しは楽をさせてあげられるだろ
う

弟曰く 勇也さんが『わりのいいバイトを見つけた』と話したらし
く

らいは曰く 『アットホームで楽しい職場！相場の給料の五倍を約
束します！』

俺には、勇也さんが騙されてるようにしか思えない程

胡散臭い感じしかないキャッチコピーであるが

あの人が、見つけて来たものだ そこは素直に受けよう

ただ 少し疑問もある

何故 俺にはその事をすぐ伝えなかったのだろうか………？

順当に考えれば やはり風太郎の成績が優秀だからなのだろうか
不思議に思う俺に風太郎は呆れた表情で俺を見ている

「幸太郎お前さ携帯ないだろう………」

「そうだった………持っていないから存在忘れてたわ」

「連絡取る時とか大変なんだからな いい加減買ってくれ」

「大丈夫だって今日みたいに風太郎を通して連絡取れるしさ」

「そう言う所は、直してくれ」

「はいはい」

兎に角だ

風太郎がある人の家庭教師となりその人物の成績を上げる必要があると言う話だ

因みに俺は、助っ人として参加して欲しいと言っている
やっぱり優秀な弟が指名されてるし

俺の出番はないのでは？

自分でも思うが俺が来た所で怖がらせるだけだろうし

「それでも 俺だけではどうにもできる自信がないんだよ」

「聞いてやるよ 話せ」

表情が曇る彼は話しを続ける

風太郎曰くその家庭教師をする人物に問題があるらしく

昼食の際に その人物とひと悶着あつたらしい

当然 その段階では彼もまさかその人物が後に勉強を教える相手
とは知る由もない

それを知ったのは、その後だ

授業前に行われた軽い挨拶の際に 転校生がこのクラスに来た事
を教えてくれた

何故他人事なのか……………

それは勿論 俺は保健室で休んでいたからその事を今知ったから
だ

そしてその転校してきた

中野五月と名乗った少女

彼女が風太郎が勉強を教えなければいけない人物だった

「世間も狭いな……………」

「何がだ？」

「何でもねーよ」

あの時出会った人物がまさか風太郎の家庭教師先になるとは

話を聞く限り 風太郎とのいざこざの後 彼女は去ってしまった
らしい

当然追う義務もこの時の彼は知らないわけで仕方ないと言える
ただまあ こいつの自業自得な所も無いとは言えないけど
その後行われた自己紹介の時には勿論
彼女から無視をされ続けたと彼は説明した

これで納得が行く

何故わざわざ俺のいる席まで来たのかを

それは人が近寄らない俺の周りが開いていたからだろう

当然転校生である中野は俺の学校での噂を知らないため ああ
やって接してきたのだろうか

ここまで話を聞く限り 中野からの風太郎に対するイメージは最
悪だと言う事だ

そこで白羽の矢が立ったのが こいつの兄である俺だと言う

正直人選を見誤ってるのではと思うが、風太郎は成績は良いが

先の中野とのやり取りもそうだが、同年代の人間との会話を得意と
していない

勉強以外は必要ないと言った感じの少年なのだ

兄としては悲しいが、俺も人の事は言えない

友人がいないのは俺も同じだ

この一件は無事に解決する必要がある

俺も他人事ではない上杉家の将来がかかっているのだから

「それで教えるのは【中野五月】だけで良いのか？他は」

「手伝ってくれるのか、流石持つべきものは兄弟……………ん、他？」

「ああーいや何でもない」

どうやらこいつは知らないらしい

俺も中野五月に出会うまで忘れていたし、本人も俺を覚えてないよ
うだった

上杉幸太郎は彼女を知っていた

そして中野四葉と中野五月との出会いで、既視感の正体が何かを気づいた

俺はあいつらを知っている

中野と言う姓で出会うのがあいつとは初めてだったただけだ
それに今の姿は、当時を知る俺には、違つて見えていた
けどそれについては俺も彼女達の事は言えないのだがな
あの頃から変わったのは彼女達だけではない。

記憶に間違いが無ければ……………中野五月と四葉以外に後三人いる筈だ

(覚えてないのも仕方ないよな なんせガキの頃だし)

「普通は大学生に頼む所だが 上杉家が誇る風太郎君だ 下手な奴より頼りになる」

「褒めてるのかそれ」

「気にするな……………んじゃ後は 中野五月を探してどうにか説得する事から始めっか」

「目指すわ！借金返済だ！」

「あんまり気張るなよ 後々痛い目見た時が辛くなるから」

「そう言う事言うなよ、それに幸太郎お前が頼りなんだ」

「へいへい 話は苦手だけど 頑張れるだけ頑張つて見るから」

正直言えば前途多難だ

これから探すであろう

中野五月は性格は良い人物と思うが

風太郎とのやり取りを見る限り 中々の曲者だ

そして中野は一人ではないと言うこと…。

勇也さんが見つけたこの仕事 多分相手は中野五月だけではない
中野姉妹全員を相手にしないと行けないだろう

相場の五倍とは上手く言ったものだ 要は5人相手に挑めと言う事だ

これは流石に骨が折れるが、学園での生活よりはましだろうし

何より 家の借金を返済するための大きな近道になる
風太郎程ではないにしろ 俺自身も少なからずやる気が出てくる

「ん……………?」

「どうした幸太郎」

「いやゝ気のせいかな誰かに見られていた気がしてな」

「変な事言うなよ。自意識過剰なんじゃないか?」

「どうやら 弟は手伝いがいらないと見えるな」

「嘘です。すみません」

「よろしい」

決意を決めた俺だったがふいに誰かに見られた気がし
辺りを見るが、そこには誰も居らず

風太郎の言う通り気のせいと思う事にした

それにこの髪色だ嫌でも目立つしな

「……………コウタロウ」

俺や風太郎が去ったあと廊下の曲がり角で俺の名前を呼んでいる
人物がいた事を俺は知らなかった

第二話 不良少年と中野姉妹

翌日

らいはからも説明を受け

改めて風太郎に協力し中野五月との仲を取り持ちつつ

可能ならば彼のサポートも頼まれた

出先に 勇也さんから『お前も無理するな』とお声をいただいた

その勇也さんの負担を減らす為にも頑張らないと行けない

今の俺が彼に出来るのはそれくらいしかないのだし。

学園に着くと先ず初めに俺は自分の席へと座り隣を確認した

何たる偶然か俺の隣が中野五月嬢なのだ

それもあり風太郎は俺に期待を寄せているのだろう

ただ 弟は昨日の一件もあり中野五月からの心象は悪いため

俺が今日一日彼女とそれとなく会話し

何とか風太郎を紹介する流れとなっている

取り合えず 放課後まで彼には待機してもらおう

俺自身周りの人間から良いイメージねーけど

それは今更だ……………。

「おはよう 中野 隣とは不思議な縁だな」

「お おはようございます！ 上杉君 昨日は隣の席が空いてたので驚きました」

「少しな 授業休んでた」

「えっ……………何処か具合でも悪いんですか？」

「さぼりだ」

「それはいけませんよ！」

「はいはい」

よし 流れはいい感じだ

こつちを見ている風太郎も？と指を立てている

着飾る必要もない

中野五月に対しては普段通りの俺で接して居ればいい

今はまだ俺がどういう人間か周りから知らされてないのだ
そこを狙う形になっているが、勘弁してくれ。

苦手と言ったが ある程度なら人との会話も出来る位には人間として生きて来たつもりでいる

今の会話と良い

中野五月は人を見た目で判断しないと分かったただけでも大きいだろう

これから先 風太郎と共に彼女に教える際に見た目で怖がられては勉強所ではないしな

けど 俺が中野五月と会話する事が気になるのか

周りの生徒は一気に注目している

これさへ無くなれば話ももっとスムーズに進むんだがな。

「どうかしましたか上杉君」

「いや 特には無い」

危ない会話が途切れてしまった

「その昨日は悪かったな せっかく中野が親切にしてくれたのに無下にしている」

「いえ 良いんです上杉君の言う通り 私も少し距離感を見誤っていたようです」

「そうか でも中野のその親切心や人との接し方自体は悪いとは思ってないぞ」

「そう言っただけだと私も嬉しい限りです でも不思議ですね」「何がだ？」

「上杉君の苗字ってこのクラスもう一人いたような気がします」

「偶然だろう 似た人間なんて世界中にいっぱいいるし」

「そうですね 偶然ですよね …あんな失礼な人と上杉君が兄弟な訳ありませんし」

すまん 風太郎

兄は選択を誤った ここは素直に兄弟と言っておけば良かった

つい癖で他人と答えてしまった。

あとの事を考えるとこの回答は面倒事の種になりかねんと思うけれど今更撤回しても遅そうだ

中野五月も『そうですよね』と納得してしまっているし

風太郎を失礼な人間と言っているあたり 嘘でしたと言えば

確実に道は絶たれてしまっただろう。

最悪 俺を犠牲に中野五月の勉強を風太郎が見れる環境まで作れば良い

それさえできれば条件はクリアだ…。

まあ：残り四人いる事を俺は知っているし

その四人とのパイプにもならないと行けない訳だ

借金返済のため そこは血反吐を吐く覚悟で身を削ろう胃がいてえ

ただ確証を得る必要はあるし それとなく中野五月に姉妹の事を聞いてみるか

その後ホームルームは終わり

俺も中野五月との会話をやめ

一応授業に意識を集中させた

今更 この学園で真面目人間として青春する気はないけど

成績を落とす訳にも行かないし 問題事は避けたい為

ある程度は授業を受けなければならない

一時限目の開始と共に教卓で先生は事前に話していた箇所読み生徒を当て答えさせている

ここまでは良い 普通の授業だ きちんと勉強していれば、困る事はない

だが問題は起きた

すっかり気を抜いていたのか

次に当てられたのは中野五月だった…

彼女本人は当てられると思って居らず その場で焦っているのが目に見える程明らかである

家庭教師が必要とは知っていたが、俺が思っているよりも深刻な事になっていくのかも知れん

えーっとその場で考え込む姿中野五月はページをめくり何とか回答までたどり着こうとしている

全然違う箇所を見ては『これ あれ』と困っている様子だ

昨日の恩もある それに後味も悪いしな。

(アフリカ)と書いた紙の切れ端をすつと中野五月の方に投げた

こちらを見るが、俺はアイコンタクトで紙を見るよう目線を落とす察してくれたのか、紙に視線を落とし内容を確認した。

「はい アフリカ大陸です」

「よろしいでは 続けよう」

中野五月は安堵しているようだ、こちらに視線を送ると

軽くお辞儀をする 俺は返事を返すように小さく頭を動かした。

一度当てた生徒だ、これ以上は当てられる事は無いだろうし

俺も昨日のバイトに合わせ朝の会話だ疲れが来ている

この時間が終わったら 暫く眠らせてもらおう

――――

――――

――

爆睡とまでは行かないが、その後の内容は俺の耳には入って無かつた

先生の話す内容は、ある程度知ってるし

五月の方もきちんとノート取っていたのも確認出来た

本格的に目が覚めれば、時刻を示す針はお昼を刺している

「完全に寝てたな…首が痛い」

い その場で軽く背伸びをし周りを確認すれば既に中野五月の姿はな

当然風太郎も食堂へと向かう時間の為 その場には居なかった
『起こせよ』と内心は思ったが、風太郎が俺といれば悪目立ちしてしま
う

何よりすぐ寝てしまう自分が悪いのだ

「食堂行くか……」

腹が減り食堂へと向かおうとした最中

ノートの間に紙が挟まっていた

中には綺麗な字で文字が書かれていた……………。

『上杉君 先程はありがとうございます』

お疲れのようだったのでそのままにさせてもらいました

中野五月 』

「律儀な奴だな」

—————

—————

—————

食堂では毎度見慣れた 人の波が左右に分かれるモーゼの道
動くときには、有り難いがやはり目立つな

それに毎度これをやる 周りの人間は疲れないのだろうか

まあ…良いか どうせ言ったところで引かれるのが目に見えてい
るしな。

「焼肉定食、焼肉抜きで…」

『何の心境の変化だ!』

『何時もはパンしか口にしない人間が定食を頼んでいる』と

後ろから聞こえる声など無視だ

それに俺だって偶には白飯も食べる

心境変化と言うより 妹からお叱りを受けないためだ

『お兄ちゃん パンだけとか倒れるよ! 栄養も取ってよ』と朝方言
われてしまった

食べればどれも同じと思っている認識している俺だが妹に心配

はかけられない

ならば普段と大して変わらないお手頃な値段で頼める物と言えばあの勉強少年と同じ この定食だろう
出費も抑えられて 更に汁物までつくのだ

(やべー 何か泣けて来た)

定食を渡されると俺は支払いを済ませ

適当な席をまた探す事に

昼時くらいは一人で過ごしたいものだ

放課後には行動を開始すると風太郎は言っていた

加え 中野五月の朝の風景を見て兄は色々と察してしまったのだ
これは風太郎が思っているよりも厄介な案件だと言う事になればそれまで個人で過ごせる時間を作って置きたい
そうでもしないと体力が持たないだろう

「さて 何処かねーかな」

辺りを見れば風太郎も既に定位置おり もくもくと箸を進めており

暫くすると席を立去って行く

通り過ぎざまに『厄介な奴らがいる』と俺に忠告してきた

厄介な奴ら：複数形と言う事は、やはり居るか全員
彼が去ったと同時に俺は風太郎がいた席に向かった
そこしか空いてないのだから仕方ないだろう

「あつ 上杉君じゃないですか！ おはようございます」

「おう 中野か、おはよう」

「ん おはよう少年」

「えっ…」

「だって今呼んだでしょ」

俺が来るのが見えたのか

中野五月は挨拶をして来た

俺も咄嗟に『中野』と答えいたが失念していた

中野は彼女一人ではない

反応するかのように右側の席に座る人物が俺の方を見て声をかけてくる

彼女だけではない 残りの数人も反応してこちらにふり返る

『?』と全員頭に浮かべているが、俺のミスだな

「上杉君 すみません こちら私の姉妹で その私達五人姉妹なんです」

「ほうー 珍しいな五人とは」

「どうもー 私が長女の中野一花お姉さんだよ」

「上杉幸太郎だ よろしく」

「上杉 上杉ねー」

「何かあるのか？」

昨日と同じ光景だ四葉と同じく俺の名前を何度か復唱し

中野一花は、こちらをじーつと見ている

この様子なら こいつも覚えて無さそうだな

「いやー ごめんごめん 凄い髪色しているなーって」

「一応は地毛だ」

彼女は俺の髪色が気になっていた様子だ

確かに黒髪かと思えば内側は白がまざっていると言う

変な髪色だが、これはそう言う風に出来てるんだ

この一年で慣れた

と言うより 中野姉妹の方が俺より派手に見る気がするのだが

女子ならお洒落と言って髪を染めるのも普通なのかもな

将来妹も髪を染めてしまうのだろうか

流石に勇也さんも止めてれるだろう

「不良少年かなーって」

「ある意味ではそうかもな」

「ちよ 一花！ 上杉君に失礼ですよ ごめんなさい」

「気にするな この髪色何だ 勘違いされても文句は言えねーよ」

一花の発言に反応して五月がこちらに謝罪するが、別に気にはしない

「わたしは中野二乃っていいいます よろしくね」

「はいよ よろしくな」

「……………三玖」

「そうか 三玖かよろしくな」

現代の若者感がある二乃は元氣よく挨拶をし

ヘッドホンを首にかける三玖は、俺とは反対方向を向いたまま静かに声を出していた

何と言うか 俺の知る中野姉妹とは随分変わっているが、

それぞれあの頃よりも確かに成長しているんだと会話をして実感している

残りの四葉は先ほど何処かに行ってしまった此処にはいないと教えてくれた。

彼女とは昨日顔合わせしているし

行ったとなると……………風太郎の所だろうな

チラツと姿を見た気がするし……………。

「上杉君もお昼なんですネ どうですか一緒に」

「ちよ……………五月！」

「何ですか 二乃」

「(何ですかこっちの台詞よ アンタこっちに来てから変よ 自分から男子誘うとか」

「(べ 別に 誘っているわけではないですよ 今は四葉がいなくてすし席も空いているので」

「ああー いや俺はそつちで食べるから良いよ 中野は折角姉妹でいるんだ 邪魔したらわりいからな」

やめてくれないか……………。

女子4人の中に俺が入るとか、周りの目がこっちに向くだろう

疲れる事は極力したくないんだ
誘いを断ると俺はすぐさま別の席へと逃げていく

「上杉君！ 待ってください」

「何でついてくるんだ 中野」

「五月です 五月！ 私だけ苗字とは不公平です」

「そう言う問題じゃねーだろ……さっさと自分の席に戻れ」

「上杉君は一人でいるんですよね」

「悪いか？」

「なら私もご一緒に」

「良いよ別に……」

何がどういつてこんな事になるんだ

中野五月とはこういう少女だったか……？

確かに昔の姉妹は何かと強引なイメージがあったがそれでも

この中野五月と言う人間はどうだろうか

昨日の事と言い 朝自分でも言っただろう距離感を考えると

実際は距離感を考えるどころか追っかけてくる始末だ

何故そこまで俺に付き纏うんだ……。

『上杉が女連れてる』『いや、アレは泣かせてるんだろうな』『やっぱあいつはそう言う人間だな』

周りのやつらも適当いやがって……。

けどこのまま俺が移動しても中野五月はついてくると言うのだ

現状が変わらないのならここは素直に五月の言う事を聞くべきなのか？

平穩がある昼食時間をこのまま潰す訳にも行かない……。

「降参だ……。中野、向うに座るよ」

「五月と呼んでください」

「はいはい。中野さん」

「五月です！」

第三話 不良少年と突撃!

「どうぞ 上杉君座ってください」

「おっおう……………」

何と言うかこれで本当に良いのだろうか……
仲を取り持つ事が使命であるのだが。

女子4人の中に俺が居るのは場違い過ぎる

案内された席には先ほど同じく

二乃 一花 三玖 そして五月が座っており

何処かに消えた四葉はまだ帰って来ていないようだ。

俺の前に座る五月は、何でかニコニコしているし

その隣にいる 二乃は笑顔なのだが、何処か違う気配も感じてしま
う

他の二名特に 一花は俺が戻ってきた時は『ただいまー』と気さく
に挨拶を交わしてくれた

いやほんと もう少し警戒しても良いと思うがな……。

そして俺の隣にいる三玖だが、俺が来た途端に別の席に逃げられた

これが普通の反応だ

やはり俺を向かえる五月が可笑しいのだ

「やっぱ別の席に座るわ」

「なんでですか 上杉君?」

「……………お腹一杯一杯だよ」

移動しようとする俺の腕を掴みは離そうとしない五月
なんでそこまで必死になれるんだよ

この学園ではまだ 今の俺達は 大して交流もないだろうに
……………。

五月には悪いけどやっぱ集団の中は苦手だ

すまん風太郎 俺はダメそうだ。

確かに五月からは好感触を得られたようだが、怖くも感じて来た

「あの……………」

「三玖か すまん気分悪くしたよな」

「そんな事ない」

「本当か……?」

「コウタロウは悪くない 私が少し動揺しただけだから」

「ほら 三玖もこう言ってます だから座ってください」

俺を避けたと思っていた三玖だったが、俺と五月のやり取りを見て

こっちに戻ってきた

本人曰く少し動揺と話 俺に座るよう促す

何時までも五月に掴まれたままなのも面倒だし

それにここまで女子に言わせて帰るのも男としてどうなのか?

「わーった 座ります はい」

「これで解決ですね」

五月……恐ろしい女だな

「あれー 君さ」

「何だ一花?」

「それだけでいいの 昼食」

「焼肉定食 焼肉抜きどころが悪い 最適解だろ」

「いやいや 意味分からないから」

「二乃までひどい言い草だな」

しょうがねーだろ

どこの家にも家庭の事情という物が存在するんだ

今回は割と豪勢な方だし

食べばどれも同じ何だ栄養取れば 味何て関係ないよ

味かあ……。

「あの 上杉君 良ければ私の少しあげましょうか?」

「良いよ 五月はそれ食ってる お前のは見るだけで十分だよ」

「でも流石にそれだけだと お腹空きますから!」

「そうだよ 少し貰っちゃいなよ」

「はああ……なら少しだけお願いします」

「はい どうぞ 上杉君」

特盛!俺のご飯の上に大量の肉が乗せられた

「これが、焼肉定食か…。」

「つか こんなにいらねーよ」

「良いんです 私の気持ちです」

「あの五月 大丈夫」

「何ですか 二乃その言い方は私ははいたって普通ですが？」

「テンション上がり過ぎでしょ」

「そ そんな事はありませんよー」

やはり姉妹から見ても五月の様子はおかしいようだ

でも理由を聞いてもこいつは教えてくれそうにないだろうな

ここままでされる覚えはないんだけど……………。

一花は一花で俺を見ているだけだし

三玖は謎の飲み物飲んでるし

何だ抹茶ソーダって 一周回って上手そうにおもえるな。

「……………」

「女子から取る訳ねーだろ」

「本当」

そこまで飢えてねーよ

飲み物は水があれば十分だろう

「あのさ 幸太郎くん」

「何だ 一花」

「君って兄弟いる？」

「いねーよ」

「ふーん てつきりさつきのがり勉君の兄弟かと思っさ 目つき似

てるから」

「ぶっふー」

「五月 大丈夫ほら これで拭いて」

一花の奴鋭いな……………。

苗字じゃなく目元で判断してくるのか

どうでりでさつきから俺の顔見てるわけだよ

俺の前に座る 五月は、何故か水吹いてるし

お前が何故動揺するんだ……………。

「一花 悪い冗談はやめてください 上杉君とあの目つきの悪い人が兄弟なんて絶対あり得ませんから」

「何で五月ちゃんが必死なのかなー お姉さん気になるな」

「必死なんて ただありえないと言ったまでです！ むう」

風太郎 やっぱお前ダメだ

五月は全否定してるぞ。

第一印象が最悪過ぎるぞ……………。

五月曰く 勉強を教えてと頼んだにも関わらず

あいつに拒否され 100点の点数を自慢までされたとか

お前は一体何をしてるんだ

幾ら学業に関係ないとは言えもう少し考えて行動しよう

特に女性関連の事だ。

俺が言えた義理じゃないし ここは少しでもフォローは入れておくか…。

先ほどの焼肉をもぐもぐと口に入れ噛みしめ

眩くように静かに会話へと入りこんだ

「その目つき悪い君も何か事情でもあんだろうよ」

「ありません ぜったい だって食事中に勉強しだす人ですよ

行儀も悪いです！」

「それは そいつが悪いな……………」。

けどまあ 世の中には必死に勉強やらねーとダメな奴がいんだあんまり嫌ってやるな」

「上杉君が、そこまで言うなら考えてみます」

「頼む 俺はあんまし 人が喧嘩すんの嫌いなんだ」

「見た目のわりに意外な事言うんだね」

「見た目は余計だ 二乃」

あいつあれでも頑張ってたんだ

例えそのやり方が褒められた物じゃなくても必死なんだよ。

俺みたいな半端な人間より断然ました

「幸太郎くんは、優しいんだね」

「優しかねーよ」

「ええ 上杉君は優しいんです」

「五月 うるさいから」

えっへんとポーズを取っている

何でお前が誇らしげに言ってくるんだよ

三玖にすら言われてるぞ。

本当に不思議な奴だよ 中野五月って奴は

けどまあ こいつら全員それなりに姉妹してんだな。

一人足りないけど

「そう言えば昨日 四葉って子とあつたけどお おう五月さん」

気のせいだろうか一舜悪寒を前方から感じたのは

ぶるぶると手を震わせる五月さんのお姿だ

「何で 上杉君の口から四葉の名前が出るんですか……………」

情緒不安定だなあ

「さつきも言ったろ 昨日ここで出くわしたんだけど お前らの姉妹

か 顔つきも似てるからさ」

「そうよ 四葉は私達の姉妹よ」

「ほー 一番最初に幸太郎くんと接点持ったのは四葉なのか」

ベキツと次は隣から聞こえて来た

恐る恐る見ると三玖が抹茶ソーダの缶を握っていた

三玖までどうしたっていうんだよ

「私 クラスに戻るから」

「え 三玖まってよー」

一花の制止を振り切り彼女はそそくさと食堂から出てってしまう

それを皮切りに二乃も軽く挨拶をすると席を立ち

何処かバツの悪そな一花も三玖が気になると言っただけのまま彼女の

後を追いかけてしまった

残された俺と五月は取り合えず残った昼飯を食べる事にした

何と言うか嵐のような時間だったな……………。

「ごっそさん じゃ俺も行くわ」

「ごっそさん 私も行きます」

「無理して早く食べる必要ないだろ」

「あれが平常です」

「はいはい……………」

どう見ても早食いだっただが……………。

お盆を戻そうと進めば案の定人は避けていく
忘れるところだったな

この生徒達の俺へのイメージを

「五月 先に帰れよ」

「さて 早く返して戻りましょう 上杉君」

「おっおい 五月！」

俺の手を引いて隣を歩く五月はただ前向きに進んで行く

何でこいつは平気なんだ

クラスの人間がこうして避けるんだぞ

どうしてお前は何も見なかったように俺の隣を歩けるんだ……………。

俺なんかと居たらお前のイメージが悪くなるだろう

転校してきたばかりなのに

「五月 お前さ気にならないのか？」

「何がですか？ 良いから戻りましょう 上杉君」

正直言えば 五月の優しさが怖くもある

お前は、それで良いのか 中野五月

その後の授業は 頭に入らなかった

五月の行動だが、突然帰ってしまった三玖もだ

何がどうなってるんだか 頭痛くなってきた

—————

—————

———

「取り合えず言わせてくれ 中野五月やばい」

「やっぱりか 何かされたのか」

放課後 風太郎と落ち合い

現状報告をした

俺が言える事は一言だ 『中野五月はやばい』

語彙力もへったくれもないが昨日今日接しての俺があいつから得た印象だ

男女の距離感を云々の話だな あいつは……………。

ただ他にも 気になる点があった

それは彼女の一眼目での態度だ

その事は風太郎も気になってはいたようだが、大した事ではないと言おう

「一時限目の終わりまで見てたが、中野五月は要領が悪い印象だった」

「良く見てるなあ……………」

「あいつ自身はそれなりに頭は良いと思うんだよ ただそれを正しく学べるかだと思う

そこは家庭教師である 風太郎次第だな」

「幸太郎から聞く限りだと 中野五月はお前に悪い印象無いんだよな？」

「何でそこまで気に入られてるかわかんねーけどな」

「でも 活路は見えたぞ」

流石秀才だ

何とか五月と上手くやれそうだと言ってくれた

あまり疲れる事は苦手だが、この家庭教師問題は俺たち上杉一家には重大な事だ

今日は五月の情報と彼女から信頼を得る所から始めたが

実際は俺が教えるのではなく 目の前のこいつだ

彼女から聞く限り 中々厳しい物を感じてしまうし

結局 風太郎の紹介も出来ずじまいだったしな…。

「そこでお前に頼みたい」

不甲斐ない兄に弟から三度声がかかる

「なんだ 借金返済だ 俺も本腰入れるぞ」

「幸太郎にはこのまま補佐を頼みたいんだ」

「改めて思うけどよ 俺さんに教えるの苦手かも」

「教えるのが苦手なのは俺もだよ それに幸太郎は成績が良いだろう」

「

「元から断るつもりはねーよ」

「よし お前がいれば何とかいけるぞ」

「熱くなってるのは、良いがどうするんだ？」

「この事が俺たち家族の未来を決める事になるんだ

熱くなるのも分からないわけじゃねーけど

空回りはするなよ……………。

—————

—————

—————

『先ずは 今日中野五月を尾行する 周りの友人が邪魔だが何とか家まで行って話でもしないと』

弟が堂々とストーカー宣言しだした事を思いだし

少々頭が痛くなるが、あいつも自分が五月からどういう事を思われているのかそこは理解している訳で彼なりに考えた結果なのだろう

俺が五月に紹介するのが最初の案だったが、それも成功するかどうかも怪しい

風太郎本人は昼に中野姉妹達に顔を覚えられてると言うし

俺が知らない間に何してんだか……………。

「五月達の家かあ……………」

「上杉君 私の家が何ですか？」

「おつ 五月か お前も帰りか」

「はい 上杉君も帰るんですね」

「部活も入ってる訳じゃねえし 何時までも学園にいるのもな」
「なら 一緒に帰りませんか！」

おつ これは願ってもないチャンスなのでは

五月の優しさに付け入る形になるのは心苦しい

けどもう少し警戒するって事を覚えて欲しいもんだがな……………。

軽く後ろに目配せすれば既に待機する風太郎の姿が見える

俺がこのまま同行すればあいつが余程ドジを踏まなければ、他の奴に気づかれねーだろうし

そして帰り道……………。

正直言えば居心地は良い方ではない

女子5人男子1人というこのバランスの悪さ

周りの視線もちよくちよく刺さる

俺の姿を確認すれば今日見かけなかった四葉も『上杉さんだー』と手を振ってきてくれた

二乃も何だかんだ言いつつ『よろしく』と言ってくれた

返事を、返せばそのまま五月の元へと行ってしまふ

「五月食べ過ぎじゃない」

「そうですか？ まだ二個目ですけど はむ ! ひゃ 二乃」

「この肉まんおばけー」

「やめてくださーい」

「男にもてねーぞ」

「余計なお世話ですー」

帰り際に寄ったコンビニで五月が何個か肉まんを買っていた
美味しそうに食べる彼女のお腹を何度も握る二乃

五月はくすぐりたいようで、振り払おうとしている

「わ 私だって昨日は男子生徒とランチしたんですからね……………」
(確かにな 俺と相席だったな)

「キヤー誰 誰 一年先輩？ 頭文字だけでも教えてよ」

「一年先輩……………いえ違いますよ」

「何よ 自分だけ秘密にしゃってさー ああ逃げるなー！」

突然黙りだした五月はそのまま二乃を振り払い去ってしまった

見失わないよう俺も追うと思ったが、風太郎が足止めを食らっているように

流石に怪しまれたのか三玖にじーっと見られている バレるよな やっぱり…………。

スマホを取り出し何処かに連絡しようとする素振りを見せた後三玖はこつちに戻ってきた

チラツと視線を風太郎に送る

コクリと頷き彼はその場で止まり俺や三玖の様子を窺っている

「三玖どうかしたのか？」

「……………不審者」

「はあ？ 誰が誰が？」

「コウタロウじゃない……………」

「冗談だよ 冗談」

「意地悪なコウタロウは嫌い」

「へいへい」

昼時は何だか逃げられて会話もろくに出来なかったけど

一応話せば、それに答えてくれるくらいの事は彼女もしてくれる

「三玖 ヘッドホン首に下げてるのは良いけど 着けたまま歩くなよ」

「!! しない……………」

「ん……………」

「それは絶対にしないから！」

親切心で言っただつもりだが

どうやら怒らせたみたいだ

彼女は言い切るとそのまま走って行ってしま

さして追いかけるか

(行くぞ)

(了解)

風太郎にアイコンタクトを送ると俺たちもそれに続いてついで行く事にした

――――

――――

――

五月達の元まで無事つけば

目に入るのは超高層マンションだ30階近くはありそうだ

俺や風太郎の住む家が蟻んこみてーに思えてくるな

バイト代といい このマンションといい お金持ちになったんだな

隣で見ている風太郎も空いた口が塞がらないと来ている

「確か五月がさつき言ってたな 30階って」

「ほぼ最上階かよ ブルジョワはレベルが違うぞ」

何時までも関心してる場合じゃねえ

俺がついてこれるのもここまでだ

こつから先五月とどうやって会話するかは風太郎次第だ

向こう側で手を振る五月に俺は一声かけ

歩み寄る

「んじや またな 中野」

「五月です！ 上杉君からかわないでください」

「はいはい 中野さん」

「もー上杉君でも怒りますよ ふふふじやまた明日」

「明日な 五月」

軽くやり取りをすれば彼女も満足したのかマンションへと入って行く

鍵がないとエレベーターまで行けないタイプか

部屋番号が分かればどうにかなるが、果たして風太郎は教えてもら

えるのだろうか

「ちよ！ きみそいつを止めて」

「コウタロウお願い！」

「おっと……………（今の風太郎だな）」

俺の横を風太郎が走り去って行く

適当な演技をして彼をそのまま五月の元へと向かわせた

ただ運悪くエレベーターは行ってしまい

風太郎は階段を発見するとそのまま昇って行く

「すまんな 取り逃した」

「あの ストーカーやろうめ」

「ストーカーじゃないと思う」

「いやいや ストーカーだから」

「ついていくか？ 男手があると便利だろうしな」

「コウタロウ 良いの」

「さつき何か気分悪くさせたみたいだしな その詫びだ」

「うん ならお願いする」

適当な理由をつけて彼女と同行し

マンションの中へと入って行く事になった

利用させてもらってすまねえな

アイツが強行手段に出たのだ 俺もその流れに乗る感じで彼と合流しなければな

ここまで大胆に行動するとは少しばかり予想外であるけど…。

第四話 不良少年と家庭教師

入って行く彼を追う俺や

二乃や三玖合流した一花と四葉の五人でエレベーターに入り
彼女達の住む階層30階へと向かって行く

三玖のフォローもあったが 一花や四葉の二人に警戒心と言う物
はないようだ

気さくに接するのは良いけど距離感を考えろ…。

「さて ついた しっかし あのストーカーまじきもかった」

ごめん そのストーカーは俺の弟だ

ついて早々毒を吐く二乃とそれを聞き流している三玖

一応こいつはさつき風太郎と少なからず会話をしていた為

ストーカーではないと思ってくれてるようだ

ただ あんな強行手段されれば気になるのだろう

その為俺の同行も許可された。

「おっ いたいた」

「優等生くんだ！」

「ストーカーよ！」

「上杉さんがストーカー」

「早とちりし過ぎ」

「なな なんで こいつらが」

「ぶぶぶぶ…。」

ダメだ堪えろ

風太郎は覚えてない様子だったし

学園で出会った彼女達を五月の友人と勘違いしたままだ

俺もあえて姉妹とは伝えていない

困惑する彼は、俺がいる事を確認するところちに説明を求める救難
信号を送ってきている

「ここに住んでるからに決まってるじゃないですか…。」

「へえ… 同級生五人でシェアハウスか へー」

「あいつの頭はもう限界に来てるな…。」

「違います 私達五つ子の姉妹です！」

五月を先頭に左右にそれぞれならぶ彼女達

五つ子の姉妹そう名乗り 事実を知った風太郎は白目を向いていた…。

現実逃避はやめておけ

――――

――

――

その後の流れはドキドキもんだった

家庭教師という事もあり風太郎は家の中に案内されはしたが、五月や二乃は凄く不機嫌な様子だった

当然と言えば当然だ

一方他の姉妹は、彼と共に招き入れられた俺の方をじーつと眺めてくる

はい！と言い手をあげる四葉は質問があると俺に聞いてきた

「上杉さんと上杉さんってお知り合いなんですか」

「違いますよ 四葉 上杉君とこの家庭教師と名乗る上杉君は何の関係もありませんから」

「でも 何か似てる気がするんだよね」

「気のせいです そんな事天地がひっくり返ってありえませんかよ」

「ひどい言われようだな風太郎…。」

「俺が悪いのか…」

初対面でお前が彼女にした事を思い返してみろ

流石に擁護は出来んぞ

親切心は受け取るべきだし 頼まれたなら話だけでも聞くべきだったな

「幸太郎だって そう言うの無視するだろう」

「俺はまあ……まず相談すらされないからな」

俺に話をかけてくるもの好きは

学園だとお前を除けば五月くらいなものだ

今日は珍しく 中野姉妹全員と話す機会があったが、それが無ければ基本は一人

「寂しいな……」

「お前には言われたくねーよ」

「あのさー 優等生君とコウタロウくんってさやっぱり知り合いなのかな」

話を聞かれていたようだ

それに一花は、この中では一番に鋭い人物だ

目元だけ見て俺と風太郎を兄弟だと見破っていたのだから

そろそろこいつらにも種明かししないと

時間をかければかける程

修正出来ない位に関係が面倒な方向に拗れていく

ごっほん喉を鳴らす 風太郎は覚悟を決めたかのように話を始める

頼むぞ風太郎 上杉家の未来の為に

「えっと こちらにいる 上杉幸太郎と 私事 上杉風太郎は 兄弟です

そして彼もまた 家庭教師と言うより 補佐を務めてもらうつもりです」

しーんと静まりかえるリビング

悪いとは思ってる完全に彼女を利用して俺は何食わぬ顔でこの部屋までたどり着いたのだ

風太郎より質が悪いだろな

ガタン

「あつっ ありえませんが 絶対に 上杉君と彼が兄弟そして 私の家
庭教師 それは悪く

いえいえ 違います 私には認めません絶対に！」

頭を抱えたまま五月は何処かに走りつてしまう

残された姉妹

二乃なんて何も言わずに同じ方向に行つちまうし

三玖はこちらを一度見てそのまま向かつてしまう

三人の姿を見て一花も『ありや』と言いながら去つて行く始末だ。

――――

――

――

「本当に五つ子何ですね……いえいえ 断然 自信が漲ってきました
た 娘さん全員無事に 卒業させて見せます!!

ああ 娘さんですか事情を説明して部屋に集まって貰っています

よ おいおい 押すなよ困つた生徒だなあー はっははー」

五月から聞かされた事実を疑いを持った風太郎は四葉からこの家
の電話を借りると

知らせていた 雇い主である中野姉妹の父へと電話を入れてい
た

何度も額の汗を拭つては ここにはいない五月とのやり取りを一
人パントマイムで披露し始める

隠してた俺が言えた義理ではねーけど少しばかり申し訳なく思え
て来た

暫くし電話を切れれば深いため息と共に力の無い目で前を向く
勿論そこには 誰もいない

誰も座っていないソファーとお菓子だけが置いてあるテーブル
虚しいなあ

「えー今日から 君達の家家庭教師となった上杉風太郎と私の兄上杉幸太郎さんです 楽しく勉強を……………」

「風太郎よ 現実を見ろ…。 これはひどい有様だ 全員消えたぞ」

「はいはい 私がいまーす」

残された風太郎は自己紹介を進めているが、

視線の先には虚空のみ 五月を先頭に全員部屋に閉じこもっている

残っているのは 俺と風太郎

そして唯一この場に留まっている四葉だけだ。

「とうか 幸太郎お前 中野五月が姉妹だつて知ってただろう！」

「ああ でも聞かれてないしな 考えても見ろよ 相場の5倍だぞ 五月一人でそれは無いだろう？」

「どうりでお前が笑いを堪えてた筈だ… でも教えてくれよ。

「はあ…えつと四葉だっけか 0点の」

改めて相場の5倍という ありえない報酬を思い返し

彼もそれに納得すると眉間にしわを寄せ これからの事を考え始める

父親と電話して『やって見せます』と啖呵も切ってしまったのだ 後には引けないよなあ。

一方四葉は、風太郎の授業に参加してくれると話

風太郎も嬉しさのあまり『抱きしめていい？』とセクハラまがいな事を言いだしている

綺麗に彼を回避し四葉は残りの姉妹を連れてこうよと提案してくれた

「風太郎 お前は勉強の準備してろ 俺が連れてくる 四葉 すまんが部屋を案内してくれるか？」

「何度でも言う お前が頼りだ 一人でも多く連れてきてくれ！」

期待するな 多分俺の評価はさっきの一件で底辺まで落ち込んだ

筈だ

〇に何を期待しても〇だからな…。

「私達の部屋は前から 五月 私 そして三玖 二乃 一花の順番です」

「せめて一人は確保してえな…。」

「大丈夫ですって 五月は凄く真面目な子です 余程の事が無い限り協力してくれますよ」

「それに私がいいますので〇人になりません！」

四葉さん その余程の事をあの弟はやってしまったのだ

俺が五月の説得に駆り出されたのもその事が、理由なんだぞ…。

足が重いな 今から会いに行く全員に理由を話すのか

だるいなあ

だけど 風太郎も風太郎なりにここまで来たんだし 勇也さんの為にも頑張らねえとな

トントン

「嫌です！」

「即答だな 四葉ダメだ ここが落ちた時点で俺の価値は皆無と化した」

「上杉さん 落ち込まないでください」

「……」

「五月：騙して悪いな 本当にすみませんでした。」

でも気が向いたらで良いんだ 顔だけでも出せよな 行くぞ 四葉」

「ちよ 上杉さん 待ってください」

(なんで 上杉君が謝るんですか)

五月には何を言われてもしようがないと思っている

嫌ですの一言で済んだけましと言える

謝罪を述べた後 俺と四葉は次の部屋である三玖の元へ向かう

三玖にも謝らねえとな

あいつなりに気を使って俺を部屋まで連れて来た訳だしな
四葉が『心配ないですよ 三玖ならきつと来てくれますよ』と声援を送ってくれるが、足取りは重いままだ。

トントン

「……嫌」

「あれー 三玖までえ」

「だろうな すまねえ 折角三玖が気を利かせたのに利用する真似して

でも余裕がある時で良いんだ お前も参加してくれ」

「あつ…その」

「ん どうした三玖」

五月と同じだ彼女もご立腹だった

そうだろうさ

中に入って行った風太郎を探す手伝いを言いだした人間が俺
それを了承してくれたのが三玖

なのにどうだろう 実際は言いだした俺も共犯だ

怒るなど言うほうが難しい

頭を下げた 彼女にも参加して欲しいとだけ伝え去ろうとしたの
だが

裾を掴まれてしまった…。

ふり返れば三玖はこちらを見ている

そうか 説教か受けるぞ、これも上杉家の為だ。

「何で コウタロウは、此処にいるの」

「えっ それはお前たちに勉強を教える為で、」

「それだけ…？ 他に何か」

「んなもんねーよ さつきも言っただろう お勉強を教えるって た

だそれだけだ 行くぞ四葉」

「はっはい！ ごめんね 三玖 ああー待つてください 上杉さーん」

「コウタロウ…私は」

三玖が何を期待してるかは知らないけど

俺が言えることは、お前達の家庭教師をする その事だけだ

試すように俺を見つめる彼女の部屋を去り

直ぐに隣の二乃の部屋に向かう

結果から言えば 論外だった

居留守を使われた挙句に『うっさい』と怒鳴られる始末だ

二乃さんも相当怒ってらっしやる

その矛先は今俺に向けてくれ

風太郎の心を折る事だけは勘弁してほしいな…。

「えっと まだ一花が残っています 一花は…」

「何が言いたいか大方予想はつく フォローする必要はないぞ 四葉」

「いえいえ ああー えっと すみません」

「あやまるな」

残るは中野姉妹の長女である

中野一花のみだ まあこのままの流れで行けば簡単に話は進まないだろう

けど試合終了のベルが鳴るにも早すぎる…。

接してみても 一花は少なからず興味を持つてくれる筈だと勘が囁く

それが勉強する意欲になるかは、別として参加してくれるだけでも動いた甲斐はある

四葉のように協力してくれればいいのだ。

真正面の部屋 事前に『驚かないでください』とだけ注意された

ああ 覚悟は出来てる

この如何にもと言わんばかりの彼女の表情で俺は確信した

一花はきつと…

「知ってたよ ったく…。」

開けられた扉目に映る光景

一目見れば、人が住んでるとは思えないこの光景

辺り一面に脱ぎ散らかされた服や散乱する荷物の山々

机とも思わしきものもただの荷物置きとなっている

まさに 汚部屋だ！

この惨状を見て冷静でいられるのは以前にも似た部屋を俺は訪れた事がある為で

こういった事には慣れているからだ

「一花さん 入るぞ」

「上杉さん 驚かないんですね」

「似たような人間を知ってるからな…。」

「上杉さん？」

「何でもねえよ…さて何処かな」

(なんだろう 今の上杉さんの寂しそうな顔…)

関係ない昔の思い出だ…。

今は一花を探して話だけでも聞かないねえと

四葉だけとか洒落にならない…。

「ううー 誰かなあ 勝手に入ってるのは？」

「おはよう 一花」

「もーまた散らかして」

「まさか 君が私達の先生とはね… それで五月ちゃんを」

「確かに五月に近づいたのは、それもあるけど 正確には俺は補佐だ」

「へえー 認めるんだね」

「今更 隠し立てする必要もねーだろ…服着ろよ風邪引くぞ んで下に来い」

「そんな風に言われるとお姉さん自信無くすなあ…。」

上目遣いでこちらの表情を確認しているが

そういう子芝居は効果はない

「自信ねえー 大丈夫だろ 一花は十分魅力的だから」

「…彼はああだけど お兄さんは、結構言う方なんだね 何か面白いね」

「面白くねえーよ… あと一花もすまねえな 騙す真似して」

「私は別に気にしてないよ」

「上杉さん 私も気にしてませんよ!」

おい 四葉 フォローは有難いんだけど

パンツを持ったまま向くのはやめてくれないかな

流星に俺でもその光景は心臓に悪いから…。

『すつすみません!』と下着を一花に返した

「とにかく 居間に来いよ? 風太郎が準備してんだから…。」

はーいと二人の返事を聞き俺は静かにガッツポーズを取った

これで二人確保出来た

最低ラインとして後一人は確保したい所だ

少しづつで良い 彼女達を仲間に引き入れる

全員一気にと考えるからダメなのだ

脳内で開かれる裁判でもその方針で満場一致と出ている

「あおう コウタロウ…。」

「どうした 三玖 やる気出てくれたか でも無理はするなよ?」

「あの そうじゃなくて」

「そうじゃねえのかよ…それはそれで嫌だな」

「私の…体操服が無くなって」

「何色だ?」

「赤のジャージ…さつきまであったの」

「四葉と俺が来た後か前か?」

「コウタロウ達が来た後に無くなってた…。」

廊下で待っていた。三玖に事情を聞けば

『赤のジャージが無くなった』盗難事件発生だ

それは俺と四葉が来る前は確かに部屋にあったと話す

確かに俺たちは部屋に軽くだが、お邪魔させてもらったが、物を取れる暇なんて無かった……。そこまで手癖も悪くねえしな……。

急に訪れた人物となれば絞られるし三玖が俺を疑ってしまうのは無理ないだろう

彼女には恩があるし 困ってるなら助けないとな

(助けるかあ……………。)

「一つ良いか 俺たちが来た後に誰か来なかったか」

「えっ……………うーん あっ！」

「思い当たる節はあるようだな」

「この廊下は一本道だ

誰かが、出入りすればすぐ分かるだろう

あの時部屋から出なかった人間は、五月と三玖と二乃

よ 一花は、あの部屋で寝てた訳で三玖の部屋に来る暇なんて無いんだよ

可能性としては……………

「あれとか……。」

「あっ！」

居間を指させれば何か準備している二乃の姿があり

彼女は、胸基に『三玖』と書かれたジャージを着ている

う 大方俺たちが、部屋の前から去った後に三玖の部屋に入ったんだろ

兄弟で着回し出来るかついつい借りてしまう事は、俺もあるからな
…。

サイズが合うと余計な

三玖の消えたジャージは無事に発見され

彼女も少しは安心出来ただろ

大事にならずに済んで良かった良かった……………。

「俺は行くから……。」

「コウタロウ その疑ってごめん」

「気にするな 困ってるなら助ける何て 当たり前だろ…？ この外見だと説得力ねえけどな

ああ これで別に勉強しろとは言わないから やりたくなったら来てくれ」

「……………」

「三玖？」

「たす……………！」

「おーい たす？ 何だよアイツ？」

何かを言いかけ三玖は全部言い終わる前に居間の方に行ってしまった

『たす』その後続く言葉を俺は分かっているつもりだ

でもお前が気にする必要なんてねえんだけどな……………。

はあ…色々と考えて頭痛がして来たな。

居間の方で二乃の呼ぶ声が聞こえる

一花と四葉も準備を終えて部屋から顔を出す

五月はと言えばさっきのやり取り以降姿は出していない

あいつにはあれだけ世話になって仇で返したんだ

時間はかかるが気長に待つとすつか……………。

「さて行きますか」

「上杉さん 私達もいきますよー」

俺の後ろに続くように二人も階段を降りる

何とか二人集まった 風太郎、まだまだこれからだ 気張れよ。

第五話 不良少年と帰り道

「上杉さん ご心配なく私は勉強してますから！」

自信満々に言うが四葉…。

お絵描きの時間は今じゃねえよ

「と言うか 上杉さんは二人いんだぞ〜」

「えつとなら 上杉さんと上杉お兄さんで！」

「OK それでも良いぞ」

呼び方は大切だ

上杉さんと呼ばれたら俺か風太郎が反応して面倒だ

今日も中野と呼んで数人が反応する場面を俺は見ているしな

やる気はあれど一向に進まない四葉

やる気と言うより 興味本位でこの場にいる一花

勉強中などお構いなく予定を決める二乃や

こつちに全く反応しない三玖

五月に至っては部屋からまだ出てこない

これは望み薄かな…

想像以上に厄介だ

(お前何で そんな冷静なんだ)

(考えて見ろ 家庭教師が必要って言うんだぞ それが5人も勉強が出来るなら呼ばねーだろ)

(だからって 無法地帯過ぎるぞ この状況は)

上杉家のアイコンタクト

俺以上に現実の直視を避ける風太郎は、「どうしようもねえ」とぼやいている

呆れてるこいつには悪いけど今は少しでもやる気のある四葉に勉強を教えるべきだろう

せっかく志願してくれているのだ

ここは一人一人教えていかないと後手に回るだけだ

(お前は四葉に教えてやれ やる気があるだけましだろ。)

(だけど この中で無理だろ どうしろと！)

行動する時は思いもがけない方法を取れるくせに
いざ開始となると動けないと額を押さえる風太郎
お前がそんなんでこの先どうすんだ。

俺も出来る限りサポートすると彼に言うが
思考回路はショート寸前のように見える…。

困り果てる俺たちにニヤリと近づく影が一つ

この中で 今現在要注意人物と俺の中で警報がなる人物

中野二乃がお盆に乗せられた水をこちらに手渡す

「食べてくれたら 勉強してもいいよ!」

わざとらしく目を輝かせ風太郎の顔を覗き込む二乃

自分の作ったクツキーを食べてくれる彼に『嬉しいなあー』と言っ

ているのだが

感情がこもってねえ…。

でも出された物を食わねえわけにも行かない

俺も一応頂くか、『毒は』ないと言うんだ流石に入れないだろう

あむ…。

「君も食べなよ」

折角出されたんだ俺も食うか

数個手に取り、口に入れた

「食えるな…。」

「食べてくれたあ でもお……………」

ぶつちやけ家庭教師何て いらなんだよねえ…。 なーん
てね」

『!!』

今の洒落にならないな

先程と違いどす黒い感情が入った言葉が俺たちの心にぐさりと突

き刺さっている

当然の反応だろうな 俺たちは部外者だ それが急に押しかけて勉強しろと言ってくるんだ

多少なりと彼女の言葉に含みがあるのは仕方ないだろうな…。

俺の本能が言う 『飲むな』と…。

出されたコップをそつと机に置き

二乃の方を向く

彼女の一声で 一花達もこちらに視線を送っている

(嫌な…予感…悪寒がしやがる…)

「ぐくぐく ふう … (五人を卒業させるしか俺たちには道が無い) ……………」

あつ 飲んでる人間がいる

神妙な面持ちでコップを持っていた、弟はゴクゴクと豪快に水を飲みだしあつという間、グラスは空に……

「バイバーイ」

「ああ？…………… あれ」

バタン…

風太郎はその場で顔を突っ伏していた

彼が倒れたと同時に二乃はこつちをぎろりと睨む

ああ…これは終わったな

今日は退散するべきだな

「上杉さんー ええ 二乃何を飲ませたの!？」

「何も っつか何であんたは飲まないわけ？」

「危機回避能力だけは高いからな」

「っ 余計な手間がかかる」

「こえーよ」

やっぱり猫かぶり女子だったか中野の次女は

この子に勉強させるのは相当苦勞するだろうな。

考える暇もないのかそつと先程のコップを再び手渡してきた

「いや 飲まねーよ」

「飲めよ 飲みなさいよ」

「二乃 少し静かに」

「三玖は黙って 何かこいつは気に入らないのよね 俺は分かっ
てます 見たいな顔しちゃってさ」

「二乃 それは言い過ぎじゃ」

「別に良いよ 何を言われても 嫌う勉強を俺らは教えに来てんだか
らよお これくらいは覚悟してる」

「言うじゃん!」

…つかあの可愛かった 中野二乃が、変わり過ぎだろう…。

俺が知ってるこいつらはもう少し天使のような感じだったんだが
な

ふと過ぎる幼少期の記憶 今の二乃と昔の二乃を照らし合わせる
が

脳内ではエラーと表示されてる

「何見てんのよ? キモ」

「言いたいだけ言えよ はあ」

全く 勇也さんも厄介な所から仕事もらって来たなあ

けど幾ら言われても俺らは引かねえ 家の将来が掛かってんだ

それに一度受けた事は投げ出したくねえしな……………。

ボト…

「あつ…」

「何してんのよ 水がこぼれたじゃない!」

「今のは俺が悪かった わりい」

三度渡されたコップだったが、不意に起きた事なのか
左手に力が入らずそのまま落下してしまい

カーペットの上を濡らしている……。

手近に何かないかと探すと 四葉がタオルをこつちに手渡す

「四葉 ありがとな」

「いえいえ これくらい余裕ですよ」

四葉は何て良い奴なんだ

こいつが居るだけで賑やかになるな。

「何してるんですか？」

「おう 五月かうるさくして悪かった」

「うるさいのはアンタだけでしょ」

「お前もな 良いから手を動かせ」

「零したのアンタでしょ」

「だから 謝っただろ……。」

入ってから頑なに部屋から出ようとしなかった

五月だったが、騒ぐ声が聞こえたようで部屋から出て来た

床を拭く 二名を疑り深く見ている

五月からの信頼は、もう無さそうだな。

「濡れてるところはなしか」

「たく アンタがちゃんと受け取らないから」

いい加減それを言うな

何べん謝れば気が済むんだ中野次女は……。

「はあ…今日は帰る 風太郎は寝てるし これじや教える所じやねえからな」

「二度とくんない」

「うっせ また来るよ よっと」

久々に背負ったがこいつも随分と重くなつたもんだな

風太郎を何度か起こそうとしたが、二乃が飲ませた薬が余程効いたのか

今日の出来事がさうとう応えたのか全然起きる気配もなく

仕方なく背負っている

「お兄さん大丈夫ですか！」

「弟を置いて帰れるか それにバイトしてるからなこれくらいは余裕だよ んじゃまたな中野姉妹」

「コウタロウくん気をつけてね」

「コウタロウ……………」

「どうした 三玖」

「夜の道は危険 車には気を付けて 絶対に」

「うん ありがとな キーつけるわ 五月もまたな」

二乃の『かえれーコール』は未だに聞こえるが無視だ無視

夜道は危険だと言ってくれるこいつの忠告はありがたく受け取る事にしよう

俺は三玖達に挨拶を済ませるとそのまま部屋を出ていった

今回の収穫は、あれだ 四女は良い奴ってか…

はあ 進捗は無さそうだな

「ねえ 五月ちゃんはいいの？ 彼帰っちゃうよ」

「うう……………」

—————

—————

——

「30階だしな エレベーターも少しは時間かかるよ……………」

「上杉君！」

「おっ びつくりした 何か忘れものでもあったか？」

エレベーター待ちをしている俺の背後に気配を感じ

咄嗟さに横に避ければ 五月の姿があり

何故かもじもじとしている……………。

「あの 上杉君 私送ります」

「大丈夫だ ここに来たのは俺らだし 俺らだけで帰る」

「夜道は危険ですから」

「まあ…それはな でも男だぜ 負けねえよ」

「お願いします 送らせてください」

「良いのか…俺はお前に嘘ついたんだぞ？」

「それは……………」

「どうした 急に声が小さくなったぞ」

「もう 送るったら送るんです 良いですか！」

「分かった……………でも静かにな 今こいつが起きると面倒だ」

しーつと指を口元まで持って行き静かにするよう言う

彼女もこくりと頷く

今起きると絶対に二乃と喧嘩になる

それにあまり遅い時間に帰ると風太郎も勉強する暇もなくて

明日辺り憂鬱になってそうだからな。

「では私はタクシーを手配します」

「押しかけておいて悪いな 借りは返す」

「このまま上杉君達を徒歩で帰らせるわけには行きませんから タク

シー代も私が出します」

本当に律儀だな

タクシー代に関して断った所で返せる余裕ないし素直に五月の
厚意甘えるとする

—————

—————

———

「すみません 〇〇までお願いします」

「ほれー 風太郎くんやー 入れー」

下に行けば既にタクシーが到着していた

さつき呼んだと思ったが五月の事だ事前に呼んでいてくれたのだ
ろうな

後ろの席に風太郎を寝かせ 俺もそのまま後ろに乗り

五月は前の席へと座り 俺が持っていた手帳にかかれた住所を説
明してくれている

「タクシーとか何時ぶりだよ 随分のつてねーよ」

「普段どうしてるんですか？」

「自転車か全速力だ 一応バイクの免許も持ってるぞ」

「疲れないんですか」

「さつきも話してたけど 普段からバイトしてるから体力には自信
あつからな」

「バイトですか…無理はしてないですよね」

「無理ねえ…どうだろ 俺は自分で出来る範囲まで動くからな」

「気を付けてください 何かあつたら ご家族が心配なさるのですか
ら」

「心配だけはかけない もうかけたくないからな……。」

「……………上杉君 私」

「良いよ 五月 無理にやろうとか思わなくて」

そんな泣きそうな面させてまで俺は無理をさせるつもりはねえ

五月の心の整理がついてからで構わない……。

一言言うと彼女は黙り

同じくして俺も黙ったままタクシーに揺られて行く

—————

――

「おーい 風太郎 起きろ 起きろって言ってんだろ！」

「はっ！ ここは何処だ あいつは、二乃は！」

「4800円になります」

「カードをお願いします」

「本当に悪いな 五月」

「送ると言ったのは私ですから 上杉君は気にしないで良いんです」

目を覚まし辺りを確認する風太郎は自分の状況を理解してないよう
うで

俺の声も届いていない

口に涎まで良いから拭いてくれ…………。

「五月！ どういう事だよ」

「一泡吹かされたと言う訳です これに懲りたら諦める事です」

「それは出来ない」

「送ってもらって何だが 無理だな…………。」

「上杉君まで 何でそこまで」

五月には悪いとは思ってる

帰りのタクシー代まで出してもらったんだここは引くのが正しい
だろう

けど俺と風太郎は引く訳には行かない

このチャンスは一世一代の大博打なんだ。

「わーい やっぱり お兄ちゃん達だー」

「おー らいは帰ったぞー」

「お帰りなさい ご飯出来て わーい」

「ぐはあ」

「風太郎ー！」

「幸太郎お兄ちゃん この人つてもしかして生徒さん！」

「ちげーよ ほらいくぞー」

「うそだー あのもし良かったら家ご飯食べていきませんか!!」

「俺は良いと思うけどな 世話になったし」

「幸太郎まで何を言いだすんだ!」

「嫌ですか…シクシク」

ズキーンと言う音が俺にも聞こえた

らいはの上目遣いに合わせ涙目という洒落にならねえ程の破壊力を秘めた兵器

流石に五月も効いたようだ

その場で軽く悶絶した後は流れるように

タクシーを返し 五月も共に上杉家のアパートに向かう事になった

第六話 不良少年と家庭事情

「親父 今帰った」

「勇也さん 今帰りました 遅くなつてすみません」

「上杉君?..... ああ どうも夜分遅くに申し訳ありません」

玄関を開ければ既に夕食の準備を始めている

我が家の大黒柱上杉勇也さん 俺たちの父親だ

『よう 無事に帰ったか』とこちらに返事をしてと思えば

こちらを見れば目を丸くしている

その反応は当たり前前だよな.....。

らいはは入るや否や鍋の中のカレーを取り分ける

五月も靴を並べそのまま中へと入つて行く

俺も鍵を閉めた後、靴を置き

まず初めに 母への挨拶を済ませた

「お母さん ただいま帰りました」

「お母さん お兄ちゃん達が女の子を連れてきました」

「らいは いいからそう言うのは報告しなくても」

母への報告は大切だろうか?

らいはどんな時でも良い子なんだよ

それぞれ写真に写る母への挨拶を終えると席につく

狭い家だが、俺達が暮していくには十分だ

今はテーブルを囲むように

勇也さん らいは 俺 五月 風太郎と上手く円を描く形で座っている

「上杉家 特性のカレーと卵焼きです お口に合うと良いんだけど」

「とっても美味しそうです」

「ぶっはー」

出された料理を俺たちは囲み手を合わせる『いただきます』

勇也さんは早速と牛乳を飲んでているが

『一週間前じゃねーか』と言いなながらも飲み続ける

「ちよ 勇也さん お腹壊しますよ」

「これくらい 何でもねーよ ゴクゴクゴク」

「お嬢様に庶民の味が分かるかねー」

そういう偏見はやめておけ風太郎

こいつ何だかんだ中野家での出来事を根に持つてるようで

皮肉交じりにもらすが、らいはにお盆で叩かれている

「つははは そんなこったから お前は俺やこいつ見てーにもてねーんだぞ」

「勇也さん 冗談はやめてください」

「謙遜すんなよ 幸太郎 つははは」

「上杉君………?」

「何だよ 五月 こえーよオーラしまえ 今のは勇也さんなりに小粋なジョークだよ」

「いえ………私は何も知りません ふん」

今日の昼時の悪寒が再来してきやがる………。

左隣からぞくつとする寒気を感じたが家の雰囲気もある

すぐさま収まってくれた

五月さん………怖ええよ

勇也さんも俺らを見て笑っているが、こういった事は全然笑えないんでまじで

勘弁してほしいです。

「あつそうだお兄ちゃん 家庭教師ちゃんとやってきた?」

『あつ!』

らいはの何気ない一言で風太郎と五月の声は重なった

二人は軽く目配せするが、口を紡いでしまう

「ああ らいは 勿論だ 俺も一緒なんだぞ 大丈夫に決まってんだろ」

(上杉君 何でそんな嘘を)

(五月 今だけで良いんだ 家にいる間は 会話を合わせてくれねえ

か…………妹の泣き顔は見たくないんだ)

(上杉君の頼みなら 仕方ありません)

「どうしたの 幸太郎お兄ちゃん？」

「うーん 明日の予定を話してたんだ」

「はい 明日は何処を教えてもらおうかと」

「らいはは何処か安心したように胸に手をやる

大丈夫だ らいは俺はお前を絶対に泣かせない 嘘でも何でもついででもな。

「でも これで安心したよ これで借金問題も解決だよ」

「らいは お客さんの前だぞ」

「ああ ごめん」

「少しくらいいいだろ」

「幸太郎まで……………」

人前で言うような事ではないが、口に出してしまうくらい妹も安心出来たという事だ

—————

—————

——

「お邪魔しました らいはちゃんご馳走様」

「では 勇也さん 俺もバイトがあるんでこのまま彼女を送ります」

「おう」

上杉家での時間もあつという間に過ぎて行った

会話の中でぼろが出ないように最善の注意を払ったつもりではないんだけど…………。

勇也さんには気付かれてそうではある

五月の隣に座る 風太郎は内心ドツキドキだった。ただろーな俺もそうだし 何より話を合わせてくれたこいつも相当気を使ってたしな

食事も終わり 五月も帰宅することとなり俺自身もバイトがある為 このまま彼女を近くまで送って行く事になった

じーつと居間の方から『頼むぞ』と言ったような視線が飛んでくるが

風太郎に言われんでも分かっているわ……。

「五月さん！」

「はい」

「幸太郎お兄ちゃんは 口は悪くて 見た目も怖い 面倒くさがって人の話をするーしたりする人ですけど それでも困ってる人は助ける人なんです！ 勿論風太郎お兄ちゃんも良い所あります！ だからそのまた食べに来てくれる？」

「勿論です 頭を使うとお腹が空きますから またご馳走してください い それに

(らしいはちゃん私は知ってますよ……彼が優しい人だって事は)」

口が悪いのは自覚してるし 見た目も分かっている

そこまで面倒くさがってたかあ？でもそうやって俺たちをフオーしてくれるらしいはが居るんだ

俺も諦める訳にはいかねえな……。

風太郎の奴はチラツとこつちを見ては笑ってやがるし

ただ隣でにこやかに微笑む五月もそれは作り笑顔ではない事を俺も分かっている

今こうして隣で笑ってくれている少女 この子をこういう笑顔を浮かべれる状態で

共に勉強がしたいもんだな。

「じゃ 行ってきます らいは ちゃんと寝るんだぞ 勇也さんでは」

「お兄ちゃん……事故だけには気を付けてね」

「幸太郎 きーつけて嬢ちゃんを任せたぞ」

家族に見送られ俺と五月はアパートを後にした

事故か夜は特にあぶねえからな 夜間はきいつけないとな

――――

――――

――

帰り際俺はタクシーが来るまで五月と軽く話していた

家の事は深く突っ込んで来なかったのは幸いだ

彼女から見て実の父親に対する俺の接し方は少し奇妙に見えてた事は、分かっていた

何度かこちらの顔色を見てきていたからな……

「上杉君、あの……事情察しましたけれど ご協力は……。」

「気にすんな……泣き落としなんて事すっと思うか？ しねーよんな事」

「知ってます あなたはししないと……。」

けれど 勉強は私なりにやり遂げて見ようと思います。

それでも家庭教師を続けると言うなら みんなをよろしくお願ひしますね。彼は、あんな態度でしたが、上杉君は悪いと思っつてませんから……。」

「了解 明日はまた午後一に風太郎と行くから 三玖や二乃 一花に声かけてくれ。四葉は来てくれるだろうから……。」 後は勝手

に進めるさ んで勝手にままにお前に声をかけるかもな?」

五月は言った 『家で勉強教えるならどうぞと私は知りません』

自分の問題は自分でやりますと……………。

一応では、あるが家に入る了承は得たのだある程度は自由に動ける
というのは大きい進歩だ

けどな 隣で勉強会開いてるのに 一人で勉強してる人間を無視
出来る程淡泊ではない

五月は『悪くない』そう言ったが俺本人はまだ自分を許せてない
俺は俺なりに五月達に接するぞ んで全員を笑って勉強させてや
る!

これが俺のやり方だ 風太郎……………。

それにこいつには世話になつた貸しが残ってんだ

何でかしんねえけど俺が一人だと付いてきやがるし

本人はと言えば鳩が豆鉄砲を食つたよう面でポカーンとしてる

「えっ……………」

「今日 焼肉定食肉抜きに焼肉が追加されたしな トッピングの分
は、家庭教師と関係ねーから」

「いえ それでは上杉君に負担が 家庭教師とかわらないのでは!」

「んな事 かんけーねえよ 受けた恩は返す 困ってるなら助けんだ
よ」

「……………!!」

「どうした 耳が赤いぞ?」

「しつ知りません! あと上杉君…」

今日散々言われているが、『上杉君』って人間はこいつの周りには二
人存在する

家に来れば何と合計4人もいるわけで、今後付き合っていく中で
色々と不便だ

四葉だって『上杉さん』『お兄さん』と分けてくれたんだ

五月にもそれぞれ呼称で呼んでもらわねば……………。

「ああ その上杉君ってやめてくれないか 【上杉君】は二人いるしな

呼び方分けてくれ……あいつを風太郎君で 俺はそのまま
「拒否します」

「ひでえ、嫌われようだな なら 『幸太郎』 っと呼んでみるか？」
「あつ あの良いんですか？」

「上杉君って混同するよりましだ 言ってみ」

「うえs…… 違う 幸太郎 【上杉幸太郎君！】」

「上出来 これから頼むぜ 中野」

「だから 私は五月 中野五月です！」

「つはは……冗談だ 五月だろ」

このやり取り今日だけで何回しただろか

人とかうやって話すの案外悪くねえかもな……。

少しばかり彼女をからかった後暫くすれば

呼んでおいたタクシーがやってきた

彼女はそれに乗ると自分が住むマンションの住所を教え目的場所

へと向かう事となり

俺も彼女を見送ればそのままバイトへと向かう

「あの 幸太郎君 言いたい事が」

「んだよ？」

「私達は全員……」

「その件か 俺は予想はしてる 風太郎は多分 分かってねえだろ
な」

「あんな事言っておきながら、すみません」

「あやまん……んじや運転手さん よろしく願います じや
な五月」

「幸太郎君も バイト頑張ってください 後道中気を付けてください
ね」

軽く手を振り彼女も振り返す

タクシーが見えなくなった頃に俺は自転車に乗り

ペダルを動かした。

彼女の言おうとした事 『私達』

それは【私達全員が赤点候補】と言う事なのだろうな

あの姉妹それぞれ難ありだし

やる気だけはある四葉もノートにお絵描きしていたんだ

勉強何て中々しないんだろう

そして依頼された風太郎 あいつの性格だ

『誰か一人』と勝手に解釈していてもおかしくない

「面倒だなあ　まあー　でも面白いからあいつには黙っておくか

っふふふ……何か久々に楽しくなってきたな」

その日バイト先の店長から『上杉君　にやけ顔が怖いよ』と言われ
てしまった。

第七話 不良少年と悩める三女

「全員赤点候補だと… 合わせて100点ってどういう事だ」

「うつせーぞ… 風太郎 諦めろ〜」

「幸太郎こそ知ってたくせにそうやって重要な事隠す癖 何とかしてくれないか?」

「へい、へーい」

家を出て暫く 姉妹の実力を図る為行われたテスト

その事を思い出しては今朝からずっとこの調子だ

頭を抱えては『ありえないだろう』と何度も呟く

風太郎の考えは『誰か一人赤点の回避』それさへ出来れば良かったと話す

ここは俺の予想通りだった…

だが、五月が俺に伝えようとした事やあいつらの勉強への意欲無さを見て俺も薄々はそうではないかと感づいてはいたが、ハッキリした事実が出るまでは風太郎にも黙っていた

『合格ラインを超えた奴には金輪際近づかないと約束しよう』

風太郎は言い放ったが現実には甘くは無かったのだ

彼が思い描いた 一人だけ勉強見よう作戦 淡い夢は、塵となって消え去り

中野姉妹という強大な存在に圧倒されテスト用紙もただの紙切れ同然に

彼女達から返却された紙には知りたくもない現実が俺達の前に現れた

ガタガタと肩を揺らし逃げ行った彼女達を風太郎はその日眺めてる事しか出来ない程

脱力してしま

全員の勉強を見ないと行けないという過酷な現実が俺たちに待っていたのだ

今では五つ子卒業計画と名を変えている

仲のいい事に全員合わせて100点満点だ。花丸でもあげたくなるが、ここは小学校ではなく高校だ。褒められた事ではないのが本音だ

元から5人いる事を知っていた俺はある程度余裕はあるが
弟はそうもいかない様子だ　これから先の事を考えながら
夜は自分の勉強までやらないといけないんだ

「なあ　風太郎…暫く俺があいつ等の相手するか？　お前も勉強したいだろ」

「はあ？　良いよ　お前だってバイトあるだろ　それなのにこっちに本腰入れたらまたぶっ倒れるぞ」

「そんなやわな作りしてねーよ　心配すんなよ」

「今度また　あんな事になったら」

「言わなくて良い　俺が一番わかってる　まあ気長にやるぞ」

「ああ　この際全員見てやるよ　一人づつ信頼勝ち取ってやるよ！」

「お互い無理のねーように頑張るぞ　さて走つか」

【今度また、あんな事】　風太郎に言われなくても俺が一番分かっている
家族が泣く姿何てもう二度と見たくねえ。

不意に頭に過ぎる　あの記憶……………誰も彼もが報われない記憶だ
でも今はその事は記憶の隅っこにでも閉まっておこう

何だかんだと言いつつ俺がこの依頼を投げ出さずやる気をだしているのは

勿論　勇也さんや家計の為でもあるし

そして何より　中野姉妹が心の底で笑ってくれる姿を俺は見たいのだ

それに恩返ししなくては……………

俺の前に現れた【中野六花】　そう名乗ったあの女の子の為に
……………

—————

――
――

「あぶねえ 着いた」

「はあ はあ ギリギリセーフ 幸太郎お前早いよ」

「運動しない、お前が悪りんだよ」

「……ん 見た事無い外車だな 百万くらいしそうだな」

「適当言ってんな あぶねえぞ」

アパートから学園まではそれなりに距離があり

今日みたいに走って来なければ間に合わず門前で立ち往生もざら

風太郎は肩で息をし 辛そうなにしている

普段から勉強以外は切り捨てている為、体力勝負になると、とことんそれが目立つ

俺や風太郎が走って到着する中

結構高めの外車がその場に停まり

風太郎が興味本位で近づくが、ぶつかれば洒落にならない為少し距離を開けさせた

「あつ コウタロウ!!」

「上杉さんにお兄さん おはようございます!!」

「何なんですか? じろじろと不躰な」

車内から中野姉妹が降りて来た

外車で登校かやはりリツチだなあ

「よう お前らおはよう」

「幸太郎君 おはようございます!」

「ん? 今さ五月 こいつの事さ名前で呼ばなかった?」

「そ、それは……」

「二乃も一々噛みつくな 上杉君が二人いると厄介だから俺が頼んだんだ 悪いか?」

「キモ」

「はいはい まあ二乃もおはよう」
「……………」

テスト以前まで上杉君だったし

一昨日もそこまで会話する暇もなかった為 五月から名前呼ばれる機会もなく

急な変化だと思い二乃が気にするのわかるけどさ 一々嫌味っぽく言うのだけはやめて欲しい

五月が意味もなくしょんぼりしてしまう。

「って 悠長に挨拶してる場合かお前ら良くも一昨日は逃げて っ
またかよ！」

「やめろ 風太郎…… がつつくなビビッて余計逃げんだろうが ほ
れ見ろ 無害だ無害」

別に叱るのはダメとは言わんが、タイミングという物がある

今みたいに出会いがしらに挨拶もせず叱るのは、余計にあいつらを警戒させるだけだ

俺は手を上げ 危害は加えないと主張し 彼女達は疑り深く見る
が一応は走るをやめてくれた…………。

「騙されねえーぞ つかアンタの見た目で無害とかないから！」

「何だかんだ言いつつ コウタロウくんも参考書とか持ってそうだし
ね」

「コウタロウも油断させて勉強させてくるかも」

おい 二乃おめーだけ後半悪口だろ

今更気にしないが、目の前で言われるとカチンとくるぞ

ビシツと指をこちらに向け言葉を飛ばしてくる

(五月 うちの事だけどあいつ等には黙っててくれるか? 家ではあ

あは言ったが言いふらす事でもねえ)

(妹さんやお父さんの為ですよね 口外はしません 幸太郎君は安心

してください)

(ありがとな お前には貸し作ってばつかですまん)

俺と風太郎の事情は家に来た五月しか知らない

バレてあいつ等の同情さそう訳にも行かないしな
さり気にお父さんと言ったがスルーだスルー。

「それで私達の力不足は認めます けれど幸太郎君にも言いましたが
自分の問題は自分で解決します」

「勉強は一人で出来る」

「そうそう 余計なお世話って事」

「そうかじゃ 一昨日のテストの復習は勿論したよな！」

「……………」

「はあ幸太郎 頼む」

「はいよ 問一だ 巖島の戦いで毛利元就を破った武将を答えよ ヒ
ントは無しだぞ」

俺達は事前にかいつらが復習しないのを予測し

答えられるかを試す為 問題を暗記してきた。

その中でも簡単な部類を選んできたつもりだが……………。

『無言かよ!!』

三日間接して居て分かってはいた

5姉妹全員勉強が大っ嫌いだと言う事が

んで 二乃は特に俺が嫌いだという事もだ

昔はもう少し素直だったのになあ……………。

「心の距離を感じるぞ」

「奇遇だな 俺もだ」

ただ 勉強が嫌いな事で中には得意な事も存在はしていると
言う事もある

(幸太郎 見て見ろ 三玖だけはさっきの問題正解してんだよ)

(本当だ でも何で答えないんだ?)

(答えない 答えられなかったって感じか……………本人に聞くのが手っ
取り早いな)

—————

—————

「三玖 少しいいか」

昼飯時

食堂で俺は珍しく人が来るのを待っていた

『上杉から話しかけてるぞ』とかぬかしてくる輩がいるが、今は無視だ
無視

それよりも三玖と少しでも会話をしていきたい

こいつには家に入れてもらった恩があるし

少しでも手助けをしてやりたい 本当に最近は柄にもねえ事ばかりしてるな

呼び止められた三玖はその場で固まり

一回転して去ろうとしたが、『ふう………』と息をしたかと思えば
ふり返り何食わぬ顔でこっち向かってくる

「お前好きだな 抹茶ソーダ うまいか？」

「コウタロウが意地悪するなら上げない」

「そうかい 残念」

「欲しいの？」

「今は良いかな 機会があればそんな時貰うわ」

「うん それでコウタロウだけ？」

「ああ 風太郎なら向こうに座ってるぞ」

「帰ろうかな」

「嫌ってやるな あいつは俺よりましだ」

「それでもないよ………」

「どうだか んじゃ向こうに行こうぜ ここだと通行の邪魔に」

「何か 人が避けていく」

「はあ………」

「コウタロウ？大丈夫」

出入りの激しい場所での会話は避けたいと言ったが

案の定人が、通行する事はなかった何時も見たいにみんな俺を見ては避けていく

噂と同じだ今は無視だ無視……………。

「幸太郎に三玖 良く来てくれた それで三玖聞きたいんだけど」

「上杉さーん お昼一緒に食べませんかあー お兄さんもどうですか？」

「四葉よ 急に出てくるな 風太郎の心臓が止まるところだったぞ」
突然の襲来だ

今回三玖との話の為に俺と風太郎は他の姉妹の目を掻い潜って彼女を発見出来た

その為 先ほど五月からも『お昼どうですか？ お勉強はしませんがお昼ならご一緒にします』

笑顔で誘ってくれたが、俺が風太郎と一緒に食べると言えば

『は？ えっ冗談ですよね 幸太郎君が』ぶつぶつと何かを言いその場で固まってしまった

何か色々ひどい思い込みをされていそうだが

最大の難関を超える事が出来て安心しきつてのこれである。

四葉は何処から出てくるかわからねーんだよ

どうやら一花も同席してるようでこっちが気づけば手を振ってくれる

お前も大概神出鬼没だな……………。

「んでさーみ」

「見てくださいこれ全部間違ってるんですよー あっはははは 宿題も全然です」

「ふぬぬぬぬ」

「落ち着け 風太郎 一花見てねえで止めてくれ」

「はーい ほら行くよ邪魔になるし」

「一花も見てもらおうよー」

「うーん パスかな 私達 ほらバカだしね？」

「別に卑屈になるなよ 見る位ならこっちも気にしねーよ」

一花も一花で何言ってるんだか

勉強に興味あると思えば何もしいし テストしよと言えば寝て

るしなあ

笑ってるその顔も何処か嘘くさいんだよ…。

「それにさ 高校生活勉強だけってどうなの？もっと青春をエンジョイしよう」

「例えば何だ言うだけなら たただぞ」

「それは 恋とか！」

「！」

「恋ねえ」

「あれは、学業から離れたもつとも愚かな行為だしたい奴ならすればいい…だがそいつの人生のピークは学生時代となるだろう」

「この拗らせ方 手遅れだわ それでコウタロウくんの方はどうなの 少し意味ありげに呟いていたし」

「そうだな 風太郎程は偏見はもってねえぞ 恋は人の生き方を変える重要なもんだと俺は思ってる」

「へえ 案外ロマンチックな事言うんだね」

「茶化すな 俺のはただの意見の一つだ」

恋とは色々な意味合いがあると俺は思っている

それはある意味では学業や勉強などと似たようなもんだと俺は認識しており

体験すれば人の価値観は少なからず見えてくると俺は解釈してる

なお、相手が居ればの話だ。

「あっははは お兄さんが言うような恋愛も良いですけど やっぱり相手がいないと成立しませんからねえ 三玖はどう？ 好きな男子とか出来た」

「えっ……………私は その い」

「い？」

「いないよ コウタロウの馬鹿！」

「何で俺が罵倒されんだ…。」

「あの表情 姉妹の私には分かります 三玖は恋をしています！」

一花の発言から始まり三玖に渡されたバトンは彼女が去って行くことで終わってしまった

結局は朝方の事も聞けずじまいだし 五月に風太郎の事紹介する時もだ

どうしてこう話がうまくいかないんだろうな…。

—————

—————

—————

(三玖が恋かあ… あいつ等が好きな相手か…。)

きつとそれは喜ばしい事なんだろうな

知らぬ間に成長した彼女達の一面として俺は受け入れてやらねば…。

「あれ 幸太郎君戻ったんですね 昼飯はきちんと食べましたか パンやご飯だけでは駄目ですよ

幸太郎君はただでさえ 家庭教師以外で週四でバイトを入れてるんですから 聞いてますか？」

「五月か、すまんすまん 少し考え事してたんだ。無視してた訳じゃねえぞ」

「なら 良いのですが具合が悪いのなら保健室に行きますか？」

「いいよ というか俺のプライバシーどんだけ詳しいんだ バイトの日数教えた覚えねーぞ

お前は俺の母親かよ」

「…:さて 準備しないといけませんね」

何だそのわざとらしい言い方は…:…

「おい 五月おめえ！」

「ううう…」

「良いよ別に 知られた所で俺に何のデメリットがある訳でもねえから だから怯えんな」

「平気です 別に怯えてませんから」

少し熱くなりすぎたな教室で、これだけ声出してたら

周りもついついこつち見ちまうしな。

特に五月の事だ俺を心配してなんやかんや調べたんだろうな
本当にこいつはどれだけ俺の事知ってたんだ？

そこんところは不思議だよ

：『どれだけ知ってたんだ』か

五月を見習う訳じゃねーが 俺も俺なりに三玖の事を知ってあげ
るべきだろう

『やる気あれば来てくれ』とは少しばかり投げやり過ぎる言葉だと改
めて思い知った

「五月 サンキューな お前のお陰で少し分かってきた」

「えっ あはは 何かは知りませんが、少しでも幸太郎君のお役に
立てたなら幸いです」

「そう言うな 驚かされる事もあるけど参考になる事もあんだ 謙遜
すんなよ

ん……………(手紙か)

「幸太郎君 何かありましたか?」

「何でもないよ 俺はちよつと用事あつから 何かあれば風太郎に伝
言頼んだぞ」

「それをするくらいなら 幸太郎君を探し出して直接言いに行きま
す」

「……えーよ……………」

参考になる事も言うけどやっぱり五月の俺への扱いが、日に日にエ
スカレートしてくんだけど

携帯なんて持ってたらGPSとか付けられそうで余計に買う気し
ないわ……………

(コウタロウへ 昼休みに屋上へ来て、コウタロウに伝えたい事が
あるどうしても

この気持ちだけは抑えられないの。 三玖より)

机の中に入っていた手紙に主は 俺が今まさに探している

中野三玖からの物だった 昼休みにて屋上へと

如何にもなシチュエーションだが、何を伝えるつもりかは知らんけど

俺も三玖を知る為 あいつと話をしないと……。

「待ってろよ三玖」

第八話 不良少年と歴女な三玖

「おっす三玖」

「コウタロウ来てくれたんだね」

「ああ、あの手紙はお前ので間違いないんだな」

「うんあれは私が入れた手紙 中身も私が書いたもの」

「それで俺を呼んだ理由は何だ？ 教えれくんねえか？」

昼休みの屋上

ここに来た時には誰もいなかったが、何時もと同じクールな表情で三玖が扉を開けて

外にやってきた。

こちらを訝し気に見るが、安全と安心を保障する為 両手をフリーと朝と同じく教えれば彼女は、安心したように息をする

一応だが手紙の主が本当にこいつなのか尋ねれば

入れた人間も書いた人間も自分だと言っている

「しっかし 良く入れたな誰にも見つからなかったのか」

「コウタロウの席に近づくのは五月だけだから誰も気にしない」

「はあ…虚しいね」

「ごめん、そう言う意味じゃ でも」

「フオローしないで良いぜ そこは自覚してるんで早速で悪いが

俺を呼んだ理由を話してくれ後 俺も三玖に聞きたい事があるんだ」

「私に聞きたい事」

「お前が話そうとしてる事を聞けば、それなりに答えは出るとは思うけどな」

しっかし 人望がないねえ俺は

誰も俺の席に興味を示さない 俺が来れば嫌でもひそひそと話し出す癖に

でもよく五月にバレなかったな？ あいつ教室でフリーズしてた

筈なんだが

少々疑問は残るが、今は三玖との話が先決だ

少しでも彼女を知れば、それが信頼獲得への道になり風太郎の助けになるし

こいつともっと話したいと思っっているんだ

……………俺が人と話すか、少しは心境の変化があったのかねえ

「誰にも聞かれたくなかった　コウタロウあのね　ずっと言いたかったの」

（四葉の言う　恋　そう言った事じゃなえ気がすんだよな）

「陶晴賢　朝のコウタロウが出した問題の答え」

そう来たか

しかしこれが朝人前で言えなかった事なのか

俺と風太郎が朝方　彼女達姉妹に出した

一昨日の問題その復習の答えだ

誰も答えず終わっていたが、三玖は一昨日の時点で正解だと言う事に

俺達兄弟は気づきその理由を聞きだす為　彼女に証言を得ようとし

普段しない　人を待つという慣れない事までやっていた

四葉の乱入や一花の恋バナで結局聞けず仕舞いだったが

やっと答えを話してくれた……………

「三玖……………」

「どうコウタロウ」

「正解だ　やれば出来んだよお前は」

「うん知ってたからこれくらいは」

「じゃよ　三玖俺からの質問良いか？」

「コウタロウが私が答える前に聞いてきたから聞いてあげても良い」

「ありがとな　んじゃ教えてくれ　何で朝その事を言わなかった

どうしてそれが恥ずかしいと思った？これは脅しじゃねえからな

俺は純粹に知りてえだけだ」

日本史の問題だ別に答えるくらいどうって事ないだろ

ハズレていれば、それはそれ『勉強やれ』と俺たちは言うだけだ
だが三玖は答えを知っていた だが何も言わず

屋上に呼び出し話したと思えば 『誰にも聞かれたくない』と言っ
たのだ

今と朝の状況の違いを考えれば自ずと分かってくる

ここにいるのは、三玖と俺の二人だ

朝は中野姉妹としての三玖とそれに向き合う俺たちという構図

人前で言いたくないつまりは、そう言った事を他の姉妹に聞かれる
のが

嫌なのではないのか？俺にはその理由は分からんがな……………。

「コウタロウ……………コウタロウは誰にも知られたくない事とか秘密
にしておきたい事ってある？」

「誰にもか……………まあそうだな人は誰でも秘密はあるよな 俺も知
られたくねえ事は何個かはあるぜ

風太郎とかにも言えねえこととかな」

「それは私も同じ 私が朝一昨日の問題を出されて答えなかったこと
それがコレ」

「武田菱 武田信玄の事か だけって事でもねよよな」

俺にスマホの画面を突き出し

中身を軽くだが見せてくれた三玖

そこに映し出されていたのは、あの名だたる武将であり

風林火山で有名な 武田信玄の その家紋だった

だが何故これが、彼女の秘密にしたい事なのだろうか

一瞬考えたが、脳内でバイト先での客同士のやり取りを思い出した

『歴女』だ所謂 戦国版のオタクとでも言えればいいだろう

店で働く中で客の一组がそう言った話をしていたので

「歴女って奴か……………」

「きっかけは四葉の貸してくれたゲームだね 野心溢れる武将達の姿
に惹かれたの

でもそれは私だけクラスのみんなはイケメン俳優とか美人なモデルとかの話

それに比べて私は髭のおじさん 変だよ」
珍しくすらすらと言葉を並べ

自分と歴史の出会いとその大切さ 同時に周りとの違いでこいつはそれを比較し

『変だ』と思い自分が好きな戦国武将の事をひた隠しにしていたと言う

う
だが俺にはそれが変な事とは思えなかったし

『変だな』そう言った言葉で切り捨てる考えもなかった

三玖が隠していた事を俺が知りたいと言った事で話してくれたんだ

今も自信なさげに俯いてんだ

俺も少しは自分の事を話す必要があるかもなあ

ううんと喉を鳴らし 俺の頭の中を散策した

錆びるなよ俺の記憶……………。

「ヒポクラテス 紀元前460年 華佗 生年不詳不明異説あり 杉

田玄白 1733年」

「?!っ コウタロウあの急に何を言いだすの」

「ああ 混乱させたか、今の三人は医者だ 俺は高名な医者の事を気に入っててな

それを調べるのが好きなんだよ 戦国と違って有名どころは限られるがな 変だろ」

急に謎の名前を口走る人間に彼女も頭が混乱したのか

その場で固まってしまいが、何とか意識を保ち俺に声をかける事で呪文にも似た名前の連呼から開放された

今もこいつは何処か不思議な面してるが、そういうもんだ

昔から誰も俺の話す事理解しない 興味も持たない

俺は医者特に 医療関連に関する知識が好きなんだ

それが俺の秘密だ この事は風太郎も知らない 知ってる人は今

はいねえ……………。

「ん？ 何かおかしいか」

きよとんとしたと思えば、三玖はくすくすとその場で笑っているけどそれは馬鹿にしたような笑い方ではない事を俺は理解出来た

「はあ……ごめん　コウタロウ　別に変じゃないよ　コウタロウの好きな物は」

「ならば」　お前もそうだよ。歴女でも戦国武将好きでも俺は変に思わねえよ

だから…三玖お前は自分に自信を持ってても良いんじゃないか？
それはあまり触れられたくねえ事だろうし

家庭教師それも補佐である俺が立ち入る事でもないんだが
如何せんそう言う訳にも行かねえと来た……………。

こいつが「歴史や武将が好き」そう言った時

彼女はその好きな事に対する自信を持ってそれをひた隠しにしてると危うく思い込む所だった

でも実際は違うんだろう……………。

勉強は出来ずとも　あの姉妹は全員個性的だ

それぞれ得意不得意も分かれてきてると思うし　姉妹だからと割り切るのも考え物だ

けど三玖は何処かで思ってしまったのではないだろうか？

姉妹だからこそ……………その考えにいたった

【全員出来てしまうのでは？】

きっとそれは自分の足元が崩れるような何か大切な物がすり減るような感覚を覚えた事だろ

その事は姉妹に限った事ではないと俺も覚えはあるんだぜ……………。

「コウタロウはエスパーなの？」

「んな　能力あればお前に聞かんでもわかつから　姉妹って訳でもねえけどよ

自分と同じく知ってる人間が自分と同じく学んだ奴が

自分よりそれが断然得意だよ　優秀だったってだけの話だ……………」

エスパーならお前ら全員を勉強させるのは苦勞もしねえよ

この世界はそんなとんでも能力が徘徊する世界ではない

「過去系？何か変だね その話」

「まあ ちつとした昔話見たいなもんだし 別段面白くねエ事だ た
だ

どんな奴でも劣等感を抱く でもな それでその事を無かった
事にする必要は

俺にはねえって思えるんだ」

何を説教くさい事言ってるんだろな

折角三玖が打ち明けて 俺の話もしたのに何でか言葉が止まって
くれない

彼女に言っているようでそれを俺自身が自分に言い聞かせてるよ
うだった…。

「それに俺や風太郎もお前には期待してる あの中でお前は一番に点
を稼いでいる

そこは誇つていい だから自分を落ちこぼれとか言うな」

「コウタロウは優しいね」

「優しかねえよ……でも お前が出来る事が全員出来るとか思つて
それを人前では無かったような事にはすんな

それはお前には出来てんだ 今のお前はその時点では姉妹の中で
は確かに上なんだよ

だから俺は三玖を認めるし お前の為に俺は全力を出す！面倒と
か言うか

それに俺もあいつもお前らを諦めない 赤点候補だ構わん

俺はお前達全員が笑って勉強してそれで卒業するその姿が見た
いんだわりいか」

今の姿はクラスの連中にも学園の奴らにも見られたくない

俺が熱血少年見たいな事言ってる姿とかまた変な噂を立てられる
だけだし

でも 三玖には言っておきたかった、俺がどう思っているのか

あの時の『何で此処にいるの』その答えになったとは思えないけど俺がこいつらに接して家庭教師の補佐を続ける理由だ

「勝手だね…でもコウタロウは知ってるでしょ？全員合わせて100点って事」

「さつきも言っただろ 姉妹だからって 『全員できる』出来るのではと

それは何も戦国武将の事だけじゃねえだろ 勉強全般に置き換える

お前が出来る科目を他も出来るようになり他の出来る科目をお前が出来るようになる

俺はそれが可能なんじゃねーかと思ったんだ」

「!! そんな考えした事なかった」

それもそうだろうな

三玖の中の考えは 「自分が出来る⇨姉妹だから全員が出来てしまふ⇨落ちこぼれ」

ネガティブな面で捉えていた

でもそれは違うんだ

例えば「三玖が日本史が出来る」「他は出来ない」

そこを良い面でも捉えれば話は変わってくる

これは俺と風太郎も兄弟だから気づけた事だろう。

三玖が出来る事を他に覚える それを勉強での科目に置き換えるだけでいい

そして三玖の不得意な科目を他の姉妹と同じように勉強に置き換え

え 覚えればいいのだ理屈だけ聞けば『ああ』そうかとなるが

実際やろうと思えば途方ないし 聞いている三玖も頭がパンク寸前と言った感じだ

『赤点候補かよ』と言いながら風太郎はきちんと見ていた

俺もテスト用紙を見て驚いた

この姉妹 器用な事に全員が全員 誰一人として

正解が被っていないのだ 狙ってやろうとしてできるもんじやな

いし

これが偶然なら何という奇跡だろうか

だがこんな奇跡のような事を彼女達なら出来るのではと可能性を見出した

「お前ら全員が 100点を取れる可能性を秘めてんだよ 一人が出来るれば全員出来る！」

「何それ 屁理屈？ コウタロウは五つ子を過信し過ぎだよ」

「過信しすぎ結構な事だ お前らでも可能と分かればそこを磨くだけのこった」

何処か呆れたように

でも彼女は俺の話を最後まで聞きじつとこつちを見ている

ここに来た時と同じく少し深呼吸して息を整え気持ちを整理する

それくらいの余裕はある…。視線は下に逸らしつつ『考えてみるとだけ口にした

表情は見れなかったが、嫌なら考える事はしないだろうしいい返事を期待はできそうだ

――――

――――

――

「コウタロウ……これあげる 友好の印」

「だよ抹茶ソーダ先輩」

「だつてずっと見てたからそれに私が好きな物だし」

「ありがたく受け取るよ サンキューな」

「それと 鼻水なんて入ってないからね なんちゃって」

「三玖それも戦国の逸話か、今度教えてくれ俺も知らねえ事多いからよ」

「うん分かった………それとコウタロウも教えてね 医学の事とか
医者とか」

「それに関しては気が向いたらな」

「むう コウタロウの意地悪」

「ふくれんな そんなに知りたいなら教えつからよ」

俺と三玖の屋上での話は終わった

上杉兄弟による『全員100点取れるんだ大作戦』に関しては

三玖は『考えておく』と話してくれたし

俺の努力は無駄ではないと信じたし

帰り際に三玖が何時も飲んでる抹茶ソーダを渡され

誰か有名な武将の逸話に基づいた話を言っていたが、知らない俺に

彼女は教えてくれると約束してくれた

(お茶に鼻水ねえ…戦国は色々とアブノーマルだな ん?)

彼女からもらった抹茶ソーダ片手に教室へと向かう中

俺はふと廊下を走って行く人影を目にした

「コウタロウ?」

「今向こうを………気のせいだろうか さて俺達も戻るか」

—————

—————

——

「違う 何度言わせれば分かるんだ ライスは?じゃなくRだ お前
はシラミを食うのか」

「はわわわ」

「まあ ライスもシラミも白いしな」

「幸太郎も余計な事言うな こいつが真に受けるだろ それと何でニ
コニコ出来るんだ」

「いや 家庭教師の日じゃなくても上杉さんとお兄さんが勉強見ってくれるのが嬉しくて」

「ああ 風太郎涙いいつすか」

「気持ち痛いほどわかる けどな残りの四人もお前くらい物分かり良ければ良いんだがな」

「俺は声をかけたぞ『絶対いやですー』『はあ話しかけんな』『うーん やっぱいいよ』」

「お前のその妙に特徴捉えてるものまねはやめろ でもお前が学園でも手伝うのは意外だな」

「まあ 5人相手にお前一人を行かせるほど鬼ではない」

「そうか……………」

「さて四葉 ここだがおーい風太郎」

「あつ でも残り四人じゃなくて三人見たいですよ お兄さん！」

放課後に図書室で軽く勉強会が行われていた

それは昼に俺と風太郎に見せて来た四葉の英語の宿題についての事だ。

何度も間違えながらもこいつなりに頑張って問題に挑む姿勢に俺の涙腺は少しばかり緩んでいた

ここまでちよろかったかな俺は…………。

一応俺は昼に話した三玖以外の全員に話をしたが

五月も二乃も一花も全滅だった それが現実だ

だから今は少しでも四葉の勉強を見てやろうと思ってたのだがどうやら

俺達は3人ではなく…………4人になった

「うつす 三玖来てくれたか」

「おお 幸太郎お前説得したのか！」

「特にこれといっては何もしてねえけどな」

余程来てくれたのが嬉しいのかテンション上がっている

それにあんなに熱く語る姿 お前に見せられねえよ…………

「コータローがあんなこと言うから 考えちゃったよ 私にも出来るんじゃないかって

だから 責任取ってよね」

「言ったからには投げ出さねえ 責任とってやるよ！」

自信がないと言っていた少女はそこにはいなかった

俺の目に映るはこれからの難関に挑もうとする決意を固めた姿だ
……。

(ねえ もしかしてこの前隠してた三玖の好きな人ってお兄さんなん
じゃ……………)

(!! ないない……………)

(ええーうそー)

「なあーにこそこそしてんだ始めっぞー！」

(ねえコータロー 私はねコータローが医者に詳しいって事は実は
知ってたんだよ。)

第九話 不良少年と小悪魔次女

今日は休日だが………休み何て物は存在しねえ!

俺も風太郎も家庭教師の仕事がある為中野姉妹の家に向かう事になったのが

出先の事だ、バイト先から家に電話がかかり俺はそれに対応し

風太郎を先に行かせた

「日曜っすか はい了解しました」

「お兄ちゃん店長さん何だっつて?」

「ああ 日曜のシフトなんだけどな新しく新人が来たからその日は空けてくれても構わねえっつてさ 暇になったわ」

「良かったじゃん 偶にはお兄ちゃんも休まないと倒れるよ!」

「らいはは良い子だなくお兄ちゃんは良い妹を持ったよ じゃ俺も行っていくから…変な人は家に入れちゃ駄目だからな——」

『はい・気をつけてねー』と妹の言葉を受け中野姉妹達がいる

マンションの元へと全力で走って行く事になった

因みに愛用の自転車は現在パンク中と今朝方から不吉な事が起こっていた

「あつ!!お兄ちゃん 替えのコンタクト置きっぱなしだ」

—————

—————

—————

「やべ 替えのコンタクト忘れた まあ眼鏡は持ってきてるしこれで良いよな………ん 三玖か、よう」

「あつ コータローだ 今から家に行くところなの?」

向かう中俺の前を見慣れた後ろ姿が歩いていた

手には袋を持っており買い物でもして来たんだろうと思いつながら

俺は彼女に声をかけた

最初の頃なら俺を見れば逃げだしていただろう三玖だが
きちんと返事を返し 俺は三玖の歩幅に合わせて歩き出す

「ああ 俺は遅れてだけだな 風太郎は先に向かったぞ」

「そう…………… コータローあの家庭教師よろしくね」

「了解だ 任せろ……………三玖は買い物でも行つてたのか？」

「うん 二乃の飲み物間違つて飲んじやったから だから買いに行つた」

「おい これは抹茶ソーダじゃん 二乃は飲めるのかよ」

こくりと頷く三玖だが絶対に二乃は飲まねえだろうな

あまり聞くべき事ではないと思うけど

姉妹でもそりの合わない人物と言う物はいるので

ジャージの貸し借りの際も二乃が勝手に部屋に入り取つて行つたらしいしな

もし何かあるならそこら辺も改善しねえと後々厄介事になりかねんぞ

「あつ そう言えば今日は日本史中心で行くからな おつ！」

「本当に日本史なの！何処何時」

「それはついでからの楽しみだ 他の科目もこれくらい食いつてくれれば良いんだがな」

「……………無理」

「諦めんな……………」

そんな簡単に言われると俺や風太郎の作戦も意味なくなる

けど前の三玖なら聞く前に黙るか逃げてたしこれも進歩と思えば
まだ気楽な方だな

—————
—————
—————

「幸太郎と三玖が来なかったら俺は永遠にロビーで居座る事になった」

「オートロックくらいは覚えような」

「文明の利器すら持たない お前には言われたくない」

「あつ 上杉さん お兄さん おはようございます！ 準備万端ですよ」

マンション下で風太郎がカメラに向かって話しかけている姿を俺と三玖は見ている

それに気づき『その目はやめろお』と逃げようとしたが

何とか取り押さえた 三玖から部屋への番号ややり方を聞き彼も納得

確かに俺たちにオートロック何て縁もないしなあ

「おはよう 四葉 一花もよう 勉強見ていくだけ見てけよ」

「コウタロウくんが誘ってくれた じゃお邪魔しようかな」

「五月もおはようさん 朝飯は食べたか」

「幸太郎君おはようございます。 はいきちんと食べました 幸太郎君は栄養取りましたか」

「おう食って来たぞ」

「そうですね なら私はここで自習をしているので幸太郎君 何かあれば声をかけてください」

「はいはい」

何だかんだと言いつつ俺や風太郎の声が聞こえる辺りに座ってくれたのは

五月なりの配慮なのだろうさ 感謝しないとな。

風太郎も順調に集まった一同を見て目頭を押さえている

と ここまで良いんだ

一花 三玖 四葉 五月 中野四姉妹だ

あと一人この場にいない

ある意味でここでやって行くにはもつと強力な対決相手だ

カタカタと歩き音が聞こえ そこを見ればニンマリとした笑顔だ

はたから見れば素敵な笑顔としてどんな男でもコロつと落ちるだろうが

本性をすればその笑顔はまた別の側面を写し出している……………。

「なーに また懲りずに来たんだ アンタは先週見たいに途中寝ちやわなきやいいけどねえー」

俺達 上杉兄弟の現在最大の障害 中野二乃の登場だ

ぐぎぎと先週薬を仕込まれた水を飲んだ事を思い出したのか

奥歯を噛む風太郎の姿 あれは不意打ちだしな

「んだよ 二乃 声かけてくるって事は勉強してえーのか？」

「アンタ一番嫌い話しかけんな！ キモ」

「おい お前俺より嫌われてるぞ 何した」

「しんねーよ まあヘイトは俺が集めるから気にすんな」

今下手に動いてこいつにこの空気を壊されたら

俺や風太郎の頑張りが全て無駄になる

二乃にはなるべく刺激を与えないよう配慮しねえとな

(なんで ここまで捻くれた昔はもう少し可愛げあったのによ)

『おーーー！』

風太郎の声でやる気を出した四葉の姿を見て

二乃は懐からスマホを取り出して何かを言いだしてきた

(やばい 先手を取られた！)

「バスケット部の知り合いが大会の臨時メンバー探してるんだけど あんた運動出来るんだし今から行ってあげたら？」

「えっでも今から……………」

勉強と助っ人板挟み状態だ

どちらを選ぶか迷い俺達と二乃を交互に見ている四葉

このまま二乃の思惑通りにさせたらなし崩し状態になっちゃう

焦る俺達をよそに 二乃が追撃をかけてくる

「なんでも五人しかいない部員の一人が骨折しちゃったみたいでこのままだと大会出られないらしいよ」

「そんなのやるわけないだろ」

風太郎はそう言うが、四葉は動くだろう

こいつはそう言う人間だ困ってる人を助ける中野四葉は自分より他人を優先する

「分かった 四葉行つてこい ただし行くなら半端はなしだぞ」

「お兄さん！ありがとうございます 行つてきます！」

「幸太郎 お前まで何を言いだすんだ」

「どつちにしろ 四葉はいっちなう ならこつちから行くよう促せば四葉も気を悪くしなくて済むだろう」

「コータローの言う通り四葉は放つてはおけない性格だから無理」

風太郎 お前が言いたい事はわかる

けどここは抑えろ 向こうが姉妹の弱点を突きそつちに誘導するなら

俺達はそれに従う姉妹を快く向かわせよう 家庭教師として全然駄目な考えだと思おうが

下手にそれを妨害でもしたらその人物からの信頼すら危うくなるんだ。

「っ 余裕ありそうな態度しちゃって ああ一花も二時からバイトつて言つてなかったっけ」

「ああ そうだった コウタロウくんごめんね」

「いいさ 一花もバイト頑張つて来いよ 次の機会に教えっから」

「うん 期待してるよ不良少年ー」

「うっさい はよいけ」

一花もバイトがあつたようでそそくさとその場を去つて行く

ただ期待してると言つてくれただけでも良い進歩と思おう
……………。

「ぬぐぐぐ」

「何だよ 二乃ー お前の邪魔は何もしてねえぞ」

「五月 こんな奴がいる所で勉強するより 図書館で勉強した方がいいわよ」

「……………」

(五月 これ持っていけ)

(何ですか、この紙)

(俺が教材とかから選んでまとめてある 参考にしとけ これはこの前のお礼だ 家庭教師は関係ねーよ)

(はい ありがとうございます 幸太郎君！ 無理はしないでくださいね)

「では私は図書館に行つてきます それでは……………ふっふーん」

二乃に言われた通りに五月は上機嫌で図書館へと向かつて行つた 勿論ただでは行かせない……………。

俺たちを嫌つてる二乃が居るんだ何の対策もしないわけがねえだろ

あいつには上手く要点など纏めた物が書かれた紙を手渡した

五月は要領が悪いだけだ 何処をやればきちんと出来るかさえ分かれば

真面目なあいつは図書館に行つても勉強を続けてくれる

「何よ五月まで 何で機嫌良いのよ！」

「さあーな よーし 風太郎 まだ三玖が残つてんだきっちり教えてやろうぜ」

「おつおう お前がいるとこういう時心強いと実感できる」

「普段はちげーのかよ！」

二乃は思惑通り 三玖以外全員勉強から遠ざける事には成功したわりに

機嫌の方はあんまりよろしくないみたいだ。

俺と風太郎にまだ余裕がある事がこいつ的には物凄く納得がいかねえと見た

そうなれば残つた一人三玖にターゲットを絞り 俺達の心を折に来るだろう

三玖に詰め寄ると二乃は余裕なさげに彼女に食って掛かっている

「あんた まだいたの間違つて飲んだアタシの」

「それなら買って来たテーブルの上だから そんな事より授業始めよう」

「そうだ 授業開始だ 行くぞ 三玖 風太郎」

「つて 抹茶ソーダつて嫌味かー!」

知らねーよ それに三玖なりに選んだんだろう

ここまで来るときに飲むからと頷いていたしな

「つて あんたら何時からそんな仲良くなつたわけ?」

「はあ? 何時からとかわかんねーよ」

「うっさい え?え? こういう目つき悪い男がタイプなの髪も変色だしさー染めるの失敗してさー」

「地毛だつて言つてんだろ」

「目つき悪いとか弟の俺まで無駄に被弾するからやめてくれ」

「二乃はメンクイだから でもコータローの髪は変じゃないよ シマウマ見たい」

「ひどい事言つた後にフォローしてくれんのは良いけど すごく複雑だ」

三玖の態度に明らかに怒りを表す二乃

どうやら余裕といった雰囲気が入らないらしい……。

「なるほど こんな奴でも気にしないからそんなダツサイ服で出かけられるんだ」

「その尖つた爪がおしやれなの?」

「あなたには分からないでしょうね」

「分かりたくもない」

「とりあえず 少し頭冷やせ 二乃も言いたい事あれば俺に言え」

「そうだね 言う通りに頭を冷やす もう邪魔はしないでね」

最近の三玖はやたら素直だな

勉強を教えるのも楽になるからこれは有難い事だ……。

んで残つた二乃だが凄い見幕でこつちをぎろりと睨んでいる
暫くそつとして置こうと風太郎にプリントを渡していた時だ

不意に二乃からお声が掛かった

「ねえ アンタからお昼は食べて来たの……」

「あつそう言えば」

「食ってねえな……………」。

ぐうううと二人同時にお腹の虫がなっている

それを聞くととてくととキッチンまで歩き

三玖を見ながら話を再開し始める

「じゃあ三玖の言う通り中身で勝負しようじゃない！どちらがより家庭的かアタシが勝ったら勉強なし！」

「……………」

「そ そんなのやる訳ないよな」

「諦める風太郎 三玖頑張ってこい」

「分かった コータロー フータロー すぐ終わらせるから座つて」

「お前が座つてろよ！ つて幸太郎も座つてるな」

「この流れはだめだ」

「さつきまでの余裕はどうした 何か策は」

「んなもんねーよ料理対決何て想定してるわけねーだろ」

風太郎が思ってるほど俺は万能じゃねよ

想定してたりしてなかったりとあるんだ

今日はこのまま二乃が黙って俺に罵倒でも飛ばして終わりかと思つてたのに

『『ごとうくうまくいかない』』

やはり兄弟シンクロしている

—————

—————

—————

料理対決から数分

良い匂いが鼻を刺激する

料理が出来るまでの工程は俺も風太郎もなるべく見ないようにしていたが

初めて来たときに 二乃はクツキーを手作りしていた

アイツは手慣れた手つきで器具を使っていたのだ

三玖はぱっと見た感じ何でかファイヤーしてたり色々危なっかしい

これは勝負が見えたかもな……………。

でも そんな簡単に勝負が決まる程俺達

上杉兄弟の舌はあまくねーぞ 二乃……………。

「じゃーん 旬の野菜と生ハムのダッチベイビー」

「オムライス……………です」

この勝負の審判がもし見た目で判断するのなら

三玖の料理は論外と言われてもしかたねえ

それに代わり二乃の料理は文句のつけようがない程完璧な出来である

多分味も良いだろう

勝利を確信する二乃は余裕の笑みを崩さない

三玖は俯いたままこっちを見ようともしてくれない

開始前から諦めてどうする

「やっぱいいい 自分で食べる」

「せっかく作ったんだし食べてもらいなよー」

「では俺から頂きます うんどっちも普通にうまいな」

「はあ」

「風太郎は貧乏舌だ」

「意味わかんないんだけど」

「んで 俺は味覚音痴と来たもんだ！」

「はあー アンタら兄弟の舌どうなってんのよー！」

「んじや 俺も食べるかいただきます」

「コータロー良いよ食べなくて」

「幾ら味音痴とか言っても見た目じや……………」

一口目は二乃のダツチベイビーうん触感の良いし歯ごたえもいいだが分かん

二口目は三玖のオムライスだうん ぱさぱさしてるしタマゴも焦げてるだが分かん

スプーンですくったそれぞれを食べ終えた俺の感想だ

正直言えば判断基準はない 見た目なら二乃と言いたいが俺は違う

「三玖の勝ちだな」

「コータロー……………」

「意味わかんない アンタ味覚音痴って自分で言ったでしよ」

「あ? 言ったけどんで勝負の内容は 見た目じやなく中身だ」

「アタシの料理に中身が無いとでも言いたいわけ」

「いやちげーよ 二乃は確かに完璧に作っただろうし 誰でも選ぶぞでも三玖のは歪だ でもな歪ながらもあいつは自分の不得意な料理を頑張ってくれた

その料理に中身が無いわけあるかよ? 勝負優先と頑張って作った料理なら

味音痴の俺でも 三玖を選ぶぞ」

料理に対して俺はとことん無頓着と言ってもいい

食えればどれでも同じと言える人間だ

でも譲れないものがある それは作り手の愛情だ

どんな料理でも愛情が籠って無ければ大して変わらんだ

らいはだっ俺が味音痴と知ってても欠かさず料理を作ってくれる

だから俺は妹の作る料理をおいしいと認識できるし

三玖の作ってくれたぼろぼろのオムライスも美味しいと感じるのだ

二乃の料理は愛情がないと言えば嘘だろう

こんな手の込んだ料理を作ってくれたんだでも 愛情よりも勝利して三玖を見返そうと言う魂胆ばかりを意識した それが三玖との差だろうか

「何それ ほんとつままない この馬鹿！」

どたどたと足音を立てて二乃は何処かに行ってしまった

残された俺達は出された料理を食べきる事にした腹は減るしな

「ご馳走様 三玖美味かった やっぱ愛情にまさる調味料はねえーな」

「お前は良くそう言う事ハッキリ言えるよな」

「コータロー……………ありがとうほんと」

「泣くなよ どうした大丈夫か」

「うん 大丈夫だから」

「焦らせるな はあ…」

—————

—————

—————

「もうこんな時間だ 今回は出直すとするわ 二乃の策にまんまとはまったな」

「しゃーない あいつはあいつで俺達をどうにかしたいんだろうさ」

「お前は特にあいつから悪意はんぱじゃない程受けてるからな」

「記憶にございませんとはこういうことだな はあでもそのうち分かりあえるとおもうぞ」

「うん ちゃんと誠実に向き合っていれば分かってくれるよ」

「でもどうすれば良いんだよ」

「私に言われてもわかんない」

「聞いて分かれば苦労はねーぞ？」

「うん…それを考えるのが フータローとコータローの仕事でしょ」

誠実に向き合う 今の二乃と分かりあうにはそれしかないんだろ

う

俺も分かり合えないとは思ってはいいねえ……。

こいつらが実際は素直だと言う事も知ってるし

風太郎と一緒に気長にやって行けば二乃も何時かは認めてくれるだろう

俺に対する敵意はどうにもならん気がするけどな……。

料理勝負で使った食器や器具など後片付けをしていれば圧倒的に時間は過ぎてやがる

その日は解散と言い

三玖に別れを告げそのまま帰宅する事になった……

ただここで俺はある物がない事に気づいた。

「やべえ 眼鏡をケース事忘れた」

「あれ お前コンタクトじゃ」

「朝替えの分忘れて 鞆の中に予備に眼鏡があつてそれで誤魔化そうかとな

取りに戻るわ らいはに遅れるって言つといてくれ」

「わかった オートロックには気をつけるよ」

「お前じゃねえんだから大丈夫だ」

戻った俺は中野家の番号を入れ誰かが出るのを待つことにした

二乃だったらさっきの事話さないとな 俺も少し言い過ぎたかもしんねえしな。

待つ事30秒

「忘れ物？」

「すまんが 開けてもらえるか」

「シャワー浴びてるから勝手に取ってて良いよ」

「おっ ありがとな 三玖！」

この時 俺は眼鏡の事など気にせずそのまま帰宅するべきだったと少なからず後悔する羽目になる

それは色々な意味で俺の運命を左右しかけた出来事の一つだった
…。

第十話 不良少年と次女の本音

「失礼します 三玖はいっかんなー」

『出かける前にはきちんと準備すべし』

まさにそれだな

出先の電話ですっかりその事が頭から抜けていた

眼鏡があるからと安心していればその眼鏡を他の家に忘れると

最近の俺は、妙に抜けてるなあ

「うーん!! 三玖さん早くないですか!」

居間に行けば三玖がソファアーの上に座りドライヤーで髪を乾かしている

入る前に声はかけた筈なんだが……………。

俺の声も届かず気づいてもないのか?

俺が来るって知ってるんだから少し警戒してくれ

一花の時は汚部屋という事もあって気にはしなかったけど

こう普通に着替えられると俺だって意識はすんだぞ……………。

ただ風呂に入ると言って出てくるまでが、早すぎる速攻かよ

「ねえー誰 三玖?」

(はあー 二乃かよ 流石の俺でもこれは区別はつかねえよ)

多少なりと五つ子が入れ替わっても普段の俺なら区別はつくが

バスタオル一枚の姿で判別出来る程優秀な観察眼はもってねえ

いやいやそんなことはどうでもいいケースを回収したらさっさと

おさらばだ

こんな所を五月達に見られて見る

不祥事も良い所だ 出くわしてる時点で積んでいるんだよ!!

(ケースを確認 二乃のまんまえじゃねーか!)

ケースは置かれているのはソファアーの真ん前にあるテーブルの中

心ポツンと置かれている

二乃が料理勝負を挑む時に三玖の部屋へと移動する時に眼鏡をか

けようとしたのだが

彼女から呼び止められた時にかかる動作を止め

二乃と三玖の料理の完成をまってそのままケース事放置し

俺は気づかないままだった

眼鏡かけるのは久方ぶりで帰宅する際に気にも留めななかったの
だろう。しかし 下に降りた際にふと思いついた

『置いてきた…。』

何であのタイミングで思い出すのか……。家まで行ったところな
らそのまま気にせず、明日に回せたものを……………。

既に俺は二乃の素肌を目にしてしまった 俺で良かったよ 良く
ねえが、風太郎だったら家庭教師として二度とこの家にこれなかった
だろう

素直に謝った所で今日の二乃とのやり取りだ完全にこの事実を上
手く利用されて

家の借金問題はそのままとなり 勇也さんに顔向けが出来ない。

「いつもの棚にコンタクト入ってるから取ってくれない？」

こいつ俺と同じで目が悪いのか？

それもそうだろうな気づけていたら騒がれていたし

この場じゃなければ、安心して…。事態は何も変わってねえが
な…。

(何時もの棚とか知らねえよ！ 俺はお前が目が悪いと知ったの今だ
ぞ)

五月が眼鏡を時折着けていたが 姉妹で目が悪いとは…。

目が悪いのと相まって俺と三玖を勘違いしてんのか？

どうすんだこれ……………ケースを回収しようにも目の前だぞ

取りに動けば、怪しまれるし 。。。ここで帰ったところで下で連絡した
三玖には俺がいたと言う事を知られている

つ 詰んでる……………！

コンタクトを渡しても視界回復で、詰むし取りに行っても詰むしこのまま帰っても詰むし

ここが地獄かくそつたれえ。

一花の時とは状況が違い過ぎる あれは四葉も同行してたし
本人も俺だと気づいてたからだ。

「なに？お昼に意地悪したことまだ根に持ってるの？」

(おいおいおい)

少し距離を開けようとした瞬間業を煮やしたのか遂に二乃が動き出した

お前見えてないら動くな あぶねえだろうが

「あれは勢いで…悪かったとは思ってるわよ。」

おい見えてないんだよな？何で俺の位置を正確にわかんたこいつ！

徐々に近づいて来やがるんだが

俺も男だぞ 恥ずかしいに決まってるだろう

だが活路はある 最悪この場を逃げ二乃が、三玖を問い詰めた場合
三玖が俺を信用してその場をやり過ごしてくれる可能性それにかけるしかない

じゃないと風太郎と家の未来も俺からあの子への恩返しも出来ないまま終わっちゃうだろう！

体力には自信があるこのままじりじり詰め寄られても

一瞬の隙を突いて走り出せばこの状況から逃げ出せるのだ
(動くなら………ん?)

だけど それは出来なかった

正確には俺は足を止めてしまった

「やっぱり怒ってるんじゃない…全部あいつらのせいだわ！」
その一言が俺を鈍らせた

「全部あいつらのせいよ…パパに命令されたからって好き勝手家に入ってきて 特にあいつの兄貴よ

ほんとむかつく 何でもかんでも余裕ある雰囲気出して 何でよ あいつを見るとムカムカしてくるのよ!!」

(……………二乃 お前)

俺は少しだけ昔を思い出した それはこいつが小さい時だ 俺達が遊んでる時にこいつは良く俺の後ろを追いかけていた『まっつーーコウにい』

「今日だって何よ アタシの料理には愛情がない だから三玖の勝ち はあ? アタシだって頑張って作ったのよ 何でああまで言われないといけないのよ あいつに言われると腹が立つのよ」

(俺がこいつに何を言われても気にしねえ理由は、こいつが俺にとつて妹見たいなもんだったからだ

……………だけど俺はそんな二乃の料理にあんなひでえ事を言ったんだ。)

「私達5人の家に、あいつらの入る余地なんてないんだから!」

二乃は怒りを表すかのように手をテーブルに叩き叫んだ

俺は色々と考えてたつもりでこいつらの気持ちをくみ取ってやってなかった

何が全員笑顔で勉強させるだ 何が全員笑顔で卒業させるだ

目の前にいる 妹同然に接してた こいつの気持ちも理解してやらねえだよ

また あいつにやった事と同じ事を 二乃にまでする所だった

こいつは不器用なだけだ 不器用ながらこの家を家族を守っているんだ

俺達が家に来ると見せるあの表情は、この家を姉妹との時間をこいつなりに守っていたんだ

思い出を大切にしていたんだ……………。

『幸太郎君 もし私に何かあった時は娘たちを気にかけてあげて そ

して出来るなら守ってあげてください……。』
あの人が普段は見せる事無い顔を俺は見た…………。

俺は何やってんだ あの人と約束しただろ

こいつらを守ってやるって…………泣かせてどうすんだよ

家庭教師が嫌いだからじゃねえ こいつの本心は純粹にみんなが
姉妹が大好きなんだ

「もう決めた！あの兄弟は今後一切出入り禁止！」

その場で地団駄を踏み暴れ出す二乃だったが先ほど開けようとした扉に手を強打する

それと同時に俺の目には彼女に迫る物体が目に入った

大量の本の山や荷物が彼女の頭上めがけて落ちていくのだ

「ついた……………!?!」

「二乃あぶねえー！」

「えっ」

考えるより先に体が動いた

二乃の名前を呼び俺は突き飛ばすように覆いかぶさる

ドドドと俺の頭に多数の本がぶつかるが目の前にいるこの子に何も
もない

それだけで体を張った甲斐があつた…………。

「二乃 無事か…………。」

「えっえええ この声は何であんたがここにいんのよ！」

「取りに来たんだよ」

「とととりに！」

そう忘れ物を取りにきたそんで妹同然に接してたやつの本音を聞

けた

二乃は動揺しているが、それはそうだろうな
ほんと 風太郎すまん 弟より 妹を選んじまった。

バタン

「ごご 幸太郎君 何をやってるんですか！」

「まじで終わったわ……………」。

第十一話 不良少年と今後の方針

「被告何か言い残す事は」

「何もねえよ…全部俺が悪い」

正座をして自分が受ける罰を静かに待っていた

あれからすぐ 三玖が風呂から上がり

一花もバイトが終わったと帰宅

四葉はだけは未だ帰還せず 付き合いの良いあいつだ

今も練習の真っ最中さ

今回の事件は単純明快だ

俺が部屋に侵入し 二乃を突き飛ばし それを五月に目撃された

何を弁解する余地があるだろうか？

被害者である二乃は怒り心頭とばかりに何時も以上の視線を飛ば

し

こつちを睨んでくる

他の数名 裁判長役を担う一花も俺の言葉を聞き

やや引きつったような表情になっている

「まって コータローを家に入れたのは私 コータローは悪人顔だけ
どそんな事は絶対にしない

これは不慮な事故……………」

フォローに入ってくれる三玖には申し訳もたたない

五月に至っては被害者側に立つ訳でもなく こつちをじつと見て
いるだけだ

彼女からの信頼も急降下で一直線といった感じだろう

考えなしに動いた結果 風太郎と家の未来を俺は終わらせてし
まったのだ

「あんたまだそいつの味方にいるの！ こいつはハッキリ『盗りに来
た』って盗撮よ盗撮」

「違う コータローは目が悪い 忘れた眼鏡を取りに来ただけ！」

「裁判長 三玖は被告への個人的感情で庇ってまーす」

「ち 違……………」

「良いよ三玖 俺を庇わなくて」

「コータローで でも」

「裁判長 被告も認めています！ これは明白でしょう」

二乃の発言でうーんと唸りこつちを値踏みするように観察する一花

もしこれで俺が裁かれてもどうか風太郎の解雇だけは取り下げたく欲しい

俺の願いはそんだけだあ

「うーん どうなのかあコウタロウくんがそんな事するのかな？ でも本人も言ってるし」

「はい 意義ありです！」

「い 五月なんでアンタが異議を申し立てるのよ」

判決を甘んじて受けようと覚悟を決めたその時

まさかの救いがそこにあった……………。

下を見て俯いてはいるが、五月は手を上げこの裁判に申し立てがあると

新たな証言があると言っているのだ……………。

「裁判長 彼 上杉幸太郎氏 半年近く前から携帯の類を所持していません！」

つまり盗撮は不可能です」

「はあ んな訳ないでしょ 今のご時世携帯やスマホもなしで生きる原始人がいる訳ないでしょ

あんたもこんな奴庇う為にでたらめ言わないでよ」

「でたらめだと思うなら 二乃 彼の鞆の中身と彼の体を調べてみてください」

「なっ……………いいわよ そこまで言うなら調べてやるわよ！」

「五月……………」

「……………」

じつと彼女を見るが 五月は俺と目を合わせようとはしなかった

そして 二乃と一花による俺への本格的な荷物検査が行われた
……。

――

――

――

結論から言えば 何も出なかった

俺の所持品の携帯電話の類やスマホの類 勿論の事カメラなども
出てくる事はなく

その事実を知り 別の意味で二乃が困惑してきていた

「ありえない ありえない あんた高校2年でしょ 何で持っていないのよ

本当に原始人出て来たよ！」

「お姉さんも驚いたな コウタロウくんまさか本当に、携帯とか持っていないなんて」

それは驚くよな

今の時代携帯は当たり前と言っている程 町の人間は持ち歩いているし

高校生活を過ごすならば持っていなければ誰とも連絡が出来ない

あの風太郎ですら所持している

だが俺はスマホどころか携帯も今どき持っていない 二乃が言う
原始人だ

「ちっと あってな その時に捨ててそれ以降は持つ事をやめたんだ」

「コータロー……………」

「何で 三玖がそんな顔すんだよ お前は何もしてねえよ 俺の不注意が招いた事だし

それと 五月 本当にすまない」

「いえ 良いんです 持っていない物を持っていると言われ 濡れ衣を着させられる所を見たくはないので………」

「でもこいつはアタシの上に乗るかかって」

「ああー それね 私もそこがおかしいと思っただけだよ これコウタロウくんの頭見て見なよ

おつきなたん瘤出来てるでしょ それに二乃を押し倒した場所物が散乱してるし

これはうん そうだね 幸太郎くん 君は二乃を庇ったんでしょ？」

一花は俺の荷物や身体検査をする際に

ずっと頭を触ってきていた それはきつとこいつなりに何かしら直感めいたものがあつたのだろう

散乱する本や荷物などそこを指さし 二乃にそこを見るよう促し俺に実際なにが起こったのか、真剣な眼差しで説いてくる

「お前達が信じてくれるなら 俺は本の山から二乃を庇った」

「やっぱりねー いや そうだと思っただよね」

「これで解決ですね」

バン

一旦話を閉廷これで万事解決そんな空気が漂うとしていた中

二乃 彼女だけはそれに納得が行かないと机を両手で叩いている

「何 解決した感じ出してんの？ 適当な事言わないで」

「二乃しつこい」

「あんたねえ!!」

「まあまあ そうカッコカしないの 私達 昔は仲良し五姉妹だったじゃん」

「昔はって 私は！」

その言葉は今の二乃には言っではいけない

俺は聞いてしまった 彼女の心の声を彼女の想いを

アイツは本気で家族をお前達姉妹を大好きで仲良しでいたいんだ。

いや そうだと願ってるんだ

二乃はそのまま何処かへと去って行く

「追いかける」

「ほっておけばいいよ」

「いや 俺の責任だ 一花 三玖 五月 今回は俺が全面的に悪い

確かにあいつは必要以上に俺や風太郎を敵視しているが、それでもお前達への思いは真剣なんだ それだけ分かって欲しい

騒がせたな それと三人とも信じてくれてありがとう 久々だよ 家族以外に信用されたのは」

「コータロー……」

「じゃコウタロウくん 気をつけてね」

「幸太郎君 さようなら夜道を気をつけてください」

二乃を追う それが今回の騒動の原因を作り出した俺の償いだ

彼女達を喧嘩させた俺が出来る事だ

他人ではない 俺の妹分であるこいつらの為に動こう

あいつ等の母親 中野零奈さんとの約束なんだ…。

――――

――――

――

「見つけたぞ 二乃」

「はあ アンタなに言ってるの アンタの顔何て二度と見たくないわ

ああ使えないわね」

「お前鍵忘れたんだろ？」

「うう………」

凶星か、ジャージ姿で出ていく程だ

鍵なんて持つてくる暇はないんだろ

体育座りで入り口付近に座る彼女を見て俺も反対側で座り込む

「何してんのよ」

「バイトまで時間がある　それまでここで座ってる　話し相手になるぞ」

「キモ　今どきそんなの流行らないっての　何時も何時もバイトつてバカみたい」

「そうか　バイトいいぞ　体を動かせば生きてるって実感できるからな」

「はあ　何次は？自分語り健康自慢？」

「そんなつもりはねえよ」

「バカみたいアンタもアタシも　みんな馬鹿ばかり」

「でもお前はそれでも姉妹が好きなんだろ」

「二乃残念だがお前はあの時自分の気持ちを俺の前で言い放っていた
た

もう忘れたのか

「お前は家族が大好きで大切なんだ、それは嘘でも何でも無いお前の正直な気持ちだという事を俺知った」

だからその変な言い訳も強がりも無意味だ。

元凶である俺が言える事でもねえけどな

「はあ?!……何だよ」

「私達5人の家に、あいつらの入る余地なんてないんだから!とだからこそ異分子である」

俺達兄弟が気に入らない……。」

「何よそれ　ほんとアンタつてキモイ　初めてあつた時からアタシ達の事知った気でいて」

キモキモ　でも　悪い?」

「いや悪くねえよ」

「……………ねえ　何であんたそこまですんのよ　家庭教師とか関係ないじゃん」

「俺がしたくてやってんだ」

二乃の質問に俺は答えた

何を思うのか、暫く頭を抱え

『うーん』と唸ったあと彼女はその後で立ち上がる

「そうなら 私も決めたわ 私はアンタ達兄弟を認めない 特にアンタを例えそれであの子たちに嫌われようとも」

「ああ いいぜ かかって来いよ 俺は真向から受けて立つぞ 二乃」

「精々 その空かした態度でいればいいわ すぐ化けの皮はがしてやるから！」

ずっとこのまま落ち込んではいられないと

何で自分がこんな事を考えないといけないのか 彼女は何度か呟き

遂に決心がついたのか 俺達兄弟にそして俺に改めて宣戦布告を言い渡してきた

俺も付き合ってやるよ

「あと アンタに聞きたいんだけど アンタ 私と昔どこかで」

「二乃 何時までそこにいるの早くおいで コータロー…お疲れ様」

「よう 三玖 後の事は任せたぞ じゃ」

「もういいわ 行くわよ 三玖 (ベーーーーだ)」

二乃は何かを聞こうとしたが、タイミングを見計らったかのように三玖が二乃をむかえにやってきた。

彼女の言いたい事を俺は聞いた だから後の事は三玖達に託そう

それに二乃が聞きたい事は、そのうち時間が出来れば俺の口から話す

あっかんべーと舌だし そのまま三玖を連れていく二乃

俺は二人が去って行く姿を確認し

何処か満足した表情で家族の待つ家へ帰宅する事にした。

「風太郎 二乃に宣戦布告されたぞ」

「はあ?! 何やらかした」

「まあ色々とな」

「胃薬飲んでくるから……………」

第十二話 不良少年と次男の思い

「日曜日は最高だな 勉強し放題だ」

「生き生きしてるな風太郎」

「今日はアイツらの事考えなくて良いからなあ！ あつこれは四葉にはいいかもな

これは三玖に ああああ って立派な家庭教師かよー！」

「立派だな、俺の弟は。兄は嬉しく思うぞ」

「幸太郎も何か最近立派な家庭教師って気がして来たぞ」

「そうかあ？ 俺は自分のやりたい事やってるだけだぞ」

「それが家庭教師してるって事だよ」

「哲学かよ」

今日は日曜日だ 俺や風太郎が休日でも行く日は土曜まで

だから風太郎も大好きな勉強に時間を費やせるとノリノリだったのだ

自分で自分に言い聞かせだす程には家庭教師が板について来た感じである

本人はあまり認めたくないと言っているがな

ぶつぶつと言いながらも再びノートに向き合い

また頭を抱えている どうやら日曜日でもあいつ等から逃げられねえようだ

ピンポン

俺も少しは勉強しようと思ったが突然のチャイムでそれを中断した

日曜だと言うのに一体誰だ……………？

また借金取りか、金はねえぞ…………。

「はい、どちら様ですか」

「おはようございます、幸太郎君」

「五月か珍しいな、お前が訪ねてくんのは、んで？ 要件は何だ今風太郎が勉強してんだ」

「流石彼ですね、ぶれませんか。ではなく幸太郎君達にお渡ししたいものがあります」

扉を開けた先には見慣れた赤い髪の少女 中野五月が立っていた
今まさに風太郎と五つ子について話していた所だ 部屋の中にいれたらあいつも驚くだろうな

五月も何か渡したいものがあると言うし 狭い家だけど入ってもらうか

「らいはお帰り。お前の大好きな五月さん来てるぞ」

「お兄ちゃん たいだいま ああー五月さんだー！」

「いらっしやい 五月」

「はい お邪魔します幸太郎君」

――――

――

――

「父から預かった。上杉君達への給料です」

ポンとテーブルの上に封筒が置かれた

割りやすく『給与』と書かれている

この瞬間は緊張するもんだ

風太郎はあまり変わらぬ態度で封筒を手に取り中を確認し始める

お前はもつと緊張感を持ってよ。

「でもまだ2回だぞ 中は大して……………は！」

「一日五千を五人分 計二回で五万円になります」

「おおおう……………」

「幸太郎お兄ちゃんも落ち着いて っってお兄ちゃんの汗で諭吉さんがしわしわに」

2回で五万だと俺が一月ファミレスで働いても3万だぞ
やはり五倍の相場は伊達じゃねーな

流石に風太郎も動揺してるのか汗で諭吉がべとべとだ

「お母さん お兄ちゃん達がやりました」

「幸太郎……………」

「ああ なあ五月 これは受け取れねえわ」

俺と風太郎は視線でやり取りした

思ってる事は同じなんだろうな

「お前達の家にも2回行った でも勉強は教えてない」

「俺も同じだ 何もしてねえからな」

確かに2回は行っただが

やった事と言えば現地集合で現地解散見たいなやり取りだ

「俺達の力不足で勉強会自体は実際行われていない」

俺が五月にアドバイスした事もこれとは別の事で俺なりに借りを

返しただけに過ぎない

「そうでしょうか 幸太郎君はセクハラしてたじゃありませんか」

「五月さん 何で今回そんな事言うんだ お前も違うって言うてくれ

ただろ」

「幸太郎 お前え」

「お兄ちゃん……………」

「やめろ 兄をそんな目で見るな！」

まさか 五月は根に持っているのだろうか

やめてくれ 俺が悪いのは認めるけど弟や妹の前でその事を言う

のは、ジロリと白い目で見られ「すみません」とお芝居やっていれば、

五月はくすくすと笑う

「何もしてない事は無いと思いますよ あなた達兄弟の存在は5人の

何かを変え始めています」

「5人」

「つ……………違います 4人です4人 幸太郎君も見ないでください

後返金は受け付けませんからどう使おうがお二人の自由です」

5人の何かと言う言葉に風太郎は首をかしげるが

俺には心当たりはある 二乃の本音 三玖の気持ち などここ一

か月で結構変わった気がする

じーつと五月を見れば両の手で顔を隠してしまう

お前も少しずつではあるけど変わってきてると俺は思うぞ

風太郎は五月に言われお金の使い道をしばし考えていた

その時だ 家の電話が鳴り出し らいはがそれを取ると俺を呼び
電話を俺に手渡した

「はい 上杉幸太郎です ああ店長どうしたんですか はああ?!大丈夫
夫ですか

いえ ファミレスの方は今日はないですね いえ俺は別に了解で
す時間は

また急ですね はい分かりました では現地で失礼します
…………… まじか

「どうした 幸太郎? 深刻そうな顔して」

「幸太郎君 今の電話は何ですか?」

「ああ それが急にバイトが入ってな ファミレスとは別の所なんだ
が、そこに行くはずの人が急遽来れなくなったらしくてな 俺が使命
された断る事も出来たがそうもいかねからな」

「ええー お兄ちゃんせつかく休み取れたのに」

「ごめんならいは 今度遊び連れて行ってやる 風太郎すまねえけど
その金の使い道はお前で考えてくれ」

バイト先の人でが足りず俺へと電話がかかってきた

断る事は出来たし 向うも言ってくればそれでいいと言ってく
れたが

そういう訳にもいかねえしな

世話になってる先の人だ それを無下にする事は俺にはできねえ

初給料はまかせ俺は荷支度を開始する

「幸太郎君 大丈夫なんですか? ここ数日働き詰めです 今回お給料
も出ましたし」

「五月 そういう訳にはいかねえんだよ 心配してくれるのは素直に
嬉しいよ

でも困ってる人が居るんだ助けてやらねえと

んじや 俺は行くから 風太郎自転車借りるぞ！ んじや五月また今度な」

俺の愛用自転車は未だにパンクしたままだ

風太郎の持つ自転車を借りれば今から行っても余裕で間に合ってくる筈だ

俺のバイト事情を詳しく知る五月は『今回給料が出たのだ休んでもいいのでは』と気にかけてくれたが

そう言う訳にも行かんだ

家庭教師は家庭教師だ 俺のバイトとはまた別件なのだ

「さて らいは 何処か行きたい所あるか？」

「うーん ゲームセンター」

それにだ俺には給料をどう使うか点で思いもつかないしな

――――

――――

――

「何だ 五月……幸太郎がいないと寂しいのか」

「な そんな訳ある筈ないですよ……」

「説得力ないぞ そんな落ち込んでる姿は」

俺は幸太郎に任された初給料をらいはに使ってあげる事にし

あいつの頼みもあり五月にも同行をして貰っている

『断れません 可愛すぎます』と全く同感だな

三人で時間を過ごしていた 流石に今この時まで勉強とは俺も言いはしない

らいはが目に見える範囲でゲームをしている間 俺は五月聞きたい事があり

話しかけている 人と話す事はあまり得意ではないけど少しばかり聞きたい事があった

「なあ 五月 お前さ 幸太郎の過去知ってるのか？ だからあいつを気にかけるのか」

「!?……………な 何ですか急に」

「あいつは何も言わないけど、俺はそれしか思いつかないんだよ」

「……………いえ 私は別に彼に何かしら ってもし何かあってもあなたに言う必要があるんですか」

「あるよ 俺はあいつの弟だ、理由はそれだけで十分だろ それにもし知ってた場合

それが同情の気持ちならやめておけ それは逆にあいつを苦しめる」

「……………もし 私が彼の何かを知っていてもそれはあなたには関係のない事です ただ」

「何だ」

「私は彼に害を及ぼす気はありません 彼を傷つける事はしません それだけは分かって欲しいんです」

「分かった 今はその言葉を信じよう お前が、話したくないのかそれとも本当にただの過保護なのかそのうちハッキリするだろうしな」

「上杉君はお兄さんが大切なんですネ らいはちゃんと同じく」

「大切か……………そうかも知れないな 今では、あんな奴で人には怖がられてるけど本当にいい奴だ 学園の噂も誰かが勝手に言ってる事だ 真に受けないで欲しい」

「安心してください 私は、あんな噂何一つ信用も信じる気もありませんので私は私の目を見た 幸太郎君の姿で判断します」

上杉幸太郎 それは俺にとって憧れのような人間で

俺とらにはに取って頼りになる兄である

学園でどんな扱いを受けようが、俺はそれに干渉する気もないし あいつもまた俺の学園での生活に干渉はしない

がだそんな俺達兄弟の日常を少しづつ変え始めた奴らがいるのだ
それが俺の隣にいる この女 中野五月といや五月だけではない

三玖や一花 四葉 二乃だってアイツが周りからどんな評価を受けて居ようが関係ない

と言う様に接して居るのだ

楽しく話すし 冗談も言うし 喧嘩だってする

中野姉妹は、俺達兄弟が変わらない 変わろうとしない時に現れた起爆剤のような存在だった

だからだ あの日からアイツの顔から消えた笑顔を俺は最近見るようになった

作り笑いを浮かべる事もやめた

それに学園でのアイツと話す機会も少しづつ増えてきているのだ
俺を見てもあいつは避けようとはしなくなった

むしろ俺を見るなり 『五月がまた』『二乃の罵倒は健在だ』『四葉は教えていると楽しい』『三玖にここを教えたいんだ』『一花は勉強に参加させるためには』と自分で考えている

五つ子卒業計画を話してくれるのだ

その事に関しては、言えば俺は中野姉妹に感謝しないとならないだろう

上杉幸太郎は不良少年だ 周りはそう言い あいつの見た目で全てを判断する

でも違う そんな人間が汗水たらして毎日のようにバイトをし

面倒な五つ子の家庭教師の手伝いなどする筈もない 真正面から彼女達と向き合う事なんてしないのだ

あいつは根っからのお人好しで真面目な奴なんだ……………。

—————

—————

———

「五月、来てくれてありがとう、あと話を聞いくれて感謝する」

「良いんです。らいはちゃんの頼みです。それに上杉君が、彼をどう思っているかも聞きましたから」

「まあ結局日曜は、潰れたけどな……………いやまだ夜がある…お前らも勉強しろよ」

「わ、私はこれで」

おいまさかこいつは……………。

幸太郎が、あれだけフォローしてやってるのに何もしてないのか？

さっさとこの場を去ろうとする彼女に幾つか問い詰めているが

『ついでにないでください』としか言わず勉強の事については何も答えない

本当に何もしてないのか？日曜だぞ 24時間あるのにそれを有効活用していかないのか

そんな事ありえるのか……………。

「お兄ちゃん……………五月さんが四人いる」

「えっ？」

らいはの言葉で後ろふり返れば

あの顔が四つ 今横にいる五月合わせれば五つだ

そう中野姉妹が、全員集合しているのだ

それも浴衣で着飾って四人はここにいる現れた……………。

何だその恰好は、

「集まったし早くお祭りいこう……………フータローだ」

「あれー 五月といえるのフータロー君 珍しい組み合わせだね こつちが好みだった」

「五月もなんで そいつといえるのよー！」

お祭りだ？ 何だその浮かれた考えは

この場に幸太郎がいれば『勉強向上の為 行ってもいいだろ』と二つ返事だ

だが俺は違う そんな時間はない さっさと残った宿題をやる必要がある！

「わっー 上杉さんの妹ちゃんですか？ これから一緒にお祭り行きましようよ」

「ねえ フータロー」

「何だよ 三玖」

「コータローは？」

「あいつは用事で今日は、夜まで戻ってこないだろうな」

「そうコータロー居ないんだ……………」

「つて お前達勉強を！」

「お兄ちゃん……………お祭り行きたい ダメ」

ふっ俺を甘く見るない

らいはがどれだけ俺に頼みこもうが俺は……………。

「あ いいぞ行こう お祭り！」

日曜日が潰れました

俺も幸太郎の事はあまり言えないのかもしれない

だがこれはあくまでもらいはの頼みだそうでなければ動く事もしない

でもな 俺だって簡単には祭り何て行かせない

「お前らは今から宿題終わらせてからだ！」

『は……………！』

幸太郎 俺はとことんこのやり方で行くぞ

信頼もこいつらの学力向上も俺は狙って行くからな！

……………

……………

……………

「幸太郎くん すまん今日は休みなのに こんな時に休みとは全く」

「良いですよ店長 それに祭りですから楽しみたいんでしょ 俺が居

るんで怒らんでやらんでください」

「君は真面目だね　じゃ今日は頼んだよ　！」

「了解です！」

さて屋台での販売だ

折角の休みを返上してやってきたんだ　稼がねえと元も取れねえ

ぜ！

渡されたタオルを頭巻き気合を入れなおす

ここはもう祭りという名の　戦場なんだ！！

第十三話 不良少年と花火の夜

この時期行われる花火大会は特に人の行き交いが増え
通常より人手が足りなくなる事が多々ある

理由としては 大量の人を捌きれる人間が純粹に足りない

または働く側が休みを取り花火を見に行ってしまうと言う何とも
笑えない話だ

変な奴らと行動して問題を起こすとかよりは、全然ましではある
が、働き先には前日に話していた方が心象も変わると言うもんだ

「らっしゅい 一個400円で味は保障しますよー 買っててー!」

頭にタオルを巻き 首元まで隠れた黒のTシャツを着

袖をまくり垂れそうな汗を拭い

鉄板の上の麺との激闘が行われている

熱いってレベルじゃない

ごった返す人の数も合わせ横の屋台街まで熱が来るわけだ

横に置いてある 簡易扇風機の風はもはや熱風だ

涼しく何ともない

俺が呼び出されたのもまた人手が足りないと言う純粹な理由だ

今朝方電話で花火に合わせ屋台を出したが、今回来るはずだった奴
が『ああ休みます』と

もつと言いつつもつと頑張れよ

そんなんで良く雇われたな 店長も『まさかあんな人間だったと
は』と肩を竦めていた

ただいな人間な事を今更とやかく言っても何も始まらない

今は売れるだけ売って、客に満足してもらおう事だ

売れ行き自体も好調で店長も臨時代と合わせて多く出してくれる
と言ってくれた

少しでも良い 借金を返せるんだ頑張らねえとな……………。

何パツクか作り置きも合ったのだから、先ほどお客様が気前よくお買
い上げだ、そんなわけで今の在庫は0、休憩を終え再び鉄板に向かう

きちんと水分補給も忘れない脱水症状で運ばれたとか笑えないしな

(動きますか、ねえ)

こつちに来る人影が見えてどうやら客のようだ

接客も同時にやらないと店長は今席を外していかないからな

「すみません あの焼きそば3パック 量多めとか出来ますか」

「はい 3パックですね 美人さん何で麺も具も増量しますよ!」

「やりました 美味しそうですね 1個はお土産にしないと」

「あつはは 五月ちゃんよだれ はしたないよ お兄さんも美人さんなんてうまい事言うねえ」

「……………ん」

あれ……………?

ふとヘラを持つ手が止まる

今聞き覚えのある名前を俺の耳が捉えた

そしてその話し方を知っている……………。

煙もあり俺は客の顔が一瞬しか見えなかったが、浴衣で着飾った女性二人組だった

辺りは賑わっており声も張らないと聞き取りにくい事もあるし

接客の際にも気付かなかったのだろう

「あれ お兄さん手が止まってるよ」

「さーせん 今すぐ作ります」

客の正体は 五月と一花だ

ちらつと顔見れば普段違った雰囲気を出している

正直言えば、二人に見惚れた……………。

向こうは気づいてないのか、『手が止まっているよ』と言い慌てて動かす

今は客と店員だ 何時もと違うきちんとしなければならぬ。

隠し立てする必要はないが、やっぱり働いてる姿を知人に見られるのは気恥ずかしいもんがある

「あの すみません」

「あつ何っすか……………」

「どうしたの五月ちゃん？」

「いえ このお兄さんの目つき何処かで見たような気がして」

「き 気のせいですよ」

裏声で何とか誤魔化す

特徴的なあの髪はタオルで隠され見えす

周りの声もあり俺だと判別出来ないと思ったが上杉家の血だ

このするどい目

何か感づいたのか浴衣姿の五月がじーつとこちらを見てくる

だが確証がないのか、うーんとうなっている

(どうかこのまま気づかずに帰ってくれ)

「じろじろ見てすみません 知り合いの男性に似ていたもので」

「はあ…」

「うん 確かにコウタロウくんに似てるかも 目元とかさ」

「ハツハハハ 美人なお嬢さん方の知り合いに似てると言われるとか
光栄ですな……………」

「美人なんて そんなありがとうございます」

「五月い 顔が真っ赤だよ でも五月ちゃんが彼以外に珍しいね？」

「屋台の熱でそう見えるだけです でも不思議です お兄さんに言わ
れても嫌な感じがしません」

「……………」

「ああー何かすみません!!」

「大丈夫だ…。」

「ねえ お兄さん こんな熱い中さそんな 首元まで隠れる服で良い
の熱くない？」

「…………自分寒がりなんですよ (そんな訳あるか熱いよ)」

「そうなんですか でも凄く汗かいてますよ？」

「気のせいっすよ……………」

こんなクソ熱い中 俺くらいだろう首元まで隠すのは

因みにこのTシャツはらいは特注の品だ以前頼んで作ってもらっ
た

訳あつて普段から喉元まで隠して過ごしている…。
何かあると言う訳でもないがこいつらにだけは、見せたくない
だから今回見たいな不測の事態の時には助かる ありがなとらい
は……………。

(よし このままいけばやり過ぎせる)

2パック目が終わり最後の3玉目を作り始めた時

俺の中では勝利へのゴールテープが見え始めた

二人も余計な詮索は避けたのか顔を引っ込めてくれたし

これならバレる事もない そう俺は安心してた

「幸太郎くん 売上はどうかかな！ おお流石は幸太郎くんだ」

「店長おおおおおおお！」

「あぁー やっぱり コウタロウ君だ！」

「ここ 幸太郎君何でここに！ それより私幸太郎君に美人つて」

他の露店との話を終えた店長の帰還で俺の無駄な戦いも終わりを
告げた

呼ばれた名前を彼女の耳は聞き逃す筈もなく

一花は面白がり俺の姿をスマホで撮影し 五月は俺のさっきの発
言を思い出したのか

自分の髪と同じくらい真っ赤に染めている

そうだよな 知り合いにそう言われれば、恥ずかしいよな

—————

—————

—————

「3パック合計で900円だ」

「えっ でも1個400円って」

袋に出来た3パックを詰め込み

二人に手渡した 300円値引した

普段は見れない二人の浴衣が拝めたのだお釣りが来てもいい方だ

「社割だ それに良いもん見れたしな 似合ってるぞ二人とも」

「幸太郎君に 浴衣を褒められてしまいました ありがとうございます
す」

「ありがとね コウタロウ君 安くして貰って でも嬉しいなお世辞
でもさ」

「お世辞で言うかよ 似合ってるって言ってるんだろ たく」

「……………あつはは お姉さん照れるな」

「うっせー はあ買ったなら他の奴の所に行けよ」

「幸太郎君は来ないんですか?」

「五月 俺はバイト中だぞ」

営業中と書かれた後ろの紙を指さし同行出来ないと教える

稼ぎ時に元の人が休んでたださえ人が足りないんだ

俺が離れる訳には行かないねえ

うるうるで見つめる五月には悪いと思ってる

「フウタロウ君や妹ちゃんも来てるよ?」

「ほーあいつが気を利かせたか珍しいな」

「まあ 一度帰宅させられて勉強やらされたけどね」

「納得だな じゃお前ら人込みで迷子になるなよ 五月 一花これっ
けとけ」

「鈴ですか?」

先程知り合いのバイト先の人から手伝いのお礼として貰ってた

紐が掛かる手鈴を二人に手渡した

俺が持つていても使い道はない

女性である二人の方がまだ持つていても違和感はないだろう

「ああ 万が一逸れても音で分かると思ってたな手首にでもつけとけ」

「この中だと 音には期待出来そうにないけどね」

「いらぬなら返せ」

「いります!返しません」

「五月ちゃんもこう言ってるし 素直に貰うかな じゃコウタロウ君
もバイト頑張ってるね」

「幸太郎君 無理はしないでください 後…首元を詮索するような真似をしてすみません…。納得できました では」

(……………さて今の五月の言葉 あいつまさか知ってる? もしや見られたか?)

応援を受け 俺はまた五月に対して少しの疑問を抱いたが

今は少しでも売り上げに貢献した店長を助けなければ

ヘラを取り再開しようとしたが、店長に声をかけられた

そう言えばこの人も戻ってきてたんだ

「なんつすか店長?」

「幸太郎くん お店は十分売上を出せた 君はさっきの友人の所に行きなさい」

「でも 店長一人には」

「君の頑張りでこれなら黒字だよ これ君の今日の分ね

それに大切な高校生活だ青春しなさい」

「店長……………ありがとうございます! また何かあれば声をかけてください」

給料の入った封筒を手渡され

店長の粋な計らいもあり俺の今日のバイトは終了となり彼等に合流するよう言われた

気を利かせて貰ったのだ素直にご厚意に甘えよう…。

彼女達が行ってそこまで時間は経ってはいないが

この人混みだ無事見つける事が出来るかどうかと言う不安があった

(あっ 案外早く見つけたわ…。)

人混み中でひとときわ目立つ浴衣を着る五つ子の姉妹の姿を俺は見つける事が出来た

—————

—————

「はあ アイツがいたの 良かった行かなくて 汗臭そうだし」

「二乃その言い方ひどいですよ！ 幸太郎君は頑張ってる働いているんですから」

「頑張ってるかー あんな目つきの奴が働く所かアタシはごめんだけどね」

「ほれ これがバイト中のコウタロウ君の姿」

「一花それを私のスマホに送ってください」

「一花 私にも頂戴」

「うわー お兄さんすごい熱そうですね！」

「幸太郎のバイトしてる姿とかすごくレアだな」

「そうなんですか？」

「ああ あいつ普段から色々バイトに出てるけど俺は一度も出くわした事はない」

「つか アンタは基本勉強ばかりで家から出ないでしょうが！」

「俺だって少しはしてるさ 幸太郎が異常なだけだ」

「はいはい 分かったから急ぐわよ アンタ達！ アイツの話なんてして暇ないのよ！」

「お前ら… 祭りなんだ 人の話より 今を楽しめ」

『!! 本物だー』

「つたく 合流してみればなんだ 面白くもねえ話しやがって 身乗り出し集団の中に顔を出す

ばつと離れる彼等をじーっと見る

二乃はこつちを睨み 一花は手を振っており

お婆けでも見たかのようにガタガタと震え指さす風太郎

「ビビらせるな！ その顔を急に出すなよ」

「おい ブーメラン刺さってんぞ？」

「お兄ちゃん お疲れ様！ その服着てくれたんだ」

「おう らいはありがとよ 助かったわ！」

妹の特注Tシャツはいい具合に隠してくれた

なお五月は何故か知っていたようだが…

(そのうち 五月には色々と聞かねえとな)

「コータロー お疲れ様飲む？」

「よう 三玖 浴衣似合つてて可愛いぞ」

「……ありがとう」

持っていた抹茶ソーダを受け取り三玖の浴衣姿の感想を述べた

青を基調としたデザインだクールな三玖にとてもマッチしている

一花達の時もあったが浴衣を着ている姿は普段のこいつらを更に華やかにしている

『似合ってる』『可愛い』とかの言葉では足りないかも知れない

「はい セクハラ発言」

「二乃 俺は褒めただけだが！」

「アンタが言うときモいのよ」

「ふーん 二乃 お前も似合ってるぞ」

「思ってもないくせしてさ」

「お兄さん 私はどうですか！」

「うさぎが浴衣を着てるかと思った」

「うさぎ！ 本体はリボンなんですか」

「冗談だ 四葉も可愛いぞ」

「やったー お兄さんに可愛いって言われちゃいましたー！」

宣言布告して来た二乃だ

発言すればその都度噛みついてくる

ただテンション自体は高く感じる気がするな

四葉も浴衣の感想を言われて嬉しいのかはしゃいでいる

「つて 幸太郎君 バイトはどうしたんですか？」

「うん？ 店長が今日は上がっていいとき」

「ははあーん さてはアンタ見たいな味覚音痴が作ったやつが不味いからクビになったんでしょ」

「二乃 こいつは確かに味音痴だが、普通に料理は出来るぞ」

「人並だけどな 料理は愛情だつて言つただろ？」

「あーハイハイ……つて こんな奴の相手してる暇じゃない！ 花火よ花火」

「二乃の奴どうしたんだ？ 何時もなら食つて掛かりそうなものだ……」

『さつさと歩けー』と全員に聞こえるように声を上げる二乃

中々進まない人混みにイライラしながらも突き進んでいる

一花もそうだが五つ子の様子が普段と違う気がする

お祭り効果とでも言う物なのか？

「花火はお母さんとの思い出なんだ」

(零奈さんとの……そりや二乃も行動する筈だ)

「お母さんが花火が好きで毎年揃つて見に来てた お母さんがいなくなつてからも毎年 私たちにとって花火つてそういうもの」

「そうだな 母親との思い出なら大切だな」

「うん」

「さて二乃が見えなくなるし 行くか」

【母親との思い出】それは零奈さんに育てられた彼女達にとって

大切な思い出だ そしてそれは姉妹を一番に思う二乃も同じだろう

だからあいつはみんなに急ぐよう声をかけているんだ。

二乃が見えなくなつては大変だと俺達も歩く速度を上げたが

花火のアナウンスが流されると周りも自然に歩くスピードが上がり

何処に誰がいるのか分からない状態になり始め

自分はここだとそれぞれ声を上げ 場所を示すがこの人混みだ

徐々に吞まれ始め 気づけば俺の周りには誰もいなかった……

と言うより周りの人間が明らかに俺を避けている

睨んでねえよ 探してんだよ

「っ 全員とはぐれちまったか！」

人が避けていくのを利用してみんなを探すため前進した
止まっても誰も見つける事は出来ねえ

二乃が歩いて行った先は確かにこっちの方向だ
逸れないようにする中であいつの位置だけは、確認していたためだ

「おーい 幸太郎！ 見つけた」

「風太郎 と 二乃か！ 良く俺が分かったな」

「いやいや アンタ見たいな 目つきの人間遠くでも分かるから怖す
ぎよ」

「何も言わん んで他の連中はどうした」

「ダメだ完全に逸れた」

「ああもーせっかくの花火なのに！ 取り合えず予約してる所あるか
らアンタ達だけでも良いからついて来なさい」

「了解だ 二乃」

「なんで こう上手くいかないのよ！」

タオルを巻き黒いTシャツ姿が周囲を見ていれば嫌でも目立つよ
うで

二乃と風太郎がこちらを発見し無事に二人と合流し

一旦二乃が話す店の方に向かう もしかしたら全員そこに来てる
かもしれないと淡い希望を抱く

「あつ…」

「どうした二乃」

「お店の場所 アタシしか知らない…やば」

「はあ？」

花火大会終了まで残り一時間 中野姉妹 現在二乃のみ

行方不明 一花 三玖 四葉 五月 らいは

ひでえ…。

どうすんだこれ？

第十四話 不良少年と彼女達の関係

「起源は中国でヨーロッパをへて種子島に鉄砲と共に伝わり…。」

「つまんない 何が悲しくてアンタ達兄弟と花火見てんのよ」

「そう言うなら 全員に伝えておけ二乃 はしゃぐのは良いけどよ」

「うるさい 説教はいらないから！」

花火は開始された

それを堪能しながら雑学まで聞けると待遇だが

何が楽しいだこの状況は…。

暫く待機したが、二乃以外知らないここに誰も来るはずもない

時間は進み一時間は切っている

焦りの色を出す二乃だが、自分のスマホが鳴った事に気づき耳元に寄せる

「四葉？もうどこにいるの！」

…え、時計台？…うん、わかった！迎えに行くからそこで… あっ!？」

「誰からだ？」

「四葉から妹ちゃんはあるから安心なさい！ ってアンタ達も連絡しなさいよ！」

四葉とらいはの安全は確保されたどうやら二人ここから少し先の時計台にいるらしい

切れたスマホ片手の二乃は俺達にも他と連絡するよう言ってくる

「ダメだ この携帯使えねえ！」

「ダメだ 俺文明の利器もってねえ！」

「使えないのはアンタ達 兄弟よ!!」

その場でシンクロする二人

二乃の言いたい事はもつともだこの人が離れ離れと言う最悪の中で

風太郎はらいはと勇也さんの連絡先しか知らず

俺に至ってはそんな物半年前に捨てている

戦力外も良い所だ…。

五月達から聞かされている

花火を見る条件として宿題をやってきたと

彼女等はやるべき事をやってここまで来たのだ

それを混雑したから 他と連絡を取れないからという理由で終わらせていい訳がねえよ

「おい あれ 一花か！」

「あつ ほんとだ でも何で電話でないのよ」

「二乃 俺と風太郎で姉妹達を連れてくる ここを知っている人間が全員移動する訳には行かねえ」

「でも 見つけてきたら勉強しろとか言ってくるでしょ信用ならない！」

「幸太郎が、そんな事言う訳ないだろ 行くぞ」

「おい 待ってろ お前ら全員一緒に花火を見せてやるからな！」

「…なら絶対よ！ みんなを任せたわよ」

「了解だ任せろ二乃！」

母親との思い出それをこんな形で終わらせる訳には行かない

信用するとは言ってこないが、でもこいつは任せたと云ったのだ

ならば俺達がやる事は変わらない

どんな形であれ彼女達には見せてやるんだ…。

「風太郎はらいはと四葉を俺は一花達を探す もし俺より先にここに戻ってきたら

入口で他の姉妹を中に案内してくれ」

「分かった 幸太郎 お前も無理するなよ」

「弟に心配されるほどやわじやねえって言つたらろ」

互いに軽く手の甲を当て それを皮切りにそれぞれ目的の場所へと向かう

らしくねえな

――

――

――

「一花！何してやがる 早く二乃の元に戻るぞ」

声を上げ人の波をかき分ける

数歩先に一花が見えた 声をかければこちらを見る

でも何処か様子がおかしい

少し強引だろうと良い 彼女の手を取ろうとしたが、横から遮るよ

うに誰か俺の手を弾いてきた

「君 誰？ ナンパかい」

「はあ？ アンタこそ誰だ急に出てきておい 一花戻るぞ」

「……………」

顔も名前も知らない謎のおっさんが現れた

こつちを見てナンパと言うがそんな気はもうとうない

俺はただ一花を連れ戻しに来ただけだ

「君一花ちゃんとどう言う関係？」

「はっ関係……………」

おっさんの言った言葉で俺はつい止まってしまう

関係とはどう言う意味だ そして何故このおっさんは俺にそんな

事を聞いてくるのだ

俺はあいつの何だ……………。

家庭教師で良いのかいやそれは風太郎だ 俺は補佐にし過ぎな

い

友人とでも言えば良いのか それとも知人か、それも違う

頭が痛くなってる何で悩んでるんだ。

あいつは妹分だそれで良いだろう

例えば忘れられていてもそれで良い

「俺はそいつらの！ おい 待てよ おい一花！」

「……………」

少しの遅れが全てをダメにした
俺が動こうとした時には既に向こうは移動を開始していた
それを追いかけてしようとするが、人混みの中二人は消えて行ってしま
う

関係とかどうでもいい またあの顔だ 一花は何時もなんであんな顔してんだ。

……………!

まるで何かに押しつぶされるよう感覚が俺の胸を締め付けた

「うつ……………ぐ くそ こんな時に」

胸を締め付けるような痛みが襲って来た

これが来るのは久しぶりだ、最近は安心しきっていた
もうしばらくは無いと勝手に思っていた。

その場に膝を着き胸を押さえる

息をするのも辛いが、今は少しでも動かなければ行けない

一花が行ってしまう

「はあはあ ………………はあ っ」

「コータロー!!」

「誰だ……………」

青い浴衣が見える

俺の名前を呼ぶ声がする

視界もぼやけてきているが、この声は知っている

「コータロー…コータロー…」

両の目が開く

目の前には俺の名前を何度も叫ぶ三玖の姿があった
今にも泣きそうな面で見てる

「三玖か…だ 大丈夫だ…」

「ダメ…こつちに来て向こうで休もう どいて!」

「俺は、俺は平気だ……………」

「今は言う事聞いて！今だけで良いから！」

その場から立たせると俺の手を自分の首に回すようにし
周りの人に退けるよう声を出し一歩一歩と歩いていく

こんな三玖の姿は初めてだ

普段は、ちいせえ声なのにな…。

……………

……………

……………

人の行き交いが少ない階段を見つけ

そこに俺を座らせ持っていた飲み物を俺の口に入れた

「はあはあ……………」

「コータロー 大丈夫？ねえ」

「ああ……………何とかな 抹茶ソーダに感謝しないとな」

「ふざけないで！」

「なんだ 今日は珍しいな お前が、そこまで声を出すとかよ」

「コータロー……………今は動かないで無理はしないで、お願い…」

「……………悪い」

三玖の怒った顔を俺は初めて見た

少しでも気を紛らわせよとしたがそれがかえって彼女を怒らせた
ようだ

普段は物静かでクールな彼女だが、ここまで感情を露わにすると
は、意外だった…。

三玖は隣に座ると。胸を押さえる手の上に彼女も自分の手を重ね
『ごめんコータロー……………ごめん』と何度も三玖は謝っている

「何でお前が謝るんだ…」

「ごめんね……………」

「俺の方こそ悪かったよ……………心配かけたな」

目を閉じ 息を整えよう

ゆっくりで良い

今ここにいるのは、俺と三玖だけだ周りの事は考えるな

耳を傾けよう 鼓動を聞こう どくんどくん

大丈夫だ、動いてる

それに三玖が重ねてくれる手が温かく安心出来る

俺に寄りそうに座る彼女の鼓動も聞こえる きつとさつきまで俺

以上に鼓動が早まっていただろう

あそこまで必死な表情で動こうとする俺を止めたのだ

「三玖ありがとうな だいぶ楽になったわ」

「もう大丈夫なの？」

「ああ さつきより全然平気だ」

「……………あるのこういう事？」

「いや初めてだ だから俺も驚いたよ」

「……………」

嘘だ

「でも三玖がいたから落ち着いた あのままだったら危なかった」

「良いよ コータローが大丈夫って言うなら」

「……………三玖 俺はそろそろ行くわ 一花達を探さないと行けないから」

「ダメだよまだ」

「信じてくれ もう大丈夫だ絶対に……………嘘だったら今度三玖の言う事聞かす」

「そんな事はいいいから……………無理はしないで、約束だから」

こくりと頷くと三玖は少し距離を開ける

顔を下にし俯いてしまう耳もちよつとばかり赤くなっていたり

どうやら三玖も普段と同じく戻ってくれたようだ

「三玖 ここから道なりに進んで右に少し距離はあるけど そこで二乃達が待つてる

みんなと合流してくれ」

「コータローはどうするの？」

「さつきも言ったが一花と五月を探す」

「……………」

「三玖 さつきの事はみんなには黙っててくれねえか 特に五月にはな」

「分かった みんなには秘密にしておく（でも五月は…）」

彼女が領いた事を確認すれば

足に力を入れ残る一花と五月を探すため散策を再開する

くつそ スマホでもあれば楽なんだがな

捨てた事を後悔はしないが無いと不便だという事を実感させられた

「コータロー……………私は見てられないよ」

……………

……………

……………

一花だけではない五月も見つけないといけない

あいつは方向音痴な所がある昔何度かいなくなったあいつを探した事があった事を思い出した

きつとあの人混み中五月もみんなを探しているだろう

風太郎達が先に見つけていってくれば御の字だ

それに不思議とあの痛みも引いて来ていた

暫く大丈夫だ、懲りもせずそんな事を考えていた

「三玖にはきちんとお礼をしないと……………つどいてくれ！」

痛みは引いても疲れが出て来た

一度止まり肩で息をし何とか態勢を整える

「何とかあいつ等を見つけた方法を探さねえと体力ばつか持ってかれるぞ……」

その場で辺りを見渡す

くそ学園だったら人混みもモーゼ見たいに避けてくれただけどな外ではそうもいかない。

チリン……………。

「ん……………今確かに聞こえた　小さいけど」

何かが揺れる音だ

鐘か違う　ここにはない……………!」

『方が一逸れても音で分かると思つてな手首にでもつけとけ』

自分の言葉がフラツシユバックする

「鈴だ　五月と一花に渡した　何処からだ……………そっちか!」

自分の耳と頼りに音の発信源を探した

こんな人混みの中良く聞こえたものだ自分の耳の良さに驚く

少し歩いた先に見えた

目を丸くし　キョロキョロとあっちこっち心細い表情で赤い髪の

少女がいた

「五月　見つけたぞ……………はあはあ」

「幸太郎君! どうしてここが分かったんですか!？」

「お前がかえさねーって言った鈴のお陰とでも言えば良いのか、聞こえたんだ」

手首には律儀に鈴がかけてあり

これのお陰だと言うと五月は鈴をそつと別の手で握っている。

「良かったです　あの人混みでみんなとバラバラになってしまつてス

マホも繋がりにくくてどうしようかと……………」

「大丈夫だ、何があっても見つけつから はあ」

「ありがとうございます。そう言ってもらえると安心出来ます
えつと幸太郎君息が荒いようですが大丈夫ですか？」

「ん？大丈夫だ、後は一花だけだな、つ大事な物忘れてた

これ五月に渡して置くここ周辺の見取り図だ

ここでバイトしてたから渡されてたんだ 今はここだから真つ
直ぐ進んでくれ

そこを行けば一旦壁に着くが、地図を見れば大丈夫 壁沿いを進め
ば二乃か風太郎と会えるはずだ」

「ありがとうございます これで見んなと合流出来ます！」

今回ここでバイトしてて良かった思う

ここら一帯を表示した地図を店長から事前に渡されていたのだ

ここまで大事になるとは思わず使わないままポケットにしまった
ままだった。

現在地を示す場所を指でなぞり 二乃達がいる辺りまで動かし

五月に説明する 少し混乱気味だが、五月なら大丈夫だ。

「なあ 五月よ聞きてんだが 一つ良いか」

「何ですか幸太郎君突然に」

「俺ってさ 何なんだろうな……………さつき色々あつてな 考えてん
だよ 三玖にも聞こうか迷ったけど

こういう事なら五月の方がばさつり言ってくれる気がするよ」

「関係……………私達と幸太郎君のですか？ そうですなざつくりとし
た事しか言えませんが」

幸太郎君 この答えはきつと幸太郎君自身分かっていると思うん
です。」

「俺が、答えを分かっている……………？」

五月なら簡単に答えてくれるのではと思ったが、そうもいかないよ
うだ

彼女は少し考えた後に俺に『あなたはすでに分かっている』と言っ

て来た

「どういふ事なのか頭を傾げるが、答えは一行に出ないけどヒントは貰った」

「幸太郎君に頼って貰って私も嬉しい限りです」

「ほんと何でお前は、そこまで俺に接するんだ……なあ五月」

「次は何ですか幸太郎君？」

頼られた事が嬉しいと話 何処か清々しいと言った顔だ

それを見て俺は、自分の中にある疑問を今聞こうと思った

ここに居るのは俺と五月だ チャンスだろう

「お前は……中野り！！」

(良かった五月ちゃんと合流出来たんだね)

鈴の音そして今確かに小声だが聞こえた

あの声は一花の声だ

そして五月に全てを言いきる前に俺本人はその一花に引っ張られるように連れていかれた

「あれ 幸太郎君？ 幸太郎君………何処ですか！」

第十五話 不良少年と長女の秘密

「おい 一花何だよ！ 花火の時間終わっちゃうぞ」

「いいから いいから」

現れたと思えば、俺の手を引き何処かへと歩きだす

俺の手を掴む彼女の手にはさつき渡した鈴が付けられていた

こいつも大概律儀な奴だ。

歩く中『花火見えた？』と何とも他人事のような発言にイラツとしたが

今のこいつの表情を見てると怒る気にもなれない

少し先に路地が見え

二人でそこに入って行く

あの場に残した五月の事が心配だが、地図を渡したし

壁沿いを行けば合流できるとも言ったしあいつを信じよう

「……………で 何だ一花 こんな所に連れてきてよ」

「コウタロウ君 さっきの事さみんなには秘密にしてくれる

それと私はみんなと一緒に花火を見れない……………」

ドーンと大きな音がして

夜空に綺麗な花火が広がっていた…………。

……………

……………

……………

「理由を聞かせろ……………」

「急なお仕事が入っちゃてさ だから花火には行けない」

「お前がいねえとダメだろ」

「コータローくんだってバイトって言って最初は来なかったじゃん

？」

そこを突かれると言いつ返しな

バツの悪そうな顔になる俺に彼女は続けて話す

「それに同じ顔だし 一人くらいいいなくても気づかないよ」

「無理言うな」

「でも急いでるんだ 人を待たせてるし」

「一花 説明だけでもしろよじゃないと二乃は納得しねえぞ」

二乃と約束をした花火を見せてやると

三玖は言った 思い出なのだ

だからこいつらに花火を見せてやるんだ。

もしそれでも行けないと一花が言うのなら説明でもしてくれないと

姉妹を思う二乃の事だ、また喧嘩になってしまう

そんなところは、見たくないのだ

行こうとする彼女の手を掴み離さない

「なんで お節介焼いてくれるの？」

「そんなの！」

「フータロー君と同じく家庭教師だから コータロー君は補佐だっけ

でも何でなの？」

「今はどうでも良いだろう！」

どうでも良いと言った俺の態度に彼女は顔色変える

今はあんまり動かないで欲しい

さつき倒れそうになつたんだ体力もあんまし残ってない

手は掴んでいるが実際は力はほぼ入ってない

威勢に任せただけだ……………。

「ごめん コータロー君…私急いでるから」

「あつ 待て一花！」

するつと手から抜け出し

彼女は自由になるとその場から足早にさつて行こうとする

ここで一花を見逃したら二乃に何て言えばいいんだ

俺は何を言われてもいいが、姉妹との関係を険悪な物にはしたくない

い

「つて一花 おっどうした!」

「ごめん 隠れて」

行ったかと思えば一花は急にこちらの方に戻ってきた
ちらつと向こう側が見え先ほどのおっさんが、きよろきよろと辺り
を探るように見ている

俺達のいる路地のまん前まで歩いて来ていた

「どうしよう 仕事抜け出してきたから怒られちゃう」

「ああ もう……………少しだけ我慢しろよ」

「コータロー君!」

壁を背にし一花の顔が隠れるように抱き合う形でその場で動きを
止める

咄嗟の行動だ

一花は抜け出したと言った それなのに誰かと会っていた
相手は男と分かれば向こうからすれば、良い気分とはいかないだろ
う

少しでもやり過ぎす為にはおっさんが通り過ぎるのを待つしかな
い……………。

「よっこいしよ」

(座んのかよ!)

通り過ぎるどころか箱の上に座りやがった

くっそこんな所で時間くってる場合じゃねえよ

(コータロー君 汗臭いね)

(うるせえ……………バイトだったんだし 走ったからなでも 少しだ
け辛抱してくれ)

今日は朝方から急なバイトだ

屋台の準備やら他の手伝いやらで動きっぱなし

加えてあの暑さの中で鉄板と数時間も格闘していた

上着にもタオルにも汗がびっしよりだ

そんな体で一花に抱き着くようにしてんだ

二乃にでも知られたら、何て言われんだろうな『このセクハラやろう 目つき以外手癖も悪いのね』

カンカンに怒る彼女の姿が頭で脳内再生される……………。

(ねえ コータロー君 傍から見ればさ 私達って恋人同士に見えるのかな?)

(恋人か…………ぱつと見ればそうだろうな この現場に居合わせたら俺なら何も言わず帰る)

(コータロー君の心臓の音余り激しくないね こういう事慣れてるの? 結構大胆だよ)

(慣れてる訳ねえだろ そんな事する奴 今の俺にはいない)

(今 ね…………でもさコータロー君とこんな事してるの何か、悪い事してるみたい友達なのにね?)

慣れてる訳じゃない ただ単に俺が、そう言う人間だからだ

丁度顔が、俺の胸辺りにある為一花は鼓動を聞いている

その態勢のまま会話を続けた。

少しのやり取りで、俺の発言の一部を一花は強調するように言う耳が痛い 別にそこまで深い意味はないんだがな。

ただ少々気になる事はあった 俺に抱き着く形でいる一花は何処か震えていたように思えた。

(友達か……………)

(ハグだけで友達超えちゃうの流石に早いかな)

(そうじゃねえんだ…………俺が言いたいのは別で)
(えっ?)

この状況は傍から見れば恋人同士で抱き着いてるだけに見える

だが 本人である俺達の関係性と言えは

俺は風太郎と共に家庭教師する

一花は、中野姉妹と共に教えられる側だ

彼女の言う様にハグだけで恋人と言うには今の俺達には関係と言えるものが足りない

もし過去の出来事を合わせても 一花は覚えていないそれを+材

料にも出来るわけでもないのだ

だから 彼女の言う通り 友人と言う その呼称が正しいの
らう

だが、あのおっさんの言う 『どういう関係』その言葉が頭に残るし
五月にも『あなたはすでに分かっている』と言っていた

(友達か……)

今ならハッキリと言える 俺は五つ子の友人だ

そして俺にとってこいつら姉妹は手のかかる妹のようなもんだ
もしその関係性が何かと問われたら………。

「ええ 撮影の際は大丈夫ですのー！」

自分と彼女達とはどんな関係なのか…。

改め見詰めなおした時ふと座り込む男性が声を上げた
目を凝らせば何処かと電話のやり取りをしている

(撮影? 一花お前の仕事って)

(うん あの人カメラマンなの私はそこで働かせてもらってる)

(カメラアシスタントか………まさか)

(良い画が撮れるように試行錯誤する 今はそれが何より楽しいん
だ)

(………)

顔は見えないが、静かに語る一花は、きつと俺が思っているより充
実した表情でいるだろう

(一花……進学すら危ういつて言われてるそれは自覚してるよな?
だけどそっちを優先したいお前はそう思ってるんだよな?)

(そうだよ………ねえコータロー君はさ何のために勉強してるの?)

教えてくれない)

(俺が何の為に勉強してたか………)

『零奈さんは絶対に………』ある日の言葉だ

一花に言われ記憶の隅から姿を出した

出来もしねえ事を夢見た馬鹿の思い出だ。

俺が勉強をしてた理由何故しようと思ったのか
何故 それを俺は諦めたのか……………。

(なあ 一花俺は！ ん)

「一花ちゃん見つけた 言い訳は後で聞く 早く走って！」

またこれだ言いかけた時に突然おっさんが一花の名を呼び

誰かの手を取る

第一一花俺の前にいるし おっさんはこちらに気づいてもいない
のだ

なのに一花を見つけたと言い その人物を連れて走って行こうと
する

「あの 私は！」

(三玖！)

おっさんに連れられていくその人物を俺や一花は良く知っている

それは先ほど俺と分かれば 二乃達の元に向かった筈の 三玖で

あつた……………。

第十六話 不良少年と彼の答え・長女の道

「さっきの調子だと電話も出れねえな！」

「かけてるけどやっぱ出ない」

くっそ何で三玖がいるんだ

やっぱあの人混みで一人にするべきでは無かった

俺は何してんだ

イライラが募るが、そんな事しても意味はねえ

今は走って行く三玖を連れ戻さないと行けない。

「一花 一つ良いか 何で仕事抜け出した」

「コータロー君は私の友達って聞いたとき答えなかったから教えな
い」

「はいはい 分かりましたよ……今は追いかけてようぜ」

言おうとしたと口から出そうになったが止めた

言い訳何てしてる暇はない

こいつが聞きたい事は後で答えてやればいい。

少しむくれるているが本当に嫌なら口も聞かないだろう

—————

—————

———

「あっ あの私は一花じゃ」

掴まれていた手を離しガシツと彼女の手を取りこちらに引き寄せ
た

走らされ疲れたのか三玖も息を切らせている

先程は気づかなかったが三玖の髪型は俺と別れた時とは違ってい
た

髪を後ろで縛っている これでは一花と勘違いされても仕方ない

俺に阻まれたおっさんはまたかと言うような表情でこっちを見てい
る

俺も同じ事思ってるから安心しろ。

「三玖すまん 遅れた…。」

「コータロー」

「君は君はなんだ…：君はその子の何なんだ!？」

鬼気迫るように言ってくる男性

再び俺にその問いを突き付ける友人という単語では歪だ

少し違う知人と言う言葉も少し違う

何時も気に掛ける五月に説いたがあいつは俺は既に知っていると
言った

さつきも遮られ一花にも言えずだ

そんで今度はこの男性だ 合計で4回

四度目の正直だ 意を決し俺は自分の答えを聞かせた

「聞きいてえなら言うよ 俺が誰か 俺とこいつらどんな関係か

俺の家族だ だから返せよ…!!」

その言葉に目の前の男性も抱えている三玖も一花も固まっている

それでいい どんな反応をされようと俺の答えは変わらない

中野姉妹は、俺の家族だ

「なっ 何をわけわからん事を言うんだね」

「おっさん 良く見ろ この顔一花じゃねーだろが! ってかヘッド
フォン首にかけてんだろう

一花は持ってたか? 持っていないだろ」

「だけどその顔見間違いようがないよ! うちの大事な若手女優を放
しなさい」

若手女優…………?」

「っ………」

「カメラって………そっちかよー!」

—————

――

――

男性から今日の事を聞かされ きちんと謝罪も受けた

一花はこれから大事なオーディションがある

急がないと間に合わないという事を

それが一花の仕事今やるべき事なら俺はそれを止める事は出来な

い

だけどこのまま二乃達に自分の口から何も言わず去って行こうとする

彼女をこのまま行かせて良いのか……………？

何か手はないのか

それに止めようにもこのまま三玖をここに置いていく訳に行かな

い

五月と違つて地図も渡してねーんだよ

人混みに飲まれたらまた何処かに行ってしまう

さつき見たいな事は勘弁だ

「くっそ……………」

「ゴータロー 私はまだ大丈夫だよ」

「背負つてでも行くぞ」

三玖を風太郎達の元まで一旦連れていき

裏道を通つて一花達の所まで戻れば行けるか

……………今の体力的に厳しいか

焦る俺と何処か申し訳なそうにする三玖

お前は何も悪くないんだそんな顔するなよ

「お困りのようですね」

「よう 幸太郎辛そうだな？」

「四葉に風太郎！ 何でここに」

困っている所に現れたのは

風太郎と四葉の二名だった

待ってましたとばかりな彼女にやややつれた顔の弟
面白い組み合わせだな

「つて らいはどうした？」

「一旦向こうにいつて 俺とこいつで辺りを探してたんだ」

「お兄さんは携帯とか持ってないんで連絡つかないと大変だと思いま
してー」

一度向こうに行けば逸れても目的は分かるしな

渡りに船と言えばいいんだろうな

「花火の事はお任せください」

「何かあるのか？」

「ふっふっふ取って置きがありますよー！」

――――

――――

――

「了解だ 俺は一花の所に向かう 三玖その髪型似ってるぞ！偶には
いいかもな」

「幸太郎 これ持ってけ」

「お前の携帯……………」

「こつちに連絡する時困るだろ 今だけ持っててくれ 後捨てるなよ
俺のだから」

「ああ 分かったー！」

四葉達の考えを聞き即座に実行に移す事に

去り際に風太郎本人の携帯を渡された

実行するにも俺と連絡着かないんじゃ意味はないと言う

捨てるなよと念を推されたがそこまでじゃねえよ少しは信頼しろ
よ

(俺のじゃないんだ………気にするな)

「三玖良かったね お兄さんに髪型褒められて」

「うん………少しだけ勇気だして良かったそれと………良い事も聞いた」

「ええー何々！教えて」

ここまでされて何も言えずあいつを向かわせたら

今度こそ二乃の言う通り出入り禁止だろうな

最近の良い流れで来てるんだそれを崩したくないんだ

――――

――――

――

「一花見つけたぞ あのおっさんはどうした？」

「車を取りに行ってるよ」と

こちらを静かに見据えている

声も何処か低い そこまで真剣なんだろうな。

「ゴータロー君 さつきははぐらかされたけど私からまた聞くね なんでただの家庭教師のいや彼のサポートしている君が、ここまでお節介をやってくれるの？」

そんな事かあそこで言い切ったんだ今更恥ずかしくない

もう一度言えばいいんだろう

さつきなんて結構人がいる前だったんだ

今は観客はこの一花のみだ

「家庭教師としては協力関係だ けど俺にとってはお前ら姉妹は妹み

「たいなもんなんだ 家族と言つていいぜ」

「家族ねえ もつといい例えなかつたの お兄ちゃん？」

「うっせーよ」

茶化す余裕があるんだ

少しは肩の荷が取れただろう

さつきよりはましに見える……。

ずっと本のような物を俺に手渡す

受け取るのを見ると安心したのか彼女はそのまま話してくれた

自分とこの仕事の出会い

半年前に会った彼女への夢の始まりをだ

ちよつとした事で人の運命とは自分が想像していた事よりも大き

く

それが大切なもの変わって行くもんだ

彼女はそれを演技をしていく中で見つける事が出来た

そして今回のオーディションで一花が本格的なデビューが掛かっている

「そう せつかくだから練習相手になってよ？ コータロー君が相手役で」

「演技ねえ…あんました事ねえぞ？」

「お願いお兄ちゃん」

「はいはい」

俺に演技を期待されても困る

そう言った事は苦手だ

それでも構わないと一花は言っている

断る必要はないと台本に目を通し

自分の台詞部分を自分なりに朗読をはじめ

それに合わせ彼女も台詞を読み上げる

内容と言えば良く見る学園ものだ

クライマックスという超重要な場面である……。

自然と彼女の演技も気持ちも籠って行く

「あなたが先生で あなたの生徒で良かった」

その台詞を聞けば目頭も熱くなる

あの一花からそんな台詞が出てくるとはお兄ちゃんも涙が止まらんぞ

「良い台詞 そして一花良い演技だ」

「ありがとね 自信つくよ」

これなら俺も彼女を見送る事が出来る

少しすれば向かいの車がこちらに向かってくる

ライトが見え始めた頃には一花は移動を開始し

こちらに笑顔を振りまく

まだダメなようだ

「い……………コータロー君!」

「一花 お前の笑顔で俺を見る そんな顔じゃ俺はお前を安心して見送る事はできねえ」

両頬を軽くひっぱる

当然びつくりしてこちらを見てくれる

こいつは何時だってそうだ

風太郎もそれに気づき先ほど俺に忠告していた

一花は重要な場面で何時も笑ってごまかしている 本心を見せようとしていないのだ

内心イラっとしていると弟は話した

俺もそれを何処かで気づいていたでも怒りよりも寂しさを覚えた

その作った笑顔を姉妹相手でも使う姿を見て来たんだ切なく思える

そうまでして本心を見せたくないのかと

自分に突き刺さる台詞でもあるがな……………。

此処から先の内容は風太郎からも許可を得た

本心を見せて欲しいのならこっちも自分達の状況を伝えなければ

不公平だろうな

「俺達の家は借金をかかえている その借金を返す為 俺は風太郎に協力し

お前達姉妹の面倒を見る事にした。でもやって見れば全然上手く行かんどころか、何もしてねえのに五月に給料だって渡された。その分は働くし義理を返す

それに俺はお前達が本気で報われる姿が見たい！

俺にはお前達に返さないと行けない恩があんだ！

それに震えるお前をこのままにしたくはないしな……………ッ」

俺の言いたい事は全部言った

最近自分らしくもない熱血な長い台詞を言う事が多くねえか？

中野姉妹の笑顔の代償と思えば安いもんだろうが精神がすり減る

「この仕事を始めてやっと長女として胸を張れるようになれると思つたの。一人前になるまであの子達には言わないって決めてたから

花火の約束あるのに最後まで言えず黙って来ちゃった

これでオーデイション落ちたらみんなに会わず顔がないよ」

それがこいつ中野一花の本心だ

自分にも厳しいけれど姉妹を思う心の優しい少女の姿だ

こいつは俺なんかより立派に長女をしている

偽ってばかりなのは俺なんだ……………。

あの日から一花は一花なりに前に進もうとしている。何時までも後ろ向きの俺とは違う

「もう花火大会終わっちゃうね。でも流石にあんな事するだけはあるね。コータロー君…君って思ってた以上に気がきくのかも。お姉さん驚いたよ」

「俺が敏感に思えるか？」

「それはそれで色々面倒だね君は……………」

「まあ俺はただ一花とあいつらの笑顔が少し違うそう思っただけだ」

「何だろ。君相手だとペース崩されっぱなしだな……………こんなで崩されてて芝居出来るかな」

「一花……………俺はお前の夢の道を応援する。夢は諦めたら終わりだというが本当に終わるときは

それを誰かのせいにしてずっと逃げ続ける事なんだ……………

だから自信を持っていい お前なら出来る！」

自信なさげに表情なる一花を励まそうと出たその言葉自分で言っていた

耳が痛くなる 逃げ続けているのは

あの人の言葉に振るえ自信を無くしたのは他でもない俺だろうが……………。

だけどこんな男の言葉でも少しは一花の力になれるのなら今はそれでいい

「一花 謝る時は一緒に謝ってやるよ それと御守りだ鈴無くすなよ？」

「……………うん」

「一花ちゃん 早く乗ってー」

「はいはい」

一言だけ言うと彼女はそのまま車に乗り込み

オーデイション会場へと向かい走って行く

俺は見えなくなるまでその場で立ち止まり

その場で深呼吸をした……………。

「はぁ……………っつて一花を待つ間済ませねえとな！」

今日の俺は色々人に救われてばかり

五月にも四葉にも風太郎にもそして三玖にもだ

少しだけ此処を離れ一旦屋台の方へと向かう

一花達が戻ってくるまでには戻れる筈だ……………。

「すみません……………これください もしも四葉……………。」

幾つか並んだ品の中で彼女に似合いそうな物を選び

袋に入れてもらう上を見れば最後の力と言わんばかりに力強く

花火が夜空を照らす

体力の限界が見えて来たが明日までは持つてくれと足を叩く

こっちの準備も間もなく終わる 四葉に連絡を入れ
空にあがる花火を見つめ オーディションで戦う彼女に激励の言
葉を投げかける。

(一花 お前なら大丈夫だ)

第十七話 不良少年と長女の話

『第十四回 秋の花火大会は終了しました』

「コータロー君 お待たせって 凄い顔……？起きてる」

「はっ！ 寝てねえよ 誰が寝るか」

「そういう事においてあげる」

「はあ………でオーディションはどうだった？」

「うーん どうだろうね」

ここに戻り待機しじつと座って待つが、オーディションから戻ってきた一花の声で意識を戻す

自分では現実にいたつもりだが、意識は完全に夢の中にいたようだ
少しばかり懐かしい景色が見られた気がする。

手ごたえの方はあったかと尋ねれば、自信なさげに一花は話す
ただおっさんはそうでもない『間違いなく合格』だと彼は太鼓判を押ししてくれた

本職の人がそうやって彼女に言うのだお世辞でもないだろう
待ってる俺には見れなかったけどきつと良い演技をしてたとそれを
自分なりに頭に浮かべる

彼は一花の表情など以前とは違っていたなど更に評価してくれている

それは俺ではなく彼女自身の頑張りだ

『君のおかげ』とは過大評価だろうな

これだけ聞ければ満足だ 俺は一花の手を引きその場を去る
今から姉妹達が待つ場所へ行かねえと行けない

「んじや 行くぞ一花 では失礼します」

「って 何処に行くのコータロー君！」

「みんながこっちで待ってるからな」

「待ってるって まだみんなは会場にいるの？」

「いや この近くにさ公園あんだよ 二乃達も着いてる筈だろう」

「みんな怒ってるよね 花火を見れなかったこと謝らなくちや」
「まあ そんな時は俺もつき合うよ 二乃にあんだけ言って連れだしてこなかったしな」

この先で二乃達が待つてくれている筈だ

一花がオーデイションをして少し 四葉に電話をして準備を頼んでいた

今回の騒動の発端と言うべき一花は母との思い出をみんなと見れずに終わった事に

表情は曇っている どう彼女達に言えばいいのかと弱音とは珍しい物を見た

だけど一花の心配の一部は杞憂に終わるだろう

「花火は終わってねえぞ 打ち上げ花火は無理だけど姉妹で囲んでやる事はできる」

「あつ 一花にお兄さんだ！」

「つて 四葉お前もう始めてのんかよ！」

公園に入れば中野姉妹と風太郎達が買ってきていた

花火に火をつけ早速始めていた

少しだけ待つてると電話では伝えたつもりだが、『我慢できず』と笑顔で花火をかかっている

楽しそう良かった………はあ

一花は言葉が出ないのかここに着いてから黙ったままだ

「アンタ 五月を放つてどっか行つちやたらしいじゃない 私と合流した時この子地図片手に半ベそだったわよ！」

「に 二乃その事は内緒って 幸太郎君違うんです！地図の見方が分からなかったとかではなく」

「悪い やっぱ説明おおざっぱ過ぎたな ごめんな五月 今度何か詫びするから」

「……………はい よろしくお願いします。」

「あと アンタに言う事あるわ おつかれ」

「どういたしまして 風太郎にも言っておけあいつがいなかったら厳

しかつたしな…。」

「もう言ったわよ　じゃそう言う事で……………ふん」

こちらも見つけるな否や

顔をも近づけ言いたい事を言えば、噛みつくような言い回しで俺に
劳いの言葉言い

さつさと行ってしまう

二乃も素直じゃないだけでちゃんとお礼は言える子だ

本人の前で言ったらまーた罵倒されるけど……………。

五月にも地図を回して目的を言ったのはいいけどそのまま一花と
行動を共にし

すっかり状況を聞くのを忘れていた

半ベそまでさせたんだそれなりのお礼はしてやらんな

俺の財布よもってくれ　中身を見るが今は戦力としてはあまり役
に立ちそうには無さそうだ

五月の後方既に線香花火をしている三玖を見つけた

髪型は何時もと同じく戻っていた

普段はあの髪型は中々見れないから少々名残しいとは思う

「三玖も今日はありがとな　助かった」

「うん　私は何もしてないよ　余計手間をかけたから」

「そんな事ねえよ……………　それで　これ」

今回特に　三玖には世話になったお礼を言えば三玖は首を横に振
る

そうでもないこいつは十分助けになった

あの人混みの中俺を見つけ　運んでくれたんだ

幾らお礼をしても足りないくらい

何が好きとか分からないけど　そのお礼も兼ねた品が入った袋を
手渡す

今朝方　準備をしている時に目に着いたそれを一花の帰りを待つ
間に買っておいた

『?』と首を傾げる

彼女はその場で中を確認し始める 大したものじゃない それは何処にでもある

普通の髪留めだ……………。

「お前に似合うと思ってさ どうだ？」

「……………コータロー」

「何だ」

「私この髪留め……大切にする」

「そうしてくれればありがたいな 着けてはくれないのか？」

「……………似合う？」

「ああ すぐえ似合ってる 可愛いじゃん」

「……………!!」

着けてみてはと催促してみれば

受け取った。それを左の分け目の方に着けてくれた

俺の目には狂いは無かった 劇的な変化はないだが

青の髪留めは三玖にとても似合っていた

可愛いと言うのはお世辞でも何でもない 素直にそう思ったからだ

「三玖来てください」

「うん……………」

五月は一花を見つけると早速準備を始め三玖もそのまま行ってしまった

何を言うのにもタイミングがある今は彼女をそっとして置こう

未だ困惑する一花を置いて状況は進んで行った

俺達の前に一花が立つようにし

それぞれ花火を手渡された

「みんな……………ごめん 私の勝手にこんなこになっちゃって……………本当にごめんね」

「そんなに謝らなくても」

「一花も事情があつたんだ 反省もしてんだ それにちゃんと一花を連れて来れなかった俺にも責任がある ごめんな」

「全くよ」

一花は俺達に頭を下げ自分の行動で全員に迷惑をかけたと謝罪をする

俺自身も二乃と約束をしそれに一花の事情を知ったのに直ぐに知らせなかった事を

連れて来れなかった事を詫びた

「なんで連絡くれなかったの そしてあんたは論外連絡できるもの持っていないし

一花 今回の原因の一端はあんたにあるわ あと目的地を言い忘れた私も悪い」

「私は自分の方向音痴に嫌気がさしました せつかく彼から地図も頂いたのに」

「私も今回は失敗ばかり少しは考えて動くべきだった」

「よくわかりませんが 私も悪かったという事で！屋台ばかり見てしまったので」

それぞれがそれぞれ今回起きた騒動自分が居たらなかった点

反省すべき場所を言い合っている

一花も二乃も三玖も四葉も五月も一人が全ての責任だとは言わなかった

誰しもが今回の事で自分のダメだったところが見えたと話す

「お母さんがよく言っていました 誰かの失敗も五人で乗り越えること 誰かの幸せは五人で分かち合おうと 喜びも 悲しみも 怒りも

慈しみも

私達全員で 五等分ですから」

五月の言葉と共に一花を加えた この場にいる全員での花火が開
始された

みんな笑い 楽しく 花火を満喫している

一方で俺はと言えば風太郎と二人近くの気に寄りかかってその光
景を目にしていた

ちつこい線香花火を男二人で眺めている らいはの方は疲れたの
かベンチに寝かせていると四葉が先ほど教えてくれた よつぽど今
日が楽しかったんだろう

うちだけだと限界がある だから妹が楽しめ勇也さんが楽できる
ように俺も頑張つて家庭教師のサポートを続けたいとな

「風太郎 電話かしてくれてありがとな 助かった」

「ああ お前もお疲れ……何で俺はここまでしてるんだろ」

「家庭教師だからだろ？」

「帰りたい………と思っただけでもう少しだけこの風景眺めてる」

「だな 今は帰るなんて無粋な事言えねえな」

「でも幸太郎と花火か………新鮮だな」

「野郎二人だがな………。」

借りた携帯を返し

家庭教師とは何かを語る

風太郎も何処か変わってきたと俺は思い始めて来た

以前のこいつならここまで付き合う事もなく帰宅しててもおかし
くない

『勉強だ』と口にしながら家でひたすらにノートに意識を集中する弟は容易
に想像出来る

けど風太郎は投げ出さず最後まで中野姉妹の花火の手伝いをして
くれた

一花の作り笑顔にもこいつなりに知っていた
それに偶にはこうやって風太郎と話すのも悪くねえと思う……。

手元にある花火の火が消えた頃に

俺は風太郎に一声かけ少しばかり休憩を取った

公園のベンチを探しそこに腰を下ろす

隣にはらいはも寝息を立て眠っているしここなら安全だろう

「……………今回は少しばかり疲れたかもな 色々とあり過ぎて なん
かあ」

少し先

座る俺の目線に楽しく遊ぶ姉妹の風景

家ではみんな自分が好きなように動き それぞれが自分の時間を
過ごしているけど

こうやってみんなが集めれば 昔のような景色が見える

あの頃とは少し変わったけど それでも変わらない何かがある
はあった

(零奈さん姉妹は元気ですよ きつとこれからも面倒は起きますけど
俺はアイツらを見守ります

助けます それが俺に出来る事ですから……………)

「……………すう」

—————

—————

———

「残りは五本」

「もうこれだけ？」

「やり足りないねー」

「最後はこれでしょー」

「これに決めた」

「これが一番好き」

「私はこれがいいです」

「これが楽しかったなー」

『セーの』

「あは珍しいね 私はこれでいいよ それは譲れないんでしょ？」

彼等が見守る中姉妹達は楽しい時間を過ごす

しかし何時までも続く事はなく

残された花火は五本 どれも見た目が違う別々のものだ

おのおのが思いを口にし 同時に好きな物を手に取った

同時のタイミングだ 一花と三玖の手が一本の花火に触れた

三女の表情を見て何かを察した一花はそれを妹に譲り

受け取った三玖はある少年の言葉を思い出し

嬉しそうな表情を滲ませる……………。

「一花？ その鈴は」

「ああ これ私の御守りかな ご利益はうーん これから出てくれる

と思う 三玖もいつの間にか髪留め お洒落だね」

「これは私の大切な宝物だから、大事なんだ」

「ふふ……………」

「どうしたの一花 笑って？」

「何でもないよー」

姉の手首かかる鈴は彼女に御守りだと話す

妹が付ける髪留めは彼女の宝物だと語る

今日起きた様々な出来事はきつと彼女の記憶にずっと残って行く

事だろう

二人の少年と共に過ごした 秋の夜の花火の思い出を…。

—————

「お礼まだ言ってなかったね 夢を応援してもらった分 私も君に協力しないかね 家族何でしょう」

自分で言うのもなんだけど 私は一筋縄じゃないから覚悟してよね」

「すう……すう」

「えっ……寝てるの またそのままの態勢で」

上杉幸太郎は眠っていた

彼女から言葉も今は耳を素通りしている

朝から今までずっと動きっぱなしで彼の体力も気力も限界だったのだ

何度か寝ないよう顔を叩いていたが、一花を待つ段階でひと眠りその後には花火をしている姉妹達を見て安心しきった彼も緊張の糸が解け

彼女達を見守るよう目を開けながら眠っていた

彼の姿に一瞬だが力が抜けた一花だが、すぐに笑みを浮かべ

少年の隣に腰をかけ自称『家族』と言い張った彼を自分の膝に寝かせた

何処か不思議なこの少年

クラスメイトは口々に一花に話した

『上杉幸太郎は危険』『上杉幸太郎は人を傷つける』『上杉幸太郎は厄介者』

「本当にそうなら……君は私の夢を応援なんてしないよね」

優しく語り掛けそつと撫でる

自分だけでは無く 妹達にも向き合う姿を彼女は何処かで見た事があった……

とても前 まだ母が生きていた時の頃……

今のようにな 誰かに膝枕をしたような記憶が彼女の脳裏を過ぎる

どうして彼を見てそれが一瞬思い出したのか、深くは考えない
今はこの少年を少しでもいい 見守ろう

「頑張ってたね……………ありがとう 今日はおやすみ コータローお兄ちゃん」

眠りにつく少年を少女は見つめる…。

チリンと鈴の音になる…

(……………幸太郎君……………一花)

安らぐ彼と微笑む少女をじっと見つめる五月の姿を彼女は気づく
事は無かった

彼からもらった鈴をぎゅっと握りチリンと静かに音が鳴る
……………。

第十八話 不良少年とメアドの行き先

「ふぁー……眠い」

昨日の今日で疲れが残る中 相も変わららず
学園へと登校中である 軽い眠気に襲われ目を擦る
体に来る風も少しばかり冷たいものだ 体は認識しており
季節10月の頭

すっかり秋だと街中ですれ違う人の服を見ていれば嫌でも分かる
こういう時に自分が普段から着用しているくつそ暑い制服が役立
つ

らいはも昨日の疲れか珍しく起きるのが遅れ 俺や風太郎も軒を
かいて寝ていた

『起きろー』妹の声と朝食の匂いで目を覚まし

急いで支度をし 風太郎は先に行くと言い荷物片手に家を出た…。
らいはも日直があると言うので、必然的に俺が最後に家を出てい
た

寝坊とは言え遅刻する程でもない 今日の俺は何処か余裕を持っ
ている

そう言えば聞こえはいいが実際は、最近の疲れからただ単に走る事
をやめているだけだ

今日の夜にもシフトがある体を壊れない程度に無理をしないと
色々と面倒である…。

そんな年中目つきの悪さを指摘される俺の前に昨日の花火で騒動
の発端になった

彼女中野一花が手を振っている

周りの人は一花に見惚れているのか 歩きながらも視線を逸らさ
ない

もう少しで良い 自分が人の目を惹きつけると理解してほしいも
んだな

「やっ おっはー 欠伸すると幸せ逃げるって言うよ」

「うつせー 一花 てか欠伸じゃなくてため息だ まあ あれだ おはようさん」

欠伸で幸せが逃げるなら 俺の幸せはとっくに底辺を超えているため息は人並程度と思っているし

人の幸せに対する価値観でそれぞれだ。

俺は俺で今を満足してんだ……………。

何処か面倒なスイッチが入ったと思い 一花は苦笑いしている

良く見ればこいつ周りの人と同じく冬物に変わっている事に気づいた

『感想は?』と気づいたなら述べるべきとこちらをじろりと見る彼女に適当な理由を言っておく

「温かそうだな」

「それだけ? 浴衣とかお洒落してる時とかはコートロー君まじな言い方するでしょ?」

「冬服にこだわり何てねえよ……………てか制服に関してはどう褒めろって言うんだ」

「えーっと スカートの裾が変わったねとか」

「お前も大概ひどい感想をお持ちだな それでなんだ朝から お前がいるの珍しいな」

「うん ここで待てばコートロー君と会えるかと思ってさ近く何だし一緒に登校しようかと思って」

訳を聞けばただ単に待っていたと言う彼女

さつきも思っただけど目立つんだし 人の目を気にするべきだろう

あの一件で俺が家にはいると言ったにも関わらず三玖は『お風呂』と話していたが

中野姉妹とはあまりそう言った意味では一目を気にしないのだろうか?

まあ 三玖の場合は家だったという理由がつののだけど

「お前はもう少し 自分が目立つと自覚しような……………。俺まで視線くんだから」

「昨日 あんな事して あんな事言った 幸太郎くんが今更気にする

の？」

「余計な事言うのは その口かぁ コラぁ！ あぁ？」

彼女の口にした言葉で聞き耳を立てていたであろう

男どもが一斉にこちらを見てくる 軽く睨めばこの外見だ学園以外でもそれなりに有効な効果を出してくれる

『ひい』と声を上げ数人がその場から去って行く

そこまでの効果は狙ったつもりはねえけどな

一花の頬を軽く抓ろうと思ったがこれから商売で使う顔で傷にでもなってみろ

今後に支障が出てしまおうし夢に向かう為に頑張るこいつにそんな事出来ない

軽く頭をポンとだけ叩くだけで済ませた。

「暴力だー」

「うっせー 余計な事言うからだ んで 一花……………二乃達には言えたのか？」

「昨日あの後みんなに打ち明けたんだ みんなびつくりしたなー」

「受け入れてもらえたようで安心だ」

「うん スッキリした！」

半年間ずっと彼女はその事実を隠し

一人ずつと誰に言わず頑張ってきた 昨日の一件で姉妹の前でそれが露見する事は無かったが

火花を見れなかった理由を話さねえと一花本人も目覚めは悪いだろうし

バレてないとは言え『女優』と言う発言を三玖には聞かれていた ついでに言えば四葉辺りにも聞かれていただろう

その状態で隠し続けるのは、難しいし

何より彼女はもう自分の道と向き合うと言った 隠す必要ないんだ。

姉妹全員が驚きはするが、誰もそれを否定せず応援

三玖なんてサインを求めて来た嬉しそうに話す一花を見ていれ

ば俺も不思議と笑顔が出ている

「コータロー君も笑うんだね」

「嬉しいからな……………」

「嬉しいの？私の夢が」

「昨日も言ったろ 俺は夢や道を否定はしない 俺はそれを応援するし背中も押す

だれがお前の夢を否定しても俺は応援を続ける……………」

「あつはは……………あのね 改めて言われると照れるんだけど」

「理由聞いたのはお前だろ 俺も恥ずかしいんだ お相子だ」

どんな理由であれ夢や道を持つ事は良い事だ

努力しそれが報われる事は自然である

一花が『道・夢』と言った時に俺は決めた『こいつの為に出来る事をしよう』と

俺に出来る事なら彼女には協力してあげたい

ただあくまでもこれは俺個人の意見だ 同じく中野姉妹に教える

本当の家庭教師である 上杉風太郎の意見は違った

昨日みんなと解散後 帰り道で俺は風太郎にも一花のやりたい事を話した

この事は隠しておく訳にはいかなかった

一花に許可を取らなかつた事は悪いと思っている。

「風太郎に話した」

「うん……………それでフータロー君はなんだって」

『俺は反対だ 勉強をするべきだ』となでもな あいつが本気でそう思ってるなら俺を止めただろう

それにあいつは、そこまで非情でもねえよ って何だその顔は」

一花は風太郎に話した事を怒りはせずどうという反応をして彼はどう思ったのか

聞きたいと話す

俺はあいつの話した事あいつが思っているであろう事を一花に伝える

ジーっと見る視線を感じれば一花が関心したような表情で俺の顔

に目線を寄越していた

「こつちの声を聞き『ごめんごめん』と言い

彼女は俺を見ていた理由を続けて話す

「コータロー君ってちゃんとお兄さんしてるんだなって思ってたさ 二乃が彼を寝かせた時もコータロー君は背負って帰って行ったでしょ？ 五月ちゃんが言うには起こさないようにしてたって言うし：。」

「ちゃんとお兄さんしてるか……………まあそうだろうな 俺に取って風太郎とらいは掛け替えのない弟と妹だ 長男である俺はアイツらの事を守ってやらんといけねえしな あいつらの前ではちゃんと兄貴として向き合いたいんだ」

「ふふ……………何となくわかったかも。それに私も長女だし 長男であるコータロー君とは似てるのかもね… お兄ちゃん!!なんてね」
「うう……………頼むそれを人前で言うな あの発言却下するつもりはねえけど 気恥ずかしさは俺にもあるんだぜ」

あの後も何度か一花には『お兄ちゃん』とからかわれてばかりだ
今もニヤリとし何時また言ってくるかわかんねえ

その発言自体を俺は取り消すつもりはないと言うのも本音だ

試しに風太郎にも聞いたがあいつにとっての中野姉妹は

『協力関係でパートナー』だと言ってきた

俺も大概だが弟も結構な発言が強力なもんだ

それも帰り際に俺に言う様に発言したのだ 他の人から色々変な目で見られ

誤解も招いたのは言うまでもない。

一花もその言葉を聞き『パートナーか……………やっぱり兄弟だね君達は』と笑いを堪えながら言ってくる始末だ

そう言った事で兄弟認定するのだけは本当に勘弁してほしい……………。

暫く歩けば学園も見え始めてくる

その時だ唐突に一花が俺にスマホを差し出してきたのだ

一体なんの冗談だ 文明の利器を持たない俺への挑戦か

スマホくらい使えっからな？

「違う違う これからコータロー君達に協力するんだし 私も留年しない程度には勉強したいと思ってるね。放課後連絡するから メアド交換しよう」

「おう 風太郎に聞いてやる 紙を貸せ」

「フータロー君もだけど コータロー君のも教えてよ」

「だーから俺は持ってねえって言ってるんだろが!? お前も俺の鞆の中見たんだから分かんדרろう」

「あれ 本当だったの? 家に置いてきたとかだと思ってるんだけど」

「だれが んなことすつか 携帯なんざ持ってねえと意味ねえーだろうがよ 俺のは諦める 風太郎には俺から伝えるから」

きよとんとしての辺り本当に俺が携帯やスマホを持ってない事を改めて認識したとみえる

あの日五月に言われて鞆や俺のポケットまで探してこいつ驚いていたのに

あれもその場の演技なのか?

それはそれで良い演技力を持つてる こいつの将来は安泰であると俺はうんうんと一人で納得しているが

何と言うか一花本人は納得がいかないと言った表情でこつちを見続ける

その後スマホをタップし何かを操作し

俺の前へと体を乗り出したと思えば以前にも似た光景を俺は目にする

スマホの画面を俺に見せてくるその姿何時かの三玖のようだ

ここまで悠長に構えているが、スマホに写っているものは三玖の武田信玄とは比べ物にならない程俺にダメージの大きなものだった

それは昨日の俺のバイト姿ではなく………一花に膝枕されて寝息を立てているであろう目つきの悪い俺の姿だ

「おい おめえ何だこれは?」

「ふっふー 昨日可愛い寝顔があつてねーこれは撮らないと指が勝手

に動いたんだよねー」

「……………はあ 要求は何だ 仕事の応援はするって言ってるんだろ
う」

「違うよー これ他の人にはちよーっと見られたくないよね？」

「これはうざい……………」

「俺は周りの事は気にしねえって言ってんだろう」

「でも 流石に連絡手段ないとコータロー君も大変でしょ」

「風太郎でいいんじゃない」

「コータロー君は私の応援してくれるんでしょ？ ならコータロー君
だけに言いたい事とか口裏合わせ要因がいればと」

「こういう時は自分を偽らねえなお前、なーにが口裏要因だ」

学園での中野姉妹は、俺が見る限りそれなりに友人関係が広い

だからふとした事で先ほどの写真が何処かに流失する恐れがある
だろう

それで俺がどうと言う訳でもない 最初は驚いたが良く見ればタ
オルで髪も見えねえんだし

今更誰にどう思われようが、0から何を掛けようが0だ焦るのも馬
鹿らしいと思っではいるが……………。

俺はどうでもいい その写真俺が写るそれを一花が持っている
周りで言われる事だけ嫌だ

これからこいつは夢に向かって行くんだその障害に俺はなるつ
もりは無い

ただ 今更捨てたあれをどうしようとは思えない未練はない
し

そんな態度を続けていけば一花の表情はどんどん険しくなる

険悪なもんは避けてえな……………。

「まあ あれだ昨日、五月にも帰り際言われたんだ 今度俺が接する
中で無いのは不便ではってな」

「五月ちゃんがね……………」

「少しは考えてもいいかもなって」

「五月ちゃんの言う事なら君は素直に聞くんだね コータロー君」

「はあ？別にそう言う訳じゃねえよ 変に勘繰るなよ まあもう一度持つ事くらいは考えてもいいぜ」

「それならお姉さんも安心かな あと条件として姉妹全員の聞くように フータロー君も含めてだからよろしくね」

「全く面倒事で……風太郎にはそれとなく伝えておく」

「Okじゃ 校門までもう少し行くよコータロー君！」

「走って怪我すんなよー」

何処かから元気にも見えるが一度はそのまま走って行く

俺も追う様に走り出す周りで見てくる生徒はまた『上杉が』といらん事いうが

気にしないでおこう そんなの今更だしな

問題と言えば携帯の確保だ………。

(もう一度俺が携帯を持つ事になるかもしれねえとはな………。)

第十九話 不良少年と四女の行動

「アドレス交換！ 大賛成ですよ！ あっその前にこれ終わらせちゃいますね」

「一応聞くが何やってんだ？」

「千羽鶴です！ 友達の友達が入院したらしくて！」

「勉強しろ！」

「図書室に集まり勉強会が開始されると……………」。

俺も風太郎も思っていたが何時もやる気を出してはそれが明後日の方向へと飛ばす四葉さん 今日変わらず全速力だ

渡されたプリントでもなく 風太郎がまとめた問題集でもない
彼女が力を注いでいるのは、何処かの誰かの為の千羽鶴作りだ

終わらせますの前に何も始まってすらいないという何とも四葉らしいと言えづらい状況だ

頼まれてしまったからには引き受けるのが、彼女中野四葉だ

元気が溢れるとは彼女の為の言葉だと俺は最近辞書を引くたびに
そう思う事になっている

人の為に出来るその姿勢は俺も大賛成だ 素直に四葉に頑張った
と言ってあげたい

ただその頑張りを勉強の方にも向ければこいつは化けると俺は
考えている

「風太郎と俺で残り半分やっか」

「仕方ないな」

(やってあげるんだ)

彼女から数枚紙を預かり俺と風太郎もそれに手を貸す

こういった事はこしばらくやってない

四葉のやっている姿を参考に俺は手を動かしている

「っ……………」

「お兄さん 紙落ちましたよ」

「すまんすまん」

紙を折るところか掴もうとする指に力が入らずそのままするつと

落ちてしまった

昨日の疲れがまだ残ってるのだろう

今朝だって寝坊しかけたんだ 蓄積されている疲れは俺が思っているより多いものかもしれない

隣でひたすら鶴を折る風太郎は何でか物凄く手慣れている

何か悔しいな……………。

こいつには負けまいと俺もスピードを上げようとしていた矢先

何処かの教諭が四葉に声をかけ何やら話をしている

何度か頷くとその男性教諭は、後ろの本棚付近に置かれたプリントの山を俺達の座るテーブルに乗せるとやり切った感のある表情で去って行く

どうやら俺達が鶴を作ってる間に四葉がまた何か頼まれ事をしていたようで

聞かされれば二つ返事とはまさにこれ 気づけば鶴どころの話ではない

隣に座る風太郎から不機嫌なオーラがふつふつと溢れ出ており

一花もそれには苦笑いと言う状況だ

「お兄さん 私すでに5枚作りましたよ」

「俺は3枚だ!」

「お前も張り合うな」

少々俺も悪乗りが過ぎたか叱られちゃった

一方四葉には焦りの表情すらもなく鶴を折り続けながらも渡されたプリントをきちんと配りますと言いつつ切っている程だ 何と言うかここまで来ると凄いしか言えない

このまま放ってはおけばどんどん物や頼み事でここが溢れるのんじゃないかねーか?

見て来た限りだが、四葉は断ると言事を知らんらしい

俺の考えが表情に出てるのか

お前が言うなと 三玖や一花に風太郎まで俺に視線を向けている
「なんだよ 顔に何かついてるか」

「目と鼻と口だ 幸太郎」

「奇遇だな お前も俺と同じのついてるぞ」

「微笑ましいねえー」

「良いから一花もやっててくれ」

「私はうーん 見てるって事をやってるよー」

「お前なあ いるならやれよ?」

一花も合流はしているが、全くと言っていい程手を動かさない

こちらを見てはニヤリと笑ったり手元でスマホいじったりと

こつちに様子を見に来てるだけだ……………。

一度も来ない二乃と比べたらここに顔を出すだけマシと言える

ただ是非とも目の前に置いてあるプリントだけでも書いて貰え

ねえーかな?

「?」

「?じゃねーよ 学校いる間だけで良いからやってくれ!」

「はー コータローくんもフータローくんみたいな事言うんだね 悲

しいな でもまあ やりますよ」

嫌々やらせるのは俺の主義に反するが、ここにいるという事は少な

からず彼女もやると言う

意志は持っているという事だ、今だって言えばプリント相手に格闘

を開始

ノートに悪戦苦闘しながらも教科書を頼りに少しづつだが書く速

度が上がって来いるようにも見える俺の視線に気づけばチラツとス

マホ画面を見せてくる

(こいつは懲りねーな)

今持っていないもんをどうしろと言うんだ?

冒頭でのやり取りだ 風太郎には既に彼女達とアドレスの交換の

やり取りをするよう言ってはあ

俺と違い何か弱みがある訳でもない為乗り気ではなかったが

昨日の二乃とのやり取りを思い出せた

それは不測の事態での連絡先の有無である

携帯関連を持ってない俺は論外だが、風太郎は所持している

ならば家庭教師をするうえで彼女達の連絡先知るべきだ

『過度な事は必要ない』とはこいつの言葉だ

少しでも姉妹との関係を良好にしていくなにはこういった交換は必須だと

途中からごり押しで話を進めた、

多少なりと効果は出たのか、一花や三玖の連絡先は入手出来ていた

「コータローにも私のメアドを教える」

「まあ 教えてもらっても返せる手段を俺は持つてすらいねえがな
……でもありがとよ」

「ううん もしコータローが携帯を持ったら登録しておいて」

「はいよー……それとな三玖 それ着けてきてくれたんだな」

「これは私の大事なものだから。」

三玖は天使なのかもしれないねえな

聞けば気恥ずかしそうに顔を背けてしまうが

送った髪留めを翌日にもしてくれていた

加え大事な物とも話している送った本人としては凄く嬉しい事である

勉強にも自発的に参加してくれる 分からなければこちらに質問も投げかける

難点と言えば日本史以外は極端にやる気が低くなることだろうな

そこは俺や風太郎でカバーしていけば良いだろう

ッ！突然の激痛だ

下を覗けば誰かの足が俺の足を踏んでいる

勿論方向から犯人の目星はつく

「コータローくん私のは知りたくないのかなー」

「おめえのは朝見たよ つかどけてくれ」

「そうなんだ 教える手間省けたからいいかな」

「紙に書いてあっから………まあ 本体無ければただの紙切れだけ
どな」

「そう言う事言うと お姉さん勉強やる気でないなー」

「検討させていただきますつつつ」

「素直でよろしい」

(三玖良かったね 彼もしかしたら買うかもよ)

(うん コータローと連絡できる)

「どうしたー 手が止まってるぞ」

「何でもないでーす それで二乃と五月ちゃんのは良いの 二人とも？」

「ああ…うん、」

出たよ最終関門だ

五月はそれとなく頼めば教えてくれる可能性はある

ただし 二乃は難易度が一気に上がって行く

正直言えば、あいつからどうやって聞けば良いのか、考えてはいるが

どれも断られる未来しか頭に浮かばない

本音を聞かされた分厄介な類だ

まあ なるようになるとしか言ねえ

訂正する所はまだあった……。

絶賛千羽鶴量産態勢にある四葉だ

このウサギリボンのメアドを俺はまだ聞けてない

先程この話題には乗り気ではあるが、俺や風太郎が二人に聞く際も本人からは動こうとしない

もしかして交換する気ははなっからないのか？

「そう言えば 二人を私は見ましたよ 今のうちに聞きに行きましよう」

「なんでお前も行くんだよ！ってか四葉お前のアドレスは…」

「早くしないと帰っちゃいますよ！」

「やっぱ勉強する気ないだろ！」

「もう今はこれで良いだろう風太郎……」

「お前は諦めるな！」

四葉の行動を制服するのは難しいとしか言えない…。

下手にコントロールしようとすればまた何か頼まれ事でもして来

てそれこそ勉強の時間は無くなっていく

風太郎には悪いが、今は四葉のペースに合わせて動こう

「ちよつくら 二人の所に行くわ おい 四葉案内頼む」

「お兄さん 了解しました!」

「二人とも勉強しててくれ!」

はいはいと手をふる一花にこくりと頷く三玖を見て

風太郎も俺と四葉についてくる

「四葉から聞きだせばいいのだが、案内したいと言うんだ素直に従った方がいい

――

――

――

「お断りよ お ことわり」

「模範的な回答だぜ…」

そう言われる事は知っていた

ランチをしている二人の元へと四葉の案内で来たは良いが、二乃からの返事は即答だ

露骨に嫌な顔をされている

隣の弟も想定してた事なんだろうな表情で分かる

風太郎もここまで何も考え無しで来た訳じゃない最終手段は考えていると話した

「つか あんたは 現代人のなのに携帯もないじゃん? 何で聞いてくるわけ…アドレスって別に電話番号じゃないんだけど わかるよね?」

「んなも知ってるわ!」

電話番号とメールアドレスが違うってくらい知ってるし

俺が携帯持ってた頃もきちんと使えた

そこまで脳内は過去の人間じゃねえよ

二乃からしたら俺は、いまだ現代の人間と言う呼称ですらないらしい

一応違いを教えてくれるだけの優しきはまだあるようだ

と言うより困惑してるように話している

「けど 幸太郎君が聞いて来るのは意外です はつまさか!」

「まあ…お前に言われた訳じゃねえけど 考えるだけは良いかなってよ…なんだその目は」

そこまで可笑しなことを言ったか?

二乃は信じられないと言いたげな顔でこつちを見ている

五月は何処かよそよそしいが食は進んでいる

(ん?)

食堂でのやり取りだ やはり目立つのだろうな

周りの連中がこそこそと噂話を始めている

中野姉妹とは今では有名な人間となりつつある様で

そのうち二人からアドレスを聞きだそうとする俺は異端に見えるのだろう

こういった光景も半年近く見ていれば慣れてくるな……………。

何かがすり減るがそれも今更だ

「幸太郎君 何時頃とか予定はあるんですか」

「まあ追々な 早めに見ておこうかは思ってる」

「そうですか…了解しました」

「そうか…何を了解したかは知んねえけどな」

「でも アンタが買うとかうける」

「言いたいだけ言ってくれ」

「アンタが新しい機種とか絶対にお店の中で混乱するから!」

「はあ? 俺はそこまで老化進んでねえよ二乃さん」

「どうかしらねー」

今どきの携帯やスマホがどれだけ進化してるか知らんけど どうせ何処まで大した進歩はしてないだろう

風太郎ですら扱えるんだ 俺だって今どきのは扱える自信はある
二乃と変わらぬやり取りをしていると横を見れば

風太郎はらいはの番号とアドレスを盾に五月から聞きだす事に成
功していた

卑劣なやろうだ 身内の顔が見て見たいな

「あんたが兄でしょ つか身内を売るなんて卑怯よ！」

「何だ二乃は教えてくれないのか残念だな ではお前抜きで話すとし
よう俺達と四人で内緒の話をな」

「うわ…」

上杉風太郎 これがお前の最終手段か、ひどいと言う感想しかでな
い

何時も思うがこう言った行動をする際の弟は容赦と言うもんが
ねえな

流星に効いたのか、苦虫を噛んだ如くと言った顔で肩を揺らす二乃
は、手帳を提示するよう風太郎に言い 彼はそれを手渡す

手帳が良いと俺も関心させられる

俺はと言えば、二乃からも五月からも聞けず仕舞いだ

先程の二人ほど簡単に行くとは思ってなかったが、まさか収穫なし
とはな…。

「何だ 二乃」

「アンタも生徒手帳出さないよ」

「何で？」

「馬鹿なのアタシの書くからに決まってるでしょ」

「ああ………悪いな はいよ」

「あんたの手帳やけに綺麗ね新品？」

「前の奴は無くしたからな…。」

ふとした疑問なんだろう

風太郎の持っている手帳よりも綺麗だったため気になったと話す
ちよとした事で無くしちまうんもんだしな

しかし難攻不落と思っていたが二乃は何だかんだ言いつつ優しい
子だな

手帳に書き写す彼女を見ているとやはり昔と変わってないのだと思えてくる

「これで全員揃いましたね」

「あと一人いるだろ」

「えっ？一花 三玖 五月 二乃 あー！！私です！」

「お前らしいな…。」

図書室から今まで共にアドレス交換の旅をして来たが

四葉は自分を勘定に入れる事をすっかり忘れいたようだ

千羽鶴からプリントの配布 ここまで案内と四葉は四葉で動いていたんだし忘れんのも

仕方ねえだろうな…。

わわわと焦る顔を見ると果たして忘れていただけなのかアホなのか怪しくもある

五月も入力が終わったのようで風太郎へ携帯を返す

彼女が持っているスマホなんだが良く見れば俺が渡した鈴がストラップ代わりに付けてあった

「五月 これなんだが…。」

「はい 幸太郎君がせっかく渡してくれたので この鈴の音が私を見つけてくれたんです大切にしたいんです…。」

「そうか 大事にしてくれる人に渡ったんだそいつも喜んでるだろう」

付けてある鈴を大事そうに見つめる彼女を見ていると

こいつに渡して良かったと思えるしそれに五月が言う様にこいつのお陰で見つける事が出来た

縁起が良いものは傍に持つておきたいしな

五月は大事そうにしてくれているが、一花の方は身に着けている姿を見る事は無かった

流星に無くしたって事は無さそうだとは思うけどな

「一花ですか？ 彼女なら財布に着けてましたよ 私と同じだと間違ってしまうからと言ってました」

「そうだったのか…財布とか見せびらかすもんじゃないしな 大切に

してんならいいさ」

一花は目に見れる範囲では気づけないだけで所持はしていると言った

五月と同じだと咄嗟にどつとがどつちと区別もつきにくいと言うしな

小学生なら鞆にでも付けるんだが、もうこいつらも小学生じゃねえしな…。

手帳にメアドや番号を書き写し二乃を見ていればそれも領ける

五月はスマホに付けられた鈴を鳴らしニツコリとしてしており

ちらつと二乃は視線をそっちに向けるどうやらこいつはこれの出所を聞いては無いと言った感じだ

「五月 あんたそれ昨日から持つてるけど何？祭りで買ったの 一花も持ってたけど」

「えっああー これは」

「鈴の音色は厄除けや勉強運向上の効果もあるんだぞ 五月は自分なりに勉強してんだ少しでもこういう効果を期待してんだろう」

「へえー アンタが珍しいわね 一花は昨日のオーディションの為にしら」

「んじやね？ それに音色は案外良いだろ 心が落ち着くし」

「あんたのその顔で 心が落ち着くとか似合わないわね」

「余計なお世話だー」

姉妹でも知られたくない事があるそれを一花で学んだ

五月が言っただけなんだし 俺も言いふらす必要はねえだろう

二乃もらしくないと言いつつも『偶には良いんじゃない』とあとに付け加えた

男から送られた物とか言えば姉妹大好きなこいつからしたらどんな気持ちなのか用意に想像出来ちまう

鈴の効果を適当な理由で誤魔化した但实际上に効果があるのは、持つてる人間を判別できる事ってくらいだろうと五月が持っている鈴をじーっと眺める

二乃も難航しているようだし暫くここで待つのもありだと離れた

場所に座ろうかと思えば

五月が自分の隣の席をぼんぼんと叩いている

「だから おめえは母親かってんだ」

「幸太郎くんは今日はお昼取ってませんよね？」

「何で知ってたんだよ」

「昼頃には上杉君と何処かに行っていましたし その後は保健室に居ましたから」

「把握してんなよ 少々お前の考えを俺は改める必要があると思て来たぞ」

「ですから、少しでもお腹にいれるべきです」

「携帯の事考えると暫くは無駄使いはパスだな 適当に水分取れば行けっから」

「それでは体が持ちませんよ！」

「まあ 落ち着け周りの目がある クールダウンしろ」

「うう……………」

ここまで良く他人の為に出来ると驚かされる

四葉と違い五月は普段見る限りは、断れる事は断っているし

自分の許容範囲と言うもんをこいつなり分かってんだと思う

だけど何故か俺に余計に世話を焼いてくる

ここ暫く考えているが、俺は五月に世話を焼かれる理由がない

俺は姉妹を妹のように思っており 学園でも自発的話す努力はしてる

だが五月はどうなのか？ 学園であった際も俺の事は覚えてない様子で

今もずっとそれが続いている 不良少年を更生させる優しい女の子と言えば聞こえはいいかも

知れねえけどそんな感じとは実際やられてる側の俺は思っていない

たまには注意をするがそれだけだ 更生させようとする人間の行動ではない

今更言った所でこいつがそれを止めるとは思えねえけど俺に向けてそれを風太郎の勉強へ向けて欲しいというのが俺の本音だ

ただこいつには不本意と言え騙す形で近づいたんだ 人の事は言えん

しゅんと拗ねながらも口に物を運ぶ

もぐもぐとメロンパンを頬張る姿は何処か小動物を思い描かせる

五月との何時ものやり取りをしている時

四葉の方から何やら音楽が聞こえ そっちの方を向けば

スマホの画面を確認する彼女は、何かを思い出したと言うような表情でこちらを見ている

その表情を俺と風太郎は今日嫌と言う程見て来たし

何を考えているのか容易に想像出来る…つまりはあれだ

頼まれ事なんだろうなと風太郎には悪いが俺は自然と折れている

やる気がある分四葉に勉強しろとはあまり強く言えないのが最近の俺だ

一礼し その場を去ろうとする彼女を追いかけようと走って行く弟を見て

俺も他人事ではないとそっちに視線を送り

中野四葉の真意を知る為にも俺もまた彼女の後を追う事にした

「んじゃ そう言う事で」

「幸太郎くん！ あの私まだ 教えてませんよ！ 私が最後と言うのですか…」

「って 二枚とも書き終わったんだけど…いないし」

—————

—————

———

「…何してんだ」

「隠れる見つかる」

「へいへい」

二人を追えば廊下の角で風太郎が身を隠しちらちらと覗いている
俺も身を乗り出し顔を出せば、四葉がにこやかに会話をしていた
相手の顔は部屋の中に入ってるから分かんねえが、ここは部室等が
並ぶ建物だ

何処かの部活から呼ばれているんだろう

「バスケ部だ」

「ああ……………例の怪我してるやつが出たって言う」

数ヶ月前に行った勉強の際に

二乃がこちらを妨害するために画策した四葉排除作戦の一つだ

勉強意欲がある四葉に変な罪悪感を抱かせる訳にいかないと彼女
に行くよう俺は促し

『やるなら半端はなしだ』と言ってしまった張本人だ

あれ以降も関係は続いているようで時折勉強を抜け出していたり参
加が出来ない理由はこれなのだろう

まあ四葉の事だ他の部にも力を貸してんだろさ

それ程四葉は人を放ってはおけないと言う 善人と言う位置付け
られる立ち位置立っている

盗み見る事は良い事ではなく勉強にも参加してくれる四葉には悪
いと思う…。だが俺は、あいつの真意や覚悟にも似た気持ちを知りた
い

こうやって誰かを助け続けるなら俺は、それを止める事はしない

自分に出来る範囲で他の姉妹と同じくカバーもする

しかし 四葉の成績を上げる必要も俺にはある

アイツが本当に勉強に取り組みたいのかそれともただ来ているの
か確かめたい…。

暫く監視をしていれば『入部の件考えてくれた?』と女子の声が聞
こえる

どうやらバスケ部の主将のようであるの一件以来 四葉を何とか部
に入れたい

そしてその才能を生かしてほしいと語る

(才能か……………)

(幸太郎?)

その才能があるなら応援するべきだ

何時ものように力になる声をかけようと頭が勝手に判断している

それは軽率だと言え自然と足は止まる

バスケ部と話す四葉は笑顔を崩さないが、スカウトの事を聞かされた時に

顔色を少し変え ちよつとばかり間を開けた後に口を開く

『入ります』と言えば確実に風太郎は止めに動くだろう

でもそれをさせる訳には行かないし する必要もねえと何処か確信めいた物を覚えた

「はい 誘ってもらえて嬉しいです でもごめんなさいお断りさせていただきます」

彼女はバスケ部の勧誘を断り

四葉は頭を下げる 隣にいる風太郎も驚いた表情でそれを見守り続ける

話はまだ終わっておらず顔をあげると言葉を続ける

「バスケ部の皆さんが大変なのは重々承知の上ですが 放課後大切な約束があるんです

も もちろん試合の助っ人ならいつでもO?ですので……!」
「そっかなら仕方ないね せつかくの才能がもつたいない気もするけど」

バスケ部の言葉は最もだ

四葉の運動している姿は時折見かけるが、それは下手な部員よりも戦力になる

誰よりも早く 誰よりも動く そんな才能と能力を彼女は持っている

昔からだ四葉は姉妹の中でも一番に運動を得意としていた

五つ子だから平等だとかつての二乃は話したでも他人目から見ても

運動のセンスは確かにあった……………。

全員それぞれ何かしらを得意とするそれは長所であり短所になってしまう

「三玖と話しそれを俺は知る事になった

俺が動かなかつた理由はそこだ………三玖や一花と同じように考えていた

けど 四葉はそれをやりたい事とは話していないのだ

あいつはただ単にそれを誰かの為に使っているに過ぎない

続けはするが、それが本当にやるべき事ではないと彼女も考えていてくれるのだ

「才能がない 私を応援してくれる人がいるんです」

その言葉は俺の隣にいる風太郎には良く刺さっている

効果はてきめんと感じた感じだ 断った姿を見てからずっと何かを考えている

嬉しいような 恥ずかしいような何処か困惑している様子

自分の行動は無駄じゃないとこいつも分かったんだろうさ

「ぬわ！ 上杉さんにお兄さん なぜここに………」

「ああ？逃げたウサギを5羽探しにな」

「う うさぎですか！ 何故学校にうさぎが………お手伝いしますよ」

「まあ 二羽は捕まえたし お前がくれば三羽」

「えっえ あのどういう うさぎ？」

「四葉 お前の用事は終わったのか？ 今日もしごいてやるから覚悟しろよ」

「はいっ 覚悟しました！ そしてうさぎも見つけます」

「幸太郎の冗談は気にするな」

5匹の兎とは俺も咄嗟だが適当な理由で誤魔化したもんだな

四葉でなければ信用しねえよこんな言い訳

風太郎の言葉で四葉も表情に力を入れ右手で敬礼している

その後は図書室に戻り授業を受け俺と風太郎の学校での一日は終

わって行った

5人中3人だが、当初に比べれば大きすぎる進歩だ……。
なにか忘れてる気がするけど思い出せないって事は大して重要な事ではないんだろう

――

――

――

「って事が今日あってねー」

「だから遅かったんだ」

「それに四葉がウサギって言ってた意味も分かったかも 5匹の兎つてコータローくんも中々だね」

「ええー 一花は兎の事わかるんですか」

「さあーどうかな それで五月ちゃんはどうしたの？ 帰ってからずっとテンション低いけど」

「幸太郎君が……。私のアドレスと番号だけ聞いてくれませんか」

中野姉妹の夕食風景

それぞれが今日起きた出来事を楽しそうに話す

四葉は自分が部活には入らないと決め断った事も伝えた

一花は元から心配はしていなかったのかにこやかにそれを聞き

同じく今日妹が口にした『兎が5匹逃げてるんです』の意味を理解したのかふふと笑っている

楽しく話し 順調に学園で生活出来ていると実感する中で

ふと自分の前から見て右に座る五月の様子が帰宅の時からおかしい事に気づき

声をかける あまり食も進まず 雰囲気も重い…………。

上杉兄弟とのやり取りの中 風太郎の連絡先と本命のらいはの連絡先も無事に手に入れたと言うが

彼等の兄である あの少年一人だけ文明の利器を使用しない彼には教える事が出来ず

後から聞いてくれる事もなかったと思いだすだけで、ため息をついてしまう

発端は自分だった事を思いだした一花はフォローを入れ

妹を落ち着かせる

「コータローくんは楽しみは最後にとっておくタイプかも知れないじゃん」

「……………!!まさかそうなんですか一花 いえ別に何でもないですが、私だけ教えてないのはおかしいと 言うだけで別にどうこうとは無く あの私は何を言ってるんでしようか」

「あつははは 複雑な年ごろだからね まあゆっくり考えれば良いよ

三玖も焦らずね」

「なんで私が……………私は別にコータローの事は言っていないから」

「ええー 何の話ですか! 私もまぜてよ」

一花は知っている彼がそんな事するわけではない

ただ単に聞くタイミングを逃し 彼の事だそのまま忘れてしまったのだろう

自分の事にはとことん無頓着で彼女が、言わなければ自発的姉妹から聞く事もしなかっただろう

暫く話す中一人会話に混ざらず 手元に二枚の生徒手帳を持つ少女がいた。

二乃もまたタイミングを逃し 風太郎と幸太郎の手帳を持ったままだった

じーつと手帳裏の証明写真に写る目つきの悪い二人を見て如何するべきか一人考えを巡らせる

とその時だ 二乃を除いた、全員のスマホが鳴り出した

電話ではなく メールだったようで音が鳴ればすぐに止む

彼女達は中身を確認するが、顔色が一気に変わっていた

文面にはずっしりと問題が本文の文字数の限界まで書かれていた
これが彼からの初メールだ

「やっぱり 断った方が良かったね」

四葉の言葉に四人は頷くのみだ

第二十話 不良少年と二つの写真

「憂鬱だ」

中間試験のお知らせと記載された紙を見て

表情を曇らせる眉間にはしわを寄せ

こめかみを軽く指で押さえる

風太郎の後ろから顔を出すらしいは普段のこいつから出る言葉ではない為

少々驚いている

まあ 自他ともに認める勉強馬鹿だ 勉強がバカとは矛盾とこいつの言葉だが

そういった人間がテストを知らせる紙を見て弱音のような発言をするのはとても珍しいものである

「へー自信過剰のお兄ちゃんがテストを嫌がるなんて珍しいね」

「俺じゃない……あいつらだ……試験がある事すら知らない可能性すらある」

可愛い妹だが時折毒つく事もある

風太郎は軽くスルーし三度用紙を見るが内容が変わることは無い

ここ数ヶ月挑んではいるが、勉強できたのは僅かだ

今日は一花 三玖 四葉が協力して勉強に勤しんでいたが、此処から数週間で全員の成績をある程度まで上げないといけないと思うと彼でなくても深いため息は出てしまう

ただ それを夕食時と言う 家族がそろう場で堂々と見ているのは考え物だ

こいつは五月の一件で何も学ばんのか大抵同じ事をする人間は痛い目を見るもんだ

勇也さんはもぐもぐと箸を進めるが、口々に『勉強勉強』と話す息子を見て

一言物申した

「風太郎 家でまで 勉強の話は やめなさい」

「どんな教育方針だ！ そもそも親父が持ち込んだ仕事だろ」

「やめい！今は夕食だ 後に回せ」

「幸太郎まで 良いのかそれで？」

それが親の言う事かと食ってかかる風太郎を制止

今は少しでも良いからお前も自分の事を考えろ

それに良いも何も俺は俺で考えてはいる

ある程度は、ましになって来てるんだ、肩の力を少しは抜く事を覚えるべきだ

「俺もいるんだ 一人で抱え込むな 何の為の補佐だ？」

「それもそうだが 幸太郎には言われたくないと思うのは俺だけか？」

「お兄ちゃんも一人で何でも解決しようとするからね」

まさか妹にまで言われてしまうとは

抱え込むねえ 俺はそう言った事してないつもりでいんだがな

周りはそうは思わんらしい

俺達のやり取りを見てか深く勇也さんはため息を零す

この人も考え無しでこの仕事を持ち込んできたわけではないと思う

相手があの中野家だ

うちにはそれなりに因縁がある家庭だったりするが、風太郎はそこから辺深くは知らんのだ

この人が言わないのなら俺も風太郎にその事を言うつもりはないが

あの人からなのか 勇也さんが無理を言っただけなのかは知らないけど

重要な事なのは間違いない 下手したらただの家庭教師としての話で終わらんかもしれない

「お前だって昔は勉強できなかっただろ 心配しなくても五月ちゃんたちも変わるさ」

「まあー うん昔のお前は………すまん笑うつもりはない」

「ええー前はこんな勉強オバケじゃなかったの？」

「こいつは昔は俺や今の幸太郎見たいにワイルドな男だったぞ」

「俺はワイルドとかではないですよ」

「お兄ちゃん 写真嫌いだから昔の話聞きたーい」

何とも懐かしい話題だ

5年前の風太郎の話でうちは盛り上がっている

その頃はらいはも今より幼く覚えてないのも無理はないだろうな

余り人の事は言えんが、昔の風太郎は色々とやんちゃだった印象だ

今では真面目な人間として日々勉強に明け暮れるがり勉強人間と

あの頃では別人だ

「別人と言えばお前もだろ？」

「ああ？誰がだ誰が」

「怖い怖い 悪かった」

「あの子に会ってからか その子の写真なら生徒手帳に忍ばせてるのを知ってんぞ」

「バレバレだ」

「えっ」

あんな頻繁に入れ入れする手帳にしまっている

それも一番後ろに挟んでんだ嫌でも見えてしまう

こいつにその気がなくてもだ。

それもあつて風太郎が二乃に生徒手帳を手渡した際は俺も驚いた

こいつは案外神経が図太いのだと……………。

「見せて〜」

「絶対見せな…あれ？生徒手帳……………二乃から返してもらってない……………」

迫る妹を避けつつ胸ポケットにあるであろう

生徒手帳を探るが ある筈の物がなく焦りだす風太郎

見たかったものがないと分かるくらいは『残念』と自分の席に戻る

「今更か……………」

「またお前は知ってたのに言わなかったな！」

「いやお前が余りにも自然に渡すからな まあ俺はあいつが持っていて

も別に構わんけどな」

その場に力なくうなだれる風太郎は奪還するための手立てを考え始める

相手は二乃だ もし見られたら簡単に返してくれないだろう

風太郎自身の写真は見られてもいじられる程度だろう

だが写真に写るもう一人が問題なのだ その写りこむ髪の長い少女

けどそれを見られた場合

風太郎が思っているよりももつと厄介な問題が待っている事も俺は知っている

これに関しては風太郎が向き合う事でそのうち自分でそれと向き合うだろう

「でも お兄ちゃんもないんだよね」

「俺は写真も何も入れてねえからな……」

「ああ お前の前の手帳は無くしたんだったな」

「はい あの時に無くしてそれ以来です 見られても問題はないですよ」

紛失して早や一年少し

大した思い入れもないあの手帳は果たして今は何処で何をしてんだかな……

最後に見たのは、買い物の時だっただろうか？

もし誰かが拾っていたなら届けていただろうし

何も連絡が来ないという事は、何処かで処理されたと考えるべきだろうな

「勇也さん 少しいいですか」

「おっ お前からとは珍しいな 言ってみろ」

俺の手帳の事はどうでもいい

写真の話題で一花の事が頭を過ぎり

すっかり失念してた

もし携帯を持つにしろ 彼には話しておくべきだろう

「明日あいつらの家に行って取りに行くか」

――

――

――

10月2日朝方

場所は中野姉妹の暮す マンションの一室だ

そこで寝息を立てているのは、この家の次女である中野二乃である
髪は睡眠の時には解いておりぱつと見ただけでは普通の人には見
訳はつかない

安心しきっているのか、よだれをたらしパジャマは軽くはだけお腹
が見えているが、自分の部屋だ

彼女が警戒する必要は全く無かった

ただ熟睡している二乃は気づかないこの部屋にある人物が侵入し
ている事に…

その人物は辺りを見回し

自分の探すものがないと分かれば熟睡する彼女の元へと向かって
行った

「ん…なに」

「生徒手帳を返せ」

「ぎゃあああああああああああああああああああ！」

中野二乃の絶叫がその朝響き渡った

――

――

――

「信じられない！」

怒りを表す彼女は、自分の前に侵入者である

上杉風太郎を正座させている

彼ではない誰かが以前にも似たような事をおかし

こうやって彼女に謝罪をしていた記憶が彼女の隣にいる三玖の頭に浮かんでいた

風太郎がこの家に入れたのもまさに あの時彼の兄と同じく

中野三玖の協力が合ったからである

深々と頭を下げ二乃に謝罪をし

どうにかして手帳を返してもらおうと試みる風太郎

正攻法で頼んでも彼女は返さないだろうと考え

取りに行けばいいと 何とも大胆な行動に出た結果である

彼女の悲鳴で目を覚ましたのは他にもいる

ぼさぼさの髪のまま欠伸をする五月や朝から元気に彼に挨拶をする四葉

既に制服に着替えその光景を楽しそうに眺める一花

この家に集まる事がある人間はほとんどここに集まっていた

約一名は珍しくこの場におらず 風太郎を入れに招いた三玖や起きたばかりの五月も首をかしげている

「あなただけですか？」

「ん？ 幸太郎なら暫くしたら来るんじゃないか」

「うんうん 良かったね 五月ちゃん」

「何ですか一花 私は別に何も言ってますんが？」

妹が何を言えばからかえるのか姉である彼女には丸わかりであり

五月も予想通りの反応を示しているようで、別段誰の事とは彼女は言っていないにも関わらず

その場で慌てふためいている

少々いじり過ぎたのか三玖がぎろつと一花を人睨み 三玖の前で

この話題で触れるのはよそうと

軽い感じで一礼し何とか五月も許すが『知りません』とそっぽを向

かれてしまう

一方侵入者である彼とそれに向き合う二乃は未だに冷戦状態
彼も下手に動き中を見られれば、自分の写真を見られるリスクがあ
ると理解している

なるべく穏便にここは済ませたいと腰を低く素直に彼女と接する
ただ冷や汗は止まらない

その真つただ中に 一花は二乃に何かを伝えようとテーブルにある
ものを置いた

彼は一瞬だが、そつちに視線を送る

ん？と不思議がるも彼はそれを見た事があつた

針が付いた手のひらサイズの機具である

興味はないが見た事のあるそれが何故この家にあり 一花が持つ
ていたのか彼は疑問に思ったが

年ごろのなのだろうと解釈し 再び二乃の方に向き直す

何度か取れるチャンスはあつたが、隙を見つける事が出来ず焦りば
かり募る

もう少しで取れる範囲まで来たときに ひよいと生徒手帳を二乃
は上にあげてしまい

彼の手は空を切る 握つたの空気だ

何で返さない？と彼は問うが彼女は先ほどの機具をテーブルから
取れば

風太郎に着いてくるように言い

何をさせられるのかと嫌な汗を彼は滲ませていた

逆らつた所で戻つてこないと彼はしぶしぶついて行き

再び中野二乃の部屋へと入つて行つてしまう

残された姉妹は彼等が行つた方を見たあと暫くし

学校に向かうまでの支度や着替えなど出来る事を始めた

一人 四葉だけは彼が連れて行かれた部屋を少しばかり眺めてい
た…。

—————

――
――

着替えをし朝食を食べ忘れ物がないか確認する

胸ポケットにある筈の手帳は、二乃が持っているままだ

それ以外気になるものは特になく

妹と勇也さんに声をかけアパートから出ていく

最近風太郎との登校も多かったが

今日は珍しく俺は一人で向かっていた

珍しくと言いながら昨日は一花が出待ちしていたり 何だかんだ
と言いつつ最近人との交流も増えて来た実感している

少し前なら学校でも風太郎とは会話もすることは無く

互いに干渉は避けていた

「あいつ曰く俺が逃げていたと言うが、そんな事ある訳ないと思いは
するが」

幾つか思い当たる節が、あり完全に否定はできない

その風太郎だが俺より早く起きると『取り返してくる』とだけ言っ
てさっさと家を出てしまった

せわしない奴と口に出そうになつたが押しとどめた

よくよく考えればあの写真はあの頃のあいつの支えであり

大切な思い出だ 当時の俺は、今よりもましだと思うが

それでもいい兄とは言えない人間だと記憶の淵に残るものを読み
取り実感させられる

一花にはお兄さんしてるねと言われ 俺も自分の言葉でやり過ご
したが、果たして本当にあれは俺の本音だったのか…？

自分の事は自分が一番理解してると思っていたがあまりそうでは

ないんだろうな。

少しため息を零し幸せもまた減ったと苦笑いを入れ
俺は歩くペースを速め目的地に向かって行く

「まあ…今は俺の事より 家庭教師の事そして中野姉妹の事あとは
五月に聞かないといけない事が出来ちまったしな…。」

あの日五月は『詮索してすみません』と俺に言った

それは彼女が、知っているからだろう

俺の事に関して言えば詳しいにも程がある

聞けるタイミングがあればあいつに一度聞いてみたい

「…？ 求人雑誌か…バイト増やさねえとな」

目に入った広告と自由に取れるように置いてある幾つかの求人雑
誌が数冊

勇也さんと話 俺は自分のバイトを少しだけ増やす事を決めた
携帯を買うにもお金がない

全くと言うわけではなく、バイト生活に明け暮れるゆえに多少の蓄え
は、持っている、いるものの、どうしたものかね

諸々の事情もあり勇也さんに負担させるわけにも行かないと昨夜
のうちに話しておいた。

あの人もしづしづ納得してくれたが、『無理はすんな』と一応の忠告
は受けている

家庭教師での収入は風太郎やらいは、勇也さんに使い
借金も返済しなければならぬわけ…。

どうにかして収入を得るには今よりも数をこなさないと全てが不
足してるのが事実だ

実家にいる祖父母にも心配をかけてしまう。

「はあ…問題は山隅だな」

今の俺はきつと情けねえ面してるんだろう

こんな姿 母さんが見たらどう思うか

あの明るい母さんだきつと『大丈夫 元気にいこう』と言ってくれ

るだろう

不思議と記憶に残る母と四葉が重なったように見えた
底抜けに元気な姿はとても良く似ている…。

だからなのか俺は四葉を叱れないのは、何処となく母と似た雰囲気
を見せる彼女に自分の母の姿を見てしまう

発想がやばいと思いつつもそう思う俺が今ここにいるんだ

「っ 感傷にふける暇あったら風太郎達迎えに行くか！」

フリーペーパーを幾つか貰うと俺は今度こそ目的地場所へと向
かった

――――

――――

――

場面は再び中野姉妹のマンションへと変わる

既に風太郎の目的は終わったようで二乃から手帳を取り戻す事は
出来たようで

中をめぐりかつての自分

金髪に染め愛想のない顔で写真に写っていた

如何にも悪ガキと言ったこの少年がかつての風太郎だった

だがこれを取り返す際に全てが上手く言ったわけではない

実の所写真自体は二乃に見られてしまった

彼女に部屋に呼ばれ ピアスを開ける手伝いをした際

悪ふざけがすぎ彼女から逆襲を受け

危うく開けられそうになったが、その時手帳が二乃の元から落ち

ページが捲られ中身が見られてしまった

覚悟を決めた風太郎に対し

二乃の反応は彼が思っていたものとは、正反対の反応で彼はそれに
戸惑いを隠せずいた

『ちよー好み誰これ？ あいつじゃないでしょ えっ親戚？ うそー』と

何故か過去の風太郎は今と違い二乃から好印象だった

咄嗟に嘘で誤魔化し

親戚だと話したが、そんな人間は何処にもいない

元は幸太郎だと溜まった鬱憤を晴らそうと思ったが、ここでその選択をしたら

何かやばい事がこれから起きる気がし彼はそれをやめ

架空の存在を作り出したのだ…。

その甲斐もあり無事に写真の入った手帳を取り返す事が出来

彼もそれに満足し 架空の親戚の事を頭の隅に追いやった

手帳にしまつてある写真を彼が取り出せば

その写真は二枚に折られたもので、開いた先には

仏頂面の小学生の風太郎と真逆で笑顔でピースをする赤い髪の少女が写っていた

(五年前か色あせて来たな…。)

彼に取って大切なその一枚を彼は普段は見せない微笑むように眺めていた…。

何時かの再会を願う彼 ただそれは思いのほか近くにいるのかも知れず

彼はそれに気づく事はなかった…。

彼が事実を知るのもう少し先の話である

一方 彼に金髪子がタイプと言い『何時か会わせる』とその場凌ぎの嘘に誤魔化された二乃は、一枚の写真をきっかけにかつてのアルバムを持って

姉妹達の元へ向かう

手帳を手に入れた風太郎はそれに見向きもしなかったが、ここでもし彼が彼女が見せようとしたアルバムを見ていけば、少しだけ話は変わっていただろうがそれは もしも の可能性である

二乃が持つてきたアルバムを囲む懐かしさに浸る彼女達
「懐かしい」

「私達も随分雰囲気がかかりましたね」

五月が一枚の写真を見つける

それは小学校6年生の時に姉妹で撮った集合写真である

写りこむその姿は風太郎が持つ写真の少女と全く同じ顔の少女が
5人

笑顔で写っていた どの子もピースサインをし 当時から彼女達
が仲のいい姉妹だという事を思わせる

幾つかページをめくって行く中で一花は一枚の写真に目が留まる
それはまだ母が生きていた頃

修学旅行が行われるよりも前の写真だ 何処か原っぱで撮られた
写真なのだろう

姉妹全員は先ほどと同じく笑顔でカメラに向き合う

そしてその中に一人 この空間にいない人物が写っていた

帽子を被り 一花に手を引かれる形で写真に写りこむ少年がいた
歳は彼女達と同じか一つ上に見える

彼女達と同じく笑顔でカメラに向かい 彼に横から抱き着くよう
に映る二乃もいた

「えっ 誰この子 それにアタシだよねこれ？」

「この手を引いてるの私かな…」

「アルバムにあるって事は、知り合いつて事だよ！」

うーんと唸る二乃は何かを思い出しそうになるが、自分の記憶の中
で名前が検索にかかる事はなく

イライラとするが、一花は何かを思い出したようで口を開く

「この子 昔よく私達と遊んでくれたお兄さんだ……………名前
は確か
うーん」

「ああー そうだ 良く遊んでた人だ！ 二乃が何時も後ろを追い
かけてた」

「言われてみれば…そんな気がするかも」

腑に落ちたようでポンと手を叩く

當時を思い出したのか二乃は懐かしそうにその写真を眺める

「確かこーって呼んでた気がする」

「そうか…こーお兄さんか 懐かしいな 今も元気かな？」

「修学旅行より前の期日ですからね…」

「きつと元気だと思う 何時か会えるよ」

「だよねー うふふ こーお兄ちゃんにも会いたいなー」

「二乃何だか今日は機嫌が良いね」

「何か今日は 嬉しい事が多くてさー 朝のあれで神様も私にプレゼントしてくれたのかな」

ガラの悪い金髪少年

笑顔がまぶしい爽やか少年

今日だけでも二乃は二つの写真で気分が舞い上がっていた

同じく他の姉妹も写真に写りこむその少年が、今はどうしているのか

元気で過ごしているのか 何時かの再会を願う少年に思いをはせていた

ピンポンとインターホンがなり

四葉が応答に向かう

「本物の四葉だ」

「はい 本物の四葉です！おはようございます！ お兄さん」

「おう おはよう つうかおめえら 時間みろ！」

相手は上杉幸太郎だった

相変わらぬの目つきの悪さと目立つ髪色 首元まで隠す学生服と何時もの彼だ

先程まで四葉が頭に浮かんでいた為 本人が出た時不意にその言葉が出た

彼の登場に反応する 三玖と五月そして彼の手帳を持つ二乃

幸太郎は『時間だ』と彼女達に言い時計を見るよう促す

針が示す時間は、遅刻する程ではないが悠長に構えていれば遅刻し

てしまう

絶妙なラインだ

急いで準備を始め

写真の入ったアルバムを片付け始める

その中で一人考え込む少女　一花は先ほどの写真の少年の事を考えていた

幾つか考えるが、頭を振り勘違いと自分に言い聞かせる

(「ーお兄さん　まさかね……………」)

風太郎も会話を聞き急いで下に向かう

全員は準備を終えエレベーターに乗り込んだ

「おはようさん」

「おはようございます！　幸太郎君」

「おはようー　コータローくん」

「コータロー　おはよう今日もよろしく」

「ほら　アンタの手帳返してあげる！」

それぞれと挨拶を交わし　二乃から渡したままの手帳を受け取り
お礼を言った

ふんとそっぽを向かれたがこれが何時もの光景だと自分の日常を
思い出す

そう思うと先ほどまで色々と考えていた自分が笑えて来ると口元
もにやける

？と頭に浮かべる彼女達に『気にするな』と言い彼は遅れて来た風
太郎と共に一歩先に学園へと向かう

(色々考えたけど　今はこいつらが笑えるよう頑張る事を第一にする
かあ)

第二十一話 不良少年と面倒な一日

生徒手帳を返却された翌日

俺は普段と変わらず学園で変わらぬ日々を送っていた

別段変わったイベントはない

昼になれば食堂に行き

放課後なれば風太郎達と勉強会を開くだろう

俺の中ではそれが当たり前となっており周りでもそれが認知されてきたのか

誰といても以前よりは騒がれなくなっていた まさに『何時もの光景』認識されてきた

だが今日は違っている

クラス中の視線は普段の倍に感じ

風太郎は俺がクラスに来れば触らぬ神に祟りなしと一度席を外す隣の席にいる 五月はずっとこちらに声をかけてくる

お前はお前でぶれないな？

「幸太郎君 あの」

「なんだよ五月？ あんま今話しかけんな 周りがうるさい」

「ですが…………その顔どうしたんですか？」

「はあ……………」

クラス連中も五月も普段より意識を向ける理由は俺の顔にあった

実際には頬だ正確には頬より少し上目の下あたりだが、そんな些細な事周りには関係ないだろう

昨日までなかった物が覆うように貼ってある

何かと言えば、ただのガーゼだ 取れないようにテープで固定している

少々だがまだ昨日の痛みは残っている

その姿俺が頬に怪我をし カーゼで押さえるその姿を見て

クラスの連中もここに来る前に俺を見る連中も視線を向けるし

避けていく 教師も俺に何があったと登校時に聞いてくる始末

「ああ……………うぜ」

周りの評価なんてやっぱりあてには出来ねえ

掌を返すように『やっぱり上杉幸太郎は不良だ』『誰かに喧嘩を売った』だの言ってくる

そのまま耳から通り過ぎていけ

休みたいと思っただがきちんと登校しないとらいはに心配をかけてしまう

朝も俺をずっと心配していた 妹にあんな顔させて何してんだか……………。

「とりあえず 五月は普通にしろ 心配すんな俺は何もしてねえよ」

「でも その怪我どうしたんですか？昨日までありませんでしたよ」

「生きてれば傷なんて出来んだろう……………今は一限目前までに課題をやってる」

「……………」

「心配してくれありがとな」

「……………いえ心配するのは当然です」

「そうかい……………」

少しばかり意地悪が過ぎた

五月相手だと少々度が過ぎるってしまうのが俺の最近の反省点だ

世話になってる 何だかんだ言いつつも勉強をしてくれる

間違いがあれば素直に修正してくれるし

声もかけてくれる そんな奴だからついつい距離感を忘れてしま
う

あいつに言っておいて俺が忘れてどんすんだか……………。

目線を前にすればいつのまにか風太郎は戻ってきていた

こいつも気まずいだろうな 兄がこんな姿で登校してくんだしよ

その後担任が教室に現れ

ホームルームも何事もなく行われた

不貞腐れてる暇などない

一限目も開始されるのだ 俺も受けれる間はきちんと黒板に目を向けなければな

そこから昼までの間 意識を授業のみに集中させ周りの声をシャットアウトしていた

「コータロー！ 顔どうしたの」

「お兄さん頼怪我したんですか？」

「フータローくん 何かあったの」

「それより勉強をしろ」

「さっさと始めろー」

図書室での勉強会 家庭教師 正確には補佐だが

俺がさぼる訳にはいかない

案の定だが、三玖達にも心配をさせてしまった。

一花は俺に聞くよりも早いと判断したのか風太郎に聞いているが
残念だったな

風太郎はこういう時には何も答えない

理由は知っていても干渉を避けるのが弟である

まるで 中野姉妹が転校して来る前に戻ってみてえだな

図書室で勉強を行う光景も周りの人間に当たり前に認識され始めて来たが

視線は何時もより飛んでくる

暇な奴らが多いなこころも……………。

それぞれ課題や風太郎の出した問題を答えるなど出来る限り集中して行っていた

ただこいつらも気になるんだろ 特に四葉なんてガン見してくる

風太郎に叱られてるし

「勉強しなさい」

「すみません 気になってしまって 痛くありませんか？」

「素直だな」

「だから手を動かさせ！」

三度風太郎と四葉のやり取りを見て
少しは気分が楽になったかと思いい俺も自分の勉強に取りかかる
四葉程無いせよ 三玖もこちらじつと見ており
視線に気づけば顔を逸らす何でかねえ……………。

『2年一組 上杉幸太郎 至急生徒指導室まで来るように』

図書室がざわつき始める 視線は一気に強くなる

朝方説明したつもりだが、学校側は信用してないようだ
校内放送まで使うあたり まじで俺が嫌いなのか？

「ちよつくら行ってくる 昼休みには戻れそうにないから 風太郎あ
とは頼む」

「分かった 気にせず行ってくれ」

「コータローくんまた放課後に会おうねー」

「ああ 一花もまたな 四葉に三玖も頑張れよ」

「お兄さん 私なら心配なしです！」

「コータロー……………気をつけてね」

後ろに手を振り生徒指導室まで向かう事にした

俺がいけない方が捗るだろうしこっちの方が良いだろうな
三玖の奴 顔は伏せてるが何で泣きそうな面してんだか
別に辞めさせられるわけじゃねえのによ。

……………

……………

……………

「何でお前がいんだよ……………」

「校内放送を聞きました」

「昼飯食ってこいよー」

生徒指導室の前で五月と出くわした

待ってましたと言わんばかりにじつとこっちを見ている
まじこいつは何だ？

先回りしてきたのか……………。

俺の事なんて気にせずって言っても家庭教師してるしな
仕事の雇い主である あの人耳にでも入って見ろ

『君にはやめてもらう』あの冷めた声で言ってくるんだろうな

風太郎にだけは面倒をかけさせたくないし

中野姉妹の為に今は少し慎重に動かねえとな

「とりあえず 五月 いるなら待ってろ」

「はい ここで待ってます」

冷静な時の五月程 梶子でも動かぬの言葉がそのまま似合う人
間もないだろう

覚悟を決めたと言わんばかりだ

下手な説得は聞かない為 終わるまで待ってて欲しいとだけ伝え
部屋に入る

「失礼します」

教師とのやり取りは特に面白いものは何もない

説明書をそのまま完コピしたような事を言い

俺はそれに答えるだけだ 怒ってるのか叱ってるのか分からない
声を出す

本音を言えば 教師より 勇也さんからどう言われるかの方が俺
は怖いと思ってる

父親だからなのかあの人だからなのか、幻滅させる事だけはしたく
ない

せつかく入れた高校だ むぎむぎ退学させられるつもりもない
だから俺は教師には事実だけを告げた

信じようが信じまいが関係ない 下手に言い訳してどうすんだ？
現実に俺は怪我を負っているわけだ 隠し立てする気もない

朝方俺を問い質した体育の教師にも俺は言っているんだ

『俺は手を出してはいない』と

「失礼しました」

数分のやり取りを終えて俺は解放された

先ず目の前には、捨てられた子犬見たいにしよぼくれる五月が立っていた

トレードマークであるてっぺんのアホ毛も萎びたように倒れている

何でこいつが此処まで気に病むのか……………。

「教室戻るぞ」

「はい……………」。

その一言だけ言い俺の横についてくる

歩幅を合わせ遅れないように

世話焼きなおかんかと思えば、叱られて泣いてる子供のようでもある

実際子供なのは変わらないけど

「一ついいですか」

「何だ」

「幸太郎君は大丈夫なんですよね？」

「ああ……………怪我も殴られただけだ」

「それさえ聞ければ満足です 無事ならそれでいいんです」

中野五月は俺に対しての信頼は厚い

俺が問題を起こした事を彼女は問う事はしない

それよりも俺の体の心配をして来るのだ

体調に異常が無いと伝えればこいつは納得をしてくれた

教師からは停学も退学も言い渡される事はなく

学校にも別に今まで通り過ごせるわけでこれ以上の問題事は起き

ないんだと思い

俺も五月も足を速めた

「お前 また問題起こしたのか 上杉幸太郎……………」

「おい 無視か上杉？」

「何っすか 須藤先輩」

どうやらため息で幸せが逃げるのは本当だと実感した
さっさと教室へと戻ろうとした途端にこれだ

何処からか現れた一人の坊主頭の厳つい男子生徒に名指しで呼ばれた

これ以上面倒は御免だと五月の手を取りそのまま無視をしようとしたが、道を遮られる

その男子生徒 3年生須藤和之はこの学園の野球部エースであり
将来を期待されている逸材だ

そんな大物が、学園で一二争う程嫌われてる俺に何のようなのか？
俺の態度が気に入らないのかぎろりと鋭い眼光で睨んでくる

この学園で過ごす中で一番に会いたくねえ奴だよ
一人の時でも御免被るが今は、五月も同行してんだ

これ以上は面倒に巻き込むな……………。
適当にその場をやり過ごすべく言葉を並べるが須藤は退こうとせ

ずただ俺を睨むのみだ
話がねえなら絡むなよ

手間取っている間に五月の方が先に行動に出ていた

「あの須藤先輩と言えば良いんですか？ 私達急いでいるので失礼します」

「女子連れか…お前も言い身分だな 上杉」

「そんな事関係ないです 退いてください！」

五月から俺の手を引き何度も避けようとするが目の前の男子はそれを遮る

ただ俺を睨むのみだまじ話がねえのかよ

何が癪に障ったか知らねえけど先輩相手だし どちらにも被害を

出す訳には行かねえよ

「謝ればいいんですか？」

「死んだ魚見たいな目したお前が何に謝んだ」

「さーせした」

「幸太郎君 その言い方は流石に」

「上杉 お前舐めてんのか！」

「そんな訳ないですよ先輩……………手を離してください」

「ふざけんな！ てめえ何でそんな他人行儀なんだ 馬鹿にすんな」

「先輩は俺見たいな馬鹿の相手する暇あるんっすか？ 卒業も近いでしよっ」

他人行儀と言われた何だろうなまじでさ

どうしてこいつはこんなイライラしてんだ？

その場を乗り切ろうにも胸倉を掴まれちまった

相手は毎日を鍛える人間だ俺がどうこう出来るわけもない

五月は離すよう言うが俺は五月に『何もするな』とだけ言いされるがまだまだ

「先輩 やめてもらえますか？ うちの高校のエースでしょ

卒業も決まって有名大学からも話来てるって聞きましたよ

俺の相手なんてしてたらせつかくのチャンスも夢も消えます

……………ムキになるなよ 須藤……………」

「お前にだけは言われたくねえ！何がチャンスだ

お前が夢を語るなお前に夢を語る資格はねえよ この意気地なしが！」

何処か吐き捨てるように掴んでいた俺をその場で離すと須藤はそのまま元居た方向へと帰って行く

一体何がしたいのか？

三年生は後半暇だと言うがマジでそうらしいな

10月ともなれば部活も引退してるだろうしそんな時に俺でも見てイラっとしたんだろう

俺をはけ口にして怒るなよ……………。

「はあ……………面倒な奴」

「幸太郎君 大丈夫ですか 何処か怪我はしてないですか」
「ただ持ち上げられただけだ………：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～」

「幸太郎君に何もなければそれでいいんです………：：：：～」
「はあ しょぼくれんな」

「なつてません！」

「そうかよ………：～」

正直言つて 生徒が、まばらな時で良かったと思う

大勢の前であんな事起こしたら須藤は教師に何と言ひ逃れするつもりだったんだ？

俺見たいな人間の相手なんてせずに卒業まで過ごせばいいのにさ
考えるだけで頭が痛くなる

「五月 さっきの事は見なかった事にしてくれると助かる」

「幸太郎君がそう言うなら私は口外しません でもあんな無茶はしないてください」

「へーいへい」

五月には黙っておくよう告げ

承諾を得れば止まった足を動かし今度こそ教室へと帰る事にした
男子生徒との喧嘩か…何時ぶりだろうなそんな事………：～

そのまま時間は過ぎ

一花も用事があると風太郎と俺に話し

三玖と四葉の四人で勉強会を開き 遅くなる前に解散する事にし

た

下駄箱に向かい靴を探す

出入口では五月と二乃や三玖も待っていた

二乃は人目がある為何時もの態度はしてこないが雰囲気判断は出来る、機嫌が悪い………：～

「アンタ 今日呼ばれたでしょ」

「否定はしねえ………：～」

「仮にも家庭教師なんだから気をつけてよね」

「認めるのか？」

「ち 違うわよ！」

「コータロー 先生達から何か言われた？」

「停学も退学もねえから 前向けよ」

「これからも勉強教えてね」

「補佐だけど任せろ！」

出入口前でそんな会話をしていれば俺を呼ぶ声が聞こえ後ろを振り向けば

一人のポニーテールが似合う小柄な女子生徒がこちらにお辞儀していた

俺はその子を知ってるし 向うも俺を知っている
学年は同じでクラスは違うだけだ

「あの 上杉先輩 昨日はありがとうございます」

「あ、ああ 気にすんなよ 誰にも初めてはあんだしょ」

「はあ？ 初めてとかえ？ あんたマジで何言ってるの」

「コータロー どういう意味？」

「幸太郎君 詳しく聞かせてもらえますか？」

「二乃 お前は余計な言い回しするな 二人も落ち着け別に何もしてねえよ」

「すみません 勘違いされる言い方をして 私は2年の須藤真弓と言います…。上杉先輩とはバイト先が同じなんです」

「ん こいつが先輩？ 同じ学年よね？」

「あ あのこれ そうです 言葉足らずでした 私より先にバイトしてたのでついそう呼んでいて」

「あんたが先輩ねえ」

「うるさい」

「幸太郎君 須藤ってまさかあの体の大きな方ですか」

「まあ：そうだな」

俺に絡んできた 三年生須藤和之とこの小柄な二年生須藤真弓は遺伝子レベルがビツクバンでも起こしたのかと言いたいほど細胞レベルで似ていないと言っている

あいつを見た五月は『嘘ですよね』と何とも失礼な事を口走っている

「コータローも失礼な事言つてたよ」

「聞き流せ」

「それでこの子がアンタに何をされたつて言うの」

「されたと言うか 昨日バイト先で 酔っぱらったお客さんから私を庇つて殴られてしまつて

ごめんなさい先輩 中々お礼を言えず」

「良いよ別に 俺は気にしねえし」

「その傷つて この子を庇つたから出来たの？ こいつが」

「はい 先輩はバイト先でも真面目で仕事も丁寧に教えてくれるんです」

「真弓ちゃん そう言う事言わなくて良いから……」

「ま まゆみちゃん 幸太郎君という関係なんですか？」

さつきの須藤さんと何か関係あるんですか」

「まさか 兄が何かしたんですか？ 昨日の事知つて朝から上杉つて言つてたんで ごめんなさい」

「真弓ちゃんが謝る事じゃねえーよ それに何もされてねえから」

「兄は頭が固くて 融通が利かないし 考えなしの人間ですが、上杉先輩にお礼を言いたかつたんだと思います 私が怪我をしなかつたのが先輩のお陰と話したら納得してくれただ」

妹と言う存在は兄を説明する時には毒を吐かないと死んでしまう病にでもかかっているだろうか？

彼女が教えてくれた事であいつが俺に絡んできた理由も何となく察する事は出来た

必死に兄を庇っている子だ 俺は何も言う事はねえよ

「話は理解しました でも幸太郎君は何でそれを言わないんですか」
「別に周りに言いふらす事でもねえだろ？」

「それだと周りも勘違いしてコータローの変な噂が広まるだけ」
「俺は気にしねえー」

人に説明したところで何がかわるんだ？

周りの人間なんて同調圧力で生きてるだけだ何も変わらん
「アンタの拗らせ方も相当よね」

「うるせえー んで真弓ちゃんは今後バイトは続けるのか？」

「兄から 危ないようなら辞めさせると暫くは行けそうにありません」

「そうか まあ何とかするか 店長には話したのか」

「はい 昨日の事で 私の事を気にしてくれて心のケアも大事だと」

「O?分かった」

「それで 上杉先輩の本命の方って誰ですか」

『』
『!!』

「コータローとはそんな関係じゃないから」

「そうです 私達は幸太郎君とは疚しい事はありませんから」

「それはないからー」

「一斉に否定されると泣けてくるんだが？」

流石に俺もそこまで言われればへこんじまうぞ？

二乃は分かるが二人もそこまで必死に言ってくるのか
信頼が下がっていたと思ってたけどそれなりに傷つく

「なら 私にもチャンスありますよね？」

「冗談はやめておけ 俺が須藤先輩に殺されるわ」

「あつははは 残念です」

「からかうな んじゃ きーつけて帰れよ」

（先輩 兄はああ云ってますが 先輩の事信頼してるんです 早く仲直りしてくださいね）

「無理言うな………まあなる様にするさ」

「はいでは失礼します 先輩話せる相手が出来て良かったですね」

「余計なお世話だ！」

まるで嵐 あつという間の出来事だ

須藤真弓は俺にお礼を伝えれば去って行き

同時にシフトにも穴が開く事が確定してしまう

兄と仲良くしてくださいか…幾ら真弓ちゃんの頼みでも

可能な事と無理な事ってものは存在する それが俺と須藤との関

係だ

今日だってあいつと話したのいつ以来か覚えてねえ程だなる様になると言っていたが状況は芳しくないんだよ

「コータロー……：チャンスって何」

「知らねーよ」

「そう言う事は早いと思うんですよ幸太郎君？」

「五月は目が笑ってねえよ」

「アンタもとことん馬鹿よね」

「お前には言われたくねえよ！」

頬の怪我が元で生まれた今日の騒動

俺は非常に疲れた

今日という日はとことん俺とはかみ合わない一日だったが

俺の怪我を見ても怪しむどころか心配してくれるこいつらには感謝をしている

二乃も悪態は着くが怪我を見ても「それが何？」と言った感じで何時もと変わりはなかった

誰一人俺が問題を起こしたとは思ってないのだ

須藤の件も五月は真弓ちゃんに話す事はなかったし

こいつには借りをまた作ってしまったな

「なんか ありがとな お前ら」

「あんたが素直に言うのキモイんだけど」

「うっせー 俺は帰る」

「あっ コータローが拗ねた！」

第二十二話 不良少年と末っ子の休日

携帯、スマートフォン

それは俺達の生活に欠かせない存在と言われ

連絡のみならずゲームは勿論の事動画の視聴や編集など

小型の機械だけで出来る事は想像以上に多いと言われている

その文明の利器を俺はある理由で破棄し

それ以降持とうとする気も持つ気もないまま生活を続け

その生活に何も疑問を抱く事はなかった

破棄した事に後悔も何もなくむしろ何かに開放された気分さえ感じていた

勇也さんは何も言わないが 弟や妹は再び持つよう俺に何度も言ってきた

俺は必要ないの一言で、二人を躲してきた

変わらぬ生活を続けていれば、その考えは変わる事はなっただろうが

最近俺と弟の周りの風景は以前と違うものになって来ていた

ある姉妹の登場で、俺の文明の利器必要ない宣言は終焉の道を一歩また一歩と進み

遂に俺は、再びあの機械を手に入れるかもしれない状況へとむかっていたのだ

壮大に語っているが……………

そこまでの大事でもないんだけどな。ようは、俺が携帯を持つか持たないかの話だ

切っ掛けは一花が隠し撮りした俺が膝枕され眠っている写真だ

彼女は『弟くんと共に 姉妹全員の番号とアドレスを入手せよ できればこれをばらまく』と言って来た

人に見られた所で気にする性格でもないんだが、如何せん

家庭教師の補佐を続けると言っているんだ 彼女達と連絡が取れないと厄介な事になる事を俺は花火の日に思い知っている

ああ云った行事をあの面子でまた行う事は稀だが、あのお節介も

『持つてないと困ります』とぶんすかと言う擬音が似合うポーズで俺に言つてきていたし

これは検討するくらいはしなければと俺なりに危機感は覚えていた

手元にある数人の連絡先

一花 二乃 三玖 四葉 これだけあれば上出来だろう自分の頑張りが少し誇らしく思える

結局は持つていられるだけで、連絡する手段なぞ持ち合わせない為ただの紙切れにしか過ぎんのだが

教えてくれたあいつ等の為にも真面目に考えるべきだろう

一人足りない気もするが、本人に聞こうにも何故かはぐらかされるし

何処かよそよそしい態度だったり

実は嫌われているのでは？

普段見せているあの様子も見せかけなのではと少々考えてしまいが、あいつに限って

人を騙す 人を欺くと言った事はしないだろうと信頼はある

あいつからの信頼は果たして戻っているかと頭を傾げるが……………。

「うーん 使えればどれでも良いんだがな……………」

日曜日 来週には中間試験が行われ

それに向けて各々が各自出来うることをしている中で俺は携帯シヨップの前に飾られる

幾つかの機種を食い入るように見つめていた

今日だけは家庭教師と補佐と言う役職からは解放され俺も俺で自分の事に集中できる

普段なら勉強をしたりらしいのは宿題を見てあげたりと兄として出来る役目をやっているが来週にはそんな暇もなさそうだと思いつける前に家を出た

勿論黙って出た訳じゃない みんなにも『少し用事』と伝えてはある

何故だからいはいは目を輝かせていたが、俺が自発的に出かけるのがそんなに珍しいことなのだろうか…？

心配になるだろうと行先自体は言っているし何も問題はないと思うんだけどな

因みに触れはしなかった弟の勉強相手だが、俺は必要ない

上杉風太郎は、学園では一番頭がいいんだ 努力の差が違う

ただ前回と同じく勉強しながらも問題集を考えて居たりと家庭教師の事が無ければ、自分の勉強に集中出来ていただろうが…

俺がもう少しちゃんとしていれば弟にも苦労を掛ける事は無いんだけど

ショーケースに映る自分の顔を見て何でこんな悩んだ顔してんだと自分でその顔が嫌になる

外で考えていても埒が明かないし中に入って適当な物を選んで戻ってくればいいと

一歩足を動かした所で、俺を呼び止めるような聞き覚えのある声を耳にし

ふと振り返ればあいつがいた…

「幸太郎君！」

一人だけ教えてこない 中野姉妹の末っ子

中野五月がそこにいた 10月の頭で冷え始める中ぱつと見た感じ薄着に見えなくもないが、きちんと寒さ対策はしているようだ、白のニットと茶色がかったオレンジ色（テラコッタ）のロングスカート 肩には鞆がかかっており 完全に私服だ 普段見慣れた制服姿と違って私服姿もとても良いと思うあまり流行には詳しくないが、俺が見る限りとても可愛らしい

素体が良いんだ、周りの人間も五月の方を見てはそのまま歩いている人も多く見受けられる

やはり姉妹だな。

「似合ってるな その服 温かそうだし」

「ありがとうございます。 幸太郎君も温かそうでいいですね 冷え

る時期なので」

「普段と変わんねーけどな んじゃ」

「はいではまた………って違います！」

「おい 何だよ 相談か？ 勉強でも見てくれってか、やる気があるなら俺は手伝うが」

「いやそう言う事ではなくて 見てもらわなくても大丈夫です」

「はぁ んで 五月一人なのか？」

「今日は用事があったので私だけです 幸太郎君の方こそ珍しいですね」

「気分転換だよ 俺だって偶には一人でいる事もある」

引き留められ軽く会話をし

他の姉妹はそれぞれ所要があったり 四葉などは助っ人で他の部活に顔を出していると教えてくれた

一花辺りは仕事なのだろうと予想は出来る

他の二名もそれぞれ自分の用事でもあるんだろう

そして俺と遭遇した五月だが、見た感じ買い物などをしに来たのかそれとも他に待ち合わせしている人でもいるのか？

下手に詮索する事はやめようと思う

『きーつけるよ』とだけ言い俺は再び店の中に入ろうとするが、腕を掴まれ阻まれてしまう

ふり返る事無く誰かは分かる

「何だよ 五月……」

「あの もし良ければ私も同行しましょうか？」

「大丈夫です………ついてくんな」

「何でそう 避けようとするんですか？」

昨日の今日で五月に迷惑をかけるわけには行かない

最近バイトの接客以外で人との接触を多くし過ぎた

俺が土曜を避けて今日にしたのは何も家庭教師を休むのがいやかではなく

純粹に一人で行動したかったわけで、こうやって誰かと出かけるつもりは無かった

考え自体浅はかだったのだ 中野姉妹は女性だ 家庭教師の無い日は出かけているに決まっているだろう

二乃や五月は特にだ 出くわす可能性が高い何を当たり前の事を忘れているのか

「出直すか……………」

「何ですか 私とは嫌なんですか」

「そうじゃねえよ」

「でも実際避けてるじゃないですか」

「はあ……………」

ダメだ逃げる事すら不可能となっている

少しでも帰ろうとすれば何処にそんな力があるのか、ぐぐぐと一歩もその場から動けない

体力なら勝てる自信があるんだがな

どうにも気が乗らないのか やはり世話になってる五月の事を無下に扱う事を嫌っているのか

それとも妹分のお言葉だ お兄さんとして言う事を聞こうという心境なのだろうか？

周りに目をやれば人の視線はこっちに向いている
どうやらカツプルが喧嘩していると思われる

ひそひそと声が聞こえてくる 普段から慣れてはいるけど五月が居るんだこいつに変な注目をさせるのはここまでだ 素直にこいつも同行させるか……………。

何も言わず五月の手を引きそのまま店内に入れば、自然と周りからの視線も消えている

「幸太郎君 あの」

「まあ あれだあまり五月には世話になってるし ついてくるだけなら良いかなと」

「ああの よろしくお願いします！」

「動揺するくらいなら帰っていいんだぞ」

「いえいえ これくらい平気です それにせっかくここで会うのも何かの縁ですので手伝いをさせてください！」

何処かよそよそしいんだよな今日のこいつは
いやまあ普段からこいつはこんな奴だし今更気にする事でもない
が

なーにか隠してそうだな？

じろりと視線を送れば『何でしょうか』と丁寧な返答だ

というかこいつの用事は、終わったのだろうか？

俺はさっさと家を出て要件を済ませれば家に帰って昼飯を食べて
勉強と変わらぬ日々だ

余計な詮索は避けるつもりだが、俺につき合ってその用事とやらに
間に合うのか？

「どれが良いのかねえ………つうか値段たけえな 財布が息をしてねえ
ぞ」

並べられた品を手に取り見るが、月々の支払いで飛んでいくお金
それを返済に持っていけばどれだけ家系が楽になるのか

そう言った方にばかり頭が行ってしまう

五月も色々機種を紹介してくれるが、どうにも厳しい物を感じる

中野姉妹視点で渡されても俺にはそれを強気で持っていく事は出
来ねえ

店員さんにも幾つか勧められ

パンフレットも手渡された

中を開き何か手ごろでピンとくるものは無いかと考える

少し視線を五月の方に送れば誰かと電話で話している

『はい無事に』と聞こえて来たが一体何の事だ…？

ペラペラと捲って行く中で会話を終えたのか五月がこっちに寄っ
てくる

そつと右に避ける

「何で逃げるんですか！」

「すまん 癖だ」

「そう言う事あまりしては行けませんよ 嫌われてしまいますから」
「慣れてる」

「でもダメですよ 幸太郎君は一人になります」

「今は一人じゃねーけどな」

「!!…ふいうちです」

「何がだ？ 現にお前と二人だろ」

「確かにそうですが、面と向かって言われると意識してしまっ」

「はいはい さーせん」

「そう言う態度も少しは改善すべきです」

「お前は俺の携帯選びに来たのか俺を説教に来たのかはつきりしてくれ」

「すみません 学園での癖が抜けなくてつい」

「いやな 癖だなそれは」

休みの日くらい俺としないで他の姉妹や友人と出かければ良いだろうに

五月なら友人多いだろうし言えば来るだろうさ

俺が休みを取ってなかったら五月は一人でこころ辺を歩いていたのか？

先程五月をおいて行動しようとした男の発言ではねえけど

パンフレットもそろそろページが終わりに向かう

奥に行いけばいく程機種は古くなるしな

残り数ページの中 俺の手はふと止まる

値段は最初見たのと大して変わらないが、その携帯に目が行ってしま

「……………」

「どれか気に入ったものでもありましたか？」

「いやなんでもない……………」

そのページに載せられている品は俺が昔使っていたものと同じ系列のもだ

同じなだけで別物なのだが、見てるとあの頃がちらついて少々頭痛を覚える

そこまでする必要はないと思うがあまり思い出と言うには俺には辛いもんだ

見なかった事にしてページをめくる

次で最後のページか結局これと言ったものは見当たらなかったな
しつくりこないと言うべきか……………ん？

「幸太郎君 あのこと何てどうでんしょうか？」

「ん？ ああ 風太郎と同じタイプか、これならいいかも知れないな」
五月は俺が持っていたパンフレットのページを幾つか前に戻すと
気になっていた物があつたようでそれを指さし俺に進めて来た
機種自体は、風太郎の持つものとは似たタイプだが、これは携帯で
はなくスマホだった

あの系統のスマホタイプだ

そこまで機能を使う事はないだろう俺にスマホとは不釣り合いだ
ただ他のページを見ても特にこれと言ったものは無いのも

現状で時間を無駄にするのは一人なら良いのだが今は二人で行動
してる あまりかけたくなえ

「スマホか…」

「何かと便利ですよ？ 慣れれば苦になりませんし」

「慣れる程使う気はねえけどな 連絡を取ればそれでいい」

「もしもと言う事もありますから考えるのもありますよ」

「色は……………」

言われるがままという訳ではないが一応色だけでも見て見た

合計で5色あるようだ

黄 紫 青 緑 赤

「五つの中からかあ 多いな」

「五つ……………幸太郎君はどれがいいんですか？ どれが好きです
か」

「んなもん適当で良いだろうさ？」

「これから使うものです どれを選んで悔いがない方が良いと思
います」

いやに真剣だな

ただ五色の中から選ぶだけだろうし そこまで考える必要あるの
か？

「幸太郎君は自分の物にはとことん無頓着なので、少しは真面目に考

えるべきです」

「無頓着ねえ ばつさり言うんだな お前も」

「えっ ああ すみません」

「いいさ 別に指摘されるのは初めてじゃねえし 俺も自覚はあるよ」

どうしても自分の事になると何をすることも適当になる

バイトは借金返済と考え 家庭教師は姉妹の為と思えば体が自然と動き頭も声も考えも纏まる

ただこうして自分の事で選ぶとなるとどうしてもなあ

「五つか…どれも個性的な色だ スタンダードな色でも良い けど奇抜な色は俺には似合わない」

「以前はどんな色を使っていたんですか？」

「覚えてないなー 忘れた」

「……………そうですか なら良いです」

「なんだ 急にしおらしくなって？」

しゅんとなりアホ毛もしおれている

俺は別に怒ってないけどな

それに以前の色々今はどうでもいいと思ってる

「過去も大切だ けど今も大事だろ」

「それは違います！ 過去は大切です！」

「おい 次は何だ 落ち着け」

「すみません 怒鳴るような事を言って 意味は無いんですけどだ

……………」

「いいさ 気にすんな 別に否定したつもりは無ねえよ」

何か俺は地雷でも踏んだのだろうか

珍しく 本気で五月に怒られたと言うより怒鳴られたと言うべきか

声のトーンが何時もと違っていた

確かにこいつらの前で 過去を否定するのはいい発言ではない

母との思い出もある

それは俺も同じだ 母さんとの思い出や零奈さんとの約束も無

かった事になるしな

それにあの子との出会いも否定する事になる

でも人間には忘れてたくても何時までも頭に残る嫌な記憶というものがあある…何時も後ろについてくる嫌なもんだよ…。

「あの幸太郎君 顔色が優れないようですが 気分でも？」

「何でもねえよ……それより選ぶぞ」

「それで どれにするんですか この “五つ” の中から」

「五つのを強調するな!!」

何でか こいつは五つと強調しがちだ

それを選んで機能には変わりないだろうし

……………ん？

俺はふと前を見た それは俺が見てるものと同じ品だ

それが店頭に並べられている 先程は気にも留めなかったが並べてあるとは

だが よくよく目を凝らせば値札の所に『現在在庫無し』と札が張られている

「ねえーのかよ！ なら片付けろ」

「……………何故か安心しました」

「まじで お前どうした？」

隣を見れば、胸をなでおろし安心しきったように

呼吸を整えている五月もいる…。

あれだけ 五つから選べと言いつつ何でか緊張していたようだ

まあ…でも何か救われた気もする

何か重大な選択でも迫られたような気もしていた

どれでも良いと言いつつ俺も何熱くなってるんだか……………。

「お客様 そちらの品なんですが、一応在庫はあります」

「まじすか？ でも品切れって」

「実は色はもう一色ありまして パンフレットにまだ記載されておらず」

「6つ目の選択ですか……………。」

「んじや それいいですか？」

最新機種という訳ではないが、数日前に色が追加されたようで店頭の札も貼ったままでパンフレットにもまだ記載はしてなかったと店員は頭を下げる

ここに来て6つ目の選択が出て来た 迷ってる暇もないし疲れて来たからその色でも良いと店員に話し席まで案内された俺は五月に適当な席で待ってて欲しいと言いつつそのまま契約内容を確認しに行く

これがまた面倒なんだよな……………。

「で 何故お前が俺の隣に座る?」

「ここまで来たら私も最後までお付き合いします」

「個人情報ってあんだよ 俺の家の番号とかその他諸々がよ」

何でかこいつまで座ってきやがる

遠くで待ってればいいのかよ

ほんとこういう時は、梃子でも動かないんだな

呆れつつも害はないと店員に説明『ひどいですよ!』と聞こえるが座っているお前に言える台詞じゃねえーよ

渡された書類に幾つかサインをし

内容を確認 店員からの話も特に変わったことは無い

ただ最近の携帯と言うよりスマホだ

何でここまで色々な機能がついているのだろうか?

五月も慣れれば便利と言うが本当にそうなのか……………?

「幸太郎君 誕生日が5月5日なんですな」

「何か文句あるか?」

(そう言えば、こいつらと俺 誕生日同じだったな)

不思議な縁もあるもんだと自分の誕生日を眺める

幾つかの書類にサインをする際も店員は気にしていたが

相手は五月だ 俺の個人情報知った所で悪用もくそもないしある程度情報が知られてるんだ

隠しても意味はないだろうな
流石に幾つかのロック番号を決めるときは耳をふさがせ目を閉じ
させたが

家庭教師先の末っ子に個人情報駄々洩れな件
スマホの色も無事に決まったと言うか

第六の色しか俺に選択するもんはなく 在庫もこれだけとか
最後の一個 選択は重要だからな

色自体は白である 何とまあ似合わなえ色だな
髪といいスマホといい白で統一かあ

そして話は支払い方法になる
生々しい話までこいつに聞かれるのか？

(一括か 分割か 今は手持ちすくねえからな、分割で済みますか)
「カードで一括でお願いします」

「おいしいい お前なに言ってるんだ 俺にそんな事出来るか！」

「私がお支払いします 幸太郎君は座っていてください」

「そう言う 問題じゃねえーよ」

流石に俺でも言う時は言うぞ流石にこれはやり過ぎだろう？

何で赤の他人と言うか 家庭教師の携帯の支払いまでこいつは面
倒を見てくるんだ

お前に何のメリットがあるんだ？

中野五月は俺が思っているより相当な人間だったと思うべきだ

店員に分割と言う前に 五月は俺を制止し

真面目な表情で話を続ける

「これは、父から言われてる事です」

「あの人から……………何で 面倒見てくんだよ」

「やはり 幸太郎君は父を……存知なんですか？」

「まあ…色々存じてますよ ったく、これで借りを返したって事か」

「借りを返す？」

「気にすんな、こっちの話だ」

まさかここに来てあの人自ら俺の事に干渉してくるとは思いもし
なかった

最後に会ったのはあの時か去年の6月頃だったな

意識は朦朧としてたが、あの冷えた目 冷めたような話し方 あの顔だけは忘れない

あの人に会う時は何時も最悪な時ばかりだ……………。

(つたく 俺なんて構わず 娘達に構えよ アンタの仕事だろうが)

「幸太郎君？ 幸太郎君ー大丈夫ですから当然黙り込んでしまっ
お節介でしたよね」

「ああー お節介だ 何処の世界に他人の携帯代まで払う奴がい
だ」

気づけば俺は新品のスマホが入った袋を片手に店の外

あの後は適当にやり過ぎし話もまともに聞かず仕舞いで商品を受
け取ればそのまま出て行っ

隣にいる五月も父の命令とは言え流石にやり過ぎたと思っ

俺が言う前から顔を伏せたままだ。

何でお前が気にすんだ こいつはあの人に言われてやっただけだ

こいつに非はない

「でも まあ ありがとよ 一緒に選んでくれて」

「もう 怒らないんですか？ 私は父から言われて幸太郎君に近づい
て」

「全部が全部さ、あの人から言われてやったことか？」

「それはあり得ません！ 私があなたに接してる理由は」

「なら それで良いよ あの人が関係してねえならよ」

「許してくれるんですか……………」

「許すも何も お前は俺に被害出してねえだろが？ お前は俺に世話

焼いてただけだろう 無視してる訳でもねえしな 時々面倒な奴と

は思うけどよ」

今まで全てが中野父からの命令じゃないならそれでいい

こいつ自身の意志で行っていると言うなら俺も怒る気はしない

ただもう少しセーブして欲しいとは思うけどな

五月がしょんぼりとしていたのは俺からもっと叱られ怒られると

思っていたからだ

でも事実が分かればそれでいい

携帯代も浮いた訳だし 感謝するべきだろうな。

「それと この借りは何時か返す あの人には俺から言っておく 話す機会があればな」

「幸太郎君がそう言うなら私は何も言いません 父も気づく筈です」
俺が言えた事じゃないが五月も五月で父親との距離を感じているのだろうな

いつ来るか分からないがあの人とは何処かで会う事になるし
言いたい事はその時に言えばいい もう俺もガキじゃねえからな
今回の目的を終え、何をするかというところ 予定なんてこの先はない
訳だが

このまま解散と言うにも味気ないと思う俺がおり

五月と二人と言う状況は何かと珍しい

学園以外では会うことは無いし 普段の恩もある少しは彼女のわがままにでもつき合うか

「なあ 五月 何かしたい事あるか？ 借りがあるしな」

「え」

「何だ その顔 変な事でも言ったか？」

「あの 幸太郎君の事ですからこのまま帰るのかと思って
「帰るなら送って行くが？」

「いえいえ あのどれくらいならいいんですか……………？」

「人間には良心と言うもんがあつてな」

「うーん 少し待っていてください 考えます」

「時間はあるし 気長に待つき」

俺から何かしたい事があるかと聞かれるとは思ってなかったのか
最初は間の抜けた声を出したが、一応は真意を読み取ってくれたらしく

暫く時間が欲しいと言う

ただここは店の前だ 人が勝手に占領している場所でもない

近場に何処か休める場所はないか探し

五月とはぐれないように隣を立ち移動を始めた

未だに隣では『こんな機会はないです 何かないんですか
ああ』と騒いでいる

なんでこんなに楽しそうにすんのか？

男と二人で出かける事に今更ながら抵抗と言う物がないのか？

「あれー もしかして こうくんかい！」

「はっ……………」

「幸太郎君どうかしたんですか？」

俺の耳は聞きたくもない声を耳にした

何処となく天然さを感じさせるその声を俺は嫌という程聞いた事
がある

後方から聞こえるそれを俺は無視するべきだろう

会いたくない人間の一人だ

どうして先日といい… こんな事が続くんか 同窓会でもしよ
うってのか？

「やっぱりこうくんじゃないかー お姉ちゃんを無視するとかひどい
ねー」

「すみません 自分を姉と自称する人間を俺は存じ上げません」

一花や三玖の前で家族宣言した俺には特大のブーメランが突き刺
さり

効果は絶大だが、今はこの場から去りたい

五月の手を引き去ろうとしたが、再び先日のデジャヴだ

道をふさがれた……………でも俺は学んでいる

横をすり抜け

「っーかまーえた」

「はなせー… はなせー…」

「ひどいねー 君は」

「あ あの幸太郎君 この女性は誰なんですか？」

逃走は再び阻止された五月の手を掴む方とは別の手を掴まれ

その場でだらーんと手を広げた状態となり掴んでいる

シヨートへアーの女性は笑うだけ

五月はいつそうこの状況に困惑している

「五月関わるな、面倒な人間だ！」

「うーん こうくん 彼女出来たのー お姉さんは嬉しいね 君が青春できて」

「うつせー 良いから離せ！」

「い、いえ 私と幸太郎君は、そのような関係ではなく、ただの友人で」

「えー 残念 でも二人はデートしてるんでしょ？ 若いねー」

「デート あわわ あのこれはデートになるんでしょうか」

「うんうん お姉さんから見たら立派なデートだよ 君みたいな可愛い女の子がねー」

泣かせるなよー こうくん」

「勝手に盛り上がるな 良いから手を は な せ」

「ごめんねー じゃ 若い二人の邪魔しちや悪いしお姉さんは帰るねー またね……中野五月ちゃん」

「あつ はい、………えっ何であの方 私の名前を知っているんですか」

ようやく女性は手を離すと言いたい事言って満足したのかそのまま何処かへと消えていく

相変わらずマイペースと言うか、いるだけで疲れる人だ

五月は自分の名前を知っている彼女が一体何者か頭を悩ませるが、そこまで深く考える必要はない

先程の女性の仕事医者でその上司がああ男だと言う それだけで十分過ぎる

もう会う事は無さそうだし…。

「かわんねーな みずき姐は……」

「何か知っているなら 教えてください！」

「秘密だ ほらさっさと行くぞ」

困惑したままの五月が、面白いと言うのが本音だが言ったら怒るだろうし

黙っておこう

その後数分の間 五月に聞かれ続けたがそれをスルーし
彼女にやりたい事はないか聞いていた

「んで ここが五月の来たい所か？」

「はい ここです！」

「お前は真面目な女の子だと思っていたんだがな……………」

適当に時間を過ごし何か思いついた五月に今度は手を引かれる形で目的地へとついた

正直言えば、財布の危機を感じるような場所だと思っていた俺は拍子抜けと言うか

多分間抜けな顔をしていると思う…。

「ゲーセンな 意外過ぎる 何処かで食事かと思つてたんだがな」

「私はそこまで食い意地はつてませんよ！」

「ここに来るまで何個肉まん食べた」

「うう……………」

近くのコンビニにより お腹が空いたと言う彼女にお礼として、奢る事にした別に奢るくらい俺は構わん 財布の危機は変わらんが

今回は予定していた出費を抑える事が出来たのだし

肉まんの事を言われ顔を赤くし伏せてしまう

「別に気にすんな いっぱい食べる事は良い事だ。五月の元氣はそこから来てるんだしよ」

「……………何か幸太郎君はズルいです」

「知らねえよ さっさと入るぞ」

「はい 目的自体は決まっていますから！」

「おっ おい引っ張るな」

中に入れば五月は他の物には目もくれず何処かへと向かっている
何が目的なんだろうな？

「ここです」

「おい 何だ これは」

「プリクラです」

「これに入れと言うのか」

「……………やっぱり ダメですよね」

「行くぞ」

お前のしたい事を言えと俺は言ったんだ

それがこれくらいなら別に俺は、構わねえ

まあ…学校の奴には見られたくないが

上杉がプリクラとかまじで噂されるんだろうしな

「これと これどと」

「手慣れてますね」

「そうか？ お前も何の躊躇いもなく連れて来ただろうが」

「以前らいはちゃんや上杉君と来た事がありました」

「ああー 花火の時にか 俺はバイトだったしなあ」

「ですから……………その時 幸太郎君とは撮れなかったので」

「いいさ んな事は 今は俺は居るんだし ほら笑え」

「はい！」

『素敵な笑顔でキメチャお☆』

『カメラを向いて 3 2 1』パシヤリ

ゲーセンの外に出る未だに五月は撮ったプリクラを大事そうに
持っている

そんな仏頂面な人間と撮ったやつ何が良いのか？

つき合ってくれと言うんだ、俺もそれには従うがもう少し欲を出し
ても五月は罰は当たらないと思うんだがな……………？

俺も俺で取り分として渡され

映る物じーつと見る まさか俺が、またこれを撮りに来ることがあ

るとは、死ぬまで来ないと思つてた

死んでからも来ないなきつと……。

渡されたそれを五月は鞆にしまうと俺の方を向きお辞儀をした

そこまで律儀な事をしなくてもいいぞ

「本当に今日はありがとうございました 幸太郎君 良い思い出が出来ました」

「まあ 俺も気分転換になつたし スマホも無事買えたしな そうだ五月 お前の番号まだ聞いてねーんだ もし可能なら教えてくれねえか？」

「え 良いんですか？」

「良いも何も買った理由はそれだしな 他の奴の番号は知つてもお前のは聞きそびれたし 風太郎から聞く訳にもいかねえしな」

「はい あのこれをどうぞ 書いてあるので」

「準備が良いこつた んじゃ帰つたら入れておくか」

「私も教えようと思つていたんですが、タイミングが無くて」「そうなのか 悪かったな最近は忙しくてな」

五月は鞆から一枚の紙を取り出し

そこには彼女の番号とアドレスが記載されており

先日から準備をしていたと話す

何処か気恥ずかしいのか少しうつむいている

俺も聞くタイミングを逃してたし お相子だろうな

五月の願いも聞いたし このまま帰宅しようとして彼女に提案する

「ああ 五月の用事はいいのかわ？」

「私のは はい きちんと完了しましたので」

「なら帰るか」

「送ってくれるんですか？」

「一人で帰らせる馬鹿じゃねえーよ 行くぞ」

先に歩きだせば五月は慌てたように追いかけてくる

「改めて今日はありがとな」

「こちらもお役に立てたようで良かったです。では幸太郎君また明日」

「おう また明日な 勉強できそうならやっておいてくれ中間試験も近いからな」

「心配しないでも大丈夫です 私なりに続けますから」

「そうか 本当に厳しい時は俺は力になるからな」

「その時が来たら 声をかけます」

「あつ そうだ 五月」

「はっはい 何ですか」

「聞きたい事があるんだ……………」

「幸太郎君が私に……………何ですか？」

俺はふと花火の日に聞こうとしたが、聞きそびれた事を思いだし
彼女に尋ねて見る事にした

『何でしょうか？』と今日何度見たか分からないその表情で俺を見て
いる

アドレスもだがこの事が重要だった すっかり忘れていたのだ

「五月 中野六花って人間 知ってるか？」

何も救いが無いあの時の俺を救ったあの少女の手がかりはない
知っているのは彼女が誰か探していた事そして ヘッドホンを首
にかけていた事だけだ

五月は知っているんじゃないのか、俺は彼女にもう一度あって
お礼を言いたいのだ……………。

(あれは コータローと五月？何で入り口で話してるんだらう)

少し後方で買い物帰りの三玖がいた事を俺も五月も気づく事はな
かった。

第二十三話 不良少年と迫るテスト

12月のあの日 俺は初めて彼女を見かけた

「君は優しいんだね」

彼女は語り掛ける

その表情は何処か切なさを感じさせ

何を思い 彼女はそんな悲しい顔をしているのか

この人はどうしてそこまでその人を探すのか……………

名前も知らない人

大切な人

そんな人を彼女は探す……

手伝うと決めた以上俺もその人を探す事を諦めるわけには行かない

困っているなら俺は彼女に手を貸そう

少し話したただけだが、今の俺を救うには彼女の存在はとても大きいものだった

「ではまた 上杉幸太郎さん」

ではまた と彼女 中野六花と名乗った彼女はそう言った

『また』と言うのだ ならもう一度彼女と俺は会えるのだろう

同じく限られた手がかりで

かつて出会ったあの子と俺はまた再会する事が出来るのか……………。

「コータロー コータロー！」

「おっすまん 折角の勉強会なのに俺が教えないでどうすんだ……………」

「大丈夫 少し気になったただけだからでも無理はしなくて良いよ」

「無理？ してねえよ とりあえず今は出来る事を一歩づつやらねえと」

図書室へは俺と三玖しか居らず

一花や四葉ももうしばらくしたらつくど教えてくれた

風太郎はと言えば 先ほど五月に真正面から「ただ馬鹿だけなんだ！」と堂々と言い

再び怒らせる結果になり 俺の仲裁なぞ入る前に終わってしまった

『幸太郎君に迷惑はかけられません 安心してください』と笑顔で返された

「五月かあ……………」

問題はその五月だ 昨日の帰り

彼女を家まで送り届けた後に俺はあいつに聞いてみた

『中野六花と言う人間を知っているか』と俺の事を詳しく知る

五月に聞けば何かわかるかと思っただが結果はと言えば

『中野六花さん……………？ いえ親戚にも居ませんし ごめんなさい

幸太郎君の力にはなれそうにありません』

頭を下げられただけで成果は何もなかった

表情自体も嘘を言っている訳でもないし 隠し事をしてると思

えない…。先ず理由もねえと来た…。

中野と言う苗字で少しは、関係あるかと思っただが、当てが外れたか？

再び考え事をしてしまい気づけば隣に座る三玖がこちらをじっと見ていた

俺の視線がそっちに向かえば顔を逸らしてしまう

何だろうか最近の三玖はやたらとこっちを見てる事が多い気がするんだけど…。自意識過剰だな

「どうしたの何かついてるの？」

「いや 綺麗な顔だなーと」

「……………!!」

「あぁー わりい」

何を口走ってんだ俺は、そんな事言うから三玖は俺から距離を取ってしまった

今の発言は痛すぎた　五月もそうだが、三玖とはあの一件もあり
距離感覚を忘れがちだ…。

「急に言われてびっくりしただけだから」

「俺も悪かった　少しな色々とあってな」

「そうなんだ……悩み事」

「そこまで大した事じゃねーけどな」

「でもずっと　うわの空で何か考えてる」

上の空か昨日の事が気になりすぎて風太郎と五月の事を止める事
も出来ない位には…。重症なのは確かだ　人間と言うのは、手がかり
があれば期待を寄せる

ただそれが絶たれた場合のダメージは本人が抱く想いも合わさつ
て倍以上の重みとなって帰ってくる

今の俺はまさしくそれだ。

自分では顔に出さないようしてるんだが、周りにはそれが丸わかり
と言う

五月にはああ言った事を聞いてしまい少し顔を合わせずらく

普段より距離を開け　昼飯も見つからねえように行動していた

勉強会までそんな面で来てるんだ　辛気くせーよな

「もし何かあれば私が力になる……コータローには花火の日に助け
てもらったから」

「あれは　知らねえおっさんに手を掴まれてんだ　助けるだろう？」

「必死に追いかけてきてくれただけでも嬉しい」

「必死ねえ……」

朝の風太郎はまさにそれだ

来週には中間試験が待っている

その結果次第ではあの人の事だ…。何を条件にして来るから分か
らねえ下手したらこの仕事も下ろしにくるぞ

そんな事にでもなれば最悪だ　家の問題もこいつらの問題も何も
解決しないまま変な気持ちのまま残りの学園生活を送らねえといけ
ない　それだけは避けたい…。

風太郎の負担を少しでも減らし　あいつと他の二人との仲も良好

になれば、それが万々歳だ

ちよつとした事で拗れて見ろ。修正は難しいぞ

心配してくれる三玖にもこれ以上そんな泣きつ面させたくねえしな

五月と言い三玖も何でそう直ぐに悲しそうにすんだよ

「俺は大丈夫だ……。三玖が頑張つて勉強に参加してんだ。それはきつと成果として出てくる」

「実感はあまり湧かない。少しのミスで頭から出ていきそう」

「そう言う時は何かしら好きなもんで。例えれば良いんだよ。まあ日本史に関して言えばお前は俺よりも上だと思つてるから。俺は三玖を信頼してる」

「そうかな。私でも間違えるときはあるから」

「それでもだ。間違える事を恐れる事無く挑んでんだ」

間違える事を恐れないか……

またブーメランが刺さる事言うなこの馬鹿は、はあ何だか今日はネガティブに捉えがちだ

パンパンと顔を叩き気合を入れなおす

結構響いたのか周りも見てくるが、視線なんざ今更だ

「痛そう」

「まあ。少々気合は入れすぎたかな。あつやべ。落ちた」

思いの外力が入っていたようでコンタクトが落ちてしまい間違つて踏んじまった

ペツキ

嫌な音がしたが、無かつた事にする。三玖にはじつーと見られたがやめろ

コンタクトに替えた事で時折これがあるから困りもんだ

眼鏡ならそうも無いんだがな。鞆からケースを取り出し中から黒縁メガネを装着した

人前で付ける事は最近なかったし。以前は、付ける前に忘れあの場面に行くわしたりと散々な目に遭つた。まあ……二乃の方が散々だったけどさ……。

「これでいいな」

「……………」

「何だ 三玖変か？ まじまじと見られると気になんだが」

「に 似合ってるよ……………」

「お ありがとな この髪だと眼鏡はあんま似合わねえと思ってるからそう言われるとちっとは自信がつく」

「ふふ」

「何だ笑う事があったか」

「何でもないよ」

「変な奴だ 俺の方が変だけど」

「自覚あるんだね」

「今日はやけに素直に感想をいつてくるな 三玖さんは」

表情自体にそこまでの変化は、見れないが、何処かこの状況を楽しんでるように思えた

勉強が嫌いとは言ってたが、日本史となれば話はべつなんだろうな
暫くすれば一花や四葉も顔を出してきた

元気よく声をかける四葉は行われた小テストの答案を片手に『い

やー 難しいですよー』

と何だか他人事に言うがもう少し気にしておいてくれ

一花は俺見てにやりと笑っている

「コータローくん 眼鏡なんだ イメチェンかな」

「さつきコンタクトを踏んだからな……………」

「災難だね 君も」

「おお 本当だ お兄さんが凄く賢そうです！」

「目の前で喧嘩うってくん な イメチェンって言うなら 四葉もだろ
う」

「えっ」

「リボンの柄違う お前こそ気合でも入れ直したのか？」

「まさか お兄さんがそこまで乙女に敏感だったとは 私から言おう
と思っただんですが 上杉さんには秘密で問題としてほしいので！」

「よーし なら俺からもお前に何か問題でも出してやっかなー」

「ご勘弁を……………」

「諦めんな まだ何も俺はいつてねーよ」

普段とは少し違うのは四葉も同じだったうさ耳リボンは柄が違う

「風太郎が来たらあいつから話す事があるかも知んねえし 聞いてやってくれ」

「うーん？何かな あっ そう言えばさ コータローくん新しく買ったスマホ見せてよ」

「関係ねえーだろ」

「そうですよ お兄さん見せてください」

「勉強をしろ 勉強を！」

「見せてくれれば 頑張るからー ね」

「っ ほらよ」

ポイツと嫌々ながら机に乗せる

それぞれが謎の食いつきを見せる それを勉強に使って欲しんだがな

「白とは意外だね」

「まあー 元は5色から選ぶ筈だったんだけどな」

「五色……………コータローは選んだの？」

「選ばなかった」

「ふーん」

「何だ 一花文句あつか？ んで5色はなくて 6色目があつてな必然的にそれになった」

「コータローくんも助かったね 二重の意味で」

「たかが スマホの色だろ？」

「うん まあそうだね さて適当にやりますかねえ」

なんだろう 激しく不安になってきた

まじでこいつらは中間試験が近い事を知らねんじゃねーか？

何とか勉強をしてきてくれたのだが、正直言えばこのペースで行って間に合う自信はあまりない

ただ無理な方法だと頭から抜け出るし 今のこのやり方で着実に

覚えさせる方が良いんだろうな

楽しい？勉強会は進み風太郎も合流する事になるが、二乃の説得に失敗する所かくつきり頬に後が残るくらいの力で叩かれた形跡をつけて来た

『痛そう』と言う感想しかでないな

兄弟にして同じ個所を殴られるとはシンクロニシティでも言え方がいいのか

焦りを感じさせながらも風太郎は彼女達に勉強するよう言い

来週には迫った中間試験の事も伝えている

案の定一花辺りは、気にも留めめて無さそうで

『林間学校だー』『楽しみ』と言う女子の会話が聞こえてくる

そういう事を言うところいつにまたストレスがかかる

今も何処か表情は険しい……。

「おっ お前英語をやってるのか苦手な科目を挑むのは良い傾向だ」

「うん 少しは頑張ろうと思っただけ」

「頑張るって事が大事だ 気持ちと行動は噛み合わせ もんだからな」

「気持ちと行動か………」

「何かまた俺言っちゃったか？」

「気にしないでいい」

「よーし 私も頑張りますー！」

四葉も気合を入れて声をだし 勉強を開始した

先程も風太郎にリボンの柄とテストのチェック柄で叱られていたし

こいつなりに気にしてんだろうな

風太郎も教えていく中で時間が足りないと言葉に出さずとも

兄である俺には、分かってしまう

だがあまり焦り過ぎると何か大事になりかねん

余裕を持ってと言いたい、そうも言つてらねえからな……。

鐘が鳴り俺達も帰宅の路に入る

靴を履き替え外に出れば 解放されたと声をだし動き回る四葉の姿が目映る

お前は本当に元気だな……………。

「ふうー」

「いいいいいい 何にしゃがる」

「何時も怖い顔してるのに そんな眉にしわなんてよせてさ 心配しなくても私達も頑張るからさっ

じつくりつき合つてよ」

「氣遣いに言葉なら 俺じゃなく 風太郎に言つてやれ 俺はただの補佐だ」

「お に い ちゃん」

「了解です」

「素直でよろしい」

耳に当たる温かい空気 さつと横にさけ確認すれば

一花が立っていた

どうやら俺の顔は辛気臭さが出てたようで声をかけた

また『お兄ちゃん』といじられたが、それでも頑張つてくれると彼女は言ってくれた

先程も適当にと言いつつ最後までやり遂げてくれたんだ感謝しねえとな

もう少し彼女達の実力を信じよう

一人に出来る事は全員出来るかもしれないと言う希望はまだ潰えてはいない

それに今は彼女達と同じく いやそれより重症なのは弟の方だな

二乃や五月の交渉を失敗させたのはこのタイミングでは大きな損失だ

少しは風太郎本人にも気を配ろう 最近は疎かにし過ぎてた気もするしな

四葉達がこつちに手を振り 俺達を待つ中

一人とぼとぼと別の方向へと向かうあいつを見て俺は三人に手を振り返し

風太郎を追いかける事にした

「お兄さんもいちやっただ」

「男子二人とは花がないね」

「……………」

「三玖 やっぱ寂しい」

「別にそんな事はない 早く帰ろう」

「あぁー待ってよー 三玖ー」

足早に去って行く風太郎を俺は追いかけた

三人には出来る限り勉強して欲しいとだけ伝え『無理はするな』とも注意はしておいた

頑張ってくれているが、中々彼女達の成果は出ず風太郎も焦るばかりだ

下手に打って出て問題を広げなければいいかと不安が募る

結論から言えば問題は起きようとしていた

俺が彼の元につけば 五月が風太郎と共にいた

あいつは誰かと電話をし いっそう焦りの色を滲ませ

勢いに任せ 彼女のスマホを下に投げようとし我に返ればそれを五月に返し謝罪を入れる

どうやら安心は出来そうだと 俺は少し安堵したが、そう簡単には解決しないという事を目の前で見せつけられた 朝の時と良いこいつらはどうして直ぐに喧嘩をすんだ？

元をたどれば風太郎が五月に言った言葉と態度が原因でそれが延長戦となっているだけなのだが

もう少し穏便にと 自分の事も棚ね上げて俺がいるのだがな

「黙って俺の言う事を聞いていれればいいんだよー」

これは不味い本格的に修正が困難になってしまう

焦りから出た言葉でもその発言は言っではいけない

少しづつだが風太郎の頑張りを五月は認めつつあった

花火大会の日で四葉の搜索や諦めず続けた勉強会など 彼女もそれを
見て来た

だが それが今崩れようとしている

「所詮お金の為ですか」

「金のために働いて何が悪い」

「やめろ お前ら！ いい加減に頭冷やせ」

「幸太郎もそれどころじゃないんだ！ 今やらないとダメなんだ後がないんだ」

「お前らしくないぞ 少しは冷静に」

「冷静だよ 俺はお前と違ってお気楽主義じゃない なる様になるとか考えない」

「それは あんまりです！ 彼は頑張ってくれています」

「なら何でお前は俺達に勉強を教わろうとしない！ こっちだって必死なんだ 仕事じゃなければ誰がお前なんか！」

「無理して教えてもらわなくて結構です 私は あなたのお金儲けの道具じゃありません」

「そうかよ 後悔しても知らねえからな」

「ええ！ 例え退学になっても あなたからは絶対に教わりません」

「お前にだけは絶対に教えねー！」
最悪の展開だ これどうやって収集付けばいいんだ？

二人の言い争いを止める事も出来ず風太郎はそのままアパートの
方向へと走り去り

一方残された俺と隣で顔を真っ赤に肩を震わせる五月と言う気ま
ずいってレベルじゃない

あいつを追いかけたが、今は五月を家まで届けるべきだろう
あの怒りようだ、それぞれ何があったのか聞きたいところだ

「はい 分かりました 幸太郎君 父からです」

風太郎が去って少し見計らったようなタイミングで五月の電話が

なり

相手側が俺に用事があり取り次いで欲しいとスマホを渡してきた
五月は、何も無いと言うが、今にも泣きだしそうだぞ

嫌々ながらも電話を受け取り 俺はその相手と会話をした。

「どうも 上杉君 弟くんと同じく 娘達が世話になってるね」

「っ どうもお久しぶりです 中野さん」

「こうして話すのもあれ以来かな」

「去年の6月に話したのが最後ですね」

「君も随分とあの頃より変わったようだね」

「思い出話は結構だ あんたも俺が嫌いだろ それと先ず言っておく

携帯代の事だ余計なお世話と言いたい为正直言えば、助かったあり

がとうございます それだけだ」

「その件は僕の独断だ 五月くんは関係ない」

「くんとか付けるな 娘だろうが！」

「君にとやかく言われはないよ」

「ああ そうかい 用事がないなら切るぞ」

「その様子だと 何かあったようだね」

「そう言うのは良いから あいつに何を吹き込んだ！」

「中間試験で誰か一人でも赤点をとれば彼には家庭教師を辞めてもら
うと 当然だ娘を預かる身としてはきちんと実力を把握しておきた
い」

想定した最悪のケースだ 次の中間試験まで誰一人として赤点を
とるなだあ？

無理にも程があるぞ 俺が知る限り一番勉強してる三玖も日本史
以外は厳しいし

目の前にいる五月も努力はしてるが、風太郎の言う通りだ 今の方
法では確実に赤字だ

二乃は論外 一花や四葉はもどうなるんだ。

卒業まで一年近くあるんだぞ そんな無理な条件出すなら最初か
ら依頼してくるな

「僕も父親だ そのこの所はきちんとしておきたいんだ」

「っ……」

「君が何を思おうが彼には辞めてもらう」

「わかった あんたがその手で来るならこっちも覚悟をきめる」

「君が覚悟とは、その言葉 本気と受け取って良いんだね？」

「俺にも俺のやり方がある！」

「そうか それと上杉君 君は本当に何も異常はないんだね」

「しつけーな 体の事なんて俺が一番知ってるんだ 異常とかなんもねえーよ！」

「了解した 最後に一つ」

「なんだよ？」

「君だけには 娘をやる訳にはいかない分かってくれたかい 僕は君が嫌いだ 上杉幸太郎」

「……………うるせ お互い様だ」

「では健闘を祈る」

「あばよ中野先生…………… ほら返す」

ほんとあの人は、昔から苦手だ

声も態度も全部が苦手だ だけど憎むに憎めない 憎み切れない と言った方が良いだろうか

俺も俺だついつい感情的になって怒鳴ってばかりだった 少し冷静になるべきだった

五月はずっと驚いた様子でこっちを見てたし 彼女は事情を知らないと見るべきだ

口留めされる訳でもないが、これをネタに協力を持ち掛けるのは俺の信条に反する

一花の時とは状況が違い過ぎるしな 五月に頼るとしたらそれは更に状況が悪くなった場合だ

「あの 幸太郎君は随分と父とは親しいようですね」

「あれ 聞いて良くそう思えるな」

「会話まで聞こえませんでしたか 父を相手にあそこまで話す人は私は知りません」

「前も言ったが 色々あったんだ」

「それで 幸太郎君 さっきの言った 体に異常とは何ですか？」
「だから 何もねえーよ 俺の事なんかより先ずは風太郎と和解する
か勉強するべきだろ」

『俺なんか』ではないです 何かあれば言ってください 力になりま
すから」

「いらねえーよ お前は中間試験に集中してくれ」

「幸太郎君は そうやって何でも秘密にするんですね 私では頼りに
なりませんか？」

「関係ないだろ 今は俺の体は何ともねえーってんだろが」

「そうですか……………詮索するような事をしてごめんなさい 幸太郎
君 では私はこれで帰ります」

「あつ…………… 何やってんだ 五月に当たってどうすんだよ」

凄く悲しい瞳だった

五月は一礼すればそのまま向かってしまう

あいつが何処まで知ってるかは知らないが心配から来る言葉なら
もう少し聞いてあげるべきだった

それを俺はあしらう様にし 相手にしようとしなかった

怒ると言うより 彼女は何処か悲しそうな目をしてそのまま帰っ
て行った

風太郎の事を言えねえな……………。

最近はどうしてこうも面倒な事が立て続けに起きるんだよ

風太郎とは帰って話せば何とかかなりそうだが、五月に関してはお手
上げとしか言えない

あと一週間でどうにかなるのか……………？

してみせねえと俺達も中野姉妹もお先真つ暗だ

第二十四話 不良少年と泊まり込み

「自分の人生どうにかしろー!」

中野宅で人生ゲーム真つ最中

現実でもゲームでも厳しい生活を送る風太郎の人生は世知辛いと
し言いようがない

俺は自宅に帰ればまず初めに風太郎に頭を下げた

そして自分も同じく 中野父と話をし風太郎があそこまで焦りを
見せた理由も知ったと話す

最初は複雑な顔だった弟も『俺も悪かった 幸太郎がいなかったら
もつと厳しいままだった』

と言いつつ何か弟とは仲違いのまま終わるケースは避けれた

彼に何としても五月と仲直りをし 彼女と協力して欲しいと告げ
れば

こいつも少なからず反省はしているようで 言い過ぎた と顔を
伏せながら言う

その言葉は俺ではなく 五月に言ってあげて欲しんだがな

『お前は何ともなかったのか?』と珍しく気がきいた事言ってきたが

俺の問題は、別に中間試験とは無関係で起きた事だし五月は何も悪
くない

「どうすっかな……………」

「コータロー フータロー…………何かあった私達 そんなに危ない?」
「……………」

また声に出してたのか三玖がこちらを見ている

彼女じゃない 一花も勘が鋭い人間だ下手に動けばぼろが出る

こいつらに事実を伝える訳にいかないと言うのが、俺の考えだ

プレッシャーと言うものは良いも悪い人を押しつぶす

俺の願いは笑顔でこいつら勉強し卒業する事だ

勝手な言い分で風太郎にも『お気楽』と言われても反論は出来ねえ

…

五月にも言うか言わないか未だ考えており

結局そのまま時間が経過し今に至る訳だが、どうも最近は頭が冴えないね

今は勉強を教え 着実に伸ばしていくしか道はない
そして一番厄介な存在と言え、今まさに こちらに歩み寄ってくる

姉妹の次女 中野二乃だ 知られでもしろ

確実に邪魔をする 異分子とされる俺達を追い出すにもいい情報となってしまう

「私もやるー あんた代わりなさいよ」

風太郎を退かすと彼の代わりに手番を貰うと二乃は所持金の少なさに呆れている 言うなそれが事実でも言われると心に響くんだよ

「ねえ コータロー?」

「何でもねえーよ」

一番頑張っている三玖には言う訳には行かない

これ以上心配をかけたくない

「アンタも交ざる?」

ふと俺の後ろに声をやればそこには五月が立っていた

こちらから視線を逸らし 見ようとしな

風太郎は咄嗟に謝ろうとするが、彼女は聞く耳を持たない

「五月 風太郎が話があるって」

「私はこれから自習があるので失礼します」

「そうか……無理はするなよ」

「……………」

呼びかけに答える事はなく

五月はそのまま玄関の方へと向かおうとしていた

「ほら あんた達も今日のカテキョーは終わったんでしよう 帰った
帰った」

「ちよ 二乃」

「待てまだ!」

二乃は俺達二人の背中を押しさつさと追い出そうとする

彼女の言う通りだが、このまま帰ってしまったえば何も変わらねえ
少しで良い 風太郎と五月の仲直りのチャンスでも欲しい

その時 天からの助けだ

「待って二乃 フータロー君もコータロー君も何言ってるの？ 約束
違うじゃん 今日は泊まり込みで勉強教えてくれるって話しでしょ
う？」

『え ええー』

二乃と風太郎の声がシンクロする

どんな理由かは知らないが、一花がくれたチャンスが無駄にする訳
にはいかない

(一花 ありがとうな)

(何の事かなー?)

――

――

――

勿論泊まる予定なんて最初から無く察した一花の起点だ

その為着替えなんて持ってきてないし 風呂から上がれば着てい
た服をそのまま着る事になる

と思えば 四葉が適当に服を持ち出しそれを着るよう言って来た

中野姉妹が上がった後に 俺達が入る事になり

風太郎が上がった事を確認すれば入れ替わる形で俺は風呂場に向
かう

他人の家での風呂とは随分久しぶりで最後に来たのあれ以来であ
る

最初は風呂は断る予定だったが『流石にお風呂入るべき』と一花に言われてしまい渋々借りる事に

服を脱げば 嫌でも俺が入りたくない理由が分かる

「相変わらず ひでえ 体」

洗面台にある鏡に映る 俺の体一応は鍛えてるから見られても肩までなら良いその先だ

喉元にある切り傷と胸にある大きな手術痕 背中にも軽く傷痕がある

きちんと塞がってはいるが、未だに生々しさが残っており
お世辞にも他人に見せられるものではない…………。

俺が他人に喉元を見られたくないのはこの傷のせいだ

胸から下なら隠しきれるが ギリギリ喉元まで傷はあり

服もらいはが特徴で縫ってくれた服で隠してあるし 冬服は人より早く着ている

そつと触るが痛みはない ただ最近の痛みの原因の一つもきつとこれだろう

「何時までセンチメンタルになってんだ らしくねえ さつさと入ってさつさとあがるか」

こんな高級なマンションのお風呂に入るとは

少し前の俺なら『うそこけ ぶっ飛ばすぞ』とガンを飛ばしていただろうな

俺も変わり始めて来たのかもしれないそう思うとこの機会をくれた

中野姉妹と俺にこの話を紹介した風太郎には感謝しなければなら

ない
そのためにも今は、あいつらの仲だけでも良い それくらいは改善しないと後悔したまま終わる

それに今は風太郎が勉強の準備をしている 時間が増えたと考えよう

「あつたけー こんな大きい風呂 初めてかもな…。」

一度お湯で体を流しその後湯船につかる
疲れも何も飛びそうだが、今はそんな事考えてる暇はないな

「幸太郎君 五月です あなたから私に話したいことがあると 一花に言われたのですが何か御用でしょうか？」

「?!」

五月が突然現れた…。

風呂場の前に立ち 顔は見えないが立ち姿で確認は出来る

一花に言われてきたと話す彼女に少し混乱したが、扉越しなら見られる事もない…。それにまた一花に気を使わせたようだ

あがったらお礼を言わねえとな…。

「ああ そうだ 来てくれてありがとな」

「話したい事とは何でしょうか？」

「昨日は悪かった 風太郎も感情的なただけなんだ 家の事情は知ってるだろう？ 俺以上にあいつは真面目だ だから真剣なんだ」

「何かあったんですか？」

「何かか… お前だから言うが…。このままだと風太郎は家庭教師をやめさせられる 誰か一人でも赤点をとった時点で 俺達は終わる」
「そういうことでしたか」

ガラリと風呂場の扉が開けられた

咄嗟に後ろ向く

やばい 湯気でいくらかは隠せるが、このままだと見えるぞ

何でこいつは躊躇いなく 開けやがる？

つうか やっぱりおかしい気がするこれは本当に五月か？

いや違う！

「前に 私の裸を見たんだから これでおあいこでしょ 弟は何時もだけどアンタと五月の様子が特にへんだったから来てみたら っつて 何すんのよ」

「お前は乙女だろうが 男の裸は好きな奴にしておけコラあ！」

俺の勘は五月でないと告げ 扉が開けられこいつが入ってくる前に

湯船から出ればすぐに彼女を風呂の外に押し出し脱衣室に戻す
流石に少し見られたと思うが、全部見られて変な勘繰りされるよマ
シだ

今は洗面台と風呂場で扉の開け閉め合戦 対抗ロールが発生して
いる

「あんた 恥ずかしくないの!」

「見に来たおめえが言うな とっと出ていけ!」

「でも 良い事聞いたから 赤点でクビねー まあそれで良いかい
ま は」

「っ……………」

事実を知って満足したのか、二乃は不敵な笑みを浮かべ去って行く
(……………あいつの背中と胸に何かあった気がするけど今は良いかし
ら)

「はあ……………やべえ奴に知られたあ」

その場でへたりこみ 一番厄介な人物が本当に厄介な敵になった
事と

自分の浅はかな行動を後悔した。

彼女が去った事を知ると俺は風太郎にスマホで連絡し一旦来るよ
う指示した

「すまん……………二乃にバレた」

「なっ なんて」

「五月に成りすまして聞いてきた 俺のミスだ」

「あいつにだけは知られたくなかった」

「風太郎 最悪手段はある……………」

「無理だろ あいつは邪魔する事に勤しんで勉強には勤しまないぞ」

「言い訳はしない」

「それと 傷は見られたか?」

「多分 見られてないとは思う 咄嗟に風呂から追い出したからな
「なら それでいい 俺は先に戻る」

俺を恨んでくれていい弟よ

見た目の判別なら自身はあつたつもりだが、あそこまでガチで声のトーンまで真似してくるとは

姉妹は恐ろしいぞ

風太郎は怒りは出さずもやはり頭を抱えてしまう

一番厄介な人物が貴重な情報を手に入れたのだ、確実に妨害してくる

誰にどうばらされるか分かんねえ状態だ

余りにも軽率過ぎた もう少し警戒するべきだったな

「うーん 見えないよな？」

借りた服を着れば喉も隠れ傷も目立たないだろう

――――

――

――

「お兄さん 遅いですね」

「きつと美少女たちの残り湯を堪能してるんだよ」

「!!」

「呼びに行く？」

「お風呂……………いいよ さつきフータローが行ったから」

「せっかく コータローくんもバイト休んで泊まってくれるんだし積極的にアプローチしなよー」

「な なんのことだかわからない」

「あつ帰ってきたー おかえりなさいー」

「お おう いい湯だったぞ」

「よし 幸太郎 じゅ 準備するぞ」

「そうだな……………」

「さて幸太郎も来たところだし さつそく試験対策をに にの一緒にど

うだ」

「あ 私は必要ないから」

風呂から上がれば四葉が元気よく声をかけてくれる
今の癒しはこいつだな

一方二乃はスマホをいじり一向に参加する気配はない

ばらされてないだけかもしれませんが、このまま参加しないで終わるのか？

三玖や一花も既に準備をしているし彼女達のやる気があるうちに
出来る限りをしてやろう

だから二乃お前も参加してくれよな。

「さて始めるか……………」

「はーい詰めて詰めて」

「おっと」

「三玖が分からない所あるってー」

「一花……………」

「ここかあー でも三玖から聞いて来るとは珍しいな」

「ふふふ」

「よーし 任せろ答えてやるぞ お前らわからない所があったら何でも聞いてくれ」

「上杉さーん 「討論」 って英語でなんて言うんですか!？」

「良い質問ですね ? e b a t e これは確実に今回の試験に出るぞ
「でばて」と覚えるんだ!」

風太郎は苦肉の策 声を上げて出来る人間アピールと問題の内容
を教える二重戦法を開始

如何にもとあったように大きな声だが 二乃は興味は一切なし
マホしか見ていない

「お兄さん…………… 結論ってどういのですか!」

「結論か c o n c l u s i o n 俺は「カーンクールジャン」って
覚えてる」

「ふむふむ 了解しました かんくーるですね」

「カーな 発音は面倒だが覚えればすんなり行けるぞ」

討論に結論か今の俺達みたいだな

幾ら討論しても結論は変わらない このままだと確実にクビになると

どうにか覚えやすい単語を俺も二乃に聞こえるよう言うが、スマホしか目に入っていないようすだ

「教えて 欲しい事 好きな女性のタイプ」

「え」

「え」

「え」

「三玖さん あのですね 意味が」

「私は俄然興味ありますー」

「そんなの知りたければ教えてやる 俺の女子の好きな要素トップ
3」

「風太郎 お前……………」

「流石に コータローくんも答えてくれよね？」

「風太郎だけでは？」

「ロマンティックな事言う コータローくんの好み気になるな」

「はー 分かったよ」

突然行われた 俺と風太郎の好みを教える問題

別に構わないけど 面倒だよな。

何気に風太郎もノリノリだったりするし

ノート1ページに一個づつフリップの下から剥がしていく形式で
ある

扱いやすいと思うが気が引けるな

「はい出来た」

「第三位 何時も元気」

「第三位 真面目で素直」

「はい 次！」

「第二位 料理上手」

「第二位 料理上手」

「終わったよ」

「よーし 第一位」

『お兄ちゃん 想いだ!』

「つて それはあんた達の妹ちゃんでしょ!」

俺と風太郎の声は後半はほぼシンクロしていた

まさかここまで好みが被るとは流石兄弟と行ったところか

最後が発表されたと同時に椅子から立ち声を上げた二乃

「どうやら聞こえていたようで『嫌でも聞こえるだけ』と本人は言うが

俺と風太郎は一瞬目を合わせた

(これはいけるのでは?)

「真面目で素直……………」

「お兄ちゃん想いね コータローくんも面白い事言うね」

「別に騙した訳じゃない 俺が今思うのがこれだってだけだ……………」

「俺のスタンスも前に言った筈だしな」

隣の少年は恋愛事は無駄と言いつ張っていた

俺の方は恋愛は否定もしないが、俺には無理だ…。

そう言った事は諦めている 他人との距離を開けてしまうだけだ

そんな人間に……………」

「三玖 課題終わったんだ コータローくん頑張った人は褒めないからね」

「おう 三玖お疲れ良くやった」

「……………」

「どう ドキドキしない?」

「人並にはな」

「ぶー 四葉チェック」

一花に言われ そのまま手を三玖の頭に持っていかれ撫でる形になった

この感覚は懐かしいな

小さい頃にこうやって撫でた事があった けどこいつらは覚えてないだろうな

俺の答えが不満なのか 一花が四葉の名前を呼べばあいつは俺に

とびかかるようにし

胸に耳を押し付ける

「やめろ 離れろ」

「うーん…………… これは」

「はーい 終わりだ」

「あの お兄さん」

「良いから終わりだ 四葉も頑張ってたんだ 風太郎手を貸せ」

「おっおい 幸太郎！」

「お兄さん！ 上杉さん あのう……………」

ノートを見れば四葉もある程度は進めており

彼女もきちんと努力してたんだ 報酬は貰うべきだ

隣で素知らぬ顔そする風太郎の手を取り 四葉の頭に乗せれば、自

然と彼女は静かになってしまう…。

「お疲れ」

「感想はそれだけか？」

「特には」

「冷めた弟だな おめえ？」

「コータローくんがそれを言うんだ…」

何を呆れてるんだ？

「騒がしいですよ 勉強会とはもう少し静かな物だと思ってきましたが」

「ごめんねえー」

上の方から声が聞こえ視線を送れば冷めた目でこちらを見ている

五月がいた

少々疲れたようにも見えるが大丈夫なのか？

「五月 参加しないか？ 風太郎も悪気があって」

「三玖 ヘッドホンを貸してもらっていいですか？」

「いいけど なんで？」

「一人で集中したいので」

「五月 頼む……………」

「すみません 幸太郎君 私はあなたの足手纏いにはなりたくありません」

せん」

「どう言う 意味だ？」

俺の足手纏い？ 別にお前を足手纏いと思った事は一度もない

お前は確かに俺に毎度の事絡んでくるが俺はそれをそんな風に捉えた事は一度たりとも無いんだぞ

心では何とでも言える ただ昨日の事が尾を引くのか それを口に出す事は出来ず

三玖から借りたヘッドホンを手に持ち去って行く彼女を見ている事しか出来ず立ち尽くしていた

「五月……………」

「コータローくん ちよつと外出ようか」

「一花 分かった 風太郎後は頼んだ」

何かを察した俺は彼女の後を追いつつベランダに向かう

—————

—————

—————

「綺麗な空だな」

「うん それとコータローくん オーディション受かったよ」

「良かったじゃねーか！ お前の道は続くんだ」

「ほんと嬉しそうに君は、語るんだね」

「夢や道は誰にも持つ権利はある それを俺は純粋に応援してるだけだ」

最上階とはよく言ったものだ 想像してたものより何倍も空は綺麗だ

普通ここまで星は見えないものだが、見ると心も晴れるかもな

……。

案内した本人は先日行われたオーディションの結果を俺に教えてくれた

彼女は無事に夢に近づく事が出来た それはとても喜ばしい事だ

中途時半端な俺とは違う 一花は頑張つて掴んだんだ

『君は一度考え直すべきだ』かつて誰かがそう言った俺は何も言い返せず

何も出来ないまま今を生きる 須藤が俺に切れる訳だよ

「コータローくんは夢はあるの」

「俺には………ねえよ 夢なんて 持つ事は金輪際ないだろうな」

「それは 寂しいね 君はあれだけ他人の夢を応援するのに」

そんなたいそうな物を俺は持っていない

きっとこれから持つことは無いだろう

俺には夢なんてないんだ

「そんなもんだろ んで 一花 本題は？」

「じゃ 聞くけど 五月ちゃんやんと喧嘩でもしちやつた？」

「喧嘩ねえ………風太郎はしてたぜ」

「二人は何時もだからね でもさっきコータローくんは仲を取り持ちうしてたの見たし」

「あいつらには早く仲直りしてもらいたいからな………」

「あの子とフータローくんは似てるから 似た者同士」

「それは言える」

「でもね 喧嘩をするなら仲良く喧嘩して欲しいんだ きっとあの子もいじになつてると思う

フータローくんもでしょ？」

「そうだな アイツは昔からそうだ 本当の事は言えず不器用でさ俺とは何度も喧嘩した」

「あの子もそう 不器用で素直じゃない だからきっと今も一人で苦しんでいると思う

「コータローくんには特にそう言うの見せれないんだと思う」
「なんで 俺にそこまでするのかわかんねえーけどな」

「私にやれることはやってみるけど きつとこれは君達にしか出来ないことだから お願いね」

昔から何も変わっていない 一花は本当にいい姉だ

俺はそんな一花だからだろう 長女と長男という似た関係だから

少しは本音を言えるのだろうか

「それでさ コータローくんの方はどうなの」

「俺はアイツに迷惑をかけたくなえ……………世話になつてるのもあるけどよ

五月に 誰かにそう言った事させるのが俺は嫌なんだ ……………

だから俺は俺に出来る事をしようと思う」

「うん コータローくんなら大丈夫だよ」

「お前は立派に長女してるよ 五月の事も考えてる 自分の出来る事を分かつてる」

「……………この手は何かな お兄ちゃん？」

「お礼つて言うには割にあわねえーけどな それとありがとな一花」

「!!」

『ありがとね 一花ちゃん!』

「どうした一花？」

「な なんでもない」

「そうか なら戻るぞ 寒くなってきたしよ」

「寒いかな あれ なんだろう……………この感覚 さっきの言葉……………」

—————

—————

—————

「風太郎 お前聞いてただらう?」

「……………」

「今からでも遅くない 行くぞ」

中に戻ると風太郎が入り口で立っていた

「どうやら俺と一花の話を耳にし考え込んでしまったようで凄く複雑そうな表情だ」

でも先延ばしには出来ねえ

五月が泣いている苦しんでいるのなら俺はそれを助けないと行けない

未だ答えは出せないが、こいつもそうだ

謝りたくても素直になれない ぐれた時期もそうだった

こいつことある事に反発し 本音も言わず一人で頑張ろうとした

一花に任せられた あいつも一歩を踏み出したなら風太郎も少しは素直に話せばいい

一人で行くのが嫌なら俺が連れて行く

コンコン

「はい 誰ですか……………」

「よっ 五月」

「幸太郎君ですか 何ですか 私は今を勉強をしています」

「ああ知ってる だから連れて来た」

扉を開ければ眼鏡をかけた五月が顔を出す

怪訝そうな表情だ

「五月 話がしたい」

「あなたの力は借りないと言った筈です」

「うーん……………俺が…感情任せにお前を怒鳴った事は謝る すまない

俺も焦っていた…けど少しは、考えるべきだった

お前は一人で頑張っていたんだそれをきちんと見るべきだった」

「……………」

風太郎は口下手だ 俺が言えた義理ではないが社交的とも言え

ねえ

けど根は悪人ではないんだ きつと五月もそれに気づき始めてる
筈だ

少して良いのだ 風太郎と俺にチャンスをくれるだけでいい

明日でも明後日でも良い 一緒に勉強をさせて欲しい

「昨日の事は謝る だから俺に家庭教師をさせてくれ！」

素直になれないこいつの背中を押すのが、家庭教師の補佐である俺
の役目だ…。

「……………私もすみませんでした 話も聞かずに」

「なら俺と一緒に勉強してくれるか！」

「それは少し難しいです……………ですが信じてくださいお願いしま
す」

「いいよ 五月！ 全然いい 気持ちがあるならそれで」

「あの時間も時間です 少し音量を下げてください」

「悪い でも待ってるから」

「はい」

一花の言う事は正しかった

話してしまえば簡単に解決出来た 素直にごめんなさいと言える
人間になればいいだけだ

—————

—————

—————

俺はソファで寝ると決めたが四葉に止められた男二人が寝る場
所なんて無いと思ったが

三玖が部屋を貸してくれると言うのだ

それこそ男二人が入って良いものかと迷ったがここで時間を食っ
ている暇はない

五月と風太郎の仲も最悪な状態は回避されたし 五月も自分を信じて欲しいと言ったんだ

「最初はグー」

「じゃんけん」

「チヨキ」

「パー」

「風太郎は床な？」

「畳仕様じゃなければ文句を言っていたぞ」

「男二人でベットにはいる趣味はねえーよ」

「抱き合うとか勘弁だしな」

部屋にはいればもちろんベットは一つだ

流石に男二人寝るには狭いし そんな趣味はない

どちらが寝るかじゃんけんで決めた

他の布団は借りてきている それをひく形で風太郎は寝る事になった

「幸太郎 ありがとうな」

「何がだ……………」

「五月の事だ きつとお前に言われなかったら」

「お前は勝手に答えを出してたよ」

「そんなものか」

「そんなもんだらうよ でもよ 風太郎 もう喧嘩するなよ」

「努力はする」

「はいはい じゃ寝るぞ」

俺と風太郎の長い一日は終わった

五月は言った明日には答えを出すと それまで待つてほしいと俺もあいつに謝らねえとな またタイミングを逃しちまった

第二十五話 不良少年と過去の手帳

『……………』
誰かが俺の名前を呼んでいた

泣きそうな顔で俺を呼び 俺は何も出来ないままそこで転がっていた

視界もぼやけ

体は痛みで動けない……………。

ああ そうかこれは あの時の

「はっ……………はあ 夢かマジで胸糞悪いぞ」

目を覚ませば俺は知らない部屋で知らないベットで目を覚ます

違うな ここは彼女の部屋 中野三玖の部屋だ

俺と風太郎を信頼し部屋を貸してくれんだ

そして昨日は弟である 風太郎とジャンケンしてベットを勝ち

取ったんだったなあ

嫌な夢でその事も忘れていた

周りを見れば床に敷いてあった布団は畳まれ風太郎の姿はなく

既にアイツは起きているようだ

俺を起こさないのはアイツなりの配慮なのだろうな

「さて おきる ……………？」

「すう……………」

布団の中に三玖がいた 俺の腰に抱き着く形で寝ており

よく確認しなければぱつと見て分からないだろうな

「冷静に何分析してんだあ やべえーな 早く起きねえとバレたらや

べえよ」

抱き着いている三玖を起こさないよう最善の注意を払う

無事に離す事が出来れば、後は部屋を出るだけだ

そーっと起こさないように体を動かしベットから身を乗り出す

何時起こしてもおかしくない状態だがしゃねーよ 何でこうなつてるか俺にも分かんねえ

ゴロンと寝返りをうち危うく足に絡ませそうになるが何とか脱出し

布団を三玖にかけ直し部屋を出ようと足を動かした時

誰かが近づく音がした 直ぐに入り口まで向かい扉を開ける

「へ……………」

「おはよう コウタロウ」

入り口には三玖がいた

—————

—————

—————

彼が起きてくる数分前の時間まで遡る

中野家の食卓には一花 二乃 五月の三名

風太郎は彼より先に目を覚まし 昨日の借りがあるとして気を利かせ彼をそのまま寝かせ

その後居間で五月達と遭遇 軽い挨拶の後 三玖を探しに行くと話し

四葉を追いかけ共に何処かへ向かってしまった

風太郎も五月も昨日の一件で少しだけ気恥ずかしいようで喧嘩せずともまだ少し距離がある

そんな二人を見て一花も笑みを浮かべて 昨日のやり取りを見ていた為

思いのほか二人の喧嘩が早く収まったのは嬉しい誤算だったよう
だ

ただ五月は未だに満足が行かないのか少しばかりムスツとしてい
る

理由は明白だ 風太郎から謝罪されたが、幸太郎からまだ言葉が
ない

と言うより昨日もまともに会話をしないまま終わってしまった

彼女は部屋に戻ったあと『何で 私は謝れないのですか』と自分が
自分で嫌になった様子だ

普段が彼に関わる際そこまで気にはしないが珍しく喧嘩をしてし
まい

少々彼女も戸惑っている

「別にコータローくんは、気にしてないと思うけど」

「いえ きつと怒ってます 私がいけないんです もう少し彼の気持
ちをくみ取るべきでした

一花や三玖のように素直に言えればと反省しています」

「いやいや、あんなの無視すればいいから」

「そもいきません 今回の事は私の責任なんですから」

「なんで そうあんな奴庇うのかしら でも まあもう少しの辛抱だ
し」

「……………」

「さつき 私や三玖みたいにつて言ったでしょ ならさなってみよう

姉妹なんだし」

「えっ いえ それは困ります」

「いいじゃん 三玖はいなんだし バレないよ コータローくんと話
したいんですよ」

「……………はい」

「その素直さを フータローくんの前でも出せば拗らせずにすんだ
のに」

その言葉にしゆとする五月はモグモグと食を進めるだけだった

一花も何故妹がここまであの少年に気を使うのか気になっている

本人は『べ 別に普通ですよ』と傍目でも分かるほど動揺しており

彼本人も『わかんねえー』と述べている 彼の言葉に嘘はないだろ

うと一花は思っている

ならば妹が自分達姉妹に隠し 彼と何かがあつたのでは？

それは昨日ふと思ひ出した 幼少期の記憶と何か関係があるのだろうか？

謎は深まるばかりだが、何時までもしよぼくれて居られると話は一向に進まないだろう

五月に近づくと彼女は妹の髪を先程述べた通り 三女と同じ眼が隠れるような分け目に替える

顔は同じだ髪型さへ替えれば幾らあの少年でも引つかかるだろう その様子を見た二乃はガタツとその場に立てば怒っている

……………

思いきや 『分け目が違う』と五月改造計画に自らも参加

見る見るうちに 彼女の見た目は 三玖と瓜二つの見た目に代わり

素人では判別出来ない程 精巧である

この姿で彼のいるだろう三玖の部屋まで行き

話をすれば何かしら自信がつくと一花は冗談交じりに言い

二乃は少し後悔したように五月を止めようか少し迷っていた

五月もあまり乗り気ではないただ 折角姉妹がくれたチャンスだ

少し前向きに考えよう 今は三玖として彼の前に立ってみよう

……………

そして時間は彼が扉の前に着た所まで戻る

「……………」

バタン

彼は勢いよく扉を閉めた

「……………なんで ハハハ」

あれは 三玖？ でも俺の隣には三玖が寝てた
え……………ならまさかあの人は！

中野六花では…………

「あの コウタロウ？」

「す すまん」

「おはよう コウタロウ」

「おつ おう…………… あの君は誰？」

「私だよ コウタロウ」

「だから あれ 俺を知らない？」

「こ コウタロウだよね」

「うん 幸太郎だ」

何だ あの子なら俺の事を知っている筈だ

でも知ってるようで知らない何とも噛み合わない ……………まさ
か

誰かが三玖の振りをしてるのか？

良く見ればヘッドホンも首にかけてないし 髪型も何処となく違
う気がする

第一に彼女がここにいる筈がないだろう 五月は中野六花を知ら
ないと言った

あの言葉は本当の筈だ

それに彼女が着ている服は、昨日五月が着ていた服とよく似ている

「まさか 五月か？」

「えっ あのこれはその……………」

「ごめんな 探してる人とそっくりで混乱しちゃった」
「……………」

「五月………… 昨日はごめんな 俺お前が真剣に聞いているのに あんな
態度とってさ」

「私の方こそ 幸太郎君の気持ちも考えず 立ち入った事聞いてごめ
んなさい」

「良かった 五月に嫌われたかと思ってさ」

「……………！！ 失礼します」

「おっ おい 五月！」

無事に謝る事も出来たし 五月も怒ってない様子だったが
話が終わると何処かへと向かってしまう

下の方では 一花がにんまりとしており 二乃は面白くないと
言った表情だ

「ねえー コータローくん 三玖しらない」

「え あー図書館でも行ったんじゃねえーかな」

「そうか うんなら 私達も図書館で勉強しよう」

「そうだな 一花」

三玖は部屋にいますとか口が裂けても言えない
それこそ事情を知る二乃に何て言われるか分かんねえぞ……。

一旦俺は部屋に戻り 着替えをすることにした

未だ三玖はぐっすりと寝ている起こすのも悪いし 起こしたら俺
が終わるぞ

風太郎が寝ていた付近に俺の着替えはおいてあり

俺はそれを取りに向かう

ガタツと音が鳴り良く見れば三玖の頭が枕もとの棚にぶつかった
ように

『ううー』と寝ながら痛そうな声を出している一瞬ヒヤツとしたが

起きてないようで安心して良いのか少し戸惑うがとりあえず息を
整えようと一旦深呼吸をした

ふと目を三玖の頭付近にやれば 彼女の物であろう生徒手帳が
あつた

だがそれを良く見れば、俺は目を疑った

「……………これ 俺の無くした生徒手帳 何でここにあるんだ？」

そこにあつた生徒手帳は 俺事上杉幸太郎が去年なくし

そのまま放置した生徒手帳であつた……………。

「……………間違いない……………何故ここに？」

俺の頭は混乱し 正常な判断が出来ずにいた

どういう事だと何度か寝ている三玖を見るが答えは出ない

「何で 三玖が持ってたんだよ」

生徒手帳に乗せられた写真は確かに去年の俺だった

一体どういうつもりなのか 可能性があるとしたら一つだでも何時だ？

しばし混乱する頭を押さえ俺は生徒手帳を戻すと三玖の部屋を出る事にした

――――

――――

――

「……………」

風太郎は彼女の言葉を信じると言ってくれた

昨日の一件と一日経ってこいつも冷静になったのだろう

ただ心配事は尽きない

やはり このままでは幾ら時間があっても足りないのが現状だ

図書館に行けば 弟は四葉相手にその言葉を声に出していた

「もしもこの先誰かが進級できなかつた時お前はどすする？」

「私ももう一回二年生やりますよ」と言っても私が一番可能性高いん

ですけど あはは でも上杉さんとお兄さんがいればそんな心配いりませんね」

「心強いな なあ風太郎？」

「ああ……………2年生をやり直すか」

四葉のそのポジティブさを俺も見習うべきかも知んねえな

自分の事にはとことん後ろ向きな事が多いからな

それに俺の仕事は終わってないまだ時間あるんだ

こいつらに限界まで教えてやるべきだ

「そう言えば 私筆箱わすれた コータローくんお願いできる？」

一花はまた気を利かせてくれたようだ

五月の事は信じているだが、俺はやはり一緒に勉強してえんだ

あいつにはずっと世話になってんだだからもう少し借りを返させろ

「風太郎 ここは頼むぞ」

「そっちは任せた」

こういう時 弟がいると頼りになる

待ってる五月！

—————

—————

——

「おっと 三玖か！」

「コータロー 図書館に行ったんじや」

「忘れもんだ 一花達は向こうにすでに行って合流してくるなら向かった方がいい」

「もしかして昨日の夜」

「ああー 俺は居間で寝たぞ やっぱり人様のベットで寝るのは難しいな」

「そうだよね 良かった」

「ソウダネ……」

「じゃ 私先に行ってるね」

「ああ また後で………あとさ三玖 今度時間あるか」
「えっ?」

「お前に聞きたい事があるんだ テストが終わった後でも構わねえ出かけないか」

「うん良いよ 何時でも」

「ありがとな 三玖」

「……………え 何処か出かける? デート!!」

マンションにつけば三玖と出くわした 俺の顔見れば驚いた表情

だ

俺と一緒に寝ていた事は覚えてねえようだが、正直言えば顔が会わせにくいし

適当な嘘で誤魔化しちまったな 三玖には聞きたい事もあるしその時お詫びも兼ねるか

三玖が鍵を使い開けてくれた為 中に入る事が出来
そのまま30階まで向かい中野姉妹の部屋まで到着

「五月 少しいいか？」

「えっ 幸太郎君が何故ここに図書館で勉強している筈では」

「お前の勉強を見に来た」

「でもそれは昨日の話で」

「これは家庭教師と関係ねえ 前にも言ったろ それと偶には俺を頼れ お前が何を俺に隠してるか知らねえけど お前の勉強見るくらいなら出来っから！」

五月に俺を頼れと言ってきた。

だが五月は俺を頼らないし アドバイスは受けるが勉強は頑なに受けようとしらないのだ

笑顔で勉強させたいと俺は思ってるが、このまま五月に何もお礼を出来ないまま放置を決め込むのは主義に反する…。

「だから 頼む 今だけは頼ってくれ！」

「…………… 私は絶対にあなたに迷惑をかけないと決めているんです」

「理由は教えてくれないんだよな？」

「はい これは私が決めた事です」

俺にはそこまでされる義理も筋合いもない

何故ここまで頑なに真実を言わないのか、無理には聞かないしそれでもいい

「俺は今から 勉強を始める」

「えっでも 私は」

「勝手にするだけだ 聞こえた事は聞き流せばいいだろう」

「幸太郎君は勝手ですね 何時も」

「うるせーそれが俺のやり方だ だからお前も勝手に始めてろ」
「はい 私も勝手に勉強をします よろしくお願いします 幸太郎君」

「ああ よろしくな 五月」

受けた借りは返す

それが俺のやり方だ だから絶対に誰も落とさせねえ

第二十六話 不良少年とドツペルゲンガー作戦!

「おおー 夢みたいだ――」

「風太郎 うっせーぞ」

「幸太郎 おはよ」

弟の雄たけびで目が覚め

体を起こす昨日はギリギリまで勉強しており

リビングでそのまま寝てしまったようで俺達以外一花や三玖や四葉までぐてつーと体を前に倒し意識は未だ夢の中…、

五月も椅子に座ったまま寝ており 同じく風太郎の声で目が覚めたらしく欠伸をしながらこっちに近づいてくる

「おはよう 五月」

「おはようございます 幸太郎君」

「おい お前ら学校の登校時間は8時だよな」

「そうだな 15分に試験開始だ」

「あの 時計壊れていたりしない」

『『ああー………!』』

三人の声はシンクロし残りの姉妹を起こす形に

それからが大変だ、それぞれが準備に手間取りマンションを出るころには結構な時間が経っていた

四葉は一番に元気がありあまり ふと見れば姿はすでになくなっていた

「遅刻で受けられねえとか弁解しようもねえよ」

「どうすんだそうだったら」

流星に俺もあんなたんか切って 『遅刻で試験受けられませんでした』とあの人に言える度胸はねえ

怒るところか呆れるぞあの人も………。

息を切らす風太郎は車はないのかと姉妹に言えば

三玖が話してくれた

「江端さんは お父さんの秘書だから」

「お父さんたちが家にいたら良かったのにね」

娘に近づくなつて言う男と一緒に登校とか死んでもいやだが

こいつらの前では言えない 笑顔で誤魔化した

「メイクしたいわ スツピン見せたくない」

「他の四人がバンバン見せてるだろう」

「うーん 偉い 手伝うぞ三玖」

手鏡を見ては、愚痴を溢す二乃やお年寄りの歩行を手伝う三玖
どうにも進捗の程は芳しくない…。

「最近 学校の入り口に生徒指導の先生立ってなかったっけ？ 怖そう
な先生だし遅刻したらテストどころじゃないかも」

「ああ あの教師は問題あればすぐに迫ってくるからなー 俺もあい
たかねえーよ」

「コータローくんはお世話になる事多いのかなー」

「うっせー 行くぞ って五月大丈夫か」

「お腹が空いて力が出ません」

まじか…。でもしやーなしだ

朝食を食べる暇など俺達にはなく精々水を飲むくらいが、出来る
最大の行動だった

しかし一番食べる五月がそれで満足できる筈もねえ

歩く力も徐々に失っていきとぼとぼとその場に立ち尽くす

意を決した俺は風太郎に視線を飛ばし 彼女の手を掴み引きづる
ように近くのコンビニ二へ連れて行く…。

時間なんてもんはねえ でもテスト中に倒れられてもしてみろ
それこそすべてがふいになる

陳列された商品を食べい入るように見つめる彼女に『時間なんてな
い』と急ぐように促す風太郎

「あなたは何にしますか？」

「いや 俺は」

「これくらい 奢ります 何とは言いませんがご迷惑をかけましたので」

「さっさとしろよ 俺は向こうにいくから」

「えっ 幸太郎君はいいんですか」

「別に腹へってねえし?」

「って 急ぎなさいよ」

「わあってるよ 二乃」

食べれば、良いのスタンスは継続中だ

それにこんな事で倒れるなら俺はとっくにバイト先で倒れてんだろう

二人には急ぐようにいい 入り口前で待っている三人と合流した

良く見れば三人ではない 見知らぬ子どもが、泣きじやくっており

検察すれば日本人ではなく 外人である

『I want to meet my mom』と英語を口にだし。

話そうとする二人は一瞬固まる

(お母さんに会いたいですか……………)

「急いでるみたいだけど間に合ったとして赤点回避なんて 出来ると思ってる」

言うておくけど私はパパに真実をそのまま伝えるから あの子どもも頑張ってるみたいだけど果たしてどれだけできるやら」

「うっせー 風太郎は出来る限りを尽くした俺はあいつを信じる それと二乃お前も信じてるぞ」

「はあ? 私が頑張る訳ないじゃん」

「どうだかねー 何だかんだと言いつつ お前俺達が勉強してる中 何度か見てただろう」

「っ……………! うっさい」

「口がわりいぞ 二乃」

「あんたには言われたくない!」

そっぽを向いてさっさと行こうとする二乃だが

こいつはこいつで俺達が気になるのか一夜漬けの中何度か確認しに来ていた

『トイレよ』と言っていたが、そんな奴が飲み物片手にリビングで休んでっかよ

嘘が下手過ぎるぞ

交ざりたくても交ざれないとでも言うのか、言えば教えるのが風太郎だ

遠くを見れば、迷子の子供とのやり取りに混ざろうとするが、三玖が何かに気づいたようで

一花も察し 子供に何かを伝えればコクリとお辞儀をし

彼女達是对応すれば子供に手を振り去って行く

「病院を探してた？」

「多分だけど お母さんのお見舞いなのかな」

「まあ 勉強の成果だよ」

「ところで君達 何か忘れてない？ タイムオーバーだ試験はじきに始まる」

10月18日『木』八時三十三分と表示されたディスプレイをこちらにみせる風太郎に

俺達の間抜けた声はシンクロした

五月は勿論他の姉妹は焦りだし 二乃も『どうするつもり』と言うが

ここに四葉が居ないのは好都合だったのだろう

俺は何度か五つ子が誰かに成り代わる姿を見て来た

風太郎に耳打ちすれば、彼も納得し すぐに四葉に電話をかける

この作戦しか 彼女達を無事に学園へと届ける方法はねえ

「ドツペルゲンガー作戦だ 残された最後の希望だコラ」

—————

—————

———

「おはようございます！」

「お前遅刻だぞ！」

「おーっとこのリボンに見覚えありませんか！」

出入口前で待機する生徒指導の教師と四葉が会話をし

遅刻だと言うが、その四葉は先生の頼みで外にいたりリボンで主張し

一瞬疑いの眼差しを向けるが、既に登校している生徒だ それ以上何も追求をすることは無く

無事に四葉は下駄箱へと入る事が出来た

そしてリボンを解くと

「ふう……………知りがたきこと陰の如く」

風林火山の言葉と共に三玖が姿を現した

そう作戦はいたってシンプルだ

学園に四葉が既にいるのなら こいつら全員を四葉と誤認させれば良い

この5人を見分けられるのは、あの人ぐらいだ本気で変装されれば、俺にも分かんねえ

概要を伝えれば少々戸惑いを見せたが、何とか納得してくれたようだ

一番に得意だと話した三玖を先頭にし それぞれを出陣させた

「おはようございます！」

「おはようございます」

「お おはようございます」

最後の五月なんて物凄く動揺しており

真面目なあいっだ、騙す事は心苦しい筈だろうが今は勘弁しろとしか言えねえ

「あ 良かったみんな無事入れたんだね」

『『本物だ』』

「ここからが本番だから 切り替えよう足元揃われるよ」

「いよいよですね」

「あれ 上杉さんとお兄さんは？」

残された俺と風太郎には策などない

「おはようございまーす」

「おはようつす」

そう何も無い 最後の抵抗とばかりに

風太郎はリボンを結び 四葉を演じるが通じる筈もない

俺も何も抵抗する気はない 元より教師からの信頼もない 体育は新任の先生だ俺の事情など知らんのだ

「遅刻したうえにふざけてるのか？ それと貴様もだ 真面目にしろ」

「ですよねー」

「さーせしたー」

その場で軽く叱られると首根っこを掴まれずると俺達は引きずられるように

生徒指導室まで連行される事になった はあ最近いったばかりなんだがなあ

少しの遅刻ぐらい見逃しても罰は当たんねえぞ

「コータロー フータロー」

「早く行け」

「さっさといけー」

「俺達がいなくても大丈夫だ」

「お前らは努力したんだ 無駄にすんじやねえぞ」

心配してくれる三玖には感謝するがよ

なら見せてくれ ここ数日でどれだけの成果を出したのかを俺とこいつによ

「何を訳の分からん ことを お前らは生徒指導室だ」

「知ってまーす」

「煽るな 幸太郎」

「うん！」

「いい点とつて二人を驚かせちやお」

「ほら二乃も」

「なんで私まで……………」

「死力を尽くしましょう」

『『頑張るぞ おー!!』』

去って行く俺らを見て 決意を決めた5人は囲み指で円を組み

気合を入れ直した

第二十七話 不良少年と家庭教師の補佐

怒鳴られた そりや耳にたん瘤が出来ちまうほど

口を酸っぱくするほどに同じ事を何度も言ってきた

目の前の教師は生徒指導室まで連行すると今までの鬱憤を発散させるように俺に言い聞かせる

『その髪はなんだ それにその態度だ』と今更新任教師に詳しい説明などする気はねえ

もう一人の先生が、見かねたのか 俺の事情を説明すれば何処か納得が如何に表情だが

何とか解放され 俺は先生にお礼を言えば『成果で見せて欲しい』
と言い

そして俺達は中間試験と言う戦場へと同じく向かう

「頑張れよ 秀才」

「お前もな 天才」

「嫌味か？ んなもん適当で良いんだよ」

天才なんて言葉を俺には似つかわしくない 俺は何処にでもいる
ガラの悪い不良少年に過ぎない それが俺上杉幸太郎と言う 人

間だ

でもまあ 勇也さんや弟に恥じないだけの点数は稼がせてもらおう
とするかあ

その後無事に試験を受けることになった

それぞれが自分の戦いをしているだろう

一花 二乃 三玖 四葉 五月 彼女達ならば出来ると俺も弟も
信じているのだから

(難しい問題ばつかでも 歴史ならわかる コータローよりいい点数
取ったら どんな顔するかな)

(うーん 思い出した 五択問題は四番目の確率が高いつと)

(討論 討論 わかんないや……………【でばて】 勝手に教え
てくるんじゃないわよ)

(おーわった こんなものかな おやすみー…… 式の見直しくらいしてもいいかな)

(あなた達は辞めさせません らいはちゃんの為 そして彼を一人にしない為)

『一人でも赤点なら辞めてもらおうと先ほど伝えたんだ』

彼女達はそれぞれの決意と知力をいかし 戦っているのだ

――――

――

――

「ぼちぼち始めっか」

「全員集まったな」

翌週だ 風太郎と俺は図書室へと彼女達を呼んだ

今日は先週行われた中間テストの返却日だ

俺達二人は勿論だが、目の前でこちらを見るこの5人も同じだ

既に貰っている筈だ 隠し立ても出来ねえし 結果は何をしても変わらねえ

既に死地に飛び込んでいる 後は閻魔大王への報告だ

きつとどんな結果でも今の俺達は後悔しねえ……………。

「どうしたの？ 改まっちゃって」

「水臭いですよ」

「中間試験の報告 間違えたところまた教えてね」

「了解だ」

「まずは……………答案用紙を見せてくれ」

「はい」

「私は見せたくありません テストの点数なんて他人に教えるもので

はありません 個人情報です断固拒否します」

「五月ちゃん…」

「五月 個人情報とかおまえ なあ 俺には説得力はねえぞ」
「うぐ…」

携帯の契約の際に人の隣に座りこんで

あえやこれやお節介やいて テストの点数より見られたらマズ
イ人の個人情報を見た人間が言えた義理かよ… 痛い所をつかれた
のか言葉に詰まる五月

彼女にはわりいけど ここからは…ここからが本番だ
どんな結果でも後悔はしねえよ

それぞれが答案用紙を机に並べ 自分の点数と自己の評価や反省
点を述べている

「山勘があたつてちようど30点でした こんな点数初めてです！」

「困ったら最悪それもありだしな 悪くねえぞ」

「社会は68点 その他はギリギリ赤点悔しい」

「成果は出たんだ 胸を張れ」

「私は数学だけ 今の私じゃこんなもんかな」

「何回か見直したんだろ？ 十分すぎるぞ」

「国数理社が赤点よ言っておくけど手は抜いてないから」

「抜いたとは思ってねえーよ 良くやったと褒めてやるよ」

「合格ラインを超えたのは一科目…理科のみでした…」

「五月 お前は自信を持っていい 後はどう学ぶかだ」

結果だけ言えば散々と言える

短期間での勉強でもこれはひどいといしか言えねえが、あの勉強嫌いで
合計で100点だった

こいつらからしたら十分過ぎる成長だろう

『改め馬鹿さを認識した』と風太郎がぼやくが、それでもだ

俺達はやる事をやったんだ それに風太郎 お前は胸をはれこ
こまで育てたのはお前だ

少し間を開けた後 息を整え

先ず最初に三玖に視線を送る

「今回の難易度で68点は、大したもんだ 偏ってるが 今後は姉妹に教えられる箇所は自信をもって教えてやれ お前はそれだけの成果をだした」

「えっ? それはどういう意味」

「四葉 ミスが目立つ お前はやる気あんだから焦らずじっくりとだ」

「了解です」

「二花 お前はもう少し問題に拘れ これからも やり遂げろよ」

「はい」

「二乃 結局最後まで言う事聞かなかったな マジでどうなんだよと焦ったが あれでここまで取れたんだ 俺は今後バイトをもっと増やして来れる時間はねえーけどよ 任せたぞ」

視線を戻せば三玖はこつちを見ていた肩を揺らし、けしてこちらから視線を動かさない

「他のバイトってどういう事? 来られないって……. なんてそんな事言うの?」

「いったろ バイトだバイト 俺は元々補佐だし 風太郎も雇われただだ単に俺がバイト増やすだけだ 今までと何も変わんねえーよ?」

あの時と同じだ 三玖は動揺している

どんな時でも俺を気遣い 珍しく怒ることだってあったんだ

そんな優しい奴にこんな悲しそうな顔をさせる俺はやはり

相応しくないのだろうか あの人の意見は全うだ…….

そしてまだ一人残っている

「五月……風太郎にはああ言ったが うんお前は馬鹿だな」

「幸太郎君まで!」

「でも 馬鹿でも不器用でもお前はやり遂げた この点数は誇るべき

だ

俺がお前に手を貸せたのはほんのわずかだ 例え赤点でもこれはお前一人で勝ち取った点数だ

まあ 次からはきーつける なっ」

それが俺が抱いた五月へのテストの感想だ

こいつは頭は良いのだろうが、それを全くと言っていい程生かせていない

何をするにも遠回りになりその結果時間が掛かり 取れそうな点も逃してしまう

本当に馬鹿で不器用な奴だよ。

それにこれから俺は風太郎にも嘘を言う

下ろされるなら二人で覚悟した 始めたのも二人ならこれで諦めて

一から稼げる物を探そうと でも俺は風太郎にはこいつらと一緒にいて欲しいと願ってる

五月もすまねえな お前が寝てる間にスマホを見させてもらった

まるで図ったかのように電話がなり 五月はそれに出れば

電話を俺に手渡した

「ああ 五月くんと一緒にいたのか 個々に聞いていこうと思ったが君の口から聞こうか 嘘はわかるからね」

「俺があなたに嘘をついた事がありますか？」

「君は嘘ばかりだろ」

「はい では 昨日の件お願い出来ますか」

「おい 幸太郎 昨日ってなんだよ？」

「幸太郎君 父と話していたんですか！」

「風太郎は続けさせて欲しい こいつは兄の俺から見てもひでえ性格だ だがそれでも

こいつは相応しい

五月は言った『俺達に給料』と正式ではない俺もカウントされてんだ その一人を削るだけでいい

そしてあんたの要求を俺は飲む…。」

「そうか という事は…」

「結果は… 二乃おまえ！」

覚悟なんて決まっている

それを口に出せばいい 例え勉強を見れなくても彼女達を見守る事は出来る

突然耳に当てていた スマホは無くなっていた

二乃だ彼女が奪いとるようにして俺と電話を代わっていた

「パパ？二乃だけど 一つ聞いていい？なんであんな条件出したの？」

「僕も娘を預ける親として 責任がある

高校生の上杉くん達がそれに見合うか計らせてもらったただけだよ
彼が君達に 相応しいか」

「私たちのためってことね。ありがとう、パパ……………」
も、相応しいかなんて数字だけじゃわからないわ」

「それが一番で至極簡単な判断基準なんだよ」

「あつそ。じゃあ教えてあげる—————私たち五人で五科目全ての赤点を回避したわ」

「二乃が言うなら間違いはないだろうね これからも上杉くん達と励むように」

電話が切れたようだ、五月に返せば二乃はこちらに向き直す

「私は英語、一花は数学、四葉は国語、三玖は社会、五月は理科。五人で五科目クリア、嘘はついてないわ」

「嘘じゃねえーけどよ ひでえなそれはそれで」

「そんなのありかよ」

「結果的にパパを騙す事になった。多分二度と通用しない」

「だろいな あの人には通じねえさ」

「やってやるよ」

「次は、実現させなさい」

まだ認めてはいないのだろう

だけど二乃はチャンスをくれた このチャンスを俺と風太郎は活かさねえといけない

彼女の言う通り 次は確実にあの人自ら出向くだろう

そうなれば俺と風太郎に出来る事はないに等しい

少しばかり二乃と話していれば 四葉と一花が駆け寄ってくる

事情を話すと面倒だし 後は風太郎にでも丸投げだ

「三玖、安心してください。どうやら彼らとはもう少し長い付き合いになりそうです」

「……………うん」

「じゃこのまま復習しちゃいましょう！」

「え？ 普通に嫌だけど」

「逃げないの」

「そうだな 試験が返却された後の勉強が一番大切だ だが直後じゃなくてもいい ぐ褒美だっけパフエとか言ってたろ」

「ぶっははははは 風太郎から パフエって言葉がでるとはなあー」

「笑い過ぎだ 幸太郎！」

「いやいや すまん」

まさか あそこまで面倒とかほざいてた風太郎がそんな事を口走るとは

そこまでは、想像出来なかったな…。

膨れっ面でそっぽを向いてしまった弟に俺は、ニヤリと笑みを浮かべた…。

こいつは確実に変わって来てんだ…。

それもいい方向へと 中野姉妹の影響だろうな

感謝してもらったりねえな…。

「幸太郎君 父と何を約束したんですか？」

「…大したことじゃねえよ 心配すんな」

「私ではやはり信用なりませんか？」

「違う違う お前は信頼してる けど男の約束ってのはあまり口外する事じゃねえんだよ…。だから泣きそうな顔すんな 俺に心配かけ

るのが嫌ならその顔はやめて笑顔で頼むぜ」

「わかりました 幸太郎君 でも何時か私にも貴方の抱えるものを打ち明けてくださいー!」

「お互い様って言いたいのが ああ 分かった」

五月とまた喧嘩したら面倒だ

けどこの話だけは、彼女の前では決して言えねえ

俺とあの人が交わした言葉

『君の覚悟は聞いた もしもダメだった場合でも上杉風太郎君の解雇は免除しよう

そして君は 金輪際 五月くんと三玖くんに近づかない それは他の姉妹も同じだ』

少しでも風太郎をサポートしそれを助けるのが補佐であり兄である俺の役目だ

直接的には関われなくなるが、零奈さんの言った 見守る事だけでもするにはこれしか方法が無かった

二乃の起点が無ければ本当に何も出来ないままだっただろう

「そう言えば上杉さんって何点だったんですか？」

「全部100点」

「あー めっちゃ恥ずかしい」

「その流れ 気に入っているのですか? …それで幸太郎君は」

「俺か まあ こんなもんだろうな」

「お兄さんもすごい 90点代をキープしてます」

「はあ? 何であんたみたいな奴が高いわけ? 納得いかない」

「さーなー」

「幸太郎は 今でこそバイト尽くしで成績は落ちたけど 実際は俺より上だ」

「そんなに へえ 人は見かけによらないって言うけど」

「うつせー 帰るぞー」

一応は俺も補佐だ

勉強出来なきや教えることも出来ねえからな
それに今は、ある程度出来てればいいんだ そんなくらいがちょうど
いい

第二十八話 不良少年と三女の買い物

目の前には何かがある

黒い塊だ 製作主はエプロン姿で箸を持つ三玖である

『何これ』と聞けば『コロッケ』と三玖は述べる

正直言えば俺には何なのかすら想像できなかつた

「味には自信がある」

彼女はそう述べるが四葉は手を動かす事を躊躇いその場で動きを止めている

こいつでも動けない時があるのだと新たな発見だろう

固まる四葉の後ろから俺と風太郎が顔を出し

それぞれ手を伸ばし口にする

「おはぎ作ったのか」

「流石に油で揚げるおはぎはねえーよ まあ もらうか もぐ」

味に関して言えば多分不味いと言われる部類だろう

四葉は美味しくないというし

風太郎は普通にうまいと話す

作った本人も意見が二つに分かれ困惑しているんだろ

残された俺をじつと見る 正直な感想言えばいいのだろう

味が分からない俺にはどう判断できるかも左右されないが一つ分かるのは

これを三玖が頑張って作っていた事だ

「うん うまいぞ」

「コータローは優しいから気を遣わなくて良いよ?」

「やっぱり 上杉さんとお兄さん おかしいよ!」

「おかしくねえーよ 愛情に勝る味は存在しない」

「そう言う 問題じゃないですよ!」

「… 完璧においしくなるまで作るから 食べて」

これが風太郎と俺の苦難の始まりだった

四葉 俺とこいつは素直な感想を言ったんだぞ

それから数分間はただひたすらに三玖が作るコロツケ擬き

四葉曰く 石 をひたすらに俺と風太郎は食い続けた

食ってる俺達が言えた事じゃねーけど 三玖も良くここまでぼんぼん作れるもんだよ

あとは作り方さえ学べば完璧なんじゃねーか？

そして遂に 風太郎は倒れた

四葉は叫んだ「上杉さーさーさーさーん」

必死に介抱する四葉だが、効果の程は期待出来ず

胃薬を探すが見つからず、俺は買いに行くと三人に言いそのまま向かうが

三玖に『フウタロウが倒れたのは私のせいだからついて行くよ』と言われ

無下にあしらうのも気が引けたので、そのまま二人で向かった

「見ての通り 上杉さんは重い難病なんだよ見てあげて！」

「ぐは 動いてたら死にかけた」

「まさか あなたも いえあなたがそんな病を患っているとは」

俺の居ない間に何かしらコントのような事が起きているとは想像もできない

現場にいない事を少しは後悔している…。

「食べ過ぎに聞く薬か、これ何てどうだ」

「コータローの方は平気？」

「ああ 別に胃は弱くねえし」

「でも私も少し熱くなり過ぎたね あの数は多い」

「そこまで本気で作ったんだ気にすんな」

近場のドラッグストアまで俺と三玖は向かい

棚に並べられた胃や腸 食べ過ぎに関連した薬を何個か手に取り
どれが一番効果が良いか見比べている

あまり効果が強すぎても胃事態を痛める可能性もあるし

ここは適度に聞く薬でも良いと判断した

三玖は作り過ぎた事を気に病んでるが、そこはあまり気するんもんじやないと俺は言い聞かせた

あれは練習だ 普通に作ってる訳じやない数が多くなるのは、当たり前、味見役として駆り出されれば、喜んで手伝おう

まあ限度をわかってないと風太郎みたいにぶっ倒れる

それに四葉の意見も、間違つてはねえけど、正直に思う気持ちの方が何よりも大事だと俺は思っている…。

「本気で不味いつて思うならまず食わねえよ 俺はうまいと思ったぞ、家族以外のの手料理は中々食える機会はねえしな」

「コータローは、愛情でおいしさを判断する」

「そうだな 俺は味が分かんねえから 人が作る際はそこを見てるあまり外食もしねえし」

外食なんて贅沢が先ず俺達家族に許されてすらいないがな似たようなもんと言えば普段学食で食べるパンを数切れだ

腹に入ればどれも同じだし そこまで気にもしない

「それに俺はお前が作ってる姿が好きだからな 一生懸命に頑張ってる姿は見てて良いもんだよ」

「……………!!」

「おい 三玖 急にどうした」

「何でそう言う事を普通に言うの……………」

「可笑しい事いったか？」

「薬買ったら帰ろう」

「おっ おう……………」

何だろうな 前にも話したが、俺は頑張ってる人間が好きだ努力は何時か報われるもんだし

三玖も努力をして 前回のテストでは68点だいをとった訳だし今回も料理してんのは純粋に興味を持って それがしたいと考えたからだろう

自分から向かって行く 三玖の姿勢はとても良いものだと思う

会計を終えても三玖はずっとだんまりだ

何処か不自然に視線を合わせないようにするし

なんだろうな全く？

「具合でも悪いのか？」

「平気だから」

「そうか、無理なら言ってくれよ」

「コータローには言われたくない」

「あの事は、忘れてくれねえか」

「……………」

「まあ、あれだ 心配すんな あんな事はもう無いからよ」

痛い所を突かれたなそう言われると良い切り返しを俺は返せん

『心配するな』の一言をかける事しか出来ない

三玖は物静かな奴だが、感情をあまり表に出さないだけで決して無関心という訳でもない

でなければ倒れた俺が動こうとした際に、怒ったり泣いたり謝ったりする筈もないさ

ただ あの一件以降だろう 五月程ではないにしろ 彼女から声をかけてくる事が多く感じる

自意識過剰なのかどうかは、実際どうだろうな

このまま無言で帰るのも味気ないし、だからと言って俺に切れる

カードは……

いや一つだけあるかもしれない

会話の切っ掛けが……

一歩先に進む彼女に俺は声をかける すると先ほどまでムスツシていた表情も少しだけ和らぐ

「この前さ 三玖に言ったよな 何処かに出かけようって」

「……………うん コータローが聞きたい事があるって もしかして今？」

テスト前の最後の期間 五月に会いに行く際に三玖とエントラン

スで出くわし

俺は咄嗟にこう言った『聞きたい事があるんだ 今度何処かに出かけるかい』と

三玖は一瞬考えるがすぐにO?の返事をくれた その後俺はそのまま中野宅へと向かい

テストも無事と言うには、受けたダメージは多かったけど 彼女達との強い絆を少しでも感じる事が出来たし 二乃の言葉は俺と風太郎にも効いた まあ風太郎本人は食べ過ぎで倒れてんだがな

そして今 この状況だ まさに二人と言う中で あの約束と同じだ

三玖も覚えていてくれたし 今なのかと聞き返すでも 聞きたいのは今ではない

「出かけようって言っただろう? でも今はただの買い物だ 出かけるって言うには味気がなさすぎるし 俺と三玖の用事じゃないさ」

「でも 私のせいではあるから」

「気にするな あれはただの食べ過ぎなんだからな 少しは自分の限界も知るべきだよ

普段から小食だから出されれば食べるのが俺達だけだ それでもだ まあ馬鹿でも弟さ」

「コータローはフータローの事ちゃんと考えてるんだね」

「胃薬を買いに行くくらいは アイツの事は考えてやってるさ」

手に持った袋を彼女に見せれば『コータローらしい』と一言言い少し口元が緩む

そう 笑っていて欲しいムスツとしたり怒ったりそんな表情は彼女には似合わない

例え表情には出さなくても笑みを出してくれだけで俺は満足だ

「それで 話は戻すけどさ 暫くすれば林間学校やら行事も多くなる…お前らも準備とかで忙しいだろ?」

「三日間だからね 服とか買いに行くかも知れない」

「ああ だからさそれが終わったら出かけよう」

「コータロー それは忘れるフラグ」

「それはない 三玖と出かけるんだ 俺は忘れるなんてことは無い」
「……何でそうはつきりと言うの」

「楽しみだからさ 聞きたい事もあるけどさ 三玖と出かけるって中々ないだろう……って言っても 中野姉妹と出かける事自体 あんまりなさそうだけどな？」

「私とコータローで……うん 分かったコータローがそう言うなら待ってる」

「よし 確認は取れた ただ会話だけってのも寂しいからな そんな時は何か見て回るか」

(デート……なのかな)

俺が彼女に聞きたい事は例の手帳の件と中野六花についてだ
何故去年なくした筈の手帳を彼女が所持しているのか

そして俺にそれを知らせないのだろうという事なのだが……
偶然とは言え彼女の部屋でそれを見てしまい

俺は『あの部屋では寝てない』と堂々と嘘まで言う始末だ

それにあの手帳自体結構厄介な代物で、彼女自身言いだせない可能性もあるし

何だかんだと言いつつ 彼女が何時 あれを手に入れたのかも目星は付けたつもりだ

ただまあ 焦る必要はない 三玖が話したくなった時でも個人的には構わないと思ってるし

持っているからと俺は、怒ってる訳でもない

中野六花については、ある意味で俺には重要な事だ 五月が知らないのなら一人づつ聞き出すのが一番だろうというのが、手取り早い建前で固めているが、俺は三玖と出かけてみたいと言うのが本音なのだろうな

五月と同じく この子には恩がある ここまで弱音も言わず勉強会に参加してくれたんだ

少しくらい礼はさせて欲しい 彼女は知らないだろうが

三玖には返せない程の恩があるんだ……。

(五月といい 三玖といい何かしら俺に関して隠してる事をかかえて
いる……前者にいたってはあの性格だ 墓までもっていきそうだな)

改めて思うが、考えている以上に中野姉妹は謎が多いのかもしれないな

「そろそろ着くな」

「うん フータローに飲ませないと」

「あいつも気に入られてるな」

「む……………」

「コウタロウの馬鹿 切腹」

「ええ……」

「そこまで言わんでもいいだろう？」

「今は江戸時代か、そんな物騒な真似できるかよ」

「冗談だよ」

「笑えねーよ」

「三玖はムスツした顔を止めほくそ笑む」

「笑っていた方がとても良いとこいつの顔を見れば納得だ」

「風太郎が回復したら 勉強すつぞ さっきの詫びだ 日本史でい
く」

「！ 早くフータローに薬を届けよう」

「焦るな 焦るな 全く 見てて飽きねえよな お前も」

「日本史という単語一つでここまで変わるとはな」

「好きな物の効果大きいな」

「何だかんだと買い物してれば時間もあつという間だった」

「俺と三玖がついた頃には何故か風太郎が『人は信用しない』と真剣
な顔で俺に言ってきた」

「居ない間相当な事があつたんだろうな 災難続きだなお前……………」

「三玖 買い物付き合ってくれてありがとな」

「コータローもありがとね 食べてくれて」

「ああ 何時でも作ってくれ俺は大歓迎だ」

こうやってたまには買い物も悪く無いと思える静かな一日だ

どうかこの何事もない平和が長続きしますようにと祈り

残った四人で勉強会を再開する……………。

第二十九話 不良少年と代行相手

俺は頭を抱えた いやこれに関して言えば俺が全面的に悪いだろうが

勝手に役職を決めるのはやっぱり悪しき風習だと俺は思うんだがな

図書室では三玖と俺と風太郎の三人に加え 先ほどやってきた四葉もいる 謎の仮装をする風太郎は彼女の反応が楽しいのだろう

仮面を取っては『俺だ』『誰ー』の繰り返しを四葉としている
流石にうるさいのか注意を受けた

一方俺もそんな風太郎に仮装用に同じ仮面を渡されており 髪色と合わさりすでビビると言われた

金髪の風太郎にはいわれたくねえーよ

何で俺がこの役職なのだろうか？

理由を聞けば『幸太郎は保健室にいて話し合いに参加してなかった
余ったお前をどうするかで協議した結果 兄弟である俺のところに
回された』

ようは家庭教師と同じだ 風太郎の実行委員の手伝いである

まあ選ばれたのなら俺はそれをやり遂げるし 黙って立ってるだけでも人がビビってくれるんだ

こんな楽な作業もない 手を抜くつもりもないがな

風太郎も驚かす事に関しては鬱憤も晴らせるというので妙にノリノリだ

「そう言えば 五月は何も言わなかったんですか!」

「五月か 何か肝試しの話が出てから静かで幸太郎の話には全然反応してなかったな」

「五月……………」

「そんなもんだらう? それに俺も林間学校自体 そこまで楽しみつてわけでもねえしな」

あまり修学旅行やそう言った行事に良い思い出はない

確かに外に出ることじたい滅多にないが、昔から何処かに出かけると必ず面倒な事になり

小学生の時も中学生の時も散々だったな

俺や風太郎の態度が気に入らないのか四葉は、乗り気にさせるため林間学校にまつわるある話を自信満々に語りだした…。

「クラスの友達に聞いたんですが、この学校の林間学校には伝説があるって知ってます?」

「……伝説ねえ」

「最終日に行われるキャンプファイヤーのダンス、そのファイナーレの瞬間に踊っていたペアは生涯を添い遂げる縁で結ばれるのです」

「非現実的だ、くだらないな」

「うん」

「冷めてる、現代っ子冷めてるー」

「学生カップルなんんてほとんどが別れるんだ時間の無駄遣いだな」

「それでも好きな人とはお付き合いしたいじゃないですか」

「すげー懐かしい話だ」

四葉の語るそれは俺には縁もゆかりもないものだが

それはこの学園で語られる伝説だ

実際の効果を俺は見た事もないし、実演する気もないが、風太郎程悲観的な意見もない

俺のスタンスは変わらない、恋は人を変える、いい方向にも悪い方向にも

故に俺は、生きていく中でそれは確かに必要な物だと思っている

俺には関係のない話だし、相手もないというのが現実だ

そんなある意味で冷え切った俺の隣でもくもくと勉強を進める三玖、何時も隣にいるなこいつも……。

と色々考えながらも試行錯誤していると

突然隣で勉強に勤しんでいた少女は口を開く

「なんで好きな人と付き合おうんだらう」

『えっ』

以前の勉強会の時もそうだが、三玖は毎度突然にこういった話題を

投げかける

少し考える中 テクテクと近づく足音があり

芝居がかった声が聞こえて来た

「その人が好きで好きで堪らないからだよ 三玖も心当たりあるんじゃない?」

「ないよ」

「好きで好きで堪らないか……そうかもな」

「おっ 流石恋愛にはロマンティックな コータローくん」

「ロマンティックとか言うな でも 一花の意見は正しいと思う
きつと好きだと思うとどうにもできない感情が出てくるんだろう
その人といいたいとかその人を大切にしたいとかよ ん?」

「私 四葉が認めます お兄さんは恋愛ロマンチストです!」

「いらねーよ んな称号」

「コータローくんは ああいつてるよ 三玖」

「うう……………」

一花の登場で早速勉強会が進むかと思えば

これから撮影があるとし彼女は帰ると話す当然風太郎はぶーたれている

「ああー ごめん私行かないと!」

「一花 無理はすんなよ 応援してっぞ」

「ありがとね」

「ファイト」

「頑張ってー」

そのまま帰るかと思いきや

スマホがなり確認すれば三玖の所に戻り何かを話している『何時もの』とだけは聞こえた

暫くすれば一花はそのまま撮影に向かい

俺達はそれを見送った

「少し行ってくる」

「おう きーつけて来いよ」

その後仮装道具の中からウィッグを借りたいと言いだした三玖もそそくさとその場から去って行く

『嫌な予感がする』 兄弟の心がシンクロした

二人で消えれば四葉を一人にする事になる為 風太郎が「俺が様子を见に行く」と話し

俺は四葉と此処で待つことにし 二人で適当に時間をつぶす事となつた

「四葉と二人つてのも 初めて会った日以来か」

「確かに お兄さんよろしくお願いします」

「そうか ビシバシ勉強するか？」

「ご勘弁を」

「冗談だよ まあ 四葉さ 風太郎をどう思う」

「えっ 突然すぎますよ お兄さん何の話ですか」

「特に 意味はねえんだ ただふと思つてな あいつは良い奴だ」

「上杉さんは良い人です」

「だからさ お前も悔いのないようにしておけ」

「どういう意味ですか……………」

「何でもねえーよ 四葉さん」

「お兄さんは不思議な人です 何か色々知ってる感じで私や上杉さんより大人な感じがします」

「気のせいだよ 俺はそこまでふけてねえーよ

それに風太郎には最高の思い出を作つてやりてえからな」

「お兄さんもです お兄さんも最高の思い出を作りましょう 林間学校で！」

「ほどほどになー」

突然の事で一度混乱した四葉もすぐに調子を戻した

そして何処か不思議な人間だと俺に話した

大した奴じやねえーよ俺はただの高校生だ

それと 四葉 お前は俺を恋愛ロマンスと言ったな

俺はその言葉に恥じないだけの勘はあるつもりだ だから悔いを残すなよ

――

――

――

暫くすれば 風太郎が三玖と戻ってきた

だが二人の様子は何処かおかしく 風太郎は完全に焦っている

話を聞けば、風太郎はある男子生徒と話し 一花がいない間に勝手に話を進めるなど彼と話した

風太郎は『既にこいつには相手がいる』とその男子生徒に言い放ったようだ

何とかその場は乗り切る事に成功し 相手側も『林間学校までにはなーと』言い

幾つか三玖 一花と話したあと解放されたようだ

だらだらと汗を流し 俺と目を合わせない弟を不思議がり聞いてみた

「んで 一花の相手って誰だ」

「お前」

「はっ?」

「お前が適任だと思っつてな 相手も上杉幸太郎の弟と知って引いてくれたんだ

『あいつの女をとれるか』って」

「てめー おい 風太郎くん? 兄を売ったのか つうか一花の気持ちを考えてろ」

「コータローは 一花とは嫌?」

「三玖 そう言う訳じゃねえけどさ はあそれで一花には話したのか？」

「一応メールで伝えてある」

「はあー 良いよ 俺も適当に林間学校を過ごすしさ」

まさか再び風太郎が身内を売るとは

弟に関する認識を改めなければならんな……………。

一花も俺なんかで良いのか？

「まさか 俺が踊るとはな」

「……………」

「どうした三玖？」

「何でもないよ」

その後は三玖は何処かだんまりとしていた

勉強も一度取りやめ 明日の準備をする事になり

俺や風太郎は一花を除いた面子で何処かに行く予定を立てていたのだが……………。

突然俺のスマホが鳴り出した

そこには小学校とかかれていた

「上杉幸太郎です…………… はい 分かりました」

「どうした 幸太郎？」

「何かありましたか 幸太郎君」

「急用が出来た 俺は帰る また明日」

「コータロー？」

「何よあいつ 急に帰って 空気を読みなさいよ」

らしいはが倒れた その連絡で十分だ

みんなには適当な理由で誤魔化し 家へと向かう既に学校の先生の車で家には帰宅しているという話

誰も付き添えないまま放っておく訳には行かない

風太郎には今を楽しんで欲しい だからこいつには秘密にしななければならぬ

俺は本当にあの人の言う通り『嘘つき』な人間だ

第三十話 不良少年と家族の記憶

母はとても笑顔が素敵で とても元気な人間だ

俺はそんな母が大好きだ

そして母と共に俺を育てた父である 勇也さんを俺は尊敬している

今ほど貧乏ではないが、裕福と言う程でもない

ただ普通の家だった そんな普通の家で普通に暮らすその当たり前が俺の大切な記憶だ

でも母は体が弱かった いや弱くなったと言った方が良いだろう

元より病を患っていた

らいはが生まれた頃には母は病院にいることが多かった だけどそんな母でも夢があった

そして父は母の夢の為に毎日汗水たらして仕事漬けの毎日

夢を追い続ける母も 彼女を支える父の姿も俺は大好きだった
……………。

俺もあの人のようになろう そう決心した

俺が家族を守るのだ 母と父が帰ってくるこの家を守るのだと
……………。

「ねえ こうちゃん やっとお母さんの夢は叶うんだよ お父さんに感謝しないとね」

俺の手を引く母はとても嬉しそうな笑みを浮かべまるで子供のようだった

やったー 良かった 嬉しいよ 子供ながら自分は言えるだけの事を口にした

だけど 俺の願いは叶わなかった 母の願いも叶わなかった

彼女は帰ってこなかった……………。

あの日全てがかわった……………俺が見た母に笑顔はなく

何も言わず 目の前で……………。

そして あの男と出会った 『最善は尽くした』 その言葉で片付けたあの男に……………。

医者嫌いだ 母を救えない医者は嫌いだ そんな医者は俺は大っ嫌いだ

家には多額の借金だけが残り 家族は悲しみに明け暮れた

……………

……………

……………

妹は体が弱い 母と同じ病気ではないがそれでも彼女に負担をかけ過ぎれば、何時かはこうなる…

分かっていた事だろう 上杉幸太郎……………。

「らいは ただいま今準備するからまってる」

「お兄ちゃん……………」

「寝てろ 俺がついてるから 今はゆっくり休んでろ 勇也さんは明日まで帰れない」

帰ってくる中 俺は出来うる限りの準備をして来た

どれが必要で今のらいは少しでも元気に出来るのか

もう誰も失いたくない

林間学校なんて 俺にはどうだっていい 家族が俺にとっての生きる意味だ

「お兄ちゃんも風邪うつるよ」

「俺は丈夫だ これくらいは平気だ今は寝て居ろ」

「また学校にいけなくなるよ……………」

「気にするな」

「林間学校の話聞きたいな……………」

学校に行けなくなる raithは それをお前が気に病む事はない

あれは俺の責任だ 俺が馬鹿だったからあんなことになっただけだ。

だから今はゆっくり休め……………。

それに学校の事なら俺ではなく風太郎が聞かせてくれるはずだ

暫くすればraithは眠りにつく

余程体に負荷をかけていたようだ

ずっと笑顔で俺がバイトで疲れても頑張れたのは妹の笑顔があったから

みんなの為に頑張る妹 こんな小さな妹に負担をかけていた

あの笑顔の中でこいつはどれだけ頑張っていたんだ

「俺は 兄失格だ」

また あの頃と同じだ 俺は何を浮かれていたんだろうな

ガタンと後方で音が鳴る

振り向く必要もない 帰ってきたのだろう

きっと学校側が連絡したんだろう

「風太郎 どうした」

「お前何で 黙ってた」

「明日林間学校だろ お前は休め 一花には俺から謝っておく 風太

郎…………一花を頼んだぞ」

「そうじゃない 何で何時も一人でやろうとするんだ」

「俺はお前らの兄だ それが俺のする事だ 兄を信じろ 明日に響く休め」

「……………」

風太郎は何も言わない

弟にまで心配をかける程俺は馬鹿な兄貴だよ

一人でやろうとするな

五月や風太郎を不器用と言ったが 人の事は言えないだろう
でも俺はこの生き方をやめないだろう

一花 二乃 三玖 四葉 五月 林間学校が終わったら謝ろう

「風太郎は寝ないのか」

「お前こそ寝ないのか」

「お前が寝たら寝るさ」

「嘘つくな」

「嘘はつかないさ」

（お前の口調が荒くない時は何か抱えてる時だって俺にだって分かるぞ）

――――

――――

――

明け方だ 風太郎は結局 俺の隣でずっとらいはを見守っていた
ずっと起きていた

あれだけ学校で話してるのに家で二人で無言だった
ただひたすらに妹の回復を願って……………。

時間を見れば、バスはとっくに出ている時間だ

俺達二人は 肝試し実行委員と補佐だ。誰かが代わりをやらされるのだろうな…そいつに申し訳ないし、悪いとは思う

「らいは―――生きてるか」

「勇也さん お疲れ様です らいは寝てます」

「親父 声を下げてくれまだ寝てる」

「お前ら 看病してくれたのかつてもう バス出てるんじゃないのか

!？」

勇也さんが玄関を開けて中に入ってきた
彼もどれだけ焦っていたらうか、どれだけ早く家に帰れたか
だろうか

それでも俺達を信じて時間いっぱいまで頑張つて来てくれた
心配してくれるんだ それだけ報われる

「良いんですよ 俺は替えのタオル持ってきました」

「ああ どうでもいいよ これで三日間勉強できる」

「風太郎 忘れもんだ 早く帰れなくて悪かったな 一生に一度のイ
ベントだ 今から言っても遅くないんじゃないかねーか それに 幸太郎
お前もだ 今度こそ2年生をやるんだ 少しは楽しめ」

「バスもないし 良いよ」

「俺もいいですよ 勇也さんも疲れてるんです 俺に任せてください
風太郎お前は行けよ」

勇也さんが弟に渡したしおりは何度も読み直し幾つもチェックが
されていた

こいつがどれだけ林間学校を楽しみにしていたか俺がもつとしつ
かりしていれば

風太郎にもこんな思いさせずに済んだんだ

「あーーー お腹空いたーーー」

『!!』

「えっ らいは熱は」

「治ったーー でも何でお兄ちゃんがいるの ほら早く行ったー」

「お前 俺達の気遣いを返せ」

「らしいは……………良かった 今用意するから待っていてくれ」

らしいは 俺が帰ってきた時に見た弱った姿ではなく

元気に布団から跳び起きた ふと周りを見れば 林間学校の筈な
のに未だいる

兄に何でいるのと体を押している

ある程度は本調子は出て来たようだけど、また何時倒れるか分からない

「幸太郎お兄ちゃんもだよ！ 今度こそ楽しんでよ お兄ちゃんも遊んでよ」

「俺は良いよ 十分だから……………」

「ありがとう お兄ちゃんずっと見ててくれて でも私はもう大丈夫だから林間学校行ってきて」

「俺も幸太郎も今更 行くためのバスもないし」

妹は大丈夫 楽しんで欲しいと何度も言ってくれる

その言葉には甘えるべきなのだろうだが、俺が楽しんで良いのだろうか

風太郎の言う通りバスは既に出ているだろうし向かう足もないのだ今更みんなに合わせる顔もない

「バスならもう出てますよ」

この家にもう一つの声が聞こえた

それはここにいる筈のない人の声だ 既にバスに乗っている筈の人物だ

「五月か……………風太郎 行ってこい」

「幸太郎君 あなたも来てください すみませんお二人をお借りします」

「いってらっしゃーい」

どこからともなく現れた五月により俺も風太郎も連行されるように連れていかれてしまう

「五月離せ！」

「今は 私の言う事をきいてください」

「なんでいるんだよ」

「バスは見送らせていただきました それにあなた達の家を知ってるのは私…だけです 私しかここへ案内できませんから」

暫く連れて行かされ 開けた道に出た

そこには一台の車 あの日風太郎と俺が見た車だ

その前には 一花 二乃 三玖 四葉 彼女と同じく本当はここにいてはいけない人達だ

なんでお前らまでここにいんだよ

「幸太郎君 あなた少しで良いんです自分を許しても良いんじゃないんですか?」

「……………俺にそんな資格はねえよ」

「少しで良いんです それにらいはちゃんに言われた筈です 『もう大丈夫』と」

あなたは妹さんの言葉を嘘だと言う人間ですか 上杉幸太郎君」

「らいは 良い子のあいつは嘘をつきはしないさ」

「では そのらいはちゃんの為に一緒に行きましょう 幸太郎君」

「ああ……………ありがとうな 五月」

「私 オバケが苦手なんです だから肝試しの実行委員であるお二人がいないと私がその役をやらないと行けませんから」

妹に背中を押され そして彼女達にも道を作ってもらった

ここまでしてもらって『無理だ』と言える程俺は屑ではない

それに五月が肝試しの実行委員が嫌だと言うんだ 俺達がきちんとやり遂げないとな

今は進もう……………。

「風太郎 今は行こう」

「仕方ない 行くとするか」

(みんなには黙るぞ)

(ああ 分かっている引き返せるか)

「もう 見られたくない写真入ってるなら慎重に扱いなさい」

「あつ 悪い」

(五年前か やっぱりこの顔どっかで見たのよね)

「三玖 昨日言ってたキャンプファイヤーの話 本当に私でいいの?」

「うん その場しのぎで私やフータローが決めた事だし」

「そっか じゃあ コータローくんの相手をお姉さんがしてあげよう

五月ちゃんにも悪いけどね」

(相手を独り占めにしたい そんなことしない 私達は五分分だから
それに一花なら心配ない)

(三玖が言うなら良いよね)

車に乗り込んだ俺達 合計7人と相当厳しい状態だが、こうでもし
ないといけない

一番前に風太郎 後ろに 一花 四葉 二乃 最後尾に三玖 俺
五月と座っている

「あつ 俺着替えないや」

「大丈夫です 私が幸太郎君の分の三日分の服準備してますから」

「相変わらずだな お前は でも少し安心する」

「これくらいしか私には出来ませんから」

「コータロー狭くない大丈夫？」

「俺こそ邪魔じゃねーか？」

「うん大丈夫だよ」

「ようこそ 上杉さん お兄さん どうですか乗り心地は」

「良好だ」

「すげふわっふわだ」

(お兄さん 私は後悔しません 私はこの三日間を 上杉さん そし
てお兄さんの思い出の1ページにしてみせます！)

『しゅっぱーっ！』

俺達の林間学校が今始まった

第三十一話 不良少年と結びの伝説 初日

「五つ子ゲーームむ いえーい」

『五つ子ゲーームとは 隠した手から伸びる指を当てるゲーームで、

一花Ⅱ親指 二乃Ⅱ人差し指 三玖Ⅱ中指 四葉Ⅱ薬指 五月

Ⅱ小指です』

開催された五つ子ゲーーム出題者と指を出すのは二乃である

「二乃」

「三玖かな」

「四葉!」

「二乃です」

「…………… 二乃だ」

「いや 軽率だぜ 風太郎 これ 四葉だ!」

「残念でした 三玖です」

「くそー 次は俺な」

「いや 俺だぞ」

「お二人は急に元気になりましたね」

『誰も俺達をとめられねーぜ』

「まあ……………もう一時間以上 足止め食らってるんですけどね」

テンションを爆上にし 続いての出題を始めようと盛り上げる俺達

止めれるものなら止めて見ろと言った傍から外は大雪 一向に前は動かない

荒れ狂うもう吹雪 テンション駄々下がりイエーイ

「て テンション 上げて行こうぜー いえ」

「幸太郎君が頑張ってる!イエーイ」

「コータロー いい いえーい」

「お前ら 何て優しいんだ」

「コータローくんも 今日はテンションの上がり下がりすごいね」

—————

――

――

「おお なかなかいい部屋だな」

「でも5人部屋ですよ」

暫く進み旅館が見え始め

俺達はその日そこで一夜を過ごす事になった

団体様が入ったと聞かされ 部屋は一つでここに合計7人

……………。

二乃じゃなくても文句は出るだろうな

車で休もうにも仕事の為に戻ってしまい

外にある犬小屋で寝泊まりすればと言いだし

洒落ならんぞそれは？

(幸太郎 らいはからだ)

(俺は荷物置いて来たしな らいはがせつかく用意してくれたのに)

風太郎が荷物の中を開ければらいはが用意した手紙とミサンガが入っていた

一方俺は、あのまま出てきてしまい 荷物は持っていない

何処まで 知り尽くしてるのか知らないが五月は俺用の荷物を用意しており

今回の俺本人の荷物は出先で渡された しおりとスマホのみと言
う

何とも寂しものになっているが、必要最低限の物は持ってきている
為

これで三日間は生きていけるだろう

「良い部屋だな」

「そうだ 文句言っていないで楽しもうぜ」

「はーい 女子集合 不本意だけご覧のありさま 各自気をつけ
なさい」

「気を付けるって何を」

「それは……………ほら一晩同じ部屋ですぐすわけだから……………あいつらも男だつてことよ」

『!!』

「幸太郎君に限つてそれだけはありません」

なにやら後ろが騒がしいな

俺も風太郎も騙し騙しだが 確実に体に来ている

【風邪だ】 少しずつだが、妙なだるさがある らいはを一日面倒見ていたんだ

特に接触の多い俺はそれなりに削られている

一花との約束もある 最悪そこまで持つてくれればそれでいい

「ふう……………」

「コータロー？」

「おつ おうなんだ」

「少し様子が変だよ また胸が」

「大丈夫だ 車ではしやぎすぎてな！」

「わかった」

無駄な体力の消耗は避けてえが、こいつらに心配はかけられねえ

少しでも楽しい時間を作らねえと……………。

その後夕食は豪華な物だった

タッパーに容れたいとか言いだす弟だがやめておけ

三日間は流石に持たねえから 他にもこれからのスケジュールの

話題も出始めた

風太郎はあんなに楽しみにしてたんだ内容は全部暗記してきていた

キャンプファイヤーの話題になった途端に全員が口を紡ぐ

二乃はやけに辛辣で「関係ないから」とご立腹だ

(俺と一花とは口が裂けても言えんな)

(あはは……………これは難しいな)

実際の効果は見た事もないがまさか一花と踊る事になるとは

風太郎も余計な事をしてくれた 一花なら大歓迎と言いたいが

俺見たいな奴では釣り合わんと言う現実だ

二乃もくだらないと切り捨てている

こういった事には反応しそうだがどうやらへそを曲げる原因があつたようだ。

一花がそこを突けばバツの悪そうな顔でぎろりと人睨み

持っていたパンフレットを見ている一花は一瞬肩を揺らし何度かその文字を確認し

震える口を動かした

「えっ 混浴」

「はあー こいつらと部屋のみならずお風呂も同じってこと？」

「言語道断です！」

「二乃 連れねえ事言うなよ 傷つくな お前と俺は経験してんだろう？」

「え 幸太郎君 二乃どういう事ですか？」

「二乃どう言う事………ツ」

「わざと誤解を招く言い方するなー」

「たまには仕返しもいいだろ」

「あつ 混浴じゃなく温浴でした」

「そつちかよ 安心したわ」

「何だかんだ言ってもやつぱりはずいしな」

「何であんたらが照れてんのよ！」

――

――

――

「絶対あいつらおかしい とくにあいつよ」

「二乃なんかコータローには厳しい」

「そうですね 当たりが強いですか」

「何かコータロー君には反抗期みたいな感じがするよねー」

幸太郎と風太郎が部屋で待つ中

中野姉妹は混浴ではなく温浴に浸かり温まっていた

普段は絶対に見られない絶景と言えるだろう

四葉が『三玖また胸が』とおっさん見たいな事を言いだし即座に隠す

『同じだから』と姉妹は変わらないと言い逃げる

そんな中 今日の議題の一つが様子のおかしい

上杉兄弟だ 特に風太郎は朝からテンションが高い

『トランプしようぜ！』と言ってきたり『ほかにもあるぞ』と珍しく色々と準備してきたため

少々驚いた 五人の部屋に七人が寝る中でそんなテンションの間がいるのだ少しは怪しむだろう

それは彼の兄も同じだ少しばかりテンションが高く 先ほども二乃に仕返しと普段とは少し感じが違っていた

学校では省エネモードのように家庭教師以外はなるべく避けて動く彼だがいざ姉妹の事になると

弟同様それ以上に予想だにしない行動にでる人物だ その男も普段では見せないテンションの高さ

二乃はそれを警戒している

ただ 五月や三玖は普段から二乃が彼に対して良い印象を持っていないと思ひ尋ねて見た

どうしてそうまでして彼に食って掛かるのかと

お団子に纏めた頭の二乃は少し湯に顔がつく形になりながら少し黙ってしまうが

ここにはあの男がいない 姉妹相手だ別段言っても問題はないだろうと口を開く

「何かあいつを見てると もやもやしてますんよ」

「二乃それはまさか！」

「四葉 あんたが思ってるような事は一切ないから私が好きなのは……」

親戚の子とあのお兄さん

とにかく 何か話そうとするとどうしても素直に ああー何で温泉にまできて」

「ふふ 二乃はきつと 恥ずかしんだね コータローくんと話すのが」

「恥ずかしいとか別に……………」

「それに素直になれないだけかもよ？ もっと彼に寄り添ってみれば いい 彼は違うから」

「コータローもフータローも良い人」

「二乃 少しだけでも良いんです 彼を信じてあげて欲しいんです」

「……………うう なんてこうなるのかしら でもまあ 少しだけ少しだけなら」

(反抗期って 事かな コータローくん?)

何処か素直になれないでも彼の前からこそこまで怒りを吐きだせるのだろう

その理由を二乃は知らないしどういったこの思いを何て言えばいいのか彼女には分からない

少し大人ぶり まるで自分達を子供用にあしらう彼 何でこころで面倒を見るのか

そして何で何時も自分の愚痴や罵倒を彼は気にも留めないのか 二乃の悩みは尽きない

「それで 一旦あいつの話は置いておくわ 問題は誰が 寝るかよ」「どういう意味ですか?」

「ああー そうか フータローくんとコータローくん二人いるからどっちかと隣になるのか

流星にあの二人も女子を挟んで寝ようとはしないでしようからでも二乃は少し考えすぎじゃない? 私達 ただの友達なんだし」

「そうだよ 上杉さんとお兄さんは良い人だよ」

「なら あんたが隣で寝る? あのと二人どっちも心配ないって言うな

らさ」

「それは……ちよつと どうなんだろうね」

就寝の際の布団の配置だ

男は左側で寝て 女性陣はそれを囲むような配置になっている

どっちが壁側でどっちが内側なのか決めてもいないただ 横の方は男子と二乃が言い

二人もそれには同意をした 流石にそこまでの度胸は二人にはない

彼等を良い人と言う四葉が適任ではと話すが、それとこれとは別な
のか顔を湯に沈め消えてしまう

ここで一人名乗りを上げた

「もし 幸太郎君が内側なら 私が隣で寝ましょう それなら問題は
ありませんね 二乃」

「あんたはどれだけ アイツを信用してんのよ？」

「彼はそのような事を絶対にしません それだけは誓って言えます」

「でも もしフータローくんだったら」

「ああ えつと 二乃お譲りします」

「それ 依怙贖戻だから 流石に弟が可哀そうに思えて来た

じゃ一花ならどうあんたは優遇もしないだろうし」

「おつと私に来たか コータロー君達はいいい友達だよ」

「ならさ」

「待って 平等 みんな平等にしよう」

誰が隣で寝るかの井戸端会議ならぬ風呂端会議

二人のどれかが隣でも問題のない人間は誰なのか

そこで指名されたのが一花だ 五月は彼を優遇するし

四葉は黙ってしまう 二乃は最初から隣に行く気はないと話す

一花は何処か余裕がある それならばと二乃は姉を指名したのだ
ろう

彼女も別段それを否定はしない ただ本人も突然の事で戸惑って
いるようにも見える

そこに待ったをかけたが 三女だ 風呂から立ち上がり 危うく

素肌が見えてしまいそうになるが

ここには姉妹しかない　さして問題ではないだろう
平等と言い放つ彼女　果たして5と2の七人でそう平等にするの
だろうとどうにも歪な形な

五角形ならぬ七角形　さてはてどうでるのか……………。

—————

—————

——

「なるほど考えたわね」

「誰が隣でも良いように　全員隣に行けばいいんだ」

『少なくとも　コートローとフータローから見れば』

そこには同じ髪型の人物が5人いた

全員同じ見た目にしていれば二人は気づかないし手も出せないと
言う結論だ

いざ決戦の舞台に！と意気揚々と襖をあけ中に突入

さて二人はどうでるのか！

「かあ————」

「こお————」

二人は寝ていた　風太郎の隣には幸太郎が寝ている

つまり奥は風太郎となっていた

色々と覚悟はして来たが、色々と考えるのが馬鹿らしくなってきた
と言った表情だ

「えーつと……………私達も寝よっか」

「そうですね」

「うん寝ようか」

誰が隣かは今はどうでもいい　何故かむしように疲れて来た五名
であった

その際に三玖と五月で少々駆け引きが合ったとかないとか
……………。

—————

—————

———

朝になり日が差し始めた頃だ

それぞれが凄い寝相であり誰が何処に寝ていたとか何処にねる必要があるとか昨日の議題は一体何だったのだろうとなる程の惨状だ

ぱつと見れば五月の姿だけではなく何処かへ行ってしまったの
う

「ん……………あれ」

「すう……………」

「ゴータローくん　なんで　つてみんなめちやくちや」

目を覚ました一花は先ず最初に眼前に寝息をたてている幸太郎の
寝顔に焦る

どうしてここに彼の横顔が、自分の隣は五月だった筈なのだがと焦
る気持ちを押さえ一度

辺りを見れば、彼女も今の部屋の惨状に目を向けた

『これはひどい』と似たような部屋の彼女が言えた義理なのか少々疑
問であるが

誰も彼もな状態だ　ぼやきたくもあり笑えて来るのもある

一旦状況を確認した　一花は再び隣にいる彼の顔を見る

こうして彼の寝顔を見るのは二度目だ

一度目はあの日　花火の日に弟と二人で辺りを駆けまわる彼

疲れ切り寝てしまった日に彼女が膝枕した時だ

「これくらい平常心でいられないと　君は家族って言ったんだし　友
達だから　大丈夫だよね……………」

ドクンドクンと胸がなるあの日感じた想いと今感じてるこの高鳴りは何だろうか

それを確認する為なのか そつと彼の顔に近づいていく あと数センチと言う時だ

ガチャリと音なる 襖の置く出入口の扉が開く

「もう 朝ですよ 朝食は食堂で……………」

「……………」

バタン

刹那目と目が合う 五月が戻ってきたのだだがすぐに彼女は扉を閉めた

一花もすぐに顔を彼から背けた

「ハアハア 嘘……………あれって」

膨大な情報が頭を駆け巡り彼女の頭はパンク戦前だった

一体誰が、彼の隣にいたのか？ 本当に彼だったのか あの寝相だ風太郎の可能性もある

それでも問題なのは変わらない 彼女はもう一度扉を開けて中を確認しようとするが……………

「あれ……………？ 五月さんだ」

「須藤さん どうしてここに 林間学校の筈では」

「あの吹雪でバスも動かせず 私達も足止めを食らって」

「ふぁー おはよう 何で真弓ちゃんがいんだ」

「あれー 先輩まで一体どういう事ですか！」

五月を呼び止める声があったそれは、あの日出会った自分達と同じ二年

須藤真弓の姿だった 一体どうしてここにいるのかと尋ねれば自分達こそ何でここにいるのかと

そんな時に彼も起き 外に顔を出した 寝ぼけてはいるが、知り合いの顔くらいは分かる

少しは目が冴えたようだ

そう この旅館に泊まったの何も彼等だけではない

学校側も同じなのだ あのもう吹雪バスも下手に動かせずここに泊まった

その為部屋が足りなかったと言う事だ 何とも不思議な話だ

五月は真弓について行く形で、先生の元へ向かう事になり学校側への説明に向かう

幸太郎は眠っている 姉妹と風太郎を一人づつ起こす事になった
……。

――――

――――

――

「はあ……………何でバスの中まで隣なんですかー 五月さん」

「幸太郎君はきつと一人になるので 肝試しはダメでしたがこれくらいは大丈夫です」

「俺は大丈夫ではありません……………目立つだろう」

「班も同じですので安心してください」

「安心出来ねえよ……………はあ」

「あの幸太郎君 朝方」

「ん？ ああ 酷い寝相だったみんな 俺も風太郎も普段あんな広い場所では寝ないからな」

「あつ……………えつと 何でもないです」

目が覚めればひどい現状だ

俺の隣の風太郎は俺の枕まで奪ってるし 周りの中野姉妹もだ

女子という自覚をもってほしいもんだよと思うが……………。

まあ寝相何て治そうと思つて治せるもんじやない

風太郎もらいはの事で寝てねえし ゆっくり寝れて俺は安心できた

一度外に出れば、真弓ちゃんと話す五月もいるし話を聞けば先に出た学校側も立ち往生と奇跡見たいな事が起きていた

風邪が移るとヤバいと思い一人で座ろうとしたが、五月が横に座ってきた

俺が保健室にいる間に決まった事は 肝試しだけではなく

班やバスでの席の割り振りもだ 風太郎の奴 俺に黙る癖を直せと言いながら何で言わねえのか

「はぁ……………」

「大丈夫ですか？ 何処か様子が」

「五つ子ゲームー はい五月 この指だれだ」

「えっ あの 一花ですか？」

「正解だー 流石は五月だな」

やばいやばいこいつは変に勘が良いんだ気づかれれば何を言われるか分かんねえ

せっかくのチャンスが無駄には出来ない らいはも楽しんできくと俺の背中を押したのだ

きちんと答えなければな 明日 明日までもてば後はどうにでもなれだ

第三十二話 不良少年と結びの伝説 2日目

学校側と合流し

流れ流れてカレーの準備片手にはマッチの箱だ

視線を辺りに向け他の連中が何をやってるか観察する

「火加減はこんなもんだろうな」

二乃は流石と言うべきか指揮を取り班の連中に指示をだし

一花は一花であの性格だ周りの男子は浮かれてやがる

四葉は変わらず元気に動き 他の男よりも数段活躍している

風太郎は風太郎で何か分からんが知らん男子と話しており

ぱつと見て『ガラの悪い』ってイメージの男子だ

適当にその男子に応対しており スルーしてるようにしか見えな

い

もう少しまともに話せよ

三玖は三玖で熱心なのは良いが料理にひと手間加えようとし

同じ班にいる真弓ちゃんに止められている 相談してからやるべ

きだろう

残る五月がまた問題だ スマホ片手に時間を正確に測りだしてる

流石に同じ班だし 手伝ってやらんと五月にも悪い

「そこまで 正確じゃなくて良い 肩の力を抜け」

「しかし 美味しくするにはやはり手順通りに作らないと」

「手順も良いが細かすぎると 中の具も崩れすぎる 目安で行け」

「そう言うものでしょうか？」

「そう言うもんだよ」

何とか普通に会話が出来た 朝方バスに乗って少しは話をしたん

だが

それ以降はずっとこつちを観察するような感じで中々会話をしよ

うとせず

何かを気にしてた様子だったが、俺の杞憂何だろな

「っ……………」

「ああ 三玖さん大丈夫ですか」

如何やら鍋担当から外されサラダに使うレタスやらを切っていたらしく…その中で間違つて刃先が指先に少し当たったようだ…

表情を歪ませ指を押さえている

「ほれ 貸して見ろ 少ししみるぞ」

「う…」

「傷口は放っておくと菌がはいる これでよし」

「コータローありがとう」

「気にすんな」

元々今着ている服は俺が家から着て来た服だ

何があつても良いように絆創膏ぐらゐは入っている

「流石は先輩 手慣れてますね」

「まあ…：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…」

「コータローでも怪我する事あるの?」

「誰も完璧には料理は出来ないよ でもやる気持ちが大切だ」

「気持ちが大切…：…：…：…」

(コータローへの気持ち 一花は それに五月もきつと…：…：…：…)

料理は愛情だ ただそれでも自分自身の腕前は問われるのが現実だ

手慣れてなければ怪我もしちまうしな

それに俺も元から作れた訳じゃないし 今でもこうやって怪我した時の備えはしてある

それに作つたことのないものは沢山あるしな。

三玖や真弓ちゃんと会話をしていれば 後ろから俺を呼ぶ風太郎と四葉の声が聞こえ

俺は二人に頑張れよと声かけると二人の元へ向かう

途中五月にも『離れる』と言い承諾も得た

一応理解してくれたのか、スマホで時間を正確に測るのはやめていた

自分の匙加減で五月はやれば出来んだもう少し自信を持つべきだ…：…：…：…

「んで 何のようだ」

「お兄さん 私もお手伝いしますよ！」

「わりいな 男二人だどどーも華がねえし」

「キャンプファイヤーの係もあるのに悪いな」

「勉強星人の上杉さんがやる気を出してくれているので！全力でサポートしますよ」

「俺も補佐だしな 任せろ」

「んじや とびっきりの奴でビビらせるか」

――――

――――

――

『うわあああああああああああああああ』』

「お前も容赦ねえーな」

何組目かのグループが来ただろうかそれを悉くビビらせ

悲鳴を上げさせている

余程鬱憤が溜まってたんだろうな

確かに 今の風太郎のピエロ姿は近くで見てもビビる

顔も判別出来ねえんだ 素直に怖い

四葉も衣装から借りたのだろうか 包帯をぐるぐる巻きにしてミイラのような仮装である

俺もまた風太郎と同じだ マントを羽織り仮面を被る 何故か知らんがオペラ座の怪人だ

「これ、ただのコスプレだろうか！」

「お兄さん 似合ってますよ」

「四葉程でもねえーよ 風太郎も思ってるぞ 似合ってるって」

「そうですかね……………」

「それにしてもお前も楽しそうだな」

「当たり前です。普段から死んだ目をした お二人に生氣を感じます
やる気もでますよー」

「オバケは、生氣があると死んじゃう」

「えー」

「冗談だ」

「もしかしたら お兄さんも上杉さんも来ないかと思って……………
だから後悔のない林間学校にしましょうね ししし」

「そうだな」

「わかった」

四葉は本当にいい奴だ

普通ならここまで手を貸してはくれないだろう

他にもやる事があるのにこっちに集中してくれてんだ

それに四葉自身も楽しそうにしている

こいつの為に悔いのない思い出を俺も今度こそ作って見よう
と思う

(足音か、行くぞ)

(OK)

周りを警戒し 次のグループが来た事を確認すれば一斉に飛び出
した

「うわー」

「食べちゃうぞ——」

「コータロー フータロー」

「それに四葉もいるじゃん」

「三玖と一花か」

「バレてる二人だとやっぱり効果ねえな」

「あ、ごめ……………」

「わあ びつくり予想外だー」

気遣いが身に染みるねえ

続いているグループは事前に俺達が肝試しの実行委員だと知っている一花と三玖だ

案の定 驚かれず 四葉がいる事には驚いていた

わざとらしく驚く素振りを見せたり いい奴らだが少しひねりが足りねえかな？

「その髪染めた？」

「地毛だつて言つてんだろが！」

「ふふ 冗談」

こいつは知ってるくせに何でいじるかねえ

「あとさ、この先の道一つは崖で危ないから注意しろよな ルート通りに進めば問題ない」

「……………」

「三玖？ 聞こえてるか」

「分かつてる行こう一花」

「えっうん」

道を案内する中 三玖は何処か心ここにあらずといった様子だ

一言言えば一花の手を引き看板のある方向へと向かっていく

ちゃんと聞いていたようだが、本当に分かっているのか？

二人が去った後に あの脅かし方ではまだ迷いがある

四葉が俺たちに話す

『確かに…』と口許に手を当てる弟は、暫くしたのちにある提案を持ちかけた

(まじかよ、…)

少しばかり大掛かりな仕掛けを準備する事になった

近くに木を見つけ準備物の中からロープなど出し

安全靴など準備している

宙吊りで相手を脅かすと言う手の凝った方法で脅かす事になり
それをあのピエロ姿の風太郎がやると言う事で満場一致となる
暫く待機となるが、一旦俺は迷子になっている生徒がいらないか気
なり

四葉と話暫く 開ける事にした風太郎も『確かに』と言い

俺は二人に任せ一度見回りに向かう

四葉が助っ人で来てくれて感謝している

「んじや ほどほどにな風太郎ー」

「ああ 全力で脅かすぞ」

「あはは お兄さんも夜道なのでお気をつけて」

昼頃に風太郎達と下見には来てたが、夜になると勝手が違う

ライトで照らさないと何も見えない有様である

脅かす側だが、逃げた連中は本当無事かと考えてしまうな

「早く 見つけないとな」

「わああああああああ もう嫌ですううううう」

「五月いー!」

突如として五月が俺が来た道の方からやってくる

全速前進で消えていく 咄嗟の事で何処に行ったのかすらわから
ない

「やべえぞ これ」

――

――

――

上杉幸太郎が絶叫する五月と遭遇して暫く

中野一花と中三玖はライトを頼りに夜道を進んでいた

少し進めば開けた所に出てくる もう少し進めばゴールにたどり
着く

『崖で危ないから注意しろよ』彼の言葉はきちんと届いていた

「せつかく コータローくんに会えたんだから もう少しいたら良かったのに ほら肝試しって絶好のチャンスじゃん」

「私ね 変かも これはいけない事なのに ねえ一花はコータローの事どう思ってる」

「うーん 変わった男の子かな？ 色々と気を回すし意味深な事も多いし」

「そういう事じゃない 一花はコータローを」

「三玖 やっぱり最終日のダンス代わろつか？ 心配なんでしょ」

「平等……………それに一花なら 私はダメなんだよ」

「ダメって何が？ 平等なんでしょ それに後悔しちゃうよ？」

「今がいつまでも続くとは限らないんだから」

「……………」

彼女は何も語らない 彼女が見たあの景色を中野三玖は今も忘れない

……………

……………

……………

「五月の奴何処まで走って行きやがった？」

外れたルートには崖があるという

命の危機すれすれな肝試し大会の森で中野五月は絶叫と共に姿を消した

怖いものが苦手と知ってはいたが、ここまで苦手だったとは五月には、もう少し配慮すべきだった

一瞬だったが、去り際にライトを片手に走っていたのは見えた

夜道は、大丈夫そうだけど灯りが見当たらない

それにあいつが、本気で走ればあそこまで早いとは思っても無かつた

「こっちは立て札の方向で良いよな 偶然とは言えこっちのルートなら問題ないがああ調子だ

また逸れてもおかしくねえぞ」

五月と行動しているであろう人物も心配だ

あいつが一人で走ってきたならば相方も一人だろう

うまい具合に風太郎が、もう一人捕まえてくれてればいいけどな

チリン

何処か遠くで音がする

『御守りですので付けてるんです』

五月は言った俺が渡した鈴をスマホにストラップ代わりにつけていると

もし今の音が聞き間違いでなければ五月はこの近くの何処かだ辺りを探せば見つかる筈だ

所持しているスマホも充電はない、一度捨ててそれ以降持つことを拒み続けた…電源があるか無いかなんていちいち気にもしていなかった…ちゃんと習慣つけないと持つてる意味もねーな…。

んで、探すとなれば、最後に頼りになるのはやはり自分の足だ

「五月 見つけた!」

少し先開けた方とは別の所に五月は立っていた

辺りをきよろきよろしておりやはり迷子になっていた

「五月ー!」

「幸太郎君 ふええ」

「お前 大丈夫か顔が大丈夫じゃない事になってるぞ」

「ずみません 怖くて」

「確かに あの顔が出てくれば ビビるよな」

「幸太郎君　こそ何で此処にいるんですか？　その恰好です肝試しをしてたのでは」

「俺は見回りだ　この夜道だ　だれが道を外れても可笑しくねえからな」

「そうですか　二乃とも逸れて　どうすればいいかと」

「でもまあ　見つかって良かった　鈴渡してて良かったよ」

本当に五月は気づけばいなくなるしな

頼りにしてと言いながら何処か抜けてたりその癖一花の言う様に『不器用』な人間だ

苦手なら来ない方が良かったのではと思うがイベントを楽しみた
い心の方が大きかったのか？

暫くすれば五月も泣き止み話も出来た

彼女と行動していたのは二乃らしくピエロが出た辺りで逸れたと
話す

ほぼ前半じゃねーか　持っていた地図をライトで照らし現在地を
確認した

もう少し歩けば、森からも出られる　二乃を探したらすぐに出るべ
きだろうな

ガサガサ

「ひっ!!　幸太郎君な　なにかいます!」

「ん　誰だ?」

「良かった　五月とあんだだったのね」

「二乃かお前も良く無事だったな一人か?」

「え　ああ私はね　何でもないわ」

「やけに素直だな　まあ良い　ついてこい　出口はこっちだ」

「もう大丈夫でしょうか」

「本物なんて　でねえーよ」

茂美の中から二乃が現れた

彼女は五月を探し此処まで来たようで道中は何事もなかったと話
す

ただやけに上機嫌に見えなくもないと思う

鼻歌混じりに歩いているあたり何か良い事でもあったのか？
少しばかり疑問は残るが、そのまま二人を連れて出口に向かう開けた場所まで出る

「あとはこのまま道を一直線だ 流石に迷わねえーよな？」

「大丈夫 大丈夫ー 行くわよ五月」

「はい あの幸太郎君ありがとうございます。 それとそのマント似合ってますよ」

「おうー きーつけろよなー」

ルンルン気分な二乃とそれに手を引かれ五月も出口に向かう

それを見届ければ俺も元の道へと戻って行く

これ以上の問題はやめて欲しいってのが本音だよ

無事に肝試しも終われば俺も四葉もロツジに向かう事になる

隣を歩く風太郎の様子がおかしく戻ってからずっと静かだ

四葉に聞けば「二乃達を追って 戻ってきたと思ったら上杉さん急に静かで」と言っており

先ほど出くわした二乃の反応を見る限り

二人に何かがあったのか？

(風太郎 風邪は大丈夫か)

(まあ……………うん 平気だ

明日までは持つだろう 明日まで

かあ)

(何があった?)

(後から話すわ)

二乃と何か合ったの明白だし それに俺も風太郎も風邪を引いている

空元気を振りまいてるが何時倒れても可笑しくない

無事に明日を向かえてえよ…。

第三十三話 不良少年と結びの伝説 2日目②

「はあ？ まじか 俺達に親戚が」

「口から出た嘘で雁字搦めだ」

服を着替え 荷物を整理する中

俺と風太郎は肝試しの最中に起きた出来事をそれぞれ話した

五月が消えたが無事見つかり二乃も発見できた。

それが俺が伝えた事だが

風太郎はその二乃と少し前まで行動していた

【キンタロー】と言う架空の存在として彼女と行動していたと罰に悪そうな顔でだ…。

以前二乃に写真を見られたと話

その時に【親戚の写真】とあの頃の自分をそう伝えた

何故かその見た目好印象だったようで、その時はそのままやり過ごせたが

どうもその嘘が今になってこいつを苦しめ出したようだ

二乃の勘違いだが、彼もそれに合わせそのまま過ごし

彼女とダンスの約束までしたとか 本人はどうするべきか頭を抱えている

『キンタロー君 私と踊ってくれませんか？』

『っ……………えっと』

『待ってるからね』

『五月 見つけたぞ！』

『幸太郎君 ふええん』

俺が五月を見つけその裏でキンタロー（風太郎）と二乃が話を交わしていた

近くにいた理由としては納得できた

「俺と一花を組ませたのはお前だ それに二乃と約束したのはお前だろ？」

「あの格好で誤魔化しきれぬ自信はない」

「二乃には補正フィルターかかってんだろう」

「断るに断れない…面倒な事になった」

「俺はお前のせいで面倒な事になってるけどな」

こいつは責任感の塊だ それ故今回の事が相当悩んでるんだろう

別段伝説は信じないが、二乃は完璧に舞い上がっているそれは傍目でも分かるほどに

その気持ちを踏みにじるような事になりかねない状況に今はあり

正直に「キンタローは俺だ」と言えば良いのだが、引込みがつかないってのもあるんだろう

それにしても、キンタローとは、こいつも咄嗟と言うが因縁のある名前が、よく出たもんだ…あまり無関係な名前じゃねーしな

「とりあえず お前は普段通り過ごせ 下手に動いて頭使っても風邪が悪化するだけだ」

「分かってるけどどうにか誤解は解きたいだが、これを弱みにされそうだ」

「二乃は素直になれば、いい子なんだがな」

「お前は例のあれであいつの気持ちを聞いたらしいしな」

「まあ そう言う事だ とりあえず無理はするなよ？」

最悪明日は俺もお前も中野姉妹と踊る事になってんだからな…」

「幸太郎 ここそ良いのか？ 俺が勝手にやった事だけど」

「本当にな 寛大な兄だ 誇れ」

「流石ー」

「棒読みやめろコラ まあ 一花が何か言えば 俺はそのまま一人で過ぐすさ」

俺の悪評が勝手に招いた結果だしな

その相手側を騙す真似事な訳で、実際目的自体は終わっている
一花が一言「いや」と言えば俺も素直に身を引くし元から林間学校
には興味はなかったしな

らしいはの頼みと五月達の事が無ければ来なかっただろうし

そこら辺歪んでるよ本当に 自分で笑えて来る

暫くは風太郎と作戦会議をし

その後は別行動をする事に

今日から朝まで冷え込むらしく 風太郎にも外に出るなら厚着し
ろとだけ伝え一旦外にでた

少し風に当たり休憩していれば

男手が足りないかと教師に言われ俺は、キャンプファイヤーで使う丸
太を運ぶ作業やらされた

言われたならやらねえといけないだろうし これを女子に運ばせ
るのは忍びないしな

「っ 地味に重いな」

「おっ 次はコータローくんの手伝おうか?」

「一花か 次は俺なんの事だ」

少し手間取っていれば、一花が奥の道から走ってきた

軽く汗をかいておりここに来るまで誰かの手伝いでもしてたんだ
ろう

1 2 3と声を合わせ同時に端を持つ

「よっ 誰ってフータローくんとこれ運んでさ 何か可笑しな話し方
だったな 彼」

「そうか あいつやってたのか 無理はすんなど言ったんだがな
そっち重くないか?」

「大丈夫ー 楽ちんだよー」

「よし 重さをやろう」

「あぁー 重いなー」

「嘘だ 行くぞ 足元きーつけろよ」

「了解 了解」

軽口は変わらねえな

肝試しの時もだが、一花は特に今回のダンスの事は考えてないよう
だ

俺が少々自意識過剰だったんだろう

彼女がどんな事を風太郎と話したかは知らないがそれで

あいつの心が少しでも軽くなるなら俺はそれで良い

ここ最近はいいつの頭ではキャパシティオーバーな事が多い少し
でも会話できる人間が増えんのはいい傾向だ

「ありがとな 一花」

「ふえ…」

「何だその 情けねえ声」

「コータローくんが急におかしな事言うからだよ」

「おかしかねえーよ ただ風太郎が話したって事だ それはいい傾向
だしな」

「ふふ やっぱりお兄さんしてるね 君は」

「前も話したろ 俺は兄だ あいつの為なら俺は頑張れるさ」

「下の子の為か………ねえ コータローくん」

俺は風太郎やらいはの為なら自分の事は大してどうでも良いと
思ってる

時には疲れて自分の行動を優先する事もあんだろうが、それでも下
を優先するのが兄である俺の役目だ

会話で、何か気になるのか、一花は聞いてきた このタイミングは
明日のダンスに関わる事か？

「なんだー 疲れたならいいぞここで下ろしても？」

「そうじゃなくてさ…明日踊る見たいだね私達」

「ああー 何かすまん 俺何かとだとお前も苦労するよな」

「コータローくんは私と踊りたくない？」

「それはねえーよ 一花と踊れるんだろ 人生中でも良い事だ」

「………そうなんだ」

「でも俺とはだめだ 俺は学園で嫌われもんだ 一花に変な噂が立つ」

「……」

一花はいい奴だ 誰とでも笑顔で時には、本心を隠すだろうが、それでも

みんなには、姉として学園では友人として プライベートでは女優だ

その一花が俺何かといれば何を言われるか分からない

こいつの障害にだけはなりたくない…。

会話は途切れ 暫く無言で歩く 建物までつけば丸太は最後の一本だ…。これさへ運べば、俺たちも休める

「つて 一花 どうした」

「あれ……私どうしてかな」

一花は泣いていた 俺はまた余計な事言っちゃまったんだろう

こいつを泣かせるとは馬鹿にもほどがある

何してんだおれは……

持っていた丸太を壁に寄りかかるように置き

近くに一花を座らせ落ち着くまで待機することにした。

「……一花……ん？」

その時だ

バタン 突然音がした

『よし』と言う男性の声が聞こえる

急いで正面の扉をまで行けば鍵がかかり閉まっていた

何も確認なく締めやがったぞ！ 少しは中を確認しやがれ

「まじかよ」

「ええ……」

「たつく ぶっ壊すか」

「いや これは防犯センサーなる奴だよ 警備員飛んでくるよ」

「っ ほれ 今日は冷える これ着てろ」

一花は薄着だ 流石にこのままいれば風邪を引いてしまう

俺は普段から厚着だすこしくらい減っても変わらない

着ていた服を一枚彼女に手渡す

『ありがとね』と声をくれた一花は、その場で上着を羽織る

でもこうなったの俺のせいでもあるしな 一花は巻き込まれただけだ

壊せば警備員が飛んでくる 適当に説明すれば良いが信用され

んのか？

「俺が連れ込んだって言えば……………」

「それは駄目 絶対ダメ」

「俺は別に気にしねえよ 誰も信じないしな」

「君は 時々悲しいことを言うね」

「実際そうだ 人間なんて少数の意見を聞きはしない なら俺はそんな無駄な事はしないさ」

でも まあ…………最近はその考えも少しは変わったとは思う時もある」

「そして貰えると嬉しいかな 君にそんな事はさせられないよ」

「さて 防犯センサーの解除だけだよ これは無理だ届かねえな それに俺には解体出来る程繊細な指なんてないしな はあ」

「どうしよね 本当に……………」

「最悪はけ破るぞ」

「うん わかったよ」

—————

—————

—————

幸太郎と一花が閉じ込められからそれなりの時間が経過しただろうか

このままいても風邪をひくと彼はどこらかマッチを取り出した
そのマッチは朝方に参加したカレー作りの際に彼が使ったもので
ある

火の当番として働いた事がここに来て良い効果を出したようだ
学園の行事も悪くないと得意げに話す『参加したからこうなっ
た』と少し頭を抱える

「これで寒さは凌げるな」

「コータローくんはそう言えば五月ちゃんと同じ班だったからね そ
の時のマッチなんだね」

「そう言う事だ この中の板を借りたが、今はこんな状況だ しゃー
なしだ」

「ほんと困るよね もう少し確認してから閉めてもらわないとー」

「ああ 『これでいいな』って 馬鹿か？ 全部運べばそれで良いのか
よ たく」

「ふふ」

「どうした 一花？」

「何でもないよ」

「そうか 何かあれば言えよな 聞くからよ」
「……………」

二人は誰かが助けに来る間に 他愛もない会話で時間を過ごす
彼が力になると話せば、一花は少し時間を開けた後『よし』と軽く
気合を入れる

そして彼女は口を開く

彼ならば聞いてくれるだろうし きつと反対はしないだろうと彼
女なりに彼を信用している

そうでもないところで二人きりと言う状況で普通に話す事も出来
ないだろう

「ねえ……………コータローくん 私学校辞めるかも」

その言葉で彼の表情は少し変わるただ 目の前で話す彼女はそれ
をふざけて話す訳でもない

彼女なりに考えた結果なのだろうと彼は思ったようだ

「……それはお前の夢が順調と捉えれば良いのか」

「うん おかげさまで」

一花は話す 今のままでは駄目なのだろうと

同じく夢を持つ者たちもそれぞれのやり方で道を追っていると言
う

彼女のなりに考えた結果の一つが学校を去る事だ

それもまた一つの方法だろうと彼も納得した それで彼女の夢が
叶うならと

「寂しくないと言えは嘘だがな………ちゃんと卒業させてやりた
いってのもあるさ……」

俺はお前の夢を応援している その為の努力も惜しまない でも
失敗しても諦めないで欲しい……前に進み続けて欲しいんだ」

「コータローくんはそこまで言ってくれるのに 君は夢も夢を持つ事
もしないんだよね」

「俺にその資格がねえからな……半端な人間だ 誰かに言われただけ
で揺れる夢なんて意味はないさ」

彼は一度彼女に話した 自分は夢を持たないとそして持つ気もな
いとその理由も彼は決して口にはしない

ただ自分にはそんな資格ないとそう言うだけだ

でも彼は決して夢を馬鹿にする人間ではない 持たざる自分は持
つ人を応援しようとしてそれが不可能ではないと証明して欲しいと
思っているのだ、だから一花の女優として活躍する事を自分の事によ
うに彼は喜んでくれる同時に一花は、それが寂しくも見えるのだろう
……どこか諦めきつた彼のその表情が………。

「風太郎もきつと応援してくれる 嫌味は言いそうだがな」

「彼らしいね」

「あいつは素直じゃねーからな 俺も人の事は言えねえけどよ」

「本当に お兄ちゃんしてるね」

「兄貴だからな………」

「兄だからか……ねえコータローくん一つ聞いて良いかな？」

「面倒な事じゃなければな」

「うーんとね 私といや違うな 私達姉妹と君は昔何処かであった事があるかな？」

風太郎がどんな反応をするのか、兄だから分かると彼は言いきる
その姿を見て 彼女はある事を彼に聞く決心がついた

それは数日前 二乃が持ってきたアルバム その中であつた一枚の写真

自分達姉妹が写り その中にいたもう一人の謎の少年

一花が手を引き 二乃が抱き着く彼だ 『こー』と呼ばれる笑顔が似合う彼の事がずっと頭に残っているのだ その彼と仏頂面な彼が何処か重なって見えると彼女は思い

彼に聞いた『あつた事があるか』と 彼は考えるように口に手を当て『一花が最初にか』と独り言のように呟けば、考えが纏まったのか話をしてくれた…。

「あるよ……………ずっと昔だ お前とお前ら姉妹とな」

「そうなんだね やっぱり あの子が君なんだね こーお兄ちゃん」

「こーお兄ちゃんか随分懐かしい呼ばれ方だな 二乃からコウって呼ばれてたな

それで一花は全部思い出したのか？」

「少しだけね 家にアルバムがあつてそこに君が写っていた もしかしたら私だけかな 気づいてたのは

二乃は多分 君と彼を同一人物とは思って無さそうだけど」

「そりやまあ……………今と昔では全然違うし 二乃も気づく訳ねえよな」

「昔はあれだけ 仲良さそうだったのに 今は随分と言われてるよね」

「無意識に俺を誰かと重ね それをどう反応して良いか分かんねえだろう 反抗期の妹だ」

「お兄ちゃんも大変だね」

「兄なんて そんなもんだよ… よし詳しい事は林間学校が終わったら話してやるよ」

「今聞きたいけど…………… うん 終わったら楽しみにしてるね」

(これで心残りなくなっただかな……私はこれで良い 踏ん切りをつけよう)

彼に感じていた既視感と懐かしさの正体は嘘では無かった

この少年がああ頃自分達と遊んでくれていた　こーと呼ばれていた少年本人だった

それを思えば彼が「家族だ」と言い張ったのも納得であるし　自分が「お兄ちゃん」と呼ぶ事に抵抗がないのも納得できる　ただ「兄」と呼んでいたのは基本的に二乃だったらしく

今とは彼への接し方も真逆だったと述べる　そうした理由なのだろう彼が二乃に何を言われても本気で怒らないのは、妹の言う事だと彼は聞き入れていたのだろう

「少しだけで　気になってたことが聞けたからすっきりした」

「そうかい　なら良かった」

「うん　これならいける」

「どうした一花？」

「ねえ　コータローくん　今夜ここで二人でキャンプファイヤーしようか？」

「まあ………小さい炎は確かにあるけどよ　俺は踊るとか苦手だぞ」

何か決心をつけたようで何処か儂げな表情で彼女は彼に手を伸ばす

少々困惑していたが、彼女の決心を読み取ったのかはたまた付き合いが良いのか

彼はそれを拒否はせず　その場から立てば彼女の方をじつと見つめる

「四葉がキャンプファイヤーの伝説とか言ってたの聞いたんだけど　どんな話なの？」

彼の手を取り少しばかりその場で踊る中　彼女は先日妹が話したことを思い出していた

それは図書室での彼等の会話だ 当然それを彼は一花も聞いており
あの場に現れたのかと思ったのだが彼女は話が終わった頃に現れ
全容は知らないと言語る

話して良いものかと彼は考えるが、黙っておくのも後味悪いと思い
彼女に学園での伝説を話した

それはキャンプファイヤーの最後に手を繋いでいた二人は永遠に
結ばれると言うロマンティックな内容で彼も恋や愛は好きだが、伝説
自体はあまり信用してないと話す

「え……………コータローくん それを三玖は知ってるの?」
突然足を止める彼女は彼にそう問う

彼は首を縦に振る その答えに彼女の表情は一気に蒼白となった
自分を抱くようにその場で肩を揺らし『そんな筈じゃ 三玖 私
は』と何度も妹の名前呼ぶ

彼女は知っている 目の前の彼を妹である中野三玖はどう思っ
ているのか

だから ただ踊るだけでも良い 彼と踊ってみればと妹に言うが
「一花で良い」と言われ 彼女もそれに承諾 ただ先程彼と話す中
彼女も決心が付き 明日のダンスは無しでいこう 彼とはそれで
終わりだ

これからもずっと今のままだと だが自分は知ってしまった
明日行われる キャンプファイヤーでの踊りの意味を 妹が何故
それを自分に言わないのか

何故自分は、軽い気持ちで妹と接して居たのだろうか
だから彼女は言うのだ『そんな筈じゃ そんなつもりじゃないよ』
と狼狽する彼女を見て

少年は自分の手を彼女の頭の上においた ゆっくりと頭を撫でる
落ち着かせるように彼女一人ではないと一花に教えるように
彼女は顔を上げれば、そこには彼がいる 自分一人ではない

「落ち着け 一花 俺がいる 一人で抱え込むな」

「……………コータローくん コーくん……………」

(あれ 今 またどきって何だろうこの気持ち)

「お前がどうして今 三玖に謝っているか分かんねえけど 俺のせいだろうな」

そして俺はお前と三玖を会わせてやらねえといけない 少々強引だが この手しかねえな」

「どうするの コータローくん？」

「こうする !!」

バキツ：

この手は最後の最後にと彼は思い 強行手段は避けていた

だが 時間も過ぎこれ以上ここにいれば自分も彼女も体調を崩すそれに一花が三玖の名前を呼んでいる 兄として彼は二人を会わせる必要があると覚悟を決めた

彼女に頭を出さないよう言えば 近場にある木材を手に取り

扉に向かい叩きつける そして思いつき蹴りも入れる

扉にバキツと音が鳴り 微かに外の光が入ってくる

同時に 防犯センサーが衝撃を感知し 反応そして寒さ対策での火を感知し

スプリングクラーも作動した 彼は勿論服を着こむ一花にも降り注ぐ

それでも彼は何度も 扉をたたく だがそろそろ体を騙すのも限界に近いのか

その場に膝から座り込む だが手を止めない 今更どんな悪評を言われようが彼は気にはしない

自分を送り届けた 父と妹に謝りの言葉をつぶやき

何としても ここから出る為に手を動かす

「コータローくん それ以上は手も怪我するよ」

「はあ……………大丈夫だ こんくらい」

咄嗟に彼を止めようとするが、彼はその彼女の為に動く 止まることは無い……………。

暫くした後には 扉がガチャリと 外側から鍵が開く音がする
少し後ずされば、扉は開かれ その光が入り 二人は顔を背ける
「誰だ？ すまねえ 一花がいんだ 連れてつてくれ このままだと
風邪引いちまう」
「それはコータローくんもだよ」

気づけば二人はスプリングカラーで体中濡れていた
一花は彼から上着を借りているからまだまじだが、彼は厚着とは言
え服のみだ

このままでは彼も危ないと言うが、実際既に幸太郎は病人であり今
更と言う状況だが

それを知るのは彼と同じく風邪をひく風太郎だけだ

二人のやり取りを見て その倉庫の外の間

二つの影の人物 その一人が口を開く

「幸太郎君 一花 ここで何をしてるんですか？」

「……………一花」

その先にいたのは 五月と三玖の二人だった
彼女達から見ればびしょ濡れの幸太郎と一花が薄暗い 倉庫で二
人きりと言う状況がどういふ事なのか聞きたいのだ……………。

第三十四話 不良少年と結びの伝説 3日目

気づけば朝だ

二人が扉を開けた後はあんまり覚えてねえな
ただ去って行く二人の表情が印象的だった事だ

あの顔は納得してない顔だった 今日うちに二人を探して話を
しないとな

「風太郎、生きてるか」

「ごほ、ごほ何とかな？ お前も無事か、こんな季節に水浸しはきつ
いだろう」

隣のベットで横になる風太郎

俺や一花を探す手伝いで体力を消耗して

風邪がぶり返したようだ 悪い事をしたなこいつは楽しみしてた
のにな

謝罪を入れるが『まずは今日を乗り切れ』と言われてしまった
そうだな今日だ今日で林間学校が終わるそれまでに何とかして
五月と三玖にはきちんと話をしねえとな

ガチャ

「上杉さん お兄さん 自由参加だからって逃がしませんよー」

「だるいし寝る」

「無理だ相手は四葉だ 勝てねえよ」

現れた四女は力強い

俺も風太郎もベットから引きすり出され

あつという間に着替えを渡された

だるい体に気合を叩きこみ何とか力を入れる

昨日の蹴りで足も痛むが何とかするしかない

まだ時間は残ってんだ……………。

—————

――

――

風太郎が誰かに教わっている姿とはとても新鮮である

四葉に手を引かれ滑っているのを見るのも何だか良いもんだな

あいつも楽しそうだ まあ何処か辛そうでもあるが、それは口にし
ない

せつかくの思い出が全てパーになる

「……………」

「お兄さんも滑りましょう」

「あつあ…………… 少し待っていてくれ」

やばい本格的にきつくなってきた

四葉には悪いけど俺は暫く近場で休むぞ

昨日の今日でそろそろ限界に近いのだろうか

ちきしようが……………。

「はあはあ……………」

遠目で向こうを眺めれば三玖も合流した様子だ

四葉の話では一花も倒れたと言っていた

風邪を移してしまったか、あんな事になるなら火なんてつけずさつ
さと扉をぶち壊すべきだったな

「風太郎の奴 こけてやがるな 楽しそうが良いな……………。」

今日までもてば万々歳だが、は果たしてもつのかこれは？

今までこんなに動いた事はない騙し騙しも後何時までもつか分か
んねえぞ

少しでも体力を温存する為ベンチまで向かい座っているが視線も
定まらないし…息も上がってきた

「君は滑らないの…？」

「誰だ お前は？」

「私だよ 一花……！」

「ああ そうか 一花か …………… はあはあ 何でここにいんだよ寝てる筈だろうが」

「まだ 万全じゃないけどね」

「無理すんな 風邪引てんだろ 今は帰れ はあ」

「幸太郎君こそ きつそうだね」

「平気だ これくらい それと昨日の話だけどさ 帰ったら話すから待ってる」

「あ うん わかったよ 幸太郎君も昨日のこと秘密にしてね」

「分かってる 墓まで持つてく 用事は終わりか なら風太郎達と合流してこい」

風邪で寝込んだと言う話だが、こいつも相当無理をしてんな

部屋から抜け出して来やがった

顔も完全に隠して判断も出来んぞ

「……………はあ」

「大丈夫？」

「まだ いんのか……………俺は良い 風太郎達を見てればそれで十分だ」

「少しだけでいいから滑ろうよ」

「まあ……………少しだけな 俺は滑ったら帰るぞ」

「さあー 行こうか、みんなが待ってるよー」

「くっそ 元氣有り余ってるな」

これ以上は何を言っても引く気はないみたいだし
適当に滑って後はやり過ぎか……………

スキー板に足を乗せ後は重心を前に出すだけだ……………。

まあ滑った事は一度もねえーけどな

「……………風が気持ちいいな」

「つて 幸太郎君何処いくのー」

身を任せ俺はそのまま何処かへと走って行く

分かんねえよ止まり方なんて風太郎もさつきこんな感じに落ちて

たな

――

――

――

「……………はあ 疲れた 戻るか」

そのまま転んだが、雪がクツションとなったんだろう
体に痛みはなく死ぬことはなかった

あのスピードだし 運が悪いと何が起きてたか分からん
けど このまま雪に埋もれるのも悪くないかもな

「まあ 何時までもとは行かねえよな」

「大丈夫？ 幸太郎君」

「ああ……………悪くねえな 滑るのも」

「はっはは なら良かった」

「ああ 一旦みんなの所に戻るか」

「そうだね 三玖達も待つてるから」

「三玖か……………昨日の事話さねえと それに五月にも説明しねえと

一花は悪くねえんだ

おれが悪いんだ……………はあはあ」

「こ 幸太郎君 本当に大丈夫」

「あつあ 大丈夫だこれくらい」

くっそ視界がぼやけて一花の顔も判別出来ねえよ

何とか手を借りて立ち上がるけど全く力が入らない

ただ 一花に心配はかけられない今はみんなの所に向かわねえと
な……………

「……………」

「いくぞ 一花」

今日の一花はやっぱり不調だな
様子も変だし 口調何かおかしいな 同じ筈なのに違和感が出て
くっぞ

「よう 風太郎 生きてるかあ?」

「幸太郎も生きてるかあ」

「何とかなあ」

声で分かるこいつも限界が近い

何時ぶつ倒れてもおかしくねえな

そんな時に鬼ごっことか無茶しやがって……………。

俺は流石に無理だな 足もまともに動かんし

ここに来るまで二乃からも追いかけられたようだし三玖のお陰で
何とか回避したそうだが

そうそう同じ手は使えんだろうな

「俺はやらんぞー 立てんからな」

「そうかい 俺は逃げるからな」

風太郎は力を振り絞り何処かへと向かって行く
から元気も良い所だな無理はすんなよ

「はあ……………」

「コータロー?辛そうだよ」

「何だ いたのか」

「コータローの横にいる」

ふと横を見ればかまくらがある

そこから三玖の声が聞こえて来た

風太郎が逃げたと言った場所は俺の真横だったみたいだ

駄目だ 判断力もねえよ……………。

「コータローもはいる?」

「ああ 少し休むわ」

「どうぞ……………」

「失礼します……………よっ 昨日ぶりだな さつきも見かけたけど

な」

「コータローが何処か行くから」

「わりいな……………四葉から逃げてんのか？」

「うん フータローに言われた 四葉とハンデはいらないって公平でいこうって」

「そうだろうな それは駄目だ 風太郎ならそう言う お前が努力した日本史と同じだ…。ハンデなんてそれは努力を否定する事だ」

「フータローと同じ事言うんだね」

先ほど逃走を開始した弟は少しばかり三玖と話をしていたようだ

『あいつが後天的に身に着けたもんだ その努力を否定したくない』

本当にカッコいい事を言う奴だよ

でもあいつの意見を俺も尊重する 五つ子は全員同じで誰かが一人飛びぬけているという訳でもない

四葉の運動力や三玖の日本史に関する知識 どれも彼女達が努力して得たものだ

それを否定する真似は弟は好まない

遊びで本気の答えは格好が悪いが、そういう人間だ 上杉風太郎とは……………

「まあ……………兄弟だからな でも良かった 三玖と話せて」
「……………」

「昨日のあれは何でもねえよ 俺が馬鹿だから

一花も巻き込んでさ それなのに俺は何も言えず寝ちまった 風邪までひかせたよ」

あの一件は俺の判断ミスだもう少しスマートに出来た筈だ

それなのに頭が回らず三玖と一花を早く合わせたくて一花のあんな顔見てられねえさ

「妹を心配する姉なんだ 早く会わせたくてな」

「大丈夫だよ 分かってるから」

「そうか……………なら良いんだ」

「そう言えば コータロー 一花とさつき電話したんだ」

「おう 何だって……………」

「一人でいる 五月を見つけて欲しいって……………」
「五月ねえ……………了解」

三玖は風太郎と別れ直ぐに一花と電話をした

その様子からどうやらまだ本調子ではないと言う事だ

何とか帰ると話すが、その後に一人いる五月を探して欲しいと伝え
たようで、風太郎もそれを聞いていたと話す

そうかそう言う事か今理解した あのと違和感の正体だ

あの一花の様子だ……………。

不自然過ぎる話し方と俺へのよそよそしさ 普段の一花ではああ
はならないだろうな

「三玖 風太郎に電話を繋いでくれ はあ……………」

「うん わかったけど はい」

「よう 風太郎 お前も分かってるだろう？ 何処に居るか」

最早最後の馬鹿力だ、今はそれを使いきるだけだ

—————

—————

———

二時間前

「いやー悪いね こんな時に体調崩すなんてついてないな」

「事故とはいえ 不注意が招いた結果です 反省して日中は大人しく
してください」

「え〜」

部屋のベットの上で顔を赤らめやや息苦しそうにしている一花が
五月に介抱されている

昨日の一件でプリンクラーが作動し体を冷やした事が原因だろ
う

朝方には7度代の熱を出し咳をしている姿も目立ち

五月からは『今日は一日ここにいる事』と注意をうけた 本人は今日のスキーを楽しみにしており

やや残念そうにしている 彼女の言葉に従う一花だがあまり強気に言えないのは他にも理由がある

それは 一花と彼が服を濡らし 倉庫でうずくまっていた事だ

最初は『幸太郎君 見ませんでした?』『一花とコータロー見なかった』

五月と三玖の言葉から始まった 案の定彼と関わろうとしない人間ばかりおり

彼の居場所は分からず仕舞い 風太郎の手も借りて懸命に探すが成果は見込めず

スマホに連絡をしようにも部屋に置きっぱなし 一花も充電がないのか繋がらず

彼等は焦った 周囲の生徒からは『上杉が中野さんを何処かに』と幸太郎本人が思っていた通り

そんな反応がちらほらと出始め 『ここにおいても埒があきません森の中を探しましょう』

五月は静かな怒りを滲ませ 森の方へと向かった

ただ『きやああああああ』と入って行ってそうそうに森の中で泣きながら逃走し

『ここにはいませんね』と直ぐに弱音を吐いていた そんな時だ

近くの倉庫から物音がし センサーが鳴っているのだ

倉庫前まで来れば 中から壊されたように 扉には穴が開いており

五月は持っていた鍵を使い 恐る恐る 三玖と共に扉を開ける

そして二人は見た びしょ濡れになりながら 荒い息をする幸太郎

彼を支えるように同じく濡れている一花の姿を……

その後は教員が駆けつけ二人を問い質すが

『さーсенでした 俺の不注意です 勝手にどうぞ』と彼は適当な

態度で教師を煽るかのようになんて言

部屋へと戻って行く

一花本人も要領を得ない状況で『すみませんでした』と謝るのみだ
五月と三玖は二人の話を聞けば、それぞれ部屋へと戻り

その夜に一花は熱を出し 部屋で安静にしてるよう教師からも言
い渡されたのである

「あー…五月ちゃんは、私に付き合わなくていいからスキーしてきな
「ですが…」

「大丈夫 私も回復したら合流するから …それともコータローくん
と顔 合わせづらい？」

「……」

「あの旅館からずっと警戒してたもんね」

「やはり あれは一花でしたか」

観念したのか一花は林間学校初日 七人で寝たあの部屋での事を
五月に明かした

朝起きれば 自分の隣では無防備な姿見で寝息をたてる、彼の姿だ
多少なりと興味は持っていた一花

ふいに彼の顔に自分の顔を近づけていた その時だ 五月が部屋
に現れたのは……

すぐに扉は閉められたが、あの現場は 確かに見られた
誰が幸太郎に対しそのような事をしようとしたのか

五月はこの林間学校の最中 色々と周りを見ていたのだ……
なるべく彼の周りで行動し 彼が誰といるのか観察していれば自

ずとあの現場にいた人物も探せるはずだとだから無理をしてまで肝
試しにも参加し 二乃にも聞いてみようかと思いい話をかけようとし
た瞬間

風太郎がふんするピエロが現れ 彼女は恐怖のあまり逃げ出した
当然 二乃とは逸れ 一人森を彷徨う中で 彼と出くわした

その時に彼に聞こうか迷っていた中で 二乃とも再会し結局は聞
くタイミングをも失った

そして 幸太郎が一花と共に倉庫で見つかるといふ騒動まで発展し始め

周りではそれが噂され始めていた 一花もそれは耳にしており『彼には悪い事をしたな』と口にもらす

「ねえ……五月ちゃん なんで彼をそうまでした 氣遣うのかな？」

「そ それは……」

「友達って言うには少し行動がオーバー過ぎるし 彼にはそんな理由もないって言うから」

「彼はきつと分らないと思いますから」

「ならさ 私には教えてくれる？」

「すみません 一花 今はこれを言うにはいきません」

「残念……お姉さんは信用ない見たい」

「そう言う訳ではありません ただ私がどうしてもと」

「意地をはっているの」

「ち 違います 意地とかではなく」

ずっと一花は気になっていた

初めて彼と学園出会った日から いやその前からだ 学園に転校したその日から

妹である 五月の様子は何処かおかしいもので口々に『上杉君』と言っていた

『上杉？』と頭を傾げる 一花 今思えば あれは幼い頃に知っていた彼の名前

思い出しかけていた予兆ではないのかと……

それからここ三ヶ月の事 家庭教師の合間を見計るかのように

彼女は彼に何度も接触しており 『面倒』と彼は口に出すも決して彼女を怒鳴る事はしなかった

一度 少しトラブルは合ったものの無事にそれも解決したようであり一花も満足している

そして昨日 彼と話すうちに 彼女の心にも変化が出始めていた 本当はただ 不思議な少年で 何処か自分達よりも大人びている

ような彼に興味を持っていた

それだけの筈だった……三玖にもそう話した

しかし 彼は言った『お前らとはずっと前にあっている』とその言葉で彼女は幾つか思い出した

靄のかかった少年の顔は晴れ 今とは比べ物にならない程の笑顔を浮かべる彼が脳内に現れた

『一花ちゃん』そう呼ぶ彼は確かに存在していたのだ……………

それはきつと他の姉妹も同じな筈だ 彼と遊び写真も撮る仲だった 自分一人だけの関係ではない

とても胸が痛く 張り裂けそうだが きつとこの思いは自分一人ではないだろうと……………

この五つ子の五番目の少女は 彼女にしか分からない事があるのだろう

「三玖がさ 私は駄目って言うんだ 五月ちゃんは心当たりあるかな？」

「三玖が……………彼女は何も悪く無いのに」

「やっぱり 何か知ってるんだね？」

「……………」

「無言か……うん わかった今は聞かない けどさ五月ちゃん 今は彼とそれにさ」

彼を探す手伝いをしてくれたフータローくんに会いに行くべきだと思う

フータローくんはあの人とは違うから……………」

—————

—————

———

「五月だけいいない？」

二乃は慌てたように言うが、問題は解決する

集まった 俺 風太郎 一花 二乃 三玖 四葉

大騒動とはいかないが一人だけ姿が見えないんだ、心配そうにするのは、当然の反応だ、

でもそれも終わる すまんな五月 こんな事になって……………。

「大変だね…でもさ、あまり騒ぎ立てると迷惑になるから」

「何が、騒ぎ立てるとよ！五月が、見つからないのよ！」

「あの…だからそれは……………」

徐々に話は、大きくなり始めるそうなる前に一旦集まった…。

ただ『これ以上は、騒がず、辺りを見回す程度に』やたら悠長に構える一花を見れば、姉妹大好き二女が、黙ってる筈もなし

慌てて止めにはいる。四葉となにかに勘づいたのか、三玖がこちらに視線を贈る…………。一花と電話をした彼女だからこそか…。

さてこの五女失踪事件…一体誰が犯人なのか？

まあ…そんな奴は、初めからないし

何より…………この場に元から6人しかない…。

俺、風太郎、一花、二乃、三玖、四葉だ

さてはてそうなると、さっきの一花からの電話に違和感と矛盾を覚える…。彼女は風太郎達に『あとから合流する』

咳をしながら答えていたそうな…。

無理はせずに部屋へと戻って欲しい、二人の言葉を洩々承諾したと話している…。楽しみにしていたスキーに参加出来なかった中野姉妹の長女……………そして目の前にはやたら悠長に何処か焦っているようにも見える。中野一花さん…………君は誰だ？

(最初に気づくべきだったな…………。)

『お前が 五月だ』

俺と風太郎は一花を指さした

風太郎の違和感それは彼女から『上杉君』と呼ばれた事だと話す

それはそうだろうな 一花は風太郎を上杉君と言わない

俺と風太郎を名前で呼ぶんだ そして俺の単純に違和感だ

一花はいい奴だ だがあそこまで親身になって俺の傍にいるだろうか？

ああまで、俺を気にかける奴は一人しかいねえよ…。

顔まで隠してんだ 分かる筈もねえけど お前はお前が思っている程他人に成り切れなかった

ただそれだけだ五月……………。

俺と風太郎は五月を指さすと その場で二人でぶっ倒れる

意識も暗転するが、最後に見えた…。

マスクをとればハッキリわかる 必死に呼び掛ける。あのこの子の姿を…：やっぱり五月だ…：良かった…：今度は…：…お前を

「幸太郎君！」

「上杉さん！」

「コータロー！」

「上杉！」

—————

—————

———

彼等は五月達によって宿まで運ばれた

風太郎は何とか意識を保ち二乃に『外せない用事で来れない』と謝罪していた

元気を出せと彼に言われるが二乃は口に出さずも『あんたが言うな』と言った顔である

一方幸太郎にいたってそのまま意識は戻らずベットまで運ばれ

上杉兄弟の林間学校はベットの上で向かえる寂しい終わりとなつた

部屋は完全立入禁止となり 教師の監視が入ってしまった

誰一人看病も出来ない状態となった……………。

それぞれがキャンプファイヤーへと向かう事になった

「くだらないわ」

「あれ 二乃さんどうしたんですか？ 誰かと踊る約束をしたって」

「フラれちゃったわ」

「あまり落ち込まないくださいね」

二乃は静かにキャンプファイヤーを眺め 守られなかった約束を思い出す

真弓の声は確かに届いているが、心ここにあらずと言ったように彼女は考えこむ

「真弓 悪いけど トイレ行ってくる」

「あつ はいお気をつけて！」

何かを決心したのか二乃はトイレと彼女に言えば気合の籠った表情でその場を去って行く

三玖と一花が火を眺めていた

幸太郎が倒れた直後の三玖は普段では見れない程動揺し

先程やつと落ち着いた程であんな姿初めてだと姉妹は話す

買って来たであろう抹茶ソーダを一花に手渡し 渡された側は困惑気味

隣に座れば一花はここ三日の事を思い出した

幸太郎の風邪は誰のせいなのかと

それを聞けば三玖は首を横に振る

『コータローもフータローも元から調子がおかしかった』と述べけし
て彼女を責めはしない

二人は妹の看病の際にそれを貰い
それを隠しまま林間学校へと参加していた
どちらかと言えば 一花はうつされた側の人間だ 謝る事はない

誰かが悪いと非難する事でも無い事だ

「もつと良く見てあげられたら 私も自分の事で必死だったから ご
めんね」

「？」

「ダンス断るべきだった もつと早く気づいてたら良かったのにね
伝説の事……三玖の想い」

(そしてこの気持ちにも……………)

キャンプファイヤーを眺める一花はここ最近自分の事にかまけて
周りがどう動き 自分が本当は何をすべきか見つめ直し その度
にため息をもらす

それと同時に感じる胸の高鳴り 三玖を見てはこの想いをどうす
べきか彼女は真剣に考える

これは誰の為の想いなのかを……

(一花もきつと五月も コータローの事を想ってる)

三玖はかつて出会ったあの少年
彼とどう接し彼と何を話せば良いのか彼女は内心ずっと戸惑って
いた

だけど彼女が知る彼と今の彼はどれだけ変わろうとその中身はか
つての少年そのものだった

様々な人の話を聞く事でこの湧き出る感情は何かを彼女は理解し
た

それは一花も同じだ 彼 上杉幸太郎がどんな人間か彼女なりに
理解した

彼が何故自分達の為にそこまで身を削るのかもわかった
そんな彼を見て胸にかすかに覚えた温かさを 彼が自分達の兄の

ような少年の正体でも構わないと

彼女は想い始めていた

「私のせいでコータローは一度深く深く傷ついた 本当は会ってはいけない 彼に顔を見せるのもダメ

そう言い聞かせて来た でも彼は私に変わらず接してくれて
……………とても温かくて

彼と話して 彼といて気づいた…私は……………」

「三玖はどう思ったの 彼の事を聞かせて」

（独り占めはしたい この感情に嘘はつけない だけどそれは今じゃない
ない

それにもう彼に守られているだけは嫌だ 同じ目線で見ていた
い……………」

平等ではない 公平に行こう それが彼女が一花と話して選んだ
答えだ

「……………私はコータローが好き だから好き勝手にするよ

その代わり一花もお好きにどうぞ 一花にもそして五月にも負けない」

（五月ちゃんもか……………」

三玖は堂々と宣言した 彼 上杉幸太郎の事が好きだと

例え過去に自分と彼に何かかがあったとしてもこの胸に秘める感情を隠す事は出来ない

どんな時でも自分と向き合い 声をかけてくれる彼が好きで好きでたまらないと……………」

「ねえ 三玖 コータローくんと過去の何時か教えてね」

「うん 分かった その時はコータローも一緒に」

中野三玖と上杉幸太郎との間に起きた事件

それが語られるのは彼女達が思っているより早く訪れる事になる
……………。

—————

――
――

中野四葉は上杉風太郎のしおりを持ち立ち尽くしていた
そして自分を応援してくれた上杉幸太郎の私物を静かに眺めてい
た

「具合の悪い　上杉さんとお兄さんを無理に連れまわして台無しにし
ちゃった　私が余計事をしたから……………」

そう語る四葉を五月はじつと見る

五月も同じだ　彼女も三玖と同じく　幸太郎の異変に気付きつつ
あつた

でも彼はそれを表に出さず普段以上に元気に振る舞い

一花を巻き込んだのは自分が悪いとずっと謝っていた

四葉が余計な事をしたと言うなら

来ないという選択をとった彼を林間学校に來させた自分にも大き
な責任があるのだ……………」

だが彼女はそれを表情には出さず　四葉と向き合う

風太郎の持つしおりに書かれた　言葉を彼女に見せる

それを見れば　四葉の表情にも自然と力が戻る

きつと無駄ではないと彼女に示す……………」

「上杉さん達に聞いてくる！」

目的が決まれば彼女が行動に移すまでは早い既に部屋には居らず

風太郎が眠る部屋へと向かっていた

一人残された五月　誰に言う訳でもなく静かに呟く

「何時　あなたに許されますか　幸太郎君？」

中野五月と上杉幸太郎の出会いと事実が明かされるのはもう少し
先の事である……………」

―――
―――
―――
一人の教師が二つのベットでそれぞれ眠る少年たちを動かないよう監視していた

しかし別の教師に呼ばれそのまま部屋を後にする……………。
すると何処からか見慣れたアホ毛がベットの置く入口付近から出ている

そう 中野五月である
先生に隠れ行動する事は真面目な彼女からすればとても耐えられるものではない

だがこのまま林間学校を終えることは出来ない
風太郎とそして何より幸太郎のイベントをベットで終わらせる事はしてはいけないのだ

既に来ている筈の四葉の姿はなく 一人不安の中、何時までも黙って座っている状況は変わらない

動かなければ始まらないと意を決した
壁を伝い 電気をつける為ボタンを探す

(あ、ここですね！)

そして カチツとボタンは押された
電気がつけば そこには自分一人ではない

一花も二乃も三玖も四葉も全員集まっていた
おのおのが彼等を心配し ここにやってきた
顔を見合わせれば 自然と笑みが出てくるし 声も出る

やはり自分達は五つ子だ こういう時にどう行動するか分かって
いたのだろう

二つのベットに彼女達は近づくと、それぞれが彼等の手を取り
時間を待つ。外ではカウントダウンが開始されている。

3 2 1 彼等と彼女達の林間学校は終わりを告げた

……………。

(幸太郎君 あなたは一人ではありません)

(コータローはもう傷つけさせないよ)

(コータローくん何時か君の夢を聞かせてね)

(上杉さん早く元気になってください)

(本当に世話のやける兄弟なんだから……………)

第三十五話 不良少年と結びの伝説 2000日目

あれから約5年6か月が経っていた

上杉らしいはもすつかり成長し かつての兄達と同じく高校生となつた

台所に立ち『パパパーン』と口ずさみ 軽い朝食を作ってる最中である

すると家の電話が鳴りだし らいはは慌ててそれに出る

その相手が誰かと分かれば 彼女はため息を漏らす

電話の向こうでらいはと話すの今日結婚式を挙げる主役である

上杉家の次男 上杉風太郎だ

彼は今日と言う 大事な日に指輪を家に忘れたと話し

今から取りに行つていては間に合わないと言い

妹に持つてきて欲しいと頼み 彼女は『わかった』と電話を切る

今でも変わらない兄に嬉しくもあり 悲しくもありと言つた表情だ

二人の会話が終わるとそれを聞いていたのか 父である 上杉勇

也は『血は争えんな』と堂々と語る

そんな似て欲しくない所が似ている父と兄を見て

『良い人と結婚する』と決意を固めた

だだをこねる父に呆れるらいはだったが、ふと この場にはいない彼

もう一人に兄の事をらいはは思い出す

「幸太郎はもう 日本に戻ってきたのか？」

「ギリギリだつて伝言残つてたよ でも間に合わせるぞーつて」

「あいつも風太郎の結婚が嬉しいんだろうな」

「お兄ちゃんは今こうで良い人見つかったのかな？」

「ふーん 俺には分かるぞ あいつが好きな子は日本にいる」

「ええー 私にはいないつて言つてたよー」

「ふははは 父親だからな 勘で分かるぞ」

それに あいつは苦労したんだ幸せになるべきだ」

「そうだね お兄ちゃん達には幸せになって欲しいね」

「ここにはいない 上杉幸太郎 彼は今どこで何をしているの
だろうか？」

「……………」

「……………」

「……………」

一台のタクシーが速度制限ギリギリのスピードで道路を突っ走っている

事故は起こさないよう尚且つ目的の場所まで間に合う様にと
……………」

「洒落にならん 弟の華々しい日に俺は遅刻する可能性すらあるのか？」

上杉幸太郎は焦っていた 今日弟の結婚式だ 事前に彼女等
からも聞かされ

その為に服も新調している 髪もセットした 色自体は当時とは
違い真っ白になっており

向こうの大学に来て3年程前だ 知り合った友人達が彼の昔の写
真を見て面白がり

白く染められてしまった

朝方に気づけば『ふぎけんな!』と部屋にいる全員を追い出した
それも今では良い思い出なのだろうと苦笑いしている

そして今日 それから3年が経った日 出発前日

彼の弟の結婚を勝手に祝いだした友人達がどんちゃん騒ぎ

朝まで飲み明かしていた

そのまま彼を巻き込み朝まで大騒ぎだ 酒は飲まされずには済ん

だものの部屋の惨状は見るも無残

『私は先に向かうから幸太郎も遅れないように』と二日目ここにを
発った友人の言葉を思い出す

『俺も早めに日本へ向かえば良かったよ』ボヤキ交じりに部屋で寝
ている彼等にシーツをかける

足元に転がるワインの瓶を掴めばやはり昨日の騒動は夢ではない
んだなと嫌でも思い知らされる

本当に何をしているんだと彼は呆れている

一度彼は現状確認 パスポートや財布 向うで使うだろう品も忘
れずチエツク

目の前にある紙に何かを書き出せば彼は部屋を出る準備を開始

時計を見れば自分が乗る筈の飛行機が出発するまであと僅かばかり

間に合わないと判断した幸太郎 その場でスマホを取り出し

急いでらいはに電話を入れ『遅れるけど絶対間に合わせる』と伝言

日本との時差は8時間近くあり電話の向こうは夜だった

乗る筈だった便を諦め 次に日本に向かう便を探し急いで荷物を
纏めると自分の部屋に

『No Trespassing』と紙を貼り そのまま全速前進で
空港へと走って行く

場所は日本へ

それから飛行機に揺られ 無事に日本に到着した彼は空港を足早
に出ると

急いでタクシーに乗り込み 風太郎達がいる式場へと向かう

「5年少しか………手紙ではやり取りしてるけど 会うのは久々だ
元気かな」

ふとスマホを取り出せば 卒業旅行で撮った集合写真が待ち受け
にされている

彼が弟や中野姉妹と撮った最後の思い出であり

風太郎や彼 中野姉妹も笑顔で写っている

思い出すだけでどれだけこの日本で彼等と楽しくもあり そして辛くもある

高校生活を過ごしただろうか全て良い思い出である

卒業旅行を最後に彼は 日本を離れた……………。

それから5年近くが経っているのだ

連絡は取り合ってはいるが直接会うのと手紙 その差は大きいものである

期待に胸を膨らませながらも 遅れてくる自分はどうか彼等に弁解しようとか脳内で会議が行われている

「まあ…………取り繕う 必要もないか 実際に遅れてきてるんだしな」

そして今日 4月28日 弟と彼の恋人が結婚する

林間学校からちようど2000日が経ったこの日に これは伝説の効力かはたまた二人の為した事か

恋や愛には興味を見せずただひたすらに勉強をしていた彼 それを見守るあの子

きつと沢山の人々が彼等を祝福するだろう

そう思えば自然に笑みも出る

「ここからは歩きます。……………。これで足りる筈です、さて走るかあ！」

遠目で見え始めた式場 ここからの道は車で移動するよりも歩いて行った方が断然早く

運転手にお金を支払うと彼は急いで会場へと走って行く

全速前進だ これまでにならない程に 既に式場の中からは音が聞こえだす遅刻だ…、入り口の扉が見えれば彼は迷うことなく その扉を力強く開けた

「はあ はあ……………間に合った」

扉の先には、弟とあの子がいた
綺麗に着飾ったあの日の少女だ

急に扉が開かれたと思えば、息を切らした髪の白い男が入ってくる
のだ嫌でも目立つ

本人も『すみません』と頭を下げ

兄が来た事を知った妹は『お兄ちゃんタイミングが最悪だよ』と小さく呟く

隣の父は大笑いだ 主役より目立ってしまった

参列者一同もその人物が誰なのか気づけば笑いを堪える

そしてそれは今日の主役も同じだ

日本から去った 兄が戻ってきた自分と彼女の結婚式の為に

「たく 間に合ってないぜ 幸太郎」

「久々だな 風太郎」

「!!」

「それと〇〇もおめでどうー!」

二人を祝福し 二人も『ありがとうございます』と彼にお礼を述べる

林間学校の伝説

それはキャンプファイヤーの結びの瞬間に手を繋いでいた二人は
生涯を添い遂げる

素敵な素敵な伝説である

彼は言う 人は恋や愛を通し変わっていくと

恋とは人生の終着駅 学生はそこで終わりと弟は言った

だが 風太郎は変わった あの子と出会う事で……………。

林間学校の最終日の事は二人も良く覚えていない

誰が誰と手を繋いだのかも定かではないけど 幸太郎には確信え
た何かがあった

きつと風太郎は結ばれると だからこの結婚は必然なのだ
……………。

彼等と祝う幸太郎 果たしてその伝説は彼にも適用されるのか
父が言う 幸太郎の相手とは一体誰なのだろうか……………。

(俺も答えを出さないとな……………あいつ等の為にも……………。)

第二章

第三十六話 不良少年と彼と入院

「はぁ……………病院か」

俺が目を覚ますと そこは知らない部屋だった

ただ左手に刺さる針とそれに繋がる管のようなもの所謂点滴だ

白く清潔感のある部屋に備え付けのテレビ

自分が寝ているであろうベットなど…………。

嫌という程自分が何処で何故ここにいるのかが分かってしまう

つまりは病院だ

服も何時の間に着せられたのか、入院服へと変わっていたりする

(はぁ…………) 深いため息がもれ

気を入れ直せば 自らの上半身に力を入れ起き上がらせ

体を感じる重みも懐かしく感じ 改めて自分が寝ていたのだと実

感している

どれくらいの間と考えるだけでも恐ろしく毎度の事ながら学校行事に関わるとロクな目に遭わんな

(風太郎やあいつらは…………何処にいらんだろうな)

何時までもここで寝ている訳には行かないと

だるさの感じる体に鞭を打ち長い無用と体に入れ直し動き出

す

病院に入院している程の余裕は家にはなく 幾ら請求されるんだ

と胃が痛くなる

長期入院とか御免被る ベットから足を出し

青いスリッパを履き 点滴を抜き取り俺は個室と思われる部屋か

らさつさと去ろうと扉まで向かい

手をかける 扉近くの壁を見ればカレンダーがかけられており日

付を確認した

日付は11月6日ではなく 11月10日 林間学校から四日

経っていたと嫌な現実だ

(四日間か…たく ひ弱な体よな！)

ガラガラと扉が開かれる

『あつ！』

目の前には 黒のショートヘアをした白衣の女性が現れ

目と目が合い 向かい合うようにその場で固まった

はぁーと深いため息もでる『見つかったよ』

それは少し前に俺と五月が出くわした人物で俺が会いたくない人の一人だ

俺がベツトから脱走した事に気づき うーんと唸り眉を顰める

このままでは不味いと体を動かすとしたが、四日間と言う時間で鈍った体は思っていたように動かず

先に行動を開始したのは 相手側の女性だ

『コウくんー』と詰め寄り捕獲体制にはいる

何とかこの場を逃げ切る為に彼女を避けようと試みる

前回は捕まってしまったが今度はそうはいかない 幾ら鈍っているのが元の運動力は俺が勝る

(今度は捕まらねえぞー) 意気込む俺は右に避ける

だが そんなのは儂い夢だ

入院していた俺には走る力何てない すぐに手を掴まれればその

場で動きを封じられてしまう

ズルズルと連行されていく

「離せ——俺は病院何かで寝てる暇なんてねえんだよ！」

「はいはい 病人は大人しくねえ〜」

「あぁー 縛るなー！ 動けねえだろ」

「動かない為だからね これは」

ベットまで引きずられれば 拘束用のベルトで両足と両手が縛られ

これでもかとの自由まで奪われちまった

坂下水木 俺の幼い頃からの友人でお世話になっていた人だ

自称姉と名乗る人物で良く家にも顔をだしていた

現在はこの病院で働き数々の手術を成功させた天才医師である

年齢は言わぬが何とやらだ 因みに既婚者で旦那さんは今は日本にはいないとか

色々な理由があり 俺もこの人を避けていたが、この前の買い物時に目をつけられたようだ

抜けた所もあるがそう言う所は抜かりねえなこの人は……………。

「でも 俺は退院するんだ 解放しろ」

「だめーだめっ！ 君はここ4日間意識なかったんだからー まーた無茶して お姉ちゃん悲しいな」

「うるせー 知るか んな事」

「なんで ここまでくれたのか昔は素直で良い子だったのにー」

「はあ？ 昔は昔だろ 周りが勝手に変わってるだけだ」

「まあー 変わんない所もあるようだけど 今回はちよーと看過できなかなー」

「…っ」

「弟くんも火曜まで入院してたし 今朝は勇也さんもお見舞いに来てたよ」

「風太郎にも勇也さんにも迷惑をかけたとは思ってるさ」

「ここに入院していたのは俺だけではない」

同じく最終日まで無理をした風太郎も世話になっていた

風邪の症状などが抜けきるまでとして あいつも一昨日まで入院していたらしく

その間に中野姉妹も風太郎の所に顔を出していたと知らせてくれる

(風太郎は無事か……良かった)

風太郎は勇也さん達とお見舞い来ていたとも教えてくれた

視線をずらせば 花瓶も置かれ 机の上にはらいはからの手紙だらう

『元気になってね』と一枚置かれている

勇也さんまでわざわざ足を運んでくれたんだ 本当に家族には心配をかけてしまった事は

深く反省している こう言った事で家族に心配をかける事は二度としないと決めていたが

結局はこうなってしまった

「なーら 今後こういう無茶は絶対にだーめ O?」

「もうしません これで良いか?」

「ああー うんこれは反省が足りないね うん お姉ちゃんも本気で君に挑むよ」

「だ だから 反省してるって やめ やめろー」

俺の態度が気に入らないのか 動けない患者相手に

じりじりと顔を近づけるが、目が笑ってはいない この人は怒らせるととても面倒な部類だ

白衣の中から取り出した注射機を左手にもち

『安全だよー』と言うが、全然そんな風には見えないし

怪しい匂いしかない 長年いるんだこういう時にこの人が何をするかぐらいは俺にも分かる

「安全だって言う奴ほど 安全じゃねえーんだよ 変な薬を投薬するな!」

怒ってるのはわかるけど、そう言う方法で叱るのはやめろ

ある意味で死を覚悟した俺は、腕も手も動かせない中 静かに覚悟を決め

目だけ閉じた 抵抗は諦めてここからの逆転劇はそうそう出来るものではない

(南無三)

トントンと その時 扉が叩かれた

このタイミングで一体誰が訪問してく来たのか そしてこの状況をどう言えいいのか

頭で整理する間も世界は動く 扉は開かれ

外から同じ顔の人間が五人程入ってきた

正確には五つ子の姉妹だがな

『……………』

数名は俺の状況に呆れてるのか声もでないと言った表情だが、俺もそうだ

どんな顔でお前らと会えば良いのか、考えていたからな

再会がベットで縛られる俺に迫る注射機 何のプレイだよ

目をぱちくりさせると まず初めに五月が声を出した

「失礼しま…！ 幸太郎君 目を覚ましたんですか！」

「ゴータロー 無事で良かった」

「よ よう五月 それに三玖も 元気してたあ？ ってかこれ解け

よ」

「ちっ 今回だけだよ こーくん」

「次回も世話になるかよ！ 良いから早くしろ」

舌打ちをし 彼女は持っていた注射器をしまい込み

俺を拘束している ベルトを外し 何とか俺は自由を得る

あのままいたら体を痛めてたし こいつらが来てくれて助かった

「もー 勝手に退院しようとしないう事 次逃走したら これじゃすまないよ こーくん」

「へいへい　って　五月も三玖もどうしたんだ」

『返事だけはいつちよ前だね』と返され　言葉に詰まるが俺の日頃の行いだ

反論も出来ない　何だかんだと言いつつこの人は心配症だしな

俺とみずき姐のやり取りが耳に入ったのか二人が俺に詰め寄ってくる

見て分かる逃げれば何をされるかわかったもんじゃない…。

「コータロー逃げようとしたってどういう事　コータローは倒れたんだよ！」

「幸太郎君　あなたは今日まで意識を失っていたんです　それなのにそんな無茶を」

「……………」

二人は俺を心配してくれていた

プルプルと肩を震わせる　俺を見据える……………。

心配だけではない　怒ってもいた　当然だろうな　見舞い来てみればその相手が逃亡を凶ろうとした

そして未遂に終わり　先ほどまでベットで拘束されていたんだ

怒りもするさ　俺もそんな状況に出くわせば、きつと怒っていただろうな

「わるかった…ごめん」

「本当にもう　こんな無茶はしないでください」

「コータロー約束して今後はしないって」

「あぁー　分かったよ　しません　それと心配かけたな悪かった」

「コータローが無事ならそれで良い　何かあれば何時でも言ってね」

「私も幸太郎君の力になります　だからお願いします」

「おっ　おう　お手柔らかに頼むわ」

鬼気迫ると言った感じだ

無下に扱う事もしないし　それは彼女達の心を踏みにじる事である

今後は心配をかけないよう俺も少しは身の振りを考えないとな
あの時とは違う 俺を蔑むために来たんじゃない心配して来てく
れたんだ

二人との約束が終われば 二乃達も中に入り声をかけてくる
少しよそよそしいがきつと彼女なりに心配してくれていたんだろ
うな

四葉も花瓶の水を変えると言い 動きだし

一花も『おはよう 不良少年』と嫌味混じりだ

この風景を見ると何処か心が落ち着く 苦手な病室でも気分も悪
くない

林間学校では色々とおつたが、やっぱりこいつらといると楽しいな
「つて あんた何時までいんだよ いいから帰れよ」

「ええー お姉ちゃん 寂しいな」

「何が寂しいだー」

「コータロー この人誰病院の人？」

「そうだよ 中野三玖ちゃん 私は彼の担当で名前は坂下水木と言
います 一応彼の幼馴染かな」

それと五月ちゃんお久しぶり」

「どうも あの時はちゃんとご挨拶も出来ず、すみませんでした ま
さか幸太郎君の担当の方とは」

「いいよ そんなかしこまらなくても お姉ちゃんはそう言うの苦手
だから」

「コータローの幼馴染なんだ」

「認めたくないけどな」

「ふっはは お姉さんでお医者さんだよ」

「あんた 良く医者になれたな その適当さで」

「褒めるな 照れるだろう こうくん」

「ほ め て な い」

彼女は未だ帰る事はせずに俺達を見ては楽しそうに笑っている
何故そんなに楽しそうなのか

この人なりに昔を思い出ししては、懐かしんでるんだろうと表情を見ればわかる

だがこう言った性格はあの頃から何も変わってはいない

以前あった時もだ 俺が連絡を入れずともその関係を彼女は続けて居てくれた

何も疑問に抱かず俺と接して居たのだ、まあ人前ではやめて欲しいんだけどな……………。

(旦那さん 早くこいつをどうかしてくれ……………。)

自称姉との対応を検証中に何かを思い出したかのようにパンと手を合わせる

「そうだ こうくん次第では明日にでも退院できるように手配はするよ」

「明日は土曜か まあ異常はねーんだろ？」

「君は風邪と過労とその他諸々普段からお姉ちゃんも休みたい」

「しらねーよ 医者ならちゃんと働け」

風邪だけではなく過労と来たか

俺個人はそこまで意識はしてなかったが『ここまで疲れるって君は会社員かな?』と

呆れたように言われてしまう

当の本人は林間学校での出来事は風邪だけが原因と思って他の考えは除外していた

by俺

「あの経過を見なくても大丈夫なんですか?」

「うん 〃〃〃数日まともに睡眠取れなかったのが大きかった訳だし点滴で栄養も取れたし

暫くは平気だよ」

「そうだよ 点滴代もだ 今は手持ちが少ないんだ下ろさないよ」

ただでさえ入院費をどうするかと考えるだけで頭が痛いのに

加えて点滴を〃〃〃数日俺は使っていた そんなリツチな生活が許

されるか？

『一本いくらだ』と小さく呟いていれば、一花の隣にいる二乃が口を開く

「うちのパパが払ってるから」

「ああー また借りが出来たか お礼言わねえとな」

「君は相変わらず 中野先生が嫌いだね」

「苦手なんだよ 昔から」

「コータローくん うちのお父さんと知り合いだったんだね どうりで中間試験の時態度が大きい訳だよ」

「一応は顔見知りだからな」

知り合いというか何と云うか色々面倒な関係だ

付き合い自体も中野姉妹よりも長いだろうな

俺が再び運ばれたと知った時 どんな表情だったんだろうな

あの人の事だ 自分の患者じゃなければあまり気にも留めないだろうと思っっている

でも今回は世話になったし 嫌でも顔を会わせるだろうしきちんとお礼を言うか……………。

「一花も それに二乃も四葉も心配かけたな 見舞いありがとな」

「わたしは みんなが行くからついて来た訳で 一人だけ行かないのも変だしさ」

「私も お兄さんに色々迷惑かけちゃいましたし お見舞いくらい何度も来ますよ」

「私もコータローくんの異変にもう少し早く気づくべきだったと反省してるよ」

五月や三玖だけじゃない 俺はこいつら全員にも心配をかけてしまった

きっと俺が寝ている間にも何度かお見舞いには来てくれていただろうな

学校のプリントやその他は既に風太郎を通して渡してあるらしい

あいつにも苦労かけたし 話が終わったらちゃんと教えてやらないと心配だろう

(……………そう言えば一花の奴)

「ん？ 何かなコータローくん お姉さんに見惚れた」

「違う……………」

会話を続けているとふと一花の服装に目が行く

今更だが一花は制服だ、どうやら学校続けてくれているようで何だか安心してている

「どっちも続けるのか？」

「うん もう少しだけね」

「おつ なんの話ですかー？」

「なんでもねーよ」

一花はまだ話してないだろうし 彼女が話さないなら俺も口外はしない

そう言えば、こいつらが全員いるとは珍しいな『みんなが行くから』と二乃も言っていた気が

それに今日は金曜で平日だ 明日は土曜 もしかして学校帰りなのか？

俺の疑問にいち早く答えたのは五月だ

「はい 学校帰りにみんなでお見舞い行こうと話たんです

上杉君は用事があると今日は来れないと謝っていました

でも目が覚めたようで安心しました」

「本当にすまん まさかここまで体にかたが来るとはな俺も知らなかった」

風太郎は来れないと言っていたようだが、あいつは学校前の時間に来てくれたようだし

気にはしない 偶には一人の時間も必要だ

「コータローはもう少し休んでいても良いと思う」

「生活していく中でお金は必要だろ 休むのは難しいさ」

「なら 私がコータローを養う」

「いや 大丈夫だ」

「いえ 私が幸太郎君を養います」

「お前らは話がおかしくなってるぞ……………」

おかしい 俺のバイトが云々の筈が俺を養う云々に変わって来てるんだが？

何で二人はそこまで熱くなってるんだ 少しは落ち着け

「え 五月さん？ いや大丈夫だから友人に養われるとか俺はヒモだよ」

「ははは コータローくん修羅場だね」

「笑ってねえーでどうにかしてくれ」

悠長に笑っている一花だけど二人の目は本気に見えたんだけど

俺はそんな生活はしないぞ 最終的には自立を目指してんだからな

五月と三玖というレアな組み合わせでこのまま見ていてはいたいが、いい加減止めないと何時までも続くぞ

楽しくもあるが、やはりこの姉妹がいると騒がしくある

先程と同じく会話を眺める暇なみずきねえは、それを見て会話にまざり出す

「それにしても この面子を見てると 昔を思い出すね コーくん」

「ん………まあな つうかあんたは静かにしてくれ」

「ぶーだ 意地悪」

「何今の 昔って？ どうい意味よ」

二乃が今の話題に食いついてきた

俺と会っていた事を思い出したのは一花だけの筈だ

帰ったら話すと言ってた事を忘れていた まさか倒れて入院する

とは俺も思ってもいなかったしな

後でまた話せば良いし適当に流すのもありだが、みずき姐の口は止まらない

あつけらかなとした感じで彼女達に話す

「こう君と中野姉妹のみんなは幼馴染だからね 私も良く顔をだしたよ うんうん」

「何でそう ペラペラと話すかねえー？ 聞かれてないなら言う必要ないだろう」

「えっ あんたと私達が」

「お兄さんと私がですか！」

「愛称はコウだったね 二乃ちゃんは良くコウにいつて言っつてこーくんの後ろをついて歩いていたね」

「あ あんたが あの写真のお兄ちゃんだつていうの あありえない 目つきも違うし」

「生まれた時は母親似だったんだがな 今では父である勇也さんと目つきが似てきてる」

「ああ ああー 嘘だあんなに優しそうなお兄さんがああ」

「コータローは優しいよ 二乃が一方的に怒ってるだけ」

「だつて こいつが何時も ああーもー」

二乃が混乱するのは勿論だろうな

あの頃の俺と今の俺では見た目と言えば確かに別人だ

どうしてここまで変わったのかと再び話を掘り返す みずき姐に

うるさいの一言で済ませる

いい加減やめてくれ その話題は……………

「じゃ 私が説明しようかな」

「ここまで来たら隠す必要もないし 一花とは約束してたしな 俺が話す」

「良いから良いから あれはまだ こーくんが小学五年生で君達が小学四年生の時だったかな」

「え？待つて？ 今 こいつが五年で私達が四年つて言いました だつて私達とこいつは同学年」

この話をすると当然そこがネックになる 色々とデリケートな話題もあるし…。

色々と避けたい事もあつたが、話すと決めた時には俺も覚悟を決めてはいたのだ

二乃が指摘する通り 俺と彼女達は同じ学年だ 今は だ

昔は違う 正確には一年前までは 俺はこいつ等よりも 上の学年だつた そう過去形だ

「彼は 君達より年上だよ 今は18才になったしね」

「お兄さんが本当にお兄さんだった…」

「まあ……人には色々事情があんだよ それもおいおい教えつから今は昔の話からだろ」

話すうえで通らないと行けない事だが、今は俺とこいつらの過去の話だ

驚いている 四葉や二乃には悪いとは思う

ただ約二名 五月と三玖だけは俺の年齢を聞いても驚く素振りも見せないし。この二人は覚えたいたのか？

第三十七話 不良少年と彼等の過去

みずき姐が話すと言ったが、

俺と中野姉妹との正確な出会いの際にみずき姐はいない

彼女はその後の中野姉妹と出会ったのである

ただし正確には姉妹の事を思い出したと言った方が正しいな

食堂で四葉や五月と再会するまでは忘れていた…。

まあ今では全ての事が鮮明に頭の中で再生されるほどには思い出している

そして当時を思い出すと確かに俺も今とは違い 随分と捻くれたと思う

本当にいい子ちゃんだ 吐き気がするほどにな

「あれは俺が小学5年生の時だ 俺はあの人 零奈さんと出会ったんだ」

『!!』

「当時は色々あって 勇也さんも忙しくて俺も風太郎も知り合いである坂下の家で良く世話になってた 風太郎は坂下家での事は全然覚えてねえがな」

あの頃は特に風太郎は色々とぐれていたからな…。

今の俺に比べれば、可愛いもんだけど…

その風太郎は、坂下の家に行っても何時もふて寝していたし 時には、俺と折り合いも会わず何度も喧嘩した事もあった

そんなある日だ 俺は一人で散歩し 転んで泣くのを我慢してた時だ

『どうしました？ 迷子ですか』

例の一件で、結構な記憶が抜け落ちたが零奈さんの存在は強く記憶に刻まれている

あの子と同じだ例え約束は忘れていても存在だけ覚えていた とても美しく儂い人だ

彼女と幾つか会話する中で俺は何処となく 彼女は無愛想と思っ
てしまった

小学5年生相手に真面目な言葉で話し 当時の俺は混乱しただろ
う

ただ彼女は俺の名前を聞くと『君が 彼の子なのですか 随分と成
長しましたね』

彼女は俺と俺の家族を知っていた 勇也さんを知っていたのだ
戸惑う俺に彼女は言った『少し家に来ますか？ 足の怪我を放って
おく訳には行きませんか』

彼女の家はそこから近くだったらしく 俺は手を引かれ、当時はま
だ中野と名乗っていなかった彼女達の家へと向かったのだ

アパートについた矢先だった

俺は一人の少女と出会った 長い髪を持つ 可愛い女の子

「最初に出会ったのが お前だよ 一花」

「私が コータローちゃんと最初に会ったんだ」

「まあ 昔だからな忘れてても仕方ねえよ」

本人は驚いているがそれは事実だし

俺はそれを今でも覚えている つい『可愛い』ともらした程だ

うぶだよ 俺も その話を聞き一花も照れているが、気にするな

『お母さん この子は』

『彼は 上杉幸太郎君 私の知り合いの子です 一花』

『そうなんだ 私は一花 よろしくね 幸太郎君』

『よろしくね 一花ちゃん』

足の痛みなんて既に消えていた

そして俺は更に驚く光景を目にした

『一花 その子誰』

『わあー 男の子だ』

『君誰ー』

『お母さんのファンかなー』

『同じ子が 五人』

俺は混乱した どういう事なのか

一花ちゃんは何人も存在するすごい人間なのかと子供ながら色々な発想が出て来たが

零奈さんの言葉で俺は状況を理解した

『彼女達は 私の娘です 5姉妹で 君より一つ下です 上杉君』

『5姉妹』

俺や風太郎も兄弟がだそれは年子だ

しかし姉妹それが5人ともなれば 驚かないわけもない

でもなぜだが 不思議とそれを俺は受け入れていた 一応は兄だ

自分より下の子と接するのは弟で慣れていた 柄にもなくお兄さん風でも吹かせたいのか

自己紹介もしていた

『小学5年生の 上杉幸太郎です 友達からはコウって呼ばれてます よろしくね』

『私は二乃だよ よろしくコウにい』

『私は三玖』

『私は四葉って言うよ』

『五月だよ コウ君』

二乃は最初から俺をコウにいと呼んでいた

後から知ったが彼女達には父はいなかったし

そう言う意味でも年上の男の子さらに母親が連れて来たのだ

それなりに信用あったのだろう

零奈さんから足の怪我に絆創膏を貼ってもらおうと 俺はみずき

ねえの待つ家に帰ろうとした

それを呼び止めたのが一花だった

『コウくん また会える』

『うん 何時でも会えるよ 一花ちゃん』

『約束だよ コウお兄ちゃん』

約束は守りたい 当時からそうだった だからまたここで彼女達と会おうと決めた

『さようなら 零奈さん』

そう一言言うと俺は全速力で坂下の家に向かった
学校終わりのみずき姐は俺を見て

『こうくん 何か良い事あったー お姉ちゃんに言ってみー』

『友達が5人出来たよ』

『すごいじゃーん 流石私の弟だ』

『違うよ』

ここの会話は今も変わらない みずき姐も今も変わらない

そして俺は 坂下の家まで預けられれば 毎日のように彼女達と
会い遊んでいた

時には風太郎にも声をかけるが『うるさい』と一蹴された

『みんなー』

『あー コウにいだー』

『コウお兄ちゃんだ』

『コウくん遊ぼー』

『みんなで何かしよう』

『何がいいかな』

『かくれんぼー』

俺と彼女達はそうして毎日のように遊んでいた

それが全てだ 俺 上杉幸太郎と中野姉妹とのあの頃の話である

「んで：数年して 今になるわけだよ」

全部話すと時間があっても足りない 重要な所だけを彼女達に話
し終えた

一花との約束でもる訳で 聞かれたなら俺はそれを無視はしな
い

黙っていた理由も俺個人の気持ちの問題だ

決心がつけば話せるようにはなるしな

過去の出会いの事を俺は伝え終われば、やはりと言うか

一花もだが、二乃や四葉も相当 驚いている
ただ気になるのは、三玖と五月の表情だ 明らかに三人とは違う
俺が思うにこの二人は、気づいていたんだろう
だが、それをとやかく言うつもりはないし 黙っているならそれも
理由があつてのことだろう

「あのね コータローくん 何か恥ずかしいね」

「話した俺にそれを言うな」

「驚きです 言われてみれば、あの時の男の子はお兄さんだった気がします」

「俺だから 気がするじゃない 本人だ」

「けど不思議ですね お兄さんは急に来なくなりましたし」

「それは……………色々あつたらろ」

「そうか コータローくんは家の事情を知ってるし お母さんの事も知ってるんだよね」

「悪かったよ 黙ってて でもお前らが元気そうで本当に良かった」

中野姉妹は今でこそセレブと言うか中々のお金持ちなんだが

当時は今の俺達と変わらない生活をしていた

それでもだ零奈さんは俺が遊びに来ることを拒もうとしなかった

俺もそれを深く聞こうとはせず 子供なりに気を利かせていたんだらう

そして あの日 から俺は彼女達の前に姿を現さなくなった

「で 二乃 お前はどうした？」

「いや いや 本当にあんたなの…何時も遊んでくれていたあの人が」

二乃はすげー動揺してる それもそうだろうな

家に来て勝手に家庭教師し始めた 人間のうちその一人が昔遊んでいた人物だった

それもだ 見た目も性格も全然違つて来た 二乃が疑うのももつ

ともだ

でもそれが事実であり 俺も覚えているし 一花にだって覚えはあると話してた

当時を思い出してか二乃の顔は真っ赤だ

俺と目も合わせようとしてもしない徹底ぶりである

「まあー そんな感じだ 今まで通りで良い普通にしててくれ」

「これを聞いて 普通にとか…」

「良いよ 二乃 まじで普段通りでそれの方が俺も話しやすいしな」

「……………まあ 少しは考えてみるわ」

視線を俺から逸らしてぶつぶつと言いだす二乃

昔のような関係とまでは無理とは思うが、少しでもいい方向に考えてくれればそれが一番だ

四葉達も話を受け入れてくれたのか『改めてよろしくお願いします』と握手を交わした…。

とここで終われば今日は解散だったのだが、先程から視線を逸らしたままの二乃が

『ああー』と何かを思い出したようで 俺の方に視線を戻す

病院では静かにと言いたいが、一応は個室だ 少し声を上げた所で迷惑はかからん

「あんたの事でもう一つ 聞きたい事…あんたが私らより 年上って!? さっきの話でもアンタの方が一才上だったしき」

「ああ 確かに私もそこが引つかかかってたかな」

何でこう勉強は覚えねえ癖にこういう事は、きちんと覚えてんだか柄にもなく頭を抱えちまうよ

その熱意を勉強に向けて欲しいもんだ…。

しかし面倒だ 俺が彼女達より年上と言う話 これに至っては帰って来ても特に話す予定は無かったんだけどな どのどいつだそれを口から滑らせた奴は？

『ふっふー』と鼻歌まじりに俺と目を合させないようにしているみずき姐

焦ってはいるんだろう だらだらと汗をかいている
本当にこう言う時は口が軽いよなこの人は
安心しきってる証拠だが、もう少し口は堅くしてくれ…。

「別に隠すつもりはねえ………ただ アレだ こういう事って気を遣わせる」

「やっぱり 言いづらい事だよな」

「それでもねえよ 隠すようなことをしてたのは事実だしな 何時かはバレる」

「勿論 上杉さんも知ってるんですよね」

「当たり前だろ…」

こう言ったデリケートな話題は避けるべきだと思い四葉も口を塞ぐが

やはり気になるものは気になるだろうし 何時かは話すべきだろうと

俺も薄々は思っていたところだ 『友人だから話す必要がある』
かつてある男が俺に言った言葉だ

その時は何も言わず最悪な形になったが、その事を繰り返す訳にも
いかない

もうあんな事はごめんだからな…。

これを誰かに教えるのは何時ぶりだろうか…

「俺は去年 事故にあってな

それで病院に運ばれて 出席日数が足りなくてな 進級できなかった」

俺上杉幸太郎は去年の春 2年生になったばかりの季節に 交通事故に遭い

そのまま2年生をやる羽目になった 馬鹿な男だ

「それって そのままの意味って事 コータローくん」

最初に口を開いたのは一花だ

俺以上に深刻そうな顔でじつと見ている
風太郎や家族も勿論知っていたし それを口には出さないだけ
正直言えば、五月はこの事を知ってたと思う
あえて言わないのはあいつの優しさだ…。

「そうだ 去年一年間 俺は病院で過ごしてた」

「あつ… まさか 胸の傷って」

突然口を開く二乃

家に泊まった日に五月に成りすました際にやはり見られていたよ
うだ

「…………… 胸の傷はそんな時のだ 人に見せるもんじゃないしな」

「何か悪かったわね」

「謝るな 別に気しちやいねえよ」

俺がこれを隠すのは純粹に人にお見せできるようなものではない
からだ

怪我人アピールを俺はするつもりはないし

それで同情を買う気もない

二乃は顔を伏せるが、こいつは傷を見たくて来た訳じゃないし
色々な事情が重なり偶然それを目にしたただけだ

「まあ…………俺がぼーっとしてただけで」

横断歩道を渡る中で迫ってくる一台の車

それは信号の色などまるで見えていないかのようだった

咄嗟の事だ 俺は回避が遅れ 車と激突 気づけば病院のベット
の上

そのまま去年一年を俺は何も出来ないまま終わってしまった

「違う…………嘘だよ コータロー」

俺が会話を続けようとした時だ

先程から黙っていた三玖が俺の言葉を遮ってきた

当時の事を話そうとしたが、彼女にはどうもそれが納得いくものではないと来た

あの祭りの時と同じだ 明らかに怒っている

「嘘じゃねーよ 俺のせいだしな 怪我したのは」

「それは私が」

三玖が言いきる前に俺は言葉を続ける

「この話は これで終わりで良いか？ 面白くもない事だし 三玖も何か悪いな」

「……………コータローが謝ることは無いよ」

自分を責めるような表情の三玖

だがこれは本当にお前は悪く無い だからそんな顔はしないで欲しいな

一花も二乃も四葉も三玖の様子が気になるようだが、今はそれには触れないよう

気を遣ってくれているようだ

俺個人は騒ぐほどでもないと思っただがな……………。

五月も先程からずっと黙ったままだし どうしたもんか

暫くは無言が続くが、それでは空気は重くなる一方だ

五月は一度『少し電話があるので一旦外します』と病室からそそくさと出て行ってしまふ

三玖も落ち着いてくれたのか、表情も明るく見える

五月がいない今だから彼女達に聞けることがあるのではないかと欲が出た

さっきの今で聞く事ではないが、後々聞くのも色々と考え物であった

空気を換える為の一つとしてここは話を切り出すべきだろう

この話は以前に五月に話した事だが、俺は他の姉妹にも聞きたい事であった

「なあ お前らに聞きたいんだが 五つ子以外に姉妹って 実はいたりするか？」

「なんと」

「まさか 連続でとは」「ん？」

このタイミングで俺は彼女 中野六花について聞こうと思った
五月は知らないと答えたが、他の姉妹ではまた別の答えが来るのはと言う淡い期待があった

しかし何やら様子が変わり 『連続で』と一花は言った
どういう意味だ？

「六海ちゃんですか？」

「誰だそれは……………」

「実は 昨日色々あってさ」

一花が言うには昨日ひと悶着あったらしく

その時に彼女が適当に作った人間が六海と言う人物らしく

似たような事が続きつい 『連続か』と呟いたようだ

しかし六海とは面白い発想をするもんだ

他にも あいつと昔あった人物はいるかと風太郎から聞かれたよ
うだが

誰もそれには答えなかった

風太郎本人も『いるわけないよな』と過去にあった人間と現実を比較してたと

失礼なやつだな あいつも……………。

「それで コータローくんはどうして そんな事聞くのかな？」

「探してるんだ 中野六花って言う 人物を」

「中野……六花さんですか お兄さん？」

「知らねえか？ 俺も話したのは去年の12月の一回だけだが あの人は確かに中野と言ったんだ」

「…………… お姉さんは知らないかな」

「コータローごめん 私も知らない」

「中野って 偶然じゃない？ 私も知らないわよ」

「私も心当たりありません すみませんお力になれず」

「知らないならいいんだ また地道に探すさ」

やはり 誰も中野六花と言う 人物には心当たりはないと答える

四葉や二乃の表情からも見てほしい分かる

残りの二人もそうだ 特に変わった様子もない

本当に知らないのだろう まじで中野六海と言う人物が実在して

その人が俺の前に現れたのでは？とかつての記憶を少々探っているが確かに

彼女は『六花』と答えた

中野と言う苗字も聞き間違いではないだろう それは確かである

可能性として 誰かが嘘をついている 俺にはあの人がこの姉妹と関係ないとは思えない

何らかの理由で、正体を隠しているのではと 何でそんな事すんのかねえ

考える時間はあるし焦る必要はないんだろうが、俺はもう一度でいい

あつて話をしたいだけ それが唯一だ

「コータローくんはさ その六花さんと何かあったの」

「何かという訳でもないぞ ただ適当に会話してただけだ 名前を知ったのはお互いが帰る時だしな」

「コータローは会ってどうするの？」

「特に何もねえよ」

「ふーん そう」

「どうした三玖？」

「何でもないよ」

先程までしょんぼりしていたが、次は妙に食いついてくるな

『五月ちゃんには聞いたの』と一花に聞かれたがあいつには一番最初に聞いている

あんだけいる時間があるんだ それくらいのチャンスは何時でもあったしな

「でも 風太郎程言う訳でもないけど 勉強は続けろよ 進級出来ないと面倒だからな」

「コータローくんが言うのと重いね」

「先輩からのアドバイスとして受け取っとけ」

「わかりました お兄さん！」

「うん 分かった勉強もこれからも頑張ってみるよ」

「少しは考えておくわ」

「頼む 風太郎は俺と違って 真面目なんだ」

「君も割と 義理堅いけどね」

「自分ではわかんねーよ 俺は俺のやり方でやってんだ」

このまま続けば進級するら危うい可能性もある

だから今からでもいい彼女達には成績を上げて

笑顔で卒業して欲しいのが俺の気持ちだ それはけして変わらない
い

自分の心は変わらない それを再確認し

少しばかり 会話をすれば五月が何処からか戻ってきた

表情は少し硬く見えるが何かあったのか？

「五月 どうかしたか？」

「いえ 大丈夫です 幸太郎君」

「そうか無理はすんなよな」

「お兄さんがそれを言いますか」

「コータローが言っても説得力はないよ」

「はあ……………ひでえ言われようだな」

そのやり取りを見て五月はくすくすと笑っている

笑顔が出せるんだし 本当に大丈夫だろう

暫くすれば時間も結構過ぎていた

彼女達もそろそろ帰り支度をしているし長居をさせればあの人になんて言われるか

「きーつけて帰れよ」

「はい 幸太郎君も無理はしなでください」

「はいよ それと三玖 お前は何も気しなくていいから」

「……………コータローもまた明日」

「じゃ さようならお兄さん」

「もう倒れないでよね 家族もいるんだし じゃ」

「またねー コータローくん」

それぞれが別れの言葉を述べれば、病室から去って行く

先程会話には混ざって来なく 珍しく静かなみずき姐はまだ部屋に残っているが

彼女達が病室から出ればそれを追うようにして彼女も去って行く
去り際に『逃げないでね』と釘を刺されるがもうそんな気はなねえ
よ

上杉幸太郎がいる病室から去った後 坂下水木は中野姉妹を呼び
止めた

「おーい 君達少し良いかい」

「えっと水木先生でいいですか?」

「そうかしこまらないで良いよ 昔みたいに水木お姉さんとも呼んでくれ」

「あまり覚えてない」

「あっははは こうくん程君達とは接点ないからね」

坂下水木もまた彼女達を知り

そして彼女達の母とも親しい仲だったが、娘である彼女達との接点は彼程は無く

時折彼を迎えに来る際に顔を合わす程度だった

しかし 彼女達のアルバムに合ったあの写真は彼女が撮った物で他にも幾つか彼女達は当時の写真を持っていると話す

「それでどうしてコータローくんの担当の人が呼び止めるんですか？」

「うん 君達に聞きたいんだ こうくん 幸太郎はさ 学校ではどうかな？ 私は忙しくて

彼もその辺全然教えてくれなくてさ」

「お兄さんは その あのー頼りになりますよ」

「でもコータローは無茶ばかりする」

「やっぱりそうだよね 彼のその性格は昔からだから今更は無理だね」

「確かにあいつは昔からそうだった気はするけど」

「でも 幸太郎君は学園に休まず通っています 安心してください」

「休まずか……良かったな さつき聞いたでしょ 彼は事故のせいで一年も病院にいたって

だからさ心配だったんだ 友達はあるのかな 勉強は遅れてないかなとか

私さお姉さんとか言いながら仕事ばかりで 事故の時もそうだよ彼の事構ってあげれなくて」

事故当時の事は彼女は今でも鮮明に覚えている

血まみれになりながら担架で運ばれてきた 大切な幼馴染の姿弟のように可愛がった彼が物言わぬ死体同然となって病院へと運ばれてきたのだ……。

毅然と振る舞うが、その心中は穏やかではない 曰く『生きてる事が奇跡』と誰かが言った

それは彼女も同意した 彼の見せた生きる意志が奇跡を起こしたも同然だったと言う

高校2年の始まりという大事な時期に彼は 学校も通えず 地獄

のようなりハビリの毎日

あの性格だ音を上げる事はしない けして他人には見せない

彼がそう言った時に 彼女は家のある事情で中々 彼の話し相手になる事が出来ず結局はそのまま

退院後もまともな連絡も取れない 彼は携帯も捨て去った 個人で取れず

家にかける勇氣もなかったと打ち明ける でも彼女はずっと彼を気にかけている

彼があんな姿になったのは本当の原因は自分ではないのか……？

彼女は自分を責めていた

普段見せる冗談交じりの話し方はしない 真剣な彼女を見て五月も向き合う

「水木先生…… 大丈夫です お兄さんには私達に 上杉さんもついていきますから！」

「うん 馬鹿で無鉄砲でその癡隠し事は多いし大事な事は何も言わない そんな子だけど

うかこれから仲良くして上げてください」

「頭をあげてください 大丈夫です 私達は彼を信じています 彼は何もしてません

私は知ってますよ 水木先生」

「五月ちゃん……君はもしかして」

「では 私達はこれで帰ります 彼が無茶しないよう それに先生もご自愛ください」

「ああ うん じゃ また何時か会おうねー 中野姉妹さん！」

五月や四葉の言葉で救われたのか彼女は笑顔を取り戻し

去って行く彼女達に手を振った

その後は 俺が目覚めたと知って 風太郎やらいは勿論勇也さんもバイトが終わったので

顔を見せに来た

(お前 ついに聞いたらしいな)

(でも あの中にはいないだろう)

(分かんねえぞ)

(あの子なわけがない)

風太郎と軽く話をすれば、明日は家庭教師で来れそうにないと謝っている

『優先は向こうだ気にすんな』その言葉で気合が入ったのか弟もやる気だ

俺も明日には退院できるし 今日大人しくしているべきだとみずき姐にも釘を刺された

もうこのまま寝てしまおうと意識を手放そうと枕に顔をうずめれば

ガラガラと扉が開かれ 再びの来客だ

めんどそうに顔をあげれば 白衣の男性がそこにいた

「目が覚めたようだね 上杉幸太郎君」

「どうも 中野先生」

中野先生 中野姉妹の今の父親でこの病院を営んでいる人物

そして 事故に遭った俺を担当した医師がこの男だ……………。

第三十八話 不良少年と彼女が語る彼の過去

上杉幸太郎の病室から帰って行く彼女達

彼のお見舞いついでに知った事実は自分達が思っていたものよりもヘビーな事が多かつたようだ

過去に彼と出会っていた事 彼が実は進級出来ず二年をもう一度やっている事

彼が誰かを探しているという事

あまり自分の事を話さない彼から様々な事が聞けた日だ

特に 彼が話した『俺は事故にあった』と言う事も彼が普通に話すが

そこまで簡単に話せる事ではないだろう

それでも話したのは自分達を信用しての事だろうと一花や四葉もそう理解した

その彼の為にも今は少しでもいい勉強する事がお返しになるだろうと

ただ約一名はあの時相当動揺し『私が』と口からもらし

姉妹もそれを聞き逃してはいなかった

病室を出る際も気持ちを整理して彼に挨拶をして帰った三玖だが家に着く頃には、しよんぼりとしている

彼の回復は嬉しいし 一花にも負けないと言い張った三玖だが

どうしても今日の話は彼女が思うに納得の出来るものではないよ
うだ

彼は自分がぼーっとしていて事故に巻き込まれたと話したが

それは果たして事実なのか？

彼は深くは話さなかったが、彼の今の姿と昔の姿が違うのもその事故が影響しているのではと

一花も二乃も考えている それを知るのは三玖 そして五月ではないだろうか

五つ子だからこそ隠している事も薄々分かってしまうし

表情を見れば、一発である ただそれはデリケートな話題だ

自分達が騒ぎ立てるような事ではない 彼が話さないのならそれで今は良いと

気になる気持ちを抑える

彼が学園で孤立しそれを受け入れるのは、事故が最も大きいだろうと

彼女達も理解した

今では普通に自分達とは会話するがそのほかの人物とは自発的に会話する事を避けている節もある

それもそうだろう 進級しなかった生徒がいるとは他の生徒からすれば

会話がし辛いにも程があるし 下手な詮索もできない

ただ 事実はどうあれ 彼が学園では『不良少年』『問題児』と呼ばれるのはどういう事

なのだろう

彼は本当に何かをおこし それを隠しているのか？ それも考えただが

普段から接する彼を見て 一番にそれはないと思っただのは二乃だった

幾ら自分が何を言っても口は悪いが親身なって接する彼が誰と問題を起こしたとは到底思えずにいる

一花もそれには同意だ 反省して今ではそう言う人間になったのかとも取れるが

その可能性も違うだろうと彼女なりに直感があった

幾ら頭を使ってもその答えはけして出てこない

あるのは彼がまだ何かを隠しているという事だけだ

帰宅して時間は経つが、無言は続く

ただ それを破つたもがいる

それは三玖だ 他の姉妹にも伝えたいと言うのだ

「コータローは自分がぼーっとしてたせいって言ったけど あれ嘘」
「なんで 三玖が言い切るのよ？」

「嘘なのは本当」

「ねえ 三玖はやっぱり何か知ってるの彼の事故の事を？ 無理に聞きはしないよ」

自分から話を切り出すも何か口ごもる三玖

やはり彼女は彼が巻き込まれた事故について自分達よりも詳しいのだろう

無理強いはしないと窘める一花

林間学校で自分に宣戦布告をした妹と今の妹が同じとは彼女は思えなかった

何か後ろめたい事でもあるのだろうか？

一人で抱え込まないで欲しいと彼に言われた言葉を三玖にも言う
何故かますます表情を悪くし 一花も少し焦っている

ただ三玖には助け船もちゃんと来ていた

それは予想通りと言った人物だった

中野五月 その人だ

帰ればすぐに部屋に籠っていた彼女だが、何かを決心したのか

部屋から出れば、リビングへと降りて来た

「で なに 五月まで何か言いたい事あるの」

「はい 彼がこれ以上学園で孤立しない為 この話は 姉妹の中だけでも知るべきです」

「五月……でも勝手に話したらコータローが」

「大丈夫です三玖 彼の父親から既に了解を経ています」

「何時の間に コータローくんのお父さんと電話してたの？」

「病室を出てすぐですよ」

五月の考えは彼の事を自分達だけでも知っておくべきだということだ
だと

二乃が『そこまでする必要ある？』と言う

勿論かっつてお世話になった人だが、それはそれ今は今だ

けど五月はこの話は、他人事ではないと言う

やはり三玖や五月も少なからず関わっている事らしいのだ

……………。

話をする中で 五月は既に父親である上杉勇也にも話を通してあり

『構わない』と了解も貰っている

果たしてどこまで五月はあの少年の事を知っているのか

姉妹ながら一花は検討つかないと言った顔だ

本人は覚悟が決まったといった表情であり

当時の事 あの一年前に起きた事件以前の彼の事を先ず話した

「彼は学園で問題児や暴力事件を起こしたと言われていますが 事実無根です 彼は何もしてません」

「うん お兄さんを見ててそれはないと 私も思う」

「彼は一年から二年の初めまでは クラス委員をやったり学校の行事にも自ら進み参加をし

周りの生徒から慕われる 社交的な人でした」

「今のあいつとは真逆じゃん」

「彼の運命を変えたのは 今から一年少し 二年になって暫くです

彼はその日普通に過ごしていただけでした でも彼は」

五月は話した 過去に起きた事件など存在はしない

彼は誰も傷つけず学園で随一の真面目な人間だったとその彼が今では

不良少年やら不真面目な生徒やらと色々言われている

その理由は彼が二年になって最初の日曜日

それが 彼 上杉幸太郎の人生を変える事になったのだと……………。

「彼は あの日 三玖を 庇い交通事故に遭いました

そして私もまたその場に居合わせて居ました……………」

『「！」』

三人は言葉を失った

あの少年が大怪我を負い一年を病院で過ごした本当に理由

彼は自分が悪いと言ったがそれは違った

誰が悪いという事ではないけど 確かにその事は姉妹には無関係の事では無かったのだ

三玖が『私のせいでコータローは傷ついた』と言った意味がやっと理解出来た

「私が悪いんだ コータローはただ私を助けただけなのにそのせいでコータローは学校で」

「三玖のせいではありません あれは信号無視をした車のせいです 幸太郎君がいなければ今の三玖はいません だから自分を責めないでください」

顔を抑える三玖 微かに水滴が落ちている

彼女にとつてあの日の出来事は自分の運命 そして一人の少年の今後すら変えてしまったのだ

でも 彼は何も言わず 更に『俺が悪い』と言い切った

それが余計に彼女に刺さっていたようだ

流石にここまで予想外だと一花の表情も何時もと違っていた

二乃や四葉もだ

彼はただのお節介な家庭教師補佐ではない 自分の身を犠牲にし大切な家族を助けてくれていたのだ……………。

『すみません 彼女 僕の連れなんです』

『えっ……………』

『それでは僕達はこれで失礼します』

あの日 高校生になったばかりの三玖

買い物の最中に絡まれた時 彼は現れた 黒髪で眼鏡をかけた真面目そうな少年

困り果てる自分を助けてくれたのだ

そして三玖は知っていた 自分を助けてくれたこの人が幼い頃にずっと遊んでくれていた あのお兄さんだったと

『僕の名前ですか 上杉幸太郎と言います』

『私は……………中野三玖です　ありがとうございます』
自分に優しく語り掛ける少年　あの時とは何も変わっていない
優しく頼もしい彼のままだった……………だが

『三玖　あぶない！』

『……………コートロー』

彼は　彼女を突き飛ばし　次に彼女が彼を見た時には
辺り一面が真っ赤にそまり　その中で倒れこむ　上杉幸太郎の姿
であった

そして中野五月はその血だまりを見て何も出来ずただ立ち尽くす
事しか出来なかった

第三十九話 不良少年と退院の日

退院が決まった翌日

だがその前日に一度時間を戻そう

友人や家族が見舞いに訪れた中

その日は早めに就寝しようとしてベットで寝ようとした俺の前に

この病院の経営者である 中野丸男 その人が現れた

俺は面倒事だと目を逸らし見なかつた事にすれば

何もないと関係ないとばかりにこちらまで歩いてくる

「目が覚めたようだね 上杉幸太郎君 体調に変化は？」

「ああ 今は医者としてのあんたか 別に異常はない」

「それなら宜しい ただ君は僕に嘘をついたね？」

「何がですか？」

「君は林間学校以前に倒れたそうだね」

診察へと訪れ

説明書にでも書かれているのか模範的な言葉のみ来るため

俺は適当にあしらうが、あの日花火の日に起きた事を

彼は知っており 顔が強張ってしまった……………。

視線を逸らせば呆れたようにため息をつく

「やはり 五月くんの勘は当たっていたようだ」

「はあ まさか適当な事だったのか！」

「君の様子が、おかしい場合は連絡を寄越してほしいと頼んであつて

ね」

まさかこの男がかまをかけると想定もしてなかった

本当に苦手だよやりづらいにも程がある

同じ空間ってだけでも息がし辛い

「別に何ともないっすよ〜」

「あの事故だ。生きている事自体不思議だ 君に退院前に言ったはず

だ。無理はするなと……助けた命を無駄にしないで欲しい」

「誰が好き好んでアンタに……………っ わかつたよ無理はしねー

あと五月に変な命令をさせんな あいつが傷つくだろう」

「君がいるだけで五月君も三玖君も傷つくのだがね」

「嫌味な人だよ」

「お互い様だ」

これが病人とその医者とのやり取りだ

顔見知りだから済ませられるが、本当に恩知らずだよ俺は

だけどここの人を前にすると何時もこうだ

今だって一年ぶりに顔を合わせるのに悪態しか出てこない

『子供だな 相変わらず』と言われ左手を押さえ何とか踏みとどまれば

彼は俺の手に一度視線を送ればすぐに戻す

「何だよ？」

「変わりはないかね」

「あれば 何かあるのか」

「君からしか聞けない事もある 医者として聞く義務がある」

「……………この手はあの日からそのままだ」

「そうか 何かあれば連絡をしてくれ」

「はいはい 分かりました あと今回は風太郎も世話になった。あ

りがとうございます」

「君達は 娘達の家庭教師だ あのままでは困る それに患者を診るのが私の仕事だ」

「入院費は何時か返す 期限があれば言ってくれ」

「その必要はない」

「俺がいやなんだよ アンタに借りを作るのが！」

だめだ歯止めが効かない

多少はその厚意に甘えれば良いのだろうか

それが大人である彼の役割だ 娘達が世話になってるならある程度はサポートするだろう

今回は多少なりと家庭教師とは別だが、それでも彼にこんな態度は失礼だろう

『不毛だよ このやり取りは』と口からもらしている本当にその通りですよ

「ここからは 彼女達の父親として話そう 君はあの事を娘達に話したかね？」

「適当な事で誤魔化したよ 別に話す必要ねーからな」

「そうか………変わらないな君も」

「何勝手に 納得してんだ！」

「本当に君は似ているよ 若い頃の彼に」

「なんで 勇也さんが出てくんのだ」

「勇也さんか………本当に強情だな君も」

「関係ないだろう あんたには……」

あの件とは俺の事故に関しての事だ

一応は伝えたが、どんな事かは詳しく話す気はないただ巻きこまれた俺が進級出来なかっただけだしな

今思えば 五月にはスマホの件で誕生日を知られ年齢も知られて
いる

あまり気にはしなかったが、あいつはとつくに俺がどういう理由で
学園にいるのか知ってたんだろうな

それを言わないのはあいつなりの気遣いだろう あいつに限って
何か裏があるとは到底思えない

そしてこの人に父親との関係をとやかく言われる筋合いもない
俺が嫌いなのか世話を焼くのかはつきりしろ

悪態をつきながらも彼の診察を受ける中 彼は幾つか薬を出すと
話す

「君は最近ストレスが多いようだ 心臓に負担をかけないようにしてく
れ」

「別にストレスなんて ねえよ 俺があいつらに勉強を教えるのは頑
張って欲しいからだ」

「君がいなくとも 弟がいるだろう 君が無理をする必要はない」

「俺は約束したから」

「君はどうなんだね 彼女との約束だから傍にいるのかい？」

「それは……」

「答えは見つからずだ 上杉幸太郎君 では私は戻ろう」

最後に一つ 娘はお前だけには絶対にやらない」

「大人げねえな 分かっているよ 俺もそんな気はさらさらねーよ 安心してくれ！」

最後の最後まであの人とはこの調子で終わってしまった

病室を出る際に見た彼の表情はとても医者とは思えない冷たい顔だ

それは何時もだが、何処か険しい表情だった…。

彼が置いて行った紙が残され幾つか書かれていた

『今回はストレスと過度な負担から来ているものであり 傷口や体には異常はなし

ただし無理をすれば何時異常がでてもおかしくない』

口で言えとは思ったが、あの人も大概不器用だからな 面と向かって言えんのだろうさ

そして彼が去ったあと 俺はそのまま意識を夢の世界に落とせば退院となる明日に向けたのだった…。

翌日だ

みずき姐がやってきた軽く検査をすれば異常はなく

予定通り退院しても良いと話

俺は幾つかの荷物を纏め始めた 風太郎は家庭教師でいない

ただ今回は一人ではなく 助っ人がいる それは須藤真弓である

この四日間の間には彼女もお見舞いに来てたらしく

退院する日とは知らず 今日も訪れたと話す 少ない荷物だが手伝うと話してくれた

「上杉先輩 何だか少し痩せました？」

「四日間も寝てたしな 昨日も目が覚めた後に 何も食わずに寝た」

「先輩 あのいい加減学びましょう そういう事が原因だと思っうんですよ」

「真弓ちゃんまで 五月見たいな事言ってくんだな」

「いや 普通ですから」

この後輩は俺の事を先輩と呼ぶ

それは以前 俺が彼女の働くバイト先で最初働いていたらと言う理由だった

実際は別だ 彼女は俺が年上だと知る 小学校時代からの後輩だ

俺が二年になった際に『もう 先輩呼びはやめてくれ 先輩じゃねえから』と言つてはいたんだがな

あの場は適当な理由で流したが、小学校からの癖が今でも抜けてないに見える

テキパキと荷物を纏め せっせと動く小さい後輩を見れば

彼女と須藤が本当に兄妹か毎度ながら疑問である

「どうかしましたか先輩」

「何でもねえよ つうか須藤は何も言わねーのか 俺の所来てて」

「兄は『今日はどうだった アイツは なんでもねえ』って相変わらなです」

「変わんねえな あいつも」

「本当に 兄は心配してました 先輩がまた病院に運ばれたと聞いて 勿論私もです」

「悪いな 心配かけて 今回は割と反省してる」

「そうです 先輩は無茶しすぎです もう少し周りを信用すべきです」

「へいへい」

「その軽い返事もやめましょう」

「まじで 五月が二人に増えたよ」

何と言うかこの子は 俺が二年になってからも何度か声をかけようとしていた

ただ変な噂のある人間の傍に 長年いる後輩を近づけさせるのは 流石にまずいし

須藤にも申し訳が立たない 基本的にはバイト以外では話さないようにしていた

先月のバイトでの事件以降に再び この子とも話す機会も増えた

クラスが三玖と同じな事もあり 時折だが普段クラスで三玖がどうしているのかも聞いている

三玖とも連絡先の交換はしていたと言うし 知り合いどうしこうして輪が広まるのはいい傾向だろう

ふと後輩の事を考えていれば俺は昨日の事を思いだし 彼女にそれを教えた

「真弓ちゃん 中野姉妹だけどさ 俺さ自分の事話した……」

「良かったですね これで三玖さんの前でも気兼ねなく先輩って呼べます

それに先輩の事を悪く言う人が少しでも減りますし 兄も喜びますよ」

「学園での噂は今更どうでも良いけど 言った事で少しつつかえが取れた気もするのは事実かな」

「先輩 その調子で噂なんて消しましょう！」

「そう簡単にいかねーよ さて荷物も纏めたし 帰ろうか」

「はい お供します先輩」

「いや 近くまで送るって俺はそのまま帰るさ」

「流石に 病人を一人には出来ませんよ ただ不思議です 先程三玖さんに連絡しても返事がなくて」

「まあ 忙しいんだろうし 今日家庭教師もあるしな しゃーなしだ 帰るぞ」

昨日の今日だ 俺の事情を元から知ってるとは言え色々と思う所はあるだろうな

何と言うか俺の知らない所で問題だけは起きないで欲しいな

中間試験の二の舞いは勘弁願いたいね

後輩の心配を聞き流し

彼女と共に家へと向かう この四日間 寝れるだけ寝たんだし

当分は大丈夫だろうな それにこれ以上あの人の世話になる訳にはいかない

「そう言えますが 先輩は昔のような口調には戻さないんですか

？」

「もうーなれた このまま俺は人生を過ごす」

「以前は僕って一人称でとても社交的だったのに」

「怖くて悪いな」

「いえいえ 兄で慣れてますから」

「怖いは否定しねーのかよ」

全くこの子も変わらん

久しぶりに後輩と帰る中 少しばかり昔を思い出し

懐かしい気持ちを覚えていた

果たしてこれからどうなるのか色々と不安だが、先ずはやる事だ

『退院した 来週からよろしくな』

と中野姉妹にメールを送る

風太郎からは今日は休むよう言われたし 顔を合わせる機会はないため

知らせるくらいししないと心配させるだろうしな

『幸太郎君 退院おめでとうございます 今日には行けなくてすみません
無理はしないようにしてください』

『コータロー 退院したんだね これからはちゃんと休んでね何かあれば行くから』

『コータローくん お勤めご苦労様 今日には会えなくて寂しいねー』

『お兄さん おめでとうございます 明後日会いましょう！』

『元気になったら顔くらい見せないよね』

なんともあいつ等らしい内容だな

三玖だけは林間学校が終わって以降少しだが色々変わった気がするが、気のせいだろうか？

隣にいる真弓ちゃんも三玖から返信が来たようで、何やらニヤリと
しているし

嬉しい知らせでも来たんだろうか、まあ乙女の会話だ聞かんでおこ
う

「ん… あっ」

「お兄ちゃん！」

「真弓と 上杉か 何で一緒なんだ」

「言ったじゃん 今日もお見舞いに行くって そしたら退院が今日だって言うからそのまま帰って来たんだよ お兄ちゃんこそここで何してるの？ 買い物」

帰り道の最中だ 見慣れた坊主頭の三年生の生徒が私服で道を歩いていた

すごく気まずいし 一番に見られたくねえ相手なんだがな

「はあ……………真弓ちゃん ここまでで良いよな 須藤先輩もいるし先輩任せましたよ」

「あー 先輩 無理はしないでくださいよー」

「おい 上杉てめー」

「何だよ 一応病人なんですか？」

「っ… 妹を送ってくれて ありがとう それだけだ」

「そうですか じゃ 俺はここで 真弓ちゃん それに あばよ須藤」

「はーい 先輩また明後日会いましょう」

呼び止められた時はどうなるかと焦ったがあいつも卒業を控える中 問題は起こしはしないだろう

そんな事すればせつかくのチャンスも不意になるしな

そこまで単細胞な人間じゃねえだろうさ

きーつけて帰れよ 二人とも……。

「お兄ちゃん おかえりー 退院おめでとー」

「おう らいはもお見舞いありがとうな」

「今日は 幸太郎お兄ちゃんと二人つきりか お兄ちゃんバイトは暫くお休みなんでしょ」

「来週の土曜からは復帰したいな でもまあ 今日はやめておくさ」

「よーし じゃ今日は お兄ちゃんの退院祝いで 豪勢につくるよー」

「了解だ でも無理はするなよ」

「お兄ちゃんにだけは 絶対言われたくないよ」

「手厳しいな」

妹とも顔を合わせるのは一週間ぶりか らいはからしたら一応はお見舞いで見てるが

俺の意識はなかったしな

退院祝いと張り切る妹に家庭教師で奮起する弟 せっさと働く父

俺だけは今日は休業と何ともやるせないが、仕方ねえだろうな

たまにはこういう日も悪く無いかもな……。

第四十話 不良少年と復帰の登校

退院して二日目

今日は登校の日だ 意識のない四日間と土曜日曜とたっぷり休んだお陰か

体力も元に戻っていた 有り余ると言う程でもないがここまで長期に休みを取ったのは、去年ぶりだろう

ある意味じや その反動で今の俺がいるんだが、そう考えれば色々複雑である

その学校までお供するのは風太郎であり こいつと二人というのも久々だ

朝から辞書片手にとは変わんねーなこいつも……………

彼曰く

『お前を一人にしたら、らいはにどやされる』とのこと

もつと本音で兄を労われよ……………。

「赤点回避は、出来そうか風太郎？」

「厳しい、あいつ等の中でまだまともな三玖と一花でも得意な教科以外は壊滅してる」

「手厳しいな」

来月には期末試験もあり 今のうちにこいつと対策を練らなければ、中間試験の二の舞いだ

中野父に一生頭が上がらないだろうし

絵ずらすら想像したくねーよ……………。

不測の事態と言うものもある程度は考えておいた方が良いだろう

あの姉妹と俺達で問題が起きないと言う事は先ずない

自分で言っていた悲しくなるが、人間そう言うもんだ…良い事も悪い事も友人とは起こすもんだ

駄々洩れる不穏なオーラは周りの人からの視線を集めていたが、そんなもんは、些細な事だと二人でため息を交え足を進める

(まあ最悪なんて起きない方が、一番良いんだがな)

学校へと入れればあいつ等に下手な負担をかけない為 極力は顔に出さないよう二人で心掛けた

何と言うか 俺達二人はそういった事がもろに顔に出るようだ

あまり意識はしなかったが、らいはにそれを指摘された

何とも情けない兄だよ俺達は……………。

ガラガラと扉を開ければ クラス中の視線が集まってきた

風太郎から聞いていたが本当にもの好きに暇人が多いなこの学校は

今一部では俺が『中野姉妹の誰かを倉庫に連れ込んだ』と話題になつてるようだ

ここまで俺が想定してた事をこいつらがやってると思うとむしろ安心すら覚える

まあ、そんな奴らの相手をしてるほど暇じゃない

風太郎と俺はそれぞれの席に向かう

目をやれば既に五月は来ていた こちらに笑顔を送る 本当にぶれないなお前は

「おはようございます、幸太郎君、土曜日はお手伝い出来ず、すみません」

「気にすんな 家庭教師の日だろう 勉強してくれるだけで俺はありがてえよ」

「でも 流石に一人で帰させたのは反省してます」

「別に一人じゃねーよ？ 真弓ちゃんが来たし」

「幸太郎君！ どういう事ですか 説明してください 何故須藤さんがいるんですか」

「何だ?!急に」

朝の軽い挨拶と共に五月は俺の退院の日に来れなかった事を謝罪するが

せっかくの家庭教師の日を潰す必要はなく

勉強してくれた事が俺や風太郎的にも有難いと伝える

ただそれでも自分が許せないといい張る彼女

本当に何故そこまでこいつは俺に世話を焼くんだらうな？

特に荷物は多くもなく お見舞いに来た真弓ちゃんや俺の手伝いをしたと伝えれば

顔色が一気に変わり 朝だと言うのに物凄い気迫だ

近くの生徒も軽くひいてるぞ……………。

「ですから 何故幸太郎君の病室に 須藤さんがいたのかと」

「お前らと同じだ 普通にお見舞いに来て んで土曜も来た 本人が手伝うって言うからな」

「幸太郎君は私を頼らないのに須藤さんは頼るんですね」

「めんどくせえ…………… 別にお前を頼らないって訳じゃない ただ毎度の俺の問題事が他人には頼める事じゃない 事が多いだけだから機嫌治せ」

何だろうな このやり取りは……………

周りの視線も普段より多く感じるし『喧嘩か』『別れ話だ』と適当言いやがる

何が別れるだ 俺達は付き合ってもねえよ

『見んじゃねー』とガンを飛ばし 周りを退散させ 五月に落ち着くよう言う

「それに 頼りにならねえ人間なら 俺の過去なんて言わねーだろ」

「……………そうですよ 何だか恥ずかしくなってきました」

「その笑顔でいてくれ その方が俺もほっとするしな」

「わ 分かりました 幸太郎君がそう言うなら精進します」

勉強と風太郎との仲も精進してくれと言いたい

弟との話を聞く限り 林間学校をへて五月と風太郎の関係はいい方向へと進んでいるようだ

あいつが自分の過去を話す何て中々無いからな

五月には心を許してんだらうな

俺とは違う…………… 俺はまだ話してない事が多すぎる

中野先生の『君は嘘ばかり』と言う言葉が今でも刺さっている

(嘘つき嘘太郎だな……………)

今は学校だ あの人の事は頭の隅にでも追いやっておこう

考え込んでいたのか覗き込むようにして五月がこちらを見ていた
「どうした？」

「あの 後程お話があるのですが 幸太郎君は時間がありますか？」

「俺は勉強を教える以外は基本一人だ 時間は腐る程あるぞ」

「悲しい事言わないでください でも私がいます」

「お前は 恥ずかしげもなく 良く言えよな そんな台詞……………」

「あ……………すみません やはり少し恥ずかしいです でも幸太郎君
は一人ではありませんよ」

「そうかい……………んでどうすんだ」

「はい お昼頃でも良いですか 幸太郎君？」

「了解しました 五月さん」

「真面目に聞いてください」

毎度思うが、お前は俺の母親かよ

何と言えば良いのか、林間学校を終えて風太郎との関係は良好な方
へと進んでいるが

俺への扱いは以前より悪化してないか？ 三玖もだが昨日なんて

一時間おきにメールが来ていた

こいつらには俺との昔を話して聞かせたが、昔はここまでする奴
じゃなかったのにな

『？』と浮かべる五月さん本人には全く自覚はないようだ

質が悪いな このままだと五月は駄目になるぞ……………」

少しは自分の為に時間を使って欲しい 俺に構ってる時を勉強や
らに回せと言いたい

言ったら何て返されるか分かったもんじやないし 喧嘩はしたく
ないから喉元で抑え込む

「はあ……………」

「ため息していると幸せ逃げますよ」

「もう底辺だよ」

「うう……………またそう言う事を幸太郎君は言うんですから」

数年後の再会した 妹同然に可愛がっていた姉妹の一人がダメ人
間の世話をやいてる事実

俺はため息を出してんだけどな……………。

自覚のない本人相手に俺は適当に流せば、そのままホームルームから一時限目までずっと謎の疲労感と戦っていた。一週間近く休めた筈なんだがな。五月恐ろしい奴だ。

一時限目の授業が終わると俺は時間を有意義に使おうと図書室へと向かう。

これから先、勉強で必要になるだろう資料や期末試験に向けての準備を少しずつでも良いから進めないとな。時間は腐る程余ってるんだし。

「ん？ 四葉おっす」

「お、お兄さん。おはようございましたー」

「ええー。何だあいつ」

図書室へと向かう中、二日ぶりに顔を合わせた四女に声をかければ

幽霊を見たような顔で固まり、俺に挨拶を返せば何処かへと走っていく。

元気なのは良いけど転ぶなよ……………。

「あいつ、どうしたんだ？ 土曜は普通にメールも返してたくせによ、何かあったのか」

朝の勉強会もあるだろうし、そのまま図書室から去られると困るんだけど

行ってしまったなら仕方ないだろう。あいつにはどうしても無理強いを出来ないんだよな。

不思議だよ。四葉と言う人間も……………。

！

俺に電流が走る……………。

まさか風太郎との間に進展でもあったのか？

それは喜ばしい事だが、それなら俺を見て逃げる理由にならんし
まあ 気恥ずかしいって事もあるのかもな
昔を聞いて あいつも驚いていたし

「おつ 三玖に一花 おはよー」

「コータローくん お おはよー」

「コータローおはよう……………」

図書室で二人と会えば 先ほどの再来だ

何処かよそよそしいと言えいいのか一花の様子は明らかにおか
しい

俺と決して目を合わせようとはしない 一花まで何かあったのか
?

四葉も逃げたし なんだろうな今日の姉妹は新手の嫌がらせか

「四葉 逃げたの……………」

「一花落ち着いて 大丈夫だよ」

「何が大丈夫なんだよ お前らみんなして 何だサプライズでもあ
んのか？」

残念ながら俺の誕生日はこいつらと同じ五月五日だ

とつくに過ぎ去っているし 今年も家族とだけ祝って終わったぞ

顔をふせて唸る一花を心配する三玖

何時も以上に世話を焼く五月や逃げる四葉 一人悶える一花と俺
のいない間に何が起きたんだ？

「はあ……………何か 一花も辛そうだし 俺は教室戻るわ 保健室で
もいけよー」

「あつ コータローくん 私は！ ああー言えなかった」

「次こそ 言おうコータローに」

「うん これはちゃんと伝えるべきことだからね」

あの調子で勉強を続けても頭に入らないだろうし

教えても耳から出ていくだろう 今はそつとしておくか

目を合わせないんじや 話も出来ないし

それに三玖もいるし任せるべきだろうな

「ん…………二乃か おはよう 珍しいなお前が図書室に来るなんて」

図書室から出てすぐの階段で二乃と出くわした

ここは俺達の教室から離れているし わざわざ此処に来たという事はこいつも勉強会に混ざりに来たんだろうと挨拶がてらに言うが……………

こいつも様子がおかしい いや普段から俺に対しての扱いは風太郎よりひどいが

今日はそういう感じではなさそうだ

俺を前にもじもじと手を動かしている……………。

「あ あのあんたに……………」

「何だ 頼み事か？ すまんがキンタローの番号は知らんぞ」

「な なんでここで彼が出てくのよ」

「風太郎が教えないなら俺に来るだろうと思ってな 力になれなくて悪いな」

「違う 私が言いたいのは……………」

こいつが勉強会以外で話すとしたら 風太郎が考えた

金太郎の事だろうし 正直に言えば色々と厄介事もあるし

今は弟の嘘に付き合つてやろう

本人は違うと言い なら何のようだと聞けば二乃は意を決したように俺に何かを聞こうとした

しかし

「二乃 うわ この人やばいって噂の人じゃん」

「え こいつはそんな奴じゃ」

「はあ……………さいなら」

二乃の友人が間に入る

どうやら他のクラスでも俺の悪評は健在らしい

言い訳をする気もないし それに的外れでもないしな

言いかけた二乃には悪いと思うが切り上げるか

俺はその場を去る形で教室へと足を動かす 人前はやっぱり目立

つ彼女達と話すのは控えるべきか？

言いたい事がありそうだし 聞くなら家庭教師の日でも良いだろうな

割と簡単に考えている俺を余所に 様子がおかしい中野姉妹達

五月は一体何を話したいんだろうな？

俺は次の休みが少々怖くなっていた…。

第四十一話 不良少年と姉妹の理由

逃げる四葉 俺と顔を合わせない一花 何故かもじもじとする二乃

五月は普段以上に思えるが……何時もあんな感じな気がする
三玖も話した感じでは 一花程ではないにしろ何か思う所があり
そうだな

けど目を合わせて返事は返してくれていたし 俺の考え過ぎか？

一花 二乃 四葉

上記三名は俺のいない間の2日で何が合ったのだろうか…。

何故だが嫌な予感と言うか、俺の知らんところで大事にでもならなければ良いのだがな

「どうした お前が俺に相談って」

「何故か 四葉や一花に避けられ 二乃はしおらしいんだよ」

「先言うが 家庭教師を行った日はお前の話題は一切してない 安心しろ」

「流石 風太郎くん くっそ真面目だよ」

四時限目が終わると俺は五月との待ち合わせの前に風太郎に今日起きた事を軽く説明

聞けば面倒な顔をされたが、この先家庭教師をやって行く中で後に面倒の種なられても困ると相談

風太郎本人が言うのは土曜日の際に行われた勉強会でも特に様子がおかしいことは無く

むしろ 真面目に勉強し 二乃も珍しくリビングで聞き耳を立てていたとか

良く見てんな こいつは……………。

ただ その原因に心当たりがないと言えば嘘にはなる

『話せよ』と催促する弟にしぶしぶと言った感じで俺はその内容を話した

「実はな 俺の過去を話した」

「えっ…」

「知り合いの医者が口を滑らせて なし崩し的に話す形になつてな」

「それが原因だろう」

「だよな でもこれ 金曜の出来事だぞ？ 三日経つて今更か」

「結構重要な事だろう でも幸太郎が話せたんだし お前も気を許した証拠じゃないか？」

何だろうな 相談に乗る時の弟は普段よりかっこよく見える

こいつはここまででは人とは話せる人物だっただろうか？

『うるさい』と一蹴されるが、その顔は何処か晴れやかだ

風太郎本人もこの話を何時までもあいつらに黙って置く事は心苦しいと言つた感じだ

本人は『違う』と言うが兄から見れば一目瞭然だ

「っ …話が終わりなら 俺は帰るぞ」

「悪かつたからかつて でもお前の言うとりかかも知んねえな」

「そう思うなら あいつらと話してくれ ここで問題事は起こしたくない」

「五月と喧嘩してた風太郎がそれを言うのか？」

「お前も喧嘩したつて一花と話してただろう」

「何の事か 俺にはさっぱりだな…」

「戻るぞ 貴重な昼が終わる」

「了解 んじゃ食堂に行くか」

何だかと言いつつ風太郎は本当に人を見ている

俺が自分で気づけない変化をこいつは何処かで感じていたのだから

出なければ『気を許した』と言うわけもない こいつから見ると今の

俺はそう見えたのだ

それに向かう途中に弟はこうも言った

『最近のお前 姉妹達に対して言葉使いが柔らかくなつたしな』と

……

五月の指定した場所へと向かえばそこは食堂であり

既に五月が頼んでいた天ぷらそばを食していた　ぱつと見で分かるがこれは高いな

俺が来たと気づけば、慌てて箸を置き　『味見です』と凄く分りやすい嘘をつかれた

「良いよ　美味しそうに食べる姿は嫌いじゃないしな」

「すみません…」

「んで　どうした？」

「あつ　その前に　幸太郎君は何も頼まないんですか」

「ダイエツト中です」

「嘘はやめてください　お腹が空くとまた倒れてしまいますよ？」

「分かったよ　後から適当に何か頼むから」

いや本当に五月が食ってる姿を見るだけでお腹が一杯になるんだよ

それで今は食欲より　他の姉妹からの扱いだよ

あそこまで露骨な態度だとやはり気になって腹も空かないし

じーと見てくる五月には悪いけど終わるまでは頼む気もないといった感じだ

納得は行かないようだが、本題には入らないと行けないと言い五月は俺を呼んだ理由を話す

「幸太郎君　先ずは謝らせてください　ごめんなさい」

「何をやった　あいつ等の反応と関係あるのか？」

「やっぱり　みんな幸太郎君と何かありましたか……………」

「まあ…色々あったな　んで理由は何だ」

やはり他の姉妹が俺に取っている

態度と今回五月が呼び出した理由は関係があった

五月からの呼び出しがなければ

俺はもやもやした気持ちのまま過ごす事になってたと思うと表情も強張る

こいつの話聞いていて良かったよ

まあ元より断る理由はないし相談されれば俺はそれを聞き入れる
じーつと五月を眺め 一体全体何がどうなっているのか傍から見
れば恐喝だろうな

(すみませんか……はあ)

謝罪から入った本人は表情も険しくなり だらだらと冷や汗をか
いている

本当にこいつは何をやらかした

こいつが追い詰められてるって余程だぞ？

すこしばかり悠長に構えていたのだろう俺はもう少し 真剣に彼
女と対話すべきだった

彼女が口を開き先ず第一声

「幸太郎君……私は あの事故の事実を姉妹に伝えました……」

「……………」

「やはり怒ってますか？」

俺は一瞬だが、固まった 今こいつは何と言った

『あの事故の事実を伝えた』 おい待て 今更五月がどれだけ俺の過
去を知ってるのかはもはやツッコむ事はしないだろう 何を知って
いても驚きはしない 幾ら聞いても五月は『話せません』としか言わ
ない

それに無理に聞くのも気が引けると言うのが本音だ

(別に怒る事でも無いけどさ……………)

ただ今回に関しては何で言ってしまったんだと頭が少々だが痛く
もある

黙っていた俺も悪いがまさか俺抜きで話をするとは……………。

せめて事前だけに良い一言は入れて欲しかった

「はあ……………まあ 嘘ついた俺が悪いしな」

「そうではないんです　せめて姉妹には幸太郎君の事実を知っていて欲しくて」

「事実は俺が事故にあった　それだけだろうか？」

「いえ　幸太郎君は私の姉を三玖を助けました　それは何があるとかかりません」

「……………」

俺が三玖を助けた

五月はそう言った　確かにあれはそう言う話だ　事実である

あの日俺は三玖と出くわし　彼女を助けた

だがその事は伏せ適当な理由でその場をやり過ぎたのだ

どうにもそれは三玖本人には納得がいくものではなく『嘘』と言ったのもその為だろう

そして五月は何故かそれを知っており　姉妹達にそれを話していた

何時からだと言え　帰って暫くしてからだと　勿論勇也さんの許可は取つてあると言う

「怒つてはないさ……………」

怒る理由と聞かれれば勝手に話した事だけだろうが、俺に怒りという感情はない

この子ならそれを知っていれば話していただろうと言う確信だけはあった

「本当に　勝手に話してしまいごめんなさい…。」

ただみんなにだけは誤解させたまにはして置けないと思つて……………」

「特に隠してた理由はねえよ　人に言いふらす事でもないと思つただけだ」

中野先生　俺は言つてねえぞ…。

あの人は言うなど念押ししたがどうやらダメだったようだ
でも彼なら何時か知られると察しはしていただろうけど

案外早く露見した

それにだ　この話を聞けば　他の姉妹がどうしてあんな態度かも

領ける

そりやよそよしくもなるな

「みんなは 幸太郎君にお礼を言いたいんだと思います」

「実は俺が助けましたとか 知れば そりや驚くよな」

簡単に『ありがとうございます。』と言えば解決だが

そうも行かないのだろう

余りにも唐突で現実味もない 内容で今まで過ごしていた家族が
実は事故に巻き込まれていた

突然過ぎるそれは彼女達を困惑させるには十分過ぎただろう

俺が話さなかった理由の一つがそれだ下手な混乱は避けたいと言
う事だ

五月は何度も頭を下げるが、お前が俺に謝る事なんて何一つとして
はない

でも彼女の誠意はきちんと受け取るべきだ それこそ失礼と言う
もんだ

「幸太郎君 姉を助けていただき ありがとうございます」

「三玖が生きてるだけで俺は良いんだ まあ人生何があるか分かんない」

見知った人間が目の前から消えるのはもういい加減こりこりなんだ

泣いている彼女達を俺は、もう二度と見たくはないのだ……………。

後から俺がどうこう言う必要もなくなった訳だし

ここは四葉に見習いポジティブに捉えよう

「五月 あんま気にするな 俺もあいつらと後から話するから ただ
し」

「は はい！」

「次からは俺にも一言頼むぞ 良いか？」

「分かりました 今回はすみません 幸太郎君」

「いいさ 困った時に助けんのが俺の役目だ 昔も今も変わんねえ
よ」

びくつと肩を揺らし 何度も首を縦に振る五月

確かに俺は自分の事には無頓着かも知れないが一応は相談して欲しい時もあると言う事だ

「言ったら 止められると思ったので」

「まあ 口留めはするよな」

「幸太郎君ですからね……でも何ですか？」

「さつきも言ったが特に理由はないよ 別に言いふらす事でもないしな」

見知った顔もあるし何よりそんな状況を俺は見過ごせない

当時の俺は正義感で生きていたような人間だ

性格で言えばある意味では今よりも歪んでいただろうし

『理由なんてない』と言えば五月は何処か不満気だ

ただ俺はそう言う事をやったと言いふらす趣味はないだけだそれで勘弁して欲しい

ここに呼ばれた理由と彼女が俺に頭を下げた理由もはつきりし

他の姉妹が何を言おうとしたのかも判明し気分は少し晴れやかだ

取り合えず五月は何かあったら先ず話してほしいとだけ伝えた

『分かりました でも幸太郎君も話してくださいね』と何故だか反撃を受けたりもしたけどな

「幸太郎君は本当にこのままで良いんですか みんなから勘違いされたままで」

「その事が、別に間違つてはないし 間が悪かったと思う事にしてるさ」

「けど 私は納得できません あなたは何も悪い事はしてないのに」

「人の考えなんて掌返し連続だ 周りがそう思うなら自分もそう考えようってな

俺はそれに抗うのが面倒なんだ……けど」

俺が学校で噂されている事も五月は納得がいかないと話はまだ終わっていないかった

一年前まで優等生だった男が一つの事件で不良少年と呼ばれ

周りから避けられるし、それを本人は受け入れたままの現状だ……。

でも今は少し違う。風太郎や家族、中野姉妹や、近しい友人が俺を少なからず信用してくれている。

だから……。そんな人達の事は信用してみようと

「まあ……。気長に考えるわ」

「そうおっしゃるなら何も言いません」

「おっ、言ったな、なら何も言うなよ」

「今はです！ 私は考えを変える気はありませんから、あなたは悪くはないんです」

「本当に、五月はどうして、そこまで言えるんだろうな」

「そ、それは言えません」

つとこのように決して自分の思いを彼女は教えようとはしない

手で口元を隠し、目線を下にし、頬を赤らめる五月

まあ……。こいつはこいつだ、詮索はやめよう

「じゃ、俺は一旦教室戻るから」

「つて！ 幸太郎君もお昼食べましょう」

「お腹が空いたら食うから、んじゃ、またな」

席を立てば俺は、何処かへと足を動かす、特に目的地なんて決めてはいない、

適当に歩けば、あいつ等とも顔を合わせるし

それに放課後は、図書室で軽く勉強会だ。何人かとはそこで会えるだろう、無理に探す必要はなねえな……。

少々考える時間が必要だ、それは俺や彼女達も

(もう一年になるのか)

第四十二話 不良少年と姉妹のお礼

五月から言われ 謎も解けたし

放課後になれば一花や三玖 それに四葉とも会える

二乃とは中々出くわす機会もないため本人が現れるのを待てばそのうち

何かしらアクションを起こしてくんだろうな

『お礼を言いたいんだと思います』と五月はそう言った

家族を助けて貰ったんだその反応は間違っではない

もし俺が助けられた側なら正当な評価を受けるべきだとも言うだろうが

俺は別にそんな評価やお礼の言葉を求めてはいない ただ命が無事ならそれで良いと思っっている

酷く歪んだ考えを持つ そんな男だ

黄昏るようにその日は時間を過ぐし

五月も珍しく俺に何も言う事はなくただずっと俺から目線を外す事だけはしなかった

「さて 図書室行くか」

席を立ち 待っているだろう図書室へと足を運ぶことになるが

一応 五月には同行するかどうか確認はしておく

最近風太郎との衝突もないと聞き 近くで勉強をすれば捗るだろうからな

「すみません もう暫くは自分の力で頑張ってみます」

駄目でした

「まあ そのうちで良いさ 風太郎も来てくれれば喜ぶだろうし」

「彼がですか？ いやそれはいいですよ」

「どうだろうな でもあいつはあいつでお前を嫌ってはねえと思う」

「そうでなければアイツが日曜まで全員分のプリント製作をする筈もない」

嫌ならとつくに投げ出してる

「幸太郎君は私が参加したら どう思いますか」

「俺か？ 勉強してくれてありがとうとは思うぜ」

「そうではなく あのもつと具体的な感想を」

「何が聞きたいかは知らねえけど……俺はお前ら全員を笑顔で勉強させる事は諦めない」

「楽しく行こうぜ 五月」

「はい………／／ あの時少し 席を外します で
は………」

俺が言い終われば五月は一目散に教室から出て行ってしまい俺はポツンと残された

あの感じからすれば五月も勉強会の参加は拒否しないだろう

あいつは『あなたの迷惑になりたくない』と告げたが

ここ最近の五月を見ていれば、勉強を見てもらう＝迷惑になると言う考えも変わって来ていると思う

去って行く五月に

『お大事に』とだけ言い

止まった足を俺は動かす 風太郎は既に図書室にいる 俺もさっ

さと向かわないといけない

早く合流しねえとな………。

『上杉がまた何か言ってるぞ』『やめろよな 問題を起こすのは』

(本当に暇な奴らだよ……)

出先 横ぎった時に聞こえた言葉 俺が何かをすれば反響するかのように噂を始める

見ていて虚しさするら覚えるが、何時もと同じだ俺とこいつらは無関係だ

人の価値観や考えは、同調圧力だ いつの間にか知り合いだった奴が突然何も言わず

敵になる 周りの人間もそれに康応し気づけば周囲は敵だらけ………。

そんな暇あるならお前らはもう少し自分の為に生きろ

階段を降りて直ぐだ 待ち構えていたかのように
一花と三玖が立っていた 朝方と同じく何処かよそよそしく見え
るが

目線は俺と合わせている 顔も真剣そのものだ

『少し待って』と手を向け 息を整え始める一花

そしてその場で頭を俺に下げた

「コータローくん 妹を三玖を助けてくれてありがとうございます」

「コータロー……あの時は本当にありがとう コータローがいなかつたら私はここにいない」

「まあ………何だ 三玖は怪我もなかったしな 無事でいてくれただけで俺は嬉しいしな」

本当に俺は語彙力も何もない 感情が欠落してんのかな？

何時もと同じだ まるで自分の事は関係もないかのような態度

自分でやってて恥ずかしいな もう少し真面目に話せよと出来ない自分に言い聞かせている

けどそれが俺だ あの時は必死だった

三玖を助ける事で頭がいっぱいで気づけば俺は動いていた
迷ってる暇なんて俺には無かったんだ

『どれだけ感謝すればいいかわからない』と一花は言う

別に俺は人から賛美されるために行動していた訳じゃない
必死で必死で気づけばそうなっていただけの事だ

俺は確かに進級も出来ず二年をもう一度やる事になったが
きつとあの行動を俺は後悔はしないだろう

「コータローくんはそんな目に合ったのに

それでも私達と向き合って家庭教師として教えてくれている
君には頭があがらないよ」

「家の事情もあるが 俺は俺がやりたい事をやってるだけだ 気にす

んな」

「今回は流石に気にするかな 君の今の状況を作った一因が私達姉妹な訳だし」

一花は何か勘違いをしている

俺が学校でありもしない噂で孤立し 風太郎達以外と交流しない原因の一端はあの事故だと言う

関係ないとはいかないが、あの事故がなくてもきつと俺はこれと似た状況に陥っていたと思ってる

当時の俺は今以上に敵が多く 正義ずらするのが気に入らないと言った輩が多かった

それと当時の事故が同時に起きただけで俺は一度もこの事故が原因とは思った事はない

どうしてと問われても俺は話す気はない

そう言うもんだとしか答えない

後悔なんて事は一度も感じた事はない ただ俺でも命を救えた

彼女は無事だった それを知れただけで俺は救われた

三玖は俺に『命の恩人』だと言う けど 本当に命を救われたのは実の所俺の方なだけだな……………。

あの日の記憶が少しばかり思いだせば自然と胸を押さえていた

「俺は何も望まない けどそれでお前らが困るなら 毎日元気でいてくれ

それだけで俺の一年は報われんだ」

「うん 分かった私はコータローのために元気であるよ コータローの願いなら」

「そうだね 君がそう言うならお姉さんはそうする けどコータローくん

もう少し自分を大切にしておいてね」

二人がいや 中野姉妹全員が何事もなく過ごすだけ俺の一年はお釣りがでるくらいには戻ってくる

それに幾ら悩んでも時間は戻る事はない　なら今を見るしか俺にはないんだ

一花には『自分を大切に』と釘を刺されたがきつとこの生き方は変えられない

18年という時間を俺はこの方法で生きて来た　それをやすやすと変えられる程器用じゃねえ

でも彼女達や家族の為にそうならないよう努力はしていくつもりだ

ぽんぽんと二人の頭に手を乗せる

少々驚かせてしまったが、別段逃げる事はしない

「これからもよろしくな　二人とも」

今言える事はそれだけだ

ここで再会した日には何も言わずぶつきらぼうに挨拶を交わしたが

一花はあの日の事を知り　三玖はそれと向き合い俺の前に現れた

きつと三玖の方が辛い筈だ　何も言わず俺は彼女達と今日まで接して居たんだ

今思えば　三玖がちよくちよく俺に接触してきたり　屋上で自分の秘密を打ち明けたのも

彼女なりのお礼だったんだらうな

「うん　これからもずっと　よろしくコータロー」

「少し照れくさいけど　よろしくね　コータローくん」

吹っ切れたと言うか、満足できる答えを聞いたのか

二人は視線を合わせて返事を返した　何時までもしよぼくれたままだと困るしな

二人の頭から手をどければ『あつ…』と名残惜しいと言うような顔で見られた

あんまりこういう事してると何言われるか分からんし　セクハラになるからな

『図書室に行くぞ』と言えば二人も頷く　今はこの関係で良いだろう

俺はこいつらの家庭教師で補佐だそれで十分だ

(コータローくんは不思議だね)

(昔からコータローはこうだったからね 私はずっと覚えてたよ一花)

(何か 三玖が生意気なんだけど…ふふ)

後ろを向けば二人は何かこそこそと話している

本当に仲が良い事で 安心するよ

向かう足を止めず前へと進める 少し歩けば図書室まであと少し
入口付近で俺の視線は止まった そこには先ほど一花達と同じく
待っていたかのように待機している 四葉と二乃がいた

この二人の組み合わせも珍しいと 見ていたが、二人と同じだ二名
も話があるのだろう

一花達に先に行くよう言えば、何も言わずそのまま図書室へと入っ
て行く

待機する二人はじーっとこつちを見ており

ここから動く気配はない

声をかけるが 二乃は警戒でもしてるのかオーラを纏っている
睨み合いが続くとここは決心したが、その沈黙は数分もすれば終わ
りを告げた

「五月から 聞いたわ そのありがとね」

「お兄さん 朝方は逃げてしまいすみません 三玖を助けてくれてあ
りがとうございます」

「素直が一番だ それにちゃんと生きてんだ あんまり考えるな」

「本当に 上杉は不思議よ 幾ら私達と昔遊んでたからって自分を犠
牲にしてさ」

「理由なんてないさ 俺はただ三玖を助けたいと思ったただけだ 家族
や友人は大事だろう？」

「…調子狂うな 今日の上杉を見ると あの話のせいだ」

「って 二乃 お兄さんを上杉って呼んでる」

お礼の言葉を受ければそのまま会話になる

ふと四葉が二乃の異変に気付く よく聞けば彼女は『あんた』ではなく『上杉』と苗字で呼んでいた

これは良い方に転んだなと俺もつい笑みが出る

「関係ないわよ つうか あんたの笑顔怖いからやめてよね」

「俺はそれだけは傷つくだけだな」

「はいはい じゃ 私は用事あるからお先に」

「何時かは 参加してみろよな」

二乃は何も言わなかった

でも彼女との関係も少しずつ変化している

良い成果だと思おうな

残った四葉も笑顔は絶やささない 朝は急に逃げたくせに言う事言えば

こいつもすつきりしたんだろう

「お兄さんには大きな借りが出来ましたね」

「借りとか思わなくていいぞ 一花達にも言ったが 俺は俺がしたい事をやった 結果はどうあれな」

「例え お兄さんが怪我をしてもですか？」

「ああ 後悔はない やりたい事をやれない方が俺は嫌だからな」

「後悔ですか……………」

「四葉 何度も言うが後悔をするような選択はするなよ 人生の先輩からのアドバイスだ」

「あつははは なんですかお兄さん急に 私は大丈夫ですよ」

笑ってすませる四葉はそのまま図書室へと走って行く

俺もそれを追いかけるように中にはいる

周りを見れば 既に全員定位置だ

風太郎もこちらを見れば『よっ』と手を上げる

悪いな四葉…………俺にはお前の気持ちがあつてしまう

お前や五月に会うまで忘れていたとは言えそれまでは覚えていたんだから

風太郎の持つ写真に写る人物が誰かくらいはな……………。

「さて 全員揃った事だし 勉強会始めるか」

『おーーー』

始まりを告げる声と共に全員はノートを開き

課題を相手に戦いを始める

俺達はそんな彼女達を時には見守り 時には指導し 正解へと導

く

そうして一つずつでいい 着実に覚えさせていく

せまる期末試験の前起きた姉妹とのトラブルも無事に終わり

俺も勉強会に身が入る 少し疑問は残るが何時かはそれを五月本

人が語ってくれる事を願い

信じて待つのみだ

第四十三話 不良少年と勤労感謝の多忙な日

「いらない」

「ほおーっ！」

妹に日頃のお礼として単語帳を渡すが、

勿論らいはがそれを素直に受け取ることは無く 目の前でいらない宣言され

その場でうなだれる風太郎だ

俺が退院して一週間近く経ち 今日木曜 11月23日 人々の間では

勤労感謝の日として休日認定されている

そんな大事な休みを風太郎が見逃す訳もない

彼女達のやる気を出させるには先ず自分自身見本にならねばと朝からずつと勉強中で

そんなおり らいはから『四葉さんにお礼をしないとだめだよ』とお叱りを受けた

俺もだが風太郎は特に四葉からサポートを受けていた事が多い

林間学校でもあいつはずつと風太郎の周りでこいつが孤立しないよう動いていた

多分本人は気づいてもないがな

妹の命令と言うかお願いとして風太郎は四葉に勤労感謝として何かを渡す事になった

彼は汗をだらだら流し『何にやれば良いんだあ』と壁にもたれ掛かっている

本当にこう言う時には頼りにならない奴だな……………。

「って お兄ちゃんもだよ みんなにお世話になったんでしょ」

「そうだな あいつ等にはな 特に五月には世話かけっぱなしだな」

「ああ……………五月さんか」

「どうしたらいい？」

「な 何でもないよ」

急にそわそわしだしたらいいは 五月と何かあったのか？

俺との視線を逸らし 自分の準備を再開し始める

出かけるのは何も風太郎だけではないのだ

俺に話しかけているらしいはも朝から準備をしており誰かと出かける約束があると言う

誰と出かけるかは話さないが『勘違いしないで男子じゃないからね』

お兄ちゃんは安心したよと胸をなでおろす中

妹は俺にも勤労感謝として誰かに何かをするべきではと云っているが

安心して欲しい 何と言うか昨日の時点で俺も約束は自体はしてある五月ではないけどな

「俺は今日用事あるから安心しろ」

「流石 お兄ちゃんだ でも誰と出かけるの？」

「秘密かな」

「ずるーい」

教えてくと言う妹には悪いが、兄もたまには妹にも隠し事くらいはするぞ？

風太郎も『気に何だけど』と詰め寄るがやめろ 顔が近い

勉強以外も考えるようになったのはいい傾向だけでもう少し距離感を保て

彼を突き放せば俺も出かける準備を始める しまい込んだスマホを確認し

時間を見る そしてディスプレイに表示された メールアイコンには未読2件と書かれている

「ほえーよ」

と静かにもらす 時間まであと1時間近くあるんだがあいつら既に来てるのか

中を確認すれば宛名は 中野三玖 中野一花と書かれていた

そう俺が今日出かける相手はこの二人だ

三玖とは以前に出かける用事を立てていたが彼女に聞く筈の用事

は入院中に確認済みである

ただ約束は約束であり 五月同様に三玖にも世話になってるし休日だ

誘うのはこの日だろうと 俺はメールを送ろうとしたのだが
……………

その夜に一花からもその日に出かけないかとお誘いのメールが飛んで来た

断りにくい 一花も二乃の一件で何かと手を回してもらい

五月と風太郎の喧嘩を止めるのは彼女の助言が無ければ不可能だっただろう

三玖に送るメールと一花に送るメール 俺の指はその場で止まり小一時間悩んだ

結局は 二人共に連絡を入れる事になった どっちの約束も無下には出来ない

風太郎の事は俺も言えないな

ただ電話をした時に三玖が『少し一花と相談してくる』と言い向こう側でも帳尻合わせをしてくれた

女子のこういう時の団結とはとても頼もしいもんだよ

(ダブルブッキングと言うか 最低な事してんな俺も)

準備が終わり次第 俺も風太郎も先に家を出る

らいはもう少ししたら出かけると言うので戸締りだけは気をつけるようにだけ伝えた

俺達よりしつかりしてる妹だ そこは心配はないのだがな
……………。

そして俺は待ち合わせのショッピングモールへと無事に到着した
先に来ていると言う二人を探すか……………

如何やらその必要はないと見た 出入口から少し

視線の先で何人もの男性の目が集まる場所があり

そこでは一花と三玖が何度もスマホを確認しては辺りを見回していた

二人は目立つ容姿をしてるからこういう時には見つけやすい

白いコート姿の一花と黒で白のラインが入ったタートルカットソーを着ている三玖

ぱっと見てセーター姿の俺があのだ二人の所に行って良いものか考えてしまう

『すげー美人』『お近づきになりたい』と様々な声が聞こえてくる

俺は今からその中に飛び込むのか……………

以前にも言ったがもう少し自分達が人目を惹くと言う事を自覚して欲しいもんだよ

はあと漏られるため息をここでとめ 二人に向かい声をかける

気づけば向こうは俺の方に手を振り『遅いよー』と一花からお叱りが飛んできている

自然の周りの視線は俺に来るがうるせー見るなのオーラで辺りを威嚇し前に進む

「三玖 一花 おはよう 服似合ってるな」

「ありがとうコータロー」

「コータロー君は流石だね きちんと見てくれる」

疎い俺でも女性がお洒落をすれば褒める時は褒める

全神経を最早古臭い自分の脳内の言葉の羅列からどれが適切な物かを選択し

それを口に出す 当然だがお世辞ではない 何度も言うが中野姉

妹は美人だ

紛れもない事実だ 下手なお世辞何て言う事は無いんだ素直に褒めるこれが一番だろう

くるつとその場で周り『どう』という一花

俺にそこまでは求めるなど言いたいが流石は女優だ

服を着こなすし 似合っていない訳はない

三玖も同じく俺に三度感想を求めている 何故にそこまで求めるのだろうか

ふと見れば何時もと同じく髪留めをつけてくれている

自然だが笑みも出る

「どうしたのコータロー?」

「本当に大切にしてくれてんだなって」

髪留めを指させれば三玖はコクリと頷く

『大事な物』とあの時と同じくそう話す

横の一花は何かを三玖に耳打ちし突然顔を真っ赤にしだす

何を吹き込んだのかは知らんがあまりいじめるなよと言いスマホを確認する

時間は11時少し 暫くは色々見て回っても十分に時間は余るだろう

「さて どうする」

「ここは男性がリードするべきじゃないのかな?」

「コータローは何処に連れてつてくれるの」

「俺に何を期待してんだよ……………」

以前出かけた時は突然五月が現れそのまま行動する事になったが
今回は違う 事前に一花と三玖とは連絡を取っている

世間体はこれを何と言うんだろうな……………デートなのか?

ふいに頭を過ぎるみずき姐の言葉 友人同士で行動する事をデート
と言えるのか

それも二人連れだ この状況は多分そうは言わないだろうな

二人から何処に行くのか期待されてるし このままいても周りの
目が痛い

見てねえでどっか行けと軽くガンを飛ばし

二人を先導するようにして何処か目ぼしい所はないか考えながら
移動を始めた

ルックス最高な二人といれて俺も幸せもんだよ 全く…………。

大型ショッピングモールだ　買い物以外の施設も内部には沢山備わっている

雑貨屋にゲームセンターやスポーツ用品店など様々だ

普段はこういった場所にはあまり来ず　以前にスマホを買いに来たくらいだろう

それを除けば本当に稀だ　妹にも『バイト以外で出かけてみたら』と常々言われており

はいはいと軽く流していた俺だが、『流石に女性二人を連れ歩くとは想定もしないぞ』

と思ういはするが

それで取り乱したりはしない　一応は昨日の時点で今日何をするかの予定自体は立ててはある

あちらこちらに目をやる二人はあっちに行こうとこっちに行こうとそれぞれ別の方向に移動しようとする

姉妹なのになんでこうも行先は別なのか……………。

二人を一旦止め　俺は最初の目的地を二人に指さす　それはここから少し先の大きなホール

中にはグッズやらパンフやらが売られており

休日のためからか家族連れやカップルの姿も多くみられる

そう最初に行くのはあそこだ……………流石は大型ショッピングモールである　映画館まで完備さ……………。

「まずは映画いくぞ」

「映画かあ……………コータロー君のおすすめとかあるの？」

「時代劇とか戦国物とかやってるの？」

「これだよ」

スマホを二人に見せる

そこにはある映画の内容が書かれており

内容と言えば一応はアクションなのだろうし　R12くらいで血の描写も多い

何故か題名が「死　国オブザDEAD」とすごく　B級くさい名前

だ

どうして四国なのかと監督に聞きたいほどである
ただ俺も適当に選んだ訳じゃないし これも気になったいた作品
の一つ

余り行動しない俺は映画館に来ることも少ない 今日折角こ
の面子で出かけてるんだ

一緒に鑑賞するべきだろうと思っここに連れて来た

三玖は『うん 良いよ』と頷くがもう片方の様子は傍から見てもお
かしい

『もつと別の映画があるんじゃないのかな』と声が裏返っている

「なーにどうかしたか 一花？」

「君は本当に意地悪だね」

「？一花どうしたの」

「まあ 見てのお楽しみだ 行くぞ二人ともチケットは予約してある
し」

「こう言う時だけ 手際が良いんだから……はあ」

何処か諦めたかのような表情で三玖と俺についてくる一花

『ため息は幸せが減るぞ』と何時かの言葉を投げかける

むっすとはすれど怒りはしない 本当に嫌なら入り口で待ってる
だろうしな

劇場の中は割と空いていた

今日から公開という割にはあまり集客力もないようで少々不安だ

ただ話題作とまでは言われてはないだろうが見に来るには十分過
ぎるキャストがこれには出ているんだ

その人物とは誰かを知っているのは俺と四葉だけで 知るきつか

けをくれたのがあいつだしな

「さて 何処に座るかな」

「コータロー君真ん中に座りなよ 両手に花だよ」

「一花」

「まあ 拘ってる訳でもないしな」

一花 俺 三玖の順番で席に座り 暫くすれば明かりは消える

ふと一番前の席を見れば一瞬だけ何処かで見たとようなリボンが見えたが、気のせいだろうか

俺は画面に目を向ける

さて あと数分で映画も上映開始だ 『覚悟してよね』と隣の一花さんは言っている

本当に何を気にしてるんだか、自信を持っていれば良いんだよ お前は立派だぞ

『もうお終いよ 四国の人間は全員ゾンビになってしまったわ!!』

開始そうそうぶっ飛ばしている いきなり腐敗した四国が出て来たと思えば

何処か見覚えのある女性が周りのゾンビを見て悲観的な考えと言葉を言っている

「コータロー あれまさか一花」

「女優だしな 映画も出るよ つおま踏むな」

「ううう コータロー君のバカ」

彼女が女優を指すと知った時に三玖は目を輝かせサインをねだったと言っていた

当然今の映画に写る女優を見れば、テンションも上がっているのか ずっと首をだし一花を見ている

まじで連れてきて良かったな 三玖も嬉しそうだし 一花もまんざらでもなさそうだ

軽くだが足は踏まれた 俺にその手の趣味はないんだがな……

そして映画は続く

一花の出番と言えば あの後数分後何事もなく そのキャラは死亡した

呆気ないにも程がある 悲鳴すら上げる事もなかった メインの人たちはさっさと行ってしまふ

薄情すぎる奴らだと思った その後はなんやかんやで四国は救わ

れ

最終的に ゾンビは消えた けど瓦礫がガタリと動き

如何にも続編を匂わせる終わり方だった

俺は満足感にひたり 終わってから暫くは笑顔だった

一花も最初に入った時とは違ったため息はなく

純粹に映画を見ていた 自分が少しでも出ているんだそりや見

入ってしまう

一方三玖はパンフを買えば 一花にサインが欲しいと突き出す

「あの出番で サインは流石に」

「書いてやれよ 台詞もあるキャラだし 罰なんて当たんねえよ」

「うん 取っておきたいから お願い」

「分かりました 帰ったら書いてあげるよ今は書くもの無いから」

「と 言うと思ってインクを持ってきたぞ」

「何だろうね 君のその準備の良さは」

悔るなよ事前の準備は万全だ

懐からペンを取り出し一花に手渡せば、少々驚きながらも三玖が

持っているパンフレットに

自分の名前『中野一花』とサインをする

仕事じゃないんだ 中々持ち歩く事はないだろうし準備していた

良かった

四葉は言っていた林間学校以降からだろうか 一花は普段以上に

やる気を見せていたと

仕事も増え始めた嬉しそうに語っていた

俺も彼女を応援すると決めた傍らその成果を見て見たくなくなった

本人に聞いても気恥ずかしいのかどれに出てくるかなんて教えて

くれない

ならば実際に見て目に焼き付けようよ…

情報を提供してくれた四葉には感謝しないと行けない

確かに出番と言える出番はなかったが、それでも一花がスクリーン

に映る姿はとても良かった

演技一つ一つに感情が籠っている。プロ何だし当たり前前だろうけど

俺はてんで素人だ。ありきたりな感想ばかりだ

「お前の頑張り。ちゃんと出てたな一花」

「コータロー君にはあまり見せたくなかった」

「ひでえな。俺はファン一号だろ」

「なら。私は一花のファン二号」

「もー。二人してからかわないでよ。でもありがとね」

はにかむよう笑顔を作る一花

それはあの日とは違い。偽った作り笑いではない…

彼女は俺やみんなの知らない所で頑張っている

学校と仕事に板挟み。追い打ちとばかりに風太郎の家庭教師だ

何時休めてるか不安だった。先週も事故の全容を知ってたかテン

ションも低く見えていた

彼女達からの誘いではあったが、こうして一花の笑顔が見れたんだ

十分過ぎる成果だろう

「それで。コータロー君。次はどこに行くのかな？」

「少しまで。時間は。うん会場は12時だ開いてるな」

「何かあるの？」

「まあ。ついて来ればわかるさ」

一旦外に出ると俺はスマホを確認し。今の時間を見た

現在13時少しだ。このショッピングモールでは他にも行く場所

はある

それが開くが12時からだった。一花の映画とうまい具合に重

なってしまう

先にそちらを優先していた。ここから歩けばすぐの場所だ

今が二階。目的地は3階の展示スペースにある

二人に逸れないよう言えば。一花は『御守りがあるよー』と鍵をチ

ラつかせる

頼むから落とすなよ？

三玖も『大丈夫。逸れないから』と小さくだが俺の裾を掴んでいる

まあ これなら離れる事はないだろうし

花火の時とは違う 俺には連絡手段がきんと用意されてんだ

(三玖も頑張ってるね)

(コータローとは離れたくないから)

「また ここそそ話か前向いて歩けよー」

『『はい』』と返事を返す二方 本当に女子とはお話が好きだな

エスカレーター乗り 少し歩けば 展示コーナーが見えて来た

それに近づくたびに 俺の裾を掴む三玖も『え』と小さな声を上げる

「コータロー これって…」

「ああ 昨日から開始されてんだ 武田信玄 所縁の展示会がな」

「でも 私はコータロー以外に知らせてない 一花にも」

展示会では武田信玄に所縁あるものがずらずらと並べられ

沢山のお客が、写真を撮ったり 書かれている文献を読んだりと思
い思いに楽しんでいる

来月12月22日は三方ヶ原の戦いが行われた年だ

それなのになぜ今なのか 今回ある理由で企画が前倒しになった
らしく急遽昨日から行われている

後ろで楽しみでもあるが、不安でもある三玖

確かに彼女言う通りだ 趣味を知ってるのは俺と三玖 そして詳
しくは聞かないがテストを作る際に風太郎も彼女が武将関連が好き
だと気付いている

今でも彼女はそれを秘密にしている 俺も勝手に話す事はしない
元々今回は三玖をここに連れてくる予定でいたんだが、まさかの同
時に誘いを受けるという

不測の事態だ 俺はどうするか迷いに迷った

最初は一花と三玖をそれぞれ別行動させ どちらかに付き添う形
も考えたが

(それは駄目だ 色々と駄目だ)と心の中で誰かが警告を出した
幾つか選択を迫られる中 俺は風太郎共にある計画を進めており

その合間に 俺はあるものを製作した

不安がる三玖に『まかせろ』と告げ

展示会を見て不思議そうな顔をする一花に声をかける

「一花 どうだ こう言うの」

「あまり 来た事ないかも コータロー君好きなの？」

「割とな そこでだ せまる来月の期末に備え こんな物を作ってきた」

バーンと俺はそれを取り出した

数枚のプリントだ うーんとそれを見る一花は『あっ』と間の抜けた声を出す

そうこれはただの紙じゃない

問題用紙である 内容と言えば武田信玄についての事だ

「今回のこの展示会を利用して 二人には幾つか問題に挑んでもらう。教科書だけでは分からない事が多いし レプリカとは言え見ながらやるのもいいだろ？」

「せっかくのお出かけ中に 勉強とはやっぱり フータローくんのお兄ちゃんだね。けど そうだね 楽しそうではあるかも 家だと出来ないから」

一花には連れて来た理由を主張版の家庭教師と説明した

もつとうまく誤魔化せたと思うが今の俺にはこれが限界だ

勉強と言ひ張れば 三玖が展示物に興味を持ったり 写真でとつてもそこまで違和感はないだろう

「まあ…これで三玖も安心して 中に入れるだろ？」

「ありがとね 色々考えてくれて」

「三玖には世話になったし 林間学校では心配させたからな これくらいはさせてくれ」

後ろで縮こまる三玖にもプリントを受け渡す

安心出来たのか、表情も柔らかくなりお礼も言われた 俺に出来る事なら手を貸すし

せっかく来て楽しめないまま帰るのももつたいない 三玖には楽

しんでももらいたいと思ってる…。

「コータローくん 何だかんだで 楽しみだったんだね 二人も美少女がいる訳だからね…。張り切るよねー!」

「ほほー 随分と余裕だな 一花 一つ忠告しておく 今渡したプリント平均点は60だ

問題を答えるだけでは終わらんぞ きちんと平均点以上はとってもらおうからな」

「えっ 無茶を言うね 私の間試験の点数見たでしょ?」

15点 三玖は68だ 差は大きい

ただし あれは数ヶ月前の結果だ 本人は面倒な顔だが、俺は一花がああ頃よりも出来ると信じている

一応だが平均点以上なら商品も用意はする

「60点以上なら何か奢ってやろう 払える範囲なら構わんぞ」

お出かけだ 多少の消費も覚悟はして来ている

何とも有難い事に消え去って行く筈だった 幾つかの貯金だが、不思議な事に消えずに済んだ…。

(ここに来て こいつらの父に助けられるとはな)

スマホ代はあの人を持つてくれた それが生きる形になっている。俺としては凄く複雑な気分だ…。

「制限時間は一時間と半とする 別に平均点以下だからって罰はない 分かる範囲：展示物やそれを見ながら解いて行ってくれ ようは気楽にやれ」

「了解 コータロー君のおごりとは中々嬉しい特典があるし お姉さん頑張ろうかな」

「コータロー 60点以上で奢りなら 90点代なら何かある?」

「特には考えてない 一応は口実で三玖を連れてくる事が理由だ」

「分かった なら楽しむ けど戦国武将 それに武田信玄なら誰にも負けないよ」

「その意気だ よし 行くぞ二人とも」

武田信玄の所縁展示会に入る為に行われた 小テスト(口実)

一花を騙すような形にはなったが、三玖を楽しませるためだ 悪く思ふな

勿論中に入れば 傍目でも分かる 三玖が纏うオーラが普段とは違う

渡されたプリントを持ちながらも 展示物に釘付けだ

写真を撮ったり 飾られている品を眺めたりと 普段ではお目にかかれない物を見ては

とても満足した笑みを浮かべている

これで良くバレずにここまで来たなと感心してしまう

それに一花が頭を傾げれば 三玖は彼女に手を貸し

ヒントなど与えている

これだ俺が見たかったのは 楽しく勉強して協力し合う

一人では限界も多い 何時かは躓くだろうでも彼女等は五つ子だ

互いに協力し合えば何だって出来るだろう

『五つ子だから』と三玖は屋上で言った そうだ五つ子だから

一人が出来ない所 他に教えてもらう それが俺と風太郎が考える

五つ子卒業計画の一つなのだから

俺達は異分子だ 五つ子の輪を壊しかねないだろう 二乃の意見は割と当たっている

ある程度整った物は たった一つの出来事でいとも簡単に崩れ去るものだ

だが 俺も風太郎も諦めない 彼女達には笑顔で卒業し 大切な思い出として覚えておいて欲しい

「コータロー これ被って見て」

「ん？」

「この兜は一般の人でも被って良いらしいから」

「コータロー君 侍だね 似合うよ」

「思ってもない事言うな」

「ううん コータローかっこいいよ」

「そういうもんか………ありがとな」

先の事を考えていればいつの間にか二人は俺の前に立ち

三玖から展示物の一つを手渡された。お試しで被れるものらしく武田の家紋が入っている。しぶしぶといった感じで被れば

本当ではなくてもそれなりにずっしりと重さを感じる。一花は面白がってその姿を写真に収めている

毎度のことながら許可もなく撮るなよ。減るもんじゃないけどさ

「三玖も撮ったら」

「コータロー。撮って良いかな？」

「三玖は偉いな。許可取れて。まあ気が済むまで撮ればいいさ」

「O?撮るね」

そこからは制限時間が来るまで俺も参加し三人で中を見回した

事前にネットで調べたが、俺も知らない事が多いなど発見も多く

その都度三玖から逸話を聞いた。頼りになる奴だ

一花も最後まで楽しく過ごせたようで『何かこういう勉強ならいいかもね』と言ってくれた

そして予定の時刻がスマホに表示された

まだ見たいといった雰囲気是三玖から感じるが、「次は二人で来るか?」と話した

「二人で……うんよろしく」とちゃんと返事も得られた

次回似たような事があれば、三玖を誘わないとな

近場のカフェに入り、二人が注文を済ませている間に俺は答案用紙をチェックした

「ふむふむ」

来月には期末試験が行われ、実質風太郎の最終試験のようなものだ

このままペースで行けば、まだ希望はある何もなければだ

今日行った簡易テストも一花は全体に成果も良く、三玖のアドバイスが結果に出ている

三玖にいたってはほぼ正解と言っても良いだろう

下手な問題だと俺や風太郎よりも良い成果を残せる筈だし

これを日本史に限らず他の教科でも生かせれば万々歳だ

紙と向き合い 頷く事数分 全てのチェックは終え待機すれば

一花と三玖が戻ってきた 手には飲み物持参である

一花はコーヒーだろうが、三玖のまさか…

「抹茶ソーダだよ」

「何でカフェにあんだよ」

「抹茶だからあるに決まってるよ コータロー？」

「ごめんな 俺が悪いよな」

「押し負けたね…。」

この世には不思議な事が一杯だと俺も自覚してるしな

今更だろうと自分に言い聞かせ納得させた カフェ何だ抹茶はあるしそれがソーダでもおかしくない

普段から飲んではいるが三玖も別にコーヒーが飲めない訳じゃない
い

ただ単に好きな飲み物がここにもあったただけだろう

「それで コータロー君 採点は終わった」

「おう 終わったぞ」

「どうだった」

楽しい展覧会 ただ借りとは言えテストだ

事前に60点以上が平均だとも知らせてある

二人も神妙な面持ちだ

俺は採点の終わった紙をそれぞれ見て二人に結果を教えた

「一花は 29点だ まあ急な問題だししゃーないな 後半は空白だしな」

「ああ やっぱその場では難しいね 色々見てたら時間なくてさ」

「でも一花 15点から成長してる 頑張ったよ」

「三玖もありがとね それで三玖はどうだったの？」

一花は急な小テストだ 流石にそれで60点以上取れとは少し無理があった

しかし前回の中間試験よりは難易度自体は上げているし これを満遍なくあげれば十分だろう

そして最後は三玖だ

まあ結果自体は見ていた。何せこれは日本史のみの内容だ。それも彼女が好きな戦国武将問題

織豊時代を中心とした問題で。元は一花にバレず展示物を見る為の物である

「89点だ。先言う。これが本番のテストでこれ一個に集中してれば確実に100点は行けただろう」

三玖に手渡した紙には89と書かれ。答案用紙にはきちんと答えが書かれていた

ただ後半部分だ、一花と同じで空欄が出来ていた

まあ：理由はどうあれ好きな物を姉妹の前で隠す事無く見れたのだ。それでこの点数本当にこいつは優秀と言える…。

「うわー。流石三玖だ」

「どうした三玖？」

「コータロー君。やる前にさ。60点以上なら何か奢るって話したじゃん」

「ああー。そうだな。何か欲しいもんあるか」

渡されたテストを見て三玖は固まったまま何も告げず

俺は気になり様子を見るが、何も言わない

一花は『約束を守ろう』と俺に開始前の話を思い出させた

本当に高いものでもなければ、好きな物を俺は、奢ると話した

さてはて三玖は何が欲しいのかな？

「写真……」

「ん？ 写真」

「コータロー。私と一緒に写真を撮って！」

何か奢ると俺は言った。飲み物で良いし食べ物で良い。小物類だ。買って買える品なら買っていた

けど。三玖が要求して来た事は『俺と一緒に写真を撮る』ただそれだけだった

本当にそんな事で良いのか？。確かに三玖から何かを強請るといった事は今までなかったし

そう言った場面に出くわした事もない。彼女にあげた髪飾りも俺

がお礼として上げたものである

考え込む俺とは対象的に一花は笑みを浮かべている

本人にいたってはじーっと俺を見るだけだ…。

「それで良いのか」

「コータローは何でもって言ってたし」

「何でもとは言ってるよ」

「ならダメ？」

「別に良いけどよ こんな目つきの悪い奴何処か良いんだ」

「はいはい そう言う事言わないの 私が撮ろうか」

「一花も一緒に撮ろうよ 今日はそう言う日なんだから」

「良いの三玖 私がいても」

「うん 今日は良いよ 三人で撮ろう」

「?? 何の話だ」

「良いから じゃあ 誰かにとって貰うかな すみませんお願い出来ますか」

今日は良いよとは一体何を意味するのか

俺にはてんで理解は出来ないが、一花も含め三人で撮る事になり

一花は店員を呼び止め自分のスマホを手渡すとぎゅと体を近づける

反対側の三玖も同じくぎゅと力を入れる やめろ 潰れるだろうが

：

3 2 1 の合図と共に パシャリと音がしその日の思い出が

記録された

「うわー コータロー君すごい睨んでるよ」

「コータロー 何だか怖い」

「んな事言うなら 今すぐ消せ」

「嘘だよ 思い出だから取っておく コータローにも送るから」

「大切にしてくれ こんな可愛い子と撮った写真なんてみんなに自慢出来ちゃうからね」

「自覚があるならもう少し 視線を気にしろ」

三玖から早速先ほど取った写真が送られてきた

一花俺三玖と写り 二人が笑顔の中 俺も何とか笑顔を作り写っている

挟まれる形なんだ こうなつて仕方ないだろ……。

大切にしておねと一花は言う それは当たり前前だ

友人と撮った思い出を俺は大事にするさ 未だにこのスマホの中心は空に近い

林間学校でも俺と風太郎や四葉の三名で撮った写真ぐらいだ

あの時は色々頭が回らず この写真を撮るのが精一杯だったしな
俺が楽しい思い出とはよく言えたもんだよ

それに 去年の俺なら携帯もスマホも持つ気なんて無かつただろうな

少ししんみりした顔になってたのか二人が心配そうに見てくる
パタリとカバーをし スマホをポケットにしまう

「ん……そうだ次は何処か行きたい場所あるか？」

目的の二つはやり遂げた次は二人がやりたい事をさせるべきだろう

リードするのが男の役目だが偶には女性陣からの意見も聞くべきだ

うーんと考える一花は『そうだ』と何か閃いたのか

次の目的地を教えてください……

さては遂に女性陣からの要望だ はたして何処に連れて行かれる事だろうか

今いる三階から下に行き 二階の洋服店に向かうと話す

俺は指示されるままその場所へと歩いていく 今から行く場所は多少なりと値が張る物が多いとか

事前に言ってくれてありがとな 覚悟は決まったぞ

少し歩けばそのお店が見え始める

『何が良いかなー』と上機嫌な声で歩く一花

見てるこつちも気分が良くなるさ

先ほど彼女は言っていた『留守番している二乃にお土産を買っていきたい』と如何やら

今家には二乃しか居らず 五月も四葉も何処かに出かけているよ
うだ

まあ役一名は誰と出かけているかぐらいは把握は出来るが、面白いから黙っておくか

店内に入れば、幾つか並べられた服を見てはどれが良いかと迷う一花に

『そこまでしなくていいよ』と相変わらず二乃には冷たい発言が目立つ三玖

何着か選べば よしと試着室へと向かう

その時だ 試着室のカーテンのが少しだけ開かれ見覚えのあるりボンが顔を出した

「あらあら 一花と三玖 それにお兄さんじゃないですかー」

「四葉 あれ何処か食事に行くって」

「よう 四葉か何だ慌ただしいなお前も……」

首だけをだし挨拶をするのは中野四葉だ

何故か額に汗を滲ませ試着室から出ようとはしない

一花が見せたい服があると言うが『いやー 今は大丈夫だよ』と目が泳いでいる

そんなやり取りをしていると 四葉は俺に目線を送ってくる

(ん……何だ?)

何かの暗号でも送ってきてるんだろうか

凄く必死に何度も俺に目線を送る……風太郎という筈のこいつが何故ここに一人でいるのか

そして何故そこまで慌ててんだろうな 風太郎の奴はどこ行ったんだ?

「コータローは ハットとキャップどっちが好み？」

肩をとんとんと叩き俺を呼ぶ三玖は二種類の帽子を手に持ちどちらが良いかと聞いて来る

個人的には動きやすさを重視してキャップだろうとは思う

ハットをかぶる印象は俺にはないだろうしな

「コータロー君は確かに似合わないかもね」

「うるせー まあ うん 俺はキャップの方が好きだなバイト中でも被っていられるし」

夏場のバイトとか今年も何だかんだと暑く

照りつける日差しが、凶悪過ぎ熱気で体力を持っていかれ

タオルを巻くだけじゃ頭を守り切れんと実感していた

「なら こつちにするね うん似合うよ」

「それで何で聞いてきた 二乃へのお土産だろ」

「私は別に二乃に買う為に来た訳じゃない」

「虚しいな……………」

「こーコータローに買う為に来た」

「まじかよ…別にいいぞ無理しなくてさ」

二乃への買い物はあくまでも一花で自分はそれの付き添いにしか過ぎないと述べる

今聞いてきたのも俺へのプレゼントだと言ってくれている

嬉しいけど 俺はそこまでされる理由はないんだけどな…

「むう…」

「コータロー君 今のはいただけないねー 女の子の気持ちは受け取るべきだよ」

「確かに言い方が悪かったな…日頃のお礼って思えば良いのか」

「家庭教師のお礼もあるけど…コータローに助けてもらったから……………」

そうだった 俺は三玖を助けたんだ

こいつが無事ならそれで良いし 姉妹達からお礼の言葉も貰えばそれで満足していた

だから三玖が何のために俺にプレゼントしてくれるのかも分かつ

ておらず。少々機嫌を損なわせてしまい 一花にも軽く怒られる。言葉選びは慎重に……。

「コータローは嫌かな 私からのプレゼントは？」

「嬉しいさ 嫌がる理由は何処にもない けど良いのか高そうだけど」

「これくらい大丈夫だよ コータロー君 良くても6000円くらいだし」

「それは安いとは言わない 俺が普段買うのは高くて350円だぞ」

普段からこういった店には来ないし 自分の服装にはこだわらない

唯一気にするのは首元の傷を隠せる服かどうかだ あれ偶に見られると自殺しようとした後だと勘違いされるものもあるし バイト先で客に与える心象にも影響してしまうからな

「じゃ これを買う 色は黒だけど良い？」

「まあ……ここでどうこう言っただけ悪いだけだしな」

「お兄さん女々しいですよ」

「うるへー んじゃお願いするか 頼めるか三玖」

コクリと頷けばハットの方を戻し 持っていた方を会計に出すという

一花は何時までも出てこない四葉にしびれを切らしている様子だ

怪しいとじーろと見えている 俺にちゃちゃ入れる余裕あんだし

お前も甘んじて出てこいよ……『無理です』としか言わない四葉 お前なにと戦ってんだよ……？

(すげー…怪しいな…つか風太郎は何処だよ?)

一花は二乃がいない代わりに自分が服を着てサイズを確かめるという…。確かに姉妹ならではの確認方法ではあるな

「んん」と唸る四葉の表情はどんどん険しくなり もう限界だといった顔つきになった瞬間

「同じ体なら私が着るよ」

「えっ」

「今の声」

「……まじかよ」

それは突然聞こえた

確かに試着室からだでも今の声は四葉の物なのか？

わ わたしだよと慌てる彼女と先ほどの声を思い出し俺は少々頭痛を覚えた…。咄嗟にスマホを取り出し ある人物へとメールを送る

すると送信から僅か数分で返って来た

『俺だ』

宛名 上杉風太郎

この試着室の中では今まさに四葉の後ろに隠れ風太郎も入り込んでいるという

俺と一花が倉庫に閉じ込められた時と同じ状況になっていた

下手したらあれより不味い状況だ その後またメールが届く

『一花と三玖が来たのを見て反射的に隠れた どうしよう？』

「俺がどうしようだよ……」

つと悠長にやり取りしていれば、四葉は服を受け取り着替えを始めていた

あの中で 着替える四葉の横で弟がいるのか……

風太郎以上に色々な意味で四葉はドキドキしてるだろうな

暫くすれば服を着こなす四葉が顔を赤くして出くくる

『ぴったりだね』と安心する一花は続けざまに服を出そうとするがこのままでは風太郎も四葉も危険だ

助け船を出さんとな

「一花 ちよとこっちにきてくれ 三玖も頼む」

「どうしたのコータロー君？」

「何か見つけたの？」

「お前らに似合いそうな服があったな 本人にも意見を聞きたい」

「ほほー 君が服を選ぶとふふ 見てあげましょう」

四葉が言えば何でと言われるが 外で待つ人間が呼べば呼ばれた人間の意識はそつちに向く

その間に二人にはすぐに退避して貰おう 俺が稼いだ時間を無駄にするなよ

(お兄さん ありがとうございます)

(幸太郎 助かった)

(お礼はいい 早く行け)

アイコンタクトで指示を出せば二人は店内を後にし出て行った

本当に何もなくて良かったよ いや何かは会ったんだろうな

ふふと笑いが出てくる

でも俺の戦いは終わっていない

二人を逃がすために囮になり一花達を誘導したは良いここから先はどうしたものか

似合いそうな服とは言うけど ここで『あ 気のせいだった』とかは選択から排除する

流石にそれは駄目だと俺でも理解は出来はするさ……。

と考えてはいるが、後ろの二人は期待の眼差しだ

そんな目をキラキラさせるな 俺はそこまで趣味は良くないぞ

(何かないか……ん)

二人に悟られないように服を見て行く中で俺は一着のTシャツを手にした

シンプルな物で値段自体もこの品物ではまだ安い方である

ただ手に取ったそれはある意味で今の俺を救う救世主だった

三玖の肩を叩きそれを見せる

「こんなのどうだ ハリネズミ」

動物のイラストがデザインされた衣服だ

ここにはあまり似つかわしくないが、タグなど見れば何処かの有名なブランドらしい

ぱつと見てこれを選んだ理由は、三玖がハリネズミが好きだ言う事だ

咄嗟に囮となった際に 探す中 ふと昔を思い出す……。何度この

閃きに救われた事か……。

それは五つ子と俺で近くまで出かけた時だ

ペットショップがあり 俺達が入り そこには珍しい動物も何匹かおり。みんなですれを眺めていた 勿論当時の俺達の生活を考えれば、動物なんて買う余裕はない

見ているだけで十分だった

今よりも繋がり強い五つ子は好きな物も同じで嫌いな物も同じと徹底している

そんな時だ 幼い頃の三玖がある動物を見て 微動だにしない時があり

全員で説得し 『僕が三玖ちゃんに買ってあげるよ』と根拠もない癖に言っていた

三玖はそれで納得したのか、張り付いていたショーケースから離れた俺達は家に向かう

帰り際に自分の情けない財布の中身を見て『きつと 大丈夫だ』とまた根拠もない自信だ

その時に三玖が食い入るように見ていたのが、ハリネズミと何とも可愛らしい

可愛いわりに自分の針で周りを遮断と距離をとる……。
高校で再会した時の三玖と何処か似ている

ハリネズミがプリントされたTシャツをじつと見るが何の反応もなく

もしやあの頃約束したのは三玖ではなく別の誰かなのか？と俺は焦り見せる

「コートロー 覚えていてくれたんだ」
俺の心配は如何やら杞憂に終わった

「あれだ 『僕が買ってあげる』って奴だ

本当 生活も苦しい癖に見栄を張っていたな 昔の俺は」
「何かあったね そんな事三玖が離れなくて コートロー君が言いましたの」

俺だけではない 一花も当時を思い出したのか

『懐かしいね』と肩をぽんぽん叩いてくる

あの時は俺と一花で張り付いてる三玖を引っ張り 更に他が後ろから引っ張るといふ大きなカブ状態だった

けど三玖との約束を俺は守る事はなく 零奈さんの葬式 以降俺は姉妹の前から姿を消し

次に再会したのが、俺が高校2年 三玖が高校1年と相当後の事だ 更にそこから1年時間を空けることにもなる 随分と遠回りをしたな……。

「本物じゃないけどな これくらいなら買ってやれる」

「流石にそれは悪い」

「気にすんな 急遽やったテストでもいい点取ったんだし」

「90点は駄目だったけど」

「あれは 私に付き合う形で三玖も全部書く暇なかったじゃん 実質100点みたいなものだよ」

ナイスだ一花

毎度の事 こいつには良いパスを貰う 俺だけでは中々上手くは行かん

俺達の説得を受け 何度かTシャツを見た後に『なら お願いコータロー』と承諾してくれた

一方一花も『私もなーにかー』と言いだし 俺はお好きな物をどうぞと

一応『人間には良心と言う物が』と五月の時と同じ言葉を一花にも投げかける

『大丈夫』と言うが本当に大丈夫なんだろうな？

「良い買い物できたー」

「うん 凄く良かった ありがとう コータロー」

「お前らが満足してくれただけで十分だよ」

店を出れば今日の戦果を手に持つ二人

会計の際に一花が買っていた衣類は俺や風太郎の洋服代を合わせ

ても到底及ばず

俺は少し目まいすら覚えた

何ともリツチな生活だよ 加え一花は今では女優として働くんだ
俺が知るだけでも結構出ているし 儲かってんだろうな

三玖の買物自体は 俺へのお礼として買った帽子のみで本人は
『これが買えれば満足だよ』との事

その帽子を買うにも俺はどれだけ働けばいいんだろうな

かく言う 俺も三玖と一花にそれぞれ服など買っていたり数ヶ月
前の俺なら想像もしないだろう

女子に服をプレゼントなんて機会はもう来ないと思っていた
お値段はなるべく気にしない方向で俺は強気でレジに立った

財布かた消えていく論吉たちに敬礼をし 見送った けどまあ必
要経費と割り切っているし

プレゼントと思えば俺の気も楽だ それに喜んでいる顔が見られ
ば十分お釣りも来る

こういう時の為に俺は普段から借金返済分とは別に貯蓄もしてい
る

男の甲斐性とも言うしな 見栄くらい張らせてほしい

三玖は不安そうにしているが、気にするなの一言で済ませた

「よし 後は何処か適当に寄って行くか」

「そうだね でも一旦休憩しよう 向うに喫茶店あったしさ」

「確かに 今日は歩きつかれたかも」

「へいへい……………あつ お前らは先に行っててくれ」

「ん どうしたのコータロー君」

「と い れ」

「うわー これまたひどい」

「分かった 待ってるよコータロー」

一旦二人と別れ 俺は少し先に見えた玩具に目があった

『お兄ちゃんもお世話になったでしょ』と朝方らしいはに言われている

二人にはプレゼントを渡したが、五月にはまだ渡していない

勤劳感謝だ あいつは普段何時も気を配って 林間学校でも俺を

同じ班に入れてくれた

わざわざ車も出して 風太郎と共に連れて行ってくもしたんだ
……。

「すみません これとこれにあとこれお願いします」

俺は店に入ればぬいぐるみコーナーへと向かう

アイツへのお礼 一瞬『お食事券』五月に渡すには最適だがとても
色気がない

彼女なら素直に喜ぶし 受け取ってくれるだろう

けどもつと別の女性が持つていても不思議ではないものを贈ろう
最初に目に入った その動物 俺は何故か目が離せなかった

とても五月と似ていると思えたからだ……。

それをレジまで持つて行き 会計を済ませ 包装紙に包んでもら
う

少し手間をかけ過ぎたかとも思ったが、これくらいは別に良いだろ
うと頭を縦に振る

店員から『彼女さんへのプレゼントですか?』と聞かれたが

『いえ 大切な友人にです』と俺は返答 店員は『ふふ』と笑っている
何か可笑しな事でも言ったかな? 少しすれば包み終わり

商品を受け取れば俺は店を出る 二人に何かと言われたら適当
な理由で済ませれば良いだろう

あまり他の女性の話をするのはこういう時は良くないとも言おうし
色々理由を考える為店を出て少し歩いた時だ

俺の背後から呼ぶ声がした……。

「お兄ちゃんだー」

「幸太郎君 今日のは出かけていたと聞きましたが ここにいたんです
ね」

「らいはに五月か」

振り向けば、私服姿の五月と朝からおめかしていた妹の姿があった
二人を見れば 朝のらいはの反応も納得できる

妹が出かけるといった相手は五月だった 初めて家に来た日から

ずっと妹は懐いていたし

番号も風太郎から教えられている 知らない合間に連絡を取って
いたんだろうな

そして何故か俺を見て固まる二人

何と言うかタイミングばっちりだ 二乃以外とは全員に会えるとは
な

「お兄ちゃん 誰かといるって言ってたのに一人 朝の嘘だったの」

「嘘じゃない 今は別行動だ 少し用事があってな お前らこそ 買
い物か」

「はい 折角の休みなのでらいはちゃんとお出かけでもしようかと

聞けば幸太郎君もお出かけと聞いたので……残念です」

「いいさ 妹の遊び相手やってくれてんだ それだけで十分 休みく
らいは俺の事は気にすんな」

「分かりました」

本当にその通りだ 学校では四六時中後ろにいられて

トイレや図書室以外に俺の休息の地はない 休みの日くらいは自
分の面倒を見ていて欲しい

そのうちぶっ倒れてしまうぞ

うんうんと頷けば『お兄ちゃんにだけは言われたくないよ』と妹か
らの発言が胸に刺さる

「お兄ちゃん その包みなに？」

「あっこれか」

五月の横にいるらいはは俺が持っている包みが気になるようで興
味深々と言った感じで

目を離さない 確かにおもちや屋から俺が出てくるというのも妹
からしたら変だもんな

俺はその包みを目の前の五月に渡した

本人は凄く驚いた表情で困惑し『何ですか』と言います

「爆弾ではないぞ」

「そう言う意味ではないです 急に幸太郎君からプレゼントなんて想

像も出来なくて」

「悪いな 気がきかない男で」

「お兄ちゃん意地悪だよ その言い方 五月さんが可哀そう」

「悪い悪い 受け取ってくれ 勤労感謝だろ 世話になっただし」

「うう……………」

「い 五月さん」

「あつ すみません とても嬉しくてつい涙が」

渡された途端に目に涙を浮かべ 俺は変な事でもやらかしたのかと脳内でリプレイしたが

どうやら違うと言う『純粹に嬉しい』と五月は言っている

何だろこの感じ 傍目ではどう見られているんだろうか？

「らいはも何処かニヤリといった表情だし 変に見えるのか……………」

「中身はぬいぐるみだ 色々考えたけどさ これが良いかなって思ってたさ」

「ありがとうございます 幸太郎君 大事にしますね」

「渡した甲斐があるさ でも今は開けるなよ それとらいはにも ペンギンのぬいぐるみだ」

何時もありがとな」

「わー お兄ちゃんありがとうね ペンギンさんだー！」

「妹の好きな動物くらい 兄にはお見通しだ」

「らいはちゃん 良かったですね」

「うん 今日はこれ抱っこして寝よう」

「それと 五月これも渡して置く 本当は直接二人に渡したんだけどな」

五月以外にもプレゼントは用意している

妹にもだ 本人は働いてるつもりは無いと言っているが

それでも居るだけで俺も風太郎も勇也さんも生活にゆとりが出来るし

先々週は無理がたたリ妹は倒れてしまった

俺もちやんとした思いで話も出来ないままに家に戻ってきている

せめてプレゼントくらいは買つてあげたいのだ………。
何時もは大人びて見える妹だが今は年相応に喜んでくれている
共に行動して五月も自分の事のように嬉しそうにしており
まるで親子だよ

その五月だが彼女にももう二個程荷物を渡した
相手は勿論あの二人だ

「四葉と二乃のだ 林間学校ではあいつ等にも心配をかけた
今日は行けそうにないから渡しておいてくれないか」

「ええ 二人にまで 受け取れませんよ」

「もう買つちまった だから頼んだぞ 五月？」

「普段は頼つて来ないのにこういう時は調子が良いんですね 幸太郎
君は」

「男なんてそんなもんだよ じゃ俺は行くから 二人もきーつけて遊
べよ」

「はい 幸太郎君も気をつけてください！」

二人に手を振り 帰るまでが遠足だ念を推し

一花と三玖が待つ喫茶店を探し歩く事になった 方向からすれば
右だった筈だ

「お兄ちゃん 何か楽しそうだな」

「そうですね 今日の幸太郎君は一段と元気に見えます ではらいは
ちゃん私達もいきますか」

「はい ペンギン ペンギンだー」

「さて どこかな？ おついた」

少し歩けば 二人が見えた

優雅に飲み物を嗜み 楽しく談笑している

普段からあの二人は良くいる為 会話も弾むのだらうな
俺が来たのが見えたのか荷物をもどけ 座るよう促す

注文はあるのか問われるが特にはお腹も空いてはいない
出された水を静かに口に運ぶ

「それで、二人は何の話してたんだ？」

「四葉の事だよ。急にいなくなつてさ」

「別のお店で見てるのかな？」

「さあーな 結構急いでたようだし急用だったんだろうさ」

「あの子も時々不思議な行動に出るからね」

「元気が売りだが、あいつは気配りもうまい」

「コータローは良く見てるね」

「よそ見してて四葉だけいなくなるとか勘弁だからな」

「確かにねー四葉は、元気が良いけど気づけばいなくなるのが、お姉ちゃんの悩みの種」

（四葉だけか、あの日もそうだったな。）

「三玖？どうかしたのか」

「うんうん何でもないよ。」

四葉の今日の行動に違和感を覚えた二人だが、咄嗟の行動と話すがあの中にも風太郎が隠れていたとか彼女でも絶対に言わんだろうし
気まずいってレベルじゃない

こんな事になるなら俺が二人と行動していると風太郎には伝えておくべきだったと今更だが反省中だ

「何だかんだ言いつつ、俺も付き合いが良いよな」

「自分で言うんだね」

「確かにコータローは、昨日からずっと準備してたから今日は楽しめたよ。」

「さいですか、それなら良かった」

「本当はねー花から連絡が来たって聞いた時に二人で決めただ」

「何をだ？」

今日のスケジュール 一花の出演してる映画の鑑賞 三玖の好きな武田信玄の展示会に行く

二人の買い物に付き合う 二乃 四葉 五月 らいはへの買い物をする

考えてみれば濃厚過ぎる一日だ

自分でも良く問題なく進行出来たと思う 風太郎と四葉は驚いたけど

二人も無事に帰れたようだし 解決できれば無かったようなもんだしな

二人も楽しんでくれたと話 俺は水をすすりながら三玖の話を聞いている

「今日は勤労感謝の日、コータローにはずっとお世話になってたから二人でお礼をしたかった」

「でも、コータロー君がまさかあそこまで真剣になって進めるとは予想外だったかな」

「リードするのは男の役目と言ったのは何処の一花さんですかね？」

「誰だろうね お姉さんは覚ええないよ」

「良い性格してるよ お前は」

「林間学校での事も詳しく聞いた コータローは私と一花の為に 倉庫を蹴破った事も」

「あれか、あの時は必死でもっとスマートに出来たんじゃねーかと反省中だ」

「コータロー君 風邪引いてるのにあそこまで無理させちゃったからさ」

「コータローとフータローはずっと様子が変だった」

「あの中で言いだしづらかったよね 本当にごめんね」

「謝るな、俺と風太郎の体調管理が甘かったただけだ それに良い思い出も出来たしな。」

まあ最後は、寝てて何も覚えてないんだけどなく

「フータロー君は一度起きたけどコータロー君はそのままだったからね」

「お前らは結局どしたんだ あの後は？」

「コータローには秘密」

「乙女には言えない事もあるんだよ」

「へいへいカヤの外ですか、」

ふふと笑って返す一花

二人が言うには本当の目的は俺へのお礼だった話す

何も家庭教師からの話でなく 三玖の件や小学生時代の事も含めたと言っている

律儀な奴らだと感心するな

あまり俺も他人の事は言えんけどな

そんな勤労感謝の日に お礼をする筈の人物が自分達が思っていたよりも色々と準備していた為

自分達の方が、楽しんだ一日になったと苦笑いを浮かべている

「それで良いんだよ。俺はあの日からお前達に前から消えたんだ、これくらいさせてくれ」

「コータローも辛かった」

「お前達程じゃないさ」

あの人の死は、当時の俺には衝撃的過ぎる程だ

お見舞いも毎日行ったけど結局は何も出来ず

葬式で泣いてる彼女達をただ見守る事しか出来なかった……………。

それに俺と違い あの人は彼女達を引き取った娘に向かえたんだ

自分の無力さと彼への嫉妬で俺はあの日以降 彼女達の前から姿を消した

何ともちっぽけな人間だ 女々しい奴だと笑われるだろう

「だからさ お前達と再会した日に 少しでも良い力になりたいって思ってたんだ」

「コータローくんは義理固いね」

「大切だからな お前らが」

『……………』

俺は事故の影響だろう 一部の記憶が飛んでいた

それは事故直後と幾つかの事だ

医師は言った『一時的な物だろう その消えた記憶は何かしらで戻るはずだ』

俺は中野姉妹を忘れていたんだ 五月と四葉の二人に会う事で頭のもやもやははれ

翌日には殆どを思い出し 事故の際に誰を庇ったのかも思い出

せた

だから食堂で姉妹と話す 三玖を見て俺は心底安心できたんだ
二乃とのやり取りで零奈さんとの約束も思い出せた
俺が姉妹の為に何が出来るのかを……………

大切な『家族』だからだ

血の繋がりが何てない 赤の他人だけど俺にはもう一つの家族だ

記憶に關しても五月は知っているのか それを彼女達に話したの
かは知らないし

無理に聞き出す気もない 何時かは知れる事だろう

「でも 何時までも子供扱いは良くないよ コータロー君 あれから
5年経ったんだよ」

「昔は可愛げがあったのにな」

「ふーんだ」

「冗談だ まあ 俺は俺なりにお前らと接するさ」

（三玖 これは思ったより強敵かもね 彼は私達を妹分としか見てな
いかも）

（コータローの馬鹿……………でも私は頑張るよ一花）

確かに5年以上経っている

三玖以外で彼女達と会ったのは、一花達が小学6年生以来だ
俺なんてまだ中学一年生と若いな……………。

弾むような会話ではないが、自分達がどいつた出会いをして
今にいたるか改めて知るにはいい機会だった 懐かしさと切なさ
様々な感情が入り乱れてる

飲み物を飲み終えた三玖は何かを思い出し俺に視線を戻す

「コータロー 前私に聞きたい事あるって」

「何々 お姉さんも気になるな」

「ああ……………その事か実はな」

以前の事だ 泊まり込みで勉強をした翌日

三玖と出かける約束をし 彼女に「聞きたい事があるから 暇な日

教えてくれ」と頼んだ

ただ中間試験が開けた後の　コロツケ事件の際に林間学校も迫る為

別の日にずらして欲しいと俺は言ったのだ

そして内容と言えば　その林間学校での後でお見舞いに来た際に俺は既に済ませていた

「コータロー君が探してる子の事ね　でも私も三玖も知らないよ」

「結局は成果は無しだ」

「コータローは会いたいのも一度？」

「会えればな」

「なら　せめて特徴だけでも教えて　私も協力するよ」

「男には秘密にする事もあるんだよ　これは俺が自力で成し遂げるさ」

「名前と容姿だけしか知らなくて　写真も何もないんだよね」

「俺の記憶と言う　信頼できるものが当時を記録してんだ」

中野六花について　俺は何の手がかりも持つてはいない

一花は協力すると言ってくれるが、俺はお断りした

俺が会いたい　あの人は、俺自身で探すのだ　それで聞きたい

『探している人は見つかりましたか』と俺の心残りがあるとすれば彼女の探してる

その『男性』を俺は見つけたあげることが出来なかったという　それだけだろう

叶うなら　他にも色々とお話したいとも思っているが
……………。

風太郎のように写真さえあれば、俺ももう少し　上手く探せただろうけど

あの時の俺は携帯も捨てていたし　撮る物なんて何もなかった
筆記用具で似顔絵でも描けばよかったとも思うが、そんな無粋な真似出来る訳ないな

「中野ねえ　偶然にしては不思議だよ　私達と同じ苗字　漢字は合ってるのかな」

「去り際にだけど 中央の中に 野原の野ですと言っていた」
「それは 確実に中野だね…。」

『上杉幸太郎さんですか……………』

『はい 上下の上と杉木の杉 幸せの幸に太郎で上杉幸太郎です』

『私は 中央の中に 野原の野 そして数字の六と花で 中野六花と言います』

儂げに何処か切なげに彼女は自分の名前を名乗り

去つて行く俺にずっと手を振ってくれていた……………。

「きつと何時か 会えるよコータローが願っていれば」

「ありがと その言葉だけで救われる」

「お姉さんも応援してるぞ」

「へいへい」

「扱いの差が酷いんですけど お兄ちゃんは三玖を優遇するの?」

「そんな事はしねーよ 平等に扱ってるさ」

「平等か…………」

「平等ね……………」

「何だよ また二人して?」

「何でもないです」

平等という言葉にやたら食いつく二人にどうしたかと尋ねても

何でもないと言われて終わり それ以上の会話は発生せずだ

まあ 深く聞くのは野暮と言うもんだろうな

それに別に聞きたかった事も一応は目星がついた

三玖が俺の以前の手帳を持っているのはきつとあの日に拾ったの
だろう

真相は不明だが、当時の俺と三玖が再会したのはあのタイミングし
かない

ただ俺が何時手帳を落としたか そこが分かんねえ

事故にあった直後は可能性として低いだろう きつと血まみれだ

ろうし

その前辺りが打倒だろうな

後は三玖本人に何時聞くかだ『あの日部屋では寝てない』と適当な言い訳をした分

言いだし辛いと言うのが本音だ

五月も三玖とはあの日会ってる筈で それを黙ったままにしてくれている

まあ 後はタイミングだタイミング……………。

俺も出された水を飲み終われば二人は席を立ち 俺もその場から立てば

会計を済ませ 一度 ショッピングモールを出て外に向かう

「今日はお開きにするか」

「残念だなー」

「コータローは今から何かするの？」

「明日の準備や 期末試験の対策かな」

「まるで 勉強オバケのフータロー君みたい」

「他人事じゃないからな 無理にとは言わなけど暇な時はお願いな」

「了解 コータロー君も余り無理はしないでね」

「しねえーよ」

「コータローの無理はしないって言葉は一番信用できない」

「悲しいな」

「自分の行いを思い出しているか？」

「はいはい」

時間で言えば18時だ 何だかんだで5時間近く中で過ごしていたのか

帰るにはまだ早いと一花は話すが、来月には期末も来る

俺も少しは勉強しないと成績に響くしな

二人にも一応は釘を刺したし 返事も貰ったし何より この二人はやる気もある

信頼はしている それを結果に出せるよう俺と風太郎がサポート

するだけだの話だ

それから二人を家まで送り届け

また明日と声をかければ二人も中に入って行った

「結局はプレゼントは一つしかあげられなかったね」

「コートローは何が欲しいとか言ってくれないから」

「ガードが堅いと言うか、欲がないと言うか 本当にお兄ちゃんは謎だらけだよ」

「ねえ 一花 明日からは」

「うん 今日は彼の為だからね 明日からは……………」

上杉幸太郎が家に向かう中 改めて 平等ではなく公平に行こうと決意する二人

果たして二人が心の奥で思う願いはあの少年に届くのだろうか……………」

一花と三玖はマンションへと戻って行く

そしてマンション内部 30階にある中野宅では五月が幸太郎から渡されたプレゼントを

二乃や四葉に渡していた

四葉は嬉しそうに受け取りそのまま部屋に向かい

二乃は渡された袋を訝しむように見るが『彼の誠意が籠っています受け取ってください』

と五月に言われ渋々受け取る 二乃は未だに彼とあの頃の彼が同一人物だと完全に信用出来てはいない

お礼は述べるが、そこまでの変わりようだ 事故だけでそこまで変わる物なのかと

妹である 五月ならもっと詳しい事を知っているのだろう

あの日彼女は事故の全容を姉妹全員に教えたが最後に『私があの場合にいた事 それだけは彼には秘密にしておいてください』と念を推された

加え彼が事故に遭うまでどんな人間だったのかも彼女は説明し

本来は優しい人柄で人望も厚かったと言っていた

どうしてそこまで彼に肩入れするのか……二乃は疑問しか出てこない

部屋に戻れば、彼からのお礼として渡された袋

一応は中を確認する……すると彼女の手は止まる

「あれ あいつ 覚えてたんだ 私がうさぎ好きだって事……」

兎のぬいぐるみが袋の中に入っており かつて自分が好きな動物は何かと彼が聞いた時に

『うさぎ』と話した事を思い出した どんなに見た目が変わろうと彼は彼なのかもしれない

だけど 二乃はまだ納得が出来ていない 心の整理がつかないのだろう……

そつと袋の中に戻せば、その場で体育座りをし 今はいない彼に私はどうすれば良いのか

と言葉を投げかける……

(金太郎君 あなたならどう思う……本当に上杉がお兄ちゃんなの?)

第四十四話 不良少年と不思議な家族

明日からいよいよ期末試験のテスト週間に入ります

風太郎の表情は何処か固く

歩きたびに横ぎる生徒達が、尋常ではないものを感じている

勿論横にいる俺も弟程ではないが、緊張はしている

このまま無事に行けば、赤点回避は可能だろうと言うのが俺達の見解だ

「何事もなければ ギリギリいける」

「まあ三玖と一花は成績の伸びは良いし 問題なのは約三名だな」

「四葉は最近やけに休みがちだ やる気はあるに何故こない」

「あいつの事だ また部活に手を貸してらんだろうな」

「テスト週間くらいはこつちを優先してくれ」

「だが 焦るなよ 前回見たいなのは」

「分かっている あんなへまはもうごめんだ 幸太郎アシスト頼むぞ」

「了解だ」

中間試験の時にはテスト前に 兄弟二人して五月と喧嘩をする羽目になり

彼女の協力を得られないばかりか、あの人から

『赤点が出れば風太郎君はクビ』だと言われ俺がへましそれを二乃知られるという大失態も犯した

結果で言えば全員一科目づつは平均点を取れたしかし他は赤点をとってしまう事になる

俺が彼と取引をし俺だけクビにし風太郎は残すよう計らった

勿論彼はそれを承諾してくれた ただ ここまで敵対して来た二

乃の起点により

全員が一科目でそれを合計して まるで 全員が一科目づつ平均点を取ったかのような話をする事ので

彼に話を進めた 勿論 あの人々の事だ 赤点をとっている事は気づいているだろう

俺が入院してた時間く事もしなかったがあんの様子からすれば直ぐ

に分かる

あの人の考えとか分かりたくもねえけどな……………。

そんな悪戦苦闘し 結果敗北した中間試験

今回の期末試験で同じ過ち犯せない あの人の連絡はないが

俺達のいや 風太郎が彼女達に教えた成果をきちんと出せねばならんだ

焦る気持ちを抑えつつ 先ずは四葉と二乃の説得に向かう事にした

「すみません 今日陸上部の皆さんのお手伝いがあるんです テスト週間になればお休みになると思いますので！」

「頑張つてこい 四葉 風太郎まだ一人目だ 次だ」

四葉脱落 ここに来て一番やる気のある四葉が再び部活の手伝いに勤しみだし最近はめっきり来なくなっていた 俺の予感的中していた

隣で株を溶かしたかのような顔になる弟を引きずる形で、次の人物 二乃の所へと向かう

申し訳なそうな四葉だが、あいつの性分だ ここで無理にやらせても良い成果は出ない

テスト週間になるまでは俺達も待つしかないだろう

「試験勉強は明日からでしょ？ 今日くらい映画観に行かせなさいよ」

「五月もダメそうか？」

「本音を言えば映画には行きたくありません……………」

「そ そうかお前も無理のないようにな」

「幸太郎君助けてください！」

「良いから 五月行くわよ！」

二乃そして五月 脱落

彼女を説得するのは、骨がおれるなやはり俺達へのイメージは悪いままだ

今から出かける為 五月も同行された ここで五月も消えるのは
少々痛い

彼女も同じ無理矢理勉強させて見る 反感しか起きない 最悪喧
嘩が起きるぞ……………。

そうならないよう 俺は風太郎をサポートしないとダメだろう

まあ 俺の方が嫌われてんだけどな

そして再び魂の抜けた弟を引きずり

一花と三玖の待つ 図書室へと向かう事になった

「と言う訳で 弟は心が深く傷ついた 優しくしてやってくれ」

「ま まあ 明日から本番だからさまだノーカンまだ何事もないっ
て」

「元氣出して フータロー明日は大丈夫だから」

そう一花の言う通り明日からが本番だ

それに何事も今は起きてはいない 俺達がへまをしなければ何も
起こらない

ここは上手く彼女達の機嫌を損なわないようにし勉強へと足を進
ませる方向で行けば

問題なくテスト勉強が出来るだろうしな

「だといいがな……………仕方ない 今日各自自習で……………」
「そっか……………」

二人は基礎は他の三名よりも出来ている

ある程度は自分で行っても期末までにはいい結果を出せる筈だ

俺が行った緊急テストでも一花は29点 これは解いた数だけだ
残りは空白

つまり挑んでいれば話は別だ 幾ら偏ったテスト内容だろうが一
花の成績は伸びている

三玖にいたっては 日本史以外も確実に伸びている事が伺える

この調子なら二人が赤点をとる事は無い

息抜きも兼ねての自習と捉えれば良いだろう

「じゃ 俺はバイト探しだな」

「はあ お前また増やすのか？」

「以前働いていた 店が移動してな 一つ空いたんだそこに入れようかな」

「そのうちまた 倒れるぞ？」

「そんな事はねーよ んじや お先に って 何だよ一花！」

自習となれば俺も一度 帰宅しバイト探しにでも行こうと考えた

あの額を返済仕切るのは、多少は無理をしても足りないだろうし日銭が無ければこの先の生活も厳しいだろう 最悪俺の貯金を切り崩す方針も考えている 今日はこのまま勉強会と思っていたが

そうもいかなかった それが幸いし時間にゆとりが生まれた訳で俺は荷物を纏め始め

帰宅の準備に入るが、一花に腕を掴まれた

「わあー こんな所に映画のチケットがあー 二人で観に行きなよ」

「何だお前……」

俺に映画のチケットを手渡し 三玖も渡せば荷物を纏め今すぐ行くべきだと言い張る

突然の事で俺は頭を傾げるが、三玖がそれを押し切り一花の手を引き 奥に行ってしまう

一花に渡されたチケットを良く見れば、昨日見に行つたばかりの花が出ている映画のだ

何でわざわざこれを出すのか……………

「無理して気を遣わないで 言った通り 私の好きにするから」

「そ そう言うわけじゃないよー」

「一花は……………私とコータローが付き合ってもいいの？」

「……………も もちろんお祝いするよ」

「後悔しないでね 私は……………」

「おーい 一花 お前この映画観たばかりだろう？」

「あれえ そうだっけ？」

「三玖がパンフレットも買ってサインもしただろうが、物忘れには早

すぎだぞ」

目を逸らし 何故か焦り出す一花

一体何があれば、三人で観に行つた映画のチケットを渡す事があるんだか？

それも三玖と俺にだぞ 確かにファン一号と二号とは名乗つたが、観に行くなら一花も連れていくし

今度はみんなで観に行きたいんだけどな

「あつはは そーだったね じゃ私はこれで」

「待て一花 本当に自習するのか怪しい 幸太郎 俺は一花の家に行くから」

「そうか 一花なら大丈夫だとは思うけど あんまり無理はさせるなよ?」

「あ ありがたいんだけど今日は用事があつて……………」

「嘘をつくんじゃない」

「事務所の社長の娘さんの面倒を見る約束なんだ」

「社長 ああ幸太郎から聞いたな でもそんな適当な理由では誤魔化されないぞ

本当にいるなら俺の前に連れて来てみやがれ」

去ろうとする一花を風太郎が止める

どうやら弟は彼女が本当に自習をするのか不安らしく今から中野宅に向かうと言うのだ

だが一花も本当に用事があると言い あのおっさん「社長」には娘がおり

今からその子の面倒を見る為 自習は出来そうにないと告げる 確かに先ほどまで様子はおかしかつたが、嘘は言つてないような気もするし

風太郎が自信満々に言い切る場合は大抵こつちが押し負ける時だつたりするんだよな

「んじや 俺は帰るから 三玖はどうする近くまで送るぞ?」

「分かつた よろしく」

「一花も風太郎も帰るならさっさと支度しろー 置いて行くぞ」

少々気になりはするが、ここは弟に一任しておこう

これで本当だったら風太郎はどんな感じで納めるのかも気になる
ところだな

「俺はここで……… 自習するのは良いけど適度な休憩を忘れんなよ」

「幸太郎も無理はすんなよ 行くぞ一花 はっははは 本当にいるか
楽しみだな」

「コータロー君の薄情ものー」

「コータロー 無理は絶対にしないでね 約束だから」

「心配してくれてあんがとな」

「だから 本当なんだって コータロー君もお願い助けて！」

三人とは近くの道で別れ 俺は一旦家を目指す

後方で助けを求める声がある 普段ならすぐに助けに行くだろう
けど相手は風太郎だ

なら安心して任せられる 知らん人間なら即座に向かっているだ
ろうけど……

家に行く前に幾つか求人雑誌を取り出し 時間や家の都合そして
家庭教師の補佐をやる傍らで

どれが支障なく続けられるかを探していた

「あれ 上杉君じゃないか」

「っ……………」

ページをめくる中で 俺は突然後ろから声をかけられた
振り向く必要はないだろ 相手をするのもばかばかしい

「無視しないで欲しいな 僕の事を忘れましたか？」

「知らんな」

「あなたと弟くん もう一人の上杉君の事はずっと前から知ってます
よ 先輩」

「何のようだ 武田」

俺に声をかける男子生徒 名前は武田 祐輔 学園の理事長の息

子と言うボンボンだ

クラス自体は別であり ほとんど話したことは無い そう皆無ではなく

話した事自体はあるんだ キラキラとした笑顔を振りまく彼を俺は苦手としている

「んで 何のようだてめえ」

「敬愛する先輩に一声かけようかと」

「はあ？ 敬愛だ ふざけた事言ってるな 俺は帰るぞ」

「先輩は 最近成績が落ちてきましたね 上杉君は中間試験では変わらざすが

あなたは今年になって更らに落ち込んで来てますよ 無理は良くないかと」

「うるせー 指図すんな 俺はあれで満足してんだよ」

何で他のクラスの人間にまで人の点数をとやかく言われればならんのだ

気分が悪くなる……………。

「当時の先輩は立派でしたが… 今ではこの状態だ もし彼女が見れば…」

「黙れ 武田 お前があいつの名前を 呼ぶな 俺が下がればなんだって言うんだ」

「っ…………いえ 僕は心配なだけです あなたはこんな所でくすぶってる人間じゃない筈だ」

「ふん……………つまらん話だ あばよ あと武田 お前が何を言いたいかは知らんが

俺に勝てても 風太郎には勝てんぞ 絶対にな」

「僕は彼を超えて見せますよ 先輩も精々期末試験いい結果を出してください

って 先輩 そっちは逆ですけど？」

「うるせー 近道だ」

イライラを募らせ俺は来た道を逆走し 元居た方へと戻って行く
ポカーンとする武田だけが残された

彼は……………武田は俺の事情を知っている

俺が高校生になってから何処かで噂を知ったのか勝手に俺に理想を抱いていた

そして勝手に失望している かつての俺とはただの勉強馬鹿で正義感を振りかざすアホだ

そんな人間 痛いだけだ 見ていて腹が立つ部類だ 本当に嫌になるよ

「……………あつ」

逆走し そのまま適当に歩いていれば俺は中野姉妹のマンション前まで来ていた

武田とのやり取りでバイトを探す気力もそがれてしまい

この気持ちはどうにかするには弟や彼女達と話して落ち着かせるべきだろうと考えた

それにせつかくここに来たんだとついでとばかりに一花達の勉強を見よと思い立ったのだ

マンションへと入って行く

30階の中野邸の番号を入れればすぐに誰かの声が聞こえる

「すまん 俺だ」

「コータロー？ 帰った筈じゃ」

「色々あつてな もし良かったら っつて 開いてるよ」

「はいって 今のコータロー 辛そうだから」

「助かる」

俺が言う前に既に開かれており 表情に出っていたのか 対応してくれた三玖は入り口を開けてくれた

あいつには気を遣わせてしまったな それに戻ってくるとは我ながら女々しい奴だよ

ため息は出るがこれ以上顔には出さないよう 表情を整える

エレベーターに乗り込んで暫く待てば扉が開き中野姉妹の部屋まで到着した

鍵は開いている為俺は『はいるぞ』と声をかければそのまま中に入

り

自習が行われているだろうリビングへと足を運ぶ

リビングへと到着してすぐだ 俺はその光景に目を疑った

「事務員 もつとパパを好きだって気持ちを出せ」

「わあー 社長さん素敵だな」

「し 社長 何処かに連れて行ってー」

「ふはは 仕方ない奴らだな」

預かっていた子供とは本当の事だった

見知らぬ少女が、何か指示を出せば、一花と三玖は風太郎の所に駆け寄り

物凄い棒読みで強請りだし 風太郎は何故か気合が入っているように結構ノリノリでやっている

「すごく 高度なプレイだ 三人共に楽しそうだな 悪い邪魔したな 俺は帰る」

「つて コーター君 何で帰ろうとするのさ！」

「コーターだけ逃げようとするのはずるいよ」

「え、だって 別にそんな事はないぞ ただ 邪魔になりそうだしな」

風太郎達のやり取りを見ていたら

武田との会話でイラついていた自分が馬鹿らしく思えて来た

あいつがどう思おうが、知った事じゃないし 俺は俺でやるべきことがある

だから 今は三人をそっとしておこうと 決意を固め 帰宅しようと思いついたわけである

まあ 流石に一花達には止められはしたがな 急に来たのは俺だけど勘弁してくれよ

預けている子が 謎の来訪者である俺が誰なのかを聞いていた

それは俺の台詞だけど 小さな子供相手に言う事じゃない

彼女 あのおっさんの娘である 菊に自己紹介をすれば

何と俺まで 三人の高度な遊びに混ざれと言いだしてきた

お断りしようとするが、おっさんの家庭事情を聞き 俺は踏みとど

まっていた

「あの おっさんも苦勞してんだな うう」

「コータロー君 泣いてるの？」

「こいつは 父親関連だと少々感情移入しやすいんだよ」

「分かった 俺も参加しよう んで配役は何だ」

「うーん パパの弟だ」

「風太郎お兄ちゃんよ ろ し く な」

「おう やめろ 鳥肌が立つだろう」

ひどい言われようだな

お前も偶には言ってみても良いんだぞ 兄は寛容だ弟の言葉くらい受け止めるさ

改めて状況把握だ 風太郎は社長で 菊は娘 一花と三玖はその社長に好意を持つ事務員

俺はそんな社長の弟ではないフリーターと来た

配役に関して俺は異論はない 元から用意されてもない人物だ

入れてもらえただけマシと言えるだろう 参加してるんだ俺もきちん和自己的役に入らないとな

「兄さん 繁盛してるね 僕さお金が無いんだ貸して貰えるかな？」

「うわ すごく意地汚い弟出て来たよ お前もノリノリだな」

「ダメかな？」

「お前は働いて稼げ」

「社長 コータローはきちんと働いています」

「それは現実でだろう ままごとの設定でこいつは無職だ」

「兄さんがダメなら その君でもいい どうかな？」

「わ 私… コータローがそう言うなら良いよ」

ノリノリで金をせびりに来る典型的なダメ弟を演じて見た

風太郎が真面目な弟だからそれを演じても面白みに欠けるといいう単調な理由だ

ままごとの世界でも俺は日銭を稼ぐ日々とは何とも世知辛いな

キャラは濃くしたが、実際は眺めているという虚しさまでセットで

ある

とそんなダメな弟は社長に好意を抱く女性にターゲットを変えるという

何とも卑劣な手口に走る

そこは断つて欲しいのだが、三玖も話に乗ってきた

「うーん ダメ パパが好きならパパの相手をしないと」

「僕も早く 兄さんが結婚する姿が見たいなー で誰が 僕の義姉さんになるんだい」

「急なキャラ変更やめろよ」

菊の要望には応えてあげるべきだろう 折角の遊び相手が4人もいて

それが自分の思い描いていた物とは違うのは、悲しくもあるしな
意地汚い弟から兄の結婚を願う純粋な弟にシフトチェンジをする

武田の事など今は忘れて こいつらと時間を過ごし事を優先しないとな…。

「コータロー君が弟 年下…。」

「ありかもしれない…。」

「えっ 怖いんだけど」

真剣な面持ちの二人だけだ これはままごとでの発言だと言う事を忘れないでいただきたい

「アタシはママなんていららない」

「どしてだ…?」

「だって寂しくないから ママのせいでパパはとっても大変だった
パパがいれば寂しくない」

風太郎に結婚の話を持ち掛けたが 菊は母親はいららないと言いだした

ここに来て直ぐに おっさんと彼女の事情を聞かされた

母親は浮気相手と共に何処かへ消え おっさんは一人で娘を育てて来た

そりやトラウマにもなるだろうし ましてや新しい母親何て必要
とはしないだろう

まっぴらごめんだ と言つてやりたいだろう

きつとあの時も……

一花を必死に探して回るついていた時も 家で菊が一人 父親の帰
りを待ち続けていた

戻つてこない母親なんて必要ない ここにいる父親だけで十分だ
でも本当にそれが本心だろうか？

彼女は配役として 一花と三玖に父親役の風太郎に好意を持つ役
割を与えた

それは何処かで彼女は、母親を求めているという表れなのではない
か……

状況は違うが 俺も風太郎も母親はいない 俺達が小学生の時に
事故で亡くなった

絶対に戻つて来ない 母親と 彼女が残したものを守る為働く

父

俺達はずっとそれを見て来た

寂しいくないそんな事はあり得ない

「菊 無理はすんな」

「ああ ガキらしくわがまま言つてろ」

「そんな訳はないって言える程大層な人間じゃないけどさ」

菊 少しは自分の心に正直になつても罰はあたらないさ 寂し
くないなんて事はないんだ」

わがままが言える相手がいらない その寂しさを風太郎は知ってい
る

何しろ俺は……あいつに兄として何もしてやれなかった

俺は兄と言う職務を一度投げ出しているのだから……

そんな奴が家にいれば、風太郎も怒り喧嘩になるだろうけど

俺はそれをまるで大人ぶつて相手にもしなかった『俺は父さんの代
わりだ』と何を言つてんだ

お前なんかが勇也さんの代わり何て出来る筈もないだろう
……………。

「うつつうるさい そんな事言うなら お前も結婚してみろ」

「お 俺？ それは無理だな 僕は人でなしな弟だからね」

誰かの事を言う前に自分からそれを実践してみろと言いだしてく
る

少し驚かされたが、まさかこんな小さな子供にそんな当たり前の事
を言われるとはな

役職は社長の弟だ それにこのキャラは自分ではそんな事は望ま
ない

兄である社長の結婚を望んでるんだ 菊の要望には応えられない
俺の言葉を聞けば菊は不満気だ あれだけ言った奴がいざ自分の
立場になれば何もしないとなれば

菊も良い気分とはならんだろうが、そう言った役だ諦めて欲しい

「先ずは相手が……………」

「ねえ……………コータロー 私と付き合おうよ」

「付き合おう？」

「あつ……………えつと」

悩んでる間に三玖はこちらに歩み寄り 唐突にその言葉を俺に言
いだした

表情は真剣そのものだ ままごととは思えない程に言葉に力が
入っている

その言葉を何故俺に 君は言うのだろうか？

今のこの流れは、父親である風太郎にかける言葉であって俺ではな
い

「違うだろう 三玖 それは俺に言う言葉じゃない」

「えっ……………」

「社長にだろう」

「コータロー君……………」

「だけど……この返しは違うだろうな」

「でも まあ 兄より先に結婚するのもありかも知れないな」

「け 結婚！ えええっ」

「ああ 結婚だ 金は無いし甲斐性もないおまけに仕事も明日も見えない」

「だけど幸せにする自信はあるぞ」

「どうだ 菊 俺は俺で幸せになったぞ これでお前も認めるか？」

「アタシの負けだ 結婚おめでとう 叔父さん」

風太郎も俺の発言に度肝を抜かれたと言った顔だ

菊も自分の負けだと言い祝福の拍手をくれた

三玖は一体どういう事だと言った表情で『あわわ』と普段は見れない慌てようだ

自分からやってきてその態度は少々傷つくぞ

相手にやってみると言うのなら 先に自分の覚悟を見せるべきだろう

どう言う理由かは知らないがせっかく三玖がくれたチャンスだ

ダメな弟なりにそう言った事を言ってみるのも良いだろうと俺は演じている

確かに このキャラは自分から望まないと俺は言った けどそれはそれだろう

例え 馬鹿な弟だろうが、結婚願望くらいはあっても良いと思えた俺本人でもなく三玖本人でもない

兄の会社で働く事務員さんと結婚とは中々面白いもんだ

「それで 兄さんはどうするの？ 婚活でもするかい」

「俺は地道に幸せを掴んでみるか 菊もう少しだけ待っていてくれ」

風太郎はすっかり 菊のお父さんに成り切っている

元からやる気もあつたし やはり子供と触れ合うのが好きなのだろうか？

「ただいまーってあれ可愛い女の子だー！」

「あんたらまで なんでうちにいるのよ」

「幸太郎君まで何してるんですか？」

ガチャリと玄関先で音が聞こえ

四葉が助っ人も終わり無事に帰宅　二乃と五月も映画が終わって帰って来たようだ

五月の顔を見れば頑張つて映画を観たんだらうと赤くなる目元で確認できた

テスト週間は明日からの筈が家に帰れば俺達が、小さい女の子と戯れてんだびつくりするだらう

「ままごとだ　俺は今から婚活に行く」

「本当に何してたんですか……………」

「俺は金をせびる弟役だが、先ほど三玖と結婚したぞ」

「え……………ああ　こ幸太郎君と　三玖がですか」

「ままごとだからな？」

「わかってますよ　それくらい」

「いいなー　私もまぜてください！　誰の役余ってますか？」

「うちの犬！」

「ワンちゃん　わんわん！」

「その二人はおばあちゃん」

「あらー私たちも入れてくれるの？　で？　なんの役だつて？」

四葉や二乃達も急遽参戦

犬やらおばあちゃんやら俺はまだましに見えて来た

「不発……………でもドキドキした」

「焦つた〜……………コータロー君真顔なんだもん」

「今回は不発に終わったけど……………私は本気だから」

「……………みたいだね」

「五月お母さんーつてな」

「幸太郎君が息子……………いいでしょう　私に任せてください」

「うわ　まじで……………めん　変なスイッチ押しちまった」

おばあちゃん役が二人だとどっちが母親か分からんぞ

風太郎は『おふくろ』つて二乃の方に言っているが、俺はとりあえ

ず五月に声をかけてみた

何だか凄くやる気になっており 普段のこいつを見るに今の発言は慎重に考えるべきだったな

「…なんでだろう? コータローを独り占めしたい 守ってあげたいはずなのに…こんな風に7人で一緒にいるのも…嫌いじゃないんだ」

「三玖」

「変かな…?」

「うん 私もそう思う このままみんな楽しくいられたらいいね」

「おい 一花と三玖 こっち来いよ」

「はい 行くよ三玖」

「うん」

「なあ 三玖さっきの事なんだけど」

「あれは…コータロー 家に来るとき様子変だったからで」

「悪いな 気遣わせたな」

「何かあれば私に言ってるね 私はコータローの味方だから」

「味方か…:ああ信じてるよ 三玖」

菊のままごとに俺達七人は全力で挑んだ

もはや何の集まりかも分からないけど、楽しければそれで良いと思えた

武田が本当は何が言いたいのか 俺は分かっていたでも怖かったのだろう

今を壊したくないのだ… もう二度と誰にも信用されず誰かが去って行く事が俺には耐えられないんだ

けど今は大丈夫だ きつと俺達なら期末試験も乗り越えられる

そう この時はそう思っていた 何時もの楽観的な考えだ

けどそれは、あつという間に崩れていく事になった…

第四十五話 不良少年とあの日の記憶

今から一年前の事だ

俺：当時は僕だ 僕事上杉幸太郎は晴れて高校二年となった
家は貧乏だけど父さんも弟も妹もみんな元気に暮らしている
風太郎は小学生が終わる間に染めていた金髪を止め黒髪に戻し
不良少年と言われていた弟の将来を心配していた僕だけど
何とか彼の未来は守られたようで安心だ

高校生2年が始まり最初の休日

今日くらいは自分の為に時間を使うのも悪く無い
来週にはクラスでの取り決めや役職などが決まる事だろうし
何人かの生徒は『上杉君が委員長をやれば良いよ』と声をくれた
正直迷っている所だけど 和之も『幸太郎がやるべきだろ』と本当
に他人事だよ

誰かの為に動く事は嫌いではない 去年も最後までクラス委員を
やり遂げ

最後まで彼等の為に全力を出す事で最高の一年になったし
どうせ選ばれるのなら 今年もみんなの為に僕は頑張ろうと思う
…。

「何だかんだ言いつつ 僕もやる気なんだろうな 彼等を失望させた
くない」

家を出て暫く経てば、幾つか店が立ち並ぶ 僕が向かうのは本屋で
あり

今日は医学に関する資料を幾つか買いに来ている
ある程度までなら家庭への影響は出ないだろうし 在庫処分と
いって店頭に安く並ぶ

「ん電話か……もしもし ごめん 今日は僕 用事があって うん
明日なら良いよ

分かった 今年も同じクラスだし 何かあれば言ってくれ じゃあね」

電話が終われば僕はそれを切り直ぐにしまう

デイスプレイには坂下と記載されている

あいつとも保育園からの付き合い

それも小学校からここまでずっと同じクラスとは裏も感じてしま
うけど あいつを一人には出来ない

僕があいつの傍に居てやらないとな…

思い出に浸れば気分は少し落ち込んでしまう

これではいけない 折角の休日だ 欲しいものも買えたし 家に
帰れば勉強だ

それに『楽しめる時には楽しむ』 母さんも良く言っていた僕が好
きな言葉でもある

会計を済ませれば僕は店を出る

天気も良いし 余程の事でも無ければ問題何て起きないだろう

そう安心しきっていた僕に神様と言うのは試練をくれるんだと改
めて実感した

少し先の道で声が聞こえた 一体何事かと

興味もあるし 聞いてしまったんだ無視も出来ない

そう この時の僕はまさに正義の人だ 困っているなら声をかけ
る

助けを求めるなら手を伸ばす それが当たり前で 人が救われる
事は当然だと思っっている

でも その相手がもし かつての友人だったのなら どうする？

「あの 離してください…」

複数の男子生徒が一人の女子を囲んでいた

嫌がる少女の手を掴み 相手の理由なんてお甲斐もなしと言った

ナンパと言うには強引だ　このまま彼女を連れ去っていくだろう
止めないと…

自然と足はそこに向かい　声も出る

「すみません　彼女は僕の連れなんです　外で待たせたままでした」

「え…あの……………」

すぐに男子生徒の手を離し　彼女の手を掴んだ

そのままの流れで彼女を連れだす

状況が飲み込めない少女に小声で説明する

(話を合わせてください　面倒な人達です)

一応は領いてはくれるが、やはり傍から見ても不自然なやり取り
だっただろう

振り払ったつもりの手は、彼女ではなく　急に現れた僕の方を掴ん
できた

「なんだ　お前　いきなり現れて」

「何ですかはこっちですよ　困ってるって言ってるでしょ？」

「うるせーな」

「おい　こいつ　うちの学校の上杉って奴じゃねーか　学年最優秀つ
て言われてる」

(上杉……………この人　まさか)

良く見れば相手側の生徒は同じ学園それも和之が入っている野球
部の人達だ

つまり上級生である　それが複数も集まり一人の女子を囲むなん
てやり方が汚い

掴んでいた人物とは別の人はこちらの顔を見て名前を出す

僕が誰だか分かれば、掴んでいた手の力が少しばかり弱まり　何人
かは後ずさる

それなりに有名だけどまさか怯ませる効果もあるとは、感謝しない
とな

当時の僕は天狗だ 何でも上手く行くし 誰でも僕を信用した
何の疑いもなく『上杉なら任せられる』『君なら安心だな』と
そんな賛美にも似た何かをずっと浴びて来たんだ 調子にも乗る
だろう

「知って貰えて光栄です もしかして同じ学校の方たちですか なら
やめましょう無意味ですよ」

「学園でチャホヤされてれば良いだけなのに 出しゃばりやがって
！」

激痛だ 何処から来たか 考える暇はない

僕を掴む男子生徒が、片方の手で僕の顔面を殴りつけた来た
付けていた眼鏡はその場に落ちる……。

「ぐ……」

人に殴られるとは何時ぶりだろうか、父さんもあの性格だ

息子に手を上げる事はないし 母さんも軽く頭をチョップする事
はあつたけど

力を込めた拳で殴られた事は、記憶を巡らせてもそうそうある物で
はない

殴り終わったと思えば、また拳を振るう

このまま殴られれば、僕も無事ではすまない実際は鼻血も出てるし
顔も多少は腫れている

(君は早く逃げて)

(え……でも)

(良いから 僕は大丈夫何とでもなるさ)

少女に逃げるよう促せば僕は打開策があると言ひ心配無用と声を
かける

ただの虚勢に過ぎない

相手は5人程おり どれも運動部だ ある程度は鍛えてるとは
言ってもそれはあくまでも素人レベルだ

ガタイの良い人間を複数相手となればプロの格闘家でも勝つのは
難しいと聞く

だけど 引く訳には行かないだろう 彼女を追いかけてやろうとした
他の男子の足を引っかけ

行動を阻害し 無事に逃げ切れた事を確認し 再度彼等の相手をする

『男は女の前ではかっこよく』父さんからの教えだ
女の子を助けて殴られるならお釣りも来るだろう

「本当に2年あがりには調子乗ってるよな あの須藤とか言う馬鹿と良い
上杉だっけ お前もさ」

やはり須藤を知っている同じ部活に居ながら何故ここまで差がで
るのか

こんな人達より和之の方がきつちりと野球部をまとめ上げられる
だろう

去年の最後に行われた試合もそうだ 何人かの生徒が和之の足を
引っ張り

最終的に逆転負けしたんだ

あいつは真面目だ 『俺が相手のサインにさへ気づけば』あいつは
ずっと悔いていた

真弓ちゃんもずっとあいつを心配していた…

女子生徒相手に数人でナンパしてる人達が和之を馬鹿にする発言
を僕は聞き逃す事は出来なかった

「どっちがですか？ 和之がいなければ決勝にも行けなくせに先輩
方は良くそんな事言えますね

足手まといはあなた達でしょ 凡人のくせに…」

「ぐ お前ふざけんなー！」

反省すべきとは微塵も思わない 親友を馬鹿にされたんだ

僕だってキレる 自分の事を棚に上げ 他人を見下す彼等が、不愉快
でしかたがなかった

咄嗟に足が出ていた 掴んでいる男子に思いっきり蹴りを入れて
いたようだ。

当時からだ僕は足癖が悪い

「てめー……いい加減にくたばれ！」

(あつ これは不味い 流石に鉄パイプはいけないな)

先程足を引っかけられ転ばされた事が頭に來たのか、横の建物付近に落ちていて

鉄パイプを拾い上げると僕にめがけてそれを振り下ろそうとする……。

回避技術なんて僕にはない運動は得意だけど格闘技は嗜んでないからね

もし無事に生き残れば、風太郎と一緒に護身術でも学んでみようかな……

幾らキレても自分が死ぬかも知れない時は冷静になるものなのだろう人間とは

目の前がスローモーションになる このまま終わるならせめて坂下に最後に会っておくべきだった

それに あの子達とも最後に会いたかったな

死を覚悟した だが それは僕には届く事はなかった

「あの人達です！」

声が聞こえた 何処かで聞いた事のある声だ

その人物が、僕の窮地を救ったようである

僕を掴んでいた男子は手を離す 後ろを見れば結構な人が後ろにいた

野次馬だろうし きつと誰かが呼んだのだろう

パシヤリと撮影する音が聞こえると 男子生徒は後ずさる

「やばいよ 流石にこれは」

「っ………上杉てめ 覚えてろよ」

「僕はさっさと忘れたいですよ 先輩方も寄り道せずに帰ってくださいね っう」

鉄パイプを持っていた男子もそれを捨てるとこの人だからだ問題

が起きたとなればただではすまない

卒業できるかどうかにも影響してくれるだろう

運が良い事に僕は、殴られていただけで、手は出していない 足は出たけど

正当防衛として整理するだろうから大丈夫な筈だ。

「はあ……いつつ」

「あの 大丈夫ですか」

その場でへたりこむ僕の傍に先ほど助けたであろう少女が心配そうに駆け寄ってきた

傷だらけの顔で、言うのもなんだけど『大丈夫だよ』と返事を返した

彼女とはそのまま会話を終わらせれば、きつと今日は何事もなく終わり

きつと僕は事故に何て遭う事はなかっただろう……

僕は痛む顔を押しさえ落ちた眼鏡を何とか見つける

如何やら無事だ壊れてはいない 眼鏡代でどれだけするか父さんにまた負担をかけてしまう所だった

「見えるな よし……… えっ」

眼鏡をつけて最初に僕が見たのは

右目が隠れる斜め分けの少女が目には涙を浮かべている姿だ

そして その顔に僕は心当たりがあつた……。

僕は彼女を知っている きつと忘れる事はないだろう

あの子達 五つ子の一人が僕を見ていた……。

「怪我がひどい 私のせいでごめんなさい」

「これくらい平気だよ 君こそ怪我はない？」

「私は大丈夫」

「うん それなら良いよ怪我が無い事が一番だし……じゃ僕はこの辺

で……………」

「ダメだよ 傷を消毒しないと」

「確かにこのままだと不格好だし 薬局にでも行ってから帰るよ」

「私もついていく 助けてもらったから」

「そう？ なら少しだけお願いしようかな ああ 僕の名前は上杉幸

太郎 旭高校2年です」

「私は…………中野三玖 黒薔薇女子一年です…………」

改めての自己紹介

ここまで会話をして分かった事は、彼女は僕の事を忘れていたとい
う悲しい事実と

彼女には何も怪我はないという嬉しい話の二つだ

黒薔薇女子とはお嬢様学校だ それに中野という苗字

そうか…………あの人が僕に言った通り僕は姉妹達を救ったんだ

4年と少しだろうか 気づかれない事が幸いしたのか腫れた顔と
言う情けない状態だけだ

あの頃の少女と僕は再び再会できた

彼女との約束を僕は果たす事が出来る…………。

『幸太郎君 もし私に何かあった時は娘たちを気にかけてあげて そ
して出来るなら守ってあげてください…………。』とあの人は僕に頼ん
だ…………

逃げ出した僕にまだその機会があるのなら…………三玖の願いには応
えてあげよう

第四十六話 不良少年と真つ赤な記憶

あの後だ 僕は三玖に肩を借り
痛む顔を押しさえ薬局屋へと向かった

流星に今の手持ちでは病院に行っても払いきれるか不安だ 三玖
は自分が出すと言うが

そこまでお世話になる訳にもいかない 自分で行動してその過程
で出来た傷だ自己責任

(あれ無い……………)

買い物の中だ 財布を取り出す際に 僕は違和感に気づいた
持っていた筈の生徒手帳が無いのだ 朝には持っていたし

買い物した時にも所持していた筈だが、何処かで落としたのでら
うか？

再発行してもう必要もあるけど。

身分が分かる品だ拾ってくれた人が届けてくれる事を信じて待
とう

この時の 僕はそう思っていた

あの時彼女が拾っていた事にも気づかず

一年後に 三玖の部屋でそれを見つucker事になり

そしてその手帳にある写真が入っていた事も僕はすっかり忘れて
いたのだ。

だけど それは今の僕が知る事はない これは過去の出来事であ
る

脱脂綿や消毒液に包帯や抑えるテープなど必要最低限で尚且つ

お財布に優しい品を選び 近くのベンチで傷の手当をする事
になった

ただお礼がしたいと言ひ三玖 いや 中野さんが消毒などすると
自分から行動している 何と言うか物凄く不安である

「染みる？」

「一応は怪我してるから いーーうう」

「ごめん 少しつけ過ぎた」

「あつははは 大丈夫 大丈夫 これくらい」

殴られた時よりも 傷口を消毒するアルコールの方が遙かに刺激的である

打撲よりもやはり切り傷の方が痛みを感じる

どちらも痕が残る分厄介なのは変わらないと思うんだけど血が出るから余計に質が悪い

体中の血液が内部でも傷口の処理をしている証でもあるが痛いものは痛い

痛みを堪えながらも何とか食いしばる事で丈夫さをアピールする

三玖は困惑しているが、平気だよと声をかける

男たるもの女の前では強くあれとこれまた父さんの言葉だ

あの人のように僕も女性の前では少しは男らしく見せるべきだろう

まあ……ぼこぼこにされてしまつて情けないもないけど

包帯やらカーゼやらをテープでぐるぐる巻きにされ

やや息苦しさも感じるし 周りの人からも好奇の目で見られ始める

一旦三玖に『少し待ってて』と告げると持っていた巻かれた包帯を解き

カーゼも張り直し 正しい巻き方とでもいれば良いのか

傷口を傷めず更に取りにくいようしっかり押さえる 医学の心得はあるつもりだ

何処を怪我した場合にどうやって処理するかも僕はある程度はわかる

幸い鼻血の方も止まり 相手側の拳も上手く逸れたのだろう折れてはいない

「こんなものかな ありがとう 中野さん 楽になったよ」

「私は何も出来てない こう……幸太郎さんが」

「幸太郎でも良いですよ 友人からはこうやこー時には太郎何でも呼ばれてますから」

「なら そのコータローで良い」

「はい 勿論中野さんが呼びたいように呼んでください」

「幸太郎さん」と言われ少し寂しさを覚えたのか

自分が普段周りからどう呼ばれているのかを彼女に教える辺り

僕もあのナンパ集団をとやかく言えないだろうな

どしても彼女に自分はあの時の少年だと思いだして欲しいとは女々しい事この上ない

少し戸惑いはするも彼女は僕を『コータロー』と語尾を伸ばす呼び方で決めたようだ

昔のように『こうくん』とはいかないだろう 例え覚えていても

高校生にもなって小学生の時の呼び方は僕も恥ずかしいと思ってしまう

あいつだつて僕を『幸太郎』と呼び捨てしているし女子とは男子以上にフランクなんだろうか？

一応和之も僕を下の名前で呼んでいるが彼は男だし違和感は覚えな事無いな

彼女に訂正されてはいるが 僕は彼女をけして名前と呼ぶ事はない

『中野さん』とは他人行儀にも程があるだろう あの人への八つ当たりを娘である彼女に向けるとは

本当に自分が嫌になる

表向きは笑顔で対応するけど内心は荒れている僕に出来ない事を彼はやってのけた

今のままで僕は彼女と話す それが辛くもある……。

傷の手当終わると僕は彼女にお礼の言葉を述べてそのまま去ろうと思った

長居は出来ない 和之や坂下とでも出くわしたら何て説明すれば

いいか…………。

「あの コータロー……」

「どうしたの中野さん」

「もう少しだけ ここにいて欲しい コータローにはお礼をしたいから」

「傷の手当もして貰ったし 僕はそれで十分ですよ」

「……………」

その目は反則だ 無意識にやっているなら質が悪い

上目遣いと言うのはどんな男性も耐性が低いものだ それは僕も例外ではなく

零奈さんとの約束もあるし これ以上三玖を困らせるのは本位ではない

『なら も少しだけよろしくお願いします』と声をかければ

彼女は嬉しそうに頷いてくれた 本当に変わらないな

あの頃と髪も変わり雰囲気も何処か大人しく感じるし

ヘッドホンを下げてたり知らない人だと思っていた

助けに入った際にも気づかなかった

でも良くその顔を見ればまだあの頃の面影をきちんと残している

目元とかは昔のままだ……………。

無意識とは言え僕は凝視していたらしく

流石に恥ずかしかったのか視線を僕から逸らす

「あつ ごめん 知り合いとよく似てるからつい 悪気はありません」

「……………気にしてないから良いよ」

「ありがとうございます」

機嫌を損ねたならどうするべきかと考えたが、本人は背けただけで気にはしないと述べる

髪で目が隠れるから言葉と仕草でしか怒っているかも判別出来ない

以前は前髪で隠すような感じではなかったけどイメチェンと言う奴だろう

風太郎もある意味ではイメチェン……………違うなあれは元に戻った

本人は一切理由を話さないけど修学旅行辺りからだな 変化があつたのは……………。

(そのうち僕も髪を染めたりするのかな?)

視線は一向に戻らず僕とは目を合わせない

放つて訳にもいかないし本人の頼みでもある気が済むまで同行かな

「……………」

気まずい 気まずい

ただ黙つて座っているのは男としてどうだろうか……………

気の利かない男子にはなりたくない 何か飲み物でも買って会話のきつかけにしてみよう

『幸太郎はもつと女の子気持ちを知るべきだよ 私が黙つたら飲み物を買うべきさ』

まさか ここであいつとのやり取りで救われるとは、少々複雑だ

「少し待ってて貰えるかな?」

「うん どうかしたの」

「すぐ戻るよ」

自販機はすぐそばだ 今日とは休日と言うだけあり

人通りも多い僕と三玖はベンチで座っているが少しでも歩こうとすれば人混みに飲まれそうだ

わざわざそんな道をいく必要はない

右側に置いてあるそれを操作すれば良いだけである

「えっと 何か飲み物は 売り切ればかりだな……………抹茶ソー

ダ」

何だろう　これは抹茶ソーダと書かれた飲み物が自販機に存在した

ここに住んで10年以上だが、こんな摩訶不思議な飲み物は見たことは無い

他の選択肢を考えるが、どれも売り切れで栄養ドリンクなどは残っているのだが

女子生徒に渡す飲み物として　果たして栄養ドリンクは正しい選択と言えるのか……………

「110円……………ダメで元々だ！」

決意を固めた　僕はその抹茶ソーダと呼ばれる謎の飲み物を選択した

果たしてこれが吉と出るか凶とでるか、本音を言えば少し気になったと言うのもある

パツと見ても味は想像も出来ない

110円と生活する中で手痛い出費だが、まあこれくらいなら大丈夫とやや楽観的に捉えた

これよりも薬局屋で薬を買い込んだ時の方がお金はかかっているし

ただ　病院で治療してもらうよりも安上がりで済んでいるならそれが最適だ

貧乏性と言うか最早ただのけちとしか見られないだろう

(明日の食堂は抜きにするか)

「ゴータローお帰り　何か買って来たの？」

「うん　あの少し不思議な物があって　もし良ければ友好の印として受け取って貰えるかな」

友好の印とはよく言ったものだ　ただ気になって自分の意思で選んでくせに

良い風に捉えてもらえるよう必死過ぎるなこの高2は…………

座っている三玖にそれを手渡し　反応を確かめる

あいつなら

嫌味混じりな言い回しで僕をなじるだろうけど

相手は三玖だ 困惑はしそうだけど僕に嫌味は飛ばさない

……………答

後は流れに身を任せるだけだ

ぶくり

「抹茶ソーダだ……………」

「あつ うん 抹茶なのにソーダとは不思議だよ 嫌なら無理して飲まなくても」

「私 これ好きなんだよ」

「まさか 愛好家が居たとは、すごくびっくりです」

驚いた再会した幼馴染は抹茶ソーダの愛好家だった

ためらう事もせず僕が手渡したそれに口をつける一応はさつき知り合った人間なんだから

もう少し警戒したも良いとは思うけどな……………

三玖は僕を信頼してくれているのかそんな素振りは一切見せない

ゴクゴクとあの緑の飲み物を飲み進める

彼女が安心出来ていると分かれば僕が同行した意味もあつただろう

しかし疑問は尽きない 何故 三玖は一人なのか

あの仲の良い 五つ子が何故バラバラに行動しているんだ？

4年前は全員何時も一緒だった筈と僕は記憶している 姉妹がいればあんな事にならない筈だ

「コータローは飲まないの？」

「僕？ 中野さんのただだよ 特に喉も乾いてもないからさ」

「それだと悪いよ コータローには助けて貰って飲み物まで 何も出来てない」

「良いよ そこまで考えなくても僕はただ自分でやりたいように行動しただけだよ

お礼なんて貰う気もないよ」

「あの……………これ 少し残ってるから」

「流石に女性徒が飲んだ飲み物を飲む勇氣は僕にはありません」

「少し残念……………せめてものお礼を」

「僕はドキドキしたけどね」

大胆過ぎないか 自分が口をつけて物を無意識とは思えないし

いたずらにしても度が過ぎる 実は既に他の姉妹が隠れているんじゃないのかな？

一応辺りを見るが、それらしい姿は確認できないし 三玖のイメチェンといい

他の姉妹も変わっているかもしれない……………。

「周りが気になるの？」

「特に意味はないよ……………あのさ 中野さんはどうしてあそこ所にいたのかなと」

「そ……………それは……………」

「ごめん 言い出しづらい事なら別に良いんだよ」

それが議題だ 中野さんは三玖は一人でいた為 あの連中に目をつけられた

誰かがいれば何かは変わっていたのかもしれない

本人に何故かと聞いても 俯いて黙ってしまうだけだ……………。

「喧嘩した」

「け 喧嘩 誰と？」

「私に姉妹がいるの その子と喧嘩して いつの間にか迷子に」

「それはまた災難だったね」

「でも 悪い事ばかりじゃなかった…………… (コータローを見つけたから)」

姉妹と喧嘩か…

どんな内容かは詮索はしないけど 姉妹との血の繋がった相手との争い程悲しいものは無い

あの4人の誰かと喧嘩とは、少し驚いた

僕が知る限り彼女達が喧嘩をした場面は見かける事はほぼ無いと言える

とても仲のいい五つ子として有名だったからね

「大変だったね 姉妹の方と喧嘩して それにあんな目に遭うなんて」

どう声をかけるべきだろうか考え出た言葉がこれだ

当たり障りもない回答だ 自分の事は忘れている下手に会話もできな

あの時に逃げ出した僕に今更名乗る資格もないだろう

五月と三玖は泣いていた 一花もずっとこっち見ていた

僕がかけられる言葉なんて何も無かったんだ

何も出来なかった僕が今出来る事それは三玖の話し相手になるとだろうな

気づかれてはいないがどういう訳か彼女にはなつかれるという言葉表現が正しいのかは不安だが

自分の現状を話すくらいには打ち解けていた

どんな学園生活を送りたいのか、これからどうやって行けばいいのか

高校生として始まる新しい生活に彼女は不安を覚えていると話す

その気持ち僕も分かる 中学生時代のノリで行けば良いのか

新しい自分で行けば良いのか 僕が選んだのは前者だった

中学生時代と同じく 真面目であろう 周りの人間を失望させないよう

彼等のお手本となろうと決めていた

実際その通りに慣れたかは自分では判断はつかない 僕にできる精一杯でクラスの人間と向き合う

それが今の僕の学園での生き方だ

正直に言えば、あまり役に立つような話ではないだろうが参考までにと言った具合だ

三玖は物静かな印象を受けるが、きちんと話せる人物だ

それを周りの人達がくみ取ってくればきっといい方向へと向かうだろう

「僕の経験談から言うと　あまり気負う必要はないと思います

きっと中野さんが心のそこで話せる友人が出来ますよ　今だって僕と話せているんですから」

「心のそこから……………」

「すみません　参考にはならない話でしたね」

「ううん　コータローの言葉で勇気を貰った　きっと私も大丈夫」

「それなら僕もお節介を焼いた甲斐があります」

「コータローは優しいね　私の話もちゃんと聞いてくれる」

「当たり前ですよ……………困っているなら僕は、その人を助けます

相談を求めるなら僕は、助言を出します　って言う割にあまり良

いかつことも出来ませんが」

優しい人　果たして僕は、彼女が言うような人物なのだろうか？

学園生活でクラスの知り合いと　教師の頼みを聞くのは

ただ僕が誰かに必要とされる事望んでいるだけだろう

僕は出来る　あの頃とは違うんだ　子供ながらのかっこつけだ

誰に認められたいのか

誰の為なのかも　きっと分かっているのだ　偉そうな事ばかり言

い

相手の心に入り込み　顔色を窺うような　そんな卑しい人間だ

……………。

少し空を眺め　気持ちを整理する

三玖と話すこの時間はとても良いものだ　彼女は僕を知らない

だからクラスの間達のように話してくるわけでもない　あいつ

や和之と同じ

対等な人物として見てくれている　久々に言葉に気持ちが籠っていた

「空き缶捨ててくるね」

「はい…大丈夫です。ここにいますから」

彼女が一度持っていた空き缶を捨てる言うので僕は、そこで待っていれば

胸ポケットに入れてある携帯が振動しだした

取り出し 画面を確認すれば 須藤和之と表示されている

一体なんのようだろう？ 勉強なら明日でも見てやれるし急ぎの用事だろうか？

「もしもし 和之どうしたんだ 勉強なら明日」

『幸太郎—— 無事か！』

「うう……………」

大声が聞こえ 僕は一瞬聴覚を失った

持っている携帯も危うく落とすところで済んだのでキャッチする

もう一度大声が来ないとは限らない 恐る恐る耳元に近づけた

『おい 大丈夫か』

「お前の声がうるさくてびっくりしたよ どうしたんだいきなり」

『本当に何も無いんだな！』

「和之 お前はいい奴だけど先ず要件を話して欲しいけど」

『すまんすまん 今日朝から学園で2年生で走り込みしてたんだ』

「せいが出るな まだ二年が始まって間もないのに お前は凄いや」

『今年こそ 優勝だ！ それに俺はどんな試合も勝つぞ 幸太郎』

「頑張ってくれ お前の夢を僕は応援している」

『それは俺もだ 幸太郎も夢に近づいているんだらなら 頑張れよわが校最優秀生徒』

「茶化さないでくれ でもうん そうだね 僕は自分の夢を諦めないよ 高校も卒業して

父さんを楽しませたいんだ 目指すは有名大学さ」

「あいつもきつとお前の夢が叶うと信じてる筈だぞ」

「筈か……………」

「どうした 幸太郎まさか 何か！」

「なんでもないよ それで本題だいい加減 脱線し過ぎた」

「すまんすまんと声を上げる いい加減その声の調整を覚えて欲しい
い

毎日聞かされる 僕の身にもなつて欲しいよ

真弓ちゃんは同じ兄妹だ 僕以上にあの大声を聞かされているんだらうな

頑張つて真弓ちゃん 僕は君の味方だよ。

電話の向こう側ではいまだに大きな声が聞こえる

何やら慌てているようで 俺に何かがあつたのかばかり要領を得ない

一旦落ち着けと冷静になるよう言いかければ彼は何とか落ち着きを取り戻す

『実はな 先程先輩達が学校に来たんだが……… 何故かお前の名前ばかり怒鳴りながら言ってるんだ』

「……………それで」

『あの人達は、気性は荒いけど 本当は真面目な人達だ』

「分かっている お前のいる部活だ 真面目なんだらうな 色々」と

『やはり 何かあつたのか』

「何も無い もし何かあつても お前は何もしないでくれ」

『どういう意味だ 幸太郎！』

「お前はずっと真面目に練習してここまで来たんだろ 何も僕の名前を言うだけの三年生の相手なんてする必要はない 今年で最後なんだ やりたいようにやらせば良いさ」

『幸太郎 何が言いたいんだ まさか脅されたとかか』

「本当に何も無いさ 和之 君は僕の親友だ だからこそ約束して欲しいんだ

何が合っても問題だけは起こさないで欲しい 僕の為だと思つてくれ」

『……………俺は喧嘩は嫌いだ 人を殴るとかは絶対にしない でも親友が何かあれば

黙っていられる男じゃない』

「僕に任せてくれ 僕が一度だって お前の事を失望させた事はあるかい？」

『ないさ 幸太郎は何時も正しい それは誰もが思ってる事だ』

「そう………僕は大丈夫 みんながいるんだ 何かあれば相談もするし 助けも求める。」

だから和之 お前は自分の事だけに集中してくれ 大丈夫万事上手く行くよ」

『よーし 分かった 俺は俺で自分の為に動く だから幸太郎 何が合っても俺達を信用してくれよ』

「……お前がいるだけで僕は心強いよ じゃまた 学校で会おう」

わかったと大きな声を出せば電話を切る

最後の最後まで大きな声だった 物理的に耳が痛くなる

彼からの電話の内容は三玖に絡んでいたあの先輩達の事だった

彼等はあの後学園に言ったらしく 僕を殴ってそれで終わりの筈が

何やら部室で大暴れと怒号と 部活の内容なら良いけど

全くの別件に力を注いでいるという本当に馬鹿の集まりだ

でも来年には消える

このまま行けば 和之がキャプテンだろう

それまで僕が彼等の相手をすればいいだけだ……

多勢無勢だけど 僕は一人じゃない クラスのみんなだっているし

彼等が三玖を連れ去ろうとした場面や僕を殴った姿も写真を撮られている

僕が恐れる事なんて何もない 何かを起こすなら痛い目を見るのは向こうだ

彼との電話で僕が気になった事は先輩達の事ではない

あいつ 坂下の事だ 和之は『応援してる筈さ』と言っていた

うんそうだね 彼女の事だ 僕の夢を応援するだろう
『へえー 幸太郎の夢なんだ 勿論私も知ってる だから 私の夢もそれにするよ』

以前あいつはそう言った 僕がどんな難関校に行くのか彼女は知っている筈だ

だけど あいつは 私もそれにすると 言ってきた

僕は天才だろう 周りはそう呼ぶ けど真の天才とは 僕の隣で何でもこなす

あの少女 坂下の事である……………。

「僕の夢か……………」

「コータロー何かあった？」

「うわ 中野さんいつの間に！」

「さつき戻ってきたんだけど コータローが誰かと電話してたから待ってた」

「ごめん 少し考え事をしててね」

「考え事か」

「うん 大した事でもないし 中野さんが気にする事でもないよ」
「……………」

僕を待っていたと話す 三玖

電話に夢中で彼女が戻ってきたことも分かっていなかったようだ

余程辛気臭い顔をしていたのだろう 僕が殴られた時と同じだ彼女はとても心配そうだ

こんな事じゃだめだ 今は三玖といえるんだ 色々あるだろうが考えるのは後でいい

「よし」と声を出すと僕は頬をパンパンと叩き気合を入れ直す

でも……………

「いっ……………」

「今のは痛いよ」

「怪我してたの忘れてた」

頬を叩くのは良いけど 自分がどんな状態かぐらいは忘れないようにしないと

せつかく抑えていたガーゼもズレてしまおうし 何より痛い
別の意味で心配された

あつははーと笑って誤魔化すが痛がつてるのを見られたんだ効果
薄い

「やっぱり 怪我は酷いんじゃない」

「そ そんな事ある訳ないよ!」

何とか話を誤魔化さないと

目をきよろきよろさせ自分は平気だと言い張り何とかやり過ごそ
うとする僕は

三玖のヘッドホンに目が行く

そう言えば不思議に思っていたんだ、あの頃は特にこう言ったもの
を彼女は付けていなかった

これもイメチェンの一環なのかな?

「中野さんって ヘッドホンしてるけど 普段から何か聞いているのか
な?」

「え……………一応は 余り大きな音とか苦手だから集中したい時に」

「そうなんだね うん あまりうるさいと勉強にも身が入らないから
ね」

「勉強……………」

「中野さんって 勉強が嫌いななの?」

零奈さんはかつて様々な人物に教えて来たベテランであり

その娘である彼女達も幼いながらも良い成果を取っていた

遊びに行けばよく一花が僕に自慢してきた

あの笑顔で見せられるんだ、僕も自分の事よのように嬉しかったさ

そして三玖も同じな筈だ……………。

けど勉強という言葉で彼女は固まってしまった

「うん少しいだけ…」

「高校にもなると中学とは別と言えるくらい難易度は上がるからね

でも始まってまだ少しいだよ 自信をもって良いと思う

先ずは得意な科目からでも良いから頑張ってみようよ」

「コータローは勉強は好きなの？」

「好きと言うより、しないとダメだと思ってるかな。何事もこう言っただ事は大切だよ」

まあやり過ぎると頭も追いつかないって言うのはあるけどね」

「私はどうなのかな……」

これは深刻な事かも知れないな。僕が思っているよりも三玖は真剣だ

何が適切で何が彼女に必要な言葉だろう

僕が語った事は彼女が求めた答えになりはしなかった

三玖は何処か憂鬱な表情で虚空を眺める……………。

「うーん。僕は中野さんじゃないからあまり多くは言えないけど」

中野さんは中野さんらしくしていけば良いと思う。君にも好きな物はあるでしょう？」

「私の好きな……………。それはコータローにも秘密」

「あつはは。残念」

正直今の彼女が好きなのとは何かに興味があるが

あまりそう言った事を無理に聞くのは良くないだろう。我慢だ

「コータローはあるの。熱中出来るものか？」

「熱中出来るものか……………うーん。そうだね。僕は医学を学ぶのが好きだよ」

「医学？・医者とか」

「ありていに言えばそうかな。僕には夢があるんだ。うん。その為の勉強かな」

「コータローは夢の為に勉強してるんだね。私とは違う」

僕がなりたいそれはきつと僕が想像しているよりも険しい道のりだ

今だってそれを目指す為に日々勉強をし。学業に勤しんでいる

手を抜く訳にも行かない。あの日の後悔を二度と僕はしたくない……………。

「今はそうでもいいかも知れないです」

「今のままでも良いの？」

「無理にやる事はないんだよ でもきつと

中野さんも何かのきつかけでやりたいと思える日が来ると思うんだ」

「きつかけがあればかわれる……………」

「勉強だけじゃないですよ 生きて行く中でほんの些細な事で人は変われるんです

もし変われる事が出来たなら 僕に教えてください。」

「うん…………頑張ってみる 変われるきつかけを私も探してみる」

浮かない顔から一転して希望溢れる表情へと変わる

その顔だ 僕が見たかったものは

彼女には……………彼女達には沈んだ顔なんて似合わないもつと笑っていて欲しいんだ

『ありがとう』と小さく呟く声があった

横を見ても顔はこつちに向いてない そう言う所も変わってないな

それから暫くは三玖と話して時間を過ごした

話を聞けば、どんな日常を過ごしているのかも分かってくる どれだけ

あの人が彼女達を大切にしているかも理解できた あの人は立派に父親をしている

「そろそろ 帰りますか？」

「うん 五月にも謝らないと勝手に逃げて来たのは私だから」

「妹さんも許してくれますよ」

「ん？ コータローに言っただけ？」

「ん……………はい 言いましたよ だから行きましようか」
危ない危ない ぼろが出る処だった

ここまで来たら隠し通していかないと あの時の彼とは名乗るのは少し遅すぎたからね

「あれ ヘッドホンを付けるんですか？ 危なくないですか」
「周りが煩くなつて来たから少しの間だけ」
「まあ 僕が前を歩くんで誰かとぶつかるとは無いかも知れませんが」

時間帯は昼だ

人が溢れる時間帯だ 何処もかしくも昼時とあり賑わい出す
ヘッドホンを持つ理由は周りの音を遮断して集中する為と彼女は話していた

まあ 正しいと言えば正しいけど 街中ではあまりお勧めは出来ないかな

苦笑はするが、止める事はせず 僕は彼女の前を歩く事になる
少し歩いた先に横断歩道が見え始めた

(今年はまだ行けてないな 零奈さんの月命日にはちゃんと挨拶しに行かないとな…)

そのタイミングで 僕の携帯が鳴り出した

何処からの電話だろうか……………

ここで一旦足を止め そのまま三玖といれば良かったんだ
だけど僕はそれを確認すれば 電話をしたまま歩みを始めた
ながら歩きというあまり褒められた行為ではない……………。

「もしもし 坂下か どうしたの？ 僕は今日用事だつて」

『うん知ってるよ でも幸太郎がいないと家にいてもつまらないからおじ様から聞いた街の方だつて』

父さん何で簡単に僕の居場所を教えるんだろうか……………。
もう少し粘って欲しかったな

『幸太郎は欲しいもの買えた？ 私が持っていれば幸太郎には無償であげるから』

「いらないよ 坂下の物だろう 僕は自分の物は自分で揃えたいんで

す」

『幸太郎は強情だね それにさ いい加減苗字で呼ぶのやめて欲しいな』

「坂下は坂下だろう 別に困る事はないだろうし」

『家だと困るけどね 間違われるから でもまあ 幸太郎が坂下って呼ぶの私だけだし』

それもいいかな 特別な感じがしてさ』

「変な意味はないよ 僕がそう呼びたいだけだから それに下の名前を呼ぶのは気恥ずかしい」

『今更？ 須藤君の事はしたで呼んでるのに 私は駄目なんだね 昔みたいに呼んで欲しいな』

「それはないよ それに和之は親友だもん 気兼ねなく話せるからさ」

『私は 幸太郎の何なんだろうね ? 教えてよ 上杉幸太郎 あっ見えた』

「そう言う問題は今はやめておこう 僕も忙しいから 何が見えたんだよ？」

その電話は彼女 友人である 坂下からのものだった

相変わらずマイペースな人物だ 聞いていて飽きないが実際一緒にいれば疲れる

でもまあ嫌いじゃない 嫌いならあいつと同じ学校にも通う事なんてしないだろうし

電話をしながら少しずつ前を進む 一歩また一歩と僕は進む

この時僕は気づいていなかった 歩幅が彼女より大きい事にそれゆえ

三玖との距離は少しづつ開いていく 電話の向こうで坂下は何かを見つけたようで声を出している

一体何を見つけたんだろうか？ 電話越しには何も分からない

そう 何も分からないんだ

咄嗟の事だ 僕は上を見た 横断歩道は確かに青で今は僕と三玖が渡っていた

安心しきっていたんだろう だけど……………。

反対側の耳は、横から迫る音を確かに捉えていた

ふいに後ろを見れば、三玖とは少しばかり距離が開いている

この時僕がもう少し早く三玖との距離に気づき 坂下との電話を後にしていたなら

もつと早く反応出来ていた そうすれば 僕もきつと無事だっただろう

クラクションの音が鳴る

そんな馬鹿な 今は青信号 車は赤信号だ こんなただの信号無視だろ

後方で歩く三玖はここを渡る前と同じくヘッドホンを付けたままだ

横から迫る車の存在には気づいてもいない

(コータローのお陰で 五月と話す事が出来そう ありがとうコータロー えっ)

「三玖……………！が」

ドスンという音がした

何かが捻じれる音がする何かが潰れた音がする ぐしやりと言う鈍い音と共に

それは地面に落ちていく

辛うじて持っていた電話からは坂下の声がひどく大きな声で聞こえて来た

「あつ……………ぐ あが ぐは」

何が起こったんだろう？ 僕に一体何が起きたんだ？

車が来た 僕は三玖を見たそして 彼女がひかれないように

何をしたんだっけ……………あれ 何かがおかしい

みる……………ダレダ……………

僕の手が 動かない？ 感触がない 視界もぼやけているし

何故だろう坂下の声がさつきよりも 近くで聞こえるのは気のせいだろうか……………

僕は一体…………… この痛みはなんだろう…………… だめだ も
う意…………… 識が

車に跳ねられ そのまま突き飛ばされガードレールに体を強打し

辺り一帯は血だまりとなっている 持っていた携帯もすぐ傍に落ちていた

そんな彼の元に駆けつける女性と

飛んでいく彼を見て 呆然と立ち尽くす少女

その光景に恐怖し その場から去って行く少女

「こーた……………い お……………い」 最後に誰か僕を呼んだ気がした

私をおいて行くな

聞こえたその言葉を最後に上杉幸太郎は完全に意識を失った

それから暫く

ある病院の個室で彼は目を覚ました

「久しぶりだね 上杉幸太郎君 君はここに運ばれるまでの事を覚えて
いるかな」

目の前の男性を知っている あの日見た…あの日？

僕は何処でこの人を見たんだ 分からない

「ここ………先生がいるなら 病院ですよ でも何で僕が それ
に何だろう先生が僕の上に見える」

「君は今ベットに寝かされているからね それも仕方ない 無理をし
ないように……」

「げっほ………でもおかしいな 喉も痛いし 指もおかしいな 感
覚が」

「事故の後遺症か 記憶がないのか？ 僕の事は覚えているようだし
一時的なものだろう」

き お く？ 僕の記憶…何の話だろう 何か起きたのかな

「上杉君 君に伝えなければ行けない事がある」

「何ですか 今は酷く頭も痛いんですけど」

「上杉君………君は事故にあった そして今は7月の初めだ
君はこの三ヶ月の間

ずっと 意識を失っていたんだ」

驚愕と恐怖の顔で埋め尽くされる

目の前の男性は何を言っているんだ………彼の発する声が不快
な物に感じて来た

そして気づいた 自分がどんな姿か ベットに寝かされ

口には人工呼吸器が付けられ 腕は何かで固定されている それ
に左手には異様な違和感を覚える

「あぁっあぁ」

……………なんだ……………なんだ……………

「上杉君 僕を見なさい こつちを見るんだ」

「先生…………… ぼ 僕の手が…………… 指が ああ 変なんです ぜんぜん…」

感触はある 感覚もある でも僕の脳が発するそれを手も指も認識しない

まるで最初そうだったかのように少しも動きはしないのだ…

そして僕は本当の意味で今の自分の状況をやつと理解できた

「上杉君 落ち着きなさい こちら集中治療室！」

「ああああ…………… 指が 手がああああ なんて なんてあああああ！」

ひどい声だ 雑音だろう 頭を抱えたくても抱える事は出来ない

体は縛られ手は固定され動かない 自分を支えるのはこのベットだけだ

現実を受け止めろ 上杉幸太郎 現実を直視しろ

お前の目に映るそれは 紛れもない 事実だ

お前の夢もお前の希望もお前の今は 全部消え去ったんだ……………。

「ひでー 夢だな おい風太郎 起きろ」

「あつ やばい 流石に体に応えるか」

「まだ 3時だ このまま書き切るぞ」

俺が目を覚ませば隣で弟が小さないびきをかいて寝ていた

このまま寝かせるのも悪くはないけど 明日にはテスト勉強も始まるし

今俺と二人で行っている 作業も朝までに間に合うかも微妙だ

「5人分の想定問題集 幸太郎も良くこんな無茶を考えたもんだ」

「俺もこのままではギリギリだと思っていたし 本気で挑まないと信用は得られんだろうさ」

「一花や三玖は良いけど 二乃から信頼は特にな」

「そう言う事 んじや 書き取りさっさと終わらせますか」

「了解だ さて次の範囲は ここと それに」

想定問題集の作成 5人分を製作中

計画自体は以前からあった ただその暇がなく結局は勉強会前日の日

丸一日使って行かう事になった プリンターなんて便利な機械はうちにはない

それにこつちの方があいつらも真剣に望んでくれるだろうし

(随分と懐かしい夢だ なんて今あの事を思い出したんだろうな)

何枚もの紙を相手に戦う中でふと一年前の出来事が夢に出た

あれを思い出すとは、きつと最近それを話題に出したからだろう

どうせ見るなら 六花さんとの出会いまで見たかったんだけどな

.....

それに手は動く.....もう大丈夫

迫る勉強会まであと7時間少し 絶対に間に合わせてみせるぞ
みんな待っててくれ

第四十七話 不良少年と勉強会での大騒動

明け方だ 既に外から日が差している

俺と風太郎は結局一度寝落ちしただけでそれ以降はぶっ通しで作業を続け切った

目の前には大量の紙の束 それに一つ一つ手書きで書き続けたのだ

時間が掛かると言うレベルじゃない

達成感と充実感そして疲労感に睡魔 押し寄せる幾多の感覚に体は驚きを覚えている

一夜漬けと同じく余り褒められたものではないが、朝勉として割り切れれば割と体も楽に感じて来た……そう思う事にした

「うわー はあ………良い音になるな」

首を振りポキポキと鳴らし 背伸びをすればまた凄い音だ

猫背の態勢でぶっ通しだったんだこうもなるだろうさ

隣にいる風太郎は最後の一枚を書き終わるころには机に顔を突っ伏していた

意識はあるのかどうなのかと 頭を数回ポンポン叩けば『い 生きてるよ』と何とも弱弱しい声だ

このまま寝かせてやりたいが、今日は土曜日 そうも言ってもらえない

既に中野宅では全員が集まっているだろうし俺らもうかうかしている暇はないだろう

俺達が終わる前に起きて来たらいい ささっと朝食を作れば

『これ食べて体力つけてー』と俺と風太郎の分を用意

普段ならちゃんと言っていると怒られるのだが、真剣さが伝わったんだろう止められる事はなく

俺達は作業を続けることが出来た

朝食をかつ込めば、今日は何もありませんようにと母の写真に手を当てて

俺は今だ夢現な風太郎を連れて家を出る事になった

少し歩けば風太郎はヨタヨタとおぼつかない足取りで前に進むのか横に進むのか

はつきりしてくれと言いたいところだが寝ていないんだそうも言えない

俺はある程度 一徹二徹と夜更かしには耐性がある為 弟、程深刻ではないのだろうか

日頃のバイトで慣れているんだろう 風太郎もバイトはしているが俺程頻繁という訳ではない

一度は転々として 今は俺が紹介した店で共にバイトに勤しんでいる

店長も『上杉君の弟ならお願いしようかな』と面接で風太郎に期待をしていてくれたし

紹介した俺も自然と笑顔が出ていた
つとこれがここ最近の風太郎事情だ

まあ始めてまで少しだ 体もなれないのだろうか やはり疲労も睡魔もWパンチだ

問題集製作がそれを更に加速させていると言う状況
あまり芳しくなく 自身の勉強もあまり進めている暇はないんだ

ろうな

風太郎にしては珍しく最近はそれも見る機会は減ってきている
こいつのは成績は学園上位 2年では一位を取り続けている それを守り続けて欲しいと言う思いと

少しは肩の力を抜いて今の自分で挑んで欲しいと言う 二つの気持ちに左右されている

俺自身は：武田に指摘を受けた通り 確実に落ちている

前回の中間試験から一度行われた テストでは思っても見ない所でミスを連発していたのが

記憶にも新しい 勉強しろと中野姉妹に言える立場ではないのか
もしれんな

まあ今は俺の問題よりも 彼女の為に動かないとな

少し歩いた後に横で歩く風太郎の足が止まる

「風太郎 大丈夫か…？」

「……………」

「おーい おーい」

目の前で手を振るが反応は皆無

一応眼球は俺の手を認識しているのか開いてはいるんだがな

風太郎の得意な 目を開けたままの睡眠だ

こいつは器用な事に目をあけたまま寝る事が出来る時折それでやり過ぎすほどであり

俺もそれには感心していた

けど 今感心している場合ではない

中野姉妹のいるマンションまではもう少しかかる 倒れずいるだけで奇跡だが

この状態は流石にまずいだろう

家に戻ろうにも今からでは中野姉妹の家に行った方が早く済む

これは俺と風太郎の体調管理の甘さが招いた事だ

それで家庭教師は休みますとは言える訳もない

俺は弟を担ぐとそのまま中野姉妹の家へと走って向かう

「まじで 前回五月がタクシーだしてくれて良かったな 流石に重いなあー！」

弟の成長を実感すると共に走って向かうにはやっぱり重いという事実が付きまとうが

これも家庭教師の補佐としての俺の仕事だと割り切っと思えば、気分も少し良い

気分だけは、前向きで行こう 四葉を見習ってな！

暫く走れば、マンションへとつき

入り口で彼女達の部屋番号を慣れた手つきで入力

対応してくれたのは五月だった『息が荒いですが 幸太郎君大丈夫ですか？』と

最早恒例となった俺への気遣いだ　大丈夫だと言えば彼女は不思議そうにしながらも開けてくれた

エレベーターに乗り込めば一旦風太郎を下ろし　顔を軽くパンパンと叩く

『その数式は……違う　……それだと　答えは』

夢の中まで勉強会となっている　家庭教師としての自覚はあるんだが、ここまで来ると心配にもなってくるが、ある意味弟らしいと複雑な兄心である

(起きる気配は無さそうだな……)

スマホを確認すればそろそろ昼になる

ここまで来るだけで結構なタイムロスだ　タクシー何てセレブな乗り物も使えんし

自転車に寝たままのこいつを乗せる自信も俺にはない

引きずって行こうかとも考えたが、それは余りにもバイオレンス過ぎる発想だ

担いできた兄に少しは労いの言葉も欲しい所だな

「さて　はあ　疲れて来たな　昨日の夢と良い　何も無ければいいんだけどな」

再び風太郎を担げば、何度か声をかけ　家は目の前だと言い聞かせる

『……ん』と唸るような声が聞こえる　本当に疲れてんだなと改め思いつた

「あの　みんなは既に待っています……って　上杉君に幸太郎君どうしたんですかー」

「おはよう　五月　まあ朝勉だよ　起きろ風太郎」

「ふぁー………はっ　よう」

エレベーターがつけばすぐ彼女達の部屋が見える

既に五月が待機していたのか扉から顔を覗かせていた

俺と目があえばその状況に彼女も驚く

担がれる風太郎は目が開いたままという 何とも奇妙な状態だ

「またやってしまった………勉強に集中しすぎて気づいたら朝だった……… しかし」

朝勉は一概に悪いとも言えないのかもな………」

「朝まで勉強することを朝勉とは言いません 幸太郎君にまで迷惑をかけて」

「俺も似たようなもんだよ 朝勉はいいぞ」

「幸太郎君まで 体を壊しますよ ご自愛ください」

「俺と幸太郎だと対応の差が相当あると思うんだけど」

「何時もこんなもんだろ」

「うう………お二人が遅いので みんなで先に始めていますよ」

いい加減こいつのこれには慣れて来た 世話好きの後輩?とでも思えば良い

害は無いし 放っておいても大丈夫だろうと最近は気にしない事にした

本人は自覚はあるのだろう ぼつの悪い顔で廊下を進む

彼女が行ってしまう前に風太郎は背負っていた鞆から大量のプリントの束を取り出し

それを五月に手渡した 俺ももう半分を持っており肩にかけていた鞆からそれを取り出せば

嫌な顔する五月に躊躇いなく渡した 『な なんですかこれは』と 驚愕する五月

本当に何ですかだよな 我ながら馬鹿げた発想だが 今の彼女達にはこれが必要不可欠である

下手な問題集よりも役に立つと自身も自覚もある

学園最高の風太郎の手も借りたんだ これで勉強が出来ないなんて事は先ずないだろう

「今回の範囲を全てカバーした 想定問題集だ 人数分用意したので 課題が終わり次第始めてもらおう」

これを一通りこなせば勝機もあるはずだ」

「やっぱり今日の約束はなしで お引取りください」

この反応も想定していた

ドン引きする五月は怪訝そうな顔で渡されたプリントを返そうとするが

風太郎もここで引けば何もかも終わる 粘りを見せる

俺もここで一言加勢をせねばなど彼女に一声かける

「五月 お前は既に受け取ったろ お前は受け取った物を返す そんな奴じゃない」

「うう 幸太郎君までそのような事を言うのですか……………しかしこの山は流石に ん？」

説得はするが、五月もこの現実を直視するのが嫌だとばかりに

何度も手放そうとするが、その都度言い聞かせた

するとプリントに目が行ったのか彼女は食い入るようにそれを見る

少しすれば、呆れたような表情でこちらに声をかけてきた

「まさかこれが原因で徹夜したんですか？」

「そ そんな事はどうでもいいだろ お前たちだけやらせてもフェアじゃない

俺達が お手本にならなきゃな」

「お手本って……………」

「そう言う事だ 風太郎の覚悟分かってやってくれ ふああ」

「俺達……………まさか幸太郎君の徹夜もこれが……………」

気が緩めば欠伸も出てしまう

一度寝落ちした以外俺も睡眠は取っていない

勘のいい五月だ それだけで気づかれるだろう

彼女の事だ色々気を遣うだろうし『知らねーよ』と適当にあしらう

風太郎もやる気で進んで行く

『誰か逃げ出さないうちいこーぜ』とアシストをくれた

まあこいつの場合は勉強させたい為でた言葉だろうけど……………。

「また二乃を引き留めるのは骨が折れそうですから 三玖の力も借りて何とかです……………」

「もう逃げようとしてんだな あいつ……………一言 灸をすえてやらねば

ならんな」

「あの……揉め事は勘弁してくださいね」

「風太郎も気負うな 肩の力を入れすぎると五月の言う通りの種になるからな」

「そうです 時間は限られているのですから みんなで仲良く協力し合いましょう！」

俺達が来るまでの間に五月や三玖の働きで二乃の足止めには成功したようだ

それが無ければ既に家から逃走していたようだ

本当にあいつは期待を裏切ねえな……。

彼女の言う通りに 俺達全員で な か よ く 協力するそれが一番だ

「仲良くねえ」

「な 仲良く……」

「五月 前を見る これが現状だ 微笑ましいな」

「幸太郎君こそ 現実をみてください！」

「三玖 この手をどけなさい」

「二乃こそ諦めて」

「はああなたが諦めなさいよ」

「諦めない」

リビングに入れば早速 次女と三女によるリモコン争奪戦が開始されていた

いがみ合う二人の手にはリモコンが握られ両者一歩引く事は無さそうだ

前途多難だな……おい

止めに入る風太郎に 二乃と三玖はそれぞれ自分が見たい番組があり

それ故にリモコンの取り合いになっていると話す

『勉強中はけしませ』と風太郎はテレビの電源を消し 机に散らかったノートや筆記用具を見て

大きなため息を漏らす

「昔はここまで喧嘩する奴らじゃなかったろうに」

「まあ 色々あったからね コータロー君も知ってるでしょ」

「これ以上大きな騒動にならないければそれが一番だけどな 一花も今日はよろしくな」

「うん 今日頼んだよ お兄ちゃん」

「へいへい」

俺の知らない4年間の空白 その間に姉妹の仲は俺が知っている物とは別物となっていた

あいつの本音を聞けば、それは愛情の裏返しだと俺には見て取れる 二乃も不器用なだけで本当に根は優しい良い子なんだけどな

一花もそれは分かっているだから仲裁もするし 彼女に声もかけている

ぶーたれる二乃もしぶしぶと机に向かう

「はーい みんな再開するよ それじゃ 二人とも これから一週間 私達のことお願いします」

「ああ リベンジマッチだ！」

「お前ら覚悟しとけよ」

全員の前で意気込む俺達 さて遂に始まる勉強会 この一週間で絶対に全員にいい点を取らせてやるんだ その為なら俺は何だってするぞ……………。

と気合を入れたのは良いのだが やはり懸念があるとすれば 二乃と三玖の二人だ この勉強会を円滑に進めるには二人が喧嘩をしないよう俺達でフォローする

それが今やるべき事だ 下手に刺激して喧嘩でもされたら今までの苦労が水の泡だ

喧嘩なんて見ているだけでも嫌なもんだしな

「それ私の消しゴム」

「借りただけ」

「借りただけ」

「あ それ私のジュース」

「借りるだけ っつマズっ！」

既視感だ先ほどと同じく二人の言い争いや物の取り合いが勃発している

どうしても馬が合わないのだろう

あれをやればそれがダメ それをやればこれがダメと負のスパイラルだ

「ほれ 消しゴムなら俺の貸すから 返しておけ」

「ゴータローは無くていいの？ 困らない？」

「俺は教える側だしな 今は使わん ほれ二乃も口元を拭け」

「うう………なんてもん飲ませんのよ」

「それは二乃が」

「はい ストップだ 今は目の前の課題に目を向けような 終わったら買ってきてやつから」

俺が割って入って言い聞かせるのもそのうち限界がくるぞ

三玖には消しゴムを渡し 二乃にはハンカチを渡す

悪化だけしないように二人にフォローを入れつつ勉強を続けさせる

その間に風太郎は打開策を考える為 『アイデア募集』と声に出す彼の前に座る 四葉は手を上げ元気よくアピール その笑顔を今の二人も分けて欲しいもんだよ

『みんな仲良し大作戦 by 四葉』

「きつと慣れない勉強でカリカリしているんです お二人がいい気分に乗せてあげたら喧嘩も収まるはずですよ」

凄く不安を感じてしまう 風太郎はけして社交的とは言えない俺が言えたことではないが

あまり人と話さない部類だと言える でなければ俺を補佐として任命しないだろう

一応はこいつも俺の昔の姿を知っている 今でこそこうだがある程度は人と話す事もしていた

ある意味で黒歴史と言えるがな……。

「んで 四葉さん 勝算はあるのか」

「えつと……まあ はい お兄さん達なら大丈夫です」

「了解 望み薄と言う事は分かった」

笑って済ませる四葉 仲良し大作戦 始まる前から落ちが見えて来たんだけど

俺の心配をよそに 風太郎が先手をきった 玉砕覚悟といった顔だ

弟の勇士を俺は見届けねえとな見せてみる お前のこの5年を……。

「素晴らしい 二人共いい感じだ 何か凄く良い しっかりしてて……健康的で……良いね

うーん…… 偉い！」

『褒めるの下手くそーッ！』

「どうしたの フータロー？」

「気持ち悪いわね 変なもんでも食べた？」

これは酷いな 俺は何処でこいつの教育方針を誤ったんだろうな
もう少し兄としてきちんと接してやれば良かった

何か凄く申し訳なくなってきたな

二乃にも心配されている 二人は完全に困惑している

玉砕覚悟で行って本当に玉砕していった……。

「風太郎が言いたいののは、家庭教師に言われた事とはいえ

きちんと課題に挑んでるその姿勢を褒めてんだろうさ 聞いてやってくれ」

「お兄さん ナイスアシストです」

「本当にそうよ 何でこんな面倒な事やってるのかしらね」

「二乃そう言う事は言ったらダメ」

「そうですね 幸太郎君が褒めているんですきちんと聞くべきです」

「っ 三玖は分かるけど 五月まで何なのよ」

今現在の俺が二乃に嫌われている前提で進んでいる やはり何か
言えば揚げ足取りとなる

俺は少し傍観に徹した方が良くもな 早速戦力外だ

風太郎の事言えんぞ 三玖が俺を庇う限りは二乃とは相容れないだろう

と言うより五月は黙って進めていってくれ 一々反応してたら進まんぞ

何処から取り出した ×マークを五月の口につけ

これ以上割って入らないよう嚴重注意をする

「四葉さん これは駄目だ 発言の先で直ぐに正面衝突してる おまけに未っ子まで来るぞ」

「お兄さんも上杉さんも 元気出してください！」

「はい失敗 次」

「こんなのどーかな」

続いての発案者はこの中野姉妹の長女である一花だ

彼女はこの中でも一番に人とかかわりの多い女優という仕事に携わっている

期待できる作戦を提示してくれるだろう

(幸太郎君 これを外してください！)

隣でうーうー言う五月は無視するか……。

仲良くさせたいならお前はもう少し自重してくれ

『第三の勢力作戦 by 一花』

「あえて厳しく当たることではイトが 二人にも向くはず 共通の敵が現れたら二人結束力が強まるはずだよ」

叱るのは気が引けるが、二人が協力できるなら俺もやぶさかでない 自信満々に一花は語り 風太郎はそれを静かに聞いている

「うーん……一応それなりに頑張ってる あいつらに強く言うのは心が痛む……」

「ぶっは …… あなたにも心があつたのですね」

「五月さん 少し静かにしてましようか？ 勉強見てやるからお前はこっちに来い」

「幸太郎君 自ら 私に……そんなもつたいないです」

「何がだ つうか お前あれだけ俺からだけは教えられたくないって

言つてたのに今回すんなりだな」

口に貼つてあるテープを外すと五月は辛口の発言を飛ばす

お前は時々毒を吐くな……

そつと風太郎の傍から遠ざけ 彼女の勉強に目を贈る

「いえ 本当は嫌なんですが」

「さいですか……」

「いえ そう言う意味ではなくて

確かに私は幸太郎君の厚意に甘える訳には行かないと言いました

しかし あなたは私に向き合うんです それを無下にすると言う

事はあなたを否定する事です

それだけは私はする訳には、行きませんから」

「否定ねえ……別に今更だ 気にはしないさ」

「また そんな事を言うんですから」

「でも その気持ちはありがたく受け取るさ サンキューな」

「……当然の事をしているだけです」

五月は風太郎からは教えても構わないと以前話した

しかし俺からだけは受ける訳にはいかない

それは頑なで泊まり込みの際は俺が勝手に横で声を出して教える

と言う回りくどい方法を取った程だ

何でここまで意地をはるのか俺には心辺りはない 嫌われている

ならいざ知らずだ

俺を労わるという意味でだ 事故の事だとしてもだ

五月自身からそこまでされる理由にはならない あの時にこいつ

はいない 俺と五月とが再会したのは……

あの食堂での相席でのやり取りだ……

ただまあ……これからは俺からの教えも素直に受け取ると話す

不安要素も消えた事が分かる

風太郎が見れない時に俺が教える際に『いえいえ結構です』と来た

意味が全くない状況になりかねなかった

それに五月は『否定したくない』そう言った

本当にこいつは俺の事何処まで知ってんだろ？な心配してくれ
のは良いけど少しは自重してくれ

「そうです かあああ！ いっ」

「コータロー ここも教えて」

「なら 抓らんでも良いだろう 声をかけろ」

「朴念仁のコータローには言っても分からない 五月以外も分からな
いんだよ」

「別に五月を優遇はしてねえーぞ」

「本当にコータローは何も分かってない」

「はあ？ 別にこの問題くらい 俺はわかるぞ」

「ああ うん コータローくんは黙っていようか」

「一花まで一体どう意味だよ」

「お兄さん ここは黙っていた方がいいですよ」

「おい 風太郎助けてくれ」

「ダメだ 俺にはそこに踏み入る自信はない」

突然三玖に抓られたと思えば 俺が何も分からないと言いだしま
スツと膨れる

一花や四葉まで俺にはこれ以上話すなど言いだしてきた

風太郎に助けを求めても 白旗を上げており 今は一花の下した
作戦を優先すると兄は見捨てる

朴念仁とはつまり 愛想がなかったり 分からず屋と言う意味だ

何故それが今の俺に飛んでくる

ただ 勉強中だ話声が多すぎると妨げになるだろう 二乃から凄
く睨まれている

ここは一花達の言葉に従い静かにするか……ヘイト集め任せたぞ

風太郎

(今なら 俺が共通の敵になるのでは?)

(たぶん 三玖はそうは思ってますよお兄さん でも今は黙りま
しょうか)

「おいおい！ まだそれだけしか課題終わってねーのかよ！」

『!!』

「と言っても半人前のお前らは課題を終わらせるだけじゃけどな あ! 違った!」

半人前じゃなくて 五分の一人前か! ハハハハハ!

(なんだか生き生きしてない?)

(余程鬱憤溜まってたんだろうな)

自分ではそんな事したくない 仕方ないと言っておきながら彼は堂々と言つてのけた

五つ子の無理難題に彼なりに付き合っていたがやはり 相当来ていたようだ

ストレス発散もあるだろうが 本音が九割だろうな

ごめんな風太郎 気づいてやれなくて その顔はとても清々しいものだった

二乃や三玖だけじゃない 一花達まで自分が言われているような気分で見えている

「言われずとももう終わってるわ ほら!」

「……ん? そこテスト範囲じゃないぞ」

「あれえ!?!」

彼の言葉に驚きはするも別段怒る素振りは見せず

自分のノートを自信満々に風太郎に見せる二乃だが

良く見れば彼女がやっている箇所は以前のテストでの範囲であり

期末試験での範囲ではない所で 風太郎もそれに気づいたのか彼女に間違えていると指摘する

焦った二乃は、自分の書いたノートを何度も見直す 『げっ』と言う声を出すどうやら気づいたようで目線をノートから逸らせば、表情をかえる

「二乃 やるなら真面目にやって」

「……っ こんな退屈な事…真面目に やってられないわ! 部屋でやってるからほっといて!」

「おっおい!」

三玖に指摘された事が効いたのか、それとも三玖に言われた事が癪に障ったのか

バツの悪そうな顔をすれば自分のノートを持ってそのまま階段の方へと向かってしまう

この状況で俺も黙っている程愚かではない 二乃を止めなければ
あいつを一人にしてはおけない……。

『無駄にしたか』と落ち込む風太郎に俺と五月は声をかける

所詮俺は補佐にしか過ぎない 彼女と向き合うには風太郎の力も必要だ

『お手本になるんでしょ？ 頼りにしています』と励ましの声も彼は受け取った

「二乃 もう少し 残れよ あいつらと喧嘩するのは嫌だろう ただ
でさえお前は出遅れてるんだ

四人にしっかりと追いつこうぜ」

「二乃 戻ろう 話を聞いてくれるだけでも良いから 頼む」

俺と風太郎の説得を聞き 歩みを止める

そしてこちらに振り向く その視線はとても穏やかな物ではない
……。

「うるさいわね 何も知らないくせに とやかく言われる筋合いはな
いわよ

あんたなんかただの雇われ家庭教師

それにあんたにだけは言われたくない 大事な時に消えたくせに
何よ補佐とか

アンタ達なんか 部外者よ！」

「……………」

「……………」

俺達は声が出なかった

忘れていた 俺達は部外者に過ぎない それに彼女の言う通りだ
俺は彼女達が俺を必要とした時に逃げた 怖くなって姿を消して

それを無かった事にしていた

昔の記憶を彼女は思い出したのだろう。それ故に今の俺が憎いのだ……………。

『何で コウにいいはないの？ 何でいてくれないの？ 何処にいるの？』

ごめんな 二乃俺は本当にダメな兄貴だ……………。

肩を落とす俺の横を誰かが通り過ぎる

隣を見ればそこには、三玖がいた。俺と風太郎が作った問題集を片手に二乃をじーつと見つめる

「受け取って」

「こんなもの いらないわー!」

二乃は払う様に三玖の退かす

同時に彼女が持っていた問題集は辺りに散らばり 二乃自身も声をあげるが

意地なのだろう けして拾おうとはしない

この空気はいけない 二人を止めなければ取り返しのつかない事になる

「ね ねえ二人とも落ち着つこ?」

「そうだお前ら……………」

「二乃も今は部屋に戻ってていい 三玖も席に戻れ」

「二乃 拾って」

「こんな紙切れに騙されてんじやないわよ 今日だって遅刻したじやない こんななもの渡して……………」

いい加減なのよ それで教えるつもりなら大間違いよ 何が助けるよ 嘘つき」

「二乃!」

ビリ…

「こんなもの!」

二乃は三玖が拾い上げた問題集の一部をその場で破り捨てる

彼女の表情は怒りというよりも何処か悲しさを訴えるものだった

「気にするな これくらい何時でも作れる。だから……………」

「そうだ 俺達の事は」

破り捨てられたそれを拾い上げようと姿勢を低くした…、

バシツと言う音が響く

俺達が間に入る前に 誰かが二乃の前まで動き 彼女の頬をビンタした

「二乃……………謝ってください!」

二乃を叩いたのは驚く事に 彼女 中野五月だった

その顔は普段見せる優しい顔でも俺に怒られて浮かべるしよぼくれた顔でもない

静かな怒りを表していた……………。

第四十八話 不良少年と二と五の家出

今朝の事だ 俺と風太郎は三玖からの呼び出しを受け

中野姉妹のマンションへと向かった

走って向かえば出入口前が見え その前で三玖が既に待機しており

何処か沈んだ顔でその場に立ち尽くす

「三玖」

「よう 三玖何があったか説明してくれ」

「ごめん 日曜日なのに呼び出して」

「他の四人はどうした あれから何があったんだ？」

「その様子からだいたい察せれる…話してくれ」

コクリと頷く

そう昨日起きたあの騒動は、まだ終わっていない
延長戦として未だに解決もしていなかったのだ……………。

全ては昨日起きた

五月が二乃をぶったところまで時間を巻き戻す

彼女が叩いた後だ パシンと再び乾いた音がした

二乃が五月の頬をはたき返していた

「五月……………急に何を!!」

「この問題集は上杉君と幸太郎君が 私達のために作ってくれたもの
です 決して粗末に扱っていないものではありません 二人に

謝罪を」

俺はこんな五月の顔を知らない 頭に来ていると言うには冷静だ
そしてとても冷めた瞳で二乃を睨む

彼女の発する圧はとて年下の子が発してるものとは思えない

一瞬だが二乃も気押されたじろぐもぎつと奥歯を噛み 五月を睨み返す

「あんた………何時も何時も幸太郎 幸太郎ってうるさいのよ
それでまんまと口車に乗せられたってわけ！ そんな紙切れに熱
くなつちやつてさ」

「ただの紙切れじゃない よく見て」
「はっ」

ダメだ このままだと本当にこいつらの仲は最悪なままになる
楽しくそして笑顔で勉強させる その筈だったんだ 俺達がいけ
ないんだ

二乃の意見は正しい 家庭教師である風太郎と補佐である俺が立
ち入った事で

状況を悪化させただけに過ぎない………。

「二乃が正しい 俺達が悪い」

「あなたは黙ってください………あっ………」

彼等はプリンターもコピー機も持っていません 本当に呆れま
した

一字一句 全部 手書きなんです」

初めて五月に本気で怒られた

一度我に返るが、彼女は言葉を続けた これはただの紙切れではな
いと

そうだ これは俺達が手書きで教科書や教材から必要な箇所を書
き写した今回のテスト勉強用だ

最初こそ 勉強に参加する事を拒んでいた五月だが何時しか彼女
自身……。俺達が思っていた以上に真剣に向き合ってくれていたんだ

だから二乃が、これを破り捨てる事が許せないんだ 本当に何処ま
でも優しく不器用な奴だ……。

「だから 何よ！」

「私達も真剣に取り組むべきです 上杉君や幸太郎君に負けないう
に」

「私だって………」

「二乃………」

「いい加減受け入れて」

「わかったわわ……あんたたちは 私よりも こいつ等を選ぶわけね」

「二乃 それはやめろ 早まるな 頼む……それは口に出すな」
「うるさい こんな家出てってやる」

俺の忠告は無視され 二乃はその言葉を言い切った

流星に想定外だったのだろう 五月も驚きを隠せない表情で二乃を制止する

風太郎も止めに入るが聞き入れない

「前から考えていたことよ この家は私を腐らせる」

「に 二乃っ こんなのお母さんは悲しみます やめましょう！」

「未練がましく母親の代わりを演じるのはやめなさいよ！」

「やめろ 二乃」

「うるさい 逃げたあんたに何が分かるのよ！ 裏切り者」

「っ……………」

俺が五月を邪険に扱うもそれでいて 彼女に嫌な気分を覚えなかったのは……

彼女が死んだ母親 零奈さんを演じていたからだ

二乃がそれを指摘した事で俺もそれを理解した

不自然なまでの敬語と丁寧語どんな時にもそれを崩さない姿勢はまさにあの人だ

でもその姿は 二乃にはただの真似事にしか見えず それがとても見苦しかったのか……

誰も言わないのなら 自分が言ってやろうと 彼女は事実を突き付けた……………」

そうだ 俺が最後に会った時

五月は『こうくん お母さんのお葬式に来てくれてありがとうございました。』

自分を押し殺しとしても見ていられない姿だった……………」

だから俺は逃げ出したんだ 苦しむあの子を見ていられないと

そして 五月だけではない その逃げ出した俺本人も二乃は『裏切り者』と言い放つ

彼女からすれば、いや事実だ　ずっとそばにいる絶対に泣かせないと約束をした

けど実際　俺は何も出来ず　ただ今の彼女達をかき乱したただけだ………。

助けて欲しいと俺を見る　二乃の前から俺は去った　本当に裏切り者さ

でも今は落ち込んでいる暇はない　後悔なんて後で一人でやっていればいい

二乃を止めなければ　今の俺が出来るせめてもの償いだ

「二乃早まらないで」

「そうそう話し合おうよ」

「話し合いですって？　先に手を出したのはあっちよ

あんなドメステイックバイオレンス肉まんおぼけとは一緒にいられないわ！」

「ド……ドメ　肉………」

手を出したなら向こうが悪い　話し合いの余地はないと五月を非難し

彼女を指させば、ドメステイックバイオレンス肉まんおぼけと物凄い表現で彼女を言い表した

先ほど狼狽えていた五月だが、冷静さをなくし　声を荒げ怒りだす

「そんなにお邪魔なようなら私が出て行きます！」

「あっそう！　勝手にすれば？」

「もーなんでそうなるのよー!!」

「ど　どうすれば」

その状況をいさめようにも解決の糸口は見つからず

おろおろとする風太郎に最早語ることは何もないといった感じで見守る三玖

暫くし一度は冷静さを取り戻した二乃は『ばかばかばか』と連呼し

自分の部屋へと戻り

俺と風太郎は『今日は悪かった』と彼女達に謝罪の言葉を入れればその日は解散した

去り際に五月が『怒鳴るような事を言ってしまった』と頭を下げたが

彼女が謝る事はない 俺達がもつとうまくやっていたらこうはならなかったのだから……………」。

そして翌朝だ

俺達の元に三玖からの電話が届く

『ごめん 今すぐ来て欲しい』と何処か慌ただしいものだった

昨日の今日だ 俺達はすぐにマンションへと向かい

冒頭へと戻る

部屋へと招かれ事情を聞けば

再び些細な事で二乃と五月は衝突し大喧嘩

二乃は宣言通りに家出を実行し 何と五月も家出をしてしまったのだ

確かに彼女も『出て行きますよ』とは述べていたがまさかそれを本当にやってしまうとは

子供の喧嘩ならいざ知らず 高校2年での大喧嘩だ まだまだ子供と勘ぐっていたがどうも…。

そこまで単純な物ではない 姉妹感でのトラブルとは総じて簡単に解決できるものではないだろう

あの意地の張り合いだ 二人は自分の意思を曲げる気はないと頑固一徹…。四葉と一花の説得も効果は見込めないと三玖は肩を落とす

彼女が見せたラインには『もう連絡してこないで』と二乃から届いている

「馬鹿やろうが……………で その二人は？」

「外せない用事があるって 一花は仕事だと思う」

「こんな時に……………試験勉強はどうするつもりだ……………昨日まで一緒だったのに……………」

「……………うん こんなに部屋が広いと感じたのは久しぶり」

「こういうことはよくあるのか？」

「姉妹だもん珍しくない でも今回は今までと少し違う気がする」
「確かに 少しの言い合いはあれど あの二人のやり取りは……………」
「くった」

「コータローは悪く無い 誰も悪く無いから そんな顔はしないで」
二乃と五月の小競り合い

俺は、彼女達がここまで大きな喧嘩する姿を多くは見た事はない。
合ったとしてもちよつとした言い合い程度だ

それでも翌日には姉妹の仲は元通りに『私達は 五つ子だもん』と
あの言葉で終わるっている

けど今回は三玖が言う通り何かが違う

軽い叩き合いが起こり最終的には二人は家を飛び出した

普段は冷静な五月も余程頭に血が上っていたのだろう 二乃より
も先に出て行ったそうさ

五月の喧嘩 その状況はあれを思い起こさせる

三玖が落ち込む理由はそこから来ている…。

彼女もかつて五月と軽い小競り合いを起こし 三玖は飛び出し
俺とばったり遭遇していた

あの後どうなったか、病院に運ばれた時の俺には記憶がないから確
認する事もしなかった

ただ 学園で再会した日には4人と普通に遭遇しており仲直りは
出来たと思った

「三玖 安心しろ あんな事は起きねえよ」

「うん もうあんな事はたくさんだから……………」

「ん?……………」ともかく五月と二乃を捜そう」

「二乃と仲の良い友達なら知ってる五月は?」

「五月は……………」あいつとクラスでつるんでは お前だろ?」

「ああ 俺だな ダメだ アイツから何も連絡がない」
「……………」

無言はやめて欲しい それはそれで深く傷つくから…。

二人を捜索する中で重要なのは彼女達が誰と仲が良いかという事
だ

家出となれば きっと仲の良い友人の所で世話になっている可能性もあるし何かしら聞いている筈だ

二乃が良く話す友人を三玖は知ると話すが

五月はどうかとなれば 風太郎は俺を指さす

四六時中 アイツは俺を追いかけまわしている そりや俺だろうけどスマホを見てもそれらしい連絡は着ていない…。

こうなれば頼りになるのは自分の足だ

何処でもいい あの二人が行きそうな場所を手あたり次第に探す作戦とも言えないお粗末なもんだけどな

「も……………もう疲れた」

「まだ 一時間も経ってねえぞ」

「お前と一緒に……………はあ するな こっちは体力無しなんだからな」

「コータローが……………元気があり過ぎる……………仕方ない この手は使いたくなかったけど」

『?』

二乃が行きそうな場所を先ずは搜索と

街の方まで走って向かい 聞き込みをするが、数分も経てば三玖と風太郎は体力の底が尽き

壁に寄りかかり 一時休憩をとる

普段からバイト尽くしの俺ははまだ元気が有り余っており その場で足踏み

『見ていて疲れる 止まってろ』と風太郎に言われる

このまま待っていても状況は変わらないと判断した三玖は

本人曰く禁じ手と言い 歩く人々の方へ向かうと『すみませーん』と声をあげる

「こんな顔の人 見ませんでしたか?」

『五つ子ってなんて便利なんでしょう』

顔は見えないが、きつと二乃の顔真似をしているのだ、

三玖はこれをする事で、彼女が居るであろう場所を絞り込むつもりでいる

ざわざわとする中で 一人の女性が声をだした

『私の泊まつてるホテルで見た顔だわ』

「それだ」

「二乃はそこか！」

何たる幸運だろうか、三玖の頑張りもあり無事に二乃の行先を俺達
は知る事が出来た

女性にその場所を聞きお礼を述べ 俺達はそこまで全速前進と
……………いう訳にも行かず

「タクシーで行こう」

「流石に走る気力は無い」

「あっはい」

三玖はタクシーを止めれば三人で乗り込み今度こそ二乃が居るで
あろう

ホテルへと向かった

行先まではそう遠くはない

少し車を走らせればすぐに目的の場所が見えてくる

近場で降りれば、三玖はカードで支払いを済ませ

フロントに向かう その前にと三玖は一度 髪型を変え 受付に
声をかけた

暫くすれば三玖を鍵を受け取り 後方で待機する俺達にこつちに
来るよう指示

部屋はこのホテルの最上階とまたとんでもない所を借りているな
と苦笑い

エレベーターに乗り込み 三人で作戦会議 二乃とは喧嘩をせず
穏便に事を済ませる方針で行こう

二人もそれに頷いてくれる 先ずは謝罪が大事だ

あいつの気持ちをもう少し尊重してやるべきだった 無意識のう
ちに勉強を重点に物事を考えていた

こんな事では笑顔で勉強なんて夢のまた夢 良い思い出で卒業さ
せるなんて幻とかすだろう

そうはならないように今度こそ間違わない……………。

「な……………なんであんたたち　つて鍵は……………」

「部屋に鍵を忘れたつて言ったら　貸してくれた」

「ガバガバセキュリティー」

部屋に入れば最初に見たのは　顔にパツクをしのんびりと寛ぐ二乃の姿だ

俺達に気づけば一気に表現を変え持っていた雑誌を下に落とす

本当に心配していたんだけど……………何だろ何故か納得できない……………。

早速と声を出す二乃だが、三玖も謝罪の言葉を述べようと歩み寄る

「二乃　昨日のことは……………」

「出てつて！　私たちはもう赤の他人よ！」

「あつ」

「うぐー！」

「せっかく来たんだお茶でもだしてくれよ」

「そうだぞ　折角なんだ　話だけでもさ」

「お断りよー！」

一気にこちらまで詰め寄れば部屋の外まで俺達を追い出す

そのまま扉が閉まるが　咄嗟に俺と風太郎は割つて入り　腕を代償に締め出される事ん阻止した

結構痛いが、こんくらい安いもんさ

うぐぐぐぐと扉に力を入れ始める二乃に男二人で対抗ロール　以

前とは逆でそれも2体1で互角

五月といい二乃といいパワフルな姉妹だよ

「二乃……………どうしたんだ　お前は誰よりもあいつらが好きで　あの家が好きだったはずだ」

この話を聞いたのは俺で風太郎はその場にはいなかった

ただ昨日の一件でどうして二乃が必死になるのか　俺が彼女の本音を聞いているのを知っていた

彼はその理由を尋ねた　これは大つぴらに言う事ではないけど

彼女と風太郎が向き合う中で大事な事だ彼にも知る権利があるだ

ろう

その話を聞けば『なるほど 要件は分かった』とすんなり受け入れた

当然二乃は驚くが、今はそんな事はどうでもいいとばかりに更に扉に力を入れる

いい加減感覚がなくなって来たんだけど……………。

「知ったような口をきかないでって言ったでしょ あんたまで……………」

こうなったのは全部あんたたちのせいよ あんたたちなん

て来なければよかったのに」

それが今の二乃の本心なんだ やはり姉妹が大好きで あの家が大事だ

繊細でも怒りっぽいでもそれは全て姉妹の為にその役を自分でやっていた

けどそれもいい加減限界に来ていたんだ 何をやっても 上手く行かず

気づけば自分以外 全員 それを当たり前として受け入れていた

『嫌われてもかまわない』と俺に宣言もして来た 俺はそれを真つ正面から迎え撃つと宣言

実際に彼女は三玖と言い争う 五月には叩かれ 仲違い

自分は何の為に頑張って来たんだろうと彼女は心が擦り減ってしまった

『この家は腐らせる』とはまさしくその通りだ……………。

扉越しに出ている 風太郎の手首を見れば そこにはらいから風太郎に送られたそれがあった

だが 二乃からすればそんな事情知らない これはキンタローから二乃が貰い

林間学校最終日の日に二乃が風太郎に託していたものだ

だけど もうそんな事はどうでもいいとばかりに風太郎から奪い取り

更に声を荒げる

「あんたたち兄弟じゃなくて キンタロー君が家庭教師だったらよかつたのに 彼はどこにいるの

会わせなさいよ!」

「それは……………できない」

「ならもう……………」

「二乃 いいから聞いてくれ!」

「あんたもうるさい いい加減兄貴ずらするのはやめて! あんたなんか あんたなんか

コウに何かじゃない! この馬鹿!」

「二乃俺は…………お前にもう一度」

「…………すみません 部屋の中にヤバイ奴らがいるんですけど」

風太郎は彼と会わせる事を拒み

そして俺は二乃ともう一度あの頃のように話そうと向かうが

『あんたなんかコウに何かじゃない』と遂に言われてしまった

同時に扉にかかっていた力は急になくなり 部屋に入る事が出来たが二乃はフロントに電話をかけ

『一時撤退』と三玖の指示に従い 俺達は部屋を去って行く

残された二乃の姿を俺は一度見ればすぐに前を振り返る 『ごめんな』と小さくもらす

(バカ……………本当に何で謝るのよ)

そこから俺達は一度マンションまで戻るが結局

五月は戻っておらず今日の搜索はここで打ち切りとして一度解散する事になった

「コータロー 二乃は本心で言っていない だから落ち込まないでフータローも」

「ああ 分かっている 三玖…。ごめんなこんな時に一人にさせて」

「もう少ししたら二人も帰ってくるから大丈夫 じゃまた明日」
「またな」

三玖の励ましの言葉は今の俺を助けるには十分過ぎる程だ

言われた時は頭が真っ白になって一瞬思考が止まっていた程だ

風太郎は五月なら大丈夫だろうと言うが三玖が解散する前に重要な事を教えてくれた

昨日出て行く際に 五月は二乃と違い 何も持たずに家を出ている為

下手をしたら野宿を強いられる可能性すらあると

結構重要な事だが、ただでさへ喧嘩が起きて三玖自身も参っているんだ

言うのを忘れていても責められはしない

風太郎なりに五月を心配し『腹空かせてんだろうな』と口に出す

最近はめつきり喧嘩も減っているし それさへ聞ければ俺も安心できる

五月の野宿とは俺も心配だが、連絡を取りたくてもアイツのスマホは電源が切れているのか繋がらない

ただ朝からずっと真弓ちゃんから電話が着ていたんだが二乃との一件で出る暇もなく

これ以上出ないのも彼女に心配をかけてしまうと俺は番号にかけ直す……。

「もしもし 真弓ちゃんどうしたんだ？」

「ああー 先輩やつと繋がった……。あの先輩今から私の家に来てくれませんか！」

「えっ……。俺も今は忙しいんですけど」

「お願いします 迷惑なのはわかってはいるんですが この件は先輩にしかお願い出来ないんです！」

「はあ……。わかった 今から向かう……。須藤はいるのか」

「兄は今出かけているので……。暫くは戻って来ませんから安心してください」

「あいつと鉢合わせはしたくないからな Ok了解だ」

須藤真弓はとても焦っていた

兄と同じく重要な事を電話では伝えないのがあの兄妹の悪い癖だろう

やはり似ているんだな 容姿は全く違うんだけどな……………。

「急用ができた 風太郎先に帰っていてくれ」

「お おう お前も無理はするなよ！」

一旦風太郎とは別行動を取り

須藤真弓の家の方向へと足を向け走って向かう事に

昨日今日色々起きていたどうも頭が追い付かん……………。

二乃の発言が今も刺さっているが、次に会う時はもっとあいつに寄り添って話し合うべきだ……………。

第四十九話 不良少年と末っ子お泊り

見慣れた住宅街 その先 何件か向かった処にその家はある
須藤和之と須藤真弓が住んでいる二階建ての住宅だ

庭も広く 昔は良く 和之や坂下 そして俺の三人で遊んでいた
その頃からだ 坂下の運動センスは須藤も関心する程で俺も見て
いるだけで

勝てる気はしないと実感させられていた

思い出にふける俺ではあるが、彼女からの呼び出しは忘れていない
玄関前まで行くと一旦 息を整え 恐る恐るチャイムを鳴らす
できる事なら須藤には会いませんようにとお祈りし

扉は開かれるのを待つ すると中から『はい』と聞きなれた声が
し

俺は一瞬自分の耳を疑った……。

ガチャリと扉が開き 中から出て来たのは 須藤でも真弓ちゃん
でもない

「こんばん……」

「なーーんで お前がいるんだ 五月!」

「つて 幸太郎君 あれ 何でここがわかつたんですか!?!」

あわわと焦りだし アホ毛も左右に動く
目もこちらに合わせようとはせずそっぽを向く

中野五月が昨日の見た時と同じ私服で須藤の家から現れた

「手間が省けたな 帰るぞ五月!」

「嫌です 断固拒否します!」

「うるせー どれだけ三玖が心配してると思ってたんだよ」

「今回ばかりは二乃が折れるまで帰りません」

「うわー面倒だ」

「私は 帰りません絶対です」

この頑固さ もっと勉強の方に生かして欲しいんだけど

まあ 見ていて安心できるし これが 今の 五月という人間な
んだ

俺も二乃だけではなく 五月の事ももう少し気に掛けるべきだったな

こいつなら大丈夫だろうと勝手に思い込んでいたんだ…。

今は少しでも気持ちを整理する時間が彼女には必要なのかも知れない…。五月に『悪かった』と言い ぽんと頭に手を乗せる

彼女も『私こそ何も相談せずすみません』と謝ってくれた

これで一応は五月の居場所もわかった けどそれだけだ

問題は何も解決していない 何故か須藤の家で平然と居座り普通にインターホンに対応してるのか

まじでなんているんだと 頭を傾げれば 家の中からまた別の声が聞こえる

「先輩 どうもです」

「真弓ちゃん 悪かったな 五月が世話になったみたいで」

「いえいえ 昨日偶然帰り際に見かけたので この時期に外は危険ですから」

「出来た後輩だよ 俺も鼻が高いね」

エプロン姿の真弓ちゃんどうやら夕食を作っていた最中

彼女は俺が五月を連れて行こうとすれば何処か安心した表情だ

後輩曰く 昨日のバイト帰りにベンチでうずくまる五月を発見し

そのまま放置するのは顔見知りとして 須藤の人間としては捨て置けないと言い

彼女を連れ家まで帰宅したとのこと…。まったくこの末っ子は

「うう……すみません」

「それで こいつを引き取ってくれて事か？」

「そんな 犬みたいな扱い！」

「家出少女が 真弓ちゃんがいなかったらどうなっていたか 心配させんなよ」

「心配してくれたんですか」

「当たり前だ！ 三玖からお前が財布もなしと聞いてどれだけ焦ったか

たく スマホも電源切りやがって」

「待つてくださいい 本当だ 着信40件 迷惑電話ですか」

「うるせー 何度かけてもお前が出ないからだ」

「それを言うなら私も何ですけどね 先輩」

五月は閉まっていたスマホを確認何故電源を切っていたのか理由は明白だ

他の姉妹との連絡を遮断する事で自分の覚悟を見せる為

早速と中を見れば、俺からの電話とメールが大量に押し寄せ

真顔でそれを見せてくる 誰のせいだと思っただろうな

五月に食って掛かる前に 真弓ちゃんがしくしくとわざとらしく

自分のスマホを見せる そこには俺への電話がことごとく無視されている。証拠を突き出してくる

「あつ うん悪かった まさか用事がこれと思わず後回しにしていた…本当にごめん」

「そんな先輩は嫌いです」

「後輩からの好感度が下がったぞ」

「幸太郎君がいけないとって 痛いです」

「だーれのせいだと思っただー！」

「まあ 冗談ですよ 先輩を嫌いになる理由なんて私にはありませんから」

「真弓ちゃんは何だかんだ 俺を弄ぶよな 将来が怖いわ」
「ふふふ」

五月の頭を軽くチョップ

頭を抑えるが別に力を入れてない 痛がる素振りやめろ

真弓ちゃんも俺で遊ぶのはいいい加減やめて欲しい

「それで 真弓ちゃん これを持って帰ればいいんだよな」

「はい 私もバイトですし 今両親も仕事でいないんです 家には兄だけで来年には大学です」

「そうだよな そんな時に見ず知らずの女子生徒がいればあいつにも迷惑がかかるしな」

「五月さんも家には帰りたくないと言うので先輩に相談してみればと言ったんですが」

須藤は来年には大学生だ それに彼女の両親は暫く家にはいないらしく

今の須藤は妹には気づかれてないと思っているが

大学の事で少し神経質になっており これ以上兄に迷惑をかけるのは彼女も本位ではないと考え

俺への連絡をした 真弓ちゃんだって期末試験の勉強もしないと行けない時に

五月の面倒を見てくれるとは頼りになる後輩だ

その世話になった 五月本人だが、やはり俺の世話にはなりたくないとまだ意地を貫き通すつもりだいい加減諦めろ…。

「幸太郎君の迷惑にはなりたくないんです そうです 何処かホテルに泊まります！」

「お金はあるのか？」

「うう……私としましたことが忘れていました」

「先輩の事情は知っていますけど 今頼れるのは先輩だけなので五月さんを任せても大丈夫ですか？」

「今さら一人増えても変わらん それに俺も今日はいないしな」

「幸太郎君 今日はいないんですか？」

「バイトだよバイト」

「先輩もお忙しい中すみません あのこれ家で作ったおかず何ですけどもし良かったらー五月さん 兄みたいにいっぱい食べるので」

「須藤さん 言わないでください」

「今更だろ それに俺は気にしない お前が食う姿は好きだって言うたろ？」

「先輩？ そう言うの勘違いされるので…はあ

五月さんや三玖さん以外にはやらないようにしてくださいね とても悪質ですから」

「笑顔で毒を吐くのやめて欲しいな 悲しくなる って何で三玖まで出てくるんだ？」

最近の後輩はやたら当たりが強く感じるんだが俺の気のせいだろうか？

五月も黙ったまま口をパクパクさせてるし 金魚かお前は俺の調子を見れば腰に手を当て 何度もため息をもらす真弓ちゃん

本当に何が言いたいんだ？

「はあ……これは難敵ですね お二人も大変でしょう？」

「須藤さん 私は別に それに昨日の事はあくまでも 私の話ではないですから」

「はい そう言う事にしておきます」

「あまりこう言う事男が聞く事じゃないけどさ お前着替えはあるのか」

「先輩 セクハラですよ」

「だから事前に言っただろう」

「一文無しで スマホのみです……」

「真弓ちゃんの服借りなかったのか」

「少し小さめだったので」

「……」

何かプツリと切れる音がした

前を向けば普段から笑顔を絶やさない真弓ちゃんから笑顔を浮かんでいるが、様子もおかしい にやりと笑えばこちらに歩み寄り持っていたタッパーを俺につきだす

どうやら地雷を踏んじまった……やべ

「うー……ん / / / 五月さんが太いんですよ! …… 私は別に小さくありませんよ!」

「あつ あの真弓ちゃん……あの」

「何ですか……。やっぱり先輩は大きな方が好きなんですか!!」

そうりやそうですね……。坂下先輩も大きかったですしね」

「あいつは今関係ないだろう……。うんまあ……。悩む事はないよ 誰しも成長期つてものがあるし」

「そ　そうですよ　須藤さん　私も元から大きいわけではなくです
ね」

「もー　／＼／＼良いです！…。では先輩　五月さんを任せましたよ
さようなら！」

バタンと扉を閉めると俺と五月だけが玄関前で取り残され

『ええ』と声がシンクロする

「はあ……帰るぞ」

「でも私は　家に帰る訳には…。」

「だから俺の家だって言ってるんだろう　野宿はさせねえぞ」

「しかし　幸太郎君の家にご厄介になるのは気がひけます」

「今はそんな事はどうでも良い…。真弓ちゃんからも頼まれたし…。

拒否権はなしだ…。それと待ってる　家にだけは連絡入れておく…。

もしもし　俺だ　うん一人泊まれるか？ああ　そうか分かった　あ

りがとならないは　よし了解は取れたぞ」

「はや！　そんなあつさりの良いんですか？」

「まあ　女の子泊まらせる訳だしな　安心しろ　お前を優先するから

よ」

「そう言う問題ではなく……うう」

「それと　三玖達にも確保した事だけでも知らせないとな」

「三玖に言うんですか……」

「帰れないって言うだけだろ　別に疚しい事は何もねえだろ？」

「……………」

このままここで立っていても近くの家から怪しまれるだけだ

五月は納得出来ないようだけど　こいつを外に放って自分だけ帰

るの何て俺はしない

外で一人で考え込む事もさせる訳にはいかない

それこそ何をしでかすか分からんぞ　家にいる妹に連絡すれば二

つ返事でO?を貰えた…。

勇也さんも大歓迎と言っており　『ええー』と風太郎のぼやく声も
聞こえてくるが我慢しろ

その後すぐに三玖に連絡を入れる

「三玖か……。ああ 一応は確保したぞ 暫くは帰れないそうだ」

『そう……。わかった五月の傍に居てあげて』

「お前も心配だろうけど任せておけ 風太郎もいるんだ それと三玖 俺はお前を頼りにしてる

それだけは忘れんな」

『分かった コータローに任せた 一花と四葉には私から連絡する』

「了解じゃ おやすみ三玖」

『おやすみコータロー 今日はお疲れ様でした』

思う所はあるだろうけど 追及はせず一任してくれた

他の姉妹はここを知らないならば彼女の居場所を伝えてもここま
で来ることはないだろう

三玖達にも考える時間や整理する気持ちもあるだろうならばそれ
が出来るように俺はするだけだ

「いくぞ」

「三玖は私があなたの家に泊まる事を許可しましたか？」

「してないって言えば」

「私は……………」

「一任された 任せると お前の傍に今は居ろとな」

「それは本当ですか？」

「本当だ だから落ち着け それと二人にもそれとなく連絡すると
さ」

「分かりました 彼女達がそう言うのなら……………ん？ 幸太郎君
その手どうしたんですか」

二乃との扉で起きた合戦の最中に挟まれた左手は微かに痕がつい
ており

五月は先ほどより真剣な面持ちで これが出来た原因を聞いて来
る

『二乃とのやり取りで出来た傷』とは口が裂けても言えない

過保護な妹は何をしでかすか分かったもんじゃないしな

「あつ 痕ついてるな まあ良いか……」

「良くありません あなたの手は！」

「お前が何処まで知っているのか何故それを言わないのか、

俺は聞かないでも 俺の手はもう大丈夫だ」

「……………わかりました…。でも帰ったらちやんと治療してくださいね」

「はいよ みんなが待つてるしな」

「今日はお世話になります 幸太郎君」

やっと帰宅を始めようと足を一歩動かしたは良いが

ある問題があった 寝泊まりする所はある 服も俺や風太郎が着ているジャージを貸せば良いだろう

だが 服の下はどうすれば良いだろうか？ 今さら真弓ちゃんに貸してとか死んでも言えないし

その為だけに帰れば五月の覚悟とは何だったのかと……………。

まあ…本人はそこまで考えて行動してるとは思えない 感情任せに家を飛び出した訳だしな

財布の中を確認すれば、それなりには入ってはいるし それくらいは足りる筈だろう…。

「でも その前に コンビニでもよるか お前には適当に服を貸すからそれを着てろ」

「ええええええ 良いんですか こ 幸太郎君の服を私が着ても」

「別に減るもんじゃないしな 服はいい 中身はどうする」

「あつ 下着がって 何を言わせるんですか／＼ 幸太郎君 相手でも怒りますよ」

「自覚はしてる らいはのは無理だろうし コンビニで代用品買ってこい」

「お金がありません」

「それくらい 俺が持つ 拒否権はねーから？」

「あう……………」

こいつが俺の世話にはなりたくないと言うのはここ数か月で嫌という程分かつている

素直に聞いたのは初めての授業くらい

でも偶には俺にも力にならせてほしい　そうでなくとも今回は俺達兄弟にも責任がある…。

「今は俺に甘えてろ」

「どうして　そこまでしてくれましたか？」

「ブーメラン刺さってるぞ　お前もそうだろう」

「私は特に何もしてません」

「なら　俺も同じだ」

「解せませんね」

「俺の台詞だよ　それは……………」

大型のブーメランが刺さる五月を連れて俺は近場のコンビニへと入って行く

流星にそれをまじまじと見る程俺も人間性を欠いていない財布を渡せば五月に好きにするよう言う

『財布』と……………少しは危機感を抱いても良いんですよ？』

こいつが持ち逃げするとは俺には思えないし　そんな度胸があればこんな事自体起きない

『さつきとしろー』と言えば、何着が選び直ぐにレジに向かう

暫くすればこちらにやって来た…。

「あつ…ありがとうございます」

「へいへい」

顔を赤らめながら俺に財布を返しそのまま何も言わず歩いて行ってしまふ

お前は方向音痴なんだから軽率に動こうとするな…。

「布団敷くだけの形になるけど　それは我慢しろよな」

「幸太郎君　知っていてそんな意地悪言うんですから」

「一応言っておくだけだー…。」

「忠告感謝します　でもあなたも知っているでしょう　私達がどんな生活をしていたのか」

「覚えてるさ お前も大変だったろう ごめんなそんな時に」
「良いんです 幸太郎君も母の事がショックだった事を私は知っています

あなたもずっと泣いていましたから」

「それしか俺には出来ないからな……………」

葬式の際に俺は泣く事しか出来ずにいた

自分の無力さを痛感する中

当時の五月は涙を流しながら『ありがとうございました。』と俺に言うんだ

俺の知る 五月はいいのだと勝手に思い込んで逃げた

だけど 話していてわかる 例え彼女を真似していても五月は五月だ

「母の事を思ってくれるだけで良いですよ」

「俺が最後に見た お前は まるで零奈さんだったよ」

「私が代わりになって姉妹を導こうと決めたんです……………幸太郎君を混乱させてしまいましたね」

「まあ多少なりとな……………」

「でも 上手くは行きませんでした 本当に頼りないです」

きつと 二乃に手を出した理由もそれだ

彼女なりに母である零奈さん演じていた故に出たのだろう

本当に真面目で馬鹿不器用だ それでここまで大事になるとは彼女も思ってもいなかった

自分の不甲斐なさを痛感し肩を落とす

それが今の五月なんだろう 俺にはそれを否定する事はできない

俺も彼女と同じだ 俺は兄という役割を捨て 勇也さんの代わりをやっていた

けど それはただ兄妹の中を複雑にするだけの行いだった
でも後悔はしていない それが無ければ今の俺は居ないと思っ
ている

「俺も勇也さんの代わりをしようとして 風太郎とよくケンカした」

「幸太郎君も……………」

「けど 俺には無理だった 俺にはあの人は大きすぎた そのせいで 風太郎との仲は最悪だった」

「今を見る限り そうは見えませんか」

「まあ そんな事もあったってだけだよ でもお前のそれを俺は否定 しないさ」

「母の真似事とあなたは私を笑わないのですか？」

「笑わないさ それで限界が来るようなら そんな時は今回みたいに俺 を頼れ 兄貴だしな」

「ふふふ………ありがとうございます 幸太郎君」

今日はずつと見れなかった五月の笑顔を見る事が出来た

これからもずつとその笑顔でいてくれ

もう五月の泣き顔も二乃が泣いてる姿も俺は二度と見たくない

………俺も決心がつく 彼女達が笑顔でいる為に何ができるの かを……。

そのまま軽い談笑と共に これから勉強をして行く中で必要な心 構えを彼女に伝授

耳を塞いで決して聞こうとはしない辺り 本当に勉強が嫌いなん だな……。

「ただいまー」

「夜分遅く すみません お邪魔します」

「お兄ちゃん お帰りー 五月さんもいらっしやい！」

「らいはちゃん こんばんわ」

「ほれ らいは知り合いかからおかずおすそ分けを貰った食べるぞ」

「うおー 豪勢だー 今日は凄いね」

「おう 幸太郎 お疲れ！ それに五月ちゃん男ばかりでむさ苦しい がまあ好きなのでいてくれ」

「勇也さん ただいま帰りました」

「あの よろしくお願いします お父さん」

「何で お父さんなんだよ」

「あつ……ごめんなさい」

「っははは これは良いな 幸太郎 お前も良い顔になって来たぞ」
「勇也さんもからかわないでくださいよ」

アパートまで来れば良い匂いが鼻を刺激する

「どうやら以前に五月が来た時と同じく今日の夕食はカレーのよう
だ」

隣のお姉さんは早速お腹を鳴らしている

『見ないでください……………」と俯くが慣れたよ

「今更だろ」

「本当に今更だな」

「こんばんわ 上杉君 お邪魔します」

「ふん」

「何ですかその態度は」

「風太郎はお前が心配だったんだよ なあー」

「ち ちがう 俺は別に何も 何でそういう事をお前は言うんだよ」

「上杉君……………」

「あーもう さつさと食べようぜ」

「素直じゃないな 弟は」

「お前もな 俺にくらい連絡入れろ 何でらいはと親父しかしならな
いんだ さつき聞いて驚いた」

「泊まる宿がないしな 狭くはなるが知り合いを野宿させるよりいい
だろう？」

「さーな……………」

本当にこの子は素直じゃないな

財布がないと知った時真剣な顔で悩んでたくせに

「本人が無事で今日家に泊まるとしればこれだ……………ツンデレとい
う奴か？」

「距離感は大事故だがこういった時は例外だ 力を貸せる人間が俺達
しかないんだ」

「分かってやって欲しい 追い出さないだけこいつも状況は分かっ
ているようだしな」

それから真弓ちゃんから頂いた唐揚げもおかずに加え
みんなで食卓を囲んだ 風太郎は『普通にうまいな』と何時もの感
想だ

五月は『一人何個までですか じゅるり』と涎をたらす もう少し
抑えような

俺も久々に真弓ちゃんの手作りを食べたがやはり 美味しいと
感じる

らいはも太鼓判を押すし 勇也さんも『うめー』とがつがつ食べて
いる

とても賑やかだ この風景を早く 中野姉妹に戻してあげたいな
……………。

「おっと……………」

「お兄ちゃん大丈夫 ありやこれは染みになるね」

「悪い らいは」

「良いよ これくらい」

「大丈夫ですか 幸太郎君」

「ぼさつとしてた……………」

見入っていたのかスプーンが手から落ち ズボンに色がつく
最近気が抜ける事が多いな 少しでも気を抜けばこれだ

らいはは『染みは何時でも落とせるから気にしないで』と言ってく
れた

また迷惑をかける 本当に妹には頭があがらないな

(幸太郎君……………)

笑顔でその場を済ませる中じつと五月が見ていたが、本当に心配性
な奴だ

「じゃ 俺はバイト行くから 風太郎後は任せたぞ」

「分かった 幸太郎も無理はするなよ」

「帰りは朝方かも知んねえから……………」

「おいそれを先に言えよ」

「五月の風呂 覗くなよ」

「覗かねーよ」

「幸太郎 こいつも男だ そこは触れてやるな」

「そうですね ごめんな 風太郎」

「なんだよ 二人して 見ないって言ってるだろう！」

少し意地悪し過ぎたな

家族に声をかければ俺は家を後にし バイト先の店まで自転車をこいで行く事に

「すみません お風呂先にいただきました」

「どうだい 五月ちゃんうちの大浴場は？」

「は はい狭……………落ち着ける空間でリラックスできました」

「ガハハ そうだろ！ らいは次は俺らが入るぞ」

「はーい」

「幸太郎君のジャージ……………温かいです／＼／＼」

幸太郎が去って少しした後五月がお風呂から上がり

お礼を述べる 勇也は感想を聞くが一瞬だけ本音が出るも

彼女なりに考え 何とか乗りきる 今まで大きなお風呂が当たり前で

こう言った小さな湯船は久方ぶりだ 狭いと思いつつもリラックスできると言うのは本当だろう

満足いく言葉が聞けたのか豪快に笑えば着替えを持ち

お風呂場に向かう

五月はそのまま近くに腰をかける 勿論風太郎はいるが何を話して良いものか分からず

何故兄は連れて来たんだと 頭を悩ませる

確かに彼女を一人で放っておくのはまずいのは彼にも理解できる

もしも彼女の父に知られれば何を言われるか考えるだけで血の気が引く

「お兄ちゃん お布団敷いておいて」

「あつ私がやります」

「やはり 泊まっていくのか…………… 果たしてお嬢様が固い布団で

寝れるかな?」

「寝れます!」

「もー お兄ちゃん仲良くして 今夜はお父さんも幸太郎お兄ちゃんも帰って来ないんだし」

「あつそうです 幸太郎君は何処に」

「バイトだバイト 今日はず段より遅いらしくてな帰ってくるのは明け方だ」

「聞いては居ましたが 朝までいないとは……」

「今日は仲良く三人川の字だね」

軽い皮肉を述べるが五月は平気ですの一言で済ます

風太郎は彼女が幼い頃どんな生活をしていたかを知らない

いや知る機会があつた……ただ

当時の彼はそれを大して気にも留めず 兄とは別行動が多かつた

一方でその兄である幸太郎は明日まで戻つてこない可能性があり

五月は、がつくりといった様子でうなだれる

らしいはも五月を慰めればお風呂に行つてしまひ

風太郎と二人 更に気まずい空気が広がつた………。

その後 勇也も仕事に向かい

風太郎 らいは 五月の順で布団敷き三人仲良く?横になる

ただこの状況ですぐ寝れるほど風太郎も鍛えられてはいない

林間学校と訳がちがう あの時は風邪をひく中無理をしており

寝る際も彼女等が来る前に幸太郎と話し すぐに就寝した

今夜は違う 姉妹の大喧嘩を間近で見せられ

その原因一端は自分達家庭教師組にもあり けして無関係とは言えず

朝の二乃とのやり取りもあり 彼は寝付けずにいた

勿論それは 五月も同じだった 幸太郎と話す事で少しは楽になるが

未だ風太郎と真剣な話は少なく 数えただけでも2回程だ
彼がくれたこのチャンスが無駄にする訳にいかない 風太郎と少
しでも話そうと

五月はふうと 心を落ち着かせる

「今日は月が綺麗に見えます 少し歩きませんか？」

真夜中 月の光が入る部屋で五月は風太郎と共に夜の街並みを散
歩する事に……………。

第五十話 不良少年と姉妹との問題

「幸太郎君 これ配達お願いね」

「了解しましたー！」

夜の11時だ それでも街には人がいる

お店の賑わいも最高潮だ 仕事疲れやボヤキや愚痴なども聞こえるが生きていれば向かい合う現実だ

世知辛いそれが人生と言う奴だ

店長が俺を呼べば幾つか注文が入ったと出来た物を俺に手渡す

夜中だけど注文は入る この時間に動くのは慣れたもんだ

俺はバイクの後ろに乗せれば、安全確認をし ヘルメットを被り夜の街に走らせる

「住所は……あいつらのマンションか」

一度視線をずらし配達先を確認 事前にしておけば良かったがそのまま外に出てしまった

よそ見は厳禁だ あんな目に遭って学ばない奴だよな。

暫く運転すれば、茂みの多い道へと入る

この時間だ 人はそうそういないだろうと俺はスピードを上げる

「……………これで良いんだよ 五月……」

「えっ……………」

一瞬見知った顔があり 通り過ぎた後に一度バイクと止めるとそこまで戻る

「お前 この時間に何やってんだ」

「あつ あれ お お兄さん！ な何でここに！」

「配達だ」

暗い夜 ベンチに座り何処か浮かない顔で中野四葉そこにいた

俺の登場で慌てふためいており 本当に予想外といった顔だ

服装はジャージ姿であり まさかとは思いが走り込みでもしていたんだらうか？

「お前 今何時だと思ってるんだ？」

「ごめんなさい えっと 色々と訳がありました」

「そうかい でもこんな夜更けに知り合いがいれば俺は心配するんだが」

「本当にすみません」

「顔をあげろ 叱ってはいるけど そこまで怒ってない 本当に何でここにいるんだ」

「そ それは……………その」

「言い辛い事なら 別に良しさ」

「……………」

「もう 何もないなら帰るぞ」

「えっ でもお兄さんはお仕事ですよね？」

「偶然だろうな 今からお前らのマンションへと向かう」

「それは確かに凄い偶然です」

「まあ 流石にこのバイクだと お前は乗せられないけどな」

「大丈夫です！走って行きます」

立ち上がればその場で足を動かし 夜道でも元気な事をアピールするが

その姿は何処か痛々しい物を感じる……………。

そこまでお節介をする気はないが お前はいい加減自分の気持ちに正直なるべきだ

だからだろう つい余計な事を口走ってしまうのは……………。

「四葉 本当に 大丈夫なんだな……………」

「あっはは お兄さん何ですか その顔は」

「良しさ…。あまり溜めこみ過ぎるなよ 人間は何時か空回りする」

「私は……………大丈夫ですよ 本当に」

「説教は終わり どっちが勝つか競争だ」

「バイク相手でも負けませんよ—————！」

『『よーいドン』』

同時にスタート バイト中で何て事してんだかな

バレたら怒られちまう でも四葉が一人で黄昏てるんだ声はかけないとな

掛け声と共に俺達は走る

勿論負ける気はないし 幾ら四葉はが体力馬鹿と言えまさか追いつく訳ないさ……………。

信じられないフルスロットル

限界ギリギリのスピードを出したにもかかわらず

四葉は何事もない顔で追いつてくる 正直怖かった

ジャエツト婆ならぬ ジャエツト四葉がそこにいた 俺のバイクを追い抜けば

マンション前で Vサインで待っていた

これは手加減を貰っても勝てるか分からんレベルだ

陸上部が必死こいてこいつを狙う筈だよ

「いえーい 私の勝ちです!」

「おかしいだろう……………時速何キロだと思ってるんだ ギャグ補正でもあるのかこいつは」

「につししし 私は足と体力には自信满满ですからね!」

「はあ……………それを何時か勉強に回そうな」

「えーと その気が向けば」

「ふふ 了解 じゃ俺は届けるから」

「あ お兄さん 五月の事ありがとうございます 何時も何時も私達を助けていただいて」

「気にするな それが俺の仕事だ あっ 四葉 これ優勝賞品だ あばよ」

「おっと 飲み物ですか ありがとうございます!では おやすみなさい」

すっかり元気が戻ったのか四葉はマンションの中へと消えていく 俺は頼まれた物をバイクから降ろせば、指定された部屋へと向かって行く

無事に配り終われば、俺は再び夜街へとバイクを走らせた

二乃 三玖 四葉 五月 それぞれ抱えているものがる
一花は大丈夫だと思うが、あいつも溜めておく癖がある
何時かそれが悪い方向に向かわなければ良いけどな……………。

「もう 4時か……店長の話に付き合ってた予想以上に時間かかったな」

アパートまでつけば流石にこの時間だ 音はしない
部屋に入れば風太郎もらいほも五月も良い顔で寝ている
勇也さんはまだ帰ってきていない 6時前には戻ってくるとは思
うけど

無理だけはして欲しくないな……………。

「風呂入るか……………」

帰宅して先ずやる事は風呂入る事だ
流石に汗臭いし そのかつこのまま朝は迎えたくない
音を出さないよう静かにお風呂場まで向かう

『ん……………』と五月の声が聞こえびくつとするがただの寝息だ
焦るな…落ち着け…

「さて ゆっくり浸かりますか……………生き返る …ふあ…」

風呂は心の洗濯とはよく言ったものだ
まさしくその通り 一日の疲れも吹き飛びつつい寝そうになっ
てしまう

気を抜けば意識を持っていかれそうだ
こく こくと何度か顔が動き 目も自分の意思とは関係なく閉じ
られていく

「……………かあ……………」

そして俺は睡魔に襲われ 湯船で寝落ちすると言う
全くおバカな状態になっていた……………。

「……………はっ！ やばいやばい」

意識は覚醒し俺は湯船から飛び出す

完全に寝ていた 夢を見ないという事は本当に疲れが溜まったんだろうな

ああ……………本当に何してんだが風引くぞ

扉を開けて洗面所に向かう

「はあ……………」

「……………幸太郎君」

「五月……………」

『『キヤあああああああああああああああ』』

洗面所には歯を磨く五月の姿あつた

俺と鉢合わせれば、今年最大の悲鳴を二人であげる

こいつが家にいる事をすっかり忘れていた

「す すまん」

「私に方こそ軽率でした 幸太郎君は朝方に帰つてくると聞いていたのに」

「あの 本当にごめんなさい まじすみません 風太郎をクビにしな
いでください」

あの大声でも風太郎どころからいほも起きることは無く

勇也さんなんて風太郎の布団に入り込み あいつの布団を奪い
取つて遠くに蹴飛ばしている

すごい惨状だ

俺はと言えば五月と鉢合わせした後 彼女が先に洗面所出てその
間に着替えを済ませた

お互い気まずい中 居間で正座をし 五月に声をかけ 土下座を
する

こんな不祥事 あの人の耳にでも入れば、何を言われるか
二乃が遭った目に俺も会うとは、これに関しては俺の不注意だ
五月に頭を上げるよう言われるが、女性に裸を晒すのは男としてど
うだ

二乃は例外だ あいつが自分でやった事だし そこまで実害は出
なかつた

しかし 五月は違う 確実に見られた ナニを
だつてずっと 顔が真っ赤なんだぞ 何してるんだ俺は……。

「もう 勘弁してください 幸太郎君 思い出してしまいます」
「ごめん この埋め合わせは絶対にする だから頼む 風太郎だけ
は」

「それは大丈夫です 私は言うつもりはありませんから……」

「そうか 良かった」

「それに 幸太郎君も辞めさせません」

「良いのか 事故とは言え」

「あぁー あぁー 何も聞こえなーい」

そのやり取りは家族が起きるまでずっと行われていた

「幸太郎も行くぞ それと五月 うちから登校するのはいいが教科書
どうすんだ」

「ぬかりなく 昨日偶然会った 四葉に持ってきてもらいました」

「なぜ その時財布を受け取らない」

「あぁ……だから四葉はあそこにいたのか」

「幸太郎君どうかしましたか？」

「何でもねえ」

（あの 幸太郎君今朝の事は 私達の秘密と言う事で）

（わかつてる 話す訳ないし 忘れてくれ）

風太郎を起こし 朝食を食べれば、支度をすませ

三人で登校する事に 五月はずっと電柱の後ろに隠れ辺りを警戒

している

『お前が誰としようが 幸太郎に四六時中つきまとってんだから何も言われん』と風太郎は一蹴

ただその人物の家から出てくるのはそれはそれで問題だけだな

それと今朝の事は二人の秘密として未来永劫封印する事になった

「私も後から気づいたのですが 四葉も忙しそうだったので
……………」

「そういえば昨日あいついなかったな 何してんだ」

「え……………聞いてないのですか?」

「詳しくはな…何かあったか」

「陸上部の助っ人で大会前の練習があるらしいですよ」

「は?」

「初耳だ 三玖から用事としか聞いてないし」

「何故 四葉はお話にならないんでしょ」

「それはまあ…………一応テスト勉強開始と同時にやめるって これと約束したからな」

「ああ……………納得です」

「納得するな いくぞ幸太郎あいつにはきつく言っておかないとダメなようだ」

ここにきて四葉が未だに陸上部への助っ人として練習に参加しているという事実が舞い込み

俺達には秘密で行動していた事が発覚 昨日の時点で気づくべきだったし

断れないのが、あいつの良い所であり それがまた悪い癖でもある

一長一短だ 風太郎も『約束は約束だ』と早速四葉を捜しに向かい俺も同行

五月には、先に教室に行つて欲しいと言えば『わかりました 問題は避けてくださいね』と

有難い一言だが 五月もこれ以上は下手に動かないようして欲しい

彼女を探す事数分

体育館近くで走り込みをしている四葉を発見し　すぐさま追いかける

風太郎にはここで待機して　挟み撃ちにする形となった

俺の存在に気づけば四葉はスピードを上げ逃走を開始する　ただ向こうには風太郎が既にいる

悪いけど話だけは聞かせて欲しい　でなければあいつも納得出来ないだろう

「すみませーん」と大きな声が聞こえる　どうやら無事に兎の捕獲は成功したようだ

声のする方に向かえばリボンをわしづかみされ風太郎に謝罪る四葉と怒りと言う文字が具現化している

風太郎の二人が、叱られる側と叱る側という構成となっている

「よー　四葉何故逃げる」

「お　お兄さん　おはようございます

いやお兄さんの顔が真剣だったのつい本気で走ってしまいました」

「はあ　それでどうしてまだ陸上部にいるんだ」

「断つたがしつこく勧誘してきてるらしい　こいつの性格上断り切れないんだろう」

「内緒にしててすみません　でも家ではお二人の問題集を進めてます」

「四葉　無理なら無理と言う　それも大事な事だという事も忘れるな」

「お兄さん……………でも私」

お人好しも大概にと風太郎は強く言って聞かせ

ただそれでも彼女は断れない　いや　ある意味で自分のその性格が彼女を苦しめる形になっているんだ

本当は風太郎の頼みも聞きたい筈だろう　中野姉妹は全員優しくて不器用過ぎる。

頭を抱える彼を見て目の前の少女もどうするべきか、眉をひそめ表情も強張る……どうしたものか?…打開策を考えよと試みるもふと背後から彼女を呼ぶ声が飛んで来た…。

「中野さーん 戻ってきて」

「私頑張りますから!」

「って話は終わってねえぞ」

「無理だ 風太郎奴は バイクより早い」

「意味わからん」

走り去っていく四葉を追いかけてしようとする風太郎を制止し首を横に振る

俺は見ってしまった本気を出さずともあいつは乗り物よりも早いと言う事実を故に追いかける事は不可能

体力のない風太郎ならなおの事だ

今は彼女の出方を見るべきだろう どちらにせよ四葉には選択を迫らないといけないのだから

(四葉 自分の気持ちに正直になれ その言葉の意味をもう一度考えてくれ)

その後は教室に向かい

風太郎は四葉を見つけるたびに追跡 その度に逃走

俺はその間に一花や三玖の勉強を見て 現状を伝え 昼には五月の勉強を指南

最大の難関である 二乃は姿も見えず そのまま放課後を向かえる

そして放課後 四葉の追跡に俺も借り出せれ二人で走っている途中見慣れた顔がそこにはいた

「二乃かやつとみつけた」

「学校来てたのか この前のことは気にしてないから帰ろう!な?」

あいつらも仲良くできるって また昔みたいに」

「はあ わかった帰るわよ」

「そうか！」

案外すんなりいって怖いくらいだが、これで二乃も家に帰ると言う残すは五月だが、あいつは二乃が帰れば家に戻ると須藤家で話していた 問題は四葉のみ

と上手く事が運ぶことはなかった

『『って 昨日のホテルじゃねーか！』』

ここまで来て言う事でもないが、騙された

二乃は帰ると言ったが『家』とは言っていない 揚げ足取りは上手いな本当に

警備員に止められるが何とか二人で二乃に言葉が届くよう声をあげる

試験と言う言葉に一度歩みを止め その場で止まり

風太郎は再度説得に入る

「俺達が合格させてやる！ だから入れてくれ」

「試験なんて 合格したらなんなの？ どうでもいい」

本心から出たその言葉は俺達にぐさりと刺さり それ以上の言葉を彼女にかける事は出来ず

今日は退散する事になった……………

そこからは持久戦だ

俺達は必死に彼女の説得に当たるも悉く無視をされ 時には軽い挨拶もした

効果は見込めず 加え他の姉妹にも現状を報告しなければいけない

五月は暫く家にいる事が確定し 一花と三玖にも『まかせろ』と言
い二人には勉強に集中するよう頼む

四葉は未だに逃走中でその速さはやはり尋常ではない
風太郎も俺も追いつく事は出来ず結局話す事もままならない
下手をすれば二乃よりも成果は低いと言えるだろう…。

そして期末まで4日と迫ったその日
俺と風太郎それぞれ別行動していた

水曜日……………俺はある公園へと足を運んでいた
そこは家から少し先 大きな橋が架かる所にあり 俺にとっては
思いのある場所だ
じーつと橋の下を眺め この数日まともな成果を上げられない自
分の無力さを改めて実感させられた

どうしてこうも上手く行かないのだろうか
少しでも歯車が合えば次の瞬間にはネジが緩み一気に崩壊する
その繰り返しだ
彼女達からの信頼もへて俺は自分の過去を話し

またあの頃のように距離を縮める事が出来ている そう思ってい
た

けど現実どうだ 五月と二乃が喧嘩し 四葉は逃走…。

二人の喧嘩を招いたのは俺達の不甲斐なさだ そして俺は四葉の
背中を押す形で『頑張つてこい』

何とも無責任な発言だ ただ言うだけなら誰でも出来る 俺はた
だ状況を悪化させただけなんだ

『兄貴づらするな あんたなんか……………』
「本当にそうだ 俺は必要ないんだろうな 彼女達を笑顔で卒業させ
るためと言いつつ

俺は自分勝手な理屈や理想を押し付けていただけだ……………今だって
笑顔と言いながら

勉強に集中してくれ 今は待っていてくれ 何だよそれ
……………ただバラバラにしただけだ

一緒にいないとダメなのに……………馬鹿だよ俺は」

『失望したよ 上杉君がまさかこんな奴なんて』

『もうお前は俺達の前に顔を出すな!』

『どうせ そのテストも誰かのを見て写したものだろ この偽物!』

彼等の言う通りだ 俺は偽善者できっとダメな人間だ

かつての友人達の言葉とあの時の出来事がフラッシュバックする

俺がやっていた事が全て崩れ 誰も彼も信じない 全部失った

そして俺はそれを受け入れた……………。

今度もまた同じだ 姉妹をバラバラにした責任は俺にある もっ

とうまくやれたはずだ

やれた筈だ…。

「……………何をしてやれば良いのか 俺には」

もういつそのこと あの時と同じく ここに飛び降りようか

あの時は未遂に終わったけど今ならと…でも俺は手すりに手を乗せただけで何も出来ず止まっていた

「出来るわけないよな……………これは逃げだ…。本当に馬鹿な発想だよ」

何を考えているんだ…。

ここぞと言う時には弱い男だ…。情けない奴…。

「本当にそうだね やめて正解だよ」

コツコツと歩く音がし、声が届く 俺は一瞬そちらに視線を送れば
それに目を奪われる

「一年ぶりだね　上杉幸太郎さん　また　君はそんな所にいて　命は大切するもの

そう教えたの　君だよね？」

「中野……………六花さん」

「うん　私だよ…。上杉さん　君を助けにきたよ　安心して」

あの頃と何も変わらない彼女がそこにいた……………

黒い帽子を目深に被り

左目が隠れる斜め分けと首にかけるヘッドホン　何も変わっていない

彼女はあの時と変わらず俺を見ていた……………。

『君の話を聞かせてくれないかな？…。きっと私が探す彼を見つけられるかもしれないから』

誰も俺を信じない時に俺の言葉を聞いてくれたただ一人

第五十一話 不良少年と中野六花

「お久しぶりです 上杉幸太郎さん」

「何で あなたがここに……」

あの日 12月 全てがどうでも良くなったあの日 俺の命を救ったあの人が現れた

黒いキャップをかぶり ヘッドホンを首にかけ

変わらぬ笑顔を俺に向ける……………。

「ここは君と私が出会った場所だよ それに会いに来たんです君に」

「俺に会いに……」

「上杉さん 少し背が伸びたかな？ 凛々しくもなりましたね」

「一年も経てばそれなりには六花さんも 雰囲気こそ変わりませんが更に素敵になりましたよ」

「褒めても何もでないよ 上杉さん？」

手を当て自分と俺の身長差を確認し あの頃とは言葉使いだけではなく

色々と変わった物があると察しながらも変わらないものもあると

彼女は述べる

それは俺も同じだ 彼女はあの頃と何も変わっていない

ミステリアスで何処か掴みどころのない人物だ

彼女は『お世辞？』と言うが俺はそんな事は一切ないな 本当に素敵な女性だ

俺が知るのには名前と誰かを探していたという事だけだ、それ以上の事は何故か聞けず仕舞い

「あなたにお世辞は言いません あなたのお陰で今の俺がいるんです」

「それを言うなら私もだよ 君がいたからここにいる それを忘れないで欲しいかな」

「俺はあなたに何も出来ませんでした 結局あなたが探す人も見つかられず」

探そうとしていた【少年】ぎりぎりまで俺は彼女と共に その名も知れぬ少年を探し続けて 成果の程はお察しき。

どうにも上手く行かず結局のところ、彼女と軽く話した後にその場で俺とこの人は今日まで会う事はなかった…。

うーんと考える素振りを見せた後に彼女は軽くだが深呼吸し

『あなたのお陰で無事に彼を見つける事は、出来ました。』

俺と別れてすぐか。はたまた最近か？ そこははぐらかされたが、彼女は会いたい人と会う事は叶い その彼と言われる人は、元気でいてくれていると、はにかむ様にそう告げた。 少し羨ましいな

「確かにね 成果はなかったよ でもさ

君はここで滑り落ちた 私を助けてくれた あのまま階段から落ちていれば 私は無事ではすまないよ？」

「あれは 偶然ですよ 俺は」

「今は俺なんだね あの時は『僕』だったよね」

「からかわないでください……………俺は貴女と顔を合わせる資格はありません」

「俺って強い口調で言うのに 君は何処か弱くなったね 君はあれだけ私を励ましてくれたのに」

「子供の戯言ですよ……………忘れてください」

「残念 忘れないよ 君の言葉は一字一句 どれも全て私の思い出だから」

「言い切りますね あなたが羨ましい」

自信満々に言い切る彼女は、俺が知るよりも強くなったと感じる

あの時の彼女はとても弱弱しく 話すたびに探している人物に謝っていた

『私のせいで 人生を台無しにした 顔も会わせられない きっと嫌われている』

「君もあの時は結構大胆だったよ？ それで上杉さん 踏みとどまっ

てはいたけど何故あんな事を？」

「俺が家族を……いえ 他人ですね 知り合いの関係をめちやくちやにしたからです」

「全部君のせいなの？」

「俺なんて必要ないんです 弟がいればそれで十分だった 彼女は言っていた」

俺は兄なんかじゃないって そうですよ 俺は何でもない存在です

いつその事あの時見たいにつてネガティブな考えですよ」

「うん そうだね いけないね 命を粗末にする考えは メダよ！」

「あうち」

背伸びをするように 俺の頭を軽く叩く 痛みはないそれに優しくもある とても温かい

「君が死ねば誰かが泣き 悔やむ人もいるんだよ それを忘れないで、私も悲しいからさ」

「すみません」

「君は私の恩人 だから私は君を悲しませない 君を一人にはしない」

「六花さん…何でそこまでするんですか？」

俺と真剣に向き合う彼女はあの時と何も変わらない確かに強くなった

けど内に秘める優しさは何も変わらない 微かに抱いていた違和感も消え

本当に 彼女は 中野六花 実在する人物

「理由なんて無いよ 私がそうしたいだけ 君が私にそうしたようにね…上杉幸太郎さん」

「理由はないですか…」

うんうんと頷く彼女はにこやかな笑顔で俺を見る

「ねえ 上杉さん 手を握らせてください」

「えっ………六花さん……？」

「治ったんだね 良かったよ 本当に君の手はもう動くんだね 上杉さん」

俺の利き腕を彼女はそっと自分手で包み込み何度もささる

そうだ 彼女にあったあの日 俺は未だに利き腕だけは回復しきれずギブスをつけていたんだ

そんな手で彼女を受け止めて 尋常じゃない痛みを俺は我慢して 彼女は何度も謝罪していた

『ごめんなさい 私の不注意で手を怪我しているのに本当にすみません!!』

「医者に言われました 治るだろう…。普通に生きるだけなら困ることとは無いと……………」

「普通に生きるだけならか」

「繊細な作業が出来ないんですよ 指先で掴むとか細かいものをつまむとか…。これが言うなれば残った障害です これは時間が解決すると数年かかるかそれ以上か…。中野先生 ああ 俺の担当の先生なんです。が彼は言っていました」

「中野……………」

「六花さん どうかしましたか?」

「いいえ 同じ苗字なので戸惑ってしまいました」

中野と言う名前はそれほど珍しい名前では無い

けど 三玖を助け事故にあった際に中野と言う医者に助けられ

中野と言う不思議な人に心を救われ

中野と言う 名前の五つ子姉妹が現れた 偶然にしては出来過ぎているが、今はそれを置いておこう 目の前に彼女がいる それだけで十分だ

「本当にそうですね 俺もあの日からずっと六花さんを探していました…。色々調べました そして同じ苗字を持つ友人達にも聞きましました…。けど中野六花は何処にも存在しない そればかりが証明されて」

俺は12月に出会ったこの人を探すため出来る限り調べた

何も出来ない中 心が折れ 誰も俺を見ない中 彼女だけは

ちゃんと俺の目を見て 誰でもない俺を見て話を聞いてくれた

「私はここにいます 上杉さん あなたが困っている時は私はあなたを助けます…。どれだけあなたが嫌われようと私は嫌いしません

私はあなたを否定しません それだけは絶対に」

「はい…六花さん……」

まるで 今の五月だ あの子と同じ彼女も俺を決して見捨てない
俺を否定しないと言ってくれる あの時と同じだ

この人と話しているだけで俺は救われる不思議と癒される

「その言葉 友人も言っていました あの子も俺何かの為に何で必死になるのか」

「上杉さん その 俺何かと言うのをやめましょう それは駄目ですよ？」

「癖みたいなものですよ」

「それはまた 嫌な癖ですねぇ」

「こればかりは治しようがないですよ それで六花さん 本当はどうしてここに来たんですか？」

「えっですから 上杉さんに会いに来たんですよ」

彼女は証明された しかし タイミングが良すぎるまるで見計らって登場だ

彼女を疑うような真似をするのは気が引ける 恩人に対してする事ではない

けれどもし他にやる事があるのならそっちを優先して欲しい

六花さんと話せただけで随分と心も救われて楽になっている

「それが本当ならあなたやつぱり 俺の恩人だ

これで二度目です あなたに救われるのは」

「ふふふ それが私です ではお聞かせください 何故あなたはここまで追い込まれたのかを？」

「追い込まれたと言うより 自分の馬鹿さ加減に愛想が尽きたって感

じですかね」

優しいだけではない 時には意地悪っぽくもある

去年は見れなかったこの人の一面に少々俺も驚いている。

俺がここに訪れ黄昏少しばかり馬鹿な考えをしていた理由を彼女は知りたがっている

あまり人様に話せる事ではないが今は俺とこの人だけだ

彼女は『少しだけでも話せば楽になるはずですよ』と俺に言っている

誰かに相談……それをやろうとはしなかったな

近くのベンチに俺と六花さんは腰を下ろし

話を始める彼女に聞かせた ここ三ヶ月で起きた様々な事や出会った人々

きつと六花さんだから俺は打ち明ける事が出来ているのだろう

「五つ子の家庭教師ですか」

「補佐です 俺はおまけですから」

「はあ またそんな言い方をして」

「すみません それにしても驚かないんですね 五つ子を聞いて」

「内心は驚いていますよ 五つ子とはきつと親御さんも苦労なさったでしょう」

「苦労はしたでしょう けど 零奈さんはそれを後悔はしていませんよ」

「何故ですか？あなたがそこまで言い切れるんですか」

「彼女に頼まれてるんです 大切な娘達を守って欲しいと」

「……………そうですか」

「はい あの人はきつと 傍にいれない事の方が悔しいでしょう」

「親御さんの話は了解しました それでその娘さんはどんな方達ですか？」

「本当の父親の事を俺は知らないだからそれを説明する事はできない
だからだろう察した六花さんは、本命である五つ子の話をして欲しい」

いと言っている

「長女 一花って言うんですが 俺の憧れです…。」

今は夢に向かって頑張ってますきつと自分のやりたい事を見つけられます ただ少しおバカです」

「おバカなんだね」

「次女 二乃って名前です 一番厄介で…。でも本当に家族と姉妹の事を思っているんです

俺に取っては一番に可愛い妹だと思ってます 嫌われていますけど あと少しおバカです」

「うんその子もおバカなんだね」

「三女 三玖って言います 少し暗いところはありましたけど 最近 は生き生きしてます

それに俺は彼女を大切に思っています…。」

三玖も大好きな物があつてそれを話す三玖が大好きです 少しおバカです」

「あつはは またおバカナ子だね」

「四女 四葉と言うんですが とても元気が良いんです見ている俺まで元気を貰えるんです

お人好しですけど譲れない物をもっています それにきつとあの子は…これは秘密で

あと少しおバカナ所もあります」

「うん知ってた」

「五女 五月です こいつは謎です 真面目で不器用でも本当に優しい…。」

でも何故か何時も俺を気にかけて それをあいつは話そうとしな

い それと」

「おバカなんだね？」

「はい その通りです けどそんな彼女達がとても愛おしくて 大事な妹です」

「妹か……………」

「六花さん 具合でも悪いんですか？」

姉妹全員の話が終われば六花さんは少し俯いてしまい

心配になり声をかけるが『大丈夫ですよ』笑顔を出すのが、本当に何も無いんだろうか？

首を縦にふり 自分は平気だと主張する

「それでその仲のお二人が喧嘩をしてしまった 原因は自分にあると君は思う訳だ」

「……………」

「うん 君が家庭教師の補佐できちんと彼女達と向き合い

それと大切に思っているって事が私には伝わりました

でなければそこまで親身になって悩む事はしないでしょう

きつと 彼女達とあなたは互いに必要とされていますよ？」

「どうでしょう……………俺はただあの子達の笑顔が見たくてもそれが

あの子達には迷惑なんだろうと…」

「それはありませんよ 幾ら急に再会したとは言っても彼女達を知ってる君だから」

「知ってるですか……………でも俺は忘れていたんです あの大切な記憶や思い出を」

「そうでしたね……………何故自分が事故に遭ったのかもわからないと言っていました」

「俺は事故にあって 当時の記憶と大切な姉妹の記憶を失ったんですよ

今は思い出しましたが 五月や四葉と会うまではおぼろげに記憶にあるだけで」

「……………大変でしたね」

「そんな忘れていた自分が今更 兄貴面なんていい迷惑ですよ」

本当にいい迷惑だろう 大切大切と言いながら俺は事故の影響で

その大事な記憶を忘れていたんだ 『一時的な物だ』と彼は言った

実際その通りで徐々に当時を思い出してきたでもあと一歩が思い出せず

そんな時に六花さんと出会う 数か月後 四葉と五月に再会する

事で忘れていた全てを思い出した

当然混乱はしたが、俺はすんなりそれを受け入れる事が出来た元々持っていた物だ

それが戻ってきたと思えば、さほど気にする事でもなかった

「ようは 上杉さんが自分を認められない…。自分を許せない

姉妹の子達はあなた達を必要としています

私が保証します お姉さんの言葉を信頼してください」

「お姉さんか…」

「あつでも 年齢は不詳でお願いします その方がミステリアスですから」

「分かりました 俺もそんな気はしていたんで」

「では…。後は上杉さんが自分を許す番ですよ」

「俺を許す……………出来ますかね」

「もし今は無理だろと思うなら それを片隅にでも置いてください 何時か許せる日が来ます」

俺が俺を許せばそれで解決すると彼女は自信たっぷりと言っている

幾ら彼女の言葉でも それには少し時間が掛かりそうだ

たった一度ここであっただけ、そんな俺の為に彼女は真剣に耳を傾け親身になって対応している

俺を見ているようで見ていなかったあいつらとは違う…

優しく温かい……………何処か懐かしさすら覚える。

不思議だな……………。

やはり この人の正体はきつと……………。

「上杉さん？」

暫くその場で考えていれば、スマホが振動していた

誰からのメールだろうか？ 隣に座る六花さん『出てみては？』と進める

「もしもし」

『幸太郎君ですか 今どこにいるんですか?』

「五月……………えっ」

『何がえっですか? あっ見つけました』

電話の相手は中野五月だった

少々驚き横見れば こちらの電話に聞き耳を立て不敵な笑みを浮かべる六花さん

俺は先ほどのやり取りと彼女の態度

そして『君を否定しない』と言うフレーズから彼女の正体が自分を偽る

中野五月なのではと推測していたが、その本人から電話が掛かって着ている

本当に俺の勘違いなのだろうか?

暫くすれば コツコツと言う足音と共に電話を耳に当てる五月が現れた

「幸太郎君 ここについて……………あのその方は誰ですか」

「えっ ……五月本人だ」

「私は私ですよ それよりも彼女は?」

着用しているのは朝方と同じく学校の制服姿

俺を見つければ声をかけるが、隣に帽子を被る女性が気になる様でそれが誰かを訪ねている 『はいどうも』と六花さんはマイペースだ

すつと立てば五月の方まで歩み寄り軽く会釈する

「どうも あなたが五月さんですか 私は中野六花と言います よろしくお願ひします。」

「えっ この人が幸太郎君が探していた 六花さん何ですか 本当に実在しているんですね」

「失礼な子ですね 私は私 ここにいますよ」

「すみません 幸太郎君も疑うような真似をしてごめんなさい」

「いや 良いんだ 本当に……………」

「幸太郎君？」

「上杉さん？」

六花さんの場合帽子を被るせいで良くは見えないけど二人を見比べれば何処となく似ているような気もする

俺自身 彼女と出会った時には一時的な記憶喪失で彼女を中野姉妹と同一視する事はなく

それから暫くして転校してきた 彼女達をみて

頭のモヤモヤは晴れ 六花さんⅡ中野姉妹の誰か と推測していたのだ

だから一人づつ聞こうと決め 最初に聞いたのがある意味で本命である

中野五月だ

謎の多い彼女こそ あの日の彼女ではないかと…。

あの日の帰りにそれとなく聞いてみた

結果で言えば『知らぬ存ぜぬ』と散々な結果で俺は暫く落ち込んだ

しかしそのやけに淡泊な態度が余計に気になっていたのだ

実際に今 目の前には 五月と六花さん二人が並び 考え込む俺を見ては首を傾げる

本当に似ている…。少し考えがあり俺は二人に一度待っていて欲しいと言いたい

そのままスマホから別の番号を選び ある人物に電話をかける

「二人共すまん 少し電話をする もしもし」

『コータローどうしたの？急に確か二乃の所に行った筈だよね』

「変な事を聞くが 三玖で間違いないよな？」

『コータロー大丈夫？何かあった』

「すまん失礼だったな それで今家には誰がいる」

『私と一花だけだ』

「一花に代わって…… いや 俺から一花にかける 三玖何時もあ

りがとう

もしもし一花か」

『あれー コータローくんどうしたんだい お姉さんが恋しくなっ
た』

「……………やっぱり一花もいるのか」

『変なコータローくん』

「すまん 急な電話でじゃまた」

三玖と一花が家にいる事は確認出来た

本人達のスマホにかけたんだ…。間違いないだろう

残るは四葉と二乃だ だが四葉は…。俺の勘だが違う

それに今は陸上部の助っ人として走り込みの最中だ 朝方あった
時に

俺はそれを見かけ彼女も『学校の後も走り込みです すみません』
と言っていた

ならば二乃か…いや 彼女も違うだろう

「二乃なら先ほど 歩いているのを確認しました ホテルに戻るのだ
と思います」

「それは本当か!」

「はっはい 本当です 私から声をかけるのは今は気がひけるのでか
けませんでしたが

それに四葉も見かけましたよ」

「どうしたんだい 上杉さん 私がここにいるのが おかしいのかな
?」

まじまじと俺を見る 六花さん 本当に何者なんだ

五月を含め全員は白と判明した

ならば偶然似た名前の似たような容姿を持つ 素性の知れない不
思議な女性なのか

確かに三人に確認をし二人も違うとはわかった

彼女は中野姉妹とは別なんだろう それに俺は恩人を疑うような
真似をしていた

それは失礼な事だ きちんと謝らなければ

けど分かったこともある中野六花は、姉妹とは関係のない人物だとその確証は得られた…。

「すみません 六花さん 少しあなたを疑っていました ごめんなさい」

「別に私は気にしません 上杉さんにも何か思う所があったんでしよう」

「思う所ですか……はい 少しだけ」

「その顔 もう大丈夫そうですね」

「えっ」

「ずっと沈んだ顔をしていたのに 今はそれが無い 誰かと話しているうちに」

きつと心にあつた靄が消えたのでしよう」

「やっぱり自分では分かりません 本当に彼女達に俺が必要なのかは」

「君は自分に厳しいからね……うん わかった もう少しだけ考えてみて君は必要とされているよ」

ね 五月ちゃん？」

「えっ………はい 幸太郎君が何を思つてここにいるのか分かりません 彼女とどんな話をしたのかも」

でも私………私達はあなたと上杉君を必要としています」

「………少しだけ時間をくれないか 期末試験が終わる頃には答えを出す」

「分かりました では行きましょう 幸太郎君」

「行かつて何処へ」

「あなたは二乃と話をするべきです 既に上杉君が向かっています」

「何で知つてんだ お前が」

「それは 今は関係はありません」

俺の手を掴むと二乃が借りているホテルまで向かおうと話す五月

先程まで乗り気ではなかったが 六花さんや五月の言葉で気持ちも少なからず楽になった

今なら二乃ともきちんと話す事が出来ると思う

ただ 喧嘩の一端を担った五月本人は未だ会う事は拒んでおり

ホテルまで届けければ そのままアパートに帰ると 中々強情だ

覚悟を決めた五月は梶子でも動かない 俺はそれを嫌でも知って
いる

「二乃と話すか……五月もそれをするべきだと思っただけだな」

「確かに 話を聞いた限り 五月さんも少しはお話した方が良くも
ね」

「幸太郎君は何を彼女に話したんですか！」

「秘密 私は信用のある人だから上杉さん話がしやすいみたい」

「うう 私には何も相談してくれないのに」

ふふと笑う六花さんに対し五月は頬を膨らませ如何やらご立腹の
ようだ

別に信用がないわけではなく あまり彼女達の前では見せたくな
い顔と言うのも俺にだって存在する

六花さんが「五月達ではないと分かれば余計にそう言う事も話し
てしまう」

「六花さんも意地悪しないでください ……………それと六花さん
色々ありがとうございます」

「うん 私もまた会えて良かったよ また君が辛くなった時 私は君
の前に現れるかもしれない…本当はそうならない事が一番なんだろ
うけどね」

「六花さん 俺はあなたと出会った事を一度たりとも後悔はしてませ
ん 俺は！」

「さようなら 上杉幸太郎さん そして 中野五月さん」

「えっ?…。あの」
「またね」

去り際に彼女は何かを呟き五月は少し動揺している

小さく呟いた内容で俺は聞き取れず何故五月が驚いたように去っ
て行く彼女を見ているのか

興味はあるけどそれは聞くべきではないだろう あの人のなりに五

月に伝えたい事があった

そう納得すれば俺も自然と気にならなくなる……………。

「五月 行くか」

「はい すみません行きましようか 途中まで」

「お前は来ないんだったな」

「自分でも分かっていますけど すみません」

「いいよ 心配して来てくれたんだろう ありがとな」

「幸太郎君が、私達の事で悩んでいるなら それは私も聞くべき事です

お礼を言われる事ではありません」

「それでもだ お礼は言いたいんだ」

ガードが固いという表現は少し違うだろう

隣の少女は自分達の問題で俺が悩んでいるならば それは自分達のせいであり

俺が謝るのは間違っていると話している 無関係とは確かに言えない

でもここまで拗らせた要因は確かに俺達であり それこそ無関係ではない

それにわざわざ探しにまで来たんだ それに関してはお礼も言わせてほしいもんだ

「分かりました その言葉今は受け取ります」

「返却不可だぞ」

「なら仕方ありませんね それで幸太郎君 六花さんには電話とか聞かなくて良かったんですか」

「あの人に会えた 俺はそれだけで十分だからな って五月さん」

「何ですか？ 幸太郎君急に避けて」

「目が笑ってないんだよ 今のお前は」

「そんな事ありませんよ 幸太郎君？」

五月はニコニコしているが、雰囲気は刺々しいというよりも禍々しい

何故かとここで聞けば、きっと機嫌を損ねるだろうし

以前四葉にも注意をされたし 真弓ちゃんにも怒られている
女性相手は慎重にだ

五月は言っているが 俺は彼女の番号を聞こうとは思わない
唐突な再会ではあるがこうやって時々会うのが 俺や彼女には丁
度いいのだろう

あまり心配もかけられないし 知ってしまったえば俺は彼女を頼って
しまう

『誰かを支えられる人間に僕はなりたい そう思える自分でありた
い』

かつての俺の言葉 今は彼女の存在に支えられている
ならもう少しの間だけ 中野姉妹の支えになろう……………。

「はあ……………行くぞ 五月」

待っていてくれ 二乃 俺は今度こそお前と真剣に向かい合い話
す

あの人や五月がくれたチャンスを無駄にはしない

第五十二話 不良少年と次女の話

『それでは私はここで』とホテル付近まで来れば

さっさと何処かに行ってしまう せっかくと思っただけだが

五月も五月で自分のやり方と言う物があるんだろう

なら俺は俺で二乃と向き合う 何時までも後ろ向きに考える事はやめよう

ホテルのエントランスに向かえばやはり 警備員から警戒はされている

朝方も来ているし

彼等の対応は何も間違っただけではない 似たような仕事はした事はあるけど

その都度『邪魔するな』と言ってくる人はいたがまさか自分がその立場になるとは想定もなかったな

一歩でも動けば彼等も俺の障害となる

下手に時間もかけられない 五月の話では二乃は一度出て暫くしたら戻って来ていたと言っていた

ここの場所は教えたつもりは無いけど 一体誰から聞いたのだろうと少し疑問は出てくるけど

今は後回しだ 二乃の事だけを考えよう

「二乃の事を……」

「で 私は何だって」

「おっ びっくりした 何時の間に」

「それは私の台詞だけど あんたもしっこいわね」

「それが俺達の仕事だからな」

「あんたといい上杉といい 本当にあきらめが悪いのね」

観察がてら待機していれば 後ろから声をかけられた

振り向けばそこには普段と変わらない二乃が腕を組んで立っている

怒った様子もなく 何処か呆れており 『少し前まで上杉もいたわ』と口に出す

どうやら俺では無く 弟が説得に成功した これは良い報告だ

あいつも二乃の言葉とここ最近の騒動で結構参っていたし 心配していたが話が出来て良かった

「それで どうするの？」

「俺はお前と話がしたい」

「そう 少し待ってなさい」

二乃はそのまま警備員の方に向かい何かを伝えれば彼等は去って行き

彼女はこちらを手招きしている

何とも手慣れたもんだな思っただけ

『あれだけ 顔を会わせればね』と嫌味混じりで言い返された

頼りになるな 中野姉妹の二女は……

「まずは私から あんた何かあった？」

「急だな」

「上杉もそうだけど あんたも何か吹っ切れた顔だしさ」

「って 何でここ濡れてるんだ」

「それはいいから……」

話を聞く前には先ず 何かあったのかを述べよと部屋の主は申し
ている

適当に座ればと言われソファに腰を下ろすが何故か濡れていた

弟に何があったのか聞かないが『あんたまで濡れてたらどうしよう

かと思っただわ』

そう口からもらす二乃だけど顔も赤いし本当にあいつと何かあつ
たんだ？

この濡れた椅子と関係があんのかな……

聞けば怒られるだろうし 話す機会も無事に得たのにそれを白紙
にする訳にも行かないな

「ここに来る前か……以前話した 中野六花って覚えてるか」

「え うん覚えてるけど あんたが会ったって話した 謎の女

………まさか

「ああ さつきまであの人といった 急に現れて少し混乱したけどな」

「不憫ねアンタ達兄弟も 泣けて来たわ」

「何の話だよ」

「良いから続けなさい」

「六花さんと話して それでお前の所に来た あの人はまた消えたけど」

「あんたは追わなかったの？」

「確かに追えばまた話せるだろう けど俺が今話すのはあの人じゃない 二乃だ」

「そ そう………」

「それに 俺が想ってればそれで良いって思えるんだ」

「ぐっすん………」

「何で泣いてんだ」

「健気ねあんたも 一年も想ってさ」

「恩があるしな………だからこれで良いんだ」

「そう わかったわ………」

ここに来るまでつまりは俺は六花さんと話し 自分の気持ちを打ち明けた

彼女に言われ 自分はどうしたいのか 自分が何をすべきなのか

少しずつだが見え始めた 『自分を許してもいいので』とあの人は言っていた

でも二乃と話さない限り 俺は何も選べない………。

あの時は逃げた……… でも今は二乃から逃げない

やるべき事の一つは二乃と話し合う事である

風太郎のお陰だろう 彼女は何処か大人しく 話も真剣に聞いてくれた

『上杉には五月に謝ろうって言われた 私からなんて御免だけどね』

それは二乃が少なからず叩かれた事を根に持っているからではなく

五月が五月ではない ように思えて来たからだ俺に語った

その気持ちは俺も分かる

5年前のあの日だ 話し方が俺の知っている五月と違っていた
それが怖くて 俺のしる彼女は居ないんだと俺は逃げ出した

「あんたもなのね……」

「知ってる筈の子が その日から変わった 俺はどうして良いかわか
んなかったさ」

「気づけばお母さんと同じ話し方で あれは本当に五月なのって」

「お前は姉妹を大切に思ってるからな 一番にそれがわかるんだろう
な」

「本当にどうしたら 良いか分からないのよ……それはあんたも同じ
私の知るコウには

こんな話し方じゃない……」

五月も変わり そして思い出したかつての幼馴染も自分が知る人
間とは全く異なる

そんな状況の中 彼女が素直に従う訳もない

反発もするだろう 何故変わってしまったのか 何故今のままでい
てくれないのかと……

「昔は そんな髪でも無かった でもあんたはそれを地毛って嘘まで
ついてさ」

「実際 嘘ではない」

「染めてもないのに そんな白くならないわよ」

「PTSDって知ってるか？」

「どっかで聞いたような……」

Post Traumatic Stress Disorder
訳してPTSDだ 日本語で言えば

心的外傷後ストレス障害だ……俺のこの髪はストレスのせい
だよ」

「えっ……」

ある日気づけば髪は白く

何でこんな事にと病室で蹲っていた

自分で染めるなんて俺はしてない…。本当に勝手に髪はストレスで白く変色した

「人間なんて そんなもんだよ」

「……………ごめん」

「やけに素直だな 疑われると思ってた」

「今のアンタの顔はとてども嘘を言ってる顔じゃないから……………」

「ありがとな お前らや家族以外 誰も信じようとしなない」

思っていたものと異なっていたのか ふいに二乃から謝罪の言葉が飛んで来た

思い返せば『変な髪』とこいつには散々言われていたが、俺は特に気にはしない

確かに罵倒だ けど こいつのはまだ優しい方だ

信じない奴は信じない 例え友人でも……………」

「俺本人は変わる気なんて無かったんだけどな 変わって行くもんさ 勝手に」

「それでも……………変わらない物も変えたくないものあるのよ」……………」

俺は考えた 当時の彼女達で何故か一人だけ変わらない人間がいたのかもしれないと

一花は目に見えて違う完全にショートカットだ 三玖も同じく一花よりは長いセミロング

四葉のあれは何と言っただろうか ボブ?だったか

そして残る五月はアホ毛が生えた そしてくせつ毛になっている

けど二乃だけは あの頃のままだ 少々異なるところはあれど髪型は当時と変化は見られない……………」

変わっていたのは五月だけではない 一花や三玖も四葉もだ

どんどん変わって行く中で 彼女はそれでもあの頃を守っているんだ…。

そんな時に見知らぬ男が現れ その男も実は昔は笑顔の絶えないよい子と来た

自分達と過ごした彼までも全くの別人と化した事が彼女を更に追い詰める結果に繋がった…。

やはり全員が馬鹿不器用で優しいと彼女と話していて実感できた
「お前はさ このままでもいいのか？」

「あんた言ったよね 勝手に変わって行くって」

「ああ……………」

「ふう……………あんたには恩があるから言うけど 私は勝手に変わって行く気はない」

みんながみんな 変わる前に 私は自力で変わって見せるわ」

それが二乃の答えだ

周りが変わって行く 自分だけ昔のままなら 勝手に変わる前に

自分自身で変わってやろうと 彼女なりのケジメなんだろう

(六花さんや五月は怒るだろうな……………)

彼女を見ていて俺も自分の心に踏ん切りもついた

「お前がかわる為には何が必要だ 何が足りない」

「何よ急に……………」

「もし変わるなら 心残りは無い方がいいと思ってるな」

「……………今は思いつかないわ」

あつ これは嘘だ 露骨に俺から視線を逸らした

「急がせる訳じゃないけどさ もし手伝えるなら 俺は手伝うさ」

「本当に何時までも兄貴面ね……………手伝われたら自力にならないじゃない」

「それが俺だしな…。お節介な男だ」

「ごめん……………あの時は悪かったわ 一応は言わないと」

上杉には言ったのにあんたに言わないの変だし」

「俺もだ二乃 あの時は逃げてごめんなさい……………」

軽くだが頭を下げたあと彼女は先日件の件での謝罪を述べる

「もういいわよ… この数日馬鹿に真面目な二人見てたら 怒る気もなくなっちゃし」

「それは助かるな」

やっとだ 二乃に謝る事が出来た ここまで来るのにどれだけ時間がかかったものだろう

今の俺に家庭教師以外で何か悔いがあるとするならば それはあの時二乃に何も言えなかった事だ

俺の名前を呼び 助けを求める中 俺は彼女には何も言わず去った

『あんたも……色々あったんだろうし』と言葉まで貰えるとは兄冥利につきるな

何だろうか泣けて来たな『見つともないから』と二乃も困惑しているダメだしやんとしろ

「家に帰れって言わないの？」

「言って帰るならそうするが、今は無駄だとお前を見ればわかるさ」

「何か あんたに怒ってた理由分かって来たかも……。」

「そうかい」

「ねえ あんたここまで一人で来たの？」

「誰かがいると思ったか」

「いや 別にそんな事はないわよ」

「はいはい じゃ俺は帰るから それとだちちゃんと勉強してるんだな」

「あんた達兄弟は本当に目ざといわね ほらさっさと帰ったー」

「おすなよ」

「べー」

前回とは違う喧嘩はしていない

二乃ときちんと言葉も交わせた 二乃がどうしたいのかもちゃんと聞く事も出来た

確かに期末試験も大事だ けど今は少しずつ彼女達の問題を解決させないと何も始まらない

このまま放つてはおけば俺も風太郎も後悔するだろう

部屋から追い出されれば俺は何処か軽い足取りでアパートまで向かう

五月も帰ってきているだろうし 風太郎が適当にアドバイスをしていたら彼女も捗ると思うが

あまり期待しない方がいいだろうな

「二乃が謝罪したって………そんなにすんなりいきますか？ にわかには信じられません」

「本当だ お前もいつまでも意地張ってんじゃねーよ」

やけに爽やかな風太郎が家にいた

話を聞けば二乃との会話で聞こえた通りきちんと謝罪の言葉を貰ったと五月に伝え

機嫌をなおせというが五月はそれを全く信用せず 全く聞き入れない

「俺も二乃から謝ってもらったぞ？」

「ほらな」

「幸太郎君 私に嘘をついているんですか」

「五月は俺が嫌いなのか」

「そう言う事は………って違います話を逸らさないでください」

「なら五月も風太郎の話を聞いてやれ」

「致し方ありません」

「お前 俺と幸太郎で何が違うんだ言ってみてくれ」

「幸太郎君はとても優しくて立派です」

「はい 俺は優しくもないですよ」

「付き合いは良いけどな」

適当な話で何とか場を繋ぎ 五月と二乃がどう円満に解決できるか模索する俺達

『そう言えば お前ら映画行っただろ また』と以前出かけた時の話題を提示し

二人の友好関係の把握にかかる風太郎

帰ってきて最初に『一度 二人の現状を探るべきだろう』と彼に伝え

どうにかそれらしい話題を風太郎は思い出した

喧嘩はするが 五月と二乃は二人で出かける事は多く

やはり喧嘩する以前は仲の良い姉妹のままだという証明にもなるだろう

その話が出れば五月の表情は一気に沈む

どうやら彼女が見たのは 一花の例の映画らしい

四葉あたりが教えたのか、それとも三玖が話したのかどちらにせよあの時連れて行かれた時の五月は半泣きで俺に助けを求めていた

程で何か申し訳なくなってきた

「あんどきは悪かったな」

「いえいえ 幸太郎君も勉強で忙しかったはずですので」

(言えない 最初から最後までおままごととしてたなんて……………)

菊とのおままごとは色々と考えさせられる事もあったし

あの時『このさき何も無ければ』と壮大に俺はフラグを建てていたな

余計な事ばかりいうな俺は……………。

その後五月は二人で次は何の映画を観るかで二乃と軽い衝突があったとも話す

『恋のサマーバケーション』

『生命の起源』知られざる神秘』

「と言うように二人で映画が別れました 昔と違って二人共好みがかわってしまったのです」

「ちなみに俺はどちらも見ようとは思わない」

「名前だけなら 生命の起源とか気になるな」

「なら 今度見に行きませんか!」

「まあ この問題が解決すれば幾らでも付き合っただけさ」

「うう……………これは揺らぎますね」

「幸太郎の犠牲で全てが丸く収まるぞ」

「弟と袂を分かつべきか？」

五月もそんな事で二乃と仲直りされても困るんだけどな
ただまあ……映画が何かのきっかけになれば良いかもな 少し俺
も考えてみるか

「あー 今日まだごみ出してないかも！」

「今日是不燃ごみの日ですね まだ間に合いそうなので 私が出して
おきますー！」

「五月さん ありがとう」

夕食の合間も五月は普段と変わらず世話焼き人間だ

らいはが出し忘れたごみを出しに……向かったと思えば勇也さん
が探す腕時計を直ぐに探し出す

二人はそれに大助かりと言った感じで五月がいる事を喜んでいる
が隣の弟は何処か不満気な顔でもくもくと箸を進める

（風太郎 俺はあれを学校でもされたんだぞ）

（ほとんど世話焼き女房だな 何か二乃が怒った気持ちも分かってき
た 明日もう一度話してくる）

（そうか今の二乃は五月よりもまだ話は通るだろうしな）

五月が世話を焼く姿は俺には見慣れたものである

最初は多少なりと困惑もあったが今では日常の一つとして
……………

「そうじゃねーよ 同学年に世話を焼かれるのやつばおかしいよ」

「幸太郎君どうしたんですか 何か具合でも悪いんですか？ お口に
合いませんでしたか？」

「そうじゃない お前は本当にうちに来てもかわねーなと思ってさ」

「何だ 幸太郎 五月ちゃんにお世話されてるのか このこの！」

「勇也さんもからかわないでください 俺は頼んでませんから」

「私が自分の意思でやってる事なのでお父さんもお気になさらず」

「お気になるわ と言うか お前が勇也さんをお父さんって何でそう
なるー！」

「ふん 何なら お父様と呼んでも良いんだぜ」

「勇也さんも悪ノリは控えてください 俺は五月とは家庭教師と生徒って関係です」

本当にここしばらくはこんなやり取りだ

昼頃に俺が心配だと五月は探しに来てくれたが、やはり今の関係は他から見てもおかしいだろう

何でここまでして俺につき合うんだろうな 六花さんならその理由も知ってそうだ

(俺が困っていれば来るとあの人は言ったけど 今は来ないんですね 六花さん)

頭に浮かべるのは俺の恩人の姿『自分で考えよう』と脳内では白旗を挙げている

はあ……………五月も何時までうちで世話になるつもりだろうか

早く仲直りして彼女も姉妹達といられれば

それが一番なんだろうけど後は明日の風太郎との話次第でどう動くかだ

今回の事といい風太郎は俺が思っているよりも二乃とは上手くやれてんだよな

本人は先ほどからずっと無口を決め込んでいるけどな

いい加減お前も何かを話してほしいんだけど……………。

『こつちに話を振るな』と無言ながら圧を感じる

「はあ……………」

「またため息ですか」

「何ですか 五月さん」

「いえ 幸太郎君 やつとまともに私と会話をしてくれるようになってくれたと思ひまして……………」

「ああ……………六花さんと話すまで俺も風太郎も忙しかったしな」

「先ほども会話にまぎってくれましたし 無事に考えが纏まったようなら良かったです」

「まあな……………ふあ 眠い」

「お布団敷きますか!」

「そこまでする必要はねーよ 自分でやるわ」

「いえいえ それくらい私が」

寝るときくらいはそつとしておいてくれ

お前は自分の布団でも敷いてろ 本当にお前に関しては分からん
事ばかりだよ

「お父さん 五月さんお嫁さんに貰おうよ」

「幸太郎の手綱をちゃんと持つてる辺り 五月ちゃんなら任せられそ
うだな」

「親父もらいはもそれくらいにしておけ 幸太郎に怒られるぞ」

第五十三話 不良少年とキンタロー君作戦

風太郎は放課後になればそのまま二乃の泊まるホテルへと向かって行き

俺はと言えば四葉の説得にかかり 悉く失敗ばかり
学園でも有名な中野姉妹を追いかけまわす人間として今では新たな噂も流れる始末

本当に暇な奴らしかいねえーのかこの学校は？

「お疲れ様 お兄ちゃん」

「お前は学校ではその呼び方をするなど………」

「コータローお兄ちゃん」

「やめろ 三玖何かに目覚めそうだから」

「コータローお兄ちゃん」

「ふうんだコータロー君 何てもーしらない」

四葉を追いかけ暫くは休憩していれば

何処から一花が現れ あの一件以降続けるお兄ちゃん呼びを未だに学校で続けている

他の生徒に見られたらどう弁解するつもりなんだ

三玖まで一花の真似をして『お兄ちゃん』と言いだし始めた少々来るものがあるが

今は我慢しよう

『上杉は変な性癖をもってる』と言いだされたらそれこそ俺は学校に通える自信を無くす

「お前らは勉強捗ってるか？」

「うん問題集をちゃんとやってるよ」

「毎日あれを相手に奮闘するんだから少しはご褒美も欲しいかなー」

「はあ………適当に考える」

「わーい お姉さん頑張るぞー」

「元氣だねー お前は」

「コータローも何処か嬉しそう 昨日は少し落ち込んでたから」

「色々ありました」

「本当だよ 急に電話かけてくるんだもん びっくりしたよ」

「二乃と何かあったのかと少し焦った」

「その節はどうもお騒がせしました」

「それで 何があつたのかな」

「秘密です お兄ちゃんも偶には妹にも秘密を持つんだ」

勉強はきちんと続けているし 問題集とも戦っているが実の所成果は出ているかは

自分達では分からないと言っていたが、俺からすればちゃんと続けるだでも有難い事で

期末試験にもその結果は出てくるだろうと俺は強気だ

本人達も二乃や五月 それに加え四葉の事も気になつてそつちに手を貸した中

良くやってくれている 一花に言われたらという訳じゃないが何かしら褒美をやっても良いくらいだ

真弓ちゃんの話では三玖は普段以上に授業にも取り組んでいる様子らしく

一花も一花でちゃんと勉強しているんだろうな

そんな二人だが昨日の俺からの電話が気になるらしく

結構な食いつきを見せる 二人は六花さん搜索には手を貸すと以前述べていた

まさか俺が昨日 その本人と出くわし 似ているからという理由で二人に電話したとは言えない

それに今は期末前で余計な心配もかけるべきではないだろう テストが終わればいくらでも話してやる

「テストが終わればか……………」

「コータローなんか表情が険しいけど 本当に大丈夫?」

「大丈夫 大丈夫 二人こそ勉強してくれて有難いけど 適度な休憩を忘れずにな」

「了解 コータローもフータローもあまり無理はしないように」

「へいへい」

「その返事の仕方はちゃんとしない時」

「三玖は最近 五月に似て来たな」

「姉妹だから 似てるところもあるよ 三玖はコータロー君が心配な
んだもんね」

「うーん…。 一花！」

「何だか知らんが お前ら二人は仲良さそうで安心するよ」

「そう見える？ コータローくん」

「えっ……………」

「って 冗談だよ あっスマホなってるよ」

「おっ おう……………」

一花と三玖は俺が見ている中でも特に仲の良い二人だと思い

ふと口から出たその言葉 一花はすぐに反応し 俺は一瞬彼女の
表情に戸惑ったが

助け船とタイミング良く 俺の持つスマホが自己主張しだす

やけに真剣な表情でたじろいでしまった……………。

ディスプレイを確認し それが彼からのものと分かれば迷うこと
なくそれに応答する

「本当かそれは……………わかった 俺にいい考えがある 後から
合流する」

「フータローは何だって？」

「少し おもし…まあ今の状況が好転するかもしれないって事だ」

「へえ 彼もやるねえ」

「そこでだ 二人に聞きたいんだけどさ」

「何かな」

風太郎…………彼に知らされたそれを聞いて俺は、最悪な未来も考えた
が

有難い事に ここにはその手のプロである 二人がいる訳で少し
アドバイスでも頂くか

ドッペルゲンガー作戦ならぬ 成り代わり作戦を…………。

「ど どうも……………」

「さっ遠慮せずに入って お邪魔します……………」

現在風太郎は二乃が待つ ホテルの一室におり彼女と二人談笑しており

先ほど二乃から『本当にキンタロー君が来たんだけど！ど どうしよう』物凄くてんぱった声で電話が掛かって着た

『キンタローはワイルドだが聞き上手だ そのまま会話を続けろ』と淡泊なアドバイスを投げる

こくりと電話越しでは頷いてあろう二乃 本当にキンタローがいれば素直だなと驚かされる

その俺はと言えば ホテルのエントランス付近で一人待機中でスマホと携帯をそれぞれ準備して

直ぐに二乃との連絡が取れるよう待機中である

俺が一花達と話している時に風太郎が『最後の心残りがキンタローの事だ』と教えてくれた

そこで風太郎と話し合い決行がされ

『風太郎くん成り代わり作戦』を行う事になった

二乃を騙して悪いとは思う 本当は正直に伝えた方がきつと円満な解決策だ

でも彼女が最後にキンタローと会いたいと言うのなら 風太郎は彼になると言うんだ

俺は止めはしない 風太郎を最後まで支援させてもらう

もしも二乃が風太郎に電話を掛けた時の対策として彼の携帯は預かっている

三玖曰く『本気で演じれば 私や五月以外は声だけだと二人を判別できない』との事だ

詳しい概要は教えていないが 俺が風太郎の声真似をしたらと適当な理由で切り出した話である

一花は少し考え込んでおり 勘のいいこいつだ下手な事は言えな

いな……………。

先程の電話でもやはり 俺が幸太郎とは二乃も気づいてはいない
余程 キンタローと会えたのが嬉しいのだろうな

『もしもし キンタローくんちよー 優しんですけど!! って緊張して
まともに顔見れないわ!』

「ほう それは良かったな あいつも都合を合わせた甲斐がある 喜
んでる筈さ」

『あの キンタローくんってシユークリーム嫌いじゃないよね』

「ああ 食べてくれるはずだ 二乃が作るんだ美味しいだろう」

『オーケー!』

本当に機嫌が良いな 一目惚れと言うのはあながち嘘ではないよ
うだ

これは思っていたよりも大変な事かもしれない……………。

(二乃は本気で キンタローに惚れている)

俺は腹をくくっている もしその時が来れば答えは風太郎に託し
ている

演じ切るのか明かすのか どちらに転んでも二乃を傷つける形に
なるのは変わらない

ただ 怒られるだけで済めば良いが……………。

(ダメなら 俺が全部引き受ける……………)

前へ進むためには心残りを無くしたい

そうすれば誰にも置いて行かれず自分も前に進める 勝手には進
ませない自力でやり遂げる

それが二乃が俺に話した事だ

『キンタローくんとちゃんとお別れがしたい』それを風太郎に話した
俺もその手伝いをする と決めた

例え間違ったやり方でも今 二乃の前には確かに キンタローと

言う一人の人間がいる

俺はその邪魔をさせない……………。

『彼に名前で呼ばれたわ!』

「で 進歩はあったか」

『今シユークリーム作ってる所よ』

「了解健闘を祈る」

名前で呼ばれた それが嬉しいと彼女は話す

微笑ましい 二乃が本当に心から喜んで楽しく過ごしているんだ

きつと……………これで心残りもなくなるはずだろう

暫くは二乃からの電話は今の現状報告が続き

キンタローもまんざらではないと二乃視点で語っている

本当はどんな顔で話しているのか少々気になるが、お邪魔虫はカフェで待機だ

『あ あんた今どこにいる?』

掛かって着たのは幸太郎の方のスマホだ

「ん? 俺は近場で待機してるぞ 二乃と話がしたかったしな」

『なら 好都合ね 一階のカフェで待ってなさい』

二乃からの連絡はそれだけだ

弟のまま電話をすると思っていたがここで俺へパスが回るとは待機して正解だったな

ここ数時間ひたすら電話ばかりしておりいい加減店員の目が痛くなってきたし

二乃が来るまでの辛抱だ

「早いわね」

「電話で話したろ お前と話すから待ってたって それでどうした」

「その 実はさ キンタローくと会ってたの」

「ほう あいつも喜んでいと思うぞ」

「そうかなー」

上機嫌 上機嫌です

ああ 心が痛いよ

前の席に座り 適当に注文を始め『あんたアイスコーヒーで良いかしら』と俺にまで配慮している

キンタローくんの存在は二乃にはとても大きなものなんだろうな

「私 彼にコクられるかも」

「ほー」

「だってあんな真剣な顔して 大切な話って何よ そんなの一つに決まってるわ」

「流れだけ聞けば確かにな お前も名前で呼ばれて随分と嬉しそうだし」

「……………そうね それであんたはどう思う？」

「俺はそうだな……………」

二乃がキンタロー（風太郎）から大切な話があると言われ

その緊張を解す為一旦離籍し 話し相手として俺を呼んだと言っている

二乃は告白と捉えているが きつと

風太郎は自分の正体を明かすつもりで真剣に彼女と向き合う決心をつけたんだ

さて 俺はどう答えるべきだ 勝手に俺が明かすのも覚悟を決めた風太郎の気持ちが無下にする行為だ

ただ 『付き合えよ』と言うのもすごく無責任すぎる発言だ ここは慎重に考え、彼女自身のこれからを見届けよう…。

「あつ キンタローくん」

「どこだ！」

「そこに今……………って冗談よ それにあんたの意見は聞く気無いし」

「真剣に考えた 俺の時間を返せ」

「ふ 相変わらずね あんたも……………」

「どうかしたのか二乃？」

「上杉には連絡取れないから あんたに言うわ 彼と会わせてくれて
ありがとう」

「本当に 風太郎に言えよ それは……………まあ うんどういたしま
してだ」

二乃は今の現状を整理する為だと話す 元より意見は参考にもし
ないと

全くこのお嬢様は変わらないな 何処か気晴らし程度だが心の整
理も着き戻ると話す

去り際に握手を求められ 俺はそれに応える

「この先 どんな結果になっても彼との今の関係に一区切りつける
わ」

「俺は何んもできないが……………頑張つてこい」

握手が終われば二乃は立ち上がる

そのまま部屋へと戻るのだろう

俺も何だか眠くなってきた最近は気を貼ってばかりでまともに睡
眠も取れて無いんだろうな

また五月にどやされる……………

俺はこの時すっかり気が抜けていた

自分自身が発した 凡ミスにすら気づけずにいた

悠長に欠伸なんぞして 二乃の表情の変化すらわかっていない

プルルルと音が鳴る それは 俺が持つ 風太郎の携帯だ
まづい……………

「二乃 これは…。」

「うん やっぱり あんただったんだ」

「まさか お前」

最初からなのか それとも途中からなのか

二乃は既に気づいていた 電話の相手が風太郎ではなく俺である事に

とことん俺は詰めが甘い

「気づくわよ あんたが思ってるほどあんたは自分以外演じれないから」

それに私は『二乃』と彼に言われた話をあんたには伝えてないのよ」

「説明を……させ……なんだ 急に」

「あいつが 上杉だつてことも気づいてるわ 前回と違ってよく見えるから」

真似なんてしてもすぐバレるわ 五つ子じゃないんだから………さようならコウにい」

本当のさようなら 彼女はそう告げれば去って行き

俺は意識を失った どのタイミングで薬を盛られたのか今考えれば

『キンタローくんだ』と分かりやすい誘導をした際にだろう

初日と違い まさか二乃が再び同じ手を使ってくる事など俺は想定もしていなかった

覚悟は決めたつもりだが、二乃の方が俺達よりも上手であった………。

暫くした後 息を切らして現れた風太郎

『俺も気が付いたら寝てた あいつ飲み物に仕込んでた………。』

俺が二乃と会っていた時には既に眠らされており ホテルの従業員に起こされ

下のカフェで意識を失う俺を見つけたと話す

そして 二乃は俺達の前から去った

今度こそ何の痕跡もない 手がかりすら失った………。

第五十四話 不良少年と四女の苦悩

「終わったー」

『『天才！』』

「えへへ……もう 一生分勉強したかも……」

中野宅に残された 一花 三玖 四葉

その中でも最大の難問となっていた四葉は遂に渡された問題集を終え

どてーんと横たわり 二人から喝采の拍手を受けている

本人も満更ではないと笑顔で答える

「五月と二乃も今頃やってるのかな」

「居場所は分かってるし あの二人がいればね」

「きつとすぐに戻ってくる」

無事に二人から渡された問題集を終えた三人だが

家出をした残り二名の成果が気になり その話題へとシフトした

二人のうち一人は家庭教師である上杉風太郎の家にいる事は

幸太郎から聞かされており『そのうち戻るだろう』と彼からも言われている

勉強馬鹿の風太郎の家でお世話になっているそうならば

ただで泊まらせてもらっている訳は無いだろうと一花は述べる

現状報告は随時幸太郎から聞かされているが勉強の度合いは彼女達も知らない

『五月なら大丈夫だよ』と彼がいるならと三玖は話す

一方の二乃は五月以上に現状は不明であり 二人からはそれに関しても知らされてはいない

(コータローくん もう少し三玖の気持ちも考えてあげてね)

「四葉 鳴ってるよ」

「あ もしかして……ついに二人から連絡が……ってごめん 陸上部の部長からだった」

他の姉妹の現状を話し合う中で四葉のスマホが鳴り出した

三玖の教えで早速 通知を確認したが、四葉何処か疲れた表情で肩を落とす

しかし悟られないよう 二人には笑顔で返し『ああーお風呂入ってこようー』

立ち上がればそのまま向かってしまう

三玖と一花の心配する開いては 二乃と五月だけではない

四葉もその中の一人に数えられている

毎度の事風太郎と幸太郎は彼女を追いかけ走り その都度逃走し

『まかせてください』と彼女は言い張るのみだ 実際問題集も終わり 無事に事が終えた

…しかし 未だ陸上部から声はかかり続け 四葉はそれを断れず 毎日通い続けている

「一花…」

「うん 当事者同士で解決するのが一番だと思っていたけど そうも言ってられないみたいだね」

自分が請け負った事は自分で解決すべきだろう 一花はそう考えていた

周りの助けを時には貰うそれでも自分で決着をつける事がベストだ……………

でも今回はそうも行かない 期末試験も控えているが 四葉自身はどうしたいのか

一花はそれをずっと考え 三玖も頑張るが故に四葉にその事を聞く事すら出来ない状況だ

(四葉…………一人で出来る範囲にも限界があるって事 思い出してね…)

「勉強も陸上も頑張るぞ！」

そして夜は更けていく…

「朝だぞ五月起きろ」

「むう もう少しだけ…」

「今日は早めに出る」

「あと五分だけ…」

「そんな時間はない…」

「いいじゃないですか二乃……………！ あ あの おはようございます」

「ああ おはよう」

「おーい 五月は起きたか おっすおはよう」

「幸太郎君 おはようございます！」

「ええ：俺の頑張りは」

上杉家の一日が始まった 試験勉強も兼ねて少し早めに家を出る予定だった風太郎は

居候と化した五月に何度も声をかけるが『もう少し』と言うだけで起きる気配ない

ただ時間だけが過ぎて行つた しかし『二乃』と口にした途端に五月の意識は覚醒し目を覚ます

おはようとにこやかに挨拶を交わす彼を見れば

昨日落ち込んで帰つて来た人物と同じとは思えずにいた

その後はひよっこり幸太郎が顔を出せば、先程の眠そうな顔など嘘の如く元気に挨拶を返す

風太郎は改めて自分と兄の扱いの差を実感していた…。

「安心しました…私達のせいで気が沈んでいるようでしたので」

「全くだ 手を焼かせるな」

「もう大丈夫なのですか？」

「お前が心配することじゃねーよ 五月は自分の事を考えておけ」

「幸太郎の言う通りだ」

昨日の今日だ落ち込んでないと言えば嘘だろうな

二乃との約束を風太郎は破ってしまった そして俺もそれに手を貸した

結局は二乃に看破され 気づけばあいつの手がかりは無し 電話

にも出ないだろうし

ラインなんて俺は知らん 五月は心配しているが、今は自分の事に集中していて欲しい

五月は気づいてないだろうがやはり他人の家だ 傍目で見ても疲れが見える

「五月は五月に出来る事がある だから心配すんな！」

「はい そこまでおっしやるなら」

「試験勉強は順調か？」

「あの問題集も終わらせてます」

「上出来だ 一花と三玖からも連絡は来てるし 問題は……」

「そういえば に 二乃もやっているんですよね それなら安心してす」

まあ今も続けてくれているのなら……安心だろう

風太郎が、何処まで彼女と話したかは知らない

俺が知るのには二乃との電話とのやり取りだけだ……

けど、あそこまで二乃と話せていたのに最終的には薬で眠らされち

まって 風太郎も相当堪えてるだろう

俺もあまり人の事を言えた義理じゃない

この期末試験までの間は、彼女達の事を最優先に考え行動しなければいけないだろう……

その後は、五月達とクラスに向かい

風太郎は二乃の現状を知りたいと話す あまり気乗りしないがな

俺はあのクラスではどうも嫌われてんだよな……

「まあ自業自得か……」

「そう言う事は言わないでください 怒りますよ」

「五月さんは俺を叱るんですか」

「幸太郎君の為を想うならです」

「おい 夫婦喧嘩は後にしてくれ」

「誰がだ 誰が！」

「それで 二乃はいないのか？」

隣のクラス前で五月との会話をしていれば風太郎から『夫婦喧嘩』というフレーズが飛んで来た

こいつからそんな言葉が出るとは思いもしなかったな
必死に否定するが『はいはい』と投げやりに返される

五月は急に黙りこむし 否定くらいしてくれ…。

教室から現れたのは二乃と仲の良い生徒らしく彼女から今日二乃はどうしているのか聞き込みをした

最初は物凄く嫌そうな顔で俺から視線を逸らしていたが『二乃もあ
あ言つてたし大丈夫かな』と

何か独り言のような事を呟いている

(もしかして あの時二乃と俺に割つて入った子か?)

クラスの女子は『二乃なら休むって』と風太郎に教え それを聞けば二人で頭を悩ませる

「やっぱりな 風太郎」

「ああ…あとは信じて待つだけだ」

「痛手だな…」

「あのお二人共 朝からすこし変ですよ 何かあったのですか？」

「なんでもねえ」

「もう一人の問題児…陸上部の助っ人さんの所にいくぞ」

退路は無い そして二乃との連絡方法も完全に絶たれた

後は二乃が何処までやってくれるかにかけるしか残った道はない

事情を知らない 五月にはチンパンカンパンだろうが、色々俺達はやらかしたそれだけの話だ

(悪いな 二乃あんなやり方しか出来なくてよ)

本人に直接謝りたくても今 その本人はここにはいない

弱気な考えは捨て去ろう 残りの問題児 お人好しの助っ人の様子を見に行かないとな

後悔なんてあとで嫌でも出来るんだから…

昼休み 四葉が動き出したのを確認すれば風太郎と共に後を追う

気になるのだろうか五月も後ろからついてくる

中野姉妹での問題だ 五月が同行する事は別におかしい事でも無い

それだけ四葉も気になるし 先程の俺達の様子も気になってんだろうな

何処からか声が聞こえその方向に向かえば

数人の生徒と四葉が会話をしており『走りの天才 頼りにしてるよ』と一人の女子生徒が四葉に激励とばかりに賞賛の声を送っている 見ていて嫌なやり取りだ 四葉も何でそんな困った顔までして助っ人やっつてんだよ

隣の風太郎は『天才』というワードが出た時点で行動を開始し四葉の元まで足を運ぶ

「お前が天才とは世も末だな」

「よう 四葉 大丈夫か？」

「上杉さんにお兄さん」

「君は？ …んそっちの人はまさか あの 上杉幸太郎くんか」

「んなこと関係ねーよ」

「あんたが部長か？ 期末試験があるのに大会の練習なんてご立派だな」

「うん 大切な大会なの試験なんて気にしてられないよ」

「あ？ 試験なんて？」

「部長さん あんまり刺激すんのはやめてくれ」

「君には言われたくないな」

「っ……………」

「わー！ 大丈夫です！ ちゃんとやってますよ！」

部長である一人の女子生徒は何者か聞くが風太郎は答えず

話を進める 俺にいたっては知られていた 相手は運動部だ知られていても無理はねえな…。話を続ける中で 彼女はさも当たり前かのように『勉強なんて』と言いだし

流石に風太郎もその言葉聞きづてならないのか食って掛かる

落ち着かせようと 彼女に無駄な発言は控えるよう言うが『俺にだけには言われたくない』と痛い所をついてくる 何時の間にか喧嘩腰になっていたのか 四葉が俺達の間に入って入り

大丈夫ですと心配させないようこちらを見て答えている

(俺には大丈夫そうには見えんぞ…)

「四葉無理してませんか？」

「うん問題なし」

「もういいかな？ まだ走っておきたいんだけど」

「まあ四葉がそういうなら 止めねえよ」

「ちよ ちよつといいんですか？」

「俺達も走つか…運動不足だろう風太郎」

「そうだな 走る分なら 邪魔にもならない」

五月の呼びかけにもこの反応ならば強行手段も辞さない

風太郎と俺は袖をまくれば軽くストレッチをし 走り込みに参加すると部長に声をかける

『ご勝手に幸太郎さん』と全く過去を知る相手は面倒この上ないな

(幸太郎君 あの方と何かあったんですか？)

(あの子個人とは今回が初顔合わせだ 同学年だった子だ 俺の噂を聞いて敵視してんだろ)

(幸太郎君ら何もしてないのに何でそんな事をされるんですか 納得できません！)

(まあ 運動部は俺が嫌いだしな 色々あったんだよ まあ五月は待っててくれ)

どいつもこいつも理由も知らずに適当いやがってな

流石に俺はあの野球部を庇護する奴はどうかと思うがな…。

相当学園内だけでは 外面が良かったんだろうな 耳が痛くなる言葉だよ

「さて 久々に本気で走るか」

「幸太郎君 無理だけしないようお願いします」

「はいはい」

五月さんから何時もの言葉をいただければ俺も足を動かし

去って行った風太郎達を追う事にした　今は少しでも四葉の近く
であいつの本心を聞けるチャンス伺わねえとな　あの女は『頼り
にしてるよ　走りの天才』とぬかしていた

本人は四葉をここに押しとどめる為に言っている言葉だろうか…。
言っている本人は何んも分かんねえんだろうな

期待され頼りにされる奴はどれだけそのプレッシャーに怯えてい
るかを

何処までその期待に応えないといけないのかって事にさ

四葉を第二の俺みたいにさせる訳には行かねえ…。

「あと5周!」

「はあ…:ゼエ…し　死ぬ」

「風太郎　無理はすんなよ」

「お　おまえもやつぱ大概だ」

校舎を回る事5周折り返しになって来たのか

風太郎も限界に近く　息も荒いし軽く喘息のようになってい

チラチラと後ろを振り返る四葉はどうにも身が入らない様子で部

長は何度も声をかける

「上杉さんもうやめた方が…」

「まだだ!」

四葉でなくとも心配はするだろう

でも風太郎も意地だここは引かない

「フランスのルイ14世が造営した宮殿は」

「ベルリンの宮殿」

(王宮だ)

「『走れメロス』の著者は?」

「太宰龍之介!」

(太宰治と芥川混ざってんぞ)

「周期表四番の元素は?」

「すいへーいりーべーべりウム！」

(僕の船ー！)

(全部微妙に間違ってる)

息も絶え絶えの中で彼女の頑張りを確認する

自信満々に答えてはいるが絶妙に違い 何故か混ざり合ってる答えまで存在している

でも以前なら これを答えるのも不可能だった

そう思えば、彼女は確かにこの数日間頑張っている事が伺えるけど、果たしてこのままで良いのか……

「だが予想以上に覚えている 本気で両立するつもりかっつて！」

「無理しやちダメですよ もう休んでいてください 私は平気です お兄さん 上杉さんをお願いします」

「了解だ 風太郎出直すぞ……四葉 一言言わせてくれ 無理をして得られるもんはたかが知れてるぞ」

「……では私はこれで！」

顔を伏せたまま四葉は陸上部の元まで走って行く

疲れ果てた風太郎を担ぎ一度態勢を整える為 俺もここから場所を変えた

本当に彼女が何をしたいのか 何を言いたいのか

あの部長ではなく 四葉自身の口からそれを聞きたい

大丈夫とは誰でも言える けど大抵その言葉を使う時人間はギリギリまで追い詰められてる時なんだよ……。

だが、これ以上下手に動けない……だから俺達は最後の最後までお前を信じる……お前からこっちに歩み寄って来ることをさ

「この土日で合宿を行う」

「それはちよつと……」

「中野さん あなたは走るために生まれてきたの 私が あなたを立派なランナーにしてあげる」

「は……はい」

俺達のあずかり知れぬ所で 四葉はまた更なる試練が待っていた

中野四葉は洗面台で歯ブラシを口にいれ ぼーっと鏡を見ている
左手に握られたスマホには 宛名上杉風太郎となっており
文章を書いているのは消し 書いては消しの繰り返し 何をすれば良い
のか

どうすれば上手くいくのだろう 考えれば考えるほど状況は最悪
になる一方で

気づけばテスト勉強の暇すらも消え 睡眠もまともに取れないと
いった悪循環

このまま彼にこれを送れば 自分は彼等と共にいれるのだろうか
でもそれは 陸上部への裏切りなのは………送信を押そうと
する指はその場で固まる

『無理をして得られるもんはたかが知れてるぞ』
彼の兄が自分に投げかけた言葉が妙に刺さる 本当は自分でも分
かっているのだろう

この状況は良くないと………けど 困っているならそれを助け
る

それが自分なんだと四葉は何度も何度も自分に言い聞かせた

「送らないの？」

「うわあつ 一花く心臓に悪いよ」

「私も歯磨きく」

突然 かけられた声に彼女は肩をびくつとさせ横を見る

ニヤリと笑う中野姉妹の長女 一花だ

自分も歯磨きをするため ここにいる 見てみればスマホ片手に
歯ブラシを咥えてるだけの妹がいた

そう言われてしまえば四葉は黙って俯く

『まだ 磨けていない』と一花が四葉の歯を磨くと言い 抵抗も虚し
く

彼女の言葉に押される四葉は口を開け 一花は歯ブラシを妹の口

に入れた

何とも懐かしい感覚だと 彼女は言う 四葉も何処か気恥ずかしさが残るがこの感覚は嫌いではない

ただ 自分が感じた その味は自分の知らないものだ

『これが大人の味なのだ』と一花なりのいたずらを受ける

そのままされるがまま身を任せた ふと一花は『無理してるから口内炎出来てるよ』と

五月達と同じく 自分が無理をしていると指摘を受ける

大丈夫 無理はしていないと笑顔を作り誤魔化そうにも 一花相手に作り笑いも演技も効果はない

「どれだけ大きくなっても 四葉は妹なんだから お姉ちゃんを頼ってくれないかな」

「私……………部活辞めちやダメかな……………」

「やめてもいいんだよ……………」

その言葉は本心から出た 彼女の言葉だろう

聞きたかった言葉だ これで妹の力になれると…………。

しかし 四葉は 姉の言葉でハツと我に返る ダメだダメだ

自分はこの事は何も言っていない そう誓った筈だ

「や やっぱだめだよ！ みんなに迷惑かけちゃう 勉強とも両立できてるんだ 一花がお姉さんぶるから変なこと言っちゃった 同い年なのに」

笑って誤魔化し そのまま一花から逃れれば 自分も大人だと主張するが

姉も負けていない 洗濯機から一着の下着を見せれば 四葉も慌てだす

『お子様だよ』と……………

「しまつといて！ 上杉さんとお兄さんが来た時は見せないでね」

「はーい」

ぶんすかと少々機嫌が損なわれた四葉は姉をおいて先に洗面所から去って行く

手を振り見送る一花だが………しまっておいたそれを取り出した

スマホには上杉幸太郎と表示されている

「二人共 ちゃんと聞こえてた？」

『お子様パンツ』

「よかった」

「明日 陸上部のどこ行こうと思う 君達は どうする？」

「行くに決まってる」

「あいつを助ける！」

「よし 私は私で頑張るからさ 三玖任せたよ」

通話ボタンを切れば 一花は外を眺める

自分が今すべきこと それは妹を解放させる

そして もう一人の妹に家出した妹の説得を任せ信じる事のみだ

「お邪魔します」

「私にプライベートは無いのかしら」

中野二乃と中野三玖 数日ぶりの話し合いだ

第五十五話 不良少年と二と五の結束 四の覚悟

無言電話がかかり見て見ればそれは一花からの物だ
あいつがこの状況でそんないたずらをする筈もない
風太郎にも聞こえるよう二人で耳を澄ませた
ついでとばかりに五月も聞き耳を立てる……………。

『私 部活やめちゃダメかな』

それは俺達が聞きたい言葉だった

四葉の気持ちだ あいつが何をしたくて何を思っているのか決して本心は言わない

家族だから一花は姉だから 四葉もついその言葉を口にしたんだ
これでやるべき事は決まった

四葉を助け 陸上部から解放する 家庭教師の俺達の出番だ
決戦は明日 四葉の為にもそして姉妹の為にも失敗は許されない

そして向かえた朝 俺達は一花と合流し作戦会議を始める

どうやって四葉に本心を言わせ 陸上部との固執を生まないようにこつちに戻すかである

テストと陸上部の大会の日は別だ ここまでやってきた彼女の頑張りを見失ってはしない

一花が言うには 四葉は陸上部の合宿に参加させられる予定である
と

大会には全力で挑ませる けど合宿にまで出てみる 四葉はもうそこで動けなくなる

チャンスはこれが最後だろう

加え 二乃の説得に向かった 三玖から助けを求める電話まで掛かって着ている

あいつら何をしてるんだ？

「大丈夫だ 意味合いを考えろ 四葉はいい加減限界だろ 三玖まで

「……………」

「それもあるが 陸上部も陸上部だ。こんな時期に合宿なんて考えられん。まったく、試験前だつてのにとことんまで勉強をおろそかにしやがって」

「あなたのことなので突撃するのかと……………」

「余り派手に動くのは止めた方が良いな 先ずは四葉をどうにかしな
いと」

「なら直接お願いしに行きましようか？」

交渉 それはあつちとこつちが対等な場合に成立する事だ

昨日の陸上部の部長との会話でハッキリした あいつはこつちの
意見を聞きもしない

四葉との会話もさせる気はないだろうな

五月の意見も取り入れるが慎重に動こうと一応は提案 五月はこ
くりと頷く

後ろでは未だに一花が電話越しで三玖と話をしている

焦りようからすれば向こうで大変な事が起きてんのか助けに行き
たいが三玖を信じる あいつならやれる

幸太郎 作戦がある 一花 そのまま三玖を連れてきてくれ」

「でも……………」

「今は風太郎を信用してくれ 四葉の為だ 頼む」

「わかった！ 待ってて」

「??」

「幸太郎 気づいたようだな」

「四葉が断れないのなら 入れ替わり作戦って事だろ？」

「！えっとそれは」

「大丈夫だ安心しろ」

「わ 私は苦手です……………以前 一花の真似をした時も心臓バクバク
で」

「一花の真似？ まあ今は良い 風太郎が三玖を呼んだ理由は三玖に
変装させるためだ」

「ああ……………それで」

焦る五月だが本命は三玖だ 本人の言う通り五月にこの手の事は向かないだろう

表情でもろに出てしまう

三玖はその点 慣れてる 一花がダンスの誘いを受けた日に彼女が一花の振りをしたと風太郎から聞かされている

概要は説明したのは良いけど 陸上部から本物を連れ出す手立てはない

俺達が出れば 確実に妨害されるだろうしな

「二人共 あいつら出発しやがった！」

「駅に行かれたら終わりだ その前に四葉を奪還する」

「やりたくもない 部活で貴重な土日を潰されてたまるか」

「しかし どうするんです？」

「背に腹は代えられん……………五月頼む！ お前が頼りだ」

「何時も断るのに幸太郎君は調子良いんですから……………わかりました やります」

「よし……………」

四葉の振りさせるには本人を陸上部から引き離す

ただ そう簡単に行かない 既に行動を開始している

三玖が居ない以上は五月に彼女の振りをして貰うしかないのである

「あははは」

「リボンも似合うな」

「そう言う話じゃない……………（はあ…不安しかねえ）」

近場のコンビニでリボンを買って それを装着する五月だが本人は苦笑い

確かに感想を言ってる暇はないな……………。

運の良い事に陸上部は歩道橋のしたで止まっているその間に五月には四葉になりきってもらおう

「一身上の都合により 退部します」

「四葉にしては真面目すぎる」

「もっとアホっぽく」

「ぶ 部活を辞めさせていただきたく」

「固すぎる」

「もっと アホっぽく」

「無理です！ こんな役目もうやめたいです！」

「それだ」

「それ それー！」

四葉にしては真面目過ぎるし 何処か堅苦しい

話をするならある程度は中身も真似をしなければ部員にバレるだろう

軽い練習の末に アホっぽい五月が誕生した

「うまくいくんでしようか……………」

「作戦はこうだ」

「ひとまず 俺が四葉を陸上部から引きはがす 幸太郎にはここで一花達を待ってもらおう

その後 何食わぬ顔でお前が集団に戻り退部しろ」

「引き剥がすねー どうすんだ？」

俺と五月が彼を見れば 息を大きく吸い 耳を塞げとジエスチャー

？と顔を見合わせ 言われた通りにすれば……………

「痴漢だー！ー 痴漢が出たぞー！！」

「おま」

「まさか」

「痴漢！ その人止まりなさいーい」

（いけ 俺が捕まる前に……………なっ！）

（捨て身過ぎる いくぞ 五月 アイツの犠牲を無駄にするな！）

（なんとという捨て身の作戦……………了解です！ 二人の言葉を信じます）

大声を出した風太郎はその場で逃走し 俺と五月はそれぞれ別の

場所へとすぐさま移動

向かってくる四葉は俺らには目もくれず 痴漢（風太郎）を追い何処かへと走って行く

体力の少ない弟が自分を犠牲にしたんだ 俺もやれるだけ時間稼ぎさせてもらうか

「はあ…はあ…あはは…すみません…逃げられちゃいました」

「もー、いきなり走り出すからびっくりしたよー」

「早くしないと予定の電車行っちゃうよ」

「私 合宿にはいきません」

「えっ?」

五月は何事もなく 部員達の輪の中にはいり

頭を下げる そのまま合宿には参加しないと部長である生徒に聞こえるよう声を出す

ただ今更ながら この作戦には大きな問題がある…。

気づくのが遅すぎたな

困惑する 部員達 ただ部長は少し様子が変だ 疑るように四葉

（五月）を見る

「私 部活を辞めたいです…」

「なんで?」

「来週は試験ですし…」

「違う 違う 私が言いたいののは なんで別人が中野さんのフリをし
てるの?」

あの女 気づいてるな

五月は精一杯四葉だよ アピールをしているが、彼女はそれを冷静に対応し、何度も 問う 『どうして そんな事しているの』 五月は何とか粘るが限界だろう

ちらりと上に視線を送れば風太郎も様子がおかしい事に気づき始め

下を見ている 同じく下を眺める四女の姿…四葉は確保出来たよ うだな…。

(無理だ 五月 お前は四葉と違って…)

「髪の長さが違うもん」

(ですよねー)

(くっ… 鋭い観察眼だ)

(前も こんなことありました もっと他人に興味もってください)

四葉も心配そうに見ているし そろそろ俺も動くか 一花からの連絡待ちでは五月が持たんぞ

すまん 風太郎後は任せたぞ…。

近くで隠れ様子を窺っていた俺は五月の救援と一花達が来るまでの足止めとして彼女達の前に顔を出す

「あんなにやる気のあった 中野さんが」

「やる気だ？ 適当言ってるなよ」

「あれ 上杉幸太郎くんじゃないですか 何でここにいるんですか？」

「うるせ お前の話はどうも尺に触る」

「幸太郎君！」

(お兄さん！ 私のために みんなまでありがとう でもすみません 行きます！)

(幸太郎 お前って 待て四葉!)

「ここまでやれば警戒も何も無いだろう

元から俺を嫌っている連中だ 顔色なんて窺う必要はない

それに 俺はこの部長の言葉が気に入らない

期待 信頼 走る為の才能 こいつは何を抱いてるんだ?

確かに四葉の持っているそれはどれも素晴らしいもんだ

あの性格だきつと真面目に取り込んでいたし それに四葉は目の前で困っているなら決してそれを裏切らない 裏切れないんだ
……………

でも それはそれだ この生徒はそれを自分の良いように聞き取り思い込んで勝手に都合を押し付ける

俺がもつとも嫌いなタイプだ

「てめー 四葉の意見は聞いたのか?」

「中野さんは良いって」

「それだけだろう 疲れた 休ませて 少し時間を あいつはどれかでも言ったか?」

「中野さんはそんなやわな」

「それだ その思い込みだ! 勝手に自分の理想を期待をあいつに押し付けるな」

「押し付け 君もでしょう? 中野さんは真剣に考えてくれてる」

「アイツだって思う事はある それを自分勝手な都合で勝手に話を進めて…。意見をする前にお前は先手を打つそして退路をけす お前にわかるか、頼られる側の人間の気持ちか 責任が お前 部長なんだろう? 人の気持ちを考えろ」

「幸太郎君 もういいです ここは」

「まだだ 俺は言い足りない! どれだけあいつが苦しい思いをしてんのかこいつは知らねえ! お前のやってる事は!」

「お願いします 幸太郎君 落ち着いてください お願いしますどうか冷静に」

「はあはあ……………」

さっきの言葉はどれもこれも俺に突き刺さった

勝手に家庭教師してそれをやらせてる俺達も本質的には変わんねえけど　ここまでではしない

少しはあいつらの意見も聞いているさ　でもこいつはどうだ　四葉の言葉を何一つ無視し

あいつが走っている姿にしか　興味を示さない　エゴイストだ…。
分かんねえって顔で見てるな　こいつには永遠に分かんないだろうな…。
信頼を勝手に向けられ　裏切られる人間の気持ちは…。

そのどれもが重荷になって気づけば身動きが取れない　誰も助け
てくれない

助けを呼ぶ事も許されないんだ　期待を寄せられる側は応えない
事への恐怖がずっと付き纏う

四葉はいい奴だ　きつとやり遂げる　信頼に答えつつづける　でも
休ませないと壊れちまう

声をあげ女性徒に食って掛かる情けない男　それを止める五月
四葉の振りをさせる筈が俺は邪魔しか出来てない　情けない奴だ

「お待たせしました〜」

後ろから声が聞こえる

「みなさん　ご迷惑おかけしました」

「中野さん」

「今度は本物だよね…?」

「あはは　ちよつとしたドツキリでした　五つ子ジョーク」
「四葉…」

「お前何で」

「なんだ冗談だったんだね でも笑えないな こんな人まで呼んでさ
でももういいや 戻ってきたし」

「お前！」

「幸太郎君落ち着いて」

「っ」

「確かに怖い方ですね まあ 私が辞めたいのは本当ですけど」

突然現れた 四葉と名乗る同じ格好の少女

その物言いは四葉そのものだ そして何事もないかのように『辞めたい』と口にする。言葉が理解できないのか 陸上部は全員困惑の表情で彼女を見ており

部長は動揺が隠せないのか慌て始める

「な…中野さん…？なんで…？？」

「なんでって、調子いいこと言ってる私のこと、ちつとも考えてないじゃないですか」

「そ それは！ 中野さんが頑張れるように」

「そもそも、試験の前日に合宿を決めるなんてありえません。」

「全部あなたの！」

「マジありえないから」

「はい ごめんなさい」

この子は本当に四葉なのか？

彼女の迫力に押され遂には負けを認めたのだろう その場で膝をつく部長

そして見下ろす四葉は冷めた目だ あいつが本気でキレるとここまで怖いものなの…

いや この怒り方 …まさか

「どういうことだ…？」

「つ　ついに出た…ドツペルゲンガーだー！　死にたくありません」

「ドペゲンと言う事は　そうか！」

「ふう　間に合ったみたいだね　全く　五月も彼も無茶をしてさ」

「間一髪で助かったぜ　お前が三玖を連れてきてくれたおかげで…」

「私はここだよ」

「あれ？」

「三玖間に合ったのですね」

「私は何もしてない」

「私たちはカツラがないと髪型的にねー」

「となるとやっぱ…あいつは…」

「コータロー　お疲れ様　声聞こえたよ」

「悪いな　お前らの連絡も待たずに先走った」

「ううん　コータローと五月が時間を稼いだお陰で　間に合ったから」

「俺はただ　騒いだけだ　それに　二乃だろ　あれ　髪型短くしたのか？」

「ハサミを持って　三玖が立ち尽くしてたの」

詳しくはわからないけどきつと気持ちの変化があったんだね」

階段を昇り上で風太郎達と合流し　一花に声をかけようとすれば

後ろから三玖が現れ　おれの考えは確信に変わった　カツラがなければ変装は無理と一花は話す

ならば　誰かが髪を切ったのだろう　そしてその誰かは一人だけだ

中野二乃　彼女だ

リボンを外し　何時もと同じく蝶のようなりボンをつける

髪を切る　男はどうだか知らないが女が切るとそれは一種の決意表明だと坂下は語っていた

二乃はここ数日で様々な物とぶつかりながらも前に進み　答えを

得たのだ

知らない内に成長していると言うがまさに その通り 彼女は確かに変わった

「そんなにサツパリいくなんでもしかして失恋ですかー？」

「…ま そんなところ」

「キヤー 誰とく？ 三玖知ってるく？」

「知らない」

「内緒よ」

「何？」

「言っておくけどあんたじゃないから！」

「お おう」

「わかったわね」

元の髪に戻せば 風太郎の方まで歩み寄り 指を彼に向けて主張する

戸惑う風太郎にそれを言い終わると二乃は彼の前を去る

「あと そののあんた」

「悪かったな騙すかたちになって すまん」

「次はないからね」

「了解だ 二乃 その髪も似合ってるぞ」

「ふんだ！」

(さようなら キンタロー君 さようならお兄ちゃん そして幼い頃の私達)

言いたい事を言い終えれば二乃は四葉の元へと向かう

何だか妹が巣立った気分で俺は少し寂しいがこれもあいつが決めた事だ

それを受け入れよう……そ

れに二乃きつとお前は いや今はよそうか

自ずとその答えに彼女も行きつく筈だろう

風太郎 お前も身の振り方を考える必要が出て来たぞ…。

「四葉」

「！」

「アタシは言われた通りにしたけど、本当にこれでいいの？こんな手段を取らなくても本音で話し合えば彼女たちもわかってくれるはずよ。あんたも変わりなさい。辛いけど、きつといいこともあるわ」
「うん 行ってくる」

「付いていこうか？」

「ありがとう…でも 一人で大丈夫」

四葉もやつと陸上部と自分の気持ちで話も出来る 俺達はここであいつの思いが伝わるように祈るばかりだが、大丈夫だろ あの子の一人だ 頑張れよ四葉

残る問題は 二乃と五月 この二人だ 時間はたっぷり与えた後は気持ちを伝えるだけだぞ二人共

「さて 俺達はいくか」

「そうだね フータローくん私たちはこつち」

「期末試験の対策練ろ」

「試験のことは心配なくていい。俺達にとっておきの秘策がある 幸太郎あの手だ」

「遂にあれを使うか…了解だ」

最終手段は使わない事に越したことは無いと誰もが言うが 風太郎も覚悟を決めている

俺は止めはしないさ なんの話か考えている二人だけど 今は秘密だ

「二乃…先日は…」

「待って 謝らないで あんたは間違っていない 悪いのは私 ごめん あんたが間違ってるとすれば… 力加減だけだわ 凄く痛かった」

「二乃おお そ そうですお詫びも兼ねてこれを渡そうと思ったんです この前 二乃が見たがってた映画の前売り券です 今度一緒に

行きましょう」

「全く… 何なのよ 思い通りにいかないんだから」

彼等が去ったあと 二乃と五月は自分の思いを伝え

きちんと謝罪を言える事が出来た

當時を思い出し傍から頬をさする二乃

涙を浮かべていた五月だが、あの日彼等と話した 映画の件

それ以降ずっと五月は考えていた 仲直りをしたのなら 彼女と

見に行こうと

持っていた前売り券をにこやかに提示すれば 『上手くは行かない

な』と二乃も同じく

彼女が見たがっていたそれを密かに用意していたのだった…。

「ねえ コータロー」

「なんだ 三玖？」

「安心して 私はコータローを裏切らない コータローを泣かせないから」

「どうした急に？」

「今はそれだけ知っておいて欲しい コータローは一人じゃないから私達がいるから」

「ありがとな 三玖 お前には救われてばかりだな」

「私がそうしたいだけだよコータロー」

（三玖とコータローくんも 心配する程じゃなかったな 私はどうすれば良いのかな）

四葉の姿を俺は何処かで…。あの頃の俺と重ねていたのだろう

気づけば熱くなり 四葉の為と言いつつ自分の本音を声に出している

でも今は違う 三玖も言う様に 俺はもう一人じゃないのかもしれない

人を信用しても 良いのだろうか なあ…坂下 お前は俺を憎んでいるか？

第五十六話 不良少年とさようなら

それはとても綺麗な土下座だ

久々に中野家に戻ってきた 二名に加え 今回の騒動の元となつてしまった

四葉は家につけば ドサツと頭をさげる

問題は解決したんだ 怒る奴は誰もいないさ

「この度は ご迷惑をおかけして…」

「朝から大変だったねー」

「早朝だったので ご飯食べ損ねてしまいました…」

「全ては私の不徳に致すところでした…」

「帰りに買ってくればよかったかなー」

「でも今日はシェフがいる」

「誰がシェフよ」

「大変申し訳なく…」

確かに 誰も気にはしないだろうさ

けど少しは耳を傾けてあげても思っているんだが、その様子は皆無だ

彼等のやる事は既に変わっているんだ 過去には拘らない…。

「その前に」

「おかえり」

「ただいま」

こっちはもう前を向いてる 五月と二乃を戻すまでどれだけの時間を費やしたか

どれも無駄な事とは思わない どれも必要だった事だ

「早く入りなさい」

「お先にどうぞ」

「じゃあ同時ね」

『『せーの』』

「なんで動かないのよ!」

「二乃だつて」

この光景は和むな

喧嘩には発展する事のないやりとは見ていて安心出来る
いや気分がいいな

「久々に賑やか」

「うん！ よーし じゃあこのまま……」

「試験勉強だな」

「！」

このムードを壊したのは弟だ

まあ こいつらに試験勉強をさせる為にここまで来たんだ
風太郎の意見は正しいだろうな

「忘れていないだろうな 明後日から期末試験だ 文句あるやついる
か？」

「も もちろん そう言おうとしてたよねえ」

「……」

「四葉さん」

「お兄さん みんなが聞いてくれませーん！」

「泣きつくのは良いけどよ もう終わった事だ お前も前を向け」
「でも 今回はみんなに……」

「そう 思うなら今回の教訓を活かせるようにしろ わかったか？」

「わかりました 中野四葉 頑張ります！」

「じゃあ 四葉が朝食当番」

「さっ 行こ！」

「らしい いくぞ」

「うんっ」

今回はお咎めなし あるとすれば中野家の朝食当番だろう

暗い顔を辞めた四葉はそのまま家へと入って行く

「なあ 幸太郎」

「なんだ 風太郎？」

「お前が あの部長に言ってた事 去年のお前のような事にさせない
為か？」

「どうだろうな 俺は期待をかけられた事ねえーなからな…。」

「はああ……そう言う事にしとく だけど俺はお前に期待してる」

「弟は優しいね 兄は泣けて来た いくぞ」

「真面目に聞けよ……」

もう誰も信じない 誰にも頼られない

そんな事ばかりの中でこいつは俺に『お前に頼みたい』と俺を補佐に任命した

気づけば 五つ子と再会し 彼女達の問題に向かい合い

学園行事にも参加と……

去年の俺はそんな日が戻ってくるとは思ひもしないだろう

何だか今年一年は色々な事が多かったな……。

何時までも過去に囚われていては駄目なんだろうな 俺も前に進む必要がある

その為に 俺が選ぶ答えはもう決まっている

「お兄さん どうですか!」

「でけーな」

「大きければ お腹も膨れて気合が入ります」

「喉つまらせるなよ それと五月も落ち着いて食べる」

「!……お腹が空いてたものでしてつい」

「調子が戻ったなら それで良いさ」

四葉お手製のおむすびは大盛況 様々な種類がありみんな夢中と
いった感じだ

確かに愛情のこもったいい味 俺も久々に作って見るかな……

「それで、陸上部とはどうなったの?」

「あの後ちゃんとお話しして、大会だけ協力してお別れすることになりました」

最後に陸上部と話し合ったのはこいつ本人だ

無事に退部は出来る事になったが、四葉の性格上大会に出ないって
判断は無い

「そのまま大会も断つちまえばよかったのに」

「1度お受けした以上、それはできませんよー」

「幸太郎君の思っていた通りでしたね」

「確かに問題は起きたけど あいつの努力を全て否定は出来ない ころがベストだ

まあ：俺はあの部長は嫌いだけどな！」

「まあ 無事に終わった事ですし 冷静に」

「そいつの意見は私も賛成ね やり方が汚い」

去年の俺ならまだしもだ今の俺はあの部長とは永遠に分かり合えないだろうな

二乃の言う通り やり方がえぐい あの場でそう言われれば四葉が断れない事は

あの女も分かっていただろう まあ 四葉が欲しいって気持ちはわかる

「お前はバイクより早いしな」

「お兄さん また競争しましょう！」

「ジェット四葉さんは怖くて二度とごめんですよ」

『?』

時速60kmを追い越す 人間と誰が戦うか：負けが決まった事なんてやりたくない

お前なら世界を狙えるぞ……それに規定以上は速度違反だ 捕まりたくないからな

洒落にならんさ

俺と四葉の会話の内容について行けない残りの5人は何の事だろうと顔を見合わせる

「また何か言われたら教えなさい。今度こそ教育してやるわ」

「ありがと、二乃！でも、今度は1人でやってみる！」

「あつそ まあ頑張りなさい」

今度またおきたなら 呼べばいいと二乃は言うが 似たような事が起きれば

自分の力で解決してみせると四葉は気合を入れる 以前とは違う 任せても良さそうだな

「さて 本題に移ろう」

「休憩は終わりだな ほれ」

「とりあえず問題集は全員終わらせてるみたいだけど」

「私たち ちゃんとレベルアップしてるのかな？」

テーブルの上に乗せられた問題集の山 最初は数式や問題のみで それ以外は空白だった

だが今ではその解答欄も全て埋まりきっている 彼女達の頑張り で終わらせる事が出来たのだ

「元が村人レベルだからな。ようやく雑魚を倒せるようになったくらいか」

「それで期末試験を倒せるのでしようか……？」

「本音を言おう 無理だな お前らは頑張って来たがそれが現実だ」

「やっぱりそうだよね……厳しいねえー」

確かに厳しい元の計画では、全員が既に終わらせ

更に復習も兼ねる筈だった そうなればギリギリの点数を取れる 算段

……まあ計画は上手くはいかないもんだ

ここまでやれただけでも立派な成長と言える

それに俺達には最後の切り札が残っている

「この土日レベル上げをするしかない」

「だが 不測の事態の対策はある」

「秘策あるって言ってたね」

「こいつは禁じ手だ だがどんな弱い奴でも 裏ボスだろうがいちこ るだ……」

『『ゴクリ』』

「これが そのチートアイテム カンニングペーパーだ！」

風太郎が取り出した その紙切れがこの最悪の展開を変える魔法のチートアイテム

どんな問題だろうが、敵は無いと言った最高で使えば多数の人間からの評価も下がる

デメリット付きだ……………

「あ あなたはそんなことしなと思ってました」

「そんなこととして 点数取っても意味ないですよ」

「でも これしか道はない でも こいつを使わないようにする」

「この二日間みっちり叩きこむ！ 覚悟しろ！」

俺達もこれは使いたくない そうならないようにするために

残りの二日間真剣に取り組み寝る間も惜しめばきつと成果は出てくれる筈だ

どんな結果であれ 俺も風太郎も後悔はしない

言いたい事を言い終わり 風太郎は二乃の方に視線を向ける

「というように進めさせていただきますが…いかがでしょう？」

「何それ 今まで散々好き勝手やってきたくせに やるわよ よろしく」

こいつは想像以上の結果だ 二乃はすんなり受け入れた

風太郎本人は信じられないといった顔つきだ

「そう言う事だ 風太郎さん 俺も補佐として頑張るから 最後まで気張れ」

家庭教師の先生」

「あつ ああ！ やるぞ」

ここまで心を合わせて取り組むまでどれだけの時間がかかっただろう

全員が全員問題児といった形で 何かをすれば何処かが崩れる

上手く行けば 次にポ力をするそのの繰り返しで決して前には進めない

笑顔で間違えた問題を見せる四葉

自分に自信が持てず前を向けない三玖

俺に何故ここまでするのかと問う一花

俺のやり方を否定はしないが教えも乞わない五月
全てを否定し姉妹の事を案じる二乃

時には喧嘩し 時には協力し 勉強だけご勘弁と
本当に骨が折れる毎日だ でも全て報われた

俺達の前に写るのは 協力し互いに教え合う姉妹達の姿だ

やっとそれを見る事が出来たんだ これですべて上手く行く
うだろう風太郎？

「やりましたね 上杉さん！」

「まだ ここからだ」

四葉の声で風太郎も現実に戻り 気合を入れ直す 勉強に参加す
る

「良かったね コータロー」

「ああ……………三玖 これからもよろしくな」

「うん こちらこそよろしく」

「ごめんな三玖……………俺は最後の最後でお前らを裏切る事になる
でもこれが一番の方法なんだ……………」

勉強会は滞りなく行われ 何度か衝突したけども以前のように問
題は起きなかった

そして二日目の今日 ついに訪れたテスト当日だ

眠気を押さええ 俺は準備を始める 顔を何度もたたき 気合を入
れ直す

今日のこの日の為に俺達は彼女達の勉強を見て来た そして風太
郎をサポートしてきた

その俺が眠そうにしていは駄目だ アイツに恥じないような兄で
ありたいんだ

「風太郎！起きやがれ！」

「うるせー！こっちは寝てねーんだよ！」

「勇也さん おはようございます」

「おう 幸太郎 今日は気合入ってるな！」

息子の首根っこを掴み 玄関まで運ぶ彼は朝から元気な声だ
外には既に五月が待っている 俺達も急がなくてはな

「待たせてごめんなー」

「えー!! 五月さんもう帰っちゃうのー?」

「おはよう 五月今日は頑張れよ」

「ごめんね、らいはちゃん……それと幸太郎君 おはようございます」

五月は特にらいはに懐かれている この一週間 妹は楽しかった
んだろう

男ばかりの中で五月の存在はらいはにとって大きいものだったん
だ

大喧嘩の先についたのがうちだが、五月には感謝しないとな

「お世話になりました。あの……これ、諸々のお礼なので、受け取っ
てください」

「いらねーよ 気持ちだけで十分だよ 五月ちゃん」

「ああ お前のお陰で らいはも勇也さんも楽しい一週間だった お
礼をしたいたいののはこっちの方だ」

「幸太郎君……はい その言葉でつつかえも取れました！」

俺も勇也さんもお礼なんて受け取る必要もない

五月は謝礼をしづぶ閉まっていたが、楽しい一週間と聞けば何処
か満足した表情に変わる

まあ……お世話されるのは面倒だったけどな

「ほらーシヤキツとしろ!!」

「いでっ!」

「五月ちゃん 幸太郎も言ってたが 楽しい一週間だったぜ またい
つでも遊びに来いよ」

「試験頑張って!」

「はい」

(気合はいったか?)

(あの力で叩かれればな　いよいよだな　幸太郎)
(ああ……)

勇也さんといはに見送られ　俺達は学校へと向かう
そしてここからが俺と風太郎の最後の……家庭教師と補佐の仕事
だ

「ついに当日だね」

「大丈夫かなー」

「やれることはやった」

「二乃どうしたんですか　深刻な顔して？」

「何でもないわ……」

中野姉妹は学園内で合流した

それぞれが当日を迎え緊張と不安で胸が一杯と顔に現れているが
この数週間

そして二日間は無駄ではないと気持ちも切り替わる

ただ一人　二乃は何処か上の空で気になった五月は声をかけるが
軽くあしらわれる　そこまで大事ではないのなら大丈夫だろうと

彼女は追求をやめる

「10分前だ」

「じゃ　健闘を祈るわ」

「あれ　上杉さんとお兄さんがいない！」

「お二人はらいはちゃんに電話だそうです」

「こんな時に？」

「きつと　今じゃないといけないのでしよう　自身の携帯は充電切れ
なのに……私のを借りていったほどですから」

ここに風太郎と幸太郎の姿はない　学校につけばすぐに

風太郎のみならず幸太郎まで充電切れと言いだし　らいはに連絡
が出来ないと困っており

五月に彼は貸して欲しいと頭を軽く下げた

不思議に思ったが彼の頼みは珍しい　頼られたのだ　それに応え
よう

彼女は何の躊躇いもなく 幸太郎にそれを渡す
『わりい、すぐに返す！』と彼は言えば風太郎と共に何処へ向かって
行ってしまった

そして 彼等は屋上に来ていた

幸太郎は知り合いの教員に頼み鍵を借りていた 流石の手際の良
さと風太郎は感心

初老の教師は『悪さは控えろよ』と彼に念を推していたとか

そのまま外に向かえば 風太郎は五月のスマホを操作し

ある番号へとかけ その人物と話を始める

暫く話し合えば 『期末試験頑張ってくれたまえ』と男性は電話越
しに言い

会話を終わろうとするが、彼等の話は終わっていない

「今日をもって 家庭教師と そして兄は補佐を退任します」

「……………」

「あいつらは頑張りました この土日なんてほとんど机の前にいた
と思います

しかし 赤点は避けられないでしょう 苦し紛れの策を案じまし
たが あんな物に頼らない奴らだつてことはよく知ってます」

『今回はノルマを設けてなかったと記憶しているが』

幸太郎と風太郎は 家庭教師を辞めると 彼女等の父に報告して
いた

この決断は既に二人の中で決まっていた事だ 何度も話し合い
その都度二人で考えた でも結論は変わらない これが最善の方
法だと

風太郎は電話越しの彼に言う

本当は回避できた ペースを守れば赤点な取る事も無かったと

でもそれは避けられない 確かに勉強を教える事が彼等に課せら
れた仕事だ

だから 嫌がる姉妹達に向き合い勉強を教えた 勉強は…

でも それだけだ 幾ら必要とされていようが 彼女達姉妹をバラバラにした事は変わらない

教えられる側の気持ちもくみ取り それが出来た人間でなければ やっていても意味はない

その為の上杉幸太郎だった でも彼の力でもダメだった

本人がそれを一番自覚している サポートに回るはずが周りに助けられ勉強どころか

何も出来ないままが続き 結局自分はまだ 人の心を分かっっていないと結論を出した

風太郎も自分では限界が来ると感じ 兄との二人体制で挑んだが 惨敗続き

焦りで五女との固執が生まれ 赤点を免れず中間試験は敗北をきし

今回の問題ももう少し彼女達に寄り添えばそれは回避できた それをしなかった

出来ていたと思っていた きっと 自分達より相応しい人物がいるのだと答えは変わらない

最後に姉妹が手を取り合い勉強に勤しみ姿を見れた事が、何よりの報酬だろう

中野父は彼等の言葉を聞き 引き留めはせず労いの言葉を送る

「一度 ぐ自身で教えてみてはどうでしょう？」

『……………』

「家庭教師では限度がある 父親にしかできないこともあるはずです」

『いや 私も忙しい身でね それに他人に家庭をどうこう言われたくないな』

「最近家に帰ったりとかは……知ってますか 二乃と五月が喧嘩して家を出ていったことを」

『初耳だね……もう解決したのかい？』

「はい」

『それならいい 教えてくれてありがとう では』
「それだけですか？」

淡々と話を聞き 内容だけ聞き取れば電話を済まそうとする彼に
流石の風太郎も感情を抑えられない

何故 二人が喧嘩したのか？ あの子達が何に悩み 何を思うの
か

父親なのに それが気にならないのかと矢継ぎ早に風太郎は彼に
聞く だが返答はどれも同じだ

感情が籠っているのかすら怪しい声だ そうだ この男はずっと
こうだ

初めて電話をした時も風太郎は何処か違和感を感じていた

中間試験の際の電話もだ淡々と話を進め 心配だから力量を図る

理由は全うだろう だが 一度それ以外で娘達と彼は話している
のだろうか？

風太郎がこのスマホを借りた時に 偶然履歴が目に入った

彼女からの電話はあつても 彼から彼女にかけて形跡はほぼ無い

あつても家庭教師に関する事だけだろう

それに 不自然だ 彼女達から父親に関する話題 家族に関する
事を風太郎は一度も聞いたことが無い

五月が話した 彼女達の過去 それ以外風太郎は知らないのだ

娘達に家を与え 生活に不自由させないよう配慮する それもあ
る意味では親の仕事だ

でも顔もまともに見せず ここ数ヶ月電話越しでしか会話をしな
い彼は、本当にこれで良いのだろうか

他人に興味を示さない 彼ですらそう思えるほど 違和感が拭え
ないのだ……

この際だ もうやめるんだ こいつにぶつけてやろう全部言いた
い事を言つてやろう

「少しは父親らしいことしろよ！ 馬鹿野郎」

声を荒げ自分の気持ちを使い終われば彼は意見を聞く事もなく電

話を切る

「かつけー……」

「……やべ 今月の給料ちゃんと貰えるかな……」

「まあ そんな時はそんな時だ まあ風太郎」

「なんだよ 幸太郎」

「俺達は間違つてないよな」

「ああ………何も間違いない 答えは変わらない」

「そうだな」

「一花 二乃 三玖 四葉 五月 お前ら五つ子がそろえば無敵だ

頑張れ」

「俺達は応援してるぞ 負けるなよ お前ら……」

空を見る 流れる雲は静かに進む

正解なんて無いのかもしれない でも出した答えは間違つてはい
ない

あとは 姉妹達が今日までの成果を出し 自分達の実力と向き合
うだけだ

「さて 風太郎 俺達もいくぞ 遅れたら教師にどやされる」

「それだけは嫌だな」

第五十七話 不良少年とサヨナラ①

期末試験結果

中野一花

国語 2 4 点 数学 4 7 点 理科 4 1 点 歴史 2 8 点 英語 3 6 点

総合 1 7 6 点

中野二乃

国語 1 9 点 数学 2 2 点 理科 3 8 点 歴史 2 7 点 英語 4 5 点

総合 1 5 1 点

中野三玖

国語 3 5 点 数学 4 1 点 理科 4 0 点 歴史 7 0 点 英語 2 0 点

総合 2 0 6 点

中野四葉

国語 3 5 点 数学 1 5 点 理科 2 2 点 歴史 3 0 点 英語 2 6 点

総合 1 2 8 点

中野五月

国語 4 3 点 数学 2 8 点 理科 6 8 点 歴史 2 6 点 英語 3 4 点

総合 1 9 9 点

期末試験は無事に終わり返された答案用紙を見て五人は改めて自分たちの実力と顔を合わせる

ここ一週間と今までの家庭教師で得た知識をフルに生かした結果だ

変えようのない事実 言葉を失い何度も見直すが、覆ることは無い

「これは酷い……」

「あんなに勉強したのにこの結果かー」

「改めて私たちって馬鹿なんだね」

「二乃……。元氣出して」

「あんたは自分の心配をしなさいよ」

「ごもつともと四葉は口を閉じる

　　壮大な姉妹喧嘩の末に勝ち取った点数は自分達が思っていた物よりもひどく

　　落胆と力の無さを痛感　果たしてこれをあの二人にどう説明すべきかと

　　あの二日間で得た物はこれだと彼等に見せて良いものかと　考えていても彼等はやってくる

　　今日は家庭教師が行われる日だ　あと数分もしないうちに上杉兄弟はここに訪れる

　　隠す事はしない　諦めよう　そして受け止めよう

「お　噂をすれば……」

「コータローは言わないだろうけど　フータローにはしこたま怒られそう」

「だねー」

「なんで嬉しそうなのよ」

「あはは　結果は残念だったけどさ　またみんなと一緒に頑張れるのが楽しみなんだ」

　　飴と鞭だ

　　上杉兄が彼女達を褒めれば　上杉弟が容赦なくそれを叱る　普段の鬱憤もあるだろう

　　覚悟を決めないと　言葉だけで折れそうだと

　　でも三玖も四葉も何処か笑顔で向き合ったそれを受け入れる

　　結果は惨敗だ　中間試験よりも成長していた……。これが今の自分達だ

　　それを受け入れ　前を向こう　終わった試験だ

　　残るは反省会と次のテストに備える事だ　それに嬉しいと四葉は話す

例えこの点数であろうと みんな 7人での勉強はこれからも続く きつと風太郎は怒るだろう

『何が嬉しいんだ 迷惑だ!』それでもこの時間が続く事を彼女は望んでいた

そう 彼女達は そう望んだ…。

「失礼いたします」

五月がインターホン越しで話している人間そして招き入れた人物は

一人 そしてそれは兄弟の片方どちらでもない 一人の白髪の壮年男性だ

しかし その人物はけして、彼女達が知らない他人ではない

ここまで自分達をお世話し 林間学校の最中も車を出してくれた人物

彼女達の父の秘書である 江端と呼ばれる男性だった

軽い挨拶の中 自分から見ればまだ五人は幼い子供と変わらないと述べ

それを聞けば五つ子も苦笑い

父の秘書であり 運転手を務める彼が何用でここに来たのかその疑問に尽きる

要件は何かと五月が江端に普段のように聞いていた

「江端さん どうしていらしたのですか？」

「本日は臨時の家庭教師として参りました」

「そ そうなんだ」

「江端さん元は学校の先生だもんね」

「あいつらサボりか」

「体調でも崩したのかな」

「お嬢様方にお伝えせねばなりません」

二人は来ない その為元は何処かの学校で教鞭を持った彼が臨時として呼ばれた

彼女達はそう思った 事前に何連絡もない 今日になって用事でも入ったのだろうか？

もしかしたらまた何か厄介事なのか 憶測が飛ぶが、きつと来週には二人とここで会えるだろう

彼女達は安心しきり江端の言葉を受け入れた
ただ江端自身伝える事があると五人を見据え彼はつづけた

「上杉風太郎様と上杉幸太郎様は 家庭教師をお辞めになられました」

『「え……」』

「そこで新しい家庭教師が見つかるまで 私が務めさせていただきます」

「待つて待つて」

「何かの冗談だよね」

「もー ずれた冗談やめてよー」

「事実ですごいいます 旦那様から連絡がありました お二人は先日で期末試験で契約を解除されました それと お二人に伝言です
『彼は大丈夫』だと」

笑つてすます きつと新手の冗談だ

でもこれは違う あの人がこのての冗談を言うはずがない事は姉妹達は知っている

紛れもない事実だ あの期末試験で彼等が誰と電話していたのか

五月はやつと気づいた 父と話していたのだと

そして追い打ちとばかりに 父から五月と三玖に伝言が届いていた

『彼は大丈夫』 この言葉が何を意味するのかを二人は知っている

「えっ つまり コータロー君もフータロー君ももう来ない……」

「江端さん 父は確かに言ったのですね 彼は大丈夫だと！ 本当にあの人が言ったのですね

それは本当に！」

「嘘だ……違うよ コータロー」

彼女達は信じられないと言った表情でその場で固まる

急に目の前が真っ暗になった これは現実なのだ あの二人はも

う来ない

そして『彼とは関わるな』と 五月と三玖は父から言われた

五月は江端に何度も何度も問い質す だが答えは同じだ

そして二乃はこの中でいまだ冷静を保ちつつあの時の父の言葉と先日の風太郎とのやり取りを思い出し

答えに行きつく

「やっぱり……赤点の条件は生きてたんだ」

「どういうこと おしえて！」

「試験の結果のせいよ パパに言われたんだわ」

「それは違うと思われます 上杉様とそのお兄様はご自分からお辞めになられたと伺っています」

「自分からって」

「ゴータローどうして そんなつもりじゃなかったのに……」

「そんなの納得いきませぬ 三玖安心してください……彼等と呼んで直接話を聞きます」

二乃の行きついた答えは違うと彼は話す 赤点でもなく 父からの命ではなく

上杉兄弟が自ら選んでもうこの場に現れないと父に伝えたのだと

それは紛れもない事実 それを聞かされた三玖は肩を落とし何度も『違う違う』と声に出し

その場でうずくまる 未だ自分も混乱する中 三玖を心配し 四葉は彼女を宥める

全員が全員 納得がいかない中 五月は立ち上がり 今すぐ彼等をここに呼び、

そして今の話は本当か聞きだすと

だが………

「申し訳ありませんが それは叶いません お二人のこの家への侵入を一切禁ずる 旦那様より

そう承っております」

「やはり そうきましたか……！ なら直接彼に連絡を……えっ」

父からの命はそれだけではなく 彼らはこの家そのものに入る事

すら禁じられた

あの人ならそれぐらいやるだろうと知っていた五月はすぐに彼に連絡を取ろうとスマホを取り出し

幸太郎の番号までかけるがそれは叶う事はなかった

『その番号は現在使われておりません お確かめになつてからもう一度』

既に先手は打たれていた 彼のスマホは中野の父が間に入って契約されているものだ

上杉幸太郎の携帯の契約自体を無効にしたのだろう

電話はけしてつながる事はなく 無機質な声が返ってくるのみ

手から滑り落ちた スマホは床に落ちる……。

「そこまでしますか……何故ここまで」

「わかった 私がいく！」

「三玖まだ休んでないと」

「大丈夫だから……江端さん 通して」

「なりません 臨時とはいえ家庭教師の任を受けております 最低限の教育をうけていたただかなければ ここを通すわけにはいきません」

彼に連絡がつかないのなら自ら打って出る

背水の陣として三玖は入口の方まで歩いて行こうとするが江端に遮られ

ここから先に向かうのならば 家庭教師としては勉強を受けさせなければならぬ

それが彼が中野の父から命じられた事だ けして意地悪や悪意からの行動ではない

彼女達にはそれが今必要な事 それはほかならぬ勉強だ

ぐぐぐと奥歯を噛む彼女を五月は引き寄せる

「江端さんの頭でつかち！」

「ホホホ なんとも言いなされ」

老兵の余裕だ 彼女達の言葉を軽く流す

こうして 中野の家から上杉兄弟は消えた もう二度とこの家に彼等が来ることはない

「これ終わったら行ってもいいのよね」

「ええご自由になさってください」

「全く あいつらどういうつもりよ」

「私はまだ 信じられないよ 上杉さんとお兄さんが…」

「本人達の口からちゃんと聞かないとね 誰か終わった？」

「もう 終わります」

「私も」

問題を解く二人の速さは三人の倍だ それくらい真剣に取り組むと同時に

不思議と問題を理解できていた

「この問題比較的簡単だよ きつと江端さんも手心加えてくれてるんだよ」

「そうねでも 前の私たちなら危なかった自分でも不思議なほどに問題が解ける」

江端の手心も確かにあるのだろう だがもつと大きな要因がある

それは彼等の教えが生きた事だ 二乃が言う通り以前の彼女達なら問題を見ただけで投げ出し

解く事はしないだろう でもそれを解けるようにした人物は確かにこの家に来ていた

つと軽く舌打ちする 自分が思っていたよりも彼等の影響は大きかった

「悔しいけど、全部あいつらのおかげだわ」

どれだけ 彼等がここで真剣に取り組み彼女達も彼等を必要としているか

もう答えは出ている 彼等はただの部外者ではない 赤の他人とはもう呼べない

故に信じられない 彼等がここで投げ出した事が『大丈夫だ』と彼は言った

その言葉は嘘だったのか？ それを確かめる為にも今は少しでも多く解かなければ

彼女達の快進撃は続く……と 思われていた

「あと一問…… あと一問なのに……」

「うぐぐ 私も あと最後だけです」

「ホホホ その程度も 解けないようであれば特別授業に変更いたしますよ」

『———つつ!!』

ここに来て 全員が同じく最後の問題で躓いた

何処かで見たとようなそれを頭をフルに使い 探し出すが一向に答えは出てこない

このまま時間を遣えば彼等と会う事も叶わず 更なる難問を出されるだろう

最悪の事態を避けるべく 五月は自分の信念を遂に捨て去る

「カンニングペーパー、見ませんか？」

「それって期末の？」

「はい 全員 筆入れに隠していたはずですよ」

「いい いいのか……」

それは彼等が彼女達に託した 最後の切り札と言い放った一枚の紙である

本来はこれを使わずにテストを受ける そして彼女達は使う事無く

期末を終えた 結局はそのまま筆入れにしまったまままだと思いついた五月は

禁忌を使わざる負えないと言い放つ 一週間も上杉家にいた事で感化されたのだろう

最早 言動が 風太郎そのものだ

「有事です なりふり構ってられません」

「五月が上杉さんみたい！」

「あんたかわったわね」

全員も何とか承諾し 江端が動くタイミングを見計らう

「今だよ！」

視線を一度向かわせれば 彼は台所奥へと向かい 知らせを受け
た五月は最初にそれを開く

だがそこに書かれていた事に彼女は更なる動揺を覚えた

「これ……どういうことでしょう……？ 何というか……私のミスが
あつたみたいです」

「じゃあ 私のを使おう……？ えーっと 安？」

五月が渡されたペーパーは不備でもあつたのだろうか 本人は途
中まで見るとそれを置いてしまう

ならば 自分が渡された方を見るしかない和一花はペーパーを広
げる

『安易に答えを得ようとは愚か者め』

『……………』

行動は彼にすら見透かされていた

彼等は元からカンニングさせる気などなかったのだ

しかし これでは答えに行きつけない 彼等自身と会う事も出来
ないと考え込む一同

一花は良く見れば その紙には続きがあるとする 最後まで広げ
れば

『↓②』と書かれており 四人は二乃の方を向く

『私のかしら』

『カンニングする生徒になんて教えられるか↓③』

『自分で言ったんじゃない』

『繋がってる……！ これ上杉さん達の最後の手紙だよ』

ここで四葉は気づいた これを書いたであろう 二人からの最後
のメッセージ

全部で五枚渡されたそれは繋がっていると

『信じてるぞ お前らなら掴み取れる 自信を持って。↓④』

『この字……コータローのだよ』

『やっと地獄の激痛から解放されてせいせいするぜ。↓⑤』

『あはは やっぱり辞めたかったんだ』

『私たちが相手だもん 当然と言えば当然だよね』

どれだけ彼等に迷惑をかけただろうか 勉強を教えに来た彼等に協力するまで

あっちこっちに引っぱり 足を引っかけたり引っぱり張ったりと思
い返すだけでも相当だ

寝る間も惜しみ期末の問題集まで作り上げている

ここまでやってくれただけでも彼等の忍耐力は凄まじいと言える
だろう

そして残る 紙は5に続く 五月が持つ物だけだ

『最高に楽しい地獄だった ありがとうな あばよみんな』

「幸太郎君……の字です 幸太郎君……会いたいです」

「私まだ 二人に教えてもらいたいよ」

「私だって コータロー無しじゃ…… 私まだコータローに全然お礼
が出来てない」

全てが繋がった 1〜5まで 激励と捉えれば良いのかただの愚
痴なのか

それぞれ二人が書いたものだ 飴と鞭がまざっている 何ともあ
の二人らしい

先ほどまで勉強へと取り組むことで押さえていた感情が出て来た
のか ポロポロと三玖の目から雫が落ちる

「そうは言っても あいつらここに来れないの どうしようもない
わ」

「何か 探そう！ 上杉さんとお兄さんに会う為に！」

「みんなに 私から提案があるんだけど……」

それぞれが思いをはせる中で一花は四人に提案があると

耳を近づけるよう言い こここそと何かを四人に言う

『!!』全員の顔が驚きの表情へと変わる その選択は余りにも大きな
リスクを伴う

だが それをやるだけのメリットは確かにあると一花は述べる
後は他の四人次第と答えを待つ

「うん ずっと前から考えてた」

「私は賛成です 一花に協力します 幸太郎君と上杉君に会う為に」

「私も五月と同じ コータローに会えるなら構わない」

「はいはいーい 私も 上杉さんに会えるんだもん やりますよー!」

「はあ いいわよ ここまで来たんだし のったわ」

「よし 決まったね全員の意見」

迷う何て考えはないのだろう 五月に続き三玖も同意し

四葉 そして二乃も嫌々ながらと言いつつもここまで自分達と関わり去って行くなど許さないと感じた感じだ 全員の意見はまとまった 後はそれを実行するまで 覚悟を決めた一花は江端を呼ぶ

「おや、どうなされましたかな?」

「江端さん お願い 協力して」

「知らぬ間に 大きくなられましたな……」

江端が見た それは幼い頃の彼女達ではない もう立派に成長した姿が見えていた

にっこり微笑む彼 その表情は協力を拒むわけではない 聞き入れてくれるだろう彼女達の願いを

そして時は過ぎる 12月24日 クリスマスまで……

第五十八話 不良少年とサヨナラ②

その日 上杉幸太郎は高熱を出し バイト先で倒れた

「ああ……頭が 割れる」

「お兄ちゃん これはひどい 40℃近いよ」

「幸太郎 お前は今日は休め この状態で学校は無理だ」

「だ 大丈夫だ……お 俺は平気！」

「ガキは寝てろ 風太郎 気をつけて行ってこい」

「勇也さんまで くっそ こんな時にスマホは使えないし どうなってるんだ」

病院に搬送された後に彼は風邪と判断された

『俺は動けるー』と言いだすもそのまま病院で三度倒れた後に彼は薬を処方されると家に帰される

朝方には父親である上杉勇也も帰宅し 動こうとする長男にサブミツシオンをかけると動きを封じ

『暫くは動くな』と父親として彼に言い渡す 納得は出来ないが父親の命であれば

彼も文句は言えない それに承諾すれば布団の方へと戻り らいはは急いで濡れタオルの替えを準備する

以前は兄に助けられた 今度は自分が彼を助ける番だとやる気も気合もMaxだ

その幸太郎本人だが 実は知り合いに用事を頼んでいたのだが、期末の一件以来 自分が使うスマホがネットにも電話も繋がらなただけのガラクタと化した事で

頭を悩ませていた 長い付き合いだ

彼の家を彼女は知っているただし風邪を移す可能性もあり下手に動けない というよりも父親と妹の防壁を突破する事は今の彼には無理だろう

余程疲れが溜まっていたのだろうか

一週間近くは安静にしているように医者から言い渡されている復

帰するのは24日頃である

最後の頼みの綱は弟である風太郎だけだと彼はうつ伏せのまま弟に言い渡す

「知り合いの 須藤って子が来るはずだ 荷物を頼んでんだ受け取ってくれ」

「面倒だ」

「頼む……今の俺にはそれしか出来ない」

「わかった それにお前もあいつの隣は座りにくいだろうし」

「……………このまま会えばアイツに何をいわれ げっほげっほ」

「お兄ちゃん！ しやべらないで！ フリーズ」

「さーせんした げっほ」

「じゃ 行ってくる 幸太郎 お前は絶対に動くなよ」

「りよ 了解です……………き きーつけてな」

「行ってらっしゃーい！」

「行ってこい 風太郎！」

家族に見送られれば彼は家を出る

向かうは学校だ もうどこにも寄り道する必要はない 誰も必要もない

これから先彼等は今までと変わらぬ生活を送るそれだけだ

ただ戻っただけだ あの姉妹と出会う前に

学校へ向かう中 普段は隣にいるであろう兄が病欠とはいえここにはいない

いないならいないで急に静かになったなと思いつつも彼は登校する

きつと 嫌でも会うだろう でももう関係ない それが彼等兄弟が選らんだ答えだ

(解放されたんだ 素直に喜ぶべきだ)

何処か寂しさを覚えるが顔をはたき 弱音を消した

クラスまでつけば既に教師がおり彼は兄の事を教師へと伝えた

「上杉幸太郎ですが 風邪で暫く休みます」

「おお そうか お前も無理はするなよ」

男性教諭は話を聞けば名簿に『休み』と記載し

一度教室を後にした

風太郎は自分の席へと向かう中 後ろの方へ視線が向かう

空白の席 その隣に座る彼女 もう関係のない女性徒だ関わる必要はない

昼休みになった 生徒達はそれぞれ食堂や教室でお昼を食べる
そんな中 風太郎は普段と変わらず 『焼肉定食 焼肉抜き』を頼み

何時もの指定席へと向かう

『勉強しましょう！』

『風太郎 先に図書室行ってつから 遅れんなよ？ 五月もいい加減きてくれよな』

ふいに何時も見えていた光景が過ぎる

もう関係ない事だ 自分で辞めた 兄と何度も話し合って出した

結論

間違っている筈もない 頭を冷やせ 冷静になるんだとブツブツ
呟きながら席へと座る

食べながら勉強と最近ではそれも出来ていなかった

あの姉妹と出会ってから ここまで自由な時間あったのだろうか？

嫌そんな物はないと彼は今の状況を十に捉える

自分自身の勉強に集中出来るんだ 何の問題があるんだ

「おっ……………この問題 四葉なら……………って 何言つてんだ俺は
自分の勉強に集中しろ」

もくもくと箸を勧めながら彼は昼食を食べ 同時に勉強を続けた
この時間は自分の時間だ もう誰の為に使う事もない……………。

そして迎えた放課後

彼は教室で自分を呼ぶ声に気づいた

ふと出入口を見れば見知らぬ女性徒が自分の名前を呼んでいた

一体何用だと 頭を傾げるが彼はその女性徒の元へと向かう

「あのー 上杉風太郎さんで間違いないですよね？」

「俺がそうだけど あの誰」

「私 須藤真弓って言います 幸太郎先輩の後輩です」

「忘れてた あいつから頼まれていたんだ」

「あはは 何か聞いていた通りの方ですね 風太郎さんは」

「まあ うんそうだな それであいつに頼まれた用事って」

「はい 先輩が倒れてしまって 渡す暇なかったんですが これをど

うぞ」

風太郎を呼んでいたのは 須藤真弓 風太郎と同じ年で幸太郎の

一個下

彼は気づいていないだろうが小学校も同じだったりするのだが、他人に興味を示さない

風太郎だ 彼女の事など気にも留めた事はないだろう 今回が初

対面と思っている

その真弓本人から幸太郎から頼まれた品として彼が預かったのが一枚のディスクだ

『DVDです！』と真弓は風太郎に教える

これを渡された所で家で見る方法なんてないと彼も知っている筈だろう

何故わざわざ後輩にこんな事を依頼したのだろうかと風太郎は疑問でしかない

「実はその中身 中野一花さんが出てるドラマをダビングしたものです」

「えっ…あいつ」

「事情は私なりに察しています 先輩が『自分で応援すると決めた以上は続ける』とおっしゃっていたので そのお手伝いをしようかと自分にはこれくらいしか出来ないとおの人は言っていたので」

「幸太郎が言いそうな事だ……じゃ これは預かっておく」
「先輩にお伝えください ご自愛くださいと では私はこれで失礼します」

「礼儀の出来た奴だな 本当に幸太郎の後輩なのか？」
ディスクを渡された風太郎は自分の席へと戻るとそれをぼーっと眺める

自分達で出来る事はない 彼女達に勉強以外でも支えになれるような人物が必要だと

何の成果もあげられないようではあそこに居る必要ないとそう考えた

『真剣に向き合っているんだね きつと君はもう 必要とされる人になれたよ』

あの少女 【零奈】と名乗った彼女の言葉が頭を過ぎる
(必要とされる それに自分を認められるようになったらか………)

その日 風太郎の頭にはその言葉をずっと考えていた
何が本当に正しくて 自分達はこのままで良いのだろうかと………。

一方その頃 家で安静にしてるよう言い渡された上杉幸太郎は期末が終わった直後

風太郎と共に帰宅する中で自分にかかってきた電話の内容を思い出していた

きつとそこに理由があるのだろうか

『どうも 今までお疲れ様 上杉幸太郎君』

『なんだよ 風太郎が言ってたろ？ 俺達は辞めるって』

『君の方からは直接聞いてはいないからね それは本位と受け取って構わないんだね』

『そうだ 俺なんかより 早く あいつらにいい家庭教師を見つけてやれ それと』

『何かね ?』

『五月と三玖に言っておいてくれ もう俺は大丈夫って』

『去年とは違う 俺はもう人と話せる 逃げたりはしないさ あいつ等のお陰だ』

『そうか わかった 君がそう言うのであれば 二人には話しておこう』

『そう言う事です なら俺はこれで 後は頼みましたよ 中野先生』

彼も自らそれを伝えた 自分ではもう彼女達と居ても何の成果もあげられない

家庭教師としては必要最低限の結果も出せないと 電話の向こうでは彼がどう考えているのかも分からない

けどかけて来たのは他でもない 中野の父親だ
なら言いたい事を言うのはこのタイミングだ

『自分はもう十分救われた』 あの事故で幸太郎が失ったのは一年という時間だけではない

友人 信頼 信用 人望 それら全てを失った そしてそれが理由だろう

彼は人を信用出来なくなっていた 中野六花との出会いで幾ばくかは心にもゆとりは出来ただろう

それでも根本は変わっていない 家やバイト先では何食わぬ顔で過ごす

五月達と再会するまでは学園では風太郎や真弓とも話す事はなく常に一人を心掛け

近づく人間には威嚇する 本当に不良少年そのものを演じて来た失望させるくらいなら 自分から他人と関わらず生きていけば良

いとそれがあの頃の彼の考えだ
でもその考えは変わってきた 中野の姉妹の家庭教師を言い渡さ

れた弟とそれの補佐を命じられた事で

彼女達の前では変わらぬ対応で、学園では見せない顔を作っていた
そのつもりだった けど彼は気づいた 『俺は笑えてる』 二度と
友人も作らない

学校では何にも干渉せず 傍観に徹すると決めた自分が 心の底
から

彼女達の毎日を守ろうと思い始めていた

三玖や一花に二乃や四葉に五月 彼女達にはそれぞれ自分の過去
に関わる事を暴露していた

それが出来てしまうくらいには 彼女達が大切だったと

だからこそだ 『自分を許してもいいのでは』と六花に言われた事
で彼は自覚した

『このままではいけない』 あの子達の幸せを願うのなら 離れるべ
きだと

零奈との約束をたがえる事にはなってしまうも

あの子達を喧嘩させてまで守る約束をあの人にはさせない 『ごめん
なさい』と彼は彼女に頭を下げた

家庭教師をやめ 彼も補佐を辞退した きつとあの人的事だ優秀
な人材を見つけ出し

今度こそ何のわだかまりもないまま 彼女達を卒業まで導いてく
れる彼はそう願っている

その翌日だ 幸太郎は今までの緊張の糸が解けたのか

バイト先のケーキ屋で高熱を出し 同じく働いている真弓が急い
で救急車を呼んだ

シフトに入っていなかった 風太郎は彼を向かいに病院まで出向
き

無理をしようとする彼に 家で休むよう言い聞かせた

実はその時に真弓にある頼みをしており

彼女はそれを承諾 何事もなければ彼は それを真弓から受け
取っていたはずだったのだが

まさか再び倒れるとは本人が一番に驚きを隠せずにいる

「はあ……………せめて 一花の活躍は見てやらねえとな……………ごほっ」

ファン第一号と自ら名乗りを上げたのだ

補佐はやめようが 彼女の夢を彼は応援し続ける事はやめるつもりは無い

そして四葉の陸上部の大会だ 応援に行く気でいたがこの調子では見に行く事できないだろう

熱も引かず 体力も回復の兆しはない

あと数週間は家での静養が必要と言いつ渡されている

この大事な時に本当に運がないと自分で自分が嫌になって来た
た

「……………自分から去った くせによ 女々しいな……………」

真つ赤な顔でぼーっと天井を眺める

こうしてゆっくりしていれば何時かは動けるだろう

それまで寝ていよう あいつらにも家族にも迷惑はかけたくない

彼は瞳を閉じれば 死んだようにそのまま意識を手放す

その後風太郎は帰宅

眠るからに『帰ったぞ』と声かけ 真弓から渡された あれを彼の

机の上におくと

風太郎は勉強の準備にはいる

「さて 勉強だ……………」

何処か心ここにあらずと言った感じの風太郎はノートを眺めると
指を動かし

勉強に意識を集中させる

今は自分に……………自分がしたい事をやりたいだけやろう 時間
はたっぷりあるのだから

そして時は過ぎる 12月24日 クリスマスまで……

第五十九話 不良少年と雪降る夜空

くケーキ屋、Revival)

「完全復活」

「先輩ー！ 良かったです」

「まあ 幸太郎もあれだけ休めば戻るだろう」

40℃近い高熱を出し 近くの診療所に運ばれ

家に送り届けられるという 12月の初めから酷い日々を送った

俺だが 24日は体力も戻り

熱も34℃代まで下がっている

ただ…。復活を果たした頃には時すでに遅く

終業式も何かも参加する事無く 今年も終わりが見えて来た

(去年よりはましかもな…)

ここ数週間 寝てばかりでまともに動けず らいにはお世話されてばかりと

兄としての面目が丸つぶれ…。無理のし過ぎと

彼女の言葉を思い出すだけで泣けてきた

体調管理は万全のつもりで働いて来てが、体にかかる負担は予想以上

叱られ 怒られ 心配させる の三拍子だ まったく家族に心配

をかけるなど何度誓って破れば気が済むのか…。 本当に妹の優し

が身に染みる

ついでに弟にも感謝だ

サンタクロースのコスで隣に立つ 弟はここ暫くは俺の用事に付

き合ってくれていた

学校での様子も随時報告も受け『まあ うん』と全く参考にならないことしか言わないけどな

同じく 後輩の真弓ちゃんもこの季節にわざわざミニスカサンタのコスをさせられている

店長 もう少しまともな衣装はなかったのだろうか……………。

「似合いますかね」

「うん 流石は真弓ちゃんだ うちに欲しい程だ」

「兄は変態だったか」

「うるせー 可愛い後輩は愛でろと言うだろ それに彼女にも世話になつたしな」

「私は自分で出来る範囲で先輩のお手伝いしただけですから お気になさらず」

「凄く素直な子だよな」

「兄は暑苦しいぞ」

「うわあ……………」

「良い人なんですけど どうも感情的な兄で」

元から俺と真弓ちゃんはここでバイトをしていたが

急に働いていた人が二人もやめてしまい 店長に『上杉君の知り合いで誰かいないかな?』と聞かれた。

そこで白羽の矢立ったのが弟の風太郎だ、

ちようど新しいバイト先も探していたのでタイミングはバツチリ

そういう経歴もあり

先月からここで働いている 紹介した時は『身内がいるのか…気にしなければいいか』と

何とも失礼な奴だが こいつらしいと安心感もあった

ただ シフトが、かみ合わず 俺と真弓ちゃんとは中々働く機会もなかった

彼からしたらその方が良かったらと思うけど

回復した今日 やつと風太郎の働く姿を拝めた『お前の方が珍しい』と一言言われた

以前は 一花と五月に目撃され焦ったからな

けど働いている姿を見られても気にしない事にした 考えるだけ無駄だと

それに…あいつらとはもう学校以外で会うことは無いだろうしな

「先輩 これ今週の話数です 出番は少ないと思いますが映ってました」

「サンキュー このお礼はちやんと返す」

「いえいえ これくらい」

「そうどうぞ ありがたく受け取れ」

「お前は 出費が嫌なだけだろう」

「違う…」

「凶星か」

一花が出ているドラマ それを真弓ちゃんに頼みディスクに落とし込んでもらっている

家にはDVDを再生する機器はないが、あいつが出ているものだからちゃんと保存して何時でも観れるようにしておきたい…。

『ファン一号』と堂々と宣言したんだ それに恥じないファン活動をしていないとな

因みに一花の女優云々の事を俺は、話してはいない 彼女は偶然にも一花が出ているドラマを見たらしく

友人である三玖に本人かどうかそれとなく聞いてみた所『あれは一花だよ ファン二号は私』

との事 それ以降からだろう彼女もすっかりファンになったと話
「なあ…真弓ちゃん 三玖はどうしてる?」

「うーん 三玖さんは変わらずですよ 期末以降から勉強も以前よりやってるようです」

私も相談を受けます」

「そうか それで 一応お前にも聞こう」

「勉強は楽しいぞ それだけだ」

「ですよー」

風太郎なりに気にはするが、そこまで観察するような事もしないだろうな

五月は俺の隣 三玖は真弓ちゃん前 この二人から現在の二人の状況を聞いたが

特に異常はなく 変わらずだと教えられる

…もう一度言う風太郎のは全く参考にもならん

時間まで三人で会話をしていればドアが開かれ 男性が気合の入った顔で現れ

こちらにあいさつをくれた この店長さんだ

「さて みんな集まったね 上杉君も回復したし 無事に聖夜の夜を戦えそうだ

あの糞パン屋との差を広げる絶好の機会だ みんなよろしく頼むよ」

『了解です!』

店長の気合も高まる 何故かずっと向かいのパン屋を毛嫌いしており

売上戦争の真つ最中だ

特に今日はクリスマスという事もあり ケーキの予約や店舗での販売も多く

お店の中も人でごった返している

自然と俺達もやる気がわいてくる

俺がこの賑わいを見るのは2年ぶりだ 去年は事故のせいでバイトに来れず

クビになるかと思っていたんだが 店長の計らいで何とか席を残してくれていた

『上杉君 真面目だから 僕は見た目で判断はしないよ 糞パン屋に取られるよりいいし』

最後が絶対に本音だよ…。

「店長さん やる気ですね」

「パン屋の店長と何があったのやら」

「俺もここを受けた際にパン屋について聞かれたな 何なんだ?」

「はいはい 無駄話しない 上杉君と弟君は外でピラ配ってきて 須藤ちゃんは接客お願いね」

厨房近くで話していれば店長に見つかり俺達は持ち場へと向かう

「真弓ちゃん 何かあれば呼べよ?」

「大丈夫です もう変なお客さんに絡まれても大丈夫なように兄から護身術を学びました」

「後輩がどんどんパワフルになっていくな…」

「それより 先輩もビラ配り頑張ってください きつといい出会いがありますよ？」

「俺は出会いなんて求めてねえけどな 営業スマイルで頑張りますよ」

真弓ちゃんはあれ以降 自分でも対処できるように兄である須藤に護身術を学んでおり

それなりに腕が立つ 実際に運動神経も兄があの男だ それは彼女にも引き継がれているのか

四葉程ではないにしろ 足が物凄く速い 俺と同じでバイトかけ持つ都合上体力も必要だ

本当に あの真弓ちゃんが立派になって…先輩は嬉しい限りだ

「幸太郎早くしてくれ 一人だと心細くて死ぬ」

「お前のメンタルはそこまで弱くねえだろうが じゃ 真弓ちゃんホールは任せた」

プラスチックを持ち 俺と風太郎は店の外へと向かう

雪もちらつく中での客引きだ 風邪がぶり返さないよう たまには自分の体も少しは労わるか

それにしても『いい出会い』 真弓ちゃんは占いでも嗜んでいるのだろうか？

最近の後輩への謎は尽きないな…

「ケーキ いかがですかー」

「どれも美味しく お値段もお得です クリスマスのこの夜にどうぞ お願いしますー！」

「お前 本当に バイトと学校での顔の使い分け凄いよな 一花の事 言えないぞ」

「何を言うんだ おっと どうぞ チラシです 興味があれば見て

行ってくださいね」

街中は人であふれる どの人もカップルやら家族やらで楽しそう
だ

見ているだけでこっちも楽しい気分になれる

客引きをしていれば弟は俺の変わり身を見て驚いているが営業ス
マイルだ

それに学校でこんな姿見せる必要は全くないし お客様の前だか
ら出来る顔と言うのもある

暫くは 店先の人にチラシを配り 店に呼び込む それの繰り返し
しでだいぶ賑わってきている

接客する真弓ちゃんがあっちこっちお盆を持って走り回っている
何とも頼もしい後輩だな…

「あの…」

「はい 何でしょうか 当店自慢のケーキです もしよろしければご
確認していきますか

味見も可能ですよ？」

「ケーキを一ホールください…」

「!! あのここはケーキ屋です お客様」

「ですから 注文です」

「はい わかりました…風太郎 やばい客だ」

呼び止められ そのまま営業スマイルで変わらぬフレーズを言い

何とかお客様を引き留めようとしたが、その客は『ケーキ』の注文
をしてくれとありがたい

本当にありがたいお言葉をいただいたが 客に問題があった…。

それは期末以来 会う事が無かった 中野五月だった

真弓ちゃん これがいい出会いって奴なのか…。

「真弓ちゃん 話したのか？」

「先輩 顔 顔が近いです」

「あつ すまん…んで」

「何の事ですか？ 私は知りませんよ それより早く注文が来てるんですから」

「風太郎が行ったよ 俺は厨房に行くさ そろそろ店も回らないだろうしな」

「良いから 先輩行きましようー！」

「ちよ まつてくれ！ 真弓ちゃん」

中野五月だけではない 中野姉妹全員がこの店にやってきた

店内へと案内すれば俺は後輩を厨房付近まで呼び 何故こうなつたか理由を聞きだす

本人は知らぬ存ぜぬと目お合わせないが、この子の友人は中野姉妹だ

きつと三玖と五月に教えたのは彼女だろう

犯人も分かれば俺は厨房の手伝いに向かい 風太郎に彼女達の相手を任せるつもりだったが

首元を掴まれ 後輩にズルズルと引きずられていく

本当に俺達の周辺にはパワフルな女子が多いな

「では 先輩方お任せしますね 三玖さん 五月さんファイトですよ」

「真弓ちゃん！ 真弓ちゃん！」

「お前はいい加減諦めろ」

「つ…………… ではお客様 ご注文のケーキでございます」

「コータロー君 変わり身はや！ 本当に君は変わらないね」

「真弓ありがとうね 今度お礼するね」

「須藤さんには感謝しないと行けませんね」

やっぱり真弓ちゃんかチラツと見たが後輩は色紙を持っていた

それにこやかに手を振る一花はインクを持っているまさかサインで俺は売られたか？

「やっとケーキも来たし 遅いのよ」

「すみません 今日が繁盛してまして」

「私たち お客 あんたたちは店員」

「さっさと持って お帰りくださいませー」

「あーら できるじゃない」

「はあ……………お前らは仲良いな」

皮肉合戦だ これを見れば何処か安心感すら覚えるな

本当にケーキを頼みに来ただけなのか？

疑問に思う俺を五月が呼び止める

「すみません」

「何でしょうか お客様？」

「ケーキの配達ってできますか？ やっぱり家に届けて欲しいので」

「すみません 当店では配達はやっておらず」

残念ながらうちはそこまで手を回すようなケーキ屋ではない

ここで食べるか持って帰ってもらおうかの二択だ

特例も偶にあるがこの雪だ バイクも出せないしな

「えー」

「落としちゃうかも」

「すぐそこなので」

「雪も降ってるし」

「いいでしょ？」

「お願いします」

「か弱い乙女に持たせるつもり？」

「店長ーやばい客がいますー！」

「クレームですよ 塩まきましようー！」

悪質な客過ぎる 元気な姿が見ただけで俺はもう満足なんだし

さっさと帰宅して姉妹で仲良くケーキを食べて欲しいもんだ

クレームは慣れてるが顔見知りには夕子が悪いな…

「もう店も閉める こっちはもういいから最後に行つてあげなよ」

「ですよねー」

「はあ!？」

「上杉君 弟君 メリークリスマス」

「このバイトも辞めようかな」

「諦めろ これは駄目だ」

店長は既に向こうの味方だ この店で信用出来るのは肉親の弟だけだろう

俺はさつさと白旗上げたけどな…。

「四葉 雪の上は危ないよー」

「お子様なんだから滑っても知らないわよ」

「…」

「…」

元気溢れる四葉を先頭に姉妹は雪道を進んで行く

そして俺達は無言で後方について進む

何を話して良いのか正直気持ちの整理はついてねえ

あいつらも普段と変わらないし 何も言ってこない 文句の一つも覚悟はしてたんだけどな

それにしてもおかしいな この道は彼女達の家の方とは全くの別だ

近道と言える程のもんでもない…。

「お客様ー 道が違いますよー」

「あつてるよー」

「こつちこつち」

(わざとか)

(どうみても遠回りだしな)

「黙って辞めたことは悪かった だが もう俺たちは家庭教師には戻らねえ」

「悪い 俺も同意見だ 反省してるし顔が見れただけで十分だ」

遠回りで連れまわされるが、彼女たちが陰湿な事をするわけではないだろうし、

何かしら遠回りしなければいけないと考えた方がいいのか…。

思い当たるとしたら俺たちに聞きにきた…そうとらえるのが自然だ

まあ：確実に怒っているだろうな……。

でも何を話そうが、俺たちはもう戻れない：戻らない　その意志は変わらない……。

「見てください　この人が新しい家庭教師です　上杉君達にも見せておきたくて」

「……」

五月がふり返り　一枚の紙を手渡す　それは今度から彼女達を指導する

家庭教師の男性の写真と詳しい経歴が書かれている　人の事は言えないが少々胡散臭い人物に見えるが

東京の大学を出て元教師　非の打ち所がない　プロだ

唯一の難点があるとすれば　名前だろう　丸男って　あの男と同じ名前なのは好かんけどな

「もう暫くはかかると思ったが　あの人も約束守ってくれたか」

「意外と早かったな　それに優秀そうな人だ　この人ならお前達を赤点回避まで導いてくれるだろう」

風太郎も複雑そうだが、彼なら姉妹を任せても良いだろう　勉強できると人間と元教師とでは場数が違う

「いいの？　このまま　次の人に任せて私たちを見捨てんの？　あんたもまた……」

「俺達は二度のチャンスで結果を残せなかったんだ　次の試験だってうまくいくとは限らない

　　だったらプロに任せるのが正解だ」

「悪いな　これ以上は俺達の身勝手に　お前らを巻き込めねえんだ　二乃ごめんな」

　　中間に期末　その間にあった小テストでも結果と言えれば赤点ばかり

半年以上の期間を貰い選ら得たのそれだけだ　それに姉妹の仲を俺達のせいで一度は危機的な状態まで追い込んでいる　身勝手が過ぎた　結局は自分の事ばかりだ

こいつら全員ときちんと向き合えて　それで勉強を教えられるそ

んな人材が今は必要だ

出来ない奴らが、もうかき回す事なんてする必要はない…。

「そうね あんたたち ずつと身勝手で 上手くもいかない そのせいでしたくもない勉強させられて

必死に暗記して公式覚えて でも問題解けたら嬉しくなって…」

「…二乃… 俺たちは…。」

「ここまでこられたのは全部 あんたたち兄弟のせい 最後まで身勝手でいなさい謙虚なあんたたちなんて 気持ち悪いわ それに次はないって約束したでしょ ！」

あの二乃が…俺達を一番に毛嫌いし 姉妹の為に怒った彼女がここまで言ってくれる

勉強なんてくだらない そうとまで捉えていた彼女が本当に心の底からの言葉を俺達は聞いた

それなのに…俺達は本当に身勝手だな…。

「幸太郎君は私に言いましたね 全員笑顔で勉強させてそして最高の卒業をさせたいと…あれは嘘だったんですか？」

忘れる訳がない それはあの日五月に言った言葉だ

彼女達と過ごしたお陰で 俺はもう一度人を信用できる しても良いんだと思えたんだ

必死に呼びかける五月に俺達が言える事は限られている 既に自分達で降りた身だ

今更過ぎる…。

「そんなわけあるかよ…でも俺達はもう辞めたんだ」

「お前らの家にさえ出入りを禁止されてる」

「それが理由？」

「ああ 早く行こうぜ」

「冷えて来たし 風邪引くぞ…行こう」

一花の問いかけに俺達そう答える

あの人からの言伝だ 『二度と入る事は禁ずる』 念を推された程だ 余程こつちが嫌いらしいな…。

「もういいよ…ケーキ配達ご苦労様」

「いやまだ……」

「ここだよ　ここが私たちの新しい家」

風太郎からケーキを貰うと　一花はもう既に家の前までついたと話す

指さす場所には豪華な高層マンションもオートロックも警備員も配備されていない

ただの年季の入った　今にも崩れそうなアパートだ……。

そこはまるで　かつて彼女達が住んでいた　アパートを連想させる

ここを借りた　蓄えはあると話す　あの家がダメなら新しく用意すればいい

そして　あの男にも既に報告は済んでいるとまで言つてのける

俺も風太郎も開いた口が塞がらない

「今日から私たちは　ここで暮す」

「お前ら……何を考えて」

「これで障害は無くなったね」

「嘘だろ……教わる　たったそれだけの為に……あの家を手放したのか……？」

「頼む……やめてくれ　考えなおしてくれ　間違ってるぞ」

「いいえ　間違つてませんよ　これで良いんです」

「言いましたよね　大切なのは　どこにいるかではなく　五人でいることなんです

つてお兄さんは知りませんでしたね　でもそれが私たちなんです！」

何もかも　頭が追い付かない　俺達に教わる　それだけのために

彼女達は何の不自由もしない　生活を捨て去ったのだ　あの男から一度距離を置き

自分たちの力で出来る範囲をやつて見せると……。

大切なのは　どこにいるかではない　五人でいること

場所なんてどこでもいい　零奈さん　そう言う事なんです　俺はまだ彼女達を見守つて良いと

共にいても良いと そう思つて良いんですね

全てを言い終われば四葉は持つていた マンションのキーカードを川に投げる

覚悟を決めたつもりだったでも 本当に覚悟を決めたのは俺達兄弟ではない

彼女達姉妹の方だった…。

「本当にやりやがった！」

「っ！ うわ！」

ツル

キーカードに意識を持っていかれ つい足元がおろそかになつていた

この時期は良く滑る あの人もそうだったな
滑つて転んで 俺は会えたんだ…。

走馬灯だ このタイミングで六花さんの事を思い出すなんて

『必要とされていきますよ 上杉さん』 本当にそうなんですな 俺の方が馬鹿でしたよ

どぼんっ!!

「コータロー！ フータロー！」

「幸太郎君！」

「上杉さん！」

「お前ら 全員飛び込んでどうすんだ！ さむー」

「そうだ 何でよりによって」

気づけば真冬の川に七人の男女が飛び込む

泳ぐには早過ぎる 全員来る必要もないだろうに とことんお人好しだよ

「たった 二回で諦めないで欲しい…今度こそ私たちはできる コータロー フータローとならでできる… コータローは言ったよね 変われる 頑張れるきっかけは必ずあるって 一人でダメならみんなでって それが今そうでしょ？」

「!!」

必死に俺達に呼びかける三玖 そして俺はあの人の言葉を今一度

考えた

『あなたが自分を許せない』『上杉さんが自分を認めればいいんです』
ずっと片隅にあるその言葉……俺は自分を許す　つまりは彼女達
から離れ

俺一人で生きる事が許す事だと思っていた　認める事だと思つて
いたでもそれは軽率だった

今なら　言えるかもしれない　俺の答えを……俺は

「二乃！　くそ待ってる　幸太郎は三玖と五月を頼んだぞ」

言い切ろうとする前に水の冷たさに体が思う様に動かないのか二
乃が溺れかけており

風太郎は四葉達と共に二乃の元へ向かい　俺は三玖と五月の手を
掴み陸まで目指す

「わかった　二人共俺の手を離すなよ！」

「もう絶対にあなたの手を離しません　あなたが何を言おうと」

「そのつもり　コータローが『大丈夫』って言っても私は聞かないよ

私が見てないとコータローはまた無茶をするから」

「……ならばらくはこの怪我人の面倒でも見ててくれ　ありがと
な」

『うん』『はい』

もう二度と離すもんか……大切なこいつらの為に俺はもう一度彼女
達の為に

やれる事をやる　それが俺のやり方だ

陸まで上がれば風太郎は五人に呆れ『考え無しすぎる』とお説教だ
履歴書を破り捨てれば高らかに宣言する『俺達の身勝手に付き合っ
てもらおう！　最後までな』

「ふう　さむ」

「コータロー　まだ風邪が治ったばかりなのに」

「なんで知ってたんだ？」

「須藤さんから聞きました それに私は同じクラスですから把握済みですよ」

「このままだとま風邪をぶり返すね」

「一花にまた移したら面倒だ 行くぞお前ら せつかくのケーキだ台無しにはすんなよ」

「うん 大丈夫だよ」

「けど 良いのか 俺達がいるとケーキが五等分出来ないぞ？」

「良いんです 七等分でも」

「うん みんな公平だから」

「そういう事 さあー行こう コータロー君」

（六花さん……俺はもう大丈夫そうです きつとあなたの力を借りる事は暫くは無さそうです

今年のクリスマスは一人でもない 7人で過ごす 楽しくあり騒がしくあるそんな日だ

本当にありがとうございます また何処かで会いましょう
六花さん……)

あの日 俺は一人だった けど今は違う

愛想のない弟に 個性豊かな五人の姉妹 この暖かな気持ちを俺は受け入れよう

「風太郎 今度こそだ」

「ああ！ もう負けてたまるか！ 頑張ろうぜ幸太郎」

決意も覚悟も間違えない 俺達は正しいと思えるこの道に行く

あんたには屈しない 中野先生

それに自分自身にも負けない……。

上杉兄弟と中野姉妹が再び一つになった時 別の場所で一台の車

が走っていた

一人の男性 風太郎を診察し 幸太郎の病室に現れた男性 中野
姉妹の父

「江端、今日は遅かったね」

「申し訳ございません、旦那様」

「構わないさ。……しかし、その恰好はいつたい……」

「ほほほ、イメチエンでございます」

「そうか……まあいい」

彼が乗る車それを運転しているのが 阿多辺丸男 事江端である
中野は追記する事はなく ただじつと前を見る 先ほど掛かって
着た電話

彼はそれを聞き 彼女達の本心を聞く事となり 今置かれた状況
も改めて再認識

「やってくれたね……上杉君。しかし……君のような男に娘はやれな
いよ」

静かなる怒りとも言うのか彼は表情一つ変えない

この事態を招いた一人上杉風太郎の名前を口にし これからを考
える

「それに 上杉幸太郎 また君はそうした事をするのか……君がいる
限り」

五月君も三玖君も解放されない……。 君にだけは誰も渡せない」

第三章

第六十話 不良少年と初の春と再会の兆し

年が明けた

あの真冬の川にダイブ事件

不思議な事に俺は風邪がぶり返す事はなく無事に新年を向かえる事が出来たのだ…。

真弓ちゃん曰く『先輩 バランスが崩れた事で体調を崩したんです五つ子さんは偉大ですね』と

なんのこっちゃやと思うが、俺が考えても分からんらしい

後輩の意見だ大切にしよう 自分のバランスが何かで保たれそれが崩れた一体何を示しているんだか…

さて辛気臭い顔はやめだ今は新年を満喫しよう

年が明けて最初に訪れたのが父方の祖父母 勇也さんの父親と母親

つまりはおじいちゃんとおばあちゃんの家に一度里帰りをしていく

去年はこれぞ二人にも心配をかけたが俺の元気な顔が見れて二人も安心してくれた

本当に家族に心配ばかりで長男として恥ずかしくなってくる

そんな俺と対照的に 風太郎は寝っ転がりらいはと共にドラマを見ているが

ある場面で文句ばかり言いだしてる

それはお茶の間でのキスシーンだ

さぞ凍りつく場面だが元から冷めてる風太郎はたいした興味も示さない

らいはは年相応と言った感じで目をぱちくりさせ 俺や風太郎の意見を求める

「キスカ…まあらいはの彼氏とか俺は許さねえけどな」

「同感だ」

「お兄ちゃん達 怖いんだけど」

可愛い妹を誰にやる物か 俺は確かに恋や愛には寛容だ
だが例外もある 目に入れても痛くないこの純真無垢な妹が彼氏
でも連れて来てみる

俺は嫌われる覚悟でその男子生徒を血祭にあげるだろう

最終的に生き残れば 考えてやってもいいがやわな男がらいはを
守れるものか

俺より強い 男を連れてこい せめて最弱風太郎を倒せるレベル
は必要だ

「軽く デイするのやめろ」

「あつ 聞こえてた」

「幸太郎 風太郎 らいはちゃん 明けましておめでとう ほれ お
年玉」

『わーい』

祖父が現れれば今年のお年玉として 封筒を手渡す

「ありがとう」

勿論らいはにだ 隣で落ち込む弟は『去年まで貰えたのに』と
シヨックを受けている

「いい歳だ 挨拶で十分だろう」

「うるさい はぁ親父 挨拶も終わったしもう帰ろうぜ 新年の初勉
強がしたい」

現金なやつだな 俺よりもお金にがめついよな まあ遅しいと捉
える事が出来るが

新年くらいは勉強から離れてまったりしたらいいんだろうに

「バイトしてえー」

「お前は バイトを少しは休め」

「つて もう一か所ご挨拶に行かなきゃいけないところあるでしょ？」
「もう一か所つて」

「あぁー そうだな」

残された場所とは一つしかない

早速向かわねばと嫌がる風太郎を引きずり その場所へと向かう

「やっぱ 神様には挨拶しておかないとね」

「なんだ……」

「チツ 末吉か」

そうそれは神社へのご挨拶である

今年一年の幸運と安全祈願を神様にお問い合わせする割と重要な事である

神頼みでも効果あるし 案外馬鹿に出来んからな

隣の弟はどこに行くと思っただんだ？

勇也さんがおみくじを買えば末吉らしく 愚痴をもらす

らしいは嬉しそうに大吉を見せてくる

風太郎はと言えば 凶と年明けから飛ばしてるなこいつも

俺も今年の運をおみくじに聞いてみよう一回だけ試しに引いてみた

「えつと 何々………はっ?」

「うわ お兄ちゃん 大凶だ」

「お前こそ飛ばしてるな 幸太郎」

「うるせー これは別に良いんだよ」

俺も大概だまじで大凶なんて代物が実在していたとは

確か神社によってあったりなかったりとかかなりレアな物らしく

あいつ曰く『幸太郎はそのうち 引くだろうさ 私も同じ物を引けば相殺されるよ』

そんな効果はない

それで問題の中身だ 俺は中を見れば自分の目を疑った

『恋愛運 今年是最悪で最高の一年です 予期せぬ再会があなたにあるでしょう』

それはある意味あなたの今後を左右するものです

名前の最後がが行の人物には気をつけましょう その人物があなたの運命の人物かも』

「アバウトか！ 朝の占いじゃねーんだぞ

意味分かんねー 何がか行だ！ んな人間周りにいっぱいいるわ！」
全く納得がいかない結果に俺は珍しく怒りを表す

今年の運命を左右する出会いとは何だろうと気になるが他の文面
が朝方の占い並みに

簡略的だ良くこんな内容が採用されたもんだよ

「お兄ちゃん 落ち着いて それにしても変な内容だね か行なん
て」

「はあ……………兄は泣けて来たぞ」

今年の俺の運命はその名前の最後がか行の人物に託された
のっけからぶつとばしてるな神様もよ

「うわ…お前ら…何でここに」

「わー！ 皆さん きれいー！」

俺がおみくじとのにらみ合いを続けていた時

後ろで風太郎とらいはの声が聞こえる

振り向けばそこには綺麗に着飾った 五つ子の姿があった

新年早々出くわした事に風太郎は面倒事の始まりだと言わんばか
りの第一声だ

「よう お前ら 流石だなすげー綺麗だ 新年から良いもん見れた

あけましておめでとーございます」

「あの ありがとうございます 幸太郎君 えつと新年あけましてお
めでとーございます。今年もよろしくお願いします」

「コータロー 明けましておめでとー 今年一年もよろしく願いまし
ます。見てもらえて良かった」

「コータロー君 あけおめー 今年もよろしくね！ ちゃんと褒める
あたり流石だね」

「俺は自分の思った事を言ったまでだ 綺麗なもんを綺麗って変か？
お前らは美人なんだし 着飾れば目が行くのは当たり前だ」

「いやー 本当に コータローくんは良く すらすら言えるね そんな言葉……。すごく恥ずかしいんだけど……」

新年最初の中野姉妹は何時もと変わらぬ元気な姿だ

振袖と良いまさに花束である

おみくじでの大凶なんて大してあてにはならんのかも知れんな

ぶーたれる弟は『なんで新年になってまで』と嫌味全開 今年も平常運転である

初詣が終わればそのままアパートまで戻ると口にする四葉は風太郎とらいはを是非

家まで連れて行きたいと申しとおる

「おう 連れてけ連れてけ」

「お前は何故 他人事のように言えるんだ」

「楽しんで来いよ って何だ 五月？」

「幸太郎君 勿論来ますよね」

「コータローも強制参加だから」

「ほらほらいくよー」

「へいへい まああ別にいいか……」

「ご挨拶は済ませたけど 家にお邪魔になるのも悪くねえかもな

今日は特に予定もない と言うよりもスマホが使えん今連絡もままならん

「ん……コータロー君 何か落としてる おみくじ？」

「勝手に見たらだめですよ」

「そう言いながら 五月が一番 気にしてる」

「少しだけ見て見よう 何々………今年恋愛運は最悪で最高です

予期せぬ再会があるでしょう 名前の最後がが行の人間には注意

その人物があなたの……」

「一花 三玖 私…… か行ですね」

「って 何真剣に見てるんだらうね コータロー君に返してくるね」

後方で何やら騒がしい声が聞こえてくるが、何を手間取っているのやら

ちゃんと前を見て歩け 転んだらあぶねーだろう

あの日訪れたアパートまで8人でまったりと向かい

道中は何事もなく到着 噂だけは知っており実際に来るのは初めてとわくわくしてる妹には悪いけど

今の住居はあまり夢があるものではない 結構な現実的なお宅である

『おじゃましまーす』 一応挨拶と今日は正月だ 礼儀正しくを心掛
けよう

家まで案内されれば彼女達は即座に着替えを始め 普段通りに私
服に着替え

炬燵という人間をダメにする魔窟へと入って行く

あの時は気にはしなかったけど 内装自体は普通のアパートと変
わらんし

衣服や勉強道具以外はやはり向うの家に置いて来たんだろうな

改めて こいつらの覚悟を見せてもらった

その覚悟を見せた5人のうち三人は録画した恋愛ドラマに釘付け
だ

風太郎が冷めた目で見ていたドラマだろうな

『ロマンティックだわー』と述べる二乃だが確かにとてもロマン
ティックである

実際はこんな状況なるかと考えれば難しいもんだろうな

「僕は君が好きです かあ……………」

「ひゃー！ 幸太郎君 今なんと言いました」

「えっ 俳優の台詞をオウム返ししただけだが？」

「心臓が止まるかと思いました」

「悪かったなー こんな奴が言いだして」

「違います そう卑屈にならないでください」

「ふふふ 恋愛ロマンチストですからね お兄さんは」

「まだ その称号を俺は持っていたのか」

恋愛ロマンチストとは林間学校前日の日に四葉から命名され進呈
された

俺の称号だ こっぴばずかしいもんだけど実害は無いな

人前で言わないなら別に言われてても気にはしない

「お兄さんは何かとそう言った事に敏感なので これはもう不動ですよ」

「へいへい」

「つうか 何の為に呼んだんだ らいは 幸太郎 帰るぞ」

「風太郎も少しはゆっくりしてろ せっかく御呼ばれしたんだし」

「本当にお前の適応力はえーよな」

「まあまあ 彼の言うとり さあ、お正月くらいゆっくり過ごそう」

「おせちも作ったけど コータロー食べる？」

台所の奥からお重箱を持った三玖がやってくる

ここに来てから顔を見なかつたが、おせちを用意していたようだ

見栄えで言えば、前回よりも数段に上がっている

「おつ うまそうだな 三玖が作ったのか？」

「うん 頑張ってみた」

「あれから頑張ってたんだな その姿勢は大事だ」

「そうだよ コータロー君 ねえー三玖」

「それに これはコータロー用だから」

「おつ そうか うん ありがとな三玖」

三玖の料理は見栄えは進化しても味はまだまだだろう

けど人に作ってあげる熱意と愛情は何にも負けない調味料である

有難く俺はいただくとする

「あれ？どうしたの？ らいはちゃん」

「え……………えーつと…私、勘違いしてたみたい。中野さんのお宅はお金持ちって聞いてたから…私、てつきり…もつと」

「あぁー それはならいは」

横でお腹を鳴らす妹 お腹が空いているのだろうか何処か様子がおかしく

口からでたその言葉で俺達は『あぁー』と声が重なる

彼女達は俺達を雇い そして給料を以前は貰っていた

あの桁だ それにお祭りなど らいはにとってはお嬢様な生活を

している人物が中野姉妹だ

だが それは去年までの話だ

彼女達は24日いやそれ以前からだろうか このアパートに身を寄せている

その理由はと言えば 『勉強を教えてもらうため』 以前の家に俺達は出禁を食らっており

あのままでは勉強を教える事もままならない そこで一花がある計画を立て

父親と話す事でこのアパートに住むことで あの家には出禁だがここはセーフと

何とも揚げ足取りな作戦だろうけど 以前の裕福な生活を捨ててまでの覚悟だ

それを俺達は無下には出来ない…んで その事情を知らない妹からすれば

今までの自分の勘違いだったとなってしまう

「妹よ 人には色々な理由があるんだ 察してやれ」

「あう 何かすみませんでした」

「いや あんたも適当言わないでよ」

詳しい理由を妹に教える必要もない

俺達が一種の原因とすればどうなるか…。

「あはは…色々ありまして…」

「何も無い部屋でごめんねー」

「いえいえ おかまいなく」

「振袖も大家さんに返しに行かなくっちゃ」

「あの状況で疑問だったのが借りてたのか」

「ひとまず今は必要なものから揃えてる段階です」

疑問が一つ消えた あの状況で振袖だけ持ってくるとも考えにくいしな

必要なもの 炬燵や衣類 それにテレビなどは彼女達には必要なものだろう

以前と違い娯楽に関するものはほとんど置いて来ている

「じゃあテレビは後回しでもいいだろ」

「お前や俺はそれで良いだろうが 普通の人間は暇で死ぬんだよ」

「そうそう 暇つぶしにテレビくらいないと」

「うちにはないがな」

大して必要ではないと思っていたんだが、一花の活躍も見事も出来ない

「らいはもこの年頃だ友人と共通の話題も欲しい筈だ

(すこし 考えてみるか……)

「とにかく自分の家だと思ってくつろいでよ」

「そうだぞ 風太郎も座れ」

「お前は何でそこまで馴染めるんだよ」

「ここまで来て何を言うんだか……」

気になりはしているがしぶしぶと風太郎が開いてる場所へと座れば二乃が

『なんでそこなのよ 炬燵入りなさいよ』と自分の隣を指さす

「らいはを座らせようとするが、一花にも勧められ 少々疑いながらもそこに座る

「つうか 8人は入れねえな 俺は適当にこちら辺座るか」

「コータロー君も入りなよ」

「いやいや 流石に無理だろ」

「良いから さー座った座った」

座れば床でも良いんだがせっかくの三玖の料理を床において食べるのも行儀が悪いだろうな

風太郎の前辺りに座らされ ぬくぬくとした温かさを俺は身に染みる

「そうだマッサージしてあげるよ 二人共お疲れでしょ？」

「別に疲れてはないが……」

「俺も別に大丈夫だけど？」

なーんか雲行きが怪しくなってきたな

「(厚意なら甘えるべきだろうけど……」

ずるずると炬燵から引きずる俺ら二人

「一花だけずるい」

「早い者勝ちだよー」

「じゃあ腕取った!」

「仕方ないわね」

「私は幸太郎君の手を」

「なら私はコータローの右手を」

風太郎には四葉と二乃が

俺には一花と三玖と五月が

それぞれべつたりとくつつく様な形でマッサージを始める

「距離感を考えろって何度言えばわかるんだかな……」

「日頃のお礼だよー おっコータロー君肩凄く凝ってるよ」

「コータローの手やっぱり大きい」

「幸太郎君…手を大事にしてくださいね」

「へいへい……」

されるがままだけど

左手をマッサージしている五月がさり気に『大事にしてください』

そう述べる…俺の手の事情を知っている事も分かった

慣れきつてはいたし あの人言葉から察するに

三玖と五月は俺がどういう状況だったのかをずっと知っていたんだらうな

「お兄ちゃん達が急にモテました……お母さん、お兄ちゃん達に一足早い春が来ました」

「違うぞ ら らいは!」

「そうだぞ お礼らしい」

妹が勝手な勘違いをし始めている 誤解は解かねば

しっかし 四葉も二乃も何処か嬉しそうだな 俺の気のせいではなさそうだし

これは俺の立ち回りも考えないとな 下手に動いたら二人の迷惑になるだらう行動は慎重に行こう

「あの幸太郎君これを」

「おっおう」

「上杉 何時もお疲れ様」

「…幸太郎 何かしたか俺ら？」

「知らんぞ」

「福笑いやりましょう 五つ子バージョンを作りました」

『『難易度たけーよー！』』

慌ただしい 五月は普段とは何の変りもないむしろ平常運転だ

二乃なんてにつこり笑顔で風太郎を労っている様子

四葉は福笑いをやろうと大量のパーツをだしてくる

慌ただしい…それに何か怪しい… 風太郎の言うように何かしたのか？

「あの コータローと それにフータローに渡したいものが」

「それはまだ早いよ！」

「みんな隣の部屋に行こっか」

三玖が俺達に渡したいものがあると伝えたが何か不味かったのか

他の姉妹に連行され そのまま隣の部屋まで連れて行かれ

全員その場から消えてしまう

「何を企んでるんだ？」

「確かに 気になるな」

「身の危険が無ければそれでいい 俺は静かに勉強がしたい」

「こんな時くらい 一度頭から勉強をなくせ」

「うるさい 幸太郎こそ バイトの事を忘れろ」

「へいへい…って あれねえ」

「どうした？」

彼女達がいらない間 二人で適当な会話で場を繋ぐ中

俺は神社で買ったおみくじがない事に気づいた

「らいはい 俺のおみくじ知らないか？」

「お兄ちゃんのか？ 私は知らないよ 私はすぐに結んできたし」

「お前 落としたんじゃねーのか？」

「はあ………あのラッキー占い見たいなおみくじ何か知らん」

「確かに 何かフワツとしてる内容だしな 所詮はまじないだ 根拠何てない」

「夢のない弟だな けど今回はどう同意見だ あんな紙切れに俺の今後を左右されてたまるか」

「ねえー 暇だから福笑いしてよう！」

「あいつら くるまで時間かかりそうだし」

「本当に何種類パーツあるんだ…」

何時まで待っても五人は戻ってこない

『不純です』と五月の怒鳴り声が聞こえてくる 何してんだ？

ただ待つのも飽きたのか四葉が持ってきた中野家 福笑いセットをらいはが引つ張りだしてくる

改めて見ても凄い数のパーツである

五人それぞれを髪型や鼻や口など沢山あり 誰から完成させるかで時間もかかるだろうな

髪型に関して言えば全員固有のものだ

上から攻めれば誰かが完成するだろうし地道にやっけて行くしかない

「ねえー これ誰のかな？」

「髪型は一花だけど それは二乃の目だろうな」

「待て待て その口は違うだろ ちよつと隣の部屋確認してくるわ！」

風太郎は譲らないがああ口はどう見ても四葉だ 口角の形で分かる どちらも笑みを作っているが

この形は五月で間違いない 風太郎とはあいつ等と過ごした時間の差が違うんだぜ

……見つともない兄だな

「決まりですね 幸太郎く……」

ガチャリと扉が開き 正面には五月の顔だ

うーん？ 俺の見立ては間違いない筈だ 何処まで精巧に作られ

ているかは知らないが

やはり五月の口だろうな　しかしここまでまじまじとこいつの顔を眺める日が来るとはな

「うーん　五月　動くなよ」

「えっ　幸太郎君　顔が　ちかい　ちかいです……」

（どういう事ですか　何故目の前に幸太郎君の顔が…これはやはりあのドラマのように

男性はきちんと選ぶべき　母はそう言いました　母が認めた彼なら　私は）

「やっぱり！　風太郎　この口は五月だ！　すまん五月　目が悪いと見えにくくてな」

「えっ　あの」

「五月……ずるい」

「三玖まで何ですか」

「くっそ　違ったか」

「えー　こつちだと思っただのに」

「わー！遊んでくれてるんですね！」

「ルール、ちよつと変わっちゃったけど……」

残念だったなやはり年季の差だ

しつかしあいつ等なんの話し合いをしていたんだ？

「えー…どれどれ……う……あ、上杉さん。ほっぺにクリームがついていますよ」

チュッ

「な……なっ……？」

「お、お兄ちゃん!? 四葉さん!」

「あれはまた飛んでもない爆弾が投下されたな」

『!?』

!!!!

全員がその場で固まった 四葉が風太郎の頬にキスをしたのだ
先ほど俺が五月から貰ったシュークリームを風太郎が食べてしま
い

その時だろう あいつは頬にそれを付けたまま俺もらいはも面
白がりあえて黙っていたんだ

まさか 四葉がここまで大胆な行動に出てくるとは、

彼女の性格だ無意識にやってのけたのだろうがそれはそれで恐ろ
しいな

「……………あ……………その……………今のほっぺにチューが家庭教師の
お礼、ということ……………／／／」

「??」

風太郎も突然の事で状況判断が出来ずいる

「コータローもお礼欲しい?」

「いや 俺は別にここでお前らと話すだけで十分だけど……………つて三久
さん」

「むむむむ……………コータローの朴念仁」

「またかよ」

ポンポンと俺の肩を叩く三玖は四葉がしたように

俺にもお礼として頬にしても構わないと提案してくるがその必要
はない

それにお礼と言うなら俺は既に貰ってる

不満なんだろうか ぷいっと不貞腐れてしまった

「あの……………その件ですが……………今の私たちでは十分な報酬を差し上げら
れない状況で……………」

せめても……………」

「ああー そう言う事か 俺も風太郎も別に気にしねえぞ? なあ」

「おっおう 俺達がやりたくてやってんだ給料のことなら気にすん
な」

何とか意識をこっちに戻した弟は俺と同じ意見を述べる

給料何ておまけだろう 確かに借金問題が解決する道は遠のいたけど こいつらが笑顔でいてくれるだけで俺は給料以上の物を貰えているんだ

「お礼をしたいのは俺の方だ お前らが笑っていてくれるだけで何十万以上の価値がある」

「上杉君……幸太郎君」

「出世払いで結構だ」

忘れていた 弟はこう言う奴だった

ドヤ顔で彼はそう言い放つまだ言い足りないのか更なる追撃だ 先程の感動的な空気をどうしてくれんだよ

「その代わりちゃんと言いと書いてくよな!! 一人一日五千円ぽつきり!! 1円たりともまけねえからな!! わかったか!!」

「お前……」

「貰わないとは言ってない 幸太郎程 お人好しでは通さないからな それでさ 俺達に渡すものって?」

「えつと……今日渡さなくていいか」

「出世したらってことで……」

風太郎はやはり変わらぬ ぶれない お年玉を貰えなかった事も大きかったんだろうな

色々と台無しになったけどこいつなりに借金問題には真剣に取り組んでいるんだ

それは否定できないな 頼み方つてものをもう少し学ぶべきだと兄は最近思ってきてるぞ

「そう言う事らしい 俺はかまわんぞ 五月?」

「本当に彼らしいですね 安心感すら覚えます でも幸太郎君だけに渡さないと言うのも不公平です」

「俺は補佐だ ただでさえ正式に採用されてないのに 辞めた後でとやかく言えるかよ」

「やはり 納得が行きません」

「ふっ そう思ってくれるだけで俺は十分だって言ってるだろ?」

お前からのお節介が給料だと思って受け取るさ」

24日に俺は自分から二人に言ってしまった。今更取り下げるともりは無い

今は貰える程の成果も上げれていないんだ、補佐は補佐でやりたい事を勝手にやらせてもらう

去年と全く変わらんけどさ……………。

「お前らは今を頑張れ 俺達もかわらず教えるから それで今はいいだろ」

「分かりました 幸太郎君は一度決めればそれを曲げませんから」

「お前には言われたくないけどな？ ふふふ」

その後は俺達は夕方頃までお世話になり

三玖のお手製お弁当までいただいた 生活も厳しい中律儀だなど思いつつも俺はお礼述べ

風太郎とらいはの三人で家まで向かう

『名前の最後にか行がつく人物には注意をせよ』

やはりおみくじの内容は当てならんな

無くした紙の存在を俺は頭から消し去れば何事もプラスに捉えるべく

先ずは今日と明日をしつかり頑張ろうと決意を新たにしていた

「帰ったね コータロー君達」

「最後まで騒がしかったわ」

「まあ お兄さん達より 私たちの方が騒がしかったけどね」

彼等を外まで見送り 姿が見えなくなった頃には彼女達もアパートまで引き返していく

きつとこれから自分達はあの頃のように様々な苦難が待っているだろうけど

あの二人と共にいればどんな問題もきつと乗り越えられる

「つてかき 私たちの隣の部屋 誰か入ったの？」

「そう言えばいつの間にか部屋が埋まっていますね」

「先週辺りだったか業者の人見た」

「この時期に引越しか珍しいね……………12月前半にここに来た私たちもたいして変わらないね」

中野姉妹が借りているアパート その隣の部屋は当初借りる際には空き部屋だった

しかしここ暫くの間人が行き来しており あまり生活音はしないが誰かが越してきていた

ただ誰一人として隣の住人とは顔を合わせておらず

引越しの挨拶もない こっちも未成年だけで住んでいるそういう意味では隣とは変わらないだろう

全員が部屋の中に入ろうとした時 カツカツと階段を昇ってくる足音がする

一步また一步と向かってくる 五月達が部屋に入る間際だ

その人物が現れた

黒く長いロングヘア― 美しい容姿

同じ女性である五月も彼女に見惚れていた

ただその人の瞳には光という物が感じ儂さすらも覚えた

ついつい視線が行ってしまい 気づけばその女性と目が合っている

少し気まずい空気の中 階段を昇ってきた彼女が口を開く

「おや お隣さんかな？」

「あっ……………今晚は隣に住んでいる中野五月と言います よろしくお願
いします」

「中野……………中野さんね よろしく」

「五月……………この人は」

「三玖ですか この人はお隣の方のようです」

「どうも……………中野三玖です」

「どうも 同じ顔だね 少し驚いたかな 隣に越してきたものなんだ

けど 色々と事情があつて

挨拶がおくれた ごめんね」

「いえいえ お気になさらず 私たちも越してきたばかりで挨拶も出来ず」

「お互い様だよ あーうん これだとダメだね 彼に叱られる少し待つてくれ」

顔を出す三玖も知らない女性がいた事で一度は驚いて目を伏せたがお隣の住人と分かれれば

彼女に軽く自己紹介をした

隣同士で顔を会わせないまま一週間近く 軽い挨拶のあと彼女は一度二人に待つていて欲しいと告げる

自室の前まで向かえば鍵を開けて中に入ろうとした

だがガラガラと部屋の中から沢山の荷物が溢れ彼女の足元まで転がっていた

「ああ 部屋は汚れるから嫌いだ 彼がいればこんな事にはならないのにさ」

「大丈夫ですか？」

「ん？ 気にしなくていいよ 何時もこーだからさ 以前片付けくれた人がいたんだけど

どうにも私は苦手なんだよ………お あつたあつた これ引つ越しの挨拶がわりに

菓子折りでもどうぞ」

「ご丁寧ありがとうございます えっと」

「いいよ 無理に返そうなんて 私も適当に渡しただけだし」
「本当にすみません」

お世辞にも綺麗とは言えないその惨状 彼女は何かぼやいていたが

以降は気にも留めず 溢れるそれを退かして何かを探す

あつたあつたと一つの箱を引っ張り出せば それを五月に手渡す

中身はお菓子の詰め合わせだと彼女は言う

「そう言えば まだ名乗つてなかつたね 私 面倒くさがつて遅れて

いた」

「えっ」

「私は 紡木 雨宮あまみやつむぎ紡木 だよ これからよろしくね 中野五月さん」

ニツコリと笑みを浮かべその女性は手を差し伸べる

その手を取ろうとした時 一瞬 彼女は目の前の女性に何処か既視感を覚えた

一体今のは何だろうと思うが後で考えれば良い事だと彼女は握手に応じる

「雨宮さんですね よろし」

「いや 雨宮って呼ばないで欲しいな 苗字は嫌いなんだ 紡木で良
いよ 中野さん」

「すみません 紡木さんですね 騒がしいと思いますがどうかご容赦
ください」

「ふふ 騒がしい事はいい事だよ 騒げるのは良い事さ それじゃま
た 何処かで

五つ子の末っ子さん」

(あれ……………私はあの人に五つ子と話したでしょうか?)

去って行く彼女が残した言葉に五月は戸惑うも自分の考え過ぎだ
ろうと頭を横に振り

そのまま部屋へと戻って行く

こうして新年最初の一日が終わって行った……………。

「!」

「どうした 幸太郎」

「いや なーんか すげー嫌な予感がすんだよな」

「適当言うな帰るぞ」

「何だよ 冷たい弟だな」

第六十一話 不良少年とお疲れ長女

新年が開けて幾ばくか経った

風太郎も俺もかわらず勉強とバイトの日々

今週には学校も再開する その前には中野姉妹達との勉強会も始めておきたい

3月には期末試験が待っている備えておいて損は無

成果も残したいが同時に前回のような失敗をしないように心掛けて
いる…。喧嘩事はもうこりこりでみんな仲良くが一番の理想だ

家に向かう際は風太郎経由で連絡を済ませる

俺の持つているスマホは未だガラクタで状態であり いつそのこ
と解約も視野にいれたのだが…。

せっかくもう一度持つと決めてこれを購入した訳で付き合ってく
れた五月にも悪いし

暫くこのままでも良いかもと考えている

(まあ……………持ってて害はないしな)

アパートにつけば、それは悲惨な状態だった

一部屋を五人で使っている 林間学校の再来を見ている気分だ
「もう こんな生活うんざり!」

悪いとは思ってる 原因の一端を担う分同情もしている

二乃が起きれば布団には五月が潜り込んで来たと話 夜中には取
り合いも発生していたとか…

「あんたの髪 くすぐったいのよ さっぱり切っちゃいなさいよ!」

「あー! 自分が切ったからってずるいです!」

「お前ら五人で寝てるのか……………」

「うちよりも広いが 五人だと狭くもあるよな」

「でも お布団は久々でまだぐっすり寝られてません」

「四葉は もう少し寝付けない方がいいと思う」

「ふかふかベットが恋しいわ」

「そうですね……………私もお布団は久々……………というわけではありませんが慣れるまで我慢しましょう」

あの生活から何ランクも下がった生活だ

それは文句の一つもでるだろうが、まだ生活をして2週間経つか経たないかだ頑張ってくれ

四葉の寝相にやられた三玖は頬が赤くなっているし　これは殴られたな…。

後から手当してやるか　五月は姉妹の喧嘩で俺達の家で暫く厄介になつていた影響だろう

他よりもまだましと言った感じだが　努力はするが文句は出てしまふ

「でも　私のお布団が消えたのは不思議です……………」

「本当に不思議」

「ベットから落ちなくなったのはいいよね」

「四葉　あんただけよ」

「はあ　新生活始まつて　早々これか　それに　幸太郎から聞いていたが一花は凄いな

お前らも見習えよ」

「見習えって……………」

「既に汚部屋の片鱗が見えてきてますが……………」

他の四名が未だ新生活になれない中　一花はぐっすりと寝ており
布団による要塞を建造している

どうにも中野一花という人物はすぐに寝れる人間であると同時に汚部屋にする才能まで持っている…。まじであいつと同じ部類か……………」

「おい　一花起きろ　朝だぞ」

「あ！幸太郎君！　今は」

「う……………うくん……………」

朝早く悪いが一花も起こそうと近づくと近づくが五月に止められる

まあ一花の事だ　どうせまた全裸なんだろうな…はあ

「……………あ、コータロー君。おっはー」

「おう おっはーだ 一花 はよ服着ろ」

「本当に君は……私も乙女だよ？」

「分かってる 風太郎外出るぞ」

「お お前よく平然でいられるな」

「お前は免疫がなさすぎる」

俺は散々見たし見られたしの一年を過ごした

それにこの手の人間を俺は何年世話していたか、要介護人間は慣れてんだ

「コータロー見ちゃだめ！」

「わーってる 出るから目を抑えるな 何も見えないだろ！」

「幸太郎君 今は部屋を出てください」

「あんた 何でそんな余裕あんのよ と言うか乙女の寝室よ出てきなさい！」

三玖に見ないように目を隠されるがそうされると余計に動きづら
い

軽く放心状態の風太郎の頬を軽く叩き

首根っこを掴めば俺は弟共に部屋を出る

「よし、揃ったな。これでやっと始められ……！」

「一花」

「あっごめん」

リビングへと集まれば一花が眠そうにうとうととしている

四葉が何度も肩を揺らし その都度目が覚めるが三度睡魔に襲わ
れている

ここの家賃は彼女が出していると話すがその為に無理をしてるん
ではないだろうか？

心配になってくるな

「コータロー君もフータロー君先程はお見苦しいものをお見せして申
し訳ない……。それともご褒美だったかな？」

「聞いてた通りだが 冬なんだから服を着て寝ろ！」

「習慣とは恐ろしいもので寝ている間に着た服を脱いじやってるんだよね」

「え！授業中とか大丈夫？」

「あはは家限定だから」

着脱機能が家だけで本当に安心した

学校で『中野一花って裸族らしいぞ』って噂がたった日には

どんな顔して零奈さんのお墓に報告すればいいんだよと頭悩ませる所だったぞ

「授業中に寝てる前提で話しが進んでる……」

「なんだと……！！」

「落ち着け 風太郎 疲れてんだそれくら許してやれ」

「お前はそうなんて悠長なのか」

「フータロー君もそんなカリカリしないでね コータロー君もごめんね……。これからは勉強に集中できるように仕事もセーブさせてもらってるんだ」

セーブしててこれかやはり女優ともなれば相当の負荷とストレスが溜まるんだろうな

なるべく一花をサポート出来るよう動くか……

ここまで身を削って頑張ってくれてる一花の為に俺達は俺達で全力でそれを支えるまでだ

「次こそ赤点回避して、お父さんをギャフンと言わせたいもんね」

あの男がギャフンと言う所は正直見て見たい

「うん」

「私も今度こそ……！！」

「そうですね 全員で合格して お父さんに上杉君たちを認めさせましょう」

改めて一致団結した姉妹の力をひしひしと感じている

この調子なら好成绩も残してくれそうだ そのやる気が消えない間に早速始めないとな

風太郎も珍しくやる気を見せる五名を見て少々驚いているが
元より赤点回避は当たり前だと言った様子で準備を始める
冬休みの課題を机の上に並べ　すぐに終わらせるぞと5名に言い
渡す

「どうした?」
「?」

俺達は凡ミスでもしたのだろうか

誰一人として課題を始めようとはしない

まさかここに来てボイコット運動など台無しな事は起こさないと
は思うが……………。

不安に思う俺を余所に　ニヤリと姉妹は笑う

「ふふ」

「あはは」

「コータロー　フータロー」

「あんたたち舐めすぎ」

バンと机にそれをのせる

「課題なんてとつくに終わってるわ」

「あっそう」

彼女達はすでに課題を終わらせていた

これは予想外だった　俺も風太郎も呆気にとられやや間抜けな声
が出る

あの期末試験以降から　こいつらなりに考えるとところもあったん
だろいな

「……………じゃ、じゃあ……………通常通りで……………」

「あなたは今まで何をやってたのですか?」

「……………」

「私たちが手伝ってあげましょうか?」

「うっうせー!　始めるぞ」

「ふふ」

「笑うな　幸太郎!」

勉強にかんして風太郎が姉妹にからかわれる場面と言うのはレア

なケーズだ

本当に予想外な事が多くていい意味でこいつも余裕がなくなつて来てるな

強い口調で言ってくるが、それは怒りから来るものではないのは誰でも分かる

まあ 課題と言えば 俺はまだ何も手を付けてはいないが家に帰ってから終わらせれば良いだろうな

冬休み前にぶっ倒れて バイトの掛け持ち気づけば新年 そして来週には学校も再開とあまり悠長にしてはいられんと思うが、どうも最近自身は勉強が疎かになり気味だ

勉強を教える側としては失格だ 自分の立ち振る舞いを考えないと……………。

「幸太郎君もお手伝いしましょうか？」

「大丈夫だ 休み明け前に終わらせれば良いだけだしな 一、二時間もあれば終わるだろう」

「えっ……………あつ そうですね」

「まあ この程度なら それが無難だな」

「あんたたち兄弟 やっぱりおかしいわ」

二乃が驚いたように俺達に言っている

一応は俺も勉強一筋でここまで来ている余程面倒な課題でも無ければ普段通りやればすぐに終わる

今日は姉妹の勉強会でここに来ている 自分の勉強を疎かにするつもりはないが

課題を終わらせてと言うなら 普段と同じく彼女達の勉強を見る事にしよう

「コータロー」

「上杉さん！」

三玖は俺を呼び 四葉は風太郎を呼ぶ

分からなければ聞く それは重要な事だ三玖や四葉はきちんとそ

れを実行してくれる

だから飲み込みも良いんだろうけど 四葉は運動終わりにそのまま覚えて事も頭から抜けるらしい

「ここがわからない」

「どれどれ ふーん 和の法則か」

「／／／」

三玖の元まで近寄ればノートに目をやる

サイコロの目の和に関する事だ 一度覚えれば案外すんなりと覚えられる

三玖ならすぐだろうな

「三玖？」

「／／／うん ごめん」

「ここな 何通りかってやつだけど サイコロは三つだ 奇数になる二パターンがある

偶数偶数奇数 後は奇数奇数奇数って感じで……………何だ五月？」

「いえ 何でもありません」

三玖に教えてる最中視線を感じ前を見れば二乃の隣に座る五月が食い入るようにこつちを見ている

「お前もわかんねーところあるのか？」

「だ 大丈夫です これくらい えっとこれが」

「お前 その数式だけだよ 一ページ前の奴だ」

「あつ……………／／／」

あの一件で踏ん切りがついて以前とは違い 俺からの指南も受けはくれるんだけど

聞かない時は聞かない 下何故そこまで意地をはるんだ？

大丈夫って言う奴は大概 大丈夫じゃないのは四葉で経験しただろうに……………。

その場で五月のノートを見れば 何処を解けば頭に入りやすいか教え

三玖も他に聞きたい箇所があると言うので再度 ノートを見せて

もらう

「まるで 家庭教師だな」

「いやいや あんた達一応は似たようなもんだから」

冴えるツツコミ

余談だが あの丸男と名乗った男性は別のところに派遣され

契約は一旦保留となったと一花に教えられた

本物の家庭教師さんには謝りを入れたかったが連絡先を知った所で俺には手段がないし

本当に申し訳ないと思っっている

更に余談だが あの男性以前何処かで見た気もする

何処だったけかな？

五月 三玖 四葉が勉強を教えられる中で二乃は独自に解いているなどやる気は十分

そんな4人とは対照的に先程から こくり こくりと首を上下させる人物が俺の左前隣に居る

四葉の横でその人物に睨みを利かせる風太郎は『この野郎…何がギヤフンだ』とぼやきだす

「一花？ 眠いなら一度 休憩するか？」

「あ…。い、いやー…ごめんごめん…。寝て…ない…よお」

「寝てるだろう 疲れ溜まってんだな」

「少し寝かせてあげなさいよ」

勉強開始からそこまで経ってはないが、一花の疲労は相当なものだと伺える

人様に見せる仕事だし 周りにも気を配るわけだし神経も使うんだろうな

『は？』と許可を出そうとしない弟を諭す

「眠い時は頭に入らねえしな 睡眠学習なんて勉強してた奴しかできんしな」

「えっ お兄さん それ本当なんですか…簡単に覚えられると思ったのに」

「四葉よ 人間そんな簡単に覚えられねえよ 地道行こうな」

四葉の場合は朝はすつきり爽快に頭の中もすつきり爽快なイメージしか浮かばん

ただ寝てるだけならそれは睡眠と何もかわらん

衝撃の事実だったのかしじぶとプリントの相手を再開している

「一花 さつきはあんな風に言ってたけど 本当は前より仕事増やしてるみたいなの」

「生活費を払ってくれてますもんね」

「貯金があるから気にしなくていいって本人は言ってたけど……………」

「こうやって コータロー達に教えてもらってるのも全て一花のおかげ」

「……………」

やはり 一花は無理をしていた

ここ暫くはセーブしていたと居眠りをする間に笑って話していたが、彼女が寝ている間に

二乃の口から事実を聞かされた

女優業で稼げる量は分からないけど アパート代を一人で賄い

五人の食費まで考えれば

相当なオーバークワークをしているんだろうと想像も容易だ

こりや俺らも本腰を入れて勉強教えないと一花の頑張りに泥を塗る結果になりかねんな

『本末転倒だ』風太郎の意見はもつともだ でも それだけの価値を俺達に見出しているんだ

それに応えるのが俺達の為すべき事だろう 休める間に休ませる少しでいい寝かせてやろう

「お前 何だかんだ一花に一番 甘いよな」

「そーか？ 頑張ってる人間労って何が悪い」

「悪いとは言わないけど 勉強させないと頑張りも意味はない」

「あの……………私たちも働きますんか？」

一花の今度を考えれば風太郎の意見の方が真つ当だ それに甘いつて発言 実のところ自覚はある

彼女の背中を後押しした以上は、少しでも支えるのがあの場で言い放った俺の責任だ

そうなれば彼女に甘くもなる……………俺の場合は別の要因もあるがもう過去の事だしな。

俺たちのやり取りを見てか 今後の方針として五月が意見を言うだす

自らも働いてこの家に貢献出来ないかと……………

これまた五月らしいと言えばらしいな

「も もちろん勉強の邪魔にならないように 少しでも一花の負担を減らせたらと思ひまして……………」

「五月……………天使だなお前」

「えっ 幸太郎君 急になんですか／＼／」

勉強をしながらも一花の為に頑張つてあげたいと言えるこの子は本当にいい子だ

ただのお節介な世話焼き後輩でなかった

「バイトか 今まで働いた経験は？」

変な面接が始まった 机の上で手をのせ顎のせる風太郎は静かに語り掛ける

ゴクリと飲み込み五月もこの圧に押されないように彼との対話に挑む

「あ ありません」

「勉強と両立できるのか？ 赤点回避で必死なお前らが」

「うっ…そ それなら 私もあなたのように家庭教師をします！」
「えっ」

間抜けな声が出してしまった 五月が家庭教師？

何かの冗談か、見た目だけなら完璧だろう しかし中身はどうだろうかやつと基礎も身につけて来たばかりの彼女に果たして出来るだろうか……………

俺や風太郎を見て簡単と思っているなら考え直した方が良いと思う

自分が理解できない事は決して他人に教えられる事ではない

「教えながら 学ぶ！ これなら自分の学力も向上して一石二鳥です」

「やめてくれ……お前に教えられる生徒がかわいそうだ」

「悪いな 五月 俺も風太郎と同意見だ 挑戦しようとする気概は大
事だけど 勉強に関して言えば、ある程度は自分も知っておかないと
厄介なだけだ」

「うう……………無念です」

落ち込む五月だが、仕方ない 俺が生徒なら逆に教える立場に
変わってそうだな

でもやる気があるだけ十分だ

「はいはい それならスーパーの店員はどうでしょう？ 近所にあ
るのですぐに出勤できますよ」

「四葉 レジうちは案外面倒だぞ どれだけ正確でスムーズに行える
かだ 笑顔は100点でもそれ以外でマイナスだろう」

「ああ 即クビだな」

「て 手厳しい！」

俺も経験者でそれゆえの発言として受け取って欲しい

最初は不慣れでも徐々に学んでいけばいい スーパーだからレジ
うちだけとは限らない

総菜の並べやお客の対応も仕事の一つだ 四葉の性格上 どれも
これも一斉に引き受けそうで別の問題も発生しそうだけどな
……………。

「私…メイド喫茶やってみたい」

「い 意外と……人気でそうだな」

「三玖のメイド姿か見て見たいな」

そつなく着こなせるだろうな 三玖の場合問題として出てくのは
接客だろう

あとは面倒な客の対応だ 一度目をつけるとその店員にしつこく
付き纏う客とは実在するもんだ

知り合いの某後輩もその被害に遭い何度護衛した事か……………。

「却下却下」

「二乃はやっぱ女王様？」

「やっぱって何！」

「そんな怪しいバイトさせて見ろ　あの父親に何て言われるか
殺されるで済めば良いけどな……………」

「二乃はお料理関係だよね」

「ふん　やるとしたらね」

「だって二乃は自分のお店を出すのが夢だもん」

「へえ　初めて聞いたな」

　　そう言えば二乃の夢だったな

　　小さい頃に話してたな…………どうりでこいつが料理に関しては自分の意思でやろとするわけだ

　　ふと蘇る記憶の中では嬉しそうに語る　中野二乃　小学4年生の姿があった

　　どうやらまだまだ忘れている事はあるそうだな

「こ　子供の頃の戯言よ　本気にしないで」

「戯言でも　夢なんだろう　目指して見るのもありだぞ　二乃」

「……………たく　そうやって兄貴面して」

　　お前が俺から巣立とうと俺は変わらず接るまでだ

　　こいつが本気でそれを叶えたいと思っているのなら一花の時と同様に俺は二乃の夢にも手を貸そう

　　戯言とか語る二乃だが、満更でもなさそうな表情で視線を逸らす

「居酒屋　ファミレス　喫茶店　和食に中華　イタリアン　ラーメン

そばピザの配達

　　バイトを経験してきたが、どれも生半可な気持ちじゃこなせなかった」

「食べ物系ばかりですね」

「まかないが出るからでしょう」

　　今まで経験してきたアルバイトを語り彼女にどれだけ厳しいのか

教える風太郎だが

下心が丸見えなのか痛い所つかれている

まあ まかないは俺たち兄弟の生命線だからな……………。

「俺も 新聞配達 道路整備作業員 ヒーローショーの着ぐるみ 土木・建築系 引越しやら

他 風太郎と同じだ 今基本的にケーキ屋だろうな」

「あんたあんたで汗臭い仕事ばかりしてるわね」

「幸太郎君が朝までいない 理由がわかりました」

「風太郎が言いたい事は 仕事を舐めるなって事だろうな」

「ああ 生半可な覚悟でやって失敗してみろ その請求は誰にいく！」

「運んでる荷物を落としそうになった時には自分の命も落とすと思えるよな」

「意外と簡単に思えるような仕事やバイトでも実際には思いもよらない大変な作業だったり

重労働などが待ち受けている 慣れれば大抵何とかなるが、慣らすまでが大変だ

「新人時代の自分を想像すればどれくらい周りに迷惑をかけていたのか 若かったな……………」

「もしもの時は一言言えよ 手ごろな奴紹介してやるからさ」

「はい その時はよろしくお願いします」

「一花を支える為 それは重要だ でも慣れない作業で倒れてしまつてはそれこそ本末転倒だ

バイトの話はもう少し彼女達が今の環境になれてからがベストだろう

「試験を突破し あの家に帰ることができたら全て解決する 今は勉強だ」

それが一番の解決策だ

あの家に帰ることが出来れば、一花の負担も減るだろうし

他の姉妹も勉強に集中できる時間も増やせる

「一花が目指す夢だ 一花のサポートは俺に任せとけ 無理はしないように本人にも伝えておくしな」

あの一花だ素直に聞くととは思えないがそれとなく俺の方でも伝えておくか

それにもし困るようなら先程五月に提案したように知り合いに掛け合ってみるのもありだろうが

俺の場合は力仕事ばかりなのが難点だな 新聞配達は四葉にぴったりだと思っけどさ

「…んん…」

ぬぎ…

「一花 おき」

「うわー」

突如として服を脱ぎだす一花

これが噂に聞いていた家限定の習慣と言う物か…。

「コータロー 見ちゃダメ！」

「だから目を抑えるな！ 潰れる」

「幸太郎君 そんなに見たいんですかー！ー！」

「俺がわりーのか！」

「上杉も見ろな！ 変態」

再び三玖が俺の視界を奪い 二乃に睨まれ 五月には誤解される

勉強始めとしては色々と不安を覚えるが、こいつらとの勉強はやっぱり楽しいもんだな…。

その後は四葉が寝室に一花を運び 残った面子での勉強会で今日は終わらせる事になった

「すこし 休憩しましょう」

「何かおやつでも食べましょうよ」

「あつ それなら これありますよ」

「げっ でた激辛せんべい 美味しいんだけどさ口が痛くなるよ」

少しの休憩の中で 五月が台所の方からお菓子のはいった箱を持ってきた

中身は真っ赤　その形容が一番だろう　せんべいが敷き詰められている

何とも不思議な事にそれは俺の好物だ

「おぉー　俺の好きなお菓子じゃん　五月良く知ってたな」

「コータローこれ好きなの？」

「ああ　知り合いの家で良く出されてさ　味覚は昔からおかしいけどさ

このヒリヒリする感じが好きなんだよな」

「そうでしたか：実はこれお隣さんからの貰いものでして」

「ほー　お隣なんていたんだな」

「私も一度だけみたかも　髪の高い綺麗な人だったな　名前は雨宮さんだっけかな？」

「その雨宮さんから　引越しの挨拶として頂いたんです」

面白い偶然ってのもあるんだな

お隣からもらったお菓子の詰め合わせは俺の好物　余りの辛さに誰も手をつけられずにいたらしく

『幸太郎君が好きならどうぞ』と言われた

そこまで食い意地は張ってないが　徐々に食べるそれは昔とんなら変わっていない

「雨宮さんねえー」

バリバリ

一体どんな人物なのか　辛いもの好きなのか？

でも今はどうでもいいか……

第六十二話 不良少年と長女の来店

翌日 ケーキ屋 Revival でのバイト中だ

俺は店長の指示で厨房で皿洗いに勤しむ

一方 風太郎は店長の作るアップルパイを自らも真似て作る事で厨房入りを目指し

給料のランクアップを要求している

家庭教師のアルバイトは実質的には無賃だ 善意で行っているよ
うなもんで

それ故にだろう バイト代が上がる方法を弟なりに模索しているのだ

ただ食料品を出す以上は味や見た目に最善の注意を払う必要があり

下手な品物は店頭には並べる事はできない

果たして弟は 我らが雇い主 その味は彼の舌を唸らせるのだろうか？

「うーん 上杉君 君も一口食べてごらん」

「えっ………はい ううー！」

「どうだ 幸太郎！ これは自信作だ」

「お前も食ってみろ」

眉を顰める店長は俺にも味見を頼み

一切れ口にしたが、正直言えば不味い 確かに俺は味音痴であるが
ある程度は

判断つける舌は持っている 風太郎が作ったパイは

【愛情ではなく 欲望まみれの味がした】

給料を上げて欲しいって気持ちかひしひしと伝わってくるが

客を安心させる気持ちがこのパイには微塵も感じない

「はっそんな筈はない 完璧に…… おっえええ これは三玖のこと
バカにできねえな」

自らの作品に自信を持つ彼だが一口食べれば前言撤回その場で吐いてしまう

落ち込む弟の肩に手をのせ『まだ無理だ』と先輩から一言

「掃除終わりましたって 店長さんのお手製ですか！一つ頂いてもいいですか？」

「あつ 真弓ちゃん！」

掃除を終えて戻ってきた後輩は目の前にある見た目だけは完璧なそれに手を伸ばす

制止しようにも彼女の方が早く 間に合わない パクつとそれを口にした途端に顔が真つ青に変わる

「あむ むむむ 何ですかこれは!？」

「真弓ちゃん 安易に変なもん口にするな ほれ水だ」

「あ ありがとうございますごさいます先輩」

一声かけるべきだったな 目の前で苦しむ後輩は吐く事も出来ず

頑張つて飲み込んでいた 気休めだろうけどコップに水を汲み彼女に吞ませる

何とか大事な後輩を失わずに済んだな 災難だったな。

「これ 風太郎さんのですか」

「まあ うん 見た目は完璧だったろ？」

「見た目はですよ！ 何で中がべたべたしてて酸っぱいんですか」

「これは 焼き加減の問題もあるな 風太郎 もう少し練習しろ」

「何故 兄弟でここまで差が出る！」

「お前は欲が出過ぎだ……」

確かに見栄えは完璧だろうけど味はひどい

三玖の作る料理は見た目も味もまだまだろうけど人に食べてもらいたいと言う気持ちがある分、風太郎よりは勝っている

「厨房に入るのはまだまだ先だね… 自分の片付けとい

あつそうそう 上杉君に弟君 それに須藤ちゃんもう帰っていないから お疲れ」

「おい 風太郎のせいでクビになったぞ？」

「はわわ 何故に私まで 風太郎さんのせいで……」

明日からまた新しいバイト先見つかるかあ……

って言っても店長の事 要件を飛ばしているだけだろうな

「違うよ 今日午後から休みだから映画の撮影に店を貸すことになってるから」

「はやく言つてくださいよ」

「よ 良かった ここのお店割とお給料いいので焦りました」

「しっかし撮影ね なーんか他人の気がしないんだけどな」

クビはまぬがれたが、今日は店じまいと言うのは割とまじだった

真弓ちゃんに掃除を頼んだのも清潔を保つ以外

今からここで行われる撮影で汚い所を見せる訳にも行かないしな

その時に事情を説明してくればいいのではと出そうになった言葉を押しとどめる

「主演は今を時めくみいちゃん。りなりなやこんタンも出るらしい。生で見れちゃうかもよ……」

「詳しいですね……」

「店長の意外な一面だ」

映画なんて一花が出る作品以外全く興味ないからな

言われた所でピンと来ねえーな……

「私は見学していきます サイン欲しいな」

「真弓ちゃんはこう言うの好きだねー」

「先輩たちが興味なさすぎるんです！ では一緒に」

「では帰ります。1人たりとも知らないんで。お疲れでした」

「風太郎 お前はなあ……映画の撮影ね 邪魔になると悪いし 俺も

今日はあがりませう」

「そうかい。まあ、僕もあんまり詳しくないんだけどね」

何か参考になればと思っただけ 素人が一花に何をアドバイスできるのか？

撮影も始まれば邪魔にもなってしまうさっさと支度して帰ろっかな

一花も勉強が遅れてるだろうし 今日ならば家にもいた筈

確認したくても俺のスマホは使い物にはならない……。

「失礼します。今日はよろしくお願ひします」

撮影スタッフだろうか 何人か入って来れば更に女優らしい人物が数人入りにこやかスマイル

「わー！おいしそー！」

「よろしくお願ひしまーす！」

「きた サインもらっちゃお……」

「私も行ってきます！」

「ミーハーかよ」

「ミーハーっすね」

何処から出したんだ？ 色紙片手に二人は行ってしまふ

見送った俺達は帰り支度を始めるべく奥に戻ろう そう考えていた

何故だろうか……ある一人の女優が店に現れた事で俺達の足はその場で止まる……。

「よろしくお願ひしまー…すう…」

「あっ……」

「ああ このお店は確か！」

「店長 さーせん 気が変わりました」

「俺もです店長……。よく知ってる女優がいましたわ」

俺達の視線の先にいる人物 たいして女優にも詳しくない俺達だけど

その人物はいやという程知っているんだ……。

中野姉妹の長女 中野一花だからな

第六十三話 不良少年と長女のお芝居

「カメラチェックしまーす」

「ケーキ用意してもらってる?」

「台本確認しよつと」

「照明どこに置きましょう?」

いそいそと周りが慌ただしくなる中 俺達は無言だ

「・・・ふう・・・。よろしくお願いしまーす!」

先に動いたのは一花だ

最初は動揺していたが、見なかった事にしたんだろう

他の女優達の元に向かつて行く

彼女の存在に気づいた真弓は目がハートだ 俺以上に一花のフア

ンと言っても過言じゃないだろうな

女優の仕事は順調なんだろう それが見れば俺も安心できる

しかし それは私生活にまで影響を出すほどだ……。

見なかった事には出来ないな 一花を支えると言ったんだ 今日

の撮影は見届けよう

風太郎も気になるのだろう 店長の元へと向かえば適当な理由で

このまま残ると話す

「先輩 先輩! 一花さんですよ」

「ああ 俺も見て行くわ」

「それにしても……冬休みの書き入れ時に撮影なんてよく許可したよな」

「確かにな……」

あの店長がこの時期を見逃すはずはない 何か策はあるんだろうか?

弟のふとした疑問を投げかければ店長は答える

「ふふふ、この頃は向かいにある糞パン屋にお客を取られてる厳しい状況でね。もしこの映画がヒットしたら聖地としてファンが押し寄

せるに違いないよ・・・！」

抜け目がないな この先の事も考えての採用だった

宣伝4割 対抗6割と言ったところだろうな

店長の対抗意識は物凄いもんだからな まじで向うの女店長と何があつたんだ？

「とりあえず撮影に使うこのパイに店名の入ったピックを差し込むんだよ。上杉君、弟君、真弓ちゃん

手伝ってくれ。積極的にさりげなくアピールするぞ」

「すごい やる気を感じます！」

「店長目が生き生きしてんなー」

「見習いたいハングリー精神だな・・・」

ある意味では風太郎の理想像だろうな店長のこの姿は……

並べられたパイの上に 店名が記載されてピックを差し込む作業が開始され

さりげない全国アピールを狙うようだ

「ああ そうだ 上杉君 例の件 任せて良いんだよね？」

「はい その日は空けておきました」

「向こうには話は通してあるからよろしくね」

「？ 先輩何の話ですか」

「ん？ 店長の知り合いが営むカフェなんだけど 人手が足りなくてな 暫くそこの助っ人にな」

「店長が良く許したな」

「ああ……………うちの店のケーキを並べるって条件付きでな」

「店長らしいですね」

街の方に店舗を構えるとあるカフェ

そこに短期の助っ人として俺は店長の推薦もあり出向く事になっている

勿論俺がどんな人物か店長の口から知らせているし向こうの店長さんも『OKOK』と物凄く軽かった

その条件として店長は暫くうちを宣伝して欲しい 願わくば『コラボ的な感じで並べてほしい』

飢えぬハングリ―精神だよ……………。

「リハーサルを開始しまーす！こちらのパイでよろしいですね？」

「ええーできればこっちの向きでお願いします！」

本番まであと少しなのだろう スタッフの人が並べられたパイを運んでいく

店長は終始 名前が見える方を向けて欲しいと念を推している

「いよいよですね 先輩 風太郎さん」

「真弓が何でびくびくしてんだよ」

「だって 知り合いが出てるんですよ 緊張しますよ！ ああ一花さん可愛いな」

「わかる すごく可愛い」

後輩とは意見が合うな

呆気にとられあの時は言えなかったが普段は見れない一花の姿だ

とても可愛らしいな 普段は大人びて見えるから余計にそう感じるんだろうな

「にしても……さすがに雰囲気があるな……真弓の言う事は強ち間違っていないな」

準備もほぼ終え スタッフの人達や関わる女優陣から発せられる

独特の雰囲気

「ぐくりと唾を飲む風太郎 彼も緊張し始めている

「では シーン37の4…3、2、1…アクション!!」

いよいよ 来るぞー！

「このケーキ屋さん、一度来てみたかったです」

「ん」

「え」

「は」

時間が止まった

あの言動 本当にあの一花なのか？ 普段見せるお姉さんキャラとは真反対だ

ぶりっ子と言うんだろうな 一花は語尾をくと伸ばし そのキララを演じ切っている

「タマコ！そんなこと言ってる場合じゃないよ！」

「え〜？何の話です〜？」

「それ呪いのリプライだよ！」

「送られると死んじゃうっていう・・・」

「う〜ん・・・タマコには難しくてよくわからないのです〜それよりケーキを食べるのです〜」

「雰囲気以前の問題だったと風太郎は口にする

呆れているのか脱力しているのかといった感じで眺めており

店長曰く『ホラー映画』らしい：女子校感でのホラー映画か 人間のがえぐいタイプだぞ

真弓ちゃんは『可愛い』の連呼だ 語彙力が死んでおられる

「なあ・・・真弓ちゃん」

「な なんですか先輩！」

「リプライってなんだ？ RTって レベニユートンの事か」

「ああー 先輩 入院する前もTwitter使ってたんですけどね SMSと言うものの中で使われるスラングの一つです。兄も使ってますよ」

知らぬ単語が出てくれば 俺にはまさにホラーに見える

一花は何時の間になんな知らぬ単語を学んでいたんだろうと別の意味で真剣に悩んでいた

「どうやらその単語自体は俺が入院する前から使われていたとか・・・」

須藤ですら使っていたと衝撃を受けていた

そんな俺をおいて撮影は続く

風太郎は一旦席を外し トイレに行っている

演技を続ける一花を見ていればふと口から言葉も出てしまう

「それにしても 一花の配役 あれで大丈夫なのか？ 間違っていない？」

「間違っていないよ。一花ちゃんは幅広い役を演じられる女優だと私は信じている」

突然横から声が聞こえ 視線を送れば

あのおっさんが飲み物片手に立っている 何時の間に現れた・・・。

「上杉君だったね 久しぶり」

「ああ あの時はどうもです その菊は元気ですか？」

「かわらずだね でも前よりは笑顔は見せてるよ」

一花をスカウトした男性 あの祭りの際に俺の前に現れ

彼女とはどんな関係かと聞いてきた 社長さんだ

挨拶も交え 娘さんはどうかと尋ねればかわらず元気らしく

俺や風太郎に憎まれ口もちらほら目立つと楽しそうに教えてくれた

「一花は無理してませんか…」

「どうかな 彼女はそう言った事 口には出さないからね」

「そうですね…でもああやって演技してる姿 生き生きしていて あいつはやりたい事を全力で出来ている…本当にそれを嬉しく思います」

「迷っていた彼女の背中を押したのは他にもない君だ 君さえ良ければうちで働いてみない？」

君には人を突き動かす 何かしらの素質を感じるんだ 一花ちゃん
の才能を見抜いた目だ

「どうかな？」

「残念ながら お断りさせていただきます 俺のやるべき事はあいつの
帰る場所で

あいつを支える事です あいつが女優業の中で無理をしないように
にするのが社長さんの仕事でしょ」

「そうかもしれないね 彼女にもそういった場所はあるからね…分
かった今回は挨拶も兼ねてだったからね 上杉君 一花ちゃんを頼
んだよ」

まさか一花の働くプロダクションからお誘いが来るとは予想外
だった

一花の才能を見抜き 開花させたのが彼ならその彼女の背中を
押したのが他にもない俺だと

社長は言っていた 実際は俺が一花の存在に感化されたに過ぎない

俺に取って一花は憧れだ 夢を追い そしてそれに着実に向かつて行く彼女の姿は俺には眩しく
けして届く事のない大きなもんだ その彼女が安らげる日常でアイツが無理をしないよう見守る
俺に出来るのはそんなくらいだ 俺自身プロデューサーってのもがらじゃないしな

俺との話で満足したんだろうか社長さんはスタッフ側の方へと戻って行った

あの人には感謝しないとな…大変だろうけど今の一花は本当に楽しそうに充実している

風太郎は悪いと思ってる 一花に甘いと言う あの言葉も自覚はしてるんだ

罪滅ぼしなのかもしれないな…

「?どうした?」

「次、一花だよ?」

「え?あ…すみません…ちよつといいですか?」

「カーツト!」

俺が感傷に更け込む間に撮影は一度中断され

一花が俺の元まで歩み寄ってくる

そのまま店側への許可をとればずると俺は連行されていく
まてまて 一体何のようだ?

物置部屋まで連れて行かれれば 何故か壁ドンを受けている

顔を真っ赤にしている一花 俺の相手なんかせずに撮影に集中すればいいものを…

「どうした タマコちゃん?」

「コータロー君…恥ずかしいからあんまり見ないでくれるかな?」

あとその呼び方も出来ればやめて欲しいな…」

「あつ 悪い悪い それでなんだ俺だけ呼び出して？」

「フータロー君は急に何処か行っちゃうし コータロー君は社長と何か話してるしき」

「あいつはトイレだ それに俺は別にあのおっさんとは何も話してねえよ

菊は元気かーってくらいの世間話だ 一花が気にするような事はなしだ」

「そ そうなんだ」

元は風太郎も呼び出す筈だったのか見れば俺しかいない

一花も驚いただろうな それに働いてる事務所の社長がお店の店員と話してる姿が目に入れば

声もかけてくるだろうさ

「それで 何で俺をここまで呼び出した？ 何か重要な事か？」

「みんなには誤魔化してるけど貯金が心許なくてね・・・」

「そりやそうだ 一人でも大変だろう生活をお前が支えてんだ」

「いやー、食費やら光熱費やらって、思ったよりお金がかかるもんだからまいるよ。だからどんな小さな仕事でも引き受けるって決めただ。あの子たちのためにも、私が頑張らなきゃ・・・」

それは当たり前前の現実だ 人一人生きていくのがやつと

その中で一花は一人で4人の妹の生活までカバーすると家を出たんだ

本人が思っていた以上に大変だった だから少しでも無理をする必要があると

受けれる仕事はなるべく受ける……

ぼん

「一花……頑張ってるな」

「えっ……」

「安心しろ 俺はお前の仕事を否定はしない 言ったらお前の為ならやれる事はするって

それにだ 家庭教師をもう一度やれるチャンスをくれた恩がある
今は仕事に専念してくれ……でも………」

「でもっ。」

「お前がそこまで無理をし続ける 姿を俺はあまり見たくないな…風太郎も止めはしないだろうが、きつと俺と同じ事言うはずだ お前は今のままやり続けるんだな？」

「コータロー君お願い……今は私の言う事を聞いて……」

正直言えば少しは自分の為に休んで欲しいと言うのが本音だ

問いを投げかけるが多分彼女は止まらないだろう 中野一花とは
そう言う人間だ

やはりというか 伊達に四葉の姉でないな

止めるつもりは毛頭ないけど一応は聞くべきだろう

「でないと これをばら撒くよ」

「何とも懐かしい 写真だな………ばら撒くねえ」

「あっ………今のなしで」

「はあ………五月から聞いたんだだろうな 気にすんな 前以上は気にはしないさ」

一花は前言撤回と画面を戻す

『写真をばら撒く』と言う発言で彼女の表情は一瞬変わった

もう誰から聞いたのか、一発で分かる 軽くだろうけど俺の過去を
五月から聞かされたんだだろうな

「何も そこまで気にすることはねえーよ 当時の俺ならつゆ知らず
……今は何も思わんし それにその写真は良い思い出だ」

「それでもごめんね」

「一花 俺はお前を止めないさ お前がやりたい事を俺は肯定する

でももし辛くなったらさ 俺に言え 長男と長女だ 悩みは共通
出来るさ」

「うん その時はお願ひするね コータロー君も疲れたらまた膝枕し
てあげるからね…あの時はあまりにもぐっすりだったから起こすの
悪いと思っただ」

「いい感触だったしな………」

疲れからの睡眠でいつの間にか爆睡で一花から起こされた

翌日には実は膝枕でしたと明かされたけど 余り深くは考えず適当に流そうとも考えてたな

一花もオーデイションで疲れてたのに膝枕かお疲れ様だよ……。

「って 言う事で今回の事はお姉さんとの秘密って事で」

「了解だ それと風太郎にもそれとなく伝えておく一応は共有しないとまずいだろうしな」

「うんフータロー君との連携は任せたよ お兄ちゃん」

「姉なのか妹なのかハッキリしてくれ……」

一花との軽い打ち合わせが終われば風太郎も既に戻って来ていた 幾ら胃袋が強かろうとあたる時にはあたるらしいなお腹をさすっている

先程の話を軽く伝えれば『はあ……』と大きいため息だ 今日 は胃薬が大盛況といった感じか

「うくん、おいしいのです」

「はいカットー！」

「一花ちゃん、今のいいねー！今のもいいけど、もうパターンいつてみようか！」

「はいー！」

撮影も滞りなく進んでいるようで安心だ

事情も伝えた事で一花も仕事に集中出来てるし問題はもう起こらんだろうな

ふう………安堵のため息を漏らす

何度かスタッフの方々が移動し序盤の撮影も佳境に迫る中

一人の男性スタッフが手にする パイを見て俺は何か違和感を覚える

この撮影の為だろう 今日店長と共にパイを作っていた

その後明かされた事情で風太郎達と三名で店長の手伝いでパイに

ピックを差し込み

店の名前を広める作戦　今しがた通って行ったスタッフが手にするパイは差さってなかった

(まさかつ！)

それに気づいた頃には既に手遅れだ

あのパイは他でもない風太郎が作った何とも微妙な味のするパイだ

他と区別するため　端の退かして置いたがきちんと処理すべきだった

「それは！」

「スタンバイできました！」

「本番！3、2、1・・・アクション!!」

ぱくっ

「うくん、おいしいのです」

とてもいい笑顔だ　一花はあのパイを食べた

それを表情にも出さずまるで本当にそれが美味しかのように

隣で見守っていた弟も『困った生徒だ』と何処か恥ずかしそうに口からもらす

同時に俺は改めて　一花の演技に心を掴まれた…。

(お前はすごいよ　一花…)

彼女の浮かべたその満面の笑みを俺は頭に刻み込んだ…。

その後は休憩に入った

風太郎も用事があると話すとそのくさと帰って行く

どうにもさっきの演技を見て会うのが気恥ずかしいんだろうかうぶな弟だ

店長はスタッフや女優の方々に差し入れとしてケーキを振る舞っ

ている

「さて 一花は何処か…って これ台本だ あいつ落としたのか？」

一花に差し入れをしようと思ったが何処にも居らず

彼女の名前が書かれた台本だけが落ちていた

休憩している場所は何処だろうかと近くのスタッフに声をかければ

奥の方で見かけたと教えてくれた 届けないとアイツも困るだろうしな

「一花さん 問五が違うぞ？」

そこには必死に勉強に取り組む一花の姿があった

俺達は『遅れてるからな』と話していたが、どうやらそうでもなさそうだ

彼女の疲れは仕事もあるし その合間にこうして勉強も忘れずにやっていた事も要因だろうか

人には見えない所で努力する 中野一花はそういった人間なんだな…。

「隠す必要はねーよ ありがとな 勉強しててくれてさ」

「こういうのは陰でやってる方がカッコいいんだよ」

「確かにな…はい 擦ったりんごだ あれだけ撮影で食べれば胃も驚くだろうさ」

「ふふ 君は本当に心配りが上手だね ありがとね」

「まあ こんくらいしか出来んからな…」

先程の厨房でりんごを擦って来た

ヨーグルトも良いだろうけど切らしていたらしい

在庫確認しなかった俺のミスだな…。

そう言う訳で擦ったりんごだ

「それで 台本の方は見なくて良いのか？」

「うん 内容は全部覚えたから」

「勉強の方もそうなら 風太郎も気が楽なんだけどな」

台本を返す物の一花は既に内容は覚えたと横の方に置いてしまう

「あはは…私の役は序盤で呪い殺されるから、出番が極端に少ないんだよねー」

「おう デジャヴ」

まさか死国の再来とはな

チヨイ役だからという訳で覚える台詞も少ないと彼女は笑いながら話す

「あ、そうそう…っていうか…このケーキ大丈夫？何というか…よく言えば個性的な味…悪く言えば三玖の手料理だったんだけど…」

「こちらの不手際です 申し訳ない」

確かにあれはひどいもんだけど

三玖の手料理はまだ愛情がある分ましだろう 風太郎のあれは欲望にまみれていた…。

「でも 流石だよ 一花 お前の演技さ 正直言えばさ…あの笑顔さ 見惚れた

本当に いい笑顔ですいませんもんな すげーよ一花は

お前は立派に女優なんだなって…これからも応援させてくれ」

「……………」

「それでさ 一花 頼もうと思ってたんだけど…後でサインって寝てるのか…今日はお疲れだったよな 頑張ったな一花」

余程疲れていたの緊張の糸が途切れたの寄りかかるようにして一花は眠っていた

せっかくのチャンスとサインを貰おうかと思ったけど…今度でもいいか

「今度はさ 三玖と俺達だけじゃなく みんなで観に行きたいな……………」

(こんな時まで演技だなんて…これじゃ嘘つきだよ でもこんな顔見せられないよ ありがとうコータロー君……………)

トクントクン 中野一花の胸の高鳴り 少年が何かを語る度彼女の気持ちを表すかのように鳴り響く

彼女が抱くその気持ちは果たしてどういった感情なのだろう
本人も未だそれを胸に秘め決して出そうとはしない……………。

ちなみにあの映画は爆発的ヒットなんて都合のいいようにならなかったが、とあるシーンで男の霊が二人も映っていると噂になり、彼等のバイト先で心霊スポットとして一部のファンの聖地となったようだ。

第六十四話 不良少年と偽善の戦い

「えーっと 君が上杉幸太郎くんだね？」

「はい 精一杯頑張らせてもらいます！」

今日はケーキ屋のアルバイトではなく

店長の頼みで彼の知り合いが経営する喫茶店の助っ人として訪れている

知り合いと言ってから男性かと思ったが、女性の店長さんで少し驚いた

大宮咲子と名乗った店長は俺の履歴書を渡されていたのか交互に見れば

『ふむふむ』と頷く

「うん 彼から聞いていた通りの人物なのは間違いなさそうだね

それと 手の事も隠さず記入されてる 両利きなんだって？」

「はい 障害が出るとしたら左ですが 右は何の問題なく動きます」

「了解了解 にしても人は見かけによらないって言うか ああーごめんね」

「いえ 構いませんこの髪です 疑われてもしょうがないと思ってます」

染めたような白い髪

「こんな姿で『染めてません』と言うほうがおかしいだろ 未だ学校でも指摘されている

しかし地毛であるのは紛れもない事実だ その理由も履歴書には記載されている

『重度のストレスによる脱色』

あの事故以降にあるトラブルに巻き込まれ 俺はPTSDにも似た重度のストレスを発症し

気づけば髪は今のようになり縞模様にも似た黒と白が入り乱れる色に変わっていた

当初は染めようかとも考えたでも

あの人の言葉『きつとあなたは報われます』
彼女の言葉を聞いた事で

俺は今のままで生きていこうと決めた　それに染めるってだけで
も

結構な値段だろう　ならいつそと貧乏性も出ていたと言うのは秘
密である……………。

加え　左手の主に指に残る障害だ　バイト先でそれを隠す事は店
側にも多大な損害を出す可能性もある

俺は履歴書には必ずその事を記載し　提出

そのせいだろう　バイト先が決まらな事もままあるが　以前働い
ていた所は快く受け入れ

採用や軽い助っ人として俺を呼んでくれる『君は真面目だからね
安心しない』とみなが言ってくれた

あんな目に遭って　人を見る目がかわったけど

それでも俺を認めてくれる場所はあったんだと思わされる

今回のカフェでの助っ人でも店長から渡された　俺の履歴書と詳
しい概要をここの店長さんは知らされているし

何度か尋ねられた　彼女自信も戸惑ってはいたんだろうけど『O
k』と踏ん切りがつけば俺の助っ人を承諾してくれている

「しっかし　君のバイト経歴は凄いな　特例だとは言え　中学2年生
から新聞配達か

若いのに苦労してるな」

「色々事情もあります……………」

「まあ　深くは聞かないよ　上杉くんね……………もしかしてさ　坂下水
木って名前知ってる」

「世間は狭いって事　今実感させられました」

軽い面接が終わればそのまま作業開始とは行かず

まさかの人物の名前がここに来て登場『いえーい』としないあの人の
声が脳内を木霊する

「まあ知り合いですね ある意味では腐れ縁です」

「何処かで聞いた名だとは思ってたけど 坂下先輩が話してた あの
上杉くんね」

「あの人は適当言うんで 流して置いてください」

「つははは あの人が気に入ってる上杉君 今日には宜しく頼むよ」

「了解です」

先輩と店長さんは口にした

まさかみずき姐の後輩なんだろうか？

あの人も大概謎の多い人だよな…

渡された制服に着替えながら

幼少期からの長い付き合いのある姉を自称するあの人の事を少し
ばかり頭に浮かべている

坂下水木は俺よりも年上であの家と関りが出来た頃からだろうか
良く俺に絡んで来ていた

どうにもあのノリが苦手であの人から逃走する毎日

本人も学校で忙しいのに年下の相手なんてしてるもんだよ

『お姉さんが相手だー』本当に毎日が楽しいんだろうと思える程

俺はあの人が笑っている姿しか見たことがない……………塞ぎ込ん
でる姿想像も出来んな

「そう言えば……………みずき姐の旦那さんってもう日本に戻って来た
のかな？」

疑問が出て来た 俺が入院するより前だ

盛大などとは行かないが彼女は『幹雄』言う男性と結婚した

それももう今が幸せの絶好調とばかり

とてもいい笑顔で脳裏に焼き付き記憶されてる……………。

本人も『こうくんも幸せつかもう』と俺に熱弁をかましていたくら
いに有頂天

それからだ……………あの事件が起きて気づけば俺は病院の中

みずき姐とは何度か顔を合わせ 幹雄さんは何故か顔を見せる事
はなかった

入院して少し 俺は聞いた『あの人はどうしてますか？』

事故のせいか当時の俺は物凄く他人行儀な言い方でみずき姐も困惑していた

まあ 物事を簡単に割り切るあの人はすぐに考える事をやめ『幹雄くんは海外だよ』

俺に説明してくれた どうやら海外で教鞭を取っているらしい
因みにその人は俺にとって兄のような人物で勉強などで世話になっっている…。

「暫くって まじでアバウトだよ…。実は身近にいたんだな……。プロが」

「上杉君 これ注文表ねー」

「了解でーす (考え事は後でも出来る)」

渡された注文票にはサンドイッチのセットやその他諸々

カフェと行っても何も飲み物だけではない 小腹を満たせるくらいには食も取れる

喫茶店だからと馬鹿には出来ないのがこの世の常だ……。

「まさか いきなり厨房を任せられるとはな」

店長さん曰く『この時期は手が足りないから一人でも多く動ける人が欲しいんだよね』

目が笑ってなかった……。あれは得物を狙う目だ

集客力でお店の将来が決まって行く その中での助っ人 それも厨房だ

自然と気持ちも引き締まる

「これ お願いします」

作り終えた品を店頭に並べる

陳列された物から出来た物まで様々だ 今のように注文してお店で食べて帰る客もいれば

テイクアウトで済ませる人も中には多い

それにだ……。今日に限って人が多くみられる その要因が勿

ケーキ屋 Revivalのメニューまで並べられている

あの映画の撮影が、クチコミで広がり初めお店に通う人も増え始めた…。宣伝とは馬鹿に出来ないな。これが映画公開になってみる人の出入り更に増えんだらうな……。

んで以前から話が来ていた、このお店に俺を貸す変わりにRevivalとの実質的なコラボを店長が提示…。お互いが承諾…：そういう事情もあり期限付きで売り飛ばされた…：世の中はお金さ

「まあ…：給料も良いし。ケーキ屋の売上も上がるし万々歳だな」

暫く厨房に籠り 仕込みの準備など始めた

それなりに商品もあるようで壁に貼られている紙だけでも種類も豊富だ

元は喫茶店ではなく 洋食屋を営む予定だったが色々な都合で喫茶店に方向転換したとか……：

人のやりたい事とは中々うまくは行かないもんだなと改めて現実を実感したが…。

『例えば 変わっても自分のお店出せるのって嬉しいからさ』

店長さんは何処か楽し気に話していた

(自分のお店か…：母さんも生きてたらきつと店長さん見たいに忙しく楽しい毎日だったんだらうな)

ふいに店長さんと母の姿が重なった

こう言った事には弱い人間だ目頭も熱くなる 母は夢を諦める結果にはなったけど

その夢の痕は、俺達の住むアパートの下に残っている

窓の外に付けられている『うえすぎ』と書かれた看板はけして明かりを灯す事はないだらうけど

何時か誰かが母の夢を引きついであれば良いなと俺は密かに願っている

感傷に浸れば時間も過ぎていく 夜ともなればお店に来る客層も変わっていく

俺は一旦休憩を言い渡された『本当に君は誰かがストップと言わな

い限り動き続けるね』

店長さんも呆れ気味だ　きつと俺は動かないと死んでしまう病なんだろうな

学校では省エネを重視して目立たず黙っている事を信条にしているが……

ひとたび働き先に向かえばまるで水を得た魚だ　マグロのように決して動きを止めない

『生きてるって実感できる』二乃に言ったあの言葉本当にそのままの意味だ

あの時期の俺は本当に死んだ目をしていただけ　だから助かった命だ　それを他人の為に使おうと俺は決めたんだけ……。

「さて……そろそろ休憩も終わりだな」

椅子から立ち上がればエプロンを腰に巻く　こいつは性分だ
今更変わらないしな……気合を入れ直し俺は一旦部屋を出る

「……………何で　あの二人がいるんだ？」

店の中に戻れば俺は少々　目を疑った

一つの席に男女がおり真剣な話でもしてるんだろう

女性は神妙な面持ちで目の前の男性の話を聞いている

男性も表情にこそ出さないだろうが彼なりにあの子に真剣に話を
持ち掛けている様子だ

加えてだ……カウンター席にも見知った人物が数名座っており　その二組の会話に聞き耳を立てている

(五月とあの人……それに風太郎と二乃か　遂に動き出したか)

沈黙を守ってきた中野父が娘に接触を取ってきた　あのまま見過ごすようなら

それこそ俺はあの人を見限っていただろうけど……3月のテストもあるのにまーた厄介事か

店長である咲子さんはそのテーブルに座る　お客からの注文だと

俺に紙を手渡した

「サンドイッチ 全種類か……………あの店長 給料から差し引いて良いで

これとこれをカウンター席の二人に それとサンドイッチセットですけどプラスでこれも頼みます」

「ええー 上杉君どうしたんだい いきなりまさか知り合いかな？」

「まあーそんなもんですよ……………あと あの奥の席にいる子にも」

「了解 君の意見は引き受けました」

「ありがとうございます！」

五月の事だきつとお腹も空かせてるだろうし

風太郎も店の値段を見て財布との交渉だろうな

給料から少しばかり引かれるが無理を通して俺を貸し出した。普段よりも多く貰える

多少減っても痛くないだろうしな

出来上がった料理を渡せばそれを五月の元まで向かい

本人やあの男も驚いている

「すまないが 頼んだ覚えはないが？」

「ちよつとしたサービスですお気になさらず」

「ふう……………」

「頂いてよろしいでしょうか」

「はい きつとお腹を空かせてるだろうと彼は言っていましたよ」

「彼？」

「随分とお節介な人もいるものだ……………気が引けるが頂こう」

なーんか嫌味を言われてそうだけど無事に五月の元に追加の料理も届いたようだな

風太郎と二乃の所にもケーキのセットが届けられ一安心だ

戻ってくる咲子さんも『緊張した』と声を出している

そのまま戻るかと思いきや俺の方まで来ると 肘でこつこつと胸を何度も押す

「それで あの子とはどういう関係なんだい 上杉君？」

知り合いつつただけでここまで気を回すかい？」

「カウンター席の男子学生は弟です それと隣の女性徒とさつきの子は……。まあ…弟の生徒みたいなもんですよ あの男性は色々と訳アリです」

「なーんか腑に落ちないね 君との関係が見えてこないな」

「俺は……………保護者見たいなもんだと思つてください」

不満気な様子だが咲子さんは奥に戻って行く

何かと問われれば 家族だ 弟に妹同然に可愛がった二人

俺の答えはあの花火の日から変わっていない

誰かを優遇するつもりもない 全員が全員俺には大切な家族に変わりはない…………。

その後は 店も落ち着きを見せ

俺も俺で少しばかり二人の会話を遠くで聞き耳を立て聞いている

どうやら俺と風太郎の出禁は解除されるようだ

加え 今後は彼の雇うプロの家庭教師の人物も含めた三人体制で五人の面倒を見て行きたいと彼は、言いだしている

俺と風太郎は補佐に回すと先生は宣言する 俺は変わらんけど風

太郎まで補佐とは……。

相当 あの電話が頭にきているんだろうな 中野父にも感情はあるようだな…………。

まだ話は続き 彼が言うには今の姉妹は自立と言うのは程遠い

もうすぐ始まる学校で誰が学費を払い

誰の名義であるのパートを借りているのかと痛い所を突かれ

五月は顔を伏せており

見かねた風太郎も動こうとするが二乃に止められている

下手に行けば心象はさらに悪化し話もややこしくなる 二乃の判

断は正しいだろう

最大の問題として彼はあの事を五月に問いかける

『四葉の赤点回避は可能なのか?』

不安は残るさ 前回のテストも四葉は最下位だ

一番点数を稼いだ三玖ですら赤点回避は免れなかったのにその下となればあの男も動き出すだろう

『この状況で頑張っている』五月の必死の抵抗も彼は聞き入れない
そうだ あの男が言う事は何一つ間違いはないだろう このままのんびりと勉強していたら

必ずまた何処かで俺達は躓くだろう 俺も風太郎もそんな事は重々承知だ

五月もカウンター席の風太郎も静かに彼の言葉を聞く正しいその言葉を何時も強気の二乃ですら

臆している それ程だ

でも誰一人として反論しない 負けっぱなしでは終わる訳もない

「やれます 私たちと上杉さんたちならやれます！」

(やっばいたか……………)

「この七人で成し遂げたいんです だから信じてください

もう同じ失敗は繰り返しません…絶対に!!」

俺が咲子さんに頼んだ注文追加は

風太郎 二乃 五月 中野父 加え五月達が来た少し前にここに

現れずつと話を聞いていた四葉だ

ずつと俯いて話を聞いていたが、彼女も覚悟を決め 父親の前に立つ

自分の意見と自分達がなす事を見届けて欲しい 今度こそやって見せる

以前の学園で何があったのか俺は知らん 話す気もないなら聞きもしないさ

四葉の鬼気迫る表情も今の彼に通用しない

たじろぐ事もせず 彼は娘の話を聞き終われば

「もし次の試験で落ちたら その学校に転校する プロの家庭教師と三人体制ならそのリスクも限りなく小さくなると保障しよう それでもやりたいようにやるなら後は自己責任だ わかってくれるね？」

あの男は本気だ

次のテストまでと猶予はくれたが、内心は今すぐにも娘を家に戻し

プロの指導の元確実なカリキュラムを実行させるだろう 本当嫌なほど真面目過ぎる……。

今更出た所で状況は何も変わらない これは 彼女達を選ぶ答えだ………五月お前はもうどうしたい？

「わかりました」

「では こちらで話を進めておこう 五月君ならわかってくれと思っていたよ」

「いいえ………もし だめなら転校という条件で構いません 素直で物分かりが良くて

賢い子じゃなくてすみません」

一呼吸おいて 五月は父に姉妹達全員の代わりに代弁した自分達の総意を……

たとえ不利な状況でも 俺達七人で 試験を向かえる その答えは変わらない

本当に不器用でおバカ……おまけに優しい子だ

ありがとな五月 俺達にチャンスをくれて

俺もうかうかしてられないな

あの男の前で五月が反抗する姿

彼女のいや 彼女達の覚悟は相当だ……

「どうやら 子供のわがママを聞くのが親の仕事らしい そして子供のわがママを叱るのも

親の仕事だ 次はないよ」

「前の学校の時とは違うから」

「僕も期待してるよ」

風太郎の言葉は確かに届いていた

親としてあの男も娘の為に動いている ただそれは本当に優しさだろうか？

彼は本当に娘達を見ているのか……それが気がかりだ

五月は自分を素直で物分かりが良くないと彼の言葉と真向から戦った

実は…この男と真にその意味に当てはまるのではないんだろうか？

まあ…考えてもわからんな

彼女達との話を終わればあの男は会計を済ませる為レジへとやってくる

対応する人手が全体的に不足している為助っ人として呼ばれた俺だレジも任せられる

「お会計は…」

「シエフに言っておいてくれ 味の薄い サンドイッチだったと」

「了解です おきやくさま」

「ふん…」

「風太郎とあいつ等の覚悟 舐めるなよ」

「君もだ…：今度のテストは彼女達だけではない 君も用心しておいてほしい」

「なんか知らんが…：ご忠告ありがとうございます」

この人が俺にそんな事を言ってくるとは内心驚いている

お互い出会いは最悪で険悪のまま今を迎えている まさかここまで因縁になるとは小学生の俺

未来は凄いや事になってるぞ…。

カードで一括の支払いを済ませればそのまま帰って行く

勿論払ったのは娘達の分と自分のだ 風太郎のコーヒー代やケー

キ代はノータッチ

苦笑もんだよ…。

「お疲れ様 風太郎も良く耐えたな」

「こ 幸太郎！ お前いたのかよ」

「ああ そう言う事 頼んでもないケーキとか来たのね」

「俺の判断だ 気にするな 五月も美味かったか？」

「あつ あの女性の言っていた彼って」

「知らんなー俺は腹を空かせた奴にサンドイッチを作っただけだ」

「幸太郎君らしいですね お気遣いありがとうございます とても美味しかったです。」

顔を出せば皆は驚いてる

今日は急用だと事前に伝えていたからな

「お兄さん ありがとうございます」

「良いって 事情は知らんがあんなに辛気臭い顔してんだ 気づくさ」

「あつはは バレてましたか」

「それで 話は纏まったのか？」

「はい 私たちはこのまま 七人で テストに挑みます」

上杉君 幸太郎君改めてよろしくお願いします」

「さつきも言ったがやりたいようにやるだけだ！」

「へいへい 任せておけ やりたいようにやってそんでいい結果を迎えようぜ」

「はいー」

ここから後二ヶ月後 俺達は決戦まで出来うる限りその時間を費やすことになった

あの父親をギャフンと言わせたいが、俺はこいつらと離れるつもりはない

やりたいようにやって 転校もさせない それが上杉幸太郎の答えだ

第六十五話 不良少年と最後の試験

「それでは 試験開始します」

この試験で目指すのは赤点回避だけじゃない
他の姉妹にも負けたくない……あの日そう決めたんだ

3月決意を固め 中野三玖は全てがかかる大一番 期末試験へと
挑む

この一日が自分とそして彼らとの今後を左右する負けられない一
戦である

もう彼を一人にはさせない為にも……………。

「冬休みも終わっちゃったね」

「あんたたちのクラスも進路希望調査もらった？」

「何 書けばいいかわからない」

「一花はすぐ書けるよね」

「うーん まだ学校には言っていないんだよね」

「よーし集まってるな」

「うーつす さて今日も授業を…」

「やりましょう…………… ぜひやってください！」

「気合入ってるな……………」

中野姉妹の家に訪れれば気合十分な五月に一声で周囲の目も自然
と彼女に集まる

あれだけ父親に大見得切ったんだ 五月にかかるプレッシャーは
相当だろうな

風太郎も押され気味だ 合格ラインは30点越えと宣言し五月も
『やりますー！』

空回りしないか不安だな……………。

「気合入れるのはいいけど 無理はきんも……………」

「わー！ 幸太郎君 鼻血が出てます まさかぶつけたんですか
!?! 具合でも」

「エツチな本でも見たんじやない?」

「んなも 読まんわ! 読むなら求人雑誌だ、五月も落ち着け」

五月に一旦肩の力を落とすよう伝えようと声をかけるも言い切る
前に俺の言葉は途切れ

そのかわりだろうか鼻からは赤い線が伸びる

一花からいらん疑惑までかけられる始末だ そんな本誰が読むか
よ

五月も五月だ 最近は大入りかと思つていたんだが鼻血見れば
慌てふためきスマホを取り出し

『救急車を呼びましょう !110でしたね』 普通に間違つてる

こいつは俺を警察に突き出すつもりなのか? 焦るの程がるわ

「うーん……………別にどこも悪くねえよ 最近三玖がやけに市販の
チョコよこすからさ」

食つてんだよ食うだけなら害はないさ」

「今日も持つてきた 食べてコータロー」

「はいよ あむ うーん わからんな」

ここ暫くは出会う度に三玖が口にチョコを突っ込んでくる

最初は困惑したが悪意がある訳じゃないんだろうし飽きるまで付
き合うのも悪く無いだろう

鼻血はちよくちよくでて勘違いされる事がちらほらあるくらいだ
しな……………。

風太郎もおすそ分けとして何個もらつてるし特に意味はないと思
う

「あら 丁度甘いものが食べたかったの」

「二乃にはあげない」

「はあ? 独り占めしないでよ」

「しないよ まだ」

不穏な空気を感じ一度五月や風太郎とアイコンタクトをし
何時でも動けるよう準備はしていたが、問題は起きる事無く

はあ………とため息

でも問題は確かにあった

先ほど持っていたチョコを俺の前にずらっと並べ始める三玖何を
してるんです？

「コータロー 全部食べて感想教えて」

「はいよー あむ 市販のものだどうもなー」

「わ 私も一つくらいは」

「だめ 五月は一つじや止まらない」

「残念だったなく五月さん……あむ、うーん……市販の味だな」

「フータローも一口どうぞ」

「おお 悪いな……うーんチョコだな」

「なっ 上杉君は良いのに私がダメとは納得がいきません」

（あつ そっかバレンタインなんて 今まで意識したことなかった
よ）

「ん？」

手当たり次第にチョコを食べる中 一花が神妙な面持ちで三玖の
方をじつと眺めていた

この二人に関しては何の問題も無さそうだけど………大丈夫だよ
な？

—————

中野三玖は悩んでいた 朝早く起きては台所でうーんと頷き 何
度かレシピを見直す

その悩みも姉である中野一花が連れてくるあるある人物に教えられれ
ば解決する筈

うだうだと考えていては、作りたいのも作れない よしと気合を入

れ直す

「あれ？ 一人で何してんのよ」

「二乃…今日は学校で勉強会の筈じゃ……………」

「一花に呼ばれて戻って来たのよ」

「えっ 一花の言ってた人って……………」

姉が言っていた 料理の上手いとびっきりの人物とは、中野家の次女で何かと三玖とはいざいざを起こしてしまう 二乃だった…。

心の中で『うわ』と期待よりも不安の方が大きく 登場すれば 自然と口は閉じてしまう……………」

ドン

『!?!』

無言の二人は突如として聞こえた物音でその場で抱き合う

「あっ……………」

「何よ 今のびっくりした…………って こっちにもびっくりだわ」

「……………」

「美味しくなさそうだし滅茶苦茶じゃない こんなのあげて誰が喜ぶのよ

あんたは味音痴と不器用のダブルパンチなんだから…………おとなしく市販のチョコでも」

ちらりと目配せ 何時もならムキになった三玖は話も聞かず 自分と意見が食い違い何もしないまま終わっている…………。

一花に頼まれ来たもののある程度は、三玖に現実を見せる必要もある ただ褒めるだけでは何の成長もならない…………。

「うるさい」

「ッ……………」

思っていた反応と違った

静かな声は怒ると言うよりも落ち込むでいるようにも見える

どんよりとした空気が広がりだし、言い過ぎたと二乃は彼女を元気づけるべく頭に浮かんだ言葉を並べ慰める 暫くすればぽつりと小

さく声を出し語りだす

「コータローはどんなものも美味しいって言ってくれる。だからなのか私もあれこれと市販のチョコを渡して様子を見てた。本当に不器用だなんて自分でも分かっているよ。でもあの日のお礼もあるからちゃんと喜んで欲しいんだ……。……。だから。作り方を教えてくださいお願いします……。。」

上杉幸太郎はとんでもない味音痴だ。適当に食を済ませ。腹に入れば同じと豪語する

ただそんな彼にも譲れないものがあり。二乃はその事を痛い程理解していた

彼が美味しさを決める基準はどれだけ作り手の愛情が、その料理に入っているかで判断

誰もが嫌がる不味い料理でも彼はそれを美味しいとペロリとたいらげる

素直に嬉しく。でも何処か納得が行かないのが三玖の本心だ

今回渡す。彼へのチョコはバレンタインであると同時にあの日自分を庇い事故に遭った彼への感謝も込められている。だからこそ……。本当の意味での美味しいと言う言葉が彼女は聞きたい

真剣にそして。真っ直ぐで不器用な三玖の姿

普段ならきつと断っていた。自分で頑張りなさいと軽い言葉で済ませた

でも。今回はどうもそうはいかない。高校一年のあの日から暫く部屋に籠り

時折顔を会わせれば何処か生気のない表情。そして二乃は知っている

彼女がずっと誰かに謝罪の言葉を言っていたことをかすれた声で名前は聞き取れず

何にをそこまで気に病むのか当時の彼女は理由も知らない

今は違う 彼女が誰に謝り 誰の為に頑張っているのか二乃は理解した……。

「全く……………面倒くさいわ 準備しなさい」

「……………！ うん」

「本当 面倒な性格だわ……………」

目の下に隈を作り 真剣に取り掛かり
勉強以上に頭を悩ませる 彼女の姿がとても可愛らしく見えた…。

(ちゃんと食べてもらうのよ……………三玖)

—————

あれから暫く勉強会は滞りなく……………という訳にも行かず何度か躓き

それぞれの問題と直面 気分転換などを挟みつつ気づけば 2月14日になっていた

「ふああ…………… 眠い」

「あつ 三玖おはようございます」

「お前も二乃も何時まで寝てんだよ」

「まあいいだろう……………おはよう三玖」

「コータロー達……………来てたんだ」

五月や風太郎との話も終えればタイミング良く三玖が起きて来た
まだ眠いのか欠伸もめだつ けど俺達がいるのを確認すれば頬を

軽く赤らめる

「来るなら言っておしかなかった　でも丁度いい……………あれ」

「ああーチョコなら食ったぞ　三玖だいぶ上達したな　うまかった」

勝手に食って悪いと思ってる

最近ずっと三玖がチョコを食わせるもんだからまた事前に準備をしているもんだと気づけば

ここに来れば自然とそれに手が伸びていた……………。

今まで市販のチョコばかり　最近では少しアクセントを変えたのを見た目が歪なチョコも多々あった

でもまあ……………先ほど口に入れた物は三玖の頑張って作るという熱意と愛情が良く伝わりとても美味しかった。

「あ　ありがと…そのチョコなんだけど…」

「おつとまで　三玖お前に伝えるべき事がある」

「な　なに…」

「やっぱり三玖が一番だな　俺の健康を労わってチョコ作ってるんだろう

兄思いの良い子だよ　ありがと　脳もすつきりだ　それとな前回の模擬試験だけどな…」

「あ　うん…」

最近やたらと疲れてた勉強会の合間にバイトと少しは無理をさせ過ぎたかと反省中だ

三玖がくれたチョコで血行も促進され　だいぶ目覚めも良くなった

気―遣ってくれた三玖には感謝しないとな

それに彼女はチョコ作りだけではなく　勉強の成果も着実に出ていた

行った模擬試験では姉妹の中でも頭一つ抜け出ている

風太郎も期待を乗せてるいるし俺も三玖ならやってくれる 期待は確信へと変わっていた…。

「私頑張る 見ててねコータロー」

「はいよ 見てるさ」

テストまで残り一か月…このまま突っ走るか

「うーさむさむ」

「お仕事お疲れ様」

「三玖 何してるの？ っていうか今日だった？ 渡せた」

「一花は…コータローにチョコあげないの？」

「ど…どうしたの急に そりゃ誰にもあげなかつたらかわいそうだし

お姉さんが買ってあげようかなと思ったけど

コータロー君だけってのもフータロー君に悪いし それに三玖があげるなら安心だね」

「安心して何が？」

「…うーん」

「フータローは生徒としか見てないし

コータローは知ってたけど…ずっと5年前から あの人は私たちを妹としか見てない」

「三玖…」

「だから決めた こん期末試験で赤点回避する しかも五人の中で一番の成績で

そして自信をもって 今度こそ好きって伝えるんだ」

（それに…きつとこのままだと またコータローは一人になるそんな気もするんだよ…）

「あれ 一花 右手包帯巻いてるけど怪我したの？」

「もう平気だよ…大丈夫」

中野三玖

国語43点 数学48点 理科41点 歴史72点 英語34点

総合238点

たいへんよくできました！

――――

――――

――

今まで失敗続きの私だけど… 勉強の神様どうか今だけは私に力を貸してください

だってみんなで頑張ったんだから

中野四葉は今一度自分の今度を左右する戦いへと向かっている

あの日言い渡された言葉を彼女は決して忘れない

あんな失敗は二度しないと心に決めた

このチャンスが無駄には出来ない 最後まで向き合ってくれた彼等の為にも… 姉妹の為にも

「もうみんな勉強するよー 試験まであと二ヶ月なんだから」

やる気を見せる四葉の言葉に他に姉妹も勉強へと意識を向ける

風太郎の指示の元 彼女達はノート向き合い…横で俺がサポート

する…。理想の形で勉強は進んでいた…その筈だった

気づけば2月テストまで猶予は残り一か月

最初はやる気を見せていた5名だが快進撃は止まっている

完全に行き詰っていた

そこをカバーしていく俺達もある異変に気付く

『どこが分からないのか わかんねー』

勉強を教える それはある程度なら誰でも出来るだろう

何処かと聞かれれば この問題 と答えれば良い

だがここに来て俺達には教師としてのノウハウはなく

何故そこで躓くのかと疑問に思い 分かっている前提で話を
しまっている

俺も一年の時の実績を生かし 何とか彼女達に教えるも中々いい
結果にはならず

『IQの差を感じる』と物凄く失礼な事を弟は言いだした

ただそれ以前の問題もあった…

ここ暫くは勉強と生活の両立だ 姉妹達の集中力自体も限界に
来ている

そうなってしまうえば勉強を教えても何の効果もない

頭に入るところか集中力が更に激減するだけだろう 適当な事を
覚えテストの赤点も免れない

逆効果を恐れた風太郎はその場で逆転の一手を考え出す

風太郎の手には先日俺と一花が出かけた際に買った一冊の本が握
られており

弟は中身を何度も見直し…ある一文に目が留まる

「時には飴だ」

「お前にして冴えてるな」

「何時も甘やかしてるからなこの兄は」

飴と鞭は使いようだ… 飴ばかりで鞭を使わない俺は逆にその発
想を頭ら除外していた

という訳で 風太郎の発案で俺達は一度息抜きとして姉妹を遊園
地へと連れて行く事となる

そして翌日

『今日だけは勉強の事は忘れよう』と弟から出る言葉とは思えない発
言だったが

そこは素直に受け取ろう姉妹達も久々の遊園地なのだろう

高校生なのに…高校生だからのはしやぎようだ

「ああ……………吐きそう」

五月に連れられ俺と一花はダウン中だ

苦手と言う訳ではないが連続で乗らされれば幾ら俺でも体には応える

暫くベンチで休んでいると彼女達に告げ少しばかり休憩だ

「動くな観覧車 目が回るだろうが…………ん？ あれは四葉か」

ベンチの真ん前のアトラクションは観覧車だ

絶叫マシンで疲れ切った俺の目にそんな物を見せないでくれ

口元を押さえ視線を上逸らした時だ…

観覧車の一つに四葉が乗り込んでいた

流石に何をしているのかまでは分からないが真剣そうな顔で中腰の姿勢だった

気になりはするが今動けばリバーさだ すまん四葉…

戦力外となっていた俺は無力さを噛みしめ下を向く

すると観覧車の方から聞き覚えのある声が聞こえ

その声の主はそのまま観覧車へと乗り込んだようでスタッフも止める暇さえなかったのか焦っている

（まかせたぞ 風太郎…）

四女の事は弟に一任し 俺はそのままベンチで眠る事にした

完全にバイト疲れに加えジェットコースターがトドメを刺したな

「……………」

「幸太郎君？ 寝てるんですか ここで寝てたら風邪をひきますよ」

「ふう……………くう……………」

「だいぶ お疲れのようですね 先月はありがとうございました」

眠りこむ上杉幸太郎の元に中野五月が現れた

他の姉妹の姿はなく それぞれアトラクションを満喫している

その途中『わるい 俺は一旦休憩』と顔色を悪くした幸太郎が何処かへと向かってしまい

五月は彼を探していた 何度か起こそうとするも反応はなく完全に意識は夢の中

今の今までずっと動きっぱなしで 先月14日の際も自分の用事に彼は付き添ってくれた

その彼にお礼の言葉を述べれば五月は彼の隣にこしかけベンチに座る

眠っている彼を自分の方まで持って来れば そつと彼の頭を自分の膝の上に乗せた

「まるであの日の一花のようですね……………幸太郎君 今はゆっくりお休みください

大丈夫です 私たちもあなたもきつと乗り越えられます」
そつと彼の髪を触り 優しく問いかける

「六花……………さん」

そしてテストの答案が返却されたその日

幸太郎はある人物を探している

それは中野四葉だ

一花からある程度の事情は聞かされて彼なりに彼女の様子を見に来ていた

暫く廊下を歩き散策する彼は遠目でそれを確認する

嬉しそうに涙を流し 風太郎のお辞儀をしている中野四葉の姿を……………

『これはお邪魔だな』と彼は眩き元の道へと戻って行く

中野四葉

国語51点 数学33点 理科32点 歴史36点 英語32点

総合184点

たいへんよくできました！

――
――
――

お父さんとの約束もありますが……………

私の夢のため　まずはこの試験を通って進級しないことには話になりません

背中を押してくれた彼の為にも……………

中野五月の意気込みは普段以上と言えるだろう

このテストは確かに自分たちの転校もかかっているが同時に彼女の目指す先に

そこに向かう為の第一歩　そして自分の選ぶ道は間違いではないと確かめる為だ……………。

「今日で三学期が始まって一週間　せつかくの日曜日　これからって時に…」

『『くくり……………』』

「何故　五月と幸太郎がいない！」

学校も始まり　テスト勉強も開始された14日

一番に意気込みを見せた中野五月の姿はそこにはなく　上杉風太郎の声が虚しく響く

他の姉妹も『まあまあ』と彼を落ち着かせ　何とかその場をやり過ごそうと試みる

姉妹の中でも特に真面目な五月がいないのは風太郎としても芳しくない状況なのだろう

一体なぜいないのかと考えるが事情も知らない彼ではその答えは出る事もなく

何だかんだと頼りになる兄も今日に限ってこの場にはいない

去年の春以降の例外を除けば彼も彼でこうして時折姿をけすらしく

風太郎も詳しい事は聞いてはいない

適当な理由で誤魔化そうとする中 中野二乃は何のためらいもなく言つてのける

「今日は「あの日」なのよ」

「あ!?! なんだよそれ ハッキリ言え!」

「直球に聞いてきた」

「ノーデリカシーの名をほしいがままにしてるね」

あの日と曖昧な答えに納得のいかない風太郎は他の姉妹を問い詰める

呆れる二名を余所に風太郎は嘘の言えないだろう四葉に事情を行うこうとするも

汗をだらだらとかいては口ごもり どうすべきか四葉も頭をフルに回転させる

「女の」

「いや普通に母親の命日」

流石に二乃も四葉の言いそうな嘘には黙っておらず彼に今日が何の日かを教えた

それは母親である 零奈 彼女命日だと

正式には8月14日 今日1月14日は月命日だと詳しく話した

最初は疑っていた彼だが何か腑に落ちたのだろうか『どうりで』と
呟く

「そう言えば 何でコータロー君もいないんだろうね?」

「二花 もしかしてコータロー……………」

「お兄さんもまさか」

ここにいる筈の彼が何故いないのか三玖は直ぐに答えに行きついた

彼も知っているのだ……………彼女達の母親命日を

「お久しぶりです 零奈さん 去年はこれず申し訳ありません」

あるお墓の前で俺は手を合わせ軽く現状を伝えた

その中に眠るのはある意味では俺の恩師であり 母や勇也さんと同じく尊敬している人物

零奈さん 墓標には中野家と刻まれており 中野家の人間として埋葬されている

「幸太郎君も来ていたんですね おはようございます」

「よう 五月……………お前もか……………不思議だな こうして同じく足を運んでいる筈なのに

ここで会うのが今回が初めてなんてな 零奈さん 娘さんが来ましたよ」

「そうですね 私も不思議に思います……………お母さん 来ました五月です」

彼女への連絡を終えれば五月が花をもつてそこに立っている
真面目なこいつだきつと欠かさず来ていたんだろうな

その場を退け 五月に譲れば彼女は母への連絡とこれからの自分
についての悩みを打ち明けている

聞かないように少し席を外し 辺りを見回す……………

お墓だけあって人の気配は全く感じない 頻繁に人が訪れるような所ではない……………

「幸太郎君 お話が終わりました 帰りましょう」

「ちゃんと話せたか？」

「どうでしょうか 私にもわかりません 本当にこれで良いのかも」

「まあ…そんな辛気臭い顔するな あの人も心配すつぞ」

「そうですね 母を心配させる訳には行きません 行きましょう」

風太郎にはそれとなく伝えたつもりだけど……………。

隣の女性徒はどうなのだろうか、デリケートな話題だ きっと何も言わずに出て来たんだろう

向うでフォローが入っている事を祈るのみだな 頼むぞ中野姉妹

「お 先客が それも二人珍しいこともあるね」

「えっと……………初めました」

「どうも お初です」

「うげっ……………先生!! 勇也!!」

『?!』

見知らぬ女性が五月の顔を見れば驚いたように一歩下がりに

『先生』と口にし どうしてだろうか俺の父親である勇也さんの名前まで出て来た

状況が理解できない俺達は顔を見合わせ

この女性が何者で何故ここに来たのか一旦状況を整理する事に相手側は何度か頭を悩ませ

『よしゃ』と声を出せば 零奈さんのお墓の前に向かう 何だか念仏を唱えだした

話が終わったのか『私は下田 取り合えず二人共ついてきてくれ』と俺と五月を連れ

駐車場へと向かえば後部座席に俺達を乗せ そのまま何処かへ走って行く

『『?』』

「わっはっは 悪い 悪い」

連れてこられた場所は俺が良く知る ケーキ屋 Revival

入れば早々に店長とご対面『上杉君がお客なんて珍しいね』と真顔で驚かれた

バイト先は予定が無ければ来ることはほぼまれだ 店長の反応も分かる

席に案内され 適当に注文し

彼女 下田と名乗った女性に 五月と俺の素性を明かした

するとどうだろうか 腹を抱えて大笑い 周りの視線もこちらに集まってくる

眼鏡をかけた知的な人物か思いきや何ともガサツな人物だ

俺が勇也さんの息子とすれば「勇也の長男か ヘーそっくりだな」嬉しいんだけど反応に困った

軽く話を聞く限りだとこの人は勇也さんと同じ学校通っていたらしく

当時は粗暴な生徒で五月の母親である零奈さんに毎度の事 げんこつを受けていたとか…

「意外だ 俺には凄く優しい人に見えたんだけどなあ」

「私の方が意外だねー まさか勇也の息子と先生の娘さんが二人であるの月命日に来てるとはさあ」

「まあー色々もあるんっすよ」

「あの人で出会ったわりには君もだいぶ ぐれてんなー？」

「人生色々ですよ 下田先輩」

「そういう所 勇也にそっくりだ」

へいへいと軽く流す こつちの話が盛り上がってばかりで五月が置いてきぼりを食らっている

「おつと悪い……………まあ 聞きてえならいくらでも話してやるが なにぶん先生とは…」

高二の一年間だけの思い出しかねえ 私も少々おてんばだったかかもしんねえがとにかく…こえく先生だった」

俺もあの人の親としての顔しか知らず

学校の教師としての姿も少々気になっていた……………。

他人の俺が聞いていて良いものか、迷っているんだが五月が『幸太郎君も聞いておいてください』

『そう言えば俺の手を掴んで離そうとしない その手は少し震えていた。』

あの人を演じそれをやり続ける 五月に取って

零奈さん本人の話は最大のプレッシャーだ

気持ちの整理はついていると言っているが、やはり怖いんだろう

『わかった…』 それだけ述べれば俺は帰るのをやめる

下田さんも俺たちの様子を見て 話を再開する

彼女曰く 愛想もなく笑いもしない それでいて誰にも媚びない まさに鉄仮面

初対面の時もそうだけど…あの人他人の前だと一切の感情殺す そうしてる節があつた 大人の事情つてもんがあるんだろうけど…。

「はは…さぞ 生徒さんには怖がられてたのでしょうね」

ケーキを口に運ぶ五月も母の仕事を聞き苦笑い

「いや それが違うんだ」

五月の意見を下田が否定

何処か懐かしみように下田さんは話を続ける

「どんなに恐ろしくても 鉄仮面でも許されてしまう 愛されてしまう慕われてしまう

先生はそれほどに店長…めっちゃ美人だった」

「…！めっちゃ美人…！」

「わかります あれはヤバいですよ」

「分かってくるか 後輩よー あれはまさに女神だよ」

鉄仮面だろうが何だろうが…零奈さんは誰もを魅了する容姿だ

うちの母が可愛い系なら零奈さんは美人系… 中野の先生が羨ましいよ

実は中野家に通っていた理由もあの人見たさと言う 子供ながら

下心があつたのは秘密だ

あいつ等の前では口が裂けても言えん

「ただでさえ新卒で私たちと歳が近い女教師でしかも超絶美人。それだけで同学年のみならず学校の全ての男子はメロメロよ」

「メ…メロメロですか…」

あの人の話を聞いたびに横で驚きのリアクションばかりの五月
こいつにとつては偉大な人だ あの人の凄さを実感してるんだろ
う

「ふふふ」

急に不敵な笑みを浮かべる下田さんは俺と五月の顔を交互に見る
一体なんだ？

「ま、それは言わずもがなだな！先生似のお嬢さんが まさか勇也の
息子とねえー」

「なーに言ってるんだ あんた？」

「わっ…私た!?そ、そんなことありません!／／／ えつとですね

／／／

あの何と言えば良いのでしょうか 幸太郎君…どうしましょう
「俺に聞くな…」 下田さんもからかうな 俺と五月はそんなじゃ
ねーよ

単なる幼馴染見たいなもんですよ」

「こ う た ろ う い つ き 下の名前で呼び合う仲間ー
」

「ダメだ 五月 この人昔のやんちゃしたせいだろう 人間の言葉が
通じねえぞ」

何を言いだすとか思いきや 俺と五月が付き合って

寝言は寝て言えとはまさにこの事だ幾ら否定しようが流石講師あ
れやこれやと言葉を羅列

俺の意見は悉く打ち崩される

隣の五月さん怒って顔が真っ赤なんだけど… どうしてくれんだ
？

『わけーな 青春かよ』少しでも隙を見せれば彼女はちゃちゃを入れ
てくる

「はあ……さーせん 俺トイレ行ってくるんで」

「いついつい いついつい」

話していたら胃が痛くなってきた

どうも俺はあの手の年上女性相手だと調子が出ねえよ

少しばかり席を外し 一旦気持ちをリセットする為トイレまで足を動かす

「さて 話を続けっか…まあそれもあつて ファンクラブもあつたとかかく女の私でも惚れちまう美しさ」

俺が去つたのを見れば下田さんは未だ顔が真っ赤な五月に話の続きを始める

席を外した理由は、簡単だ彼女からの目配せ軽いアイコンタクトだここに第三者がいると話しにくいことや五月に対して思うところでもあるんだろな

「あの無表情から繰り出される鉄拳に私ら不良は恐れおののいたもんだ。まさに鬼教師だ。だがその中にも先生の信念みたいなもんを感じて…いつの間にか見た目以上に惚れちまつた」

「……」

「結局1年間怒られた記憶しかねえ。ただ、あの1年間がなかったら…私も…教師に憧れて、塾講師なんてなってねーだろうな」

「下田さん、ありがとうございます。下田さんの話を聞いて、踏ん切りがつかしました」

上手く内容は聞き取れないが、五月は何かを決めたんだろう

学校で配られた進路希望調査を机に出せば第一希望にボールペンを向ける

(あいつの夢か… そう言えば知らねえな)

ペンを紙につけたその瞬間だ…下田さんが持っていたフォークで受け止めそれを阻止

(なーんか雲行きが怪しいな)

「ちよいと待ちな。母親に憧れるのは大いに結構だ。憧れの人のようになろうとするのも決して悪いことじゃない。私もそうだしな。だがお嬢ちゃんは教師になりたいんじゃないか?」

「!!」

「なりたいたけなら 他にも方法がある……あの人に拘る必要もねえ」

「……………」

「……とはいえ、人の夢に口出しする権利は誰にもねえさ。生徒に勉強を教えるのも楽しいし、やりがいがあつていい仕事だよ。お嬢ちゃんが教師になるっていうなら目指すといいさ。……『先生』になりた理由があるなら、な」

少しばかり内容が聞こえた……………五月の目指すそれは果たして彼女の夢なのかと…

人生の先輩からのそしてあの人の生徒からのアドバイスを下田さんは五月に提案している

さて そろそろ戻るか……………さつきから店長がずっとこつち見てる営業妨害になりかねん

「おっと、こんな時まで説教だなんて……先生としての悪いところが出ちゃったな。悪かったな、えらそうなこと言って」

「いえ……………参考になる貴重なお話ありがとうございます。」

「うつつ どうした五月?」

「おっ戻ってきたな ヤンキー少年」

「こ 幸太郎君 お帰りなさい いえ 何でもないです」

何事もなかったかのように戻れば
下田さんが声をかけ 先ほどまで塞ぎ込んでいた五月も顔をあげた

「へいへい 下田さんも何かお疲れっす」

「何の事か わかんねえーな」

食えない人だよ　五月が零奈さんの事を聞こうとした時からずっと俺に目配せしてたくせに

五月を見て彼女も何か思う所があったんだろう

初対面の下田さんから見ても何処か五月は歪に見えたって感じか………。

あいつにもう一度考えるよう　進めている程だ

俺は他人の夢を否定はしないそれは絶対だ　だから五月の夢も俺は応援してる

それでも今だけは安易に『頑張れ』と声をかけてはいけなくらい俺でもわかるさ

「それで　勇也の息子さんは　進路希望調査は持つてんのか？」

「はあ？　んなも捨てた」

「うわ　これはやべー奴だ　先生がいればんこつもんだぞ」

「こ　幸太郎君　それは本当なんですか！」

「嘘だよ」

「そう言う冗談はやめてください！」

「何時もの五月だな　それで良い　今は普段通りの五月でいろ　俺もそれが安心すつからよ」

「え　あのまさか　幸太郎君　わざとあんな事言つたんですか」

「知らねーよ　下田さんも笑つてないで帰りますよ」

あのまま五月が塞ぎ込んだ　ままだとあいつ等も心配する

俺も五月には笑つていて欲しい……………。

ガラじゃねえ事はするもんじやないな　むず痒い

「これも何かの縁だ。連絡先交換しようぜ　勇也の息子もさ」

「俺のスマホは現在ガラクタ状態なんで　いらないます」

「なんか色々とあんたも大変そうだな……………。

それじゃお母ちゃんの話が聞きたくなったらいつでも話してやる。

またどこかで会おうぜお二人さん」

五月と連絡先の交換を終えれば下田さんは俺に名刺だけ渡すと支払いは自分がすると言い先に帰って行く

「父はまだ 怒ってるんでしょうか」

「さーな あの人は俺が嫌いだから使えてただけ 奇跡だよ」

「やはり ここは一度父に言うべきでは…ん 幸太郎君？」

「いいよ 言わんでも お前らの成果を出せばあの人も嫌でも認めるだろうしな」

「そうですね………きっとあの人も分かってくれます」

今何を言ってもあの人は首を縦には振らんだろう

なら実力で認めさせるそれが一番の近道だ

それに使用できるようになれば俺はあの男にイタ電ばっかししそ
うだしな

「俺たちも帰るか」

「はい みんなが待ってます」

了解をとれば俺は五月と共にアパートまで向かった

何事もなく勉強会は進んで一月は何とか乗り来れそうだな

下田さんとの出会いから暫く2月になった頃だ

風太郎の提案で以前 三玖に話したそれぞれを補う計画を軽くだ
が説明

俺たち二人が何時また出禁を食らうか分からんし

あいつらだけの方が気兼ねなく教えられる事も多々あるだろう

当初は困り顔だったあいつらも徐々にそれに慣れ始め

何時しかその勉強方法が当たり前になり始めていた………。

そして時間は流れあの日から丁度一か月が経った

風太郎から『お墓の場所教えて欲しんだけど』と頼まれ

何を考えているんだろうと疑いの眼差しで見たが、こいつに限って

悪意なんてあるわけもない

考える必要もなかったな……。

俺は風太郎に五つ子達の母が眠るその場所を教えた

「うーん 良し 任せたぞ風太郎」

「ん？ 何か知らんが任された」

きっと先に五月が来ているだろう

俺の前だとあいつは本音を隠す 風太郎相手なら多少なりともそう言った事も言えるだろ

彼女事を風太郎に一任すれば俺は迫る期末に向けて準備を始める
あと一か月……………

(お母さん 私……………先生を目指します)

中野五月

国語47点 数学35点 理科70点 歴史32点 英語40点

総合224点

たいへんよくできました!

……………

……………

……………

余計なことを考えちゃダメ……。今は赤点を回避することだけに集中しよう……。余計なことを考えちゃダメ……。今は今だけは……………収まって

静かに胸を抑える一花この高鳴りの理由はもはや隠せない……………。今日の前にある それ この紙に彼とそして姉妹の今後がかかっている

その為にも今はこの一戦に集中しよう何度も言い聞かせる

「はあ……………なんで 好きになっちゃったんだろ」

「おー 一花さん ため息は幸せが逃げるぞー」

「~~~~ッ!?!」

四葉を風太郎に任せアパートに戻れば何故か玄関前で一花が大きなため息をしていた

「こー コータロー君 な なんで!」

ドンッ

「っ 痛……………」

「一花 手を見せろ」

「え 大丈夫だよ」

「良いから見せろ」

「はい……………」

後ろから声をかけたのが不味かった

びつくりした一花は立った拍子に手を鉄柵にぶつけてしまう

すぐさま手を見せるよう彼女に言うもそれを断る だがそう言う

訳にもいかない

二度目は少しドスを利かせた声で言い 彼女は渋々右手を見せる

赤くなり擦り傷があり腫れ始めている

「こー これくらい平気だよ」

「ダメだ 少し待ってろ」

傷は傷だ…。それに何かにぶつかった傷とは、本人が思う程後から

効いて来ることが多々ある

鞆に閉まっていた 一式を取り出し手を軽く消毒『ううう』と染みるのだろう顔を強張らせる

一度拭き取りその上を包帯で包む きつくそれでいて痛めないよう優しく

「これで良いな 痛みは少しすれば引く なるべく右手を使わないように わかったか?」

「はっはい……………ありがとうございます」

「ふう……………お前は女優なんだぞ 怪我が目立つ訳にはいかんだろ

うが

まあ何も考えず後ろから話しかけた俺が悪いけどな 悪かったな

「大丈夫だよ お姉さんこそ ぼーっとしてからさ」

あつはははと笑って笑って誤魔化そうとするけど

確かに痛いと言う声も聞こえたし 手を摩ってた

大事な友人つてもあるけど目の前に怪我人がいるんだそれを放つてはおけない

普段から持つてて良かったと自分の物持ちよを今日程ありがたいと思つた事はないよ

「そ それでコータロー君 何でここにいるの？」

「風太郎と四葉の代わりに参考書をな」

「あ……あーそれこの、前捨てちやつたかも………」

「かも？」

「捨てた うん 間違いないよ私がポイっとさ 後か気づいて焦つたよ」

「まじかよ どうつすかな」

「よし 今から買いに行こうよねえー」

「お前の借りれないか？ 家目の前だし」

「私のも捨てたからー さあー行こうー」

参考書を二冊捨てるとか何やってんだ こいつ………。

頑なに家に入れようとしな一花は俺の背中を押すようにアパートから遠ざけ

その勢いのまま二人で近くの本屋と連れて行かれた

「とりあえずさ 風太郎に遅れるって連絡してくれ」

「あれ？自分で言わないの……？」

「だから 俺のスマホは何か知んねーけど止められてんだよ たくあの男嫌がらせしやがって」

「うん 了解……四葉にもメールしておくよ」

こういう場面で持つてるのに機能しない自分のスマホにイラつと

してしまう

八つ当たりも良い所だよ いい年して……………。

「その手だとやりにくいかな？」

「大丈夫です このくらい はい送信」

(本当に何でこんなことになったのかな……………。)

手の甲に包帯があるとタップもしにくいかと思ったが左手で難しく操作する

現代っ子は手慣れてやがるな……………。

「参考書選ぶから お前は待つてろ……………いや 外は駄目だ近くにいろ」

「ああ うん」

三玖も一人で外にいて変な奴らに絡まられたんだ

目立つ一花を一人外で待たせるのは余り良いとは思えない

中に入ればなるべく近くで待つていて欲しいと伝える

「おっ……………風太郎にこれ良いかもな」

「コータロー君あった？」

「合ったには合ったけどさ……………良い値段しやがるな」

手に取った二冊の本は合計しなくても俺と風太郎の昼食代を超えている

自分が原因と口にした一花を見て俺は考えた

このまま会計させて良いものか？家賃や生活で厳しいと以前話してくれてた…。

「よし 俺が出そう そのかわり結果出してくれ」

「大丈夫 大丈夫 私が出すよ コータロー君は何もしなくて良いから！」

「何でだ？ こういう時は男が持つもんだらう おい一花」

「本当に大丈夫 心配しなくて良いよ……………んコータロー君その本は？」

俺から二冊奪い取ればそのままレジに向かおうとするが

もう一冊別の本があると気付き ニヤリとこちらの方へと足を戻す

なーんかその顔嫌んですけど？

「まさか 本当にエツチな本を……………」

「鼻息を荒くするな……………」

仮にも女優 そして女子高生がそんな話題で鼻息荒く 男子に詰め寄るな

思春期の男子中学生じゃあるまいし

「風太郎にお土産だよ」

「へえーいい先生になりたいんだ〜？」

一花曰くエツチな本 実際は『良い教師になる為のいろは』と書かれている

参考書だ これも中々のお値段であるが、俺と風太郎は教師じゃない

さしすせそ基いろはも学んでいない 久しぶりに本屋に来たんだ
こういった参考書はこの先必要なると思つて手に取つたままで……………。

教師事態になりたいとは俺は思つてないただ主張する

「お前らや風太郎の為には必要だろうとな」

「本当にお兄ちゃんしてるね 君は」

「実際一番年上だからな」

「なら それも買ってあげる」

「大丈夫だ これくらいは自分で買うさ」

ただでさえ苦勞人に二冊も買わせるんだ

一冊くらい自分で買わねえと男としてダメだろう

「遠慮しないで。もしかしたら、今度こそ落第するかもしれないし」

「落第？……………おい まさかお前ら」

「あれっ？言つてなかったっけ？」

「聞かずに俺達はこの仕事引き受けからな……………」

「私たちの前の学校でさ……………」

俺と風太郎は 赤点候補の五つ子の勉強を見てそれを教える
その事だけをやってきた 彼女達が何故家庭教師が必要なのか
勉強出来ないだけとそう思っていたが

ただ勉強出来ないだけで あのお嬢様学校からわざわざ転校して
くる事もない

一花は語り出す 声を小さく周りには聞こえないよう

期末試験に落ちた そして落第寸前まで陥った事

勉強出来ないつまりはテストでの結果も今の比ではないと

今日まで見て来たが成程と合点もいく

それに三玖が前の学校のジャージを着ないで今のを着る理由もそ
れで納得もできる

良い思い出とは言えないだろうし……………。

「了解……………ここで聞いた事は胸にしまおうさ」

「そうしてくれるとありがたい 三玖はきつと知られたくないから

特にコータロー君にはさ」

「だろうな……………。」

三玖は高校でどうやっていくか凄く悩んでいた俺はありきたりな
アドバイスで三玖を励ました

結局はそれが仇なっただろうな

あの時意地になつて名乗らなかつた自分が本当に滑稽だ

彼女達の力になれるチャンスはあの時に既に目の前に提示されて
いた

「それでさ 口留め料って言うのも変だけど 黙ってもらおう為に私が
買うよ」

「色々とツツコミたくなるけど…じゃこれよろしく」

「支払いしてくるからブラブラしてて」

「一花 これ持ってけ 図書カードだ 一応は役に立つだろう」

「良いの？ コータローくん欲しい本とか」

「参考書を買う分に費やす予定だ 期限も迫ってるしな」

欲しい本はもう一花が持つてる

買いたい本はもう俺にはない 使用期限も過ぎるしそれなら

今使ってもらった方がその図書カード本望だろう

「一花：今日まで見て来たけど 勉強と仕事を両立してる：お前はやっぱりすごい奴だ 何より飲み込むが早い だからさ今度こそ合格しようぜ」

「うん やるだけやってみるよ」

参考書を三冊持ち レジまで走って行く

あんなに頼まれれば断る方が野暮ってもんだろいな

「つて 一花て怪我してんだつた 見るもんじゃないし 追いかけるか」

求人雑誌でも探そうかと足を動かしたは良いが

一花は右手を軽くぶつけてしまい包帯を巻いている

話に夢中でその事が頭から抜けていた何やってんだか：

「一花を探すか レジは向うだな：？」

手間の方で一花が慌てふためく男子生徒を宥めている と言うよりも反応に困っていた

二人の男子生徒は声を上げ『医者は何処だー』と注目を集めてしまっている

申し訳なそうに二人にお辞儀し 一花はこっちの方まで走ってきた

「よう 大丈夫か？ 絡まれたのか」

「ううん 違う何か大げさに騒がれた感じかな」

朝方ぶつけた手の甲を見せる 先ほど見かけた男子生徒はこれに反応し

一花は気づかれないよう逃げ来た

包帯はやり過ぎたとは思わないさ 自称兄は何時も心配なんだよ
「痛みがないようならおkだ でも一花って少しドジだよな」

ドキンッ

（この顔だ：ずっと昔から私は彼に惹かれていたんだ ；でもこの気持ちはダメだよ 三玖はコータロー君を：それに彼は六花さんの事

が…)

「ねえコータロー君…」

「なんだ？一花 荷物持ってほしいのか」

「ううん 何でもないよ 呼んだだけ」

「そうか…あのさ 一花 この前は無理だったけどさ テストが終わったらで良いんだけど

サイン貰えるか？」

「うーん お兄ちゃんは興味深々かー」

「応援するって決めてるし 興味もあるぞ？」

「／／…ああーはいはい テストが終わったら幾らでも書いてあげる だからさ頑張ろうか」

「おうー！」

よし これで心着なくテストに挑める

本人がいるのに貰うタイミングが中々無くて三玖が持つてるサインが羨ましかった

そのまま買い物を終え俺達は風太郎達の所へと参考書を届けに向かう

『捨てたなんでー』と大騒ぎの四葉を見て風太郎もびっくりしていた

その後は一度アパートへと戻り 一花は仕事がある一旦別れる

「試験まであと僅かと言ったところか…みんな頑張ろうな」

ケーキ屋Revivalに集まる 何時もの七人… まだ二人

ほど来てないけど…

今日はテスト返却日である3月9日

あつという間の三ヶ月だ 無事に赤点回避を成し遂げ姉妹達は嬉しそうに笑顔を浮かべる

一番に心配された四葉も何とか乗り切り 本人が一番に驚いているという

自信を持って お前が成し遂げた結果だ……………。

「四葉、やりましたね！」

「一番 危なかったのに！」

「おめでとう！」

「えへへ 私史上一番の特典です 自分でもびっくり 合計は18
4点とギリギリでしたけど…」

「私は計224点 少し危ない 科目もあつたのが今後の課題です」

前回の期末は全員が全員赤点を取っていた

そのプレッシャーもあり少々不安もあつたと話す

真面目な五月は今後の課題として幾つかをピックアップし始め
次回に生かしたいと述べている

「三玖はどうでした？」

「私は…238点」

「えー凄い！」

「流石三玖ですね」

俺達の見立ては間違い

彼女の成長は想定以上だ どの科目も順当に点を稼ぎ英語以外は
40点代

元より本格的に勉強会にも参加し学び続けていたこれも当然の結果
果 誇るべきだ

三玖の点数を聞き終えたタイミングで一花も入店 残すは二乃だ
け

連絡手段のない俺にはあいつの居場所も分からん

「あつ一花も来たよ 二乃はまだかな？」

「試験結果が返ってきたら ここに集まるよう伝えてある筈ですが
…」

「三玖 やはりお前が一番の成長株だ」

「フータロー…」

「お前の頑張りがちゃんの結果につながった おめでとう三玖」

「コータロー……………コータロー…あの 私！」

「ん なんだ三玖」

赤点回避おめでとうとその気持ちを伝え

三玖も笑顔で縦ふる 一旦一花の点を聞こうと思った時再度三玖

に呼ばれ俺はそつちに視線を戻す

笑顔から一転 俯き何処か口ごもる なんだろうな？

「良かったー 一花も赤点無かったんだ」

「合計何点だったの？」

「私？ えーつとね 240点だったよ」

「って ことは」

「一花が一番じゃないですか！」

「ほー これはまさかのブラックホースだ」

「あつ そうなんだ……やった」

やったと口にする一花 だけどその表情は何処か冷めており

一瞬 一花とあいつが重なって見えた……。

中野一花

国語38点 数学63点 理科52点 歴史40点 英語47点

総合240点

たいへんよくできました！

—————

—————

—————

ありえない ありえない

私があいつのことを好きだなんて 絶対に認めない…… そんなことある訳ない！

それにもう あいつからは卒業した あの時そう決めた筈なんだ

から

試験の最中 脳裏の浮かぶのはあの少年 勉強にうるさく デリカシーにもかかけ

兄と二人で自分を騙したあの彼だ……

同時にその兄への感情 一度は捨てた筈だった けど何処かまだ彼を慕う幼い自分が心の中にいる

何度か頭を横に振るい その感情頭から追いやり 自分のやるべき事に集中しようと……。

「今のところ 一花が一番だね」

「いや〜頑張りましたよ」

「本当に……お仕事もあるのに凄いです」

三玖の点数よりわずかとは言え 一花はこの中で一番の点を稼いでいる

本人はあまり実感がないように振る舞っているけど謙遜せず胸を張れば良い

「私は てつきり今回も三玖が一番かと……」

「！……あッ」

今回も三玖が そう聞いた途端に一花はその場で固まり

三玖の方へと振り向いた どちらも頑張ってここまで結果を出せたんだ

競っていた訳でもないのに何故そこまで動揺しているんだ？

この時の俺はそんな事を考え 彼女達の想いなんて気にも留めてはいなかった

「三玖…… 私……そんなつもりじゃなくて……」

「二花 おめでどう 私もまだまだだね」

「二花 やったな それに三玖も良くやった 次の糧になる 忘れる

なよ」

「うん 次はもつと点数稼ぐよ」

「コータローくん……その」

「なんだよ？ さつきから お前らしくもねえーな」

一花がしおらしいとどうもこつちまで調子が狂つちまう

何でそこまで焦ってるのか分かんねえけど いい点取れてしよばくれてるの似合わない

三玖だつて嬉しそうにしてるんだ 顔をあげて欲しいな

俺が三玖達と会話をしている後ろで風太郎の点数を見ようとする

五月と四葉

すんでの所で五月は踏みとどまり『毘です』と口走る

この弟は何て良い性格をしているんだろうか……

「そう言えば 幸太郎君の点数はどうなんですか？」

「お兄さんも中間では90点だいキープでしたから 今回もバツチりですよね」

「ん？……まあ……それなりにはな」

答案用紙を咄嗟にポケットの中に押し込む

やべやべ 風太郎と別の意味ではこれは見せられんよな

適当な返事を返せば五月と三玖は何か感づいたのかじーつとこちらを覗き込む

こいつら何でここまで感が良いのか……。

「コータロー？ 何かあった」

「期末試験があつたな」

「そうじゃない コータロー何か今 表情が変わつた気がしたから」

「なんでもねーよ 俺の顔は何時もと変わらん仏頂面だ」

五月と違い 三玖はそのまま声をかけてくる

横に逃げればすつとまた俺の前に立ち逃がさないように立ち回っている

普段は体力がなくて直ぐにばてる割に こんな時だけ器用に動くよな

『大丈夫 大丈夫』とその場しのぎ

俺にも教える側のプライドつてもんがある 今だけは見せられねえな

納得がいかないようだが一旦身を引く三玖は『相談してね』と一声くれた

(相談ねえ……………)

「試験突破おめでとう 今日はお祝いだ 上杉君達の給料から引いておくから

好きなだけ食べるといいよ」

「色んなケーキがあるんで 皆さんどうぞー」

「もー店長ったら冗談ばかりー 真弓まで何だよ悪ノリしてさー」

「本当だよ 店長も本当に人を乗せるのがうまいなー はっははははは」

何も言わない二人に俺達は嫌な汗をかく

似たような事を俺は以前確かにしたけど 好きなだけとは言っていないぜ

本当に…………頭が痛くなるな

全く目を合わせない後輩と自慢げに商品を見せる店長

商魂たくましいな この人も……………。

何時までもねちねち言うのはやめよう 哀愁漂う弟の肩に手を乗せ 首を横に振る

『諦めよう』その一言が心に刺さる

それにだ今は祝い事だ 五つ子と風太郎 それに真弓ちゃんも無事にテスト終えたんだ

めでたい日に 辛気臭い顔は似つかわしくねえ

五月達を見てれば、考えるのも馬鹿らしくなってきた

その祝い事にあと一人足りない

五月が口に出せば店長は胸ポケットから一枚の紙を取り出しそれを風太郎と俺に手渡した

「風太郎…………これまさか」

「試験結果の紙だな」

「ああ それと二人に伝言がきてます」

『おめでどう あんたらは用済みよ』

真弓ちゃんの発したその言葉の意味を俺達は瞬時に理解した
あいつは会いに行っているんだ あの男に……。

中野二乃

国語32点 数学33点 理科40点 歴史48点 英語56点

総合209点

たいへんよくできました！

第六十六話 不良少年と動き出す関係

「やったー」

「見事全員赤点回避を出来ましたね！」

二乃の点数は無事に赤点ラインを越え

あの男の提示した条件を彼女達はクリアできた

大はしやぎと四葉がわーいとその場でジャンプ 一花から聞かされた

以前の学校での事を考えれば彼女が大喜びするのもうなずける

風太郎は彼女達に『良くやった 特に三玖 お前は一番に安全圏に入った』とお礼の言葉を伝え 店長からバイクの鍵を渡されればそのまま外に向かう

『全員強制参加だー』と去り際伝えている

「それと 上杉君ももう一台あるからそれで行ってきな 君達もバイクに遅れないようね」

「ありがとうございます 店長」

店長はもう一台の鍵を投げて渡す

「コータローも迎えに行くの？」

「まあな……………それと三玖 本当にありがとう風太郎も言っただけだよ」

お前の頑張りが合ったからみんなここまでこれたんだ 俺を……………俺達を信頼してくれてありがとう」

「うん 私は二人を……………コータローを信頼してる これは私の気持ちだから」

私の気持ち……………それはどう言った意味として捉えれば良いだろうか

微笑む彼女に見送られ 店を出る

裏の方の倉庫に入れば一台のバイクがひっそりと置かれている

『動くのか?』と不安もあったが、このままさようなら そんな都合が いい事誰が許すか

ものゝすごく突き刺さる言葉だけど今は二乃の元に向かうのが先

決だ

倉庫から運びキーを差し込む

しまわれていたけど何時でも使えるよう整備されているのか汚れはなかった

「待つてろよ 二乃 それと中野先生……」

アクセル全開 風太郎より遅れて出るんだ少しくらいは勘弁してくれよ

「おーっす 迎えに来たぞー二乃 それとこんばわ中野先生」

「あ あんたまで何で！」

「ハア？ 勝手にいなくなる奴を捜しに来ただけだ 風太郎早く二乃連れてバイトに行け」

「はいよ 乗れバイトに遅れる」

数分遅れで俺はマンション前まで到着

既に話は終わったのか二乃は風太郎の近くでどうすべきか迷っている様子

俺が来た事に気づけば早速に本音を隠しての一言だ

『はあ』とため息を出す中野先生は俺達をじっと睨むように視線に入れる

二乃の方に手を伸ばす

「君が行こうとしているのは茨の道だ うまくいくはずがない

後悔する日が必ず訪れるだろう こちらに来なさい」

「二乃 迷うな風太郎の後ろに乗れ」

「ううーん……パパ 私たちを見てて」

「えーえつと……お父さん……娘さんを頂きます 幸太郎遅れるなよ」

風太郎と父 二人どちらと選択に迷う彼女に『迷うな』と声をかける

振り切る様に風太郎のバイクに跨れば弟は爆弾発言を残しつつそ

の場から去って行く

「ふふふ 笑えるな……はあ……あんたの言った条件あいつ等はクリアしたぞ

これで良いんだろう？」

「確かに彼女達は全員赤点を回避できた 父親として喜ばしいかぎりだ……感謝しよう 上杉幸太郎君」

「思ってもねえー事 言うな」

風太郎は先に行ったが俺はまだこの男と話す用事が残っている
成績が乏しく低い娘達

それでも可愛いからこそこの人も色々と考えているんだろう

でもだ そのやり取りは彼自身の考えで結局は娘達の意見など聞く耳はない

今回の期末の条件も風太郎に言われたからだろう

自分から出向き五月と話し合った

そして彼から提示された条件が彼女達の赤点回避だ………。

高い壁だか、七人で挑むんだ

不安もなく彼女達はそれを受け入れる

覚悟も決まっていたしあいつらも自分たちの実力を発揮できた

姉妹は全員赤点回避を成し遂げた 喜ばしいさ俺達も教えた側としてこれほど嬉しい事もない

去年から続く 惨敗黒星の連続から無事に脱却し初白星だ

なのに彼は出向くことなく、結果を知ればそれだけだ

当たり前でも言いたいのか……

なぜそこまで彼女たちと距離を開けようとするんだ……

解せないことばかりだ

「本当に思うなら……あいつらに直接聞くべきだ 二乃は自分からここまで来たけど

他の四人とも……ちゃんとあんたから聞く そうすべきだった筈だ」

「相変わらず 家庭の事情にずけずけと入り込む あの頃から君は何

も変わってないね」

「お互い様だ……」

彼の言う事は本当に正しい 俺は他人だもう踏み込んでいいライオンはとつくに超えている

赤線なんて気にも留めない ぶつかる寸前さ

でもこれが俺だ あの子達の為なら俺は例え父親だろうと思った事は口にだす

この人からの評価なんて初めて会った頃に最低値を振り切りマイナス

デッドライン目前…… 嫌いな男だ

「……………」つ言わせてくれ 俺はダメだ 今回の試験 俺は……最悪だ

赤点ギリギリと言わないけどな」

「……………」

「あんたに隠す必要もない 何時かバレる 言い訳はしない」

「了解した……………」それが君の答えという訳だね 上杉幸太郎君」

今回の期末試験

俺は全く点数を稼げなかった

上杉風太郎

国語89点 数学97点 理科88点 歴史94点 英語91点

総合459点

上杉幸太郎

国語70点 数学79点 理科75点 歴史74点 英語80点

総合378点

風太郎と百点近くの差をつけられ 前回から一気に落ちている

80点代は英語のみ 歴史は三玖と2点の差だ

これがかつて 学校で最優秀と言われ周りが期待した人間の今の姿

俺史上最悪のテスト結果と言っても差し支えない……………。

「だから言った筈だ 用心するようにと……………その点数で君は彼女達に教えられるかい?」

「無理だ……………って以前の俺なら言ってたな でもこのまま続けるさ 下がった分はこれから取り返せばいい」

「許すとも?」

「勝手にするさ あんたが許す許さない そんな事あいつ等と風太郎には関係ない

「アンタの事だ どうせまた何か仕掛けるつもりだろう 受けて立つよ」

「自分勝手が過ぎないかい 上杉幸太郎」

「そうだ 俺は自分勝手な人間だ あんたが一番知ってるだろ 中野先生」

「言い訳も弁解もしない 俺がテストの成績を下げた事実が変わらない

「苦情も文句も受け付ける だけど勝手に調べられどうこう言われるのだけは俺は嫌だ

「そうなる前に自分から言っちゃった

「わかったでは行くといい ああそうだ 幹雄君から君に伝言だ『期待している』と」

「!!」

「珍しく動揺しているようだが……………くれぐれも事故の無いようにしてくれ」

「っ……………あばよ」

最後の最後で隠し玉か……………

勝ち誇った顔で俺を見送ればあの男もさっさと車に乗ってしまふ
運転手の人は俺にお辞儀をしてくれた

何処かでは少しおかしいけど 別の所で見た気もするが今は良
いか……………

(幹雄さんが俺に期待か……………)

まさかあの人が俺に伝言とは聞いた時は本当に驚いたけど
今は頭をクールダウンさせよう 今からあいつ等とお祝いだ
ただでさえ仏頂面で加え辛気臭い顔なんて見せられるか……………
それに俺自身 明日はケジメをつける日なんだ 今からこうでは
後が思いやられるぞ

「気合の入れ直しだ あの人に宣戦布告したんだ 気張れ俺！」

上げる声は虚勢か答えは帰って来ない……………。

カランカラン

「うーっす」

バイクを倉庫に戻し みんなが待つ席まで向かう
当然だろうけど楽しそうに話すあいつ等には俺の声は聞こえてな
いようだ

まあ……………笑顔で話してるならそれで良いけどな

「バイクがなんだってー 二乃さん？」

『!!』

本当に俺が戻ってきた事に気づいてなかった
声をかければ、花火大会の再来だ全員が肩をびくつかせる
なーんか既視感あるな

「もう 驚かささないでよー！」

「悪い悪い まじで話に夢中だったとはな……………」

「コータローお疲れ様」

「俺は何もしてねーよ 風太郎に感謝しろよ」

「……………あんたもありがとね」

「気にすんな 俺がやりたくて行っただけだ でもノーヘルはマジでやめろよ」

「……………」

「なんだー？ 反論は無しか」

普段ならここで『うるさい・勝手にしょ』と罵詈雑言ギリギリの苦情が来るかとも

構えていたが黙って顔を下にするだけだ 風太郎と何かあったのか？

「じゃ 俺は厨房に行くから……………何だ五月？」

「幸太郎君 少しお話があります 行きましょう」

「おっ おい五月！」

「五月……………」

(やっぱり 五月ちゃんはコータロー君の事お見通しなんだね……………)

厨房に向かう前に五月に手を引かれ

以前にも似たような場所まで連れて行かれた 中野姉妹は人を連れ去るのが好きなのか？

「強引に連れだすような真似をしてすみませんでした 父から伝言が来ています」

「最近は何言が流行りなのか？」

「……………えっと スマホの方ですが使用できるようにしておいたと」

わざわざそれを娘に伝言で伝えさせる辺りあの人らしいな

「つうか 契約したのは俺だぞ 使えるのが当たり前だろうが……………」

「そうですね 少し力技が過ぎますね」

「これでお前らとの連絡も取れる訳だ……………うわあ」

持っていたスマホを開き

履歴を見れば12月から今日までずらーつと中野五月の名前で埋まっている

三玖の方はメールも来てるし 知らん顔してるがこいつ俺のスマホ使えないの知ってたくせに……はあ……頭いてえ

起動できるのを確認すれば胸ポケットにそれを戻す

「要件は終わりだな」

「いえ まだです 幸太郎君 父と何を話していましたか？」

「プライベートだ」

「私たちには言えない内容なんですね？」

「別に大した話はしてねえーよ」

「宣戦布告してきましたーとか言えるか」

『やはり私では』と塞ぎ込む五月 本当にかいつは直ぐに落ち込むな
どれだけ気になってんだか、俺の事で悩んでくれるのは有難いけど
それで落ち込まれたらこっちまで

悲しくなっちゃう

「前も言つたら 信用してないと俺の過去は話さないって」

「ですが……うう……わかりました」

「わかればよろしい ほれ戻って姉妹と楽しく話してこいよ」

俺も早く厨房に行かねーと店長に何言われるか

耳元で嫌味は言われたくないさ

「幸太郎君……明日は学校に来るんですよね」

姉妹の元に戻るかと思えば、まだ何か言いたい事があった

口を開けば『明日は学校に来るのか』と当たり前前の事を聞いて来やがる

「行くに決まってるだろう……学校なんだ」

「そうですね 変な事を聞いてすみません では幸太郎君 期末試験

改めてお疲れ様です」

「おー 五月もお疲れ様 頑張ったな」

ぺこりと頭を下げればやっと姉妹達がいる席に戻って行く

彼女がいなくなると分かれば深いため息だ

「あいつは本当にこえーな 何でも知ってるな……」

明日3月10日は3年生の卒業式

同時に俺がケジメをつける日でもある

今後あいつらと接して行く中で遺恨やしこりは無くしたい

その為にも明日は何があっても学校に行く

「はあ……………ん？」

『対象外なら無理にでも意識させてやるわ……………あんたみたいな男でも好きになる女子が地球上に一人くらいいるって言ったわよね　それが私よ　残念だったわね』

『な　な　な』

『今は返事はいらぬわ……………そう言う事だから覚えておきなさい！』

『おつ　おい二乃！』

(まじか……………)

戻り際突然聞こえたその会話はとてもじゃないが　驚いた　その言葉で片付けて良いものではない

二乃が遂に風太郎に告白したんだ　予兆はあった

あの姉妹の喧嘩が収まった頃だ　そしてこの三ヶ月の間少しずつだが

二乃は風太郎の傍で行動していた　祝福すべき事だろう　二乃が選んだ相手だ

その相手も弟の風太郎……………喜ぶべきだ

『時間は止まらないさ　幸太郎　人が思っても周りは勝手に動き出す

だから前に進むべきなんだよ　上杉幸太郎』

あの女が言った言葉を思い出した

時間や今は自分だけでは動かせない周りがある事で勝手に進行していく

今のままとはいかない様世界は出来ている　哲学的だでもそれが当たり前だ

24時間365日 永遠なんて続かないのかもしれない……………。
(二乃は席に戻ったか?)

タツタタと急ぎ足で駆けていく音が聞こえた
隠れるのをやめ 厨房に戻ろうと足を動かす

「ん?……………一花」

「あつあーこ コータロー君だ どうしたの?」

明らかに動揺してやがるなこいつ

厨房の近くにあるトイレの中から一花が出てくれば俺と目が合う

顔は真っ赤で汗も掻いている 目もあちらこちらと定まっていな
い

「あの あのコータロー君は今」

「さて 戻るか 何だ一花早く戻れよ」

「えっ 聞こえて無かったの」

「何の話だ? 俺は今さっきお前のところの末っ子から解放されたばかりだが…」

「そうなんだ 五月ちゃんも心配症だからね じ じゃーお姉さんはこれで」

俺は嘘をついた

聞かなかった 聞こえなかつた その場を嘘でやり過ごす

変わる事を認められないのはきつと俺だろうな

二乃は前に踏み出した……………けど俺は同じ場所で永遠に足踏み
何時になれば前に進めるんだろうか

そのために明日は学校に行かないと俺が俺に出来る事はそんな事
しか思いもつかない

「ふうー 風太郎 お疲れ様 悪かつたな 洗い物全部させて」

「お おう 幸太郎もお疲れ ああの何だ 俺はそろそろ帰るから」

「はあ? みんなまだいるんだぞ」

「悪い 今は色々と頭がいつぱいで本当にすまん」

「了解 あいつらには適当に言っておく きーつけて帰れよ」

「家でまた会おう」

弟は兄に相談しない道を選んだ

告白なんて生まれて初めて何だろう 動揺する気持ちは分らない
もない

今は悩めそして悔いのない選択をしてお前も前に進め

(……………四葉 お前はもうするんだ?)

洗い終わった食器を片付ける中

一人の少女の名前を俺は口にした 中野四葉 五つ子の四番目

(俺は二乃とお前を応援する……………どっちかを優先に何てしない)

第六十七話 不良少年と過去の清算

『この嘘つきー!』

『お前なんて偽物だ!?!』

『何が被害者だ 先輩方に怪我を負わせたのはお前だろ その事故も自業自得だ』

『もう二度と 学校に来るな 上杉幸太郎!』

嫌な夢だ 周りの人間が俺を非難し 誰も俺の声に耳を傾けない

一声言えば二重三重の声になって俺を叩きつける

一体全体俺がお前らに何をしたんだ? 俺はお前らに危害を加えた事は一度だつてないだろう

俺がどれだけ自分の時間を使い一年の間 学校やお前ら生徒に善意の行動をして来たと思ってるんだ

その仕打ちがこれか………全員で俺を罵倒して ありもしないでつち上げを信用して

俺の居場所を奪っていくのか、

誰も俺を助けないのか………

『ならいつそ ここで死んだ方がまだ 誰も僕を必要としてないんだ それに生きる意味もなくなった』

『だ ダメです 命を粗末にしては! あ ああー!』

『危ない!』

大きな池の前 危険注意と書かれた看板を無視して

体を乗り上げ直ぐにでも身を投げ出そうと思った時に 彼女の声が俺を救った

飛び降りる俺を制止し 『粗末にしていきけません』と呼びかける彼女

ただ12月の始め雪もちらつき 走れば転び始めるこの季節

彼女は俺に声をかける事ばかりで自分の足元の確認も疎かに一步を踏み出した

するつと雪に足を取られ 彼女は階段から落下し始める
だめだ ダメだ 駄目だ 助けないと助けない この人は絶対
に……………

治ったばかり 未だ入院が必要と言ひ渡された体でその場をかけ
俺は彼女を受け止める

『うぐう……………』

左手が悲鳴を上げる 落下する人間の体重は実に倍だ

治りかけの手や体にはそれを相当なものだ 痛みで歪む顔に力を
入れ

戸惑う彼女に声をかける

『大丈夫ですか？ 怪我はありませんか』

『はっはい それより だめですよ 命を粗末しては！ 死んでし
まったらどうするんですか』

『いきなり 大声はやめてください 耳元なんで』

『あつ すみません』

『それと ありがとうございます あなたのお陰で命を拾いました』

それが出会いだ

黒い帽子を目深にかぶり 分け目で素顔を一部隠し 首にヘッド
ホンをかけている

その女性 俺の命を救ってくれた その人中野六花さんの初め
での出会いだ

「コータローー コータローー！」

「ん……………三玖か」

「どうしたの急にぼーっとして」

「何でもない………… それより期末試験も終わったんだ 勉強なんて教
わる必要はないだろ」

現在は図書室で三玖と二人勉強会と言うなのワンツーマン

風太郎は昨日からずっと上の空で一花は会えば何処かに逃げていく

四葉は変わらず今日も元気に走り回っていた

五月も昨日の今日で何か変わる訳もなく、普段通り俺が考え事してれば声をかけてきた

二乃は朝方見かけた時はすごく機嫌が良さそうで近寄りがたい雰囲気でした

時間まで暇だった俺に三玖が声をかけて来た

『まだコータローには教わる事ばかりだから』と真面目と言うか律儀と言うか……………」

「今日は三年生の卒業式だ、授業も短縮される、良いのか俺といて」

「うん、今日はコータローの傍に、い、いようかと思って」

「お前も大概に心配症だな……………」

「コータローは今日は平気？」

「平気だよ、それに今日でこの関係とは終止符をうつんだ……………」

(関係に終止符を……………コータローはそう考えているんだ)

本当は俺も三年生で、今から体育館に向かう彼等のように晴れて卒業生となり

親や先生に祝福され、『最高の三年間でした』とありきたりな言葉を言い、先生方も涙する

そんな当たり前な学生生活をしてたんだろうな

「三玖、何も気に病むな」

「でも、コータローは」

「もう、その話は終わったろ？、俺はあんな三年間過ごすより、お前らと過ごす今の方が」

何よりも大切だ」

これは本音だ、隠し事ばかりする俺でも言うべきタイミングは心得ている

あんな奴らと卒業なんてこつちから願ひ下げだ

それなら進級出来ない今の方が何千倍も輝かしい三年、いや、四

年間だ

「ありがとね」

「どういたしまして」

「あっ それとコータロー これ返すね ごめんなさい あの時から
ずつと持っていました」

「……………」

会話の中でふと三玖はポケットの中から一冊の手帳を取り出した
それは俺の手帳 無くしてたとばかり思い探すのをやめた 2年
の初めにもらった生徒手帳だ

何時かは聞こうと思いついて結局はそのまま放置した案件だ

まさか三玖の方から返しに来るとはな 期末試験で彼女なりに心
境の変化があったのか？

「何時拾った」

「助けを呼んですぐ コータローの所に行つた時に落ちてた」

「あの時は殴られてボロボロだったしな 薬局でない事にやっと気づ
いたくらいだし」

「ごめん 本当はずつと言いたかった 返したかった」

「いいよ ちゃんと戻ってきたしな……………それにただの手帳だ 特に
は……………」

三玖が拾ったタイミングは俺が殴られ

助けが来た時だ 最初の一発を受けた辺りで胸ポケットから落ち
たんだろう

必死過ぎて落ちた事も気づかない程頭に血が昇っていた やっぱ
り不良少年だなと苦笑している

ページを幾つかめくる中である写真がスルツと落ちて来た

「これ 挟まっていたのか……………」

「うん コータローと私たち それにお母さんで撮った一枚懐かしい
ね」

「忘れてた 無くしたと思ってたんだこの写真 生徒手帳に入れてた
のか」

落ちたその一枚はある時に撮ったものだ

水木姐が零奈さんを含め七人で撮るべきだーと言いだし 流石にあの人も困惑していた

最終的には姉妹達の言葉で折れ 彼女の撮影で七人で撮り 大切な思い出として

現像した一枚 そしてこれが七人で撮った最後の写真でもある……………。

「みんな 変わったよな……………特に一花や四葉 長さが全然だ」

「コータローもまだ目つき悪く無いね」

「今はこんなだけだな ふふふ でも変わらないものあるよな 確かにあの頃とは違うけど

今も七人だ……………」

「うん 一花 二乃 私 四葉 五月 フータロー そしてコータローの七人」

「男が二人になったな でも俺はこの七人にいる 今が楽しいんだ ずっと続いて欲しいとも思う」

「私も今が楽しいよ コータローやフータローに勉強してもらって 一花達と遊んで

二乃と喧嘩したり……………それでも何時までもこのままは難しいよ」「そうだろうな」

「でも今だけはこの時間が続いて欲しいと思う」「ん?」

(今は私とコータローの二人だけ この時間だけはゆっくり進んで欲しい)

何を思い 三玖はこの時間と言ったのだろうか

俺には先ほど このままは難しい そう答えた筈なのに……………

女心と秋の空は 空模様のようにころころ変わるとは言うがそう言うもんなのかな

卒業式が執り行われるまでの間 俺は三玖と二人図書室でその時間を噛み締めるように

過ごす事になった

その後は2年生も一度体育館に集まり教師の話聞き終われば教室へと戻される。三年生の数名がこつちに気づけば式もそつちのけでこそそと話だしていた

卒業式までそんな暇があるとは余裕もあるな。あいつらもぼやくも別段気にはしない

教室まで戻ればあとは適当に時間を潰した

五月は何度か俺に声をかけて来た。悪いが今の俺にはそんな余裕はないようだ

治つたと思つたストレス障害。やはりと言うか三年を見れば嫌でも胸が痛くなる

倒れる程とは行かないが息も苦しくなってくる

落ち着け。俺よ。今日はこの胸の苦しみともお別れだ。その為此こまで来たんだ

大丈夫だ。あいつらが何を言おうと関係ない。俺は俺だ

上杉幸太郎はここにいて………。

(幸太郎君………)

そして3年生は卒業式も終われば。校舎を出て行く

体育館の前では多くの生徒が涙し。親御さん方も子供の記念すべきこの日とお化粧とお高い服だ

生きてる中で卒業式は3回くらいだ。その中でも高校生となれば一番の思い出となるだろ

「さて。俺も行くか………。」

「コータロー。辛そうだよ?」

「コータロー君。私たちもついて行くこうか」

「いや。大丈夫だ。はじめだ。俺一人で十分だよ。お前らはここで待ってろ。挨拶したい先輩がいるなら話は別だけどさ」

「転校してきて。知り合った人はいないかな。勉強と今で精一杯だからさ」

「そうかい じゃ」

「幸太郎君 ご武運を」

これから戦争にでも行くのかと 面も引き締まる

健闘を祈るように見送るお三方 風太郎は二乃の件でこの場には
いない

二乃は未だ教室だ四葉は知らん 何故かない

アイツの事だし 部活動で世話になった先輩達の挨拶周りだろう
な

「足が竦むってこんな感じか……………」

向かう足が自然と止まる まるで石だ

個人の力ではどうにもならなそうな重みを足のつま先から頭の
てっぺんまで感じている

腰抜けめ 今更怖気づくな 前を見る 歩くだけで良い 話は口
でする

足癖の悪さを今出すな

俺の表情が余程怖いのか先生方を含め 親御さんまで道を空ける
始末だ

久々のモーセだ これなら迷うことなくあいつらと会えるさあ行
くぞ

「よー お前ら 卒業おめでとう」

『上杉・上杉君』

旧2年1組 現3年1組

かつての友人達が俺を見るなり 表情を曇らせる
ひそひそと話すかと思えば視線も合わせない 余程嫌われてるな
…。

あの時の全員が一組に属してる訳でもないが、あいつがいるクラス
はここだ顔を出すべきだ

「まあ お前らの相手は今はいいさ 須藤 元気か」

「上杉…………おっ おまえ 何でいやがる」

「可笑しな事聞くな？ 親友の卒業式だぞ 祝うくらいさせてくれよ」

「な 何が親友だ お前は お前なんか！」

ざわざわと周りが騒ぎ出す 教職員も様子を伺い始める

おーこえこえ 別に喧嘩をしに来た訳でもないのさ……。

目の前の坊主頭の男子生徒は俺が来た事が余程嫌なのか
睨みつけ胸倉まで掴んでくる

「お お兄ちゃん！ 先輩もやめてください せつかくの卒業式なのに」

「悪い 真弓ちゃん 今はこいつと話さねえーといけないんだ」

「真弓 下がってろ」

「妹にそんな強気の口調はやめろ 怖がるだろう？」

須藤和之の妹 真弓ちゃんが存在を忘れていた

彼が卒業するんだ 祝いに来るのは当たり前だろうな

俺と須藤が睨み合をすれば引き離そうと試みるが須藤自信ががそれを制止した

同時に後方から彼の親からの援護『二人はちゃんと向き合うべきだ』

(おじさん おばさん ありがとうございます)

「和之 卒業おめでとう」

「!!」

「悪かったな ずっと避けてた お前はいい奴だ本当に今も昔もな

今の2年は噂で俺を避ける でも何で今の3年が俺を避けるのかずっと考えていた」

俺の世代の3年は今の2年と違い ある意味で事件の当事者と
言っても差し支えない

当時の「あれ」は俺が病院を抜け出した頃から始まり 周りはそれを当たり前のように行っていた

ただある時を境にそれがぴたりと止まった

俺が再び2年をやることが決まった4月の終わり頃だ

こいつらは俺を見るなり逃げていく 『噂もここまで来ると暗示だな』と頭を抱えていたが

どうも何時もと様子が違って見えた

俺を避ける彼等の目は あの時の『怒りに満ちた』それとは違う

『すみません』と謝っているように感じたんだ ただ怖いからなのかそれはおかしい 怖がるなら俺の方だろ あんな目に遭ったんだ避けるのはこつちだ

暫くはそれも慣れ 五月達が転校して来て風太郎とも学校でも会話も増える

そんなある日だ 『あの噂 嘘だって3年の生徒が騒いでた』帰りにそれを耳にした

噂なんて沢山ある 俺とは違うだろうとその時は気にも留めずていなかった

「考えたんだ ひよるこいつらと 騒いでる3年の生徒の事……………」

和之

お前さ 庇ってくれてたんだろ？ずっとさ みんなに言ったんだろ 俺は何もしてないって」

須藤和之は馬鹿だ けどそのぶん心は真っ直ぐで いじめはしない
い

そんな事をこいつは見過ごさない

『言えよ 幸太郎 お前は何もしてないって！』

『……………ごめん和之』

『謝ってんじゃねーよ この野郎』

俺が最後にアイツの前で名前を呼んだのが去年の1月が最後だ

それ以降から俺は今の3年との付き合いを完全に絶った
その俺が今 あいつを下の名前で呼んだ

どれだけこそばゆいか言ってる俺が一番身に染みている
目の前の男子生徒はポロポロと涙を流し出す

「男が泣くなよ」

「幸太郎 ごめん 俺何も出来なかった お前がいじめられてる時に
何も」

「お前は良くやったさ 俺の身の潔白をみんなに証明しよう」と毎日毎
日さ

ありがとう お前は最高の親友だよ もう一度 言わせてくれ
卒業おめでとう」

この時をどれだけ待ったか

胸の痛みは最高潮だ 今にも倒れてしまいそうだけど こいつと
話さず

こいつを卒業させたならきつと俺は永遠にトラウマに悩ませされ
本当の意味での卒業も出来ないまま人生を過ごす事になっていた
泣き崩れる親友の肩に手を乗せ『馬鹿やろう』と一声

真弓ちゃんまで号泣してやがる

「だ……………だって お兄ちゃんつど ぜ ぜんばいが やつと」

「可愛い顔が台無しだ 涙もろい所はそっくりだよ」

おめでとう親友 お前は夢の為にこのまま突き進め

もう俺に負い目を感じて 俺の前で悪ぶる必要もない

和之が異様に俺を警戒するのは俺の前では強くあろうとし

あの日守れなかった親友を遠ざける為だった 普段は喧嘩も出来
ないこいつが

そんな器用な真似をしてんだ 言葉もおかしくなるだろうさ

加え 本当の意味で俺に怒っていたのもある

誰に弁解せず 説得を諦めた俺にこいつなりに激怒していたんだ

俺はあの件には無頓着を決め込んだ 和之は俺の分まで怒ってて
れていた

随分と負担をかけさせちまったな

「じゃ俺は行くわ」

「こ　幸太郎っ！」

「俺は不良少年だからよ　これ以上は入れない……………何のつもり
だお前ら」

和之を立たせ　五月達が待つ体育館前に戻ろうとしたが

何人もの卒業生に阻まれる　全員何か言いたげとばかりにその場
で黙る

『あぁ？』と睨めば　一斉に頷く

『ごめんなさい』

「えっ……………何だ」

全員が深々と頭を下げる

流石にこれは想定外だ　俺も困っている

何人かの生徒が俺の方までくれば事情を話す

「上杉君が何もしてないって　須藤君から聞いた　それにあの写真や
動画もでっち上げだって」

「っ……………今更かよ」

胸が痛い　心臓がドクン　ドクンと鼓動する

どンドン速度上げていく　これだこいつらと話す　顔を見るだけ

で俺は息ができない

瞼も自然と閉じようとする　現実と過去を直視しようとしな
い

怖くして仕方ないんだ　また　いじめられる　足が震える　嫌な
汗も出る

今すぐに　逃げ出して何もかも無かった事にして　今すぐ　あい
つらの顔が見たい

でもダメだ　ここは引けない……………。

「っ……………う……………」

吐きそうだ　今すぐトイレにかけ込んで食ったもんを吐きだしたい
ただあいにくとうちで朝食が出る事は稀だ　吐くもんなんてねえ
それにこんな情けない姿　彼女達には見せられない
今は前を見る　こいつらの顔を見る　逃げるな……。

「あんな情報に踊らされて　君の話も聞かずにみんなであんな　酷い
事とをしておめんなさい」

「真面目だった　君がそんな事しないと云っていた生徒もいたんだ
よ」

「だから　なんだよ？」

「……………」

「今更だな……………本当に調子が良くねえか？」

「ひっ！」

「ご　ごめん　でもあの時は　みんな」

「みんながやれば　それが正当化されるのか？　お前らあいつ等より
質が悪いな」

入院の最中は和之以外は誰も来ない

電話をしようもみんな俺を無視して番号すら変える　ネットを見
れば捏造された

暴力事件の記事　学校に行けば謂れない暴言ばかり

孤立無援だった……………。

結局今日まで　和之以外の誰も俺とは話そうとはしなかった

そのこいつらが卒業式で友人と仲直り　なら俺達も仲直りできる
よね

そんなアットホームなゆるふわな答えを期待していたのか？

何処まで俺を小馬鹿にすれば気がするんだろうな……………低い
声で話すれば

全員が目を伏せる　それだよ全員が全員何で　自分の意見を言
おうとしない

「幸太郎……許してくれとは思ってないでも話だけは聞いて欲しい
頼む」

「和之 頭上げろよ お前は悪く無いだろ 俺が話してるのはお前以外
の三年だ」

他の生徒を代弁して自ら頭を下げる唯一の友人は真剣だ
どれだけお人好しなんだ こいつは………

何も変わってないな 和之は何時もお前は誰かの為に身を犠牲に
出来る真面目で不器用な奴

俺が本当の意味で本音を言えていた相手だ その友人が頭を下げ
ている

それにだ 俺は今日 顔を出したのは和之と和解する為だけじゃ
ない

こいつらと話し 過去の俺とおさらばする事だ……。

ぼちぽりと頭を掻き 面倒くさいと言わんばかりの表情で卒業生
の方を向き直す

ダルそうなの声を彼等に向けた

「今更だ だから もー 終わった事だ 勝手にしろよ」

『……………』

「俺は俺で新しい 奴らと三年を向かえんだ だからお前らもさ 何
時までもあの事を考えるな

誰も悪くねえさ きつとな」

何処まで俺は馬鹿なんだろうな

あれだけのいじめを受けた あいつらをその言葉だけで許す

もう気にするなと声をかける 前を向けと諭す 過去に縛られる
のは俺だけじゃないんだ

卒業を迎えた こいつ等もまた あの日から止まったままだ

そんな事………知つちまえば目覚めも悪い

俺は別にこいつらを責めに来たんじゃない 友人の晴れの舞台を

見送りに来た

そう考えれば自然と胸の痛みも消えている

信じられないといった顔で俺を見る卒業生達は『ありがとう』と何でお礼を言ってるんだ

「はあ……………まあ卒業 おめでどう 先輩方」

「おい 幸太郎 あいつとはムギとは会えたのか あいつもきつと卒業を迎える筈だ」

「さーな 事故以来あいつとは連絡を取ってねえーよ

あの人外だ きつと何処かの大学でも行くんだろうさ」

「ムギは戻って来てるぞ…。」

「……………そうか あいつ戻ってきたのか」

「上杉君 私たちが言えた義理じゃないけど むぎちゃんと話すべきだよ」

「そうだよ 二人はみんなが認めたベストパートナーなんだからさ」

何人かの卒業生が駆け寄り あいつと会い 話し合えと

さつきまで辛気臭い顔で俯いてたわりに 余裕があるなこいつら
脳内お花畑かよ

「本当にその通りだ 言われる義理はねーよな 勝手に言ってる

俺はあいつとはもう会わない……………」

和之があいつの名前を出すと数人の生徒が俺に押し寄せる
軽くすし詰め状態だな…。 これ以上世間話もする気もない

それにあいつとのことで誰かにとやかく言われる筋合いはもうと
うない…。

適当に引き離し 落ち着けと彼らに言い聞かせる

はあ だるい…。

(それにな どんな面してあいつと会えって言っただよ)

やや予想外の人物の名前で余計にごたごたしたが、やるべき事は終

わった

やつとだ あの忌々しい日々から俺は解放された

ずっと心の奥で引つかかっていたそれが解け始めている

前を向ける あの男に宣戦布告をした以上はこの因縁とは決着を着けるべきなんだ

ずるずる引きずったまま…。

新しい日々を過ごす何てきつと今の俺には耐えられない

これで良い 誰も彼もが報われず 誰もが後悔ばかりした一年間は遂に終わる

人一人の意見なんて誰も耳に貸さず 自分の無力さを知る

人は多数となることで自分の意見が正当なものだと認識しだす

例え 目の前の人物が何もしてないと答えても

『でも友達が言っていた 動画でみた みんながそう言ってるから』と

言葉の羅列は何時もそれだ…。意見や主張は意味をなさず

『なら正しいと思う方に手を上げよう』

多数決と言うなの存在は一人を標的とした攻撃へと変わっていく

『お前が悪いんだ ほら皆だってそう言っている』

目の前の光景は信じられるものではない、標的となった人物に言葉を話す権利も立場もない

あのたった数週間で俺は友人も信頼も何もかも無くした

だから決めた

『誰もが信じないなら俺は意見はしない』いい感じにひねくれ

それが何時しか学校で一番の不良少年と呼ばれる事になり俺は否定もしない肯定もしないただ身を任せる道を選んだ…。

きつと正解だ 流されるままの方が楽なんだ…。

でも俺の考えは、少しずつ変わり出し周りの環境も変化し始めている ならば何時までも後ろ向きな姿勢はやめて 暗い過去の俺は必要ないんじゃないかな？

大切な家族や友人と過ごすにはそれを受け入れ乗り越えられる強さが必要なんだと思う だから俺はここに来た ここに来れた…。

(あばよ お前ら…。これが俺の答えさ。)

去り際に手を振った もー俺とは関係ない奴らだ 何を言おうが
勝手にどうぞ

この先さ生きていくんだ もう変な噂で人を疑う事だけはするな
一瞬まだ楽しかったあの日の学園生活を思い出すでも、それは過去
俺が向かえるべき今は、卒業するこいつらとのあの日ではなく今を
過ごすあいつら6人との明日だ

「はぁ……………」

「お疲れ様ー」

「何だ二乃も来たのか」

「幸太郎君 お疲れ様です」

「コータロー 頑張ったね」

「良い顔してるね コータロー君 うん迷いは消えたね」

「はぁ……………まあそんなところだ いい加減あいつ等も反省してるし
とやかく言うのは大人げない…。」

「それでも彼等はそれだけの事を あなたにしたんです…。反省すべ
きです」

「コータロー 手が震えてるよ」

戻ってくれば五月達だけではない

朝方から姿を見せない二乃もその場に合流している 『お疲れ様』
と労いの言葉

こいつもまだ気持ちの整理がつかないのにお人好しな奴だよ

彼女達を見て安心仕切ったのか今更 左手の震えに気づく

三玖に言われるまで全く意識してなかった

「正直言えば 今でも人が怖いさ…………でも前に進むためには 受け止
めないといけない」

手の震えは続くが不思議と胸の痛みは消えていた

鼓動も静まり正常に動く

体を感じていた重みが消え かかった靄も晴れだしている

「まあ……………終わった事だ 何時までも考えるのは……………ん？」

「せんぱーい 兄と写真撮りましょう」

「和之と？嫌だよ 面倒だし」

「仲直り出来たんです お二人で卒業出来ませんでした 記念に撮りましょう」

「あの 中野さん達か？」

「お久しぶりです 須藤先輩」

「あの時は悪かったな くすぶってる 幸太郎を見てるとどうも感情が」

「いえ 良いんです もう彼は前を歩んでいます」

先輩もどうか彼が願った夢を諦めないようにしてください」

「ありがとう それとあんた達 これからも幸太郎を頼む きつと無茶ばかりするし

あの見た目だ勘違いされるだろうし 卒業する俺には今後はどうにもできない」

「コータローは任せて 私たちは絶対に無茶をさせない」

「おい 和之 こっち来てくれ 真弓ちゃんがうるさくて」

「うるさくありません さー二人で撮りますよカメラはありますから！」

「わかった 今行くぞ じゃ あんた達も残りの一年頑張ってくれ」

「はい 先輩も今後の活躍応援しています」

真弓ちゃんもしつこいな

わざわざ和之と写真なんて撮る必要もないだろうに…

「五月ちゃん あの人の良い人だったね」

「はい 最初は怖い方だと思っていました、ずっと裏で幸太郎君の為に頑張ってくれていました」

彼には感謝しないと行けません……………」

「五月 まだ納得がいかない顔してるね」

「……………」当然です 彼の受けた仕打ちは看過出来るものでありません 自分が齒がゆいです」

「ならば」一言文句言いに行こうか？ コータロー君には来るなって言われたけどそれはあくまでも 彼があゝの卒業生と話している時だけだしさ」

「……………」二乃 ここはお願い出来ますか？」

「別にいいわよ 私は関係ないし……………」でも一応は兄代わり 私や四葉の分もよろしく」

「行きましょう 一花 三玖」

上杉幸太郎が須藤和之との和解と卒業生との因縁も無事に解決

万々歳と喜ぶべきか 実のところ五月も三玖も それにある程度の事情を知らされた

一花も満足できていない 自分で決着をつけると彼は言い 実現させた

これ以上は彼の行為に水を差す

それでも一言物申す必要がある あゝの優しい少年をここまで陥れた原因になったあゝの卒業生達に

二乃に幸太郎の事を任せれば五月を先頭に三人は彼が戻ってきた方向へと歩いて行く

「あの……………」上杉幸太郎君のご友人だった方達ですよ？」

「君達は？」

「彼の友人です……………」上杉 いえ 幸太郎君はあなたたちを許しました

ですが私たちはあなた方を絶対に許しません」

「先輩達さ コータロー君に何をやったかもう一度思い出してご覧よ」

「どれだけコータローが苦しんで　今まで学校に来ていたのか　先輩達は考えた事ある？」

『……………』

「あなた方は一人の男子生徒から人を信頼する気持ち　そして本当の笑顔を奪ったんです」

本当は『もう一度彼と話して謝罪してください』五月はこう言いたい

「ただど踏ん張った彼の為に五月も三玖も耐え忍ぶ彼が許すと言ったんだ従おう」

でも今だけは本音をぶつけ　彼等にも悩む時間を与える

「それでもしないと　あの少年は報われない　余りにも不憫すぎる

「それでー先輩達に頼みがあるんです

もう二度とコータロー君の前に顔を出さないで貰えますか？」

『ひっ！』

一花の見せるその笑みは背筋が凍るものだ

全員『はい』とその場でお辞儀　せつかくの卒業式なのに笑顔すら

浮かべない

浮かべられない

自分達の為に身を削って頑張り続ける彼に今できる恩返しの一つは彼とこの生徒達を遠ざける事

「どれだけ彼が自分に言い聞かせても患った精神障害は付きまとう

須藤とは和解できても本当の意味で元の友人達と和解するのは出

来そうにないだろう

卒業生はたった一人の男子生徒を自殺寸前まで追い詰めた

その事実を決して変わらない　それを永遠に謝れずにそしてずっとモヤモヤしたまま生きていけ

一花の出した答えはとてもえげつない

「言いたい事は言えたかな　五月ちゃんはどうか？」

「未だに許せません……けど　今はこれが最善なのでしょう」

「うん　これ以上は私たちでは出来ないから」

「おーい　一花ー　五月ー　三玖ー」

「おつ 戻ったねー 四葉 どうだった？」

「いやはや 色々な部活に顔を出してたから今まで時間かかったよ」

「四葉らしいですね」

「三人はここで何してたの？」

「うーん お話かな？」

(齋しとは言えない)

この学校に来て一番に三年生と交流を深めた四葉は参加した全部活の先輩に挨拶周りに出ており

やっと終わったと満足げだ

さつきまでシリアス全開で卒業生に物申ししていたとは言えるわけもなく一花はお話と

間違いではないがその言葉で四葉を納得させる

『うーん まあいいか さあー戻ろうー』深くは考えず四葉はそのまま走りだした

それを追いかけるように彼女達も歩み出した

「はーいそれじゃ 二人共撮るよ」

「真弓は取らなくていいの？ 兄貴なんですよ」

「良いんです 今は二人が仲直りしただけで嬉しく」

「仲良かか……………」

「二乃さん？ ああー先輩逃げないで お兄ちゃん動かないように掴んで」

「うぐぐぐ離せ 和之！」

「嫌だ お前もいい加減諦めろ」

「うるせーよ まったくお節介な兄妹だ」

「あんたがそれを言うの 笑えないわね」

手厳しい二乃の一言

それに見守る 和之の両親も涙ぐんでいる 二人もずっと気にかけてくれていたんだ

俺もいい加減気持ちを切り替えるか……………

「それじゃ 撮りますよ」

カシャ

「はあ 面倒事が終わったな」

「がっははは 良いな幸太郎 お前とこうして話すのも」

「和之も昔の口調に戻ってきたな」

「嬉しいからな 友人と話せたんだぞ」

「へいへい………ん なんだ 第三ボタン？」

「前 聞いたんだ 第三ボタンは友人に送るって 幸太郎にやる」

「やめろ 恥ずかしい たくよう」

自分の身に着ける 学ランの第三ボタンを無造作に取れば

それを俺につきだす ガサツ過ぎるだろう お前の学ランを直す

真弓ちゃんの身にもなれ

やめろと言うが 俺はそれを受け取った 友人に送る その言葉

はとても心地いいもんだ

「お兄ちゃんは 第二ボタンは誰かにあげないの？」

「うぐ」

「やめてあげろ 和之が泣きそうだろう」

「誰が泣くかよ……俺だって好きな女子はい いるぞ」

「お兄ちゃん本当ー 誰誰ー何で相談してくれないの！」

「それは初耳だな 和之が恋が良いじゃんか頑張れよ」

「そ そうだよな 幸太郎 こう言う時どうすれば良いんだ！ お前

恋とか詳しいだろ」

「相手もないのに詳しいも無いが 好きなら好きでそれを伝えろ

恋なんて自分が思ってもいない時にするもんだ」

「相手もないって お前！」

「うるせー 意見はちゃんと聞き入れるよな？」

いやー聞いていて耳が痛いな

和之にそう言った話題が出るとは18年間共にいて初めてだった

野球一筋 運動馬鹿 そんなイメージが俺の中では定着している

この一年間俺が知らないだけで 和之にも変化が出ていたことは

嬉しい発見だな

「ねえ… あんたに話があるんだけど良いかしら？」

「何だよ二乃？」

「あいつは…上杉は学校に来てる？」

「来てる筈だ 普段と変わりねえーと思う あいつに話でもあったか」

「べ 別にないわよ」

写真を撮り終えれば和之や真弓ちゃんからも解放され

後はゆつくりと…休憩は出来ない

昨日の事を聞いてしまった俺には目の前の少女の話を無視する事は出来ない

風太郎はどうしているのか そう尋ねられる

正直言えば朝からテンパって勉強にも身が入らないといった感じで上の空

彼からしたら現実離れた出来事過ぎて 処理が落ち着かないと言った様子だ

それをまんま伝える程俺も馬鹿ではない…。

「まあ…何かあれば力にはなってやる 嫌ならかまわん」

「少しは頼りにしてるわよ 本当に少しだけよ」

「へいへい」

(上杉に告白したって言えば こいつも話を聞いてくれるかしら?)

「最近はどうも人の恋路の話ばかりだな…恋ねえ」

同窓生達と話し 友人との仲を戻し

妹分は恋の悩みと今日はとことん忙しい一日だ

あいつ等も言ってたけど 坂下も何処かで卒業式を迎え

何処かの有名大学にでも進学して居る筈だ

どれだけやっても追いつかない雲の上のようなあいつは今俺をど

う思っているろうな

怒っているのか呆れているのか その答えを聞きたくてもそのすべを俺は持たない

ほつりと呟いた 恋と言うワード はずさりと俺に突き刺さる

「恋か…俺には出来るのか?…:…恋が」

(幸太郎君が恋…ええ?)

(コータローが…)

(えっ…コータロー君が…)

口に出たその言葉は周りの音でかき消されそうなほど小さな呟き
誰も聞いてはいない

意識する程でもない空気のようなそれを

戻ってきた三名がひっそりと聞いていたそんな事を俺は気づく事もなく

後に火種になる事すら予想出来る筈もなかった…。

第六十八話 不良少年と次男と三女

あれから数週間：

弟 上杉風太郎はここ最近様子がおかしい

理由は明白だ 俺が偶然聞いてしまった

あの二乃から彼への告白 愛の言葉だ

物凄く照れくさそうに彼に言い放つが返事はいらぬの一点張りで去って行つたあの日からだ

気まずいのだろう風太郎は二乃のみならず姉妹たちを避け

期末以降家庭教師には行っていない

毎日毎日ため息ばかりだ 勇也さんやらいはも最初はそれを心配し

『病院かな?』と何度かかけようとしていたが、最近では慣れたのかテストでいい点が取れなかつた事が原因なのではと言われている

「ねー 幸太郎お兄ちゃんは何処か行きたいところある?」

「そうだなー 温泉旅行 ああでもこの体じゃ無理かな」

「どうだろうな 貸し切りなら構わねーだろ?」

「あまり人にはお見せできないものですから」

「謙遜するな それはお前が人を救つた証だ 恥じる事も隠す事もねえ」

全くの反応を見せない風太郎に意見を求めてもダメだと判断し
らいはは迫る連休で家族で何処に出かけるべきか俺にも聞きたい
と意見を求める

勇也さんは『ハハッ!』と言いそんな夢の国へ行きたいと言つてい
る

恐れを知らぬ我父はやはり尊敬できるお方だ

かくいう俺はと言えば 家族水入らずとなれば

一度で良いから温泉旅行に行つてはみたいと思つていた

でも俺は温泉には入れない 胸の傷が気分を害させる恐れもある

勇也さん曰く 勲章であり 俺の生きている証だとか
哲学だ そしてそれは的を射ているな

「それで 風太郎…どうすんだ 答えは」

「こ 答え 俺は俺は ああー」

「だから 勇也さんもらいはも言ってるだろう？ 何処に出かけるか
だ」

「そ そうか」

「はあ…これは重症だな」

答えと言う言葉に過敏に反応し消しゴムに力を入れすぎたのか
ノートはびりつと破けてしまう

どうしたもんか 俺はあの場にはいないという事になっており
彼から相談されない限り下手には動かない様にと行動している

このままずると何も答えを出せない状況は、流石にまずい
答えを出せとは言わないが息抜きぐらいはさせるべきだ チラツ
と 妹に目配せ

コクリ

「コラっ！」

「わああ 何だよ」

「いつまでも 引きこもってないで買い物行ってきた」

「何故 俺が…幸太郎がいるだろう」

「俺は昼のシフトだ」

「そう言う事 働かざるも食うべからずだよ」

バタン

エコバックを渡されれば状況判断出来ないままに家の外へと放り
出れた

満足げな、らいはにへーいとハイタッチ

「さて 幸太郎 お前はアイツがああなった理由は知ってるな」

「すみません こればかりは自分から口外は出来ません あいつが
相談するまでは」

「そうかあいつがそうなら見守るだけだ 任せたぞ」
「了解です」

流石は勇也さんだ ちゃんと俺達を見ている
風太郎の悩みを俺が知っている事を既に看破だ

この話は弟のプライベートだ面白がって話す事ではない

あいつが相談するまでは俺の胸の内に秘めておく

まあ：問題があるとするれば：俺が卒業式を見届け家に帰宅

次の週には家庭教師の再開だと意気込みを決め込んでいたんだが
…。

卒業式の一件以降 どうもバイトが忙しく中々家に行く事も出来
ない

三玖は『今はコータローも心の整理が必要だから』とメールを寄越
し

学校での勉強だけで家庭教師は休業中 全員が家庭教師計画もあ
り

俺達が教えるよりも捗っている事もある

ただこのまま放置もそれはそれで責任感が無さすぎるし休み前
は一度は行くべきだろうと考えている

「じゃ 俺もバイト行ってきます」

「きーつけてなー」

「お兄ちゃんいつてらっしやーい」

よーし 今日も家族の為に頑張るか

上杉幸太郎いざ出陣

上杉幸太郎がバイトに向かうタイミング

中野姉妹のアルバイトでは三玖に頼みこむ二乃という変わったやり
取りが行われている

期末試験が終わってから正確には卒業式を見届けて以降

中野姉妹の関係は少し変わっていた

テストで一番の成績を残し 幸太郎に告白する予定だった三玖
三玖より高い点を取りさてどうするかと考える中で二乃が風太郎
に告白している現場を目撃した一花

三玖と一花と違い 弟の風太郎を選び自分の気持ちに正直に生き
ようと決め彼に告白した二乃

卒業式以降からずっと気持ち落ち込む五月

他の四名が何でこうなってるのか見当もつかない様子の四葉

色々な感情が入り乱れ 二人があれ以降この家に訪れず 更なる
悪循環が家に蔓延していた

そんな時 ある来客が現れた

黒髪の美しく誰もが見惚れるお隣さん 雨宮紡木

遅ればせながらと期末試験を終えた彼女達にお祝いと称しお祝い
の品を届けに来たのだ

「どうもありがとうございます 紡木さん」

「気にする事はないさ 友人経由で噂を聞いてね 年明けの期末試験
だ下手に低い点数も取れないしね」

「ひ ひくい点数ですか……………」

「どうかしたのかい？ まさか お気に召さなかったかな 彼曰く
お祝い事にはと」

「いえいえ こっちの話なのでお気になさらず」

「そうか まあ何にかあれば 私も相談に乗ろう お隣なんだ」

善意から来るその言葉 でも何故かこの人の前では気を抜くなど
脳が眩く

それに一瞬でも気を許せば取り込まれそうな

そんな瞳すらしており美しさ故に怖さと言うのもを五月は感じて
いた

「その時は頼らせていただきます 今日のご足労いただきありがとうございます
ございます」

「隣だけどね ふふ じゃーまたね んやあ おはよう 三玖ちゃん」

「おはようございます　じゃ私出かけてくるね　二乃に買い物頼まれたから」

「はい　三玖も気をつけてくださいね」

「ふふふ　中々面白いね　あの子も」

「え？　面白い」

「こつちの話だよ　じゃ　今度こそ　さようなら　五月さん」

今度こそ　さようなら　と手を振り彼女は隣の部屋へと戻って行く

ガシヤンゴロゴロと物凄い音が響き渡るが最近では五月もこれには慣れ始めていた

めつきり消えていた笑みも久々に浮かべる五月は彼を真似るよう
に一度気合を入れ直し

頬を軽く叩く『やはり痛いですね』と力加減を間違えたのか頬は赤
くなっていた

更にそこから時間は進みあるデパートで風太郎と三玖が肩を並べ
買い物をしていた　ここ数日何故家に来ないのか　訪ねて見れば

『行く用事がない』とだけ彼は言い　幸太郎程でないにしろ信用して
いる彼からそう言われれば

少し寂しく感じている

そのまま行こうとする彼だったが三玖の発したある言葉で足を止
めた

彼女の姉である　中野二乃　彼女の頼みで買い物に訪れたと

うーんと悩む彼は唐突に彼女に聞いてきた

「好きな人はいるか？」

「ええっ!!」

まさかあの勉強オバケの風太郎から恋の話が出るとは彼女は思い
もしなかった

どちらかと言えばそれは彼の兄である上杉幸太郎の領分だ

突然の事過ぎて慌てだす三玖にぐつと詰め寄る風太郎

『恋バナしようぜ 恋バナ』一体彼の身に何があつたのか？

教えてもらつてる身である為 三玖も邪険に扱えず それに風太郎がそう言う一面を見せるのは

何処か嬉しくある ふふと笑えば彼との恋バナを始める

風太郎が悩む二乃との関係

三玖が悩む幸太郎との関係

お互いがお互いに『知り合いの知り合いの話』と遠回しに自分ではないアピールで会話は続ける

このまま関係が続けるべきかいつそ踏み切るべきなのかと…。

自分ではそんな勇気は出せず 関心する三玖

その勇気さえあればきつと幸太郎に想い届けているだろう

あの日 卒業式の日 図書室では二人だけ その時に彼が『今が楽しい』といった事で三玖は踏みとどまり彼への告白を先伸ばした 彼が現状を楽しむならそれもまた良しと

しかし 風太郎の話を聞いた事で三玖も決心がついたようにも見える

「風太郎 ありがとね 勇気が出せそう」

「俺も…じゃなく 知り合いの話が出来て良かった あつははは」

何処か微笑ましい 二人の関係お互いの想いが果たして今後どんな問題を起こすのか

この時の三玖は思いもしなかった…。

「上杉君 今日はお疲れ様」

「はい 店長 あの給料から引いても良いので材料幾つか使わせて貰つていいですか？」

「先輩 何か作るんですか！」

「ホワイトデーのお返しだよ」

「な 上杉君の裏切り者……」

「て 店長！」

何か不味い事でも言ってしまったのか？

店長は涙を流し そのまま店の外まで走り去っていく

まだ店は営業中なんですけど……

「はあ………それじゃ作りますか」

追いかけるのも面倒だ ぐれた店長の相手は真弓ちゃんに任せ

幾つか必要な材料を問いただせば調理の準備を始めた

手に持ったレシピには抹茶プリンのは作り方が記載されていた……。

そして2時間少しが経過

「完成だ 抹茶プリンとか初めて作ったな」

「おお 先輩流石です！」

「これは真弓ちゃんの分ね バレンタインのお返し」

「あ ありがとうございます！ えへへへ」

「そんな嬉しいもんか？」

「先輩のお手製は中々 食べられませんから それでこれは誰に ああ聞かずともわかりました

ちゃんと渡してくださいね 先輩」

「心配すんな ちゃんと渡すさ」

実はこの後輩からもバレンタインとしてチョコを頂いていた

三玖のチョコと良い 鼻血が止まらず 貧血気味の2月だったなと当時を思い出す

一生分のチョコを食ったと言っても過言じゃないな

うんうんと頷きながら片付けの準備を始めていたが『ここは私がいします 先輩は三玖さんの元に行つてあげてください』

「気の利く後輩だ じゃ俺は帰るな 真弓ちゃんも帰り道気をつけ
て」

「はーい さようなら」

自転車に跨りそのまま直進 目指すは中野姉妹のアパートだ

「久々だな ここに来るのも あいつらはいるよな…渡すにしても

三玖が出てきてくれれば一番だな」

最近会っておらず気まずいのもある

一番は説明が面倒だ

玄関前に何時までも立ってたら変質者と思われるし インターホン鳴らすか

『はい』と聞こえる声 誰だ 頼む三玖でありますように…珍しく神頼み

「どちらさま……!!…コータロー!」

「三玖か神頼みが効いてくれたか…」

「あの コータローだね」

「はい みんなの幸太郎君です どうした? 最近変だぞ」

「な 何でもない そ それでどうしたの」

「悪い 本題だ渡すもんがあんだよ」

「渡す物?」

「これ お前らで食べてくれ プリンのセット」

「あつどうもありがとう」

玄関から顔を出したのはパジャマ姿の三玖だ

いきなり現れた俺が言うのも変だけど空ける前に外を確認してくれないか心配になる

渡された箱を不思議に見たあとお礼を述べる

「ん……抹茶プリンがある」

「何故今開けた?…まあ うん それはバレンタインのお返しだ」

「!……コータローが私にお返しでも私はあげてない……」

「あれだけチョコ貰ったんだ 俺の中ではバレンタインとして認識されてる」

「そうなんだ……そうなんだね ありがとう コータロー」

「お返しのプリンの形は少し 不恰好だけど それなりにはいける……」

「愛情でしよう?」

その通り料理は愛情だ 誰かに食べてもらいたい

喜んでもらいたい その気持ちが一番に大切なんだ

彼女の『ありがとう』という言葉を聞くと胸が温かくなり何故だろうか鼓動も少し早くなる

不思議だな……。

「そう言う事 俺は食べて欲しくて作ったからな あとさ 悪いな 最近来れなくて」

「ううん コータローは学校で毎日 勉強見てくれてるから」

「家庭教師として どうなんだと言いたくなるけどな はあ…」

期末試験も終わり春休み明けまで大きな試験は来ないとは言え

やはり勉強は見てあげるべきだと思っている

実際に行動には移せず 学校で昼休みや放課後に見る程度

無賃だからと投げ出す程俺は愚かではない もう少し生活さへ落ち着けば、また何時ものようにこの家に集まれる…。

「それじゃ みんなにもよろしく おやすみ」

「あの コータロー」

「なんだ三玖?」

「コータロー はこ こいを」

「うーん?」

「な なんでもない おやすみなさい」

「あっはい おやすみなさい」

渡す物を渡し 軽い談話

それが終われば俺も帰宅だ

挨拶が済むと同時だ 三玖に裾を引っ張られた 顔を向ければ何故か赤い

口ごもり言葉も聞き取りにくい

聞き返そうとするが そのまま扉は閉められた……………

「ええー…」

卒業生との因縁さえ終われば後は万々歳 何も問題は起きないと
そんな軽い気持で俺は今を生きていた
ずっと続くと思っていたこの時間 徐々にだけど確かに動き出し
ていた

「三玖ー 誰だった…?」

「コータローがみんなに差し入れ…」

「こー 幸太郎君が来たんですか!」

「今はバイトが忙しくて来れない ごめんだって」

「おやつで釣るとか本当に私ってあいつからしたら 妹のままなのね
…。」

「あつはは まあ せっかくお兄さんが持つてきたんだし食べよう」

「えっ…またプリン」

「隣の紡木さんもお祝いにプリンくれたよね…」

「こう言った品は重なるとも言います じゅるり」

「五月 よだれ」

「あつすみません」

「あれー 三玖のだけ抹茶だー なんでー」

「秘密」

幸太郎が差し入れとして渡したプリンの詰め合わせ

何とも不思議な事に隣に住む雨宮紡木も似たような品を彼女達に
期末試験のお祝いとして送っていた

偶然と言うのは何度も重なるものだ 気にするのは後回しと

彼女達は受け取ったそれを手に取れば美味しそうに口に入れる

(コータロー とても美味しい 私もコータローに負けないようにし
ないと

きつとこのままじゃいけないだよ 次はコータローに気持ちを
聞かないと)

(と言うか…コータロー君の差し入れはわかるけど なーんで 雨宮

さんは私たちの期末試験のことどこから聞いたんだろう？ 本当不思議な人だな…。

第六十九話 不良少年とスクランブルエッグな恋模様1

「ヤッホー!!」

ヤッホー ヤッホー

絶景とはまさにこの事 大きな山を前に

勇也さんと妹は大きな声をあげそれは反響しやまびこして返ってくる

何て微笑ましい光景だろうか、温泉旅行が決まった際は少々不安があったが

彼等の姿を見ればそうも言っていられない

「まさか本当に当たるとは」

「お前の運に感謝しないとな」

「確率的にも商品券の方が高いだろう 不正か？」

「どんな疑心暗鬼の仕方だよ……………」

二人とは裏腹にどんよりとした空気を身に纏う弟は石の上でずっと座り込み

未だに当たった事が信じられないと呟き続ける

そうこの温泉旅行に行けたのは何を隠そう

弟である上杉風太郎の働きがあつてこそだ

先日の買い物際に3000円の買い物をした風太郎はそのレシートを応募券に

豪華景品プレゼントキャンペーンに送ったのだ 勿論風太郎は旅行なんて眼中にはなく

欲しい商品は一貫してE賞の商品券 B賞のペアリングが当たれば『売ればいい』と何とも夢の無い発言だ

その二日後 当選と書かれた封筒が届き 大きさから商品券と大きな期待を寄せていたが

蓋を開ければ大当たり 温泉ペアチケットだ

本人は絶妙に『いらねー』と顔で表していた

そのまま破棄も出来ず売るにも売れない それにらいたの目にも止まり

『全員で温泉だー』と大はしやぎ 勇也さんも大はしやぎ楽しそうに俺は満足です

ただ一つ大きな問題があった このチケットはペア つまり定員が二人までと現実是非情だ

せっかくの休み俺も連れて行きたいと話す妹の考えを無下にできない

そこで勇也さんと俺は自腹で 予約し

諭吉が消えると言う中々の出費を食らった ただ妹の笑顔が見れるならこのくらい安いもんだ

それに正月明けからバイトとハードな日常で3月までの稼ぎは去年よりも多い

と温泉旅行と家庭事情を交えつつも無事にこの場所へと訪れたため息続きの弟 あの一件が未だ尾を引く形になっている様子だが

変化はあった 買い物が終わって帰宅した際にこいつから相談を受けた

『二乃に告白された 返事はいらないと来た 幸太郎少しでいい力を貸して欲しい』

まさか直球で直線で俺に相談が来るとはやや予想外

友人の友人とかぼかして来るとばかり思っていたがこれも成長か

本人曰く『恋バナの成果』 全く意味が分からんぞ… 何が合ったんだ？

「風太郎 今は少しその事を忘れろ あいつも返事はまだ良いって言ったんだらう」

「俺の記憶に間違いが無ければ確かにそう言っていた筈だ」

恋愛にはやや否定的な自分がまさか誰かに告白なんてされる日が来ようとは

これも彼の成長にも欠かせない それに告白されたと言う事はそれだけ彼女達からの信頼を弟は得た

今は沢山悩め どんな結果になれお前は一步一步進める筈だ

「なんだろこれ お兄ちゃん写真撮ってー」

「あつ……………携帯とか使わな過ぎて充電がない」

「俺はスマホを忘れた…」

使えないのは俺達だ せつかくの旅行に二人して記録媒体が使用不能

鞆を確認すれば充電器だけ入っている

残念がる二人は残念な俺達を置いて先に宿まで向かって行く

「虚しいな それは」

「世の中そんなもんだろうな」

「まあ 誰からも連絡来ないんだ 別にいいか」

「卑屈だな」

「卑屈過ぎてくれた幸太郎には言われたくない」

「へいへい さっきも言っただけど今は旅行を楽しめ お前もヤツ

ホーって叫んで来いよ?」

「もーやけくそだ うおおおー」

「青春だな……………」

少し離れた先にある頂上まで走りだす

生きて行く中でぶち当たるその悩みに彼なりに立ち向かう姿を見ると心の底から応援したくなる

お前がどう想いどうして行きたいか、この一年で考えれば良い

「「やっほーー!!」」

声が二つだ どうやら先客がいた

物凄く気まずいだろうな からかいに行くかな

「おーい 風太郎…………」

「やっぱり コータローだ」

「お兄さんだ！」

「そりやあんたもいるわよね」

「幸太郎君です」

「嘘……」

「こつちが嘘ーだよ まさかお前らがいるとはな いやー世の中狭いな」

頂上まで出向けばそこには良く目にする五つ子の姿

どうやら先客とは彼女達の事でこいつらは、俺達とは違う道から登って来たようだ。どうりで会わねえ訳だよ……

驚きを隠せない 6人とやたら冷静な俺 まあ立ち話もと思いい歩踏み出した途端に

背筋も凍るような殺気にも似た何かいや……間違いなく殺気だ

ふり返れば彼がいた せつかくの旅行だと言うのに何て顔してんだか……

「まさに 家族旅行だ だが気をつけなければいけないよ 旅にトラブルは付き物だね」

「どうも 中野先生」

「やあ 上杉幸太郎君 お互いトラブルには事欠かないと言える」

「全くその通りですね はあ 帰りてえー」

—————

—————

—————

「この鐘は随一の観光スポット『誓いの鐘』です

この鐘を二人で鳴らすとその男女は永遠に結ばれるという伝説が残されています」

「は……は……どこかで聞いたことある伝説だ そういうのどこにもあるんだな コンビニか！」

バシッ

「江端さん とても素晴らしい話です ありがとうございます。ほ

らこつち来い風太郎……」

父親の登場で遂に壊れ始めた弟は思考回路がショート寸前
いらんツツコミまで入れて 中野家からの視線がとても痛い
か
るーくどつけば一旦離れる

(冷静になれ)

(慣れるかよ なんでお前はあの父親と普通に会話できるんだ)

(面白い事いうな あの人と俺は皮肉しか言ってるねーよ とりあえず
深呼吸だ)

冷静さを取り戻させるため弟を諭し

深呼吸をするよう言い聞かせる 『深呼吸ってどうやんだ』

ああー本格的にダメだこれは…

それにしてもだ 風太郎程ではないが俺もこの状況には少なから
ず思う所はある

今彼女達は父親とは別にアパートに住んでいるはず

力は借りず出来る範囲でやり遂げると

だがどうだ目の前には秘書である江端さんのみならず

あの男まで旅行を満喫している 風太郎が二乃を連れ去った事が
原因か

それとも俺が宣戦布告した事が頭に来たのか…

どちらにせよ 父親という事は和解したと考えるべきだろ
う

(さて何が起きたのか…)

表情は全く読み取れないが娘達と過ごす休日だ

俺達は完全に蚊帳の外 部外者と言える 邪魔にはならない様
かしどうにか事情を聞きたいものだ

風太郎は早速行動に移り 一花や四葉に話しかけるが悉く失敗に
終わる

助け船を出すべきかと考えていれば 彼女 中野二乃の方から風
太郎に接触をしている

これはある意味で好機だろう ここ最近風太郎中野姉妹 特に二

乃とは距離を開けていたんだ

進展を望むにしろ 彼女と話さなければ何も始まらない

「に……二乃……」

「何よ 言いたいことがあるればハッキリ言いなさい フータロー」

「これは予想以上だな……」

「二乃 今の呼び方 どうかしたの?」

呼び方のトーンが完全に三玖と被っている

隣で準備をしていた三玖本人も反応してしまう

「えっ? 私たちも出会って半年が過ぎたわ そろそろ距離を詰め
てもいいとは思わない?」

「まあ それは常々考えてはいるけど……」

「あ そうだわ! あだ名とかどうかしら? 三玖なんか考えなさい
よ」

「え 私なんで」

確かに出会って半年以上経つな……って言いながら こいつら半年
より前に出会ってただけだな

修学旅行の際に顔を合わせてる筈だろうし やっぱり忘れてるの
か?

その半年記念として風太郎のあだ名命名を任された 三玖は突
然過ぎてテンパリ始める

可愛いな……

「どう しよう 上……すぎ 風太郎 うーん? フータローだから
フー君?」

「へえ……いいじゃない それとあんたも何かないかしら?」

「俺は何でも良いさ? コータローでも幸太郎でも上杉でもさ」

「うーん コータロー?」

「それは駄目! その呼び方は」

「な なんでよ ならコウってどうかしら」

「随分と懐かしい答えが出て来たな 二乃さんよ」

コウとは俺が幼い頃に呼ばれていたあだ名の一つだ今ではみずき

姐しかその呼び方をしていない

意味はないと言いい張る彼女 もう過去の杉幸太郎とは決別し今の俺を見てるんだ

にいとと言う語尾が着かないのはそれを表しているのかもな

「別に意味はないわよ いい加減あんたの呼び方決めないと面倒だからよ」

「コウ…くん」

「なんだ三玖？」

「な 何でもない それより二乃準備しないと」

「はいはい 分かったわよ」

「なんだ一体」

「なんか 二乃だけじゃな みんな余所余所しいんだけど…」

様々な事が起こり風太郎は当然困惑

確かに二乃の様子はおかしい 特に一花だ 俺や風太郎を避けるようにして動いている

何か原因があるとすればこの数日で彼女に変化があったのかもしくは

あの会話を聞いた第三者は俺だけではなく 一花も含まれていたその可能性もある

(まさか…二乃だけじゃない 一花まで風太郎が好きなのか 罪な弟だな)

ジー

「ん なんだ五月？」

「……」

「五月くん 何をしているんだい？ 江端から弁当を受け取ってくれ」

「っ……」

「あ あの…先日は」

「さあー 準備を始めよう 久々に全員揃ったからね 家族水入らずの時間だ」

意味ありげにこちらをじーつと見つめる五月に声をかけたが

あの男に遮られ 家族 と言う言葉を強調すれば五月を連れてシートを広げた方へと戻って行く

「嫌味な男だな 相変わらず」

「おーい 幸太郎 風太郎 おせーぞ 心配で戻ってきちゃった」

「あれー なんでみんないるのー？」

下山して先に宿に向かっていた勇也さんとらいはが何時までもこない俺達を心配し戻って来てた

やばいやばい こっちも家族水入らずだったの忘れる処だった……。

俺たちの後方に中野姉妹を確認するとらいは駆けだした

「らいはちゃんだー」

「やはり 幸太郎君たちも家族でいらしてたのですね」

「じゃあ あの人がお父さん？ コータローくんは将来ああなるのね」

「むう 似てるわね」

「コータローのお父さんだ…」

「兄より お姉さんですか 悲しいねえ」

「ありや マルオか…」

「勇也さん 偶然にも同じく家族旅行だそうです」

「へえー これは面白いな」

「俺は少々息苦しいですけど」

「お前は本当にあいつが好きだな がはは」

「勇也さん 目大丈夫ですか？」

声をかけるつもりはないのか、彼がいる事だけ確認すれば

すぐ戻るぞーと俺たちに声をかける

それにしてもどう見れば俺があつた男を気に入ってる風に見えるん

だよ

一度勇也さんは眼科に行くべきだ 勿論俺がお金を出すけど

「雨が降ってきたね」

山の天気は変わりやすい 登山家は誰しも雨を警戒すると何かで読んだ事がある

秘書に片付けを一任すればあの男は姉妹に声をかけさつさと下山していく

「えーつと……」

「あはは仕方ありませんね」

「じゃあね フータロー それにコータロー」

「多分同じ旅館よね」

「たく 勇也さんが来たから 本当にあの人は……」

「あの 幸太郎君」

「なんだ 五月？ 俺の顔に何かついてるか」

「えーつと あの幸太郎君と上杉君に後程お話があります

ご足労をかけますがよろしくお願いします。」

「了解だ……五月 せっかくの家族旅行だ 楽しめよ」

「はっはい では」

話して分かった 五月は何処か俺を避けている

丁寧口調は相変わらずだ 俺に対する接し方も普段と変わらない ただ何処か壁のような物を距離のようなもの感じてた

「お兄ちゃん 雨降ってる？」

「今から降るんだろうさ……面倒な事が起きそうだ」

「同感だ 話ってなんだ……」

空は晴天 雨なんて降る気配は一切なく

ピクニック日和と言えるだろう……

五月の話とは気になるが、今すぐ追って聞くのは気が引ける 時間をおいて俺達も下山しよう

—————

――
――

「わぁ お化け屋敷みたい」

旅館には着いたが、とても営業してるようには見えない

何度も確認するが、やはりここで間違いなく

あとは五月に会うだけだ 風太郎は『何時話せば良いんだよ』と確かにアバウト過ぎる

時間は指定して欲しかったな 今の時間帯なのか明日なのかハッキリして欲しかった

「あのー・・・中野さんって何号室ですか？」

「……………」

先に入った風太郎はチェックインカウンターに座る老人に話しかけるが

黙殺されている つかこの人寝てるのか？

「これはダメそうだ…………うーん」

「どうした？幸太郎…お前も何かあったのか」

「いやー…何でもねーよ」

何だろうな この爺さんだが何処かで見た気がするんだが

考え過ぎだ…。奥に進む風太郎を追って俺も中に入って行く

仲居さんを待つ二人には適当な理由をつけて後で合流する事になった

「風太郎…………手分けして探すぞ 俺は二階に」

「俺は一階だな」

闇雲に探しても見つかる訳はない

ここは二手に分かれ五月を見つける

連絡手段がない俺は見つけ次第 お風呂場近くで合流しようとして風

太郎に話そのまま二階に向かった

俺の勘だが簡単には解決しそうに無さそうだ

「五月は何処だ？……………」

「何故 ここに君がいるんだね 上杉幸太郎」

「そりゃ ここに泊まるからですよ それじゃ俺はこれでって 何ですか？」

「そこから先は僕たち家族の部屋だ 君が立ち入る場所じゃない」

「はいはい すみません 向うか……………って今度は何ですか？」

二階の廊下 曲がり角付近でまるで誰かを待つようにして腕を組む中野先生と出くわした

一番面倒な人間だ 俺たちが五月を探していると知れば妨害されるのも確実だろう

一言詫びを入れれば回れ右と方向をかえ 足を動かすが、何故か声をかけられた

「上杉幸太郎君……………彼から君に手紙だ」

「まさか幹雄さんから……………」

伝言の次は手紙かよ

あの人も大概暇なんだろうな 胸ポケットから取り出した一枚の便せん

それを渡せば さっさと戻るようトーンの低い声で追い返される

「たく 面倒な人だな……………幹雄さんも俺に一体なんだろうな？」

渡された手紙を一度ポケットにしまい込めば俺は五月の搜索を再開した

「見つからねー あいつは忍者か何かか？」

五月は確かに見た だがそこに行つても既に別の場所に移動している

追いかけても追いかけても逃げられる

話があるなら何処かで待っていて欲しんだけど……………。

結局は成果はなし

一旦風太郎の元に戻った俺は仲居さんに嚴重注意を受けている弟という構図に苦笑い

女子トイレの前で待つのは流石にダメだろう……………

「はあ……………」

あの後部屋まで案内され 家族で温泉へと向かった
躊躇っていた俺は一応確認すれば

『安心してお使いください』と傷ありの俺でも温泉に入る許可を得た
その間に済ませたのか勇也さんもらいはも風太郎も先にあがって
いた

「ふう〜…たまには温泉も良いもんだな。でもここからさき動けば、
無駄がないかな？…五月とは中々会えないしな」

せっかくの家族旅行から まさかの中野姉妹登場
更に追い打ちとばかりに様子のおかしい彼女たち

加え話があると言っていた 五月は捕まらない…中野父から釘も
刺される…それにあの人からも手紙まで来ていた……………。

軽く目を閉じ一気に起きた事を頭で整理する

うーんと唸るが、どうも噛み合うピースが見つからない…確かに中
野の姉妹が中心だが、それだけだなのかと新たな疑問も生まれてくる

「せわしねーな……………。 はあ上がるか」

何時までも風呂の中で考えていたら逆上せちまう

気持ちいい湯だったが一旦部屋に戻り風太郎ともう一度作戦会議だ
な

脱衣室まで戻り 着替えを取ろうとした時 俺はある違和感とあ
るものが増えている事に気づいた

「まーた 手紙かよ」

着替えの上には一枚の紙が置いてあり

内容は『0時に中庭で』 回りくどい……………。

「つか……………誰か俺の着替え漁ったか？」

手紙は勿論だ だけどおかしい 中野先生から渡された手紙は確かに左側に入れた筈だ

でも風呂から上がればそれは右の方に閉まってある……………。

(五月のやつ 手紙を置いて 更に勝手に俺の手紙まで読んだな)

まったく あいつにも困ったもんだよ

下手な隠し事は全部見抜かれる 怖いくらいな程に俺の生活を脅かす

中野五月の暴走を俺は止められるのか？

……………

……………

……………

その夜 俺は風太郎に手紙を見せれば二人で指定された場所まで向かう事になった

下に向かえばあの爺さんが夕方と同じようにその場で居座っている

中庭は何処か問うが返事は来ない それらしい場所を探すと風太郎は別方へと向かって行き

俺も中庭に出れる場所を探した

「見つからねーよ 何処が中庭に繋がってるんだ！」

探す事30分程 初めて訪れた旅館で真夜中ともなれば自分が何処にいるかすらも判断出来ない

予想以上に広く このまま歩いていけば迷子になってしまう

目ぼしい場所は見つからないとなれば風太郎の行った方向が正しいのだろう

来た道を戻ろうと振り向き そのまま直進し 暫く歩いた先の曲がり角だ

ドン

「おつと……大丈夫か つて五月！」

「ゴ 幸太郎君 何故ここに」

出会いがしらぶつかった人物は探していた五月だった

慌てていたのか前方確認もせず突っ込んで来た

尻もちをついて 俺が目の前にいると分かれば声をあげる

『しー』 口元に指をつけ 声を下げるように指示……。普段なら適当な理由で誤魔化せるが、ある意味では密会のような物であり……。

せつかく人がいない時間帯を指定したのに意味もなくなるし……。中野先生にバレる前には、詳しい話を聞きたいね……。

「お前が俺達を夜中に呼んだんだろうが……。たく そんな慌ててどうした？」

「いえ 何もありません………っ」

「お前まさか………見せてみる？ 少し血が出てるな」

「あの コー 幸太郎君」

「旅先だからこそ 持ってきて良かった」

抑える足を見せてもらえば ももの裏から少し血が出ていた

浴衣の裏ポケットにしまっていた絆創膏を貼り ばい菌と傷が広がらない様軽い処置

今はこれしか出来ない 部屋まで戻れば鞆の中に道具は一式揃えてあるんだが

今は無理そうだな………。

「悪いな 転んだ時に擦りむいたみたいだ」

「ち 違う これはさつき」

「五月だよな？」

「あつ あのこれは先ほど上杉君と話してる中で階段にぶつけてしま

い」

「おう そうか……………」

目の前の少女は五月だ 暗くて判別しにくいがその話し方と髪型はあいつしかいない

多少言葉が崩れ 俺は違和感を覚えたが本人それを直し話を続ける

それでも何か解せない……………。 本当に五月か？

「それで話ってなんだ」

「あの…………幸太郎君はこの関係をどう思いますか？」

「関係ねえ…以前は家族って答えたな 俺には妹みたいなもんだ、んで風太郎はパートナーって言ってた気がするな」

「はい 幸太郎君は自分でその答えに行きつきました そしてもう私たちはあなたの 妹でもパートナーでもありません…。 幸太郎君 この関係を終わらせましょう…。」

「まあ冗つてのは俺が自称してる事だしお前らが言うなら…。 それで終わらせるって具体的にはどう言う意味を示すんだ？」

「上杉君にも伝えましたが もう私たちだけで勉強は続けられます…。 お二人の手を借りる必要はないと言う事です」

これは驚いた まさか五月から解雇を言い渡される日が来るなんてな

あの勉強を通して五月達は確実に成長した…。 今では姉妹中で勉強を教え合える程までに問題を理解できている それに勉強が嫌いだけで教えればきちんと生かせるし結果を示してくれた

きつとこの数日間 五月はこれからの事を彼女なりに考え頭を悩ませ

その先に導き出した答え それがここから先は自分達の力で成し遂げると言う事だった

「そうか……………少し寂しくあるけどさ お前らがそれを選んだなら俺はその背中を押す

もし分からない事があれば聞いてくれ そんな時は話聞くからさ」

「あの……それで 幸太郎君」

寂しいと言うの本当だ

何だかんだと過去に決別が出来たのはこの姉妹のお陰だ

こいつらという事が楽しくもあり 居心地が良かったんだ

「部屋まで送るか？ 中野先生がいるから そんな一緒に入れないけどさ」

「あつそう言えば………は はいそうですね もう時間も時間ですから私はこれで」

「おやすみ 五月」

「はい おやすみなさい 幸太郎君」

去つて行く五月に手を振り 階段の方まで戻るのを確認

暗い道だ 階段を踏み外さなければ良いけどな………。

「幸太郎 ! 五月 来なかったか」

「さつき部屋に戻ったぞ」

「なんで そんな悠長なんだよ 聞いただろう あいつらが」

「そうだな………」

「五つ子の祖父は現れし 五月から解雇されるし わけわかんねーよ」

「追いかけるのか？ ならきーつけていけよ」

「何か知らんがとりあえず行ってくる」

五月が向かった方に風太郎ダツシユで走って行く

きつと中野先生が立ってる筈だし 今日中に説得は無理だろう

詳しい話を聞くなら明日だ………。

「五月に聞きそびれたな 手紙勝手に読んだかどうか………」

第七十話 不良少年とスクランブルエッグな恋模様

2

朝になれば五月からの電話で目を覚ます

俺と風太郎の現代の利器は息をしていないならば誰なのか

……………

上杉兄妹の中であと一人 五月と番号の交換をしている人間が存在する

らいはだ

何故朝から電話が掛かってきたのか 疑問が尽きないが

電話を出た風太郎は驚愕の表情で俺に伝える

『五月は昨日俺たちとは会ってないってさ』

それは確かに衝撃の事実過ぎる

となれば昨日出くわした人物はあの姉妹の中の誰かになってくる……………。

「やて…目く覚めますか…」

そうなれば早速行動だ

反対側とこちら側が現在行き来できない

中野先生が監視の目を光らせていると五月から知らされた

彼女から詳しい話を聞くには何か別の方法がある

うーんと考え込む間に 風太郎が『妙案がある』

うわー嫌な予感がする……………。

それから風太郎の作戦は実行された

五月と合流する方法は一つしかない

色々と考えた結果として風太郎が出した結論は…………

温泉で彼女と会う……………なんて?なに?

「ぶっ飛ばすぞっ!」

「違う違う 混浴じゃない つうか殺意高いな」
当たり前だ

俺でも怒るときは怒るし 色々と呆れてしまう
こめかみに手を当て何度か状況を整理

何と云うか風太郎は天才のわりに根本的にはおバカだよな……………。

「じゃ 俺は先に向かう 幸太郎も後から来てくれ」

「はあ……………何でこうなる」

先にお風呂場に向かった弟の姿に不安感はぬぐえないが

俺も俺で自分の用事を済ませてさつさと五月と合流しないと…

昨日預かった 幹雄さんから手紙だ

俺が風呂場に入ってる間に 誰かが 俺より先に読んでいる

あの数分の間は何処だかと考えたが……………五月が一番怪しい
だって手紙を置いたのが五月な訳だし

理由は後から聞けば良いだろう さつさと読んでしまおう

『拝啓 上杉幸太郎様

この手紙は一旦中野先生に渡っている筈だ 彼も無関係とは言えないからそこは許してほしい

上杉君 君が無事に完治した事は水木から知らされた まずはおめでとうございます

そしてお疲れ様と言わせてほしい 僕は当時から海外で君が入院した際に戻れず

全部中野先生と水木に任せつきりだった すまないと思っっている
』

「すごく 真面目だ 幹雄さんは何も悪く無いのにさ…」

真面目を絵で描いたような人物だがお堅い人でもない
とても話しやすく 何度かお世話になった人物だ……………

水木姐の旦那である 坂下幹雄先生だ

中野先生とは友人らしいのかこうして彼を経由して俺の所に連絡

をくれた

どうにも気に入られてるのか あの人は俺の将来を真剣に考えてくれている

手紙の内容と云えば ありきたりと言って良いのか

彼の現状と俺に対する労いの言葉など 何とも彼らしい

読み進めて行く中で俺はある一文に目が留まり

尋常でない汗を掻きだす

とてもじゃないがこれは他人に見せられるようなものではなく

プライバシー案件だ 五月に見られたと考えると少々厄介

あいつが公言するような人間ではないと俺は保障出来る でも
それでもだ

「あいつに直接聞かねえとな…」

手紙を鞆にしまい込み

着替えを持って風呂場まで向かう

さーて 向うはどんなカオスな状況なんだろうな

――――

――――

――

風呂場に到着すれば既に風太郎が上がっていた

話は終わったと言うし 俺の出番は必要はなかったようだ

「はあ……せつかくだし 風呂入ってくるわ」

「わかった 詳しい話はお前が戻ってからする」

「了解ですよ…」

作戦会議でもするのかな？

今の状況を知るのは 俺 風太郎 五月に三名かあの父親が見

張ってる中でどう動くだろうな

弟の働きに期待するか……………

「あーっやっば 朝風呂最高だな…はあ…」

家族旅行で一人とはなんとも寂しくもあるが、温かい風呂につかれ
ば、自然と力が抜けていく…おお脱力

一人というのもあり気を抜けば眠ってしまいそうだな。日々の疲
れも吹き飛ばす…旅館の風呂…侮れんな

「こ 幸太郎君ですか？」

どうやら一人ではない 女子はお風呂が長いな……………
はあ……今日一番のため息だ

「風太郎はもー 上がったぞ今なら誰もいない」

「いえ 幸太郎君を待っていたんです」

「そうかい 昨日の事で何かあったか？」

「幸太郎君はどう思いますか？ 偽五月の存在を……………」

偽五月とは面白い固有名を得たな 姉妹の誰かは

弟との話で彼女は彼女なりに偽物と共感出来る事があったと話す

「俺はまあ…お前を含んで全員がああ意見でいききたいって言うなら止
めない

家庭教師としての役割が終わるだけだ……………」

「幸太郎君らしい 意見ですね あなたは何時も何処か私達よりも目
線が高く一步を見据えています

だから今回の話でも動揺しないのでしよう」

動揺しないのではない そう言った姿を見せたくないだけだ

実際偽五月には『寂しいけど』 そう口に出していた

今のこの時間を俺はずっと続けばいいと そう思っていたでもそ
うも行かないと来た

現に五月も前を向いて進もうとしてる……………。

「それで 五月は最近どうだった……………俺も忙しくてな」

「最近って幸太郎君は何時も私やみんなを学校で気にかけてくれてい
るのではないですか？」

「それはそうだが 家での話だ 学校と家じゃ 様子も異なるだろう？」

「と言われましても……………」

「俺は何か五月が遠く感じた」

「えっ 私がですか それはないです 私は何時も幸太郎君の事を／

／

ああー 今のは聞かなかつた事にしてくださいー!

「ぶっははは ごめん 俺の気のせいだ」

「少し 笑い過ぎではないですか？」

こいつは何時も自爆してんな……………」

家庭教師をしてる時は当たり前前のこのやり取りが何処か懐かしく
思い

気づけば大笑いだ 学校でも変わらずだが

こうして日常でもこのやり取りが俺には当たり前になり始めてい
たんだ

「わりい……………お前はお前だ あれだずつとお前と話せなくて

寂しかったんだろうな……………大切な友達だからさ」

そうだな これは確かに風太郎の言うパートナーとは変わって
いる

もう十分に友達だ 『俺は俺で友達と三年を過ごす』気づけばそう
あいつ等にも宣言していたな

「……………あの 幸太郎君 一つ聞いてもいいですか」

「なんだ五月？」

「幸太郎君は 恋がしたいですか」

「恋？ 何だ藪から棒に」

「いえ 少しの興味です……………したいと思えますか？」

こいつが何を求め この質問を俺にしているのか

どうにも理解が出来ない まさかとは思うけど

五月も好きな奴が出来たりしたのか……………こいつらは可愛いしな

モチない方がおかしいだろうし

って 今はそれは良い 俺に対する質問だよ

「少し 前向きになら検討はしてるかな 相手はいねえーけどな」

「そ そうですか 相手 相手がいればいいんですよね」

「五月さーん 声がちいせーぞー」

「い いえ独り言です 聞きたい事は聞きました ありがとうございます
ます」

「なら 良いけどさ もし何か悩んでるなら相談してくれ 話は聞く
し協力もする」

結局五月が何を聞きたいのか俺には点で分からなかった

こいつが何かを悩んでいるのなら 力になれる範囲で力になって
あげたい：三玖や一花 五月には散々力になって貰ったんだしな

聞きたいことはそれだけなのか、ないなら俺も彼女に聞いておきた
いことがあるんだ：二人だけのこの状況を利用してもらうか

「そう言えば 俺も五月に聞きたい事あんだよ」

「私にですか？ 何の話でしょうか」

「とぼけてるならそれはそれで良いんだけどさ お前昨日手紙置く時
さ 俺の服漁ったか？」

「服を漁る？ 私は幸太郎君の着替えの上に手紙を置いたらすぐに戻
りましたけど」

ん……？ まさか本当に五月は俺のズボンを漁ってないのか……
でも確かにあの手紙は誰かが先に読んだ形跡があった

中野先生はある程度信用しているから先ずそんな事はしないだろ
う

もし 五月が言っている事が本当なら……犯人は別にいるのか

俺が風呂に入り 上がるまでの間に 五月以外の誰かが先に来て
いた

そして手紙の内容を読み 五月が来たことで咄嗟に元の場所とは
別のポケットに入れてしまった

そう言う事なのか……

「五月 お前が手紙を入れる前 誰か出て来たか？」

「えーっと 私が来た時には……………」

二乃が出てきましたね 四葉もいましたし 三玖や一花も見かけました」

「わかった つまりはお前以外が怪しいって事だな O?了解だ」

犯人候補が多すぎる 五つ子全員とか勘弁してくれ、つうか何で全員何事もなく混浴出入りしてんだよ…少しは恥じらえ…

「あの 幸太郎君 何かあったんですか？」

五月に相談して良いものか……………こいつが嘘を言ってる

可能性はないよな 五月は正直もんだ 俺があんな目に遭ってそれで嘘つく様な人間なら

どれだけ肝が据わっているのやら…………

脳内を出した結論は たまには五月に相談しろ これで可決した

「知り合いから手紙が来てた それを俺が読む前に誰かが読んだ可能性がある」

「それは本当なんですか？」

「嘘言うかよ 内容を伏せるが 俺のプライバシーに関する事が記載されてる…ポケットに入れてた俺が悪いんだけど 封が切られてた…」

「幸太郎君は誰が怪しいと踏んでますか…………」

「正直言えば 誰も彼もだ……………怒りはしないけど…形跡があれば気になるさ」

「……………わかりました 偽五月の一件が片付き次第 幸太郎君の手紙を読んだ人物を探しましょう」

「もしくは その偽五月と手紙を読んだ犯人が同一人物の可能性もある」

今までの前提として五月が手紙を置き その前に来た人物が犯人だと

だがそれが違う可能性もある 五月が手紙を置いたのを目撃した偽五月が

時間と場所を知り 偶然に俺の手紙を見つけたという線だ

「確かに そうなれば 私が見た4人の中から更に絞れますね」

「お前が出てった後だ 誰かが見てない限り 犯人像は見えてこねえ」

「しかし 不思議ですね 何故幸太郎君の手紙を盗み見たのでしょか？」

「興味本位とかならやめていただきたい……………」

手紙の内容自体は俺の期末試験の点数や今後の方針がかかれており

お世辞にも人にお見せできるものではない

この一件が解決すれば、手紙を読んだ犯人の特定にも力を入れられる
先に言っておく 犯人が分かっても それは俺と五月の胸に閉まっておこう

そしてそいつを責めない事だ 注意はするがそこまでだ」

「私も誰かを責めるような事はしたくありません その方針で行きましよう」

五月から承諾を得られた 興味本位でも見てはいけない

見られたくないものはごまんとある だから今回は嚴重注意で済ませる

偶然だった場合は少しの注意で許してやろう

「それと偽五月だけどき 足に怪我してる」

「怪我ですか」

「ああ……………軽い擦り傷だけどき 血が出てたから絆創膏をはってやった」

「ま 待ってください つまり幸太郎君は偽五月の足を触ったという事ですか破廉恥です」

「へいへい すみませんでした」

ふんすかとむくれてやがる

情報提供のつもりが墓穴を掘ったな上杉幸太郎よ

一応探す際には参考にすると言ってはいるけどやや不機嫌だ

「なんで 俺が弁解せねばならんだ……………」

他人の事で悩んだり考えたり そればかりで痛い目を見た最初の二年

今ではそれも当たり前だ 姉妹の問題を解決し 仲の良い状態に戻す

五月曰く俺を呼んだ最大の理由は最近の姉妹感についてだったらしい

風太郎にも聞いていたようだが求める答えは何もなし

「悩み相談は受ける それと五月 五つ子を見分ける方法ってあるか？」

「見分けるですか……上杉君と違い 幸太郎君は私たちと幼い頃から過ごしてましたからね」

「やっぱ……気合と根性か」

「いえ 愛の力です！」

「O? 俺の得意分野だ 料理も愛情 お前らを見分けるのも愛情か……やっつて見ますか」

姉妹の相談をするに辺り先ずはあいつ等を見分ける事が重要だ

5年前の俺ならば彼女達を一発で見分けられただろうが今ではブランクもあり

以前ほど見分けれなくなっている 愛が足りないな

気合 根性 愛情 その三つを駆使して見分けてやるか……。

「さて……上がるか」

「……幸太郎君」

「五月……」

「ま 前にも似たような事がありましたね」

「悪い 戻るな」

「いえ 大丈夫です」

「俺が大丈夫じゃねーから！」

風呂から上がればタオル一枚の五月とご対面だ

中野家覗き事件の風呂上り目撃の再来だ 今回も完全に俺の不注
意が招いた

混浴つては聞いていたが何で脱衣場まで繋がってんだよ……

とつさに風呂場に戻るが何故か五月にがっちり腕を掴まれる

「やめろ 離せ」

「後ろを向いているだけで良いので 幸太郎君は絶対に覗きなんてしないし私は信用してます」

「っ………わかりました さっさと着替えてくれよ」

「髪を乾かさないといいけません………」

「お前は俺をタオル一枚で放置するつもりか？」

「じよ 冗談ですよ」

「わかった 髪が濡れたままの方が風邪ひくしな だから早く着替えてくれよ」

卒業式の一件でトラウマを越えた筈なのに心臓がバクバクなつてやがる

やはり女性が真後ろで着替えてるのは心臓に悪すぎる

「幸太郎君………」

「なんだー」

「背中にも少し傷がありますね」

「ガードレールに直撃だったらしいからな そんときだろう」

俺の胸の傷は手術で出来た痕だ

背中への傷は車に跳ねられた時に運悪くガードレールの先にぶつかり切り傷が出来てしまった

これに関してはそれほど重大な傷という訳でもない

中野先生も『当たり前所が悪ければ』何て言っていたけど当たりは良かったから無事だ

ぺた

「………何だ 背中なんて触って」

「痛くないんですか？」

「……前よりはましだな まあ大丈夫さ」

「大丈夫という事は痛いと言う事ですね」

「っ………良いからさっさと着替えろ」

「もー 終わりましたよ 次は幸太郎君の番です」

「よーし ならさつさと脱衣所から出て行け 見られちゃ着替えもできんぞ」

あーだこうだと言ひ合うのは面倒だ

一旦外に追い払えばさつさと着替えを始める

タオル一枚ですつかり体は冷え切ってるし 風邪なんて二度とごめんだ

外からは『ずるいです』なんて声が聞こえてくる始末

五月のテンションもやっぱおかしいよな……………。

……………

……………

……………

作戦の概要を説明された

先ずは五月が中野先生の足止め その間に俺達二人が姉妹の部屋まで気づかれぬ様に向かう

当初は俺も足止めに参加する予定で話は進んでいたが

五月がはつと思ひ出す『幸太郎君が父に話しかけるだけで怪しまれる可能性が有ります』

同意せざる負えない

あの人の前だと俺はついつい本音が出て何時も話がややこしくなる

『大船に乗ったつもりで任せてください！』

『不安しかねー』

一応は五月にあの人の相手を一任し 俺と風太郎は部屋の前までやってこれた

ここまで誰にも気づかれず 彼女達の祖父にも会うことなく無事到着

ばん

「な……………」

「五月の森だ」

扉を開けた先に広がる光景に絶句

見覚えのあるアホ毛が四本ぴよんと立っている

「コータローくん達 ノックくらいしてよ」

「びつくりさせちゃった」

「これはですね……………」

「丁度良かったわ あんたにはもう一度試してみたかったのよ

覚えているかしら五つ子ゲーム？」

「すまん 俺は存じ上げない」

「あっ お兄さんは入院中でしたね」

「お前 四葉だな？」

「ふっふーん なんのことでしょう」

「いいわ あんたの覚悟も試してみたかった 当ててみなさい 誰が

誰かを……………もう あの時とは違うわよ」

「これはまた すげー事になってきたな」

五月達？からの挑戦 本当の名前を当ててみると

過去の俺なら誰が誰かも完璧に見分けている

この五月が言うあの時とはまさに過去のリベンジも兼ねているの
だろう

本物の五月が言う 愛 それが試される大事な場面だ

風太郎はすげー面倒そうな顔だけど……………

—————

—————

—————

急遽開催された 第二回五つ子ゲーム 俺が入院中の間に第一回
が開催され

当時は風太郎と出くわした誰かを当てる為に行われたらしく

一応は正解までたどり着いたと自信なさげだ

筆跡や書き方で何とか見つけたが最後に五月と三玖を間違えたと

か……………

ぱつと見は同じだ 間違えてもしゃーない

それで今から簡単なルール

俺と風太郎が部屋で待機

残りの4人が一人ずつ部屋に入り 彼女がそれぞれ五月っぽく振る舞う

そこから正体を導きだすと言う 単純明快な五つ子ゲーム

偽五月の正体を探る手立てにもなるし 同時に彼女達の相談も行える

手っ取り早い方法でいきなり足を見せろと人間性を疑われる質問があるけど流石に控えた

「お一人め どうぞ」

「自己紹介ですね。私は中野五月、17歳、5月5日生まれのA型です」

「五月だな……………ありがとうございますでは お次の五月さんどうぞ」

最初の五月は自己紹介だ

近くで見れば本当に区別が難しいな

話が終われば退室させ 二人目の五月を部屋に通す

「好きなこと……………ですか……………。やはりおいしいものを食べていると
きが幸せですね」

「ありがとうございます では お次の五月さん」

二人目は好きな食べ物に関する事を言ってくる

一番目の五月と顔も些細な仕草も同じだ……………

特に可笑しい点はない まあ五月が二人いるのがおかしいけどさ

「なあっ?!?そんなこと答えられるわけないじゃないですか!!上杉君!
女の子にそのような質問をするのはいけません!どうかしています
よ!!」

三人目の登場でいい加減風太郎も口を開く

ある質問を投げ掛ければ三人目は顔を真っ赤に怒りだす

ゴツン

「いて」

「すみません 弟が では最後の五月さんどうぞ」

「どうも 上杉君 幸太郎君」

「くつそ 全然違いがわからねー」

「おい 落ち着け冷静さを失えば判断が鈍るぞ」

弟の反応はもつともだ ここまで4人 全員が五月だ 紛れもない中野五月

些細な違いすら見つけられない 相手がぼろを出さん限りは何が違うかも……………

一応は俺なりに判断は出来ているんだが、自信はない

「あのー…・質問がないなら、もう行ってもいいですか？」

「おっと 悪い悪い」

「おう 質問か……………聞きたい事がある なんで全員五月の変装なんてしてるんだ？」

「ああ……………確かにな 最初に聞くべきだったな」

もつともな疑問だ 五月が増えたせいで俺は五月忍者説を疑った程だ

実際は全員が五月の格好で行動し 俺たちが勝手に翻弄されていた間抜けな話さ

「えっ……………えーつとですね」

(もしかして この五月)

「話すと長いん……………の ですが えつと……………」

別段難しい質問ではない

疑問に思っていたその答えを教えて欲しいだけ その簡単な質問で突然口ごもる4人目の五月

風太郎曰く ある四番目の四女の四葉は嘘が下手で演じるのが苦手とか……………

彼女は話し始める 五月の変装をせざる負えないのか……………
当時の五つ子は全員同じ見た目 同じ髪型 趣味や服装まで全く
同じ

自他共に認める 仲良し姉妹だ 当然そんな仲の良い姉妹を見て
祖父は大変喜んでいたとか

そんなある日だ 一人の少女が別の格好をし始めた……………。

「ふーん どんな格好だ」

「それは 今と同じウサちゃん リボ……………」

「確定です 四女です この子は四女です」

「はっ……………お前四葉だろー!」

「な なんのことかわかりませーん」

四葉だと確定した 本人に暴きやすいなこいつは嘘が下手つてレ
ベルじゃない

自分から自爆していきやがった……………

四葉四葉と何度も呼ばれるが本人は『五月です』ともうメツキ?
が
れてきてるぞ

まあ ちゃちゃを入れるのはここまでだ

五月（四葉）は話を続ける

彼女達が何故五月に変装しているのか

その理由は 仲の良い姉妹が急に姿を変えた それが祖父には衝
撃的だったらしく

何日も寝込む結果に陥り 祖父を元気づける為に

全員の見た目を一致させる そこで選ばれたのが五月だった 一
番に変装もしやすいと…

ただ それがどうも四葉は苦手だったと話している

『ちゃんと変装できるか不安でした』それが理由でここ暫く様子が
おかしかった

これで四葉の悩みは聞けた

彼女は誰か演じることが極端に苦手なんだ……………。

質問が終われば風太郎は祖父がどんな人物か聞いている

「とても 優しい人ですよ 私も大好きです」

「じーさんもお前らが大好きだ」

「確かにな…」

「お前は何を言われたんだ…」

風太郎やけに祖父を怖がっているが

理由は口にしない 『気をつけろ』とだけ言えば口を紡ぐ

――

――

――

全員の話聞き終われば 一度部屋に集め直す

ここで俺たちはミスを犯した

五月（四葉）に目印も何もつけてはおらず 全員が同時に座ったた

め

最早誰が誰かも区別がつかない……………露骨に視線を逸らせば四葉だと確定するんだけどな

「あ……………あれ どれが四人目だ」

「はあ……………ガツカリ だめみたいね」

「まってくれ もう一度チャンスを」

「うーんと 俺の勘だけど……………って 誰か来た！」

コンコンと伏間が叩かれる

バレたら今までの事が全部パーだ……………

「風太郎 お前は炬燵に隠れろ！」

「おっ おい 押し込むな!？」

「俺は ……………よつと」

『『ええー……………!!』』

流星にあの中に二人では入れない

咄嗟の行動だ 俺は空いている二階の窓から飛び降りた

そのまま落ちる何て事はしない 手すりにつかまり懸垂のような形でその場に留まる

普段からバイトで鍛えてるから良いけどさ 良くもまあこんなバ
カな真似したよ

(左手がきついな……………)

—————

—————

—————

「お おじいちゃん」

「おはよー」

「……………」

「え?え?」

「何か心配してるみたい」

「安心して 今でもそっくり仲良しだから」

上杉幸太郎がベランダ飛び降り

落ちない様 手すりに捕まり 上杉風太郎が炬燵の中に隠れる

何とも不思議な光景だ

だがこれは風太郎からすれば好機 この中ならば誰の足が怪我を
しているのかも確認出来る

兄には質問を控えるよう言われ あの場では偽五月を割り出せず

五つ子ゲームも答えられず仕舞い 踏んだり蹴ったりだ

姉妹達は悟られない様祖父と会話をし何とか誤魔化す

彼女等に祖父も一度は侵入者を疑ったが 彼女達以外居らず 先
ほどの叫び声も

『て テレビです』と五月(四葉)が苦手な嘘でその場をやり過ごす

とっさの行動だと言え まさか飛び降りるとは予想外

未だに目を疑う

約二名は心底心配しており 何度か視線をベランダに向け

手があると確認すれば 安堵のため息がもれる

(こわ……………流石に足がぶつかるな)

中をまさぐる風太郎はくすぐったさで動く彼女達の足に何度も蹴

られるが

偽五月を見つげられる絶好の機会 諦めず続けた

(あった こいつが偽五月だ！)

遂に足に傷がある人物を発見 彼が言った通り絆創膏が張られて
いる

一応顔を出すか五月と同じ容姿で判別は出来ない

(あとは 幸太郎の救出だ)

――

――

――

10分程経っている いい加減左手は限界だ

現在右手のみで全体重を支えている ひええー 落ちたらひとた
まりもねえーな

部屋を確認したくても顔を出せば見つかったらもうし

下の階には流石に着地出来る箇所は見当たらない……………。

スル

「あつ……………やべやべー！」

「っ！ お前は無茶し過ぎだ うぐぐぐ」

「サンキュー 助かった」

手汗で滑り 手すりから手が離れ 危うく天に召される寸前
息を切らし 弟が俺の手を掴む

「はあ……………それで見つかったか？」

「え ああ確かに 絆創膏をつけてた って お前は今度はあんな真
似するなよー！」

「はいはい……………それでその怪我してた 五月は勿論目印は」

「あつ！ 行ってくる」

ベランダに倒れ込む俺たち

まさか温泉旅行で命を落としかけるとは想像してなかった

流石に俺の態度が癪に障ったのか軽く叱られた

助かったから万々歳と…言えれば良いんだがあれはやり過ぎたと反省はしている

風太郎は叱り終わればその怪我した五月を捜しにさっさと部屋から出て行った

「俺もその人物を探すかねえー……………」

「ちよつといいですか？」

「五月じゃねーな……………」

「むー」

「えっと 待ってくれ 昔なら判別出来たんだ」

「今は分からないんですか？」

「違う そうじゃない……………うーんと」

「私は怒ってます すごく」

入口付近では五月ではない姉妹の誰かがむくれっ面で待ってる

一体この五月は誰なのか頭の隅には出ているが中々答えには行きつかない

いやー四年前ならすぐに出ただけだな

一言『怒ってる』と言う 台詞を聞き

誰なのか回答に行きつけた…。

俺がこんな無茶をやらかし それを本気で怒る人物は姉妹の中で二名

一人は未だ中野父と話し合い中だ となれば彼女しかいない
答えが分かっても怒りは収まらない はあ……

「あつ……………三玖か！」

「ゴータローの馬鹿馬鹿 あんなことして！」

「悪い悪い 風太郎隠すので手一杯でき 逃げる場所がベランダしかねーからよ」

「今度は怪我じゃすまないんだよ！ 何でそんな軽くすませるの！」

「そんな つもりはねえーんだけどな 悪かった お前には刺激が強すぎたな」

「本当に無茶だけはやめて絶対に……」

「ごめんな」

一度三玖の前で死にかけた 責任を感じる三玖にとって あの行動は軽率すぎた

泣かせないと言いつつ同じことを繰り返す とことんダメな男だな

怒らせておいて足に怪我があるかを聞くところじゃねーな

ぽんぽんと頭に手を乗せ『もうしない』と彼女と約束を交わした

「コータローは本当に無茶ばかりだよ」

「こいつは性分見たいなもんだしな……。でもあんな真似はしな
いから 怖い顔するな」

「ふん……。でも許す コータローもビックリしたでしょ お父さんが
いて」

「あの人なりに心境の変化でもあったのかとな……」

「実はね コータローが家に来た日 フータローとぼったり出くわし
て 同じく応募してみたんだ

住所の欄は間違つて 全員で来ることになったけど」

「それでも あの人が来てるんだし……。何か変化あったんだろうさ」

「コータローはお父さんと何かあったの？」

「お前は五月から聞かされてると思うけど 俺の担当の一人が中野先
生だ」

「うん 知ってるよ……。でもそれ以上に二人は何かありそうな気がする」

あの人との関係なんて医者と患者以外何も無い

下手な事言つても混乱させるだけだし……。何時か三玖に話す機

会でも来るのかねえ

「特にはねーよ　それで　お前の悩みってなんだ　あるなら俺に相談してくれればいいのにさっ。」

「ダメ　コータローの力で当てて……………」

「お前の悩みねえ……………」

バレンタインのお返しはした　確かに一週間程遅れた
それを根に持つようなタイプでもないし　味にいたってはこいつの好みの抹茶だ

やべえ……………全く見当がつかないんだけど

うー……と深く考えるが　こいつと最後に会ったあの日の言葉

『コイ』が悩みに関わる事ならなおの事意味が分からねえ　コイって鯉か？

「お前も　孫に手を出すのか　殺すぞ」

「いつ！　しませんよ」

背後からドスの聞いた声　手を出せば殺すとまで言われちゃった

「どうも　えっと　こいつらのお爺さんですよ」

「三玖よ何もされとらんか？」

「う……うん」

「……………」

あの爺さん　一発で三玖だと気付きやがった

伊達に五つ子と過ごしてねえな

「って　関心してる場合じゃねえーよ」

「コータロー？」

「少し用事が出来た　後でまた会おう」

「無茶だけはしないでね！」

「了解……………爺さん　話があんだ！」

足の事はまた後で良い

あの人は五つ子を見分けられる　そのこつを是非聞きたい

「おう　幸太郎　お前も弟子入りか　さつき四葉といたんだけど

あいつが何も言わないのに一発で見抜いたんだ」
「俺は三玖だ………すごいなこの人は………」

――

――

――

中野姉妹の見分け方を祖父から聞きだそうと行動に移す彼等

それと同時に

温泉に入るのは 中野二乃と中野一花の二名

自分に相談があると部屋からここまで同行を頼んだ妹の悩み

それは聞かずとも彼女には分かっている 上杉風太郎への告白の
件だろう

好きな人が出来た その人物との出会いは最悪だった

突然家に現れ 家庭教師と名乗りだし あまつさえ自分を騙した

その男

やはり 風太郎への恋愛相談

聞いていると何処か胸が苦しくなる 何故妹はここまで素直に好
きな人に告白まで迫れたのだろう

自分が想うあの少年に対して自分は何も出来ず 距離を置く事で
気持ちに整理をつけた

そのつもりだった 彼の発した言葉 『恋か………』

その言葉を聞いて秘めていた気持ちがあつても溢れそうになった

でも 彼には 彼を想うのは三玖だ 三玖じゃないといけないん
だ

それに 彼を良く知る五月だって口には出さないだけで傍から見
ればカップル

自分が足踏みをしている間に 妹は一步先に進んでいる どうし
て？

「告白されたら 多少 意識したりするのかしら?」

「私の経験では……………だけど ごめん」

自分の経験 そんな経験あるのだろうか……………

「そういうことはなかったかな」

(フータロー君に変化があれば コータロー君だって気持ちが変わるかもしれない)

今はこのままでいたい いさせて……………!)

恋と呟いた彼だ 弟に恋人が出来たなら きつと彼も自分の発した言葉の意味に気づく筈

そうなれば今のように彼といられる時間は無くなってしまう

現状維持 足踏み何かじゃない

今の関係が自分や彼にも一番なのだ和一花は遠回しに二乃を誘導している

妹の恋路は素直に喜ぶべきだ でもそれを喜べない自分がここにいる……………。

妹も初めての気持ちと自分が告白した その二つで舞い上がって冷静な判断が出来ていない

そうに違いない 一花は得意とする言葉で二乃を引き留めようと必死だ

「告白だけじゃ 足りない……………と え!? いや……………そうじゃなくて

出会いは最悪だったんだよね……………本当にその人が好きなのかな?」

「最初はさ 兄貴と同じ私の大事なものを壊す存在としか見て無かった だけどあの夜……………」

王子様見たいな あいつを別人と思い込んだまま 好きになっちゃった

そして理解したのよ 私が拒絶したのは彼の役割であって 彼じゃない」

だめだ 駄目だ 妹は止まらない 自分の今の言葉ではもう止められない所まで行き始めてる

何か手立てはないのか焦りの色を滲ませる一花

対照的に二乃はスラスラと自分の気持ちを赤裸々に語る

「それにき 憎からずコウ…上杉もき 思ってるけど 好きなのは弟の方

王子様って気づいてから歯止めが効かなくなっちゃった 本当は一花に相談する前に

兄の方にも相談するつもりだった あいつはきつと応援してくれるから」

(やめて 二乃 彼にだけは言わないで きつとコータロー君は二乃を応援する 祝福する 自分が出来事なら何だってする……………それが引き金になりかねない)

彼に言う前に自分に相談してくれた事を一花は心底安心した

何が引き金で彼が動くか、三玖が動くかもわからない

だから とめないよ 二乃はここでとめる

彼と同じく風太郎にも恩があるここまで自分達を先導した一人だ、本当なら二人は報われるべきだ…でも今だけは許して欲しい

「だからって好きになつたって……………そんな都合が良すぎない？」

きつと今の姿を幸太郎が見たのなら幻滅されている 最低な姉だ

応援してくれる彼に会わせる顔がない でも彼の為にもこの関係は現状維持が最善な選択

その筈……………みんなそう望んでいる

(それにこのままだと 本当にコータロー君はいなくなってしまう……………)

「そうよね こればかりは 自分でも引いてるわ だからって 諦めるつもりもないけど

だって これは私の恋だもの 私が幸せにならなくちゃ意味ないわ」

「もしも！ その恋で何かが崩れるとしたら……………大切な関係とか」

「うーん……………今の関係……………ねえ そうね 悪いけど無理 強引だけど

その関係や他に好きな人がいても 蹴落としてでも叶えたいと思っっちゃう」

(とまらない 恋の暴走機関車だ!! 話も聞いてくれない! 相談つて言ったのに!)

最早 聞く耳持たない 自分が何を言っても二乃は二乃自信の気持ちを言うだけで

参考にすらしようとはしない 一方通行 投げたボールは戻ってこない会話のデッドボール

自分ではもう妹を足止めする事は出来ないのだと一花は実感させられた

「あんと話せて良かったわ やっぱ告白だけじゃ足りないのね」

「何をするつもり……?」

「うーん、手を……決定打にかけるわね……抱きしめて それでもわからないなら……キスするわ!」

(妹が分からない………)

更に同時刻 五月はたった一人で父親の足止めを未だ続けていた

(幸太郎君 いつまでここでお父さんと話せばよいのでしょうか……? まだ朝ごはんも食べていないのに……… そろそろお腹が空きました………)

第七十一話 不良少年とスクランブルエッグな恋模様3

「今 来たのが一花と二乃」

「えっ」

「まじか」

「あれが三玖」

「えっ」

「へえー」

「その隣が四葉だ」

爺さんに弟子入りした風太郎と俺は釣りをしながら遠くを眺める

ここから少し離れた場所には、姉妹達が浜辺で遊んでいるが、普通に判別するのさえ難しく中々解にたどり着けない俺たちはうーんと頷く一方だが、爺さんはたんと彼女たちの名前を口に出す。離れていれば適当言えるし直接見なければ本当に当たっているかも分からないが、疑う余地もなく当たっていると直感でわかる…、

流石と言うべきか、きつと爺さんが言ってる事は間違いない 一応は俺もこつを掴めたのか些細な違いは見えて来たつもり………正直自信がない

まあー何だろうな どう表現し言い表したら良いんだ…ただ何かを掴む一歩手前までできている…あと一歩何かが足りない、その一歩が出ず 脳内を過ぎるのは五月のあの言葉『愛です！』自信満々な彼女のあの言葉は確かに姉妹を見分ける中で最も重要な事なのだと思う…。

「うーん……。出かかっているんだがなー」

「俺は、全然わからん」

昔の感覚を取り戻し始めて来た俺とは違い

風太郎はどうすべきか 判別は最早足でするしかないのかと弱気な発言が目立ち始める

「焦るな………」

「いや 無理だろ 爺さんと居れば何か分かるかと思ったけど なん
でああまで言えるんだ」

焦ってばかりでは足元が掬われる 俺たちは何度その間違いを起
こしてきただろうか

『とりあえず 冷静に平穩に』何の役にも立たないアドバイスで弟を
落ち着かせる

浜辺で水遊びに興じていた四名はそろそろここまで歩いてくる

間近で見てもやはり厳しいと言うのが、本音で俺の勘は鈍っている
いやいや：そうじゃないもつと親身になってあいつらと向き合う
べきだ

以前と同じだ 何も変わっていない それに昔の俺は、全員の区別
は出来ていたんだ：。第一に勘で見つけようとするのが、そもそも間
違いだ。向き合えばだれがだか分かってくるはずだ……不安しか
ねーよな

ともあれ区別する事も大事だが、問題は他にある 残りの四人が余
所余所しい原因を探らないといけない……。紛れ込んでいるであろう
二乃と四葉については凡そ理由は分かっていた 全く分からない
のは、五つ子ゲーム後に話した三玖と今日まで会えない一花の抱える
悩み事 点で予想がつかんぞ……。

「わぁ 沢山釣れてますね！」

「ほとんど爺さんの手柄だ」

「爺さん 何でも出来るよな………」

「これなんて魚です？」

「クロダイ」

「これは？」

「アイナメ」

「これは？」

「メバル」

(傍から見れば魚なんてどれも同じだ

余程魚の事が好きじゃ無ければ……………同じ どれも同じ)

「じゃあ、これは？」

「ああ、こいつは・・・キスだな」

「今じゃないわね…」

「何がだよ…？」

目の前の五月の一人が風太郎に寄ってきたが寸前で止まりぽつりと呟く

「見て おじいちゃんが大事引いてる！」

「幸太郎 も手を貸せって どうした？」

「えっ 凄！」

全員が大事に気を取られている間 耳を澄ませ 心を落ち着かせる

少しばかり俺も冷静に考えよう

楽観的過ぎた 気負い過ぎるなども言うが気負わな過ぎるのも考え物だ

「悪い 少し席外す」

「おお……………無理するなよ」

「お前こそな……………どれも同じ どれも同じ」

「はあ……………いつ」

ズキッ

「……………！」

「ん おいあぶねーぞ！ 怪我でもしてんのか」

状況整理とその場から一旦動き離れた場所で姉妹を観察でもと思つて乗ってきたバスの方まで歩いていった

すると近くに誰かが扮する五月がおり

さつきまで妙に焦っていたと思えば 急に安心したかのようにため息を漏らしている

どうしたのか、彼女のもとまで歩み寄る

すると突然目の前の五月が苦悶の表情を浮かべよろめきだし、転びそうな彼女をとっさに自分の方へと引き寄せた

「おい 大丈夫か？」

(コータロー君……………)

「ご ごめん ちょっとよろけちゃって」

「……………」

「昨日 足を痛めちゃったから」

「足を痛めたか……………こつちに来い」

引き寄せた五月は確かに足を痛めている

軽い捻挫だ 少々腫れもあるしこのまま放置も出来んな

自分の物持ちの良さには何度も救われる さて昨日の偽五月の時も絆創膏で傷を覆ったし

この五月には包帯だ

「包帯だけ巻いておく 余り動くなよ？」

「あ……………うん ありがとう」

直観だが こいつは四葉と三玖ではない気がする

自分でも何故だかそんな気がしている 表情はどれをとっても全員同じなのにな……………

「なあー 少し聞いて良いか？」

「何かな……………って隠れて！」

「な なんだー！」

「おーい 幸太郎どこ行ったー」

この子が何時どこで怪我をしたのかそれを聞けば正体は分らずも

彼女が偽五月かどうかは判断出来る筈だ 傷の箇所が違う 偽五月じゃないと言う考えは軽率だ

彼女が質問に答えようと思った 刹那 凄い力で体を引っ張られバスの後ろまで連れて行かれた 中野姉妹は怪力過ぎる

……………

……………

――
――

バスの裏手では自分の体に幸太郎を抱き寄せる

中野五月（一花）が赤を真っ赤に染めていた 心臓も高鳴り この
近きなら彼に聞こえてしまう

それでも咄嗟にこの行動に出てしまった

幸太郎を探す声の主は弟の風太郎 加え彼を観察する 二乃もい
た

何でか今あの二人と顔を合わせられない

二乃に対しては軽い罪悪か風太郎に対しても似たような複雑な気
持ちだ

昨日の話で余計に幸太郎を意識している一花は

二人の目から逃れる為とは言え何故かこんな行動に出てしまった

「おい 足怪我してんだ 動くなー」

「ごごめん でも今は少しだけ……………」

（何故だろう この状況と似たような場面に何度もあったような）

抱き寄せられる彼は一花の足を心配し声をかけるが

今のこの状況で彼女には足の痛みも分からずにいた

（なんで私はいっつも…。悪いことだってわかってるのに……………

フータロー君と二乃の恋を邪魔してるのに……………）

せめて 今の時間が続くよう祈る中 妹が自分より先に動き出し

気づけば彼女の恋路を邪魔する発言ばかり にも関わらず彼とこ

んな状況……………

許される筈もない これじゃ本当に姉失格だと

「まずは落ち着け ここまで顔が近いと余計に誰か分からんぞ」

（そっか 私が誰かまだ分からないんだ……………それなら
いっそ

こんな面倒なこと考えなくてもいいのに……………）

本当は自分だって 恋がしたい 目の前の彼に『大好きだ』と大声

で伝えたい

二乃と風太郎が付き合い 状況が動き今が壊れるくらいなら

いつそ自分が先に動いて彼に気持ちを伝えてしまおう もう考えも纏まらない

彼の呼びかけも聞こえない 耳が捉える音は自分の鼓動と静かになる彼の鼓動だけ

(コータロー君 私は君が……………)

近づけた顔 あと数センチで唇が触れ合う

「そこに誰がいるの？」

「幸太郎ー 何処だー！」

「！」

寸前で顔が止まる 先ほど祖父の所に戻った 二乃と風太郎が再び

近くまで来ていた この場をどうするか

考える事を放棄した彼女が問った行動は……………

「えい！」

「ちよー！」

ドボンッ！

幸太郎を海まで突き飛ばし 最悪の事態から救われた

「なにしてのよ！」

「幸太郎見なかったか えーっと 誰だこの五月」

「あはは 誰だろうね 上杉君さー 向うまで戻ろうか」

「なんで 俺は突き飛ばされたんだよ……………」

ぷくぷくと泡を作り 海上で漂う幸太郎は訳も分からずその場で頭を悩ませる

—————

――

「へっーくしゅん　ちくしょう訳わからん」

「お前なんで　海水浴なんてしてんだ」

「俺が知るかよ………はあ」

「ずぶ濡れですね　おに　幸太郎君」

「おい　こいつ　四女だぞ」

その後　漂う幸太郎が発見され　バスまで戻れば毛布を渡された
いまだ海水浴には早い季節　何で飛び込んだと呆れる弟だが本人
が一番驚いている

バスの裏手まで引つ張られたと思えば顔を近づける　何をするの
かと思えば

急に両手で海へと突き飛ばす　どれもこれも謎すぎて頭はパンク
寸前だ

(コータロー君　ごめんねー　今度何かお詫びするから)

「あいつと二人でもおじいちゃんの前だと何かと制限されるわね」

「ねえ　二乃別に今じゃなくても……」

「この旅行もお互い明日まで……2人きりで会えるチャンスがあると
したら……」

一花が離れていた間もあれよあれよと策をを巡らせるがどれも不
発

風太郎には全く効果の程はなく

この旅行期間の間に進展する事を望む二乃は何が一番に彼を振り
向かせられるか

その事のみを考え一花の言葉もびしょ濡れの幸太郎の姿も見えて
はいない

それ程までに風太郎への熱は上昇中　一花の不安は募るばかり

「…ねえ　一花」

「な なに？」

「夜になったらここを抜け出して彼に会いに行くわ。手助けしてちょうだい」

嫌な予感しかしない 今の暴走機関車の二乃は決して止まらない
自分の言葉は届かない……………徐々にだが確実に一花の心に靄が
かかり始めて来た

—————

—————

—————

宿に戻り 幸太郎は部屋まで戻って行く

声をかけようにも祖父の前で迂闊に動けず くしゃみをする彼を
ただ見ているだけだった

『その時ネツクになるのはパパね。だから一花は邪魔されないように、
パパを見張っていてほしいのよ。できるわよね？』

（お父さんは今おじいちゃんと話してる。もし私たちの部屋に来よう
としても、私が足止めすれば二乃に気付かれない。きつと…その時こ
そ、二乃はフータローくと密会することになる。そして…もしかし
たら…キスを…もうとめられない このままなし崩し的に状況は変
わっていく

今の関係が崩れていく コータロー君だって変わってしまう…

聞く耳無し 計画を伝えれば一花に父の監視を一任し

着替えが終われば風太郎の手紙を持って部屋へと走って行った

一人暗い廊下で体育座り 今までを振り返れば自分は人の恋路の
邪魔ばかり

本気で風太郎と向き合うとする妹の邪魔をして今に留まろう

ダメ元だ彼に近づこうも考えた 思い返せば返す程 自分はダメ
な人間だ

「こんなのコータロー君に応援してもらおう資格も 恋する資格もないよ」

自分の心を押し殺し 他人の恋に嫉妬して そんな自分が本気の恋をする妹の邪魔をした

もうあの少年と会う事すら一花には辛いものになっていた…。

「うー トイレトイレーっ。 一花だ こんな所で何して… あーっ
と漏れちゃうかもーっ」

チラ

「一花…？ どうしたの…？ 泣かないで」

「四葉…」

「久しぶりにあそこ行こっ」

—————

—————

———

「あっ お父さん気づいた みたい 後で怒られるかもねー

…ししし でもまさかこんな所にいるとは思わないだろうね」

(やばい どうしよう 二乃に頼まれてた通り 止めなきやいけないのに…)

二人は二階の窓から降りられる屋根の上で肩を並べ座っていた

下を見れば今まさに 父親が消えた娘達の捜索に動き出す

ここ暫くは傍観していたがそろそろ誤魔化しも効かなくなってきた

まさか屋根の上にいるとは思うまいと余裕の笑みを浮かべる四葉と違い

冗談を言える余裕は彼女にはなく、今もまだ葛藤している。会話がない。なんとか場を盛り上げようと、口を開いた途端に四葉は大きなくしゃみ

余裕はないが、寒がる妹に上着を貸すことくらいが出来る

羽織っていた上着を四葉に着せれば『大丈夫』とそう述べ

一花は父親を追おうとしている

もうダメだろう。せめて最後の願い聞き入れよう。一花が出した結論だ

一人で行くこうとする一花。でもそれを見逃す四葉ではない

何処か無理をしている。何でもかんでも背負い込む。今行かせたらきつと一花は傷つく

四葉は手を伸ばし、一花の裾を掴む

「無理してない？ 心配だよ」

「え……」

「気のせいだったら、ごめん。この旅館に来てから、昔の事、思い出したんだ……」

今回の温泉旅行、始まる前から不安だらけ

始まってからも不安は尽きない。そんな時ふと昔を思い出した四葉

ここで起きた様々な思い出や、祖父とのやり取り

何時も自分は怒られたばかり、彼女が語る昔話。一花は当時を振り返れば

『四葉はやんちゃだったから』その言葉が適切な筈だった

でも四葉は違ふとそれを否定した

一番に怒られ、叱られたのは、一花であったと

昔は今以上にやんちゃでガキ大将のような性格。おやつの横取り、シールの奪い合い

何時も何時も一花は全部取っていた。お転婆娘に母親も手を焼いていた

「遊びにくる。お兄さんも引つ張り回してたよ」

「あつはは そうだったね 彼は昔からお世話好きだから どうにも面倒かけっぱなしで」

(それは今も変わらない 彼にはずっと迷惑ばかりかけている…)

痛い所つかれた 苦笑いを浮かべる

「ま まあ……………そんな私も大人になったってことで…」

「不思議だったんだー なんで私は子供のままなのに 一花だけ大人になれたんだろって」

「…それは お母さんが死んじゃった後の あの痛々しい五月ちゃん
の姿を見てたらね

当然だよ お姉ちゃんらしくしないと」

「一花…」

母の死で一番に影響を受けた 五人目 中野五月

まるで呪いだ 死んだ母の役を自ら演じ 未だにそれを続けている

一番最後に生まれた痛々しい妹 彼女がそうだったのなら自分は少し先に大人になろう

母を装う彼女の負担を減らしてあげようと彼女は思いたった

気づけばこうだ 姉として 姉らしく そう振る舞う事が彼女の中では当たり前前の事になっている

どんな時でも自分は 姉 年上 大人 そ言いかせて来たんだ

そんな姉と言いつ張る彼女の前に 兄と言いつ張る彼が現れた それ
が自分を狂わせた

それでも自分を曲げず選択は常に妹たちの為 その筈だったのに
……………

「つて お腹から生まれた順なんだけど…」

「あはは 私が一番じゃなくてよかったよ… 一花が一番で良かった」

「五月ちゃんや三玖だって……………」

「ううん…これだけは言っておきたかったんだ 子供の頃の一花はガキ大将で

すぐに 人のものが欲しくなっちゃう 嫌な子だったけど
.....」

四葉は一花の言葉に首を横に振る

五月でも三玖でもない 一花だからこそ一番に生まれてきて良
かった

「私たち姉妹のリーダーだった.....あの頃からずっと お姉ちゃん
だと思ってたよ

.....って あれ？ なにが言いたいんだっけ」

「.....」

「一花だけ 我慢しないで したいこととしてほしいな.....か
な！」

我慢はしないで 自分達を先導する 彼女は何時だって辛い選択
を自分に強いて来た

それに文句は言うがけして弱音を見せない 自分は平気だと言
続ける

まるで何処かの誰かさんを見ているようで四葉は姉が心配になっ
ていた.....。

「私がしたいこと.....!!」

(ずっと 今が続いて欲しかった.....。

.....この一番心地の良い空間が変わってほしくない。

でも 本当は.....)。

『一花ちゃん ずっと一緒だよ 絶対に!』

『俺はお前の夢の為なら なんだってするさ お前は俺が支える だ
から俺を頼れ 一花』

(コータロー君.....コウくん 私は素直になって良いんだよね
君にこの気持ちを伝えても良いんだよね もう我慢しなくて良
いんだよね.....)。

「誰にも取られたくなかったんだ……………」

一人だけいた ずっと前から自分を姉だと見ない人物が突然現れては姉妹達を翻弄し

急に消えては自分を心配させる……………放つてはおけないあの少年

素直かと思えば隠し事ばかり 知らない所で妹の為に自分まで犠牲にする

お兄ちゃん……………上杉幸太郎……………

誰にも遠慮なんてする必要は無いのかもしれない 四葉の言う様に我慢の必要はない

変わらない今を変えてしまおう 彼だって一歩先に進んだんだ 自分も一歩先に進み

少しぐらい欲張りになってみよう

「?」 一花 さむー何で取るの!」

「実は私も寒かったんだー だから没収ー」

「ええー 一度は貸してくれたのにー」

「あはは さーて 部屋に戻ろうか 五月ちゃん達もいるだろうからさ」

「つて 一花 お父さんに用事あるんじゃない」

「ああ……………ううん もういいや」

(ごめん 二乃我儘な姉で……………それに今更間に合わないから)

四葉に羽織らせた上着を奪い取り

文句は受け付けないと彼女はさっさと窓から中に入ってしまふ

今風太郎を待っているであろう妹に謝罪を述べながら……………。

……………

……………

……………

中野父が二乃を捜しに行く直前にまで時間は遡る
最初から五月が自分を足止めしていたと気づいていた彼は娘の話
も聞くべきだ

あの少年の言葉を思い出し 少しばかり付き合っていた
でも それは少しだけ 五人いる筈の娘 帰って来たのは僅
か一人

残り三名は行方知れず 何とか一人だけでも連れ帰ろうと父自ら
出向く事に……………。

残った 五月 三玖は久しぶりに父に叱られ 少々参っている

「みんな どこに行ったんでしよう」

「はっ……………まさか コータローのそこだったりして」

「あははは こんな夜中に会う理由なんて……………」
(ダメです私は心当たりが多すぎます 話を聞けば幸太郎君はずぶ濡
れだとか

大丈夫だったのでしょうか 心配です……………)

彼女達に限って彼の元に行く事はないと結構失礼な発言が目立つ
が

もしそれが自分ならばと考えてみれば、あれやこれやと理由を重ね
向かっていたかもしれない

「……………三玖」

「何?」

「ただ待ってるだけなのもなんなので、温泉に入りに行きませんか?」
他の姉妹の行先は気になるが、黙って座るのも暇である

それに断る理由は三玖にはなく承諾すれば 五月と二人一階へお
風呂まで向かう

「あ」

「……で何してるの?」

一階では偶然にも風太郎 幸太郎 祖父に出くわした
五月と三玖を見れば訝しげにじーつと顔を見ている

「えーつと」

「うーん……………」

「三玖、五月」

「あーつと！ 今言おうとしたのに！ 先に言われたぜ 今言おうとしたのにー」

「風太郎 流石にかっこ悪いぞ……………ん？」

「ああの 彼と幸太郎君は何をしてるんですか？」

「中野さん」

「むー五月です！」

「本物だな ああー 実はな 風太郎と二人爺さんに弟子入りしてさ
お前らを見分けようかと 俺もお前の言葉で色々と考えてな
……………」

「おい 幸太郎行くぞ」

「おっおう……………じゃ また おやすみ 五月 三玖 おーいま
てー」

幸太郎から事情を聞けばやや複雑な表情になった

偽五月を見つける為には必要な事だと彼は五月に言っただけで聞かせる

「コータローたち 大変そうだったね」

「三玖たちも 何もこんなタイミングで彼等を試さなくてもいいじゃないですか……………」

「元は二乃が言いだした事」

「事情は聞きましたが タイミングが悪すぎます

しかし呆れました 彼だけではなく幸太郎君まで」

偽五月探しの為に足止めをしていた

今進行しているのは誰が誰なのかの見分け方

ここに来るまであらまは聞かされたがここまで真剣に取り込んでいるとは

「仕方ないよ……一度コータローは全部忘れたんだから

…それに私はコータローに見つけてもらいたい」

「三玖……………」

上杉幸太郎には記憶がないそれは何も会わない五年間で忘れていた自然な形ではない

彼女Ⅱ中野三玖を交通事故から庇った際に頭を強打した彼は、事故の前後の記憶のみならず中野姉妹と関わっていた全てを忘れ思い出せないそれが、何かも分からずあの日食堂で再会する日まで悶々と生きていた

林間学校での一件後、病室で事故と進級の事を話すが、記憶に関しては彼は一切触れずいる

三玖は五月同様に彼が、あの一年どう過ごしていたのかも知っている人物であり 隠そうとする彼を見ると不安になってしまう 彼が大切にしていたあの日の思い出を奪ったのは他でもない自分だと三玖はずっと後悔していた

「その事で三玖が自分を責める必要はありません…。間接的となつてはいませんが、原因は信号無視をし彼を轢いた、あの乗用車です…お父さんもそう言っていたはずですよ？」

「でも…。考えるよ、事故さえなければ、コータローは怪我もしない記憶も忘れる事はなかったって……………」

「五つ子ゲームを通して幸太郎君が、本当に覚えているか、三玖なりに知りたいそう言った意図があるんですね？」

コクリと彼女は頷いた、確かに突然起きた五つ子ゲームだが当時を良く知る三玖にはこれはある意味で挑戦なのだろう

彼がちゃんと記憶を戻しているのかはたまた未だ誤魔化し続けているのか……………」

当事者としてそこは知っておくべきというのが一番の理由と口にする

「聞けば、きっと彼ははぐらかすから…」

「幸太郎君はそういう人ですからね……自分だけ何でも背負い込む……本当に困ってしまいます」

（五月も似たようなものだけどね……）

――

――

――

「そう言えば 幸太郎君は三玖と再会した時には覚えてなかったと言っていましたね」

「きつとあれは コータローなりの誤魔化し でもちゃんと名前前で呼んで欲しかった……中野さんって呼ばれ方は寂しい」

「三玖 その気持ち痛い程わかります……」

「それにさ フータローにも少しは期待してる 付き合いは半年で普通なら無理だつて思う……でも頑張ってるみたいだし」

「そうですね 今は二人に任せま……!?!」

姉妹の相談から目的がわかり始めて来たが彼が本気と言うのは二人はちゃんと理解した

この一件は二人にまかせ 自分たちは温泉に入ろうと脱衣所に入り浴衣を脱ぎ始める

会話も交えながら浴衣を脱ぎだす中で、ふいに五月が言葉に詰まるじーつとある一点を見つめ……今回のある騒動を知る五月は当然それを見て驚き、何故なのかとその場で頭を働かせる

何事かと自分を凝視する五月を不思議そうな表情で返す中野三玖その彼女の右足だ、そこに視線が止まる

そこには絆創膏が貼られていた

「どうしたの五月？」

「三玖 その足の絆創膏は……偽五月の正体は三玖だったのですね」

「そっか そのままだった コータローが心配するからさ」

「三玖 何故ですか 一番協力的で 上杉君の勉強にも参加していたあなたが

それに二人で話した筈です 幸太郎君の傍を離れないと……何故関係を断とうと?」

「その前に謝らなくちゃ とつさとは言え あんな嘘を

まさかフータローがいるとは思わなくて いや これは言い訳か
……………」

本当は三玖としてコータローに大好きって伝えたかった その為に手紙を読んだ

あんな事言うつもりで行った訳じゃない……………」

「み 三玖って 幸太郎君がす 好きだったんですか!」

その言葉は中野五月には衝撃的過ぎる言葉

まさか彼を好いている人物が自分の姉妹 彼の事を相談する間がらの三玖が彼に恋心を抱くなんて

何かと、疎い五月は全く想定もしていなかった……………」。

「え 今更 あれだけ二人で話してたのに五月は気づいてなかったの……………」

「それは 三玖が幸太郎君に助けられたから恩を感じているのだと」

「……………鈍い」

「ああんてことでしょう こんなこと皆が知ったら! 驚きます」

(多分 みんな知ってる……………五月はどうなのかな?)

「で でもいいのでしょうか 幸太郎君ですよ 私たちの兄のような人で

今は教師と生徒です」

「だからだよ……………コータローは私たちを妹としか年下の後輩としか見てくれない

彼を見守るならそれだけで良かった…。」

「……………」

「私が一番の生徒に 妹以上になれば良いと思ってた」

停滞する時間 今の彼は三玖や五月を含め全員を恋愛対象として見た事は一度とすらない

彼にとって中野姉妹は何時までも手のかかる妹 それは不変だけれど三玖はそのままではいけない 今動かないとこの関係は進まない

だから期末試験に全てをかけた 結果は五月も知っている
一番になれたのは長女の一人花 三玖は二番という結果に終わった

「こんな私でも自分を認められるチャンスは誰にでも公平にあるんだって

結局が一番になれなかった…。その一縷の望みも潰えた今こうするしかなかった

今のままだとコータローの傍にいれてもコータローを守ってあげられない

同じ目線でコータローの隣に立ちたいの……もう守られるだけはいやなんだよ」

自信を無くし 一人だった自分に励ましの言葉をくれたのは

今の幸太郎とあの日自分を助けた幸太郎 同じ人間に二度も救われた

自分がここにいられるのは他でもない彼のお陰 感じていた恩は何時しか恋になり

愛へと変わっていた

ここから先 もっと彼は無茶をするだろう

このまま彼の生徒で終われば、彼に守られるだけ けして彼と同じ目線で物事を考える事も

彼本人を守る事すらできない…。

彼に言った『この関係に終止符をうつ』それは三玖の心を動かすには十分過ぎた

「勿論 五月との約束も守る コータローを一人にしない 彼を裏切らない

彼が困っていれば手を差し伸べる 私の本位だから」

「約束の件感謝します…三玖の気持ちもわかりました。そのうえでお願いです」

「話して…」

「はい。明日の旅行の最後の日に…幸太郎君に会ってください

そして上杉君とも会って欲しいのです。あなたにばかり負担をかけてすみません」

「いいよ。自分で蒔いた種。それに私がフータローを見定めるチャンスでもある」

決して進まない停滞した今の状況それを動かしたい

三玖の気持ちを五月は全て聞き入れた

彼女は話す。それは。この半年だけではない彼に助けられたあの日からの延長戦だ

それに幸太郎だけではない。風太郎の覚悟も確認する必要がある。あつた

彼女が家庭教師に協力したのは幸太郎からの説得だ

本物の家庭教師である風太郎と本当の意味で分かりあう為にはここで彼の答えを見ておきたい…。

第七十二話 不良少年とスクランブルエッグな恋模様4

爺さんは言った

相手の仕草と声 ふとした癖を知る事 それはもはや愛だと
そして何故見分けたのかとも

悩み悩んだその夜に五月からはいはの携帯に電話があった

明日の早朝 大広間で彼女が待つと

そこで俺と風太郎が 順番に正体を見破って欲しいと

先に見破った方は次の人物が正体を見破るまで その人物との接触を禁ずる

ようは答えを聞かないようにするためだ

そんな真似俺たちはしないと五月は言ってくれたが、そうして貰った方が、俺たちも安心して 偽五月と話が出る

――――

――

――

「おはよー お前が初日に俺とぶつかった五月って事で良いんだよな？」

「はい」

「了解だ よし 先ずはお前が誰かを知る必要がある 質問いいか？」

「どうぞ…幸太郎君」

五月の指定した大広間に入れば既に五月（偽）が待っていた

最初に彼女と対面するのは俺であり 風太郎はこの会話が聞かえない、少し離れた部屋に待機させてある

俺が、終わり次第ここにいる五月が、本物の五月に連絡し更に本物

の五月が、電話でらいはの携帯を持つ風太郎に連絡する流れとなっている

「五月からも聞いてるだろうし それも話す」

「お願いします」

「四葉の悩みはこの旅行自体だ ちゃんと変装できるかが不安だったそうだ

あいつは気を遣う性格だ それにお前が四葉だった場合この時点でぼろが出る」

「正解です」

よし 一番わかりやすいが確実な問題だ

確かに四葉は変装を苦手として ここに入った時点であいつ本人がぼろ出す

だが目の前の五月は決して表情を変えない

ここまで完璧に演じきれもしないだろう…。

「続いて二乃だ これ関しては凄く悩んだ 見た目の判別もアイツにつける…マニキュアか？」

「ペディキュアです」

「ああー それな そう言ったものでも俺にはわからん」

「お手上げと言うわけですか？」

「お前が二乃じゃないってのは分かるんだよ

でもそれを確証出来る証拠を俺は何も持ち合わせていない」

二乃を判別できる 確固たる証拠はない

この数日 旅館で二乃と接点が多かったのは風太郎の方だ

俺がまともに会話したのは 初日山の上 そして五つ子ゲームでの会話

故にここから先は憶測と俺の勘 それを頼りにこいつが二乃ではないと言う前提で進める

「声のトーンだよ 変装してる時の二乃は声も完璧に真似できる俺はそれで何度か痛い目を見ている

その声のトーンだけどき 二乃は何故か俺を相手にすると必ず

声に力が籠る

怒ったような　そこから構って欲しいような　小4の記憶が戻ってから余計だ　俺にはお前が二乃だとは思えないんだ　悪いな　凄く浮いた答えになつてさ」

「……それが答えですか」

「俺にはそーとしか言えん　お前が二乃には見えないんだよ」

「……いいでしょう正解です　では二乃の悩みと言うのは？」

「それに関しては　あいつのプライバシーだ　心当たりはあるが言えないんだ」

一応は二乃ではない　正解は出来た

そして二乃の抱える悩み　俺には見当がつく　それは風太郎への告白だ

期末試験が終わつてすぐに店で二乃は風太郎に告白していた

好きだと言つた人間と言われた人間が同じ旅館に泊まるんだ　平静を保つのは至難の業

二乃にいたつてはそれを隠そうともせず堂々と風太郎に言い寄っていた

目の前の五月は納得してくれたのか『続けてください』と促す

その前に一つ質問

「俺がこの旅館で最初にあつた事件はなんだ？」

「えっ　それは偽物の五月の件では？」

「よし　お前は五月ではない事が確認出来た」

「??」

五月が知っている俺の悩みは　それは封が切られた俺の手紙

盗み見た人物についてだ　本物なら『手紙関連ですね』と即答していただろう

事件自体も偽五月と出会う前に起きたと本人も知っている

この事を知らない　ならば　こいつは五月ではない　一応確かめる必要はあつた

「それとな　お前が一花ではない　それも俺には、分かる」

「！ な 何故ですか？ 確証はあるんですか」

「呼び方や好きな物 そういった誘導尋問もあるだろう けど 何か違うんだよ

覚えてるか 昨日釣りに行った事 お前らは海辺だったろ」

「はい それは勿論」

「その時は ある五月と話す機会があったんだ その五月は足を捻挫していた

包帯を巻いた筈だ まあ それに関して言えば取っつてしまえばそれまでだ

傷だって化粧品で隠せるだろう」

「なら 何故です？」

「五月と名乗っている 一花は何故か俺と少し距離を開けようとするんだ

同時に距離を詰めようともしていた 何か悩んでいるって感じさ」
個人的な見解だ あれを一花と定義した場合 色々と納得が出来る

一花は何故か行動では、俺に近づいて来る癖に話すと途端に距離を開けようとした

元からその違和感を感じていたが、あの爺さんと行動してるうちに色々と見えて来た

「だから お前は……… 三玖だろ お前は分かるんだよ 実は最

初の夜に会った時から

偽五月に違和感があったんだ 偽五月は本物と同じ 俺に優しく語り掛ける…話しているとき すげー心が温かくなるんだよ

今それと同じ気持ちを感じてるんだ…だから

お前は三玖だよ 俺にはお前が分かる 違ったか？」

――

――

――

『三玖 偽五月として幸太郎君の前に出る際の注意として 少しきつめの話し方をお願いします』

『そうだね 流石にコータローにも気づかれる』

『普段のままなら 彼は感づきます 私から話が来たのなれば 三玖が偽五月だと言う答えに行きつきます だから悟られないよう 言葉に最善の注意を……………』

五月との約束は守っている 普段と違い棘のある話し方

口調も普段の五月より更にきつく 守っていた

コータローの境遇を考えれば この接し方はしたくはなかったでも彼が私までたどり着くには

必要な事 だから心を鬼に……………

その筈だ そうしていた筈だ

紛れもない近寄りがたい雰囲気を出し 彼と話し 四葉や姉妹の事を聞いていた

コータローも自信なさげに自分が感じた事を話し 最後に残されたのは

私と一花だった

でもコータローは 私は一花ではなく 三玖だと一発で見抜いた

何故なのか? 『お前と話していると心が温かくなる』

……………

『お前は俺に優しく語り掛ける』……………

何でかな……………何で分かるんだろうね

あなたはずっとそうだ 昔から ちゃんと私たちを見てくれていた

初めてやった五つ子ゲーム あなたは全員を言い当てた

二回目の五つ子ゲーム あなたは一花と私が入れ替わってる事に気づいた

『何故か 分かったんだよ 三玖ちゃんと一花ちゃんが違うって』

どれだけそれが凄い事か彼は分かっているまいだろう

例え友人でも気づけない 些細な間違いすら分からない 話した
だけでは誰もが同じ

みんなそう答える そんな中で君は私を見つけてくれた

照れくさそうに頭をかいて 私の答え待つ 君に私はどう答える
のが正しいだろう？

何が良いコータロー？ 私が何をすれば あなたは喜びますか

.....

—————

—————

—————

「当たり前 私は三玖だよコータロー！」

「おっと！」

ドサ

答えを待っていた 彼女が本当に三玖なのか

俺は俺の直感と自分の記憶と心を信じた

一花ではない お前は三玖だ

数分待った 待って顔を覗き込んだ

その時だ 彼女が笑顔で俺に抱き着いてきた

とっさの事で反応が遅れそのまま押し倒された

「良かった.....やっぱり 三玖だった」

「ねえ.....一つ聞いて良い？」

「なんだ 俺が言える事ならいいぞ」

「私の悩みって何かな？」

「それな…………一花もそうなんだが実は全く見当がつかない

最初はバレンタインのお返しが遅れて怒ってるかと思っただ」

二名の抱える悩みについて俺は答えに行きつけない

一花の事だ仕事関連かと思えば俺の勘が違うと語り掛けるなら何だと聞いても答えは帰って来ない

残った三玖はさらに謎だ まともに会話をしたのが五つ子ゲームが終わった後

だから俺はあの日プリンを差し入れに向かい 三玖にはバレンタインのお返しをした時

発した『こい』という言葉にこそヒントが隠されているのではとずっと考えていた……………。

「違うよ ちゃんとお返ししてくれたから」

「だよな ……………そこで思い出した

あの日お前が言った言葉『こい』って」

「！」

「だからさ……………俺は調理師免許を取ろうと思ってる」

「えっ？ コータロー何を言ってるの」

「鯉が食べたいんだろ だからさその為に 魚の調理師免許 取ろうかなって ……あの後色々調べて 調理法も結構って三玖？」

「あはははは…………コータローはおバカだね」

「え なんか違ったか」

「何でもかんでも真剣過ぎ……………」

「真剣に考えるさ 三玖の事だぞ？」

「コータローは本当に 鈍いね」

「??」

(コータローは教師であり兄のような人 私は生徒で妹のような存在
それは変わらないのかもしれない でも全部変わらないなんてことはないんだ

私を見つけてくれてありがとう コウくん)

――
――
――

その後風太郎の試験も行われ

あいつはあいつなりに姉妹を見分け

『俺にはお前が三玖に見える』

逃げる事無く三玖の正体を看破

結局 悩みについては俺と同じく答える事は出来なかった

一旦別れる前に俺は三玖にある質問を投げ掛けた

五月との相談でこれは偽五月事件が解決してからという決まりに

なっている

俺の持っている手紙について

三玖と話している中でとてもじゃないが内容を知ってるとは思えず

知っていて態度を変えないのなら

相当な役者かはたまた俺に興味がないかと失礼な事も視野に入れていた

「手紙…？ 五月が置いた手紙は見たけど コータローが持つてる手紙は知らない」

「やっぱりか となると 犯人候補は一花 二乃 四葉に絞られる

まあ 姉妹が犯人とは決まった訳じゃないけど」

「私が…。手紙を読んだ後 五月が戻ってきたかと思つて外で待機してたんだ…その時には一花と四葉がそれぞれ出入りしたのは見たよ…二乃は見えてない」

「二乃は除外でいいか…一花と四葉ねー うーん」

三玖は、旅行初日に俺に用事があった 理由はやはり教えてはくれなかったが、俺を探しお風呂上がりの風太郎を確認して彼女は、脱衣室に足を運んだらしい…

その途中に置手紙をつい見てしまい あの時間まで待つていたと

手紙を読んでる時に誰かが、戻ってきたと思った三玖は、時間指定が、書かれた五月の手紙を持って一旦外に逃げてしまう

その間にお風呂に出入りした 人物は 四葉と一花だけ 彼女が手紙を戻し

俺が出てくるまで、他の誰もその時間帯にはあの場から出入りしてない…。

それ以前なら他の姉妹を目撃したが、彼女が手紙を持ち出してしまったときには、二人が出入りした姿を見たのみ…

「つまり 二乃↓四葉↓三玖↓一花↓五月↓三玖↓四葉↓一花↓三玖の順番か…」

つうかみんな出入り激しいな…。どれだけ風呂に用事あんだよ」

(多分 二乃はフータローを捜しに…。四葉もそうなのかな? 私や五月、一花はコータローでも何で二人はまた戻ってきたんだろ?)

「コータロー…。もしかしたら二人が…。その手紙を読んだ可能性もあるよ」

「あつ確かにな…誰か一人と勝手に思い込んでたな うーん 向こうから言ってこない以上、下手には動けん…。暫く様子見だ」

「手紙ってさ どんな内容なの?」

「それは秘密 俺のプライバシーも含まれてるし 色々とな」

「わかったよ 無理には聞かない」

「助かる…さて みんなの所に戻るか…」

後さ 三玖 何で俺たちに家庭教師を辞めるよう言っただけなんだ?」

「あぁ…。それさ 無かった事にしていい?」

「O? お前も思う所が合ったんだろうし俺も忘れよう」

結局は誰が読んだのか特定は出来なかった

成果がないと言えばそれも違う 見れた人物は二名とまで絞れた
それに誰か一人とも限らない 二人が読んだ可能性すらあると
ま
で

いやー本当に面倒な事だ…。

――
――
――

時間は進み 場所もかわる

女性陣はそれぞれ温泉に集り 二乃 四葉 五月 らいはは温泉に浸かり

一花と三玖はサウナへ入ればそこから出ずに我慢くらべ

「三玖・・・もう限界なんじゃない・・・？」

「ま・・・まだ平気・・・」

じーっと耐え忍び 二人の一騎打ちは一花の根負けで終わり迎える

という訳にもいかなかった…。去って行く彼女に三玖は一声かける

「すごいね・・・お姉さん、そんなに無理はできないよ・・・。脱水症状はいやだからね：降参でいいよ・・・。」

「一花」

「！」

「期末試験…。本当は悔しかった」

「・・・」

「・・・多分、顔に出てたから気づいてたよね」

（何時も無表情だし 卒業式の日も普通にしてたから分からないよ・・・。）

表情には出していた と言っているが今日までそんな素振りはずえ

彼と出向いた卒業式の日も 彼からの差し入れを貰った日も一花から見れば三玖の表情はあまり

変わりのないものに見えていた

「でも・・・もういい」

「！」

「私たちは生徒と教師だけど・・・勉強だけが全てじゃないって今日わかったから・・・。」

勉強を諦めたつもりはない・・・だけど・・・私は私を好きになっ
てもらえる

私は何時までも子供じゃない…。何時までも守られる側じゃない
…。同じ目線で見れるように…何かを探すって決めたんだ」

彼女にどんな変化があったのか 表情には出ないだけで何かしら
抱えていた

時折見せる表情は暗く あの口聞いた言葉が彼女の中でも尾を引
いて

きつとそのままモヤモヤな気分が終わってしまうと でも今の三
玖の表情はすごく晴々としている

この数時間の間 彼の事で何があり自分にそう答えたのか
姉として嬉しい 嬉しい筈だ…。

四葉の言葉で我慢をやめる 自分のしたい事をする決めたから
にはあまりおもしろくもない

「ふーん…」

扉にかけて手を離せば来た道に戻り三玖の隣座り直す

「・・・降参、したんじゃなかったっけ？」

「・・・なんか、負けたくなくなっちゃったよ」

林間学校とは正反対 あの時引いた一花 今では三玖とは対等
な立場として

小さな宣戦布告だ

それに彼女にはそれ以外にやりたい事が出来ていたり…。

—————

—————

—————

「二乃…。どうしたのですか？」

「してやられたわ……」

口元まで湯につけぷくぷくと泡を立てる二乃は一花が入ったサウナ室をずっと眺めては

イライラと言ったような何処か悔しそうな表情だ

気になった五月は声をかけている

「まさか 一花まで 三玖は兄貴の方だからって安心しきっていたわ…もうなりふり構っていられない…ねえ…五月？」

（一花と何かあったのでしょうか？ 三玖が幸太郎君を好きだと言っていたから…）

壮大な勘違いが発生 一花が蒔いた種は二乃の暴走機関車に更なる油と燃料を投下する羽目に

詳しい事は三玖から聞かされてないが五月からの主観では一花が風太郎と何か合ったとは思えない

『五月は鈍い』と三玖から言われた言葉がずっと木霊している

「五月！」

「あつすみません なんですか？」

「あんたは、これ以上私に内緒にしていることはないでしょうね？」

それはどれを示しているのか？ 上杉風太郎の事か 上杉幸太郎の事か

真剣に見つめる彼女に向けるべき言葉は今を持ち合わせていない

誰だって秘密は持っている 話す事で楽になる事もあればそれが心を傷つける結果にもなる

（そうです…秘密です 例え姉妹でも言えない事は私にもあります…

彼の為の選択で彼を傷つけない為にも…。）

「…あつたとしても言えないから、隠し事なんですよ」

「…それもそうね」

姉妹だからこそ言えない事も言いたくない事も沢山ある

上杉風太郎の一件で少しばかり神経質なっていた二乃も五月の言葉で一度頭が冷え

再び湯につかる：彼女達の姿に不安はあれど喧嘩は起きないと分
かり四葉は微笑む

(二乃も五月も三玖も一花も色々とお悩んでたけど……。きつと大丈夫

上杉さんも見かけた時は何故かすつきりとした表情でした……。
後はお兄さんか)

「私で力になれないかな……。何時も迷惑をかけてるし……。あの事も
心配だな」

「四葉さん？」

――

――

――

場所は変わり男湯

勇也 マルオ 幸太郎 風太郎の四名

朝から飲み始める勇也と違いポーカークフェイスを崩さないマルオ

ただ彼の息子二名の事は未だ警戒中 不審な動きを見せようなら
ばすぐにでも動くだろう

「カーツ！たまんねえなあ！お前も飲めよ、マルオ！」

「上杉、僕を名前で呼ぶな」

「勇也さん飲み過ぎ注意ですよ」

「それに酒は苦手だ。特別な日にだけ飲むと決めている」

「つたく、お前は昔からかてえーんだよ。長湯して、少しはふやけたら
どうだ

幸太郎もだ こんくれー何ともねーよ」

家で飲む機会は無く ここで知り合いと出くわした飲まない理由
は彼にはない

疲れも癒せるし 喉も潤う最高のひと時だ

幸太郎は父のその姿に心配しながら満喫する姿を見れた事が嬉しいようだ

笑みもこぼれる…。

「まあ 気をつけてください それと先生もせっかくなんで 俺がお酌しますよ」

「遠慮させたもらおう 本当に苦手になりそうだ」

「へいへい それじゃ 俺達はそろそろあがるんで」

「親父またあとで」

「おー」

居心地の悪そな弟を気につけて 声をかけ二人でお湯から上がる

幸太郎は中野マルオとはそれなりに交友と言う名の因縁があり基本彼には物怖じしない

相変わらず兄の姿に頼りに思うと同じく少々怖くも思えた

彼が知っている兄と今の兄は本当に同じなのか

自分が知らない所で何が起きているのか風太郎なりにも考えている

きっかけは何でもいい…。たまには自分も頼れと口にはけしてださない複雑な弟心…。

「・・・そういや中井さんから不思議な話を聞いたんだが・・・」

「やめてくれ。僕とお前は世間話をする間柄でもないだろう」

「まあ聞けつて。知つての通りこの旅行はうちの息子とお前んとこのお嬢ちゃんが偶然当てたもんだ。けど、こんな偶然があると思うか？ 5組限定だぜ？」

世間話をする間柄じゃない ある程度関係を知っている幸太郎も歩きながら

『確かに』この少年自ら中野院長そう述べた事もあった

やはり似た者同士なのか…。そんな不穏な単語が頭を過ぎるが首を横に振りそれを追い払う

そのまま脱衣所に向かう その筈が 父の言葉で足が止まった
この温泉旅行には何か裏があると

5組限定のこの温泉旅行で上杉一家が来る前に既に4組来ていた
ならば同じく当たったと口にした 中野三玖の言葉は嘘なのか？

それは違った 風太郎にも幸太郎にも心当たりがあつた

偽の温泉旅行を計画するまでこの父親がここに訪れる理由なんて
一つしかない

気づけば二人そこに向かう

姉妹にとって何が重要な事か…。それは彼女達と祖父を会わせて
あげる事

父として最低限出来る事が何か彼なりに考え決行した…。

「あのー・・・実は昨夜の話聞いたんですが・・・」

「すみません 勝手に聞いてしまつて」

「・・・」

(生きてるよな?)

(ガチで死んでるかと思うから笑えない)

来た時と変わらず 寡黙と言うには静か過ぎる程

彼女達の祖父はじつと何かを待つようにそこに立っている

ここまで来た 後は何を伝えるべきなのか二人は考えが纏まる前
に動いていた

二人に何が出来るのか？ 幾ばくも無いと言われるこの老人に出
来る事なんて

ましてや二人は赤の他人だ…。でも言えることはある

たった一日それでもこの老人に付き従い 数日だがこの旅館で楽
しくもドキドキな日々を過ごせた

『・・・お世話になりました』

ここでの数日全てに対する 敬意を込めた言葉とお辞儀

今自分達に出来るのはこれくらいだ せめて敬意と誠意を示そう

「・・・孫はワシにとって最後の希望だ。娘の零奈を喪った今となってはな」

「え？」

「零奈さん……。」

「お前さん方……。孫たちに伝えてくれ」

「……………」

「自分らしくあれ、と」

「爺さん……」

「……………」

この人は最初から気づいていた。姉妹が自分の為に同じ姿をしてくれていた

改めてこの老人には驚かされ同時に頭も上がらない

「・・・爺さん。あいつらは・・・きつと乗り越えます。あなたの死も。

あいつらは強い。短い付き合いです。それは必ず保証します」

「爺さん　また来るさ　あんた達との思い出作りの為にさ」

「・・・その時は・・・5人の顔くらい見分けられるようになってるんだな」

次までの宿題　その時は必ず間違えるつもりはない

風太郎も幸太郎も『上等だ』と表情もかわる　辛気臭い顔はここま
でまた会う日まで……。

—————

—————

———

風太郎と共に挨拶を終え 姉妹や家族と共にあの鐘の前で記念撮影が行われる事になった

ここに来ると『コンビニか』と風太郎の何とも情けないツツコミを思い出す

彼女達の姿はここに来た時とは違い 未だ五月が五人いる……あの時は分ったけど

やっぱ全員が並ぶと分からなくなるな……

「それでは撮りますよ。はい、チーズ」

カシャツ!

秘書である江端さんが俺たちを撮影してくれた

この人のこの格好……ああーそう言う事ね

今更だが12月の謎が一つとけた

「よかったー、みんなで撮っておきたかったんだー」

「この姿のまま良かったのでしようか……?」

「これはこれで記念だね」

「いやあ、じっくり見ても誰が誰だかわかんねえなあ」

「確かに。全然わかんないですね、これ」

「お父様も見分けられますよ。愛があれば!!」

「愛で ^{アイ}目を補うってか?ガハハハ!」

あつはは流石我父で冴えたセンスしていらっしやるな

写真の撮影も終わり山を下山 出発までまだ時間は残っている
ゆっくり帰ろう

一方風太郎は考え事か鐘の方で突っ立っている

「愛の力か……。なあ幸太郎もそうだったのか?」

「俺はまあ……色々とな 今度話すき 俺の昔話を……」

「了解 気長にまつさ……んどうかしたのか?」

「あつ……スマホの充電器置っぱなしだ、急いで取ってくる!」

「遅れるなよー」

使つてもない充電器を鞆からだしてそのままだった事を思い出した…出る時になーんで気づかないのか……。

風太郎に、すぐ戻ると伝え…伝言も残した、勝手に消えれば、また何を言われるか、いい加減俺も学ぶさ

下山する道とは逆の旅館のある方へと足を動かす
まさか爺さんとこんな早く再会するとはな……。気まずいな

――――

――――

――

「……………」

「すみません 忘れもんがあつて」

「幸太郎つて言うのは…。若いの、お前だったのか……」

「えっ？」

「零奈の口から何度か聞いた 元気な男の子だな」

「!!」

「……………」

「あの…ありがとうございます。本当にお世話になりました!」

零奈さん…。

俺は…。僕は少しだけ前を向こうと思います だから見守つていてください

カウンターには、忘れ物として充電器が置かれていた

一声入れそれを鞆に仕舞い 俺は元の場所まで走つて戻つた

少し晴れやかでどこか足取りも軽く……

――――

――――

――

「誓いの鐘か……。『この鐘を二人で鳴らすとその男女は永遠に結ばれる』風太郎じゃないけど

コンビニかって言いたくはなるな」

来た道を戻った先には誰もいない

鐘の前で考え事をしていた風太郎もあいつらと合流してるだろう

鐘の方に視線を向ければ 江端さんの話した その伝説を思い出
す

ここが絶景スポットで人気があるのはこの鐘があつてこそ

数多のカップルがここで鐘を鳴らし 結ばれた

「素敵な話だな……。ここで鐘を鳴らせば、永遠……。って何考えてんだよ はあ……。」

『幸太郎君』

ゴーンゴーン……

鐘を眺め それに触れようとした時 後ろから俺を呼ぶ声が聞こえ

同時に鐘の音がその場に響く……。

木霊でもするかのように反響するその声……。

ふりかえれば「彼女たち」が、いる

さて 俺を呼んだ この二人は、誰なのか？ 案外早く宿題の答え
合わせが来たもんだな

何かを待つ二人は、俺が足を動かす事を望むのか、はたまた……

――
――
――

2000日の結婚式

上杉幸太郎がついた頃、別室で一枚の写真を眺める四人の女性
当時は懐かしみ その時を思い出す

祖父と撮った最後の一枚は今から二年前のもので姉妹や映っては
いないが風太郎も訪れていた

彼等と初めて顔を合わせた時には寡黙で表情一つ変えない印象を
受けた彼だったが

写りこむその表情はとても優しさに満ちていた

「二人は既に結ばれるって決まってたからね」

「うーん」

「どうしたの？」

「彼は間に合ったかな…。」

「この写真の時も結局来れず謝ってたね でも大丈夫 今度は間に合
うよ」

「どんな顔してるかな 二人を見て」

「彼はきつと祝福する筈です 兄だからね」

今日だって連絡すら寄越さず 何時つくのかも分からない

祖父が他界した2年前も『戻れなくてごめん…。爺さんに伝えてく
れありがとうって』

彼は間に合わなかった 正確には彼は戻れなかった

電話越しでも涙を出さないよう五つ子の祖父を心配させないよう
自分を押し殺していた

彼が去って五年 あの少年基青年が、間に合っていれば今頃は二人
を見て自分の事のように祝福をしている事だろう。何時でもどこで
も彼は変わらない それが上杉幸太郎だ

(あなたの言葉を私たちは待っています 上杉幸太郎君)

ゴーンツ、ゴーンツ、ゴーンツ・・・

――
――
――

突然の乱入者 式場は騒然となるが

その男が分かれば笑い声も聞こえだす

本人は『すいませーん』と腰を低く 手招きする妹と父の元へ向かう

遠くで彼よりも先に海外から戻ってきた彼女も流石に苦笑い

『幸太郎は本当に馬鹿だねー』と他人事…。

「お兄ちゃんー！ 台無しになるところだったよ それに髪もどしたの！」

「らいは 5年越しの再会で兄を叱るのか…。それにこれは俺の意思とは無関係だ」

「っははは お前もかわらねーな」

「父さんも相変わらずだね」

彼が5年越しに再会するのは弟や姉妹だけではない

家族とも離れ一人でイギリスへと行ってしまった 当時は妹は猛反対だった

それも一年が過ぎた頃には『月に一度は連絡だからね！ 忘れたら怒るよ』と

幸太郎が欠かさず行っている その度に自分の現状や学校でどう過ごしているのかも伝えている

「俺は今も昔も かわらねーよ それでどうだ 風太郎と〇〇ちゃん 良い顔だろう」

「はい 風太郎も随分と男前になりましたね」

「実はお兄ちゃん 結婚指輪忘れて来たんだよ」

「あいつは…。なんでこうも大事な日に」

「新郎は指輪を忘れた式の内容は変わるし 親族は遅れてくるし 前

代未聞だよ」

「はいはも呆れるだろうせつかく指輪を届けても式の内容をすつ飛ばし

誓いのキスだ 追い打ちをかけるようにその瞬間に兄が息も絶え絶えでイギリスから戻ってきた

二重のトラブルばかりで頭が痛い…。

でも 離れていった二人の兄は全然変わっていない 何時も問題の中心に立たされる

面倒なお兄ちゃんたちだ

(ねえー お兄ちゃんの好きな人って誰ー?)

(秘密ー 兄は妹にも隠し事するんですよ)

(残念だなー ふふふ)

――――

――

――

「さて みんなが待ってる 帰るぞ ○○○ 迎えに来てくれて
ありがとう」

『!!』

答えは当たっているのか…。帰った後たつぷり聞けばいい

この二人の五月は何処までも心配症な奴らだな……。

第四章

第七十三話 不良少年と姉妹のバイト

上杉一家 中野一家が共に行った温泉旅行から後日

いよいよ来週から高校三年となる その矢先に

長女である一花から4人に大事な連絡事あるとニッコリ笑顔で微笑む

長年過ごす彼女たちに分かる これは面倒事の始まり

もしくは自分たちに関わる何かだと…。

「えーつと…。来週から お家賃を五等分しようと思います」

『!?!』

「払えなかった人は…。前のマンションへ強制退去してもらいます」

恐れていた事態が遂に訪れた 何時かは来るだろうとも覚悟はしていた

まさか旅行終わりに直ぐとまで予想が突かず ゴクリと唾を飲み込む

全員で頑張ろうと言った矢先だ 今更撤回も出来まい

それにここまで一花一人に背負わせてきた 五等分という表現は何とも彼女らしい言い回しだ

「みんなで一緒にいられるように頑張ろ! ということで…よろしくね♡」

—————

—————

—————

「まさか 事前に幸太郎君に相談して求人雑誌を準備していたとは…。」

「ああ あいつは暇さえあれば…。求人雑誌を購読する程のバイトオタクだからね…。」

一度場所を変え近くの喫茶店でバイト探しの為に求人雑誌を読み漁る中野姉妹

テーブルの上には山隅の求人雑誌の山 何時の間に集めたのか疑問だが

出来先にこの山の理由を一花が話していた

バイトに青春をかけるあの少年に相談していたのだ。

『ほーバイト探しねえーバイトか…。待ってる 必要そうな分まとめを持っていく』

彼女らの頼みを断ることなく了承し

昨日の夜には大量の空き箱に最新の広告を詰め込み運んできてくれたらしく

二乃が、朝方ぶつけた謎の箱の山の正体がそれだと分かれば呆れたような顔で雑誌を眺める

「コンビニ…。新聞配達…。コータローはどれも大変だって言っただ」

「全員で同じとこでできたら安心なのですが…。」

「そんなに募集してる場所はないわね…。それに得意な事もそれぞれ違うんだし」

「私に接客業何て出来るかなー うーん…。」

最終的に補導される未来がお金を稼ぐって大変だなあ」

今では全員が得意とすることもバラバラ

募集人員を考えれば精々2〜3人 5人が一緒に働くのはあまり

現実的とは言えない

お金を稼ぐ厳しさは常々あの兄弟から言われている

「それでもお金が必要なんだもの…。まさか旅行終わりに言いだすとはね」

「でも…。一花のあの感じ懐かしい」

「あ 私もそれ思った！」

「むしろ今まで……。一花一人に無理をさせすぎましたからね」

四葉と話す事で一花は我慢をする事をやめた 無理に何でも自分でやらず

姉妹で出来る事は彼女達もやらせておこうと一花は実行した

実は前々から考えていた事で四花との話で決心がついた

「そうねあんなった一花はなかなか手強いわ……。それにしても強制退去か……。」

『……………緊張感しかない』

あの家父親と二人で食卓を囲む中々スリリングである

緊張感食も喉が通らないだろう 何とか今のアパートに留まる为一層集中する

「五月は目星つけた？」

「いえ……。まだ決めかねいます 幸太郎君が幾つかまとめてくれています
すがどれが良いか」

見れば五月用と書かれた紙が貼られている

これを準備した幸太郎は彼女達の性格などからどこが良いか簡潔だがまとめていたらしく

目を通す中で気になりはするが五月本人は中々踏み出せずいた

「するからには自分の血肉となりえる仕事にしたいのですが……。」

都合よくそんなもの見つかりませんね……。何故か私の名前が書かれた紙には

飲食店が避けられてばかりで……。不思議です 間違っているの
でしようか？」

(お兄さんは五月の性格を見通してたんだね……。)

「血肉って……。まかないが出るってこと？」

「私を……。あの人と一緒にしないでください」

「まあ……。でもどうせならやりたいことってのは同感だわ」

血肉とは表現の仕方にやや引いているが五月の意見には同意している

嫌々やるよりも自分がやりたいこと　それに準ずる働き先の方が
モチベーションも変わっていく

(やりたいこと…)

『何かのきっかけでやりたいと思える日』……コータローはあの時そ
う言っていた)

「あ！上杉さんたちと言えば！こんなバイト募集を見つけました！」
『!!』

視線が四葉の持っているチラシ　幸太郎と風太郎が働く　Rev
ivalのアルバイト募集の紙だ

「ここって…。」

「コータローたちが働いているケーキ屋…。」

反応したの二乃と三玖　体を出し　四葉からその紙を奪い取る

バシッ！

「二乃それを渡して」

「なんでよ…。これは得意分野よ」

「なんでわざわざコータローたちのいるところなの？　二乃なら他で
もやっていける」

「うっ…。あいつらがいるのは不本意…。」

ふふっ不本意だわ　味音痴のあんたはおとなしく諦めなさい」

不本意と述べる彼女の表情は傍から見ても分かるほどにやけてい
る

言葉だけで心は正直と言える

「ねえ…。五月はいいの？コータローのところ」

「私は構いません…。得意ではありませんし

行って幸太郎君の足手まといには…。なりたくありませんから」

「コータローの足手まとい…。」

「いえ 三玖の気持ちは分りますがこれはあくまで私個人の意見です…。彼はそうは思いませんよ！」

上杉幸太郎が関わる事なら誰よりも早くそして迅速に反応してきた

五月は彼のアルバイト先の話が出た際には微動だにせず 二乃と三玖に譲っている

幾ら彼が、心配とそれを行動で表しても成果に出なければ、余計な迷惑をかけてしまうと五月は考えていた 最初の頃ならばと本人も言う 今は彼の迷惑ならず尚且つ自分たちの生活を安定させる事が最優だと彼女もそれはきちんと理解している…。

(あつ…。よく見たら 五月の目が笑ってない)

本音を言えば幸太郎の傍で働きたいだろうが今は心を鬼に自分に合ったアルバイト先を探している

「私はやっぱり…。みんなと一緒にお仕事したいなー！」

「四葉 これあなた用と書かれています…。」

「おお 流石お兄さん ねえー三玖このお掃除のアルバイトなどうー

一緒にやろうよ」

「むむむ…。」

五月は五月で踏ん切りをつけ選び

二乃はニンマリとチラシを眺める

四葉は自分に合ったアルバイト先を見つけた

残った三玖が選ぶ答えは一体…。

—————

—————

—————

「つまりはな…。俺は過去にあいつらと遊んでたって事」

「それは衝撃的な事実だな…。」

「対して驚いてねーくせに その顔やめろ」

「お前とあいつ等のやり取り見てたら…。何か接点はあるのかと」

「風太郎にしてはちやんと見てたな」

「失礼な奴だ勉強のついでに見てた…。だけだ」

「ぶれない弟で俺は安心です」

Revealでのアルバイト中 休憩室で俺は風太郎に簡単なあらましを説明

俺が過去に友人の家を經由し 彼女達と交友を持っていた事 5年ぶりに再会した事

驚かれると思っていたがリアクションは小さく『へー』で済ませられた

「一応言うが…。学校であった当初は俺も忘れてた」

「事故の影響で消えた記憶ってあいつらの事か…。俺や親父たちの事は覚えてるって言えてたから…。実はガセじゃないかと」

「ぶっ飛ばすぞ 誰が好き好んで記憶喪失のふりなんてするかよ…。」まさか弟が俺の記憶喪失を疑って半信半疑 一年以上過ごしていた

それはそれで衝撃的な事実 俺の方が驚いた…。

「すまん…。でも家庭教師の補佐が記憶を戻す切っ掛けになったのか複雑だな」

「まあ他の人間から見れば…。記憶喪失に見えんからな

忘れてた記憶の人物があの場合にいないわけだし」

「改めて思うと幸太郎の人生は壮絶だな…。」
「色々あったが今は今って割り切ってる 卒業式にも顔出して気分もすつきり」

(どうりで…。ここ最近のこいつの口調が何処となく以前に戻りつつあるのはそれか…。)

すんなり受け入れたくれた弟に俺は少し感謝している

自分の話を受け入れて貰えず過去に悲惨な思いした俺には弟のその当たり前がとても嬉しく思える

こいつが家庭教師の話を買わなければ俺は一生彼女達の事を思い出さず悶々とした人生を歩んでいた

兄として不甲斐ないがこいつはとても心強く 肩を並べられる存

在だ

「それで風太郎は……。二乃との一件はどうなった？ あの日も何かずっと考え込んでいたし」

「いや考え込んでいたって言うか……。俺も色々都合ったとしか言えない。二乃の件だけ……。俺も変に構えない様しようかと……。」

「プレッシャーをかけるようで悪いが……。二乃は本気だ」

「……何が正解なのか俺には分からない……。告白なんて俺には無縁と思ってた」

「何度も言うが悩み 悩んだ先にお前が目指す答えが出てくる……。」

「何とも浮いた答えだな？」

「俺のアドバイスはいらぬらしいな……。」

「嘘です……。すみません参考にさせていただきます」

「まあ 俺は味方だ……。安心しろ」

旅行が終わってから風太郎は何処か変わった

姉妹を見分ける事が出来た事も大きい 彼女達の祖父と接した事も要因だろうが

それなりにいい方向へと進んでくれている

『人生の終着点』と言っていた頃が懐かしく思えるな

未だ答えは見つからない うじうじしてても始まらない このス
タンスで暫くは突き進む

今はまず迫る進級に目を向けようと中々前向きだ

「幸太郎もやっと三年だな」

「だな……。」

「嬉しくないのか？」

「実感がわかん……。一年生やって二年生を二回 そして三年 進級
かーってくらいだな」

「お前と同じ学年をやるって昔の俺なら絶対信じないな」

「俺もだあの頃の俺がまさか出席日数が足りず進級出来なかったなんて『嘘つきだ』って指さした」

交通事故で三年生の道を断られた去年

今年は違う 出席日数も足りているしテストも真面目に受けた……。

アルバイトも並行して行えている順風満帆 この気持ちで今度は
一歩前に進める

前向きに考える…。一年前の俺ならつまらなそうな顔で日々を生
きていたが変わるもんだな

「せーんーぱい！ 店長が呼んでますよ」

「ああー そう言えば…。今日面接があるんだった。行くぞ風太郎」

「募集人員一人 俺もやっとな後輩が出来るな」

「私は風太郎さんの先輩ですからね！」

「真弓先輩は今日もゲンキデスネ」

「先輩 この人クビにしましょう」

「ひどい」

「遊んでないでいくぞー」

たっぷり休憩もとった 知らせにきた真弓ちゃんもまた後輩が出
来るのが嬉しいと話す

風太郎も慣れるまでは大変だったしな…。真弓ちゃんが丁寧に指
導した甲斐があつたよ

さてうちの新たな戦力はどんな子かねー

「初日で皿10個は、やめて欲しいね 真弓ちゃん」

「ですねー先輩」

「うつつるさいー！」

――――

――

――

「……」

「……」

「えー今日は面接ということ…。まずは募集を見て来てくれて嬉
しーよ」

「……」

「……」

「しかしまさか二人も同時に来るとは……。」

空いた部屋を使い 募集を見てやってきた人物その面接の同行も任せられた

最近は目の前パン屋の影響だろう……。経営を考え人員は一人までとチラシにも書いてた

実際来たのはよーく見知った少女二人だ

「なぜ お前らがここのバイト受けてるんだ！」

「まさかここを受けるとはな……。二乃は分かるが三玖は意外だな」

「いやー 二乃さんと三玖さんですか……。これは戦力的に二乃さんですよねでも……うーん悩ましいです！」

面接を受けているのは 二乃と三玖

一花からの相談で幾つかアルバイトを募集している求人雑誌などを届けたが

その時にうちのチラシも紛れ込んでいたようだ……。

慣れ始めて来たが知り合いのいるバイト先は神経を使う……。

「なんでこの子がいるのか、アタシも知りたいくらいだわ」

「出来るならうちも二人ともに採用してあげたいんだけどさ 向かいの糞パン屋のせいでギリギリ

チラシにも書かれているけど一人が限度さ」

「売上は好調だけどやっぱ昼時になると客はダンチですからね……………」

「そうそう 上杉君か弟君が辞めてくれたら」

「はっははは 店長冗談やめてください」

「本当に店長はお茶目ですねー」

やめてくれ……。風太郎の巻き添えでクビにはなりたくない

時間と給料を考えればここが一番ベストだ 暫くはやめるつもりはないですよ店長

それに風太郎の次に皿を割るのは隣で知らん顔してる後輩も同じですから……………」

「ケーキ作りたいです」

『!?!』

「へえ 得意なんだ……。じゃあ君に」

「ちよちよつと！ 私の方が得意です！」

「うーん 上杉君 弟君 彼女たちは君達の友達だったよね……」

「ここは任せていいかな」

席から立てばケーキを作ると言いだす

当然得意な二乃は黙ったままではなく自分こそが主張する

唸る店長はさじを投げ俺たちに一任した

「コータローはどうするの！ 私にできることなら何でもするよ！」

「あんた当然私を選ぶわよね」

『選んで!!』

「風太郎さんも先輩も人気者ですね」

『他人事かよ!!』

選べと言われても俺たちそれぞれの意見では簡単に決めれる事ではない

姉妹がバイトを始めた つまりは一花が動いたと考えるべきだ

ここはケーキ屋だ勝負事なら料理で決めるのがセオリー

詰め寄る二人を一旦避け ごほんと喉を鳴らす

「じゃあー 二人には今…言ったようにケーキ作ってもらおうから…」

それなら白黒はつきりするだろう」

「幸太郎良いのかそれで？勝敗は分かりそうなものだが…」

当然店頭に並ぶなら二乃の作るケーキが圧倒的に有利だ

散々食べて来た俺が言うんだ三玖の料理はまだ人に食わせられるには程遠い

でも彼女はちゃんと練習を続けて来た その成果を見定める為に

はこの勝負は最適だ

「二乃には負けない！ 前とは違う」

「あなたには負けられない！」

バチバチバチッ！と火花が見える 二乃がここで働きたい理由は察しがつくが三玖は何でかな

「いっちょんわからん」

「先輩…。三玖さんの前で迂闊にそういう事言うのはなしで？」

何か叱られた

真弓ちゃんは三玖と同じクラスだから仲が良いきつと理由も知ってるんだろいな

俺が心配ならそれはそれで有難いとは思うけど…。バイト先まで同じにする必要はないと思うけどな

考えれば考える程後輩からの視線は突き刺さる 俺が悪いのか？

「ではでは 私から説明します お二人にはショートケーキを作ってくださいますね

完成品を私たちで試食致します…。味は勿論の事見た目も大事です…。どちらも疎かになつてはいけません」

「余裕ね…。さーてあなたのお手並み拝見ね」

「むむむ…。絶対に負けない」

「アレンジもO?です どうせ余った素材なんで好きに使ってください」

「真弓ちゃんそういう事はいいいから…。じゃーよいスタート」

厨房にはケーキの材料がたくさん並べられている

面接の為とはいいここまで大盤振る舞いな理由は先輩が示した通り

余りもんだ このまま捨てるのは勿体ないと…。気持ち分るがもう少し言い方があると先輩は思っていますよ

裏事情はここまで開始の合図と共に先に動いたのは…。三玖だ

その彼女を試すかのように二乃は余裕の表情を崩さない
はつきり言えば料理作りの才能も作ってきた数も断然に二乃が上
だ

前回の料理対決で俺が三玖が勝ちと言った理由は愛情の差ゆえだ
だが今回はその愛情の差で決めるのも難しそうだな

俺の言葉を覚えているのか『愛情ねー…。同じ轍は二度も踏まない
あんたも見てなさい』

堂々の宣言だ…。勝負の程はここから一時間程で決まる
柄にもなく緊張してきたな

「先輩 風太郎さんどっちが勝ちますか？ 一応ですが私はお二人の
料理は知ってます」

「順当にいけば二乃だろ…。三玖の頑張りは認めるが俺たちの仕事だ
幸太郎も頼むぞ」

「へいへい 鼻屑はしない…。つうかそれは二乃と三玖どっちにも言
えるからな」

「先輩は中野姉妹に甘いですからね 今更どっちとは言いません…。
私も同じかな？ 選べません」

風太郎には釘を刺された

三玖を鼻屑せず公平に勝負を見極める 勘違いされがちだが俺は
三玖だから優遇してるのではない

中野姉妹全員を優遇してるその二人が争えば…。後は二人の頑張
りを祈るのみだ

何だかんだ言いつつも『三玖頑張れよ』と口から出てる弟君
俺よりも優しい奴だな

審判三名が話し込む間も彼女たちは黙々とケーキを作り上げてい
く

はてさてどうなることやら

前回の大喧嘩騒動の不安が過ぎったが杞憂に終わるかも

作ってる姿を見れば以前のような喧嘩はもう起きないだろうと見
ている側でも分かる

二人は真剣だ……。これはどっちが勝ってもおかしくねえかもな

――

――

――

時間が経過

終了のホイッスル 全力を出しての勝負……。負けても文句は言えんだろう

先ずは見た目だ 二乃の作ったケーキは、何一つ崩れたものは無く飾られた果物も綺麗に並べられ完成度で言えば

今すぐにも店の看板商品として陳列ケースに置きたい素直にそう思える

対する三玖のケーキは……。やはり崩れてしまっているクリームがどろどろと滴り落ち

上に載せられる苺もバラバラになってしまっている

「ふふーん」

「むむむ」

「まっまだ 実食が残されていますから」

「真弓いいのよー 私は何でも勝ったも同然だし」

「食べて判断して！ 味は保障する」

「じゃあ 俺から うーん 二人共普通にうまいな」

「私……。うう 二乃さん流石です……。悔しいですが私よりもおいしい

三玖さんののも確かに味は以前よりは上がりましたが……。

見た目の精巧さと味を見るに二乃さんが優勢です」

風太郎の感想は全く参考にならない事が改めて実感させられた以前と全く変わらないぞ……。

店長も恐る恐ると三玖のケーキを食べるが『独創的』の一言残ったのは俺一人 ここまで来ると多数決だ

判定を待つ二人に俺もちやんと答えないと失礼だ

先ずは最初に口にしたのは三玖の作ったケーキ

フォークを差し込むがねちよりと変な音が聞こえる……………。

スポンジが……………と 解けてる？

「あむ…。おー三玖凄いな チョコといい断然上手くなってるぞ…。
頑張ってるな」

「／／／…。」

「まああんたが、三玖を優遇するのは最初から分かっていたけどさ」
「そうは言うが、上手いもんはうまいぞ？ さて次は二乃のケーキか
……………」

「ねえ…。悪いけどさ本気で判定してよね……………」

「分かってる…。 こっちも仕事だ妥協はしない……………。あむ！」

以前の勝負は

三玖の料理の方が二乃よりも愛情が勝っていた故に二乃は敗北と
その後の事件でそれを悔しく語っていた彼女の事を思い出す

試食している俺を見る目は真剣だと同時に何処か不安げだ
さつきまで余裕の表情だったのが嘘のように……………。

この一口で全てが決まる フォークに刺したスポンジを口に含
んだ瞬間だ

それはとても素晴らしく優しい味だった

「ど…どうかしら……………。？」

「悪い……………」

「えっ？」

「今回は二乃の勝ちだ…。 これは誰かの為にこいつが真剣に作った
もんだ

味が互角なら残されるは見た目だ…。 勝者は二乃だ」

「満場一致だね…。」

これは三玖の負けだ どっちも本気で挑みその結果選ばれた
きちんと受け入れこれを糧に次のバイトを見つけて欲しい

――
――
――

「じゃあ、来週からよろしく」

勝者は二乃だ

店長、真弓、風太郎、幸太郎 誰もが二乃と札を上げた

本気で選んでと言った二乃は本当に自分のケーキを美味しいと言った事が少し信じられない様で

店を出る前に『あの…。ありがとね』と柄にもなく彼にお礼の言葉を残して行つた

前は自分の料理に足りないのは愛情だと言われやはり悔しくもあり

今回の結果はつまりは風太郎への愛情は確かに存在していたと再認識出来るものであつた

「負けた…。」

「あんたが料理対決に挑むからよ…。まあでも悪いとは…。」

落ち込む三玖はふとケーキ屋の前に構えるパン屋のチラシに目が行く

パンと言えはあの男だ普段から味気ない食パンばかり食している彼はパン好きなのかと

彼女はずっと気になつていた

「向かいのパン屋さんでもアルバイト、募集してるんだ。私、こっちにしようかな」

「なっ!？」

何もケーキに拘る必要はない

パン屋という手も十分にある。遠くで彼の身を案じるよりも近くで見守るならば

ケーキ屋の前のこのパン屋で働いて見るのも悪くはない…。

それに同じく彼を案じる五月は『彼の足手まといになるような事はしたくない』

自分のやりたい事を押し殺した自分も偶には彼女を見習ってみるのも良いのかもしれないと心境の変化

「随分と切り替えが早いわね…。そのパン屋には兄貴のほうはいないけどいいの!?!」

「うん 私の今の目的はコータローじゃないから」
「!」

「今日ケーキを作って、改めて思った」

『おー三玖凄いな チョココといい断然上手くなってるぞ…。頑張ってるな』

先ほどの彼の言葉を思い出すと胸が温かくなる

この気持ちが大変なんだ…。きつと自分と話す時に彼が抱く気持ちもこの温もり

「私、どうやら作るのは好きみたい」

勝負には負けたけれど得るものはあった この気持ちを大事に下を向かず前を向こう

俯いたままではいけない…。彼が美味しいと言ってくれたそれを別の形で彼に作ってあげるのは何も悪い事ではないのだから…。

三玖はちゃんと覚えている 彼の好きな女性のタイプ

真面目 そして 料理上手だと話したあの日の夜を……………。

(コータローに好きになってもらえる私になるんだ……。)

第七十四話 不良少年と三年生

「と言う事があってな……。うちで次女を雇う結果になった」
「はは……。みんなには困らせること言っちゃったなあ」

あれから2日程が経過した……………。

隣を歩く一花に当日のあらましを簡潔に説明

内容を聞けば、若干苦笑い……。

まあ：突然の提案に姉妹も焦ったし、知った俺らも確かにびっくりはしたさ

でもそれを負い目に感じる必要は、全くない……。

一花は、一花なりに考え姉妹に提案したのだろう、

事前に一花から電話で聞かされた俺は、凡その理由を考えた

今の姉妹の生活を支えるのが誰なのか？ 考えれば分かる事だ……。

それに今回の事は、あいつらにも良い刺激になったと思う

春先には、『バイトよりも勉強を優先に』と俺や風太郎はそう伝えただが、

机とにらめっこばかりの毎日はどうにも息が詰まってしま……………。

勉強以外でも学べることは、沢山ある その機会を増やしてやっただとプラスに考えれば良いだけ

「つーかなんで一花がここにいるんだ？ 他の姉妹とは別登校か」

「ん？ お姉さんは寂しい……。コータロー君と一緒に登校をと思って

フータロー君も見えないし彼は一緒じゃないの？」

ここでふとした疑問を浮かべただろう、さも当たり前のように一花は横を歩いている

その理由は、本人曰く『寂しい俺を思って近くまで足を運んだ』いやー良い友人が出来て嬉しいねえ

(俺に合わせて登校ねえ……)

昨日は何時もと変わらずバイトが、終わったのは夜遅く 家に着く頃には明け方で睡眠も疎ら

ギリギリまで布団にくるまっていたが、妹に取っ払われ 歯ブラシを口に突っ込まれた

んで弟は、『今日は遅れるなよ?』とやけに真剣で

らしいはも『今日は大事な日だよーしゃっきとしてー』ぼーっとしている俺は、気づけば家の外

二人は気にかけてくれたが、等の俺本人は、今日と言う日を余り意識はしておらず

欠伸混じりに学校まで足を進め暫くすれば、何時かのやり取り『おっはー』と声をかけられ

目を凝らせば、中野姉妹の長女が、にこやかに手を振っていた…。そう言う経緯で彼女と登校している

「俺より先に出たからな…。つうか何時も一緒にいる訳でもないさ…ふぁ…………悪い話中に欠伸だ」

「毎日毎日お疲れ様ですコータロー君」
「何が?」

(コータロー君…。君はいい加減オーバーワークって事理解しよう
何時か限界が来るよ)

「んでよ…。お前に相談された時も思ったけど…何か見つけたかやりたい事?」

「流石だね うん…。今までは家賃や生活の為に仕事をやってきた」
「家賃の返済の為に仕事して、普段は学校や家庭教師……………まあ一

花の自由な時間は皆無と言っている……………お前は頑張り過ぎだ」
『君には言われたくないな』と眠たそうな俺を見ては、不満気に語る

一花さん

全くその通りです…。でも家の事情を考えれば、はいはいと頷ける物でもなく

彼女の言葉は受け取るが、『俺は俺で充実してる』と適当な言葉でその場を流した…。

「俺の話は終わりー…で一花は何を思ったんだ？」

「私もやりたい事に挑戦しようかなって…色々考えて出した結論だよ」

一花が、ここまで仕事をして来た理由は、アパートでの家賃やその他生活費の為

全部が全部そうだと言わないが、過半数は生活費の為に身を削つての毎日

その中に彼女自身の時間やお金は存在しない

いい加減足踏みは、やめて一歩先に進んでみたと前向きに捉えている

四葉や三玖もそれぞれバイト先を見つけ

案の定と言っているのか見つからないのは、五月のみとある意味想定内だな

あいつの事だから下手に構え無駄に悩んでいる…。思ったものに挑戦すれば良いんだが

俺も俺で少し意地悪が過ぎたかな？

(流石に五月でもバイトを疎かにするほど食に目が行く訳…ないよな？)

なるべくあいつに向いたバイト先を選んだつもりで選び飲食店を避けたが、それが仇になってしまった…少々不安だ…。

「まあ…。俺から言えるのは何時ものあれだ 何かあれば頼れ

それにここまで来たんだ成績は落とすなよ風太郎が嘆くからな」

「あはは…。そうだね卒業したいしね…。じゃ これからも頼りにしてるよ

せーんせつ」

先生かそれは俺ではなく風太郎に言ってやって欲しい

うれし泣きして暫くは静かになってるさ

微笑むように話す一花の表情は誰をも魅了する

少々俺もドキツとした…。

「私が言いだしたことなんだけど 少し寂しくもあるんだ」

「みんな働くわけだしな…。」

「うん…。きつと前見たいに一緒にいれる時間も減っていくと思う

そしてそのままバラバラになって…。大人になっていくのかな」

「うーん…。一緒にいれることは大事だ でも偶には離れるって事も

悪くはねえーかもよ…それによ…これに…これでさいならって訳でもないさ」

「だねっ」

今日で俺たちは三年生になる

いよいよもって俺にとつても最後の一年だ

実感が湧かないとは言いつつもこうして家族以外の人間と話すと
多少なりと意識はする

一抹の不安を覚えつつも学校へと向かう足を止めずしつかり一歩
一歩進んで行く

—————

—————

—————

「幸太郎君 おはようございます！」

「おつす おはよう五月」

「先輩おはようございます 私三年一組でしたよ 五月さんと同じです！」

「へえー 良かったな真弓ちゃん 同じクラスになれてさ」

貼りだされた掲示板には今年最後を共にするクラスの割り振りが
書かれている

事前についていた真弓ちゃんは五月と同じく三年一組

視線を掲示板に戻せば、上からの準に

上杉風太郎 須藤真弓 中野一花 中野五月 中野二乃 中野三

玖 中野四葉

と何時もの面子が間をおいてではあるがちゃんと記載されている
…。

本当に些細な不安だが消え去ったな

ん……………？ あれ

再度掲示板を確認し ある事に気づいた…。

「あつ…。俺だけ名前ねーな 何組だろ」

「えっ」

「本当だ コータロー君だけ名前ないよ 一番上に来るはずなのに」

「まあー こんな事もあるわ お前らはさっさとクラス迎えよー 俺
は自分のクラス探すから さーてどこかなー」

五つ子が同じクラスで俺だけ省かれるとはこれは裏も感じざる負
えないぞ

去って行く俺を捨てられた子犬見たいに見つめる五月さん

悪いなこればかりは俺にもどうしようもねーよ

避けていく生徒をしり目に掲示板を何度も見つめる

違和感だ何度見ても上杉という名前が一組の風太郎しか見当たら
ない

い いやな予感が…。 嫌な汗がどんどん出始め 柄にもなく
焦っている

これは不味いのではなからうか？

勇也さんに何て説明すればいいんだよ…。

「寂しくはあるけどな…。 つうか 俺の名前が何処にもねーよ まさ
か 進級出来なかったのか、あの点数じゃダメなのか…。」

「コータロー見つけた」

「おっ三玖か…。 何か俺だけクラスが見つからねー いじめか？」

「そんな…。 何でコータローだけ」

「どうにも学校は俺が嫌いらしいな…。 嫌になってくるな」

「ごめんね 私のせいで」

「お前はなんも悪くねーよ」

いや今回は割と三玖は無関係だ

以前は事故だが、今度は違う出席日数も足りてるし 期末試験は散々だが赤点回避はしている

これはもう謎の力が働いてるとしか思えないな…。

俺を進級させたくない新手のいじめだろうと呆れ気味だ

と普通に考えれば一報は来るはずなんだ 今回は何事もなく学校に来ている

一人の生徒を傍観なんてそんな陰険な事するだろうか？

確かに俺の悪評判で色々と学校も問題を抱えたとおっさんが話していたしな…。

うーんと考えこむと俺を呼ぶ声が聞こえてくる

「幸太郎君の名前ありました…。同じ一組です！」

「だってさつき無かったろ？」

「記入漏れだと先ほど先生方が話していました」

「うわー俺の三年最初が幸先悪すぎ…。」

「良かった…。良かった コータローが三年生になれるよ 五月」

「はい 喜ばしい事です すみません少し涙が…。」

「普通は俺がうれし泣きするんだけどな まあありがとな」

何ともこの先が不安になりそうな三年最初の一日だ

全く記入漏れとは、たらふく給料貰ってるわりにやる事がぎるだ

な この学校の先生は…。

「三年生か…。」

「思う所はありますか？」

「風太郎にも同じ事聞かれたな…。昨日までは意識してなかった

でも名前がないとやっぱビビるな」

「コータローはちゃんと頑張っつてここまで来てる…。だから何に恥じる事はないよ」

「何時もと変わらさず…。まったりとだな」

「ふふ そう言いつつ幸太郎君は困ってる人を見過ごせませんからね」

「うっ…。うるさい」

「コータロー照れてる？」

「照れてない ひつつくな…。それと今年も一年よろしく」

「うん やつと同じクラス頑張ろうねコータロー」

「はい…。学校での勉強も自習も頑張っ行って行きたいと思います」

今年最後は五つ子全員と同じクラス

去年までは俺 風太郎 五月 それが今年は7人+真弓ちゃん

合計8人か

世間は狭いな…。

喜びや戸惑いを感じつつも俺たちは少しばかり大人になった

足踏みしていたあの頃とは、おさらば今は前を向いている

抱えている問題は割と無視は出来ないが…。

友人達と居るんだ乗り越えられるだろうな

五月達と軽く話し 一旦彼女達は教室に入る

二乃や四葉ともに報告に行くらしい

恥ずかしいから黙っててくれねえーかな…。

「はあ…。何か急に疲れたな…ん？」

「上杉 すまん こっちのミスだ」

「園田のおっさん 勘弁してくれよ 焦るからさ」

「あつははは 悪い悪い…。こっちも生徒を捌くので手一杯

弟の名前を記入した時点でお前の名前も記載したつもりだったと

担当も反省していた」

「別に怒っちゃいないけどさ」

突然現れた 白髪の日立つ恰幅の良い男性はこの学校の教師の一人

数少ない教員で俺の事情を知っている園田雅先生だ

小学生の時に一度世話になりこの学校で再会した

須藤共々散々面倒見られた…。

「んで おっさんは今回何組の担任だ？」

「二組 お前らの担任だ」

「へえー……。知り合いに囲まれ 兄弟とも同じクラス 担任は素性を知っている

なーんか胡散臭いな」

「俺は何も知らぞ 兎に角だ 俺がお前の馬鹿に付き合えるのも今年で最後だ

上杉……。今度は抱え込むなよ」

「へーいへい おっさんも和之も心配症だな」

「まずは そのおっさんつてのをやめんか 馬鹿たれ」

「さーせんしたー！ー！」

三年生とは高校では最上級生だ

三年間の集大成……。地道に積み上げた結果で誰しも迎える事の出来る最後の学年

俺はあの事故でその機会を失い 更に父がくれた最後のチャンスまで棒にふった

やり直しの効かない人生で俺は2年生をやり直し

共に学んだあいつらは先に進み遂には卒業……。

取り残されたと思う反面決別したあいつらに未練はなく 今ともに歩む

この五つ子や弟 そして数少ない友人達とともに俺は最後の年を迎える

ここから先きつと去年の比ではない面倒事が押し寄せる

覚悟を決めろ上杉幸太郎……。そしてあいつらを全員ちゃんと卒業させるんだ

(さ)らば 二年生の俺……。俺は今日でお前とは本当にお別れだ 二年間世話になったな)

第七十五話 不良少年と学級委員な次男坊

「よう 風太郎今年も同じクラスだな」

「朝方見たが、お前の名前なかつたぞ？」

「教師から新手のいじめを受けた」

「怖い世の中」

「何があるかわかんねーよ」

教室で黄昏る弟に声をかけた

何処か憂鬱そうにも見えたが、杞憂に終わる。表情一つで分かるさ
内心では五つ子と同じクラスだったのが嬉しかった 兄には一目
でわかる

俺も人の事は言えない立場だ、そつと口を閉じよう

『中野さん本当五つ子なんだねー』

『すげー可愛い』

『お近づきになりたい！』

その話題の五つ子だが、クラスの注目の的となっている

見慣れない人からすれば、全員が揃った姿は物珍しい 数人の生徒
が彼女たちを囲むように同じような質問ばかりを投げ掛ける…。や
れやれと言った表情でやり過ぎす五人は気苦労が絶えんな…。

つうか見世物扱いだな…。

「何が楽しいのか…。」

「確かに見慣れれば、普通だからな」

「同じなのは顔だけにしてくれ」

「照れ隠しだな」

素直になれよとブーメランが顔面に突き刺さる

口に出せば軽い論争だ 今は、控えよう

「トイレでも行ってくるか」

「俺もちつとばかり用事あるし その前にトイレでも…。」

五つ子程じやないけど年子でもシンクロする事は多々ある
やることなす事 考える事は変わってきただけ結論は何時も同じ
意味合いが異なる事が多いだけだ

三年の教室の中ある程度は把握したし便所の位置も覚えておくか
…。

「退いてくれ」

「すみません 歩行の妨げになるんで」

席の位置関係上後ろから行った方が、早いのだが、如何せん…。

五つ子鑑賞会と凄く面倒なことになっている。物珍しいって気持ち
ちは、誰しも持ち合わせるが、もう少し相手側の気持ちと周りに配慮
して欲しいな…。

(ぞろぞろと並んでるなあ…。)

クラスの何人かが 風太郎に『中野さんに興味があるの』と声をか
けるが…。

ザ無愛想な弟は『トイレ』の一言で、そのまま直進。俺も俺で『も
う少し周りに気配れ』と注意

言い方あ！と内心想いつつも確かに…。あのままいられるとす
げー邪魔なんだよ

「あの二人感じ悪ー」

「片方は暴力事件起こした人でしょ？ 何か嫌だね同じクラスっての
は」

(まーだ 噂してる奴いるのかすごく暇なんですな)

三年生の卒業式にも乗り込んで大暴れと噂に尾ひれまでついてい
る

何処まで拡張されていくんだあの噂は…。

こんだけ広がると弁解する気もでねーな

まあ…あの噂よりも俺は俺でやらんと行けない事もあるし 無視
無視

「コータロー…。」

「彼の態度もですが、幸太郎君もわざと憎まれ役を演じる必要もないの…。」

「やっぱりまだ引きづってるんだねコータローは…。」

通り過ぎざまに二人の視線を感じたが、こっちも忙しい何かあれば
後程

（さーて四葉と話せる機会があれば良いんだけどな…。）

風太郎の現状だけでも何とかしてやりたい

先に出て行った弟君の今後を兄なりに不安を抱きつつ打開策を
練っており、一応は布石は打ってある後は、必要な人材 中野四葉
彼女とどう会話するか…。

（スマホ使えるようになってんだ…。さて 送るか…。）

軽く目配せをした後テスト以降に復活したスマホ操作 四葉に『廊
下に来てくれ』と一報

（お お兄さんから…。まさかあの事で相談が！）

「おーっと すみません おトイレです！」

「って 四葉まで急にどうしたのよ」

—————

—————

—————

ホームルームまでまだ時間はある トイレと適当な理由で出て来
たが

本当は、四葉を呼び出す口実だ、廊下の先階段近くで待機中

暫く待てば、きよろきよろと辺りを警戒する怪しいうさちゃんリボンが現れた

「悪いな…。話の途中によ」

「いえいえ 実は困っていたんで助かりました」

「おーそれは良かった…。まああいつらも五つ子が珍しいんだろうが大概にしろ」

「あつははお兄さんは相変わらずですね…。それで何で私を呼び出したんですか？」

「おう実は、お前に折りいって頼みがあるんだ…。結構重大な事さ」

（やっぱり あの事だ お兄さん怒ってるのかな？）

「あのすみま…。」

「お前と風太郎で学級委員になって欲しい 頼めるか？」

「すみません ごめんなさい…。って あれ学級委員？」

こいつは何を謝ってるんだ？ まさか学級委員が嫌だったとか…。

だが本人も予想外な回答に驚き何度か復唱している

うーんと表情を変え考え出す…。怪しい

「あの…。一体なぜ 私と上杉さん何ですか」

「このまま行けば…。風太郎は孤立する。あいつには楽しい気持ちで終わって欲しい…。四葉もそこは同意見だろ？」

「確かにクラスでは悪目立ってますからね 上杉さんは…。」

「そういう事は、俺の分野だ…。あいつはお勉強出来るが口と性格が悪いだけだ」

「お兄さんも大概ひどい事を言いますね」

「事実だ…。でもそれが全てじゃない お前知ってるだろ？」

あいつは林間学校でも最後までやり切った…。何でもかんでも一人でやる癖があんだよ」

（お兄さんが言っても説得力皆無ですよ…。）

「風太郎には、悪いとは思ってるが、あいつには学級委員になってもらう」

あいつのイメージを良いものに変える作戦だ」

「確かに…。でも上杉さんが自分から立候補する絵ずらが浮かびませ

んよ」

林間学校の際も余った。俺が風太郎と実行委員をやらされる結果に終わった

もし俺があのまま来なかったら一人でやろうと無理をする

四葉という人間は気配り上手だ、風太郎のサポートに打ってつけ

一度は二乃の線も考えたが今のあの子にはとてもじゃないが任せられない

それにだ……。俺の話を真面目に聞くとは思えない

五月も似た理由だ……。『そういつた事は自らやるべきです』と正論ぶつけられる

「だから お前だ……。 お前が先ず女子の学級委員として立候補し風太郎を男子として指名して欲しい」

「なるほどその手がありましたか！」

「ここだけの話……。担任は顔見知りだ 話は通してある融通は聞かせるって」

「お兄さんは何者なんですか……。時々不思議に思います」

「ん？ ただの家庭教師補佐だ お前の性格を利用して悪い 頼めるか？」

「私は大賛成です 実は考えていた事なので」

四葉は周りをよく見る

どんな時でも動けるようにしており そのせいで勉強にも身が入らない事が多く

何度風太郎は泣かされたか……。でもその性格が今度は風太郎を救う

あの部長にあんだけ言っておいて俺も人の事言えんな……。

「よし……。話は終わりだ 風太郎に良い一年を送らせてやろうぜ」

「はい 不詳中野四葉 頑張ります！」

「その意気だ……。さて戻りますかー」

「お兄さんは……。お兄さんは良いんですか？このままで！」

「俺？ 別に中野姉妹や風太郎に真弓ちゃんと話せればそれで良いし

さ」

今更だ。ここ二年で立った噂は未だ消える兆しもなし

和之にはああ言ったが、当時の三年生と違い今の三年生は俺の詳しい事情を知らん

どうにか頑張ってみようとは…。考えてはいる暫くは様子見だ

「別に諦めたってわけじゃねーよ…。だから心配すんな 今は風太郎を最優先だ」

「は…。はい わかりました あのお話はこれだけですか？」

「なーにか、俺に隠し事でもあれば話は別だけどな？」

「い いえ わわたしが お兄さんにか 隠し事なんて」

何故か、食い下がらず話を引き延ばす四葉

様子がおかしい…。慌てだし 汗も掻きだす目線が俺とは合わない

まさか本当にこいつが、犯人なのか…。

例の手紙を読んだ犯人候補の一人が四葉

三玖曰くあの後脱衣所に入った人間は、彼女と一花だけ それ以外

は見えないと…。

もし読んでいたのならこの反応も可笑しくはない

(こいつはアタリだな……………はあ)

どうすつかない…。問い詰める気はないし 本人から言いだすまで俺は聞くつもりはない

だからこのまま四葉は解放する でも一応そう一応は忠告だけしておこう

(もし…。見たのなら誰にも話さないでくれ)

「お お兄さん！」

「さーて 教室戻るぞー」

ポンポンと頭を叩き不安を抱かせないよう俺も作り笑いで、その場をやり過ぎす

教室に向かうまで、口を閉じる四女さんは、何か言いたげだったが、胸にしまっておいて欲しい

――
――
――

「頼んだぞ 四葉…。」

「はい了解です」

ずい

「何が了解なの四葉…。」

「み 三玖急に出てこないでびっくりするよ」

「コータローと何を話してたの」

「何でもないよ…。三玖が心配するような事は…。」

(耐えろ 四葉手紙の事は誰にも言うな)

教室に入り 別れ際に軽く伝える

タイミングが、良い事に三玖が待ち伏せしていた タイミングのいい待ち伏せって何だよ？

風太郎の件もだが、手紙の件をこれ以上他人に知られる訳には行かん

四葉が確定した今 残すは一花のみだがあいつがボロを出すとも思えんしな

三玖に詰め寄られる四葉は何とか切り抜け そそくさと自分の席まで戻る

「コータロー…」

「別になんもねーよ…。」

「そんな言い方中野さんが可哀そうだよ」

結託した女子生徒に絡まれた

普段と変わらんつもりだがこいつ等には暴言に聞こえたと一回耳鼻科に行け

適当にあしらってさっさと戻るか…。

「はあ…。くっそ面倒だな 和之に見られたらまた怒られる」

「兄がどうしたんですか先輩？」

「うわって！ 急に話しかけるなよ」

「同じクラスなんで私は遠慮しませんよー」

「へいへい そーですか」

2年の時は別のクラス

それ以前は学年すら違った 懐いてくれるのは先輩としては嬉しい限り

この後輩も、もう少し距離感を大事にすべきだな…。

まあ…。彼女には重要な場面で助けられてる事が多し あんまり強く言えない…。

「真弓ちゃんもさつきと席座れー ホームルーム始まるから」

「仕方ないです では後程」

「はっははは 元気だな」

三年生の始めとなると席順も以前とは違う

俺の隣には、もーあのお節介な後輩はいない いなくなったらいいで寂しく感じるのは、気の迷いだな…。

(もう少しで風太郎の誕生日だ シャキツとしろ 上杉幸太郎)

今後を考える間に園田のおっさんが教室へとやってきた

いぎホームルームというタイミングで四葉が元気よく手を上げる

「なんだ 中野ー」

「このクラスの学級委員に立候補します！」

「ほー 説明の手間が省けるな 誰か他にやりたい奴はいるかー」
そんな物好きはそうそういない

中学生時代から高校2年の初めまで学級委員をやってきた俺から言わせれば一種の雑務担当だ

あれやこれやと役員をやらされるやりたくない代名詞

誰もが優等生を支持する出来レースだ…。

ただ嫌でも目立つそれは誰しもがその人間を覚えるという事

いまいち影を薄くする風太郎にはこの先大切な思い出として学級委員を頑張ってもらいたい

それに流石園田先生だ……。話を聞かず手を上げる生徒の話もちやんと耳を貸す

相変わらず問題児の扱いはお手のもだな……。

「皆さん困ったら私になんでも言ってくださいね！」

ちら

(雑なアイコンタクトを送るな)

「じゃあついでに 男子も決めておくかー 誰かいないか？」

立候補はいないか

「誰かいませんかー」

四葉がわざとらしくクラス中を見わたし

一花は恥ずかしそうに顔を伏せる

ここからが問題だ……。

女子は簡単に決まった男子はそうも行かん先ほど言ったように雑務を任される仕事を

自分から名乗り出すのは限られている……。

立候補が消えた今 残るは推薦 多数決という……。俺がこの世で一番苦手としている決議だ

そしてこのクラスのなかで誰もが推薦する人間はただ一人 武田だ

朝方掲示板を覗いた時に武田の名前が記載されていおり

俺が少し教室を空けた間に五つ子にがつく男子どもを一声で納得させた

俺の場合は睨めば似たような現象が起きるが五月や三玖に叱られるからなるべく避けている

案の定クラスは武田の話題で持ち切り

誰もが武田の名前を呼ぶ そう呼ぶだけだ 誰一人として自分から手も上げない

誰かが動かない限り行動も出来ない……。

ここがチャンス あいつの性格ではみんなが名乗ればならば僕が引き受けようと

芝居がかっている でも残念だったな…。

(四葉 いけ)

こくり

「私 学級委員にピッタリな人知ってます!!」

女子の学級委員である四葉の声で更にクラスは盛り上がる

武田コールは徐々に強まり 今か今かと待ち望む中…。

彼女は彼を指定した

「上杉風太郎さんです!」

『『えっ……………』』

彼女の一声でクラスはざわめき後ろの席の風太郎は体を揺らす

『何故だあ』と小さく呟く声

だがまだ一押し足りない

ここで四葉以外が手を上げず 他の人間が武田を推薦したならばそのまま崩し的に武田に軍配が上がる

「先生 自分も上杉風太郎くんが良いと思います」

「なっ…幸太郎 お前!」

そう最後の一声は俺だ

全員が全員…。文句を言えない人間となれば俺だろ
手を上げ園田のおっさんに風太郎が良いと声を出す

ここで推薦2票

誰も動かなければ風太郎の当選は確実

他の奴らは、武田武田という割に手も上げない

自分で発言もしない 思うだけでは何もならない…。

「上杉と中野の2票か…。他に立候補する奴は いないか？」

「いないのなら 他の係も決めるぞ」

「先生 俺はやるとは言ってますん！」

「諦めろ 風太郎…。」

「お おまえ」

ぐぬぬぬと拳を握る弟

この流れは覆せないと判断し それ以上の抵抗はやめた

悪いな風太郎…。確かに勉強は大事だ お前にとってそれが一番だろ

でも勉強以外も学ぶべきだと俺は、常々思っている

根の良いお前だきつとクラスを引っ張っていける…。こんなやり方しか出来ず悪い

その後は適当に進み 風太郎も物凄く不満そうな顔のまま無事に学級委員に抜擢

一応は園田のおっさんから『経験者のお前が二人をサポートしてやれ』

推薦したからには責任は取る…。

今回が初めてとなる二人 学級委員のいろはを教えれば円滑に事が進むだろう

—————

—————

—————

ホームルームも終わり 授業も滞りなく行われ

現在は昼休み 後ろでずっと呪いの呪文を俺に唱えていた風太郎は『この野郎』と文句を言って

何処かへと行ってしまふ

放課後にでもやるべき事を教えてやるか…。

「さーて 俺はその間に…。」

風太郎がいない今 俺に出来るのは

あいつの誕生日プレゼントを考える事だ 悲しい事にうちの弟は欲しいものは何ですか

『金 具体的には借金返済後ある程度不自由なく暮らせる額が欲しい』

すげーリアルな事を言ってくるほど夢がない

適当に持ってきた雑誌を見ても風太郎の好みとはかけ離れている

あいつは余り派手な物は好まん…。昔は派手だったけどな…。

「まったく もう少し兄が困らない物を要求しろ…。」

「なーにが 困らないものなの？ コータロー君」

「…。ほんと 後ろから声をかけるな」

「ごめん ごめん 何かずつと唸ってたからついつい」

手を合わせて軽い謝罪を述べる一花

名前で席順とは困ったもんだ 後ろから声をかけられてばかり

正直心臓が持たん…。

じーつと俺の顔を見ればにつこり笑顔

まじでこいつは何しに俺の所に来たん…。

「ようがないなら 席つけー」

「いやー せっかくコータロー君と同じクラスだからお話でもと」

「俺は特にないぞー 勉強なら後で見てやる 今は個人的な理由で忙しくてな」

「雑誌何て珍しいね 普段は求人広告眺めてるのに」

「偶にはいいだろ？ んで要件はそれだけですか」

「あのー コータロー君に聞きたいんだけどさ」

「何ですかー 一花さん」

なんだ急に…。

「フータロー君って何が好き」

「お金 勉強」

「あの そう言う事じゃなくてもとつと具体的なものとか…。」

「あーそういう事か、お前らもあいつにプレゼントをやるのか 風太

郎は果報者だねー」

「今の言い方は流石にバレるね うん フータロー君にはお世話になってるし何かないかなーと」

「と言われてもな 聞いてもお金としか言わん弟だ」

「だからコータロー君もずっと唸ってたのね」

「そういう事…。クツツ いっそのことアイツの好きな麦茶をパツクで買って叩きつけるか」

「お兄ちゃんも大変だねー」

「年に一度の記念日だ…。ちゃんと考えやらねーとな…。はあー学食いくか」

考えても答えは出ない…。同じ場所に留まれば見えてくる事も見えないとよく言う

誕生日プレゼントも似たようなもんだろ

「記念日か…。」

「なんだ一花？ 暇なら一緒に行くか？嫌なら別に良いけどさ」

「あつ…。うん行くよ」

「まあー三年生の始まりでも俺のお昼は味気のないパンだけだな」

「お姉さんが奢ってあげようか？」

「大丈夫だ…。腹に入ればどれも同じー」

食えれば同じというスタンスは…。変わらん

それに自分のやりたい事を決めたと話している彼女から奢られるのも考えもんだ

「そう言えば、コータロー君に返す物あったんだ」

「？ 何か貸してたっけ」

「それは放課後のお楽しみと言う事で…」

――

――

結局放課後まで何の進展もなし 勉強会は無く

二人に学級委員にとって大事な心構えを教えさつきと下校
同じくプレゼントで頭を悩ませる 四葉を除いた面々と行動して
いる

あいつが欲しいものは分からんまま

よくよく考えれば俺は毎年毎年…。何をあげていたんだろう

考えれば考える程頭が痛くなってくる

「コータローでも分からないんだね」

「弟が現実主義者過ぎる…。お金が欲しいのは俺もだよ」

「上杉君と同じ事言ってますね…。」

「何だかんだアンタらも兄弟なのね…。」

「お小遣いやる年でもねーしな」

三玖が、それとなく風太郎に誘導尋問を行った結果

お金 体力 睡眠 運氣アツプ

最後のはどうしろと言うんだ…。

「運氣の上がる壺でも買ってやるか」

「怪しい壺とか詐欺くさいからやめなさい」

「へいへい」

考え込むうちに彼女達のアパート前までついてしまった

つく前には決まるだろうと俺が浅はかだったな

五月や三玖が部屋に入っついていかないかとお招きしているが丁重に
お断りしよう

「誕生日プレゼントを選ぶため幸太郎君の意見も参考にさせて頂きま
す。」

「俺のは参考にならん 嫌いな食べ物生魚 あとアイツはコーヒー
も苦いから苦手らしい」

「何という…。」

「要らん情報だったな…。取り合えずはあまり考えず…。きつと喜ん
でくれるだろうなっつてものが一番だ…。 ようは真心だ!!」

『アバウトだ!!』

何とも曖昧な答えだ…。誰でもそうだ

考えが、纏まらなければ自分が送ってあげたい物 下手に着飾る必要はないと思う

まあ逃げの一手に近いな……。でもそれもありだ……。趣味に合わせようと考えれば痛い目を見る

何事も自分のできる範囲が大切なのだと……。身の丈と言う有難い言葉が、この世には存在する。

「そう言えば 一花……。俺に返す物があるって言ってたな……。」

「ああー おみくじ」

「おみくじ?」

「コータロー君の新年のおみくじだよ 実は私が拾ってました」

「一花まだ彼に返してなかったんですか……。」

「渡す暇と……。忘れてました ごめんなさい」

「良いよ別に あんなアバウトなおみくじ擬きなんて」

「良いからまってて 直ぐ取ってくるからさー」

あの日無くした。おみくじをまさか一花が拾っていたとは少々驚きだ

『部屋の前で待っていて』と言われその場で待機

別に今更な気もするが、せつかく拾ってくれたんだ素直に受け取ってあとは煮るなり焼くなり

俺の自由だ……。

「まじで俺も存在忘れてたな……。」

「悪いとは思ってますが実は……。私も見てしまいました」

「私も……。何か不思議な内容だった」

「あれは最早占いだ……。年明けから最悪だよ」

笑って流してくれ……。思い出すだけで馬鹿らしくなる

今年は俺に取って最悪で最高な一年……。予期せぬ再会が俺を待っている

とてもじゃないがおみくじに書く様な内容ではない

一花が部屋に入り暫く経った。一向に来る気配はなく玄関前で持っている…。

一花が持っていた…忘れていた…

つまりは、あの汚部屋と化したあの場所の何処か…。時間もかかるわな…。

『おーいまだ』一花に一声かける…。

直ぐに『待っててー』と返事は変える。バイトまでまだあるし待つか…。

「あつたー はいコータロー君 これ」

「わざわざすまん…。じゃまた明日ー」

「コータロー君は今からバイト？」

「えっ？そりや勿論 さっさと帰って晩飯食べたらバイトだな」

「相変わらずだね…。無理はしないでねコータロー」

「ありがとな…。じゃ今度こそさいならー」

渡された紙切れには

くだらない俺の今年の運と大凶と書かれたまったくご利益が無さそうな不吉な品

どう処理するか家に帰って決めるか…。

（今は先ず 風太郎の誕生日にあいつのサポートだな…。やることに事欠かねーな）

アパートを出て道に出る

このまま真っ直ぐ家に帰ろう

今日もバイトが俺を待っている

そんな悠長に構える俺に神様はとんでもない贈り物をくれた

「なーがおみくじだ…。」

改めて見直したそれにケチをつける

何度も見てもアバウトな内容に実は紛れ込んでいた偽物ではと

疑いの間差しを向けていた

アパートの前あと一歩でそこを出る瞬間に後ろから懐かしい声がした…。

この時 俺が取るべき行動は一つ 何も見なかった 何も聞かなかった

何もなかった事にしきつさと帰る…。それが最適解だった

でも…そうしなかった…。出来なかった

「あれ…。もしかして 幸太郎かい…。？」

「えっ…。」

その声はひどく懐かしく俺の頭に残る

何でここにいるのだと俺の中では自問自答

ふり返って自分の瞳で確かめる

確かに聞きなれた声だ でもその容姿は俺の知っているあいつとはまるで違っていた

美しく誰もが見惚れるその容姿……。だが確認すべきだ……。本当にあいつなのかを

「お…。おまえ…。坂下なのか」

「坂下か…。うんそうだね 君の中では『まだ』坂下なんだね」

「坂下さかしたつむぎ紡木…。何でお前がここにいる」

実に2年ぶりの再会だ

俺が事故に遭って入院する前に電話をした最後の相手

『そう言えば、坂下何で髪切ったんだ？』

『意味はないよ…。ただ長い髪は死ぬほど嫌い…。それだけさ』

『そ そうなんだ…。(でもずっと伸ばしてたのに何でかな？)』

坂下紡木が特徴的だったショートヘアをやめ。あれだけ嫌っていた髪を腰ほど伸ばしている。その姿はまるであの頃の中野姉妹を彷彿

佛とさせた…………。

戸惑いを隠せない俺とは、対照的に彼女はあの日と何ら変わらない態度で再会の挨拶を述べている…。

にっこりと微笑むその姿は誰もが心を撃ち抜かれるだろうが、俺にはそう見えない…………。 まったくよお…冗談きついで…。

「今の私は…。 あまみやつむぎ 雨宮紡木…。色々あってそう名乗ってる やつと会えたね幸太郎」

『恋愛運 今年是最悪で最高の一年です 予期せぬ再会があなたにあるでしょう』

それはある意味あなたの今後を左右するものです
名前の最後が行の人物には気をつけましょう その人物があなたの運命の人物かも』

おみくじなんてクソくらえ そんな事思ってたらこれだ…。

まじで俺の人生バグだらけだよ…。

さかしたつむぎ 坂下紡木と言う名前で答あまみやつむぎえ雨宮紡木と言う知らない苗字を名乗るこの女…再会を喜び浮かべた笑みか、はたまた俺を嘲るものか…。

どちらにせよ高校三年の初日で俺は詰みを言い渡された……………。

第七十六話 不良少年と次女のバイト

朝のホームルーム

迫る行事として『全国学力模試』と勉強となればとことん元気な弟
一方で学級委員のわりに統率が取れておらず

『修学旅行ーー』とこっちも遊びには全力投球な中野姉妹の四女
ある意味ではバランスが取れており何だかんだクラスにも馴染ん
でいる

武田のちやちやが入るも学級委員としての仕事は滞りなく進め無
事に終了…。席に戻ればどでかいため息だ

勉強との両立は大変だろうが、お前には良い起爆剤だ
この先きつと経験が生きていく…。

「はあ…。」

「何でお前がため息なんだよ？」

「わるい…。何かどつと疲れてな…」

「それも俺だよ…。全くお前と四葉にはしてやられたよ」

「俺は散々やったし…。たまには弟にもとな」

「いらん世話だ」

授業が、始まる前の軽めの会話

ああ…。風太郎やあいつらを見てると本当に安心出来るな

昨日は散々だ…。なーんでこんな時に坂下が出くわすんだ

中野姉妹にアパート前でのやり取りを思い出すだけで頭も胸も痛
くなる

『それじゃまた…じゃーね幸太郎』

『おい！坂下…。あいつ何で…何でここにいるだよ』

(まじで…。今年は厄日だよ)

不敵な笑みを浮かべつつ再会の余韻に浸るように

あいつは、再び俺の前から去っていった…。

ただ今度と言う今度は、以前のように数年越しに顔を会わせるよう
ことはねーだろうな

「はあ…」

「幸太郎？」

――

――

――

「もしもし…。みずき姐」

『ごうくんから電話とは珍しいねー』

「はあー俺だつてする時はする」

『なんだい…。随分余裕がないねー？』

「悪い、少し頭を整理する…。ふう……………昨日あいつに会った」

『誰かな？あいつつて』

「誤魔化すなよ 坂下…。坂下さかしたつむぎ紡木だ…。あんたの妹の…」

『ああーむぎちゃんの事か…。ごめんね黙つててさ』

昼休みになればそそくさと俺は、教室から去り誰も来ないだろう場所まで移動

スマホを取り出し…。けして自分からかける事はないと思つていた

自称姉の番号に連絡…。ワンコールで出てくれた…。

出てくれる確信は合つたしここまでは、順調だ

「別にいいよ…」

自覚はないのか直ぐに人をからかう様な事はしないでいただきたくない…。

進展しないと思い 名前を出せば『ごめんごめん』とすぐノリが軽い

「あいつさ…。中野姉妹と同じアパートにいるんだが みずき姐の差し金か？」

『私はノータッチだよ…。一応は引越し先は聞いてはいたけど…。

お姉ちゃんも忙しくていまだに行つてません』

「はあ…。たく まじであいつがこっちに戻つて来てるなんてな」

『どうだったー 2年ぶりの我妹はさ？』

「えっ…。なんか髪をすげー伸ばしてたな あれじゃ声をかけられない限り気づかん」

『本人も心境の変化があったのか 伸ばしてみようって以前から話してたのさ』

「そうですね…。あのさ…。あまり込み入った事聞くのは良くないと思ってるけど…。何であいつ苗字が違うんだ？ 少し気になったんだけど」

髪の長さは驚いた

以前のあいつは、今の一花と同じくショートヘアと短く

『髪を伸ばすと面倒なんだよ…。それに長い髪は嫌いなんだ』

ロングヘアーに恨みであるのかと殺意高めに言っていた

その坂下が心境の変化とは…。意外だな 結構強情な奴で他人の評価を気にしない…。だからこそなのか…。

それに幾ら幼馴染とは言え 家族構成やその詳しい事情を聞くのは失礼だ

仲の良い人間なら余計に相手側に与える影響力も変わってくる親しき仲にも礼儀ありだ…。

昨日あいつは『ああ 君の中ではまだ『坂下』だったね』と意味深な事を告げ、詳しい事は姉に聞いて欲しいと次の再会を予告すれば部屋に行ってしまった…。

もう会う気はないが、あのアパートに行けば嫌でもエンカウンターしちまう。それなりには事情を把握してないと会った時に俺が何を言いだすかもわかったもんじやない…。本当に会いたくなかったよ…。『えっーと 実はですね うちのお母さんとお父さんが離婚しました』

「はあ？…。まじで…えっえ」

『大まじだよ…。それでさ 私はお父さんに引き取られ

むぎちゃんはお母さんにそれぞれ引き取られる事になってさ』

「…。俺が眠ってた間にそんな事が…。でもお婆さんの旧姓は宮前だろ？」

『その大変申し上げにくいのですが…』

「無理にはいいよ…。そんだけ聞ければ十分だし」

『ここまで来たら言わせて…。お母さん　その後すぐに再婚してんだよね』

「割とヘビー過ぎる…。それであいつが雨宮って名乗ってるのか…。」

『本人は嫌ってるから…。あまり苗字で呼ばないでね？』

「会えばな…。それとみずき姐　ごめん　無理に聞き出して」

『いやいや　こつちこそ言っておくのを忘れてたからお相子だよ！気にしない、気にしない』

普段は明るく元気　電話越しでも分かるくらい底抜けに明るい人物だ…。そのみずき姐が何処寂しそうに話している気がした…。

あの人も大概にため込む癖がある…。心配かけるなよ

特大のブーメランだが…。今は甘んじて受け止める

「事情は把握した…。」

『まあうん…。そう言う事だから…。もしむぎちゃんに会ったらまた仲良く』

「会いたくはないけどな…。」

『そう言わずにお姉ちゃんは、むぎちゃんに頑張って欲しいけどそう言った優遇はダメだよね』

「なんの話だ？」

「先が思いやられるねえ…。じゃー私　お仕事あるのでさいならー』

「了解…。つて　みずき姐　幹雄さんから手紙来てたんだ！」

『おう…。愛しの妻を放っては置いてコウくんとお手紙とは悲しいな』

「大した事じゃないけど…。一応はみずき姐には言っておこうと」

『はいなー　ではーサラダバー』

ガチャリと電話は切られ壮大なため息…。

最後まで明るい人だ…。しかし思っていたよりも状況がややこしいな

聞きだした。俺が言える事じゃないけど…。内容が重すぎる

まさかおじさんとおばさんが離婚しておばさんが再婚して二人がそれぞれ別の親に預けられていた…。

全国学力模試や家庭教師に手紙の件 更には坂下基…雨宮問題…考えれば考える程…。頭が痛くなる事ばかりだが出来る事を一つづつ着実に解決しねえーと何処かで詰む…。

「風太郎の誕生日もあるんだ…。顔には出さねーよにはしないとな
五月辺りは直ぐに勘づく…。怖いくらいだしな」

問題山隅で、お先は真つ暗…。ただ始まった三年生だ…。

みんなには楽しい学生生活を送って欲しい…。それに抱えてる問題の過半数は俺個人の問題…。他を巻き込む訳には行かない

朝と同じくどでかいため息と吐きつつも教室のある三階へと一歩
また一歩と降りていく

先ずは、今日のバイトだ…。二乃の初出勤だ…。あいつの邪魔にならない程度にサポートして

何とか風太郎の誕生日プレゼントが聞けるようしてやるか…。

――

――

――

「ちーっす」

「先輩…。今日もよろしくお願いします！」

「おう…。真弓ちゃん…。元気だな…。それと二乃今日からよろしく
な」

「あんたも…。真弓もよろしく」

「わかんねーことあれば…。俺たちに聞けよ？」

「大丈夫よ…。私は聞かなくてもそれくらいは」

「まあまあ…。二乃さん初めてとは色々トラブルもつきます…。そ
れにこっちも教えるのが楽しいので…。むしろ大歓迎ですよ!!」

バイト先につけば、早速二乃と真弓ちゃんに出くわした風太郎は先

ほど荷物を運び手伝い……。厨房を行ったり来たり……。力仕事もだいぶ慣れて来たな

二乃は何時もの調子に見えるのが、逆に不安だ……。風太郎もなーんか余所余所……。お前がその調子でどうすんだ？

と思いつつも、告白の件もあるし落ち着かないのも無理ねーか

(下手に割り込めば話がややこしくなる……。それとなくフォローする感じだな)

「つて 二乃髪型変えたんだな……。良いね心機一転か」

「はい……。とても可愛いですよー」

「普段の髪型も良いけど結ぶのもいいよな」

「あんたは……。恥ずかしいでしょ！ ふん」

あつ早速……。怒らせたか口をむくつと膨らませさっさと出てつてしまふ

思った事を言っただけなんだけど……。二乃相手だと兄貴癖が抜けない『少し遊び過ぎましたね……。反省です』真面目な後輩だ……。

「さて俺は着替えたらすぐに向かうから……。真弓ちゃんも二乃と合流してきな」

「はい……。では先輩後程です!!」

「へいへい」

別れば、男子更衣室に向かい……。すぐに服を着替える

体調も万全だ……。異常は無し……。うん何もなし！

店長も今日は稼ぎ時つて何かテンション高めだったな……。

店先で出会った店長は『上杉君……。今日は大事なお客様がくる頑張りよう!』

大事なお客様か……。一体どんな客なのか少々興味は出てくるな……。

厨房からは、店長の絶賛する声が聞こえ

ちらつと覗けば二乃が自信満々な顔で自分が作ったケーキを披露している姿が見えた。

隣ではその光景を不満気に見つめる弟の眼差し

「納得できん…。」

「初日であれか…。確かに出来は完璧だな」

「俺なんて未だにキッチンに入れてもらえないのに…。面接で自慢しておけば」

「やめろ…。今のお前でもあれだぞ…。過去のお前はもつと悲惨だ」

「っ…。給料アップの道は遠すぎる」

弟のケーキを作るセンスは一向に改善の兆しが見えない…。

厨房に入るの機会は少なくあれ以降から虎視眈々と狙っているが店長からも釘を刺されている

他が出来るんだ…。お前は十分店に貢献してるんだけどな…。

「ホールに行くから」

「おっおう…。」

二乃が作ったケーキを見終われば風太郎はホールに戻って行く去って行く彼を寂しそうに見つめる二乃さん…。一途だな

「それで店長―何で今日はここまで人が多いんですか」

「ですね…。私や風太郎さんに先輩や他のバイトさんまで総動員ですね」

「M・A・Y」

店長は語った M・A・Yと呼ばれる有名レビュアーが存在

彼女が来れば口コミから客が倍増し売り上げもどつと増えると

店長は目を生き生きさせながら語っている…。何度か知らないうちにお店には来た事があるが

今回はその M・A・Y 本人から予約の電話が来たと…。

(そりゃ…。店長もやる気が倍だよね…。

しかし M・A・Yか…。五月って意味だよね…。うえー悪寒が)

「今夜初めてのご予約が入ったんだ。失敗は許されない。 M・A・Y

さんはこの春の新作をご所望だ!!目指せ、星5!!」

『はい!!』

こりや失敗できねえーな

店の今後を左右するかもしれない大物からのご使命だ

自然と俺らも気合が入り…。懸念点は沢山あるが…。普段と変わらず一個一個丁寧になをかつ

時間を取られない様やれば…。問題は起きる事はない

ただ一つ上げるとするならば新人の二乃だ…。

店長は彼女のケーキを絶賛し これを並べようと自信たっぷりに話すが、もう少し冷静に判断して欲しい

幾ら才能があつても暫くは下積みで慣らして行くのがベスト

一応は耳に入れておいたが『大丈夫…。彼女ならいける』

「すげー不安だ…。」

この不安がその後現実になった…。

それは厨房の手伝いを任せられた真弓ちゃんの一言で始まった

普段はホールで接客だが事ケーキ作りとなれば彼女にも白羽の矢が立つ…。今回は二乃が加わり厨房の稼働率は何時よりも…。動きは早い…。その中で生地の見目を任せられた真弓ちゃんの表情がかわった

「先輩…。これ少し味見してください」

「?…。何だこれ…。」

「すみませんー。これ作ったの誰ですか!」

「あつ…。私です!」

ボール中に入った生地は何処か味がおかしく…。舌触りも違和感を覚える

味音痴でもそんなくらいは把握出来ている…。出ないと厨房は任せてもらえない

「店長…これ…味に違和感が…」

「えっ」

「ダメだ…。お店には出せない…。すぐに作り直して！」

「はい」

「了解です」

「……」

その後は厨房もフル稼働

一人のミスは全員のミスだ…。俺の監督不行き届きだ…。二乃を
も少し気遣ってやるべきだった

才能のある新人…。店長には流されたが強く言う必要があったな

明らかに落ち込む二乃…。その後の休憩ギリギリまで生地作りを
続け

店長も一言労いの言葉を入れれば…。休憩室まで歩いて行った

「二乃さん…。大丈夫ですかね？」

「失敗できない時に失敗しちゃうのは…。予想以上に気持ちを左右す
る」

「私だって似たような失敗があります…。まだ可愛いくらいですよ」

「真弓ちゃんはよく床にケーキ蒔くからな」

「うー…意地悪言わないでくださいよ」

「さーせん…。でも心配はいらない」

「どうしてですか？…。きつとシヨツクを受けてる筈ですよ」

「既にカウンセラーが待機中だ…。あいつに任せようぜ」

「うーん？…。!!あーそう言う事ですね了解です」

確かに失敗は大きな傷となる…。でも失敗しない人間は誰もいな
い

どんな万能人間でも小さなトラブルを起こしてしまう

今回はそれがたまたま二乃だっただけ…。普段のあいつなら冷静
に対処出来た筈だ

今は心に少しの迷いがあり…。それが判断を鈍らせた

下手な慰めは逆効果…。そつとしておこうとはさじは投げない…。

でも休憩室には風太郎がいる……。『……。考え過ぎだ』と軽くぼやくほどには冷静だ

俺の出番は今日は無し……。風太郎にまかせ俺は俺で時間つぶしだ

――

――

――

適当にぶらぶらし……。時間まで待機

二乃がギリギリまで作っていた生地を味見……。先ほどの生地とは
違い

多少は荒いが……。味は十分だ

今回の事が足枷にならないかやや不安が残るがカウンセラーさんが既にいる。同じ新人同士……。うまく話もしてくれる筈だ

焦る気持ちと有望な新人がはいり嬉しいのは分かるが……

店長にも一言言っておいた『あれは……。僕も反省してる気を遣って
あげるべきだった』

落ち込む気持ちは分りますが……。店長もシャキツとしてください
ね

一言良い終われば俺はもう一度厨房に戻る

「ん？……。知らん着信だな」

残った皿の片付けの途中で……。スマホが一度を音を鳴らす

知らない電話で……。俺は取るのを躊躇えば数度鳴った後にそれは
止まる。出るべきだろうか迷ったが……。仮にも仕事……。スマホ
なんていじってはいられん

時間も時間だし……。二人の様子でも見てこよう

店長もやる気を戻せばどっかに行っちまったしな

「おーっす 風太郎調子はどうだ？」

「……何にも……」

「ふーん……。顔がにやけてるぞ」

「うるさい……。つか噂の客も来てるし……。お前は厨房に戻れよ？」

「わーった……。そんで二乃はどうしたんだよ？」

「二乃ならその噂の客の所だ……。多分お前も知ってるやつだぞ」

ぼーっと突っ立って顔を赤らめる弟はテーブル席を指さした

うーんと目を凝らすと 絶句した

顔をマスクとサングラスで隠し……。じーっとテーブルと向き合う

その女性

接客している二乃がサングラスを外そうとするが相手も抵抗

動きたびに頭のアホ毛があつちこつちと左右に動く

「あれでバレてないつもりなのか……」

M・A・Y 日本語で五月を意味する

聞いた時に感じた悪寒の正体は確かに当たっている

噂になるほど色々な店舗に行き来しているとは本当に食べるのが

好きなんだな 五月は……

離れた向こうの会話は聞こえないが……。二乃も注文を聞き終えた

のかやつとこさ戻ってきた

五月と話して気分が楽なつた……。というよりも風太郎の反応から

すれば。彼と彼女の中で何か進展があつた。それもプラスに働く

らいだ

「ねえ……」

「何ですかー 二乃さん」

「ありがとう」

「何のお礼だ？……。俺は何もしてないが」

「店長が……。私に謝ってた……」

「良かったな……。お咎めなしだ」

厨房に戻つた二乃は何処か口ごもる

一応は店長も反省して二乃に声をかけたと……

戦力として見るのは良いですけど目先に囚われてこつちが、二の足

踏んで新人の心に傷がつくのは、マイナス以外の何物でもない……

「まあ……お前はやれば出来るんだ……。肩の力を抜け、失敗は誰でもす

る」

「はあ…。何か考えてるのが馬鹿みたい　今から言うから」

「何をだ？」

「ありがとう…。コウに…。」

「えっ…。二乃　もう一度頼む！」

「はいはい…。さっさと準備しましょうねー　お客さんが待ってますからねー」

「おーい二乃！」

気持ちも切り替わり今度こそ心機一転

何時もの調子を取り戻した二乃は何処か爽やかで吹っ切れたように俺を『コウにい』と呼んでくれた

復唱を頼むが軽くあしらわれた…。

少し関係が進んだのは風太郎だけではないのかも…。

コウと呼ばれた人間から卒業したとばかり思ってたんだけど…。

どうやら少し違ったようだな

「つうか…あいつ頼みすぎだろ！」

「私も聞いたとき驚いたわよ。」

謎のレビュアー「M・A・Y」は大量の注文と注目を集め店を去っていった…。終日『美味しいです！』とパクパク食べてる姿はさながら動物のようであり。見ている癒されるが、軽い胸焼けを覚えた。

運ばれた皿を見て二乃は『なにしてんだか…』

呆れつつも店員と客として接客をやりきった…。

まあ…楽しいことは良いことだが、五月さんもしっかりバイトしてくれよな…。

「これさ…社割りって効くかしら？」

落ちがひどい…。

第七十七話 不良少年と次男と四女

学校……。そこは学び舎だ。それと同時に人間を一つまた一つと成長させる

人生で過半数の人間が通るであろう道の一つ

誰しもが挫折し誰しもが青春を謳歌する……

それは自由で誰かが阻害出来るようなものではない

行き過ぎた自由は自由ではなくただの暴徒だが……。節度を持った

関係は、誰しもが望む……

さてうちの弟は先月に中野二乃に告白され

更にはバイト先までが同じとなる……。彼女の悩みを解決すれば関係は一気に進展

二乃のラブコールは見ているこつちも少々恥ずかしくもなる

そのラブコールを受ける風太郎君は誰の差し金か

学級委員となり毎日毎日……。クラスの為に奮起し日々周りの人間から評価を受け始めている

悲しい事に学級委員として認識されるが名前を出せば『誰それ』と微妙な立ち位置になりつつあるが……。本人は特に気にはしない

そんな彼と同じく、日々奮起する。学級委員の中野四葉は今日も人一倍元気に学校内を動き回り

ただでさえ五つ子として有名なのに更に名前を広めつつあった

この上杉風太郎と中野四葉には最近だが……。ある噂が流れている

『三年一組の学級委員は付き合っている』

まあ：等の 風太郎本人は学級委員としての職務以外で他人との交流を拒みがち

一応は前田と言う人物と交友を持っているがそれ以外は果てしなく不安だ

そんな風太郎君はクラスで流れる噂なんてこれっぽちも知らず

今日もまた四葉と共に学級委員としてクラス中をせっせと動き回

る…。

「はあはあ…。し 死ぬ」

「息が荒いな…。楽な姿勢で一旦止まって息を整えろ」

「何で…。お前は何時もそう…。余裕な顔なんだ 同じ親から生まれたのに」

「普段から…。死ぬほど鍛えてるし…。動き回るバイトも多いしな」

四時限目の体育…。今日は50メートル走のタイムを測るため

運動部のみならず全生徒が必死こいて動き回っている…。風太郎は走り終わった途端に

その場に倒れ込み息も絶え絶え…。割と深刻だなお前のその体力の無さは…。

『お前が異常なんだよ』と無理して言うからむせている

「タイムは？」

「11秒だった…。」

「頑張ったな偉いぞ」

「お前に比べると霞むからやめろ」

「はっは…。6秒ちよいだ」

「日本記録に挑むのか？」

「日本記録か…。それを言うならあいつだろ？」

同じ兄弟でも差が出ている…。嘆く彼に本当に恐ろしいものは何かを指さした

にこやかに走り息も切らさずゴールする四葉

それから5秒程遅れてゴールし…。その場に倒れる三玖

測定している生徒も四葉のタイムに目を疑う

『5秒30』

「男子の日本記録を抜いたぞあの四女」

「うわーまじで恐ろしいな…。」

さつきまで息を切らし辛そうだった風太郎も流石に真顔に戻る

女子の記録なんて…。朝飯前中野四葉は男子日本記録を普通に抜

いてしまった

「再来月の体育祭のリレーは四葉で確定だな……………」

「聞きたくもない単語だ…。テストは良い。その次の修学旅行はさておき体育祭もつとも面倒な行事だ」

「学級委員と体育祭実行委員も大変だろうな」

「お前は一年の時どっちもやってたらしいな…。化け物か？」

「周りが勝手に持ち上げてその気になってやってた…。ただだよ…。両立は面倒だ」

体育祭の実行委員まで無理してやるなよ？ クラスの奴らもそこまで馬鹿じゃないさ」

「勿論そんな無駄な事に時間は使う気はないぜ…。学級委員ですら日々限界なのによ」

今日は全国学力模試に加え…。来月修学旅行と行事がぎっちぎちうが先生も止めないし
それに加え6月は運動部が命を燃やす体育祭だ…。どれだけ騒ごうが先生も止めないし

文化祭に続き誰もが楽しむ行事の一つ

人生を勉強に注いだ風太郎には耳が痛く…。勉強の妨げにしかない
と愚痴も出る

授業も終わりになったのか…。教員が体育委員を探すがどうやら今日は休みだ

クラスを代表する学級委員にお声がかかる

『逝ってくる』…。文字が違う気がするがあの男は本当に大丈夫か？

戦地に向かう如く…。哀愁漂うその背中を見送った

「ぶっ倒れないと良いがな…。」

バツシン

「いでー！」

「どっちが先に倒れるのかなー コータロー君」

ぼーっとしてた俺が悪いが、背中を思いつきり平手打ちされ

背後に聞こえた声の主は素知らぬ顔で隣に座る

何だか最近は何かに一花は絡んでくるな…。

「たく…。声は普通にかけるよ…。背中がヒリヒリすつぞー」

「あつははごめんごめん」

「悪気があるなら…。叩くなよ…。はあ」

「コータロー君今日は凄かったねー」

「何が？」

「50メートル走 6秒少し早いね」

「普通だろ…。運動部はもつとはえー お前だって四葉に負けじと6秒切りそうだったくせにさ」

「ああ…見てたんだ」

位置関係的にも見えるし

彼女達は嫌でも目立つ…。頑張つて走っているなら自然と応援の声もでる

「そりゃ…。お前らの走りだきちんと見てるさ」

「／／…。そう…。」

「なーに顔赤くしてんだ？…。具合が悪いなら保健室行くか？」

「だっ 大丈夫大丈夫」

「無理すんなよー…。」

一花は忙しい奴だな…。驚かしてきたり…。自分で話を振っておきながら急に静かになり

声をかければ慌てだす…。見てて飽きないから良いけどさ…。何か悩んでいるなら一声は欲しい

「さて…。俺も行くか」

「何処に？…。教室は向こうだよ」

「風太郎たちの手伝いだ…。それに三玖も疲れているのに手伝ってくれてる…。」

「…。よし手伝おう！」

「いいのか？…。向こうで手招きしてる女子組がいるけど」

「良いの良いの…。フータロー君の手伝いしないとね…。三玖もいるから」

（気を抜けない…。コータロー君は目につけば誰でも手を貸す…。見

張らないと)

視線の先では片付けに手間取っている二人を見てか

三玖も参加している…。風太郎と同じく体力も少ない中頑張ってるな

一花には先に教室に戻るよう言ったが…。自分も手伝うとやる気を見せ一緒に来てくれた

「おーっす 三玖お疲れ」

「コータロー…ありがとう」

「お前もな風太郎たちの手伝いだろ？頑張ってるな」

「…。二人だけだと時間もかかるかと思つて」

「よーし ならこれは私とコータロー君が持つていくから三玖は休んでなよ」

「一花まで…。いつの間に」

「こいつも手伝いだとき…。いいお姉ちゃんだな」

「ありがとう一花」

「えっ…。うっうん…。頑張ろうね」

一花と三玖の二人は姉妹の中でも特に仲が良い
困つていればちゃんと手を貸す見てて安心出来るな…。

この時の俺は本当に悠長に物事を考え過ぎていた

自分の事で手一杯の中…。自分の周りが何時しか大きく変わつて
いる事さえ気づかず、愚かな行動が多く目立つ…。

――

――

――

「ふあー…。」

「最近の幸太郎君は欠伸が目立ちますね？ちゃんと睡眠をとつていますか？」

一日8時間以上の睡眠は必須とテレビでもやっています」

「確かに睡眠は大事だな…。一日8時間か…。まあ…。うん寝てる」
「嘘ですね…。」

「うっせー…。と言うかナチュラルに俺の隣に座るなよ」

昼になれば学食に向かう…。指定席は特にないが

空いていれば自然とそこに座り代わり映えのしない昼食を食べては…。眠気との戦い

体育であれだけ動けば…。いい加減体も『寝ろ』と警告

残念だが…。今は寝れない…。色々とやらないといけない事が多すぎて睡眠は蚊帳の外だ

最早俺の隣が定位置なのかと言わんばかりに気づけば座っている

五月は美味しそうに昼食を食べながら睡眠の重要性を説いてくる

「相席です」

「へー」

「三年になって…。幸太郎君とは席が離れたので以前よりも話す機会が減ったと言うのが本音です」

「受け入れる…。このクラスには俺より先に名前が来る人間はいない

お前が上杉と名乗るなら

俺よりも前の席なるけどな…。」

「私が…。上杉に」

「何を真に受けてんだ？お前は…。適当に流せ」

「と…。特には意味はないですよただふと思っただけで…。」

「別に良いよ…。あむ」

「幸太郎君は三年になっても食パンなんですね」

「悪いか」

「栄養が足りません…。どうぞお好きなおかずを」

「ならその大きな肉でも」

「うう…。致し方ありません…。私も覚悟を決めます」

「冗談だ…。そんな険しい顔で見られたら取れねーよ」

少々意地悪が過ぎたか…。どれでもお好きにと言うので意味ありげに残された肉を指さす

渋い顔で…。『ど どうぞ』と言われる

そこままでして食べたくないし…。こいつもこいつだ安易に男に昼食を分けようとするな

俺はそこまで介護はいらん…。

ただでさえ風太郎と四葉とまでいかんが俺も変な噂が立ってるんだ

『上杉兄は中野姉妹に養ってもらってる』

誰だこんな適当な嘘流した奴…。永久に50メートル走を走らせろぞ…。

「そんでき…。なんで俺の隣なんだよ」

「ですから幸太郎君の現状を…。」

「お前は…。三年になっても」

「と言うのもありますが…。実は四葉に相談事があると言われてました」

「なら俺は席を外すか？…。姉妹だけの方がいいだろう」

「大丈夫です」

「俺が良くても四葉が大丈夫じゃねーよ…。」

「幸太郎君ですから…。彼女も嫌な顔はしませんよ」

そう言う問題じゃない…。俺が受けた相談ならいざ知らず

五月が受ける相談となれば話は別だ…。勝手に聞く訳にも行かぬえ…。

ガツシツ！

去って行こうとするが…。何時かの再来だ この細腕の何処にそんな力があるのか？完全に動きを封じられた

「あつ…。お兄さんもいる！」

「四葉…。お前の妹をどうにかしろ」

「あつはは一度言いだしたら五月は梃子でも動きませんから」

「勿論です！」

「自慢げに語るな…。たく まじで俺は邪魔になるから」

「うーん…。この話をお兄さんに黙ってたら私の命がありませんので…いても大丈夫ですよ」

五月をがっちり掴んでる事には全く突っ込まない
こいつも慣れ過ぎだろう…。

この場に留まる許可は得たが何やら物騒なワードが出て来たな…。
(俺がこいつに関して怒る事ねえー？ 何だろ)

じろりと睨むと早速視線を逸らす…。持つているコロツケパンを
五月に献上

気にせず貰うあたり本当に食べる事が大好きな奴だと感心する…。

一旦間を置いた後 何故か俺に『すみません』と謝罪

五月も不思議がりどうしたのか…。二人で顔を見合わせる

「五月…。学級委員代わって！」

「えっ」

「ええー」

まさかの学級委員を辞退したいと申している

これが俺に知られれば命の危険があるという事の理由だ

「お兄さん…。すみません やはり私では無理です」

「諦めるな…。お前も話した時に『大賛成です』って言ってたろう
？」

「やはり…。あの件にあなたも関わっていたんですね」

「五月もお願い…。コロツケパンあげたんだから」

「あむ…。食べ物で釣ろうとは…。あむ無駄ですよ」

「つうか既にこいつ食ってるから！」

まさかの土下座だ

四葉が姉妹の前以外で弱音を吐くのはそうそうあるもんじやない

五月も貰ってすぐ食べだすし…。先ずは話を聞いてから食え

まあ…俺も四葉を責めはしない無理なら構わないと話してはおい
た

それに四葉が何故辞退したいのかその理由も俺は知っている…。

「お兄さん…。ご存知で…。」

「噂？ それが四葉がやめて私が代わる理由なのですか？」

「そんなもんだよ…。でもなあー一度決めた学級委員の交代は後期に
なるまでは原則は不可だ

余程の事情を抱えなければ認められない…。お前に渡した紙にも書いてる筈だぞ？」

「ああ…。確かそんなような事があったようなー」

「お前…。読んでないな…。風太郎はちゃんと勉強の合間に読んでくれてたぞ？」

「漢字が漢字が多すぎるとは…。」

「はあ…。純日本製だろお前は……………」

「それでその噂とは何なのですか？私は聞きませんね…。あむ」

五月さんはぶれませぬね…。コロッケパンを食べ終われば

かつ井の捕食を再開…。どれだけの食材がこの小さな体に収納されてるのか…。

こいつと結婚する男は懐事情もちゃんとしないと破産するだろうな…。

昨日も新作のケーキを5個程食べたと思えばお持ち帰りまで

一花に言われて金銭面を気にしてると思ったが…。好きなもんは仕方ないと割り切つて良いものか

(五月だけバイトの話を聞かん…。選んだ先が気に入らなかつたのか？)

「噂…。その…。上杉さんと私が… つき」

「突く？そのままの意味ですか」

(あつこいつわかってねーな)

首を傾げ何かを浮かべているがきつと四葉が思っている事と五月が想像している事は限りなく遠い

四葉は相談相手を間違っている気がする…。

あの中では確かに一番学級委員には向いているが五月はきつとやらんだろ

「でもまあ…。俺の責任だな…。そう言う目で見られると考慮すべきだった 悪いな」

「お兄さんの責任だなんて…。私がいけないですよ…。私はただ

上杉さんは凄いなってみんなに知って欲しかっただけなのに…。」

「……………」

俺も俺だ…お節介が過ぎた

四葉の気持ちもくみ取ってから相談を持ち掛けるべきだったな
彼女は元から計画していたと話す、実際に俺も加担している
噂で知り合いが悩む姿は見ていて気分が良いものではなく

如何すべきか俺も考える…。後期までは原則は不可能

二人でいればそれが噂となる…。

「俺も手伝うか？」

「えっ悪いですよ」

「私には学級委員を代わって欲しいと言っておいて…。」

「あーそれはそれ…。これはこれだよ」

「それにお兄さんには…。手が…。！」

「おっーと手が滑った」

そしてこいつは口が滑った

拒む理由を五月に説明する前に手が動き四葉の口を塞ぐ

もごもご言いだす彼女に小さく話す。五月に聞こえない様説明する

（五月は手紙の存在知ってても中身は知らねーんだよ）

（危なかった…。危うくお兄さんの秘密がバレる所でしたね）

（お前が注意してればバレねーよ）

嘘が苦手なこいつに誤魔化しをさせるのは直ぐに限界を迎えるが
似た話題を出さなければ、手紙の件も思い出す事はない…。

『誰にも言わないそれを忘れないように』もう一度伝えればこくこくと頷く

五月が疑いに眼差しを向けるが…。何とか話を逸らさないと…。

「と…。危ない 今四葉が言おうとしたのは…。」

「一体何ですか…。露骨に怪しいです」

「学級委員にまつわる呪いの噂だ」

「!!…。そ そんな嘘で誤魔化そうとしても」

「五月や四葉は俺が2年生をやり直したって知ってるだろう…。」

俺達がまだ一年の頃にある噂が流れてな…。当時は全員が」

「聞こえませんか！聞こえない！」

五月……。こんな誤魔化し方で本当にごめん

あとで何か奢るから今はさっきの話題を忘れて記憶から抹消してくれ……。

適当に作りだした嘘の怖い話で五月の追及から逃れる事に成功

がたがたと肩を揺らし『あわわわ』と震える彼女の姿に申し訳ない気持ちでいっぱいだった

――――

――――

――

放課後まで時間は進む

五月は『ご勘弁』と言い教室から去って行く

脅かしすぎた反省しないとな……。

残った姉妹もそれぞれ用事があるのかそれぞれ帰宅

風太郎と四葉は学級委員の仕事で雑務をこなし

ボヤキ交じりにノートを集めている

俺はと言えば四葉が心配になり……。一旦帰ったと見せかけて

下駄箱まで戻って行く

頃合いを見て二人の様子を見に行こうとゆっくりだがちやくちやくと足を教室まで向ける

「上杉君も大変ですよね……。先輩」

「っ……。何だ武田？」

向かう途中で武田とぼったり出くわす

相変わらず爽やかな空気を醸し出しやがって……。

「そうですね……。じゃー俺はこれで」

「家庭教師をしてるって話じゃないですか……。」

「知らねーな……。妄想も大概にしろ」

「先輩……。僕は忠告しました……。あの点数で家庭教師を続けるのは限界でしょう」

「お前に関係あるか？…。あと余計な事言うな」

「すみません…。でも先輩にはやるべき事がある筈です…。それを忘れないように」

たった数分の会話でどつと疲れた

言いたい事を言えば満足したのか…。武田は教室から離れたトイレにへと入って行く

あいつが何処で家庭教師の話聞いたかは関係ない

俺のやるべき事は風太郎と中野姉妹が…。笑顔で学校を卒業する事だ

その為なら自分の事は後回し…。文句を言われる筋合いはない

「ぎーて…。二人の様子は…。あぶね四葉だ」

廊下を歩き少し先で四葉がこつちに向かってくる咄嗟に隣のクラスに隠れた

そのまま歩いて来るかと思えば…。他の女子が四葉に声をかける

「また上杉君と一緒にいたでしょ！」

「見ちやったよー！」

「……」

「放課後の教室で二人つきりなんて！」

「キヤローマンチツクー」

「やっぱり上杉君と四葉ちゃんは…。」

すごい食いつきだ女子は恋愛事は目ざとく

何かとそれに結び付けたがる…。言葉の連弾の応酬で四葉も話すタイミングを見つけれられないのか

一言も言わず女子生徒は勝手に盛り上がる…。

人の気持ちを考えろと今まで四葉に何かとお節介を焼いた俺が言える筈もない

口を押えて様子をうかがう…。

やってる事は最低だな…。

「ないよ…。」

「えっ…。」

「私と上杉さんが…。ありません…。だからそういう噂はやめてください」

「そっそうか…。ごめんね勝手に…。じゃさようなら」

物凄い寒気だ…。恐ろしく冷めた目で四葉は二人の生徒にそう言い放つと

これ以上変な噂を流さないように注意を促し

押された二人は普段見ない四葉の姿に困惑と驚きの表情を浮かべ帰って行く

「そうだよ…。私は彼を応援しないとイケないんだ」

そつと漏らした彼女の本音…。

寂しくもあり何処か切ないその台詞…。言い切った後に彼女は教室へと戻って行く

ぽつりと小さく放ったその言葉を俺は聞き逃してしまった…。

それ程に四葉の言った言葉に俺は衝撃を受けていた…。

あの日…。四葉が語った 金髪の男の子とは紛れもなく風太郎だその筈なのに…。

(なんで…。お前は…。それが本音なのか…。)

第七十八話 不良少年と背水の陣

暫くぶりに……。中野姉妹のアパートまで訪れた

一花は仕事の都合が合わず不在中

忙しいとなれば、何も言うまい。今はこの六人で事を進めよう……。月末の全国模試まであとわずか……。この間に勉強をして少しでも学力向上を狙う風太郎は普段よりもやる気に満ちている……。

俺はと言えんば……。恒例の欠伸だ

「ふぁー……あぁ……」

家に帰っても中々寝付けず……。何故かと考えれば先日の四葉の一言だ

どうにもあれが衝撃的過ぎて……。気づけば朝とそんな日が続いた

目の前の少女は何時もと変わりなく勉強に取り組み

分からなければ風太郎に聞いて叱られればそそをかく……。こんな楽しい日々を送っていて……。四葉にとつての風太郎は……。

(俺の思い違いだったのか?)

「コータロー……コータロー!」

「あつ悪い……。考え事だ……。悪い」

「お兄さん?何かありましたか……。」

「何もねーよ……。:!!」

ぼーっとしていたのか……。三玖の言葉で意識を戻した

心配そうにこつちに顔を近づける四葉に対し俺は咄嗟に後ろに下が

『に 逃げられた!』とオーバーリアクションで対応

何事も無さそうと分かれれば笑顔で『安心しました』と言っている……。どうにも頭が働かない……。本格的に脳が限界に来たのか?

「コータロー……あの採点してもらっていい?」

「おう……。五月も紙くれ」

「……。」

「五月？」

「いえすみません…。どうぞ」

何処か上の空なのは五月も同じか…。

じーっとこつちを見たまま固まっているので何度か声をかけた

答案用紙を渡せば…。ちらりと俺の方を向き視線に気づけば慌てたように顔を伏せる…何事か？

「？」

「幸太郎…。そつちの二枚は任せただぞ」

「O?」

俺が三玖と五月を

風太郎が二乃と四葉をそれぞれ採点

あの学年末試験を越えた…。こいつらなら今回渡した模擬試験も無事にクリア出来る

無理だと諦めた風太郎と挫折した俺は一筋の光明を見た

今ならきつと…。この七人で迎える筈だ…。

笑顔での卒業を……………

とここまで良い話風にまとめているが…。

彼女達は俺たちの予想を遙かに上回っていた…。採点を続けていく中で徐々に体が震えだす

持っている赤ペンがぎこちなく動き…。風太郎は『ぐぐぐぐ』と唸り始める

やばい事実が発覚した…。もしかしたら彼女達は本当に馬鹿なのかもしれない…。

「嘘だろ…。」

「ほとんど赤点だぞ…。あの頑張りは一体」

何と恐ろしい事に4人全員がほとんど赤点ギリギリ…。

今回彼女達に渡した、この模擬試験の内容は以前行ったテストよりも少しだけ難易度を上げた

それも些細な程度だ…。ギリギリとは言え赤点を取られると次回に迫る全国模試が不安でしかない

「ふざけるなお前ら…。あれか学年が上がると脳がリセットされる仕組みなのか?」

「なるほど道理で…。おかしいと思いましたよ!」

「はあ…頼む…。そこは脳内のセーブデータはきちんと引継ぎ周回してくれ…。」

「面目ないです…。」

「できたと思つたのに…。」

「言い訳になるかもだけど…。ここ最近仕事ばかりで…。あんまり自習できてないのよね」

「そう言えば五月はアルバイトしないからそこまで下がってないな」

勉強とアルバイトの両立は大変で1日24時間という過密スケジュールの中でどれだけ頭に詰め込めるかが、重要で、二乃が話した通り…。確かに彼女たちも以前とは違ってアルバイトを始め出した

限られた時間が更に短くなり全員で勉強なんてそれこそ何時ぶりだろうと…。

言い訳と本人の口から言ってくれるだけまだましだ…。

「忙しいってのは分かつてるし。そこは責められないな…」

「何言ってるのよ…? さっき言ったでしょこの子だけまだ見つけてないって」

「そうだったつけ…? 悪い聞いてなかった…。悪い」

「幸太郎君…。何かありましたか?」

「なーんもねーよ…。五月もバイト先見つからないらな相談してくれよな」

「はい…。もう少しだけ考えてみたいと思います」

やばい全然聞いてなかった…。

二乃はケーキ屋 三玖は向かいのパン屋さん 四葉は清掃のアル
バイト

一花は女優とそれぞれ働き先が見つかる中で…。

五月だけは、未だ決められてないと先ほど話に出てたとか…。上の
空過ぎて耳を素通りしていた。

先が思いやられるのは俺の方だ…。ちゃんとこいつらを見てない
と…。

『大丈夫だー』と頬を叩き起きてるアピール…。

ある程度事情を知ってしまった…。四葉は俺の様子を見てシユン
となっている

下手に動けば、こいつの動きを妨げかねない 悪循環の発生源は俺
だ……………。

この空気を変えられる存在はあの男しかない

「確かに…。これは芳しくない状況だ俺たちも模試勉強をしないと
いけない…。だから間違った箇所を順番に確認しておくぞ！」

『お願いします！』

すごく頼もしい…。

この場は風太郎に任せて俺はサポートに回るか…。

どうにも調子が出ねー…。

「はあ…。」

何度目のため息だろうか…。吸っては吐いての繰り返し

変なルーチンワークが体で確立されつつある

入れ直したやる気も空回りしそうだな…。

ピーンポーン

考えているうちに中野姉妹のアパートのインターホン音が部屋に
流れた…

この家の住人で手が空いているのは出口が一番近い五月だ

立ち上がって一旦立ち止まる『誰なのでしょうか?』

『この時間帯だ郵便だろう』と答えると五月はそそくさと玄関前まで向かう

「えっ…。」

玄関先で扉を開けたと同時に五月の驚いたような声が聞こえた

一体誰だと…。体を伸ばしチャイムの主を確認…

「……はあ?」

俺も間の抜けた声が出しまった…。そりや驚くだろう

だって訪問してきた人物が…。あの男だったのだから…。

「失礼するよ…。」

「うわ…。」

中野先生のご登場…。

予想よりも少々早いのが昨日のあの少年が家庭教師事情を知っていた事で頭は働いてくれた…。

「最悪だ…。」

――――

――――

――

俺たちだけが驚いているわけではない

向かうに行った五月も未だ状況が飲み込めず固まり…。二乃や三

玖も緊張した面持ちだ

四葉はこつちに目配せ…。たぶんその件だと俺も思います

彼は入ってくるなりある人物を姉妹に紹介したいと話す

入ってくるよう玄関先で待機する彼を呼んだ

「お邪魔します…。申し訳ない突然…。押しかける形になって」

「え…。君って」

「どういうこと？」

「わ 私何がなんだか……」

驚く姉妹に更なる追撃

この親は娘に容赦と言う言葉はないと見た

落ち着いた物腰の彼、武田を……。中野先生は紹介する

「今日から この武田君が君たちの新しい家庭教師だ」

「！」

「はああ！」

「どういうことでしょう」

「お お兄さん……。やっぱりこれってあの手紙の件では」

「それも含まれてるだろうな……。はあーまじか武田かよ」

「説明してください！」

新たな家庭教師として父親も公認の武田君

成績優秀で……。コミュ力も高い……。俺と四葉が動かなければ学級

委員だってやっていただろう

その男が……。彼女たちの勉強を見てくれると……。くそくらえ

「上杉君……。そして上杉幸太郎君」

俺だけフルネームで呼ぶのはまじで……。やめてくれ

嫌がらせ以外の何物でもないぞ……。

声に出さず睨むように意思表示するがこの男に効果の程は見込めず区切る事無く話を続ける

「先の試験での君たちの功績は大きい……。成績不良で手を焼いていた娘たちだが……。優秀な同級生に教わる事で一定の効果を生むと君たちは教えてくれた」

「それならフータローもコータローも代える必要なんてない」

「あ……。やば」

「これは不味いですよ」

「……そうだよな」

四葉は俺の事に関して心当たりがあり

あつと口から出す二乃……。風太郎の点数を知っているんだ

「それは彼等が未だ優秀ならの話だ」

「え……」

「上杉君……。幸太郎君？」

事情を知らないのは五月と三玖だ

加え風太郎もだ……。俺は家族にすら自分の成績を隠している

特に弟には見せられない……。見られたら『お前は自分の事に集中してくれ』

きつとこの件以前に家庭教師の補佐を降りる事になっていただろう

「残念だが……。上杉君はどの科目も点数を落としている。順位も落ちた

今回は2位と……。一位から転落……。更に彼の兄上杉幸太郎君」

「っ……」

「君の場合は論外だ……。弟よりも更に点数を落とし。その差は100点……。順位もキープしていた3位から徐々に落ち……。今回は……。10番台にすら入れない……。20位前後……。君はただ勉強が出来る生徒だ」

「幸太郎君……。それは本当なんですか!」

「コータロー……。何で黙ってたの!?!」

「……」

「そして新たに……。学年一位の座に就いたのが彼だ。家庭教師に相応しいのは彼だろう……」

何も言い返せない

事実だ風太郎も俺も前回から点数を落とした

『家庭教師のアルバイト』

この話がどう言った経歴で勇也さんの元まで来たかは分からない

二人の関係性を考えれば……。ある程度までは判断もつく

ただ彼の言う事は全うだ……。成績が優秀な人間が彼女たちの家庭教師をする方が理に叶っている

(宣戦布告をしておいて……。情けねーな……)

少し話した後の中野先生に同行してきた。彼こと武田は急に声を

上げたと思えば学校では見せないほどにはテンション高めなはしやぎっぷりだ…。

『勝った勝ったんだ』と連呼する…。

いつか風太郎を超えて見せると言うあの宣言を彼はやってのけた…。

どうしてここまで自分が喜ぶのか急な自分語りも始める

ただ満点しかとらない弟にとってはどうでもいい存在なのか全く相手にはしておらず

『誰だお前？』せっかくの喜びに水を差す発言と来た…。

何度か風太郎に突っかかっていた理由がこれだったとは…。案外武田もわかりやすい奴なのかもな？

それよりも問題なのは事実を隠蔽しここまで過ごしてきた兄だと
じーつと俺を睨んでいる…。二位以下には興味ない癖にこつち
みんなよ…。

姉妹達も同じだ…。五月なんて今にも俺に飛びかかって来そうな
勢いだ…。何かをずっと小さく口で呟くし怖いよ！

「ふう……」

深いため息の後に…。すつと父の前まで歩み寄れば五月は彼を見て堂々と宣言する

「わかりました…。学年で一番優秀な生徒が家庭教師に相応しいというのなら構いません…。恐らくそれだけが理由なのではないのでしょうか…。しかし…。それなら私にも考えがあります

私が…。三年生で一番の成績を取ります！」

『……………え……………!?』

「ふむ…。いいだろう」

姉妹の声が重なり…。中野先生は感心したような表情で五月を見据える

まさか…。とは思わない五月の性格を考えれば…。言いだすだろ
う事は予測できた

呆れもしないが俺たちは止めもしない…。既に答えが纏まりつつ

ある

それを何時言うのかタイミングを計っている…。互いに視線を送り

『まだ早い』と確認する…。流れはまだ向こうだ…。どうにか傾ける事が出来ればな…。

「ちよ ちよつと待って！」

慌てて止めに入る三玖…。どうにも頭が追い付かないと言った感じだ

「お父さんに何言われても関係ない…。二人は私たちが雇ってるんだもん」

「そうよ！…。ずっとほったらかしにしてたくせに…。今になって…。」

今行っている家庭教師は無賃だ…。彼女たちが父の元を離れ

このアパートで暮す事で…。新しく雇われた人物を蹴ってまで俺たちを雇ってくれたのは

他でもない彼女たちだ…。

二乃が言う様にこの人は…。何処か娘と距離を開けている それを今更と怒りたくなるし

文句の一言も出てくる…。ただ全てを言いきる前に遮った輩がここに…。

連れてこられた青年…。武田が会話に割って入る

「いい加減気づいてくれ…。上杉君と先輩が家庭教師を辞めるということ…。それは他ならぬ二人のためだ…。君たちのせいだ…。君たちが二人を凡人にした！」

「彼等には彼等の人生がある…。解放してあげたらどうだ？」

「それは…。」

「っ…。」

「それにだ上杉幸太郎君…。君は大学からの推薦も来ている筈だ…。

ただでさえ遅れてしまった君の人生を戻す機会をみすみす不意にするつもりかい？」

『!!』

したり顔でこちらを見降ろす武田は自分の理想をこれでもかど押し付ける

言わんとしてることは分かるが、そこを指摘される筋合いはない
風太郎なんて呆れて目が点になつてゐるぞ……。

加え中野先生は……。本当に余計な事まで言い出す始末

俺が嫌いなのか……。俺を気にかけているのか……。いい加減ハツキ
リして欲しいな

流れる空気は最悪だ……。誰も彼も口を紡ぐ

ただ最悪なだけで切り込むチャンスでもある

先に動いたのは風太郎だ……。武田の言葉のある程度は肯定し……。
頷きもする

だが納得はしない……。風太郎も偶にはこの男にも言つてやりたい
事はある

成績は落ちたし……。それを突かれた形で窮地に立たされた

勉強ばかりの人生で風太郎が出会った彼女たちはとてもじゃない
が信じられない程のおバカたち

目も疑つたし……。何度も出した模擬試験で頭も抱えた

何度も辞めたいと考え……。期末で遂には実行した……。彼女たちの
為として最善だと

二人で考えたからだ……。でもお節介な神様とはどこでも存在する

先に述べた通りやめた俺らがいれば拾う彼女たちもここに……。
離れたくても離れられない……。離れる気なんてとつくの前に捨て

ている
あの12月に既に覚悟は決めて来た……。

「君がそこまでする義理はないだろう」

「義理はありません……。ですが……。この仕事は俺たちにしかできない
自負がある！こいつらの成績を二度と落とす事はしません……。

俺の成績が落ちてしまったことに関してご心配おかけしました」

義理はないさ……。俺達はただの雇われだそれも……。正規の家庭教師ではなく

娘たちが勝手に選んだだけの……。中野先生はそれが気に食わない風太郎と俺を毛嫌いするのがもつともな理由だ

なんだかんだと言いつつも娘を思つての行動……。でもそれは裏目に出た

こと勉強に関して風太郎が負けたとなればこいつは……。それを超えるまで

こいつは天才じゃない……。秀才だ

努力を積み重ねここまで上り詰めた……。同じ事をもう一度するだけだ

「俺はなつて見せます……。そいつに勝ち学年一位に……。全国模試一位に！」

「う　上杉さん!？」

「全国は無茶ですって！」

「フータローもう少し現実的に……。」

今までのようにクラスや学年での一位では、この親を納得させるのは無理だと風太郎は薄々気づいていた……。ならば全国で一位になり実力を示す事で、この親にもう二度とやかく言われないようにしようとして出した結論だ……。

止めに入る間もなく風太郎が言い切ってしまった。慌てだす姉妹一同とは対照的に俺は小さく口元を緩ませた……。

四葉や五月が訂正し『全国10位以内でどうですか』と少しランクダウン

それでもこの日本で10本の指に入る男となれば実力は察せる

どちらにせよ風太郎の今後は厳しくもなり……。勉強に気合を入れないといけなくなるだろう

全く呆れる程に馬鹿で無愛想な弟だ……。でもこいつなりに出した結論だ

俺も弟に負けてはいられない

「中野先生……。それに武田よ……。本気で上に上がれば撤回するんだろ？ならさ俺も上を目指す……。自慢じゃないがこれでも元学年最優秀と呼ばれてたんだ……………」

俺もなりますよ 全国一位

それ以外は認めない……。二位になった時点で下ろしてくれても構いませんし……。金輪際ここにも足を踏み入れません」

「つて 幸太郎君まで！彼も10位以内で」

「幾らなんでもそれは無茶よ」

「武田……。気が済んだか？ 随分と言ってくれたが俺も腹を括ったぞ」

去年の終わり頃に何やら意味深な事ばかり言ってきたこの青年

風太郎を倒して実力を認めさせるのは確かに本音さ

だが……。何故俺に拘るのか？？簡単だ……。かつての勉強おバカの俺を倒す事で

真に自分を認めさせたいんだ 本当に分かりやすい奴だ

目の前の彼は……。出された条件が嫌なのだろうか いやここまで言いきるとは予想もしてなかった。少々困惑しているようで目を伏せる……。

手紙の中身もバレたんだ隠す必要もない足枷が消えてこつちも余裕が出来る

それに風太郎が10位以内と下げられたとは言え……。こいつも覚悟決めてんだ

俺も腹は括れる……。

「いくら……。あなたと上杉君でも無理に決まってる……。五人を教えながらなんて」

「わかったよ……。もしこの 全国模試でそのノルマをクリアできたのなら

改めて君たちが娘たちに相応しいと認めよう……。」

「ありがとうございます。」

「ただし……。上杉幸太郎君……。君はクリアできなかった時点で条件を飲んでもらう

それを忘れずには これで帰らせてもらおう…。 励んでくれたまえ」

中野先生の承諾を得た…。 励むよう労いの言葉だけ残し『ありえない』と何度も呟く彼を連れ出し去って行った

残ったのは覚悟に満ちた弟と、自ら地獄までダイブを果たしたこの俺…。

全国模試でのノルマ…。 風太郎は10位以内 俺は1位
つまりはミスは一つも許されない…。 覚悟はとづくに決まってる

――――

――――

――

「よし…。 勉強するか…。」

「幸太郎君！ なんであんな約束をしたんですか!？」

「あのくらい見せない…。 あの男は絶対に俺を認めない」

「でも…。 一位取れなかったら…。 コータローはもう2度と来れないんだよ…。 勝手に決めないで…。 私や五月に相談して！」

「悪いな…。 どうにもあの人を相手にすると冷静を保てない」

駆け寄ってくる五月はかたき討ちに出るのかと恐ろしい形相でこつちを睨む

三玖も心配はしているが…。 内心は怒っている

口には出さんけど風太郎もだ…。 さっきから目を合わせない

五月との喧嘩は…。 中間試験以来だ

「えつーと みんな頑張ろうねー 上杉さんもお兄さん…もファイト…エイエイオー…」

空気入れ替えと判断し…。 四葉が割って入る

世話かけるな…。

「そう言えば……。四葉……。あんたはこいつの点数知ってたみたいだけどなんで?」

「あれーそうだったかなー……。うーん覚えはない気が」

「幸太郎君の推薦とも言っていました……。四葉 先ほどの話は一体なんですか?」

「ああ その……。えーっと それはそのー」

「たく……。四葉に突つかかるな……。俺から説明する」

何でこう五月は人の事で冷静さを無くすのか……。

聞いても教えてくれんし余計質が悪いな

『お前が言うな』と弟の言葉がぐさりと刺さる

喧嘩になる前に五月を四葉から引き離し

鞆からあの手紙を取り出した 差出人は【坂下幹雄】だ

苗字は知ってるだろうけどこいつらが知らない人物で俺はそれなりに世話になった人

「温泉旅行の最中に……。中野先生から渡された俺宛ての手紙だ……。

この件に関わってる以上先ずはあの人を手紙を預かる事になっている」

「手紙の内容をあなたは絶対に教えようとはしませんでした……。その手紙が今回の無茶の理由なんですわ?」

「まあ……。そんなもんだ……。何処かの誰かさんがかーつてに読んで俺は焦ったがな」

「その説は本当にすみません……。脱衣所に入った際に服の上に……。」

ん……。今さり気に重要な事言ったぞ この四女

服の上だと……。?それはない 俺は閉まっていた筈だ……。となると最初にこれを読んだ人物は四葉ではない

(謎が深まったな……………)

今更の話だ蒸し返すのは野暮だ……。一旦置いて話を進めよう
彼女もちやんと謝罪している事だし責めるつもりは無い

「それでコータロー……。なんて書いてあるの?」

「これは……。俺の転校手続きだ」

『!』

四葉以外は固まってしまおう

俺だつて最初に見た時は目を疑つた…。家に帰り勇也さんにも確認したら

『幸太郎次第だ…。俺はお前の意見を尊重する』俺が言うまで知らぬ存ぜぬだったが、一応は向こうと連絡を取つて俺に判断を任せられると言つてくれた…。

「いやいや…。親父から何も聞かされてないぞ…。何でお前なんだよ？」

「この手紙の差出人は俺の恩師のような人でな…。何かと目をかけてくれる

その人が俺の点数を知つてな…。成績が下がるようなら別の学校へ編入させて、勉強に励んで欲しいとき…。世話になつてる身で文句も言えない…。

それにあの人を黙らせる材料を俺は持つてない…。今回の全国模試は良い取引材料だ」

特例中の特例だ…。こんな無茶は学校関連に顔が効く坂下幹雄だから出来る芸当だ

俺自身が何かで成績を戻せばあの人も手を引いてくれると手紙にも書かれていた

だからこそ…。俺はあの人に今一度俺の成績を見て欲しい

妥協をするつもりは無い…。俺にとってある意味では兄のような人だ

その人自ら動こうとしてる俺もそれに相応しい覚悟と度量を持たねば失礼過ぎる

こんな手紙…。簡単に出せる程あの方は狂っていない

ただ単に心配してくれている。一度は進級を逃し。更には成績まで落ち込んだ

となれば俺に適した環境で勉強をし…。俺の努力を他者にも認めてもらいたい

「お節介な人からの挑戦状だ…。加え大学の推薦状まで出してくれるとは。至れり尽くせりだ…。でもな…。俺はそれに甘えるつもり

はない、勝手に俺の進路や俺の居場所を決められるのだけは勘弁だ」
「幸太郎君……。本当に大丈夫なんですよ？……。もし転校に何てなつたら……。」

「転校は可能性の一つだ……。ある程度点数を稼げば幹雄さんも納得してくれる」

「ここまでお前らと来たんだ……。転校なんてする気はもうとうない……。」

「だから勇也さんは俺を信じて俺に任せてくれた」

「五月や三玖を悲しませないでよね……。わかった！」

「お兄さんの転校は絶対阻止します！……。一人は寂しすぎます」

「私たちも頑張るから」

温かい声援ありがとう……。

この案件は俺個人の問題だ……。そう決め込んでいたでもそれは違う

俺は彼女たちの家庭教師で風太郎の補佐だ……。もう自分勝手は許されない

こいつらとこれから頑張つて行くつて決めてんだ

無事にこの学校で卒業出来るように全力を尽くすのみ……。

幹雄さん……。あんたが心配する馬鹿な教え子の本気を見せてやりますよ

「幸太郎……。大事な要件を隠すのは無しにしてくれ」

もう俺たちは二人で家庭教師なんだからさ」

「了解だ……。俺も久々に本気で勉強して学年一位を取つて見せる

でもな風太郎、加減はするなよ？」

「そんな気はない……。俺も全力で挑むつもりだ……。味方であり敵同士、お互い頑張るか……。」

決意も固まれば後は勉強あるのみ

最大の相棒は最悪の敵……。武田は確かに強力な相手だが……。

俺の戦うべき相手は実は風太郎だ……。お互い本気で勉強での競い

合いはした事がない

2位以下を気にしないと云つてのけた風太郎……。武田じゃないが少し興味が湧いて来たな……。

—————

—————

—————

上杉風太郎と上杉幸太郎の今後を左右していた中

同時刻……。中野一花は前回撮影した映画の試写会まで、近くの喫茶店で待機していた……。

手には雑誌が握られ……。ペラペラとページをめくり視線を動かす

読んでいるのはファッション雑誌

『気になる彼に振り向いてもらおう』と書かれたその欄を食い入るように眺めれば、何度かため息を漏らす

服装を変えたところで彼は『良く似合ってる』『一花は着こなし上手だ……。』と誉め言葉は出ても関係の発展は望めないだろう

これで、変わればきつと自分は今のようには焦ってはいない……。

仕事とは言え姉妹と違い 彼と居れる時間は限られている その穴をどうにか埋めようと

彼女も必死だ……。たとえ妹が相手でも……。我慢する気はない

うーんと唸る彼女 何度かスマホに手を伸ばしさりげなく彼にメールでもと思うが、思うように指が動いてくれない……。変に意識するあまり前よりも不格好になってしまった。

『はあ……。』と特大のため息だ

今日で何度目だ……。昨日はせっつかく彼と二人だったのにその彼は妹の三玖の所へ向かって行くし

お昼に探せば五月と二人でランチをし 更には四葉まで彼と一緒に……。彼は姉妹と妹同然としか見ていないのが救いだ……。悲しい事に

その一人に自分まで含まれる

どうすれば五月や三玖のように彼と特別な接点を持てるのか…。

そのせいだろう…。彼と父のやり取りを見てしまい

彼の持っていた手紙を勝手に見ていたのは…。

(五月ちゃんや三玖に嫉妬して…。私だけしか知らないコータローくんの秘密って思ってた)

覗いたけどまさか…。コータローくんが転校するかもしれないなんて…。

彼は何時もの調子だし…。なんだかなーだよ…。

悩める長女…。自分の選択は果たして正しかったのか…。

四葉に押され…。我慢をやめ 隙を見つければ彼と同行

その度に…。彼と真っ正面からぶつかる三玖を思い出し胸がちくりと痛くなる

だからと言って二乃が風太郎にしたような告白が出来る程の気持ちの整理も度胸もない

「臆病でずるいな…。でもさ これが私なんだよね」

自嘲するような笑みであの日に撮った彼の寝顔をスマホに写す

こんな風に自然に彼と接すること出来れば…。この胸の痛みもなくなるはずだ

決まらない自分の心を何とか落ち着かせ…。迫る風太郎へのプレ

ゼントを考えようとする中

トントんと誰かに肩を叩かれる

後ろをちらりと覗けば

『やー元気かい…。一花さん』とお隣に住んでいる 雨宮紡木がにっこりと微笑んでいる

何処か不思議なお隣のお姉さん…。接点は五月や三玖程なく

時折顔を合わせる程度…。仲が悪いという訳では無く何故か…。

つい距離を開けてしまう

自分でもその理由が分からず一花は不思議に思っている

「お隣良いかな？」

「あっはい……。どうぞー」

「ありがとね……。この時間帯は込むから席もなくて……。でも君を見つけて安心したよ

一花さんは目立つからね」

「そうでもないですよー……」

「そうかな……。男性なら誰でも君を見るさ……」

「誰でも……。そうですね……。一応は顔が知られるお仕事なんで」

「でも……。君が本当に見て欲しい彼は……。君を見ない」

「えっ……。何の話ですか……」

「ねえー……。一花さん」

「はい」

「幸太郎の昔話に興味はないかな？」

「！」

突然現れた隣人

彼女の口から出たその名前は今まさに自分が想う彼の名だ

でも何故引越して来た彼女が……。彼の名をそして過去を知ったような風に語るのか

彼と一応は幼なじみである一花は珍しくただの隣人相手ににムキになっていた……

「何故かまあーうん……。その話はおいおい……。それでさ興味ない」

「いえ……。大丈夫です……。勝手に聞いたと知ったら彼は気にするんで」

「そうだね……。いじめられていた幸太郎だもん……。外で自分の名前が出たとなればね」

「なんで……。その事を あっ！」

「いいよ……。口元抑えなくても……。彼が噂のせいで孤立していじめに逢った事も

彼の詳しい過去も知ってるよ……。君たち中野姉妹より

だからー…。同じ彼の昔を知る　一花さんにだけ教えてあげる

彼の初恋の相手」

なんだ…。この人は…。まるで読めない

話を逸らそうにも全てあしらわれる…。目の前に映る女性が悪魔にも天使にも見えてしまう

底が知れない…。この仕事をして来て様々な人と出会って来たがここまで自分の気持ちを見せない相手を一花は知らない…。

いまずぐ動きたくても足が動かない…。いや動いてくれない彼女の発した一言彼の初恋…。それが知りたくてしようがない

五月や三玖も知らない彼の一面を知りたいという自分の欲求が自分の行動を鈍らせる

ニヤリと微笑み　彼女は言った

「上杉幸太郎の初恋はね…。　中野一花さん　君だよ」

「ゴータローくんの初恋が…。私…。」

「ずーっと　ずーっと　君に片想いしてたんだよ…。彼は…。」

聞いてはいけなかった…。耳を傾けるべきじゃなかった…。

こんな事聞いたら…。自分はもう止まれない…。

第七十九話 不良少年と長女の異変

『お兄ちゃんが……。バイト休んで勉強してる』

絶望を直視したかのようなその表情は何なのか……。

全国模試と真つ向勝負を挑むため俺は……。バイト先に連絡を入れ『暫くおやすみを頂きます』と電話越しで頭を下げた

高校生の中で一位の成績を収めないと俺は家庭教師の補佐を辞める必要がある……。自己責任だけどき

加え……。幹雄さんとの取り決めだ 学校の転校まで視野に入っている

今度戦う相手は全国……。生半可な覚悟と勉強では一位なんて夢のまた夢

昨日の夜から今日の朝まで弟と俺はリソースを全て勉強に注ぎ参
考書片手に呪文のような言葉の羅列をずーっと唱えている

らしいは『怖いよ！』と部屋の隅に縮こまってしまい……。勇也さんも呆れていた

『幹雄との約束だろう……。俺はお前一任してる……。』けして投げやりな言葉ではない

あの人なりに俺を信頼してその言葉を送ってくれた……。

ありがたい限りで全面的信頼を受けるのなら怖いものは何もない

ただ一人俺が勝てない人物も今では、高校を卒業している……。最大の障害となれば

勿論風太郎だろう……。本気のこいつと真つ正面からぶつかると……。どんな結果でも悔いはない

「数式は頭に入ってる……。この問いも確実に出てくるはずだ……。

y || 3 x 2 | ……」

ぶつぶつと未だ呪文を唱える

ギリギリまで時間を費やし気づけば風太郎は先に家を出ていた

らしいはも学校に向かっており残った。俺は戸締りを確認し……。異

常がなければ

ノートと参考書を片手にひたすら復習……。ここまで真面目に勉強しているのも久方ぶりだ

今まではある程度覚えて……。それを用紙に書いて行けばいい

流れ作業……。まあ実際にポカを起こし 前回の学年末試験ではまさかの20位ギリギリのライン

あの調子で勉強は続けている訳にも行かない……。真剣に問題と向き合おう

「コータロー君……。そんな仏頂面で朝からどうしたのー ちゃんと前見よう」

「一花……」

「おっは……。コータロー君」

既視感だ……

一花とこうして登校するのは何回目だろうか……

カップに入った飲み物を片手に眼鏡スタイルと珍しい一花の姿だ

「あいつらは一緒じゃねーのか？」

「えっ……。あーうん……。ちっと飲み物を買いにね……。今日は偶然だよ」

「そうか……」

「朝から頑張る君にこれをプレゼント」

「偶然のわりにプレゼントとは……。お前はすごいなー」

「えっ……。まあ細かい事は気にしない気にしない……。さー飲んで飲んで」

「目を覚ますには丁度いいか……。あんがとな……。さて遅刻するし行くぞ 一花」

「うん……。行こうかコータロー君」

何にやら今日の一花はやけにテンションが高く見えるが気のせいかな？

別に問題でもないし……。一花との登校も俺は楽しいからな……

隣を歩く少女に一度視線を写せばにつこり笑顔……。なんだろう

「みんなやコータロー君から聞いたよ……。コータロー君もお父さんと

ひと悶着あつたつて」

「ん？風太郎から…。何時聞いたんだ？…。」

「あぁー…き 昨日メールで教えてもらつて」

「あいつが一花とメールか…。やるもんだな」

（危ない…。実はずっと待つててフータロー君と話してたなんて言えない）

「まぁ…。確かにな お前らの父親と色々あつた…。このままだと

俺たちは家庭教師と補佐を辞める事になる 何時もの話だ」

「お父さんも中々粘るね…。」

「全国相手だ一問でも外したらほぼアウト…。」

肝が据わつてるように見えるなら気のせいだ…。

昨日からずっと謎の腹痛に悩まされてる…。表情に出ないのは…。

2年で色々と味わつたお陰

すげー皮肉な話だよ…。

「しかも相手が…。あの武田君でしょ」

「武田か…。確かに脅威だな」

「その口ぶりからすると…。知つてた？」

「中学の後半からだ…。好青年時代の俺を勝手に尊敬してた」

「へえー…。3年近くなんだ」

「と言つても学校は別だぞ…。 まああの一件で勝手に疎遠にもなつ

たりと忙しい奴だよ」

尊敬されること自体は今でも嫌と言わない

でも…。過度な期待はされる事を苦手としている

特に当時の俺は今と真反対だ…。性格もある意味歪んでいる

そんな男に憧れてるんだ あいつはもの好きな奴だ

根はいい奴だと思ふが…。俺への反発と風太郎への対抗意識でと

りつく暇もない

最初からその気もないけど…。果たしてどっちが子供なのか考

える程嫌になるな

「と…。舐めてはいないが俺の本当の敵は…。風太郎だ」

「確かに彼は…。勉強オバケで何時も参考書片手だからね…。兄弟な

んだし手加減してもらったら？」

「残念だが……。俺はそんな気はない……。あいつとは正々堂々　小細工無しで戦う」

「あいつも加減する気はないと言ってるしな」

「そ……。そうだよね　正々堂々が一番だよね」

「そう言う事……。」

「弟だからと加減を貰って……。それで得た勝利は何の成果も生まない」

「もしそれがあの父に知らればそれこそ俺たちは……。この姉妹には相応しくもない」

「あのさ……。コータロー君……。君の件をみんなは知ったよね？」

「転校や学期末の点数の事か……」

「その事なんだけど……。先に謝っておくべきだったね……」

「もーいいよ　下手に誤魔化してた俺が悪い……。一花も悪かったな……。心配させたらろ」

「本音を言えばね……。言い訳にしかないけど……。君は凄く真剣な顔だったから……」

「割とへビーな内容しな……。俺は怒ってない　誰が見たのかそれを気にしてただけだ」

「一言言うなら……。変な風に気を遣うなよ　お前はお前らしくしてろ」

手紙を読んだ犯人の一人は四葉

最後の一人は一花

残った一人が読んでないとは限らない

四葉は『手紙は服の上にあった』と口にし。それがずっと気になっていた……。

その時点でおかしい　重要な内容が記載された手紙だ……。分かりやすく置きはしない

きつと一花が手紙を読んでもる中で脱衣所に誰か（四葉）が入ってきた

慌てた彼女は手紙を元の場所に戻すのを忘れ……。姉妹を探していた四女がそれを発見した。そんなところだろ……。

「まあ色々障害はあるが……。負ける気はなし……。風太郎とも話してこれからは暫く勉強漬けだ……。」

「中々大変だけどね……。」

「一花に至っては俺たちは心配はしてない……。お前はずっと仕事と勉強を両立してきた」

前回のテストも姉妹の中では一番だ……。この調子で頼んだぞ」

「ふふ……。君は相変わらず 話に乗せるのがうまいね」

「本音だ本音……。それにお前が眼鏡とは珍しいよな……。お勉強スタイルか」

「お勉強とは違うけど……。どう少しは知的に見える？ 一応は変装なんだけどさ」

「変装ねー……。そりや女優さんだ……。人目を引くしな」

「実は昨日さ……。以前私が出た映画の完成披露試写会が合つてね……。

そこそこテレビでも取り上げられてるんだよ」

「以前……。お前が出た映画……。」

「お 覚えてる？」

「……。タマコちゃんの奴か……。」

残念な事にうちにテレビは存在しない

せっかく真弓ちゃんが用意してくれた一花が出演しているドラマ

を録画したDVDも閉まったまま

彼女が出た試写会も拝むことは出来なかった……。

「その為の変装ねー……。タマコちゃん」

「もー恥ずかしいから言わないでー……！」

「お前が出てたならさ……。見たかったのは本当だよ」

(やっぱり……。私が一番彼に近い……。)

「そにしても変装か……。お前ら得意だもんな」

「得意だよ……。急な用事の為に何時も常備してる……。四葉や二乃

それに……。三玖や五月ちゃんもすぐに……。」

「ん？」

鞆とは別に肩にかけている袋の中身は……。様々な小物類だ

へアーバンドやカチューシャに何処かで見たウサリボン……。

何時でもどこでも姉妹で入れ替わられるようとは気――抜いたら実は二乃でしたーと来そうで怖いな

鞆を漁っている一花は突然手を動かすのをやめ

表情を変える……。別に可笑しいことは言っていないけどな

「あっははは……。そんなことしたら二人共困るよね……。ごめんごめん」

「余り見くびるなよ……。爺さんとの修行で風太郎も俺も成長した」

「へえー……。」

「先日なんて……。変装した三玖をノーヒントで見破れたぜ

昔の勘を戻してきたんだろうな……。」

「昔の勘……。ねえーコータロー君」

「なーんだ一花？」

「昔の事なだけどさ……。」

「ん？一花も思い出してきたのか……。」

「うん……。でき 君は昔さ」

「つて……。向うにいるのは風太郎と姉妹たちだぞ」

「いるね……。」

「あいつら合流してたのか……。」

「……………」

「二乃と風太郎も以前とは違って来たな……………四葉も珍しく参考書読んでるし

三玖も何か持つてるな？……………五月い お前は食べ歩きが好きだな……………。」

（やめて……………私はここだよ コータロー君……………君が想ってる子は君の隣にいるんだよ

だから……………)

「二乃もバイトに馴染んで来たし…。三玖は何かやりたい事でも見つけたのか」

向かいのパン屋でアルバイト頑張つて欲しいな…。

五月は中々バイトを見つけれないと言いながらもうちに食べに来たしな……………」

(もう…………やめて…………三玖や五月ちゃんの名前を呼ばないで…………私だけを見てよ

君の初恋は叶ってるんだよ…………だから私だけを見て私と話して…………。)

「ねえ…………コータロー君」

「俺の手なんか繋いでどうしたー?」

「このままさ…。二人でサボっちゃおうよ」

風太郎たちの光景を眺めている時

俺の左手を一花が掴む…………一体何ようだと視線を直し

理由を聞けば…………。このままサボってしまおう発言…。

一花は何をいつてるんだ…………。

「はいはい…。冗談はそれくらいでいくぞ」

「いいじゃんすこしだけー」

「模試があるって言っただろう?」

「一限目は体育だよ」

「走れば気分も爽快だぞ」

珍しく駄々をこねる一花の手を引き校舎へと走って向かう

『戻ろうー』と悪魔の囁きだ…………。

そんな言葉に俺は乗らんし一花もずる休みはさせない

勉強と仕事が両立出来て…………。ここで休まれたら風太郎の表情がどうなるか…。

下駄箱に入ったと同時に鐘が鳴る

まさか遅刻ギリギリだな…。

「やべー……。走るぞ」

「もーコータロー君も真面目だね」

「お前らの兄貴みたいなものだし…。その一人が『さぼろう』って言えば心配になる

さっさといくぞー」

（またそれだ…。私はいいい加減17なんですけど…。もう少し女子として意識してもいいじゃない

それに私抜きで話も進めてるみたいだし…。うまくいかないなあ）

むくつと頬を膨らませる一花さん

何が合ったかは知らんが…。まずは学校だ…。出席日数だけはちゃんと稼いでくれ

わりと心配になるんだからさ…。

「よーし 着いた」

「着いちゃったよ」

「着いちゃった…。じゃねーよ…。はあ 全くさ」
教室の前に着き

未だにぼやく一花をしり目に扉に手をかける

ガラガラと開けたその先は我らが教室…。の筈なんだが…。

『一花さんだー。ー。ー。すげー。ー。ー。』

「なっ…。なんだ この騒ぎは…」

クラス中の連中が一斉に押しかける

一花さん一花さんとうるせーな…。ちゃんと本人だぞ

（お兄さん…。だ それに一花もやっとなんて来た 何処まで飲み物買って来たんだらう）

「うわあ…。流石テレビだな…。」

「あつはは…。大騒ぎだね」

「いやー全く…。お前は凄いな…。オーディション受けて良かったな…。これからもさ応援させてくれ…。一花」

「!!」

トクン

(…。こんな単純でいいのかな…。君が私を気にかけてくれた…。たったそれだけがクラスメイトのどんな賛辞より…。胸に響いてしまうんだ…。コウくん)

「おーっす 風太郎目が死んでるぞ」

「奇遇だな…。俺の目の前の人間も死んだ目をしてる」

――――

――

――

「先行くぞー」

「ああ…。この問題集暗記したら行くから…。」

「了解だ」

放課後まで時間が進む

朝からずっと一花の話題で持ち切り

今も数人の生徒に囲まれ…。少々引いている

目立つ仕事だ 覚悟はしてただろうが自分が思っていたよりも情報の広まりは早かった。隣のクラスの連中まで来てたしな…。

あつはははと愛想笑いでその場を乗り切り…。一瞬の間について一花は逃走を開始

数人の生徒が後を追いかけていった…。

「有名人も忙しいな…。」

「むむむ…。」

「なんだよ 真弓ちゃん 一花が有名になったんだ喜ぼうぜ」

「納得できません…。以前から追っかけていた 私たちを差し置いて

て…テレビで見たからと…。むむむ 確かに私も似たような立場ですが 一花さんはもつと前から うむむむ」

「はあ…。複雑なファンの心ですな…。」

「それはそうと…。三玖さんから聞きました 先輩はまた大きな賭けに出ましたね」

「三玖と仲良いんだったな…。 相手は全国の学生だ わりと本気で勉強しないと。一位は無理だろ…。暫くは風太郎も俺も顔を出せん任せたぞ」

「はい任されました…。これで一位を取れば先輩がどれだけ凄いか…。みんな知ってびっくりしますね ふふふ」

「真弓ちゃんもさ…。全国模試頑張ってくれ」

「私は大丈夫ですよー 兄と違って勉強は得意ですから」

「そう言えば真弓ちゃんは前回の学年末試験で8位だったな」

割と近くに秀才がいた

兄の和之は学力で言えば、普通で坂下は異常だ

あの女に隠れがちなだけで…。このちっこい後輩は運動と勉強や家事全般どんとこいの万能少女

結婚する相手が羨ましいね…。

「先輩…。そろそろ勉強会に行った方がいいんじゃないですか？」

「そうだな…。じゃー また明日ー」

「はーい さようなら」

後輩も応援してくれてるし

気合を入れ直すか…。

自分の教室から立ち去り…。中野姉妹と風太郎の待っている図書室まで足を動かす

必要な物は…。全部持ってきてるし 足りなければ風太郎に借りれば良いだけだ

「いい加減風太郎の誕生日プレゼントも考えねーとな…。」

「コータロー！」

「おう三玖か…。まだいたのか…。うーうーん」

「な……。なにかな？」

「三玖だよな？」

「えっコータローは変な事聞くね……。私だよ」

「いやさ……。何時も着けてる 髪飾りがなくてさ」

「あっ！」

(やばい……。忘れてた 三玖はコータローくんから髪留めプレゼントされてたんだ)

出先だ……。廊下のすぐ先で三玖？が立っていた

俺を見れば声をかけるので図書室まで行こうと進める

不思議な事に……。三玖には違和感を覚える 何故か三玖には見えない……。

爺さんとの修行で勘は戻った筈だが……。判断がつかない

変装する理由は姉妹にはない……。俺の勘は早速錆びついてるな

それに何時も着けてくれた髪留めも何故か着けてない

大事に言って言ってたから少し残念だな……。

「ごめん……。忘れて来た」

「そ……。そうか……。まあ うん気分もあるしな はあ」

(コータロー君ごめんね……。落ち込まないで……)

「止まっても始まらないか……。行こうか」

—————

—————

———

一花 side

彼は行ってしまふ

そこにはいない筈の姉妹の姿が共に歩いているように見える……。

何故だろう 胸が苦しくなる……。

再会した時は無愛想で何処か不思議な怖い人なんて思ってたのに

さ

家で見つけたあの一枚の写真で私の中で何かが解け始めた

気になった私は林間学校で私は君に過去を尋ねた 私と君はずつと昔に会っていた

それから詳しい事実を病室で君は語った

ある日母が連れて来た コーと呼ばれる 年上のお兄ちゃん

ガキ大将な私をちゃんと女の子として見てくれた…。とても優しいあの男の子は君だった

何時も六人で遊び…。それが充実した毎日だった

修学旅行で会った あの男の子も何処か君に似ていたね だからかな彼と話してる時に

自然に声をかける事が出来たのは…。

でも…。お母さんが死んだ あの日を最後に君は私たちの前から消えたね

まさか 5年後 こうして肩を並べて同じ学校通って 君が私の家庭教師になるなんて…。

けど…。私一人の家庭教師じゃない…。四葉や二乃

三玖や五月ちゃんだつてあの場に居るんだよね…。そんな中で私が一人 前に進んで

抜け駆けはやっぱり駄目なのかな……。 こうくん…。

(ゴータロー君はもう一人じゃないんだね…)

今は五月ちゃんや三玖もいる…。君はどんどん遠くなっていく 私だけを見てなんて…。)

『お好きにどうぞ 負けないから』

『蹴落としても叶えたい…』

『一花だけ我慢しないで…したいこととしてほしいな』

『幸太郎の初恋は…。君だよ 中野一花さん 彼はずつーと君に片想いしてたんだよ』

彼を想う三玖の言葉を思い出す

フータロー君に恋をする二乃の言葉を思い出す

私の異変に気づき心配してくれた四葉の言葉を思い出す

そしてあの女の言葉が私の何かを破壊した

あの人がフータロー君の何なのか彼と過去に何があったのか…。

今の私には関係ない…。聞いたところでどうなるのか？

もうー私は君を一人にしない

君をいじめる人間から私は君を守ろう…。

私の夢を応援する君を私が…。私だけが守ってあげる…。…。

三玖…。それに五月ちゃん 恨みっこなしだよ 私は自分勝手な

ガキ大将だからさ

――――

――――

――

「フータロー…。」

「なんだー 早くいくぞー」

「教えてあげる…。」

「何をだ？ 一花の映画はお前が昨日話してたろ」

「一花の話なのは当たってるよ…。でも違うよ」

こいつは…。本当に三玖なのか…？

体に走るこの寒気はなんだ…？ まるで坂下と話してる気分だ

ただ何処かそれは純粹で故に黒く淀んだ何かだ…気づけば手が震え 自分の意思とは無関係に彼女の方から視線を外せずにいる…。

何かを伝えようとする彼女…。ダメだ ダメだ 俺は今すぐ
にここから離れるべきだ

そうしないと…。何か取り返しのつかない事が…。大切な今が壊れる気が…。

「…。お 俺は行くから…」

逃げるよう踏み出した一歩はとても重い、ただこの場から逃げるよりも早く

彼女の口が開かれ言葉が紡がれた……………。

「一花はコータローの事が好きだよ」

「!？」

「凄くお似合いだと思う…。ずっと昔から一緒だったからね 私は応援するよ」

「嘘だろ…。あの一花が…。俺みたいな奴を好きだなんてあるわけが…。」

「嘘じゃないよ…。良かったね…。コータロー…………。」

足元が今にも崩れそうだ…。

この子は何を言ってるんだ…。一花が あの子が俺を好き？
そんな事ある訳ない…。だってあの頃の俺と一花は親友だった…。
そう言ったのは一花…。他でもないお前だった筈だ

『コウくんとははずっと一緒だよ…。大切な友達だから！』

混乱する俺とは対照的に目の前の少女はニッコリと微笑み
『また 後で』そうとだけ呟き 俺の前から去っていた

その日の勉強会を俺はサボった

一位を狙う事以上に俺の頭を悩ませるそれが……。俺の頭の動きを
鈍らせる…。

「お前ら早くノートを開け たく幸太郎の奴何処で道草食ってんだか
？」

「上杉さん ここ分かりません！」

「一花もどこにいるのかしらね？ あれだけ周りの生徒にいられちゃ直
ぐは来れそうにないか」

(コータローまだかな……………)

第八十話 不良少年と次男への五羽鶴

「……。」

「一旦休憩にしよう」

「あー疲れたー」

「五月ちゃんは？ 放課後になった途端に見なくなったけど」

「用事があるって行つた……。」

「五月ちゃんはいないのか……。ふーん」

次の日の放課後

昨日の件で風太郎にしこたま怒られた『帰るなら一言言え！』

あいつも勉強に力を入れたい時期だ……。それを俺は逃げるように、実際逃げたが、それで風太郎に全部押し付けてしまった……。

あれからずっーとだ、三玖と名乗った彼女の言葉が頭から離れない
い

今日だって三玖を見ては、避けてしまい。一花の顔もまともに見れない状況で不審がられる1日

放課後の勉強会も、全然頭に入らず、ぼっーと考える

『重症だな』と弟は呆れている……。

「すまん……。少し席を外す……。 風太郎も一回外の空気吸ってこい」

「おう……。気分転換はしないとな……。」

重症なのはこいつも同じ

目の下に特大のくまだ何時倒れてもおかしくない

昨日は何も出来なかったんだ。気を回すくらいはしてやんねーとな……。

席を立って適当に休める所を探した。

風太郎の誕生日に、全国模試、姉妹達の家庭教師

すっかりしる俺が、こんな調子でどうすんだ……

このままだと俺はあいつらの元から去らないといけなくなる

自分で言つた言葉には責任を持って、失敗は許されねーんだよ……。

どさりとベンチに腰を降ろし口から出たのはため息と生氣
仏頂面には更に拍車が掛かり通りすぎていく人は、俺を見るなりその場から逃げるように去っていく
考えうる最悪の事態を避けるべく、働かせる脳内では、状況判断すらままならないと赤信号で止められる…。

「はあ……………」

「あつ コータロー見つけた」

「…。三玖か…。」

まともに顔を見てないせい…。今更気づいた

昨日は着けてなった髪留めを今日はきちんと着けてくれている

あれは…。ただ単に忘れていただけなのかもな…。

何か安心出来た…頭は回らないが、彼女の姿を見て弱々しいながらも笑みが、零れる…

ただそんな俺を余所に朝からのあの態度だ。三玖さんはご立腹と言える

「ううーん！」

「えーっと……………俺はその」

少し頬を膨らませ…ぷんすかと擬音も聞こえてきそうだ

そつと視線を逸らすとすぐにそちらに体を動かす

俺から視線を離さないように、絶対にと強い意思を感じる…。

そんなやり取りが、暫く続くと彼女の方から再度言葉が、飛んでくる

「朝からずつと避けてるよね」

「避けてないよ…。うん、さ、避けてません。」

「嘘…。コータローは必ず目を逸らすから…。」

「俺の事情に詳しい人間がどんどん増えていく…。はあそれで何だ。風太郎の件かあ？」

このやり取りを何時までも続けていては、せつかく探してくれた。

この子にも申し訳が立たない
せめてちゃんと会話は成立させんとな……。……。
ため息を出しつつも前を向き、彼女を見る

「うん 実はさプレゼントの件なんだけど私とコータローで……。」

「俺もさ……。お前に聞きたいんだ、昨日の事をさ」

プレゼントを渡す話は五つ子達との話で当日に決行される

何か進展があれば知らせてほしいと自分から言っておいて……。す
たこらさつさと逃げていた……情けない

けどちよつとばかり冷静になろう……今は俺と三玖の二人だ

これは、彼女に聞くチャンスではないだろうか？

『一花が俺を好きってマジ』とか、脈拍もなく聞くのは、可笑しい先ず
は、昨日俺と話したのは、本当に目の前にいる彼女だったのかそれを
確認しなければ、姉妹間での冗談とは思えないほど昨日俺にあの言葉
を伝えた……三玖と名乗った少女は真剣だった。避けるだけでは、何も
始まらない……。

「昨日？ なんの話」

「えっ……。昨日 お前が……。」

「ねえー 二人して何の話してるの？」

「!?」

おかしい……。昨日は昨日だ、三玖が俺に言ったんだらうし

忘れるには早すぎる……。聞き返そうと再度質問を試み俺は咄嗟に

言葉に詰まる

一花が横からひよいつと顔出す

突然の事で一瞬たじろぐ……。

様子のおかしい俺の顔をじーつと見つめてくる一花……

こいつは……。本当に俺が好きなのか、絶対ありえない、そんな訳な
いだろ

一花は風太郎が好きだった筈……。だからあれだけそわそわしてい
た。そうじゃないのか、まさか俺の思い違いか？

「うーん？ どうしたのかなー」

「悪い…。用事を思い出した」

情けない…。ここで逃亡とは

俺は腰抜けだ…。一花の前で『昨日一花が俺を好きだったって話さー』とか言えるか。一花が困るだろう…。変な目で見られる…。

「コータロー…。どうしたんだろ…。昨日も来なかったし、やっぱり何かあったのかな？」

「大丈夫だよ…。コータロー君は強いでしょ…。」

「うん…。抱え込まないと良いけどな」

「私たちにできるのは少しでも負担を軽くすることだけ…。コータロー君も忙しいし、プレゼントの用意も遅れてるだろうしさ…。だから一旦は忘れよう」

—————

—————

———

一花 side

ずきんと胸が痛くなる。こんな事許される筈もない

でもあれが私のやり方だ、自分のやり方に後悔してちやダメ

昨日の時点でプレゼントを渡す機会を遅らせた

フータロー君への感謝の気持ちは大きい

彼が家庭教師の仕事を受けなければ、こうしてコータロー君と再会してこの気持ちに気づく事もなかった…。だから学力模試には全力で挑んで欲しい

他に気を逸らして十位以内に入れなかったとなれば、今後の動きも厳しくなる

それはコータロー君も同義だ…。彼の場合は更に一位という途方もない条件を彼自身が提案している

フータロー君には悪いけど、誕生日の当日は避けておきたい

「あれ…。一花じゃん」

「二乃…。昨日の連絡は見たよね？」

(やばい…。忘れてた二乃のブレーキは壊れてるんだ)

「ああーあれね でもあげたいものはあげたいわ」

「ここで私は大きなミスを二つ犯した」

一つは二乃の行動を予測し忘れたこと

一つは一番重要な 誕生日の当日の話をしなかった事の二点だ

『一度この話は白紙にしよう』では伝わらない

特に今の二乃の足止めを止めるのにたった一列の文字で効果があ
る訳もなく

ニコニコしながら両の手で彼に送る それを大事にそうに抱える
羨ましいな本当に…。ここまで素直になれたならどれだけ楽か…。

自分の気持ちに気づくのが遅すぎた

「でもさ 朝見たのよね あんたもプレゼント用意してたでしょ」

「あつ、これは…。言い訳になるけど一応は持ってきました」

もう一つ問題があった、それは自分自身だ

やはりフータローくんへの恩はある 誕生日とはその人にとって
重要な日だ

どんな人にだって祝ってもらえる権利はある…。

何だかんだと言いつつも私も当日に祝ってあげたいと欲が出てし
まった

流石に今の二乃は鋭い…。得意げな表情で私を指さす

彼女には隠せない、左ポケットから彼へのギフトカードが入った
封を二乃にも見えるよう取り出す

『やっぱり』と呆れている…。たぶん二乃以上に本人が呆れてるよ

ああー情けないな

「そう言えばさ…。あの日のこと弁解はある？何でパパを足止めしな
かったのか」

「ないよ…。あれは純粋に私の嫉妬だから…。二乃はフータロー君が

好き？」

「好きよ」

「私は…。コータロー君が好き」

「！…。なら何で パパの足止しなかったのよ！」

「言ったでしょ…。あれは私の嫉妬だって…。 二乃が羨ましくてさ」

「…。本当に今のあんた 昔に戻ったみたいね…。でも少し性格悪すぎるわ」

「自分でも自覚してるから…。」

弁解はしない…。あれは私の嫉妬だ フータロー君への愛情をストレートに言える。彼女が何処か疎ましく…。現状維持で我慢していた自分が齒がゆかった…。

どれだけ真剣に妹が私にアドバイスを求めたのかも考えず

『その気持ちは一時的なものだよ！』と誘導しようとしていた

そのくせ一番落ち込んでいたのは自己嫌悪に陥った私とオチまでついている

あの雨宮紡木という女性の言葉で確かに自分の心に動こうと考えた

でも一番は二乃がフータロー君へ行った告白だ。

彼女の告白を聞かなければ、きつとここままで意識する事もなかった…。

適当な言葉で今は二乃を説得し今は一旦気持ちを落ち着かせようと提案

実際に落ち着くべき人物は私だと特大のブーメランまで戻ってくる

「わっ!? 一花と二乃か?。」

「?」

「びっくりしたな…。上杉さんたちが帰ってきたのかと思ったよ」

勉強を行っている場所まで戻れば…。四葉が声をあげ驚いている

キョロキョロと周りを見てはフータロー君たちが来てないかを確認

話を聞くと彼等の為に千羽鶴を作っていると…。

「上杉さんもお兄さんも…。あれからずっと疲れてるように見えるんだ

言わないだけで私たちに教えながらってのが凄い負担になってるんだよ だからせめて体を壊さないように…。出来た!」

「でもプレゼントは中止だし…。何よりあいつの誕生日は別の日でしょう」

「あっ!言われてみればお兄さんの誕生日と上杉さんの違うんだ」
今更過ぎるけど…。四葉らしくて笑っている

この子は周りを元気づける…。四葉のお陰で私は自分の行動に後悔なく動けるんだよ…。

二乃に言われ当日に渡す計画がなくなった事を思いだし

四葉はわんわん泣きだす

私たちにごめんと謝罪の言葉まで…。

「自分で自分が許せないよー これじゃ私だけずるしてたみたいだもん!」

約束を破るなんて人として最低だー!」

うわー…。突き刺さるな…。

「ごめん…。私も 給料日割りで貰って…。スポーツジムのチケット

ト お世話になってるから渡そうかと…。ごめん 抜け駆けみたいになつて」

四葉の言葉が刺さったのは私と二乃以外にもいた…。

まさか三玖もとは思わぬ伏兵、きつと感謝の気持ちは誰もが同じく抱えている

抜け駆けなんて考えず正々堂々とすれば良かったかな…。

やることも好みもバラバラなのにこういう時は結束する…。改めて五つ子だと実感できる

「じゃあ…。こうしよう やっぱり模試前に渡すのは勉強の妨げになつちやうから…。

この模試をフータロー君が無事に乗り越えたら…。みんなで渡そう コータロー君には私から話しておくよ」

「そう言えばコータローに伝えてない…。言わないとね」

(なに勝手に決めてるのよ…！)

(元々こうするつもりだったからさ…。二乃こそ頑張ってるね)

(ふん…まあ色々予定外だけど…。四葉に免じて許してあげる)

(寛大だね…。お姉ちゃんは嬉しいな)

散々邪魔をさせたせめて渡す日は同じにしよう…。

私と違って二乃は純粋にプレゼントを渡そうとしてるんだし…。

今回の教訓は送る前に内容をちゃんと確認しておこう

「じゃあ当日は何もなしか…。」

「うーん こんなのはどうかな！ 次のテストで全員で高得点としてそれで鶴を折って

上杉さんをびつくりさせよう」

「確かに…。フータロー君も疲れが吹き飛ぶかもね」

「まあ…。乗ってあげる」

本当にこの子は…。おバカだけど…。とつても真面目で私には勿体ないくらい過ぎた妹だよ

—————

――
――

4月15日 上杉風太郎の誕生日ぱふぱふー

盛大なお祝いが家で行う予定だが…。らいはに言われて本人には秘密である

そして前日には一花からメールで『誕生日プレゼントは全国模試が終わってから渡すから』

その方があいつも驚くだろうから俺も賛成だ…。

まあ…。俺はプレゼントを未だに決めていない 18にもなる弟に何を上げれば良いのか

俺は去年何を貰ったか…。 昨年の事を思い出す

あいつは物凄く悩んでいた…。確か貰ったのはノートとボールペンだったな

『学力向上が一番だと思った…。』 他から見れば豪華な物とは言えないけれど…。俺に取っては大切な宝物だ…。

「勉強用具一式もありだな…。」

「何がだ？」

「何でもねーよ…。数式のチェックしておくか？」

「いや…。今は頭に入れる方が先決だ…。お前もニアミスしないようにな」

「了解だ…。」

外は真つ暗で…。今日は五つ子も不在

俺たちは二人で全国模試の猛勉強中…。

非効率的だが睡眠も必要最低限に済ませている…。本番で寝たら全てが台無しだな

「お二人共 まだ帰ってなかったのですね…。こんな時間まで自習とは…。」

「ご苦労様です…。差し入れです」

「五月…。」

「悪いなわざわざ…。」

眠気覚ましのドリンクを机に乗せ

おまけに劳いの言葉のアフターサービス付きだ

今日も一体どこで何をしてたんだろうな？　ここ二日ほど放課後になれば何処かへ行ってしまう

ぐびぐび飲み干す弟は『俺を誰だと思ってるんだ？』と強気の発言

頼もしくもあり…。同時に手強いライバルだ

「先日 塾講師をなされてる 下田さんというかたの元へ出向いて来ました

幸太郎君は存じてますよね」

「下田先輩か…。」

「誰だよ…。」

「ある意味で俺たちの先輩のような人だよ」

「??」

五月がここ暫く姿を消していた理由は、あの元ヤン塾講師の下田さんの所に出向いていた為だ

彼女とはあの一件以来やり取りは続いており…。バイトを探す傍ら

『少し学んでいかなーか？』と誘いを受けたと話す

本業が出て来た事で拗ねる風太郎はとても面白い

確かに…。一言は欲しかった

「下田さんも人が悪いな…。」

「幸太郎君まで拗ねないでください」

「拗ねてねーよ…。」

「模試の先 卒業の更に先の夢の為に 教育現場を見ておきたいのです…。」

じー

「やはり恥ずかしいので…。見ないでいただけますか…。」
「かつこいいじゃねーか…。」

「お前らのやることは本当に予測不可能だよ…。」
堂々と語る五月は本当にかつこいい…。

確かに零奈さんの真似事で母になるなら手は他にもあると散々
下田さんに言われたが…。それでも彼女は自分の描くそれを再確
認したいと口にする

夢を持つ事はとても良い事だ…。五月もやっと前に進める…。
誇つてもいい事だ

「なあ…。風太郎…。って寝てるよ」
「すびー…。」

気が抜けたのか爆睡している
頭に入れたもの忘れなきやいいが…。風太郎だし大丈夫だろ

「以前にも似たような事がありましたね…。」

「あんどきは二乃が薬を仕込んでたな…。随分懐かしい話だ」

「もう半年以上前です…。 幸太郎君 明日は大丈夫ですか？」

「なんだ…。俺の実力を疑うのかー」

「いえいえ…。幸太郎君ならきつと…。いえ違いますね 絶対に一位
になれると私は信じています」

「末っ子の言葉は励みになるな…。任せろ 俺はお前らの前から勝
手に消えるつもりはない」

「私です…。幸太郎君から離れるつもりはありませんよ」

「そこはもう少し考えてから言うべきだ…。男が勘違いするぞ？」

「／／…。えつと今のは別に」

「冗談だよ…。帰るなら送って行くぞ？」

少し意地悪だったな…。

一花の一件でそう言った言葉には敏感になっている

先日行った温泉旅行で五月が俺に『恋がしたいですか』そんな事聞
いて来るもんだから

つかからかってしまった…。

「ふふ…。大丈夫です 幸太郎君は勉強しててください あとこれを

彼にどうぞ」

「お前らも芸が細かいな――起きたら風太郎もびつくりだな

ありがとな……。」

「お礼を言うのは私たちの方です……。きつと変わり始めたのは……。とこれは後程」

「へいへい……じゃ おやすみ五月」

「はい 幸太郎君また明日お会いしましょう」

姉妹からのとっておきの御守りも届いた

風太郎もこれで全力を出してテストに挑める

机に置かれた 5羽の鶴は ただの紙ではない ここ数日で彼女たちが受けたテスト

その中でも特に点数が高いもので作られたこの世でとつても貴重な5羽の鶴

どんな願掛けよりも効いてくれそうだな……。

不安と緊張でどうにかかなりそうだが……。俺も何とか全国模試まで気合が持ちそうだ……。

「お兄ちゃん 誕生日おめでとうー」

「風太郎 また一つ成長したな ぷっはー」

「おめー」

「親父また 期限切れ飲んでるのか？ 幸太郎もやけに淡泊だな」

「まあー そんなもんだろ はーい 誕生日会だー」

その日上杉家ではひっそりと風太郎の誕生日会が行われ
彼も彼で少しばかり心のゆとりが出来ていた……。

(テストで作った鶴か あいつらも頑張ってた……俺も負けられねえ)

(風太郎 良い顔になったな……俺もしゃんとしねーとな)

第八十一話 不良少年と男の戦

あと五分とギリギリまで机と向き合う風太郎を必死に引き剥がす遅れたら今日までの苦労は水の泡だ…。

そのハングリー精神は見習いたいものがあるな…。

「幸太郎…。自分を信じろ」

「ありがとうございます。誰が相手とか気負いません

俺は俺の全力で挑みます」

声援を受ける横で風太郎はパンを口に突っ込まれている

諦めがついたのか…。筆記用具一式をしまう

「お兄ちゃんたち ファイトー！」

「バカ息子ども気張ってこいー！」

「行ってくる」

「行ってきたーす」

さていざ決戦の舞台へ

「おい らいは 俺の牛乳どこ行った？」

「あつ！ まさかお兄ちゃん持ってた」

知らぬ間に崩壊への一步は始まっていたり…。

—————

—————

—————

「ぐくぐく…。」

「お前何時の間に牛乳なんて持ってきた」

「机の上に合った奴を適当に」

「勇也さんのだろ 飲んで大丈夫か」

「味は普通だ…。」

「そういう問題じゃない…。」

パンを啜えていたと思えばいつの間にかパツクに入った牛乳片手に隣を歩く

呑んでいるのは父である勇也さんが良く飲んでる期限切れの牛乳…。

あの人は体が丈夫だから良いけど 俺や特に風太郎はお腹を壊しやすい

前回なんて自分で作ったパイ食って腹を下してたぞ…。
適当にあしらっているが…。本当に何ともないのか？

靴から胃薬を出し手渡すが…。今更だろうな

「おはようございます！」

「よう…。おまえ…。すげー顔だな」

「いよいよ試験当日ですね」

「頑張りましたよう！」

「つてか 片方は凄い隈ね 酷いわよ」

「人の事言えない…。コータローは何かスッキリしてる」

「ふぁーどう…。フータロー君は十位以内 コータロー君は一位は入れそう」

「まあぼちぼち」

「勿論だ…。」

ふり返った先には今からテストだと言うのに風太郎に負けず劣らず

目の下に隈が出来た中野姉妹達…。弟と同じく徹夜明けだろうな
勿論の事彼女たちも結果を残さないといけない

勉強会ではひどい成果だったが昨日の折り紙を思い出せば不安も消える

「幸太郎君は珍しく…。眠そうじゃありませんね」

「おう しっかり8時間睡眠してきたぞ」

「どうりでコータロー元気な訳だ…。」

「でもいいの？ 一位でしょ 勉強しないと」

「大丈夫だ…。頭には入ってる 後は体調管理だ…。大事なテストで寝落ちはもう勘弁だ」

「…。そうですね 睡眠は大切ですから」

何処かの誰かさんが熱弁してたしな…。

彼女たちにも話したが…。大事な日にテストの最中で寝るなんて失態だけはしたくない…。

あんな思いは二度とごめんだ…。

一年前の手痛い過去を思い出す あの事が教訓になった 後は実力あるのみだ…。

いざ会場たる…。学校へ…。一歩足を動かした時に 何処からか笑い声が聞こえる

「上杉君…。先輩 逃げずにここに来たことをひとまず褒めておこう！」

「出た…。」

「だがしかし 君たちは後悔することになるだろう！ あの時逃げておけば良かったとー！」

「朝からうるさいわね…。」

「上杉さんもお兄さんも負けません！」

「君たちには話してない！」

武田は今日も今日とて元気な事で腕を組んではこちらを見降ろし未だ変わらぬその態度にせっかく取った睡眠も何処へやら飛んでっつてしまっそうだ…。

何も言わない 俺たちとは違い 二人が反論するもきつめの言葉で彼女たちを怯ませる

すこーしカチンと来そうになったが、後ろで五月が首を横に振るう
(冷静にだな……………了解)

気分爽快で最高のコンディションで挑む事が出来るんだ いちいち構ってる暇はない

だらだらと言ってるなら こっちは先に進ませて貰う

「ここが僕と君たち兄弟との最終決戦…。一騎打ちで雌雄を決し…。」

「お前ら急げ」

「ちゃんと忘れ物がないか確認は怠るなよー」

「はーい」

「悪いな一騎打ちじゃないんだ…。こっちは7人だ」

「それに俺たち二人に一騎打ちつてのもおかしな話だぞ…。」

「ふふふ…。それが君たち兄弟の弱さだ」

弱さ その弱さが時には勝利への道へと突き進む大きな鍵になる
それに構ってる暇が、あるならお前も悪あがきくらいはしておけ
それが慢心って言うんだぞ

散々教えただろ武田…。

去って行く俺たちを武田は苦虫を噛むが如し表情で見ている……………。

—————

—————

—————

「机の中は空にして着席してください 問題用紙は合図があるまで裏
にしてお待ちください

では…。 全国统一模試を開始します」

遂に開始された全国统一模試

たつぷりの睡眠と軽い食事を済ませた幸太郎の顔には緊張の二字はなく

開始と同時に出された問題を次々解いていく

その姿は普段見せる面倒くさがりな彼の面影は一切なく かつての学園主席候補の顔だ

些細なミスも認められない…。何処が間違いか何度も見直し

すらすらと進める…。既に答えは頭の中…。睡魔の無い彼に怖いものは何もなかった

そして第一科目の終了を知らせる鐘がなる

――――

――――

――

「風太郎…胃薬は」

「飲んだが…。遅かったようだ」

「次はいけそうか」

「何とか…。良いからお前は自分の心配をしてろ」

「了解だ…。」

「コータロー君…。彼 大丈夫？」

「弟を信じてくれ…。あいつなら出来る お前も自分の問題とちやんと戦うんだぞ」

「はい まかせてコータロー君も頑張ってね」

「任せろ…。」

科目終了と同時に解放された生徒たちが教室から去る

トイレに駆け込む生徒もいれば友人と何処か不安か話し合おう生徒など様々だ

テスト開始前に腹に異常感じ始めた風太郎は兄から薬の効果の程を聞かれるが

時すでに遅し…。お腹の中は大変な事になっている ここで彼は

学んだ

安易に机の上の飲み物は飲まないでおこうと…。

「武田なら200点満点いったんじゃね？」

「ははっどうだろうね…。漢文に少しばかり時間を取られてね一問くらいはおとしてるかもしれない」

「いや…。ワンミスでも十分凄えよ…。」

「つて事は今回も武田がこの学校のトップで決まりだな…。」

「…。所詮は猿山の大将か…。」

「えっなんて？」

「何でもないよ」

(ん…?)

彼等の後方では武田が如何にもな発言で周りのの生徒達を驚かせる

これはおごりではない…。彼の本音だ

ここまで勉強してきた自分と複数の生徒を抱え

学園トップ10点に入ろうとする二人で心の余裕にも差が生まれる

一方は今にも倒れそうなほど苦しそうな表情…無理して徹夜をしたんだらうと嘲る

もう一方は普段みる眠そうな表情は一切なく…。かつての彼を思い起こさせるが

所詮は過去の人物…。たった数日であの点数から一位を取れるほどの急成長は遂げる事は先ずない

少しの慢心も出てしまう

それ程まで彼は自分が圧倒的優位に立っていると自負している

周りに生徒も武田ならばと太鼓判

第二科目も迫る中で…。武田の携帯がなり 画面を確認した彼の表情が少し歪む…。

――
――
――

理事長室

この学園を経営する彼の父親が息子である武田祐輔を部屋まで呼んだ

早速と息子の成果が書かれた答案用紙を手に持つ…。

『手が早いですね』と苦笑気味だ 同時にもう一枚の封筒を手に持ちそれを息子の前に出す…。中身は今回の模試の答えだ

まさかと武田も驚いている…。何故それを自分の方に渡すのか…。

理由を語る

武田祐輔 200点中三問不正解で190点

父は落胆した…。信じた息子と彼を推薦した中野院長の顔に泥を塗る。

加えこの位置を保つためにはどうしても息子には、全問正解をして貰わないと自分の立場が危うい

母と同じく医者になりたいと語っていた息子、このままではそれすら難しい

ただ、医者と言う言葉を聞いた時…。武田の表情が何処か苦々しげだ

「あまり…。父を心配させるな…。祐輔、お前は出来る子だ…。

何をすればいいかは分かってるね？」

「父さん…。僕は…。」

「さあ…。早く戻りなさい…。期待しているよ」

彼が慕った杉幸太郎が嫌う。期待と言う言葉が武田にも申し掛かる

余りにも重いそれに彼の気持ちは揺れていた…。

答えは受け取るが…。果たして武田がどう動くのか…。

――
――
――

時間は流れ 残り2科目…。

食堂に集まる中野姉妹の表情には疲れが出始めている

徹夜明けの影響もあるが…。ここまで緊張して模試を受けるのは
何時以来だろう

学期末でもここまでのプレッシャーはない…。でもあの時よりも
実力は出ているという自負もある

残った科目に英語と歴史に打ち勝つために今は食事を優先に…。

末っ子は大盛ライスを頬張っている

朝から様子のおかしい風太郎を心配する一同

全国统一模試を乗り切ったあとには…。みんなで一斉に彼に誕生
日プレゼントを渡す算段でいる

勿論それは彼の兄にも伝えており…。無事に終われば彼も弟に渡
すと言っている

ただまあ…。その二名の姿はない

「お兄さんと上杉さん…。どこだろう」

「えーつとね…。それがさ」

理由を知っている一花は顔を逸らす 気になった一行は理由を問
い質す

「フータロー君…。トイレに行ったきり戻らなくて…。コータロー君
が心配になって向かってる」

『『え……………?!』』

「あつはは…：災難だよね」

笑って済ませられればどれほど良いか

大事なこの日に上杉風太郎はお腹を下していた…。

――
――
――

――
――

「風太郎…。やばいか」

「やばいってレベルじゃない…。俺が悪いけどさ…。親父もあんなところにいるいい」

「薬を飲ませてこれか…。いや確かに 勇也さんもいい加減期限切れを飲むのはやめて欲しいな

風太郎…。一応は薬持つてるから飲んでおけ」

「悪いな…。お前が何時も常備してるお陰で…。な なんとか うろうう」

トイレの中では今まさに上杉風太郎は窮地に立たされている

出先に飲んだ牛乳は…。彼の父がよく飲むものだ…。安物で期限ぎりぎりの特価品

家の現状買い溜めも必要最低限…。父である勇也は何個か買い置きし

それを月で飲んでいる…。ただでさえ、期限切れ寸前をあの男性は放置し

何の躊躇いもなく飲み干す…。体の作りが他と違うのだろう…。

悪い予感がした幸太郎は第一科目が始まる前に薬を飲ませたが、それでもお腹は大乱闘だ…。効き目の効果は薄く、未だに風太郎は腹を抱えトイレに籠る

他にも効き目がありそうな薬も兄は持つており…。次の科目前に飲んでおくよう。弟に伝えると『うう』と苦しげな声に兄も表情が強張る

外で待つ幸太郎もまさか…。こんな事になるとはつくづく上杉家の人間は行事事と相性が悪い。皮肉交じりと本音九割だ

(誰か、来たな。つまじかよ)

コツコツと…。歩いてくる音が聞こえ 幸太郎は退けようと動く

が入ってきた人物を見て表情をかえる…。

「はあ………。幸太郎？ ん」

「やあー随分長かったね」

「何故だろうな……。いる気はしたよ」

やつと腹痛から解放された風太郎

扉の前には兄ではなく、自称ライバルの武田祐輔が爽やか笑顔を崩さずにつこり微笑む

当然……。横で腕組みする幸太郎は微妙な表情で武田を眺める

次まで時間もない中で……。自分たちと会う余裕があるのかと一応は忠告する風太郎

ただ武田のにこやかな表情も見せる余裕も何処か普段と違って見える

幸太郎が彼の左手を見れば……。謎の封筒だ

『気になりますか』と安い挑発に彼は乗りはしない……。どうぞご勝手にと風太郎と出ようとすることも

武田の発した言葉で歩みを止める

「この封筒の中身は……。模試の答えだ。ここに全て書いてある」
「!?」

「流石理事長の息子さんだ……。きたねーなおい」

「負け犬の遠吠えですか先輩？」

「って……!!。待てよそれさえあれば……」

「そう……。これがあれば確実に君たちに勝てる。どれだけ点を稼ごうが、一問でも落とせば、君たちに勝利はない……」

「めちやくちや不正じゃねーか!」

「まさか……。お前がな……。そんな事するとは見損なつたぞ」

理事長を父に持ち……。同時に絶大な期待と信頼を寄せられる武田に敗北は許されない

既に第一科目の時点で190点。目の前の二人がミスをしてなければ……。一科目は負けている

だが勝利の女神……。いや悪魔の囁きか

一科目が終われば。父が彼を呼びつけ。一枚の封筒を手渡した

勝利への一石……。たとえ不正でも誰にも気づかれない……。

この二人がどう騒ごうが……。一方はただの学級委員 一方は学校最悪の不良少年だ

誰も彼等の言い分を信用はしない……。あの姉妹たち以外は……。

かつては尊敬した……。白髪の青年から見損なつたと一声受ける

武田を眼中に入れていない風太郎にとっては彼の品性よりもその紙だ

自分たちの点数を知らない二人にはただただプレッシャーになりうる

このままでは負ける……。信用してくれる あの五つ子とおさらばし

ただの学生に戻るのか……。今から復習しても結果は変わらない

相手は答えを持っている……。どすればいい 焦る風太郎を見て

武田は持っていた その紙を

ビリビリと破り……。トイレへと捨て去る

「お前……。」

「上杉君も先輩も……。安心してくれ前半の科目でもあの封筒は開けてない

勿論信用してくれとは言わないさ」

「何でだ……。武田」

「僕はね……。……。宇宙飛行士になりたいんだよ！」

『!?!』

突然過ぎる展開に二人の脳はパンク寸前……。

兄の方は既に頭から煙が出ている

額を抑える風太郎は……。なんで それで こうなのか 1から順に説明を要求

どこか素直になつている武田は嬉しそうに話をしだした。

出ばなの時点で意味不明過ぎる言葉に風太郎は止めるよう言うが……。武田は止まらない

生まれ落ちてからずっと武田少年は父と医者との重荷に耐える日々
…

そんなある時……彼は見た いや 魅入られた……。
宇宙と言うあの広大な世界に

何にも縛られない あの壮大な存在に何時しか武田少年の心は
医者と言う決められたレールから自分自身で歩むべき道を見始めていた

自分の目指す道にたどり着くためにはどんな妥協も許さない……。
一握りの人間のみが選ばれる……。そこに行くまで 彼にとつては
全てがライバル 全てが対する敵
だから……ここで こんな小さな国で終われない 負けられない……。

宇宙飛行士 それが武田祐輔の夢だから……。

その言葉に幸太郎は反応した……。
夢と言うワードは彼に取っては禁句でも……。それを描き夢見る存在を彼は否定できない

否定する事もしない……。
何故自分が……。武田にここまで敵意を持ち 同時に武田が落ちぶれと言いながら

自分に突つかかってくるのか……。やっと彼は理解した……。
「夢のためには……。実力で君たちを倒す！ 不正して得た結果なんてなんの意味も持たない！」

「武田……。ううううう すまん」

自分の行動理念と目指す目的を言い切った武田は何処か満足げだ
風太郎も何かを伝えようとするが三度の腹痛……。武田の到来で貰った薬はまだ飲んでいない

すぐさまトイレに駆け込み扉を閉める…。

中からは風太郎の悲痛な声と悲鳴を上げる彼のお腹の音だ

ただ…。それでは終われないのが彼だ…。去って行こうとする武田に風太郎は言葉を贈る

「受けて立ってやるよ…。お前の全力に…。うう」

「ははは！ 何を今更！ 当り前さ 僕らは永遠のライバルなのだからね！

それと…。あなたは僕が尊敬する人物です…。」

「武田…。俺もお前と向き合おう…。全力でな…。それとさ夢叶えろよ」

「当然です…。先輩も もう一度 夢を追ってくださいよ あなたはまだ終わってはいません」

本当の意味での男たちの戦いが始まった

風太郎 幸太郎 武田の3人の戦いは残された2科目がすべてを決める…。

—————

—————

—————

そしてあれから一週間程が経った…4月23日。

前回行われた全国統一模試の結果が発表されている

何時もと同じく黒のリムジンに乗り込む中野マルオは自分の持つ端末を操作し

娘たちの結果に目を通す…。

成績不振に陥り結果的にこの学園へと訪れたあの頃と見比べればその成長はすさまじく

上位まで食い込めなくても誰一人として70点を下回る点数を取る事はなかった…。

「お嬢様方は個人差はあれど前年より 大幅に成績を伸ばしておりま

す」

「……」

「家庭教師という 選択は結果的に大成功と言えるでしょう……」

「勿論お嬢様方の努力あつてのことです」

「そうだね……。彼女たちは良くやってくれている……」

「武田様は……。全国5位の快挙でございます。」

「それで……。彼は？」

「惜しい事に上杉風太郎様は……。2位……。旦那様には残念な報告となりますが……。彼の宣言通りとなりました」

「おかしな答案だね……。前四科目はノーミスの満点 最後の科目はラストの数問だけ」

「書いた形跡はあるけど……。これは読めない」

「報告によれば……。ちやくちやくと解いていたようですが……。突然気を失うように眠ってしまったと」

「試験勉強で根を詰めすぎて最後の最後で……」

「だが……。確かに彼の言う通り……。10位以内だね」

「武田は全国5位と凄まじい快挙を成し遂げた」

だがそれを更に超える風太郎の二位……。彼は模試の最中に腹を痛め

騙し騙し試験に集中し……。兄から貰った薬で何とか最後までやり遂げた

ただラストの科目で疲れから来る睡魔に襲われ 残った問題を解き始めた頃には夢の中へと意識を飛ばした。

目を覚ました時には回収済み……。残った問を解けば確実に一位になつていただろう

そしてまだ一人残されている

自分に宣戦布告し……。友人からの手紙を受け取った あの少年 上杉幸太郎だ……」

『全国一位を取ります……。でなければ下ろしてくれて構いません』

その目に迷いはなく……。妥協を許さない……。一位以外は取るつもりは無いと言つてのけた

彼の点数は……。

「最後に……上杉幸太郎様は……。

全国一位になりました……。

こちらも旦那様には残念な報告になりますが

あの少年は実現なされました……。

「ふふ……。」

上杉幸太郎 全国学力模試順位1位

彼は成し遂げた……。学校で不良少年と呼ばれるあの男は今……。

全国で一番の成績を誇る高校生の称号を手に入れ 記載された彼の点数はオール200

何のミスもなく全国強豪を押しつけた……。

想定外か想定内か……。中野マル才は笑みをこぼす

兄弟揃つて全国一と二になった……。普通では考えられない事態だ

それだけあの二人はこの模試にすべてをかけた……。彼女たちと

共にいる為に……。

「旦那様？ どうかされましたか」

「あの兄弟……。彼らには悉く邪魔されてばかりだ……。彼らと関わる度に僕の予定は狂わされる……。

困つたものだよ……。でもその覚悟は見事なものだ」

「それでは……。目的の場所へと……。」

煩わしい二人……。毎度毎度自分たち親子に立ちふさがり

その都度彼の思い描く計画は崩される……。修正している矢先また一つとうるさくて仕方のない二人組

でも彼らに嘘はない……。虚勢ではなく実際にやってのけるのが

あの上杉兄弟だ

報告が終わり次第 上杉兄弟と武田に合流する予定であり 江端

が車を出そうとするが

中野はそれをとめ……。ある人物に連絡を取るよう指示……。少しすればその人物との電話が繋がる……。

「おーつと……。マルオくんかい 何かな……。僕はさつき日本に戻ってきたばかりなんだよ」

「……。幹雄君……。君もだが【マルオ】と呼ぶのはやめろ」

「ごめんごめん……。学生時代の癖が抜けなくてさ……。それで用事はなにかな？」

「日本にいるなら好都合だ……。 幹雄君……。

上杉幸太郎が全国一位になった

君の予想は外れたよ」

「……………」

幹雄と呼ばれる男性と会話をし

何処かまったりした話し方のその男にうんざりしながらも彼の模試の結果を伝える

電話越しでは『へえー以外だね……。今の彼なら10位以内ぎりだと予測してたんだけど』と

驚きの声と満足したような領きが聞こえる……。

「これで第一試験は合格と言ったところかい？……。本人が知れば怒りだすだろうね」

「あつはは……。大人が勝手にだからね……。せつかく戻ってきたのにまーた向こうに戻るか」

「今から彼に会いに行く……。今日には彼を連れて出発して欲しい」

「了解……。勇也には僕から伝えるよ……。君は彼と話そうとしないからね」

「世間話をする仲でもない……。」

「同じ生徒なのにさ……。まあ良いか 彼の頑張りも見れたしねはあ……。水木ちゃんに会いたいな」

「悪いね……。家族との時間を取ってしまったって……。」

「気にしないで……。マルオこそごめん……。思い出させる形でさ。じゃ一旦切るよ」

海外から帰省してきたばかりの彼は電話の向こうで愛する妻の名前を名残惜しく呼んでいた

……。一瞬中野の顔も何処か影を落とし『悪いね』と謝罪の言葉を入れる

今回の1件は幹雄も1枚噛んでいる……。寂しいがそれもまた仕方ないと割り切って気持ちを入れ替える

かつての友人は電話を切れば早速何処かに移動するよう……。

中野も同じだ。今からあの兄弟と武田に会いに行かなくてはならない……。

想定外が続く中……。きつとこれからもこの二人は自分たち親子を振り回すだろう

そう考えると。ふいに笑顔も出てくる……。

目が笑っておらず……。秘書江端も苦笑い

(上杉幸太郎君……ここから君はどう動く?)

今から向かうその場所で自分を待つ彼はこれから起こる自体など何も想定できる訳もなかった……。

「さあー。上杉君も乗りたまえ！」

「露骨に嫌な顔だなー。風太郎ー」

「ブランコって……はあ」

第八十二話 不良少年と彼らのお祝い

時間は少し遡る…。

中野マルオが彼らの結果を見る三日前の4月20日 金曜日
ちようど模試の答案が返却される日

流石に上杉兄弟も緊張している

全国学力模試の結果で今後の二人の動きも変わってくる

今にも吐きそうな顔で机に突っ伏す風太郎と呪文めいたものを口
走る幸太郎

姉妹たちは少々苦笑いを浮かべる

担任の園田が教室へと入り

彼が抱える複数の紙の束…。それは紛れもなく 模試の結果が記
載された答案用紙

二人の緊張は限界を迎える…。顔色は一瞬で真っ青に変わり

頭を抱えだす『大丈夫だ 大丈夫だ』『ミスはない 完璧だ』と机に
話しかける

気が付いた園田は深いため息と共に生徒一同に『お疲れ様』と労い
の言葉を述べ

早速答案用紙の返却を開始する…。

勿論の事トツプッターは彼…。上杉幸太郎だ

「上杉幸太郎…。はい」

「はっはい」

声が裏返っている…。

教卓まで向かう足取りもおぼつかない…。両手と両足が同時に動
く

何ともぎこちない

結果が言い渡される彼を見て

姉妹たちは手を合わせる

(どうか 幸太郎君を)

(お願いします。コータローは頑張ってます)

「上杉……………ほら結果だ…。 須藤に報告してやれ…。」

「えっ…。…。!?」

園田の一言で一瞬だけ緊張の糸が解れた

渡された紙を確認した彼は小さくガッツポーズを取る

「お前は立派だよ」

「ありがとうございます。先生」

上杉幸太郎

全国学力模試 総合点数5科目合計1000点 順位一位

どうなったのか気になっている彼女たちは…。首をあげ視線を向ける

それに気づき 小さくサムズアップをし

五月と三玖は今にも泣きだしそうに顔を手で覆っている…。

そして同じく 次に呼ばれた風太郎も教卓まで向かう

先ほど彼と同じく足は覚束ないが…。兄の表情を見れば覚悟も決まる

「上杉…。お前も流石だな…。」

「!!…。まじか」

上杉風太郎

全国学力模試 総合点数5科目合計980点 順位二位

この瞬間彼ら二人は全高校で最も頭のいい兄弟となった…。

「風太郎…」

「幸太郎…」

『『お疲れ!』』

ばちん

互いに手の平を合わせる…。

彼らの努力は身を結んだ

――
――
――

「コータローおめでとうー」

「おっと三玖！」

「おめでとう…。おめでとう」

答案が返却され

全員が図書室に集まる

彼らが無事にノルマを合格 最大の難関に挑んだ二人だ

実際は彼女たちの方が気が気では無く

五月は緊張のあまりご飯が喉を通らず 三玖は昨日からずっとお祈りしていたらしい

不安もなくなった幸太郎は先に姉妹が待つ

図書室へと入ればすぐにだ 三玖が抱き着いて来た

嬉しさを抑え込んでいたが…。彼の顔を見て耐えきれなくなった様子で

『ありがとう』と彼女の頭を撫でる

一方風太郎の方には四葉と二乃が向かい

彼の健闘をお祝いしている まんざらでもない顔だが…。やはり実感はない様子

あそこまで緊張していたのに渡されれば呆気ないと言った感想だった

「上杉さんが二位で お兄さんが一位」

「これならパパも文句は言えないわね」

「しかし…。すごいね二人共さ フータロー君も惜しかったね」

「結果は結果だ…。それで終わり」

「フー君あれだけ緊張してたのにねー」

「忘れろ…。と言うかその恥ずかしいからその呼ばれ方…。」

ふふ…。意地悪そうに笑う二乃にやれやれと言った様子で風太郎は未だ腰に三女が抱き着く

兄に手を伸ばす

「立てるか…。不良少年」

「問題はないぜ がり勉少年」

多少はトラブルがあったが…。今回の兄弟対決は幸太郎に軍配が上がった

もう二度とこんな勝負を兄と出来る機会はないだろう

悔しい気持ちはあるが…。やはり兄は自分が思っていた以上に勉強が出来る不良だった

「三玖さーん そろそろいいですかー」

「あつー ごめん／＼／つい嬉しくて」

「ふふ…。良かったね コータロー君」

「おう…。一花もおつかれさん」

「幸太郎君…。おめでとうございます お疲れ様です。やはりあなたは不良ではなく

正しい人物です…。これでみんなも分かってくれる筈です。」

「まあーうん…。全国だしな…。他の奴らも嫌でも名前知るだろうな

五月もおつかれ…。下田先輩に成果見せてやれよな」

「はい…。今の自分の成果をあの人にも知ってもらおうと思います…。」

少し緊張はしてしまいますけど…。」

姉妹たちも70点代をキープし無事に自分自身に課したノルマをクリア出来ていた

流石に二人には見劣りするがそれでもあの頃と比べれば…。頑張りはきちんとして成果として出ている

「さて…。今日はそのまま帰るか 幸太郎はどうする?」

「っと 風太郎君よー ちっと付き合えよ…。連れて行きたい場所があるんだ」

「へえーお前がな珍しいこともあるもんだ」

各々成果を教え合えばあとは解散と相変わらず風太郎はそういう

所は淡泊な青年だ

帰ろうとする弟の肩に手を乗せると

如何にも絡まれてる学生と絡んでいるヤンキーと言う絵ずらに見えてしまい 二乃は口元を抑える

『笑ってはいけませんよ』と注意されるがやはり髪色の都合上そう見えてしまうのは仕方のない事

相手が二乃なら幸太郎は何も言わない…。

何処に連れて行かれるのか…。

模試から解放され後はあの父親に報告するだけ…。別段忙しい訳もなく

断る理由もない…。幸太郎に手を引かれ風太郎はその場所まで連れて行かれる

姉妹たちも目的は同じ 共に同行を開始する…。

「はい 着いたぞー」

「つて…あいつらのアパートじゃねーか」

「そのツツコミも懐かしいなー 五月開けてくれ」

「はい…。二人共入ってください」

「今更遠慮はしないけど…。一体何のようだ？」

連れてこられたのは中野姉妹が住むアパート

先回りしていたのか…。中から五月が顔を出す

扉を開け二人を中に案内

何故か強引に連れてくる兄やニコニコしている五月に不信感を募らせる

この二人は何がしたいのか…。考え込む間に 彼はリビングまで連れて行かれ…。

ぱーん ぱーん

大きな音が耳を刺激する

突然の事で風太郎は目を丸くし辺りを見回す

中には既に待機しているのか クラッカーを持つ 中野姉妹と御呼ばれしたのだろうか

須藤真弓まで笑顔で風太郎を出迎える

『上杉風太郎 お誕生日おめでとう&全国学力模試突破お疲れ様でしたー』

「た 誕生日…。 おめでとう？ 俺のは少し前だぞ」

「まあ…。 実は前から全員で企画してたんだ…。」

模試も近いからって一花の提案で今日に変更してな」

「お前…。 どうりで家での時は様子がおかしかったのか…。」

「ああー気づいてたのか」

「兄弟だからな…。 流星にわかるさ」

ここで種明かし

元は15日に行われる筈だった風太郎のお祝いだが

模試も迫る中で気を緩めれば…。 本番での成績にも関わるとして

一花の提案で今日まで全員で黙っていた…。 家での誕生日会も普段と違い

『はいおめでとうー』と軽い返事で終わり 風太郎は少し違和感を覚えていたと話す

結局今日まで何事もなく…。 自分の思い違いとして頭の隅に追いやっていた…。

得意げに笑う兄にため息の風太郎…。

四葉が近くまで歩み寄り…。 彼の背中を押し

中央まで連れてくる

「次はなんだ…。」

「上杉君これを」

「フータロー何時もありがとう」

「フータロー君…誕生日のお祝いだよ」

「上杉さん…。お疲れ様！」

「はい フー君受け取って」

「風太郎さん！ おめでとうございます」

「お お前ら…。 おっおう あり ありがと」

「上杉さんがありがとうって言った！」

六名の女性陣からプレゼントと言葉を貰う

戸惑いを隠せないが…。 思いが籠ったそれを受け取らない選択は
なく

顔を伏せながら小さく口からお礼の言葉を告げる

普段は見れない…。 彼の貴重な一面に四葉は大はしゃぎ

二乃も渡せて満足と言った顔で風太郎に熱い視線を送っている

彼らの姿に幸太郎は感無量と言った表情だ…。

と…。 ここで急遽参加した 須藤真弓はある事に気づく

「先輩は…。 風太郎さんにプレゼントあげないんですか？」

「そう言えば…。 幸太郎 くれ用意してんだろ」

「おっと…。 忘れるとこだったー」

「ゴータロー君も抜けてるね…。 ある意味で君らしいかな」

「はいはい…。 えっと鞆のなかに…。」

真弓に言われ 鞆の中を漁り出す幸太郎は…。 用意していた弟への
プレゼントを探し始める

何処だーと中を触るが 確かに準備した あれが 入っていない
目で確認しても…やはりそれは見つからず

幸太郎は模試の答案を渡される直前のように顔は真っ青になって
いる

「すいません… 家に忘れてきました… 本当に悪い いや本当に
ふははは…笑えねー」

「ええ：お兄さん あれだけ楽しみにしてたのに」

「本当にあんたは：ある意味期待を裏切らないわね」

「先輩：気抜きすぎですよ」

「準備はしてたんだ：ちゃんと包みにもいれてさ」

「それなら朝：お前の机に置いてあるの見たな：」

「幸太郎君：色々な意味で台無しになるところでしたね」

「コータロー：。」

「いやー：模試で緊張したんだよ：。」

言い訳のしようもない

肉親である彼がプレゼントを忘れた：。下手したら風太郎にバレていた可能性もあった

無事に行えたとは言え：。彼も少々気を抜きすぎていた

両の手で弟に謝罪『まあ：。帰ればあるし いいよ』と彼はあまり気にはしていない

「あまり：。いじめないでねー コータロー君も気を張っていたんだし」

「一花さん：。ありがとう」

「ふふ ファン一号くんは大切にしないと」

「別にコータローを責めてるつもりは無いよ」

「そ そうです だから幸太郎君も拗ねないでください」

色々と気にしがちな彼は少しテンションが落ち込み

一花はそれを見逃さず直ぐにフォローに入る

自分に正直になった彼女は本当に抜け目がなく

彼女の真意を知る二乃は『うわー』と声を出す

「それで開けて良いのか？」

「ダメです：。上杉さん お家まで秘密なので」

「お前のは：。予想がつきそうだけどな」

「おーっと 何の事かわかりませんねー 取り敢えず家まで開けてはいけませんよ」

「今開けたら：。持っていくのも面倒だしな」

プレゼントは帰ってからのお楽しみ

中身は一体何なのか……。興味は尽きない……

その後は軽い誕生日会と模試お疲れ様会も開催された
今まで全員勉強漬けで気を張っていた

今日くらいは息抜きもいいだろうとテンションを上げている

「はあ……」

「先輩もいい加減機嫌をなおしてください」

「兄として最低だなーと」

「兄もそうですが……。家族のは大切ですからね」

「和之か……。あいつの誕生日 今年は祝ってやるか」

「兄もきつと喜びますよ」

「あいつは今……。一人暮らしなんだよな？」

「はい家からだと大学通えないのでアパートを借りてます 確か先輩には伝えたよ」

「あつ……メール見るの忘れた……。和之に謝らねーとな」

「次いでに 今回の報告もしましょう 流石先輩 一位は凄いですよ」

「真弓ちゃんもな……。 全国で10位だぞ」

勉強が得意というのは嘘ではない

この少女須藤真弓は全国学力模試で十位の成績を収めている

今ここには全国 1位 2位 10位というハイレベルな人間が集まっていた

「真弓……。 あんた頭良かったのね」

「真弓に裏切られた……」

「須藤さんはこっちの味方と思っていたのですが……」

「えーつと 何て答えれば良いでしょうか……」

信じていた友人は遙か彼方の存在と分かり 姉妹は距離を開ける
呆れ気味の真弓だが……。 笑顔は崩さない この楽しい空間の中に
彼が溶け込んでいる

それが彼女にはとても嬉しい 彼女たちが来るまでは彼はずっと
一人で戦っていた

半年前の出会いが彼を変えた…。嬉しくあり少々焼けてしまう

「なー真弓ちゃんつてさ 何でそこまで勉強頑張るんだ 元が良いんだしさある程度でも」

「頑張らないと…。先輩に追いつけませんから…。それにあの人も勝てませんから」

「俺に?…まあそれは置いて…。あいつに勝てる人間はいない…。今回の模試にあいつがいれば俺は負けてた」

「坂下先輩…。少し怖いですからね…。時折何を考えてるのかも見えません」

「俺は今でもあいつが何を考えているのかわかんねーよ…。」

「坂下先輩…。何処にいるんでしょうね」

（お隣ですとは口が裂けても言えねーよ）

彼女が目指すのは彼の背中…。本人は全くその意味を理解していない

この少女は彼にとっては親友の妹で大事な後輩…。気持ちを伝えるに限りこの関係は永遠に続く

須藤真弓はそれを理解しながら彼の傍で笑顔を振りまく

とても痛々しく…。切ない…。

一方その彼は真弓が話した…。坂下先輩 事現 雨宮紡木の事を考えていた

苗字を変え隣に住んでいるなどこの後輩は知らない

幸太郎もここで過ごす中で彼女と出くわしたのあの一回のみ

大学に通っているのかも教えず去ってしまい何も知らない

それに関して言えば今も昔も変わらないと何処か皮肉交じりに彼は口に出していた…。

――

――

――

「じゃ…。そろそろ帰る 真弓ちゃんも近くまで送って行くから」

「ええー大丈夫ですよ」

「後輩を一人で帰したって和之に知られてみる…。俺が怒られる」

「あれからも須藤先輩とは連絡を取っているんですね」

「仲直りしたしな…。元から喧嘩する理由もなかったし…。」

「きつと彼も喜んでくれます。あなたの事を大切な友人と話しているんですから」

「まあ…。ぼちぼちやっていくわ…。じゃ。お前らもお疲れ」

「今日は…。そのお疲れ帰るぞ…。」

「みなさんお招きいただきありがとうございます。さようなら！」

時間が経過

そろそろ上杉兄弟も須藤も家に帰宅をする

いつまでも居て…。あの父親に知られでもしたら。言葉には出さないが無言の威圧は発しそうで

風太郎も幸太郎も顔を会わす事を憂鬱に感じていた…。

ガチャリと玄関を開け外に出る…。

「おや…。凄い大人数だね。五月さん」

「げっ…。」

「誰だ？」

「えっ…。そんな」

外に出た一向はある人物と出くわした

長い髪を一本の束にしラフな格好で手にはレジ袋を持つ女性

噂の雨宮紡木だ…。

露骨に嫌な顔をする幸太郎と全く面識のない風太郎

そして彼女の顔を見て目を見開く須藤…。

雨宮の存在に気づいた五月も顔を出す

「こんばんわ。紡木さん…。お帰りなんです。お疲れ様です」

「ありがとね。五月さん…。侘しい独り身だからね」

「っ……………」

「あぁー。この方は隣に住んでいる。雨宮紡木さんと言って女子大生の方です」

「どうもこんばんわ…。学生諸君…。私は雨宮紡木だ よろしくね」

「あぁはい…。上杉風太郎です」

「?君は…」

「上杉幸太郎です はじめまして」

「えっ 幸太郎君?」

「コータロー?」

まるで初めて会ったかのような素知らぬ態度

白々しいにも程がある…。ある意味では好都合と幸太郎は

強調するように大きな声で雨宮紡木に挨拶をする

彼の姿ににやりと表情を変え 右手を差し伸べ握手を求めている
が彼はそれを拒否

ここままで彼が他人は拒絶する姿に五月も三玖も困惑している

「あつはは…何か嫌われてるね…よろしくね

上杉幸太郎君 風太郎君

それと君は…」

「わ 私は…その 須藤…須藤真弓と言います 紡木さんと言うんですよね」

「うん…。初めまして…小さなお嬢さん」

「先輩…すみません…。私先に帰ります」

「真弓ちゃん!…。っ じゃさいなら」

「おい 幸太郎—— 真弓—— どうしたんだ急に!」

怯えたように彼女の顔を何度も見る須藤真弓は自分の名前を言い
終わると彼らに別れを告げれば走り去って行く

彼女が逃げ出した理由を知っている幸太郎はそれを追いうよう走り去る

状況が飲み込めない風太郎は渡されたプレゼントを持って彼らを
必死に追っていく

その光景に更に雨宮紡木の頬が緩む

「ごめんねー何か…。」

「こちらこそすみません」

「良いってそれでさ…。なんの集りだったの？」

「えっと実は今日全国学力模試の答案の返却日だったんです」

「ほほー四葉さんは何位だったの」

「企業秘密です…。」

「残念…。」

「でもさつきは走って行った　上杉さんは2位でお兄さんは1位何ですよ

須藤さんは10位とハイレベルです」

「凄いねー彼ら…。頭が良いなんて　生きていくのがさぞ辛い」

「辛い？」

「だってさ…。みんなから期待されるわけじゃん…。私なら適当にすませるな

つとごめんね　終えたばかりのあなた達に言う事じゃないねー

じやーまた今度」

「はい…。紡木さんおやすみなさい！」

謎が謎を呼ぶ中で…。ミステリアスな紡木は手を振って隣の部屋へと入って行く

中から　ゴロゴロガシャンと大きな物音がするが…。隣に住んで数ヶ月慣れたものだと目を細める

「それにしても…。須藤さんの様子と幸太郎君の様子が変でしたね」

「五月ちゃん何かあったの？」

「いえ　今しがた…。紡木さんとお会いして」

「雨宮さんがいたの…。コータロー君は」

「何やら怒っていると云いますか…。機嫌が悪そうでしたね

須藤さんも顔見た途端に帰ってしまいました」

「コータロー君…。やっぱり…。」

「一花？…。何か知ってるの」

「えっ…。別に　さあー部屋の中片付けようかー」

様子がおかしいのはあの二人だけではなく

姉妹の姉も同じだ……。彼女はあの日雨宮紡木からある意味で最悪な呪いの言葉を授かってしまった

それゆえか彼女もまた雨宮紡木と会う事を嫌っている

元から何処か隣人である彼女を不気味に思っていた……。あの人を見下したような目と

知り尽くしてるかのような態度がどうも苦手なのだ……。

三玖と五月は顔を見合わせるが……。答えは分からず仕舞い

後にこの出会いが修学旅行で大波乱の一端を担う事を誰が予想出来ただろうか……。

――――

――――

――

「真弓ちゃん！」

「ひっ……。」

「俺だよ……。」

「先輩……でしたか……。ごめんなさい」

「俺の方こそ……。黙ってて悪かった」

「知ってたんですか……。坂下先輩がいること」

「3年になってすぐに出くわした……。余り詳しくは言えないけど今は雨宮だ」

「そうなんです……。すみません 楽しい場を壊す形になって」

「悪いのはあいつだ……。さっさと行けばいいのに何だよ」

「あつはは……。私が悪いんです……。」

「まだ苦手なのか……。あいつが」

「やっぱり顔を見えると……。足が震えますね」

「あいつは無意識に殺意飛ばすから……。意味分かんねーよ」

（それは先輩……の周りに女性がいるからですよ）

中野姉妹のアパートから逃げて行った彼女にやっと追いついた幸

太郎は肩を叩く

びくつと体を震わせ声を出す彼女……。その瞳は恐怖からか怯えている

何時も元気で泣きごとを言わない彼女をここまで追い詰める事が出来る人物は

彼女……。雨宮紡木ただ一人だ

幸太郎は詳しい理由を知らないが……。幼い頃から真弓は紡木を苦手とし

二人で須藤家に遊びに行っても真弓は何時も兄の後ろに隠れ彼女を警戒していた……。怯えていたと言えば良いのか最早蛇に睨まれた蛙

彼女自身は、何をされたわけでもないと言って済ませるが……。どうにも納得がいかない

「あいつに何をされたんだ……？」

「何もないですよ……。先輩はもう帰った方が良いでしょう。風太郎さんが待っていますから」

「うう。確かにけどさ。真弓ちゃんの怯えようを見るとさ……。苦手っただけじゃ済む話じゃないだろ」

「本当に大丈夫ですよ……。先輩……また明日会いましょう。それじゃおやすみなさい」

「っ…………。何かあれば相談しろよ……。後輩の事くらい俺は面倒見れるから」

自分を奮い立たせ何とか彼に別れの言葉を告げれば

家の立ち並ぶ住宅街まで歩いて行ってしまおう

『一人にしてください』と背中が訴える……。下手な慰めは逆効果

何も出来ない歯がゆさを噛みしめ……。幸太郎も自分の家に帰って行く……。』

『君が……。和之の妹か……。普通だね』

『あの……。私は』

『ねえ……。もしかしてさ。幸太郎が好きかな？』

『!?』

『でもダメだよ…。お前は…。幸太郎にはなるべく近づくなよ 和之の妹で良かったね』

『…私は…。』

『ああー泣いちゃった…なんでー嫌だなー これだから子供はさ』

(先輩…私はやっぱり…。坂下先輩が苦手です あの人を見ると足が竦みます)

ある日の記憶が須藤真弓に暗い影を落とす

彼女が何故彼と共にいながら一定の距離を保つのか…。その本当の理由を知るのは

彼女と雨宮紡木の二人だけ…。

――

――

――

「ほれ…。誕生日おめでとう 風太郎」

「ありがと…。これは本か？」

「まあ大したもんじゃないさ…。」

家に戻れば風太郎は先に待っていた

追いかけてようにも体力馬鹿の幸太郎とそれと同格の真弓だ

どうあがいても追いつけない荷物を持ってなくても不可能だと彼は諦めた

その後暫くして妙に落ち着いた幸太郎が帰宅

面倒には巻き込まれないよう詳しくは聞かず幸太郎も弟の配慮に感謝しつつ

置き忘れた例のあれを手渡した

綺麗にラッピングされたそれは厚い本にも見える…。同時に棒状

の何かも入っており

不思議に思う風太郎は取り合えず中を確認した…。

「こ　これは…。」

「お前が欲しがってた…。参考書だ…。悪いなそんなくらいしか思いつかなくて」

「いやいや…。中々手が伸ばせなくてさ…。うわーやったー」

「お兄ちゃんが大はしやぎしてる…。」

「それにさ…。このボールペンも」

「これはお前が今年くれたプレゼントのお返しだよ…。二つとも大事に使えよな」

「勉強道具一式か…。最高だな」

「それとな…。一年の頃と二年の前半までに俺が使ってたノートだ色々為になるだろうし」

好きに使ってくれ」

「幸太郎のノートとか下手な教科書より使えるぞ…。」

（それは幸太郎お兄ちゃんが捨てるの忘れた奴だ…。）

色々トラブルもあったが…。

無事に幸太郎は弟にプレゼントを渡し

予想以上に喜んでくれておりあげた本人も笑顔を浮かべる

「では…。今日は全国一位と二位を記念して　二人の好物をつくるよー」

『いえーい』』

こうして上杉風太郎の誕生日は無事に幕を下ろすのだった…。

第八十三話 不良少年と彼らの今後

「見事と言う他ないね…。」

ギコギコ

「君が十位以内に入ったとしても勝つつもりで挑んだ、全国統一模試、5位というのは僕にとつて願ってもない順位だ。まさかその上をいかれるとは…。それに先輩も宣言通りに…。一位と二位おめでどう…。さて、もうすぐ修学旅行だけど」

「ちよと待て…。」

「どうした風太郎…。ブランコ嫌いか？」

「そうじゃない…。何故俺らはこんな昼間から公園でブランコを漕いでいるんだ」

「俺は漕いでないぞ」

「ははっ…。昨日の敵は今日の友…。これが青春なのかもしれないね」

「武田が青春を謳歌してる」

「ひどいですね…。僕だって」

「帰る…」

その一言と共にブランコからジャンプし前に着地する

危険な行為と親御さんが騒ぎそうだが…。どうにもこの空間が彼には苦手なようだ

着地をしても何処か納得のいかない顔で首を傾げる

弟は何時の間にブランコでジャンプする楽しさを見出したんだろ…。

因みに俺は近くで突っ立ってる…。ブランコに三人は乗れん

やろうと思えば風太郎の後ろに乗れたが高三にもなって流石になると躊躇った

用事がなければ帰って勉強だ…。

模試が終わってもぶれない弟に関心するしかない…。

もしもこいつがベストコンディションだったらどうなっていたか同率1位なんて快挙も合っただろうな

まあ…。用事が無ければここには来ない

武田に呼び止められ…。足を止める『ご到着だよ』と彼が公園の入り口に目を向ければ

似つかわしくない高級車が停まり…。ガチャリと開かれたそこから あの男が顔を出す

無表情は何時もと同じ…。少しはにこやかに微笑んでも罰は当たらねーんだよ…。

「まずは武田君…。全国5位おめでとう…。出来の良い息子を持ってお父さんも鼻が高いだろう。医師を目指していると聞いた。どうだろうか君のような優秀な人材ならば…。」

本人の意思はある程度あっただろうが武田も災難だったな

理事長とこの男の板挟みか…。実は一番にプレッシャーと戦っていたのはこの青年かも知れん

彼に労いの言葉をかけつつ 自分の経営する病院への推薦も考えるとこの男は口に出す

一瞬俺の方に視線を向けたが…。理由を知ってるくせに嫌がらせか…。

この話を武田は受けるのか…。大人たちなら

首を縦にふるだろうが…。武田は違った…。ベンチに座る彼に深々と土下座をし

その誘いを自ら断る…。中野先生の微かな表情の変化、そりや驚くだろうな

「申し訳ございません…。大変光栄なお話ではありますが…。僕の進路についてはもう少し考えたいと思っています。」

「そうかい…。良い返事を期待しているよ」

武田には夢がある…。

こいつとは中学2年からの交流があるが…。俺がそれを知ったのは数日前の模試での時だ

俺が知らないだけで元から持っていた物なのか…。その後自分で宇宙の壮大さに感銘を受けたのか

本人にしか分からない事だが……。きつとあの頃の俺と武田では夢を語り合う何て

先輩後輩らしい事は出来なかつただろう……。こいつもいい方向に変わったな……。

彼の話が終われば切り替え……。無表情のまま俺たちの方に視線を動かす

たんたんと口を動かす

まじでこの人口ボットなんじゃねーかな……。

「上杉君……。」

「はい」

「君に……家庭教師の仕事を再度頼みたい」

「えっ……。」

「報酬は相場の5倍アットホームで楽しい現場だ」

「よく知ってます」

「また君に依頼するのは正直不本意だ……。本来プロですら手に余る……。だが君にしかできないらしい。やれるかい？」

「勿論！言われなくてもやるつもりだったんだ……。給料が貰えるなら願ったり叶ったりですよ」

「それと……。やはり君一人では不安も負担もあるだろう……。知り合いに優秀な人材がいれば、『誰か』を補佐としてつける事を許す」

「っ……………へいへい」

「一人います とっておきの人材が！」

本当に嫌味な男だな……。

雇うなら雇うとちやんと言ってくればいいのに何故わざわざそんな……。遠回しな言い方しかしないんだ……。

けど、認められた事は素直に嬉しく思える。そしてとっておきの人材を風太郎は知っている……。その男は既にここにいてと言えば

『ほー』と無関心な声と共に俺を見下ろす……。相変わらず高校生相手に大人げないね、

「では……。当初の予定通り卒業まで……。」

「あつ悪い……。風太郎」

「わかってる…。そのことで一つお伝えしたいことがあります
成績だけでいえばあいつらは、もう卒業までの力を身につけていま
す」

「頼もしいね…。でも何かあるんだね？」

こくりとうなずき風太郎は一呼吸をあげる

「それでいいと思ってた、だけど五月やこいつ武田の話を聞いて思い
直しました、次の道を見つけてこの卒業俺は、あいつらの夢を見つけ
てやりたい」

「上杉君…。」

夢を応援しそれを全力でサポートする男は俺だけではなかった

弟もまたその答えに至った…。昨日家に戻り姉妹からのプレゼン
トを空けながら

ふとこいつは言いだした『あいつらは将来何がしたいんだろう』と
な…。

一花は先に動き…。自分のしたい事を見つけた

五月もまた進路希望に書いたあの夢を自分なりの方法でたどり着
く事を選んだ

武田だつて宇宙飛行士を夢見てる…。

全員が全員…。きつと夢を持つはずだ だから 風太郎はあの子
達が全員

やりたい事をするまで見守って見るのも悪く無いと…。顔を伏せ
ながら俺に話してくれた

あれだけ他人との交流を拒んだ風太郎は変わった…。

こいつも一步を踏み出した 想定外な事なのかあの男は黙った

まあ…。言われっぱなしも性に合わないのだろう…。一度伏せた
顔をあげると

物凄い殺気をゴゴゴゴゴゴと漂わせ風太郎に詰め寄る

「どのような方針を取ろうが自由だ…。間違っているとも思わないし
ね。だが…。忘れないでほしい。君たちはあくまで家庭教師と補佐
だ、娘たちには紳士的に接してくれると信じているよ」

「も…勿論です。一線を引いています！俺は！俺はね！」

「まあーぼちぼちに…。その威圧やめてもらえますか」

本当に大人げない…。紳士的とは…。当たり前だろ

俺たちはちゃんと分別着けて接してる。向うが色々世話焼いたりなーんか意味深な事言ってきたり

ややこしいんだよ…。この人の前で一花の事でも話せば俺は解剖されちゃうな

「ふん…。君たちへの話はこれで終わりだ…。武田君送っていいこうか？」

「いえ…。僕は自分の足で帰ります。では今日のご足労いただきありがとうございます。」

最後まで爽やかな男だったな

また会おうと俺たちに言葉を残し彼は去って行く。お前もお疲れ様武田

今度は先輩後輩じゃなく…。普通に友人として接しようぜ

残された風太郎も俺を連れさつさとこの場から撤退を開始するが『待ちたまえ』と威圧混じりの声が三度捉えてくる

そつちの方向を向けば江端さんが車に乗るよう促している

「娘たちに知らせるといい」

「えっあの…」

「乗リたまえ上杉君…。」

「あ。ありがとうございます。お父さん」

「君にお父さんと呼ばれる筋合いはないが？」

「はっはい」

まるで小動物を威嚇する大型動物。振り返る事はなく逃げ込むように車に乗り込む風太郎

どれだけ父と呼ばれるのが嫌なんだ…。俺も勇也さんが五月に『お父さん』と呼ばれた時も

似たような反応だった…。ここまで殺気は込めないぞ…。

へーいへいと俺も車に乗り込もうとするが中野先生に止められた
ぎろりと睨むが無表情相手だ効果はない

「なんですかー俺だけ歩きですか」

「君に話がある…。」

「車の中じゃだめなんですかー」

「弟君に知られたいなら…。僕はかまわないけど」

「わかりましたー風太郎ー少し待っていてくれ」

「おう…。早く来いよ 気まずいんだ」

「へいへい 江端さん…。弟を頼みます」

「ほっほほ お任せください」

江端さんに任せもう一度公園ベンチまで戻る

「話って何ですか？」

「幹雄君が帰国した」

「えっ…。確か何処か外国ってみずき姐が言ってたような」

「イギリスだよ…。休みを取って先ほど空港に着いた」

「ほ…。言いましたか俺の事」

「勿論だ…。予想以上だと驚いていた」

2年程日本から去っていた坂下幹雄さんが…。ついに日本に戻ってきた

ある意味で今回の元凶の一人だが 何処か憎めない

兄のように慕ってるってのも大きいけど みずき姐の旦那と言うのが大きい

先日もある人は『元気だよー』 会いたいとは言ってはいないが彼の事を話す みずき姐は何処か寂しそうにも思えた
……………

案外早くに再会出来そうで俺は安心だ 等分愚痴は聞かずに済み
そうだし

恩人であり 俺に宿題を課した彼曰く 今回は意外だったと

10位前後で止まると予測していたと教えてくれた

あのまま。まともに勉強しなかったら…。そこにはいれるかも不

安だっただけだよ」

「まあ……。あんな本気は10年に一度ですよ」

「少し誇ったらどうだ……。君は曲がりなりにも高校生で一番の人物だ」

「俺よりも風太郎の方が数段凄い……。腹を壊さなければ一位確定だ」

「それは結果論だ……。彼は二位。それは変わらない」

「本当にアンタは結果しか見ねーんだな……。母さんの時と同じだ」

それで話はこれだけか……。悪いけど。俺は自分の足で行きます」

この人は正しさと……。結果しか見ない……。

どんな時でも言い訳は許さない自分にも厳しいから扱いに困る
どれだけ勉強しても得た順位以上の評価はしない……。

本当に嫌になる……。母さんの事を思い出せば、断りを入れ自分の足
で向かうと意地を張り、足早に去ろうと試みた……。

『待ちたまえ』……。再び彼の声が俺の足を止めた

嫌々ながらも振り返り会話を再開する……。

「君には今から幹雄君と会ってもらおう……。」

「はあ？。五つ子はどうすんだよ」

「上杉君がいるだろう……。君は補佐だ……。いた所で変わらない」

「あの一応は成績一位なんですけど？」

「それはそれだ」

「うわー。本当にあんたが嫌いだ」

「お互い様だよ……。拒否権はないよ……。幹雄君も水木君と会うのをや
めてまで君を選んだんだ」

「えっ……。何で。おかしいだろ。みずき姐の気持ちはどうなんだよ！

2年もおいてさ」

「彼女も承諾したよ」

「ふざけんな……。俺なんかの為に時間を使うな」

どれだけみずき姐が幹雄さんと会いたいと思っているのか……。

この人は知らないのか……。何時も何時も元気に周りを笑顔にする傍らであの人は

本音を言わず耐えている……。親が離婚までして妹と離れ離れなんだ

それに加えせつかく戻ってきた旦那とも会えない……。何でだよ

「くっ……………」

流石に怒りを抑えられない……。

勝手に俺の事を決めて 周りを巻き込んで

巻き込まれた人の気持ちも考えず……。

この人は何も変わっていない

なんでそんな無表情でいれるんだよ……。仮にもあの人の夫だった

男だろ

くそ……。自分の事だから余計に腹が立つ

「駄々をこねるな……。これは君の主治医としての責任だ 上杉幸太郎

君 君には彼と会ってもらおう」

「つ……………わかったよ 五つ子は風太郎に任せて俺は幹雄さんと会

います」

「理解して貰えて助かる……。」

「みずき姐が我慢してんだ……。俺だってな」

「背伸びとは子供だね……。」

「うるさい」

「……………」

背伸びなんて理解してる 大人ぶってるなんて俺が一番分かってんだ

「それと……。君が乗る車はこれではない……。向こうに乗ってもらおう」

これで止められるのは何回目だ？

車に近づく前に男性は別の方を指さす。そこには一台のオープンカーが停まっております。

一人の女性が運転席に座りこつちに手を振っている……。その女は紛れもなく……。雨宮紡木だ

「おい、どれだけ嫌がらせすれば気が済むんだ」

「ある程度は事情は知っている……。ただ娘たちのアパートから幹雄君の場所まで君を送る時間がない

僕も仕事がある……。水木君もこれからオペだ。そこで紡木君に依頼した」

「事情知ってるのに……。良く俺を乗せれるな」

「苦情は受け付けない……。一度家に戻って、荷物を纏めなさい」

「えっ?! マジで何をさせるつもりなの」

「後は幹雄君に聞くと良い……。では、よい旅を上杉幸太郎」

よい旅を? 荷物を纏めろ?

周りの動きは、俺の予想なんて遥かに超えていた

呆氣にとられつつも今さらどうこう、できる状況ではないと肌で感じ、先に待つ風太郎に軽く説明をしに向かう

「風太郎……。悪いな、事情が出来た。お前だけ行ってくれ」「えっ」

「端的に言えば、あの手紙関連だ……。会わないと行けない人が来てるんだ。詳しい事は五つ子にも電話で伝える。だからあいつらにはお前から復帰したと話してくれ」

「わかった……。でも隠し事はするなよ」

「了解……。じゃー江端さん後はよろしくお願いします。」

「承りました……。」

風太郎を乗せた高級車は中野姉妹の住んでいるアパートまで向か

う間……

あの男と同じ空間とは……。俺でも耐えられねえ。窓の換気してもあのオーラは消えんだろう

目指す五つ子の家まで苦行だが……。生きてたどり着け

大丈夫だ、俺は更に地獄だから……。……はあ

「弟よ……。あとは任せたぞ」

「任されたねー弟君もさ」

後を任せ……。さて自分の現実に向き合うべきだ

嫌がる俺をこいつは愉悦に満ちた表情で眺め、軽口も合わせ俺に言葉を投げかける

「つ……。……何でお前なんだよ?」

「詳しい話は幹雄義兄さんがしてくれると思うから、先ずは幸太郎の家に向かおうか」

「お前は何を企んでいる?」

「別にーそれと 昨日はごめんねー知らないふりして」

「へいへい、たく猫かぶりが……。……。」

悪いとは微塵も思っていないだろ。坂下とは、そういう奴だ

適当に流そうにも向こうからの言葉は、止まらない。

「人の顔色窺っておべっかするのは大変だよ。幸太郎も良くこんな面倒な事を今まで続けて来たね」

「俺はそんな事思った事はねーよ」

「でもさ……。その見返りが集団でのいじめで君は精神ストレス障害だ……。最高だね」

「うるせー……。つうかお前何時の間に車買ったんだ?」

本当にこいつは、触れられたくないところを的確に抉って来やがる。遠慮やそう言った類いの言葉や考えをこいつは持つておらんのか?しかもこの態度は基本的に俺ばかりに向けられる。

被害は少ないが俺の頭は痛くなってくる……。

「あの女だよ…。免許は持ってたから車レンタルで済ませた。本当に余計な事ばかりさ」

「お婆さんとまだ喧嘩してるのか？」

「なーんだ。幸太郎はやっぱり…私が心配なんだね？嬉しいなあ」

「はあ……………。疲れる」

こいつが目的地まで同伴する。始まる前から体は拒否反応だ
全く前途多難すぎる。それに風太郎やあいつらが心配だ……………。

—————

—————

———

場所は変わり中野姉妹のアパート前

上杉風太郎は車から降ろされるとお辞儀をした

何も言わず中野院長は車を出し…。今の今まで物凄く気まずい空間

外の空気が美味しく感じるのはきつと不思議な事でない

「上杉君！」

彼が最初に出くわしたのいつも兄に付き纏う中野姉妹の末っ子

中野五月だ…。私服姿で買い物中だったのか手提げ袋を持っている

父の乗る車から彼がおおりて来た事を不思議に思っている彼女に現状を報告

今後は正式な家庭教師として中野姉妹と紳士的な付き合いを続けていく事が出来ると…全部話すと要らぬ誤解を招くため、一部かいつまんで説明『変わらず家庭教師だ』と彼女に必要な所だけ抜粋して話した。余程嬉しいのか末っ子にはっこりと笑顔を浮かべており

風太郎も少しばかり込み上げてくるものがあった。

ここまで彼らは父から嫌われる対象で何かにつけて嫌がらせまがいなノルマばかり

今回も下手をすれば…。別の家庭教師が家に来ていた

せつかく家を出て5人で生活した意味もない五月は胸を撫で下ろす

「あれ？幸太郎君はどこですか？あと何故避けるんですか……！」

ただあの男の言葉を思い出し

彼は五月から一定の距離を保ちつつ前を歩く

そこまで心配する必要はないが警戒はすべきと肝に銘じているがこの子が普段から気にかける彼が不在なれば自然と話の向きも変わり始める。

彼女の問いに適当にあしらい流す風太郎も詳しくは、知らされていない。

「あいつは来ない 用事だつてさ」

「そ…、そうですか…。」

「露骨にテンション下がるな…。」

不在と知れば頭に生えたアホ毛もペタリと倒れ込む

実は本体はこれではなからうか、兄とはその話で良く無駄な討論をしていた

階段を上って行き、部屋の前まで来ると躊躇いなく扉を開ける

「なんだこれ…。」

目にしたのは普段のリビング…。なのだが何故か物で溢れており

一花の仕業かと『いらつしやーい』と挨拶をした長女を見るが

他にも荷物を運ぶ姉妹がいる…。犯人は別または全員なのかと頭を働かせる

「生活も落ち着いてきたし…。大掃除しました」

試験の反省会と思つたが…。やはり上手くは行かない

気持ちには彼も分かる掃除はふとした時にやっってしまう…。

それこそあの兄は全力で部屋の隅までと徹底っぷりでらいはも口をあんぐりだ

そんな我が家の大掃除事情を考えていると

二乃が目の前に現れる

ニッコリと笑顔で彼にもたれ掛かる様にするので…。風太郎はすつと距離をあけた

不満気だが…。意識はされてるとガッツポーズを取る二乃は

先日の誕生日プレゼントの感想を求めてくる

「あー…。アロマな！良いよなくアロマ…。ふんふんアロマね、人を選ぶが俺はうまいと思うぜアロマ!!」

「絶対分かってないでしょう…。」

「アロマはアロマだ…。」

「もう！ちゃんと教えるから使いなさいよね」

「おうお手柔らかに…。それと一花もありがとな。変わってるけどさ」

「それで買い物でもしてねー」

「その手があったな…。」

家に帰って開けはしたがアロマなんて使った事のない彼にはどうしろと

現在箱に閉まったまま机の上に

一花からはギフトカード…。自分や家族の為に使うよう言われ彼も納得した

一花の狙いはコータローだが…。フータローへのプレゼントでは負けたと悔しそうにする二乃

『こう言うのが一番だから』と彼女は二乃に軽く助言している

四葉も自分のプレゼントの感想を求めるがあれをいつの間につつたのか風太郎の疑問は尽きない

「どころでさ…。コータロー君は？」

「五月に聞いてないのか、何か用事らしい俺も知らん」

「そうなんだ…。彼からのプレゼントって結局何だったの」

「俺がずっと欲しかった参考書だ!?まさか買ってもらえるとはな」
「上杉さんのテンションが一気に上がったよ」

「何だかんだと言いつつ…お兄さんしてるね。彼も」

「うーん三玖もいないし…。勉強は無理そうだな…今日は帰るわ」

何だかんだ勉強が一番好きなんだと中野姉妹は実感した

あれだけ考えた結果が勉強道具一式と参考書とは

プレゼントとしては飾り気がないと本人はぼやいていたとか

風太郎は少し様子を見たあと…。部屋の惨状と全員がいない今勉強をしてる暇はないと

そそくさと家を出ようとする もう少しゆっくりしていくよう言われるが

父親から釘も刺されている 勉強以外で長居は無用だ

玄関まで逃げるように歩き

何とか脱出。何故ここまで気を張らないといけないのか…。

理由は複数ある…。ため息をこぼしアパート前で黄昏ていると

「隠し事の匂いがします」

ゴゴゴゴゴゴと背後からの威圧

扉の隙間から顔を覗かせる五月はどのオバケよりも怖いだろう

本人はあれだけ苦手としているがその手の仕事が向いてそうだと

父の事なのかとすぐ確信をつく彼女に兄がどれだけ彼女を避けよ

と必死だったのかやっとなり理解できた

中々口を割らない風太郎に五月は一つ提案をした…。

「ではこうしましょう…。あなたの隠し事を話してくれたら私も一つお話ししましょう」

「お前の隠し事って…。別に…。あー なら幸太郎の事でも良いか何で詳しいのかとか」

「そ それは企業秘密でお願いします あなた経由で彼に知られれば会わず顔がないので」

「?…。まあ他でもいいさ これもいい機会だし でも引くなよ」

「ええ!」

「俺さ モテ期来たかも」

「うわあ…。」

「まだ驚くのは早い 相手はあの二乃だ…。それともしかしたら四葉も」

「四葉もなんですか？」

「俺の思い違いかもしれない…。本人も応援するって言うんだけど何かそんな気が」

「自意識過剰では？」

「おい 俺はめちやくちや恥ずかしいこと言っただぞ それ相応の物をよこせ」

風太郎の隠し事とは…。

二乃からの告白と四葉との噂

前者は確定だろうが後者は彼女自身も否定し…。自分の恋を応援すると言っていた

でも何だかんだと五つ子と接して居る彼は彼女が嘘を言っているように感じた

流石に考え過ぎかとも思ったが兄は『何事も可能性を考慮すべき』と一言言っている

告白とそれに似た何かを暴露した彼は五月にも同じ恥ずかしさを味合わせようと

すぐに秘密を言うよう強要…。前提として 幸太郎関連を言うつもりは無く

風太郎が期待してる応えは帰って来ないと判断した。

ただそれ相応であると彼女も話す

「じ…。実は私にはもう一つの顔があるのです」
「は」

「誰にも明かせない…。ずっと秘密にしてましたが」
「ま まさか…。」

「私が！」

その突拍子もない 話に彼は思い当たる節がる

それはあの謎のレビューだ…。あの髪型は見間違えようがない
しかしまだ早い…。確信を得るまでは黙っておこう

「私がい！」

「私 五月探してくる―」

「あつ」

何と言う間の悪さだ…。

玄関からは四葉が五月を捜しに現れ…。咄嗟の事だが彼女は口を閉ざしてしまう

やっと事実が聞けると思っていただけにとても悔しい気持ちを味わう風太郎

今更聞ける雰囲気でもなく…。五月は顔を逸らしてしまう

不思議そうに二人を交互にみる四葉『お邪魔でしたか?』と反省中だ

「こいつが今…。」

「上杉君…。携帯が鳴っていますよ」

「そんな誤魔化しで」

「本当だ…。上杉さん ポケット」

「あつ……………」

聞きたい一心でもう一度確認しようとするがまた邪魔が入る

意識を逸らさせるための出まかせと思いきや…。本当に携帯は音を鳴らしており

普段は使わないこの機械に物好きな人物もいるなど…。彼は応答する…。

「もしもし」

『おう 風太郎そっちはどうだ』

「幸太郎か普通だな…。それよりお前は今どこで何してるんだ」

「幸太郎君からですか!」

「こいつ物凄い食いつきだな…。」

電話の相手は今日来れなかった 上杉幸太郎だ

自分が恥ずかしい思いをしている中…。電話の相手は悠長に電話だ

相手がわかれば途端に元気になる五月を見て風太郎でも彼女が兄をどう思っているか分かってしまう

『中野姉妹のアパートか好都合だ』と彼は勝手に納得している
三人はクエスチョンマークを浮かべ何が好都合なのかと風太郎は
聞き返す

すると予想以上の答えが返ってきた…。

『俺さ5月までさ 家に帰れないから』

『はあ?!はあああああ』

『……………耳が たくよ』

「え 幸太郎君はなんとやっているんですか 上杉君」

「待て待て…。あの父親から許可は出ただろ？ まさか何か言われた
のか」

『これは家庭教師とは別の話だ…。俺の事情でな…帰るのはそうだな』

5月の10日か12日辺りだな』

「まじでお前は5月まで雲隠れするつもりか…。理由は教えてもらえ
るか」

『悪いな…。他言無用なんだ…。そのうち話す』

「隠し事はするなって言った筈だろ！」

『だから伝えてるだろ』

「理由を言わないとかわんねーよ！」

『勇也さんには既に伝えてある…。お前にまかせつきりで悪い』

「はあ……………。面倒事じゃないよな」

『……………』

「無言をやめろ…分かった…。」

『はい…。弟君から了解も取れましたと…。 あとさ 五月と三玖達
を頼む』

「了解…。無事に帰って来いよ 俺が何されるか分からない」

「おう また来月会おう」

五月から秘密を聞くどころか兄が来月まで家にいないと衝撃的事
実に

風太郎は頭を抱える…。彼曰く家庭教師関連ではなく 父親から
の圧力でもない

純粹に彼自身の問題だと言っていた

電話が終われば五月が彼に詰め寄る　今から彼女達に説明と考
れば

今この場にいない兄を少しは恨む…。

「ごっほんどわざとらしく咳をする…。これである程度は心も落ち
着く

「えーつと…。幸太郎だけど」

「はい　なんですか」

「来月の12日までいない…。多分学校にも来ないと思う…。何処に
行くかは知らないけど」

「ええええええええ　お兄さん!?　何で転校の話は消えたんじゃない
んですか」

「俺が知るかよ…。急ぎの用事らしい　お前らにも謝って…。五月
?」

「何故ですか幸太郎君が電話に出ません…。メールも送っているんで
すが返事が返って来ません」

「ひいひいひい!」

「い　五月が壊れた!　お落ち着いて　上杉さんも怖がつてるから」

「幸太郎君幸太郎君幸太郎君幸太郎君幸太郎君幸太郎君幸太郎君幸太
郎君幸太郎君幸太郎君幸太郎君幸太郎君幸太郎君幸太郎君」

瞳に光はなくひたすらに彼に電話をし…。凄まじい速度でメール
を連続で送りつける

その姿に風太郎は…。背筋が凍りすぐに後ろに下がる…。

何度も何度もここにいない彼の名前を連呼する

何処から取り出したのかスマホをもう一台取り出せば

「まだ彼は日本にいます…。追いかけてみよう」

「ちよ　五月落ち着いて!　それに何でお兄さんの居場所が分かる
の」

「これは由々しき事態です…。誘拐の可能性も考慮すべきです」
「何でそうなの!?!」

「彼は来月の12日に帰ると言ったそうです　18日間不在
455時間28分39秒いないという事です」

「こういう時だけ凄く計算早くて怖いよー」

「ただいまーって…五月どうしたの？」

「三玖ーー！」

彼の居場所が何故か分かり 不在の18日間を高速で演算
流石に四葉もそれには引いてしまう…。

今すぐに会いに行くべきだと行動を開始するが…。まだ部屋の掃除も終わっていない

それに勝手に動けば彼も困ると必死に説得

タイミング良く三玖がバイトから戻ってくる

玄関先で四葉に抑えられる五月という物凄い絵ずらに困惑中だ

三玖の姿に五月は反応し 『今からすぐに追いかけてみましょう』と言
いだし始める

主語がなければ理解も出来ない 三玖は混乱する一方

「幸太郎君が18日間いなくなるんです！」

「えっ」

「いやいや あいつも用事だって言ってるんだよ」

「そうなんだ…。コータローいないんだね」

「はいですから！ 彼の居場所が分かる今のうちに」

「五月…。少し落ち着こう…。四葉も言ってるでしょ

大事な用事だったらコータローが困るだけだよ」

「しかし…もしもの可能性もあります 三玖は心配じゃないんです
か」

「心配だよ…。でもそれ以上にコータローを信用してるから だから
待ってようね」

「むむむ…。」

「あいつが戻るのには修学旅行より少し前だ…。班を決める前に戻れば
良いんだがな…。」

もし何かあれば…。電話するから」

「了解…。フータローもお疲れ様」

五月と違つて冷静に話を聞いている三玖

風太郎も何かあればとちゃんと説明してくれている

内容は伝えなかつたが…。自分たちをよろしく頼むと彼が言っている

その言葉だけで彼女は彼を信頼出来る…。

適当に流す事はあつても…。自分たちを陥れるような嘘を彼は絶対につかない

彼女はそれをよく知っているのだ…。

「でも…。相談はしてほしかったな」

「まったくです…。幸太郎君は何時も何時も」

「まあまあ…。それよりさ このスマホなに？ お兄さんの位置が表示されてるけど？」

「ああーえつとそれは…。では私は部屋の掃除に戻ります」

「ちよー五月 教えてよ」

「そつとしておこう」

(コータローのスマホにGPS付けてるって言えないよ…。)

何時ものように相談はなし

三玖が気がかりなのはそれである…。彼の相談なら何時だつて乗ると伝えているが

どうも本人にはその声は中々届かない模様…。五月も不満気だ

彼女の暴走は何度か見て来た四葉だが…。

彼を探すときに五月が取り出したもう一方のスマホの正体が気になり画面を眺める

そこにはアイコンで『上杉幸太郎』と表示され…。何処かの建物内部にいる事が分かっている

『あつー！』と我に返り 四葉からそれを取り上げ…。部屋に逃げていく

実は彼に隠れて…。彼のスマホには小型のGPSが内蔵してある

以前彼が中野六花に会っていた時にピンポイントで五月が位置を割り出せたのはこれが理由

姉妹と言えど秘密で…。三玖にしか教えていない

「はあ…。そう言えば三玖 その袋はなに？」

「四葉…。私が作ったパンだけど 食べて」

「えっ…。そ それはお兄さんの担当では」

「ダメ…。四葉が食べて」

「私が…。一体私が何をしたって言うの…。」

あむ： あれ？美味しいよ!!三玖」

普段は幸太郎が三玖の料理の実食担当だ

あの男は味覚が死んでるのに味にはうるさい…。そして三玖の手料理がとても好きで

気にせず食べている…。大事な時にいない 幸太郎に軽い呪詛を唱えつつも

がぶりと思いつきりパンをかじる…。どんな味だと覚悟した四葉だが…。

感じたそれはいたって普通のパンだ…。

こんがりしており一口だけと思いつつも気づけば全部食べていた

「ずっと特訓してた」

「なおの事お兄さんの担当じゃん！ お兄さんも来てればな」

「コータローがいないのは好都合…。」

「どうして？」

「コータローにはとっておきの舞台で食べてもらう」

「よし お兄さんがいない間は私に任せて！」

「なら味見担当よろしくね」

「あっ……………はい…お兄さん私頑張りますよ」

あつと何かを察した四葉今更断れない…。ぐぐと拳を握り気合を入れる

幸太郎が帰還する18日間の間

四葉の苦難に満ちた冒険が今始まろうとしていた…。

――

――

――

「はあ……………」

「でもコータロー君も急だねー何処に行くつもりだろう？」

「行先は上杉君も知らされてません…。 おっと」

「五月ちゃん…。 これ…この写真の子…。 まさか……………」

幸太郎が暫くは不在だと一花と二乃にも伝えた

『あいつも何で言わないかなー』と珍しく彼女も心配しており少々呆れ気味

だからと言って掃除をサボる訳にも行かない…。

服が入った段ボールを五月は持ち上げ…。 それを持って倉庫に向かう

幾つかの荷物を待つて移動する中 五月の持っていた

段ボールから一枚の紙が落ちる…。 彼女はそれに気づく事無く倉庫まで向かってしまい

残された一花が代わりにそれを拾い上げる

よく見ればそれは、ただの紙ではなく一枚の写真

後ろを確認すると日付は今から6年程前の物

目つきの悪い少年と一人の一花もよく知る少女が写りこむ一枚

その時期にこの少女や自分が関わった、男子生徒はあの少年

自然と彼 上杉幸太郎なのでは？ 一花はそう考えたが

よくよく考えれば、彼が今のように悪ぶる様になったのはごく最近となれば一人…。 彼と似た面影を持ち 自分達と年の近い人物

……………。

金髪のこの子は【上杉風太郎】だ

興味深そうにそれを手に持つ一花は京都の思い出を振り返る

「上杉君に言うタイミングを間違えました…。」

流石にこのまま黙っている訳にも行きませんね…。次こそは彼に事実を…。」

段ボールを物置まで運ぶ　その中には…。一着の服とカツラに加え白い帽子

上杉風太郎がかつて出会い…。再会したあの人物…。

【零奈】と名乗ったあの子が来ていた服と全く同じ物がしまつてあった…。

あの時　風太郎に彼女が伝えようとして秘密とは…。一体何か…。

「…。そしてこの事実を彼にはどう説明すれば良いのか…。

あなたには何度も嘘つきましたね　幸太郎君」

もう一方の段ボール箱には…。

黒い帽子とヘッドホンに加え短めのカツラが閉まっており…。

それは紛れもなく…。上杉幸太郎が探す　【中野六花】が身に付けていたものと同じ品…。

(あなたがいない…。この18日の間に…。私は答えを見つけます

上杉幸太郎さん…。)

5月におこる一大イベント

修学旅行…。行先は京都…。　上杉風太郎には所縁があり

中野姉妹にも深い関りがあるそこで…。上杉幸太郎を待つものは…。

第八十四話 不良少年と雨宮紡木

時刻は上杉幸太郎が風太郎に連絡を入れる数時間前まで遡る
赤いオープンカーに揺られ俺は荷支度を済ませる為自宅へと向
かっていた

運転している坂下は…。『ふっふーん』と鼻歌と何が楽しいのか俺
にはさっぱりだ

「ちゃんと前見ろよな…。」

「安心してくれ…。事故何てへマしないよ」

「この歳で死にたくない」

「ふふふ…。何度も自殺しようとした安い命だろ…。びくびくするの
は馬鹿らしいね」

「うっせーよ」

「あれー怒った?」

「気分は駄々下がりだ…。」

「私は…。あの五つ子とは違って優しい言葉なんてかける気はない
よ」

「はなっから期待してねーよ…。良いから前見ろ」

助手席に座る俺へと視線を向けつつも車を走らせる

坂下は余裕そうに話までかけてくる

運転はうまいけど…。見ているこっちはひやひやもんだよ

不貞腐れながらも彼女と応対し適当に場をやり過ごしていた

「……………五つ子か」

ふと、五つ子と言う単語を聞いて

今頃風太郎たちは何をしてるのか…。ぼーっと前を眺めていた

「考え事かな?」

「話しかけるな」

「君はぐれたね…。私じゃなきゃ嫌われているよ」

「あいにくと知り合いは多くてな…。お前の席はねーぞ」

「そんなの必要ないよ…。わざわざ君に関係を聞くような面倒な間柄
じゃないし」

「ただの幼馴染のくせして」

「そうか…。君の中では私まで幼馴染として認識されているんだね」

「不服だがな…。」

この女 雨宮紡木 旧姓 坂下紡木は…。俺の初めて出来た異性としての友達

所謂幼馴染だ…。こいつとは幼稚園からずーっと一緒にその都度比較され

何度泣かされたか…。ただ 天才として生まれた由縁だろうか

誰からも避けられ何時も一人でいた…。俺が初めてこいつと出会ったのは

数人の男子がこいつをいじめている時だ…。 当時の俺…。特に

幼少期は

母と父の影響をもろに受けており 目の前でこまる人間は絶対に助ける

まさしく正義マンだ…。 助けた相手が化け物とは俺は思いもしなかったけどな

以下回想

『大丈夫？』

『誰』

『ぼくは…こうだろう』

『わたしは…。』

『どうかしたの？』

『君は…。あいつらみたいなことしないの…？』

『しないよ？それにいじめてれば、助けるよ』

『かわってる…。』

『普通だよ！』

『つむぎ』

『えっ？』

『わたしのなまえ……。さかしたつむぎ』

『うん 僕は、うえすぎこうたろう よろしくねつむぎちゃん』

『こうたろう』

回想終わり

幾ら優秀なこいつでも昔は孤立していた そんな時に俺はこいつに手を差し伸べてしまった

この女がどういう人間か、出会った当初は予測すら出来る筈もない それ以降だろうか……。こいつはずっと俺に付き纏い

母さんや勇也さんも何時しか娘のように可愛がっていた

そのオマケとしてみずき姐とも知り合った……。風太郎はこれまた覚えてなかったが

坂下は俺が入院するまで良く顔を出していた……

あの中で本当に初対面なのは中野姉妹だ

俺が知る限り彼女たちとこいつには何の接点もない

「なあ……。坂下」

「なんだい……。幸太郎？」

「お前さ……。中野姉妹に何か言ったか」

「ぷっははははははは」

「何で笑う？」

「君は最低だなーって 別の女性といるのにほかの女の話か それも複数なんて馬鹿だね」

「へいへい」

「それに自意識過剰だ……。私は別に何も話していないさ まあーうん 何度かお話をしたよ

一花さんとかね……」

「!？」

「彼女の名前を聞いた途端に目を見開く……。何かあった証拠だね」

「なんもねーよ……。知ったような口きくな」

「私が幸太郎の事で知らない事はないよ」

堂々と言い放つが間違っていない

こいつは俺を怖いくらい知り尽くしている…。隠し事なんてすぐに暴かれ

にこやかに言うんだ『バレるから秘密って言うんだよ』

五月が俺を知っているが…。坂下に比べればまだ可愛い方だ

反論しても正論で返される上からの言葉に偽りは無い

怖いくらいにいや…。怖いな 雨宮紡木は紛れもなく化け物だ天

(一花か…。)

俺の考えだが…。あの三玖はきつと三玖じゃない

話し方仕草は完璧だ…。だが何処か違和感を覚えた

あの姉妹の中で…。そんな違和感を覚える人物は皆無だった…。

でも最近になってその違和感と同じ気配を持った人物が俺の前に現れた

一花本人だ…。まるで人が変わったかのように 最近の一花は

何処か底が知れない

につこり微笑むその顔は誰もが虜になる 俺だつてドキツとはす

るさ…姉妹たちとは仲が良く三玖とは変わらず過ごしていた

あの時だつて姉妹と同じ時間を過ごせない事を不安に思っていた

そんな一花が三玖に変装して…。あんなことを言うか？

くつそ…。訳が分からんぞ…。

模試に意識を集中してあの一件を俺は一端保留にしていたが…。いつまでもなかった事には出来ない

考え込む俺を嘲わらうこの女は…。何かを知っているのか？

でもたった一度一花と話しただけであいつが代わるものなのか…。

「悩むといいさ…。今の君にはお似合いだよ 八方美人なゲス野郎君

♡」

「まじで…。お前の今の姿を中野姉妹に見せてやりたいな…。」

「今の私は…。お隣に住む女子大生で通っているよ」

「どっちがゲス野郎だよ…。 はあ……………それでお前は大学は何処だ」

「えっ…。行つてないけど？ 休学中さ」

「はあ？ 何でだよお前なら何だつて出来るだろ」

「幸太郎の期待に沿えないな…。君がいない学校に行つても何も面白くない」

「俺の事はさっさと忘れろ」

「それこそ無理だよ…。幸太郎は私の…。」

「はーい 家についた…。荷物取ってくるから待つてろよ」

何を言いだすかと思えば…。今更な事を掘り返すな

お前が俺を忘れないなら俺がお前の事を忘れる…。それが互いにとってプラスに働く

俺たちの関係はあまりにも異質で歪んでいる…。幼馴染とも友人とも言えない何かだ

家の前に無事到着

車を適当な所に停めるよう言いつけ俺はさっさと荷物を取りに家に戻った

――――

――――

――

「勇也さん…。いたんですか」

「おう…。さつき幹雄から連絡が来た…。急ぎの用だとか」

「言われました…。荷支度をしてほしいと…。暫くは帰れそうにありません」

「学校には言っておく…。風太郎はどうする？ マルオが言った条件はクリアしたんだろ」

「あいつは先に姉妹のところに行つてます…。」

勇也さんが既に家にいた

午後の仕事前に一旦戻ってきたらしく…。先ほどまで幹雄さんと電話で久々に声を聞いたと

楽しそうに語っている…。

勇也さんと 中野先生 幹雄さんは学生時代の友人だったらしく
中野先生は勇也さんを毛嫌いしているが、彼はそれを意にも返さな
い
い
幹雄さんは二人共と交流は続くが…。仕事の都合上顔はずっと会
わせていない
俺も会うのは2年ぶりくらいかな…。

少し話し込むと勇也さんは俺に旅行鞆を手渡す
既に準備はしてくれていた…。頼りになるな…。

「らいには俺から話しておく…。それでお前はここまで歩きか」
「あぁ…。その」

「私を送って来ました お久しぶりです おじ様」

「何だ この別嬪さんは…。まさか紡木ちゃんかぁ！」

「そうです…。ご無沙汰してます」

「こいつは驚いたな…。まさか戻って来てたとはな…。髪も長くて気
づかなかった」

「気分転換に伸ばしてみました」

うわー 坂下 うわー

俺の前ではあんな事言うのに…。見知った人の前だとこの変わり
よう

これがこいつの怖いところだ、猫かぶりが異様にうまい

本性を隠す事がとてもうまく…。本質を見抜きにくい

使い分けると言うよりも周りが…。それを気づけない

それが正しい解釈だ…。

まあ…。勇也さんのことだしこいつの本性は知ってそうだけどき

まじであるの天使爛漫な天然の水木姐の妹なのか、疑わしく思えてく
る…。

細胞が突然変異でも起こしたのではなからうか…？

「紡木ちゃんも水木ちゃんも大変だったろう…。」

「えっ…。勇也さん知ってたんですか おじさん達の事」

「一応な…。あの頃のお前には刺激が強いと思って秘密にしていた 悪

かった」

「いえいえ…」

「ふふ…。おじさんもお元気そうで良かった　さて幸太郎早く行こうか　義兄さんが待ってる

　それではおじさんもまた何処かで」

「つて　引つ張るな！」

「おう　きーつけて行けよ……………」

（幸太郎　お前は どうしたい？　自分で答えを見つけろよ）」

—————

—————

—————

「やっぱりおじ様はカッコいいね…。」

「それは同感だ…。」

「うちのお父さんは優しくて臆病だからね…。でも私にとって最愛の父さ」

「俺もおじさんは好きだ…。坂下の家に行くときは車出してくれたしな」

「そんな優しい父をあのクソ女は裏切った…。」

「色々あんだろうさ…。」

「離婚して一週間で再婚する阿婆擦れだ」

「母親の事を悪く言うな…。」

「君の前では地雷だったね…。失敬」

　たとえどんな状況でも親は親だ…。

　喧嘩して一人暮らしをしている紡木を心配してるから世話焼いて車だつて買って来てくれたんだろう

　スケールがデカいけどな…。

「一言言うなら　理不尽だね　子供は親を選べない…。　君の母は本当に素敵だったのに」

「お前は母さんには懐いてたしな…。」

「不気味がられた私を唯一偏見なしで見てくれた女性は、君の母親くらいさ

だからあの事故は本当に居た堪れない…。」

こいつも人の心はある…。」

天才ゆえか孤独を味わい…。同性に恵まれない彼女にとって

うちの母とみずき姐は数少ない理解者だった…。」

そのうちの一人であるうちの母は事故で死去し…。」

残った姉とは親が離婚して離れ離れトドメとばかりに別の学校に転校されたられる

よくよく考えればこいつも相当苦勞してるよな…。」

「慰めてくれるかい？ いいホテルを紹介しよう朝まで楽しもうか

童貞少年」

「うるせー…俺の同情を返せ 馬鹿野郎」

「残念…でもまあ…。チャンスはあるか」

「オイこら会話しろ！」

こいつのブレーキは何時でも壊れてる

みずき姐には『会う気はない』と豪語しておいて何だかんだと変わらぬやり取り

俺がどれだけ変わってもこいつは永遠にこのままだ…。」

事故の前にこいつの顔を見たのは金曜日…。『また来週会おう』そう言っただけ帰って行った

坂下は何処か寂しげな表情だ…。既にあの時には家庭環境は相当危うい所までいつていたのだろう

事故がなければ俺はその問題と向き合い…。あのままこいつと過ごし

学校を卒業…。中野姉妹とも再会しないまま人生を終えていた

まあ…。零奈さんの墓参りは行っていた 五月ぐらいとは顔を会わせそうもんだが…。」

実際に学期末の勉強まで会う事はなく 人間の行動次第では運命は大きく変化していたのかもな

別の形であいつ等と過ごしてた そんな未来もあつたのかもしれない

ない

「そう言えば……。坂下さ。俺が事故に遭った日に電話してたな」
「……」

「坂下？」

「ああ……。せっかくの休日に君は私の誘いを断って一人でお出かけ……。寂しいよね」

「俺はお前の召使いでも執事でもねー……。一緒にいる理由はない」
「あるよ……。だって 私と君は

恋人

だったからね……。 彼氏と過ごせない休日程虚しいものはない」
「恋人ねえ……。懐かしい響きだ」

そう……。俺と坂下は 幼馴染であり 友人であり そして 付き合っていた

『僕と付き合いたい？ 坂下が』

『うん……。幸太郎は私が嫌いかな……。苦手だと思ってるのは知ってるよ』

『そう言うところが苦手なんだけどね……。でも良いのか本当に』

『私は君が好きだ……。幼馴染として友人として……。君に救われたあの日から君は私の王子様』

私と付き合ってくれ 上杉幸太郎……。私は君の傍に永遠にいと約束しよう』

『重い……。坂下の言葉は重すぎる』

『実は既におじ様の許可もでてる 婚姻届もほらここに』

『僕は自分の名前を書いた覚えはないけど？ 完璧な筆跡だな』

『あとは君が印鑑を押せば完璧さ』

『はあ……。坂下は物好きだな……。僕も人の事を言えないか』

『ならば早速届けようか』

『僕たちはまだそんな歳じゃないだろ……。これからよろしく 坂下』

『ああ末永くね 幸太郎』

――――

――

――

懐かしい記憶だ……。

何処で告白されたかは思い出せない……。でも俺と坂下は中学2年のあの日から

高校までの2年の間 確かに恋人同士だった……。

色々な苦勞もし様々な思い出を作り……。そしてあの日 こいつ

は俺の前から姿を消した

恋愛は人を、変える それは良い方向でもあり悪い方向でもある
でも確かにそれ程までの魅力を秘めている……。俺は恋を愛を否定
しない

素晴らしいものだ と絶賛する……。でもこの女はけして何も変わら
なかった

俺が事故に遭って入院……。目が覚めればサヨナラばいばい……。

あの日を境に俺は決めた もう二度と恋はしない 俺は人を応援
する側に回ろう

こんな苦しい思いをするくらいなら…。こんな気持ちは捨ててしまえと…。

「今の俺たちの関係は歪だ…。俺は18才の高校生3年」

「確かにね…。私は18才の大学一年…。君といた時間は私には最高の思い出だよ」

「嘘つけ…。お前は俺の前から何も言わず消えたんだ…。言葉一つ手紙一つ残さずな」

「謝罪はしないよ…。あれが最善だと思ったまだからさ…。女々しい男だね」

「別に…。思えばいいさ。自分の恋愛観が歪んでるのは知ってるしな」

「ふふ…。本当に今の私たちはどんな関係なのかな？ 別れ話すらない」

「継続なんてしねーだろ…。俺は終わってるって認識だ」

「まあ…そう言う事にしておこう。君の中ではね…。」

さーてそろそろ目的地だ。義兄さんが待ってるよ」

見え始めた大きな建物…。

やっつとだこいつから解放される。いい加減同じ空気もうんざりしていた

幹雄さんと会う前に俺が参っちゃまうところだったよ…。

第八十五話 不良少年と彼の選択

「うわーすげーでかい」

「口があんぐりだ…。恥ずかしいからさっさと行くよ」

「おい待て…。お前は俺を送るだけだろう…。なら今すぐ帰れ」

「それは出来ない…。身内がいるんだ…。挨拶はしないとね」

「っ……………面倒な女だ」

途中降ろされホテルのエントランスまで入った辺りで坂下が顔を
出す

俺を運ぶだけの役割だと思えば…。幹雄さんに一言挨拶を何て似
合わんことしようとしてんだか

因みにこのホテルは坂下の現在の父親が経営する一つ…。そう他
にも幾つもの会社を抱える

やり手だとか…。

「あの女は気に入らないが…。男の方は羽振りがいい…。私も少しは
自由に動かせる」

「ブルジョアめ…。」

「君には縁のない暮らしだろうね…。まあ以前の私もそうだけど…。
人生はどう動くか分からない」

「ごもつとも…。」

中野姉妹といい 坂下といい

周りの女子は金持ちばつかだな…。真弓ちゃんが一番普通だ…。

楽な生活を勇也さんに送ってほしいから憧れはするが暮したいと
は思わない

何でも思い通りになる生活程息がつまるものは無いだろうな…。

歩いて行く先…。奥に目を凝らせば眼鏡をかけた一人の男性が
カップ片手に優雅にお茶をしている

そんな暇があるならさっさと嫁さんに会えば良いのにな…。

「どうも…。幹雄さんお久しぶりです」

「おお！ 幸太郎君に紡木ちゃんだー！ いやーすっかり変わってし

まったね」

「義兄さんもお元気そうで良かったです…。姉も喜びます」

猫かぶりやろうが…。

細身の男性はにっこり笑顔で握手を求める

何処もかしくも握手をしたがる人が多いな…。恩師であり兄のよ
うな人だ

拒む事はせず左手を出す…。細身の外見に似つかわしくない手の
力

ハツハハハ 爽やかな笑みと清々しいまでのハンサムっぷり

勇也さんや中野先生とまた違った大人の雰囲気醸し出す彼…。

坂下幹雄 某大学で教鞭を取り…。日々迷える生徒を導く大学講
師

坂下水木の夫で彼女の通っていた学校の元教師…。

あの人とは教師と生徒という関係で付き合っていた…。

見た目とは裏腹に結構なことをやってのけた 一部では鬼畜眼鏡
とか凄いあだ名で呼ばれている

一応は俺の恩師の一人で、俺がぐれても勉強が出来たのは彼の教え
方が生きた証だ…。

やや天然なところもあるが善人だ…。善人過ぎるくらいに 人を
導く事を生きがいに行っている

故に教え子である俺がぐれたと知れば、この人が動くのもある意味
では必然なのかも

出された水をちびちび飲み…。坂下と幹雄さんの会話を聞いてい
る

俺の用事よりも先に姉の現状や仕事の内容など…。電話して聞け
ばいいのに

何でわざわざ坂下を経由して聞くのだろうか…。

「いって！ 何しやる」

「君は女心が分かってないな…。姉さんだって会いたいさでもね 声
を聞けば抑えられない」

「お前からそんなまともな言葉が聞けるとはな…。今日は槍でも降る

のか？」

「拳なら出るさ」

心の声は口から出ていた

無粋だよと坂下は思いつきり俺の足先を踏み…。にんまり笑顔

暴力女が…。

俺達の様子を見てか…。幹雄さんはふふと笑っている

何処が面白いのか、俺は一方的に攻撃を受けてるだけなんですけど

『ごめん』と一札を入れたあとに彼の口から思いもよらぬ言葉が出て

俺は絶句し 呆れた

「本当に君たちは仲が良いね 安心したよ」

「流石は義兄さんだ…。見る目があるね」

「はあ…。幹雄さん みずき姐から聞いてないのか？」

「何の話だい？」

「俺とこいつはとづくに別れてる…。あの事故以来 こいつと顔合わせ

たのはこれで3回目です」

「ああーつと これは失言だったね」

彼は本当に俺と坂下の関係をあのまま続いていると思ひ込んでい

た

坂下幹雄の中では今も俺と坂下は何処にでもいるごく普通のカツ

ブルのまま

俺が思っていたよりも2年前から時計が止まったままの人間はそ

こそこ多かった…。

話を聞けば、日本を発つ際も

『一人は大丈夫だよ』とあの人は誤解を招く発言を言い彼は、それは

鵜呑みにしたまま

海外で過ごし時折電話でやり取りする際もあの人は意図的ではな

いにしろ

大事などころを適当に話す為…。

俺が退院し 2年をやり直し 学年末試験で点数を下げ 家庭教

師をしている それしか知らない

坂下に関しても親が別になって引越した程度で…。母親と喧嘩

をして絶賛家出中と言うのも今知ったと大学も休学中と知れば血相を変える…。 大丈夫ですそれに関して俺も同じ反応です

「紡木ちゃん…。 どうして大学行かないんだい！」

「幸太郎がいない大学に意味はないです」

「と 意味不明な供述しており…。 俺も困惑中です」

「いやはや…。 僕が知らない間に大事ばかりだね…。 マルオも教えてくれれば良いのに」

「あの人に期待するだけ無駄ですよ…。」

「君は相変わらずマルオが苦手と見える…。 零奈先生が取られたのがそんなに悔しいのかな？」

「み…。 幹雄さんも じよ 冗談が上手になりましたね」

「幸太郎…。 手が震えすぎ 焦点もズレてる 話すなら視線を合わせようか」

「うるせー…。 まったく…。」

坂下幹雄がここまで情報に疎いのは何も海外にいるからではない

彼は俺と同じで余り携帯関連を使っていない…。 苦手とまで行かないが少し使う程度で抑えている

どうもこういった機器に縛られる生活は好まない…。

俺に電話ではなく手紙を寄越したのも俺の番号を知らないからではなく…。

純粹に文通でのやり取りを信頼している為だ…。 まあそのお陰で四葉と一花に見られるハメになり

何かと騒動にもなった…。

――――

――――

――

そのまま軽い話が続き……。聞けば聞くほどこの人は生まれ持った教師なのだ実感した

俺が下田さんと会ったとも話したが、『勇也と間違えられた?』とやはり聞いてきた

風太郎以上に俺は父親似らしい……。嬉しい言葉だ

ある程度情報交換も終われば……。さて本題の始まりだ
にっこり笑顔はそのままに小さく拍手をくれた

「上杉幸太郎君……。全国統一学力模試……。一位おめでどう

これは賛美すべき事だ……。君はやり遂げた……。転校の話は撤回だ」
「ありがとうございます……。自分で出せる限界に挑戦しました。知り合いにも優秀な人物が多く

少し不安もありましたが、満点という最高の結果で納めました。」

全国統一学力模試は……。あと数ヶ月の俺の学園生活をかけた大一番

彼の示した10位以内に入らなければ俺は彼が選んだ学び舎で勉強漬けの毎日と過去の俺なら大歓迎

今の俺ならブーイングという事態を避ける事に成功

予想に反して一位という最高の功績も得られた

『流石は元学年主席候補』ととげのある言葉を横の女が耳元で囁く……。こいつに言われると心が折れそうだ。誇るべき事だろう。だけど坂下という人間を知ってしまった

俺は本当の意味では喜ぶことは出来ずにいる……。

「私のいない学力模試は織田のいない、本能寺の変だね」

「織田生存ルートかよ……。」

「最大の強敵と言える……。紡木ちゃんがいなかった……。確かにそれも大きいね。プレッシャーも大幅に軽減だ……。でもそれは紛れもない君の成果の表れだ。卑屈になる必要はない」

「義兄さんは優しいね……。私なら文句の一つも出るよ」

「紡木ちゃんは自他共に厳しいからね……。君の考えは他には理解し難い。あまり彼に君の価値観を押しつけてはいけないよ」

「勿論です……。幸太郎も聞き流していますから」

「こいつの価値観は人と言うより動物だ……。頭が良いわりに直感で物事を判別してる」

全くもって酷い言いようだ

攻め入った 明智が見たのはただ燃えるだけの本能寺 狙う大将は元より来てすらいないとは

俺が、言えた義理でもないが何でこうもこいつは、捻くれた考えしか持たんのか？

目的まで頑張つて頑張りがぬいて 目標へとたどり着いた喜びは誰しもがある筈だ

だがしかし こいつ 坂下紡木は違う 努力なんて最もこいつからは縁のない言葉

苦労なんて言葉が最も不釣り合いな人間だ……。

何もかもお見通し 分かりきったように怪訝そうにテストを受ける それが坂下紡木と言う人間だ

「勉強なんて一度聞けば、誰でも分かるさ、復習なんて意味があるとは思えないよ アホらしい」

「っ……………へいへい」

親の都合で振り回され、同情は出来る ただそれ以外でこいつに関して感情移入出来た事はあっただろうか？

なんで俺は、坂下と付き合っていたんだ？

顔を見合わせれば、彼女からは皮肉ばかり 上から目線は昔から加え揶揄われる毎日と来たもんだ

時には普通に会話もした気もするし人並に感情はあるのかもと考えた時期もあった

けど思い返せば思い返す程 楽な日々と同時に二つの意味で疲れ
る

いつもいつも俺は、こいつに振り回されてばかり 息継ぎの暇さえ彼女は俺に与えようとはしなかった

学園でも日常でもだ 坂下紡木は俺を離さない

飛びぬけた感性を持つこいつと俺は、本当に釣り合っていたのか？

「はあ……………」

「またため息か…。君は構って欲しいようだ」

「うざい…。そう思うなら話しかけるな」

「まあまあ落ち着いて…。じゃ 模試の話も聞けたし 君を呼んだもう一つの話しようか」

「お願いします…。風太郎たちが心配なんで」

「マルオから許可が下って君たちは晴れて正式な家庭教師に再雇用だ…。

素晴らしいね…。君が人に一から教えると言うのは元担任として嬉しい限りだ」

「馬鹿な姉妹の面倒見てさ…。成績落ちたら立場もないよねー」

「ああ？ あいつらはちゃんと努力して…。」

「努力ねえ…。ならさ 何でおバカなのかな？ 何もしてないからこそだよ」

「お前が努力とか口にするな」

「うん そうだね私にはない考えさ けどね人間には出来る人間と出来ない人間がいる あいつらは後者だ」

「知ったような事いうな！ 分からねーくせに」

何でか、坂下紡木は中野姉妹に関しては針どころか剣山を刺す勢いで言葉に悪意を込める

「わかる訳ないよ？…。何かを言い訳にしてる連中さ…。逃げる事しかできない」

「いい加減黙れ…。お前の言葉は癩に障る…。」

「自覚はあるよ…。私は中野姉妹が大っ嫌いだからね」

「ああー話が脱線していくよ…。お二人さん 一旦呼吸を整えようか…。
冷静に

そして好きな物を頭に浮かべようね…。」

空気は荒れる一方で、せつかくの話し合いも止まっただけ

言うことなす事文句ばかりの坂下にいい加減、俺も我慢の限界だ…。」

隣に住むくせに…。何でそこまであいつらを敵視する？

引越して来た初めて会ったあの五つ子にお前は何かをされたのか…。」

このひねくれものは決して理由を話さない…。」

『嫌い それに私は何もされてない』なら一々噛みつかず黙って聞いている

割って入る幹雄さんは一旦冷静になるよう話す

平常心を心掛けようと言ひ聞かせる…。」

彼の言葉に従ひ

好きな物を連想した…。浮かぶのは家族や中野姉妹などの笑っている姿 最後に六花さんのご登場

本当に幹雄さんがこの場に来てくれて良かった…。」

「ありがとうございます…。落ち着きました」

「なら宜しい 紡木ちゃんも少しお静かにね」

「義兄さんの顔に免じて」

「あつはは…。それでさ 幸太郎君は今何を思い浮かべた？」

「俺ですか？ 家族や中野姉妹の事です」

「それが今の君にとつての支えだね…。それがあからこそ…。君はもう一度立ち直れた

支えてくれる人間の存在は大きい…。それは君も分かるだろう

紡木ちゃん」

「私には理解できません…。」

「冷徹人間だ…。」

支えがあれば、誰しも前に進める

挫折から這い上がれる…。風太郎や中野姉妹のお陰で俺は、あの馬鹿げた過去から脱却し

今一度前を向ける 人を真剣に見て見ようと思えることが出来たんだ…。

「今の君に何が必要で何が足りないのか…。これでハッキリ出来たね」

「？」

「幸太郎には分からないけどね」

「うるさい…。それで幹雄さん 今の言葉はどう言う意味ですか」

「うん…。幸太郎君はさ…。卒業したら 何がしたい？」

「え…。卒業」

「変な話じゃないだろう？ 三年なんだ 君も進路を考える時期だろ」

思いもしなかった…。そんな言葉を三年生の俺が言っている筈もない

当然彼は、俺の今後である学園を卒業してからの未来予想図を参考までに聞いて来る

罰の悪い顔とどう言い返せば、良いものか？ 頭に浮かんだ言葉や出かかったそれを喉に押しとどめ

何が正しく 何が不適切か そんな事ばかり脳内でシミュレートしていた

時間にして数分 体内では数時間が経過した辺りで一応は言葉も纏まり

誤魔化すように 自分に言い聞かせるように彼へと伝える

「俺は…。そーですね 先ずはあいつらや風太郎がちゃんと卒業出来るように」

「話を逸らさないでくれ…。 上杉幸太郎 君は何の為に生きている？

誰の為に勉強をし 学校に通っているんだい」

「俺は…。自分のために勉強してます だから模試だつて」

ダメだ　ダメだ

「それは中野姉妹の為に君が勉強したんだ…。確かに僕は転校という条件を提示はしてた

でも君があそこまで努力をしたのは他でもない　あの零奈先生の娘さんたちの為さ」

彼には俺の言葉は届かない　誤魔化しも効かない　相手が悪すぎる

「家族のために…。バイトをしています」

「うん…。君は真面目だ　あの事を気に更にバイトを増やしたね

でもさ…。君の時間は何処にある？　毎日毎日必死に働いて帰ってくるのは明け方

すぐ学校さ…。それに加えて　家庭教師と…。それが続いた先に君の未来図はあるかな？」

「俺の時間…。俺はあいつらを守らないといけなんです…。だって」

「零奈先生と約束したからだろ？　最早それは呪いだよ」
「!？」

俺には何もない…。

必死に働くのは家の借金の返済の為　学校に通うのは学費を無駄にしない為

家庭教師をするのは姉妹を卒業させるため…。　風太郎を支える為　彼女たちの将来を見守るため

俺は…。　何の為に　勉強しているんだ？

確かにあの時まで俺にも目的はあった　道しるべとして過程と

して勉強に取り組み日々を謳歌していた筈だ。

だがどうだ？　今の俺は何を目的にして勉強に勤しんでいるんだ？

直ぐに答えが、出ないのも当たり前前だ、俺にはその当たり前前の理由さえ思い浮かばない

秋の夜　一花に問われた際も俺は、確かな理由さえ告げる事は出来ず、その場で言葉を失っていたじゃないか、あの時と同じだ、『あっ』『えっと』と焦りから出る情けない言葉に坂下は哀れむような表情を向け

坂下幹雄も俺をじつと見る…。答えは自分で見つけるものだ…。

でも俺にはその答えが見つからない…。何を言っているのかもわからない

咄嗟に浮かんだ言葉も真つ正面からはたき落とされる

『そうだ』など曖昧な言葉でやり過ぎそうとするほどまで俺は追い詰められている

いや違うな　一花や彼に指摘や問われるまで俺は、それから目を逸らし続けて来た

無自覚に　後で良い　きっと見つかる　そんな楽観的な何処か皮肉った考えすら俺は持とうとしなかったそれをする度胸もないまま最後の一年へと進んでしまった

『不良少年は将来は？』『捨てましたよ』

下田さんとの会話の中で進路希望の事を思い出すまで俺はそれを無かった事にしていて

目を逸らし　見なかった　無かった事になっている。

考えても考えても　あの日の言葉が、俺を怯ませ　前に出る事を躊

踏させる

『君はもう一度 自分の将来を見つめ直すべきだ 君のそれでは
………』

俺にだって進路希望は渡されている 何を書いて良いのか分から
ず

鞆の中にしまえばなし……。 かつて夢見たあの思い出はもう二
度と叶わない

叶わないと諦め同時に夢はない 夢なんてみないと言い聞かせる
……。

そんな事ばかり頭に浮かべてりや、将来何をしたいのかも 当然浮
かんでくる事もない

卑屈でうじうじする自分自身の事など

どうでもいい

自分の夢を再び考えるより……。彼女たちが話す 未来を聞いてい
ることが

あの子たちという事が、とても心地よく……。この時間が大切に

一花や五月や二乃 四葉や三玖 風太郎だつて一步を踏み出す中

俺は前に進めない……。三年生との決別で進んだ気でした

みんながどんどん遠ざかっていく……。

—————

—————

———

「ねえ…。幸太郎君」

「はい…。」

「もう一度さ…。夢を見たくないか？」

「無理ですよ…。」

「でもさ、考える時間はまだ残ってるんだ。確かに今は大切だ。そこにいる事で君は

少しづつ変わっているけど…それだけだ。君はこのまま何もないまま卒業し大人になる」

「……………」

「上杉幸太郎は…。中野姉妹から…。家族から離れるべきだ」

話を切り出した。彼は俺に彼や彼女達と一度距離を開けるよう提案をしてくる

声がつまり掠れたように弱々しい言葉と共に反論にも似た言葉で彼に返す

「ダメですよ…。それだけは」

「風太郎君が心配？それとも姉妹が心配？……………いい加減自分の為に時間を使おう

僕たち大人が勝手に決めてはいるけどさ…。

君には将来がある。君が生き残った意味は確かにあるんだよ…。転校の話は適当な言い訳

僕が君にしてあげたいのは卒業してからの進路さ…。」

母の死を見た。零奈さんの死を見た。そして俺もまた死にかけた。でも俺は生き延びた…。

目覚めた時に大切なものを全て失って…どうしていいのかも未だに定まらない

あの時本当に失ったのは、心だ…。自分の為に生きて行こうと思える気持ち湧いてこない

俺がここ最近自分にしてやった事は、何かあったか？。模試勉強会を一度すっぱかした程度

本当に俺は……………何も無いな

「今一度自分を見つめ直すために……………僕は君を日本から連れ出す」

「義兄さんも強引だね…発想がぶっ飛んでる」

「それでもしないと……………彼は生きた屍だ……………借金を返済する為のバイトだつて返上して姉妹を選んだ程さ……………今だつて考えが纏まりもしない」

「知つてたんだね……………幸太郎がバイトを休んでいた事」

「勇也から聞いていた……………」

「幸太郎を何処に連れて行こうとするんだい？」

「僕が今いる国にでも……………暫く見知った人物がいない国に行けば、彼も自分の為に何かをすると自己防衛で考える」

「すごく斬新な考えだ……………私は大賛成」

「中野姉妹を抜きにしても？」

「あの子たちはどうでもいいですよ……………風太郎君が相手していれば勝手に纏まります」

「ねえ……………幸太郎君 暫くは旅行なんてどうかかな？」

「旅行ですか……………」

「僕から君へのご褒美とでも言えば良いかな……………遠出して自分を見つめ直そう」

「あいつらに相談しないと」

「幸太郎……………これは君の問題だよ？ 何で姉妹を引き合いに出す」

「それは 俺は家庭教師で」

「5月まで大きなテストもない それに今の彼女たちなら卒業も出来る 君は風太郎君とそう考えた筈だ……………何も今生の分かれということでもない」

幹雄さんが俺を呼び出した理由は……………今の状況から少しでも変われるよう

彼なりの助力だと話す 卒業まで残り一年 答えを得ないまま学校を終わらせるのか？

かつての担任としても一人の友人としてもこの状況は見過ごせる

ものではない……。

懸念される姉妹の事も勉強が、ある程度出来る今は……。彼女たちと弟で事足りる

むしろ俺は邪魔になるとさえ言われた……。

身近で見守る事も大切だ。でも偶には遠くで見守ってもいい筈だ。自分に休みを与えても罰は当たらない……。

必要な物は勇也さんが、全部揃えてくれている

あとは俺の答え次第……。期間は来月の5月12日まで。かれこれ18日の間

俺をここから引き離す。そして何がしたいのか答えは見つからずともきっかけは出来る

変われるきっかけを作って欲しい

(変われるきっかけ……。)

高校生として不安を抱く彼女に俺が伝えた時と同じ言葉が今の俺に深々と刺さる

これ逃避ではなく……。チャンスだ。念を押された

俺が選ぶ答え……。何をすれば良いのか……。

『こうちゃんには自分の夢を叶えて欲しいな。お母さんは立派なこうちゃんが見たいんだ』

『幸太郎……。お前の名前に幸という字がつく理由をもう一度考えろ』

(勇也さん……。母さん)

「幹雄さん……。俺 行きます……。その旅行とやりに」

「その言葉を待っていたよ……。いやー 先生らしい事すると疲れるねー」

「向こうだと違うんですか義兄さん？」

「イギリスは日本と文化も違うし……。ユーモアセンスだって全然さ」

「大変そうですね……。教師も」

「憧れを超えたいからね」

「零奈さんですね」

「下田ちゃんから聞いたんだったね……。僕は真面目だったけど

勇也なんか何時もげんこつき マルオはーつとこれは秘密流石に殺される」

「あの人の秘密か……。興味あるな」

「本人から聞きだすのは指南の技だけだね……。じゃあ行く前に一言風太郎君に電話してあげよう」

「わかりました……。悪いな風太郎 勝手に決めてさ」

覚悟を決める……。とそこまでの覚悟が今の俺にあるとは思えない

その為に一度日本を離れ……。自身を見つめ直す

これがきつかけで、少しは改善できることも出てくれば、良いんだけど

着信履歴から弟を探す

ワンコールで彼は出てくれた

さして 言いますか……。

「俺さ5月までさ 家に帰れないから」

――

――

――

風太郎への電話も終わった

中野姉妹のアパート前にいるのは好都合

説明の手間も省ける……。電話越し驚き文句は言うが察してくれ
た彼は俺の旅立ちを認めた

俺の電話だと知り五月の声が残る

傍を離れないと言いつつ俺は三度あいつらの前を去る 今度は戻ってくるけど

心配をかける事に変わりはない……。

戻ってくるのも12日…彼女たちの誕生日も過ぎてしまう
向うで何か買ってお土産として渡そうかと色々試行錯誤だ

「うわー……………」

「幸太郎…君の知り合いは嫌がらせが好きみたいだね」

「メール300件 着信60件……………五月 お前も大概だぞ」

「これはストーカーの素質ありだねー」

「五月がんなことするかよ お前じゃあるまいし」

「案外GPSでもあったりしてね」

「……………」

「黙る辺り 可能性は考慮していたんだろう？」

「本音を言えばな……………あいつは何時でも俺の居場所を見つけるからな」

「怖い怖い……………本格的に海外で暮すのもありだね」

「暮すきはねーよ……………今回はただの旅行だ」

風太郎への電話の後すぐだ

大量のメールと着信でスマホが軽くフリーズしている処理落ちさせるとか

坂下程じゃないかと思っていたが、別の意味で五月が怖くなってきた
日本に戻ってきた時に俺は果たしてあいつと普通に会話が出る
のか……………会いたくないなあ

「それよりも……………お前は何時までいるんだ 帰れよ」

「同行するよ？」

「はあ？ 何処の世界に元カノと旅行する学生がいんだよ」

「私の眼前で息を荒くする白髪の男だね」

「いやだ 帰れ……………しっし」

「残念だけど……………私も姉さんからの頼みで来てるんだよ」

「みずき姐も余計な事を」

「正確には義兄さんに変な虫がつかないようにと…。杞憂だよ 義兄
さんは姉さん一筋なのに」

「ここは絶対別れないと思う」

「激しく同感だ……………羨ましい限りさ」

「お前にしては人並の意見だな」

「たまには良いだろう……君の知らない私が見れるよ」

「近づくな……。腰に手を回すな 顔を近づけるな！ 息が荒い」

「やはり幸太郎は、良いね」

「助けてください 新手の変態です！」

現在俺たちはパスポートセンターにいる

仕事の都合で日本を離れる事の多い 幹雄さんと違って俺はパス

ポート何て所持していない

飛行機に乗るには先ず必要な物だ

坂下は発行済みで胸ポケットからちらりと見せる

『今……。幸太郎君に何か良からぬ虫が』

『女の気配がする……。』

『三玖まで五月見たいになってきたよー』

坂下に体を押しつけられたと同時のタイミングで、アホ毛をレーダーのように逆立てる

五月とドス黒いオーラを放つ三玖がいる事を今の俺は知らない……。

知らぬが仏とはこの事だ……。

「私も女性だ……。体には自信がある……中野姉妹と同じと思っているが？」

「やめろ 押し付けるな」

「可愛いねー幸太郎♡」

「幹雄さん……。助けて」

「ははは……。保護者代わりの僕がいる間はそう言った行為はアウトだよ

紡木ちゃんも離れてねー」

「義兄さんはケチだね……。これくらい大目に見てもいいと思うけど？」

「お前は婚姻届を持ってくる程の女だ……遊びで済むかよー！」

同行出来るとなった途端に坂下のテンションは上がっている

離ればすぐに体を押しつけすり寄ってくる……。

何がしたいのかまるで分らん、終わった関係で復縁なんてさらさらないと何度も言ってるのに

坂下にはその気はなく人目も気にしない……。天才と馬鹿は紙一重と言うが

こいつは紛れもなく馬鹿だ……。こいつの常識はやはり歪んでい

る
「はいこれ婚姻届…私君は結婚出来る年齢だ」

「成田離婚って知ってるか？」

「結婚する気はあると…。予定より早いね」

「するわけねーだろ…はあ」

「ふふ…。では二人共早速向かうか…。空港まで紡木ちゃん運転は頼めるかな？」

「喜んで…。荷物はそれだけですか」

「僕の勘も捨てたもんじゃないね…。ある程度置いて来たんだ」

「幹雄さんの場合忘れたんじゃ」

「…：さて行こうー」

「今のは忘れたな」

「義兄さんは抜けてるから」

空港までそこまで距離はないだろう

俺達に乗るイギリス行きまで時間は残ってる…。その間に心を落ち着かせ精神統一だな

「あいつらにメール送っておくか」

「そんなにスマホでやり取りとは君は女子かな？ 前のはどうしたんだ」

「今更か…。捨てたよ」

「残念…。二人で選んだ思い出もおさらばとは君も冷徹だ」

「お前には言われたくねーよ」

「私は今でも使っているよ ほら」

「意外だな…。変えてるかと思った」

「女心と秋の空さ…。心境の変化は君だけじゃない…。それにしても

さ電話を無視とは君も最低だ」

「何の事だ？ お前が何時かけた」

「この番号に見覚えは」

スマホの画面を俺に見せる。その番号に確かに見覚えはあった

店長が張り切り 二乃が、ポ力を起こしてしまったあの日の謎の着信の正体だ

仕事とその際は適当に流し すっかり存在を忘れていた 間違い電話だと俺なりに解釈して放置

「あつ…。お前 番号は変えたのか」

「君は以前と同じ番号で安心したよ…。不用心と言った方が正しいかな」

「うるせー…。面倒だったんだ」

前を向くための俺の旅行は不安だらけ…。の海外へ

同行人は元担任と元カノ 全くもって変な組み合わせ…。坂下の同行は心の底から嫌だけど

みずき姐の頼みなら仕方ないだろうな…。こいつから仕掛けてくるなら迎撃すれば良いだけだ

（次に日本に戻ってくる時には…。修学旅行か…。行きたくねーな
学園行事の度に俺は面倒事に苛まれる…。それも また京都だろ
はあ）

空港まで向かう車で軽く鬱になる…。

修学旅行という大イベントは少々事情や思う所もあり個人的には行きたくないけど学生としての思い出は作っておかないと後になつて後悔だけはしたくない

それに俺は18日間も日本にいないんだ…。

作れるときにきちんと作ってそれを大事にしておきたい…。

期待と不安そして本当の意味で前に進むために俺は日本を一度発
つ

次に戻ってくる時には、もう少しまともになってる筈 ……………

きつと いや 絶対 あいつらなら大丈夫 だから

みんなまた会おうな 12日以降にさ……………

(それまで行ってきます……………)

—————
—————
———

「幸太郎君からです」

「本当だ コータローからだ」

「お兄さん…。何処に行くかは教えてくれないんだね」

「あいつも唐突ね…。一人旅かしら？」

「…」

「一花どうかしましたか？」

「ううんなんでも…コータローくんが戻ってくるまで私たちも何時も
通りでいようね」

「そうだね…フータローにも負担にならない様にしないとね」

上杉幸太郎がいない間 果たして上杉風太郎と中野姉妹は一体ど

んな生活を送るのか

一人考え込む一花を不思議そうに見つめる五月…。

彼は誰と共に何処へ行くのか…その誰かは一花の中で一人だけ心
辺りがあつた…。

第八十六話 不良少年と彼のいないバースデー

上杉幸太郎が日本を離れて10日が経った 5月3日

時間は進み日常は代わる代わる変化しゴールデンウィークに突入していた

上杉風太郎は彼の不在の中、家庭教師の仕事のみであの家顔を出しては

彼女たちと定期的に簡易テストを行ったりしている

学力模試から成績の低下はなく、塾講師の下田の元で手伝いをする五月の成長は予想よりも大きい筈なのだが、やけに静かで察した風太郎はあえて触れずにいる。

仕事と勉強の板挟みの一花も彼女に負けず劣らず70点以上を常にキープ

この分なら何の問題もなく卒業を迎えられる…。あの父親にもそう宣言している

残るは彼女たちが進む道を見守ることだ風太郎は再認識していた

「じゃ、俺はこれで」

今日は、バイトがある為少し顔を出しただけで。時間が迫れば彼は足早に去って行く

『ファイトです』と四女は声援を飛ばす

同じ勤務先の二乃も風太郎を追いかけるように走り去り

残ったのは 三玖、四葉、五月の3名

清掃のアルバイトも今日はなく

三玖も今日は非番ではあるものの練習はあれから毎日続けている

五月も暫くは時間に余裕があり…。下田からも

『あんまし無理はすんなよー嬢ちゃん倒れたら…。不良少年に怒られるからさ』と注意を受けた

何でかあの元ヤン講師は幸太郎を引き合いに出せばニヤニヤと自

分を見ている

その彼の事を思い出せば……。五月は深いため息だ

隣で座りこむ三玖は、彼女の背中を摩る……。最近はこの光景も見慣れ

誰から見ても五月が幸太郎に抱く感情 あれだ 本人は頑なにそれを認めようとはせず

『なんですか……。からかっているんですか わ 私が？ 学生での恋愛はふ 不純です……』と

何処か、歯切れが悪くなる

認めてしまえば楽なんだと思いつつも一花はあえてそれを言わずライバルを増やさない方針

二乃は長女の策略を知って呆れていた

重くなる空気をどうにかする為 場を和ませようとする四葉

何か話題はないかと……。彼から逸らす様にと頭を働かせる

ばんと量の手を叩けば明後日に迫る 一大イベントを改めて残った3名で話し合う事を提示

しかし……。それもまた地雷だという事を四葉は知らなかった

明後日五月五日は中野姉妹の誕生日……。だがそれはあの男も同じだ

「幸太郎君の誕生日も明後日です……。お祝いしてあげられません」

「えっ……。お兄さんって同じだったの？」

「うん……。昔は一緒にお祝いしてたんだよ……。覚えてない？」

「あつ……。言われてみれば……。そんな記憶がちらほらと、どうしようお兄さんの用意してないよー」

「用意しても幸太郎君の居場所が分からなければ渡ししようもありません……。食品関連なら日持ちするものではなくてはいけませんし……。」

「お兄さん何処に行くかぐらいは言ってくれてもいいのになー」

「12日まで待つしかないよ…。でもちようど土日挟むから会えるのは週明けだね」

「更に遠ざかってしまいました…。どうすればいいのでしょうか」

「よしよし…。五月も私も待ってれば良いよ　コートローを心配させないようにはさ」

「みくー」

(…。うーーん　五月は絶対に何かあるんだよね?)

でも三玖も…。うーん　私はどうすれば良いんですかお兄さん!!)

—————

—————

—————

「ぶっくしょん」

「幸太郎…。風邪かい？　移す恐れがある部屋に戻ってくれ」

「お前が俺の部屋から出て行け…。ナチュラルに侵入してくるな」

「鍵なんて勝手に開ける」

「何回　幹雄さんがこの鍵を変えてくれてると思ってるんだ！　つうかまじで出てけ…。俺は今忙しいんだ」

「忙しい？　あれは　まだ先だろ？　あるとすれば幸太郎の誕生日だけだ」

「俺のはどうでもいい…。」

場所は一度変わり　上杉幸太郎がいるイギリスのある建物の彼が借りる一室だ

ここに来て一週間程…。当たり前だが、出会う人すべてが英語だ　今まで使って来た日本語はほぼ通じない

坂下幹雄の元で発音を勉強したり…。英語の文章を自ら製作したりと試行錯誤の毎日だ

確かに面倒事は多いが…。不思議と楽しくもあり　言葉が通じれば嬉しくなる

毎日が発見の連続だ

今日も今日とて彼は何か手紙のような物を書き始めていた

この旅の同行者 雨宮紡木は、部屋に侵入し彼の書くそれを奪い取れば

ニヤニヤと笑い 彼を嘲る

「あの姉妹にお手紙かー 幸太郎らしいね 実に馬鹿らしい」

「うるせーよ…。返せ」

「電話をかければいいんじゃないか？ きつとすぐに出てくれる」

「スマホは死んでる…。初日にあれだったしな」

「何かあったかい？」

「お前はそういう人間だったな…。」

とことんそう言った事に興味を示さない彼女に呆れ

視線を部屋の隅に向ける…。そこには焦げた電子機器の残骸 彼の持っていた充電器だったもの

ここに来て初日に彼は、危機感なく 充電器を部屋の隅にあるコンセントにはめ込んだ

幹雄が止めようとした時には既に遅し…。 ばつちんと音を立て

持っていた機器は

黒い煙を上げ使い物ならなくなっていた…。

幸太郎も刺した時点でそれを思い出した…。日本と海外では電圧が違う

変圧器盤を使わなければ、キャパシティーをオーバーし電化製品はあつという間に壊れてしまう

運の悪い事に彼の持っている 充電器はワイヤレス対応 それ自体が機械だ

一気に電機が流され 悲鳴を上げる暇なく壊れた

勿論のこと 坂下が持つ充電器は彼と型番が合わない それ以前に幸太郎をいじる事を楽しむ

雨宮紡木が、貸す訳もない

残った 坂下幹雄はスマホではなく 携帯人間…。貸す貸さない 以前の話だった

街に出て合いそうなものを探したが見つからず、結局そのままスマ

ホは放置

旅に出て4日目で音信不通だ

五月の事を考えれば、どれだけメールと電話が来ているのか
想像するだけで恐ろしい……。連絡したくても出来ないとは彼女が
らしたら言い訳だ

散々なじるこの女もどうせ自分にスマホを貸す気はないと彼も諦
め、貸してくれるにしても長年の感で分かる。

『さーて条件だ』と嬉しそうに言うに決まってる。高いリスクは避け
て行こうと借りる気はない

そんなトラブルもあり 幸太郎は手紙で自分の無事を知らせよう
と考え

幹雄から一式を借り……。中野姉妹の宛名と上杉家の宛名を書いた
二枚を用意

それぞれ書いている……。中身を見た雨宮紡木は苦笑し すぐに
彼は取り返す

「中身はつと……出だしは日本語で途中から英文になってる。君も
器用な事をするね」

「まじだ……。全く気づかなかった、つうか返せ」

「あの子達が読めるとでも？」

「うるせー……。いちいち茶々をいれんなー」

「それにさ、この荷物はなにな、私気になるな」

「お前には教えん」

「義兄さんと昨日出かけた事が関わっているんだね？うーん何か
なー」

「それがどうした……。お前には関係ない話だ、さっさと自室に戻れ、
しっし」

一週間もいれば自然と習慣も身につく

手紙の中身は日本語と英語が入り混じっている……。嘲る彼女に文
句を洩らし

机の上にある 大きな包みを持って彼は坂下幹雄のいる部屋まで

足を運ぶ

彼の行動時一つ一つが面白い　彼女が見過ごすわけもなく後をつける…。

とんとん

「はーい　誰かな？」

「幹雄さん　俺です」

「幸太郎君が入って良いよ」

「失礼します…。　お仕事中でしたか？」

「生徒の書いた論文のチェック…。　中々興味をそそるもよが多くてね

それで幸太郎君は何用かな」

「荷物を日本に送りたいんです」

「ああー　準備が終わったんだね…。　僕が出しておくよ」

「ありがとうございます…。　一応は知らせないと心配するんで」

「そうだね　一報があつてもいいだろう　それで　プレゼントは選べたかな？」

「はい…。　喜んでくれるかどうか不安ですけど」

「君も律儀だね…。　遠く離れてまで」

上杉幸太郎が持つている大きな箱は中野姉妹への贈り物だ

彼は覚えている　彼女達の誕生日が明後日であることを…。　去年は誕生日を祝えず

今年を祝つてあげられると思ひ込んでいたが、幹雄の提案でイギリスに短期旅行をしている

どうにか出来ないかと…幹雄に相談し…。　昨日街の方まで出かけ

彼女たちへのプレゼントを選んでいた

お金は勿論彼が…。　と言いたいが、こっちの通貨を持っていない

幹雄が立て替え、彼は、何度も頭を下げた

連れて来た人間は彼自身準備を怠った自分にも責任はあると口にしていた

「幹雄さんもみずき姐に毎年贈ってるんですよ？」

「おっと 反撃か…。どうやら 立ち直ったようで安心だ」

「自分が、まだまだだと改めて実感させられました…。幹雄さんの推薦を頂いたのにすみません」

「まあ…。君の実績はここも知っている…。チャンスもまだ残ってる僕としてはあれでいいとは思ってはいただけどね、取り合えず次の期間まで気持ちを切り替えようね」

「了解です…。次回で最後なんです。落ち込んでばかりはいられません…じや お願いします」

「O?…。任せてくれ」

小包と手紙を幹雄に預け

部屋を出る…。入口前では雨宮紡木が満面の笑みで彼を出迎える

『盗み聞き野郎』とぼやき部屋まで戻って行く…。

彼の姿が見えなくなったあたりで雨宮紡木の表情は一気に暗くなる

さつきまで見せた笑顔はなくただ一言『またあの五つ子か』と一言
呟く

上杉幸太郎が日本に帰国するまで後8日…。

幹雄から言い渡されたとある試験…。当初の彼は緊張故にそれに不合格と失態を犯した

しかし今の彼の表情には緊張も不安もなく…残るチャンスに全てをかける…。

(プレゼント届くのかそれが激しく不安だ…。)

—————

—————

—————

5月4日金曜日

帰宅した一同はそれぞれバイトに向かう

明日は自分達の誕生日という事もあり…。それぞれが一個づつプレゼントを用意し

ランダムで一個選ぶロシアンルーレット方式を採用した

5人で生活していくには出費は必要最低限尚且つ…。貰って嬉しいものと言うのが大前提

一人一人買っていてはお財布が一気に空っぽになってしまう。

最近とは色々と不穏な空気が漂っており誕生日の日くらいは穩便に楽しく過ごしたいのが

彼女達の考えだ…。

「はあ…。」

「おいおい、嬢ちゃんそんな辛気臭い顔されたら生徒達に悪影響があるんだけど?」

「すみません! 少し考え事を…。本当に申し訳ありません」

「そう思うならよお…。ちゃんと心の整理をしてから来てくれるか?」

そんなんじや目指すもんも

永遠に掴めねーぞ」

「……」

「あの不良少年なら大丈夫だ…。事情は知らねーけど 幹雄といふんだし」

「その幹雄さんと言う方は、下田さんのご友人なのですか?」

「一応な…。 あいつはくっそ真面目な男で、まあーなんだ先生からの拳骨を受けずに済んだ一人だな」

「と言うと…幸太郎君のお父さんのご友人でもあるんですね」

「ああそうだな…馬鹿じゃねーが…。勝手に話を進める。面倒な男だったな」

「あつはは…そうなんですな」

「そう言えば…あいつも結婚してたな…。相手は坂下水木っていう医者だった…年の差婚で私らも驚いぜ」

「坂下先生の旦那さんなんですか…?ご結婚されているとは聞いていませんが意外です」

「意外ねー…あいつは教師だし 案外不良少年の担任だったのかもな

？」

どういった経緯で彼を連れて行ったかは友人である下田が知るところではない

帰って来たなら何か言えとは文句は言いたい、愚痴も出る

坂下幹雄は変わった人物だが…。

何か理由があつて彼を同行させたんじゃないのかと

落ち込む彼女に一声入れれば、生徒たちのところに戻って行ってしまふ…。

その何かが、自分たちには話せない内容で彼は詳しい事も告げず二週間近く不在

メールも途切れ…。秘密で付けたGPSも彼が、消えて直ぐに反応を消失

GPSに関しては三玖しか知らず、先月四葉にも見られたが深くは追及されずに済んでいる

バレれば彼だけではなく…。姉妹達にまでいらぬ誤解を招く

あくまでも あれは幸太郎の位置を確認しすぐに駆け付けられるようにするため

個人の気持ちは一切介入していない 三玖は悟った目で話を聞いていたとか…。

下田の言葉を思い出し…。今自分に何が出来るのか…。

それは彼に心配をかけるような事がないよう、過ごす事

心配事は尽きないが…。彼が戻ると言つたなら、その言葉を信じよう

少し真似をして頬をぱんぱんと叩き

気合を入れ直す…。『やはり痛いですね』以前と同じく力加減を間違えたのか

五月の軽く頬が赤くなつていおり 顔を見た下田はびっくりした様子で講義を再開した

(会えないのなら…。せめて あなたの無事を祈らせてください)

――

――

――

5月5日 土曜日

今日はいよいよ 中野姉妹の誕生日

その事を知らない風太郎からはお祝いの一言もなく

メールすら送られてこない

『流石上杉さんだ…。徹底してる』

自分たちが祝ったならお祝いの一言も欲しいものだが…。

知らないのなら仕方がないと自分達に言い聞かせ、彼女たちは部屋

でケーキや料理の準備を始める

因みに今日が幸太郎の誕生日だという事を知っていたのは

五月と三玖と四葉のみ…。

残りの二人も覚えておらず 四女の口からもれたその内容に二人

も少々驚いていた

一花は『…。なんで そんな重要な事を黙っていたの?』と一瞬目

が光っており

三人は身震いしたとか何とか。

四葉と違い…。一花なら覚えていた正確には思い出したのでは?

二乃なら真弓辺りから聞いているのではと勝手に解釈していた

案の定そんな事はなく…。二乃は心当たりがなくはないが、彼の誕

生日だとは思ってもせず

『今はいないんだし…。メールで祝うしかないわね』と申し訳なさそうにスマホを取り出す…。

好きな方は弟の風太郎だ でも 彼には幼い頃の恩がある二乃も

憎からずは思っており

ここにいればお祝いぐらいはしていたと口に出す

冷静さを取り戻した一花も同意見……。言われてみれば、幼い頃に彼の誕生日を祝ったような記憶がある

ただ現在彼は不在だ……。プレゼントの用意してない……。今から動こうにも彼自身不在だ

それに今日は姉妹にとって大事な記念日の一つ 台無しには出来ない。今回は諦めて次回に生かそうと自分に言い聞かせる

一応 三玖は彼へのプレゼントを用意しており

四葉にもそれを伝えてある……。『ああー そう言う事だったのか 任せて』と納得していた

その四葉も彼が戻ってきた時に一声くらい入れないと気が済まないと言いつつ

風太郎の時と同様に千羽鶴をちやくちやくと製作中

無事に帰ってくるよう願掛けにもなっている

最後に残った五月はこの中で唯一アルバイトをしておらず 収入と言えるものはない

蓄えはそれなりだ……。けど彼が今欲しい物は何かと問われれば頭を傾げる

ひたすらに考え悩んだ……。彼に聞いても『何でも良いよ』とあしらわれてしまうだろう

結局は答えは纏まっていない……。

物でなくてもいい あの少年が喜んでくれさえすればそれが一番なのかも知れない

手を動かしながらも幸太郎の誕生日への意気込みを込める五つ子

準備も終わり……。今は自分達の誕生日を祝おうと気持ちを切り替えた

この日のため為に……。彼女たちはそれぞれ休みを取っている

同じ日に生まれ 同じ日に祝う 今も昔もそれは変わらない。だから今日と言う大事な一日は、姉妹で過ごすそうと前々から計画していた

それぞれがプレゼントを用意

中身の分からないそれを皆で回す、はてさてどうなるのか？

好きな物はバラバラだ……。一体どんな品が贈られるのか五つ子全員がドキドキだ

何度か周回をしたのちにコクリと頷いた。

『いっせーの』

全員が同時にプレゼントを開ける…。

――

――

――

「あつー また私！」

「二乃はこれで三回連続だー」

「二乃はもう少し考えて刺すべき」

「ゲームなんだから……。いいのよ 直感で」

五つ子のプレゼントが無事終了

片付けなどに入る前に早速 四葉が買って来たプレゼントを五人で遊んでいた

彼女が買って来たのは 黒ひげ危機一髪 偶然見つけ

『これなら絶対に盛り上がる』と感心しプレゼント交換に

因みにこれを手に入れたのは、今三回連続で黒ひげを宙に飛ばしてしまった二乃である

最初はすごく微妙な顔で…それを受け取ったが、にこにこする四葉の顔を見て文句を言う気も失せた

「次は何か罰ゲームでも設けてみる？」

「具体的に何でしょうか」

「うーん 負けてからのお楽しみみて言うのはどうかな」

「ええー 一花の考えた罰ゲームとか怖いよー」

ただ黒ひげを飛ばすのも芸がない

次からは負けた人物には罰ゲームと長女は話す

嫌な予感しかしないと顔を見合わせ…。手に持つ玩具のナイフにも自然と力が入る

次の手番は三玖…。ごくりと喉を鳴らし

何処に刺せば飛ばないで済むかを考える…。周りが無言になり始める為 余計に緊張してしまう

ここは度胸！と疾きこと風の如く 一点集中で突き刺す

びよーん

「あっ…」

「四連敗は防げたわね…。」

「今回は三玖かー」

「うーん 罰ゲームは何がいいかなー ふふ」

「一花 手心は加えてあげてください 思い出がトラウマになっては困ります」

「じゃー 三玖には」

「…」

ピンポン

「あれ誰かしら？」

「罰ゲームになるか分からないけど…負けた三玖に行ってもらおうかな」

「インターホンに救われた…」

「一花の表情本気だから私まで焦ったよー」

「そう？ お姉さん悲しいなあ…」

「…では三玖お願い出来ますか？」

「うん これくらいなら別に大丈夫だよ」

大人げない発想が浮かばなかったと言えば嘘になる

同じ人物を好きになったもの同士思う所もあつたがせつかくの誕生日を最悪なムードにはしたくない

タイミングよく インターホンもなっている

今回はそれで良しにすると三玖に告げた…。

一花の顔を見て厄介な事を言われるかと覚悟を決めたが

来客に救われたとほつとする

土曜日の夜に一体誰か？ 三玖は玄関に向かい

外を確認…。玄関先には見慣れた 壮年の男性が荷物片手に立っている

「江端さん…。こんばんわ…。どうしたんですか？」

「こんばんわ…。どうしたと申されましても お嬢様方のお誕生日にお祝いの一つも言わないのは失礼」

彼女たちの父に仕える 秘書の江端が彼女たちのお祝いに来たと口にする…。

そーつと首を出し後ろを確認するが、江端一人で 父の姿はない やっぱりか 父は現れない…。今日だって電話で済ませ 何かあれば準備する

娘の誕生日なのに彼は普段と変わらず一定の距離を開けたまま…。

ちよつとくらいはと期待をしてないわけでもないが…。前回の模試以降更に距離を感じてしまっている

立たせておくのも彼に悪い…。入るよう促すが

彼は首を横に振り 持っていた箱を彼女に手渡した

「この箱は江端さんから？」

「いえ…。これは上杉幸太郎様からです…。」

「!? コーターから」

「こちらの都合で向こう様の住所は、伏せさせて貰っております ご理解のほどを」

「お父さんか…。でも何でこっちに送らなかつたんだろう？」

手に持っていた箱は、あの少年上杉幸太郎から送られてきており 嬉しい気持ちと同時に直接ここを指定しなかつたのかという疑問

も生まれる

純粹にこの荷物を日本へと贈った人物

坂下幹雄が彼女たちの住所を知らず…。中野マルオにいつも通り送るといふ少し間の抜けたオチがついてくるが、彼女たちがそれを知る由もない

「それと…。こちらが旦那様からになります」

「お父さんからプレゼント…。？」

「ご内密にお願ひします 『あの少年が贈って僕が贈らない訳にもいかないだろう』と」

「お 大人げない」

こそつりと教えてもらおう事実三玖は眉をひそめる

何かとあの兄弟には当たりの強い父が次はプレゼントで対抗し始めた

素直に贈って来ないあの人らしくもあるが、普通に贈って欲しいと内心思う

これからまた父の用事で車を出すため江端は姉妹に再度お祝いの言葉を送り

アパートから去って行った

二種類の箱を抱え部屋まで戻る

自分の戻りが遅く心配だったのだろう 四葉が顔を覗かせて

何かあったのと声を出す…。

「江端さんが届けてくれた コータローとお父さんから誕生日プレゼントだったって」

「お兄さんちゃんと贈ってくれたんだ…。 私たちは何も出来ないのに…。」

「コータローらしいと言えばらしいね…。 お父さんも少し意外だった」

「電話越しだと何て頼んでいいか困っちゃうからねー 何だろうね中身？」

部屋に戻ると『誰だったー』と一花がケーキを食べながら彼女等に問う

彼からの贈り物だよと三人に教え 案の定末っ子はビクツと体を揺らし三玖の方へと視線を向ける

「コータロー君から？」

「うん お父さんのもあるよ」

「パパからって意外ね……今まであつたかしら？」

「三玖と同じ事言ってる」

「実際本当のことだからさ……。今だってアパート暮しだから余計にそう感じるのよ」

「では早速開けてみましょう さあ！」

「五月のテンションが可笑しいんだけど……」

「割と最近の五月はこんな感じだから……。私は慣れたよ」

上杉幸太郎のプレゼントと聞けば、露骨にテンションも上がり始める末っ子

ウキウキわくわくと肩を揺らし……。本当に子供のように思えてくる

きっと彼から見れば、中野姉妹全員このような感じ見えているのではないだろうかと三玖は深く考え同時に超える壁は大きいのだと改めて考えさせられた、

「綺麗なマグカップだ」

「お洒落ね……。ちょうど五つあるのね」

「あとは……。これはお菓子かな？」

「他にも手紙が入っていますね、読んでみましょう」

『拝啓 中野姉妹様

まず初めに……。勝手にいなくなった事を謝罪します すみません
少々訳が合って知り合いの教師と街を離れています。

詳しい事は伏せさせてもらいます、個人的な事情と捉えて欲しい

今回は現状の報告とお前たちの誕生日のお祝いだ…。

こっちの都合で戻るのが、5月5日以降になり

誕生日に間に合わないと分かり。こっちにいる間に選ばせて貰った

無事に届けば誕生日当日には届く筈だ

みんな誕生日おめでとう

今のお前達に何を贈れば良いのか、今の俺には分からない

生活するうえで尚且つ持っていて不自然ではない

それに店先で並んだ、その五つの品を見てお前達を連想した。これが大きな理由だな

あとお菓子の方も是非食べてくれ…。向うで進められてさ 多分美味しい筈

風太郎やお前らには不安や心配もかけてると思うが修学旅行前には戻る…。

改めて 誕生日おめでとう…。今年もお前らが元気ならそれが一番だ ではまた

上杉幸太郎より 追伸…。どこぞの末っ子さん大量にメールを送るな軽くホラーだ』

「……………」

「五月…」

「五月ちゃん」

「あんたさ」

「ああー あの…。えっと 綺麗なカップですねー」

『逃げた!?!』

思い当たる節が多すぎるのだろう手紙を畳み

プレゼントを持っては現実逃避…。

何件送ったのだろうとじーっと五月の方を見る

「と言うかさ…。肝心なことばかされてあいつが何処で何をやってる

のか全然分らないんだけど」

「はぐらかさうとはしてないようだけど…。戻ってくるまで言えないって事なのかな？」

「まあ…。お兄さんは電話にも出てくれないので確認のしようもないからね」

「手紙で無事が分かっただけでも満足…。」

「三玖のお兄さんへの信頼が厚い…。」

手紙の内容でも 町を離れるとだけ記載され

江端から届け先の住所は消すよう…。言われたと話す

結局は何処から送られたのかも不明…。

ぱつと見て 何処にでも売ってそうなカップだが、送られてきた菓

子の方は

英語で書かれた箱に入っている…。日本製の物とは思えず

余計に混乱する二乃

あの男が簡単に口を割るとは思えないが、

来週には戻ってくるその時には、何処で何をしていたのかくらいは聞いておこうと一花は告げる

「彼が戻ってくるのは修学旅行前かー」

「何かあるの 一花？」

「何にもー、二乃の方こそ」

「さーねえー、ふふ修学旅行楽しみだな」

「みんなすっかり お父さんからのプレゼント忘れてるよ」

すっかり忘れ去られた父からのプレゼント

あの人がどんな品を贈ってきたのか、実のところ興味はあつた

恐る恐る中を確認 ぴたりと四葉の手が止まる

「なんとという事でしょう…。みて！お兄さんと同じくこっちはティーカップ贈ってきた」

「ふふふふ…：やっぱり お父さんとコータロー君って似てるかもね」

「パパは絶対やな顔するだろうけど プレゼントまで被るなんて」

最後の最後でオチを持っていったのは彼女等の父から

贈られてきた品で、全く同じ物でないが種類は同じだ

彼を毛嫌いしながら、何だかんだとプレゼントまで似たものを贈る
父に笑いが起きていた

同時刻別の場所の上杉家にも彼からの手紙が届き
内容を見て風太郎は凄く面倒そうな顔をしていたとか…。

第八十七話 不良少年とシスターズウォー①

五月七日月曜日

パン屋こむぎの店内では

真つ黒な何かが置かれており その前に座る中野四葉は

うーんと唸りこんこんと叩き強度を確かめる『石屋?』と冗談では言っていない

それ程までにこれが『何』なのか彼女には分からない

この物体の製作者である中野三玖はだんまりを決め

そつと四葉の方へそれを動かす

物体の正体は三玖が作った、クロワッサンらしく本人も自信なさげにそう口にする

彼が5月まで戻れないと言ったあの日から、今日まで幸太郎の代わりにパンの試食を頼まれ

四葉もその時のパンの出来が良く頑張る姉妹の為にこくりと頷いた…。

と意気込みは良かった だが徐々に出されるパンは形を変え

最初に出されたものから乖離し始めていた

見守る店長も額に汗かき目を細くする

「ま、まあ…。中野さんはバイト始めたばかりだし」

「うう…」

「パン作りは難しい、最初は誰でもこうなるよ…。幸運にも向かいケーキ屋はそれほど脅威じゃない出来る限り私もサポートするから中野さん頑張ろうね!」

「はい!」

「やると決めたからには私も最後まで付き合うよ!」

「ありがとう、四葉」

その日から更なる特訓が開始された

来る日も来る日も試行錯誤…。時には液状化したパンらしきもの

を生成した

『不思議な力で何故か失敗する』手順通りで何でこうなるのかは店長ですらわからず

壁に寄りかかり何が行けないのか自問自答を始めだす

五月十一日 金曜日

遂に明日12日に彼が戻ってくる

自然と彼女の纏う雰囲気も普段とは違い……。本気の文字が伺える
テキパキと手順通りに動き 下手なアレンジはせず一番大切な
食べてもらおう人の笑顔を思い浮かべ 最高の材料である彼曰く『愛情』をしっかりと丁寧に

パンに込める……。そして待つ事数時間……。

三玖のパンが遂に完成

店に出されるパンと比較してもやはり不格好さは否めない

店長も『頑張りが出てる、ここまで作れるようになってうれしいなー』とやつれ気味で答えていた

「パンだ……。4月に見たのは幻じゃなかったんだね」

「ふーん、えっへん」

作り上げた本人も自慢気な表情で四葉に見せている

見た目はほぼ完ぺきだ 味の方もこの調子なら大丈夫と四葉も太鼓判を押す

今日まで親身になって教えてくれた店長にぺこりとお辞儀

自分の頑張りは無駄ではないと店長の瞳から小さな水滴が流れていた。

「これを持っていくの?」

「まだ美味しいパンじゃない……。」

「三玖ちゃん修学旅行までにとか言ってなかったっけ?」

「はい一日目のお昼が自由昼食のはず……。」

侵略すること火の如し そこでコータローに取って置ききのプレゼントを渡す

「きつと、お兄さんも大喜びだよ!」

彼女が今日まで頑張ってパンを作っていたのはアルバイトでもあるが、

一番は先週誕生日を迎えた彼へのプレゼントとして最高のパンを彼に食べさせてあげたいのだ

彼がいないこの二週間少しは作る練習には最適だった…。

何を気を使う事もなく練習が出来ている 失敗はあったが、

次こそはもっと美味しいパンを作れると豪語…。しかし 彼女にはちよつとした不安も残っている

「たぶん来週までコータローとは会わない…。会うのは月曜」

「みんな忙しいからねー私も土日は家にいないかも」

「パンを作って食べてもらう為には、修学旅行はコータローと同じ班じゃないとお昼を一緒に出来ない」

「ああ…。自由時間はそれぞれ同じ班でっってお兄さんが書いてくれた資料にあった気が」

「パンも渡したいけど…。何よりもコータローと一緒に京都を見て回りたいんだ」

「よし！ 三玖ここは私に任せて私と上杉さんと三玖とお兄さんで一緒に班を作ろう」

お兄さんに頼みやすくするため上杉さんにも協力してもらおう！

「えっいいの？」

「お兄さんもだけど上杉さんも林間学校では色々大変だったから二人であるの二人に最高の思い出を作ってあげよう」

「ありがとう、四葉」

こうして中野四葉による第二の上杉兄弟思い出計画と幸太郎へのプレゼント大作戦を宣言

自体はどうなるのか…。不安や期待もある中で彼女たちは5月14日への気合を入れ直す

「それでこのパンはどうするの？」

「何時もと同じく 四葉が味見して良いよ」

「あむ…。普通に美味しい」

「フータロー見たいな事いうね」

「えっ…。あぁー」

「四葉もさフータローと回れるね」

「あつ、あくまで上杉さんは協力者だからー」

「はいはい」

――――

――――

――

5月14日 月曜日

黒板の前で上杉風太郎と中野四葉がせまる 修学旅行での注意点
や必要事項などを

各自に説明…。 事前に配布済みのパンフレットにも大切な事は
記載されていると修学旅行前に一度目を通しておくよう話す

「ではその修学旅行の班ですが…。明日までに決めといてください」

「当日はこの班ごとに行動します定員は五名までです

「決まりを守って楽しい修学旅行にしましょうー」

「朝から元気だな 四葉…。」

「あつ、上杉さん後々お話があります」

「時間が空けばな…。ではこれにて修学旅行の事前説明を終わります。
何かあれば自分たちに聞いてください」

元氣な彼女の姿は何時もの事だが、彼が感じる四葉のやる気は普段
の倍

そこまですて修学旅行が楽しみなのか…。

自分の兄とは正反対ど未だ顔を見せない 兄の事を思い出す

そう…。上杉幸太郎は、いまだ家に戻ってきていない

事情を知っている風太郎と違い…。彼が海外にいるなど知らない
五つ子は朝から困惑気味だった

2日前の12日だバイト中の風太郎の携帯が鳴り出した

画面に映る知らない番号から掛かって着ており恐る恐る電話に出た

『俺だ』と知った声が聞こえ彼も変な人間からの電話でないと分かれば一安心

『飛行機が遅れる。月曜の昼か夕方には帰る』

どうやら向うでトラブルがあったらしく飛行機が何便か遅れており

彼が乗る予定の日本行きも二日まで出せないと話していた

『事故だけは気をつけろ あと何か買ってこいよ』電話が切れる前に風太郎は少し要求を述べる

へーへいと抜けた声を最後に電話は切れ：翌日である今日は一人で登校だった

空白の席をじっと見つめる数名の視線やれやれ面倒事でも起こるのか？

彼から渡された胃薬に頼らざる負えない状況だけ避けて欲しいと風太郎は切に願う

――――

――――

――

「えーつと……上杉さん、上杉さんは何処かな？」

クラスでの話し合いが終わり

それぞれ休み時間を満喫中……中野四葉は先ほど教室を出て行った風太郎を探している

きよろきよろと周りを見回すが風太郎の姿は見えず、既に廊下にもいないのかと少し先まで歩く

修学旅行の際に彼の兄である幸太郎と三玖を同じ班にする為 風太郎にも協力を頼もうと考えている

同時に前回の反省も兼ねて今度こそ風太郎にも最高の思い出をと気合も入る

「あっ！上杉さんだ！」

事前に話があると伝えたあった筈だが、風太郎は数人の男子生徒と会話をしており

四葉の存在には全く気付かない…。

「上杉さー……」

「四葉ちよいちよい」

「一花……。どうしたの？」

彼の元へ行く前に自分を呼ぶ声がする

後ろでは手招きをし空いている教室に入るよう促す一花の姿

ここ最近の一花は何処か様子がおかしく、今朝も幸太郎の姿が見えずキョロキョロしていた

「修学旅行楽しみだね」

「うん楽しみ！」

「私たち京都って初めてだっけ？」

「違うよ。小学生の頃も行ったじゃん」

「そうだったね 四葉はまた行きたいところとかある？」

「うーんベタだけどお寺とかかなー……ああー食べ歩きもありだね。悩む、うむむ」

小学6年の際に彼女たちは京都へと修学旅行で訪れていた

その際に色々な思い出が生まれ あの三日間は姉妹にとって因縁のようなどころとなっている

それが理由だろう。ここ数日何処か姉妹の中の空気は重い

誕生日の和気あいあいな雰囲気は微塵も感じられず……。周りをよく見る

四葉はそれを一番に察知していた…。

「クラスの皆は五人班で悩んでるみたいだけどわたしたちにはお誂え

向きだよね」

「あつ！はは…。五つ子でよかったね…。その一花」

五つ子にお誂え向きな最大5人の班、彼女がそう告げた時に四葉は、大事な事を思いだし

先に話を切り出そうと会話を試みようとしたが……………。

「でもさコータロー君とフータロー君はどうだろう？」

「えっ…。」

「フータロー君は学級委員として周りに顔が知られてるけどさ コー
タロー君は

あの噂で今でも浮いたままお姉さんは心配だよ……………」

「えーつと…。それなら」

「それにさー4日なのにまだ学校にも来てない…。彼が置いてきぼり
も食らってしまう

うん…。そうだねここは私たちが人肌脱ごうよ」

「え、一花？」

嫌な予感を彼女は察した

すぐに話を切り出すべきだったと彼女は後悔している

「私と四葉とコータロー君の三人それに彼の弟であるフータロー君も
誘って四人で一班

いいよね？」

「！」

「あつ、ごめん電話だ…。じゃあ四葉よろしくね」

「えー待って…。まだ、どうしよう…。三玖にああまで言ったのに」

最悪の事態が発生した

上杉幸太郎不在の中で、彼を班に加えるべく動く人物が四葉以外に
も確かにいた

少し考えれば分かる事だったのもかشれない…。

姉妹のためと動いた自分がまさか二つの頼まれ事で頭を悩ませる
とは思ってもみなかった

去つて行く一花にかけた声も弱弱しく…。止める効力など皆無
ポツンと一人教室に取り残されていた…。

――

――

――

一方その頃

四葉との話を終え何処かへと向かつて歩く一花

勿論のこと電話とは嘘だ…。あの場で四葉が自分を止めようして
いるのが彼女は分かっていた

ただ彼が不在の中で話が進むとなれば必然的に弟の風太郎に回さ
れる

二乃の恋路を邪魔する形にはなるが、友人と呼べる存在が少ない彼
と同じ班になるためには

風太郎の存在は不可欠『ごめんね』と小さく口に漏らす
そそくさと足を進める中で彼女が向かうのは、図書室だ

そこである人物を待たせてある

「一花どうしたのですか？話があると云っていましたが」

「うん…。五月ちゃんにさ聞きたいんだけど、コータローくんはこ
のまま良いのかな」

「どういった意図があるのかわかりませんが、彼の現状は少しでも改
善すべきですね」

待たせている人物とは末っ子である『中野五月』

何時もピンと立つ アホ毛も何処か元氣なく倒れ…。五月の心情
を表している

この五つ子の末っ子は、一花にとって 三玖以上の天敵と成りうる
可能性があった

第一に彼女は上杉幸太郎の事を知りつくしている

彼が何故事故に遭い 何故孤立しているのか そして彼には言わ
ない様頼まれているが彼女も事故現場に居合わせていた…。ある

意味で当事者と自ら語る彼女は、この学園に来る前

高校一年の初めから様子がおかしかった

全員が全員追試を行い……。四葉のみ落第という結果になっているが

あの時に落第ギリギリの人物が二人もいた 三玖と五月だ

ここに来るまで……。正確には12月の初め頃まで二人の様子は明らかにおかしく

五月は勉強にも身が入らない状況が続いていた

『これが自分の実力です、甘んじて受けます』と話すが、あの時でもそれなりに点は取れた筈だ

でも自分の限界だと彼女は何度も口にしては、何時もややネガティブな発言が目立ち、最後の悪あがきのテスト勉強すら彼女は身が入ってないようにも見えた

当時は何故そんな事ばかり口に出し上の空が続くのか、見当もつかなかった一花だが、この学校に転校し、あの少年とのかかわりと彼が遭った事故を知って納得も出来た

上杉幸太郎の事が気がかりだった

それが大きな理由なのだろう：そして三玖も一度口にしていた『自分だけではなく五月にも負けない』と

けどその本人は姉妹の前では否定をし彼をただの友人だ主張

何も思う所はないの一点張り

だが、一花にはどう見てもそれが事実とは思えずいる

今朝だって彼が未だ帰宅していないと知れば血相を変え『警察を呼びましょう』の慌てよう

ただの過保護な後輩と言うには少し度が過ぎている

二乃は上杉風太郎に三玖が自分と同じく上杉幸太郎に好意を寄せ

これ以上のライバルは作りたくないが…やはり一言確かめなければ気が済まない

今は一花と五月のみ…彼女の本心を聞くにはいい機会だ

「ねえ… 五月ちゃんは、本当にコータロー君を好きじゃないの？ただの友人だって言い張るの」

「何故…それを聞くのです？…以前にも話しましたが、彼は恩のある人物です それ以上の感情は持ち合わせていません…。話はそれだけですか…なら私はみんなを呼んできます」

唐突すぎるとは口にした一花自身が思っている。

その言葉を聞いた途端に五月は一度視線を彼女へと向ける、そこか冷めたようなその目

そして五月は変わらず『何もありません』そう告げれば、他の姉妹を呼びに席を立った

「五月ちゃんは知ってる…コータロー君の初恋の話？」
「……………」

ぴたりと足が止まる

「彼さ…私たち、五つ子の中に初恋の人物がいるらしんだ凄い話だね」
「それが何だと言うのです？…彼が誰を好きだと思っけていてもその中には私は含まれていません」

私は彼の友人であり『彼を見捨てた』それが事実です……………」
「うん…。わかった ……コータロー君早く戻ってくるといいね。みんなが来る前に少し外すね」

彼とはあくまで友人関係…何があるともそれは揺るがない
真っ直ぐに自分を見つめる。その真剣な表情だった

けだあの一瞬、足が止まった事は事実 何処か思う所はあつても気持ちに出す気はない

これ以上、敵が増える事はない、彼女はそう受け取ったにこやかな笑みで一花はその場を一度足り去っていく

「一花…。あなたはきつとわかっていません…。でもこの気持ちを私は認める訳にはいかないんです…」

上杉：上杉幸太郎君を思うこの気持ちはきつと…」

――――

――

――

「お、今日は珍しく三玖がいるな」

「この後バイトだけど、ちよつとだけ参加する」

「全国模試以来の全員：ああ幸太郎君がいませんでした」

「上杉さん、お兄さんはまだ戻ってないんですか？」

「明け方に連絡来たけど、まだかかるとらしいな」

「あれ？あいつ電話に出れないんじゃないか」

「知り合いの携帯借りて電話かけて来たぞ：忙しい奴だ」

「図書室での勉強会、彼らがこうして全員集まるのは先月の大掃除があつた4月23日以来、三週間ぶりだ

全員集合と言いかける前に五月の言葉は止まる

そうここには何時もの七人はいない

風太郎 五つ子の合計六人 あの目つきの悪い少年は未だ不在で連絡を取り合う風太郎でも今日の何時に戻るかまでは分からないと話す

「なーに 落ち込んでるのよ」

「えっいえ さっ勉強を始めましょう！」

「その前に 修学旅行の話がしたい」

「え？」

「！」

「フータローは誰と組むか決めた？」

『!?!』

開戦の合図、火蓋は突然にきられる……。

中野三玖は、彼と彼の兄が迫る修学旅行でどのように動くのか尋ねた

「俺と幸太郎はセツトだ……。あいつの扱いは先生から任されてるしな
それでさ 俺たちなんだけど」

『ああー』と口に洩らし、彼は兄と自分は同じ班で動く姉妹に教えた
ここは予想通りと三玖だけではなく、一花も視線を向けた。

二乃も『やつぱり』と小さく零す。

それさえ分かれば、後は行動あるのみだ、中野姉妹の長女が続いて
動き出す

軽く四葉に目配せし、彼女はその場でスツと手を上げた……。

「待って……。四葉が話したいことあるって」

「ええ！」

「そう言えば、そんな事言ってたな」

「えーつと……」

「ほらね」

「何？」

「早く言えよ」

「うう……」

「四葉大丈夫ですか？」

「あ、あのですね……三玖も一花も一緒に、だけど五月も二乃は……姉妹は
皆一緒にじゃなきゃ……」

「？何のことだ」

「あ、そうだ！この際、皆で同じ班になろうよ！上杉さんたちも一緒に」

「は？」

「それが一番だけど…」

「定員は五人までって…」

「うん、だから私以外の皆でってこと！これなら万事解決だね」

「四葉……それは無理だ……お前を抜いても俺と幸太郎の二人で六名で」

「あっそうでした！えっーっと、どうすれば」

「それに大きな問題もある」

「えっ…」

三玖の言葉が開戦の合図

それを気に一花も動き、四葉に先ほどの話をするよう先手をうつ

三玖の気持ちと一花の考えに板挟みされ 目が周りどうすればと

脳をフル回転させる

何時もの七名でどうやって修学旅行を楽しむべきか…

姉妹は一緒にいなければいけない 五月や二乃も該当する

二人をのけ者にしたまま話を進める事も出来ない更なる 負荷が

脳にかかり

シヨート寸前にまで陥り……そこで彼女は思いついた

自分以外の六名で班を作れば何も問題はない これです争いも起きない

安心しきった彼女は椅子にこしかけようと体を動かすが

勿論 何も解決していない

定員は5名まで何時もの七人で行動を共にしている。そうここから四葉だけ抜いてもまだ一人多いままと誰かが抜けなければ、何の解決にもならないのだ…。

慌てふためく中で……。二乃はぎろりと一花を睨む

応援してると言っておきながら、彼女は四葉をけしかけた

理由はどうあれだ…。

定員は5名だ、だがそれ以下の人数で行動してはいけなとも言われていない

二乃は考える……。風太郎と二人つきりでの行動が一番だが…。

あの男にも恩がある 何よりも彼に誕生日を祝われ自分がメールのみで済ませるのはどう見ても不釣り合い それにだ一花や三玖が風太郎の名前を出すのなら自分が彼の名前を出しても別に構わないだろう

好きな人間は何も異性として恋としての意味合い意外も存在する
それを幼い頃の二乃は何度も味わった、あの男は紛れもないお人好しで同時に馬鹿な兄貴だと…

「私とフー君とコウにいの三人で組むとか」

「！」

「コウにい…？」

「二乃……………あなた」

「四葉が何を言おうとしてたか知らないけど…決めたわ 好きな人と馬鹿な兄貴の二人と回る

あんたたちに拒否権はないから」

（上杉君の言ってたことは嘘じゃなかったのですね それに先ほどの一花の問いまさか？）

（やられた…まさか、その手で来るのか、彼がフータロー君と行動する以上リスクはあったけど

こども堂々と宣言されると手の出しようがない）

「お、おい？二乃勝手に」

「フー君は静かに、コウにいには私から連絡するから」

「コウにい…」

「何かしら？」

「わ…私も」

「言いたいことがあるなら今言ってみなさい」

「……………」

「待つてください」

「なっ五月あんた何よ！」

「上杉君が一任されているとは言え、やはり勝手に決めるのは良くないかと、それに上杉君も何か言いたい事があるようですし…ここは彼

の言葉に耳を傾けるべきです」

「悪いな五月…あのな、俺さクラスの男子と班を組むんだ、すまん」

「えっ……………」

「そう言えば上杉さん、誰かと話していたような気が」

「ああ…。幸太郎も加えて四人で行動することになってる」

五月のフォローもありやっとな風太郎は自身の発言を許された

先ほど風太郎は前田と武田の二名に修学旅行の班を組まないかと誘われた

勿論 幸太郎も同行だと事前に話している

武田は大喜びで、指を立てる。前田は林間学校の前日に一花の件で彼の名前にビビってしまい、顔を見てはどうすべきか考えていたと話す。それに上杉幸太郎という人間には興味あり

『伝説の先輩と組むんだろ、やってやるよ』と威勢が良かったとか、その伝説とは風太郎は、何か全く興味もないが、兄の知らないところで色々と尾ひれのついて噂が大きくなっているようだ

やっと話せたのか風太郎は 安堵のため息をもらす

何故班決めでここまでの苦労をしないと行けず 話が勝手に大事になりかけるのか…………。

二乃の発言も気になり、慎重に動きすぎるのも考え物だと彼は改めて思っていた

—————

—————

—————

ガラガラと図書室の扉が開かれた…………。

「おーいっす、おひゃー」

『幸太郎君・コータロー・コータローくん・お兄さん・コウにい！』

「おっ、幸太郎かお前もう放課後だぞ」

「悪いな、知り合いとは別れて行動してたから連絡のつけようもなく
てき」

「つか何の話してたんだ？」

微妙な空気が漂う、図書室にあの男が現れた

珍しく眼鏡を着用し 既に学校は終わり放課後というのに何と悠
長な登場だろうか……。

呆れつつも彼に事情を説明 修学旅行で行動する班決めの話と
なっていた

『修学旅行かあ……』眉間にシワを寄せ目を細めており露骨に嫌な表
情にへと早変わり……。

「お兄さんー」

「四葉？どうしたすげーやつれてるぞ」

「幸太郎君今の今までどこで何をしていたんですか！連絡もつきませ
んし」

手紙を一通送っただけで！今日だつて遅れて」

「五月のその言葉聞くと戻ってきたんだなーって実感するな」

「そう言う話では無く！」

「すまん、心配かけたな、それとただいま」

五つ子相手となれば、彼はついからかってしまう

むすつとする五月の表情一つで理解できる。彼女がどれだけ自分
の身を案じてくれていたのかも

詳しい事は言えないし、余計な心配も避けた方が得策と判断、じろ
りと睨む風太郎をしり目に笑顔でやり過ごす。

ただ戻ってきたなら言わなければならぬ一言を彼はまだ言つて
いない

『ただいま』と優しくその言葉を口にする……。

「お、おかえりなさい。幸太郎君」

「コータローお疲れ様……お帰り」

「三玖もかわりねーか？」

「コータロー君お帰りーお姉さん寂しかったなあ」

「へいへい二乃もただいま」

「お、お帰りコウにい…」

「やったぜ。昔の呼び方だ」

「う、うるさい！」

「それで…修学旅行の班だけど俺とお前はセットな」

「了解…。行先は京都だっけ？行きたくねー」

「お前…まだ あの時の事気にしてるのか？」

「あの事って何ですか上杉君？」

「こいつが元々行くはずだった修学旅行先が、前日で行けなくなつて俺と同じ京都に来てたんだ」

「まじで学校の行事に参加するところくな目にあわねーよ」

「えっ？あんたは、まだその時は……………」

えつと驚く数名をしり目に彼は、普段と変わらぬ様に彼らに当時を軽く話した。

「中1でも修学旅行は行くところはあるんだぜ？俺がそうだったな、んで風太郎とも出くわしたな」

「その話はやめろ……………」

上杉幸太郎の通う中学は1年から修学旅行があり、その当時諸事情あり旅行先が沖縄から京都へと変更となった。せつかくの浮き輪も無駄になったと軽くぼやく彼に苦笑いの数名

偶然日付も被っていた彼と風太郎は京都で出くわし、その当時の二人の関係性故余り弟からは良い印象は受けなかった事を思い出しては、ニヤリと視線を弟へと向けた

『四葉君、何をしてるんだい？』

『風太郎ー！ここに居ただね、良かったあ…………探したよ!!』

あの日、上杉風太郎が、ある少女と出くわし行方が分からなかった日、彼の兄である上杉幸太郎もまた弟探しへと動いていた……………。

「お兄さんもいたんですね……………少し驚きました」

「まあーな……………」

何やら気になる事があるのか、彼に声をかける四葉は、視線を落とす

何故彼女が、そのように目を逸らすのか幸太郎には一応だが、事情は分かっているつもりだ

彼はそれ以上あの日の話題を出さないよう一旦その場で一区切りを入れ、席へと腰をかけようとした

その時だ……………。ポトンと何かが落ちる音がした

「ん？」

音の発生源は何処なのか？、一同が見たのは、席まで移動してきた幸太郎本人だ

鞆を机に乗せる際にスルツと下に落ちてしまったらしく『悪い、悪い』と彼等に声をかけた

落ちた鞆からは、幾つか小物が散乱していた。

彼自身も到着する頃には、授業も終わっているだろうと教科書の類は家に置いてきたと述べる

「……………そう言えば、幸太郎も持ってたんだな」

「ああ……………、鞆に入れっぱなしだったな、その『御守り』」

「大切なもんだろ、大事にしろよ」

近くに座る風太郎の元まで筒状の御守りが、飛んでおり拾い上げては、それをじつと見る

風太郎本人もその品と同じ物を持っており少しばかり思うところがあるのか、深くは聞かず持ち主である兄に御守りを返した。『大事なものだろ』と言葉も付け加えてだ

大事な物 風太郎が言う様にこれは上杉幸太郎にとって大事な品
今よりも生活が厳しい当時の事、修学旅行先で友人が彼へとプレゼントとして渡したものだ

『大事、大事』と後生大事に鞆へと入れる余りすっかり忘れていた、何とも罰当たりな事だと彼は苦笑いを浮かべる。

『これあげるね……はい』

(あいつから俺にプレゼントなんて当時は、驚いたもんさ……6年前か)

名前に幸福を意味する『幸』がつくわりに何かと不幸な目に逢う彼を常日頃心配していたのか、

『少女』は彼へとそれを渡せば、ある約束を交わし去って行く……
当時を懐かしむように大事そうにぎゅと握る、

ふと彼の方に視線がいった一花や三玖には、彼の表情が何処か悲しげで切なそうにも見えたのは気のせいだろうか？

「幸太郎君……」

「なんだー中野さん？」

「むー」

「へいへい、五月さん何ですかー？」

「その御守りは大事なものですか……」

「まあーそれなりにはな、あいつが人に物を渡すのは滅多にないし、せつかくの思い出の品だ」

「そうですか……。ん？ くんくん」

「おい、まじでお前は犬か？ 急にどうした」

「幸太郎君から……女性物の香水の匂いがします。何ですか？」

「!? な、何ですかね、さ、さっぱりわからん」

お守りに関する事が気になった五月はすつと顔を出す

三度彼に揶揄われハムスターのように頬を膨らませ、『悪い悪い』とほくそ笑む彼は、自分の所持するその小さな筒の由来を軽くだが、彼女に説明

拍子抜けしたのか、案外素直に聞き入れ普段からこう物分かりが良ければと内心思っていれば、ふいにその末っ子の鼻は何か甘い匂いを感じ取り、彼の周囲で鼻をならす。

突然の事に彼も距離を開けるが、ガシツと手を掴まれ動きを阻害された

何処か冷めた目で彼にこの香水にも似た匂いの正体は何か、執念深く問いだす

どうにか適当な理由をつけては、その場をやり過ぎそうとするが、側面からも気配を感じた。

「コートローどういう事？」

ずいっと三玖が顔を覗かせる

「なんだよ、三玖まで、俺は知らねーって！」

(たく、坂下の野郎：何が幸運のおまじないだ、すげー疑われてるぞ)

三女まで参戦と本格的に分が悪いと彼は直感

手を軽く払い除け考える素振りを見せ、この元凶で数時間前まで行動を共にしていた

あの女の行動を思い出した。

『ふふふ、これは厄除けだ、有り難く受け取ってくれ』車から降りる前に徐に小さな小瓶のような物を取り出し、シユツシユツと彼にふりかけた。『てめー、なんだいきなり！』

彼の言葉も聞かずに彼女は車を走らせ何処かへと去って行く、残された彼は『何だったのか？』と頭に疑問符を浮かべながら荷物を纏め一時帰宅し、そのまま学校へと向かう事になった。

『何が魔除けだ厄除けだ』と今の状況に彼は眉をひそめた。

発端である詐欺師女へと軽い呪詛を唱えつつも、迫る二人にどう対

処したものと頭に浮かんだ、言葉を並べ何とか誤魔化そうと試みる………なんでここまで必死になって隠しているのか？正直彼自身も理解出来ず解せないといった表情を浮かべていた。

「何処に行ってたんですか？ この数週間教えてください」

「残念ながら秘密です。」

「コータロー君が私たちに秘密か、残念だな」

「誰だって、胸にしまっておきたい秘密はあるだろ？俺だってある」

「幸太郎は秘密と隠し事が多すぎるけどな」

終わった話だと思えば、末っ子は掘り返しこの数週間に自分が何をしていたのか？と顔を近づけて問い質し始める………。

『はあ…』と軽いため息を吐きながら視線を軽く逸らす彼はただ一言『秘密』と強めの口調で言い放ち鞆を取っては、彼女から距離を開けた。

弟にも『お前は秘密ばっかだ』と凶星を指されたが、踏みとどまり、打開策を練ろうと周囲に目をやり備え付けの時計を確認………。

(ん………そろそろか)

放課後を利用して行われた、話し合いも何時の間にか時間が過ぎ、運動部以外は帰宅する時刻になり始めている。さて今日は平時で普段の自分は何をしていただろうか？

考えるまでもない月曜から金曜まで毎日バリバリ体を動かす彼曰く生活の一部『バイト』だ

「うるせーつうか、時間だ時間！そろそろ帰るぞー」

「あっつけねーもうそんな時間か、幸太郎、今日からバイト復帰か？」

「たらふく休んだしな、店長も『今日からよろしく』ってさ、んじゃ俺達はこれでまたなー」

五月の横を過ぎ去れば彼はそのまま逃げるように図書室から姿を消した。続く風太郎も彼の後を追いかけて行った、同時に彼らが去った後の室内には静寂が訪れる……………。

『……………ええ……………』

嵐のように現れ、嵐のように去っていく

結局は誰も同じ班になれず微妙な空気のみが、図書室内に残り続けた。
ていた。

「あつ、あいつにおめでとうって言うの忘れてた」

「私もだ…プレゼントまで貰ったのに…コータロー君は何も言わないしや」

「まあまあ、後日改めてお祝いすれば、良いじゃん」

「では、修学旅行の班もこの五人という事で異論はありませんね？」

「仕方ない…コータローもフータローも決まってるし」

翌日には正式に

風太郎 幸太郎 前田 武田

一花 二乃 三玖 四葉 五月

それぞれ修学旅行の班が決まった

納得のいかない様子の二乃だがこれ以上話をややこしくする訳にもいかない

今は一旦これで落ち着こうと全員に言い聞かせる四葉…

早速気まずい雰囲気は漂う 五つ子達は果たして無事に修学旅行を乗りきり

後日開催される体育祭まで無事に過ごす事が出来るのか？それがそれが思惑を巡らせ

刻一刻と時を刻む事に……………。

第八十八話 不良少年とシスターズウォー②

5月19日 土曜日

「お兄ちゃん達…今日はお出かけよー。来週には修学旅行だよ！」

「あぁーそうだな…旅の品は買わねーとな」

「お前は海外行って荷物十分だろうけどな」

「保護者として同伴しよう」

「そう言うのいらん」

「じゃー三人でお出かけだー」

修学旅行の準備もあり

今日行われる筈だった家庭教師はお休みとなった

そんな訳で俺は珍しく暇を持て余し『ぐでーん』と寝転がっていた風太郎は『勉強がしたい』と相変わらぬお勉強大好きな男の子だ俺がいない間に少しは変わったかと思っただが、多分気のせいだったのかもしれない

ぼーっと座ってる兄二人に声をかける妹は

何もしないんだったら、来週の修学旅行の準備をしなさいと少々呆れている

勉強とは言いつつもその風太郎君の机の上にはしおりが置かれ、気になった場所はチェックがされているなどこういったイベント事は気合が入っている

俺みたいにいまだに『行きたくねー』と言ってる女々しい男とは大違いだな

「俺も用事があるしな…充電器いい加減買わねーと」

「黒焦げだね」

「海外怖いな」

――――

――――

――

家を出て暫く歩けば何時か三玖達と来たシツピングモールへと着く事に

学校行事とは言え、旅行と銘打って 三日間も家を留守にする訳で、持っていくものも新しい方がいいと考え妹は俺達に言い聞かせた一方『わざわざ新調しなくてもいいだろう』そんな風太郎を無視しらいはさくさくと手を進めていく

三人でこうして出かけるのは何時ぶりだろうか？

偶には悪く無いなど楽しい時間を過ごす中でらいはが、ぽつりと呟いた一言で風太郎は顔色を変え

焦る様に持論を唱えだすも『五月さん達の誕生日をケチってたたら嫌われちゃうよ』

全うな意見が弟に突き刺さった…。

話を聞くと…。面白い事実だ 風太郎は半年以上過ごすあいつ等の誕生日を把握していなかった

まあ家庭教師で精一杯さ、そんな話をする余裕はあの頃の俺達にはなかった。

呆れるらいはに焦りの入りを滲ませる風太郎君は俺にも詰め寄る

「残念だが、俺は送ったぞ？誕生日だしな」

「そう言えばお兄ちゃんと同じ日だったね。お兄ちゃんは何か貰った？」

「特にはないが」

「ほら見ろ…。やっぱり必要ないだろ」

「それは俺が日本にいなかったからだ」

「お兄ちゃん『頂いたらお返し』小学生でも知ってる常識だよ！」

全く持つてその通りでございますよ。俺を引き合いに出しては面子を保とうとするが、俺のは全く参考にならんし。上げる上げないは人の自由とは言うが、半年以上過ごして向こうから頂き物をしたのならやはり返すのが礼儀だ。それに散々世話になってるしな

風太郎は如何すべきか悩み悩み考え込む中で、ふと…視線は、前に

向いていた

俺も釣られるように前方を向くと『うーん』と小さく声を出す

「何処かで見た事のあるアホ毛だなー…。」

「やっぱ あげたほうがいいかな？」

「ひゃあっ！」

少しはアドバイスをと思ったが、俺が何かを言う前に風太郎は前に歩き出す

その先には二人の少女だ、一人は風太郎に声をかけられびくつと肩を揺らし後ろに下がる

もう片方少々苦笑いしつつもこちらに手を振ってくれている

「よー、お前ら」

「どうもです！お兄さん、上杉さん、らいはちゃん！」

「あつ誰かと思えば、幸太郎君たちでしたか…。びっくりしました」

「五月さんと昨日メールしてたんだ。一緒に買い物しようって」

「ふーん…それより誕生日の…。むぐ」

「あー。シーシー」

「お前は馬鹿か？少しは自分で考えろー」
「？。」

朝から妹が元気な理由が分かってきた

お出かけの相手は俺たちの他にも二人いた妹が大好きな五月と四葉だ

こいつもなつかれてるな…。見てて微笑ましいけどさ

一方何を血迷ってるのか誕生日プレゼントが欲しいのか本人に聞き出そうとし出す風太郎を二人で止める頭は良い癖に何でも気がきかないのか…。

「やっぱり あなたも一緒でしたか…。そういうことなら一緒に買い物できません」

「何かすいません」

「ああー 違うんです!? 幸太郎君のことは言ってます。どうか拗ねないでください!」

「おい! 何だその変わり身は! 流石に理不尽だろ」

「あっはは、あの三人は相変わらずで安心したな」

「と 言いますか…。 幸太郎君の眼鏡変わりましたか?」

「目ざといな…。 以前使ってたやつが壊れてな、まあ何だ知り合いから頂いたんだ、プレゼントらしい」

「誕生日プレゼント…。 私はまだ渡していないのに」

「ん? 五月さん?」

「いっいえ…。 な、何にもありません」

「5日の事気にしてんのか…。 別にいいよ。 いなかった俺が悪い ほれさっさと買い物するぞ」

俺が時折使っていた眼鏡だが、イギリスに行っていた時だ

あの野郎が、ぶっ壊しやがった、『あれまー 残念 よし君に贈り物受け取ってくれ』

元から壊すつもりだったようだ…。 性根が腐ってやがる。

どこで調べたか知らないが、渡された眼鏡の度はピッタリで違和感なく使えている

最近ではコンタクト代も馬鹿にならないと感じ始め

暫くは以前のように眼鏡を着用してすごそうと考えている。

「ま、待ってください 幸太郎君!」

「なんだー 俺たちがいると難しい買い物か」

「はっはい…。 できれば待っていただければと思いましたが」

「ふうー了解 んじゃ俺はその間に自分の用事でも済ませるか…。 風太郎は四葉と待っていてくれ」

「わかった 何かあれば連絡…。」

「俺のスマホ死んでるんだ、悪いな」

頬赤らめる少女を見れば、俺も配慮が足りてないなど自己嫌悪だ

女性の買い物とはそういうものだというのを俺は忘れていた

謝りを入れ、風太郎と四葉をお店の前で待機させ

俺は自分の用事を済ませるべく、四人とは別行動をする事にした

…。

――

――

――

今いる衣服売り場は二階だ

俺が向かうのは三階にある携帯ショップ

火を上げ黒焦げとなった充電器を買い替えにやってきた…。

ここまで来ると保障も効かない 新しいものを買った方が幾分か
ましだろう

早速見つけたストアには、何種類もの充電器やスマホカバーが置か
れ

どれが良いのか、じーっと中を見渡す

困っていると思ったのか定員さんが俺の方へやってきて

どれが自分の機種に合うのか、丁寧に教えてくる

値段は安い物なら3桁高い物なら三千円少しまで…。

充電するだけなのに何でここまで高いのか、あまり金はかけたく
ないし手頃な値段で妥協しよう

そーでもないかとせつかくのスマホも鉄屑だ…。

適当に品を選び会計を済ませストアを出る

俺はみんなが待つ二階へと戻るべく足を進める。

「さて……？あれ……あの後ろ姿……どっかで？」

歩いて行く途中で俺は、一人の人物に目がいった

白い服に白い帽子と清楚という言葉がお似合いな少女が、人混みに紛れ何処かへと向かって行く

ぱつと見た時に 俺はその少女の後ろ姿に見覚えがあった

その服装の事も聞いている

風太郎は以前……。あの写真の少女と再会したと教えてくれた

名前は 零奈 と名乗っていた

本当に姉妹の誰かが変装しているんだなと分かるほど露骨な名前を使っている

俺が知る本人の可能性もあるが、憶測にしか過ぎんし会ってない俺には分からない

もしかしたら風太郎があつた 『その子は誰かまた別の子』 それこそ姉妹が成り代わっていた

なーんてオチもついて来そうでもある。

「ん？」

追いかける訳じゃないが、人混みの中を歩く訳で少し足元がお留守なのだろう

態勢を崩しそうになっている……。

ささっと彼女の元まで足を動かし倒れない様支える事にした。

「おつと……。大丈夫か、五月？」

「えっ あれ 幸太郎君 な、なんでここに」

「今は零奈って言った方がいいか？」

「あ、あのこれは色々と事情がありまして……。その」

「別に俺から風太郎には言わねーよ 安心しろ」

支えた 零奈 そう風太郎に名乗った人物の顔は帽子を被り名前を言われれば、一瞬間を伏せるが間違いない。

中野五月だ

変装してしようが、こいつの事だけは何か分からんが、他の姉妹よりも区別がしやすい

倒れないよう支え 俺だと分かれれば、何故か慌てだす、軽く傷つくんだけど

周りの目もある落ち着くよう言い聞かせ、一旦深呼吸をさせる

「助かります…。私から明かすつもりなので」

「意外だな…。」

「えっ」

「俺は風太郎のあった子は、『四葉』だと思ってたんだけどな？」

「!!」

「どうした？」

「何で知っているんですか」

「だってよ…。今のお前らは区別が難しいけど 昔の写真は区別がつくぞ あれは四葉だ」

俺は前々から写真の少女が『四葉』と知っていた

実際にあの現場に居合わせて風太郎をクラスまで連れ帰っている

先生は四葉を連れてさっさと行ってしまおうしな

それに昔の俺は、姉妹の区別なんて簡単にやってのけていた、羨ましい限りだよ。

どうして五月が零奈さんの名を名乗り 写真の少女（四葉）のフリをするのか

興味がないと言えば嘘だが、ここで聞くのは神経が凶太すぎる

一旦着替えに戻ると言うので俺は近くで待つことに適当に時間を潰すこと数分、五月は今朝会った時の服装に戻り照れくさいのか顔を伏せている

「最初に言わせてください…。 私はフリをしていただけです 幸太郎君も知っている通り

本当は四葉が上杉君と会った少女です」

「と、いう事は、風太郎を池に突き飛ばしたのもお前かアグレッツィブ過ぎんだらう」

「上杉君は、何で言ってしまうんでしょうか……。色々と諸事情がありまして」

「無理して言う必要ねーよ……。お前も言ってたろ。正体は明かすつもりだったってさ」

「少し、彼を試そうと私が誰かと問いました。しかし彼は『わからん早く教えろ』ともうあの子には興味がないんでしょうか……」

「それは違うな……。純粹に分からただけで、お前の問題に答えるのが面倒なだけだったんだらう」

それに風太郎はあの写真の少女を忘れたことは一度もないさ」

今の風太郎は、純粹に修学旅行を楽しみにしている

邪険に扱うが、本当に嫌なら無視を決め込むか一旦その場を離れるしやりようは幾らでもあった

だが風太郎は零奈（五月）の話最後まで聞いて『おしえろ』と言っている

本当に真面目で馬鹿で不器用な奴だ……

「大切と思える存在ってのは……。ずっと心に残るもんさ。俺だって同じだ」

（初恋の子……。それとも中野六花の事……。どちらなんですか。声に出してあなたに聞きたい

でもそんな勇氣は私にはありません……。聞く資格すらないのですから）

「お節介になるけどさ……。お前が正体を明かす手伝いは出来る、四葉が正体とは言わない。先ずは自分が五月だと明かす。そしてあの子が誰なのか風太郎に問えばいいさ」

「でも、また教えろと言われて終わってしまいます……。ただ彼を混乱させるだけです」

「それでもいいだらう?」
「えっ」

まの抜けた声を耳にした…。

「お前もこの事実を抱えたまままで過ごすのは辛い筈だ…

風太郎と話すたびに、今の姿が過ぎるんだ

別にあいつは迷惑だとは思わないさ ただ あの中の5人から4人に絞られたと分かるだけだし

まあ…。四葉からすれば困った問題だけだな…。」

「幸太郎君らしいですね、少し安心しました」

「何が？」

「ここ暫くいなかったのも、もしかしたらなんて、でもあなたは変わりませんね。ちゃんとみんなの事を考えていてくれます。」

二週間近く日本を離れた程度じゃそうそう人は変わらん

多少なりと自分を見つめ直すにはいい機会だったのは確かだ…。

イギリスに俺を知る人間は幹雄さんくらいだ、何を気負う必要もなく俺が俺として振る舞えた

色々と発見もあったし…。無駄じゃなかったな

「俺もさ 何時でもお前らの傍にいれるわけじゃないし…。 出来

るお節介はさせてくれ」

「それは どういう意味ですか？」

「特に意味はねーよ ほら行くぞ」

「もーまたはぐらかすんですから」

頬を膨らます ハムスターのような五月さん

最近は何処か姉妹の様子がおかしくて俺もどうにか出来ないかと思っただけだ

五月に関して言えば、問題は無さそうだな

こいつが抱える問題は、零奈さんの名を名乗り 四葉のフリをし続ける事だ

四葉にどんな意図があつて自ら正体を隠すのか、俺が考えたところで答えは出ない

ただ一つ分かる事がある 修学旅行が終わって以降に四葉がリボ

ンをつけだした

五月が星型の髪飾りをつけだした…。 思い出せる記憶ではこんなところか…。

本人がいずれ風太郎にその事実を告げる筈さ

俺がすべきことは、近くに入れる間はいいつらを見守ってやろうと変わらぬ思いさ

幹雄さんこれに関しては、俺は引く気はないですよ

「そう言えば幸太郎君の用事とやらは終わったのですか？」

「ああ…ほれ」

「携帯ショップの袋ですか？ 何かお買い物ですか」

「一応は今一番欲しいもんを買って来た…。ないと面倒だし…ってどうした五月」

「幸太郎君…。何故…私に相談してくれないんですか！ お誕生日のプレゼントとして私が贈って差し上げたのに、これでは何も渡せません」

「別に俺は、人にお返しをして貰う為に誕生日をあげてない 人が喜ぶ顔が好きなだけだ」

「／／／ その、私たちが喜ぶところも好きなんですか？」

「当たり前だろ…。俺はお前ら姉妹が大好きだ 全員が全員いい奴だ」

「あの…。その…。」

プレゼントにはお返しをか…。

風太郎にああまで言ったのにこっちも忘れていた

あいつにも返さないと、この新しい眼鏡を買い与えた…いや壊した元凶は、脳内でもにんまりと不敵な笑みを浮かべてやがる…。

あいつの好きなもんか、あれだけ一緒にいたのに点で思いつかねーな

「五月は俺からの贈り物はどうだった？」

「えっと…。とても可愛らしいカップで使うのがもったいないですね」

「使ってくれ、それが存在意義だ……。まあ嬉しそうにしてるって事は評価は上々か」

「日々割らない様にするのが大変です」

「おっおう……。そうか」

無駄に気に入られたなああのマグカップたちは

露店でちようど五つ出してて目に留まったんだ……。どうにも五つには縁がある

向こうでの通貨はなくて幹雄さんが代わりに払ってくれたというのは秘密にしておこう

色々と台無しになっちまう……。

「向こうで風太郎が待つてる、お前は先に行つててくれ」

「幸太郎君はどうするんですか、まさかこのまま帰るとは言いだしませんよね」

「言わねーよ、用事をもう一つ思い出した、終わったら合流する、多分何処かのフードコートだろう？」

「スマホは充電がないんでしたね、やはり私も同行します、幸太郎君一人では迷子に」

「ならねーよ、あそこで一人たたずむ弟を任せたぞー」
「こ、幸太郎君！」

出かける機会なんてめつたにない

どうせならあいつに返すお返しも今のうちに買っておこうと考えた

来週には修学旅行でその次は、体育祭だ……。

会う暇もないし俺が自発的に会う気も起きない

それにだ……。あいつの誕生日も迫っている、少し早めだが渡すのありかもな

どれが良いかは分からんが、ぱっと浮かんだもんで別に良いかもしれんな

どれをあげてもきつと答えは同じ『君にしては珍しいね』と皮肉つたように言ってくる

そのまま俺は二階のあるコーナーまで走り 彼女へのお返しを考えていた

「五月どうしたのー何かむくれてるけど？」

「幸太郎君……。なんてしりません、あむあむ」

「上杉さん 何かあったんですか？」

「俺が知るか……。戻ってきたと思えばずっとこうだ」

「幸太郎お兄ちゃん 何をやったの……。」

（上杉君の事もですが、幸太郎君にどう伝えれば良いのでしょうか、何もかも上手く行きません。）

その日にフードコートでひたすらにカレーを食べ続ける一人の女子生徒が現れたと噂が立っていた

第八十九話 不良少年とシスターズウォー③

5月21日 月曜日

修学旅行当日

「いよいよ、始まるね」

「おい五月ー新幹線乗るよ」

「ひとまずは、フー君の班に付いて行くわよ」

「でもフータロー君嫌がってたよ?」

「うう：眠気が」

待ちに待った? 修学旅行の当日だ。

学校へは行かず、直接駅に集合となり俺と風太郎は、荷物を纏めて目的まで向かった

まあ、何事もない、そう何事もないまま無事に駅へと着いてしまった

『ああーやだやだ』と嫌味をぼやくも何事もないならそれで、いいのだろうと気分を変え先に待っていた。前田や武田と合流し何やら風太郎は、前田に目配せをしている

気になりはしたが、大した問題ではないとさして問題なのは誰なのか、以下数名を浮かべつつも気持ち修学旅行へと向ける
(すげー生徒の数だなあ…怠いな)

さっさと新幹線に乗ってちゃっちゃと修学旅行ライフを楽しんじまおう。

「ワータノシミダナー」

「幸太郎さ、もう少し感情込めるよな?」

「うるせえ」

「上杉君、幸太郎君!」

清水寺行きましようよ 私たちの班と一緒に!」

「班ごと行動だろ 五月さん?」

遅れて来たと思いきやいきなりヘッドハンティングだ

何の為に修学旅行の班を決めたのか、分からなくなってきたな

確かにこいつが、風太郎に正体を明かすための手助けはすると言ったがここまで露骨に動くとはな

まあ五月らしいと言えば五月らしいが…。

本当に不器用だなあ…スマートにやれと言ってやりたいが、それが出できれば、苦労はしない…。

「はいはい…。五月さんは大人しく自分の班に戻りましょうねー」

「こ 幸太郎君！ 待ってください」

「言うには早すぎる。状況を考えろー」

（ええー 五月までどうしちゃったの…。）

五月を中野姉妹のところまで戻し、俺も風太郎たちの班まで戻る…

始まりから前途棚な修学旅行

ここから数時間の新幹線の旅も無事に終わってくれりや良いんだけどな

――――

――

――

「はい フルハウス！ いやーごめんね」

「負けた〜」

「ぐぬぬぬ…。 何でかこの手の勝負は強いのよね」

新幹線の中では五つ子が暇つぶしとしてトランプに興じていた

何度目の勝利だろうか、圧倒的な価値運と手札で他の姉妹を薙ぎ払う一花

前回の黒ひげといい、連敗続きの二乃は悔しがる

もう一度の勝負を希望し 一花も乗り気で何度でも勝負を受けると強者の余裕を崩さない

ほとほと自分の勝負運の無さに呆れる四葉は次の勝負を辞退し周りを見渡す

風太郎と幸太郎の班は、ここから少し先におり

四葉は、位置関係上彼らを把握出来ない、何故だか自分を除く全員の様子もおかしく

この先不安が尽きない彼女にとって彼らの行動しだいでどう転ぶの分からない…。

(みんな何で、焦ってるのかな?)

ふと隣で寝息が聞こえ 横を見ると目を開いたまま、トランプを握る三玖がいる、すぴーすぴーと本格的に意識は夢の中の様子

今朝からずっとこの調子で、合流するまで彼女も一時的に何処かに行っていた

「三玖?」

「あっ……………ツーペア」

はつと気づき トランプを確認 自分の手番だと勘違いし

フルハウスには勝てないツーペアで挑むが撃沈

『弱い、遅い』と二乃も呆れ気味

自分がぼーつとしていた間に勝負は既に三回戦になっていた

「ねえ三玖、眠そうだね今朝もどこか行ってみただけど」

「うん、バイト先に無理言って、朝から厨房貸してもってた」

「えっ、じゃあ…」

「うん」

「それを食べてもらっていいよ…ずっと今日まのために頑張ってきたんだもんね

最後まで応援するよ」

「冷めても美味しいといいんだけど」

「大丈夫だよ。三玖の頑張った証だよ、お兄さんも最高のプレゼントって喜んでくれるよ」

こそこそと話を始める 二人

三玖が朝から姿が見えず眠そうにしている理由は、バイト先のパン

屋に早朝から行っており

ギリギリまで試行錯誤した結果 三玖史上最高の一品が出来たらしく

ここまで彼女の練習に付き合っ来て来た四葉も最後まで応援を続けると三玖の背中を押している

彼がいない誕生日 彼のために作ったその品を彼にプレゼントするため

三玖は今日まで頑張ってきた

それは報われるべきだと四葉は感じている

二人のやり取りが目に入ったのか

トランプ片手に一花は次の勝負を姉妹全員で行おうと言います

ただの勝負ではない 勝った人は何でも命令できるルール付きと

提示

その瞬間 三玖の目が開く

五月もお菓子を食べていた手を止める

二乃の表情もかわり

一花はニヤニヤと笑みを浮かべる

メラメラ バチバチとほんわかムードを楽しむはずの修学旅行

その筈だった… この盛り上がりはどうかトランプだけでと他の心から願う四葉だった

一方男子組も

「では、次の問題です……慶安4年、まだ幼い徳川家綱が時期將軍とされました、政治や俗世に疎い彼が任命された事である人物が、後に大きな事件の首謀者と呼ばれますが、その事件又は人物とは誰でしょうか？」

「由井正雪だろ……」

「確か、慶安の変だったような」

「何でお前ら二人は、即答できんだよ、つかもつと楽しめる事しろコラ！」

全く持つてその通りと答えを言いつつも、歴史の問題を言いだす後輩に相も変わらず真面目だなと思う幸太郎がいたりする

――――

――――

――

教員の園田は生徒達に必要な事項を説明

貴重品はきちんと持つていくようと釘を刺す

その場で解散の声を聞けば、先ほどまで体育座りで退屈そうに話を聞いていた生徒達も一気に活気づく……。つくづく若さだと園田は生徒を見て実感していた

「何かしら今の音？」

「どうかしましたか？二乃」

「何でもないわ……多分」

「歯切れが悪いですね」

「さーみんなどういいう感じで周っていか意見だしてー！」

さっそくと移動を開始しようとした二乃は、カシヤツという音を聞きその場に止まるが

怪しい姿はなく 自分の考え過ぎかと心配する五月に一声かけ

一旦どうするか四葉は各々の意見を求める

「それは、やっぱり旅といえ、買い物よ 古くはお寺より お洒落なお店の方が楽しいわ」

「わかってないなー せっかくの京都だよ？ ならではの美味しい物を食べさせたいよ」

「私も……その意見に賛同ですが……。今は色々と見て回るべきです。

その方が こうた……

「いえいそうではなく楽しめるので」

「ねえー五月はやっぱりお兄さんと何かあったの?」

「別に何もありません…:…決して!」

「うーん怪しい」

「あつコータロー君達の班が出発したよ」

「付いて行くわよ」

「どこ行くんだろ?」

二乃は買い物 一花は食べ物巡り 五月は観光と意見はバラバラ
変な時には一緒になるのにこういう時は全く噛み合わない、やはり
五つ子

別段おかしくない話として取り入れようかと考える四葉だが、一昨日まで普通だった五月が何処か様子がおかしい
加えて言うならあの買い物以来だ…:

何時も彼の後ろを付け回すのは変わらぬ姿だが、何処か別の意図も
感じてしまう

一応本人にこそこそと聞いているが、何でもないの一点張りだ
ある意味で一番に強情な五月がそうそう簡単に言う訳もない
うーんと考え込む間に上杉兄弟の班は移動を開始
彼女たちは、それを追って尾行するように後ろを歩く

「五月…:。あんた何でそこまで俊敏に動けんの?」

「まるで忍者だね…:。普段からそうやって彼の後ろから動いているんだ
ね」

「しっ、気づかれます…:。静かについて来てください」

一瞬にして角に隠れる慣れたその動きに三人は啞然している
のんびり屋な一面とは打って変わり…:。尾行となれば本気の五月
がそこにいた

—————

—————

しばらく彼らの後を気づかれぬ尾行する一同

何故ここまで本気を入れて隠密行動をしているのか疑問を覚えだしているが未っ子はやめぬ

上杉幸太郎にばれないよう着実に後ろに迫る

彼女の将来は本当に大丈夫なのかと心配になってきはじめて

男性陣は後ろを尾行されてるとは知らず会話を交えながら進んで行く

途中ある神社の前に止まると 前田を除いた三人は丁寧にお辞儀

何かを言われたのか前田の大きな声が聞こえだす

「なんか、地味ね」

「こちらこちら」

「移動するみたい」

楽しく見れるスポットかと思えば、学問の神へのお祈り

全国で1番 2番 5番の男たちが祈ってもこれ以上の成績アツ

プは見込めないのでは？

彼らの考えている事はいまいち理解できない…。

お祈りが終われば、彼らは次の目的地へと移動を開始

すぐそのあとをついて行こうと一本前に足を出した時 『待ってください』と五月が四人を制止

一体どうしたのかと…。前を見た 一花と三玖は目の前の状況を疑った

そこには確かに 男性陣が屯っている移動したと思えば

見知った顔でもいたのか、歩みを止める 上杉幸太郎の姿と彼女たちも見知った人物が会話をしていた

「あれって紡木さんだよ、何でお兄さんと話してるの？」

「確か前に、フー君の誕生日を祝った時に顔合わせたのよね？ って

いっかなんで、あの人がいるの」

「様子がおかしいです…。 上杉君たちは先に行きましたがどうしま

しょうか…。」

そこにいたのはラフな格好で何時もと同じくにごやかスマイル
中野姉妹のお隣さん 大学生の雨宮紡木が、上杉幸太郎と何やら話
をしている

ケラケラと笑う彼女と対照的に幸太郎は怪訝そうな顔つきで彼女
の言葉を聞き流す

離れた場所故会話が聞き取れない…。

ここは慎重と更に気配を殺し近づくと

その時だ、彼は、自分のスマホを取り出した

何かを始める暫く様子を窺う五つ子達…。すると彼は、自分のスマ
ホを分解したのか、

後ろをこじ開けると中からは、スマホのバッテリーだろうか小さな
物体が出て来た

「あいつら何やってるの?」

「少し近づけば、会話も聞こえる筈です」

『てめー あの時か俺のスマホにGPS仕掛けたのは?』

『あれれー バレちゃったかー…本当にそう言うのは感ずくね』

『はあ、っ』

「!!」

(GPS? 五月も三玖も何て顔してるのよ)

(い いえ…)

(何でもない大丈夫…。)

彼の取り出したスマホのバッテリーには何やら点滅する小さな機
器が取り付けられ

目の前の女性にそれを突き出す

ばれたかーと言いつつも余裕を崩さず にやにやと笑うのみ

一方同じく彼のスマホにGPSを着けていた五月には思わぬ被弾
だ

その場で固まってしまい表情も青ざめる

『おかしいと思っただよ お前が俺の物を持って行つて何もしないわけがない』

坂下：。 お前、大学とか言つてたがよ。中野姉妹の会話を聞いて俺のスマホにつけたこれで、先回りしやがったな：休学中つて言つたのに可笑しいと思つたぜ。』

『ご機嫌ななめだねー幸太郎』

『当たり前だ、勝手にGPSとかつけられて誰がいい気分になるかよ：？』

(うう：ずみません 幸太郎君)

(五月は悪気があつてやつてる訳じゃないんだよ。元氣出して)

彼の言葉は雨宮紡木に向けた言葉だが、それは五月にも該当し

深々と突き刺さり膝をつき 涙目になっている

ここに来て五月史上最大のダメージが叩きだされていた

そんな事とはつゆ知らず幸太郎と雨宮紡木の会話は続く

彼に『まあまあ』と全く謝る気配を見せない彼女は持っていた鞆から小さな手帳を取り出しては、目の前で眉を細める彼に投げ渡して見せる。

『はい、君の旅の忘れ物』

『あつ！無くなつてたと持つてた、パスポートじゃねーか！お前さ、これが無かつたせいで』

『すまないねえ：。私の鞆に入っていたんだ失念していたよ』

『知らぬ存ぜぬつて誰が言つたんだらうなあ：坂下？』

彼女が、投げ渡したのは、上杉幸太郎のパスポートだった。

幹雄の説得で海外へと向かった彼だが、最も大事な身分を示すパスポートを紛失し

役所で無事に再発行は出来たものの、予定していた飛行機を見送る

羽目になり時間をずらさざる負えず日本へと戻ったのは、翌日の事だ。

家族にも友人にも心配させる結果となり紛失したのは自分の軽率な行動のせいだと少しばかりナイーブになっていたとか
.....

(旅? って何であの男は、普通に会話してるの? 知り合いなの)
(二乃音量低くしてバレル)

『落ち着きなよ。せつかくの修学旅行が台無しだよ。今日は君の忘れ物とき、先日のお礼に来たんだからさ』

『うるせ』

『ふふふ 機嫌の悪い君は見てて最高だね』

『っ…。俺がお前に渡したのは眼鏡の借りだ……。他意はねえーぞ?』

『少し早い誕生日プレゼントってところかな? ありがとう大事にしよう』

『へいへい、もーなにもないよな、俺はいくぞ、つうかお前が、どっか行け』

『それは残念だねー……。でもさ幸太郎、一つ忠告だ。君は今すぐ回れ右をしてホテルに戻って、修学旅行の最終日までずーっと引きこもってることをお勧めしよう。じゃないと……。最悪な目に合うよ』

『お前と出くわす以外に何が、最悪な事があんだよ? 適当ぬかすな、じゃーあばよ。坂下……』

『つれないねえ、まあ…精々君は、愛想でも振りまいて彼らと接すればいいさ』

忠告はしたからね……。また会おう、幸太郎』

彼女の言葉は彼に深く刺さる

けれど素直には、受け取らず彼女を横ぎった…。

ちつと舌打ちし、近くのごみ箱にスマホのバッテリーを投げ捨ててしまった

三年となった彼らが思い出を作れる数少ない機会だ、面倒くさいとぼやきつつも、大切な友人と過ごせるこの三日間を良い思い出として彼は終わらせたいと考えていた。その矢先に思いもよらぬ再会と数週間前の事実、イラっとする気持ちを胸のうちに無理やり押し込む事で何とか整理をつける、付けざる負えない。

(……………気まずい……………)

彼が去ったあと 言葉を失ない啞然とする一同

そんな彼女たちの存在に気づいているのか…。

にやりと口もとを緩める雨宮紡木は彼とは別方向へと去って行く

お隣の雨宮紡木が、何故上杉幸太郎とここまで親しく会話し

彼のスマホに細工をしたり彼の所有物を所持してたり、何より彼がああまで親しげに話すのか、親しげにしては刺のある言葉も幾つか散りばめられていたが、何にしる理由は全く分からない…。

この中で唯一 彼らの会話の際に一言も告げず傍観していた中野一花だけは、彼らの関係を知っていた、知ってしまった。

あの二人が幼馴染だったことを…。

でもそれ以上の関係だったのか、彼女の口からは聞かされてはいない…。

『どうだろうねえ、ふふふ』

答えを欲する自分をあざ笑うかのように女性は口を紡いでしまった

そしてその一花が ぱんと手を叩き『早く、フータロー君たちを追いかけよう』

他の姉妹に声をかけ再び尾行を開始する…。

「雨宮紡木さん…。」

「だ、大丈夫だよ！、紡木さんも帰ったみたいだし、二人つきりになれるチャンスはあるはずだよ」

――

――

――

ちよつとしたトラブルを目撃してしまつたが、一旦気持ちを切り替えて

修学旅行を楽しもうと四葉がみんなに言い聞かせる

彼が何故あんな態度だったのか五月も気になりはするが、彼女の言葉に従い

足を動かす 他の姉妹も後を追う

何個も続く鳥居をくぐる 『映えるわー』と二乃は写真を撮影

何枚か撮り終わり、今度は一花たちを並ばせ 写真の撮影を撮り始める

ここ数年で五つ子でこうして写真を撮るのは何時ぶりだろうと振り返る

二人、三人と全員での写真以外は撮っても五つ子が並んで一緒にとは中々ない

ぱつと浮かぶのは、小学生の時の修学旅行もしかすればそれ以来だろうか……

「絶対撮ろうね！」

「はいはい、気が向いたらね………ほらピンとズレるから動かないのー」

それに今は二乃が、スマホで撮影とやはり全員で撮つたとは言い難く

今度は全員一緒に写つた一枚を撮りたいなと四葉が口に出す

(彼と撮ったあの日は、後でしたね……)

姉妹とのやり取りでふと過ぎる、昔の記憶……

修学旅行が、終わって少し五月はある事を思い出してクスリと笑みを浮かべていた

「ゴータロー達いないもう上かな？」

「さっきまで会話してたのにね、なかなか見えないわ」

「男の子は早いからね」

「よーし 私たちもがんばろー！」

『『おー』と気合を入れ進行を再開……』

したものの…数分後

「ハアハア 結構長いわね」

「足が痛くなってきました…。」

「もー 皆おそーい！ 三玖もファイトー」

「ありがとう 四葉…。」

「あの子は気楽でいいわね」

「あれが四葉の良いところだよ」

「そうね…。どこかの腹黒さんとは大違いだわ」

「！」

風太郎たちの班を追いかける一同

先頭には三玖の両手を引きながら未だ疲れを見せない四葉

二番手はその三玖本人

そのあとを五月 一花 二乃が追いかける形である

元気に動き回る天真爛漫な四女の姿は見ていて元気が貰えるが、予想以上に長い階段に全員の体力は徐々に持っていかれている

前方で仲の良いやり取りをする二人と違い 温泉旅行から誕生日までの因縁か

一花と二乃の様子は何処かおかしく

真ん中に挟まれる形の五月は頭にクエスチョンマークを浮かべている

「どうせ今日も悪巧みを企ててんでしょ」

「はは…しないよ そんなこと」

「まあ…どうでもいいけど…。私の邪魔はしないでよね ほーら五月走ってー」

「待ってください二乃…。足が」

「あんたさつきまでの俊敏さはどうしたの コウに置いて行かれるわよ?」

「! 行きましょう 今すぐに」

「わかりやすいわー」

――

――

――

登った先は開けており、人通りが多く見られた

横に立てかけられた地には現在地が表情され、この少し先は、山頂に続く道になっているらしい

ただその道は、二つに分けられ、

遠回りだが、周りを観光できる右ルート

内側で、最短で頂上に着けるが、見るものが少ない左ルート

どっちに行けば風太郎と合流できるのか、二乃は脳を活発化させている

隣ではいい加減疲れが来たのか、五月が息を切らし

立ち並ぶお店を指さし一旦休憩をとってから再度彼らの後を追うべきだと主張する

「それであいつらが、どっか行ったなら笑えるわね」

「うう…。幸太郎君も私が食べる姿は好きだと言ってくれたので、こは食を優先します」

「はいはい…。じゃーお昼食べちゃいましょうか」

「待って…。お昼は！」

「何よ、他に食べたい物あるの?」

「…その」

「三玖?」

「ええつと…」

ここで、お昼休憩を取ってしまったえば、幸太郎と一緒に昼作戦が、台無しにどうにかしなければ…

姉妹と過ごす時間だが、先に三玖との約束を守ってあげなければ、しかしもかかし下手に動けば、変な目で見られてしまう。

(むむむむどうすれば、…。あつ!【あれだ】)

悩み悩む四葉の脳裏に新幹線内で行われた

第三回ポーカー対決が浮かぶ。あの戦いに勝てば、一度だけ全員に命令できる権利があった

どうせ自分は勝てないとさっさと勝負を降りようとしていた彼女だが

彼女は手札も見ずそれを出した。『!』と驚く四名

最高の役 ストレートフラッシュ 物欲センサーとはよく言ったもの

一番食いつかなかった彼女の勝利で幕を下ろした…。

ふむふむと悩んだ末

四名に 右手で3 左手で2を作り ここから先は別行動で進んで行こうと提案

勿論 二乃からの反論はあった

「勝者の私が言うことは絶対! これはみんなも分かってるよね!」

にっししと笑い 小さくガッツポーズ

今は少しでも幸太郎と三玖を合流させ彼らの仲を取り持つことが先決だ

不満はあれど、自分が言い出したことだ一花はその場で口を紡ぐ
右と左 それぞれの道に分かれ彼ら兄弟と入れ違うことなく合流できるか…。

一方男子組は…。

「先輩、さっきの女性はまさか？」

「今は関係ない…。けどあいつだよ」

「まじで、急に出て来たな」

「つうか、上杉兄貴のスマホどうすんだよ？」

「電池パツクねーから使い物にならねーよ」

「分解すんなよ」

「うるせえ」

彼女たちが 出発したと同時に近くの飲食店から顔を出していた

「右と左どつちがいいかなー」

「うう食い過ぎて腹がいてーよ」

「前田君は食べ過ぎだよ…それで先輩はどつちに行きますか？」

「俺はどつちに行ってもやばい予感がしてくんだよな…。」

—————

—————

—————

左ルート

一花 二乃 五月グループ

「あんたが、余計な提案したせいで変なことになっちゃったじゃない、人の流れから見て あつちが、正規ルートよ もしかしたら先に合流

されてるかも…。」

（二人は、先ほどからなんの話をしているのでしょうか？…。うーん 幸太郎君の居場所を知りたいですが…あれ以降GPSは不調ですし 彼が、嫌がる為安易に使う訳もいきません）

「あつ、お手洗いです」

「この先には無いのよねー 行っておこうかしら」

「私もついでに行っておきます」

「……っ」

右ルート

三玖 四葉 グループ

「三玖く 早くしないと お昼終わっちゃうよー」

「うん…。 あと少し」

「この日のために ずっと頑張ってきたんだもん あと少しだけ頑張ろっ！」

「四葉… ありがと…」

—————

—————

——

「もう お昼なのに… うう お腹が空きましたね…」

「フー君たちは、お昼ご飯どうするつもりだったのかしら？」

「あれ？ 一花は？ いませんね」

「まさか…先に向かったのかしら？ 本当に姑息ね」

「？」

お手洗いから戻れば、一人入口付近で待っている筈の中野一花の姿はなかった

今の彼女のことを思えば一人で待たせるのは得策ではなかったと 二乃は眉を顰める

「ハアハア……」

中野一花は左ルートを全力疾走で走っていく
確かに山頂まで登るなら左で十分だ……。しかし向こうには四葉
がいる

姉妹の中で一番に運動を得意とする彼女ならばものの数分で駆け
あがってしまう

それでも一花には余裕があつた

一番に運動できる四葉と共に動いているのは一番に体力の少ない
三玖

いくら四葉でも彼女を気遣いながら登れば、山頂までは確実に時間
がかかり

全速力の自分の方に分がある、追いつかれる前に目的を遂行できる
筈、

鞆の中から三玖が付けているものと同じヘッドホンや彼女に似せ
たカツラを取り出す

(ここ)数日見てて分かる。三玖は、確実になんらかのアクションを起
こす。それに雨宮紡木がここにいる……。あいつは危険だ……また出て
くる前にコータロー君と会って……何をやる？

本当に無鉄砲だ、焦り過ぎて考えが纏まってないや……。けど取り消さ
ない、後戻りは出来ないのなら……。一度ついた、この嘘を演じ続けよう、
彼にあの日を思い出してもらおう為に！)

走っていく一花 全ての準備が終われば

三玖と瓜二つの姿に早変わり……

山頂まで あと少し 姿の見えない彼はきつとこの先に待ってい
るはず

もう少し あと一段……

「着いた……！」

パチパチ

到着したと同時に一花は、小さな拍手を耳にした。

「お疲れ様ーでも残念 幸太郎はいませんでしたー」

「雨宮紡木…」

「凄く良い恰好だね…中野三玖さんに成りすまして彼に取りいるのかー」

「なんでー君には初恋っていう 最高のアドバンテージがあるのに何でそこまで必死に嘘で固めるのかなー…いやーツツハハハ、楽しくてお腹が痛いなー」

山頂には確かに一人待っていた

幸太郎ではなく 三玖でもない それは一番に顔を会わせたくない雨宮紡木だ

自分の今の姿をにやにやと眺め

口々に言葉で彼女の心をいたぶる

見透かしたようなその態度にイラつきを覚える

ぐつと拳を強く握り…平常心を心掛け 自分を落ち着かせようと深く深呼吸

「今は、あなたと話してるほど暇じゃありません 私はこれで…。」

「早くした方がいいよー 私はどうだっていいけどさ ふふふ」

（彼女がいるのは予想外だけど…。コータロー君が、いないって事は

まだ途中ってこと？

これだけ走ったんだ…。三玖たちは、おいつけ…！)

彼女は左で、幸太郎とすれ違う事はなかった

トイレ前で待機していた理由も男子の方から彼が出てくる可能性も考慮したためだ

中に人がいる気配はなく彼女は全力疾走で、駆けあがり 案の定 雨宮紡木というイレギュラー以外の姿はなし

そうなれば、上杉幸太郎は未だ右ルートの間あたり

三玖をつれた四葉は、まだ道の先端程で足止めを食らっている筈と高をくくっていた

すぐに右に行って確かめようと雨宮紡木を振り切り 鳥居前に向かおうとした時

誰かが、こつちに向かっている 足音は一つこれは…。きっと彼だ 待ち望んだ、その瞬間は、一瞬にして地獄と化した。

ドクン

ドクン

ドクン

「ついたー！ー、やったねー、三玖！」

「ありがとう おぶってください」

「全然平気だよー 力持ちだからね！」

「えっ…。 四葉なんで…。」

『!?!』

ドクン
ドクン
ドクン

鼓動の音は鳴りやむ事はなく、同じくピキリと何か大切な物に小さな亀裂が生じ始めた。

「二花…。 何で私の変装してるの？」

「ッ…」

登ってくる足音は一つ それは紛れもない事実
でも一人だけとは限らない

確かに三玖と昇れば時間もかかってしまうけど 四葉は彼女と幸
太郎の時間を作るため

ここまで三玖を背負って顔色一つ変えず走り抜けてきていたのだ
…。

当然 そこまで予期している筈もなく ぼったり出くわす三名に
雨宮紡木の顔は愉悅に満ちている

「最高だねー この構図は…。 じゃー私はこれで、お疲れ様 中野一
花 試合終了だ」

「紡木さんまで…。 さつきは下に戻ったはずなのに…。 ねえー一

花どうしたの？

なんで、私に変装してるの？理由があるなら、話して？」

山頂へと着いた二名は、目の前の状況に一瞬言葉を詰まらせた

雨宮の存在もあるが、第一に…なぜ？一花が自分の変装をしているのか、嫌な予感を浮かべるも彼女は、何か理由が有る筈だ

まるで自分に言い聞かせるように一花に問いを投げる

『潮時か』と小さく呟くと雨宮は体を動かした

先ほど一花が、やって来た方向へと足を向かわせ、最後の最後…冷めきったような表情と共に彼女達の前から姿を消した

「一花… 私はそんなつもりで言ったんじゃないよ…。

それが本当になりたいことなの？」

「四葉、どういうこと？」

「一花は邪魔しようとしている…。」

「邪魔って 何の…。」

その一方で四葉の言葉は止まらない

この状況を招いたのは、あの日の自分の一言だ

姉妹を思つての行動 それが裏目に出ってしまった

戸惑う三玖を余所に一花に何度も問い質す

何故 彼女が、邪魔をするのか 何の邪魔をするのか…。

甘んじて受けようと一花は、何も言わずだんまりを決め込んでいた

…ただ

それは何時までも続かない…。彼女には見えている

後ろから迫ってくる 見覚えのある、白黒の髪を…。

「!？」

とつさに四葉を止めにはいるが、彼女は止まらない

「待って四葉！」

「三玖からお兄さんへの 告白だよ！」

「よーしつい…えっ」

「ハアハア… 本当にお前早すぎる」

「お兄さん……！ 上杉さんも」

「これは…どういう状況だ」

「…」

間が悪すぎた…彼が最後の鳥居を超えた丁度のタイミング
四葉の声が周りに響く…、シーンと静まり返る…

「あれ？紡木さんだ」

「やー 五月さんと二乃さん」

「ど どうも…（あれを見てるからやりずらいわね」

「山頂に行くのかな？」

「はい：紡木さんは降りるところですよね」

「まあーね…行くなら早く行った方がいいよ…最悪な状況だ」
「最悪？」

「ハッ！まさか、あいつ」

状況はさらに悪化する一方

たった一つの言葉で、中野姉妹の全てが崩れ始めていた

第九十話 不良少年とシスターズウオー④

一体…何がどうなっている

山頂まで登ったまでは良い…でも何かがおかしい
登り終えた直後に俺の耳は確かにそれを捉えた

『三玖から、お兄さんへの告白!!』

緊迫した空気を漂わせるこの場で俺の動きは、確かに鈍っていた、
待て待て、今あいつは、なんて言った?? 『三玖から俺への告白』だ
と?!

一瞬動きは、鈍るも確かにその言葉は俺の耳へと入っていた。

(三玖が、俺を)

まさか、もしかして何て幾つか、巡る考えを隅に置き

現状へと目を向ける、後ろを振り向いた四葉と目が合い、静かに視
線を逸らす、この場をどうにかするべく弱弱しく言葉を紡ぐ

「あの…これは、違くて…ああでも」

まずい、これは何かまずい事が、起き始めてる、いや違う既に状況は拗れに拗れている

どうすべきか、少しばかり悠長に構えすぎたのかも知れない。

悪手がすぎる、後手に後手、俺が四葉に言葉をかける前に彼女は、言葉が続ける

「お兄さん…もしかして、今の聞こえて」

「!…。」

『今の』とはまさしく先ほどのやり取りの事を示唆している

聞こえていたかと、その問いを俺へと投げかけた時だ、ふと俺の視界へと映っていた隣の少女が、一瞬揺らぎ、パツと姿を消した。

「おい、三玖!」

「三玖!」

彼女は、『中野三玖』は走り出した、こちらを向くでもなく

顔を伏せ、一花の横を通りすぎ、反対側まで普段の彼女から想像も出来ない、速さでかけ下りていった。

「つ……………!三玖?なんだこれっああー!待て三玖!!」

ぼとりと、彼女が向かったと同時に下に小さな紙袋が落ちている事に気づく、あの子の持ち物だろう

拾い上げると共に俺も反対側へと向かって行った。

「はあはあ、やっと頂上ついたわ…。一花をとめないとややこしいことだ…。」

「一体なにが起こってるんでしょうか？」

「早く見つけないと、つて、ん…三玖どこに！」

「あれ？」

下ると同じくここまで登ってくる五月と二乃の姿を確認

すぐに五月へと曖昧な指示を飛ばすが、突然の言葉で彼女は、ぽかーんとしている

「五月！頼む三玖を！」

「えっえ？幸太郎君、？」

「!!」

反対方向から登ってくる五月たちに声をかけるが、間に合わず

彼女たちには目もくれず 三玖はそのまま下まで全力で駆けおりてしまう

このまま三玖を一人にしておく訳にも行かない
目の前の長い階段に一步を踏み出した時だ…。

後ろで二乃の怒号が聞こえる

振り向いた先では、一花の首元を掴み上げる二乃とされるがまま
止めにはいる四葉にこのままで良いと言葉を述べる一花の姿…。

「悪い五月は、三玖を追ってくれ」

「はい、分かりました…。」

「どうやら…。風太郎にお前の正体を明かすどころじゃなくなってきた」

「大丈夫です、それより今は三玖を追います 何かあればすぐに連絡をします」

何が どうして 誰が 状況が読めない俺には三玖を追いかけてもかける言葉はない

姉妹である五月の方が俺より効果は大きい筈だ…。

取り合えず今は二人を止めないと

「あの子を泣かせて これで満足！ あんたと違って正々堂々やっているのよ…あんたはどこまで…」

「二乃だけには言われたくないなあ…、温泉で言ったじゃん 他人を蹴落としてでも叶えたいって…私と二乃の考え方さ何が違うの？ 教えてよ」

「確かにそう言ったわ 他の誰にも譲れない 今の関係よりも優先したいって でも

私たち五人の絆だって同じくらい大切だわ

たとえ あの子じゃなくて あんたがコウにいと結ばれても 私は祝福した！」

「…っ」

俺と…三玖が？ それに一花だと…。
やっぱりあの偽三玖が言っていた事は本当だったのか…。
それにあの子の正体は、…

(つくそ、情けねえ)

まさか、坂下の言っていた言葉が本当だったとは

『八方美人の屑野郎』 さっきの会話だけじゃない

以前にあいつが俺に対して罵った言葉が、今更突き刺さる

『周りに合わせて良い顔をし 他人の気持ちもくみ取れない』

『自分の置かれた立場と言葉に責任をとれないようなら君は一人になるべきだ』

イギリスで俺はそう言われていた まさしくそれだ

(こんなんでも良く年上ぶってたな、俺は、なんでこいつ等をちゃんと見て無かった？)

だめだ 俺が、熱くなつてどうする

兎に角今は、二人をどうにかしねーと最悪 あの日の再来だ

「お前ら、一旦落ち着け」

「フー君、ごめん冷静じゃいられないわ、それにあんたもあんたで私たちに何て気を遣わずに

三玖を追いかけなさいよ！」

鬼気迫るような彼女の圧で風太郎は、手が止まる

今の現状でこいつも相当混乱しているが、それでも二人を止めたいと動くが、当事者がそれを拒否してしまった。

「そうさせてもらう…。風太郎 一緒に来てくれ」

「おう…。」

「わ、私も捜します！」

ここにいても二乃も一花もともに話も聞けそうにない

五月を先行させている…。

どうにか三玖を捕まえたい欲しいが…

最悪な事態は避けたい 誰もが悲しまず 誰もが笑顔で終われる

それが一番なんだ…。

――

――

――

中野三玖は走り抜ける…人とぶつかっても気にせずただひたすら前に前に

今は誰とも顔を会わせたくない

自分を知る人間と…一花や彼とどう向き合えばいいのだろう

今はただ逃げ出したい…何もかもが怖くてたまらない

後方では自分を呼ぶ 中野五月の声が聞こえているが、余計に顔を

会わせずらい人物だ

彼女を見れば自然と彼を連想してしまうのだから…。

走り抜けた先 気づけば見知らぬ場所だった…。

「私は、コータローに自分の気持ちをも一花も…私はどうすれば」

「三玖！ 逃げないでください 彼が待っています」

「五月…ダメ 今は会えない 会いたくないよ」

「何故ですか？ いったい山頂で何があったのですか？ 一花の行動と関係があるのですか」

「ごめん…。何も言いたくないよ」

「三玖…。わかりました…。では一旦ホテルに戻りましょう…。このまま皆と合流するのも酷ですから」

「…………ごめんなさい」

「きつと あなたは何も悪くありません だから悲しい顔はしないでください」

事情を知らない五月にはこれ以上なにも言えることは無い

ただ今は彼女を休ませて上げよう せつかくの修学旅行で何が起きたのかが分からないが

疲弊した姉を連れまわす程 彼女も呑気ではない…。

一旦 ホテルに戻るべく 近くのバス停まで向かう

自分たちが来た時には既にこの時間帯のバスは出てしまい 追いかけてようにも今の三玖を走らせる訳にもいかず、次のバスまで約30分弱 待機しようかと考えていた

ただひたすらに自分を責めるような事ばかり言い続ける彼女を落ち着かせるため

そつと頭を撫でる 今出来るのはこれくらいだ…。

中野五月は彼のいない 数週間の間 三玖に支えられていた だから今度は自分が彼女を支えよう

きつと…。母ならばと ふいに浮かんだその考えに これは自分の気持ちだと言い聞かせる

二人でバスを待っている間

クラクションの音が聞こえる

車同士のトラブルかと気にも留めない五月だったが、その音は何故か自分たちに向けられているように感じ その方向を向き直す

「やあー お困りかなー」

「紡木さん…。何故ここに 先ほど下山した筈では」

「まあーまあー 気にしないで、バスが来ないなら私が君たちを送つてあげよう」

「それは……………」

「大丈夫…。君たちが会話を聞いていたのは私知ってるし 別に
とって食おうなんて考えてない

私は良いんだけどさ…。三玖さんはいいの？ このままだと彼が
来るよ」

「！」

「三玖……。では 紡木さん ホテルまで構いません お願いで
きますか」

「喜んで…。ふふ」

—————

—————

—————

下まで降りたが三玖どころか五月すら見つからない

連絡をくれると言っていたが、…。自分のスマホに予備のバッテ
リーなどなく

ここ最近は何物という名称に改名した方がいいのではと真面目に
考えている…。

一旦取り出したスマホをポケットに仕舞う

もう一度見て回ろうとしたが、四葉の声で止められた

「お兄さん…。あの五月からの連絡 三玖は無事確保したんですが
…。

そのホテルまで戻るみたいです」

「そうか…。俺達も一旦向こうまで行って」

「えっ—とその二人が乗っているのはバスではなく 紡木さんの運転
する車だと」

「うううううううん」

「また、あの女か…。神出鬼没だな とりあえず追いかけてよう 幸太
郎。嫌な顔してるなよ」

「あいつ、なんのつもりだ…。」

「お兄さん…あの人はいったい？」

「まあ…。今は、あいつを信じるしかねえーか、置いて行くぞ」

「まっつてくださーい」

何故よりもよって 五月と三玖は坂下の運転する車なんて選んだ

信じると口に出しながらも俺には不安しかない…。

変な事吹き込まれなければいいが…。

ああ こういう時に自分のスマホが使えないとは何とも歯がゆいな

一花と二乃はまだ来てないが、任された以上はまずは二人との合流が先だ

前田と武田には申し訳ないが一時離脱させてもらった…。

バス停まで向かえば、丁度のタイミングでホテル方面に向かうバスが到着している

さつきと乗り込み三人で五月たちが待つ ホテルまで向かう

「……」

「あの 上杉さん それにお兄さんも さつき頂上で私が言ったこと…聞こえてましたよね？」

「聞こえてねーよ」

「あ！ その反応は絶対聞こえています！」

「だから 聞こえてねーつて つうか幸太郎はノーコメントかよ」

「悪い四葉…聞いちまった」

「謝らないでください…私の不用意な 発言が原因ですから、そのせいで三玖を傷つけてしまったのは事実です…ずっと…あんなに一生懸命頑張ってたのに… それに一花も家族旅行の時に私が言ったせいで…」

「そうだな お前が悪い… あんなこともっと周りを見てから言え」

「上杉さんも聞こえてたんじゃありませんか…」

無言で居続けるのも居心地が悪い…。

最初に口を開いたのは四葉だった。あの時の会話を聞いていたのかと聞いて来る。

風太郎は適当に誤魔化していたが、俺はそのまま『聞こえた』と述べる。

あつははと力なく笑う。四葉は、今回の一件の責任を感じているのか、ひどく疲れているように見えた。

彼女の会話から察するに、一花はあの温泉旅行から様子が変わったらしい。

そのあと直ぐだ俺に姉妹のアルバイト先を一緒に探して欲しいと頼みの電話をくれたのは…。

今思えば、何かしら覚悟を決めていたのか。

俺ももう少し慎重に動き、彼女たちと接していくべきだった。

四葉の隣に座る。弟は四葉の軽率な発言が事の発端だとバツサリ切り捨てる。

自分の言葉には責任を持つべきだと誰かが言っていたが、ある意味今回はそれを痛感させられた。

四葉だけじゃない。俺もだ。

無責任な言動が多すぎだ…。頼れ、任せろ。友人だから、家族だからと恥ずかしげもなく言っていた。

それが今回こうやって自分に戻ってきた…。

「三玖が俺に対して接していたのは、罪悪感から来るものだとずっと思ってた」

「あの事故か…。三玖を庇ったのか？」

「上杉さんは知らなかったんですか？」

「こいつが誰を庇ったとか俺には興味がなかった」

「上杉さんらしいですね…。」

「でもまあ…。あいつの気持ちを気づいてないと言えば、嘘かも知れない」

「えっ…。」

「ずっと『俺なんか』『誰とも』なんて思ってたけどさ…。三玖が俺に向ける笑顔や言葉が少しづつだけ、変わってきたんだ…。これを好

意と捉えるべきか、違う。お前らの兄貴分だと俺は自分に言い聞かせて来た」

「お兄さん」

俺は、何処かで、三玖が向ける視線や言葉の意味を理解していた。幾ら幼馴染と言っても異性に抱き着いたり 自分が飲んでいる飲み物を渡したり

頬にキスでもしようか…。なんて大胆な行動をする訳もない

あの行動一つ一つが彼女が表している精一杯の表現方法だったのかもしれないな

(三玖の気持ちか…。)

でも、それが本当に好意なのか？なんて色々と考えてるうちに周りには知らぬ間に動き出していた

ふと見わたした時には、修正が効かない程に状況は、悪化の一途を辿って

何時も何時も、俺は判断が遅すぎる、彼女が俺に向けてくれていた思いを自己解釈して勝手に『友人』として今を受け入れていたんだ、そのせいで四葉にまで余計な負担をかけていたなんて

兄貴分としても家庭教師としても最悪だ。

「悪かったな四葉」

「いっいいえ！私は自分が好きでやっているだけで」

それにあの偽物三玖からの言葉だ

自分に好意のような感情を向ける彼女が、何故応援しているのか…。

少々困惑してしまった

でも今ならハッキリ言える やはり あれは三玖ではない

今回のやり取りを見た限り 『一花だ』 何故あんな事をした

のかまったく見当はつかんけどな

「お前も大変だな」

「えっ…。」

「幸太郎じゃないけどな 四葉 お前は気を遣い過ぎだ 度が過ぎる程な」

「あはは…。それはいいんです。落第の話 お兄さんは知りませんでしたね

説明しましょうか？」

「いや ある程度は接しはついている…。お前が全員にあれだけ気を遣う理由も俺なりに考えている

その落第が原因でお前は姉妹に負い目を感じているんだろ？」

「流石です なんでもお見通しですね…。はい 私のせいで不幸にしてしまった

簡単に取り戻せるものではありません 姉妹の皆が私より 幸せになるのは当然です」

「なーんか 何処かの誰かさん見たいな考えだな 幸太郎」

「うるせー…。真面目に聞け」

四葉の生き方と考え方 聞いていて耳が痛くなる…。

一花からある程度は聞いていた、でも四葉が原因とまでは知らなかった

それをこいつはずっと負い目を感じ 自分が不幸にした分他を幸せにしてあげたいと純粹に願う

その為に四葉は周りに気を配り その都度トラブルに巻き込まれる

行き当たりばったりに見えるその生き方は確かに彼女の中で一番に最適化された道しるべ

誰もが不幸にならず誰もが幸運になるために 中野四葉はどんな苦勞だつて惜しまない

そんな彼女の生き方を俺は否定は出来ない

黙ってしまう俺とは別に誰もが幸福になれる方法を風太郎は知っ

ていた

それは何なのかと問われ彼は口を開く

「人と比較なんてせず 個人ごとに幸せと感じられる

もしそんなことができたなら それはお前の望む世界だ…。」

「そ そうですよね それじゃあ！」

「だが 現実的には…誰かの幸せによって 別の誰かが不幸になるなんて珍しくもない話だ

競い合い 奪い合い そうやって勝ち取る幸せってのもあるだろう」

「そんなこと言ったら 私のできることなんて…。」

「何もない 限度があるんだ おこがましいことじゃねーの？」

全てを得ようなんてな 何かを選ぶときは 何かを選ばない つかはきめなくちやいけない日が来る

いつかはな…。」

「正論で何も言い返せない

生きて行く限り人間は何かを選択し もう一つを除外する

選択された存在は幸福を得る 除外された存在は幸福を得られない

俺たちはそうやって生きて来た

今こうして三玖を追いかけろのだから

俺が五月に三玖を任せるといふ選択をしているからだ

もしあのまま三玖を追いかけていけば、彼女と話し合えた筈だ

でも 会ったところで俺に何が出来たのか、あの時の選択は正しかったのか…。

わからねーな 情けないぜ

俺たちを乗せたバスは、静かな音を立て目的地まで進んで行く

数分もすればホテルから離れたバス停まで到着

ここから更に歩いていく必要があるが、距離的に大した問題にもならない

「さて 行くか」

「はい 行きましょう」

「うーん」

「さつきはかつこいい事言ってたんだ 走つぞ風太郎」

「上杉さん 置いて行きますよー」

「お前ら二人に追いつけるか 体力馬鹿！」

――

――

――

上杉兄弟がバスに寄られる

少し前 雨宮紡木は、上機嫌な様子で鼻歌混じりに車を走らせる

後部座席に乗せられた 三玖と彼女に付き添う 五月は一切口を

開かず

ただ目的地である ホテルを目指していた

車の中に漂う空気とムードは楽しいと感ずるものではなく

どんよりとしており何処か、重く、それが原因だろうか五月は何も

言えずにいる

ミラー越しに見える 雨宮紡木の表情は普段からみる 気さくな

お隣のお姉さん

その筈なのに……。 今日一日で、見て来た彼女という存在のせいで

色々と疑念を抱き始めていた……。

上杉幸太郎との口論に 彼との接点 そして 山頂までに向かう

際の彼女の忠告

突然現れ 自分たちをホテルまで送っていくと優しく微笑むその

表情

何かも怪しく思える程……。 五月は彼女を信用出来なくなってい

た

もしかしたら隣で顔を伏せる 三玖 彼女がこうなった原因の一端を担っているのでは……。

自然と彼女の目から光は消え 鋭い目つきに変わり出す
ただここは、三玖の事を考えよう 自分の問題とこの人物の事は後
回しで構わない…。

一旦 冷静さを取り戻そうと 入っていた力を抜き
今起こる問題に集中と頭に浮かべた時 ふと鼻がある匂いを捉え
る

くんくんと…。静かに鼻を鳴らす

この微かに甘い香りを五月は、何処かで嗅いだことがあった

そう 誰かが、これと似たような匂いを…。香水らしきものを
…。

「!」

ぱつと目が見開く この香りは 間違いない

彼が戻ってきた時にこれと似た匂いが服に付着していた あの時は
彼に適当にあしらわれ

彼女は引かざる負えないと食い下がった

ただの偶然と流すべきだ でも そうはいかない

彼と話していた時のあの会話を思い出す

『お前は俺の荷物を!』

あれは一体どう言う意味だ? 彼は何処かに行っていた それは
確かだ

でも何故彼女が、彼の所持品を持っておりスマホに細工を施したの
か?

あの数週間、自分のアパートの隣の部屋からは、何の生活音もして
いなかった。

(まさか、)

嫌な予感が、五月の脳内で導き出される

彼は不在だった。あの二週間近くの間、この女性と共に行動していたのでは？

勿論そんな証拠はない。聞き耳を立てて盗み聞きした内容だ。まあその事自体彼女には気づかれていた、とことんそこが知れない人だ。

その会話と彼らと買い物をした際に、発した彼の言葉

新しい眼鏡は友人から送られた

そして

彼女が言った『早めのプレゼント』

彼に眼鏡を贈った人物は、この雨宮紡木ではいだろうか…。

ギョツと胸が押さえつけられたような痛みが走る

だめだ、この感情を抱いては、こんなものと自分は無縁の筈だ。抱いてはいけない。

一人葛藤する五月を見て、雨宮紡木はニヤリと口元を変える。

「五月さん、どうかしたの？ 今にも飛びかかって来そうな表情だよ」

「えっいえ…。何でもありません。今回は助かりました、車を出していただきたい」

「あはー 良いんだよ 私も『偶然』京都にいたからねー ああー会話きかれてるんだった

でも『偶然』って事にしておこうか、その方が都合がいいね」

「……」

「姉が気になるのか、幸太郎が気になるか…ハッキリしたらどうだい？」

「……………一っだけ 質問させてください」

「私は何でも答えるよー さー聞いてくれ」

「あなたは…雨宮紡木さんは、何者ですか？」

「へえー やけに冷静だね…的確な質問だ いやはや…君は怖いね

中野五月」

「五月……………」

「答えよう……。 私は君たちの通う高校の元生徒で所謂先輩だった人物

以前は坂下紡木と呼ばれていた……。」

「坂下…あなたが水木先生の妹さんだったのですね」

「ああ 知ってたんだー 何処で聞いたかは知らないけど うん 妹だよ

そして……。上杉幸太郎とは幼馴染といった 関係 これが良いかな 五月さん？」

「コータローの幼馴染……」

「何を驚いているのかな？ 幸太郎が君たち以外幼馴染はいないとあの偽善者が言っていたかい？」

「彼は、偽善者ではありません 訂正してください」

「はあー怖い…。 けどね 訂正するつもりはない 彼は偽善者で何もかも欲張る 強欲な男だよ」

何処まで信用して良いのか今の彼女には判断がつかない

ここまでですらすらと言うこと自体怪しくも思える……。 ただ彼の幼馴染と語った時の

雨宮紡木の瞳は何処か物悲しくも見え 切なさを感じていた
そこからはホテルまで三人は無言

聞けるのは一つまでと言う条件だ。これ以上聞き出せる事もそれ
にこの女性が話すとも思えない

あの彼も自分の過去を話そうとしないようにこの女性も彼に似ている

物越しや仕草はまるつきり違うのに何故か…。

そんな疑問が五月やそして隣で蹲る三玖の頭に残っていた

—————
—————

「見えたぞ ほら風太郎ラストスパートだ」

「上杉さん ファイト」

「ハア ハア…息が」

俺たちがついた頃には夕方、五月と合流は出来たものの

結局三玖とは話す事も出来ず、その日は解散となった

去り際に四葉に三玖が落とした紙袋を彼女返しておいて欲しいと預けて来た

俺が持っていたことがまずかったのか…二回程『中は見てませんよね』と大事な事は復唱だ

勝手に人の物を見るような性格はしてないし、詮索する気は全くない

三玖の手元に戻れば、十分だ

聞き終えた後にちゃんと渡す様に念を推し 一旦風太郎たちと合流する事になった

前田や武田には謝らないと……。

今日の状況を整理しながら部屋まで戻る最中だ

あの聞きたくもない声を俺は耳にする

『無視かな?』その声にこたえる気はない

振り向けばまた厄介な事になりかねん……。

車に乗せられた五月は『何もありませんでしたよ?』と素知らぬ顔で答えていた分余計に怪しい

この女が、何もしないとは俺には思えない……。

自分が知る 坂下紡木と言う人間は、とことん周りを翻弄するトリックスターのような厄介な女だ

「無視をするなら、うーんそうだね」

「はあ、何だよ?」

「おつ やつと話を聞いてくれたね。どうだった私が言った通り 最悪な事が起きたでしょ？」

「だからさ忠告したんだよ。君はホテルで縮こまって震えて居ろつてさ」

「やっぱてめーが、何か仕掛けたのか？」

「残念ながら……。今回は私はノータッチさ、今回はね」

「そうかよ……。ならもう俺に近づくな『それにあいつ等にもな』車のことは感謝する

「それだけだ……。あばよ坂下」

「おやすみ 幸太郎 また会おう」

俺は、会う気はない……。

聞こえていてもこいつは、素知らぬ顔で俺に言葉をかけてくるだろう……。

あの頃はまだ少し 坂下紡木の考えが分かっていたと思う

けど今の雨宮紡木の考えは俺には全く読めない

お前は何がしたいんだ……。坂下

――

――

――

「皆聞いて……。最悪な事態よ」

「？」

「盗撮犯に追われているわ」

「もぐもぐ」

「えっどういう意味？」

「そのまんまの意味よ……。 京都駅にいたころからずっと感じていたの 間違いないわ

修学旅行生がターゲットにされるって 前にニュースで見たもの

「だとしたら なぜ二乃のですか？」

「ど、どいう意味よ！」

カシャツ

「!! やっぱり」

二乃は後ろを振り返る

彼女が見たのは楽しそうに料理をSNSにあげる 女生徒たちだ

盗撮犯ではなかった……。

考え過ぎでは？と五月はやや他人事だが、京都に来てからずっとカ
シャツと言う音を耳にしている

あれは自分の勘違いなどではない……。少しの不安を抱きつつ 盗
撮犯の事を頭の隅に置いた

会話の流れは盗撮犯の話題から昼頃に起きた

一花と三玖の騒動に転換されている

あの後 一花と二乃は無言のまま過ごし

三玖は五月と共にホテルに送られれば部屋に閉じこもったつきり
応答なし

彼女と最後に行動を共にした五月曰く『何もありませんでした』の
一言のみ

余計に怪しいが、下手に詮索しても彼女の性格上、口に出すことは
ないのを二乃は痛い程理解している

一方騒動の発端の一人である 一花もホテルにつけば、そのまま部
屋に戻ったと四葉は聞いたらしいが

二乃にはどうもあの二人が同じ部屋で過ごしてるとは思えない

あの長女の事だきつと何処かで一人で過ごしていても不思議では
ない

今の一花はどうにもこうにもおかしな行動が多い……。

(あいつのことを気に入ってる素振りはあるけど……今日まで見る
限りそれだけじゃない気がして来た……一花 あんたは本当にこれで
良かったの?)

「やっぱり心配だよ 私見てくるよ」

「待ちなさい……もうすぐ食べ終わるから 一緒に行くわよ」
「二乃……!」

「私はもう食べ終わっています！」

「待っててね 一花 三玖……………」

今はそつとして置くより 少しでも良い彼女と言葉を交わすべきだ

それが今出来る 自分たちの精一杯…。

もくもくと箸を進め 食べ終わった二乃

食器を運び終わり 四葉と五月を連れて、二人がいる自分たちの部屋へと向かう

(三玖のところに行くのか……………)

「上杉君これもどうぞ」

「またかよ」

「何度もすまない トマトも苦手なんだ食べてくれるかい おや上杉君どうかしたのかな？」

「あいつ……………前田はどうした？」

「長いトイレだね 先輩も姿が見えないし」

「俺もトイレ行くか……………」

「ということは僕もだね」

「ついてくんな」

—————

—————

—————

コンコン

「三玖ー 一花ー いるんでしょー 鍵開けなさいー」

「やはり 今は無理そうですね……………」

「電話も無視と…私たちの部屋でもあるんだけど」

薄暗い部屋の中三玖は一人布団を被り蹲る

外から聞こえる全ての音を遮断し 誰の声も聞き入れない
今誰とも話したくない……。

「三玖……ごめん！ 私のせいで！ でもまだ修学旅行は二日あるんだよ これから私に取り返させてほしいんだ」

扉の先で必死に自分に呼びかける四葉の言葉

自分の為にずっと練習にも付き合い 今日も気にかけて声かけ必死に励ましてくれた

長い道で、疲れ果てた自分を背負い『全然へーき さー お兄さんが待ってるよ』

どんな時でも周りの為に元気に振る舞う………四葉

謝罪の言葉だって述べている

(……… 四葉は何も悪くない……… 私が私が悪いんだ 見てるだけで、彼が元気ならそれで良かったんだ………)

あの時の場面が今でも頭の中に残り続ける

声を出す 四葉 それを制止しようと一瞬 彼女の名前呼んだ一花

そして後ろから聞こえた彼の声……。

聞かれた いや 以前にも彼にその言葉を伝えたが、彼には冗談だと伝え

なかったことにしている 今度こそ今度こそ 思い続けて 彼女が発したその言葉を彼は聞いていた

どんな顔で聞いていたのかも確認する暇すらなく

中野三玖はあの場から逃げ出した……。 呼ぶ声も止まって欲しいという声も全て振り切り

あの女性の車に乗せられ 部屋に籠りつきり 何も言わず
ただ外で自分の名を呼ぶ 彼女たちの声を聞くのみ………。

はあーと深々とため息をこぼす三名

三玖の様子も心配ではあるが、ここは五人の部屋だ引きこもるだけならどうにでもなる

鍵を締め切られれば入る事すらままならない…。
どうしたものかと、頭を悩ませていると

カシヤツとあの音を再び二乃は耳にした

今度は自分一人ではなく 四葉と五月もその音を聞いていた

「は、はは………二乃が変なことというから私まで幻聴が聞こえてきました……」

「そ、そうよね幻聴よね いくらなんでもホテルの中まで………」

顔を見合わせ 気のせいだ やはり考え過ぎだと言い聞かせる

きつとまた誰かがインスタにでも上げる写真でも撮っているのだと冗談まじりにその場を振り返る

「そんなわけ………え」

カシヤツ………

『きゃあああああああああああああ！』

カメラのシャッターがきられ

同時に三人は大きな悲鳴上げ その場から逃走

確かにいた 中野二乃が聞いた音は幻聴でも聞き間違いでも無かったのだ…。

「なんだ 今の悲鳴！」

「何かあったの!?!」

『あ………』

「一花かお前さ」

「フータローくんだ お兄さんは?」

「あいつはどっか行ってそれつきりだ スマホも連絡つかないし」

「そうなんだ……あのさ フー太郎くん 彼に伝言を頼めるかな？」

「幸太郎にか……」

「うん 明日お話があるって」

悲鳴を聞きつけ その場に駆け付けた風太郎はぼったり一花と出くわした

顔を会わせ辛い一人だが、少しは話を聞いておくべきだ

兄を見習ってという訳でもないが、偶にはお互い話すのも悪く無いあの現場の当事者として友人として彼女たちが心配なのだ

話を切り出そうと声をかけるが、彼よりも先に一花が風太郎に兄である

幸太郎に伝言を伝えて欲しいと言って来た

今回の問題は姉妹だけが原因ではない あの男だって少しは、いや十分にかかわっている

武田と前田に一言詫びたあと急に姿を消して 電話すら出ないあの兄は一体どこに行ったのか

断る事も出来ただろうが、この話で何かしら 今の状況が好転するかもしれないと考え

少し考えたあと風太郎は頭を縦に振る

安心したのか一花は彼にお礼を述べると部屋の方まで歩いて行く

一方その頃

カメラの魔の手から逃げ切った二乃一行は息を切らし

その場で倒れ込む 何処まで走ってきたのか分からず辺りを確認すればどうやら2階の風呂場付近まで走って来ていた

追ってくる人影もなく 安どのため息をしていれば、突然鳴り出したスマホに五月がビクツと肩を揺らす

誰かから着信が来たのだろう 中を見れば 『中野三玖』と表示され

二乃は応答　電話の向こうの三玖は一度声を止めるが　心配だったのか彼女たちに何があったのか

聞いてきた…　聞きたいのはこっちの方だと　先ほどの現場を思い出せば嫌な汗を掻きだす二乃

はあ…大きなため息だ

盗撮犯のことは気になるし　さっさと解決したい

自分だって修学旅行を風太郎と楽しみたい　何でここまで頭を悩ませているのか

放っておいても別に問題はない　これは当事者同士のいざこざだ　ただ　二乃はこれを見過ごすことは出来ない

ある意味では当事者で自分の行動がもう少し早ければと少々後悔もしている

「あいつの癖が移ったのかしら…」

『二乃なに?』

「何でもないわ…　ねえ三玖　明日さ話があるんだけど?」

『私はなにもない…から』

ガチャリと電話は切られプープーと無機質な音だけが鳴り続ける

普段ならもう一度かけ直し　食って掛かりそうなものだが、楔は撃った

宣言通り本格的に動くのは明日…そこであのうじうじしている妹に一言伝えれば良いだけ

それが終われば後は自分のしたいよう過ごせばいい　お節介はこれつきりだ…。

「さて、帰るわよ」

「三玖なんて?」

「さー　言いたい事は言ったからいいわ」

「何か二乃　お兄さんに似て来たね」

「えっ…。」

「投げやりな感じなのに　そうやって気に掛けるあたりさ」

「うるさい　まったく　誰がコウに似てるのよ…。まったく」

「ふうー って お前ら何でここにいんだ？」

彼と似ているという言葉が気に入らないのか足早に帰ろうとする
二乃だが

脱衣所から出てくる男の姿を見てぴたりと足を止め 面倒くさそう
な顔で彼を見る

「幸太郎君ここにいたんですか…。でも何で今脱衣所から？生徒が入
る時間はまだの筈です」

「この時間なら他の生徒もいないからな 園田先生から言われて 先
に入ったんだ」

戻るなり姿が見えず、食堂に顔を出さず 何をしてるかと思つたら
呑気にお風呂と

この男も大概だなとじーつと彼を眺める

「えーつと ああ！お兄さん傷があるんでしたね」

「す、すみません 幸太郎君…。無神経な事を言つてしまつて」

「気にすんな…。俺もそろそろこの傷の事気にしない様には思つて
たんだ それでまじで何してんだ」

「まあー 色々とあつたの あんたは帰るの？」

「いや 三玖と話でもしてこようか 何を言つてやれば良いか分から
んけど 一人にはしたくない」

「今はダメ っていうか言いたい事が纏まってないうちは あの子に
近づかないこと いいわね！」

「追いかけるって言つたり 次は近づくなか…。了解 何か考えが
あつて言つてんだらうな」

「さーね じゃー おやすみ」

「お兄さん おやすみなさい」

「幸太郎君 おやすみなさい良い夢を」

「おう また明日…。三玖の問題もあるし 一花も何を考えている

んだ…」

手を振り見送る彼は、部屋に籠る三女と姿を見せない長女を気にかける

何が原因か、自分の名前が出た以上は他人事ではなく

今回の一件は学力模試から既に始まっていたのかもしれないと

あの時の三玖を名乗る人物を思い出す

バスの中で結論は出している あれは中野一花 自分が感じた違

和感が三玖が普段自分に向ける

彼自身が思う 彼女らしさと言う物があの三玖には感じられなかった…。

変装するのは、中野姉妹特有だ でも何故 遠回しにあんな事を彼

女は口走ったのか

それが彼には分からない…。 ここ最近の様子のおかしい一花

彼は気づいていなわけではない そこまで鈍い男ではなく 少し

ずつだが焦りを見せる一花の表情に少なからず不安を覚えていた…。

何が原因かは分からないが 一人だけ 彼女に何かを言った人物

が、この修学旅行に

紛れ込んでいる

雨宮紡木…。 中野一花と話したと言っていた あの女性は何を

吹き込んだのか…。

「やっぱ坂下を問い質す必要も出て来たな…。」

怒涛の修学旅行は、それぞれの思惑と共に一日目が終了となった。

第九十一話 不良少年とシスターズウォー⑤

清水の舞台から飛び降りる

此処を知る物ならば誰もが一度聞いたこのある有名な言葉だ
実際それを本当に行う人間『ほぼ』いない

そう少数なれど、願掛けと表して飛び降りるやからが、多かつたとか、

けど清水寺の作りゆえか、飛び降りても死ぬことは稀で生存率は85%と高く、大怪我で済むことの方が、多かつたらしい……まあそんな事をしないに越したことはないのだけれど…。

怪我を治療する医者気持ちも考えろってな

閑話休題終わり

冒頭でも話題に出たその清水寺に俺たちは、訪れていた。

遡るは昨日の事だ、部屋に戻る際に彼に呼び止められ

『三玖がお前を呼んでいる、明日会って欲しいとき』一花からそう伝言を頼まれたとか…。

『へいへい、了解しました』

二つ返事で了承してはいるが、少々不思議にも思える

今の状況で果たして三玖は俺と話してくれるのか…。二乃からも

釘を刺されているし

一花には悪いが、疑わさせて貰っている

俺の表情が、気になるのか明日の団体行動の際は、風太郎も共に同行し

三玖を見つけたなら以降は別々に…。

途中まで共に行動をするのは、昨日の一件をこいつも気にかけている為もあるが、一花に少し違和感を覚えたとも話していた 最近の弟は鋭いな…。

三玖が俺を好きならば、何故
一花とのことを応援するのか

同行すると話す弟には、上記の内容をぼかすように、それとなく話してみたところ

『あの時の一花は、何かに焦ってた、そう思える』

やはり引つかかると話す、どうにもおかしな事ばかり…。

清水寺に出向いても、一花どころか俺に話があると言う三玖の姿も見えない

観光している一般人や別の学校の制服は見かけるが、同じ学校の生徒の姿はまばらだ

辺りを一度見直し 三玖がいないなら一旦ホテルまで探しに行こうかと考えを巡らせると

風太郎が俺の肩をとんとんと叩き 正面を指さす

目を凝らすとよく見かける ウサリボンとアホ毛が寺の下を眺め

はしゃいでいる…。 アホ毛の方はすごく辛そうにしてる 方向

音痴 オバケ嫌い 高いところも苦手

あいつ 弱点多すぎだろ…。

「何してんだ？」

「お前ら騒がしいぞ…。うわあ久々に見ると高く感じるな」

「あれ 幸太郎君に上杉君…。二日目は団体行動ではありませんが…。」

お友達と一緒にじゃないのですか？」

「三玖を探してんだよ、見当たらんな」

「俺はこいつの同行者だ お前らがいたから三玖もいるのかと」

「三玖ならここにはいませんよ？ 何かあったのですか」

「まじかよ」

「一花と二乃は二人とも二年の頃のお友達と見て回るそうです」

「そして三玖はまだ体調が優れないようなのでホテルで休んでいます。」

三玖のことは気になりますが、そういう理由で私たち二人でお送りします」

「半分以下か寂しいな…。」

「三玖はいねーのか…ってホテルに戻るにも時間までまだあるしな」
武将関連ではないが、歴史のあるここになら三玖がいると思つたが当てが外れ

それどころか三玖はホテルで休んでいると二人から教えられた

どこで会うかまでは指定はされてないけど雲行きが怪しくなってきたな…。

先ほどここに来る前に何処かで見た事がある一台のオープンカーも停まっていたし

あいつもここに來ているのか？

うーんと深く頷き 今後の行動を考えていると再び誰かに肩を叩かれた

首を横に向けるとそこには眉を顰める五月さんだ…。

このタイミングで俺に用事か…。何かあつたのか？

(幸太郎君 何故三玖を探しているんですか？)

(まあ…。色々訳があつてな)

(あなたにしては齒切れが悪いですね 何かあれば私がお話を聞きま
すよ)

(分かつてる それよりお前の方こそ 風太郎に話さなくていいのか
？)

(ああー 実は彼が思い出す様にと私なりに考えていまして かくか
くしかじかで)

(へえー まあ風太郎には世話かけてるしな 少しはこいつを気にか
けるか)

一花から三玖と話すように その内容はあえて伏せた

昨日釘を刺されているのは五月も見ていた筈だし 何よりその三
玖がここにいるかもしれないと

部屋にすることを知っている 五月からすれば心配事に種になる

ここで黙る事が正解なのか、俺には分からないが、ここにいる三人

には修学旅行を満喫してもらいたい

俺の表情でそれとなく察したのか、こくりと頷いたあと

以前から二人で話していた 零奈（五月） 作戦の今後を話し合う

昨日のことで先延ばしになりそうだったが、彼女なりに考えがある
と概要を説明

風太郎が以前の修学旅行の時にあった 四葉の事を忘れているな
らば

二人で行動させ 思い出させればいいのではと…。

その一言で駅での五月の行動理由もはつきりした

少々強引と思ったが、こいつなりに二人の思い出を大切に考えた結
果なのだろう

こいつを思う二乃や四葉本人の気持ちも聞かず勝手に進めちまっ
てるのは悪いとは思ってる

ただ 五月が正体を明かせず悩み続ける姿も見たくはない

四葉だとは明言しなくてもいい あの時行動していた人間は五月
以外の四人とさえ

認識すれば良いだけだ…。 あとは風太郎がどうするかとそこ

は追々フオローしていこう

まあ…五月がちゃんと自分だと明かすことが出来ればの話だがな
…。

無理にテンションを上げて 風太郎と四葉の二人でのツーショッ
ト撮影を試みるが

どうにもあからさますぎて四葉からの眼差しが痛い

「えっ 五月！ どうしたの」

「私と幸太郎君は後で撮るので先に二人から撮ります そうですよね
幸太郎君！」

「おっおう…風太郎 ちゃんと横に來い」

「やるなら 早くしてくれ」

「上杉さんまで?! えっと、あの」

（ここまでしてるんです いい方向に向かうはずですよ!!）

（でももう少し自然にやろうな四葉が口をパクパクさせてるぞ）

最初は、断ろうとしていた四葉も五月に押され
風太郎からの言葉でしぶしぶ承諾 二人の5年ぶりの記念撮影は
無事に終わった

あいつがどうして風太郎に対し一歩距離をあけ

自分と風太郎はただの知り合いだと言い張るのかその理由も分
かってきた

自分以外は幸せであるべきと考える故に 四葉はあの思い出を自
分の心にしまいこみ

他者への献身に全てを費やしている…。

だが、何もそこまで自分を不幸にする必要はない

楽しめる時には楽しみ 想う相手がいるのなら少しは彼と共に時
間を過ごすのは決して悪い事だと俺は思えない そんな考えが正当
化されるなら今の人間社会どれだけ愛や友情の少ない 寂しい世界
になっていることやら…。

「なら 次はお兄さんと 五月の番ですよ！ さー二人ともカメラを
見てください」

「えっと それは後程と言う事では」

「お前さ実は、俺が嫌いなのでは？」

「違います！ 大切な友人です そうです友達ですから！…。」 定義

にもよりますが深い意味はなくあくまで友人として…。」

「悪い 四葉、早く撮ってくれ」

「あつはは 五月がバグってますね では撮ります」

はあ…。 この末っ子は何を自問自答してるんだ…。

そこまで深い意味は込めてない事くらい分かってるさ

第一自分で二人の後に撮ると言いながら全力拒否は流石にへこむ

まあ…。こいつらしいと言えばこいつらしい 嫌いだった話もし
ない

周りの関係がどんどん変わっていく中で俺とこいつの関係は何時もと変わらず逆に安心感すら覚えるな

――――

――――

――

上杉兄弟と四葉 五月が清水寺で撮影を行っている間

ホテルでも動きがあつた

中野姉妹の部屋の前で 中野三玖が病欠の為 自由時間は部屋で待機すると

女性教諭に説明し部屋に戻る

何かあれば連絡とついでに最近ではホテルで盗撮犯が出ていると話題になっており

用心するよう指示も受ける

目を細め 『もーあつてる』と心で呟く彼女はがちゃんと扉を閉めた

部屋に入れば髪をかき上げ素顔を晒す

それは確かに五つ子の一人だ 三玖ではなく 彼女の変装をしている中野二乃だった

「知りがたきこと影の如く だっけ？」

「何してるの 二乃」

ベットの間に膝を抱える 本物の中野三玖は変装する姉に質問を投げ掛けるが

軽く返される 二重の意味での変装と答え 鏡の前で髪を結び何時ものヘアスタイルに戻し始める

このまま悠長に話している暇はない 二人もいないと分かれば先生方が駆けつける

その前に うだうだとしている この妹に言いたい事を言わなければ自分も風太郎と楽しく修学旅行をエンジョイ出来ない口に出す

「ねえ…。あんたはこのままで良いの？ コウが取られても」

「コウ…。その呼び方」

「今更でしょ…。昔は散々あいつを『コウ』って呼んでたんだし 何今は自分があいつの事…ずっと覚えてたから？ 私だけが呼んでいいとか？」

「そ、それは…。」

しどろもどろな態度を見て『はあ』とため息を溢す二乃は、一旦目を伏せ、頭を冷やす

大切な時間を割いてまでここへ訪れたのかを考える、考えるだけで、とことん『彼』に染まってきたと実感し、ニヤリと頬が上がっていた。

よしと、気持ちの整理がついた次女は、今の現状を受け入れては、足踏みすら止めてしまった三女へと自分が、伝えられる、今を動かせる言葉を変わらぬ態度でスラリと言って見せた。

「私はフー君が好き、それは確かな気持ち 愛に時間は関係ないとか私にはまだわからない

こんなの初めてなもの 何が正しくて何が間違ってるかなんて全くわからないのよ

でも言えるのは、誰よりも彼が好きってこと あんたはどうなのコウのこと諦めるの？」

ベットの上で彼女を追い詰める 二乃は自信満々に言い切った 誰よりも上杉風太郎を愛している この気持ちはけして間違っていない

自分がここまで言い切った中 未だに悩める この妹は風太郎の兄をどうしたいのか？

彼と何をしたいのか、本当にこれで諦めてしまうのか、二乃は真剣な眼差しで三玖に問いを投げる

「私だって…。諦めたくない」

「修学旅行っていう最大のチャンスに部屋に閉じこもってる時点で諦めたようなものよ。」

「…。諦めたくないよ！」

「……」

「でも怖いんだ、いざ自分の気持ちをコータローに知られたら私なんかじゃダメだって思えてきて

私なんかがコータローに好かれる筈ない 私がいるせいでコータローは死にかけた

やっぱり 見守るだけで良かったって…公平に戦うことがこんなに怖いなんて思ってたなかった」

「なんで 負けること前提なのよ それにあれば、アンタは悪く無いわけだし

何時までも引きずってたら 何もしないまま負けるわよ？」

気づけば大粒の涙を流す三玖

林間学校で一花に宣言した 平等ではなく公平に勝負しよう

実際にそれが訪れた途端に足が竦み 胸も張り裂けそうになる感

覚

自分がどれだけ辛い戦いに挑んだのか実感させられた…。

「だって相手は あの一花だもん 可愛くて社交的で男子から人気で自分の夢を持つ強さもある

フータローに真っ正面から気持ちをぶつけられる二乃はすごいよ」

「それはどうも…」

「フータローも気づいてくれれば良いのにね」

「ほんとよ 私は告白までしたのに即OKださない あいつが変なんだわ どれだけ勇気をふりしぼったことか…」

「告白まで…やっぱり二乃はすごいよ」

「やっぱ あんたはまだしてないのね あんな朴念仁兄貴 言わなきやわからないわよ」

「一応は…したことはある…不発だったけど…」

「はあ…あの男は」

恋を自覚し、止まることをやめない彼女の行動に、三女は驚かされるばかりだ。

それでいていまだに、成功とは言えない現状に苦情の一つも言いたくなる二乃、少々ため息混じりだ。

自分に關心してないで、今回の中心を担う三女は一度でもアクションを起こしたのか、聞いてみれば、先程宜しく深いため息が出てしまう。

二乃の様には、行かないまでも告白紛いな事を彼に伝えようと彼女なりに頑張つて見たとある日の一時……

『ねえ………コータロー 私と付き合おうよ』
『付き合おう?』

あの男は、言葉の意味よりも状況が状況故に真意に気づくことなく三女の告白は、不発に終わっていた

やはりと言うか、簡単には行かないとは、理解しているが、こうも姉妹で連敗が続く現実には次女は目を細めた

「でも もう今は、告白する自信も湧いてこない

『テストで一番に』『美味しいパンが焼けたら』『コータローが元気でいれば』そうやって先延ばしにしたのは私 一花も誰も悪くない

自業自得… きつと彼を見守るだけなら 五月がいれば十分だし」
「あっそう…じゃあそうやっていつまでも塞ぎ込んでなさい うじうじと…」

「やっぱりあんたとはソリが合わないわ…でも」

昨日とは、違つて話をする事は出来た

自分が思い感じる気持ちは、伝えたくもりだ

それでも、彼女がどうもしないのなら、何も行動に移すつもりもなく、平行線な答えを自分に言い続けるならば、自分がやるべき事は、何もないのかもしれない……呆れた様に口を開き、中野二乃はその場で立ち上がり、出入口の方まで足を向けようと足を動かした

そのまま、立ち去ってしまうと思いきや、一步踏み出したところで、

中野三玖の方へと振り向き直す。

「？」

「それでもね 私はあんたが凄いつて思ってた ずっとひたむきに頑張ってたさ

なのに一花が出たらすぐに諦める…可愛いからってなによ!!

あんたは、『私も可愛い』つてあつさり認めたくせに 何それに 冷静に考えなさいよ

五つ子よ 『あんたも可愛い』にきまつてるじゃない!」

「……!!」

顔を真っ赤にし 二乃は叫ぶ

五つ子だから

その言葉は散々 三玖が言ってきた言葉だ

五つ子だから 同じ顔 再会し彼と真っ正面で向き合った屋上で も彼女はそう話した

確かに能力ではここで差が出るだろう でも彼女たちの外見は傍から見ればどれも同じ

誰もが認める 可愛い容姿をした 五つ子の姉妹だ

誰か一人でも劣っているはなく それは三玖も自覚している

だが 可愛いや綺麗と言う 勘定には自分を入れようとする その考えが二乃には許せなかった

誰か一人が突発して可愛いわけじゃない なら容姿の事でとやかく言うのは今更な問題で

悩む理由が二乃には分からない…。

「ああー お節介したら つかれた じゃー私はフー君のところにい

くから じゃーね」

言いたい事は言いきった あとは自分のしたい事をしよう
満足したのか二乃は部屋を去り 再び一人となった三玖は最初と
同じく両足を抱え
体育座りの態勢に戻る

「二乃……………ごめん」

彼女が去って暫くした後、小さく呟いた言葉、
自分の為に、出来る事を伝えられる精一杯をくれたあの子の為に自
分は何が、出来るのか？
行動を放棄し、いまだ部屋で塞ぎ込む自分には、向き合う為のその
答えは見えずにいる。

「コートロー…。 私は… それにこのままじゃダメなのかな」
彼のいないこの部屋で 彼女の言葉が木霊する。

—————

—————

—————

「五月いゝ 恋のお守りだつて可愛いね 三玖に買つていこうー」
「あの、上杉君はトイレと言つてましたが、幸太郎君は何処に？」
「あれー、本当だ いつの間にかいなくなつたね お友達のところ
に行つたのかな？」
（うう 次の作戦を考えたと言うのに何故 このタイミングで幸太郎
君は消えてしまうのか

それに何故か胸騒ぎもします…)

「ねえー 五月」

「はい、なんですか四葉?」

「何か私に隠してる?」

「…っ うーん えーつと実は、…(どっ、どうしましょう!?)」

上杉幸太郎が姿を消し きよろきよろと辺りを見回していた時にふと 今までの疑問を思い出し

その場で考え込む 中野五月に今日までの奇妙な行動の理由を聞いている

『うーん』と口ごもる五月は、彼との作戦を四葉に明かして良いものと頭を悩ませていた。

明かしてしまえば、簡単な事だが、そうも行かないと言うのが、姉事情と言える。

『?』と頭に浮かべる、四葉に何でもないと主張はするものの本人が、思っている以上にあからさますぎるそれは、四葉に疑念を抱かせるのは十分過ぎた。

ここまでずっと中野五月は、風太郎の前で『あの子』を演じて来てはいた。

何故行うのかを幸太郎に話してはいない彼女だったが、それには目の前の四葉自身の悩みが大きく関わっており、幸太郎もある程度は察してくれているからこそ、五月の作戦に手を貸してくれたのだ。

実際、明かしてみようと試行錯誤の日々を過ごして見て、五月は実感した

本人を騙す以上に、事実を伝える事の難しさと影響するであろう今後など

嫌な汗を拭いながらも四葉を引き離し、深くため息を零す少女に四葉の疑念は尽きずにいた

5年前の修学旅行あの日からずると引つ張ってきている、現状は自分が思っていたよりも複雑怪奇で簡単に言えたなら苦労もしない彼女は、思い知らされるのだった。

五月が自分の考えと四葉の気持ちで頭を悩ませていた同時刻の夕
イミング

上杉幸太郎は、誰かに手を引かれ 何処か古道をその人物と走って
いた

「おい どこいくんだー？」

「良いからこつち来て……」

「へいへい…… まあ、体調管理はしっかりな 『三玖』」

彼の手を引き前を歩くその人物は、中野三玖として自分を偽る

『中野一花』その人だった……。

（三玖が、コータローくんを好きだと知られたままじゃ私の言葉に矛盾
盾がでる。

それにアレが嘘じゃない…… 上杉幸太郎は私が好き それはあの

日からずつと決まっていた

この戦いは負けれない……)

「……」

必死に走る中……チリンチリンと鈴の音色が小さく鳴る

その音を彼は聞き逃してはいなかった……。

第九十二話 不良少年とシスターズウォー⑥

「そう言えば コータローもここに来たことあったんだね？」
「まあな……」

暫く観光すれば、風太郎は一旦トイレに行ってしまった。その間に今後の方針などを五月に聞こうと辺りを探してはいたが……。どうにも気が抜けていたのか、一瞬の隙だ人混みの中で誰かが俺の手を掴み何処かへと引つ張っていく……。

最初は誰か気づく事はなかったが、開けたところに出ると その誰かが判明

先ほど ホテルにいらつて言われていた 『中野三玖』 彼女が俺の手を引いていた

姉妹の話では未だ体調がすぐれず待機していると教えられ

こいつと合流するのは、夕方頃だと思つてたんだが、これは嬉しい誤算だな

気分はどうなのか？ 体調は万全なのか？ 心配からでるその言葉に彼女は『コータローは心配しすぎ もう大丈夫だよ』 につこりと笑顔を作る

特に変化がなければ俺は予定通り この三玖と 行動をしよう

一花との約束もある ちゃんとこいつとは話しておくべきだ

あの日 修学旅行の日に俺が訪れたであろう場所を彼女は楽しそうに散策している

『もしかしたら 会えてたかもね』 何たる運命のいたずらか

ここで姉妹とは遭遇することはなく 中野先生と共に行動していた四葉を見た程度

一応は下宿先の宿で彼女を見かけたが、俺は俺で先生から叱られた結局は誰とも……うーん 誰かとは会った気がするな？

『…だねー……で……明日……また……あ……ねー……』

一瞬……ノイズ混じりな、何かが、再生された

つぎはぎだらけのその言葉……何を誰が言おうとしているのかもわ

からない……何だ今のは??
(っ……誰の声だ?)

生憎と俺は六花さん関連以外、自分の記憶を全て信用できない
過半数の記憶は確かに戻った。でも全てではない。全くどうでも
いい記憶や実は結構重要な事を忘れていたりする……。生活する
分には不自由はないけど、今のように過去を語り合う際は少しばか
り口ごもってしまう

「そう言えば、フータローもいたんだよね?」

「俺と顔合わせた途端に逃げやがった……。あの時の俺達は喧嘩ばかり
だったな……」

「今とは全然違うんだね」

「なるべく、誰も傷つかず、誰もが自分を追い詰めない、そう言った
行動を心掛けて生活してます」

「誰も傷つかない……」

「どうした三玖?」

「ああー、何でもないよ、それでね、フータロー……。今日は話があつて
ね」

「風太郎から聞いている……。まあ、無事に会えて良かった。三玖とは
俺も話しておきたかった」

「そうなんだ……。うん、なら、あのね、昨日の事なんだけどさ」

果たして、このまま、目の前にいる、三玖と名乗る、この少女と
話を続けるべきか……。

二人は三玖は今日は病欠でホテルから出る事はないと話していた
体調なら後で回復し、そのあとに合流も出来るだろう、俺と話す
約束もあつて無理をしている線もある

色々な理由が頭をめぐるけど、彼女は三玖ではない、その答えは揺
らぐことは無い

一旦話をやめさせ俺からも言いたい事があると彼女に伝える
何を聞いて来るのか、少女は不安と焦りが見え隠れしており、俺と

話すと言うよりも

自分が伝えるべき事を先に伝えたい印象だ……。まあ 確定だろうさ

「二度目だ あの日は着けて無かったな髪飾り」

「うん 今日は忘れずに」

「そうだな……ちゃんとつけてくれてるな 安心した でもな その髪飾りは俺がお前に贈った奴ではない 似てるけど 違うんだよ」

「!?……………え ああー 急いで来てから間違えたよ ごめん」

「俺が細かいだけだったのもある……………それと もう一つ 何で鈴の音がするんだ？」

「あ……………」

ここに来るまで、俺を引っ張って進む彼女の方から何処かで聞いた鈴の音がチャリンと鳴っていた 走って進んでるんだ。体は揺れるしもう少し慎重に動くべきだったな

五つ子で鈴の音を持ち歩くのはスマホにつける五月 財布につける一花の二人だ

顔面蒼白 瞳孔も開き 奥歯を噛む……、何でそこまでお前は必死なんだ

何で お前が 三玖と一番に仲の良いお前が、あいつを騙すような事をしてるんだよ

「なあ……………一花 何で三玖の変装してるんだ？ 教えてくれ」

この少女は中野三玖でない 中野姉妹で一番に大人で視点の高さで周りを見回す

どんな時でも姉妹を心配し 長女だからと何かとため込む癖がある 彼女だ

名前を言われ その場で首を横にふるい『変な事言わないでよ
コータロー』

必死に自分は三玖だとアピールしている
でも 残念な事に俺にはハッキリと誰が誰なのか今は区別がつく
不思議と冷静で頭も冴えている 昨日からずっと考えていた あ
の三玖は違うと

そして一花からの相談で三玖と話をして欲しいと言われた時点で
俺の違和感は確実なものとなった……。 元より三玖は来ること
はなく

彼女が何かしら 三玖と振る舞い 俺と話す予定だった 妄想に
しか過ぎないけど

そつと近づき 頭に触れる……。 何も言わずただ俯くだけ
傍から見れば俺は、女性を襲う不審者だ でも 確かめる必要があ
る こいつが一花だと確認できる

何かがあるはず… 例えば 普段から持ち歩く変装道具とかさ…

触れた手は確かに彼女髪を触っている… でもそれは本物ではな
い

ばさりとこつちに引き寄せれば、それは頭から外れ 本当の姿を現
した

「悪いな…本当はお前の話を最後まで聞くべきなんだろうけど… ど
うせ話すならさ…一花として俺と話せよ」

「私は…」

「あの日も一花だったんだろ？」

「あ あれは私じゃ！」

「やめてくれ…一花 それ以上嘘をつかないでくれ 頼む」

頼れる存在…同じ長女と長男同士

昔から共に歩み 時には言い合った事もある…。

俺と一花はずっと仲の良い友達で家族が何よりも大切に 今の一

花は俺に取って憧れだ…。

夢を諦めた 俺とは違い 最初に一步を踏み出した この子は、俺の目指す理想…その一花が、何でこんな事してるんだ…

「お前は…一花は誰よりも真剣で前を向いている そうだった筈だ」

「コータローくんは覚えてる 昔のことさ」

「今はその話は関係ないだろ」

「関係あるよ…6年前 君は誰かが好きだった あの五つ子の中で好きな子がいた筈だよ」

「……………」

「私さ 思い出したんだ コータローくん ううん コウ君が、僕と一緒にいてくれませんかっ」

私に言った あの日のことを だから私は！」

一花が好きだ…。 それは紛れもない事実

一目惚れだ 零奈さんに連れられ向かったあの家で俺と会話を交わしたこの子に

心の底から惹かれていた…。 時には強情でややガキ大将なところもあったが、

ふいに見せる あの眩いまでの笑顔を見るとどうにもこみ上げる想いがあった…。

俺は一花という少女が好きだった

高校で再会した際にも 実は一花の存在には気づいていた

髪は短く 性格も昔よりも大人な雰囲気 少しばかり面倒な所もあるけど 中野一花として

俺は5年ぶりに彼女を見つけた…。

最初は忘れていた あの頃の記憶を彼女は思いだし 遂にはあの日の事も思い出してくれた…。

何時も遊ぶ あの河原で、必死に作った花束をこの子に渡した 『僕と一緒にいてください 一花ちゃんが大好きです』

人生初めての告白だった

うーんと不思議がる　一花は少し考えた後に

『うん　ずつと一緒だね　私もコウ君が大好きだよ　これからもずつと親友でいようね』

意味をちやんと理解してもらえなかったのか、それともあれが彼女なりの〇?だったのか

その後の俺と彼女の日常を思い返せば、一花という少女は上杉幸太郎を異性とは見ていなかった

そりやそうだ：小学生なんだ　何を勝手の期待して思い上がってるんだ

どちらにせよ　上杉幸太郎小学生6年生の淡い初恋は終わりの
あの人の葬式を最後に完全にこの想いを断った：。

思い出した　そう告げる彼女は瞳から雫が落ちる

涙と同時に辺りはいつの間にか雨模様　ザーザーぶりで俺も一花もずぶ濡れだ

必死に訴えかける中野一花に俺はなんと答えるべきなのか：。
あの日の延長戦　まさかここに来てあれが尾を引く形になると6

年前も去年だって：そんな事思いもしないさ：。

「最初は忘れてた　でも　あの人と話して　全部　全部思い出したの
：：：私も君が：コウ君のことが」

「あの：人：!?：：：：！」

あの人：その単語で俺の脳は一旦止まる
そして思い出す：一花が何時から可笑しくなってきたのか

あいつが何時　一花と会話をし始めたのか：。
やはり　元凶はあの女か：

「坂下に：何を言われた」

「えっ　紡木さんに　：それは」

「一花… ごめん 俺やる事が出来た…今はお前の話を聞けそうにない…悪いな」

「コータローくん 待って！ お願い 行かないで…私は」

俺の名を呼び 掴んで来た手を離す

『早く みんなと合流しろ』 少し強めの声で伝えれば、何処かにいるであろう

あいつを探しに一花を一人置き去りにして行った…。

「やつぱり…私じゃ ダメなのかな ずるばかりした 私じゃ…
ねえ コウ君」

—————

—————

—————

「坂下あああああああああああ！」

「おつーと 急に私をお呼びとは、良かったね 近くにいてさ」

「お前 ふざけるな！ 一花に何を吹き込んだ お前のせいであいつらが」

あの女を探すのは容易だ

あいつは俺の行く先で待ち構えているか、後方でやり取りを眺めて
愉悦になるかその二択だ

戻った先の駐車場には赤のオープンカー その横に傘を差し

にんまりと顔を作り 俺の神経を逆なでする 雨宮紡木が立って
いた

何故 笑っていられる 何が可笑しい どれだけ怒っているの
か

こいつには分からないのか…？

「俺は一度でもお前は、まともだと そう思ってた でも撤回だ！

お前はやつぱり 最低だ あいつらに何の恨みがあるんだ」

「つハハハハ 滑稽だ 私が原因？ 私が元凶と来た 誰が一番に悪いのか

それは君だろう 幸太郎？ 今までの君の行動が招いた結果だ 言葉に責任を持ってない君が今を生み出した 私になすりつけるなよ」
「分かっているさ…それでも お前が一花に変な事を吹き込まなければ ここまで拗れる事はなかったろ

俺を恨んでるなら 俺だけを狙え 俺だけをターゲットしろ 巻き込むな」

「気づいているなら余計に最低だ…ではさっきの言葉の返答を返そうか

彼女たちに恨み何てないよ？ 気まぐれ 遊び心とでも言えば良いかな」

「ふざけんな！ 一花と三玖が喧嘩して 楽しい修学旅行を台無しにして

遊び心で済むか…何で そこまでお前は他人の気持ちを考えない」

何か考えがあったのか…あったところでこいつがやった事は最低だ

一花をたぶらかし 一花と二乃が喧嘩

思い出作りとところではない…。 高校生活でたった一度

三日間しかない その日をこいつは台無しにしゃがった…。

『私だけのせいかな 君の頭が花畑だよ』

はあ…とため息をこぼし 面倒そうな表情 肩を竦め 投げやりに言葉を伝える

坂下とはそういう人間だ 正論なんて通じない

先のこと見据え 答えは既に自分の中に出ている 周回遅れの会話なんてこいつは覚える気もない

論議する気もさらさらない…。

俺の初めて出来た 友人だ 幼馴染だ 恋人だった

だからこそ許せない……。全てが正当化され 周りから賛美されるこの人間が

他人に叱られた経験なく育った……。誰も彼もが坂下を甘やかすその結果

こいつはブレーキのかけ方を知らないまま育ちやがった……。

ぐつと手に力が入る……。もう我慢ならない 俺の事ならつゆ知らず

無関係な五つ子まで巻き込んだこいつを……。簡単には許せない

「ぶつのかな？ はあー 本当に退屈な人間になったね 幸太郎……。」

挑発するように笑顔はそのまま両の手をあげ ノーガードをアピール

「つーーーーー！ 坂下あああ」

俺は最低だろうな……。 例え 元凶といえ

女性に手を出そうとするのは、でも既に抑えられない所まで来た

た 誰かがこいつを叱らなければ、誰かが教えなければ、こいつは一生誰かを傷つけ続ける

かかげた左手を俺は振り下ろす 止められない

あと少しでその掌が、目の前でたたずむ 女性に届く

手遅れだ 後悔も今更に 乾いた音になるの待った……。

だが その掌はけっして坂下を捉えない

パツシ：

「先輩が手を出してはいけません あなたはそれを一番してはいけない人です

誰も傷つけず 誰かの為になれ 一人だった私に勇気をくれた

上杉幸太郎は女性に手を上げる
野蠻な人間じゃないんです！」

あと数センチと言う所で 俺の手は坂下の前で止まる
一体誰が、俺を止めてくれたのか、小さいが止めるその手は確かに
強い力を持っていた

「真弓ちゃん…。なんでここに」

「先輩が心配でずっと後を着けていました すみません ずっと顔を
見せず」

俺を止めてくれたのは、何時も笑顔を絶やさず
呆れる時は呆れ 面倒な時はちゃんと声に出す でも人が嫌が
る事は率先し

人と人とのつながりを大切に思う 彼女…。
須藤真弓だ

あの4月のあの一件以来 俺は彼女と久しぶりに言葉を交わした

「ごめん…。真弓ちゃん…止めてくれてありがとう」

「いいんです…。私の役目は先輩を支える事ですから」

「っ ああーっつまんない 和之の妹さ 何で止めるかな？

面白い事になってたのにさ はあ 興覚め」

「坂下 お前！」

「先輩は少し冷静に…。 坂下先輩 私はあなたが怖いです

ここに数ヶ月 あなたの顔が離れず怯えていました…。」

「それでー 何で私の前に立つ？」

「確かにあなたが怖い でも 私はあなたを見過ごすことは出来ませ
ん

大切な先輩と大切な友人の為なら 私は前に出れます！ あなた

にはもう屈しません」

「……私 帰る…どうする乗ってく?」

「誰が乗るか さっさといけ」

興が覚め 皮肉も言う気もなくなったのか、坂下は車に乗って帰ると言いだす

真弓ちゃんと坂下の間に何があったのか俺は知らない

何時も坂下に怯え 和之や俺の後ろに隠れていた彼女が、俺を止め更に坂下の前に立ち

追い返して見せた… あいつ自信も予想以外な出来事で、行動を狂わされたように見えた

車を出す際に俺に乗るというあたり 神経が可笑しいと再認識した。

残った俺たちは、その場で項垂れる

緊張の糸が途切れたという表現が正しいな… 俺に至っては怒りで我を忘れる程だ

どうにも頭に血が昇りやすい

隣で『あわわわ』と今更 動揺しだす後輩

彼女もまた自分が思ってた以上の行動に出ていたようで俺に視線を向けると

『どうすれば』と慌てている

「これで良いさ 多分 修学旅行でアイツがしかけてくる事はもうないよ」

「恋人だからわかるんですか?」

「元な…まあ そんなもんだ 特に真弓ちゃんの登場がアイツにとっては想定すらしてなかった

最後の投げやりな言葉でわかる あいつは真弓ちゃんに負けた」

「初めて 坂下先輩に勝てました…でもすごく疲れましたね」

「俺もだ…あいつに振り回されるのは、勘弁願いたい」

「ここ数週間 姿を見なかった後輩はとても立派で更に逞しくなっ

てくれていた

俺を支え 友人たちを守る そう宣言した彼女の瞳は真っ直ぐで
あの天災にとって純粹すぎる彼女は、苦手な部類だったのかもしれない
ない

本当にこの子には助けられてばかりだ

もしあのまま 坂下を殴っていたら俺は、永遠に後悔し 五つ子と
も顔を会わせられないところだった

男女問わず 俺は人を殴らないと決めていた…

暴力とはもつとも愚かで他人を守る以外で行われそれは誰も救わ
れずただ罪悪感に苛まれるだけ

俺がもつとも嫌悪しておりかつて目指した夢はそれとかけ離れた
存在だった、

それでもその嫌悪していた何かに頼らざる状態まで俺は俺を追い
込んでしまい、すんでのところで俺は後輩に助けられた。

「先輩 戻りましようか…一花さんなら先ほど戻って行くのが見えま
した」

「まさかとは思うけど 会話聞いてた？」

「いえ そこまでは、してませんある程度は後ろを尾行はしていまし
ただけ」

「真剣な話だったので、一度戻りましたし」

「そっか、もしかして真弓ちゃんはさ 坂下を警戒して 俺の後をつ
いてきてたのか？」

「あの人がいると知ってすぐに行動に移しました でも 一花さん達
の問題は止める事は出来ませんでした すみません」

申し訳なさそうに顔を伏せる後輩に俺も状況が状況だと理解し自
分を責めないよう言葉をかけた。

「あれは 無理だ…。現場に居合わせた俺が言うんだし」

「当人たちの問題でしょうが…もしかしたらと可能性も考えてしまい

ます」

「君には君の出来る事がある・だから考え過ぎないって事でさ」

了解ですと、少女は頷いた。

確かに俺や彼女にも何かしら出来た事は合ったはずだ、ただ少しミスでもっと悲惨なことだつて連鎖的に起きてしまう、そんな気さえするのだ。

ザーザー

「冷えてきた」

少し話をしたのちに気がつけば、雨足はどんどん強くなっていった。このまま此処にいても体を冷やし風邪を引いて三日は、寝込んで過ごす

そんな最悪な事態は想定出来てしまうし避けておきたい…毎度の事俺はその手のトラブルに縁があり過ぎる

ホテルに戻らないと教師からどやさえる

これ以上は台無しにしたくない 一花も戻っているなら留まる理由もない

一步 足を動かした時に俺はある事を思いついた

先ほどのやり取りで、危うく人間として大切な何か 男として最低な事をしようとした俺

何もなく ホテルに戻るのには、俺のプライドが許さない…

前を歩く後輩の肩をぽんぽんと叩く

何事かと振り向く彼女にこそこそと耳打ち

するとどうだろう 坂下を追い払う時の勇ましい彼女とは裏腹に顔を真っ赤に染めだしている

「変か？」

「先輩はそういった事が好きなんですか」

「いや 全然 でも 踏ん切りがつかない だからさ真弓ちゃん 思いつきり頬を叩いてくれ!!」

貸し作ってばかりなのはどうもな」

「ええー…でも先輩は一度言ったら引きませんからね　でも本当に良いんですか？」

「オフコース」

「では　行きます　せーのの」

帰り際　物凄い激痛と雨の中でも聞こえる程の何かが叩かれる大きな音が辺りに響いた

去年頃から　勇ましく　逞しく　そうやって変わっていく後輩

その小さな手からは想像も出来ない程の怪力で俺の頬は叩かれた場所が場所だ　俺たち二人は一番最後にホテルに着き

入口付近で待っていた教師たちは俺の頬を見て　すごく動揺していた

――

――

――

「シャワー　空いたよ…先に頂いてごめんね」

「で　では　次　四葉どうぞ…」

「ううゝ　下着までぐっしより…」

（中で待機しててよかった…フー君ともさつき会えたし）
「……………」

ホテルにあるシャワー室から一花が出てくる

天気予報では晴れが続く　雨の確率は0%　実際は徐々に雨脚が強まり

外で見学していた学生達は足早にホテルまで帰って行った

五月と四葉は風太郎と合流したのは良いが、結局は幸太郎は戻らず大雨の中を傘もささず探すのは困難　兄である彼を信じ風太郎は二人を連れホテルまで戻った

エントランス付近でソファに座り　外を眺める二乃とも出会う

濡れてる様子はなく　ただ暇そうな彼女に『よう』と彼は声をかけ

ていた

その後は一人静かにホテルまで戻ってきた一花を見て

二乃は何かをやらかしたと察知し 彼女を部屋まで連れて行く

少しの間でも自分と話してくれた 風太郎に『ありがとね フー

君』 一声お礼を述べ

意気消沈と言った言葉が似合う 今の一花を連れ出した

部屋まで一切 会話もなく シャワー浴びている間 誰一人口を

開かない

どんよりとした空気が部屋に充満

五月はなんとか場を和ませようと試みるが、すべて不発に終わり

いそいそと自分の着替えの準備を始め出す

暫くすれば一花も戻り 五月に言われ 四葉はシャワー室へと向

かう

この空気をどうかしたいのは一花も同じ

二乃や三玖とは話し辛く 下着の準備をしている五月に声をかけ

た

「わあ 五月ちゃん これ攻めてるね着ないの？」

「こ これは違うんです！ 身の丈に合わないので捨ててしまいます

！」

「もつたいなー」

「一花……………」

「……………」

「あんた 先ずは三玖に言う事があるんじゃないの？」

五月を弄り 少しでもあれを忘れようと現実から目を離す中

それを許さぬものがある…。 何時までも放置は出来ないと二乃

は彼女に声をかけ

今日までに一花が起こした事に対し 三玖に何かしら言う事がある

筈だと一花を逃げたままにはさせておけない…。 姉妹を思う故に

二乃は先陣を切る…………。

「……………あの 三」

「ごめんね……一花」

何を言えば良いのだ……今更何を弁解するんだ？

次女に言われ 動きはするが、一花が言える言葉は何もなく 頭に浮かんだ言葉を口に出す前に

三玖の方から謝罪の言葉が出てくる……。

二人を交互に見る二乃は、どうしてこうも拗れてしまったのか、どうにも上手くかみ合わない現状

そろそろ自分の為に動いてもいいのではと投げ出したくもなってきた

三玖の言葉で、一花の口は閉ざされてしまう

この中で一番 現状に疎い五月は三人を眺め 何故ここまで重苦しい空気なのかを

彼女なりに考えた 何故だろうか、最初に浮かんだのは雨宮紡木の顔だった

二乃と自分に最悪になる前にいった方がいいと忠告を伝え

三玖と自分をホテルまで運んだ 彼女のあの不敵な笑みが頭から離れない

(あの人は、何かを知っている そんな気もします……幸太郎君が消えた事と何か関りがあるのででしょうか?)

コンコン

「入るぞー」

悩む五月 当事者の三名 シャワーを浴びる 四葉と一室で様々な問題が渦巻く中で

扉を叩く音がする 彼にしては珍しく一声をかけ 部屋に入ってくる

同じく雨に濡れびしよ濡れだった彼は 着替えたのだろう

ジャージ姿の風太郎が紙を片手に現れた

連絡事項があり 全員集合だと学級委員の仕事の為に部屋を訪問してきた

一瞬声を聞き 肩を揺らした三玖だったが訪問者が彼では無く風太郎だと知れば

慌てる素振りもなく 再びベット間で縮こまる

二乃や五月は先ほどまで会話をしていたが

一花と三玖と顔を合わせたのが昨日以来だ……。結局二人と会えず

その会う予定だった兄も姿を消し 呼びに向かった部屋では、重々しい空気が充満

こういつた事は、ここにいない兄の専門分野だが、あの男は頬真っ赤に腫れさせ

雨に打たれ過ぎたのか少しダウン

偶には自分も相談を受けてみるかと、彼女達に声をかける

「お前らまだ揉めてんのか……ちよつと俺に話してみろ」

「えっいや……………」

「これは……………」

「何だ 二乃？ さつきは普通に声をかけて来たくせに やっぱ何かあったんだろう？」

彼なりに親身なって自分たちを心配し 相談をするよう言うてるのは

二乃として嬉しいことで、問題さえ起きなければ彼に抱き着いていたところだ

でもそうもいかない……。簡単に相談できることではなく

い口ごもる

ガラ……………

「ふーっスッキリしたーっ！」

「あつ……………」

「！」
バン

一瞬の出来事だ……。彼女らに歩み寄ろうとした時

横の扉が大きく開かれ 誰かが全裸で 自分の真横にいたような
いや間違はなく いた この場にいない人物

中野四葉が豪快に扉を開けた 当然中の会話を聞いてはおらず風
太郎がいるなんて知る由もなく

目が合った瞬間に四葉は再び シャワー室へと姿を消した
突然のことで思考が停止 その場で全員が固まってしまう

ハッと我に返ったのは一花だった

「た たいしたことないよね」

「ええ！」

「こんなの姉妹じゃ日常茶飯事よ」

「はっはい……………じよ じょうしきです／＼／＼」

何とか場を和ませ 風太郎に心配と変な誤解を与えない為
会話で押し切ろうとする三名 その姿は何処かぎこちなく

約一名はあの時に起きたことを思い出し 耳まで真つ赤に染めて
いる

「ならいいが……………とにかく三十分後な 明日の選択コースもそこ
で決める

らしいから考えておけよ」

バタン

三十分後に全員集合だ と必要事項を伝えると彼は何も見なかつ
た と自分に言い聞かせ

部屋を出て行く

「ごめん 勝手な事言つて」

「いいわよ。フー君に心配されるのは一番に避けたいもの　あんたも黙ってないの」

「だって……………」

「三玖……気持ちに分りますとは、いいません　けどいつまでもそうしてはいられませんよ」

「五月……………でも」

「みんなハッキリさせよう　私たちはそれぞれ　フータローくんとコータローくん

彼らのどちらかと二人つきりになる　機会を窺っている……………」

「私は班決めの時から言ってるわ……………まあそんな時は　コウのこともあるし

三人でって言ったけどさ……………それで五月　あんたはどうなの？

本当に何も思うところがないの……………」

「……………五月」

「彼と行動をする理由はあります　だから否定はできません……………」

「このままじゃ　誰の目的も叶う事はない　それは全員が望む所じゃないはず」

「あんたがそれを言うのね……………本当に凄い神経してる」

「四葉も聞いて」

「もういないよね……………／／／」

このままずるずると引きずっても訪れるのは誰もが望まない　最悪の結末

そうならない為　一度ここでハッキリとさせる　先導する一花を見て二乃はぼやくが

今は小言は聞き流す　顔を赤らめて部屋を見回す四葉も現れ　全員が集まった事になる

一花は幸太郎にあの日を思い出させる

二乃は風太郎と共に過ごす為

三玖は彼の誕生日を祝い 彼に伝える事がある

四葉は風太郎と協力し 三玖と幸太郎を二人にさせる

五月は幸太郎と協力し 自分が偽る正体を何とか風太郎に伝えようとしていた

それぞれがそれぞれ 叶えたいこと やるべき事がある…、

だから言い争いはここで終わらせ 全てを運に任せようと話す

後程 行われる 選択コース

A B ? ? E の五つをそれぞれで選択する

この方法なら誰かが上杉兄弟の班と当たり この修学旅行でやりたい事が出来る筈だと

四人に説明 これ以上の策は一花もない

当然 二乃からは苦情が出る こんな運に任せた方法で外れれば後悔しか残らない

彼らが二人で行動する以上は、まさしく五分の一の確率だ

それでも良いのかと三玖に聞く

「今は……どんな顔してコータローに会えばいいかわからない だから低い確立の方がいい……」

「私は……これが最善だと思います……… 最初からこうするべきでした

すみません 三玖

「五月が謝る必要はないよ もしコータローと当たったら 無茶をしないように見ててね」

「はい………わかりました」

「はあ…指さしでいいわね どうせいつもみたいバラけるから」
『セーラーのっ』

三玖の気持ちを知りながら自分の事を優先にしてしまった 謝罪の言葉を述べる彼女を責めはせず

もし 自分ではなく五月が彼の班に当たった時は、自分の代わりに彼を見守り

トラブルから遠ざけて欲しいと頼む………。

二人のやり取りが終わり どうにも納得が行かないが、話して状況は変わらない

決めるときは一斉に決めようと二乃は提案 何時ものことだ被る事無いと姉妹ながらに分かっている

この指さしで自分たちの修学旅行の最後が決まるのだ

悔いだけは残したくない どんな結果であれ受け入れよう
.....。

.....

.....

.....

選択コースの話し合いが終わり

それぞれ記入するようプリントを手渡される

ニヤリと不敵に笑う一花は筆をはしらせ 記入欄にあるアルファベットをかき込む

中野一花 Eコース

『おい 上杉明日のコース選択どうすんだ？ 兄貴もないんじや決められねーだろ』

『あいつならEコースだろ 俺から話しておく』

彼女は偶然耳にした 前田と風太郎の会話を

彼らの班がどこを選ぶか既に彼女は把握していた 五つの中からどれかを選ぶ

ランダムな状況なら恨みっこなし.....

何故 彼女が提案したのかは明白だった...

書き込む中で 四葉の言葉 二乃の言葉 三玖の謝罪が頭を過ぎる

でも.....これが中野一花のやり方だ

『君は最高のアドバンテージを持っているんだよ』 忘れたい存在も自分に語り掛ける

もう後戻りは出来ない.....選択の余地などなかった

そして時間は進む……………。

自分達を選んだコースの前で生徒が並ぶ

Aコースには中野二乃が、辺りを見るが 風太郎の姿はない

(やっぱり……………運任せにするんじゃないわ はあ)

続くBコースの前では四葉が二人の名前を呼ぶ 選択してない事を祈っていた

「上杉さーん お兄さーん いませんよねー」

続いて?コース前 五月が不安そうな顔で列に並ぶ

「幸太郎君も上杉君も見当たりません……………誰が彼の元へ 不安です」

次は?コース 順当に行けば、ここにいるのは三玖の筈だ

結構な数の生徒がここを選択し 実際には知り合いが多いという俗な理由の生徒が多々見られる

その中の一人の生徒が後ろを振り向き 彼女の名前を呼ぶ

ここを選択した 中野 一花の名前を呼んだ……………。

「……………お腹痛あ……………。」

最後に残されたEコース

そこには 前田 武田 風太郎が何を見て どう過ごすか話し列に並ぶ

その一番後ろでおでこに冷えピタを張り 何度もくしゃみをする男子生徒の姿

「はーつくしよん たく これだから学校行事はよー」

「あ……………コータロー……………。」

「ん？ おう三玖かお前もEコースか」

「……………その 私は」

「まあ…。気楽に行こうぜ」

ニコリと笑い 修学旅行の最後を楽しもうと伝え

彼は列に並び直す 大きなくしやみをしては鼻をかむ

そんな彼の後姿が心配で今すぐに声をかけたいが、俯いたまま何も
言えない三玖がいる

前途多難な修学旅行は遂に最終日を迎えた……………。

第九十三話 不良少年とシスターズウォー⑦

「修学旅行最終日 Eコースを選択された皆さま 本日の目的地 映画村に到着でございます」

(ここにいるのは一花のはずだったのに……………)

私と選択コースを取り替えるなんてなんで言いだしたんだろ)

? コースを選択し直ぐ 姉である一花は自分の持つEの紙と彼女の持つ?の紙の交換を頼まれた

突然のことで困惑し 答える暇なく取り替えられ

気づけば一人 近くでぼーっと眺めている

? コースは武将や歴史に関連したコース

三玖がそう言った物が好きなのは彼も知っている故に、あの一件を通して彼がこれを選ぶ確率も低いと予想していた

二乃と話 幾分か楽にはなっているが、いまだ幸太郎とどう向き合い彼と話せば良いのか決心がついていない 加え具合の悪そうな彼を見てると話を切り出して良いのかも不安になってきた…………。

(それに…本当はここには来たくなかったな…あの日を思い出す)

ある程度鑑賞が終わり 別の場所へと移動するべく足を動かす

この広い中で彼らの班と自分が出くわす事もそうそうない

ここにきてため息ばかりだ

「はあ……………だるい」

「先輩大丈夫ですか?」

「無理するなよ?」

「分かってるさ……………」

「あつ……………」

「中野さんだまた会ったね!」

「！」

「つて 三玖なんで逃げんだ！」

「先輩嫌われてんじゃね？」

「前田もひで〜こと言つて来やがるな…」

偶然とは必然とも言う

次の目的地を何処にするかと…。その場で話し合う彼らとばったり出くわし…。三玖はすぐさま逃走を図る……。

彼女とは話しておきたいと思っていた。矢先に突然すぎる行動

彼は一瞬出遅れる 三玖はそのまま走りつて行こうとするが、ドンと前の人にぶつかってしまい、その場で尻餅をついてしまった。

「三玖大丈夫か？ 立てるか」

／＼／＼

(まあー 聞かれとなれば、逃げたくなるだろうな)

(二乃ごめん……。 やっぱ無理だよ)

その場で態勢を崩した彼女に手を差し伸べるが、自分で立ち上がり一礼すれば、再び逃走を開始

追いかけてこかよーと心で叫ぶ彼は負けじと彼女を追いかける遅れてやってきた風太郎も様子を窺うように周りを見渡し

幸太郎と共に三玖を追いかけてようと足を動かす

「戦国武将の着付け体験はいかがですかー！ー！」

本気で走れば追いつくが、どうにも調子の悪い彼には追いかける程の体力はない

どうしたものかと思えば、何処からか声が聞こえ ぴたりと目の前の少女は足を止める

戦国武将と言う単語について 足が止まっていた

着付け体験にコスプレだと言いだす 前田

一方武田は郷に入っては郷に従えと上杉兄弟や三玖にも着付けを進め

こういつた事には興味を示さない風太郎も何を思ったのか『幸太郎も着てみるよ』

普段の彼から出てくるとは思えない言葉選びに幸太郎は本当にこれは弟なのかと疑ってしまう

「うるさい 偶にはって話だよ」

「俺は別に断ってねーよ んじゃ行くか」

――――

――

――

「何で 誰もいないんだ？ 前田たちは、おろか風太郎まで消えやがったぞ」

まさか風太郎まで着付けに乗り気だったとは意外な一面だ

俺の背中を押し 店の中に共入って行く

おかしな事に 武将の衣装なんては取り扱ってはおらず

時代劇に関するものしか置いてない

先ほどの『着付け体験』と聞こえた声も何でか店とは別の方向から

聞こえていた

他にも前田や武田 加え風太郎

外で待つと先ほど言っていた三玖の姿すら見当たらない

まあ……。あんなことがあって普通に接している俺が可笑しいんだ

ろうけど

「三玖には風邪を移さないようにしないとな」

昨日の雨でどうやら風邪を引いてしまった

やはり俺と学校行事は相性が宜しくないな 大した風邪ではない

林間学校のように倒れる心配も皆無 あれを反省して風邪薬も

持ってきて正解だったな

「誰もこねーな………………。ん…はあ」
「じー…。」

俺がいる位置から少し先で、着物姿の綺麗な人物がこつちを見ている…。

向こうから注がれる視線に気づきその方へ向けば、三度逃走を開始しようとするが後ろから来た人物に押され

前に出て来た………………。ん？ 今のぶつかつた人 何処かで………………。まあ今は、三玖のところに行かんとな

「よー 似合ってるな」

「ありがとう…………。何故か店の人がノリノリ気づけば、この格好に」
「センスが良いな」

外で待つと言っていた三玖だが、これまた不思議な事に彼女は店の中に連れられ

頼んでもいない着物を係の人が既に選び終え あつという間に着物姿に

(?どういうことだ…………。まあ今はいいか)

恥ずかしいのか、やや俯き加減で、視線は中々合わせてくれない髪につける簪も良く似合っている この姿を見れないとはあの三人も損をしてるな

「そう言えば フータローたちは？」

「それがいねーんだよ まじで何処いった？」

「でも さつき着替えて外に出てきてたよ」

「何で 何も言わず出て行くんだ…。たくよ」

悲しい事実だ、風太郎 前田 武田の三名は年長を置いて先に出て行っている

置き去りとは良い度胸してんな…………。

まあ…散々迷惑をかけた俺が言えた義理じゃねーけど

取り敢えずは、適当にぶらついて探して見るのも悪くないな

「三人と連絡しないの？」

「残念ながら俺のスマホは初日以降はただのガラクタだ　たくあの野郎」

「あつ……………そうだったね」

「ん？　三玖に話したっけ」

「えっと　四葉がそんなようなこと言ってた気がする」

「ああー　話した気がするな　四女には　でもあいつらに連絡は良いよ」

「どうして？」

「歩き回ればそのうち見つかるだろうしな　三玖手伝つてくれるか？」

「うん……………わかった」

二人で行動するのも気まずい

でも今は少しでも彼女と共にいたい　それは本音だ

まさか異性と一緒にいたいと俺が思えるなんてな

消えた三人を探す傍ら（建前）　映画村の中を探索し半ば観光だ（本音）

流石に映画村と言うだけはあってセットの作りこみは凄く　何処を見てその時代の人々の格好が目立つ

途中に甲冑を着た　人物が通り過ぎ　じーんとそこから離れた三玖を見て

その人を呼び止めた　せっかくだ写真を撮るのも悪くない

凄く嬉しそうに写真を撮っている彼女の姿にふと胸の奥が温かくなる

三玖と過ごす心が安らぎ気持ちも落ち着く…何故だろうな

「コータロー　あそこ射的もやってる」

「中にいるかもな　行くか？」

「うん！」

弓の体験コーナーかこれまたこいつが如何にも食いつきそうな奴だ

中に入るが、勿論三人の姿は見当たらない

出て行く気はないし 彼女はどんどん中へと進んで行く
生き生きして見えて見ている俺まで楽しくなってくるな……。
何度かやって見るが中々難しく

指先が、不自由な俺には厳しい 手手間取っていると先に始めたか
らか慣れ始めた三玖から俺にレクチャーがはいる

「ここを抑えて」

「おう」

「私が支えるから やってみて」

「了解だ……。……。……。おっ 真ん中に当たったな」

「やったねコータロー」

「三玖の教えが生きたし 支えてくれたからな ありがとうよ」

「どういたしまして」

最近是人に教えてばかりだったから

教えられる側と言うのも新鮮だ 勿論のこと学校の授業は例外

あれは通ってれば当たり前前だ

暫く興じれば満足したのか次の場所へと向かおうと三玖の方から
俺の手を引いて来た

残念な事に的の真ん中に当てた所で特に景品などはなかった……ま
ことに残念だ

「見てコータロー あそこに何かいるよ！」

「何故に恐竜が、いるのか映画村という名は伊達ではないのか……」

「ねえー 写真撮って！ 引っ込んじやう」

「O? 待ってるよ」

ドン

「おっとっと」

「きやー」

どぼーん

「三玖 ごめん」

「大丈夫 でもせっかくの着物がびしょ濡れだよ ちゃんと周りを見
ないとだめだよ？」

「悪かった……。言い訳になるけど誰かに押された気がしてさ」

シャツターを押そうとした時だ

誰かに背中押された 手で押されたのかどうかは定かではないが、
押されてバランスを崩し

目の前で待っていた三玖にぶつかりそのまま川へと落としてしま
った

何度何度：彼女に謝る

足がつく場所ではあるが、彼女も言う通りせつかくの着物が水に濡
れ色々と台無しになってしまった…。

(うーん 気のせいなのか?)

—————

—————

—————

「係の人に説明してくるわ その間に着替えててくれ」

「うん…。」

っていつの間にコータローと普通に話せてる…。

あれだけ色々あったのに不思議だな コータローといると嫌な事
も忘れてる

私が逃げてばかりなのに 彼はずっと私と話す機会を探してい
た

今日だって風邪を引いてるのに中を見て回る時も文句も言わず付
き合ってくれた

楽しいこともいっぱい、細かい事も忘れてるな

例えばそう

(下着まで水に濡れちゃったこととか…。どうしよう

本当にどうしよう こんな着たまま歩けないし 係の人につて
呼べないよ

あ タイツがあるならそれで…。つて無理無理無理 ああどうす

ればいいの)

川に落ちた時に全身がびしょ濡れで、浴衣の中まで水が入り

案の定下着もびしょびしょ…。この格好でコータローとは会えない
ない

そんな度胸はないよ 着替えなんて用意はないし うーん

(！ 何これ)

焦りに焦り 頭が限界に来た時にカーテンの下から小さな箱が入
れられた

『お困りでしたらお使いください』と上に書かれている

この文字の書き方 どこかで見たような気がするけど 今は中を
確認しよう

きつと係の人が貸してくれたはず……

(うーーーん 何これ……)

――――

――――

――

「風太郎たち全然見かけねーな… まあそのうち会えんだろう」

「／／／ううん」

「どうかしたのか三玖？ 着替えが終わってから様子がおかしいぞ」

「な 何でもないよ ／／／」

「ずっと歩きっぱなしだな あそこに座るか」

「それが良い 早く座ろう」

係の人にはどういう経歴でこうなったのかきちんと説明し

頭も下げた 怒られるかと覚悟はしたが、お気になさらずと何とも
心の広い人だ

その後は俺も着替え

暫くすれば顔を真っ赤にし何故か内股の三玖が現れた

事情聞こうと思ったが、手を前に出され何も言わない様制止される

着付け体験から今まで2時間近く 歩きっぱなし

三玖の体力を考えてあげるべきだったな

近くに休める場所を探しおあつらえ向きに座れる所を発見 見つけるな否や三玖は小走りで移動

こういう時は物凄くはえーな…。

「目まぐるしくて あつという間の三日間だったね」

「確かな色々あり過ぎた……………」

「私は実質二日間だったけど」

「おつおう…………」

「でもいいんだ 最後にコータローと過ごせた それだけで」

「俺もだ三玖と色々と回れて良かった…。 ん？ なあ三玖 その紙

袋 お前のだろ持ってきてたのか」

「えっ？ えー 何で私のパンがここに」

「おー お前が作ったのか すごいな」

(そうだけど 何でここにあるの？ あの時なくしたはずだよ)

三玖の隣には、修学旅行の初日で彼女が落とし

俺が四葉に渡した紙袋が置いてある… 個人的の秘密で四葉から

も二度ほど聞かれたが

中身は知らん…。 三玖の口から『私のパン』と単語が出て来た事

でやっと正体がわかった

パン そう聞けば自然とお腹も鳴る

少々恥ずかしいな

「なあ三玖………… 一個貰っていいか？」

「それは、もう…………」

「あむ…………あむ もぐもぐ…………うまいな」

「えっ…………」

「言っただろ…俺は味覚音痴で味何て分らん、それに愛情で判断するって…………でも不思議な事に何故だろうな これはそれとは関係な

く美味しいと感じれたんだ

三玖がどれだけ頑張ってこれを作ったのか、うん 愛情を差し引いてもこれは最高の出来だよ

「ごちそうさまでした 美味しかったよ」

素直な感想だ 以前三玖に言われた『コータローは愛情で判断する。だから本当に美味しいと言って欲しい』 お世辞は言わない 料理に必要な物は食べてくれる人間への愛情だ

それは何にも勝る最高のスパイスでこれさえ磨けば、誰でも喜んでくれる母さんが良く話していた

味覚音痴な俺だけど作りての気持ちを考え それが判断基準になっっていた

正直言えば、曖昧過ぎて作った側を困惑させかねない

でも今食べた 三玖お手製のパンは 美味い その言葉が適切だ

美味しいと言うのはきつとこんな感じなのだろ

俺が19年生きてきて初めて家族以外の料理で味わえた 美味しいと言う感覚だ

「……………うん …… ありがとう ありがとね 私頑張ったんだよ」

「偉いな 流石は三玖だ……………」

「それと遅れたけど誕生日おめでとう コータロー これはコータローへの贈り物でもあるんだ」

「そうだったのか……………俺は自分の事にはとことん無頓着だからな

貰えるとは思わなかったありがとな でもさ何でパンなんだ？」

「えっと コータローって気づけな何時もパンばかり食べてて好きなのかなって」

「そうか……………うん 俺はパンが好きだ それは事実だ 風太郎も好きなんだ」

「二人ともに好きなんだね」

「ああ……………昔さ 死んだ母さんがよく焼いてくれてたんだ……………」

毎日毎日 俺が7才になったあの日まで……それが忘れられなくて 忘れたくなくて……未だにパンを食べ続ける そんな男だよ」

俺が学食でパンのみと言う侘しい昼食を過ごすのは、あの人を忘れない為だ

笑顔が素敵で、誰からも好かれ お調子者でそれでいて子供っぽいけど どんな時も家族を思う母

そんな彼女を忘れたくない一心で俺はパンを食べていた……。

亡くなった あの人との大切な絆の一つである 覚えていたから 笑顔を温もりを思い出せるように……。

弟と違つて俺は一度過去を忘れてしまっている それ故に敏感になつていた

「！ コータローたちのお母さん」

「小さな個人喫茶を出すのが夢だったんだ あの人が作るパンは絶品でさ 勇也さんも大好きで

つて この話は別に今は良いか……」

「ううん！もつと教えて欲しい 小さい頃からずっと一緒だったのに そんなこと全然知らなかった

コータローを見ていたい 守つていたいって自分本位な事ばかりで知ろうともせず

もつと知りたい コータローの全部！ そして私のことも全部知つてほしい」

「お前のこともか……。ならば 三玖だけに教えてやるよ もう一つ俺の秘密をさ」

小さい頃あれだけ一緒にいて俺は彼女達の事は知つていても彼女には、俺は自分の家族の事をあまり話した記憶はない。

当時の事を思うと俺は俺であり触れられなくなかつたんだと思う

風太郎との関係性は言わずもなだ、特に母さんの一件があった事も大きな要因だった

深く知っているようで知らない俺の過去を彼女は知りたいたいと言ってくれる

俺を見て俺を助けてくれる彼女は俺がどう言った人物なのかをもっと知りたいと見つめている

その瞳も言葉も嘘も偽りもない、真っ直ぐな気持ちに誠意を込めて俺が話せる俺の事を少しばかり語ろうか……………。

「教えてコータロー」

「ああ……………実は俺の名前には複数候補があったんだ
一つは金太郎」

ドスン

「今何かぶつかった音が…………。」

「な 何でもないよ続けて」

「おう……………それともう一つがさ 幸平って名前だ
「！」

「俺さ…………。今はバイトばかりの運動馬鹿だけどさ

生まれる前は医者に言われたらしい この子はとても体の弱い子
です

産むにはそれ相応の覚悟を持つようにと… そんな時に勇也さん
が考えた名前が

金太郎さ」

「…それは知らなかった…体が、弱かったなんて、そんな風に見えなかった」

「まあ…………子供なりのやせ我慢とでも言いますか、これはおいしい」
「わかったよ。コータローが話したくなった時で良いからさ、それになんで金太郎なの？」

「金太郎ってのは元気な男の子の代名詞だ、金太郎飴まであって健康にそしてすくすくと成長して欲しいって意味合いがあったんだ」

俺の名前の由来を軽くだが彼女に教える事にした。

勇也さんが俺の名前を決めた日の事だ。偶然通った路地裏で占い師が彼を呼び止めたとか

その占い師曰く『生まれてくる子供の人生は波乱万丈、今考えてる名前は控えた方が吉、名には幸福を意味するものが重要だ』とか何とか……………。

柄にもなく勇也さんは、信じ込んでしまえば来る日も来る日も考えた、だが中々いい案が浮かばずそこで母さんが言ったのだ『みんなに公平に幸せを与え』『同時に自分も幸せになれる子になって欲しい』

ただ自分だけが幸福になるのではなく、他者にも幸福や幸せを振りまける元気な子になって欲しいとあの人は口にし『幸平』と言う名前を考えてくれた……………。

「色々と凄い過去だね……………」

「まあーな……………。んで、羽陽曲折がありながらも

二人の考えた『太郎』と『幸』をくっ付けて 今の名前

『幸太郎』って名前の出来上がりだ……………今思うとマジで金太郎じゃなくて正解だったぜ」

「？」

偶然だろうが、占い師の言ったことは当たった

あのまま金太郎として過ごしていたらある意味で大変な事になっていただろ

？から出た実だ……………まあ……………そんな時は金太郎とは別の名前をあいっは出して来そうだけど

まさか キンタロー君という架空存在が弟や二乃に大きく関わってしまふとは、本人達以上に実は緊張しては複雑な気持ちを味わっていた……………。

俺が三玖に教えたいことは話したつもりだ

何故体が弱く 今は元気に過ごせるのか、それについては後日改めて教えてやるか

今話すには少しばかり長くなってしまふ。今はさけるとしようか
……………。

「それで、三玖の事をさ教えてくれよ?」

「うん良いよ。先ずはあれだよ!」

「あの建物がどうした?」

「お奉行所として 時代劇に使われてる名スポット 今日はおそこを見ただけで満足

? コースほどじゃないけど ここにも私の好きな物がたくさんある」

「お前は好きだもんな歴史がさ」

「それにね……………ずつとここにコータローと来たかったんだよ」

「俺とここに? 何故」

「今は秘密だよ」

少々意地悪っぽく話す彼女は、再び周りに視線を送る

あれやこれやと自分が気に入っている物や好きな物、ここには数々
点在していると楽しそうにはなしてくれる

「えーつと他にもあれとか、さつき渡った大きな橋もだよ」

「あれもそうなのか…………。ドラマに出るのか?」

「そうだよ それにあれとか あれ そして あれなんかも好き それに」

「おいおい ずいぶんと好きな物が多いな まあー お前の好きなもんでここは溢れてる

当たり前か…………。」

とんとん拍子にあちらこちらを指さしては、好きだと言葉を並べる
幾つか紹介し終われば、俺の方に向き直る ぴたりと止まり

指先を俺に向けた…………。いったん閉じた口を彼女は開き 覚
悟を決めたようにその言葉を告げる

「好き」

「もちろん……知ってるよ」

俺もまた彼女が好きな者の一つだった

頬を赤らめる 目の前の彼女に俺は答えを返す必要がある

と言いつつも 果たしてこれを彼女に告げるべきか、あの日から
ずっと迷っている

この言葉は正しいのか静寂の中で俺は気持ちを整理する……………。

—————

—————

——

彼と彼女が過ごす2時間前に時間を戻す

そこには素顔を隠した一花が三玖にぶつかること

走る彼女の動きを止める

その拍子に転んでしまうも三玖に駆け寄り手を刺しの述べる幸太
郎の姿があつた

そうあの時に三玖にぶつかった人物の正体は一花だ

そして『『着付け体験』』と声を出したのは 一花とまた彼女と同じ
く素顔を隠した二乃本人

何故ここにいるのか、一花も二乃もそれぞれ質問を投げる

彼のお節介が移ったのか、ここまで来たら二人を見守っていこうと
考えた二乃

一花も同じだEコースから抜け出し 二人の様子を見守ろうと彼
女はそれを選択した

今まで邪魔ばかりして来た自分が信じてもらえるとは思っていな
いと語るが

これは自分の意思だと強く主張　彼女の表情に二乃は何かを悟り
その言葉をかけようとしたが、ふいに後ろから物音がした……

振り向いた　方向には、二人と同じく素顔を隠す　五月と四葉
そして　何と須藤真弓までここにいた……。

「真弓まで」

「先輩が心配でずっと見回っていたんですが、先ほど姉妹の誰かが三
玖さんにぶつかるのを見て

追って来たんです　まさか4人もいるとは驚きでした」

「誰もルールを守ってないじゃない……。　お節介は伝染するのね」

「それよりも幸太郎君達が移動します　どうにか着付けコーナーの中
まで二人を入れなくては」

「うーん」

「どうかしましたか二乃？」

「どうにもあの二人が邪魔ね……。　フー君まで来たがるのは意外だっ
た……。　てつきり一人で何処か行くのかなって思ってたから……　さて
何とかして　フー君たちを引き離さないとね」

「何とかしてどするの？」

「せっかくだし　一花は三玖に着付けさせるように仕向けなさい」

「し　仕向けるってどうやって……。」

「そりやもう……。　得意でしょう？　三玖の変装」

「いじわる……。」

「はいはい　今は文句は受け付けないわよ　真弓も一緒に来て　武田
と前田

それにフー君を何処かに誘導するわよ」

「それならいい場所があります！　ついてきてください」

ここからは種明かしの時間

ニヤリと表情変えた二乃は一花に三玖の変装をさせる

偽三玖が係の人と話をし　どの着物がいいかを選ばせていた

三玖本人が知らぬ間に話が進んでいた謎がこれだった

彼女に似合うだろう服を選び終え　一旦店から退出

その後は様子を見に来た　三玖が店の中に案内される形で話ごと

んどん拍子に進んでいく

お次は武田 前田の二人で着替えが終わると店の外から風太郎を含む三名が登場

遠くで眺める二乃は風太郎の姿にうつとりし 真弓の声で我に返る

言いだしたは良いが、どうやって二人と風太郎を真弓が話したお化け屋敷まで連れ込むか…。

なるべく幸太郎と三玖の二人で過ごさせてあげたいと考える二乃にとつてここが鬼門だ

うーんと考えるうちに意外な人物が動きを見せる

「武田、前田……。あの中で幸太郎が待つてる筈だ、入って行こうぜ」

「まじかよ」

「先輩ってああ言ったものが好きなんだね」

「良いから入るぞー」

上杉風太郎は二人を近くのお化け屋敷まで連れて行く

彼の行動でうまくことは運んだが、何故彼が自発的にそういった行動に出たのか疑問があった

風太郎の機転で無事に幸太郎と三玖は二人になれた

自分たちも一旦 一花たちと合流しようと思われ 真弓に言われ その場を動こうとした時だ

ふいに声をかけられる……。

「やっぱ お前らだったか……。さつき 四葉や五月を見かけた時になんか怪しいと思ったんだ」

「風太郎さん」

「フー君 何でここに！ っっていうの間に私服に戻ったの」

「だるいから着替えた……。前田たちなら等分戻ってこない筈だ まさか真弓まで関わっているとはな」

「あつはは 本当に風太郎さんがいるのは意外です」

「それぞれが選択コースの列に並ぶ時さ 偶然一花の前を通ったんだ その時間いたんだ『あの二人を一緒にさせないと』……。そんな話

聞いたら動かない訳ないだろ」

「フー君……。素敵」

「二乃さん！ 二乃さん！」

風太郎もずっと二人を気にかけていた

ただ自分がどう動けばいいのかもわからず、昨日彼女らの部屋を訪れた際にも

少しばかり話を聞くつもりでいた……。間の悪い事にシャワー

を終えた四葉とぼったり出くわし

何も聞けず、今日を迎え 武田や前田とEコースまで向かう際にふと耳にした

一花の思い……。ついた矢先に 不審な動きをする四葉と五月の姿

オマケに何処かで見た事のある 須藤まで変装してコソコソとついてきている

自分が動くなら今しかないと幸太郎と三玖を二人にさせるため

前田達をお化け屋敷まで誘導し 自分はさつさと着替えを済ます

やるべき事は終えたなら 後は邪魔にならないよう何処かで待機と彼なりに気を遣っていた

「二乃が固まってるな……。どうする？」

「あつ 先輩たちです どうか二人を接近させないと！ 風太郎さんここはお任せします」

「つて 真弓 お前どうするつもりだー」

普段は見れない彼の姿に二乃はときめきその場で目をハートに石化

自分たちが話しているうちに二人はまた別の場所へと移動を開始した

二乃を背負い 走って行く風太郎

暫く彼女を追いかけ 兄の動きを観察していた

そんな時 何を思ったのか先頭を走る 真弓が幸太郎を突き飛ば

すように背中を押し

バランスを崩した 彼は前にいる三玖とぶつかってしまっ

ばしやんと水の跳ねる音 浅い川の中にずぶ濡れの三玖と頭を下げる幸太郎

あわわわと口元を抑え こつちまで逃げてくる真弓

「お前は何がしたかったんだ」

「先輩がじれったくて 背中を押ししたらそのまま突き飛ばしてしまいました」

「まじでパワフルだな お前は……。」

遠くでそのやり取りを見ていた 一花 四葉 五月も何が起きたのか判断がつかない

彼女を引き上げる幸太郎を見て 三玖が川に落ちたことだけは分かりあのままでは動く事も出来ない

近くで作戦会議 服は着替えれば良いが、大きな問題があった

「下着どうするんだろ」

「このままじゃ 三玖がノーパンデートだよ!」

「こつこつ売ってるんでしようか?」

「ふ ふんどしとか……?」

「よ 四葉の俊足でお店見て来て!」

「でも ふんどしはさすがに……」

「最悪 隠せたらなんでもいいよ!」

「あ あの その……私……変な話ですが 何かあるといけないと思っ

下着を一セット持っています」

『』 なぜに……『』

下着の貸し出しが出来るのかはたまた ふんどしを渡して誤魔化

すのか

二人が言い合いになっっているなか今にも噴火しそうな程耳まで真っ赤に染めた五月が体を震わせ

意見具申 何故なのか五月はとてもきわどい下着を持ったまま選択コースに参加しており

それを三玖の元まで運ぶことで急場しのぎ

箱に詰める際に 四葉『ええー 五月なんでもってるの』と物凄く困惑している

何故だろうか五つ子の中で本当に怖いのは一番に考えが読めないこの中野五月ではなからうかと一花は思い始めていた……………。

その後は二人が休んでる通りに立入禁止立て札を置く事で外部からの侵入とお邪魔虫を近寄らせない様に配慮 二乃を除く3人が近くで待機していると二乃を担いだ風太郎と真弓が現れる

「上杉君！」

「なんでフータローくんが」

「色々だ……二乃を連れて来たし 俺と真弓は周りを見てくる 邪魔が入らない方がいいだろう？」

「上杉さん……………ありがとうございます！」

「では風太郎さん 行きましょう」

暫くすれば二乃も目が覚め『フー君はフー君』と声を出す為

しーっと指で口元を抑える 今は二人の真後ろ下手に騒げば気づかれてしまう

はつと我にかえれば、作戦は最終段階に…。

ここでまさかのトラブルが発生

幸太郎に頼まれた 三玖の落とした紙袋を四葉は部屋に置きっぱなしだった事に気づく

「大丈夫 それなら持ってきてる ささっと置いてくるね」

悪知恵が働かない一花程冷静でちゃんと周りを把握しているものだ

二乃は改めて実感する

助けに船とお礼を言えば、二人に気づかないよう そーっと迫り

三玖の横に紙袋を置き

すぐに撤退 ふうーと息を整える

「あのパンって三玖が作ったんでしょ？」

「うん…修学旅行初日にお兄さんのために 私もずっと味見役をやつてて

あんなことが、なければ……………って ごめん！ 一花を責めるんじゃないくて……………」

「……………」

「とにかくごめん」

「？」

「私は全員が幸せになってほしくて いつも消極的になってる子の応援してたのかも

こうなるって少し考えればわかるはずなのに……………だから一花の本当の気持ちにも気づいて

あげられなかった だからごめん」

「私……………謝られてはっかだ 一番謝る必要があるのは……………私なのに……………」

—————

—————

—————

『もつと知りたい コータローの全部！ そして私のことも全部知ってほしい』

三玖ごめんね

ずっと邪魔して ごめん……………。

コータローくんもずっと私を信じてくれてたのに嘘をついて困らせてごめんね

だけどね　あの日のこと　それに出会った今までの全て

そして　六年前に君に伝えたかった　この想いは嘘じゃないんだよ……………。

照れくさくて　どうしていいか分からなくて　友達でいよう
そう答える事しか出来なかつたんだ……………。
大好きなのに……………

「実はさ　あんたの気持ち少しは分かるんだ……………」

もし　フー君と出会わずにコウと再会してたら
私とあんた　タイミングが違えば逆の立場だったかも……………」

二乃……………そうだね

ずっと彼を思ってたのは私だけじゃない　兄と慕い　彼の傍に何時もいたこの子も

もしかしたら……………私や三玖と…

「偉そうなこと言ってごめんなさい」

「そんなこと……………そんなことない」

「三玖は最後まで一花は悪くないって言ってたわ」

「うん……………それに　五月ちゃんもごめんね　あんなひどいこと言って」

「いえ……………どうにも私は中途半端が過ぎていたんです　一花が謝るところではありません」

「私もごめん　五月だって本当は！」

「今は彼と三玖を見守るべきです……………それで良いんです」

「抜け駆け 足の引つ張り合い この争いになんの意味もない
私たちは敵じゃないんだね……………」

「私もさ 間接的には 三玖の邪魔をしてたし ちゃんと謝らない
とね

好きなものって ほどじゃないけどさ 私たちにしては珍しく共
通の話題が出来たわけだしね」

あの人の言葉で止まる事をやめ 一人焦って

誰の言葉も聞かずにただ進んでいたその先は見渡す限り何も無い
更地

ずっと私に語り掛け 気にかけてくれた姉妹やあの二人 彼らに
もつと寄り添ば

気づけたのかもしれない……………。

……………

……………

……………

「好き」

「もちろん……………知ってるよ」

ジツとこちらを見据える彼女のその瞳に迷いは見えず

けして逸らす事のない姿と同時に自分の胸の内を俺に教えてくれ
た。

今の彼女の言葉と行動を少しばかり整理してみよう

俺と訪れたここには、彼女の好きなもの興味を引くものはいっぱい
でこの時間が大切で好きで、そして彼女は、最後に指をさした。

それは他でもない俺だ、『知ってるさ』と俺は口に出してはいるが、
本当に俺が思う様な意味合いが込められているのか、嫌違うだろう

『上杉幸太郎』 彼女がこのタイミングで言葉選びを間違う事があるだろうか？

知っていると自信ありげに得意げに答えた お前なら彼女の伝えたい言葉の意味を知っている

知らなければならぬ

俺と真剣に向き合い、答えを待つようにしている少女に俺は伝えなければ行けない言葉がある筈だ。

だが、どうだろうか、果たして上杉幸太郎は中野三玖を満足させられる答えを持ち合わせているのか？

俺にとつて中野三玖はどういった存在だ………

幼馴染か？生徒か？助けた知り合いか？巡り巡る答えは、現実の俺の動きを鈍らせる

ここ二日三日はあの四葉の発言を聞いて俺はずっとその答えを探してたんだ。

好きか？嫌いか？

その言葉を俺は口に出れるのか？

あの一件が尾を引いている、あの少女との数年間と別れを思い出すと胸がずきりと握られているような痛みを走らせる。もし言葉を誤れば、この気持ちを彼女に味合わせ俺はまた同じ思いを味わう事になる

素直に言える素直な言葉が、今の俺にはあるのか、きつと2年前の俺ならもつとスムーズにやってのけていた『やれてしまう』

だが、これは今の俺の問題で俺が決断する答えなんだ

俺を見る彼女は誰だ

あいつか？あの子か？あの人か？

この一瞬で2年前のあいつを思い出す。

この一瞬で6年前のあの子を思い出す。

この一瞬で半年前のあの人を思い出す。

俺は誰が好きだ……………違うだろう俺よ

お前が見るべき人物は彼女たちではない、自分が誰と話しているのかを認識しろ

今は三玖を見ろ 俺は……………僕は三玖をどう思う？

手のかかる生徒の一人で大切な幼馴染で、話していて驚かされる事は多いけど「僕」は、彼女といる時間がとても心地よく感じている、この気持ちだけは？偽りない気持ちなんだよ

お前が感じて思った気持ちは、紛れもない真実だ。

抱える思いと伝える言葉を俺は躊躇っているんだと思う

でも確かにこの胸は静かにそれでいて力強く鼓動を走らせている
緊張しているんだ、誰かに好意を向けられ、それに応える事を

……………

そう 中野三玖が口にした言葉には、『好意』がある

彼女の行動と彼女の今までの言動とそれはとうに気づいていた筈だ

俺は、三玖の告白に答えを出さなければいけない

鼓動は更に早くなりでも確かに暖かいんだ。

ビシツと俺に人差し指を突き立て 凜とする彼女はとても綺麗だ
一言言うなら見惚れてしまう……………違うな

この一瞬俺は、中野三玖に見入っていた

上杉幸太郎は逃げる訳にはいかないんだ……………。

柄にもなく恥ずかしくなってきた……。

「いつその事殺してくれ……。」

「先輩顔が真つ赤です」

「俺だつてなあ！恥ずかしいって気持ちはあるわ！つまりは三玖が言いたいのには、『俺ではなく』……。うん そうだな 後ろで覗き込んでいた 中野姉妹と うんそうか、げっほ げっほ」

「幸太郎 考え過ぎると熱が上がるぞ？ほれ水飲め」

「わ、悪いな」

「何と思つたのコータロー？」

にんまり笑みを作る三玖

でも まて冷静になろう 初日の事も思い出し

今までの事も整理しよう 確かに彼女は後ろの柵を指さし そこには覗き込む姉妹たちがいた

何処か真剣で俺と向き合う 彼女を浮かべるとやはり不自然だ

何かの遊びで俺を騙した それはない

彼女は俺に対して何処までも真面目に考え 害になるようなことは決してしない

それ程まで徹底している

ならば今の 家族と言う単語 それはきつと……。

「まあーうん 色々と分かった 先に帰ろうか 風太郎」

「急にどうした」

「俺にも猶予が出来た そんなもんだろ」

――

――

――

「三玖いいの？ せつかく伝えたのに誤魔化して」

「いいんだよ。私は誰かさんみたいに勝ち目のない特攻するほど馬鹿じゃない」

「班決めのことまだ 根に持ってるのね」

「それに………コータローはそれほど鈍くもないよ」

「そうですね 三玖さん さっきの戦いは勝ち目のない特攻ではなかったかもしれません」

「えっ、それはどういうこと?」

「私には先輩が何て言おうとしたか、わかります」

くすりと小さく笑みを作る須藤真弓には長年行動を共にした彼が何を選ぼうとしたのか

凡その推測は出来てしまふ、分かってしまふ

その陰りを二乃は見逃してはいなかった………。

「真弓もありがとね 私が隠れようとした時 背中を押してくれたよね」

「あっ気づきました? 私にはそれしか出来ませんからそれでは私はいこれで失礼します」

「須藤さん ありがとうございます。」

「真弓もさ、自分に正直な方がいいわよ」

「正直ですよ、私はこう見えて全敗ですからー♪」

「うわー、経験者の言葉は重いわね」

三玖の背中を押した彼女もまた同じ経験を味わっていた

どうにもこうにも上手く行かず今の自分に出来るのは、彼を想う彼女たちをサポートする

何処かの四女や何処かの長男と似た思考を持っていた

それでもなお 須藤真弓の心には消えぬ炎が灯されている

去って行く二人を追うように 中野姉妹へ 手を振る

残った五つ子はそれぞれ照れくさそうに顔を見合わせ

三玖が言葉を紡ぐ 今何を伝えるべきか どうすれば良いのか やつと答えを得たんだ

「四葉、パンありがとう」

「につしし 一時はどうなることかと思ったよ」

「五月…………… 多分 これ 五月だよね？ありがとう」

「すみません どうか彼には他言無用で……………」

「二乃……………フータローとの時間を削ってまでありがとう」

「別に……………私がしたいと思っただけよ」

「コータローみたい……………それと一」

自分をここまで支えてくれた

姉妹にそれぞれお礼の言葉を述べる どうにも照れくさいのか二
乃はぷいっと顔を背けた

ははっと久々に姉妹の前で笑みがこぼれ

気持ちを切り替えると共に 最後に残された 彼女 中野一花に
も自分の気持ちを伝えようとした

だが 体には温かい何かの感触が伝わる

誰かが自分に抱き着いて来た

擦れ合う頬に感じる小さな水滴

それは自分に抱き着く彼女の物か 自分が流すものなのか
……………。

「三玖…………… ごめんね」

「いいよ ねえ 一花 恋ってこんなに辛いんだね ありがとう一
花」

—————

—————

—————

どうにも釈然としない終わり方だが、三玖が伝えよとした言葉の意
味を俺はちゃんと理解した

これにどう答えるのか、それが今後の大きな課題の一つだ

言葉に責任を持たず 八方美人なk z野郎とあいつには何度も罵

られ

その都度俺は思い返す 何が正しい行動だったのか、誰もが傷つかない 誰もが公平

そんな未来を願っているが、どうにも世界とはうまくは行かないもので、

俺が再び 恋に対して悩んでしまうとは全く予想がつかないよ

中野先生には ああ言ったが、また俺は嘘をついたようだしな

「コータローくん！」

「よう……一花」

「コータローくんにも迷惑かけちゃったね ごめんね」

「それは俺も同じだよ……。 あんなこと言っつて お前を置き去りにしたからさ」

今回の選択コースでどうにかお前とも話が出来ないかと考えた」

「それでここにしたの？ 女優だからEコースの映画村？」

「当たらずと雖も遠からずだ きつとお前とはもう一度会える その確証だけはあったしな」

選択コースの際 高熱でなにを選べばいいか、全然頭が回らず

如何すればいいかと悩んだ末にEコースを選択した

女優だからとそう言った意味も確かに含まれている

もう一つ理由を上げるとするならば6年前にここを訪れた際に

高熱でぶっ倒れ 映画村へは来れなかった……。 過去へのリベンジも込められていた

三玖を見た時に他の姉妹もいるかと思っただが、やはりバラバラで動き

一花にはちゃんと話す事もないまま終わるところだった

「一花 ごめん 血が昇ってた そんな理由では駄目だろう

俺はお前が言いきる前に 勝手にいなくなっけて置いて行ってしまった ごめんなさい」

「君はさ……。 コウくん 昔から生真面目で律儀で でもさそんなところが良かったのかもしれないね」

「一花……………」

「本当にさ あんな目に合えば 私でも怒るし すごく悲しかった」

「すまん……………」

「な——んて 全部」

チユツ

「嘘だよ 全部」

「えっ……………」一花

いたずらっ子のようなその笑みは 俺が初めて恋をしたあの子そのものだ

頬に感じた優しい感触 近づきざま 確かに彼女は俺の頬に唇をつけた

何事もなかったかのように 今までの全部が嘘だと言い張り彼女はそのまま歩いて行ってしまふ

数歩歩いた時だ、ぴたりと足を止め こちらにふり返る

先ほどの笑みは消え 何処か真剣な面持ちで俺を見る

何かを呟いた後 彼女はある言葉を俺に伝えた……………。

「コータローくん あの日、連絡をくれたあの時：あの家には私しかいなかったよ」

「!!」

—————

—————

—————

それから一日が経った

俺たちはそれぞれ自分の家に帰って行く

帰りのバス中では面白い話も耳にしていた

ホテルで噂になっていた 盗撮犯 その正体は何度も姿を消していた

前田だった 呆れたような武田と何処か上の空な風太郎

ぽつりと呟いた一言『俺が頼んだんだからな』

犯行は前田で主犯は風太郎と何とも予想以外なオチがついた

最後に立ち上がった彼は疲れて眠る五つ子を写真に収めると満足したのか

自分の席へと戻ってきた……。 何故彼がこのようなことを思い

ついたので、見当はつかず

理由は話してくれず 修学旅行は終わりを告げた

そのままなら話は終わるだろう 続きがある

街に戻った翌日 5月22日 火曜日 俺はある人物に呼ばれ

近くの茂みに隠れ気を窺っていた

そこには零奈（五月）と風太郎が何やら会話をしており

弟は鞆から一冊のアルバムを取り出した

彼曰く 誕生日のお返しで 未だ零奈が誰かは判別が出来ない

ならそれでいい考えるのはやめて彼女に代表として渡して置こう

中身は修学旅行で撮影された 彼女たちの写真だ

前田に依頼していた理由がこのアルバムへ入れる写真だった

……。

ページをめくる度に五月は驚いた表情で風太郎は真顔のまま

これが自分に出来る精一杯だ 自身なさげに伝える

「てつきり お前も京都で何か仕掛けてくるかと思ったんだが

……。」

「わ……………私なりに仕掛けていたんだけどな……………」

全くその通りだ

二人でどうにか風太郎に伝えるべく試行錯誤を繰り返し四苦八苦
京都で五月がこの格好をすることはないまま終わり

俺と顔合わせた時には何度も謝られた 五月は何も悪くねーのに
な

最後に風太郎は自分の思いと零奈への感謝の言葉を伝えれば
何処かへ歩いて行ってしまおう………五月が正体を明かすなら 今
だ

でも 俺には五月に やれ とサインは送れなかった
零奈と言う存在は今の風太郎を形成する大きな役割を担う

ここで五月だと正体を明かし 他の誰かだと言えば彼を余計に混
乱させてしまう

五月本人も動こうとはせず これで良いと言った表情で風太郎を
見送った

そーっと茂みから顔をだし 風太郎に気づかれてない事が分か
れば

五月の元まで駆け寄っていく

「お疲れ」

「お疲れ様です 幸太郎君 すみません ずっと手伝ってもらったの
に結局は正体を明かせず」

「まあ……。これで良いだろう あの場の空気を壊す選択は俺には出来
ない

悪いな 俺の方こそ役に立てなくて」

「そんなことはありません あなたがいたから私はもう一度 この姿
で彼の前に立てたのです」

「そんなたいそうな奴じゃねーけどな」

「本当にありがとうございます」

「へいへい………じゃ 俺は帰るから 送って行くか？」

「いえ 私は用事があるので もしくは公園の出口で待っていてくだ

さい」

「了解だ 先行つてるぞー」

何やら五月も用事があると

先に帰っても良いし共に帰るのも俺次第と最近は選ぶ事ばかりだな

まあ……。ここまで来たんだし 帰るなら一緒に良いだろう

本音を言えば、五月にはそして 三玖には聞かないといけないことが出来ちまったが

これは後日に回しておこう

「勝手な真似をしてごめんなさい それと幸太郎君は自分で行きつき私に協力してくれました

でも 何時かは打ち明けるべきです」

「流石はお兄さんだな……。だから何時も気にかけてくれてたんだよでもこれで良いんだよ

上杉さんには打ち明けず このままで それにごめんね 五月だって本当はお兄さんとー」

「……。……。……。私は これで良いんです 幸太郎君が幸せなら私も幸せです

彼が傷つかず 誰にも責められない 彼が元気で生きてくれる私は見守るだけで良いのです

それが私の願いですから……。……。……。」「五月……。……。？」

「彼が待っているので先に行きますね」

(そうです、私のせいで狂った彼の人生を私は、守らなければならないのですから)

ニコニコと微笑むその姿は何時もの五月と変わらない

自分の心配も杞憂かと思つた四葉もふいに足が竦む
その表情は笑顔と言ふには何処か壊れているようにも思え 触れ
ば儚く砕けてしまう程に脆くもあつた

「五月の用事って何だろな、まあ…気長に待ちますかね」

俺は気づくべきだつた

五月が秘めるもう一つの秘密と俺が知らない あの日の事件のも
う一つの裏話を……………。

俺のせいで歪んだ人間は「雨宮紡木」だけではない 「中野五月」も
また歪みに歪んでいたのだ

第五章

第九十四話 不良少年と心機一転

五月のある日

上杉風太郎は登校時の中一人の女生徒と出くわした

やつほーと声をかけるその人物を彼は良く知っている

数日前に行われた 修学旅行で色々騒ぎを起こしその一旦を担う形になった

中野一花だ

彼女が自分を待っているとは、まったく予想も出来ておらず

曰く『本当に偶然だよ』

その中野一花も二乃の手前 風太郎と過度な接触は避けて来たが、一花には風太郎に伝えなければ行けない重大な話があった……。

学校まで会話も交え歩く二人 最初は面倒で軽く聞き流していたが

彼女が言った一言で風太郎の脳も活性化した

「あの日さ 京都の夜 宿でフータローくんと一緒にトランプをして遊んだ子覚えてる？」

「何故 その話を今するんだ？」

「否定はしないってことは覚えてるんだね」

「お前に何の意図があるかは分からないけど 騒動の種になるようなことは」

「あれさ 私」

「えっ……」

「ついでに言えば、フータローくんが宿に来るまで一緒にいた子は私以外の誰かだよ」

「嘘か？」

「フータローの件があったんだよ もう懲りたよ これは本当のこと
ごめんねこんな子が遊び相手で」

「まあー 今となつては良い思い出だな……。 別に疑つてはいない」

「急なタイミングでごめんね ちゃんと話しておこうとずっと考えてたんだ」

「そうか……。一花 ありがとな あの日遊んでくれて」

「どういたしまして 私も楽しかったからね」

二乃は言った 上杉風太郎と出会わなかったら幸太郎に恋をしていたかもしれないと

一花もそうだ あの日話した少しの時間 目つきの悪い少年と過ごしたあの日々は彼女にとって

かけがえのない思い出として今でも頭の中に残っている

そつとしまい込んだそれを風太郎に話す事で一花は再度 自分の気持ちを理解できた……………。

(やっぱり君が好きだよ…コウ君でも…私は…)

—————

—————

—————

5月25日 金曜日

修学旅行も無事に終わり 後は平和な学園生活……………。

そんなもんはない 6月の半ばには学園が誇る大規模な体育祭が行われる

何故6月なのか…。 普通なら秋ごろに行う行事だが、10月は我最大のイベントである日の出祭が行われる 8月には夏休みもあり9月にはテストや10月の下準備で教職員も忙しく

5月は修学旅行となっており その間 一番空きがあるのは6月〜7月 何とも過密スケジュールな一年間となっており 修学旅行の余韻もつかの間に 来月6月に行われ体育祭の実行委員を決めなければ行けない この話は以前に風太郎と話 学級委員や体育委員

と違い

この為に新しく体育祭実行委員をクラスで二人男女ペアと全くどんな奴もそう言った習わしと言うか、決まりごとが好きだと見える

「まあー6月も6月でジメジメしてるけどな」

「今年は雨漏りだけは、勘弁願いたいな」

ボヤキ交じりに机に突っ伏し俺であるが、とくに関わる事のないイベントだ

深く考える必要はない 俺は俺で日々生きて行く為の日銭稼ぎに勤しむ必要がある守銭奴ここに極まれるな発言だが、執着はなくどちらかと言えば、風太郎が当てはまりそうな単語だ

「失礼な 俺は守銭奴ではなく 節約家だ」

「へいへい」

「それで新しいバイト先でも探してるのか？」

「以前働いてたところが諸事情あつてな 暫くは暇な日が続くんだけだからその日にバイトでもと」

「また ぶっ倒れるぞ」

「大丈夫だ 真の地獄は7月～9月だ まあ6月は梅雨の季節で涼しくてバイト出来るが、8月とか考えてみる？暑い中で着ぐるみとかまじで 一瞬母さんが見えてくるかな？」

「お袋もびつくりだろうな」

息子が来たと思いきやバイトでぶっ倒れてやってきたよ

ダメだ会わせる顔がない…。

後ろの席の弟も他人事ではなく、ヘビーなバイトがあれば何度か倒れたこともある

節度をもってバイトに勤しもうなんてしてたら 借金問題の解決なんて夢のまた夢

五つ子の家庭教師での収入も加えれば、今のペースを崩すことなく

学園生活も行っている筈だ

「そう言えば 来週には体育祭実行委員決めるんだろ？」

「そうだった」

「学級委員さーん 大丈夫ですか」

「普通に記憶から抹消してた…。ああ やりたくない 学力に注ぎすぎた俺には辛い」

「一応忠告な 学級委員と体育祭実行委員は、二人三脚があるからな
「はあ？」

「強制参加する種目は、多才だったな…懐かしい」

「学級委員の辞退を…。」

「諦めろ 二学期まで交代は認められん」

「わいわいがやがやとその中でペアで走るのか…。」

「まあ お前を推薦したのは俺だけだな」

「本当だよ 鬼か！」

小言が煩く 軽く嫌味も聞こえるが、学級委員をやっている風太郎の姿はとても嫌々でやっているととは思えない 実を言えば、入院する前の良い子ちゃん時代の俺よりも向いてるとさえ思える

「その体育祭もあるけどさ…。次のホームルーム前に まだイベントあつたな」

「めんどくせえ…案外今の席には満足してんだよな…」

「くじ引きでランダムとか…。一応 昨日四葉と番号の準備したな」

「よし 風太郎 俺を窓際にしてくれ 幾らで買える？」

「不正はやめろ くじを引いた時点でお前の運命は決まる」

「それはお前もだ はあ…：…：…：嫌な予感しかしねーよ」

先ほど俺が、ぼやいていた理由は何も体育祭のことではない
それと同等か下手すればこの一年を左右するもう一つのイベント
が後程行われる

その名は

席替え

それは誰しもが望む一大イベントであり

自分の周りが大きく変わり スクールカーストにより自分の席なのに息苦しい生活すら送る可能性すら秘めている 何とも恐ろしいイベントだ

まあ……。人から避けられてばかりの俺にはクラスのヒエラルキーやその他云々は全くの無関係であり

何時もと同じく気にしなければ良いだけの話……。

勝手にどうぞだ……。

別段今の席で困る事って言えば、後ろから声をかけられてばかりうたた寝してれば、教師の目に付く 正直言えば、最悪な部類だな 思い返せば、嫌な事しか出てこない……。

それでもだ、俺は、席替えて風習自体が苦手である

理由はあの女 坂下だ 小く高一まで俺は何者かの策略を感じる程に 坂下が必ず隣だった

どんな手段を講じているのか、聞いても『そう言う巡り合わせさ』 あいつがあんなロマンチックなことを言うとは、更に胡散臭く感じていたのさ

それに天災と呼ばれる人間の隣で過ごす どれだけ精神を削られて無駄にストレスが溜まった事か

もう坂下はいない、高校生活では無縁の存在に怯えるくらい

席替えが、トラウマにも似た何かになっている……。

改めて修学旅行に体育祭 その間には席替え

本当に過密スケジュールに程がある 何故二学期の始めに行わないのか？

「はあ………あとは天に任せるか お互い健闘を祈ろう」

「気にならない席なら万々歳だな……」

固い握手を交わす 少しすれば担任の園田先生が入り

他の生徒も表情が一気に変わる 席替えが面倒な俺がいれば、それが楽しみな奴もいると言う事だ

物好きなやつも多いこった…。

ホームルームでは早速とその話題に変わり
教卓の上に箱が置かれ 一気に沸き立つ生徒を園田のおっさんは
落ち着かせる

中には勿論 風太郎と四葉が書いた 席順がかかれています紙が
入っている

後ろからは『ランダムだから知りようもないぞ』とダメ押しの一言

俺もいい加減諦めるか…。

深いため息に混ざり魂まで抜け出しそうだが、戻しておこう

くじは合計40枚あり 順番は名前順から引いて行く

俺から風太郎とその次の生徒と引いていき 全員が引き終わった
所で一斉に席を移動する

40人の大移動だ その為か今日のホームルームは席替えのみ
だ

「上杉 先ずはお前からだ」

「へえーい えっと」

教卓まで歩き 迷いを捨て躊躇なく 中に手を入れる

ランダムなんだ どうとでもなれ最早投げやりなだった

突っ込んだ手は、一枚の紙を掴む 俺には分かる これが最高の

キーカードだ

しゅつと手を引き

紙を確認した

(12番か…中心辺りか、今よりも教師の目は来ないしまあまあだな)
記載された番号は12番 個人的には5番か7番の窓際が一番後
ろというまったり出来る所謂主人公席を狙ったが、そうそう上手くは
当たらないな…。

ぱつと見た感じは、三玖が座ってる位置の隣だ

さあーって 後は全員が引き終わって新しい席につけば、今日の俺の学校はある意味終わりだ

「はえーよ」

鋭いツツコミを入れる風太郎さん

お前は一体どこになつたんだ？

「13だ」

弟とはとことん縁があるな また俺の後ろだ

前と変わらず相談や話をするには十分過ぎる場所だった

勉強大好き風太郎くん的には俺の番号が羨ましいと口に漏らすのが、恨みっこなしと言ったのはこいつだ

「では 全員引き終わったな… それぞれ指定された席に移動しろー」

「……………」

「えへへ」

これは悪夢か……………

いったい何が起きた 席替えだと後方から声が来る

勿論のこと以前と同じで風太郎がそこにいる

そして自分より右前の席は真弓ちゃんで近くなつたのが嬉しいのか手を振ってくれている

まあ…。これくらいなら不自然ではない

所詮は確率で見知った後輩なら俺も大歓迎

うん 問題は そこじゃないんだ……………。

俺の前 右横 左横 の席の人物だ…。

もしかしたらと可能性は考慮はしていた……………。

「はあ……………」

「よろしくね コータローくん」

「隣だね コータローよろしく」

「幸太郎君！ やつと隣ですね！」

よろしくお願いします。」

前方は一花 左は五月 右は三玖

なんでこうなるの？ 色々と気まずいし それを差し引いても裏しか感じない布陣だ

五月なんてずっとニコだ あの時食堂で俺の隣になれず、ずっと落ち込んだ分の反動が出てきている

「てか 五月 お前なんで五番引いてんだ 俺が座りたかった席なのに」

「五番と言えはやはり私なんですよ 幸太郎君！」

「自信満々に語るな くつそー」

エッヘンと胸を張る五月に俺は文句の一言も出てくるよ

因みに風太郎の隣の席は五月の後ろだが、これまた偶然だろうか、四葉で三玖の後ろが二乃

余程嬉しいのか二乃はずっとニコニコだ

「誰だよ 仕組んだの！」

「幸太郎 諦めろ…………だめだ これが俺たちの新たな席だ」

「くつそ おちおち昼寝もできねーよ」

「幸太郎君がちゃんと出来るよう 私は全力でサポートします」

「お前は自分の勉強を頑張ってくれ……………まあ 何だ 三玖もよろしくな」

「うん よろしく 近くだから話も出来るね」

「私には何も無いのかな？」

「宜しくな 一花」

色々と不安もあり ドキドキだ

再び隣を陣取る末っ子に新たに前と右まで固められた 何とも怪しきぶんぷんだが

一度決まった席替えだ 心機一転 俺もいい加減腹をくくるか、
まあ……退屈しないと思えば気楽だな

――

――

――

「ねえーコータロー？」

「なんだー」

「少し聞きたい事あるんだけど良いかな………？」

「………」

「どうかした？」

「いや 別に………」

「変なコータロー……何かあったなら言つてね？」

「お昼休みの図書室だ……」

見慣れた光景 学食で五月が相席するなら。図書室では三玖が俺の前に座っている……。

別段予定はない ただ単に足が図書室へと向いただけ……。

まあ：第六感が『食堂は危険！危険』とその場でくるつと方向転換だ……。やけにテンション高めな末っ子が、センサーに引っかかり危機回避能力で戦線開始前に離脱さ

とそんな俺は、図書室で適当な本を手に取って 羅列された言葉を視覚で捉え脳で理解する

読書タイムに勤しんでいたら……。 トントんと肩を叩かれた

ふと後ろを振り返れば、今日からお隣さんの三女さんが『お話しよ
う』とそのまま席に腰かけた

拒否する理由は、無いし 害もない 修学旅行の件を思えば、少々意識してしまうが

何と申しますか、彼女は何もなかったかのような態度……。

もしや 映画村の一件は俺の白昼夢だった？ 記憶障害もいい加減にしろ

そう言っつてやりたいが、今は三玖の用事を先に済ませてしまおうか……。持っていた本を閉じればいざ本題

「それで何が聞きたいんだ？」

メンタルリセット！ 切り替えようか……。

話を切り出せば、『うーん』と考え込む三玖

その姿は何処か四葉と重なって見えた……。

もしや言いにくい事なのか？ でも俺に聞きたい事だしな……。

「その……来月から体育祭があるよね」

「ああー……あったねー てか聞きたい事ってそれ？」

あの日本史大好き三玖から予想出来ない言葉が出て来た

インドア派な彼女からアウトドア勢な単語……。でもスキーとかは普通に滑ってたし
なんだろ……。

「色々大変なのかなって」

「そりゃ全校生徒が、参加する学園行事だしな………三玖は出た事
ないのか？」

「えーつと」

「すまん……。前の学校の話はNGだな」

「ごめんね……。あまり良い思い出がないから……」

黒薔薇女子の話題は三玖や四葉の前ではNGだ

誰しも昔を詮索されるのは、気分が良い事ではない
デリカシーに欠けている……。

一瞬だが、塞ぎ込むように視線を下に向けた三玖は『そう言った行
事は基本でない』

それだけ教えてくれた……。

「おう……。そんだけ聞ければ十分だ……。それで何で体育祭の事聞いてきたんだ？」

「そ　それは……………」

「良いよ無理に言わなくて……。まあ今週には実行委員やらなんやら決めないといかんし　あーやだやだ」

「コータローは体育祭が嫌いななの？　運動得意そうだけど」

「嫌いって言うか……。何だろうな……」

『学園行事』その単語は俺を鈍らせるだけで十分な効力を発揮する

俺も俺で思うところは、あるし……。なんだかなーって気分だ

運動自体嫌いか好きか、その定義で決めるなら『普通』

体を全力で動かすのは好きだし　走れば気分も爽快で、……うーん

好きなのかな？……。どっちだよ！

暫く考え込むと『聞きたい事は聞けた……。ありがとうね』

余り重要な事を話したつもりはないけど、あれで満足してくれたなら下手に踏み込むのは控えよう

彼女も彼女で心境の変化でもあったに違いない……………。

「それとさ……………。　大丈夫だよ」

「何がだ？」

「忘れてないから　修学旅行の事……………。」

「おっ…………。おう　そうか」

そのまんま本を読んで時間を潰すかと思っただらここで大きな爆弾一つ

机に体を伸ばしじーつとこつちを覗き込む彼女は『夢じゃないよきつと』からかう様な仕草を入れつつあの日　あの場で起きた事は現実だと俺に教えてくれた……………。

その時だ……。何処か安心したような安堵した気持ちさがこみ上げ……。自然と彼女から視線を外していた……………。

（真弓の言ってた事って本当だったのかな？……………もしそうなら嬉しいな）

（分からん……………。三玖が何を考えてるのか分からん……………。）

その後は二人静かに本を読み、談笑をし……。
今と言う時間を少しまた少しを噛みしめていった……………。

そして放課後まで時間は進む

帰り支度を進める俺は、一花の言葉を思い出し『また次の機会でも
良いよな?』小さく呟く

確かに気になる事ではあるが、三玖と過ごす時間を変な空気にする
の気が引ける

チャンスなんて何時でもどこでもあるんだよ……。言い聞かせるよ
うに俺は荷物を纏めた……………。

「お守りかあ……………。京都には事ごとく縁があるな」

あの日にあいつが俺に贈った筒状のお守り……………。

普段なら『僕は別に大丈夫だよ』せつかくの贈り物でも返してし
まっていただろうが

何故かこのお守りに関して言えば、俺は素直に受け取った
……………。

「ありがとう…………。大切にするね…………。似合わねー言い回し」

中学一年の時の俺は、特にいい子ちゃんだった

坂下とは幼馴染だったし…………。その事もあったのか。はたまた返
す事をおつこ悪いとでも考えていたのかどちらにせよ…………。あ
の日の事を俺は、余り覚えていない

元の予定から大幅にズレ……。急遽行先の変更が行われた修学旅行
その旅先で風太郎と四葉がそれぞれ行方不明になってしまう

大事になる前にあの人と俺は二人を見つけた……………。
ハッキリ覚えてるのは、ここだけ……………。

でも何故だろうな。このお守りを貰ったその日の記憶

坂下紡木の姿を思い出そうとすると、あいつの姿はノイズまみれで
あいつではない『誰か』が、俺に優しく手を差し伸べている姿が脳裏

を走る……………。

(何だろうな……………。確かに俺は坂下と同じ班だった。それは確かだ。五つ子と直接顔を会わせることは無かった筈……………。風太郎じゃあるまいし)

まさかここに来て 姉妹の誰かと俺が一緒にいた 誰かと俺が一緒にいた そんな都合のいい事ある訳ねーよな

「コータロー？ 帰ろう」

「おう…あれ一花は？」

「今日はこのまま撮影だつて先に帰ったよ…。二乃もバイトだつて」

「了解……………んじゃ帰るか」

「うん！」

「つて 私もいまーす」

「やべ すっかり忘れてた 遅れるなよー 五月ー」

「五月 遅いよー」

「もー二人してー！」

「冗談だ…。ちゃんと一緒に帰つてやるよ」

先に教室から出て行つて俺たちを追い

蚊帳の外にポツリと立たされた末っ子さんは、自己主張しながらこちらまでやって来る……………。

少しからかい上手が過ぎたのか、そっぽを向いてご機嫌斜め

こうなるとどうにも厄介な末っ子さん へいへいと重い腰を上げるかのように俺は二人に話をする

「パフェでも奢つてやるよ だから機嫌直せ」

「た 食べ物で釣ろうとするんですか」

「五月……………涎出てるよ……………でもいいのコータロー？」

「大人数でもあるまいし 二人なら平気だ 人間には良心があるなあー五月？」

「大丈夫です！　そこまで大量に頼みませんから！」

「ああー食べる事はするんだね……………」

「毎日は難しいけどさ…たまに奢るくらいの甲斐性はあるさ」

「これが青春とでも言うのだろうか？　どうにも俺にはその判断がつきにくい」

「ただ今は、三人で肩を並べて帰る…。そんな今がとても愛おしく大切なものだ」と俺はそれを記憶に焼き付けた……………」

第九十五話 不良少年と実行委員

5月28日 月曜日

「ではこれから 来月に行われる 体育祭の実行委員を決めたいと思います」

席替えから 約三日 休日明けとバイト明け 眠気が抜けないままに学校へ

うとうとしながら学級委員である 風太郎の声を聞き流し

夢の世界へと旅立とうすれば、お隣の末っ子さんが、俺の眠りを妨害するののか

何度も声をかけてくる……………。

「ふぁー なんだ」

「幸太郎君 寝てないんですか？」

「2時間は寝た」

「それは寝たとは言いません 以前も言いましたが8時間以上の睡眠と」

「へいへい 適度な食事ですよねー」

わーわー追い打ちはしてこないが、俺に向ける言葉は絶えない

これは心配から来るものだといいい加減理解しているし なにも彼女の発言を俺は否定はしない

ただまあ…、こっちにも事情と言う物があり バイトとなれば俺は融通が利かない部類だ

自覚している 自分の限界まで働いてしまう

これに関してはどうか改善しないと俺だって考えているんだけどな 長年染みついたもんは簡単には治らない

それでも俺には、「俺たち家族」にはお金が必要なんだ…………。

「ええ諸事情がありここ二年間は、体育祭は行えませんでした、今年度から再開されます。それに伴い体育祭の実行委員も決めようと思います。」

それぞれの役員にかかる負担の軽減も兼ねているので、体育委員の

お二方もご理解のほど宜しくお願いします」

(まあ、そうしないと風太郎がぶっ倒れるしな)

経験者から語らせてもらえば、平行して行うものではない

生活の規律やクラスをいい方向へと導く学級委員とたった一度とは言え

その一度の為に全てを注ぐ体育祭実行委員は同時並行するには体力がいりようだ……………。

加えバイトまで合わされば、かかる負担も二重三重で、いつ休めば良いのかもわからない。

「そんな面倒なこと 誰が好き好んでやるんだか」

「コータローはやってたんだよね？」

「すげー面倒だった。二年度やるかよ」

右隣の三女は先週の俺達の会話を聞いてたらしい

どんなことをする必要があるのか、何故だか異様な食いつきを見せ俺に何度も聞いてきていた

「まあ…。誰かもの好きが勝手に立候補するだろ 終わったら起こしてくれ」

「あつはは 寝ちやったね」

俺は二度とやらないと心に決めている

と言うより 俺を推薦するような輩はまずいない

学級委員はダメだったが、人を導く事にかんして言えば武田が適任だ

いやーこの時に武田を推薦しておけば本当に良かった

何故行動に出さなかったのだろうと 俺は数分前の自分に呆れちまうよ

彼女たちに終われば起こせ そう伝え机に突っ伏し 小さな寝息をたてて夢の世界へ

あれだ寝ないよう言ってきた五月だが、意識を夢に投げだす前に

『良い夢を』と何ともいい子だよ
俺へのお世話がなければな……………。

「かぁ……………」

……………

……………

……………

「……………くん……………た……………くん」

「ううん……………」

何故だか聞きなれた声が、ノイズ混じりに聞こえだす

夢の世界へと旅立った筈の俺の意識はその声に導かれいとも簡単に現実へと引き戻された

「あぁ……………なんだ？」

引き戻されたと言ってもいまだ夢現

ぼやける視界で辺りを見れば視線は俺に集中し 俺の名前を呼んでいたであろう五月も何処か安心した表情で俺に前方を向くよう促す

いったい何が起こったのか…。眼鏡を付けなおし 黒板の方まで視線も向けると

俺は自分の目を疑った……………。

いたずらにしても度が過ぎるし 嫌がらせと言ってもいい

俺がどれだけ嫌っているか、それは友人たちには周知の事実だ
得意げにニヤリとしている学級委員（風太郎）はこれ以上推薦がなければ

体育祭実行委員は『上杉 幸太郎』を任命すると堂々と言っている

「おい、まて！俺はやるとは言ってねーぞ！」

「諦めろ、幸太郎。既に数票入ってる」

何たるデジャヴだ

風太郎を学級委員にした時と全く同じ状況で、黒板に書かれた俺の名前の横には9票入っており

それ以前に武田の名前すら出ていない

本人の方を向けば、あの武田スマイルだ。こいつも俺に表を入れやがったな……………。

(誰だよ この九人！)

勿論のこと 武田を推薦する声はなく それ以前に武田が俺に票を入れた以上は、これにて閉廷

何ともやる気のないクラスだ もう少し自分の意見と言う物を持った方がいいぞ

超弩級のため息で、男子の実行委員として決まってしまった俺

ただ 俺一人が、やらされる そんな鬼見たいな展開はなく

女子の実行委員の名前も下に記載されている 再び自分の目を疑

い

同時に先週の答え合わせになっていた

体育祭女子実行委員 中野三玖

あの三玖が、自ら体育祭実行委員に立候補

「まじかぁ……………。」

予想以外だった

自分が推薦されていたことすら予想してもいないが、あの運動が苦手な三玖が自分の意思で

全クラスで競う 運動大会の雑用に名乗りを上げていたとは……………。

もやろうとした…あの頃の俺が悪いんだ」

ここまで学級委員を毛嫌いする理由は簡潔に言えば、前回のクラスでの出来事

人に散々持て囃され その結果裏切られた俺にとって役員や実行委員とは簡単にうなずけるものではない

口に出した辞退と言うそれは本音8割だ 当時の事故を未だに気に病む五月さんはテンションが駄々下がり こいつが気に病む要素は一切ない あの事件にこいつは関わっていないんだしよ…。

和ませようとするが、逆効果なのか『私がきつちりしていれば』と本当に責任感が強い奴だ

暫くは落ち込む末っ子と共にテーブルを囲んでいたが、用事を終えたのか、三玖も戻ってくる

「五月 どうしたの？」

「そつとしてといてやって欲しい」

「そ、そうだね…。それでコータロー ごめんね何の相談もなく推薦して」

「お前が、俺に体育祭実行委員の話を聞いてきた理由がやっとわかったよ はあ」

「うん 少しだけ興味が出てきて」

「大変だぞ…準備物や当日でのクラスの先導 それに選ばれた俺たちもそれなりの競技に出ないといけない…実行委員は肩書だけじゃないんだ」

「うっ…」

クラスの連中との連携も大事だが雑務雑務！そのまた雑務だ

まあ…体育祭自体の内容はシンプルではあり他校とは、さほど代わり映えはしないと言える

ただ事実を1つ述べるのならば、運動部が多いクラス程有利と言うのは、言わずもがなだ。

「確か、須藤さんのお兄さんも同じクラスでしたし、幸太郎君の世代は何かと有利だったのですか？」

「まあ、だいたいこの事は、俺や須藤と……で何とかなつてた印象だな」
スポーツだ、いわゆる競い合うものであり、クラスそうでとなれば
指揮もあがり、まさにお祭り騒ぎと言った方が、宜しいか、当時は余
計に坂下もいたし、無駄に戦力が固まっていた。

「詳しい話は、風太郎や四葉との会議ですればいいさ　はあ　まじか
何でまた俺が選ばれるんだよ？」

嫌嫌と言いつつもだ、何時まで駄々こねるのは如何なものかと、半
ば強引に役員となつてはしまったが、半端な気持ちでは入れないしな
…。

それでもだ、どうにも俺は気が乗らんと言うのが本音であり、運動
事態はどうでも良い人前で動くのは構わないが…問題はそれ以外に
ある。ようは心の持ちようだ

クラスの為となると。どうにも体には不可視の重りが押し掛かっ
てくる…。

「やっぱり　コータローはあの事が気になつてるんだね」

「お前らのお陰で幾分かはましになったさ　でもよ　クラスのために
もう一度何かをやりますか？　って問われれば、俺は何もしないって言
うぜ　でもまあ　今回は以前と違う」

「何が違うのですか？」

「そりや勿論　今のクラスで俺を信頼してる人間はいねーってこと
あの頃よりひどくはならねーだろ」

「コータロー…。私たちが真弓だけじゃない　フータローだつて失敗
しても見捨てないよ」

「分かつてるよ　でももし失敗したらつて思うとどうにも身動きが取
れなくなりそうだな

経験があるつて言うのはわかるけど　なんでまた俺なんて選ぶの
か風太郎の考えが分からん」

なんて　なんか　そう言った例えはやめたつもりだが、どうにも自
然と口から出てしまう

人に頼られ それに応えることは苦手ではない

俺が何より嫌なのは、誰の期待にも応えられず、周りからの信用を無くす事だ

踏ん切りはついた、と俺の勝手な思い込んでいただけかもな…。

少しばかり自分の心境や思いを語り 水の入ったコップに口をつける

ぐびぐびと飲む中で視線を感じ彼女らの方へと目を向けた

何故だろうか、五月と三玖は何処か驚いた表情で俺を見ている…。

「幸太郎君が自分の気持ちを語るのはとても珍しくて」

「何時もは、誰かって例えで話すから 自分の考えを言ってくれるのが嬉しいな」

「お前らは…信用してるからな それに」

「信用！ 幸太郎君がついに私を信頼してくれました」

「前から信頼はしてるさ ただ 俺も不思議だ 何故だかお前ら二人の前だと自然と気持ちと言えるんだ」

「コータローに信頼されて信用される 何か温かいね」

「あまり言うな 恥ずかしくなってくる」

「顔が赤いよ コータロー？」

藪蛇だったな…下手に言葉を並べればこうやって不意打ちまがいな笑顔をくらっちゃう

五月とは、何だかんだと良くつるんでいるし こいつを心から嫌いにはなれない

三玖とは修学旅行の一件もある ある意味では本当に打ち解けたと言えるだろう

それに あれを考え過ぎとは思わない 三玖のあの言葉はれっきとした告白だ

本人はあれ以降何も言おうとはしないけど、答えを出すべき時は訪れる

「とにかくだ 俺はあまーり 乗り気ではないが せつかくの推薦だ

それに三玖がバイトと掛け持ちやるって言うんだ　うだうだ言うてる暇はねーよ」

「私も出来る限り　二人のお手だいをさせていただきます！」

「私が言えることじゃないけど　五月も無理はしないでね　重労働重労働か」

「三玖さーん　今更ですよー　二人でやるんだ気負うな」

「わかった　頑張つて最高の体育祭にしようね」

「そうだな　最高の体育祭にしてやろうな　今年こそは……………」

去年何故　体育祭が行われなかったのか、理由を知っている二人はあえて聞こうとはしなかった

噂だけとは言うが、上杉幸太郎が運動部に何をやらかしたのか、学校でも問題視されるよ

そのせいだろうな　俺が入院した年と去年は行われなかった　呆れるよ

ただの噂とでっ上げの動画に踊らされて、それをまんまと信用しちまうとは

大人つてのはどうにも子どもよりも単純で難解に出来ている
今年から再開されるのは、俺が学力模試で一位の成績を収め
不良少年で素行が最悪と言った印象もある程度は薄まり始めているからだ

三度目の正直　ここで連続未開催と言った悪い空気を一旦リセットしたいそんなところだろう

何故そんなことを知っているのか、武田がボロっと内情を割り　園田のおっさんが知らせてくれた

全くお節介な奴が増えていきやがるぜ……………。

「まあ…。悪く無いな」

「どうかした？」

「なんでもねーよ」

「幸太郎君 これ食べますか美味しいですよ」

「俺はお前が食ってる姿を見てるだけでお腹いっぱいだよ」

「コータローなら これどうぞ 今日も作ってきた」

「おお 三玖のお手製パンか サンキュー」

今はお昼時 五月は何時ものように定価1200円少しの丼を満足そうに食べている

小食の俺は彼女が美味しそうに食べている姿を見れば自然とお腹も膨れ

丁寧にお断り申し上げる……………。

ちびちび水を飲みだせば、三玖が何処かで見た紙袋を手渡してくる
中身は彼女が作ったパンだった

好物と知ってからは 以前よりも力の入りようを感じている

手渡されればぱくりと口を開け それを口に含もうとするが、五月が物凄く納得が行かない様子で頬を膨らませる お前は、ハムスターかよ……………。

「なっ 何故三玖のは受け取って私のは拒むのですか!？」

「別に拒んでるつもりはない 受け取る皿もないのにどう食べるの？」

俺は手ぶらだ」

「私の使ってください お構いなく」

「俺が構うわ! あのなあ 前も言ったけど そんなぼんぼん男子に貸そうとか考えるな」

「えっ? 私は幸太郎君だから言うのであって他の方にはしませんよ」

「そういう所が余計にダメだろ……………。」

五月が俺をどう見ているのか、正直分からんが、俺だって女性徒が使った箸を素直に受け取るほど

鈍感ではない 俺の知る限り五月は男子生徒とはしかるべき態度で接している

何故俺には、甘いのか その理由を話そうとはしないけど、そのヒントに近い物を一花がくれた

『あの日 家には私しかいなかった』

その言葉だけで 彼女が俺に何を伝えようとしたのかも凡その把握は出来る……………。

もぐもぐと箸を進める 五月

抹茶ソーダを飲んでいる 三玖

この二人は俺にまだ隠し事をしている……………。
直感にも似た何かを俺はひしひしと感じていた。

(まあ…。 体育祭が終われば聞くタイミングもあるさ)

「あむ うまいな」

口に入れたそれは、あの日と変わらず俺に感じられない味を再び教えてくれた…